# 現代日本文學全集

ND 28-3-69

PL 809 Z9 1928
Izumi, Kyoka
Izumi Kyoka shu

East Asiatic Studies

PLEASE DO NOT REMOVE
CARDS OR SLIPS FROM THIS POCKET

UNIVERSITY OF TORONTO LIBRARY

泉鏡花集

杉浦非水装幀

# 泉鏡花集

改造社版

LIBRARY
MAR 24 1969
UNIVERSITY OF TORONTO

PL
809
Z9
1928

著者照影

# 「泉鏡花集」目次


卷頭寫眞（肖影）
序詞（筆蹟）

外科室 …… 三
琵琶傳 …… 九
一之卷 …… 一九
二之卷 …… 二八
三之卷 …… 三八
四之卷 …… 四四
五之卷 …… 五三
六之卷 …… 五七
誓之卷 …… 六三
辰巳巷談 …… 七〇
笈摺草紙 …… 一〇七
高野聖 …… 一三一
女仙前記 …… 一五九

親子そば三人客 …… 一六九
藥草取 …… 一七四
白羽箭 …… 一八九
紅雪錄 …… 二三四
續紅雪錄 …… 二五二
春晝 …… 二七二
春晝後刻 …… 二九七
婦系圖（前篇） …… 三一三
婦系圖（後篇） …… 三八五
歌行燈 …… 四五一
南地心中 …… 四八〇
賣色鴨南蠻 …… 五一一
眉かくしの靈 …… 五三三
二三羽――十二三羽 …… 五四三
栃の實 …… 五五三
（附）隨筆、唄、發句
年譜 …… 五六六

一　三錢五りん　やきどうふ
一　四錢　ふかし
一　九りん　うすやう
一　三錢　柿
一　二りん　らんぷしん
一　四錢　大こん
一　二十錢　おぜん

鏡花　写

明治十四年十月下旬、雪國の霰ふる夜、らんぷは
燈下に、母がしるしたる小遣帳の一枚なり。柿にはかぎらず
母は菓物を好みたり。ほかのものに比して、葬前菜の代の
すがりたるは、揃つて大好きなりし家内の馳走の由なるらむ。
ふかしは半ぺん、うすやうは薄様紙、節用集、袖鑑
などの武者繪を、すきうつしするとて、子どもがねだりし
おふかひ、繪きうにいふ姉様をすきうつしはしなかつたかと。
竹舎へつ曰く、八歳ごろの事。

# 外科室

## 上

實は好奇心の故に、然れども予は予が畫師たるを利器として、兎も角も口實を設けつゝ、予と兄弟もたゞならざる醫學士高峰を強ひて、某の日東京府下の一病院に於て、渠が刀を下すべき、貴船伯爵夫人の手術をば予をして見せしむることを余儀なくしたり。

其日午前九時過ぐる頃家を出でゝ病院に腕車を飛ばしつ。直ちに外科室の方に赴く時、彼方より戸を排してすら〳〵と出來れる華族の小間使とも見ゆる容目好き婦人二三人と、廊下の半ばに行違へり。

見れば渠等の間には、被布着たる一個七八歳の娘を擁しつゝ、見送るほどに見えずなれり。これのみならず玄關より外科室、外科室より二階なる病室に通ふあひだの長き廊下には、フロックコート着たる紳士、制服着けたる武官、或は羽織袴の扮裝の人物、其他、貴夫人令孃等いづれも尋常ならず氣高きが、彼方に行違ひ、此方に落合ひ、或は歩し、或は停し、往復恰も織るが如し。予は今門前に於て見たる數臺の馬車に思ひ合せて、竊かに心に頷けり。渠等の或者は沈痛に、或者は憂慮しげに、はた或者は慌しげに、いづれも顏色穩ならで、忙しげなる小刻の靴の音、草履の響、一種寂寞たる病院の高き天井と、廣き建具と、長き廊下との間にて、異樣の跫音を響かしつゝ、轉た陰慘の趣をなせり。

予はしばらくして外科室に入りぬ。

時に予と相目して、脣邊に微笑を浮べたる醫學士は、兩手を組みて良あをむけに椅子に凭れり。今にはじめぬことながら、殆ど我國の上流社會全體の喜憂に關すべき、この大なる責任を荷へる身の、恰も晩餐の筵に望みたる如く、平然として冷かなること、恐らく渠の如きは稀なるべし。助手三人と、立會の醫博士一人と、別に赤十字の看護婦五名あり。看護婦其者にして、胸に勳章帶びたるも見受けたるが、あるやんごとなきあたりより特に下し給へるもありぞと思はる。他に女性とてはあらざりし。なにがし公と、なにがし侯と、なにがし伯と、皆立會の親族なり。而して一種形容すべからざる面色にて、愁然として立ちたるこそ、病者の夫の伯爵なれ。

室内のこの人々に瞻られ、室外の彼の方々に憂慮はれて、塵をも數ふべく、明るくして、しかも何となく凄じく侵すべからざる如き觀ある處の外科室の中央に据ゑられたる、手術臺なる伯爵夫人は、純潔なる白衣を絡ひて、死骸の如く横はれる、顏の色飽くまで白く、鼻高く、頤細りて手足は綾羅にだも堪へざるべし。脣の色少しく褪せたるに、玉の如き前齒幽かに見え、眼は固く閉したるが、眉は思ひなしか顰みて見られつ。纔に束ねたる頭髮は、ふさ〳〵と枕に亂れて、臺の上にこぼれたり。

其かよわげに、且つ氣高く、淸く、貴く、美はしき病者の俤を一目見るより、予は慄然として寒さを感じぬ。

醫學士はと、不圖見れば、渠は露ほどの感情をも動かし居らざるものゝ如く、虚心に平然たる狀露れて、椅子に坐りたるは室内に唯渠のみなり。其太く落着きたる、これを頼母しと謂はゞ謂へ、伯爵夫人の爾き容體を見たる予が眼よ

りは寧ろ心憎きばかりなりしなり。
　折からしとやかに戸を排して、靜にこゝに入來れるは、先刻に廊下にて行逢ひたりし三人の腰元の中に、一際目立ちし婦人なり。
　そと貴船伯に打向ひて、沈みたる音調以て、
「御前、姫樣はやう〳〵お泣き止み遊ばして、別室に大人しく在らつしやいます。」
　伯はものいはで頷けり。
　看護婦は吾が醫學士の前に進みて、
「それでは、貴下。」
「宜しい。」
と一言答へたる醫學士の聲は、此時少しく震を帶びてぞ予が耳には達したる。其顏色は如何にしけむ、俄に少しく變りたり。
　さては如何なる醫學士も、驚破といふ場合に望みては、さすがに懸念のなからむやと、予は同情を表したりき。
　看護婦は醫學士の旨を領して後、彼の腰元に立向ひて、
「もう、何ですから、彼のことを、一寸、貴下から。」
　腰元は其意を得て、手術臺に擦寄りつ。優に膝の邊まで兩手を下げて、しとやかに立禮し、
「夫人、唯今、お藥を差上げます。何うぞ其を、お聞き遊ばして、いろはでも、數字でも、お算へ遊ばしますやうに。」
　伯爵夫人は答なし。
　腰元は恐る〳〵繰返して、
「お聞濟でございませうか。」
「あゝ。」とばかり答へ給ふ。
　念を推して、
「それでは宜しうございますね。」
「何かい、魔醉劑をかい。」
「唯、手術の濟みますまで、ちよつとの間でございますが、御寢なりませんと、不可ませんさうです。」
　夫人は默して考へたるが、
「いや、よさうよ。」と謂へる聲は判然として聞えたり。一同顏を見合せぬ。
　腰元は諭すが如く、
「それでは夫人、御療治が出來ません。」
「はあ、出來なくツても可いよ。」
　腰元は言葉は無くて、顧みて伯爵の色を伺へり。伯爵は前に進み、
「其、そんな無理を謂つては不可ません。出來なくツても可いといふことがあるものか。我儘を謂つてはなりません。」
　侯爵はまた傍より口を挾めり。
「餘り、無理をお謂やつたら、姫を連れて來て見せるが可いの。疾く快くならんで何うするものか。」
「はい。」
「それでは御得心でございますか。」
　腰元は其間に周旋せり。夫人は重げなる頭を掉りぬ。看護婦の一人は優しき聲にて、
「何故、其樣にお嫌ひ遊ばすの、ちつとも厭なもんぢやございませんよ、うと〳〵遊ばすと、直ぐ濟んでしまひます。」
　此時夫人の眉は動き、口は曲みて、瞬間苦痛に堪へざる如くなりし。半ば目を睜きて、
「そんなに強ひるなら仕方がない。私はね、心に一つ祕密がある。魔醉劑は譫言を謂ふと申すから、それが恐くツてなりません、何卒もう、眠らずにお療治が出來ないやうなら、もう〳〵快らんでも可い、よして下さい。」
　聞くが如くんば、伯爵夫人は、意中の祕密を夢現の間に人に呟かむことを恐れて、死を以てこれを守らむとするなり。良人たる者がこれを聞ける胸中いかん。此言をしてもし平生にあらしめば必ず一條の紛紜を惹起すに相違なきも、病者に對して看護の地位に立てる者は何等のことも之を不問に歸せざるべからず。然も吾

が口よりして、あからさまに祕密ありて人に聞かしむることを得ずと、斷乎として謂出せる、夫人の胸中を推すれば。

伯爵は溫乎として、

「私にも、聞かされぬことなンか。え、奧。」

「はい。誰にも聞かすことはなりません。」

夫人は決然たるものありき。

「何も麻醉劑を嗅いだからつて、譫言を謂ふといふ、極つたこともなさゝうぢやの。」

「否、このくらゐ思つて居れば、屹と謂ひますに違ひありません。」

「そんな、また、無理を謂ふ。」

「もう、御免下さいまし。」

投棄つるが如く恁謂ひつゝ、伯爵夫人は寢返りして、橫に背かむとしたりしが、病める身のまゝならで、齒を鳴らす音聞えたり。

ために顏の色の動かざる者は、唯彼の醫學士一人あるのみ。渠は先刻に如何にしけむ、一度其平生を失せしが、今やまた自若となりたり。

侯爵は澁面造りて、

「貴船、こりや何でも姬を連れて來て、見せることぢやの、なんぼでも兒の可愛さには我折れよう。」

伯爵は頷きて、

「これ、綾。」

「は。」と腰元は振返る。

「何を、姬を連れて來い。」

夫人は堪らず遮りて、

「綾、連れて來んでも可い。何故、眠らなけりや、療治は出來ないか。」

看護婦は窮したる微笑を含みて、

「お胸を少し切りますので、お動き遊ばしちやあ、危險でございます。」

「なに、私や、ぢつとして居る。動きやあしないから、切つておくれ。」

予は其餘りの無邪氣さに、覺えず森寒を禁じ得ざりき。恐らく今日の切開術は、眼を開きてこれを見るものあらじとぞ思へるをや。

看護婦はまた謂へり。

「それは夫人、いくら何でも些少はお痛み遊ばしませうから、爪をお取り遊ばすとは違ひますよ。」

夫人はこゝに於てぱつちりと眼を睜けり。氣もたしかになりけむ、聲は凛として、

「刀を取る先生は、高峰樣だらうね!」

「はい、外科科長です。いくら高峰樣でも痛くなくお切り申すことは出來ません。」

「可いよ、痛かあないよ。」

「夫人、貴下の御病氣は其樣な手輕いのではありません。肉を殺いで、骨を削るのです。ちつとの間御辛抱なさい。」

臨檢の醫博士はいまはじめて恁謂へり。これ到底關雲長にあらざるよりは、堪へ得べきことにあらず。然るに夫人は驚く色なし。

「其事は存じて居ります。でもちつともかまひません。」

「あんまり大病なんで、何うかしをつたと思はれる。」

と伯爵は愁然たり。侯爵は傍より、

「兎も角、今日はまあ見合すとしたら何うぢやの。後でゆつくりと謂聞かすが可からう。」

伯爵は一議もなく、衆皆これに同ずるを見て、彼の醫博士は遮りぬ。

「一時後れては取返しがなりません。一體、あなた方は病を輕蔑して居らるゝから埒あかん。感情をとやかくいふのは姑息です。看護婦一寸お押へ申せ。」

いと嚴かなる命の下に五名の看護婦はバラバラと夫人を圍みて、其手と足とを押へむとせり。渠等は服從を以て責任とす。單に、醫師の命をだに奉ずれば可し、敢て他の感情を顧ることを要せざるなり。

「綾や、來ておくれ。あれ！」
と夫人は絶入る呼吸にて、腰元を呼び給へば、
慌てゝ看護婦を遮りて、
「まあ、一寸待つて下さい。夫人、何うぞ、御堪忍遊ばして。」と優しき腰元はおろ〳〵聲。
夫人の面は蒼然として、
「何うしても肯きませんか。それぢや全快つても死んでしまひます。可いから此儘で手術をなさいと申すのに。」
と眞白く細き手を動かし、辛うじて衣紋を少し寛げつゝ、玉の如き胸部を顯し、
「さ、殺されても痛かあない。ちつとも動きやしないから、大丈夫だよ。切つても可い。」
決然として言放てる、辭色ともに動かすべからず。さすが高位の御身とて、威嚴あたりを拂ふにぞ、滿堂齊しく聲を呑み、高き咳をも漏らさずして、寂然たりし其瞬間、先刻より些とも身動きだもせで、死灰の如く、見えたる高峰、輕く身を起して椅子を離れ、
「看護婦、刀を。」
「えゝ。」と看護婦の一人は、目を瞠りて猶豫へり。一同齊しく愕然として、醫學士の面を瞻る時、他の一人の看護婦は少しく震へながら、消毒したる刀を取りてこれを高峰に渡したり。

醫學士は取ると其まゝ、靴音輕く歩を移して、衝と手術臺に近接せり。
看護婦はおど〳〵しながら、
「先生、このまゝでいゝんですか。」
「あゝ、可いだらう。」
「ぢやあ、お押へ申しませう。」
醫學士は一寸手を擧げて、輕く押留め、
「なに、それにも及ぶまい。」
謂ふ時疾く其手は既に病者の胸を掻開けたり。夫人は兩手を肩に組みて身動きだもせず。
恁りし時醫學士は、誓ふが如く、深重嚴肅なる音調もて、
「夫人、責任を負つて手術します。」
時に高峰の風采は一種神聖にして犯すべからざる異樣のものにてありしなり。
「何うぞ。」と一言答へたる、夫人が蒼白なる兩の頰に刷けるが如き紅を潮しつ。ぢつと高峰を見詰めたるまゝ、胸に臨める鋭刀にも眼を塞がむとはなさゞりき。
唯見れば雪の寒紅梅、血汐は胸よりつと流れて、さと白衣を染むるとともに、夫人の顏は舊の如く、いと蒼白くなりけるが、果せるかな自若として、足の指をも動かさゞりき。
ことのこゝに及べるまで、醫學士の擧動脱兎の如く神速にして聊か間なく、伯爵夫人の胸を割くや、一同は素より彼の醫博士に到るまで、言を挾むべき寸隙とてもなかりしなるが、こゝに於てか、わなゝくあり、面を蔽ふあり、背向になるあり、或は首を低るゝあり、予の如き、我を忘れて、殆ど心臟まで寒くなりぬ。
三秒にして渠が手術は、ハヤ其佳境に進みつゝ、刀骨に達すと覺しき時、
「あ。」と深刻なる聲を絞りて、二十日以來寢返りさへも得せずと聞きたる、夫人は俄然器械の如く、其半身を跳起きつゝ、刀取れる高峰が右手の腕に兩手を確と取縋りぬ。
「痛みますか。」
「否、貴下だから、貴下だから。」
恁言懸けて伯爵夫人は、がつくりと仰向きつゝ、凄冷極り無き最後の眼に、國手をぢつと瞻りて、
「でも、貴下は、貴下は、私を知りますまい！」
謂ふ時晩し、高峰が手にせる刀に片手を添へて、乳を下深く掻切りぬ。醫學士は眞蒼になりて戰きつゝ、
「忘れません。」
其聲、其呼吸、其姿、其聲、其呼吸、其姿。伯爵夫人は嬉しげに、いとあどけなき微笑を含

みて高峰の手より手をはなし、ばつたり、枕に伏すとぞ見えし、唇の色變りたり。

其時の二人が狀、恰も二人の身邊には、天なく、地なく、社會なく、全く人なきが如くなりし。

## 下

數ふれば、はや九年前なり。高峰が其頃は未だ醫科大學に學生なりし砌なりき。一日予は渠とともに、小石川なる植物園に散策しつ。五月五日躑躅の花盛なりし。渠とともに手を携へ、芳草の間を出つ、入りつ、園内の公園なる池を繞りて、咲揃ひたる藤を見つ。

歩を轉じて彼處なる躑躅の丘に上らむとて、池に添ひつゝ歩める時、彼方より來りたる、一群の觀客あり。

一個洋服の扮裝にて煙突帽を戴きたる蓄髯の漢先衞して、中に三人の婦人を圍みて、後よりもまた同一様なる漢來れり。渠等は貴族の御者なりし。中なる三人の婦人等は、一様に深張の涼傘を指翳して、裾捌の音最冴かに、するするとと練來れる、と行違ひざま高峰は、思はず後を見返りたり。

「見たか。」

高峰は頷きぬ。「むゝ。」

恁て丘に上りて躑躅を見たり。躑躅は美なりしなり。されど唯赤かりしのみ。

傍のベンチに腰懸けたる、商人體の壯者あり。

「吉さん、今日は好いことをしたぜなあ。」

「さうさね、偶にやお前の謂ふことを聞くも可いかな、淺草へ行つて此處へ來なかつたらもんなら、拜まれるんぢやなかつたつけ。」

「何しろ、三人とも揃つてらあ、どれが桃やら櫻やらだ。」

「一人は圓髷ぢやあないか。」

「何の道はや御相談になるんぢやなし、圓髷でも、束髪でも、乃至しやぐまでも何でも可い。」

「ところでと、あの風ぢやあ、是非、高島田と來る處を、銀杏と出たなあ何ういふ氣だらう。」

「銀杏、合點がいかぬかい。」

「えゝ、わりい洒落だ。」

「何でも、貴姑方がお忍びで、目立たぬやうにといふ肚だ。ね、それ、眞中のに水際が立つてたらう。いま一人が影武者といふのだ。」

「そこでお召物は何と踏んだ。」

「藤色と踏んだよ。」

「え、藤色とばかりぢや、本讀が納まらねえぜ。足下のやうでもないぢやないか。」

「眩くツてうなだれたね、おのづと天窓が上らなかつた。」

「そこで帶から下へ目をつけたらう。」

「馬鹿をいはつし、勿體ない。見しやそれとも分かぬ間だつたよ。あゝ殘惜い。」

「あのまた、歩行振といつたらなかつたよ。唯もう、すらッとから霞に乘つて行くやうだつけ。裾捌、褄はづれなんといふことを、なるほどゝ見たは今日が最初よ。何うもお育柄はまた格別違つたもんだ。ありやもう自然、天然と雲上になつたんだな。何うして下界の奴儕が眞似ようたつて出來るものか。」

「酷くいふな。」

「ほんのこつだが私やそれ御存じの通り、北廓を三年が間、金毘羅樣に斷つたといふもんだ。處が、何のことあない。肌守を懸けて、夜中に土堤を通らうぢやあないか。罰のあたらないのが不思議さね。もう〳〵今日といふ今日は發心切つた。あの醜婦ども何うするものか。見なさい、アレ〳〵ちらほらとかう其處いらに、赤いものがちらつくが、何うだ。まるでそら、芥塵か、蛆が蠢めいて居るやうに見えるぢやあないか、馬鹿〳〵しい。」

「これはきびしいね。」
「串戯ぢやあない。あれ見な、やつぱりそれ、手があつて、足で立つて、着物も羽織もぞろりとお召で、おんなじ樣な蝙蝠傘で立つてる處は、憚りながらこれ人間の女だ、然も女の新造だ。女の新造に違ひはないが、今拝んだのと較べて、何うだい。まるでもつて、くすぶつて、何といつて可いか汚れ切つて居らあ。あれでもおんなじ女だつさ、へむ、聞いて呆れらい。」
「おや／＼、何うした大變なことを謂出したぞ。しかし全くだよ。私もさ、今まではかう、ちよいとした女を見ると、ついそのなんだ。一所に歩くお前にも、隨分迷惑を懸けたつけが、今のを見てからもう／＼胸がすつきりした。何だかせい／＼とする、以來女はふつつりだ。」
「それぢやあ生涯ありつけまいぜ。源吉とやら、みづからは、とあの姫樣が、言ひさうもないからね。」
「罰があたらあ、あてこともない。」
「でも、あなたやあ、と來たら何うする。」
「正直な處、私は遁げるよ。」
「足下もか。」
「え、君は。」
「私も遁げるよ。」と目を合せつ。しばらく言を杜絶えたり。
「高峰、ちつと歩かうか。」
予は高峰と共に立上りて、遠く彼の壮佼を離れし時、高峰はさも感じたる面色にて、
「あゝ、眞の美の人を動かすことあの通りさ、君はお手のものだ、勉強し給へ。」
予は畫師たるが故に動かされぬ。行くこと數百歩、彼の樟の大樹の鬱蒼たる木の下蔭の、稍薄暗きあたりを行く藤色の衣の端を遠くよりちらと見たる。
園を出づれば丈高く肥えたる馬二頭立ちて、磨硝子入りたる馬車に、三個の馬丁休らひたりき。其後九年を經て病院の彼のことありしまで、高峰は彼の婦人のことにつきて、予にすら一言をも語らざりしかど、年齢に於ても、地位に於ても、高峰は室あらざるべからざる身なるにも關らず、家を納むる夫人なく、然も渠は學生たりし時代より品行一層謹嚴にてありしなり。予は多くを謂はざるべし。
青山の墓地と、谷中の墓地と所こそは變りたれ、同一日に前後して相逝けり。
語を寄す、天下の宗教家、渠等二人は罪惡ありて、天に行くことを得ざるべきか。

蓑着て通る

蓑きて通る、
笠きて濡る。
こん／＼蛇の目、
澁蛇の目。
繪日傘日傘。
坊やがさした繪日傘、
日傘でお天氣。

——鏡花全集巻十五「唄」より

# 琵琶傳

## 一

新婦が、床杯をなさむとて、座敷より休息の室に開きける時、介添の婦人は不圖其顔を見て驚きぬ。

面貌殆ど生色なく、今にも仆れむずばかりなるが、ものに激したる状なるにぞ、介添は心許なげに、つい膝に着換を採げながら、

「もし、御気分でもお悪いのぢやございませんか。」

と聲を縮めてそと問ひぬ。

新婦は淡冷なる瞳を轉じて、介添を顧みつ。

「何に。」

とばかり簡單に言捨てたるまゝ、身さへ眼をさへ動かさで、一心唯思ふことある其一方を見詰めつゝ、衣を攫ふるも、襟を緊むるも、衣紋を直すも、帯を結ふるも、皆他の手に打任せつ。

平常たら與新婦の、容色を羨みたる介添の、何にかは知らずおど〳〵しながら、

「此方へ。」

と謂ふに任せ、渠は少しも躊躇はで、静々と歩を廊下に運びて、やがて寝室に伴はれぬ。

床にはハヤ良人ありて、新婦の来るを待ち居れり。渠は名を近藤重隆と謂ふ陸軍の尉官なり。式は別に謂はざるべし、媒妁の夫妻退き、介添の婦人皆罷出づ。

唯二人、閨の上に相對し、新婦は悄と身體を固めて、端然として坐したるまゝ、まおもてに良人の顔を瞻りて、打解けたる状毫もなく、はた恥らへる風情も無かりき。

尉官は襟を掻合せ、こもまた稍ぎたる顔あらず、殆ど五分時ばかりの間、互に眼と眼を見合せしが、遂に良人先づ寂びたる聲にて、

「お通。」

とばかり呼懸けつ。

新婦の名はお通ならむ。

呼ばるゝに應へて、

「唯。」

とのみ、渠は判然ともの言へり。

尉官は太く苛立つ聲を、強ひて落着けたらむ如き、沈める、力ある音調もて、

「汝、よく来たな。」

お通は少しも口籠らで、

「何うも詮方がございません。」

尉官は少時默しけるが、稍其聲を高うせり。

「おい、謙三郎は何うした。」

「息災で居ります。」

「よく、汝、別れることが出来たな。」

「詮方がないからです。」

「何故詮方がない。うむ。」

お通はこれが答をせで、懐中に手を差入れて一通の書を取出し、良人の前に繰廣げて、両手を膝に正してき。尉官は右手を差伸し、身近に行燈を引寄せつゝ、眼を定めて讀みおろしぬ。

文字は蓋し左の如きものにてありし。

お通に申残し参らせ候、御身と近藤重隆殿とは許嫁に有之候然るに御身は殊の外彼の人を忌嫌ひ候様子、拙者の眼に相見え候へば、女ながらも其心のいひ開け難くて、臨終の際まで默し候

さ候へども、一旦親族の儀を約束いたし候へば、義理堅かりし重隆殿の先人に對

し面目なく、今さら變替相成らず候あはれ犠牲となりて拙者の名のために彼の人に身を任せ申さるべく、斯の證言を認め候時の拙者が心中の苦痛を以て、御身に謝罪いたし候

月日　　　　清川通知

お通殿

二度三度讀返して、尉官は容を更めたり。

「通、吾は良人だぞ。」

お通は聞きて兩手を支へぬ。

「唯、貴下の妻でございます。」

爾時尉官は傲然として傍向けるお通を瞰下しつゝ、

「吾のいふことには、汝、屹と從ふであらうな。」

此方は頭を低れたるまゝ、

「否、お從はせなさらなければ不可ません。」

尉官は眉を動かしぬ。

「ふむ。しかし通、吾を良人とした以上は、汝、妻たる節操は守らうな。」

お通は屹と面を上げつ、

「いゝえ、出來さへすれば破ります。」

尉官は怒氣心頭を衝きて烈火の如く、一喝、

「何だ!」

と其言を再びせしめつ。お通は怯めず、臆する色なく、

「はい。私に、私に、節操を守らねばなりませんと謂ふ、そんな、義理はございませんから、出來さへすれば破ります!」

惡氣もなく言放てる、片頰に微笑を含みたり。

尉官は直ちに頷きぬ。胸中豫めこの算ありけむ、熱の極は冷となりて、ものいひもいと靜に、

「應、屹と節操を守らせるぞ。」

渠は唇頭に冷笑したりき。

## 二

藤本謙三郎は唯一人清川の書齋に在り。當所もなく室の一方を見詰めたるまゝ、默然として物思へり。[illegible]書齋の窓前には、一個數寄を盡したる鳥籠を懸けたる中に、一羽の純白なる鸚鵡あり、餌を啄むにも飽きたりけむ、もの淋しげに謙三郎の後姿を見遣りつゝ、頭を左右に傾け居れり。一室寂たること頻なりし、謙三郎は其清秀なる面に鸚鵡を見向きて、太く物案ずる狀なりしが、戀ふる如く、危む如く、はた人に憚ることあるものゝ如く、「琵琶。」と一聲、鸚鵡を呼べり。琵琶とは蓋し鸚鵡の名ならむ。低く口笛を鳴すとひとしく、

「ツウチャン、ツウチャン」

と呼べる聲、奥深きこの書齋を徹して、一種の音調打響くに、謙三郎は愁然として、思はず涙を催しぬ。

琵琶は年久しく清川の家に養はれつ。お通と渠が從兄なる謙三郎との間に處して、巧みに其情交を暖めたりき。他なし、お通が此家の愛女として、室を隔てながら家を整したりし頃、未だ近藤に嫁がざりし以前には、謙三郎の用ありて、お通に見えむと欲することある每に、今しも渠がなしたる如く、籠の中なる琵琶を呼びて、低く口笛を鳴すとともに、琵琶が玲瓏たる聲をもて、「ツウチャン、ツウチャン」と傳令すべく、よく馴らされてありしかば、此時の如く聲を揚げて二たび三たび呼ぶとともに、軒內深き處寂として物を縫ふ女、物差を棄て、針を措きて、直に謙三郎に來りつゝ、笑顏を合はすが例なりしなり。

今やなし。あらぬを知りつゝ謙三郎は、日に幾回、夜に幾回、果敢なきこの兒戲を繰返すことを禁じ得ざりき。

さて其頃は、征清の出師ありし頃、新は

も豫備後備に編する召集令の發表されし折なりし。

謙三郎もまた後備役兵の令に因りて、豫備兵の籍にありしかば、一週日以前既に一度聯隊に入營せしが、其月其日の翌日は、旅團戰地に發するとて、親族父兄の心を察し、一日の出營を許されたるにぞ、渠は父母無き孤兒の、他に繫累とてはあらざれども、兒として幼少より養育されて、母とも思ふ叔母に會して、永き離別を惜まむため、朝來こゝに來り居り、聞くこともはた謂ふことも、永き夏の日に盡きざるに、歸營の時限迫りたれば、謙三郎は、ひしひしと、軍衣を裝び、將に辭し去らむとして躊躇しつ。

書齋に品あり、衣兜に容るゝを忘れたりとて既に玄關まで出でたる身の、一人書齋に引返しつ。

叔母と其姪の清は、皆玄關に立侍びて、いづれも齊しく愁色あり。斜光の中に行く人の、今にも來るを待ちけるが、五分を過ぎ、十分を經て、なほ書齋より來らざるにぞ、謙三郎は如何にせしと、心々に思へる折から、寂として聲を呑み、書齋のかたよりおとづれきて、

「ツヤチーン、ツウチャン」

と琵琶の音、聞き慣れたる叔母の此時のみ何ぞ思ひけむ色をかへて、急がはしく書齋に驅入れり。

謙三郎は琵琶に銘じて、お通の名をば呼ばしめしが、來るべき人のあらざるに、平時の事とはいひながら、あすは戰地に赴く身の、再び見、再び聞き得べき譯にあらねば、意を決したる首途にも、渠はそゞろに涙ぐみぬ。

時に緣側に跫音あり。女々しき風情を見られまじと、謙三郎の立ちたる時、叔母は早くも此方に來りて、突然鳥籠の蓋を開けつ。

驚き見る間に飛ばたき高く、琵琶は空中を逍遥し去れり。

「おや！　何をなさいます。」

と謙三郎はせはしく問ひたり。叔母は此方を見も返らで、琵琶の行方を瞻りつゝ、緣側に立ちたるが、あはれ消殘る樹間の雲か、線翠暗きあたり白き鸚鵡の見え隱れに、唯一聲鳴きける時、手を以て涙を拂ひつゝ徐に謙三郎を顧みたり。

「いゝえね、未練が出ちやあ惡いから、もうあの鳥を聞くまいと思つて。……」

叔母は眞の襟を噛みぬ。

謙三郎は潸然たる色あり。これが答は爲さずして、鸚鵡の籠の門鐶を懸けつ。

「左樣なら參ります。」

とつかくと書齋を出でぬ。叔母は引添ふ姪と倶にして、其左右に從ひつゝ、歩みながら口早に、

「可いかい、先刻謂つたことは違へやしまいね。」

「何ですか。お通さんに逢つて行けとおつしやつた、あのことですか。」

謙三郎は立留りぬ。

「あゝ、そのこととも、お前、軍に行くといふ人に他に願があるものかね。」

「其は困りましたな。彼處までは五里あります。今朝だと腕車で驅けて行つたんですが、到底逢はせないといひますから行かうといふ氣もありませんでした。今ッからぢや、もう時間がございません。三十分間、兵營までさへ大急でございます。」

謂ふことを聞きも果てず、叔母は少しく急き込みて、

「其言は聞いたけれど、女の身にもなつて御覽、如彼病舍へ推込まれて、一年越外出も出來ず、折があつたらお前に逢ひたい一心で、細々命を繫いで居るもの、顏も見せないで行かれち

やあ、其こそ彼女は死んでしまふよ。お前も餘り察しがない。」
　と戎衣を提へて放たさるに、謙三郎は困じつゝ、
「左様おつしやるも無理ではございませんが、もう今から逢ひますには、勝禁しなければなりません。」
「は、勝禁でも何でもおし。通が私や可哀さうだから、よう、後生だから。」
　と片手に戎衣の袖を捉へて、片手に拝むに身もよもあらず、謙三郎は蒼くなりて、
「何、私の身は何うならうと、名誉も何も構ひませんが、其では、其では何うも國民たる義務が欠けますから。」
　と誠心籠めたる強き聲音も、いかでか叔母の耳に入るべき。只管頭を打掉りて、
「何が欠けようとも構はないよ。何が何でも可いんだから。とれ唯た一目、後生だ。頼む。逢つて行つてやつておくれ。」
「でも其だけは。」
　謙三郎のなほ辭するに、渠は怒りて血相かへ、
「えゝ、何うしても肯かないのか。私一人だから可いと思つて、伯父さんがおいでの時なら、そんなこと、いはれやしまいが。え、お前、何時も口癖のやうに何とおいひだ。乾と養育された恩を返しますツて、立派な口をきく癖に。私がこれほど頼むものを、それぢやあ義理が濟むまいが。餘りだ、餘りだ。」
　謙三郎は如何とも辯疏なすべき言を知らず、少時沈思して頭を低れしが、叔母の背をば搔撫でつゝ、
「可うございます。何とでもいたして乾と逢つて參りませう。」
　謂はれて叔母は振仰向き、さも嬉しげに見えたるが、謙三郎の顔の色の尋常ならざるを危みて、
「お前、可いのかい。何ともありやしないかね。」
「否、お憂慮には及びません。」
　といと淋しげに微笑みぬ。

## 三

「奥様、何處へござらつしやる。」
　と不意に背後より呼留められ、人は知らずと忍び出でゝ、今しも漸う戸口に到れる、お通はハツと吐胸をつきぬ。
　されども渠は聞かざる眞似して、手早く鎖を外さむとなしける時、手燭片手に駈出でゝ、無手と帯際を引捉へ、摑戻せる老人あり。
　頭髪も銀の如く、額兀げて、歯まだらに、いと厳めしき面構の一癖あるべく見えけるが、のぶとき聲にてお通を叱り、
「夜夜中あてことも無え駄目なこツた、断念さつせい。三原傳内が眼張つてれば、びくともさせることつちやあ無え。眼を眩まさうとつてそりや駄目だ。何の戸外へ出すものか。此方へござれ。えゝ、此方ござれと謂ふに。」
　お通は乾と振返り、
「お放し、私が一寸戸外へ出ようとするのを、何のお前がお構ひでない、お放しよ、えゝ！お放してば。」
「なりましねえ。麻畑の中へ行つて逢はうたツて、さうは行かねえ。素直に此方へござれツていに。」
　お通は肩を動かしぬ。
「お前、主人を何うするんだえ。些少出過ぎやしないかね。」
「主人も糸瓜もあるものか、吾は、何でも重隆様のいひつけ通りに乾と勤めりや其で可いのだ。お前様が何と謂つたつて耳にも入れるものぢやねえ。」

「邪險も大抵にするものだよ。お前あんまりぢやないかね。」

とお通は黑く豐かな睫を以て老犬の顏をじろりと見たり。傳内はビクともせず、

「邪險でも因業でも、吾、何にも構はねえだ。旦那樣のおつしやる通り屹と勤めりや其で可いのだ。」

威を以て制することならずと見たる、お通は少しく氣色を和らげ、

「しかしねえ、お前、其處には人情といふものがあるわね。まあ、考へて見ておくれ。一昨日の晩はじめて門をお敲きなすつてから、今夜で丁ど三晩の間、むかふの麻畑の中に隱れておいでなすつて、めしあがるものといつちや、一粒の御飯もなし、内に居てさへひどいものを、ま、蚊や蚋で何んなだらうねえ、脫體をなすつたッて、もう、お前も知つてる通り、今朝ッからの何の位、おしらべが來たか知れないもの、おつかまりなさりや其ッ切だやあ無いか。何の、一寸くらゐ顏を見せたからつて、見たからつて、お前、この夜中だもの、れ、お前この夜中だもの、旦那に知れッこはありやしないよ。でもそれでも料簡がならなけりやお前でも可い、お前でも可いからね、實はあの隱れ忍んで、やらやう拵へたこの行食事をそつと屆けに來ておくれ、よ、後生だよ。私に一目逢はうとつて其位に辛抱遊ばす、それを私の身になつちやあ、ま、どんなだらうとお思ひだ。え、後生だからさ、もう、私や居ても、起つても、居られやしないよ。後生だからさ、一寸屆けて來ておくれなね。」

傳内は唯頭を掉るのみ。

「何を謂はッしても駄目なこんだ。そりや、は、迚も駄目でござる。こんなことがあらうと思はつしやればこそ、旦那樣が扶持い着けて、お前樣の番をさして置かつしやるだ。」

お通はいとも切なき聲にて、

「さ、さ、其ことは聞えたけれど……あゝ、何といつて頼みやうもない。一層お前、わ、私の眼を潰しておくれ、さうしたら顏を見る望みもあるまいから。」

「そりや不可えだ。何でも、は、お前樣に氣を着けて、蚤にもさゝせるなといふ、おつしやりつけだアもの。眼を潰すなんてあてごともない。飛んだことをいはつしやる。其にしてもお前樣眼が見えねえでも、口が利くだ。何でも、はあ、一切、男と逢はせることゝ、話談をさせることがならねえといふ、旦那樣のおつしやりつけだ。斷念めてしまはつしやい。何といつても駄目でござる。」

お通は胸も張裂くばかり、「えゝ。」と叫びて、身を震はし、肩をゆりて、

「イ、一層、殺しておしまひよう。」

傳内は自若として、

「これ、またあんな無理を謂ふだ。蚤にも喰はすことのならねえものを、何として、は、殺せることだ。さ駄々を捏ねねえで此方へござれ。ひどい蚊だがなう。お前樣アくはねえか。」

「えゝ、蚊がくふ處のことぢやないわね。お前も餘り因業だ、因業だ、因業だ。」

「なに其、いはつしやるほど因業でもねえ。此家をめざしておいでに、何遍も探偵が遣つて來るだ。はい、麻畑と謂つてやりや、即座に捕まへられて、吾も、はあ、夜の目も合はされえで、お前樣を見張るには及はずかい、御褒美も貰へるだ。けンども、何も旦那樣あ、訴人をしろと謂ふ、いひつけはしなさらねえだから、吾知らねえで、押通しやさ。そン代にやあまた、いひつけられたことはハイ一寸もずらさねえだ。何でも戸外へ出すことはなりましねえ。腕づくでも逢はせねえから、さう思つてくれさつしやい。」

お通はわつと泣出しぬ。

傳内は眉を顰めて、

「あれ、泣かあ。何時もねえことに何うしたゞ。お前様婚禮の晩床入もしねえで其場ッから此方へ追出されて、今おや月日も一年越、男猫も抱かないで内にばかり。敷居も跨がすなといふいひつけで、吾に眼張つとれといふこんだから、吾や、お前様の、心が思ひやらるゝで、見て居るが辛いでの、何様に斷らうと思つたか知ンねえけんど、今の旦那様三代めで、代々養はれた老夫だで、横のものをば縱様にしろと謂はれた處で從はなけりやなんねえので、畏つたことは畏つたが、さてお前様が嘸泣續けるこんだらうと、生命が縮まるやうに思つたゞ。すると案じるより產が安いで、長い間からやつて一所に居るが、お前様の斷念の可いには魂消たね。思ひなしか、氣のせゐか、段々窶れるやうには見えるけんど、つひぞ膝も崩した事なし、整然どして威勢がよくつて、吾、はあ、ひとりでに天窓が下るだ、はてこゝいらは、田舍も田舍だ。何處に居た處で何の樂もねえ老夫でせえ、つまらねえこつたと思つて、氣が滅入るに、お前様は、えらい女だ。面壁九年とやら、悟つたものだと我あ折つて居たんだがさ、藥袋もないことが湧いて來て、お前様つひぞ見たこともねえ泣かつしやるね。御心中のウ察しねえでもねえけんどが、旦那様にやあ、代へられましねえ。はて、お前様の様でもねえ。斷念めてしまはつしやい。何の道斯う謂ひ出したからにやいくら泣いたつてそりや駄目さ。」

然り親仁のいひたる如く、お通は今に一年間、幽閉されたるこの孤屋に處して、涙に、口に、はた容儀、心中の其痛苦を語りしこと絕えてあらず。修容正粛殆んど端倪すべからざるものありしなり。されど一たび大磐石の根の覆るや、小石の轉ぶが如きものにあらず。三晝夜麻畑の中に蟄伏して、一たび其身に會せむため、一粒の飯をだに口にせで、却りて濕蟲の餌となれる、意中の人の窮苦には、泰山と雖も動かで止むべき、お通は轉倒したるなり。

「そんなに解つて居るのなら、一寸の間、大眼に見ておくれ。」

と前後も忘れて身をあせるを、傳内聊も手を弛めず、

「はて、背分のねえ、何ういふものだね。」

お通は涙にむせいりながら、

「えゝ、背分がなくツても可いよ、お放し、放しなツてば、放しなよう。」

「是非とも背かなけりや、うぬ、ふン縛つて、動かされえぞ。」

と傳内は一呵せり。

宜しこそ、近藤は、執着の極、婦人をして我に節操を盡さしめむか、終生空閨を護らしめ、おのれ一分時も其傍にあらずして、なほよく節操を保たしむるにあらざるよりは、我に貞なりとはいふことを得ずとなし、はじめよりお通の我を嫌ふこと、蛇蝎もたゞならざるを知りながら、恰も渠に魅入りたらむ如く、進退隙なく附絡ひて、遂にお通と謙三郎とが既に成立せる戀を破りて、おのれ犧牲を得たりしにもかゝはらず、從兄妹同士が戀愛のいかに強きかを知れるより、嫉妬の餘、奸淫の念を節し、當初婚姻の夜よりして、衾をともにせざるのみならず、一度も來りて其妻を見しことあらざる、孤屋に幽閉の番人として、この老夫をば擇びたれ。お通は止むなく死力を出して、瞬時傳内とすまひしが、風にも堪へざるかよわき婦人の、憂にやせたる身を以て、いかで健腕に敵し得べき。手もなく奥に引立てられて、其まゝ其處に押据ゑられつ。

たとひいかなる手段にても到底この老夫をして我に忠ならしむることの能はざるをお通は斷

じつ。激昂の反動は太く渠をして落膽せしめて、お通は張もなく崩折れつゝ、といきをつきて、悲しげに、

「老夫や、世話を焼かすねえ。堪忍しておくれ、よう、老夫や。」

と身を持餘せるかの如く、肱を枕に寢倒れたる、身體は綿とぞ思はれける。

傳内はこの一言を聞くと齊しく、窪める兩眼に涙を浮べ、一座退りて手をこまぬき、拳を握りてものいはず。鐘聲遠く夜は更けたり。蕭籟天地聲なき時、門の戸を幽に叩きて、

「通ちやん、通ちやん。」

と二聲呼ぶ。

お通は其聲を聞くや否や、彈機の如く飛起きて、屹と片膝を立てたりしが、傳内の眼に遮られて、答ふることを得爲ざりき。

戸外にては言途絶え、内を窺ふ氣勢なりしが、

「通ちやん、これだけにしても、逢はせないから、所詮あかないとあきらめるが……」

呼吸も絶ゆげに途絶え〳〵、隙間を洩れて聞ゆるにぞ、お通は居坐直整へつ、疊に兩手を支へつゝ、行儀正しく聞き居たる、背打ふるへ、髮ゆらぎぬ。

「實はね、叔母さんが、謂ふから、仕方がないやうに、いつて居たけれど、逢ひたくツて、實はね、私が。」

といひかゝれる時、犬二三頭高く吠えて、謙三郎を圍めるならむか、叱ツ叱ツと追ふが聞えつ。

更に低まりたる音調の、風なき夜半に弱々しく、

「實はね、叔母さんに無理を謂つて、逢はねばならないやうにして貰ひたかつた。だからね、私にどんなことがあらうとも叔母さんが氣にかけないやうに。」

と謂ふ折しも凄まじく大戸にぶつかる音あり。

「あ、痛。」

と謙三郎の叫びたるは、足や咬まれし、手やかけられし、犬の毒牙にかゝれるならずや。あとは途ぎれてことばなきに、お通はあるにもあられぬ思ひ、思はず起つて駈出でしが、肩肱いかめしく構へたる、傳内を一目見て、蒼くなりて立竦みぬ。

これを見、彼を聞きたりし、傳内は何とかしけむ、つと身を起して土間に下立ち、ハヤ懸金に手を懸けつ。

「えゝ、た、た、たまらねえ〳〵、一か八かだ、逢はせてやれ。」

とがたりと大戸引開けたる、トタンに犬あり、颯と退きつ。

懸寄るお通を傳内は身を以て謙三郎にへだてつゝ、謙三郎のよろめきながら内に入らむとあせるを遮り、

「うむや、さう易々とは入れねえだ、旦那樣のいひつけで三原傳内が番する間は、敷居も跨がすこつちやあねえ。斷て入るなら吾を殺せ。さあ、すつぱりとゑぐらつしやい。えゝ、何を愚圖愚圖、もうお前樣方の樣に思ひ詰めりや、これ、人一人殺されねえことあ無え筈だ。吾、はあ、自分で腹あ突いちやあ、旦那樣に濟まねえだ。濟まねえだから、死なねえだ、死なねえらちは邪魔アするだ。この邪魔物を殺さつしやい、七十になる老夫だ。殺し惜くもねえでないか。さあ、やらつしやい。えゝ！　埒のあかぬ。」

と兩手に襟を押開けて、仰様に咽喉佛を示したるを、謙三郎はまたゝきもせで、良しばらく瞶めたるが、銃劍一閃し、喉を切つて、

「許せ！」

といふ聲もろとも、咽喉に白刃を刺されしまゝ、傳内はハタと倒れぬ。

同時に内に入らむとせし、謙三郎は敷居につまづき、土間に兩手をつきざまに俯伏になりて起きも上らず。お通は阿呀、狂氣の如く、謙三郎に取縋りて、

「謙さん、謙さん、私や、私や、誰が見たかつた。」

と肩に手を懸け膝に抱ける、折から靴音、劍の響。近く、跫どや／＼と入來りて、正體もなき謙三郎をお通の手より奪ひ取りて、有無を謂はせず引立つるに、阿呀とばかり跳起きたるまゝ、茫然として立ちたるお通の、齒をくひしばり、瞳を据ゑて、よろ／＼と倒れ懸れる、肩を支へて、襟を摑みて、

「汝、何うするか、見ろ、太い奴だ。」

これ婚姻の當夜以來、お通がいまだ一度も聞かざりし激しく怒れる良人の聲なり。

## 四

出征に際して脱營せしと、人を殺せし罪とをもて、勿論謙三郎は銃殺されたり。

謙三郎の死したる後も、清川の家に於ける居離れし八疊の彼が書齋は、依然として舊態を更めざりき。

秋の末でもなかりけれ、寧ろ蓬に代ふるに秋野の錦を浮織にせる、花毛氈を以てして、いと華々しく、敷詰めたり。

床なる花瓶の花も萎まず、西向の櫺子の下なりし机の上も片づきて、硯の蓋に塵もおかず、座蒲團を前に敷き、傍なる桐火桶に烏金の火箸を添へて、唯見ればなかに炭火も活けつ。

紫たんの角の茶盆の上には幾個の茶碗を俯伏せて、菓子を裝りたる皿をも置けり。

机の上には一葉の、謙三郎の寫眞を祭り、あたりの襖を閉切りたれば、さらでも秋の暮なるに、一室森とほのあかるく、四隅はやう／＼暗くなりて、ものゝ音さへ聞えざるに、火鉢に懸けたる鐵瓶の湯氣のみ薄く立のぼりて、湯の沸る音靜なり。折から彼方より襖を開けつ。一脈の風の颯と入りて、立昇る湯氣の靡く／＼と同時に、陰々たる此書齋をば眞白き顏の覗きしが、

「謙さん。」

と呼び懸けつ。裳すら／＼入りざま、ぴたと襖を立籠めて、室の中央に進み寄り、悄然として四邊を見廻し、坐りもやらず、頤を襟に埋みて悄然たる、お通の俤窶れたり。

やがて桐火桶の前に坐して、亡き人の蒲團を避けつゝ、其傍に崩折れぬ。

「謙さん。」

とまた低聲に呼びて、ものゝ驚きを爲たる如く、肩をすぼめて首低れつ。鐵瓶にそと手を觸れて、

「おゝ、よく沸いてるね。」

と茶盆に眼を着け、其蓋を取のけ、徐かなる瞳子の中を差覗き、打悄れたる風情にて、

「貴下、お茶でも入れませうか。」

と寫眞を、ぢつと瞻りしが、はら／＼と涙を溢して、其後はまたものいはず、深き思に沈みけむ、身動だにもなさゞりき。

落葉さらりと障子を撫でゝ、夜は漸く迫りつゝ、あるかなきかのお通の姿も黄昏の色に蔽はれつ。炭火のじようの動く時、いかにしてか聞えつらむ。

「ツウチャン。」

とお通を呼べり。

再び、

「ツウチャン。」

とお通を呼べり。お通は默想の夢より覺めて、聲する方を屹と仰ぎぬ。

「ツウチャン。」

とまた繰返せり。お通はうか／＼と立起りて、一歩を進め、二歩を行き、緣側に出で、庭に下り、開け忘れたりし裏の非常口よりふら

ふらと立出でゝ、何處ともなく歩み去りぬ。

斯て幾時の其間、足のまゝに彷徉へりし、お通は不圖心着きて、

「おや、何處へ來たんだらう ねえ」

と其身みづからを怪みたる、お通は見るより色を變へぬ。

こゝぞ陸軍の所轄に屬する埋葬地の邊なりける。

銃殺されし謙三郎もまた葬られて此處にあり。

彼夜、お通は機會を得て、一度謙三郎と相抱き、互に顏をも見ざりしに、意中の人は捕縛されつ。

其時既に精神的に絕え果つべかりし玉の緒を、嚴しき手にて取留められ、消ゆるともなく、死すにもあらで、良二ケ月を過ぎつる後、一日重隆のお通を强ひて、ともに近郊に散策しつ。

小高き丘に上りしほどに、不圖足下に平地ありて廣袤一圓十町餘、其一端には新しき十字架ありて建てるを見たり。

お通は見る眼も淺ましきに、良人は豫め用意や爲けむ、從卒に持つて來させし、床几を其處に押並べて、我とお通を抑留して、見る目を避くるを許さゞりき。

武歩忽ち丘下に起りて、一中隊の兵員あり。緋色の囚徒の服着たる一個の繩付を挾みて眼界近くなりけるにぞ、お通は心から見るともなしに、ふと其囚徒を見るや否や、左右の良人を流眄に懸けつ。會て何うするか見ろ、と良人かいひし、それは、すなはちこれなりしよ。お通は十字架を一目見てしだに、なほ且つ震ひをのゝける先の日の悲に引替へて、見よ〳〵、囚徒は面縛され、射兵の第一、第二發、第三射撃の響とともに、囚徒が固く食ひしばれる唇を洩る鮮血の、細く、長く其胸間に垂れたるまで、お通は一瞬もせず瞻りながら、手も動かさず、膝も崩さず、石に化したるものゝ如く、一筋二筋頰にかゝれる、後毛だにも動かさゞりし。

銃殺全く執行されて、硝煙の香の失せたるまで、尉官は始終お通の擧動に細かく注目したりけるが、心地好げに髯を捻りて、

「擧手に節操を破つて見ろ。」

と片頰に微笑を含みてき。お通は其時蒼くなりて、

「もう、破らうにも破られません。しかし死、死ぬことは何時でも。」

尉官はこれを聞きもあへで、

「馬鹿。」

と激しくいひかけて、お通の首の側にゝを見て、

「從卒、家まで送つてやれ。」

命ぜられたる從卒は、お通がみづから促したるまで、悪れて起つことをだに得せざりしなり。

斯て其日の悲劇は終りつ。

お通は家に歸りてより言行殆ど平時の如く、或は泣き、或は怨じて、尉官近藤の夫人たる、風采と態度とを失ふことをなさゞりき。

然りし後、未だ嘗て許されざりし里歸を許されて、お通は實家に歸りしが、母の膝下に來るとともに、蓬髮あし氣の弛みけむ、實はあどけなきものとなりて、泣くも笑ふも嬰兒の如く、ものぐるほしき體なるより、一日のばしにいひのばしつ。母は女を重隆の許に返さずして、一月餘を過してき。

されば世に亡き謙三郎の、今も青春に在るが如く、日の朝、日の夕、膳を並べ、花を活け、茶を煎じ、菓子を挾むも、みなこれお通が堪へやらず忍びがたなき追慕の念の、其一端をもらせるなる。母は女の心を察して、其擧動の殆ど狂者の如きにもかゝはらず、制し、且つ禁ずることを得ざりしなり。

## 五

お通は琵琶ぞと思ひしなる、名を呼ぶ聲にさまよひ出でゝ、思はず謙三郎の墳墓なる埋葬地の間近に來り、心着けば土饅頭の未だ新しく見ゆるにぞ、激しく往時を追懷して、無念、愛惜、絕望、悲慘、其ひとつだもなほよく人を殺すに足る、種々の感情に胸をうたれつ。就中重隆が執念き復讐の企にて、意中の人の銃殺さるゝを、目前我身に見せしめし、當時の無念禁ずる能はず。婦人の意地と、張とのために、勉めて忍びし鬱憤の、幾十倍の勢を以て今滿身の血を炙るにぞ、面は蒼ざめ紅の唇白歯にくひしばりて、殆ど其身を忘るゝ折から、見遣る彼方の薄原より丈高き人物顯れたり。

濶歩埋葬地の間をよぎりて、不圖立停ると見えけるが、つか〳〵と歩をうつして、謙三郎の墓に達り、足をあげてハタと蹴り、カッパと唾をはきかけたる、傍若無人の振舞の手に取る如く見ゆるにぞ、意氣激昂して煙も立たむず、お通はいかで堪ふべき。

驅寄る婦人の跫音に、彼の人物は振返りぬ。これぞ近藤重隆なりける。

渠は旅團の留守なりし、いま山狩の歸途なり、ハタと面を合せる時、相隔ること三十步、お通が其時の形相はいかに凄じきものなりしぞ、尉官は思はず絕叫して、

「殺す！　吾を、殺す!!」

といふよりはやく、彈裝したる獵銃を、戰きながら差向けつ。

矢も銃彈も中らばこそ、轟然一射、銃聲の、雲を破りて響くと同時に、尉官は苦と叫ぶと見えし、お通が髮を兩手に摑みて、兩々動かざるもの十分時、ひとしく地上に重り伏せしが、一束の黑髮は其まゝ遂に起たざりし、尉官が兩の手に殘りて、ひよろ〳〵と立上れる、お通の口は喰破れる良人の咽喉の血に染めり。渠は其血を拭はむともせで、一足、二足、三足ばかり、謙三郎の墓に居寄りつゝ、裏がれたる聲いと細く、

「謙さん。」

といへるがまゝ、がッくり橫に僵れたり。

月青く、山黑く、白きものあり、空を飛びて、傍の枝に羽音を留めつ。葉を吹く風の音につれて、

「ツウチャン、ツウチャン、ツウチャン。」

と二たび三たび、谺を返して、琵琶は連に名を呼べり。琵琶は連に名を呼べり。

## あの紫は

あの紫は、
お池の杜若。
一つ橋渡れ、
二つ橋渡れ。
三つ四つ五つ、
杜若の花も、
六つ七つ八つ橋。

あの紫は。
お姉ちゃんの振袖。
一つ橋渡れ、
二つ橋渡れ。
三つ四つ五つ、
お姉ちゃんの年も、
六つ七つ八つ橋。

——鏡花全集巻十五「唄」より

# 一之巻

## 墓参

十一の時母みまかり給ひつ。年紀十四の春のはじめ、其の命日に當りし日なりき。活計の忙しきに、たゞ懐しく思ふのみ、御身代りてものせよといふ、父の言葉身に染みつゝも、予は墓参にとて立出でぬ。

蒼空には凧の聲、野面に蝶の飛交ふにて、纔に風もありと見ゆ。春興轉た酣なれば、人さま〴〵に浮かれいでゝ、市をはなれ、坂を攀ぢ、日暮の丘の眺望あたり、扇が原、題目堂、鳶が峰の此處彼處、一群々々落合ひて、莚を擴げ、氈を敷き、割籠を開き、吸筒を傾けなどして、老若男女の集へる上に、鳶は颺と翼をのして、靜に打舞ふ輪の中に、湖も見え、川も見え、橋見え、里見え、城見えて、市街も眼下に見え渡る、其麗さに引替へて、ひとむら樹立松杉の鬱蒼として生茂れる、あゝ、墓原の春寒さよ。

唯見れば母の墳墓の、誰が悪戯にや傍なる松の根に倒されて、臺石ばかり殘りたり。

こは其時に限りしならず。舊此處に何とかいひし臨濟宗の巨刹ありしが、何時の頃か亡び果てゝ、今は唯そのなごりの鐘撞堂に、一杵の撞木懸れるのみ。寺領なりける墓地を開きて、染井或は谷中の如く、土地の埋葬地としたりしなるが、固より墓守る僧もなく、春の山、秋の山、をりをり茶店を營むばかり、一軒家もあらざるに、町人が遊山の場とは、別に隔ての垣もなく、松杉の其の樹立にて、境をなせるに過ぎざれば、わるあがきする里の兒、醉漢などの侵し入りて、墓石をおしこかし、印の小松の枝をなぎ、卒堵婆を拔き棄てなどするが、墓あらしとて數々あり。

然らぬだに、手向の水も涸れがちや、去にし月捧げたる、花の枯れしも果敢なきに、恁う荒れ果てし草葉の蔭の、母の亡骸も年經れば、あとも留めずならむかと、はやくも涙さしぐみぬ。

庭の隅なる茶の木の蔭に、蛙の墓を築きし手に、其の墓石を掻抱き、舊の處に直し据ゑむと、幼心に力も料らず、押せばとて、曳けばとて、如何して動くべき。

むねのせまりて切なきに、といきして打仰ぐ、樹間の天は藍の如く、ひらり〳〵と凧の影、日脚傾く塔婆にうつりて、哄とさゞめく笑聲、遠近に聞ゆるにぞ、心なき人たちよ、と覺えず眉の動きしが、詮術もなく首垂れつゝ、然るにても打棄て去なむが口惜く、效あらじと知りながら、再び犇と取縋り、傍目も觸らで力を籠めたる、肩に手を置き背後より、

「あなた、お待ち遊ばせ。あの……」

と聲優しく、ふと呼びかくる者あるにぞ、振仰ぎ、見返れば、襲着したる妙なる姿、すらりとしたるが立ちたりき。其美しさ氣高さに、まおもてより見るを得ず、唯眞白なる耳朶より、襟脚にかけ、頬にかけ、二筋、三筋、はら〳〵と、後毛の亂れかゝりたる横顔を、密と見たるのみ、はなじろみぬ。

渠は片頬に微笑みながら、

「今ね、誰かに然ういつて、お墓を直さしてあげますからね、……お可哀相に、」

といひかけつゝ、其瞬間一點の、一事の胸にあることなく、無心なりし予が面を、ぢつと視めて、面を背向け、

「それではね、待つておいでなさいましよ。」

と行きかけて、また見返りぬ。

## 彫刻師

貧しきを心に留めず、氣まゝに注文を打棄て置くを、名人上手と謂ふべくは、彫刻師なりし予が父も、名工の一として世に數へられ給ひなむ。

「長谷部さんはこちらですか。」

と細工場の格子に訪ふ人あり。跪きて迎ふるとて、予は其顏を見て驚きぬ。來客は調子高に、

「おや此家のか。」

とまづいへり。

をさなきわれは、ものをもいはず、慌しく引返し、細工臺に打向へる、父の許に駈け行きて、

「父上、あの、過日來話した、あの、母上の。あの、あの、」

と口早に急込むにぞ、父は皺みたる額をあげ、

「あの、何だ。」

「えゝ、母上のお墓を直して、あの、直してくれましたね、其人が來ましたよ。」

父は聞くより色動けり。

「いや、何、それは／＼。早く、これ、何だな。汝、早く此方へといはんかい。」

奧深からぬ住居なれば、早くも彼方にて、聞着けけむ。

「御免なさいよ。」

と打笑みながら、客は此方に入來れり。無愛想なる父の珍しくも歡び迎へて、

「これは、これは、」

「はい、はじめまして。」

「いや、よくおいでなさいました。えゝ、何かはや倅がそゝつかしうございますので、まことに失禮。先達ては、また何うも難有いお志で、佛も嘸喜びましたことであらうと、……はい。何か貴方、左樣なお情を蒙りながら、何故お姓名を承らないと、散々叱言を言ひました。根つから世間知らずで、とつともう役たゝず、まことに不念な、行屆きませぬ、お住所も分りませねば、御禮にも出られませず、殘念に存じましたに、まあ、よく／＼おいで下されました。倅や、おわびを申さぬか。」

と懇に謝したるを、迷惑げに打消したり。

「然う御丁寧では痛み入ります。別に私が心あつていたしたといふでもなし、家のお孃樣が何です、あたりが酷く亂暴だつたので、何處かあの墓原の方へ一人で氣を拔きに去らつしやつたんださうです。するとお子樣ですか。お墓につかまつて、泣きさうにしておいでなすつたのを見て、お可哀相でならないから、汝行つて直して上げて、とおつしやるので。え、女的てえ男と私と二人でね、舁いでのせましたばかりなんで、深切な御當人はお孃さまなんです。何ね、飛んだ其氣の優しいお孃だもんですから、歸つてからも何うも母上樣がおありでないやうだ、そりやもうお召物のやうすでも能く知れる、お可哀相に何處の方だらうつて噂をして居りました。何ですかい、矢張そのおつかさんがおいでなさいませんのですかね。」

父はもろくも打濕りぬ。

「はい、これが十一になります時、二十九で亡くなりました。誠にはや、不心得な奴でな、はゝはゝ、腹が立つてなりません。お孃樣とおつしやれば、お若からうに、御奇特な。何とも、お禮の申しやうもございません。」

と再び頭を下げたるに、壯佼は手をあげて、

「それでは、私が御挨拶をうけるやうで、却つて何です、もうこれだけにいたしませう。時に今日あがりましたのは、實は其お孃樣の御使なんですが、何うも、恁うなつて見ると、恩に被せますやうで、些と申しにくゝなつたやうですが、何ですか、先々月からお賴み申して置きました、あの指環とやらですが、まだお出來に

はなりますまいかね。時計屋の深水です。」

父は驚き、

「え、それぢや貴方は。」

「はい、店のもので。何時も小僧を寄越しますが、今日は一寸次手がございまして、私に參つて、よくお願ひ申してくれと、こんなことで。えゝ、決して御催促はいたしませんが、お聞にはどうぞお心がけなすつて下さい。はい、不思議な御縁です、決して恩にや被せませんが、何ですな、一番恩に被て、はやく拵へて下さると、なほ結構ですな、はゝゝ。」

と笑うて歸りける。

## 紅白

指環は日を經ずして出來あがりぬ。父は傍にわれを招きて、

「新次、お待兼の指環が出來たぞ。お前を可愛さうだといつてくれる、深水が娘の註文だ。念入りでやらかしたが。」

と打頷き／＼、細工ぶりをとみかうみて、

「うまいな、こりや、近來の大出來。我ながらよくしたものだ。新次、お前なんざ、其年紀で、熟練な眼を持つて居ても、こゝまではとても見えめえな。手放して人に與るなあ、何だか惜しくつてならないが、あつらへものだ、持つて行け。そしてな、長常銘を鏨りました、と大威張で渡して來い。」

予はいそ／＼して出で行きぬ。學校より一つ此方なる辻の角に、唐物店とむかひあひて、間口こそは劣りたれ、奥行深き、時計屋の、行歸に見る店ながら、取分け其日はもの珍しく、また懷しく、たふと／＼覺えて、直ぐには店に入りかねたり。

小路へそれて電信の柱に凭りて、硝子越に、其方を透してためらひしが、折よく前の日の使の人、奥の方より出で來しにぞ、衝と進み近づきて、

「お誂への指環を。あつ……」

「あゝ然うですか、」

と輕く受けて、上框なる椅子を指さしつゝ、

「おかけなさい。一寸、これ何や、奥へ行つて、金や、お孃樣に申して來な。」

小僧は良ありて引返し、

「おや、眞ぐこつちから、お通りなすつて、ずつとお通りなさいまし。」

と中戸をあけて導きぬ。通庭の突當に、二戸前の藏ならびたり。壁暗く、柱明るく、滑き破風口より日影さして、隈へむかふなき奥床し。

雙手を膝に、一人の下婢の珍しげに窺るに、獨見らるゝ心地して、予は退身にぞ通されたる。一室なる火鉢の傍に、其人ぞ居たりける。額へやしたまひし、着痩の肩薄寒げに、襟懸けたる半纏着て、今日は後毛のうるさきまで、咽喉を掠めてこぼれかゝり、重き頭を結へたる、顯巻の切目着なれば、顔少し／＼蒼みて見えぬ。

座蒲團を此方に進むるさへ、たゆげに手首の細りたるが、笑顔を向けてものやさしく、

「お使柄恐れ入りますこと。」

「あの、大變おそくなつて、と然う申しました。」

「いえ、ついねえ、待遠いので、おせかし申して、お忙しうございせうのに。」

いひつゝ薬は掌に、吉野紙の包をひらきて、黄金の無垢の指環を撮み、そと打返して眺めしが、

「綺麗だことねえ、まあ勿體ないやうだわねえ。母樣、」

「どれ、」

と人柄のよき母樣も、火鉢ごしに頭を寄せ、

「何うもねえ。これぢやなるほど一寸やそつとぢや出來ない道理だよ。そして何かい、此お兒かい。」

女は默して頷きぬ。

「學校へおいでと見えます。まあ〳〵折角御勉強なさいましよ。ちつと遊びにおいでだといゝね。おあひては無いけれど、庭も廣しさ、花がるたでもしませう。母様がおいでなさらなくつて、まあ何んなにお寂しからう。」

と溢るゝばかりの情の言葉、胸せまるほど嬉しくて、はき〳〵ものも得いはざりき。やがて歸らむとしたりし時、白と紅と牡丹の形の打物を、清らかなる紙に捻りて、予がふところに推し入れながら、

「父上によくお禮をおつしやつて下さいましよ。まことに結構に出來ました。そしてね、あなた。」

と背後より裳を輕く捌きつゝ、する〳〵と送り出でしが、(宜しく〳〵)とばかりいひすてゝ、彼方向きたまひし後姿、丈は予よりも高かりき。

## 學校

學校なる會話の時間は、ミリヤアド受持てり。

ミリヤアドは、年紀少き米國の美人なりし。ものいひ活々と、風采雄々しく、然も心の優しきが、四五年我國に住み馴れたれば、(お早う)(左様なら)などの、差支へず云ひならへり。二三外國の宣教師と、郷里の有志者と相料りて、布教の一種の手段として、英文と漢文を兼ね教ふる、英和學校といふを私立したるに、日々渠は出で來るなり。

學生はわがクラスにては、十名に過ぎざりき。全校を算ふるとも、百よりは多からざるべし。然は今こそあれ、其頃は外國人を見れば直ちにこれを異人と稱へつゝ、人か、あらぬかの如く、忌み、且つ卑みたる折なるに、殊に地方のことなれば、多少其道に心懸あるものも、憚りて、校に登るもの少なかりしを、予は予が父を信任したる、なにがしの勸誘に因りて、去年より教場に列りたるなり。

學生の中に年紀の長けたるは、三十四五なるも少なからず、最も少きも十八九、二十を越さぬが稀なれば、予のをさなきが珍しとか。

ミリヤアドは愛で親み、時としては予を遇するに、殆ど幼稚園の生徒をもてすることありき。

課業果てゝ後ミリヤアドは、白墨持ちし手の指を、手巾もて拭ひつゝ、衝と予が卓子のうしろに來ぬ。友はみなどや〳〵と控所に立去りて、居殘りたるは、予と、いま一人、富の市といふ盲目なり。

渠は唯會話の時間にのみ列るなり。固より眼の盲ひたるものゝ、書を以て學ぶこと能はざれども、會話は其記憶によりて、多少得ることのあるべければ、いかなる目的のありてにや、切に入校を望みしを、校長には異議のありたれど、宣教師等はもと布教のために設けたる學校なればとて、遂に渠を許せしよし。雨の日も、風の日も、渠は缺席したりしことなく、目の見えぬに心他に觸れざれば、會話は組に伍して人に劣らず、予と成績を爭ひ居るなり。

渠は年紀のころ二十八九、身の丈小さく肩痩せたり。額少しく生えあがりて、五分刈の頭髮柔かに、眉薄く、鼻高く、唇白く、頤こけて、細長き顔の身體とはふさはしからず大なるに、白痘痕みち〳〵たり。

親しく語りたることもあらねど、予ははじめより渠に對して、嫌惡の念を抱くことを、いかんともすること能はず。いはゆる蟲のすかぬにや、顔を見るだに疎ましかりき。

二人のみ殘れるに、ミリヤアドは靴の音、裳の音輕く背後に來つ。恰も其前の一時間は、漢籍の講讀にて、文章軌範卷之五の、送王秀才序……韓文公とある處、開きたるまゝにして、卓子の上にありたるを、予が肩越に瞻りけるが、ふと私ニ怪ム隱居スル者、とある、私の字をば、美

しく白き人指もて指しつゝ、

「上杉様、私？」

予は微笑みて頷きたり。ミリヤアドはまた乃知〃の處をさして、

「これ、乃の字……でせう。」

予はまた頷きぬ。ミリヤアドは得意になりて、建中ノ初、天子といふをば、

「それから天、子、旨いでせう。クラスの方、みんな覺えがわるい。私、じやうずに覺えました。」

と渠は嬉しげに微笑みたり。予は其得意を殺ぎやらむと、頭を掉りて、

「いけません。」

「まあ、いけません？」

と打顰みぬ。

## 秀

富の市は盲ひたる目に此方を見向きて、たゞにや〳〵と笑ひ居れり。

「天、子、と讀んぢやいけません。天子、天子様。」

ミリヤアドは打頷き、

「天子様、……天子様、あゝ、いゝ、みかどのこと？」

「然うですとも。だから、天子てッちや違ひます。」

「はい、はい、お師匠様、何卒叱らないで教へて下さいまし。」

と手の甲以て涙を擦る眞似をしながら、ミリヤアドの醉興さよ。予が坐りたる同じ椅子に、窮屈らしく腰掛くる。袴のひださら〳〵と、右の袂に觸るゝ時、妙なる薫馥と散りたり。

近々と予が面をのぞくやうに瞻りながら、

「お師匠様。」

また呼びかけて、傍にありたるノートの表紙に、其手にしたる鉛筆もて、何か落書をはじむるにぞ、睨むまねして、

「いけませんてば。」

「あら、叱らないで下さいまし。恐いお師匠様ねえ。」

「お師匠様もないもんです。」

「いゝえ、お師匠様、お師匠様、可愛らしいお師匠様、これは(力)の字？」

と鉛筆もて遂に(？)の字を書きつけぬ。

「違ひます。こゝは、力、と讀むの。」

「あゝ、ちから、力――神様の――」

頷くを見また頷ける、ミリヤアドなほ飽かで、あちこち漢字をあさりつゝ、王秀才の秀といふ字を、とかくしてさがしあてたり。

「この字は？」

「秀。」

「秀？」

「秀るとも讀むんです。」

「ひいづる？」

「まさること、勝つこと。」

「人に？」

「然うです。」

と答ふる顏を、屹と見たる、ミリヤアドは衝と立ちあがり、聲の調子も凜として、

「あなた、何故それを忘れました。わるい人、此頃は下稽古をして來ません。あなた一番年紀が若い、そして一番よく出來ます。けれども、いまに負けてしまひませう、人にまけてはなりません。秀。秀。」

と肅として、師の威にそなはる立姿、思はず頭を垂るゝ時、ミリヤアドは足早に外の方にこそ出で行きたれ。

戒ひしと胸に中りて、さは人目にも見ゆるや。此頃はさてわれながら、いかで恁くまでもの思ふ。

指環をとゞけに行きしより、十日あまり早や過ぎぬ。其時渠にあひながら、胸に餘れる感謝の情の、よしいひつくすべくはあらずとも、

一言の挨拶は言はでかなはぬ儀なりしを、怪しきまで口澁りて、彼方よりものを言はるゝにさへ、捗々しくは答もせざりし。さげしまれずや、卑しまれずや、と從もなきことをのみ、思ひ續けて、寐つ、覺めつ。

誰へ聞きまで懷しく、見たく、遊びに行きたきを、いはれしことの誠ならば、機よし遊びに來れよと、など使しては云はざる。姿もなき身を何とてつけに推して此方より行かるべき。忘れられしか、捨てられしかと、終夜終日なやみにぞ。

悄然として掌に面を蔽ひて俯向きたる、耳許に口を寄せて、

「君、やられたね。」

と冷かに笑ふが如きは盲人なりき。

打倒したくも思ひしが、さする元氣もおとろへき。ものをもいはで歸途に就き、學校の門を出でむとする時、外に佇みたる婦人あり。數多き生徒の中に、人をもとむる狀なりしが、予が姿を一目見るより、つか〳〵と近づきて、

「貴下だ、貴下だ。もし、あのお秀樣がおつしやいました、花を折つてあげますから、すぐお歸途に入らつしやいツて。」

こは嘗て見しことのある、深水の家の下婢なりき。

# 花

去にし年、母上病あらたまりて、ものを見ることをも得したまはざりしほどのことなりき。

寒さ烈しき頃なりしかば、奧の間なる三疊に、南枕に臥し給ひ、祖母あり、父あり、看護婦あり、予といとけなき弟と、畏坐正しくかしこまりて、互に面を見つるほど、寂として身動もしたまはざりし母上の、靜に雙の目を瞑りしまゝ、兩手を空にさしのべつ、また枕頭なる疊の上を、ものを取るさまをして、撫さすり搔さすりしたまひしを、父の見て寄りて、いかにせし、欲し求むるものありやと、耳近ういはれしに、空にも、地にも美しく妙なる花の香はしき、紅なるか、紫なるが、白きがいろ〳〵咲滿ちたり、二人の兒等に手折りて取らせむ。見たまへ此處にも、あれ、かしこにも、と紅梅の蕾綻ぶ狀に、結ぼりたる唇とけて、うつとりと、かすかに微笑みたまひしかば、あはれ、いまはのうつゝにも、さまでに兒等のいとしきかと、予と弟とを引寄せつゝ、祖母のひたと泣きたまひしを、日を經、月を經、年經れども、なほまのあたり見る如く、胸に銘じて覺えたり。

嬉しきかな。花折りくれし秀の心の、母の情に劣らじを。一枝は母上に參らせて、兒の幸あるを見せまつらむ。一枝は父に、他は祖母に、殘れる花は弟に半ば分ちて與へむと、深水の奧を辭して出て、心せはしく中戶をあけて、戶外に出でむとしたる時、

「清や、母樣がね、お前御苦勞だが、一寸、八百屋まで。」

用を命ずる聲のする。この後數々來給はむに、心やすだてなるこそよけれ。貴下も遠慮したまふまじ、此方にも行儀見せて、送迎はなましものをと、母親のいひたれば、秀も送りては出でざりし。予も其まゝに去らむとせしが、幹のするより思はずも戶に手をかけたる身を捻向け、唯見れば今日も例の如く鬢の後毛震ふるばかり、橫顏白くこぼれたり。

風にも堪へじといとほしかりし、前の日のさまには似で、病に勝ちたる姿雄々しく、全體の風采の優しう見えて凜々しげなる、恐しき敵にであはむ時、其袂にて庇はれなば、救はれ得べし、と賴母しく、うつかりと立ちたるを、ふと見返られて、耳許ぞ熱くなりぬる。

「またね、」

といふ聲聞流して、勢よく戶外に出で、店なる人に默禮して、通を家路へ五歩ばかり、足を

ばやに行きかゝる、とむかなより、杖を以てさぐりながら、歩きつきの、然までには覺束なき眼も見えで、彼の富の市來懸りたり。

擦違ふを遣りすごし、ゆきすぎりて見送れば、富の市はつか〳〵と深水の店に入り行きしが、

「は。」

とばかり茶の山高の帽の縁に手をかけたるのみ、脱ぎて挨拶なさむともせで、其まゝ今予が出で來れる、中戸をあけて入り行きぬ。

買物ならば店にてせむ、奥に入りしは知己よし、固より彼は盲人といへども、置く〳〵常に足駄を印して、夜業の點に鍛ゆらるべき、さる境遇のものにあらず。資産ある家の長子にして、親もなほ世にあるが、十六の時激烈なる、天然痘にかかりしため、目の盲ひたるものゝよし、予は人傳に聞きて知れり。

よしそれはともかくも、彼は何の要ありて、深水の家に出入るや、店のものに對したる其擧動を見ても知る、懇なるなかにあらではと、こころよからず感じてき。

彼には毫かゝはりなく、何等の恨あるにあらず。先刻に學校にてミリヤアドに戒められて消れし時、一言いひたる言とて、聊か嘲なり、わが耳の僻みと聞へばそれまでなる、其を云いでゝいふことかは。嘲る如く聞きたりしも、實に思ひくれむとて、いかにかけたらむも知れざるを、何とてさまでに富の市の御身にこゝろよからざると、もし人の問はむには、予は其答に窮せしならむ。因果は神のみ知るものなり。

## 將棊

かばり、かばり、かばり、かばり、白山氷かばりかばりの、聲にまじりてなまぬるく、幀子燒ぢや、幀子燒ぢや、お腹の藥の幀子燒ぢや、子供衆買ひな、と呼びかはす、白山氷や、幀子燒や、夜商人の口々に、往きかふ納涼の客を呼ぶ、通の夜店の賑ひも、十時を過ぐれば人まばらに、其夜は一天掻曇り、まだ一滴も落ちざれど、乾の方なる遠山には、はや一驟雨かゝりけむ、涼風さつとおろし來て、露店のはだか火漸次に消え、四角あたりの薄くらきに、瓦斯燈の火影長くさして、絞りの浴衣一人行き、二人行き、一人行き、一人行き、一人行きつゝ、ひつそとなりぬ。

秀は此時、金と銀と數十個の懷中時計を納めたる、硝子箱の蓋の後に出で來りて、肩少しく見ゆるまで、衣越に襟をさしいだし、椅子にかかりに店のもつと、さきよりもの打語りたる、予を手眞似して招きよせぬ。

「新ちやん、まかしてあげませう。」

其處に置きたる將棊盤と、秀の顔とを見くらべながら、

「またね。」

「またッて、お厭なの。」

「厭ぢやないけれど……だつて弱いんだもの。僕に勝てつこはありやしない。降參をしてしまふが可いや。」

「おほゝ、何かいつて在らつしやるのね。昨夜も二度までお負けだつたぢやありませんか。」

「そりや、歩三枚では負けることもなくつてさ。何だつて、ずつと段が違ふんだもの。勝つたつて、負けたつて、數台も何もありやしない、ほんのおあひてをして居るんだ。」

「あら、あんなことをいつて、憎らしいよ。まあ、何でもようござんすからさ。よう、新ちやん。」

と早や駒をぞ整へたる。

店より若い者口を出し、

「大層凝つてますね、お秀さん。はさみ將棊のうちは新ちやんの方から御催促のやうだつたけが、此頃ぢやあなたの方で、せつついて在らつしやる。大分あぶらがのつて來たと見えますね。」

と打笑ふ。

「あゝ眞個だよ。何故だか、ひどくおもしろいの。」

「まあ、結構でございます。折角御修行なさいまし。はゝゝ」

とて新聞を讀むなりけり。

「さあ、新ちやん、金ですか、歩ですか。」

「や、いよ〳〵はじめるの。まるであかんぼのあしらひだ。何だか先生になつて教へるやうな氣がするからね、こんなことは眞劍でなけりやおもしろくないものを。」

とこのごろはやなつかしみて、殊更に渠を婦人といふ遠慮も少しく薄らぎたるなり。秀はわざとらしく怨めしげに、

「ようございます。澤山そんなことを、おつしやるが可い。私や意地になつて、何うしてもにがしませんよ。而して、そんなに、强いことをおつしやるなら、斯うしませうね。新ちやんがお負だつたらば、お手をついて三つおじぎをするの。可うござんすか。」

「それだと、勝つたら何うするの。」

「さうするとね、私が天狗樣の羽團扇といふ、傳授ごとを敎へますよ。」

「天狗の羽團扇ツて？」

「それはね、かうやつて、かういふ工合に、ね、駒をならべるの。而して新ちやんが、左からでも、右からでも、ちら〳〵たこかいなと、から算へてね、御自分の好な駒を一つ覺えて置くの。さうするとね、私がちやんとあてゝ、此でせうといふのが、不思議に當るんです。」

「そんなことをいつて、あたるか不知、」

「まあ、ちよいと覺えてゝごらん遊ばせ。え、え、可うござんすか。それではと……これ、ね、そら、御覽なさい。不思議でせう。ですから天狗樣の羽團扇ツていふの。」

七つ八つの幼兒を、あやすが如き言の調子に、予もまきこまれて、たわいなく、

「妙だねえ。もう一度やつてごらんなさい。可いかい。よし覺えた。」

「幾度してもおんなじことよ。左の上の方から三つめ。香車でせう。もう外れつこはございません、ねえ、友さん。」

戸外より見えざるやう、彼の函を小楯に取りて、店とは別に隔りたる、奥の通路になりをれる、疊二疊敷きたる處に、彼方の洋燈の光をうけて、照返す一面の大姿見かゝりたるため、あかるければ灯も置かで、秀と二人坐りたるなり。

「ねえ、友さん。」

と秀の呼ぶに、店のものは函の彼方より、

「あい〳〵然やうでございい。」

と大きく答ふ。秀は打笑み、

「これにはね、ちやんとたねがあるんですよ。友さんも知つてるわねえ。」

「えゝ、そりやもうたねのないことは御法度ですから、あるにやありますが、まことに輕少なもので。」

「でも不思議ぢやありませんか。」

「然やう、天下恐らく此位不思議なことはございません。」

「可いよ。まあ新聞を御折角。さ、新ちやん、お負けなさいますと三つおじぎ。ようござんすか。お勝ちだつたら、をしへてあげます。」

「さきへ、たねをあかしてかゝつたつて可いくらゐなものだ。おや、お世話樣、僕の分までおならべだが、兩駒をはづしただけか。何、これでかゝらうなんて、氣が强いなあ。」

「いまぢや、もう歩三枚なんてわけに、ゆくものですか。」

と歩をつく。

「來たな。」

「まづこれをね。」

「さあ。」

「かうやつて卜新ちやんですよ。」

二手三手差合ふ折から、店頭に発音して、

「今晩は。」

といふ聲の、挟るが如く胸に響き、汗出づるまで身に感ず。富の市ハヤあがり込みて、二つ三つ店のものに、ものいひかはすが聞ゆるなり。

一夜おき、二夜おき、三日とは缺かすことなく、予の此處に來る毎に、此方おくるゝか、渠早きか、前後して、富の市と、秀の前に、かく落合はざること、いまに到るまで一たびもあらざるなく、ために二人してすることの、何時も其に妨げられて、予は遺憾なきことを得ざりしなり。

さらでも不快なる盲人なるをや。予は其聲を聞くと齊しく、むら〳〵と癇癪起りて、胸のうづくと思はれき。

「新ちやん、何をうつかりするの。」

秀のいふに心着きて、あらぬ駒を進むる處へ、富の市は入來りて、かれとわれとの間をへだて、盤の一方に座を取りしが、直ぐに口をさしはさみて、

「何うしました〳〵。あゝ、なるほど中飛車で、むかうの手からは桂馬があがつて、ふむ。」

と一々問糺し、おのが記憶に將棊を描きて明かに盤面を知り得るなり。

かくのごときこと例なるに、予はうるさゝにものいはねど、秀は一々深切に、兩方の駒の進退を、落もなくいひ知らしつ。

俄に嬉しげに叫び出せり。

「おゝ、嬉しい。飛車手、王手、ね、ね、新ちやん。」

とあふるゝ如き笑を含みて手を拍ちぬ。

予は大業に驚きたり。

「え！　こりや弱つたな。かうするんぢやなかつたッけ、かうするんぢやなかつたッけ。一寸一手待つて下さい。」

「不可ません。かけつこですもの。三つ御辭儀を遊ばすんだわ。」

「つい傍見をしたんだからさ。」

「そりや新ちやんがお惡いんだもの、待つたなんか卑怯ですよ。」

「困るなあ〳〵。お辭儀をさせられちや大變だ。女にお辭儀なんて僕は、……不可いなあ。」

「ですから然ういつたではありませんか。あまりお威張りなすつて憎らしいんだもの。嬉しいねえ。」

「ちよつ口惜い！」

先刻より苦笑したる富の市は、予を卑みたる語氣をもて、

「へゝゝ、飛車で勝負をしやしまいし。何を然う弱るんだ。そして何、歩を一個あひとうてば、理窟もなにもありやせん。其を知らんやうな將棊でもないに。」

「え。」

「君はへつらふね。はゝゝ、何時でも然うだ。まるで段の違ふ將棊なくせに、秀さんがつまりさうになると、わざと駒をあけてにがしたり、わかり切つて居るものを、それ今のやうに好んで手落をして弱つて見せたり、はゝゝ、負けておもしろがるとは妙な人だ。年紀もゆかないに。はゝ、何でも秀さんの喜ぶのが嬉しいと見えるね。はゝゝ、お殿樣のおあひて將棊だ。如才のない。君は秀樣におべつかをして居るのだ。」

全身の血は頭にのぼりて耳ぐわつと鳴るとぞ覺えし。

十分時の後は家に歸りて、あふぎ倒れてわつと、泣きぬ。盲目の言皆中れり。亡き母上よ、許させ給へ。さる兒は産ませたまはじを。

# 二之卷

## 苺

ネッキスト、ネッキスト、ネッキストと、ミリヤアドがやゝ口早に、順々質問を言送る、清き聲を聞きながら、夢地を辿る心地也。時々隣席の學友より、不意に注意を請くるにぞ、其都度はッと我に返りて、さて慌しく其間に應ぜむとするに、質問の何なりしかを、うか／＼聞漏し居るなれば、更に答ふる術を知らず。心臆して問ひも返さで、唯面のみ赤うなり、黙して俯向くこと頻なりし。

其日は學期の試驗なるに、殊にこの一致教會に屬したる、東京の中央會堂より、宣教師一名、牧師一名、並に随行員兩三名、折から巡教の途次わが校に立寄りて、生徒の成績を見むがため、此時教場に臨みたるなり。

豫め其通牒ありたることなれば、ミリヤアドは師の情として、生徒に晴を取らせたく、且つみづからも教師等に、おのが生徒の出來榮を、誇らむずる意もありたるより、二週間ばかり以前より、あはれ成績の好かれかしと、組の者一統に、繰返し／＼其旨をぞ含ませたる

特別に予を其家に招きつゝ、好き兒ぞ、かまへて仕損ずな、いと年少き御身の榮は、珍客に對するわが誉なり。あしき事にあらざれば、一斷の私は、誰も許したまふべしとて、今日われに試むべき、幾條の問題を、あらかじめ打明かしぬ。

記憶力は人に譲らじを、殊に一冊の會話篇より、難易取交ぜて抜き出して教へられたることなれば、心易くそらんじて、ものゝ數ともせざりしに、富の市に罵られて、口惜さ、恥かしさの苦悶の枕に眠らざりし、昨夜の今日のことなるより、我にもあらで茫然と、あらぬことのみ思ひ續け、今おのが身のいかなる場所、何の時にあるかさへ、打忘れたるほどなれば、然は見苦しくも失敗して、はじめより一つとして答へ得たるはなかりしなりけり。

頭重く、耳鳴りて、胸苦しき身を持て餘し、氣を取直す力も失せて、再び眠らぬ夢をぞ見たる。卓子の上をこと／＼と、三つ四つ忙しくたゝ音して、妙なる薫の腦を刺すに、ふと心着きて、面を上ぐれば、ミリヤアド立ち居たり。名を呼ぶに應ぜざることの、度重りしに、渠は堪へで、予が前に來りしならむ。手にせる鉛筆の軸を返して、卓子を打ちて、驚かせしなり。

予を見たる目に怨を帯び、激せる顏を嚇とあかめ、

「何をして、何をして！」

と低聲に強く攻めぬ。客の臨める席なれば、仂なくは得も叱らず、少しく聲をふるはせつゝも、一句の英語を予に語りぬ。蓋し國語に譯すべきなり。

予は其激したるを見てあわてたれば、さまで難解しき語にもあらざりしを、行詰りて、（我に與へよ）といふまでは解せしが、語の題なる物品の名をいかにもして譯する能はず。恐怖と、慚愧の眼を以て、ミリヤアドの顏を瞻りしに、女教師は聲をひそめて、

「赤いもの、小さい、小さい。」

と口早に教へてき。うたてき予をば憐みたる、渠が心を汲み知りぬ。

あせるに耳の熱くなるのみ、なほ答へかねて黙するにぞ、いひ效なしとやミリヤアドの、も

ふともに急き込みつゝ、
「小さい、美しい、赤いもの、赤いもの。」
（これほどの）と其形を示して、胸なるぼたんをつまさぐれり。人知れじとてしたらむが、來客も學生も齊しく此方に瞳を灌ぎて、なかには笑を含むもあるに、ミリヤアドはおもはゆげに、密とあたりをぞ眴したる。
予はおぼえずも聲を放ちて、
「根附けの珠。」
と我ながら調子はづれに答へたり。同時に、哄と笑聲起りぬ。
「ネツキスト！」
と一聲鋭く、ミリヤアドは問を送りて、乾と予を見たる目の中に一滴の涙を湛へたり。予はふたゝび仰ぎ得ざりき。
隣席なる富の市は、すましかへりて、
「苺を下さい！」
とそを譯しつ。（すとろべりい）の語なりしよ。

## 神　婢

「こら、新次、起きんか、お前の處へお客様だ。」
「誰です、父上、遊びに來たのなら斷りませう。」
「むゝ、起きるのが大儀かの。いや、其まんまで逢つたら可からう。油斷のならねえ、おい、新姐が一人尋ねて來たんだ。はゝゝ、乃公はまたおれの處へ來たのかと思つたら、大當はづれよ、はゝゝゝ。」
と元氣よき高笑、兒の病をば慰めむとて、然は氣あつかひしたまふなるべし。
予は半ば起返りぬ。
「え、女ツて誰でせう。」
「むゝ、何よ、の、あの何の人さ。お前が學校へ行くはじめに、朋達がそれ耶蘇へ入つたが分らねえとかいつて、毎日道に待伏をして、苛めるつて、弱つて居たつけの。其時分から袖の下へ庇つちや、家まで送つて來てくれた、それあの束髮に結つた別嬪だ。な、白襟で。武家方の女中が御維新になつたといふ身の、凛とした、嫌味の無い。」
「あゝ、父上、それぢやミリヤアドの家に居る操さんといふ女でせう。」
「さうかな、まあそんな者だらう。何でも構ふことは無い、寢たまゝお目に懸るとするさ。」
良ありて枕頭に來りたるは、果して其人、操なりき。日曜學校の教師なれば、人あつかひはよく馴れたり。見るよりなつかしう笑ひかけて、はやわが額に手を加へ、忽ち眉を打顰めぬ。
「新さん、熱がございますね。お頭痛が？　不可ませんねえ。學校へもおいでぢや無いさうだし、ミリヤアドがね、大變案じて居るのよ。御病氣は？」
「風邪だつて。」
操は頷き、
「ぢや、まあ、ね。ですが夏の風邪はしつッこうございますツさ。お醫者様は？」
「大したことはないツて言ひます。」
「でも、折角お大事になさらなくツちや不可ませんよ。學校もおくれますわ。」
「僕は最う學校には行きません。」
操は豫て期したる如く、
「さあ、其事でね。實はミリヤアドの代に、私がお怨みに來たんだけれど、御病氣だから堪忍してあげませう。」
といひかけて微笑みながら、
「ミリヤアドもね、新さん、學校をひいたのよ。何故ツて、何故ツて、新さん、あなたが餘りだからですわ。ミリヤアドが如彼見えても、宛然子どもなんですからね、こんど來た宣教師に、ひどく新さんのことを御自慢でね、ま、さんざ、

お弟子の惱氣をいつたの。而して御目に懸けませう、御覽なさいでもつて、試驗場へ連れ出して、こゝでといふ處で新さん、ま、貴下あの日は何うしたといふんですね、私が聞いてゝさへ口惜かつたわ。何をうつかりして在らつしやつたんだか知らないけれど、ちつとも身に染みて下さらないでさ、ものをいつても聞きつけもしないでせう。

堪らなくなつたと見えて、傍へ行くと、貴下がまたひどくとちつてさ。どぎまぎなさるんだものを、見て居ても、可哀相で私もはあ〳〵思つて居たわ。ミリヤアドがまた夢中になつて、そつと遠廻に敎へたでせう。御自分は氣が上づツてるから人に聞えないつもりでも、皆な聞いて居ますわね。それでなくツてさへ自分より年上の生徒にものをいはれると、いつでも恥かしがつて、紅くなる方ですもの。依怙贔屓で、しかもねえ、試驗といふのに敎師の方から敎へたんぢや、あとで顏があはされますものですか。あの日歸つてから、新さん、貴下が折角の志を汲んで勉强をして下さらないツて一日泣いて居ましたつけがね、でも、何うぞ、あの日は貴下が病氣だつたのであつてくれゝばいゝ、ほんとにあんなにものがお出來なさらなくなつたんなら何うしようツて、さういつちや案じて居ますよ。」

操の手は逸早く予が口を蔽ひたれば、折から茶を汲みて來合せたまひし、父はさりとも心着かで、

「新次、吸子ごと置いとくぞ。えゝ、お愛想もございません。澁茶でもおあがんなさい。」

と無頓着に言ひすてゝ、はや座を立たむとしたりしに、操は開きて、席を正して、

「貴下が新様の父上でございますか。染々御挨拶もいたしません。あの、大層なお細工のお上手だつて、豫々人から承ります。早速でございますが、簪を一本打つて頂くわけには參りますまいか。」

まめだちていひたるに、父はいぶかしきおもちなりしが、極めてまじめに、

「へい、耶蘇も簪をさしますか。」

「まあ。」

「また、御贔屓に。」

と父は立ちぬ。操はといきつきて羞ぢたる色あり。

「まあ、新さん飛んだことをいつて、貴下をお泣かせ申してさ。間の惡い處へ父上がお出遊ばしたもんだから、つい場合を繕はうと思つて、心にも無いお世辭をいつて、あゝ、私、極が惡いわ。可うござんす、屹と打つて頂きますから。で、ね、ミリヤアドが自分で見舞に來たいんだけれど、どつちかといへば叱つてあげる筈なのを、此方から出かけて行く譯にはゆかないから、おまへ行つて見舞つて來て、而して新さんには、私が大層怒つて居るから、あやまつてまた遊びにおいでなさいと、然ういつて來て吳れろツて、ミリヤアドの言葉なの。そんなに貴下のことを思つて居るのですからね、學校のことはともかくも、會堂へはあひかはらず入らつしやいよ、よ、可うござんすか。あれ男の癖に。」

枕の上にうつぶしたる、予が背を優しく搔いなでつゝ、

「新さん、御覽なさい、ね、ね、これを、貴下にあげますツさ。」

早や黃昏の一室の内に、赤く、小さく、美しき、人の情のほの見ゆる、苺を裝りたる一個の籠、添へたるミリヤアドの手紙にいふ――愛らしき學生よ、心して、再び此名を忘れなせそ――

## はなれ駒

橋の袂に屯したる一群の少年は、十六七を

頭として六歳七歳八歳ばかりなるまで、棒を取り、礫を握り、或は砂利を掴みなどして、何をか口々に罵りつゝ、予が近寄るを待構ふ。

渠等は例の如く會堂より予が歸途に就くを要せるなり。

近隣なる竹馬の朋の、嘗て小學にありし時、席を同じうしたるやから、皆予が外人の敎を受け基督敎の會堂に通ふをば、忌み、且つ憎むこと一方ならず、面に唾せむ勢もて、影を望めば後を追ひ、姿を視れば路を塞ぎ、嘲罵の果は棒ちぎりの害を加ふること常なるより、予も深く注意せしが、一月ばかり引籠りて、久しく外に出でざりしかば、忘るゝともなく油斷して、料らず渠等に出あひしなり。

予は進みかねてためらひき。

其と見るより口々に、

「腰拔やい、腰拔やい、新次の、新次の礫やい、此處まで來て見ろ上杉やい、耶蘇の新次の、馬鹿の、間拔の弱蟲やい。」

言馴れたれば、唱歌の如く、いつもの文句を一同に節を付けてぞ囃しける。耳馴れては居たれども、さりとては口惜く、腕力あらばと思ふのみ。橋のこなたに立すくみて眼へ詰めたる横合の油屋小路といへるより、わつとばかりに吶喊を擧げて、ばら〳〵と七八人、驚破と見る間に突あたりて、どんと無體に突飛しぬ。

予はたじ〳〵とよろめきつゝ、こは後よりまはりしぞ、前なる敵と引挾みていかなる憂目を見せむも知れじと、はつと思へる眼を遮り、危くも鼻頭を掠めて、木もて造れる持遊びの薙刀の刃の閃きしを、纔にはづして身を交し、右手に掴みて力まかせに八つばかりの兒の持ちたりける、其薙刀をひつたくれば、聲を揚げて泣出せり。

「やあ、三ちやんを、泣かした〳〵。」

「なぐッちまへ礫め。」

「畜生。」

と聲鋭く、誰にかありけむ、いと長き竹棹以て、滅多なぐりに打おろすを、目も眩れながら思はず眉間のあたりに受留めたる獲物はもろくもホッキと折れたり。

吻と氣落せる前後よりひた〳〵と寄せ合うて、左右を鬩みて取卷きつゝ、じり〳〵と詰寄るにぞ、手も足もぐる〳〵と呪詛の繩に縛られて、しめつけらるゝ心地して身動きもせで突立つたる、舌硬ばり、唾かわき、拳を握りてわななきつも、助欲しくて見返りたる、元來し方に蹄爪の音、人こそありけれ、ミリヤアドが、三歳駒の逞しきに横鞍にぞ乘つたりける。裳の裾長く踵を埋めて、垂れて地摺になるばかり、薄色の日曜服、川風に颯と靡き、たをやかなる身の輕く、雲に乘るかと轡の響、もの靜にぞ打つたりける。

「やあ、女唐めだ、女唐が來た、來やがつた、來やがつた。」

少年等の聲々や、予は忽ちにあびせられぬ、拳のあられ、砂の雨。剰さへ丸太に足をすくはれて、横だふれになつたる身は、冷き衣に包まれて、温き手に抱かれぬ。ミリヤアドの汗を絞りて、さも悲げに呼ぶ聲せしが、俄に凄じきものおとして、やゝありてひッそとなりぬ。

眼をひらけば蝙蝠一羽、橋の欄干より衝とあらはれて、ひら〳〵と柳にかくれ、瀨の色白く、蛇籠暗き、此方の岸を五人七人、をめき叫んで疾走する、むかひの岸なる放れ駒の砂烟を立ててかけゆくを、川を隔てゝ追懸け行く、川上なる山の端に、薄月出でゝ暗かりき。

## 留針

ミリヤアドの送別は、其住居にて、いと内端に、世を憚りて開かれき。先の日、予が少年等に苦められしを救はむとて、當時乘りすてたる

渠の乘馬の、雨の如くなりし塵に驚かされしを、取鎭むべきミリヤアドの手は、予を庇ふため塞りたれば、したゝか狂ひて離れ去る時、端なくも一人の小兒の、逃後れたるを蹴放しに、憂ふべき怪我を被らせぬ。

被害者の親は善き人にて、さまで苦情を言はざりしかど、外教を憎む者の、然るべき制裁を加へむなど、團體を造りて騷ぎたれば、然らぬだに心弱きミリヤアドの、おのが不注意を悔い恨み、人の不幸を哀傷して、一室に閉籠りて、掌に面を蔽ひては卓子にうつむきて、神に祈を捧ぐるのみ。食の細るまでわびたるにぞ、惡て久しからむには、其健康もいかなるべき。且や、心なき怨を受けて、非難の衝にあたつたる、身の上も憂慮はしく、鄕黨の怒解けざれば、布教の上にも害あらむ。かた〴〵身を退くこそ萬全の策なるべけれと、人のすゝめにミリヤアドの、さはとて旅裝を整へて、前日來逗留したる、宣教師の一行が、東都に引返すに連立ちて、上京すべく定めしなれば、世の聞えを憚りて、愼しげにたゝむとせしなり。

客はいと多かりし。

年來布教に盡瘁せし其には何の效もなきに、せめては名殘を惜まれむを、胸狹き人々のために、幾分か、否、只幾分のみならむや、市民に對する教會の德望は殆ど地におつるばかりなりなど、座の一方に囁くありて、憐むべきミリヤアドを難ずる者少なからず。

さらぬは不運を弔するのみ、渠を祝するものあらざるにぞ、ミリヤアドも悄乎として客に肩身の狹けなりし、失意の身には誰がせしぞや。

ことの起は予なるものを、と予はものいふさへ揩日に、唯人顏の晦されき。

富の市もまた座にありしが、一言をも交さゞる、予をいかにして聞着けけむ。

「や、君。」

といひながら嘯く如く空を仰ぎ、

「近頃は何うして居ますね、時計屋へも來ないやうだが、はゝゝゝ、何うだね、ちと私が家へ遊びに來なさらんか。金曜日は午後から隙だからね。」

予はきゝもあへず席をはづしつ。ミリヤアドが化粧の室の冷き椅子にたふれかゝりて、〈金曜日は隙だからね〉と繰返しつゝ切齒をしたる、蟲齒の急にうつき出でゝ、忍びがたくなやみにき。

「おや、新さん。」

外の方より、操はつか〳〵と入來れり。入るより予が狀を見て取りて、

「何うしたの、え、何かお氣に入らないことがあつたんぢやないの。ミリヤアドが尋ねて居ました。彼の方も可哀相ですよ。せめて新さんが機嫌のいゝ顏を見せて、快くたゝしてあげて下さいな、ね、此方へ入らつしやい。お嫌、何故？　え、齒が疼むの、そりや不可ませんね、あゝ、嗽をなさると可い、水を持つて來てあげませう。」

氣輕に出で行く、引違へてミリヤアド入り來りぬ。

「齒が疼むッて。さう？」

其身も疼むかの如く、眉根を寄せて身震ひしながら、髮にさしたる留針を拔き取りて、予が頤に手をかけつゝ、むかひの壁にかゝりたる姿見を仰がせて、

「口を、口を。」

といたはりいふ。

「あ……ゝ。」

とばかり指の先もて、疼痛を示して齒を開きぬ。

「甘いものをたべるから坊や、世話をやかすこと。」

ミリヤアドは呟きて、水の如き瞳を寄せ、

眉根を顰めて顰みつゝ、針の尖もて齒のうろを危げに穿りくれしが、
「治りませう、大丈夫。」
と微笑みながら、桃色の絹の手巾に、針の尖をつと通して押拭へるを、予が着たる、衣ものの襟に縫着けたり。
「あげませう、これ、また疼む時。」
齒はいえぬ。されども胸のいたかりけり。
「さあ〳〵、新さん。」
時に操は硝子杯を手にして、引返し、背後より肩越に、差寄する水を含む時、渠は予が肩に両手をかけて、斜に彼方に推向けつゝ、
「あなた。」
といひて目を合せぬ。
ミリヤアドは面をそむけて、衝とのきざまに差のばしたる、寶石輝く右手の指に、予は唇を觸れたりき、鳩尾をあふぐ時、仙藥を嘗むる時、いづれか其時のおもひに似たる。

## 影法師

唯散歩とのみいひこしらへ、十一時すぎ十二時頃、もの狂ほしく家を出でゝ、深水の前を二度三度行返りして來らでは寐られぬ病に罹りたり。
去ぬる夜、富の市に胸の秘ごとを發かれしより、獨り恥ぢて氣の咎むれば、再び行かむが面伏なるに、分けて學びの道すさびて學校も退きたるを、富の市の口よりして、秀に、はた其母に、いひつけたらむと思ふにぞ、ます〳〵われは怯氣つきぬ。
店に人目のありと思へば、宵の内は其居まはりにも足を運ぶことをせず、初夜すぎ人の寐ねてのちを、然は密にぞ通ひしなる。
はじめのうちは予が父も、もの好とのみ見許せしが、雨降りにも、風吹きにも、缺かさず出づるに疑ひかゝりて、果は夜遊を禁じたまへり。
時刻來れば胸苦しく、起居に我身を持餘しつゝも、心を抑へて忍びしが、ミリヤアドに別れてよりは、いかにしても堪へずなりぬ。
父は風邪ひきて早寐をせし、寐いきをはかりて外に出でゝ、唯見れば月のありともなく、またあらずとも思はれざる、時雨あがりの空一面に灰汁を流せる如くなり。折から動物の形したる、一團の黒雲のむら〳〵と湧き出でしが、濡れたる地に影を映して、恐しと思ふ間に、塵も留めず消去りき。これ我門を出でたる時なり。
當なく〳〵も行き〳〵て彼の大通の四角に懸れる時、眞黒なる人家の軒下より颯と音たてゝ、宙に飛びて、予が足許に落ちたるものあり。立停るに、ものあらで、一足二足行くときへ、またさら〳〵と、さら〳〵と予を導くとする如く、三間ばかりともなかりしが、怪しとも怪しきに、耳傾くれば山おろしの、そよ〳〵と渡るにぞ、さては木の葉よと心着くに、其音は忽ちやみて、毛筋も動かず風死にぬ。
あまりあたりの寂なるに、人は咎めねど下駄の音の重く響くを憚りて、脱ぎて、手に提げて、素足となりけり。
左よ、右よ、此度はまた左よ、歩行の順、正しく胸に覺えつゝ、兩側の家の累縮に似たる、町中を辿り〳〵て、やがて深水の店近き、少しく此方に歩をやすめぬ。
やゝ心の落着くに、不圖時間を考ふれば、密に家を出でしより、幾時ばかり過ぎたりけむ、思へば久しき心地のするに、予は太く驚きぬ。
急ぎ再び歩を移して、ときにもいへりし深水のむかひの唐物店の前に着く。
時に一天黒を流して、いつのほどにか、我が姿の見分かざるまで闇となりぬ。ト見れば背後なる瓦斯燈の、近くは一尺、末廣がりに十間ばかり、彼方にては町の幅一杯に、遠くなるほど蔓りて、軒を越し、屋根に這ひ、遙か彼方の通

のはづれに、酒屋の藏を蔽うたる、姫が松の梢にて、朦朧として消え失する、一道の火影によりて、莫大なる影法師のやゝ其長さに達するまで、さやかにぞ描き出されたる。歩を進むるに從ひて、頭は殆ど我居る方より半町餘も隔りたる、其松の木に登るまで、凄まじく、長うなるに、悚然としてかほをそむけし、深水の二階の四間の障子に、赤黒き火影燦と射す。啊呀と一足退れるトタン、障子の上下一杯に、大なる人の天窓と、鼻と、唇と、横に向きたる顏の影の、さとうつりてぞ見えたりける。

富の市よ！　と思ふと同時に、げら〳〵と高笑の、左右の耳へ二つの口もて兩方より推込むやうに聞えしにぞ、あとさけびたるあとは覺えず。臥床にわれは心づきぬ。外にはどう〳〵と凄じき大雨坤軸を降り靜めて、恰も瀧を落すが如く、寢着は絞るが如くなりき。汗か、あらぬか、雫や、否や。

## 山鳩

十二月十日、ミリヤアドより手紙來れり。予に東京に來れといふ。嘗て別を惜みし時、然はわれ彼の地に着きて後、身の振方落着きて、居に安んずるものならば、直ちに汝を招くべきに、笈を荷ひて後より來よ。成業の曉までは、食を別けにも扶助せむなど、細々言を交へたる、其約を違へずして、今かく報知をぞ寄せしなりける。

少年の血氣盛にて、功名心の燃ゆる頃の、予はいかにしてかたゆたふべき、固より父も許したり。其日にも發程むとせしが、心引かるゝは秀なりき。

將來のことありしより、心ばかりは寐覺にも通ひたれど、其横顏を見ざること、三月四月に早やなりぬ。わけて幻か夢かを分たず。恐しかりし夜の影法師より、夜毎にあくがれし足も留みぬ。たゞ懷しさはかはらぬを、都にのほり果てむには、幾年を經てかまた逢はるべき。あはれ叱らるればそれまでよ、一たび名殘を惜までやはと、思ふ心の切なるより、きまりの惡さも打忘れ、東都へ進學すといふをかこつけに、疎かりし足を激ましつゝ、消入るばかりの思ひにて、行くことは行きたれど、なほたやすくは入りかねて、半時餘もためらひしが、一足づゝ小蔭を出でゝ、次第に深水の前に近づき、居なる洋燈の光のうちに、わが顏見えつと、ぎよツとして、衝と行きすぎて立戻れる、身は宙にある何かの手以て、引立てらるゝやうに覺えて、啊呀、心着けば予は既に椅子に腰かけて俯向き居たり。

親しさは變らざりき。

友吉は見るよりも、仰山なる聲を擧げぬ。

―よう……これは妙だ。不思議、奇的烈といふお入來だ。新ちやん、恐しいお見限でございましたね。何うしてお見えなさらないだらう、御病氣か不知、それとも學校がおいそがしいか不知、とまづはじめの内はおうはさで、たかごろはお案じで、此頃ぢやお奧でもつて怨んで居ますぜ。可い所へいらつしやいましたよ。今ね、ちやうど秀さんも母さんも、お女中連不殘湯に行きました。いまにお歸だからお待ちなさい。ほんたうに留守の內だから可うございました。

何でも今度いらツしやつたら、さんざん怨みをいふ、と秀さんが大意氣込でお出ですからね、突然ぶつからうもんなら面くらつておしまひなさる處、友吉が一番御贔屓数といふので裏切つてしやべります。まあ落着いて何でも其のうまく言譯の出來るやうに今の內考へてお置きなさいまし。可うございますか。

お待ちなさい、それとも先んずれば人を制すで、かうやつて卜斷のうらへ隱れて居て、友さ

ん唯今と來る處を、ばあゝ、といつて驚かしは何うでせう。え、新ちやん、しばらく逢はないで居て、久しぶりで顏を合すのに、たゞおや栄えますまい。
　何か一趣向ありさうなもんですね。お待ちなさい。ばあも馬鹿けてはおもしろからず、ト仰向に寢て居るも變なものだし、入らつしやい！と此方からいつて見るか。それも道化て居て、新ちやんではきまりが惡いな、お待ちなさい、いや、からこおれちや思案にあたはず、さすがの女的大弱。何ぞおもしろいこともありませんか、と新聞を取り上げて、三の面を覗きながら、
「はゝゝ、ゐざりが逃け出すといふ標題かある。ちと御覽なさいまし。」
　と[illegible]下駄の歯の音を打ちて、入口に落す音、中戸を開くる音するに、予は新聞もてわが顏の隱るゝやうにこそ讀み居たる。
時計臺の背後より、
「唯今。」
と懸けたる聲、引緊むる如く耳に沁みぬ。
「そりやこそ。」
友吉は仰山に、
「秀さん、新ちやんが。」
「さう！」
堪らずあけたる[illegible]顏を、秀は見るより[illegible]
と笑みしが、[illegible]して奥に入りぬ。
「あれだ。」
友吉は首をすくめ、
「ね、新ちやん、だから私がさういつたぢやないか。おい、金どん、一寸奥へ行つて序候といふのを一番、是非こりや様を知つた上でないと、[illegible]計らあぐらしやうがない。おい／＼……金どん、金どん……これ！」
「おつとしよ……」
小僧は皆[illegible]りたるが、しかたこばつて、背のびをして、[illegible]諸[illegible]長く踏掛へて[illegible]から[illegible]
友吉は呆れ顏、
「何だ、そりや、おい、金」
と背をひそつた[illegible]
「い、いゝ。」
といひ、[illegible]運事に欠伸をまぜて[illegible]を掻いたるをかしさに、思はず笑を催す時、
「女さん。」
とまた呼びかけながら、秀は奥より立出づる
「店のね、皆が湯に行つておいでなさいツて、母上[illegible]いから、ゆつくり[illegible]ね」
友吉は[illegible]
「それでは、お[illegible]申しませうか。」
「あゝ、店には私が居てあげようから。而してもう片付けてね。」
「はい、では、然ういたしませう、金どん。」
「お孃樣、え、何ですか。はい、お歸んなさい。」
「何だ、これ、寐惚けなさんな。」
二人は店の洋燈を消し、臺洋燈のみ一つ殘して、椅子をひき込め、火鉢をいけ、硝子戸をはたとさして、手の[illegible]はそこに片付けつゝ、
「ぢや、行つて參ります。」
「さあ／＼。」
と出だし遣りつ。
[illegible]火鉢に[illegible]湯以て縁を[illegible]たる、予の前に、中腰になりたる秀の、火箸に兩手をかざしつゝ、微笑む顏を視めしが、やゝ含みたる[illegible]もて、
「新ちやん、しばらく[illegible]」
といひたるが、[illegible]心の[illegible]
[illegible]秀はまた、
「もしかすると御病氣で、こんどお目に懸る時は痩せてでもおいでなさいかと、皆でお案

じ申してね。今も道々母様とさういつて來たの。美津もねえ。」
「おや、新ちやん。入らつしやいまし。御機嫌よう。お孃様。」
「美津かい、かまはないで、さあ〳〵、暖かにして寢ないと惡いよ。」
「いえ、もうたいしたことではございません。」
「でもさ。」
「ありがたう存じます。あの、おゆつくり。」
「お大事に。」
「はい。」
と立つ。
「風邪なの。」
「急にお寒い故なのでせう。あゝ、新ちやん、お寒くはございませんか。」
「いゝえ。」
「まあ、おあたり遊ばせよ。父上様は?」
「息災です。」
顏と顏との其のあはひの、あまり近きにいきぐるしく、おもきものにてわが頭をおさるゝやうに心に感じ、ふと横むきて片隅の冷き板戸を望むとて、一羽山鳩の翼をひろげて、嘴を開きたるを飾りつけたる、一個大形の柱時計を、今日新しくみいだしぬ。こは先の日にはなかりしものなり。
「おもしろい時計があるのね。」
「さう〳〵、新ちやんはまだ知らなかつたのね。來らつしやつたらお見せ申さうと思つて待つてたの。あの鳩がね、時間の前になると、ひとりでに鳴きますからおもしろうございますよ。」
「鳴きますつて、あの鳩が。」
「えゝ、また時間にはならないのかねえ、二十分、まだ十一時にまがあるのね。それでに、一」
と秀は起ちて、むかうむきに時計に對し、
「聞いておいでなさいましよ、ようござんすか。」
手をふるれば、文字盤の長剣動きて、
「あら!」
鳩は鳴けり。
予は衝と秀に立寄りたり。
「不思議だ。其木で拵へたのが鳴くのか不知。」
頻に頭を傾けて、予は其の聲を異なりとせり。
「ほかに何んな鳥も居やしませんよ。」
「だつて可笑しいな。」
「そりや器械ですもの、ぜんまいで、ちやんと、かう鳴くやうに、しかけをしてあるんですツて。」
「おや、も一度鳴かして。」
「それではね、あなた背後むいて、目をつぶつておいでなさいよ。」
「何故ね。」
秀は然も、さりげに、
「さうでないと二度めには鳴きません。」
「變だな、かう。」
「さうやつて、さうやつて、ようござんすか、目をおつぶりなすつて……」
いひつゝ忍音に笑ひしが、鳩はまたしはなきぬ。
「はてな。」
「新ちやん、おもしろうございせう。妙ね。」
「妙ぢやないや、分つた。口でいふんだ、鳩の眞似をするんぢやないか。」
「私ですッて?」
「少し含聲で……似てるものを。」
「酷いねえ。私が何うしてあんなに旨く眞似られますものですか。」
「それだつても、はじめの時はあつちを向いて居てお鳴かせだし、こんだは目を塞がせて鳴かしたんだもの。」
「それは何も私の方で眞似をするんぢやありませんけれど、鳩がね、然うしないと、鳴くのが

いやだつて、いふんですもの。」
「なに、あんな木でことへたものが。」
「でも聲を出すくらゐですから。」
「そんなら鳩に、然ら貴女から、目を塞がないで鳴けとおつしやい。さうすりや、ほんとなのか、嘘なのか、確な處が分るんだ。」
秀は領きて時計に向ひ、
「鳩や、新ちやんがね、お前をおうたぐり遊ばすから、可いかい、其まんまで鳴いておくれ、よ、後生だから。」
鳩はまた鳴きぬ。鳴く時、秀はうつむきて故に其口許をば雨袖をもて打蔽ひぬ。
「あら！　またあんな怪しいことを。僕はいやだ。」
「ほゝゝ、何故え？　鳴いたではありませんか。」
「だつて口を隱したから怪しい、やつぱり自分で眞似たんだ。」
眞顏になれば、ゑみ傾け、
「これはね、口のうちで呪文をいふの。何うして術でもつかはなけりや木の鳩が鳴きますものか。」
「そりや呪文なら可いけれど、自分でいふんだから仕やうがない。何てツても、もらいけない。

誰がほんとにするものか。」
「あれ疑深い、まあ。ちや、ちやうど一分經つと鳴きますやうに針をまはして置いてね、私がすわりますから。あなた私の口をお壓へなつて在らつしやいな。」
「可いかい。」
「可うござんすとも。」
「かまはないの。」
「さ。」
燃ゆるが如きわが耳に、冷き秀の鬢觸れて、後毛のぬれたるが、左の頰を掠むる時、わが胸は渠が肩にておされぬ。襟あしの白きことよ。掌は其温き脣を早や蔽うたり。雪は戸越に降りしきる。

## 裏木戸

花の露に
白粉を、
解く黒髪や湯上りの、
雨の小窓の
　夕化粧、
青簾で噛んだ紅猪口を、
覗く柳にことづけて、
合圖の音も
まつも、
こいといふたよ
裏木戸の、
首尾も、
よいよい、よいとさ。

——鏡花全集卷十五頁より

# 三之巻

## 銀鷺

一里程、兄様に行つて居るよ。そりや女と男だから、ちよいと見ればまるで違つて居るけれど、第一恰好がそツくりだもの。だからね、僕はね、矢張母様にも肖て居るだらうと然う思ふさ。ほら、三上の叔母さんも、湯屋の女房さんもいつたぢやないか。兄様はおつかさんに、そツくりだつて。

兄様が東京へ行つた翌年の冬だつけ。紫谷に銀の鷺鳥が出来たつ。置物だつて、僕は佳いか悪いか知らないけれど、何しろ大きなもので見事だつて、評判だもんだから、父様が一度見て置きたいつてね。それがはじめッから、然ういふんなら都合もあるのに、父様は例の如しで、不図思ひたつたんだと見えて、湯へ行つて帰途に、おい、一寸寄つて行かう、といつたんだよ。

さうするとね、其前の日から清澄の侯爵が来て、紫谷に逗留をして居るんだらう。十何年振りで来たんだつて、市中大騒ぎをやつて、提灯を釣す、旗を出す、旗なんか新しく拵へて騒いだんだ。

其上にね、兄様、ちやうど其日は侯爵が皆に顔を合せるといふ日なんだから、士族どもは夜が明けないうちにどし〳〵出懸ける、羽織袴やら、洋服やら、士官の細君やら、お祭のやうで、うつかり路もあるかれやしないのに、差合も何もお構ひなしに、思ひ立つたら何てつても肯入れないで、ずん〳〵行くんだものね、僕は困つたの。

一人で行つては危いから、ついて行くと、もう紫谷の一町ばかり手前から、両側へ車が並んで、あの狭い町の真中をすれ〳〵に通る位なの、それに推合ふんだもの。

こんな時、行つたからつて、何が見られるものですか。彼処の家も目が廻るほど忙しいでせう、また出直して来ませうッて、袖を引張らないまでに留めたけれど、父様は、から平気で、可いから来い、御新造が居るから大丈夫だ、汝の知つたこつちやあねえッて、さつさとさきへ立つて行くんだもの、仕方なしについて行くとね、もう門の内は人で搔分けるやうにして通らなきやならないのさ、やつと〳〵玄関へ行つて、父様ァまじめな顔で、頼む、頼むといふのさ。誰か取合ふもんかね、兄様、あけひろげてもつて、皆ずん〳〵出入をして居るんぢやないか。

三十分も立つて居ると、小僧がね。それでも聞つけたものと見えて、何でございますッて出て来たから、これ〳〵だッて、父様がいふと、笑ひ出したんだあね、僕あ極が悪かつたのなんのッて。

案の定断つたさ。すると父様が、何、上杉だつて奥様にさう申して見なさい、御承知だからつて、ともかく、といつたもんだから、小僧は分つたのか、分らなかつたのか、其まゝ、ふいと入つちまつた。

しばらくすると、女中が出て来て、何うしたわけか、此方へ、お上りなさいッて言ふから、連れられて二室ばかり通つた時、袴を穿いた奴が出て来て、早口に何か女中に尋ねると、はい、それはといつて、其奴を案内していそがしさうに行つちまつた。

父様も僕も何うすりやいゝのかわからないから、茫手立つて、うろ／＼して居ると、むかうの襖の處から半分ばかり顔を出して、丸髷に結つた美しいのが、恁う手招をしたんだがね。大勢人は居たんだけれど、何故だか此方を呼ぶやうな氣がしたから、僕がね、父様の手を引張つて、其處へ駈けて行くと、部屋なんだ。立派だのなんのッて。矢張紫谷は大きなものだね、家中煮えるやうな騒ぎなのに、此室の方はひツそりして、跫音も聞えないで、ぞつとして寒かつた。

而して父様に挨拶して、

（お初に。）といつたぜ。

兄様、父様は豪いことをいつて、まだ逢つたことはなかつたのだねえ。それから僕の顔をぢつと見て居て、極が悪いぢやないか、

（おとなしいねえ、新ちやん。）

てツて莞爾笑つた。父様はちやうど飾つてあつた鸚鵡の置物を見てうつかりしておいでだつたが、新ちやん、といつたもんだからね、兄様、兄様のことを尋ねたことゝ思つたのか、彼は東京へ行つて居ります、と然ういふの。

（そんなことを承つて居りました　それでは……おや、弟御様、まあ可愛らしい。）ツて天窓を撫でたよ、兄様、僕あ嬉しかつたよ、

而してね、

（彼處ぢや、おかはりもございませんか。）

とお聞きだから、僕がいつた。達者ですッて。

それからね、

（新ちやんはおいくつなの？）

（十八になります。）

（まア。）ツて呆れた顔をして居たつけ、が聲を出して笑つてさ。

（お聞き申したのは、このお兒様のことですのに。新ちやんは、もうそんなにおなり遊ばしたかねえ。然うでございませう、久しくお目にかゝりません。實家へお遊びに入らつしやつたのは、ちやうどこのお兒の時分でございませう。）

僕のね、手を、掌で蓋をして然ういつたよ。それから自分で茶を入れたりなんかして、取込んで居りますので、おかまひ申されませんて、眞個に優しい人つちやあない。ねえ、兄様さうぢやあないか。僕のことをね、新ちやん〳〵ッていふの、さうしちや、

（おや口癖になつて。）

と笑つて居たつけ。

其時は初めて見たんだから、そんなに氣も着かないでしまつたけれど、其次餘所で逢つた時に肖てるやうだと思つたのは、使に行つて歸る道で。あの黒淵のがけ裏ね、彼處から芝居まではすぐだもんだから、腕車にも乘らないで、若い者が一人と、小僧が一人と、女中が三人で供をして行く處で出ツくはしてね、顔は覺えてたんだけれど、むかうが大勢で僕はいやだつたから、俯向いて、通過ぎて、ずつと離れてから一寸振返つて見ると、見返つたよ。またしばらくして後を見ると、またむかうでも振返つたから、もう一度、こん度は餘程來過ぎてから見て遣つた。

其時はね、彼の人ばかりぢやなくつて、小僧も、女中も、一所に皆で此方を向いたから、僕は逃出してしまつたさ。

今でも目に着いて居るがねえ、其時や、ひど〳〵派手な裝をして居たつけ。

それから一二度も見たことがあつたらうか、つい此間は、あの、通の紫谷の出店で見た。さつき兄様に話したツけね、何だつて店は人だかりだつたものね。彼家には紫谷の姿が置いてあるツて皆が然ういふ。僕は其奴も見たさ。其がねえ、頻にお世辭を振撒いて、此方へお入り遊ばせツて丁寧にお辭儀をして居たが、大事に

して、懐ろに居るらしい。でも急いで居たつか、内へは入らないで、上り口に腰をかけて、片足は駒下駄を穿いたまゝ、扉をねえ、少しあけて口ン處へあてゝ、俯向いて、何か其姿がいふ毎に、

（えゝ、えゝ。）

てッきり、頷いて居たんだよ。え、髪かい、髪は其時ゃ丸髷ちゃなかつた。

（奥様だよ、奥様だよ、紫谷の奥様だよ。）と囁きあつて、往来が立停つた。しばらくして帰りさうだつたから僕は家の方へ戻つて来ると、提灯が二つ、はたはたと駆けて来て、僕の先になつた奴が、紫谷に走りついて、もうお帰宅だからと女中に門口で言つて居た。兄様、いゝ人だねえ。兄様が小児の時にはなかよしだつたッていふぢやないか。……

と常は予に語りぬ。渠は何心もなかりしならむ。

## 黒 淵

水底の上の色なるべし。水の流黒ければ名としたり。岸にのぞみたる石垣の高さ四五間もあらむ。其上に板塀あり。石垣と連りて、町の角を繞りて立てり。

いろ〳〵の草石垣の間に生ひ、灌木は枝を交へたるに、小笹、荏荏茂れり。この淵の流れいと緩かなれば、夜は静なれども、水の音せず。

土手、石垣の間、路はいと細うして、衣の袖の茨の棘にかゝらざるやう、人一人肩をすぼむれば通るを得べし。横さまに延びたる楊柳の葉は、頭に支ふるばかりなり。

川上三町ばかりの間は、市街の中央を横ぎりて遊里の岸を流るゝより、人音、物音遙に繁く、冴え切りたる婦人の聲の、聞えてはまた止みなどす。月は出でたれど空曇れり。折からそよとの風もなきに、石垣の草の中より、落つるが如く螢たちて、土手の上に光りしが、すら〳〵と行きて大川の半ばに消えたり。斯に見送りて、ふと我に返りぬ。

秀がこゝに嫁ぎしは、今より六年の前なりき。紫谷の裏手なるものを、こは予が来べき處にあらずと、思はず慄然とするほどに、石垣に生ひたる樹の、ざわ〳〵と搖れて靡くものあり。立去らむとなし足を留めて、腕を組みつゝ乾と見上げぬ。

しばしもの音もなかりしが、やがてまた動き出して、石に石とのあはせ目に、足を交るがはる踏かけつゝ、しづかに下るは人なりき。夜目にも著しと見たる目の、いかでか渠を愆たむ。

渠は人ありとも知らざりき。草の根に縋りながら、爪探りにおりたちたる、下には丸き下駄ありて、一足正しくならびたるに、落着きて爪先を踏あてゝ、杖を取りて、ぬつくと立ちて、空を仰ぎて、といきをつきしが、肩を垂れて俯向きぬ。

予はいきを凝して見たり。

されど何等のことも仕出ださで、渠は徐に歩行き出しぬ。螢の光二度ばかり、しよぼけたる其背姿と、予とを遮りて顕れしが、ふはと消ゆる時、見えずなりぬ。

見送りて予は、思半ばに過ぎたり。

去にし年、爾のミリヤアド、文して我を招きし時、秀に別れを告げむとて、深水の家を訪ひたる夜、山鳩の聲懐しく離れがたき心の出で来て、其夜より降りし雪の降りやまで積りたれば、上京の道開けずといふをかこつけに、いまにも發程むと思ひたる、初一念はあだとなしつ。

なすこともなく年は暮れたり。明くるを待ち、暮るゝを待ちて、日に日に秀に慕ひ寄りて

は、何事をかし出でたる。歌留多雙六は上手になりぬ。學びの道は打棄りて、大概にものを思ひにき。

教ふる人ありて、強ひてまた或學校なる私塾に寄生とはなりしかど、同窓異業の和は密なりと、寝覺にも嘆きし、教師の口癖を習ひ取りて、人の氣に染まぬことをいふごとに、横を向きて、

「同窓異業の和は密なりですから。」

低いな消しては、唯ふことの、快きを覺えしのみ。十月三日、日もなほ忘れず。挾むこと薬が如くなりし富の市の、六月七月逢はざりしが突然予が塾におとづれ來て、

「新ちやん、秀さんが、嫁入をします。」

と一言いひて歸り去りき。日もなほ忘れず、十月三日。

## 燈籠

東京にわが行きたるも、また秀のあればなりき。

一夜予が弟の、不圖點燈頃、貸家を出でゝ、一文字につかつかと戸口に行きて、半ば入口を開けたるを、慌しく拖止め、叱れど、ものもいはで、[illegible]、目は合ひ[illegible]たれば、[illegible]く、怪みながら其まゝ臥床に推遣りしに、はた[illegible]觸れてまた寫たり。あくる日になりて門にたれと、露ばかりも昨夜のことを知らずといふに、人は時としては夢の中に、實際ある書きを寫し得るものぞと諦めたるより、予はみづから危みき。

紫谷は近し、予が家より幾程もあらざるを、いかなることをかしいたりけむ、ために上京も急ぎしなり。今年ひまありて歸りし身の、秀がただ墓みたりと、弟が告げたればとて、黒灣の紫葉を、夜深くなりて獨往ふことかは。母上、惜みたまへとて、予は其の墓前にうなだれぬ。

墓の際なる松の枝より、背後なる卒塔婆に縄を渡して、燈籠二つばかり結びかけつ。油さしの未だ來ざれば、灯も點さである、山中の日は黄昏れて、森の中暗うなり、手向けたる線香のそよ吹く夕風に灰落ちて、赤々と燃ゆるが見ゆ。

心細うなるに、蚊の聲低く耳許にひとつ鳴く時、華經讀む法師來れり。黄顔細長、鬚白く頭を埋み、白き眉長くぞ低れたる、薬は長き一人にて、寺の庵に住み給ふが、予が六歳七歳の頃も今もなほおもかげかはらで、身も太く健かなるが、悠然として來給ひぬ。

席を譲りて傍にある時、つと前に進み給ひて、妙なる法の聲は聞えたり。

讀經やがて半ばにして、油さしの老爺巡り來る、一つの燈籠にみな灯を點じて、竹と、わが入れたる藁繩を兩の手に提げたるまゝ背ざまに手を組める、腰はやゝ前の方に屈みたり。年紀五十を越えたらむ、目はやゝ引緊りてものものしく見ゆるから、無き法に太き眉つきて、しをらしき目に愛嬌あり。深き皺襞條が刻みたる額禿げて、白髪まじりの頭髪には濃なるが、聞惚れたる面色して、片頰に笑を含みつゝ、予が背後に聴聞す。一切の股引、[illegible]、太き筒袖の腰までなるを着て、胸毛黒々と襟廣く、小倉の帯の幅狭きを前さがりに結びて居れり。

燈籠あまたゝび風に戰ぎて、明くなり、暗くなり、消えむとして、さだまりて、[illegible]たかる音す。

讀經しはて給ひたれば、ソト布施を參らすに、老僧は受納めて、しなびたる掌もて、童かなんぞのやう、しづかに予が頭を撫で給へり。

「せいだしておとなになれよ。」

と微笑して、念珠持ち給ひたる手の衣の袖に隱るゝはしに、老夫は身を退りて一揖し。

「旦那様、彼處でお供物を、と申して待たつしやりますで。」
「あい／＼。」
と頷き給ひ、老夫を具して去り給ふ。
立ちあかりたるあたり、遠く、近く、十ばかり、一ならびに三つ二つ、處々に、遙に離れて一個なと、數百の燈籠風をとそひて、樹間々々に瞻く見ゆ。
母の墓なるが蠟盡きて、なかの一個いま消えかゝり、はち／＼と燃ゆる音に、ふと見返れば、予が家より参らせたるもののほかに、別に一個の燈籠あり。「印」の小松の根に寄せて、墳墓の上に置きたるが、夜露にすら／＼と滿色茂れる、夏草の葉越に透きて、山風に濕りたる灯の影冴かに、小松の翠色淺く、一葉一葉に宿りたる、露玉々る／＼と照り添ひて、奥床しうも瞭しく見えぬ。

## 山嵐

盂蘭盆の魂祭に、迎火送火は焚かざれど、菩提寺に、墓地に、祖先を祀りたる處には、家々より燈籠を携へ行きて、墓詣の時御灯を點ずるなり。家の内に、魂棚はいまだ造り設けず。燈籠は一家、親族、寺は違へ、墓こそ別なれ、志す靈のあるものは、皆墓前に手向くる習なるを、誰か母上に供へくれけむ、心當りのあらざるにぞ、予は露の中をすかしたり。
志す佛の名と、手向けし者の姓名とを、書着けて置くなれば、とさし覗き見たりしが、草の葉蔽ひ茂りたれば、此方よりは讀めざりし。
掌をさし入れて、少し押分くるに、ひや／＼と指ぬれて、可惜露はら／＼とこぼれぬ。
字は鮮かに讀まれたり。
新ちやんの母様　御墓　紫谷内
と書つけたる、二ならびの女文字、ちつと見詰むる瞳に映じて、其文字燈籠をはなれつゝ、露白く、草青き、灯影のなかに鮮かに描かれて、空に浮びてちらりと見えたる、爾時松の梢颯となりて、夜風冷かに身に染みぬ。
他の二個の燈籠は、かはる／＼ともれはてつ。今は唯其の一つのみぞ殘りける。
あたり暗うなりたれば、墳墓の上の草の中のみ翠滴りて、松の葉すこしばかりあかりのもれたる、其處ばかりは、いよ／＼照り増りて、露の色一入うつくしさに、青き蝗の小さきが一つ葉末に縋れり。
近よりつ、また遠のきつ、視め飽かずイむに、谷一つ隔りたる向の峰裏に打鳴せし輪鉦の音の、いと幽に初めて、山おろし烈しくなりぬ。袂も裾もあふりはじめぬ。
遠き山、近き谷、今は數ふるばかり消え殘りたる、燈籠の灯のあかきと、くらきと、上下に揺動けり。
鳶ケ峰の樹立深きあたり、波立つ如き風の音して、蕭々とばかり吹きまさる。
右にめぐり、左に立ち、前を蔽ひ、背後を圍ひて、墓所の風を遮れども、彼の燈籠のあふち烈しく、蠟の灯ひたとおし伏せられては、心細くなりゆくに、堪へず草の中より取出だして、墓前の地に据ゑつ。
兩袖をもて圍ひしが、なほ隙間もれて、あはやと蠟の灯のまたゝくにぞ、消されむことの口惜きに、手早く胸の紐解き棄てゝ、予は羽織を脱取りつゝ、燈籠を上より包みたり。
灯影はやがて靜になりぬ。
星の影樹の間に洩れたり。
時にこゝの前を跫音して、森を二人ばかり過ぐると覺えし、急に立停りて、
「あれ變だぜ。」
「何うかしてるんぢやないか。おや、」
と囁き合ひて、わが方に近寄る氣勢す。予は

駒を打ちて、疾く、蹲まりし身を起し、故と顔見らるゝやう、其方を向きて少しく笑を含みしに、後にひッそとなりぬ。稍ありてばた〳〵と遠ざかる音高く、遙にわッといふ聲せしが、其の後は聲もせず、風もまたいつしか止みたり。

輪鉦の音も聞えずなりぬ。

ひとつ消え、二つ消えゆく山中の燈籠、纔に草がくれの螢かとばかり消えのこる。

いまはとて伏拝み、ふたゝび舊の處に置きて、闇なる其あかりを辿り、二本三本、松杉を潜り出でゝ、見返れば、燈籠の灯はなほ點れぬ。

小戻りせしが思ひ返しつ。一反ばかり隔りて、更に遠ざかりて、更に歩を移して、また更に顧みたる、滿山黒き森の中に、青き灯影の草の露、母の精靈の消えやらず、我が情は盡きざりき。

## 色鳥

打仰ぐ
空は雲晴れ、風凪ぎて、
木の葉いろどる渡り鳥。
森も林も、
色染めて、
菊戴鳥や、瑠璃鳥、鶲、
ひよ鳥、鶉、鴫、鶫、
小雀、山雀、鶸、目白鳥、
雀の聲は千代八千代、
一筆啓上、頬白鳥も、
情に、かなり優しうて、
ゆくは白鷺の、あと振返る姿かや、
こゝは渚に鶺鴒の、ひとり、つま待つ風情
あり。

待つに、[illegible]、
胡桃の駒鳥、
駒鳥はくる〳〵りん、
くる〳〵りん、くる、くる〳〵りん、
りん〳〵、からりん、りんからりん
馬士のやうな木兎も、
紅きは、稚兒の伽となる。
銀杏の乳房、瓜の露、
紅玉の苺、葡萄の瑠璃、
甘い木の實もみのつたり。
榎の實、椎の實、柿、蜜柑、
啄み、囀り、
日ぐらしや、
誰れ不忍の水鳥も、
瓢箪に宿る山雀も、
また來む春を、
鶯の幾代の徳に契りつゝ、
唄ふや舞ふや錦葉の袖、
女神の袂、
天人の羽衣とこそ見えにけれ。

——鏡花全集　巻十五「[illegible]」

# 円之卷

## こだま

杜を出でゝ見返れば山暗し。風は凪ぎぬ。燈籠みな消えて、星あかりの山路たど〳〵しく、草の徑を分け行くに螢ははら〳〵と飛び交へり。

峠におけるなかばにして、土の崩れし處一個處あり。恰も峠の半腹にて、ひとなだれの谷深く、纔に足溜りすべき路の危げなるを、なまじひに知れる身の、今しも其處に臨みつと足數にて計るとゝもに、一歩も踏出すこと能はずなりぬ。

路はなほ、一條別にありたるを、恁と知りなばそなたよりぞすべかりし。引返さむとするに心から身は其細道のなかばとも思ふ處に居て、前にも進み難く、後にも退き難き心地ぞしたる。

わづかのあひだ二間には餘らぬ處を、草の根に縋りなばと、左手なるがけを搔探れば、茨に掌の傷つけり。

詮方なく、たゞずむに、爪尖のこそばゆく、身はわなゝき、浮足になりて心細さ限りなし。

予は草叢に膝を折敷きて、覺束なく星を仰ぎぬ。

空の色たゞならず、野の末、峰の裏あたり、星は數を盡して輝くに、この谷の上の方のみ、雲ありとしもなきに暗うなりたり。

「おい。」

其處ともわかず、人影のありとも見えで、肅びたる太き聲していふ。

こだまの呼ぶと思ひつゝ、予は氷を浴びたる心地して、ひたと草の根に身を寄せぬ。

「誰だ、其處に居るのは誰だ。」

予はいきをこらせり。

「邪魔になる、退かぬか、退かぬか、えゝ！退かぬかといふに。」

語勢烈しく頭上に迫るに、走り退かむと心は急けど、一歩をあやまてば九仞の谷の眞底に落ちむず危さ。身を起すべくもあらざるにぞ、さゝやかになりて蹲まる。

「おのれ、退かぬな、退かねば、……可し。」

はや何等か、害を加へむとする氣勢、聞覺えある聲音なり。予が心決まりぬ。

激しくもものをいはむとして、打ちふるうたる脣を、ひらかせあへずひしと蔽ひて、耳に囁く優しき聲あり。

「默つて、默つて、新さん、私だよ、私だよ。」

と、忍音ながら力の籠れる、教會なる操の聲なり。

口には堅く蓋されたれば、切なき胸の躍るのみ。

「默つておいでよ、恐うござんすから。可いから、私が居るからね。」

と背後に居てものいへりし、渠が身は衝と前にまはりて、予を其胸に抱き緊め、兩の袖もて項を蔽ひて、

「可うござんすか。そつとして、靜にしておいでなさいよ。恐うござんすからね。」

とひそめき告ぐ。暗きなかに、わが顔は渠の胸にひたとつきたれば、其姿は見えざれど、ひたすらものゝ恐しければ謂はるゝまゝにいきをひそめて、身動きもせで取縋れり。

爾時聲を高うして、

「はい、はい、あの、新さんはもう歸りました。

此處には居りません。はい、いゝえ、まつたくです。何の私が祕しますものですか。――神よ守らせたまへ――」

とて其額をつけたらむ、わが肩ものに觸るゝを感ず。婦人は默して打念ずる氣勢なりしが、恐しき聲は聞えずなりぬ。

## 有明

「もうようござんす。さ」

と婦人は予を放たむとしたりけるが、急にまたしつかと抱けり。

わが居たる上の峰の方にて、細くて淸き聲のやゝふるへたるが、

「新ちやん。」

と呼懸けたり。

胸に徹する聲なり。予は耳を欹てぬ。

「默つて、默つて」

とまたさゝやきいへり。

「新ちやん。」

やゝありて、

「新ちやん、新ちやんぢやないの。あれ。」

予は答へむとして顏を上ぐるに、操はひしとばかりおさへたる手を弛めず。

「何故、然うですよ。ものをいつちや惡いといふのに、年上のいふこと肯くもんです。」

とひそめきながら、叱るが如くたしなめられて、心ならずも默してけり。

「新ちやん、新ちやん、新ちやんといふのにさ。」

「いゝえ、いゝえ、いけません、返事をしちやいけません。いふことお肯きなさらないとミリヤアドにいひつけて叱らしてあげます。」

と乾となりて戒めいふ。

峰の上にては、しばし聲の途絶えたるが、此時また、

「あの、新ちやん、其處においで遊ばすのは新ちやんではござんせんか。」

「違ひます、何の、こんな處、新さんの來るやうな處ぢやございません。新さんはこんな處へ來るものですか。私の、私のいゝ兒はね、富の市ぢやありません。」

「あ。」といふ叫び耳にのこりて、峰の上ひツそとなりたり。

予は懸念に堪へず、振りはなさむと身をあせるに、彼の人少しく手を弛べて、

「ね、何にもあなたを呼んでやしないの。みんな僻耳です。新ちやん／＼てきこえたつて……そりや山鳩の聲でせう。あれ／＼、鳴いてるのか聞えませう。」

耳を澄せば果せるかな、遙かに遠く、三ッ山、四ッ谷、十森の彼方の、洞の中の奧深く鳴くかと思ふ心地せり。

「いまのうちに早く、さあ、お歸り。」

と姿なきものゝ導くをば、怪しともみざりしが、たしかに秀のわが名を呼びたる、上なる峰に心殘りて、さまでに某が戒めたる、緘默の掟を破りつ。

「姉さん、姉さんかい。」

とばかり峰を仰ぎ呼びぬ。

「おゝ新ちやん。」

と應ふるに、堪らず走り寄らむとせる、わが手をむずと引留めて、

「おい。」

と寂びたる聲を懸くる。啊呀と見ればいまのいままで、予を護りたる操はあらで、世にも恐しき富の市の、左手に予が手を捕り、右手には秀の腕を摑みて、深さ幾丈とも分たざる、眞暗き谷に臨み居れり。

「おにげなさいよう。新ちやん、あれ！」

富の市は苦しげに吐息をつき、

「秀さん、こ、こゝを見て、私がこゝを見て。だ、だれがこんなにしました。」

と矢庭に秀を引寄せて、其胸をさしつけたる、肋骨白く見え透きて、譬へば拳の入らむばかり、胸の一部の肉を抉りて背にも届かむ穴あきて、眞蒼に黒き皮膚を染めつゝ、鮮血其疵口より噴出でたり。

「こゝ、こゝ。」と富の市は、予を、捉へたる手を放ちて、秀に疵口を指したる、節たかき指の尖わなゝきぬ。

今はハヤわるびれたる狀なくて、肅然と立つたりし、秀の項に手をからみて、横倒れになつたる富の市！ ひとしく蹠をふみはづして、あはやと見るまに陷りぬ。

白き踵のちら〳〵と、空より雪の降るかのやら、眞暗き谷の底へ、底の方へ、ずん〳〵ずん〳〵ずん〳〵と果なき深みにおちいりゆく、秀を見るわれ堪ふべきや。

續いて飛込まむと片足かけて、屹と瞰下したる谷の底より、綿の如き白雲の、むら〳〵と渦き出で、谷一面にひろがり、蔓り、かさなりあひて、恰も蓋したらむ如き奇觀に驚き、茫然として見詰めたる、谷の半ばの雲の中に、浮みもやらず沈みもはてゞ、秀のみ一人漂へり。

月に銀波の輝く如く、折から洩れたる有明月の、綵の如きがきら〳〵と、かの白雲をぞ照したる。

秀の黒髪颯と亂れて、横ざまに臥したるにぞ、予は心地醉へるが如く、再び足を爪立てき。

「新次！ ―」

と一聲背後より、妙なる聲のいと淸きが、少しく怒を含みて呼ぶに、胸を打ちて見返りぬ。

茶博多の帶、胸高にメめたまひし、亡き母の胸のあたりのみ、わが頭より少しく上に、月あかりに仄見えたり。

飛縋りたる手はそれて、それかと思ふまぼろしの、白雲みてる谷間を切つて、矢よりも疾く一文字に、むかひの山にわたりゆき、岬の如き峰のはしに、一本高き松の梢に、斜にかゝれる月の上に、後姿の項のあたり黒髪そよ〳〵と靡くと見えしが、一刷淡き朝霧のしら〳〵とばかり姿うすれて、東雲高く消失せたまひぬ。

とばかりありて夢さめたり。胸の中安からず、秀の身の心許なさ限りなかりき。

## 柴　垣

予が日毎、醫師の許に通へる路は、かの黑淵の裏にはあらず、紫谷が家の表の門を、よぎなくいつも過りしなり。

人知れず心咎むれば、其と向ひ合ひたる家の、裏庭の柴垣の方に身を寄せては、足早に過ぐるを例としき。さりながら昨日一昨日、おなじ其の柴垣の、とある棕櫚繩の結目に如何ならむか鳥の抜毛の、一片の雪の縁を墨もて細く染めたる如きが、風、雨にも取り去られでかゝりたる、おなじ處に袂觸れて、われ知らず立淀むを、心着くまゝ、人やあるとあたりを見ては、慌しうぞ立去りたる。

醫師は紫谷のならびにて、一町ばかり隔りたる曲角の邸なり。

十日目の朝なりけむ。近きあたりの病家より、迎ふるまゝ出でたりとて、先生は留守なりといふ。

「別に診て頂かなくても、かはつたことはございません。お藥だけ頂きませう。」

と傍に置きたる水藥の瓶を取り、藥局の卓に出さむとして、ふと見れば違うたり。おなじほどに見えたるが、予が量よりも小さき瓶に、紫谷氏令息新三郎君とぞ書いたりける。

「あゝ。」

藥局の書生はむからより覗き見て、

「そりや、何です。このさきの紫谷の兒樣なんで、お名がちよいと似てますから。」

といひかけて打笑みたり。

惡は誰が名づけしぞ。秀の子の頭字は予とおなじ。予とおなじ。と思ひしが、みつめてしばらく放ち得ざりき。

「病氣ですか。何、藥を取りに來れば病氣に逢つたことはないけど。」

と予は故と微笑みぬ。

藥局生は何氣なく、

「しかし、そのお子はもうよくなりました。いまお不快のは御新姐樣で、實は先生も紫谷へ參つたんです。」

歸途にもまた知らず〳〵柴垣に寄添ひて、紫谷の門を見たる時、予は更に懸念なきこと能はず。

さらぬだに去にし夜の、不快なる夢もあるを、秀が身に疾病ありとは。奧深き家の勝手の方に下婢どもの語るらむ、婦人の聲もれ聞ゆる。門には二頭の荷駄馬あり。近山より薪、炭など持運ぶものなるが、悠々と秣食ひ居れる、草どもあちこち取亂せし門邊に風もあらざるにぞ、心少しく安んじたり。

おのが病氣に思ひ至りて、手にせる藥瓶に心着けば、予が名を署したるレツテルの、むかうざまに、紫谷の門に向きたるにぞ、はツとばかりに袖以て蔽ひぬ。

日每おなじ時、おなじ處を過ぐる身の、いつとなく家内の目に留りて、遠目にも予が名を知られむかと、門前を過るには、必ず瓶を蔽ひ隱して、予が名のうはさされざるやう、上杉といふ言の、一言も秀の耳に入らざるやう、はた秀をして思ひ起さゞらしめむと勉めたる、心づかひを人知るや。

## 几帳

前年深水の店に居たる友吉の、家を持ちて、おなじ時計店を開きたるに、一日通懸りの予は期せずして呼込まれぬ。

打出でゝは醫師にも聞きづらかりし秀の容體は、今もより〳〵紫谷に出入をすなる、渠の口より語られき。

「新ちやん、さあ、またゞ、もう、いまぢや何處か大人ぶつて、斯う見てると、いやにお澄しで、つらが憎い。ほい惡氣でなし、ほんとのことでさ。新ちやんといふ柄ぢやおあんなさらないけれど、まあ、御免蒙つて、いひ馴れた處でやつときませう。新ちやん、こゝで、あいよ、といつて下さらないと調子が惡いな。はゝゝ、笑ひごつちやありません。ほんに私等も、たいない心配して居ますがね。困つたもんです。ぶらぶらやまひで、何とも方がつかないので、お醫者もかたがつて居るんださうで。

如彼弱々しくお見えなすつても、あれで、どうして御氣象もんでおいでなさるから、どんなに氣むづかしくツても、髮の毛一筋ぶらさげておいでなさらうぢやなし、まだ深水の時分は、あれでもあどけなくツて在らしつたんだけれど、むかうへお輿入のあつたあとは、ちやんとしまつこ、高い聲でお笑ひも出ないばかり、其の癖ちつとも澄さないで、今でも私が伺ひに出りや、友さんかえ、といふお聲懸。

始終笑顏で在らつしやるツこ、彼處の女中衆もいつてます。何時も奧樣の不機嫌な顏つては見たことはありません。其で、ちやんとおもしが利いて、支店、本店、何十人といふ奉公人が奧樣といふ聲が懸ると、そりや居ずまひを直します。一體がらが大きいので、きりゝとして立たせると、まつたくあたりを拂ひまさ。

其で居て例の通りお優しくツて、庭の草取にだつてぞんざいな言をお懸けなさるでなし、坊ちやんが小間使をお使ひなすつても、新ちやん、御苦勞だつたと、さうおつしやいよ、とかういふ調子ですもの。

だから御覧なさい、いつぞやも紫谷で莽諸侯

のお宿をなすつた時も、其のとた御臺様がね、新ちやん、孔雀の土用干見たやうな洋服かなんかで、いやに反りやあがつて、横柄なことをいつたもんなら、とあ小間使どもが、何でさ、内の奥様にだつて、呼ずてにはされやしない私たちだ。何の西洋手品の幕ン中で風琴を引張らうといふ身で、生意氣なつて、同盟罷工をやらうとした位でさ。

華族の奥様だつて、面とむかつちや眞目です。紫谷のといへば聞えたもので、誰だつて立停ります。美しいツてことは私のおふくろだつて知つてますけれど、あの方は出ぎらひな質だから、見たものは餘りないので、私だつて何ですぜ、あ、この廣大もない邸ン中にや秀さんが居るなと思ふと、何だか其奥ゆかしさといふものは、几帳の蔭にでも在らつしやるやうな氣がして、紫谷の門の前を通る毎にや、懷しいやうな、貴いやうな、嬉しいやうな、泣きたいやうな、え、泣きたいツて、何です、たゞ譯のわからない氣がしますんですから、然ういつて見たものです。

妙ぢやありませんか。人の身分といふものは、もう、あの方なんざ、おうまれなさると直ぐにあゝいふ果報が備はつて居たんですね。何だつて、新ちやん、お家は、アノ通り、名所の瀧がひとつ庭にあらうといふ位、姑はなし、可愛い坊ちやんはおできなさる、旦那はあの通りのお人品で、まるで坊ちやんでさ。ちつとは浮氣もなされば、お妾もあるけれど、何があの奥様だから、妾の方で恐れ入つて、小さくなつて、とても叶はないものとあきらめて居るんで、旦那に殺文句ひとつ言はうでなし、あんな奥様があるのにまあ旦那はお茶人ぢやないかツて、人の前で笑つてますさ。平氣なもんです。

みんなが懷いて心底から大切にして居るので、氣あつかひをなさらうでなし、御兩親もお達者だし、ほんとでさ。それにもうちやんとお位がそなはつて、爭はれないもんですね、深水においでの頃は惡くすると背中の一つぐらゐ叩きかねなかつた私だけれど、今ぢや何うしてむかうではおかはりなく、友さん、とおつしやるけれど、其聲を聞くと何だか冥加ないやうで、嬉しいやうで、恐れ多いことだと思つて、おのづと俯いてしまひますよ。

すると、この病氣といふものが、錢金づくぢやいけないんで、何に不足つたない方でも、こいつだけは仕方がないんです、それもね、蹄駝いだせゐで嘘をするとか、くらひ醉つて頭痛がするとかいふんなら、また國さへ治くんでさ。

妙なことをいふやうですが、新ちやん、お醫者にや分らなくツても、私なんざ知つてますぜ。御病氣のもとは彼なんで。富の市ね、彼です。彼奴あ何です、始終何です、紫谷へ其の、ぬつと入つちや出て來ますがね、え、怪しからんぢやありませんか。

一體さう毎日々々何の用がありますもつか。深水だつて何でさ、大したお知己といふんぢやなし、ほんの見知越であつたばかり、其家の娘さんが落着いたからツて、嫁入先へさう〳〵押懸る奴が何處にあるもんです。いえ、何も私がこゝで威張つたつて仕樣のあることぢやないんですけれど、此頃はもう毎日だ、といふから呆れるでせう。

さうかといつて、別に亂暴もしないものを追出すといふ譯にやゆかず、物貰ひでもないものを巡査に引渡す分ぢやなし、彼でなまじつか、いゝ家の跡取だけに、いま私の家へやつて來た處で、矢張ともかくもお客でさ。まあ富の市さんといふので、そりや番茶でも出さなければならないといふもんです。

そこは勝手でも氣を着けてゝ、今日はお奥で少しお取込が、と思ふ先づやります。それでも

ちつとも、おかまひなし、はア左様ですか、といつたきり平氣であがり込む　それでもいけないてんで、敬して何とやらいふ術ださうで、番頭さんのさしがねで、彼奴を据ゑるやうにして、いや、御上使の格であつかつて、何ぞ御用でございましたら手前までさうおつしやつて遣はさりまし、といはせて見ると、ニヤリと笑つて、いえ、用はありません。遊びに‥‥と恁うでさ。

　さあ、さういふものを何とも仕方がないので、對手にならないで引退ると、誰に談話をしようでもなし、ぼんやりと火鉢の前へ坐つて見たり、座前へ立つて居たり、襖の蔭に踞つたり。

　惡くやると、秀さんがばつたり出ッくはす、其時は顏色がおかはんなさるさうで、あゝいふ方だから目に見えりや、うつちやつてお置きなさらず、ちとおはなしなさいましなんて、あひかはらずおつしやるさうですが、新ちやん困つたもんぢやありませんか。

　はじめの内こそ、皆が嫌な奴だ、憎らしい按摩だつて、敷居の上へ煙草盆を置いて蹴かさうの、目が見えないから擇りなし、箒を立てる、鹽を撒くと、それでもまあいくらか取合つんで居たさうですが、いまぢやもう女中衆なぞ、氣味を惡がつて夢に見て魘されるといふ化方でさ、それ、痩ッこけて、顏色の蒼いによつて如件、といふ白痘痕の、眉の消えさうなのが、日ましにやつれて、肩をゆすッて、鼻呼吸がふん／＼。それでニヤリと來た日にや、ちいつと人間にしちや行過ぎてます。お互だつて驚きますあね、暮合なんざ不氣味でせう。人間も何です、まだまあ人の眼顏が見えたり、差おくる内や色氣がありますけれども、もうあゝなつちや捨鉢でね、始まつにおへたもんぢやありません。

　飛んだ魔ものに魅込まれなすつた、秀さんがお可哀相でさ。

　いつたやうな御氣象で、別に床に就いて入らつしやりもせず、屈託顏もなさらないけれど、ちやんとして在らつしやりや、在らつしやるほど、帶のしめ工合までが、まるで切ないのをおさへつけておいでなさる樣に見えるんです。私あ思ひますがね、まつすぐに屹と立つたものは、バッタリと倒れるでせう、ほい、鶴龜。ものゝ譬へでさ。案じ過すのもそんなことがあつちやならないと思ひますからのことで。

　さうかといつて何處がどうといふでもなけれど、お食も細るッて風說だし、新ちやん、思ひなしお知りませんか、何たかお[illegible]儀おきびなさるのが、寂しくおなんなすつたやうで、情なくつてなりません。」

　と友吉はいひかけて、煙管持てる手の火鉢の上に暗うなるに、透して予が面を見しが、

「おや、新ちやん、何うかなさりやしませんか。」

「否。」

　といふ時、駒下駄の音高く、店頭にカラリと止む。

## 三日月

　婀娜たる聲せり。

「友さん、お精が出ますね。」

　友吉は頭をかはして、

「よう、お部屋樣。」

「厭だよ、不景氣な。」

「いえね、今もとう申して居た處でございますよ。何うも紫谷のお部屋樣はおうつくしう在らつしやるつて。」

「ふウ、」

　と笑ひながら面を背けて、柱に背を凭たせつゝ、たそがれの空を仰ぎ、

「おゝ、三日月樣だ。」

と呟きつゝ、急に二足ばかり外へ出でゝ、

「あ、あ、坊ちやん、坊ちやん」

予は振返りぬ。

「乳母さん、此處だよ、此處だよ。」

と手招せり。乳母たるべし。容色よき婦人、四つばかりの愛々しきをさなごの手をひきて、招かるゝまゝ此方に向ひて來ぬ。

「あれ、坊ちやま、お銀さんが。」

といひかけて乳母は立停れり。

お銀といへるは、紅の褄を蹴かへし、をさなごの手をおのが手に持添へたる。

友吉は微笑みて、斜に頸を傾けたり。

「坊ちやん、入らつしやいまし。」

乳母は其肩に手を懸けながら、

「あい、と御挨拶を遊ばしましな。」

心着けられてをさなごは、

「あ。」といひながら頷きぬ。

「はい〳〵、今日は。」

「お利口ですねえ。よくお覺え遊ばした。」

とお銀は其首を撫でぬ。

「こちらの兄様にも、御挨拶遊ばせな。」

何をか予に思へとや、秀の兒を推向くる、愛らしき目の予を瞻りて、また其頭を下げたる時、

「あら、ちよいとあなた御覽遊ばせ。」

と予を顧みてお銀といへるが、あでやかにほほ笑みぬ。

あはれ、予をして抱かしめよ。予は其胸に額を伏して、思ひのたけを泣くべきなり。

予はたゞ笑を含みしのみ、ものをもいはで頷きぬ。

やゝありて乳母はお銀にいふ。

「お湯ですか。」

「はあ、お前さんは。」

「何處へ。」

と友吉もまた問ひたり。

乳母は其答はせで、肩越にをさなごの顔を差覗き、

「坊ちやん、何處へ行つて參りましたつけね、ね、坊ちやん。」

と裏問ひぬ。

をさなごは答へ得で、いぶかしげに乳母の顔を見たり。

乳母は空を仰ぎて三日月を指しながら、

「のゝ様ね、のゝ様。」

月は恰もむかひの家の土藏の屋根と、角家の窓とのあひだに、すら〳〵とたけのびたる柳の梢に靑くかゝれり。乳母の言に因りて、をさなごはさとりけむ、いたいけなる掌を緊と合せて、三日月を打仰ぎ、

「母様。病氣、のゝ様、あ、のゝ様、あゝ。」

と伏拜む、足許の覺束なく、よろけては、乳母の手に支へられ、うつくしき迷子札ゆら〳〵と淺黃縮緬の帶房やかに結びてさげ、また拜みて屈むとて、砂を掃くにぞ、お銀は其尖を揭げ持てり。人々は見て目を合せぬ。をさなごはなほ人の答へざるに繰返しては伏拜めり。

「のゝ様、あゝ、のゝ様、あゝ。」

堪へずなりけむ、お銀は店頭に蹲ひたるまゝ、横様に膝に抱きあげて、

「お、、いまに快くおなり遊ばしますよ。母様が御病氣で、お淋しからう、おかはいさうに。」

と涙ぐむ。友吉は屹と乳母を見て、

「乳母さん、惡いこつちやないが、情ないことを教へるね」

と顔を背向けてしばたゝきぬ。

乳母はしをれて首を低れたり。

「はい、さうおつしやれば、なるほど私が惡うございました。ついおもりがてらにおまゐりをしますもんですから、いつかお覺えあそばして……坊ちやま御堪忍なさいまし。もう〳〵母様はすぐによく〳〵おなり遊ばしますから、そんな

こと遊ばすんぢやございません。御病気がお重うござ遊ばすかして、奥様が帰う御ものもおつしやらず、お抱き遊ばしにもたゞお顔ばかり見つめておいで遊ばすので、私でさへ心寂しいもの、坊ちやまはどんなでせう。乳母や、母様がと膝でそッとおつしやると、もう／＼胸が裂けるやうで。」

といひかけしお縫うるみき。

時に三日月のかげ淡く、人々のかほ灰になりたり。筋骨白く、血の色の黒かりし盲人の俤の、わが眼を遮りしが、あれと見る帆柱に消えき、片膝立ちぬ。富の前！

# 田植

千代八千代、
葉末の水濯ぎみずして、
富士の白妙たぐひなき、
影も朝日の、
田植笠。

緋の色にも紅さして、
真水に汐の日計かや。
おくれ毛もるよ、
苗の露。

戀の深田に植ゑ進む、
手許も揃ひ氣も揃ひ、
葉も揃うて
出来秋は、
鎌も鎌も輝きて、
黄金俵にて米はかる、
黄金俵にて米はかる。

玉を炊ぐこと、桂を焚くこと、
わたしや、きみゆゑ水仕事。
千機五百機、織り、紡ぎ、
情たて絲や、堅絹の、
やがて着せましよ手織縞、
そして見せましよ、
野山の錦。

栗、稗、蕎麦も一様に、
いろの暖や
田舎道。

姫もお通り、
順禮も参る、
鳥さしが来る、
鴫が来る、
暮れても遠かれ
月の影。

影や道陸神、影や道陸神、
地蔵さんもおいで、
案山子もおいで。
馬士よ、藁買へ、
馬を叱るな
馬士唄うたへ。

あの綱付は仲取おぢや。
私も唄ひましよ、嫁入しましよ。
桃が咲いたら嫁入しましよ、
菜種まばゆや角かくし。
馬は霞んで荷鞍が光る、
光る荷鞍は玉の輿。

ふしも新たに
あひ生の、
関の松風
しぐれさへ、
心の雛の嬉しさよ。

——鏡花全集巻十五「唄」より

# 五之巻

## 山櫻

一美人だ、そりや口でいふやうなものではない。君なんか西洋人たといふと、一概に何だ、棕櫚の毛のちゞれ髮で、脊高の尖ッ鼻の、團栗目とばかり思つてるだらう。まあ、ものは試だ、いえ、何も嫉妬を頼まれた譯ではないが、そりや御覽なさい。クラスん中の丈の高い奴よりや餘程脊が低くッて、ちつともをかしからず、莞爾する處なんさ、まるで美しい佛様が世話で隱れたといふ、俤があるよ。むかうの婦人は太く少く見えるッていへば二十五六でもあらうかな、二十位にッきや見えないけれど、それで先生だからいゝぢやあないか。君むかうの婦人は、人なか、出て平氣だといふが間違ひだと思ふ。まあ間違ひでないにした處で、こゝはといふ豪傑どもが、總勢七十何人といふ一クラスだもの、可哀さうにいつも眞赤になつてらあな。そりや氣のぼせもするだらうさ。處がね、妙といふのは、あの人數の皆にじろ／＼顏を見られた日にや堪つたもんぢやないけれど、そこはまた能くしたもので。

得て仰ぎ見るものなし、大分皆が俯向くよ。それが其何なんだ、馴れないせゐもあり、多人數なら一々名が覺えられるものでもなし、それに面とむかつては殊更で、むかうも極が悪いかして、其方の方を見て居て顏のぶつかつたものをつかまへちや、

「貴下。」といふので問題を與へるだらう。何うして分る奴はすくないから、問はれてまごつくのを恐れ入つて、いや、不殘俯見よ。

まあ來て見たまへ、君、なか／＼珍さ。此間も何だつた。ミリヤアドが、内から櫻の花を持つて來て、時間に出て、とつつきがなかつたか、はじめの内は默つて、うつむいて、から、兩手で、胸ン處へ花をあてゝ、頻に見詰めて居たつけが、其何らもあどけなくッて、美しくッて、品のいゝ趣ッたらなかつたもの、僕はじめ見とれたとさ。するとね、何とかいふ、熊の様な英雄が一人クラスに居る。其に其目がぶつかつたと見えて、

（貴下、何、此色は？）

とつか／＼と寄つて櫻を見せてさ、そして指をさして問うたんだ。わざ／＼内から材料を持つて來た位、腹案があつたらしく、答は英語ですることになつてたんだが、桃色、でも、薄紅とでもいつて欲しかつたものと見える。それにしちやね、君、對手が悪いぢやないか。僕のやうな風雅男を、それ見詰つて聞けばいゝのに。

英雄やゝしばし無言で、口をむく／＼とやつて居たつけ、仰山に卓子をたゝいて、

（むゝ、や、やまと魂！）とやつた。わかるまい。

通じないので問返すと、

（やまと魂の色です。其やまと魂……えゝ、ジャパニース……）

といひかけて、してやつたといふ顏でにつこりして、

（ジャパニース魂のやうな色です。）さ、秀何だね。此人にして此答あり　英雄、山櫻と解いたんだ君。

ちつと見當違ひの答案だから、ミリヤアドは妙な顏をして、

「いゝえ、色です。色のこと。」

とやり返すと、英雄居丈だかになつて、

「なあ、諸君。」といふので、谺のやうな聲を出すと、兒分大勢、「違ひません、それが大和魂、大和心です。」と疊みかけて五六人きそひたつていつたもんだから、そこはもう一概に自分の思つてることを立通して、

「いゝえ、違ひます。」

「違ひません大和魂！」

「いけません」大和魂——いけません。」

ときつぱりいつて、つんとむからを向いたんだ。まあ、堪らない。國家の干城を以て任じてる連中だから、怨くいはれて縮まるものか、英雄腕まくりをして、

「何だ、いけない。」

と席を立つて、づいと出ると、ばらばらと五六人列を亂して立つちやつた。」

## 女浄瑠璃

「生徹な大和魂がいけないたあ何だ。」

「詰問しろ詰問しろ。」

ッて、君、なぐりかねない勢で詰懸けるんだもの、おいッと見ながらあとずさりをして入口の處で押著けられて、

「御免なさい、御免なさい。」ッて悲しい聲で、君、わびたらうではないか。

そうそうあの頭を七分三分にキチンと濡らして分けてる色の白い幹事が來て、みんなを取おさへて、やうやう治めたが、ミリヤアドがね、廊下を、君、俯いて出て行つたぜ。

もう來やしまいと思つて、僕なんざ、賴る詰らない感情を起して居ると、あくる日もあひかはらず出て來たが、ひどくしよげて、無用心にや、ものもいひ得ない。もとからちつとふさき込む婦人だつたが、それ以來はまた格別さ。けれども其故か、いつそ内氣に、しとやかになつて、ときたま笑顏を見せる時も、何だかあはれみを乞ふやうに見える、しをらしくなつたから、僕なんざ大恐悦。

おかげさまであの學校は男教師の洋服の肩にたしたんざこつたものです。どうやら然うみんなで顏を見たり、張る氣だつたりするのを見ると、教師とはいふもの丶、何だた、まるで學校のかんばんのやうで、紳草屋の寫眞だの、雜誌屋の油繪だのと、たいした違ひはないけれど、ありや何だ、思ふに豐でないらしい。

其證據にや、それこそ垢のついたもんなんざ、さすが着ちや出ないがね、もうちつとも俤ッ氣のない、一色で、手袋だつて、手巾だつて、君、木綿ものを持つてるではないか。

何時もつッと入つて來て直ぐ教場へ出て、濟むとまた直ぐに其の教員の溜の前まで行つて、敷居も跨がないで遠くから挨拶をして、其のまゝ出て行く。しじうつむいてるから、しをらしいや。

それに往來を歩行く時だ。他の奴あ、いやに反りやあがつて、見てくれがしに風を切つて通るといふもんだけれど、其は全くだ、實にへかへめで、傍見もしないでさつさと歸る、何だか怨う、はにかんでゞも居るやうで、服裝が惡いせゐとでもいふのかな、おなじ國の者にでも顏を見られるのが厭な樣子さ。

何うしたといふんだらう。何でもあんまり、人づきあひをしないのに違ひはない、一本だちでひどく心細いといつた樣子だ。

僕なんざ、只に同情を表する、ええちつとも此間も何だね、あまりおかしい氣がしたんで、門口でおやうとあつた時、

「會堂はどちらです。」ツて問うたよ。考へた、だしぬけにお宅はともいへないやね、さうするとあのちよいと顏を赤くして、うつくしい前齒を少し見せて笑つたね、おい、聞いてるか

い。」
「聞いてるよ、何だ、道はしに妙な處へ持つて來たぢやあないか。」
「いえ、惡氣なし、聞き給へ。さうすると、其方何かいつたが英語だからわからなかつた。が、濟みません〳〵と答へたさ。」
「度胸がいゝもんだ。（氣障だよ、此人は）つとでもしやしないか。」
「大きにさ。」
「そこで御本人〔いえす〕と答へたはいゝ。」
「昨今だからね、はゝゝ、けれども、くはしく番地をいつたよ、で、其家は前で覗いたばかりだが、もつとも會堂らしくはない、柴垣の木戸附で、すぐ緣側が見えようといふ、まづな四室ばかりの一軒家だ。門に古い名札の引ぺがしたあとがあつてさ、其わきに假名で、ミリヤアドとばかり、窓かけも何にも見えない。鉢木が三つばかり緣さきにあつて、すかすときものがかけてある、女住居と見える。婆さんが庭を掃いて居たつけ。間違へてうちを敎へたんだけれど、別にそれが緣にもならず、見たばかりで歸つたが、佳いよ、美人だといふに、まあ來て見給へ、授業料は女義太夫へ十日ばかり行く分だ、安いものさ。」

と顰返に人憚らぬ高談話、新次こゝにあるを知らでや語る。

## なざれの歌

時間は適宜なり。東京絵入新聞二種ばかり讀み聞かせたまはむには、其の報酬といふをもこ、月々の費を給すべしと、ミリヤアドのいふまゝに、當時渠が住ひたる麻布の最寄に下宿して、日毎其許に通ひたり。

上京せし後、ミリヤアドに逢ひたるは、はじめて都を見たる年の冬、クリスマスの夜なりき。

外國の婦人の名だか、うつくしさか、洋琴を有名で、わがナザレの歌を唄ふ番組あり、來たり見よ、と、其折から、予が學資を補助したる林なにがしの男に、日子といふ人、予を誘ひたれば行きぬ。

をさなきものゝ聖書の諳誦、會話など二つ三つ濟みし後、洋行がへりの紳士がなせし感話といふもの、あまり長かりしかば、予は暖かき暖爐の傍をば離れて、入口の右手に番人が住める一室に入りたり。皆一堂に會しつゝ、其夜の興象たけなはなる頃なりしかば、室の片隅に焚けたる逆被せし二分しんの釣らんぷのかゝれるのみ、火鉢の火も消えなりしを、辛うじて其につけたる、ひのたき風心地よくつゞけさまにくゆらせし、煙の形おもしろく、むら〳〵と低くたなびきて、むかうざまに立ちわたる、襖のかげの、うすぐらき柱のなかより、髪、容、あざやかに、うす〳〵化粧うたる女の十七八と覺しきが、徐かに出でゝわが方に進み寄りぬ。

「御免遊ばせ。」

思ひ懸けず、予はすかし見たり。

「あの……誠に申しかねましたが、外國人だものですから、それに何でございます、あつちは大勢で、頭痛がしてなりませんさうで、少しばかり休まして居りますので、飛んだわがまゝな、申譯もないことですけれど、何卒あしからず、大そうあの、何を、嫌がるんでございます。もう押つけがましい、申しかねますんですが、お煙草を、あのちよいと堪忍なすつて、いえ！もう此室はかまひません。何誰でも御自由にめしあがります。どういたして咎立てをいたすなんて、あなた、飛んでもない、どういたしまして。さつきからちよい〳〵こゝへお入りなさつちや、皆さんがめしあがりますが、何とも申しはしませんけれど、あんまりお氣毒で私が差出がましくお願ひ申すのでございます。皆さん

は二三人づれでお入り遊ばすので、私も極り悪くつて申されませんで、其まんまで見にましたつけが、ついお年もお少し、お一人だもんですからまあ申上げて見ようと存じまして、つい、お背き下さいまして何うもありがたう存じます。飛んだ地獄ですこと、おほゝ。」とばかり立あがるを、予にたゞ默してうなづきたり。

女は其のまゝ彼方に行きぬ。すかし見れば灯の光のいたらぬ隈に、いま一人俯向きて人立てりし、と見るとき其もの歩を運びて、上靴の音なづるやうに近づきながら、

「すみません。」

と正しくいひたり。思はず立ちて、

「ミリヤアド!—」

とばかり進み寄りぬ。ミリヤアドは一足すさりて、おつと此方を見詰めにき。

しばしありて、來て、うつくしき手をのべつ。

予が指はわなゝきぬ。あはれ此上手のかなづるよ。ゝ山子の「なざれの歌」には過ぎたり。

## 翡翠

ミリヤアドは深くもの思ふ目に此方を見て、宇宙の間に心を[illegible]つゝ、

「何故……」

と早や語り出でたり。顔に應ずべすべあらで、しばらく顔を見合へる折しも、ハタ〳〵と手を拍つ音。紳士が談話果てつと思ふに、忽ち戸の外にあわたゞしき跫音して、ゝ山子は急ぎ來て、

「それでは唯今、ちやうど人も揃ひました。君も來たまへ。ミリヤアドお早く。」

と何かしきりに急き居れり。

ミリヤアドは無言なりしが、そのまゝ手袋を脱ぎて打揃へ、衣兜にいれて立直りぬ。

傍より、

「唯今。」

「來たまへ、君。」

といひあへず、ゝ山子はいそ〳〵として出て行きぬ。ミリヤアドの予を見返るを、女は直に顔を見て、

「まあ、あとでおゆつくりおはなしなさいまし、待つてるでせう、あなた。」

うなづくとやがて、出でゝ、あまたの來客と女學生の多人數が二ならび椅子にかゝれるなかを、肅然として横ぎりぬ。其の横ぎる時、わきめもふらで、さら〳〵とさばくとて、右に、左にひだうつ裳の、泥まみれたる人の靴さきに觸るゝもいとはで、たをやかなる姿をやゝ横ざまに、せまき人なかをすりぬけつゝ、祭壇の傍に据ゑたりける洋琴に打むかふより直ちにうたひはじめたり。

衆はみな耳を澄せり。

ゝ山子がてら〳〵とぬれ色見せし天窓の禿、ていねいに撫附けたるが、[illegible]の一振一閃、光澤をおびて、七分三分にあなたこなたに靡いて見ゆ。

曲は讃美歌、九十の譜、歌こそは星月夜の、ナザレに於ける[illegible]七五の調にてものさびしものなれ。予はしば〳〵ゝ山子の口より讀きかされ、其拙なさをば論じたり。

ミリヤアドが聲の清らかなると、あまりに其のしらべの妙なるとに、予は人ごとのそれながら、うら恥かしくもまたあはれなるに、全くは聞くに堪へず、歌はいまだ半ばなるに、席を立ちて再び番人の室に忍び入りぬ。

耳は蔽ひたれど、聲の透れば、なほさやかにぞきこえける。かなではてつ。喝采の聲哄と起りて、かなたには鳴りもやまざるに、ミリヤアドのいたく〳〵つかれし姿は、疾く戸口に歸り來れり。女はハタとあとをば鎖しぬ。

「まあ、ようございました。」

ミリヤアドはといきをつきて、衣兜より手袋を取出し片手をはめながら予を見たり。

予はそのつかれしさま見ゆるが悲しかりき。慰めむとて微笑みて、

「あんな長いのを、よく覺えました。」

「えゝ、二月かゝりました、私頭痛がして、氣分が悪い、よく覺えられませんで、ことわつたの。けれども校長様につかへる務だといつて、堪忍しません。私どうしても覺えられないで、あやまりましたけれども肯きません。頭痛がしました、醉うございました。あたまが重くッて起きられない、無理に勉強して覺えました。上杉さん、恥かしい、あなたは覺えがよくなつたでせう。」

としみ／＼といひてまたといきせり。

予はおもはず憤然として、

「あんな、つまらないものを。」

「え、」

「何です！ 子守唄にもなりやしない。」

いひ放てる胸はすが／＼しくなりぬ。

女は横をむきて手を其の面にあてたり。

ミリヤアドは目を睜りて、されかしきかなたをキッと見たるが、びりゝと手袋を裂いて十二一、

一私は洋琴を十年。一

とて身をふるはして忍び泣きぬ。

やがて端然と姿を正して、

「歸りませう。一緒に、直ぐ、上杉さん。こんな、こんな教會、私は最初から嫌だつたの、日本のおともだちがみんな勸めます。きかないと、もうともだちでないといひますから、寂しいから参りました。あんな歌、それでもみんな立派な歌だといつてだましました。口惜しいこと、そんなものにあはせるための音樂は習はないのを、みんなで、私をなぶつたの。まづい歌、惡い人、もう友達になつていりません、高津さん。」

と女を見て、

「おいで！ 歸りませう、上杉さん、さ。」

と風采凛として、氣色ばみたる面けだから、戸を出づると入り違ひに、ゝ山子はものをかゝへて、であひがしら、うれしげに立迎へ、

「よく忘れないで。結構、贈物をみんなに分けました。貴女の分、番です。はゝゝゝ、うつくしうございますな、誰が贈りましたか知らん。」

と上機嫌の笑ひ高く、一雙の翡翠の剝製なるを、見よがしに、ミリヤアドの胸のあたりに差し寄せて、

「ね、翡翠、翡翠の贈物。」

といふ聲やまず。ミリヤアドはおもてを赤めて、手強く拂ひ退けたれば、渡さむとして手の弛める、籠はハタと床に落ちぬ。

翡翠の位置も、ゝ山子の顏色も、滿場の光景も、ミリヤアドがひやゝかに戸を出づる時みな變れり。變らざるはたゞ、電燈の光と、つやゝかなる、ゝ山子が天窓の髮の分けめとのみ、相照らして依然たりき。

少年の情の激したる、何の考ふることもなく、ゝ山子を尻見も返らで、予は直ちにともなはれて、ミリヤアドの家にゆきぬ。

# 六之巻

## 卯月朔日

ミリヤアドが學院に於ける境遇の、聞くが如きものならむには、予はあまり不遠慮過ぎたり。渠に教を受くるものは、皆予がミリヤアドに對するとおなじものぞと、思ひしは謬なりき。さることとも知らざれば、今朝も新聞讀まむとて行きたる時も、ミリヤアドはなほ臥床にありて心地あしとて起きざるよし、高津のいひたるが、またわがまゝの起りしよとのみ心にも、留めで一室なる額の繪など見まはしなどす。ふと思ひあたりたるは、其日の卯月朔日なりしことなりけり。大方の人は知りてやあらむ、（えぷりる、ぷうる）の當日なるを。よきことゝ思ひ出でたり。懐しきミリヤアドに、いでわれ心ばかりのもてなしをせばやと思ひぬ。

「まだ何うもお寒いぢやございませんか、上杉さん。」

高津はかう聲をかけて、ミリヤアドが臥床に行く。手にせる珈琲茶碗には、温き牛乳を入れたり。戸も襖も冷かなる朝風に濃かなる湯氣の立てるが見ゆ。

「ちよいと、牛乳かい。」

「はあ、何うしたの。」

「まあ少し待つて御覧、僕がね、今好い事をするから、ちよいと、今朝米を磨いだんでせう。」

「磨ぎましたよ。」

と顏を見る。

「あつてくれりや可いが、氣なしだから棄てゝしまつたんでせう、あのね。」

「はあ。」

「磨水はありませんか、米の、何、少しでいゝけれど。」

「へい、何になさるの。」

「何でもさ、少うしありや可いがなあ。」

「見ませう、待つて頂戴。まあ、牛乳をあけてから。」

と行懸る、前途を塞ぎて微笑みつゝ、

「それを飲ましツちまつちや仕やうがないや、耳をお貸し、ね、可いでせう。」

高津は目を瞬りて一足すさり、

「まあ、そんなことを。」

「可いからさ。何他の日ぢやなし、今日のことだもの構ふもんか。」

「それでも何ですよ、頃日は大抵、何や、彼や、苦勞をして居なさるんですから惡うございませう。眞個にさ、そこどころぢやあございませんわね。」

「そんな陰氣なことばかしいつておいでたから不可んだ。一番笑はうのに、可いぢやないかね。」

高津は少し考へたり。

「それも然うですね、皆さんなら可うございませう。惡く取つたつて、腹は立てもしますまい、では。」

「あのね、よく沸かさなくツちや、身體に惡いと大變だよ。」

「は、可うございます。」

牛乳持ちたるまゝ高津は勝手にゆきぬ。予は見送りてひとり笑壺に入りたり。

良ありて予があつらへを齎らしたれば、先づなめて風味を試むるに、鹽を少し加へしなど、其不味いはむ方なきに、思はず打顰みたる予が顏を見て、高津はまた更にきづかひぬ。

「澤山ですわ、まあ止しませうぢやありませ

んか」

「可いよ、可いよ、そつとおし、早くさ。」

と無理に推遣りて其臥床に入るを見るよりはやく、あとを追ひ行き外に立ちて、襖に耳をあてゝ聞きぬ。

寝返る氣勢す。

「然う、上杉さんが煮てくれて。」

といふはミリヤアドなり。わが胸はさすがに躍きぬ。

「あれ。」と叫びて高津の走り退く音したれば、予は慌しく逃げぬ。ミリヤアドには首尾よく粥の藥水を飲ましおほせき。

門口に出づるひまなくて、庭下駄を引懸けざま、背戸の戸をあくる時、寝覺の顔にやつれの見えて、髪少し亂れたるミリヤアドの、身にはゆるやかに夜の衣まとひたるが走り來て、縁側に出でたるが、はれがましき日向の庭には下り立ちあへず、莞爾と笑ひ、予が名を呼びたる、口惜しき狀見えき。

「御機嫌よう。」

といひすてゝ其まゝ歸りぬ。

## みなし兒

人の風説聞きたれば、予は其夜ミリヤアドが家に行く道を、しを/\として通りぬ。かゝるごと/\なりしことは未だ一度もあらざりしを。幾度も繰返して、予はあまり無遠慮なりし、と心咎めしたればなり。

まだ宵なれば、門は鎖さず。跫音も忍ばれつつ勢なく進み入る、其框の戸はなかば閉されたり。さうなくは上りも得やらで、しばし彳み、差覗くに、今朝われ庭口より逃歸りたれば、庭下駄を穿きて、こゝに忘れおきしその穿きものは正しく向をかへて揃へて直されたり。見るよりふと予を待ちつゝあるかの感起りぬ。

急しく呼びぬ。されど低聲にて、

「高津さん、高津さん。」

「はい。」

といふ聲耳許に聞え、ぱつとさす燭の影に紅なる色こそ見えたれ。しと/\とある緋縮緬の長襦袢のみ引絡へる、胸高に扱帶をわがねて、ゆるやかに結びさげ、燭をかゝげたる、白く清けなる腕あらはに、格をもれたる膚の色雪を欺くに燃立つばかりなる紅の照り添ひて、嫋娜に立つたる姿、けやけくあざやかなる美しきもの、ふるまひに面をうたれ、予はものもいひあへず目を瞬りて立ちぬ。

紅なる立姿は、片袖をかざして予に其面を背けつゝ、透し見るが、顔をば少し傾けて、身動もせざりしが、予が呆れ顔可笑しかりけむ、堪へ兼ねたる笑ひ聲、ふつとばかり吹出すより早く、落すやうに燭を置きて、身を返しざま奥の方に走り入りしは、うつくしき外國人なり。

あとに續きて足早に入りぬ。椅子にかけたるミリヤアドは見るよりまた微笑みぬ。

高津は背後より背を叩けり。

「お手柔かなしかへしで、まあ新さんも結構でございました。お驚きなすつたでせう。」

「何うも、實に。」とばかりなりき。

高津は頻に打笑みつゝ、

「何うして新さんを驚かすまでにや、大抵な騒ぎではありません。もう/\一日がゝりの御趣向で、やう/\出來あがつたんでございますわ。待つてゝも急に、見えなさらないものだから、薄着であなた、先生がお困りだらうぢやございませんか。寒いんですもの。ぶる/\震へて在らつしやるのよ。あら、串戯ぢやありません、ほんたうに、貴下風邪をひきますよ。」

ミリヤアドは肩をすぼめて、何とかしけむくづをれし、頤をば襦袢の襟に埋めて居たり。背より輕く羽織らせたる、高津の手を密とおさへて、ミリヤアドは顔をあげぬ。

「まあ待つて下さい、」

予が方に打向ひ、すゞしき目に涙をたゝへて、

「上杉さん、貴下も母樣がありませんか。」

と沈みたる聲にこそ、さはまたわれを泣かするや。さしうつむきてうなづきぬ。

かくいひ出してはミリヤアドが、其母のことを語りつぎて、予を泣かしむるが常なりき。

母はわが國の婦人なりし由。父なる人ゆゑありて其故郷に歸る時、ともなはむといひしかど、大和の地棄て難くて辭みしかば、さりとも强ひかねて、女兒のみ引放ち、洋を渡りて米國に歸りしは、ミリヤアド三歳の年のことなりとぞ。

父年老いてみまかりたれば、たよりなきみなし兒の、たゞかねて懷しとて、一人のみまたわが國に渡りしかど、二十歳あまりは二昔、其人の行方知れず、惡みもし、嘆かれもし、つかひもなくして、大方の財産はほた失へるに、日毎心細くなりゆくに、彌增に戀しく慕はしき母にはめぐり逢はずといふ。おなじ言も血を吐く思は、いつもほとゝぎすの初音とこそ聞け、予は其時も涙ぐみぬ。

## 袖の雨

予が涙ぐみたるを見て、ミリヤアドは、いゝ、あれこといひたる、身の重さに椅子は揺れて、音高し、風もなく朧夜の静かなり。

「一寸、ね、御覧なさい、美しいでせう、きれいだこと。」

と緋の長襦袢の袖を引き、襟のあたりを撫でても見せ、

「御覧なさい、きれいでせう。」

また少し椅子をば寄せぬ。

高津は背より、

「おや、あかん坊のやうですこと、うつくしいきものを見せてすかすぢやありませんか。新さん、をかしいね。」

「何だ、綺麗だよ、——ミリヤアド、それや、高津さんの衣ですか、よく似合ふんだもの。」

「いゝえ、高津さん、澤山衣持つて居ました、みんな、私のために、あの——」

とやゝ激して言ひいづ。予は驚きて高津を見たり。女は慌しく遮りて、

「あら、そんなことをいふもんぢやありません、新さん、うそですよ。」

「いゝえ、ほんたう。みんな私に貸して、もう何にも持つて居ない。可哀相に抽斗はからツぽになりました。」

と寂しく笑ひぬ。

「だつて、其代り私にや合點がゆかないぢやございませんか、ねえ、新さん。」

予は答ふる處を知らず。

「ミリヤアドはお可哀相に、便のない方ですもの。些少はお力になつてあげる人がありさうなものだのに、些ッともない、みんな（なざれの歌）ばかりで、余計な世話までしたがるのですもの。誰がそんなものに世話をして貰ひますもんかね。おなじ國の宣教師なんざ、ちッともしてくれない、わざと困らせて、仕様がなくなつた時分に、何うにかしようとするんださうで、もう此節ぢや寄りつかず、大方此方から泣込むのを待構へて居るのでせう。教會へもあれッきり入らつしやらず、學校は學校でまた何ですッさ、随分ツらうございますッて、私や毎日學校へ入らつしやるのを送るたびに、後姿を見ちや、あゝ、觀物になりにおいでなさると、いつも然う思ひますわ。おうつくしいし、お若いので、何處にかねえ、新さん、先生の樣子がありますし、まるでなぶりものにするんだもの。私や口惜しくツてならないけれど、いま彼處をお留めなすつちや、他に牧人の道はなし、それこそまた（なざれの歌）や宣教師に嫌味なこともおきゝなさらなくツちやなりません。それも何だし、（なざれ）

だつて、意地になつて、新さん、あなたの學資までお手つだひをしないやうになつたぢやありませんか。皆それです。まだまあ名義だけでも先生で在らつしやるのが可いと、私も存じますから、時々もう我慢が出來ないとおつしやるのを、無理に勸めちや出してやります。ほんとに涙が出るんですの。

家へお歸りなすつたつて、それこそ私が届かないから、慰めてあげることも出來ません。御覽なさい、今日はあなたをだますんだツて、朝から元氣よくお騒ぎなすつて、こんななりをなすつてからに、何うも、震へて在らつしやるんです。それでも、何んなにか氣晴になつたでせう。これが新さん、精々なお樂なの、はかないねえ。」

といひかけて、ミリヤアドの背後に立ちつゝ、肩に衣服を被せかけながら、あらためて語を繼ぎ、

「ねえ、ミリヤアドさん、私のことなんざ、何うでも可うござんす。そんなことをおつしやらないで、おもしろいお話でもなさいましな。

一寸、濟みません。皆なくしました、何うしたら可いでせう、心配するけれども仕方がない、高津さんは國から歸れといひます、けれども、私が可哀相だつて歸らないで居てくれます。家で大變怒りました、もう構はないツていつて寄越しました、而して二人とも婦人です、高津さん、私、二人とも婦人です。」

と兩手に胸を掻抱き、

「母樣には逢はれません、もうなくなりましたかも知れません、これは記念です、母樣が着て居ました。」

とうつむきざま、袂を取りて引きのばして、つくゞゝ見たる襦袢の袖に、はら／＼と落涙せり。

## 母上（三）

高津は其背を掻擦りぬ。やゝありて思ひかへせしさまに、あはれなる顔をばあげき。

「上杉さん、貴下の母樣もこんなきもの着て居たでせう、然うでせう。」

ミリヤアドのわけもなきことをいふ、高津とわれ顔を見合せぬ。

母上の紅き手がらかけたる髮結ひて、欄干に倚りたまひしを、目にきざみたるもの、嘗て予に語りしことあり。さる時や、兒なる予が今一年よりも[illegible]うらわかくして、かゝるものも着たまひしなるべし、なつかしき紅の色なるかなと、くもりたる目におぼえけなから、霞のなかの色ぞとばかり、ミリヤアドの姿瞻りぬ。

「これ、然うでせう、矢張着て居たでせう。」

とうら問ふまゝ、或は違ふよしと思ひて頷きぬ。いかなりけむ、予は茶博多の帶のみ目に殘れど、紅き手がらかけたまひしことあり／＼と人のいへば。

予が頷くをみて、ミリヤアドもまた打ちつゞき、

「上杉さん、私、母樣の着物を着ました、母樣、ね。而してあなた、母樣がおありでない。こゝに母樣が居ます。もう泣かないでも可い、私も母樣がありません、私が母樣です、母樣がありますからミリヤアドも泣きません。あなた、ミリヤアドになつて、私が母樣になつて、あなたが上杉さんで、私が其母樣で、而して遊びませう。今晩は四月一日、あなたは今朝私をだましました。こんな母樣、あなたは厭でせう、けれども、だまされるが可い、らそならば構ひません。」

母ぞといふより、血の色其頬に[illegible]、目の中さ[illegible]、眉動きて、肩を震はし[illegible]と

立ちて、椅子をはなれ、引寄せて、予が手を取りたり。

高津は莞爾と笑ひながら予がつむりを撫でぬ。

「大きな坊やが泣蟲だねえ、どれおめざを持つて來てあげませう。」

とまた打笑ひて勢よく室を出でたり。

ミリヤアドは太く激せる狀にて、つく〴〵と予が顔をみまもりぬ。

「ミリヤアド。」

と呼びつゝ、ミリヤアドは、あはれなる其兒の額に接吻せり。つめたき髮は予が頰にふれて、またゝえゝ、柔かなる其白き胸は躍りたる予が動悸をおさへぬ。

跫音したれば身を分てり。

## 坂の下

高津は菓子皿を捧げ持ちて來り、卓子の上に置きて、いざと一勸めしが、予のふるへたれば取らで差置きぬ。

「めしあがれな、をかしな坊やだこと。ほゝほ、」

ともてなし顔に、一つ取りてさしよする、拳ばかりの大きさなる、名は知らねど辭みも得で、手に取り一口をつけたるに、意外なる舌觸を、わが唾かわきつ、とのみ怪しきまで、いま一齒ぞかけたる。

「おや!」と思はず叫びぬ。

「好い氣味!」とミリヤアド手を拍きて笑ふ。

「それ御覽なさい、やう〳〵敵を取つてあげた、ミリヤアドさん、可うございましたねえ。」

「あゝ。」といふ面はれやかなり。

「そりやもう私といふ、助太刀がついて居るんですもの。新さん、綿の餡といふものは新發明ですが、いかゞなものでございますね。何うでございました。折角、ミリヤアドさんと二人で拵へてあげたの、大抵な御馳走ぢやありませんよ、澤山おあがんなさいまし、まだ、いくらでもございます、何うです、もう一つ、たつた一つめしあがれな、いゝえ、餘所ではなし、御遠慮には及びませんよ、おほゝ。」

と獨悦に入る。

「御馳走様、もう澤山。」

「いゝえ、それがあなた、さうおつしやるのが餘計な御遠慮と申すものでございます。何の書生さんが菓子をぱくつくのは當然でございますわ。さあ、めしあがれ、よう、おあがりなさいまし、な、おゝ、嬉しい。」

一[illegible]

まあ、人が折角志をお勸め申すものを、そんな御挨拶ッちやあるもんぢやございません。お氣には入りますまいけれど、何うぞ召食つて下さいましな。」

とわざとらしく揉手をしながら、高津の嵩にかゝりたる、予の困じたる、二人の狀をば、つく〴〵と見たるミリヤアドの晴々しきさまに引かへて、然も憂はしげに、聲も沈み、

「もう堪忍、澤山です、可哀相。」

といひかけて、くはせものゝ菓子の一個を手に取りて、ものをもいはで視めしが、ふるふ手さきの痩せたるを、予が肩にかけてうつむき見つゝ、

「坊や、眞個にこればつかり、さうでない御馳走をしたくツても、今日は出來ません。私貧乏、母様、意氣地がない、堪忍して、上杉さん。」

と悄れたる目の中に露を宿し、思入りたる狀なりしが、何とかしけむ、眉根の顰むと見えつ。苦と叫び、胸をおさへて、よろ〳〵と倒れかゝる、長椅子に足を投げつゝ、腰を捩りて身を絞り、片手を卓子につきて、掌を口にあてし、はんけちの裏透す、血汐の紅、眞白き指を洩れて見ゆるに、啊呀とばかり縋り

寄る、高津も顏の色をかへたり。唯一度のそれたから、多量の咯血に弱り果てゝ、綿の如くなりたる身體を、搔抱くやらにする、予も夢心地に手を添へて、助けて臥床に入らしめたる、素人の二人か手して、水よ藥よといふ容體かは。

高津はといきして呟く如く、

「咳はなさるし、顏の色はお惡いし、こんなことでもなければ可いと思つて居たに、」

と肩をうるますも心細さ。

「何處、醫者を、醫者は、」といふのみ。

「いゝえ、あなたが行らつしやつても一寸は分りません。近うございますから一走り行つて參りませう、お賴み申します。」

と早や帶〆を引〆むる。

「それでも夜分たから。」

「構ひますもんですか、其上からいふ時は、男の方が危なうございます。新人も何となにか、あなたを側にして居ませう。洋燈をあかるくしてあげて下さい。つい一走り、可うございますか、新さん賴みました。」

といひずてに、忽ち門の外に跫音聞ゆる、四角あたり犬の聲、うらかなしげに吠え出して、表、裏町、坂の下、一齊にうなりかはす、山の手の大路夜更けたり。

## 神樂坂の唄

一里は、神樂に明けて、神樂坂。
玉も甍も、朝霞、
柳の軒端、梅の門。
桃と櫻が名を並べ、
江戸川近き春の水、山吹の里遠からず、
築土の松に藤咲けば、
ゆかりの君を仰ぐぞえ。
牡丹屋敷の紅は、袂に、褄にほのめきて、
戀には心あやめ草、
ちまき參らす玉づさも、
いつか人目の關口なれど、
漏るばかり瀧津瀨の思を誰か妨げむ。
蚊帳にも通ひ、飛ぶ螢、
袖に濡れよ、青簾。
あはぬ晩に見る夢は、
いつも逢坂、輕子坂、
重荷も嬉し肴町。
その芝肴、意氣張は、
たとひ火の中、水の底。
縞で首尾よく揚場から、
[illegible]の町に道行の、互の姿しのべども、
靡きもつるゝ萩薄、
色に露添ふ御緣日。
毘沙門樣は守り神。
毘沙門樣は守り神。
結ぼる胸の帶とけて、
空も小春の[illegible]、
雁の翼のかけひなた、
比翼の紋こそ嬉しけれ。

——鏡花全集卷十五「唄」より

## ゆふ月

白い花か、姫百合に、
紅筆そめて、戀とかく。
うそか、實か、夕月夜、
どうなと
露に寐たがよい。

——鏡花全集卷十五「唄」より

# 誓之巻

## 團欒

後の日のまどゐは樂しかりき。

「あの時は驚きましたつけねえ、新さん。」

とミリヤアドの顔嬉しげに打まもりつゝ、高津は予を見向きていふ。ミリヤアドの容體はおもひしより安らかにて、夏の半一度その健康を復せしなりき。

「高津さん、ありがたう。お庇樣で助かりました。上杉さん、あなたは酷い、酷い、酷いものを飲ませたから。」

と優しきされど邪險を裝へる色なりけり。

「心なき高津の何をか興ずる。

「ねえ、ミリヤアドさん、あんなもののお飲ませだからですねえ。新さんが惡いんだよ。」

「困るねえ、何も。」と予は面を背けぬ。ミリヤアドは笑止がり、

「それでも、私は血を吐きました、上杉さんの飲ませたもの、白い水です。」

「いゝえ、いゝえ、血ぢやありませんよ。あなた血を吐いたんだと思つて心配して在らつしやいますけれど血だもんですか。神經ですよ。あれはね、あなた、新さんの飲ませた水に着て在らつしやつた襦袢のね、眞紅なのが映つたんですよ。」

「こぢつけるねえ、酷いねえ。」

「何のこぢつけなもんですか。眞個ですわねえ。ミリヤアドさん。」

ミリヤアドは莞爾として、

「何うですか。ほゝゝ。」

「あら、片贔屓を遊ばしてからに。」

と高津はわざとらしく怨じ顔なり。

「何だつて然う僕をいぢめるんだ。あの時だつて散々酷いめにあはせたぢやないか。亂暴なものを食べさせるんだもの、綿の餡なんか食べさせられたのだから、それで煩ふんだ。」

「おや〳〵飛んだ處でね、だつてもう三月も過ぎましたぢやありませんか、疾くにこなれてさうなものですね。」

「何、綿が消化れるもんか。」

ミリヤアド傍より、

「喧嘩してはいけません。また動悸を高くします。」

「ほんとに串戲は止して新さん、きづかふほどのことはないのでせうね。」

「いゝえ、わけやないんださうだけれど、轉地しなけりや不可ツていふんです。何、症が知れてるの。轉地さへすりや何でもないつて。」

「そんならようござんすけれど、而して何時の汽車だッけね。」

「え、もうそろ〳〵。」

と予は椅子を離けて立ちたる。

「ミリヤアド。」

ミリヤアドは頷きぬ。

「高津さん。」

「はい、ぢや、まあいつていらつしやいまし、もうねえ、こんなにおなんなすつたんですから、ミリヤアドのことはおきづかひなさらないで、大丈夫でござんすから。」

「それでは。」

ミリヤアドは衝と立ちあがり、床に二つ三つ足ぶみして、空ざまに手をあげしが、勇ましき面色なりき。

「こんなに、よくなりました。上杉さん、大丈

大、騒げて見ませう。門まで、一

といひあへず、上靴の片褄掻取りあげて小刻に足はやく、颯と芝生におり立ちぬ。高津は見るより、

「あら、まだそんなことをなすツちやいけません。いけませんよ。」

と呼び懸けながら慌しく追ひ行きたる、あとよりして予は出でぬ。

木戸の際にて見たる時ミリヤアドは呼吸忙しくたゆげなる片手をば、垂れて高津の肩に懸け、頭を少し傾け居たりき。

## 石段

―いゝめをみせたんですよ、だからいけなかつたんです。あの當時しばらくは何うといふものでせう、其はね、眞個に嘘のやうに元氣がよくおなんなすつて、肺病なんてものは何でもないものだ。こんなわけのないものはないツてつちや、室の中を駈けてお歩行きなさるぢやありませんか。さうしちやあね、「高津さん、歌をうたつて聞かせようッてあの、なざれの歌)をね、人の厭がるものをつかまへてお唄ひなさるの。唄つちや、(あゝ、こんなぢや洋琴も役に立たない)ッて寂しい笑顔をなさるとすぐ、呼吸が苦しくなつて、顔へ血がのぼつて來るのだから、そんなことをなすつちやいけませんてツて、いつでも廢さしたんですよ。

しかしね、こんな鹽梅ならば、まあ結構だと思つて、新さん、あなたの處へおたよりをするのにも、段々快い方ですからお案じなさらないやうに、然ういつてあげましたつけ。

さうすると、つい先月のはじめにねえ、少しいつもより容子が惡くおなんなすつたから、急いで醫者に診せましたの。はじめて行つた時は、何でもなかつたんですが、二度目ですよ。二度目はね、新さん、一緒にお醫者樣の處へ連れて行つてあげた時、まあ、何うでせう。」

高津はぢつと予を見たり。睫にあせたる掌の指のさきを動かしつゝ、

―彼處の、あればかりの石壇にお弱んなすつて、上の壇が一段、何うしてもあがり切れずに呼吸をついて在らつしやるのを、抱いて上げた時は、私も胸を打たれたんですよ。

まあ可い、可い！　こゝを的に取つて看病しよう。こん度來るまでにはきつと獨でお上んなさるやうにして見せよう。さうすりや素人目にも快くおなんなすつた解りが早くツて、結句張合があると思つたんですが、もうお醫者樣へ行らつしやることが出來たのは其日ツ切。新さん、矢張いけなかつたの。

お醫者樣はとてもいけないつて云ひました、新さん、私やぢつと堪へて居たけれどね、傍に居た老年の婦人の方が深切に、

(お氣の毒樣ですねえ。)

といつて呉れた時は、もうとても我慢が出來なくなつて泣きましたよ。藥を取つて溜へ行つちや、笑つて見せて居たけれど、どんなに情なかつたでせう。

樣子に見せまいと思つても、ツイ胸が迫つて來るもんですから、合乘で歸る道で私の顏を御覧なすつて、

(何だねえ、何うしたの、妙な顏をして。)

と笑ひながらいつて、憎らしいほどちやんと澄して在らつしやるんだもの。氣分は確だし、何にも知らないで、と思ふとかはいさうで、私やかはいさうで。

今更ぢやないけれど、こんな氣立の可い、優しい、うつくしい方がもう亡くなるのかと思つたら、ねえ、新さん、いつもより百倍も千倍も、優しい、美しい、立派な方に見えたらちやありませんか。誂へて拵へたやうな、かういふ方がまたあらうか、と可惜もので。可惜もので。

大事な姉さんを一人、もう、何うしようと、我慢が出來なくなつてね、車が石の上へ乘つた時、私やそッと抱いて見たわ。」とぞ微笑みたる、目には涙を宿したり。

「僕は何だか夢のやうだ。」

「私だつて眞個にやなりません位ひどくおやつれなすつたから、ま、今に覧てあげて下さいな。

　電報でもかけようか、と思つたのに。よく早く出京て來てね。始終上杉さん、上杉さんッていつて在らつしやるから。何んなにか喜ぶでせう。しかしね、急にまたお逢ひなすつちや障するから、そッとして、いまに目をおさましなすつてから私がよくさういつて、落着かしてからお逢ひなさいましよ。馬車やら、汽車やらで、新さん、あなたもお疲れだらうに、すぐこんなことを聞かせまして、もう私や申譯がございません。折角お着き申して居ながら、何うしたら可いでせう、堪忍なさいよ。」

## 菊の露

「もう〳〵思入こゝで泣いて、ミリヤアドの前ぢや、かなしい顏をしちやいけません。そッとして置いてあげないと、お醫師が見えて、私が立廻つてさへ、早や何か御自分の身體に異つたことがあるのかと思つて、直に熱が高くなりますからね。

　それでなくッてさへ熱がね、新さん四十度の上あるんです。少し下るのは午前のうちだけで、もうおひるすぎや、夜なんざ、夢中なの。お藥を頂いて、それでまあ熱を取るんですが、日に四度ぐらゐづゝ手巾を絞るんですよ。酷いぢやありませんか。それで居て痰がから咽喉へからみついてゝ、呼吸が塞ぐんですから、今ぢや、ものもよくは言へないんですね、私に話をして聞かしてと始終さういつちやあれ、詰らないことを喜んで聞いて在らつしやるの。

　何んなにか心細いでせう。寢たッきりで、先月の二十日時分から寢返りさへ容易ぢやなくッて、片寢でねえ。耳にまで床ずれがしてますもの。夜が永いのに眠られないで惱むのですから、何んなに辛いか分りません。話といつたつてねえ、新さん、酷く神經が鋭くなつてゝ、もう何ですよ、新聞の雜報を聞かしてあげても泣くんですもの。何かねえ、小鳥の事か木の實の話でもッておつしやるけれど、何ういつていゝのか分らず、藥がおッこちるたつて、私や縁起が惡いもの。いひやうがありません。それでなければ、治つてから片瀨の海濱にでも遊びにゆく時の景色なんぞ、月が出て居て、山が見えて、海が凪いで、みさごが飛んで、さうして、あゝするとか、かうするとかいつて、聞かせて、といひますけれど、ね、新さん、あなたなら、あなたならば男だからいへるでせう。いまにあなた章魚に灸を据ゑるとか、蛸に握飯をたべさすとかいふ話でもしてあげて下さいまし。私にや、私にや、何うしてもあの病人をつかまへて、治つて何うしようなんていふことは、情なくッて言へません。」

　といふ聲もうるみにき。

「え、新さん、はなせますか、あなただつて困るでせう。耳が遠くおなんなすつたくらゐ、茫として在らつしやるのに、惡いことだと小さな聲でいふのが遠くに居てよく聞えますもの。

　せい〳〵ッてね、痰が喉にからんでますのが、いかにもお苦しさうだから、早く出なくなりますやうにと、私も思ひますし、病人も痰を咯くのを樂みにして在らつしやいますがね、果敢ないぢやありませんか、其が、血を咯くより、なほ、酷く惡いんですとさ。

　それで居てあがるものはといふと、牛乳を少しと、鷄卵ばかり。熱が酷うござんすから舌が

乾くツて、とほし、水で濡して居るんですよ。もうほんたうにあはれなくらゐおやせなすつて、菊の露でも吸はせてあげたいほど、小さく美しくおなりだけれど、ねえ、新さん、さうしたら身體が消えておしまひなさらうかと思つて。」
といひかけて咽泣き、懐より桃色の絹の手巾をば取り出でつゝ目を拭ひしを膝にのして、怨めしげに瞻りぬ。
「新さん、手巾でね、汗を取つてあげるんですがね、そんなに弱々しくおなんなすつた、身體から絞るやうぢやありませんか。眞個に冷々するんですよ。拭くたびにだん／＼お顔がねえ、小さくなつて、頸こ處が細くなつてしまふんですもの、ひどいねえ、私やお醫者様が、口惜くツてなりません。
だつて、はじめツから入院さしたつて、何うしたつて、いけないツて見離して居るんですもの。今ン處ぢや唯もう強いお藥のせゐで、やうやう持つて居ますんですとね、ね、十滴づゝ。段々多くするんですツて。」
青き小さき瓶あり。取りて持返して透したれば、流動體の平面斜になりぬ。何ならむ、この藥、予が手に重くこたへたり。
ぢつとみまもれば心も消々になりぬ。

其口の方早や少しく減じたる。其をば命とや。あまり果敢なさに予は思はず呟きぬ。
「たツたこれだけ、百滴吸つたらなくなるでせう。」
「いえ、また取りに參ります……」
といひかけて顔を見合せつゝ、高津はハツと泣き伏しぬ。あゝ、惡きことをいひたり。

## 秀を忘れよ

「餘り何だものだから、僕はつい、高津さん氣にかけちや不可い。」
「いゝえ、何にもそんなことを氣にかけるやうな、新さん、容體ならいゝけれど。」
「何うすりや可いのかなあ。」
唯といきのみつかれたる、高津はしばしものいはざりしが、
「何うしようにも、しやうがないの。唯ねえ、せめて安心をさしてあげられりや、ちつとは、新さん何だけれど。」
と予が顔を打まもれり。
「其が何うすりやいゝんだか。」
「さあ、母様のことも大抵いひ出しはなさらないし、他に、別に、かうといつて、お心懸りもおあんなさらないさうですがね、唯ね、始終心配して在らつしやるのは、新さん、あなたの事ですよ。」
「僕を。」
「ですから何うにかして氣の休まるやうにしてあげて下さいな、心配をかけるのは、新さんあなたが、惡いんですよ。」
「え。」
「あのね、始終さういつて在らつしやるの。（私が居る内は可いけれど、居なくなると、上杉さんが何んなことをしようも知れないツて。」
「何を僕が。」
予は顔の色かはらずやと危みしばかりなりき。背はひたと汗になりぬ。
「いゝえ。眞個でせう、眞個に違ひませんよ。それに違ひないお顔ですもの。私が見ましてさへ、何ですか、いつも、もの思をして、うつらうつらとして在らつしやるやうぢやありませんか。誠にお可哀相な樣ですよ。ミリヤアドも然らいひましたつけ。（私が慰めてやらなければ、あの兒は何うするだらう）ツて。何もね、祕密なことを私が聞かうぢやありませんけれど、なりますことなら、ミリヤアドに安心をさしてあげて下さいな。え、新さん、（私が居さへすりや、大丈夫だけれど、何うも案じられてと

おつしやるんですから、何とかしておあげなさいな。あなたにや其の工夫があるでせう、上杉さん。」

名を揚げよといふなり。家を起せといふなり。富の市を憎みて殺さむと思ふことなかれといふなり。ともすれば自殺せむと思ふことなかれといふなり。詮ずれば秀を忘れよといふなり。其の事をば、母上の御名にかけて誓へよと、常にミリヤアドのいへるなりき。

予は黙してうつむきぬ。

「何もね、いまといつていま、あなたに迫るんぢやありません。何うぞ悪く思はないで下さいまし。しかしお考へなすつてれ。」

また顔見たり。

折から客人ある扉開ゆ。高津は目くばせして起にゆきぬ。

良ありて、

「ぢや、お逢ひ遊ばせ、上杉さんですよ、可うございますか。」

といふ声しき。

「新さん。」

と聞えたれば馳せゆきぬ。唯見れば次の室は片付きて、畳に塵なく、床花瓶に菊一輪、いつさしすてしか凋れたり。

## 東枕

襖左右に開きたれば、厚衾重ねたる見ゆ。東に向けて臥床設けし、枕頭なる皿のなかに、蜜柑と熟したる葡萄と装りたり。枕をば高くし、病める人は頭埋めて、小やかにぞ臥したりける。

思ひしよりはほ瘠せたり。頬のあたり太く細りぬ。真白うて玉なす顔、両の瞼に血の色染めて、うつくしき、気高さは見まさりたれど、あまりおもかげのかはりたれば、予は坐りもやらで、襖の此方に立みつゝ、みまもりてそれをミリヤアドと思ふ胸は先つふたがりぬ。

「さ、」

と座蒲団差よせたれば、高津とならびて、しをと座につきぬ。

顔見ば語らむ、わが名呼ばれむ、と思ひ設けしはあだなりき。

寝返ることだに得せぬ人の、片手の指のさきのみ、少しく衾の外に出したる、其の手の動かむともせず。

瞳キと据りたれば、わが顔見られむと堪へずうつむきぬ。ミリヤアドとばかりもわが口には得出でざなむ、強ひて微笑みしが我ながら寂しかりき。

高津の手なる[illegible]色の[illegible]の手巾は、はらりと掌に置かれて、靜にミリヤアドの目のあたり拭ひたり。

「汗ですよ、熱がなかなかございますから。」

頬のあたりをまた拭ひぬ。

「分りましたか、上杉さん、ね、ミリヤアド。」

「上杉さん、」

極めて低けれど忘れぬ声なり。

「こんなになりました。」

とややありて切なげにいひし一句にさへ、呼吸は三たびぞ途絶えたる。蒼空の日光さして、障子にすきて見ゆるまで、空蒼く晴れたればこそ悲くてあれ、暗くならば影となりて消えもや失せむと、見る目も危く寒れしかな。

「切ならござんすか。」

ミリヤアドは夢見る顔なり。

「耳が少し遠くたつて在らつしやいますから、そのおつもりで、新さん。」

「切なうござんすか。」

頷く状なりき。

「まだ可いんですよ、晩方になつて寒くなると、あはれにおなんなさいます。其上熱が高くなりますからまるで、現。」

と低聲にいふ。かゝるものをいかなる言もて慰むべき。果は怨めしくもなるに、心激して、

「何うするんです、ミリヤアド、もうそんなで居て何うするの。」

聲高にいひしを傍より目もて叱られて、急に、

「何ともありませんよ、何、もう、いまによくなります。」

いひなほしたる接穂なさ。面を背けて、

「治らないことはありません。治るよ、高津さん。」

高津は努よく、

「はい、それはあなた、神様が在らつしやいます。」

予はまた言はざりき。

### 誓

月凍てたり。大路の人の跫音冴えし、それも時過ぎぬ。坂下に犬の吠ゆるもやみたり。一しきり、一しきり、檐に、棟に、背戸の方に、颯と來てさら〳〵さら〳〵と鳴る風の音。此凩！病む人の身を如何する。ミリヤアドは衣深く引被ぐ。懲は予と高津とに寝よとてこそするなりけれ。

かゝる夜を伽する身の、何とて二人の眠らるべき。此方も唯眠りたるまねするを、今は心安しとてやミリヤアドのやゝ時すぐればソと顔を出して、あたりをば見まはしつゝ、いねがてに明を待つ優しき心づかひ知りたれば、其夜もわざと眠るまねして、予は机にうつぶしぬ。

搔巻をば羽織らせ、毛布引かつぎて、高津は予が裾に背向けて、正しう坐るやう膝をまげて、横にまくらつけしが、二つ三つものいへりし間に、これは疲れて轉寐せり。

何なりけむ。ものともなく膚あはだつに、ふと顔をあげたれば、ありあけ暗き室のなかにミリヤアドの雙の眼、はきとあきて、わが方を見詰め居たり。

予が見て取りしを彼方にもしかと見き。ものいふ如き瞳の動き、引寄するやうに思はれたれば、搔巻撥ねのけて立ちて進み寄りぬ。

近よれといふ色見ゆ。

やがて其前に予は手をつきぬ。あまり氣高かりし狀に恐しき感ありき。

「高津さん。」

「少し休みましたやうです。」

「さう。」

とばかりいきをつきぬ。良久しうして、

「上杉さん、あなた何うします。」

予は思はずわなゝきぬ。

「何を、ミリヤアド。」

「私なくなりますと、あなた何うします。」

淚ながら、

「そんなことおつしやるもんぢやありません。」

「いゝえ、何うします。」と強くいへり。

「そんなことを、僕は知りません。」

「知らない、いけません、みんな知つて居る。かはいさうで、眠られません。眠られません。上杉さん、私、賴みます、秀、秀。」

予は頭より氷を浴ぶる心地したりき。折から風の音だもあらず、有明の燈影いと闇に、ミリヤアドが目に光さしたり。

「秀さんのこと思はないで、勉強して、ね、上杉さん。」

予は伏沈みぬ。

「かはいさう、かはいさうですけれども、私、こんな、こんな、病氣になりました。仕方がない、あなた何うします。かはいさうで、安心して死なれません。苦しい、苦しい、かはいさうと思ひませんか。私、あなたをかはいがりました。私を、私を、かはいさうとは思ひま

せんか。―

一しきり、また凩の戸にさはりて、ミリヤアドの顔蒼ざめぬ。其眉顰み、唇ふるひて、苦痛を忍び瞼を閉ぢしが、十分時過ぎつと思ふに、ふとまた明らかに睜けり。

「背きませんか。あなた、私を何と思ひます。」

と切なる聲に怒を帯びたる、りゝしき眼の色恐しく、射竦めらるゝ思あり。

枕に沈める横顔の、あはれに、貴く、うつくしく、氣だかく、清き芙蓉の花片、香の煙に消ゆよとばかり、亡き母上のおもかげをば、まのあたり見る心地しつ。いまはハヤ何をかいはむ。

「母上。」

と、ミリヤアドの枕の許に僵れふして、胸に縋りてワッと泣きぬ。

誓へとならば誓ふべし。

「何卒、早く、よくなつて、何にも、ほかに申しません。」

ミリヤアドは目を塞ぎぬ。また一しきり、また一しきり、繞むが如き戸外の風。

予はあわたゞしく高津を呼びぬ。二人が掌左右より、ミリヤアドの胸おさへたり。また一しきり、また一しきり、大空をめぐる風の音。

―ミリヤアド。―

―ミリヤアド。―

目はあきらかにひらかれたり。また一しきり、また一しきり、夜深くなりゆく凩の風。

神よ、めぐませたまへ、憐みたまへ、亡き母上。

## まる髷

螢がいうた。
　やみの夜の
しよぼしよぼ雨の
　紺蛇目傘。
そつととまつて覗いたら
　青い手柄が見えたぞえ。

――鏡花全集巻十五「唄」より

## 野路の雨

野路のむら雨
　さつとして、
雲のゆきかひ
　さだめなや、
待宵草と、夕顔と、
　どちらの宿へ泊らうか。
地藏さん
　をしへて下さんせ。

――鏡花全集巻十五「唄」より

# 辰巳巷談

## 豆腐長屋

### 一

「車夫、其半ばかり橋を渡つたらう。」

腕車には紺地の單衣を着た、二十一二の、色の白い、細面の少年が乘つて、膝の上に兩手をかけて、手に扇子を構へ、乾とした品の好い姿で、恍惚して居る。いま橋を一個渡つたとき、早船が一艘、十四五人の乘合かで、上の方から下つて來たが、月影の中に團扇を持つたのがあり、また婆が蔽を被つたのもあり、いづれも水面に影を流したやうな月に、少し曇つた白い衣服。

其が不圖橋の下に入つて消える、と鴉が鳴いて、遙かに飛んで去つた海の方には霧がかゝつて、ぼんやり白けて居て、渺として果のないなかに、ちらりほらりと松の樹が立つて居る。ずツと近く、棚棒に架れ合ふばかりの處、路ばたの砂地に船が引上げてある。十四五艘も並んで居よう、其中に攫んでた舳が烟突のやうに高く空を指して、船との間、處々に掛けてある薦小屋の屋根に乘つかつてゐるやうなのが月明にあり／＼と見える。前途を寥々と環つた空の、低い處に、小さく群つた星の斷間に、白芙蓉の花が風にひら／＼と動いてゐるやうな蒼い色は、洲崎の電燈の光である。

腕車は橋の勾配を辷つて、平地へずる／＼とはずんで下りた。蠣殻をばり／＼と碎いて、片碎の白いのを二ツ三ツ路傍へ蹴散らした。

車夫は反りかへるやうに腰を伸して、

「大橋を渡りましてから、左樣ですな、十餘りもございませうか。八幡樣から此方ばかりでも、五ツ六ツは渡りました。」

「さうか、橋ばかり澤山ある。」と少年は車の上から川を見下ろして、且つ船を見上げた。

「旦那、何の邊でございますね。」

「何でも此邊だらう、何處かで聞いて見るが可いや。」

この路傍の砂地を、奥へ引込んだ處に、茅屋が一軒、戸障子をあけ放したのが、蚊遣の煙で朦々と燻つた暗い中に幽に見える。

車夫は透しながら片手で汗を拭いた。

「少々ものを伺ひたいんでございますが。」

默つて返事をしない。

「御近所に……」といつて車夫は振返つた。

「旦那。」

「平田。」

「えゝ、其平田さんてえのはありませんかい。」

女の聲で、

「存じませんよ。」

「何うも。へい。」と腕車を引出す、車輪がくる／＼とまはる中から、少年は振返つて、其茅屋の奥を覗込む、と煙の中に團扇があつてひら／＼と動いた。其團扇に絡はつて、絲の亂れたやうに蚊遣が靡いて分れた——其時——枕頭に年の少い婦人が悄然坐つて、病人と思はれる、其母親らしい婆さんが鉢巻をして、側向いて寢て居る、と咄嗟に見て取つた。

少年は兩の手に扇の要を確と握つて、肩を縮うして首垂れたが、何と思つたか聲を懸けて、

「車夫、分りさうもないぢやないか。」

「何わけはありません。モ一度其處らで聞いて見ませう。」

「知れなきやあ可や、歸らうか。」

「念のためでさ。えゝ、畜生。」

と野良犬を呵して、皮坊よ、喧嘩へ出かける。

## 二

「親方、ちよいともの（を）伺ひたうございますが。」

「何だね、」といつたのは、頬被の尖つた、胸の毛い、肥つた男で、帯も緊めず、浴衣を羽織つて、納涼臺の上へ、片足をだらりと下げて、團扇使をして居る。おなじ納涼臺に、二十二三から四五までの逞しい壮佼が未だ三四人ならんで掛けて居た。

「入舟町の…番地は此邊でございませうか。」

「むゝ、此處だよ。」

片側は胡瓜畠で、ちやうど其納涼臺を置いてある背後は、まばらな竹垣で、片側には長屋を切つたやうな、眞四角な長屋が五六軒一列にならんで、戸を閉めて寝静まつた處があり、軒に風鈴の鳴つて居る處もある。路地の口は一間にも足りないから、腕車を容むと支へさうな。

「それでは平田さんといふのを御存じではございませんか。」

「平田だえ。何うだ知つてるか、」と件の胸赤は顧て横を見た。

「平田、分らねえな。」と隣座の若いのがいつた。

「青山に行た、」とまた其處に居たのが聞く、車夫は振返つて客を見ると、少年は帽を取つて、

「失禮、何をして居るんですか、平田といふので。」

「あ、そりや何でせう、」

突然冴えた聲がして、直ぐ軒下に釣つてある、低い蚊帳を、白い手でかゝげて出たのは、結髪の年増である。白金巾を細く腰に捲つたまゝ、肌には縁もつけない、素裸體で、片膝立てゝ蚊帳の外に潜つて出て、

「三八さんの處でせう、それはね、」といひながら、足をおろすと、直目駒下駄を突懸け穿、裸身のまゝで路地へ出た。

「直ぐね、其壁ン處を突當りますとね、井戸がありますからね、井戸についてモ一ツ路地をお入りなさい、左側の三軒目のお長屋ですよ。」

「向うの蔵ですか、」と車夫は提灯をあげて、路地の突當の瓦屋根を仰いでいつた。

裸體の婦人はまた近寄つて、

「蔵から曲るんですよ。さうすると井戸がありますからね、井戸から三軒目さ、左側よ。」

とききへ立つて指しをする。

「御深切樣に、難有う存じます。さやあ旦那、」

默つて少年は頷いた。

轅に曳いてがら／＼と音がすると、ハヤ突當つて腕車は見えなくなる。

「姉え、何だな。」と見送つて胸の赤いのが聞いた。婦人は路地の中に立つて、腕車の行つた方を見て居たが、呼ばれて、身を捻つて、莞爾して、

「ほら、あの一件が居る内さ。」

「何だ、あの假物か、假物。」と、降つて來たこの狼狽加減で、若いのは棒のやうになつて、納涼臺を離れて突立つ。

「何だ、何だ、一件だね、假物だねッて、何も分らねえ。」とまた一人がいつた。突立つたのは思入ありといふ身振をして、

「素ばらしい奴よ。」

「むゝ、掃溜の鶴か、此頃の。さうか、あれか、あの内の、ふむ、」といつて頷いて居る。

「六さん、何だとえ、掃溜の鶴だとえ。」

「さうよ、溜池の蚊ぢやあねえ。」

「御樣、何うせ私どもは掃溜の南瓜でございます。」

これはまた意外だつたから、飯も出ない顔をして眼を瞪つて居た、六は心着いて苦笑をした。

「なにもそんなに氣をまはさなくツたつて可いやね、そりやね、お前も掃溜だけれど…其…」

「矢張掃溜ぢやありませんか。」と婦人は笑ひ出した。

「そりやさうと、今来たなあ何だらう。」

「蟲だらう。」と、立つてる若いのはいつた。

「生白い蟲ぢやあねえか。」

「蝶だらう、いや夏蠶だらうと、わい〳〵いつてる内、胸の赤いのはぴしやりと胸へ来た蚊を叩いて、

「こすめ、巫山戯たことを！」忌々しいといふ顔色。

三

腕車は藏の壁に添つて左へ曲ると、果して總井戸があつた。少年は前屈になつて四邊を見たが、

「下りよう、下りよう。」とおさへるやうに聲を懸ける。輪のまはる發奮だから、ぐる〳〵と引込んで、がつたり路地口の狹い處へ嵌まつたやうになつて止まる。

と、二條格子の膝懸を、片手で掴んで掻遣りながら、蹴込へ眞直に立つて、少年はひらりと下りて、梶棒を跨いで路地へ出た。

拔裏の砂地に建てゝある車止の、香の圖を略したやうな棒杙を潛つて、半襦袢に湯卷をした白い扮裝の婦人が一人、目笊を小脇にして出て来たので、少年は一足後へ引いて身を開き、轅頭を取つた姿で、泥除に手をかけながら、身體を附着けて透かして昵と見た。

車夫は提灯を片手にして、いま少年が掴み落した膝懸を取つてはたいて居る。婦人は路地の中ほどで立停まつて此方を覗つたやうであるが、其まゝ赤黒い灯が幅一尺ばかり洩れて見える一枚はづした戸の内へツイと入る、同時に固くなつて立つてた少年は、ツカ〳〵と歩行き出して、件の長屋の前へ行つて、ちよいと覗くと、まだ内へは入り切らないで框に立つてた婦人が、邪慳に眦を釣つて、鋭い瞳を寄せて、ツヽケンドンな、沈んだ聲で、

「何です。」

「いゝえ。」

といつた切、少年はふいと通抜けて、ずツと行き、あの車止の杙の處で立停まる、と婦人は、手荒く戸を鎖してしまふ。

路地は暗くなつて、廂へ月あかりが薄くさし込む。片側に並んだ幾軒の長屋は、盡く寂寞として、木地の亂暴な、節穴だらけの門の戸が、唯一枚の板のやうで、處々表戸の合せ目が黒い筋を引いて、間をおいちやあ、順序よく縦に並んで居る。其が長屋の數であらう。

車夫は提灯を左右に振つて、立停まつては仰いで見、立停まつては仰いで見、一軒、二軒、三軒と順々、門札を見て歩行いたが、今戸を閉めて引込んだ其隣家の前に立つて、身を反らしながら仰向いて、思切つて提灯を高くさしあげた。あかりがうつつて顔が赤くなつて見えたが、門札を讀んだ。

「平田、平田三八。」と高い調子、提灯を振向けて、

「此處です、平田三八、此處ですよ。旦那。」と少年を呼ぶ。ちやうど棒杙に背を凭たして、思ふ所あるらしう軒合の月の形をすかして居た少年は、此聲を――車夫の此高聲を聞くと、はツとした樣子。ぶらりと膝に垂れて居た扇持つた手に力が籠つて、要を取直すと身構しつゝ、無言でつか〳〵と、しかし跫音をば浮かして寄る。

「寝てますが、旦那。」と車夫は二ツ三ツ戸の合目をがた〳〵鳴らして、

「敲きませうか、え、たゝきませう。」

少年は默つて居る。

「まだ十二時にやなりません。夏の内あ宵の口でさ、たゝいて見ませう。」

と握拳を上げたのを、思はず手に持つた扇

でおさへた。銀の要であらう、キラリと指の間に輝いた。車夫は怪訝な顔で、少年の顔を見て控へて居る。

少年はおさへるやうにソッと板戸へ手をあてて、瘠ぎすな立姿をひつたり寄せ、鼻筋の通つた顔を斜に、戸の合目に耳をおつ附けながら、しばらく身動きもしなかつたが、力なさゝうに扇を垂れて、立つたまゝ膝を組合せて、下駄の爪先でコト〳〵コト〳〵と地を踏む。

## 四

おなじ長屋内だけれど、何處だか分らない、手に取るやうに嬰兒の泣聲がして、むゝ〳〵と譫言のやうに、乳を頰張らせたらしい氣勢がする。

板戸に取ついて耳を澄まして居た少年は、戸を突いて見ようともしないながら、なほ立去りかねたか、猶豫つてるので、車夫はもどかしくなつたんだらう。

居合腰になつて、踏張つて、足に力を入れて、手つきで敎へながら少年の顔を仰いで、

「どん〳〵おやんなさい、構はずお遣んなさい。まだ〳〵早いんでさ、御遠慮なさることあねえ。」と何か知つた風で、故とらしく聲を潛めながらいふ、少年は餘計なことをと氣を揉む狀、眉根を寄せて聞いて居たが、得堪へなかつたか、手を掉つた。

「可いから彼處へ、彼處へ。」と急き込むので、車夫は立端なく引退つて、路地口に曳捨てた、空車の方へ行かうとして、

「べらぼうめ、深川の奴等は寢坊ぢやあねえか。そしてまたあんまり温柔くツて巽でねえな。」

と口吃言をいつて楫棒の傍に蹲む。

少年は再び身を寄せて、内の樣子を覗つたが、良あつて思ひ棄てたか、戸から耳を離して身を開いた、胸を撫でゝ襟を合せて、立直りはしたけれど、立去りあへずイんで、月の下に首を垂れた。

とつおいつ、それまで躊躇をして居たのが、何と決したか、つか〳〵と三たび立寄つて、扇子持つた手を板戸に縋つた時、立つけがつたり鳴つた。音は立てまいと思つて居たらう、不意に戸が鳴つたので驚いた、耳許へ、うるさいといつたやうな、寢惚聲の太いので、

「誰だい。」と詰るやうに落着いて謂つたのは、四十ばかりの男の聲で、全體寢靜まつて、寂とした處だから、巖穴のなかへ響くやうに聞えた。

少年は此聲に突出されて、恰も膠の離れたやうに、戸口から身を退いて一歩退つたが、立停まつてキッと一眼見ると、顏色をかへて足早にツカ〳〵と引返した。

「歸るから、早く。」と急き込んだ風で聲を懸けて、見返りもしないで。またゝく間に腕車の前へ廻つて路地を出たが、一文字に急なんだから車夫はアワを食つて、吞さした煙管を逆に取つて楫棒へ吸殼を叩き落した、飛上るやうに身を起こし、ソヽクサ煙管筒に突込みながら、呆れた顏をしてくる〳〵と眼を睜ると、少年はハヤ藏について曲つてしまつたので、蹴込へ煙草入を投り込んで引張りつけられたやうに空車の楫棒をあげた。ゴロ〳〵〳〵と砂地へ摺つけて轢る音が聞えたが、やがてまたひツそりして、稍照りまさつた月の色の薄ら青い路地の上に、吸殼が一ツぽツつり赤くなつて燃え殘つたのが、ほろほろと動いて、しばらくすると、地へ吸込まれたやうに、ぢいッと消える。同時にさら〳〵と礫くさい風が吹いて來たが、動くものといつたら、塵一ツ葉もない。靜まり返つた爾時。

## 五

がツたり樞を外す音がして、今少年がイんで居た板戸を細目に開けて、半身を出した美人がある、格子に手をかけ伸び上るやうにして、

襟も一面白な胸をあけた、此の乳を露出した鼠地の浴衣で、博多の男帯をぐる／＼巻に腰に纏つて、片端を乳の下に挾んだが、寝起の姿だらしなく、胸も裾も取亂した、白脛にからんだのは燃立つやうな緋縮緬で。小造のちつと肥つた、ぬけるほどの色の白い、年紀のころは十八九で、髪は艶やかに黒いのを、根の低い銀杏返に結つて居る。これをこそ納涼臺では一件だの、獵物だの、掃溜へ鶴だの、といつたので、別に不思議なことはない、つい此以前まで、潮崎の何とかいふ大店に、胡蝶といつた遊女である。

　眼鼻だちのくつきりした、たとへば月の如く玉の如しで、あかるい明瞭な、といつた顔に、何等か憂愁の煙を帯びて、さも術なさうに眉根を寄せながら、黒眼勝ちにはつきりした清いので、路地口の方をうかゞつて、またそツと四邊を見て、忍んで敷居をまたいで出る。あとの足がまた框を離れないで、身體が宙に釣られて居る、胸を空ざまに裾を亂して、仰向に反りかへつて、

「あれ、」といつたが、はつたり尻もちをついた音。するゝと引摺り込まれて、がたぴしと上を下、邪慳な内にものゝ覆つた氣勢がして、やがて眼の凹んだ、鼻の高い、細面のたゞものでない老いた女が、戸外へ顔を出して其の街を見てぴつしやりと戸をたてると、忽ち、しんとした。

## うろ／＼船

### 六

　少年を乗せた腕車は、さきの路地を後にして、今また川の岸に沿つて、砂地に引上げた船の傍を曳いて行く。

　いろ／＼情實の摑まつた、蜘蛛の巣の多い、狹ツくるしい、裸體の女の立つた、胸の赤い男の胡坐かいた、頭がつかへさうな、天窓の重ツくるしい、じろ／＼人の見る、そんなうつとしい處を出て、竝がつた、蒼い星の下に、砂地の夜露に濕つた上を、川を見、且つ船を見て、眞々しい、人通のない、せい／＼した處へ僅に出たので、道なら一町とは隔らず、ツイ三分間の前のことも、遠い處に、昨夜あつたことのやうに思はれる。少年は腕車の上で天の高いのを快さゝうに脊伸をして、胸を張つた。扇を膝に横へながら無意識に弄んで、

「寒くなつたやうだ、車夫。」

「殘暑でございますから。何てツたつて、もう強勢秋になりました。」

「何時だらう。」

「今ぢやあ、さうですね。」

行く時道を開いた貧女の住居は、路の左手に戸を鎖して、月夜に寂静まつてしまつたが、小さく猪番の小屋のやうである。

「十二時過ぎですね。」

上の方から、また川舟が、ゆるやかに流れて來た。が、水に任すのであらう、立つて棹をさすものもなく、中形の浴衣を着た華奢な女が、舳の方に眞俯向になつて居て、艫の方には立膝に手を組んで、蒼ざめた額を仰向けた、かぶりものゝない男が、月を仰いで眼を眠つて、身動もしないで、あかるい水の上をする／＼と流れ去つた。

　少年ははつきり眼をあいて屹と見たが、もう影も見えない。

「此處等は何だらう、皆船頭か。」

「船大工が居るんだと思ひますが、」

　車夫もあたりを眴した。

「まるツきり世界が違つてますから。」

　といつた時、ガツくりして腕車が止まつた。ちやうど汐見橋に懸つたので、橋の勾配がチと急なので、輪が引かゝつて、ガツたりガツたりして居る。

ふッとまた眼をあいて、物思の夢からさめた少年は、寂しく腰をふん張つて凝いて居る、車夫の後姿を見た。

「下りようか。」

「何、一呼吸です。」

　これしきをといふので力を入れるけれど、腕車は左右へ傾くばかり、ホッたり支へちやあ纏に一寸の裏で乗ツ越さない。

「あゝ、欄干につかまつて押してあげよう、寄るとあぶない。」

　車夫は無言で腕車を寄せる。少年は手を伸ばして、橋の欄干へ縋るやうにして手を懸けて、身體を固めて突張つて、押し出して呼吸を入れる。「一ウ」といふ懸聲で、一文字にのりかけた、腕車がのけさまになつた、トヽン、に六ツばかり揺りながら、梶棒が擴つて母衣を潰して、人數が四五人、

「待ちやがれ！」

　といつた聲を聞かずに、背ろから[illegible]いで引いたので、辛いで呼吸に腕車は一堪りもなく、あをむけに引くりかへつて、[illegible]の輪が南方で、地を離れたまゝくる／＼と三ツばかり空廻轉をすると、車夫が轉んだやうに立つて、梶棒を天に朝した。

　眼だけは天窓の上へ梶棒を振られたから、[illegible]しつかりといつた限、ここ一間、――橋の眞中まで押し出したが、ひよこなんと立停まつて、突あたつたやうに[illegible]引返つた。

「やい、此方等。」

## 七

## 澁團扇

「重山鼓た眞似をしやがるぢやねえか、畜生、殺されるな！」

　低い天井に殺氣が籠つて、襖も壁も眞黒になつて、じと／＼する赤疊の上に、二ツ三ツ茶碗を轉がした火鉢の傍に、骨組のしつかりした、肉の堅い、蒼黒い裸體のなりで、胡坐を搔いて眼を瞋らして居る、細面だが、鼻の隆くない、口の小さな、眉の寄つた、五分刈の頭髪が寸餘にのびて、耳におつかぶさつてる、眉間が目立つて白い。見ると四十の上に老けては居るが、三十八九で、一癖ありさうなのは、宗平といふ鰥夫で、[illegible]て、ちつとは若いものに立てられる女[illegible]つた男である。[illegible]て、ぐり／＼と膝を突いて、居丈高になりながら、中だるみをした、萌葱色の蚊帳の端に、片手を背中で捻ぢられたまゝ、片手をついた[illegible]になつていたのに頭をおさへて、銀杏返を[illegible]にした、前衣ははだけて、裾が亂れかゝつて、寝ころがつた男髷がずり落ちて、鬢のあたりへたまつて居る、踏み潰されたやうな形が、ごつしより汗になつて、ちつとも動かないさつきの遊女を、摑みかゝりさうな權幕で睨みつけて、

「不敵者め、太え奴だ、やい、殺されやあがるな！」

「まあ／＼、可いやね、可いやね、宗さん、お前さんもまあ氣を落着けてね。」

　と件の鼻の高い、眼の底光をする、顋のこけた、小さな丸髷が、眞中を隔てゝ、ほッとした呼吸をついて居る。

　引摺戻す、撲る、おさへる、踏む、縛らうとする、悲鳴をあげる、罵つてなだめるなんど、一騒ぎあつたいまの後で、小さな丸髷が呼吸をつけば、裸體の宗平も汗だらけな胸に波を立たして居た。

「可かあねえ、畜生め、畜生！　其分にして唯置くもんだと思つてやあがるんかい、いきづりめ。」

　と喰殺しさうなことをいひ／＼、これが[illegible]になつて、[illegible]になつて、[illegible]て來る。

　小さな丸髷の婆さんは、猶になつて、遊女を

庇つて居た身構を崩して、

「可うございますよ、まあ〳〵、荒立てないでも話は分りますから、何うぞまあ、」

といひながら、俯伏になつてる遊女の背中を、滿團扇の強い奴で、ゆつたりと煽いで、群つて來る蚊を拂ひ〳〵、

「さあ、ちやんとして、ね、可から、あやまつておしまひなさい。ね、何だか知らないが、あんなに腹を立つて居なさるんだから、困るぢやありませんか、ね、泣いたつて仕やうがないんですから、ね。」

と團扇を、背へ捻ぢられて居る遊女の其手の上へのせて置いて、膝を宗平の方へ向けた。

小さな丸髷に結つた老けたのは、お重といつて、滿倫で此のおいらんの新造をして居た女である。「誰でも客をつかまへちやあ、おいらんが大人しくツて、優しくツて、小さいから、女のやうに思はれまして、可愛くツて、可愛くツてなりませんと、いつてた女で、年の少い客でも熱くなつて通はうもんなら、おためになりませんからと、意見した、深切極つたもので。殊に生れが旗本だとか云ふので、お荷物な醉ツたんばうは、おもしろく機嫌を取つて、浮かして遊ばせることは出來ないけれど、其代り殿樣であらうが、大旦那であらうが、廣間の床柱に凭りかゝつて、五ツ紋でお袴を召していらつしやらうといふやうな御身分のお客樣なら、來れ！塗骨の女扇を膝について、對決をして見せようといふ御人體、みづから新造には柄が合はないと號して居つた。

八

其癖、若い内は所々の廓へ出たり入つたり、伊勢へ七度、熊野へ三度、數々洋行をした者だが、最後に田舍の隱居樣に受出された、其晩、厠から脫げようとしたのを捕つたが、懇に因果を含められて、そも〳〵十七の時から追駈けまはして、情人になつて居た——平田三八——今は剝身屋だけれど、舊は旗本の御用聞であつた現在の亭主に、再び賣りませぬといふ證文を書かして、件の隱居樣がすツぱりと下された。それからふッつりと堅氣になつて、堅氣になつて、堅氣になつて新造になつたので。そのかはり、たとひ新造はして居ても、十七の時添つた亭主はいまだ守つて居りますといふ。いや御中臈といふものは、將軍樣と寢る時束ね髮にしたもので、其寢てる時はお次にお年老が控へて居た。また其お次にはりやんこが一本ざしで畏つて居たなどと、若い人をつかまへちやあ聞かしたもので、あのお重さんになつてから、胡蝶が六枚目へ落ちたんだツて、さういつてる者もあつたけれど、ほんとに深切な人ツちやあない、こんな中にやあ珍らしいと、胡蝶はいつも然ういつて居た。

首を据ゑて千代田の大奧を語るやうな、そんな時代なのかと思ふと、また恐しく當世で、クミチンキが胃病の藥だといつて見たり、運動をしないと血の循環が惡いなどといつて見たり、いやに笑ひながら、君、失敬、といつたこともあれば、潮來が粹で可、(緣かいな)なんざ、フヽンと、酷く明治の流行唄を罵倒したこともある。

お重は宗平の方へ膝を向けて、世話が燒ける、といふ顏で眉根を寄せた。

「一體、まあ何うしたといふんですね、あんなにお話がもてるから、聞づらいのを堪へてさ、ほんとに寢られないのを無理やりに眼をつぶつて、やつとこさとう〳〵した處へ、ドサリ、ガラツ、ペタリ、ぢやありませんか、驚いたぢやありませんか、何うなすつたといふんですね。」

と一膝寄る、宗平は眉毛の太いのをピリ〳〵させて、

「何うなすつたもねえもんだ、人を踏づけやあがつて。お重、手前の足許も明るかあ無からうが、馬鹿め。」

と、手荒く、轉がつた茶碗を引たくツて、なみなみとつぎ、宵越の温いやつを一呼吸にぐツと呑む。

「え、何でございますね、些少も私にや分りませんが、おいらん。」

と云つて、また向直つて、かの澁團扇を取つて煽いでやり、

「何か喧嘩でもしなすつたんですか、え、え？」

お重は顔をおつつける。

胡蝶は疊にくひついたまゝで、微に頭をふつた。髻からこぼれた房りした髪の毛が、ゆらゆらと搖いで動く。

「でもないのですか。困りましたね、」と顔をあげて、「宗さん、そんなに怒んなさらないで、何うぞまあ、分をいつて聞かして下さいましな。また何んないひわけがあらうも知れませんからね。」

「何だ、己が、貧乏だとか何とかいやあ、牛を盗んでもいひわけが立たあ。姦通のいひわけてえなあツヒぞ出來たためしがねえんだい。ふむ、」

と言葉尻を落して、煙管を拾つた。

お重は宗平の今の一言で、ギックリ思ひあたつた體で、視詰めて居る宗平の眼から顔を背けて、胡蝶をチョイと流眄にかけたが、

「へえゝ、何ですか。」とつかぬことを、兎も角もいつて見る。

「姦通も品によらあ、己の居る所で媾曳をしようツて、餘りな太え奴だ。えツ此の阿魔！」としやがれ聲で、沸上つたやうに眞赤になつて、煙管を逆に取つて立懸つた。吃驚して手をあげる、お重の思つたほどではなく、宗平は擬勢を示したばかり。

## 九

淺き瀬にこそあだ波は立てさ。そんなにきづかつたものではない。暴風雨はやう／＼風口で、わざともりかへして怒つたのだから、お重の宥めるまでもなく宗平は手を引いた。

「ほんとに何うするか見やあがれ。」

と呟きながら、くるりと横を向いて、火鉢へ煙管を突込んだが、グッグッ雁首でほぢりまはして、チヨッと舌打。

「火がねえよ。火が、」

お重は後手で胡蝶の背を二ツ三ツ撫でて置いて、そして膝を立てた。

「いま早附木をあげます。いるんならお火も拵へますがね。ほんとに宗さん、手荒なことをなすつちやあ否ですよ。」

やれ／＼といふ體樣で、身を起して背の方へまはつて立つ。

「汝が身から出た錆ぢやあねえか。一分だめしになつたつて、言句はいへめえ。ふんぞりめ。」

とじれ切つて熱くなつてるのを、故と意地惡く螫すんだもの。

「えゝ！　うるせえな。」

脣を捻ぢ曲げて天井を仰いで、宗平は毟るやうに頬邊をがり／＼やつた。

「へい、マッチ、そして蚊が酷いんですから、ちよいと羽織つて入らつしやいよ。」

とお重は氣を利かして背から浴衣を着せると、身悶をして揺り落して、

「此奴のためにやあ、何うせ己あ裸體なんだ、べらぼうめ。」とフテをいふ。

男子斯うなるとお手のもので、お重どん更に驚かず、鼻頭に笑ひながら口では甘やかすやうなことをいふ。

「そんなことをいふもんぢやあありません、さあさあ母樣のいふことを聞いて大人になさい。」

とまたふはりと羽織らせる。手を突張りながら胸へ垂れて來る袖を兩方見て、

「つまらねえこと、ふつてらあ。」といひ／＼、うつむいて鼻のさきでマッチを摺つた。お重は再び吸付した間の胡蝶の肩を輕く打つて、

「おいらん、おいらん、おゝあ無かつた、お君さん、また、何時までもさうして居なすつちやお仕様がありません、蚊がくひますよ、ね、そら、こんなぢやありませんか。」

と何んなに口惜かつたか、此時まで泣上げられたまゝ背に置いて居るお君の手をソッと持つて、膝へおろして、よれあがつた袖口を伸して、二の腕を撫でながら、また渋團扇であふいで居る。と胡蝶の本名で、お君は、膝をうしろへまはして、細腰を辷り落ちた男帶をする／＼とたくしあげて、其手を胸へ入れたと思ふと、ギウと一緊した、片手をついて、淸水で玉をあらつたやうな、あかるい顏を斜にして、肱を曲げて横ざまに身を起したが、ものもいはないで、三人とも、人の居ない見當を睨んで、一時にひッそり。

しばらくすると、はッ、といふ歎聲を放つた、お君はバッタリ、今度は亂れた髮の透間から、雪のやうな耳許だけを見せつゝ、また俯向になつた。

お重は持餘した、困つた風で、

「困るぢやありませんか、おいらん、いえ、お君さん、さあ、さうなすつちやあいけませんよ。」

と口を近づけて宥めるやうに云つて聴す。宗平は立續に喫んだ煙草を中絶として、じろ／＼見て居たが、さも憎々しいといつた語氣で、

「打ちやつておけえ、ふてやがつて、何うせ、たゞ置く奴ぢやあねえ。」

「あれ、だからさ、ね、お君さん、またお怒んなさるぢやあありませんか。ほんとに困つちまふ。」とお重は歎つが如くにいつた。同時に膝をついて、衝と起きあがつたお君は、片袖で顏をかくして、紅、もちら／＼見ゆる、あらはになつた乳の下へたぐりためた男帶を手でおさへて、直線に床を横切るのを、あつと見る間に、蚊帳をあげて、屈む、と其まゝ入らうとする。お重は慌しく足を蹶けて、手をのばして、片袖をグッと持つて、

「おいらん！」

お君は見向きもしないで、涙聲で、ふりもぎるやうに、

「よござんすよ。」といつた、顏だけが蚊帳の中。

## 十

お君のかうした仕打を見て、餘り不意だつたから宗平は氣を拔かれて、眼を瞬つたが、[illegible]如く[illegible]

「畜生！　汝、また、そ、そんなこと[illegible]てゝおかれる。」お重は[illegible]した身を屈して、遮つて、

「ま、勘忍して下さい、勘忍して下さい、またおいらんもあんまり、」

「あんまりも何もあつたものか、」と振揚げて、取附く、押返す、押退ける、抱きついて、揉んでる處へ、門口から聲を懸けたものがある。

「兄哥、宗さん、ちよいと。」

「え、」といつた宗平は、さすがに人聞を氣にして居たから、狂つてる耳にも疾く聞きつけた。

「誰だい。」

「私でえ、鐵でえ、ちよいと顏をかしておくんなさい。」

「何だよ。」と少し落着いて、宗平は帶解廣けの其まゝで下駄を突懸けて戸外へ出たが、戸の前で立ち合つて、何か耳打をしたと思ふと、突然、

「何、橋詰で、そいつあ、」といつたがバタ／＼と駈け出した。

しばらく置いて、またすた／＼走つたのは今呼出しに來た壯佼である。

「あれ、おいらん、お前さんは！」

「何うしよう、お重さん、ちよいと、ちよいと其處まで、」とおど／＼して身もだえするので、抱留めたまゝでお重は框まで引摺られながら、障子につかまつて、踏占めて引戻した。
「いけませんよ、いけませんたら、まあ、落着いて入らつしやいよ。あれさ、しやうがないね、ひどい力だ。まあ、あれさ、あれさ、えゝ、おいらん、お君さん、そんなに世話を燒かすもんぢやあありませんよ。」
とぐいと緊めて、他人肌な、冷かなことをいふ。お君はおろ／＼聲で、
「鼎さんが、ぶたれるんだわ、私や何うしよう。」
といつたが、力なくなつて引戻されて、抱かれたまゝ下に据ゑられてしまつた。
お重は震へて居るお君の背をさすつて、
「こんなに汗かいてるぢやあありませんか。ほんとに宗さんも宗さんだが、皆が何うかして居なさるんだよ。一體、鼎さんが何うなすつたんですえ、え、何だか宗さんのいふことも分らないけれど、逢曳だのなんのツていつて居たが、何ですかい、鼎さんが來なすつたの。」
「はあ、先刻。」と泣顏で居る。お重は著しく眉を顰めて、
「何處へさ。」
「門まで、」といつて歎息した。
「まあ、何うも、まあ寢て居てちつとも知らなかつたこと。そして宗さんに見付かつたんですか。」
「いゝえ、宗さんが見つけたんですか何うですか、私は何だか夢を見て居て、腕車に乘らうとすると、鼎さんの姿が見えたの、そして吃驚して眼を覺したら、路地口へ腕車が出て行つたやうですから起きて出て戸を開けたの。」
「へえゝ、さうすると、」
「誰も居なくッて、お月樣ばッかり。」
といつて、お君はまた溜息した。
「をかしいぢやありませんか、一體何だらう。」
とお重は眼を瞬る。
「それだのに宗さんが、いきなり密通呼はりをして、背後から髻を摑んで、そ、ひどいッたらない、ひどいッたらないよ。人が此んな處に居るかと思つて、二階で居て見るが可や、名代の部屋、名代の部屋なんか、覗いてもやらないから可い、亂暴な、人が弱いかと思つて、亂暴な、喜助どんになぐられようと思つて、口惜いねえ！」
お君はいつの間にやら獨言をいふやうになつて、涙ぐんだ目を瞑つて、下唇を噛んですゝり泣をしてうつむいて居る。

十一

お重のへんこつた疑い顏は、お君の後へまはつたり、前へ出たり、階の下を潛つたり、右瞻左瞻て、
「何うなすつたんですね、をかしいぢやありませんか。それぢやあ何ですね。鼎さんが眞個に門まで來なすつたんだか、お前さんが逢ひたいと思つて居なさるので、そんな氣がさしたんだか、何だか知れたものぢやあありません。ですから宗さんが騷出したのが、何も姉さんの身にかゝつたこつちやないだらうではありませんか。お案じなさることはありますまいよ、また可加減な喧嘩なんでせう。」
お君はじれつたさうな頭を掉つて、
「いゝえ、でも確に腕車が聞えたもの、そして、おまじなひをして居たんだから。」
「でもさ、其が氣の所爲ですよ。」
「だけど、かうして居ても、ばら／＼大勢居て、鼎さんが取卷かれておいでなのが私あ遠い處に見える樣だもの。」と、うるんだ目で四邊を見返る。お重も戸の方を見返した。
「此間、彼方ぢやあアンなことをいつて居なすつたのだから、まだ此四五日はお見えなさる譯はないと思ひますがね。」

「でもあの、七日めで、けふ鳥影がさしたツて、さういつたら、お前さん、何かいつて、からかつた癖に。」
「そりや景物でさあね。それとも思つた同士で急にまたそりやあれ、何だとも限りませんからね。ま、何にしてもお前さんが出なすつちや可かありません。何かいつてるとしても、其處へおいらん、お前さんが駈けつけて御覽なさい。それこそ喧嘩に張を以て、どんなことにならうも知れませんし、第一鼎さんのお爲によくございませんからね、ちよツくら私が行つて容子を見て來ませうから、まあ、お君さん、落着いておいでなさいましよ。」
飛び立つやうにあく／＼して、身が震へるほど案じるけれど、いはれて見りやそんなもので、仕方がないから納得して、
「ぢやあ、さうして下さいな、後生だわ。」とお君は顏をあげて、濡れたやうになつてる前髮のさきを手で揮つた。
「さうしませう、其が可、其が可、」とお重は身繕をして立ちかけて、
「そしてね、おいらん。」
「何。」
「宗さんがあんなに腹を立つて居たんだから、歸つたら、まあいゝやうに、そこん處をね、私も何しますから、機嫌を取つて下さいよ。ほんとに病犬ですからね、壯佼はついてるし、恐いばかりぢやあないんですから。」
「嫌だ、私。彼んな者、日向ツくさい、何だらう。私あ女房ぢやあるまいし、鼎さんに自由に逢はれない位なら、何も素人になることツたらなかつたに。」と、また口惜しさうに、今度は鬢の毛の亂れたのを指のさきで揉んでお君はじれる。
「そんな氣になつてらつしやるから不可ませんよ。酷算段で三十兩も足してくれたんですから、宗さんも何だから、向うはもうおかみさんにしツちまつた氣で居るんですからね、まあ後のことは後のことで、ともかくもねえ、そこが苦界ですわ。」と、つけたらしく笑つたものなり。
「もう苦界ぢやあないぢやあないかね。出ッちまつたんだから、」とお君は憂慮はしい目で、お重を見て、其心を讀まうとした。お重は澄まして、
「だツてまだ、鎖は切れませんからね、さうさう自由になるもんぢやありませんよ。お前さんを彼處から出さうと思つて、私あ何んな目にあひました。」あの窪んだ目を凄くした。お君は弱みがあるのであらう、これには何ともいへや爲ないで、憐を乞はうと思つたか、術なさうに莞爾笑つた。
「だツて、逢ひたいわ！」
「困つたお孃さんだね。」とお重も顏の色を和げつゝ戸外へ出た。が、戸を閉めて行きかけて、フト小戻をして隣の軒下に踞んでしまつた。

## 三枚目

### 十二

結句ごた／＼した内を出て、お重は獨り隣長屋の軒下に、月夜で涼しいから好い心持であらう。誰が何をしようが、何うしようが、美人さへ無事であれば其で結構。今夜のやうすぢやあ突詰めて飛んだことでも仕出來されては、とさう思つて、喧嘩も何もあつたもんぢやあない。留女なんざ少い内だ、年よつては金子の事と、心に頷いて見張をする氣。
一體男の方は、廓へ行きたくなると魔が魅すけれど、女郎の方は、身脱がしたくなると魔が魅すので、いづれ雙方とも身を過る源ださうな。
で、此身脱がしたくなるのは、天窓の上の電

燈が眩いといふわけではない、草履が重くつて歩行き惡いからといふわけではない、身體が減つて行くからといふわけでもない。客が込合つて、無心がきいて、わがまゝが言へて、朋輩が持上げて、新造がおべッかつて、遣手が莞爾ついて、若い者がお辭儀をして、疊が綺麗で、夏冬の裲襠が簞笥に揃つてゝ、廊下を据身であるきながら、手前達の名をかいた總花とかの夥しいのを斜に見る、其凡夫盛なる時に當つてや、身脫がしたい處の沙汰でない。素人衆はお飯を食べますか、とそんなことを言つて居るのだけれど、天人に五衰あつて一朝ブマになり、お勝手向が亂脈になつて、新造に借が出來、朋輩に不義理が出來、お茶屋が遠ざかつて、客にわがまゝをいはれて、お茶漬を搔込んで、水をのんで、菓子を食べて、無常を感じて、癇癪をさして、母様が戀しくなつて、札がひツくりかへつて赤くなると、忽ち出たくなる、出られないと死にたくなる。こゝで魔が魅すわけである。

　お君は十六の時、式の如く親のために身を沈めてから、今年が十九の厄で、三年勤めた。

　初手からおいらん染みないで、座敷は淋しかつたさうだけれど、柔順しくツて、容色が好くつて、小柄で、愛嬌があつて、其癖ぐうたらの上方ものでない。――氣に張のある、意地のある、思つたことが色に出る。――江戸ッ兒であつたから、だまされる者は少なくつても、可愛がる者は多くあつて、一時全盛を極めて居た。但し其盛な時も、これはまた、珍らしく唯早く素人になりたい一心で、極めてじみな考へであつたので、新造に借は拵へず、蟲はつかずで、借金も早く崩し込んで、年の明けるのを待つて居たが、今年の正月、深川に居る實の母親が大病で――いまでも煩つて居るのだが――一時危いといつた時から、ぶらりとなまけてしまつた。客はふり放題、内の者にはすね放題。恰も新造が入替つて、いまだ新らしい内だつたから、立廻つて意見はせずで、すつかり客を落してしまつて、いづれか秋にあはで果つべき。鼎は其時分から馴染んだので、お君は札順に殿なのを、鼎に見られるのが恥しいといつて、地團韛を踏んであせつたこともあつたんだけれど、もう霜枯になつたので、も一度もりかへさうと思ふには、揃の半纏でも出さないではと、簞笥に凭れて物案じをするやうになつた處へ、ソレ疊替だ、うつり替だ、と矢と鐵砲が群がるのに、鼎も足が遠退いたは、案ずるに金子の事。いよ／＼用事をつけて宵から寢込むことになると、こゝがお重で、いつも娘のやうに可愛い／＼といつて居た、お君が一世の浮沈といふ時で、四箇お構の禁を破り、「ねえ、おいらん、何ぞ役で、此灘を越えるには、百と二百かもではッイ要りませう。年期に積つて二年か三年、母上も御病氣なり、鼎さんも呼通すわけにはゆかず、何らせ身の詰ですから此處は一ッ。」と耳打をして、別に矢文を射る客はないのだから、親の身請といふことにした。

## 十三

　さていよ／＼請出といふ場合になると、夜具、簞笥、長火鉢、衣桁から柱時計、懸物をならべても思つたほどには取つてくれず、內證へ返すのが足りないばかりか、總菜屋だ、小間物屋だ、使屋だ、髪結に拂ふ分まで、居まはりの一時借ばかりでも、小四十圓はあらうといふので、固より賣つたほどの總計だから、請出すほどの貸金はない。で、一度は匙を投げたんだが、お重が企策に驅けまはつて、勿論、高利を借りたのであるが、此金子のなかに、彼の宗平の身の皮剝いだ三十圓内外も交つて居た。それからお君がありつたけの衣類を曲げて、晝夜帶一筋とお召の餘所行が一枚、肌着なしで、他に浴衣を二三枚と、部屋々々から祝

つて貰つた深張の蝙蝠傘が一本、それに一枚、着替の三人一揃、浴衣地一反、菓子の折が都合五箇と、それだけ持つて、お重と合乘で、人形を一個抱いて、賣られた時穿いて行つた、とき色、鶯紋の緒のたつた一足きり低い駒下駄を穿いて、お重は、なにこんな處は跣足だつて出た方が利口だといつたけれど、勿體なくならずにしまつてあつたから其を穿いて、晝前に洲崎の大門を乘つて出たが、お君は此春、雪の中を、遣手につれられて母親に餘所ながら告別にいつた時と、三年の間に前後たゞ二囘であつた。

このためにお重までも一枚の半纏をなくなしたほどではあり、いざとなると案外で、隨分辛い工面だから、末が恐しいといつて、お君は一度二の足を踏んだけれど、「何うしてこんな時思切つたことをしなければ、とても足が拔けるものではない。それにこんな處に居て通はしては、何はおいても鼎さんのためにならぬ。素人になつて御覽なさい、朝から晩まで、くツついて居たつて可いのだから、鼎さんに逢へるのだから、」とお重がさういつたので、何にもいはないで、

「忘れません、」といつて、たうとう出た。

尤も此度の心配で、二三日はものも食べず、夜もおち〳〵寝ず、人には氣兼をする、瘠せたといふので、お重はつれて行つてお君を其母に逢はせた時、長煩で窶れ切つて居たけれど、品の好い、母親は、頽巻した枕をあげて、ぢつとお君を見て、莞爾笑つて、そしてお重を拜んださうだが、其母親といふのも、狭い、穢い、むさくるしい、姉の内に厄介になつて居るのであるから、一緒に寝させて置く分ではないと、さういふわけで、お重はこんなに自分の内へお君を引張つて、世話をして居るのである。

あとで聞いてお君は驚いた、宗平には、まるで身を任せるのだと、お重から約束がしてあつた。しかしさういはなければ金策が出來なかつたとのことで。しかし何でも出ツちやへば可い、自由の身體だから何うでもなる、第一鼎さんのためだといへばお君に無理ではない。で、元來開いてる おいらんにかういふ人智慧をしたことが知れると、新造たるべきものは何處へもお雇にはならないといふので、隱して居たんだけれど、ツイ知れたから、後々のことはともかくも當分お重は勤めに出ることが出來ないといふ。

「だつて構ふものか、あんな家業は私ももうフツ〳〵だ。」とお重はいふのだが、そんなら何を家業にするんだか分らない。むかし旗本の御用達、唯今は刺身屋で、十七の年から持つた亭主で、玄人で、而して内の情人なる、平田三八君たるや、既に今夜の如き、宗平が泊る時は、餘所へ泊つて内には居らない、豆腐屋の主人であるから、遊女上りを二人迎へて、女房を長火鉢のむかふに坐らして置くといふ御身分ではあるまい。

お重はいづれ内の人三八君と相談づく、米と薪を半分持つたために、奉公をしたわけであらうのに、手許へは殘さないで、不如意なお君につぎ込んで、つぎ込んだ上へまた借金をして、銘仙の半纏を失くしたのみならず、手ぶらで引下つたのみならず、本人を内へ置いて、湯へ入れる、髪を結はせる。仕事はさせず、草さう紙をあてがつて、新聞を借りて來て讀ませもすれば、寄席へも遣る。たとひ鰕の天麩羅はたべさせないにしても、油揚は添へてお給仕をする。其癖自分は小遣もまゝならないといふは、何たる算盤の持ちやうでありますか。

お重は、「何、どんな切ない思をしても可い、こんな可愛い女を一人拵へたのだから、」とさういつた。深切極つたものである。

このお重のさきに居た新造は、かゝる深切なものではなかつた。いつもお君をつかまへて

は、おいらんといふもの[illegible]、おも
しろいものだ、世の中にこんな氣さくな[illegible]すぎ
はない、陽氣に浮いて入らつしやい、人が出さう
たつて、[illegible]になるもんぢやありません
と、いひ/\して、自分もいける口で[illegible]
の相手の上手な、ざつくばらんな女であつたが、
お職が素人になりたい/\といふのと、つまり[illegible]
意氣地[illegible]にしまつたが、[illegible]
理心中ともいふ、[illegible]づくだともいふ、遺書なし
で、男に斬られて亡くなつた其前日、いまつい
ここでお職が[illegible]んでは[illegible]いからと、[illegible]
[illegible]出して、久しぶりで顏を見て、[illegible]に[illegible]を
[illegible]、[illegible]いつても[illegible]
うて、お職はいつまでも[illegible]
向[illegible]て[illegible]りとするが、[illegible]心の人は
しかし[illegible]がよくない、[illegible]いつちやあ、素人
になりたがつた自分の持說を確める證として、
傍らお職の[illegible]に[illegible]して[illegible]るが。

## [illegible]女

十四

閻は[illegible]つて[illegible]ないから[illegible]を使はれた時別に
何處も[illegible]はなかつた。[illegible]に足をつい[illegible]

上へ[illegible]けたが、[illegible]を[illegible]て、[illegible]つと
して[illegible]ないで[illegible]
「やい、此奴等、何、俺をしやがるんだ、」
と[illegible]には[illegible]手の[illegible]を[illegible]出して、胸を
[illegible]ながら[illegible]んで[illegible]つて[illegible]した。[illegible]に[illegible]れ
合つた、[illegible]の[illegible]はいづれも[illegible]で[illegible]と
縱横に肩を並べて、何の車夫づれが身單でとい
ふ澄したもの。悠々として落着いて、飛んで[illegible]
りさうなのに[illegible]もくれず、[illegible]つたり[illegible]いたり、
手ン手に何か[illegible]らしい。
[illegible]は[illegible]を見せられて[illegible]
つて、
「やい、何うしやがるんだい、[illegible]め！」
身構をして詰め寄ると、うるさい！　といつ
[illegible]、中の一人を[illegible]に見た。
「若い衆さん、おう、お前の提灯にやあ赤坂と
書いてあつたぜ。」
「何だと！　赤坂と書いてありや何うしたん
だ。」
また談話をして居た別なのが一寸句切つて、
「此[illegible]、[illegible]た[illegible]」
「山の手のもゝんがあ、江戸へ來るにやあ手水
でもつかつて來い。」
「[illegible]たばかりで[illegible]

[illegible]ない、[illegible]手は[illegible]さうだし
[illegible]
「引込んで[illegible]い、[illegible]い衆さん、お[illegible]にやあ
用はないのだ[illegible]、[illegible]も[illegible]で[illegible]い目を見るこ
とあねえ。」
「用[illegible]ないつたつて、やい、[illegible]、[illegible]し
てくれるんだい！」
「何うするたつて起して曳いて行きやあ可いぢ
やねえか。」
「それとも損[illegible]、[illegible]で[illegible]込むか、」
「[illegible]は[illegible]手[illegible]。」といつた[illegible]、自[illegible]でまた
何かいひあつて笑つて居る。
「たゞぢやあ[illegible]されねえこぞ。此奴等、此[illegible]、
默つちやあ、山の手の名折だい。」と力を入れる
ばかり[illegible]、[illegible]に[illegible]
夫はもがく。
「堪忍しなよ、はゝゝゝ。」
「あやまつたら可いぢやねえか。」
「お容しなされて下されませだ。はゝゝゝ。」
と茶かし切るので、底氣味が惡くなり、とても
[illegible]、[illegible]な
れないので、形容ばかり、また一ツ二ツいふと、
忽然一喝して、
「[illegible]々いふと[illegible]ぞ」と[illegible]しい[illegible]

で、胴の細いのがすつと出た。ぎよツとして、
さらぬだに勞は抜ける、氣は怯けるで、一つの
足を踏んで佇んで居た車夫は、吃驚して後退
をして、ものも言へなかつた。
—ほんとに亂暴な人達だ。」と老人がいつたことを
くどくどいつてゐたが、それも口の中に消えて
しまつて、ひよこなんと立つた。壯佼の一人は
暗を離れて前へ出て、此時までうしろ向いて立
つて居た、鼎の背後にまはつて、とがつた聲で、
—おい、先刻路地口へ引込んだのは手前だら
う。」と肩のすれ合ふばかりにぴつたり寄添ふ
—其奴たとも、」と矢聲をかけて、また一人、つ
と來て鼎の面前に立つた。
—さゝ苦味を帯びて毛一筋動かない、鼎のうつ
くしい顔を月にすかして、
—此顔あ忘れて堪るもんか。
と引挾んだ時、橋の袂に居る一群、盡く立
なほつて、齊しく此方へ眼を注いだ。
「車夫をおさへてろ、交番へかけだされると面
倒だからな。」とさういひながら、胸赤は動き出
して、斜めに身を挺して、鼎の傍に立はだか
る。此時川岸を縫つて白地の浴衣を飜して、
驅けつゝ近づいたのは宗平である。月は大に高
く、夜露で水を打つたやう。

十五

—何奴だ、其奴か、むゝ、此奴だな。」と、詰つ
てる壯佼の間を拔けて、宗平は立停りもせず
驅けついた其足でじりじりと詰寄つた。
—もし、宗さん、お前の寝てる處を立騒して居
やがつたんだぜ。
—小盗賊ぢやあねえか。」
—人様の鼻ッさきに腕車の轅を押つけやあがつ
て、何だ顔にぶつかりさうにしやがつた、山猿
め、何處の國の風船から落ッこちやアがつた。此方
人等の地内を何だと思つてあがるんだい。」と立
はだかつた胸赤は肩を怒らす。傍から又た宗平
に薪を添へて、
—宗さん黙つちやあ居られねえぜ。
—知れたこッたい。」と宗平は叱るやうにこたへ
て眼を怒らした。
—小僧、何しに來た。
鼎は下眼で自分の帶のあたりを見ながら手を
垂れて、身體を細く足を踏占めたまゝ默つて居
る。胸赤は腰を屈めて覗くやうにして、
—宗さん、顔を見ねえ、これだあ、」と嘲つて、
いきなり鼎の頤の下へ、握拳を突込んでぐい
と上げると、扇を持固めた手が思はず動いたけ
れど、胸のあたりへ堪へてしまつた。鼎の顔は
月をあびて、苦味を帯びて、漆黒な鬢髮は露に
しめつて濡れてゐるやうで、眦の釣つた眼を瞑
つて、ぢツとして動かないのを、宗平はキッと視
詰めたが、瞳の据わつた眼中にはいふべからざ
る嫉妬の色が満ちて居た。
—何とかいはねえか！」とあらゝかにいつて宗平
は足蹈をする。
鼎はそれでもいはなかつた。
—耳にも顔を見せねえ。」と背後に居た壯佼は、
矢庭に鼎の耳を摘んで、ちぎれるばかりぐい
と引いた。絲のやうに閉ぢて居ながら、眦の
キリキリと釣いてた鼎の眉は逆つたが、耳を
引かれたから頸を仰向けに倒れかゝつて、背後
の壯佼に凭れかゝつたと見る時、片手で急に振
放して、片手の扇で頤を押上げてる彼の胸赤
の拳骨を十分にたゝき拂つた。
—あ、痛。」と怯む胸赤の前にきツと立つて、
—お前達は、何だ、」といつた、鼎は唯單に、個、
美少年の風采ではない。
—其口でものをいへ、手前、己ン處へ何しに來
たんだい。」と宗平は詰り問ふ。鼎はそれでも默
つて居た、其二の腕へ礑とあたつて、はらりと
散つたのは、誰かゞ螺殻を投げたので、コツト
タンに背後からどんと一人突當ると、前へのめ

もうとする、手を掴んで、
「来い！」とばかりに宗平は力まかせに手許に引いた。鼎は浮足で引付けられて、帯も緊めない宗平の毛だらけの乳のあたりへ、ピッたり顔を押附けられた、其頸へ腕をかけて、また手を掴んで、
「来い！　さあ、来い、手前、内へ来たなあ用があつて来たんだらう。大道ぢやあ話が出来ねえから、来い！　来いといふに。」
またずる〳〵と引立てられて、鼎の身體が前に動くと、周使の一張は動揺をつくつてぞろりと取巻く、夕顔に蟻がたかつたやうで。哄となたゝる橋の上に鼎が手籠にされようとするために映されたる人数の月の影を見て、あれよ、といふのでサッと下駄を脱いで爪先を揃へて、裳を取つて褄をかゝげて、道へ出て、汐見橋の北の詰にて、きつと見構へた婦人がある。

## 十六

鼎は宗平の腕節の力に掙扎し得ないで、橋板を、只摺り、いゝいゝてくられてずる〳〵と引かれたが、たとひ色は白くつても、身體は肥えて居ないでも、眼は清らかでも、唇は紅くつても、一氣の少年である。眼が逆釣つて、肩が動いて、下唇を噛んだ面像の氣勢、再び扇で宗平の手を掃ふのけたはずはつたり分れて、盛に南北へ、ひツくりかへつた腕車を横に、輿夫鳥を前後にして、一尺とは間を置かず、手首を掴んでおもはず手を放した、宗平とむかひあつて、二人はきつと眼を見合つた。鼎は風をつて色は蒼ざめ、唇の色はあせて戰いたが、殺氣を帯びて蠢立すると、壯佼等はどよみを造つて哄となだれたが、一度靜まつて控へてしまふ。

橋の上は森として、瀬のない川に月影がゆるるにつれて、岸につないだ、艀はだぶ〳〵と、左右へ傾いちやあうねつて居る。洲崎の電燈で西をかぎり、八幡の森で北をかぎり、火の見櫓で南をかぎつて、船の舳で東を限つた、この一圓の橋の上、そよともせで行く、其の下で、一時をすぎた靜かな月夜に、ありのまゝ、婦人はおつとすかして居た。が、何と思つたのか莞爾して、忘れたやうに、引上げた褄を落すと、下前がかきなつてきりゝと揃ふ。うつむいて足を見て、懐へ手を入れたが、小さく畳んだ手拭を出して、横にして、持直して片足をぐいとあげ、砂まぶれになつたのをはた〳〵と掃いて、うしろを振り向くと、脊妻下駄が揃へて脱いである。まづ安いて、欄干に身を横へて、つかまつて、また砂を掃いて、それから手拭をふるつて其まゝ手に持つて、少し俯向いたが、雪のやうな咽喉に結目高にしたへへき宗寄位な鬱金木綿の風呂敷包を背負つて居る、結目を遮め、ほり直して、吉津の方へ向直つたが、すら〳〵として柳のやう、風にも靡きさうに佇んだ。脊の高い女で、髪は根の上つた丸髷。鬢の毛一筋亂して居ない。眼がぱつちりして鼻筋の通つた、色の白い細面で頤のしまつた、ちとケンな顔で、眉はうつくしく剃つて居る。生際がすこしぬけあがつて、耳の色のすきとほるやうな、項の抜けた、年紀は二十八九で、色すきとほるやうな衣の肌に水筆で點を打つたほどな、眞黒な黒子のある小間物屋だといつたら、凡そ大橋を渡つて深川の女に志すほどのもので、直たと値がないものはあるまい。富岡門前の小間物屋に小僧一人居ない、まつたくの一人ぼつちで、商法といふ女である。店を閉じて商賣をして居るのではない。包を背負つてあるく行商で、櫛、簪、天窓のもの一式、化粧品、袋物の類、上包に注目を記て書いた紙袋、問屋でかりて商をする。年の曉上高・下間この所謂稼・南二分をキチンと納めて、二ヶ年でから五年越で、男かたかつて、獨者で、素性の分らない女だけれど、橋詰の交番でも決して薬は

疑はない、と片附しらべの顔にもちつともかはりはないといふが、誰でも一見して其だと思ふ。推量とは大いに異つて、神津は口數を多くはかない、また柄になく實體で、酒はのまず、賭博はうたず、三味線は彈かず、唄はうたはず。朝早く宿を出ると、直に洲崎へ行つて、いつでもお晝は峰八幡といふお茶屋で濟まして、晩方歸つて來ると背の口から戸をしめるのが例であつた。だから今夜のやうに、かう晩く歸ることははないのだけれど。洲崎には、胡蝶が居た樣でも、賭場へ這り込んで居た峰八幡でも、顯の顔に瓜二ツだと評判した神津が此處へ來合はせたのは、何かの縁があつたんだらう。

## 刎釣瓶

### 十七

「をばさん、據のおまじなひに蚊帳を着せると可いッていふが眞個よ。」

井戸側に來て立停まつた。神津は紺の單衣に緞子の帶、昨夜のまゝで朝戸出のまゝ、黄楊の櫛で、藍の入つた手拭を提げて居る。朝の七時前で、井戸の際が裏口になつてる清元の師匠の内はぴつたり閉つて、横窓にかけた簾の前に釣るした水色にちよい散らした岐阜提灯があけがたの日影に褪せて白ずんで、窓の竹格子の中に動きもしない。あたり一面に鎖ざしめつて、師匠の家と合角の材木屋の戸にかけて巨大なる十五六本の材木が軒にかさなつて、すつくり屋根の上に聳えて居る。其上の方に白色の天が見えるばかり、狹ッくるしい路地で。井戸側に米を磨いで居た婆さんは、赤ッちやけた髮だらけの、面の皺を兜めながら、でつかい口をあけて白い歯を出して、眼ざめるやうな神津の洗つた顔を仰いで見た。

「はい、さうでございますよ、效きますとも。またね、擂鉢を天窓へ被せて、底の眞中へ灸を据ゑるのもございますかね。」

「それぢやあ髮が生えて飛びやしませんか。」と微笑んだ。婆さんも打笑ひ、

「大きに左樣でございました。何ですかい、誰方ぞ。」

「はあ、」と、さそくに輕く受けて、神津は自ら頷くやうにいつた。

「昨夜の可愛いのがね、」

「おや！　據で。それぢやあ、何ですけれど、いつになく晩いお歸りでございましたから、また、」

「何うも御迷惑をかけまして濟みません、構はないで寢て下すつたら可かつたのに。」

「いゝえ、いゝえ何、何ういたしましてに、そんなことは可うございますけれども、何かお連樣だと思ひましたがね、あなたの肩にお縋んなすつて、最暮でよろ／＼して入らつしやいましたので、其に何だかお召物も損じてをりましたやうでございますもの。何處の若樣だか、御病氣ぢやあないだらうか、婦さんお一人でお手が足るまい、お困りなさるであらうかつて、角の師匠もちらりとお見懸け申したまゝでお案じ申しましてね、あの人も深切でさ。ハイ／＼と起きて出て寢衣のまゝでね、私と二人お内の前へ立つてましたつけがね、存じの外お樂だし、夜更ではございますなり、うつかりお見舞にあがりますのもと、さう申してね、其まゝで内へ入つたんですが、お使でもあつてお呼びなすつたらと、氣を付けてをりましたよ。はい、さやうでございましたか。」

「何うも御深切、お氣の毒でなりません。」

「何のあなた、そしてお歩行でございましたかい。」

「なにね、葉茶屋の處まで腕車に乘つて來たんだよ。私がついてさ、もうあの時分になつちやあ不自由ね。」

「お合乘だと可かつたでございませうのに。」といくつになつたか不知、元氣のいゝことを云ふこつた。

「何だつて？」と笑つて問返した。

「はゝゝはゝ、」と高聲で、婆さんは指についた米を落して、

「ぢやあ葉茶屋の前から、」とわけもないことをいつて置く。沖津は眞に受けて、

「其邊かね、をばさん、何となく。」

「まつたくでございます、」と深く頷いた。

「何がまつたくさ、ほゝゝ、をばさん、こんなおばあさんだから、私、孫のやうに見えるだらう。」

「いゝえ弟御樣のやうでしたよ。」

「おや、をばさん、ちと妬けるんですか。」

「何ういたして、壽命の毒でございます。」

十八

「串戲おやないね、眞個に、あの位な伜が一人欲しいもんだね。」

「棄んだことを。」

「いゝえ、あの娘が十九だといふから私が八の時に出來た兒さ。ちつとも不思議なことツてありやしないよ、でもお前うそにもからかつて見る氣になるのかね、」

と沖津は何うしたのか、これをば眞面目になつて聞いた。婆さんはやゝたじろいで、

「へえゝ、それぢやあ、ではないのでございますかい。」むつと口を塞いで頬張つたやうな顔色をする。

「馬鹿にしないねえ。」と沖津は投げやつたやうにいつて、バッタリつゝかゝつて井戸端に両手をついた。井の底にぢやぶ〳〵といふ水の音がする。沖津は何となくのぞいて見た。婆さんは米を、ざざ、ざ、ざ、ざらり〳〵とやる。沖津はやがて思出したやうに、

「をばさん、もうあの孑孑の殼は上りませんか。」

「お天氣つゞきですつかり澄みました。」

「どれ。」といつて刎釣瓶の竹を握つて、どぶんと突いたのを取つてあげると、米磨桶へ水晶のやうなのか一幅になつて上から注いだ。つめたい風が面を打つた。

「一杯あげませうよ。」

婆さんはびつくり身を退いて、變な手附で、ちつと見て、

「こりや、こりや、何うも、あなた何うなすつたんでございます。これは、」といつて不思議さうにまた桶にあふれるばかりの水を見た。

「些少ばかしお癡の氣さ。」と沖津は立直つて靜かに手拭で手を拭いて居る。

「はい〳〵、何うも此節は、こりやこげますね。」

「御迷惑なの。」

「いえ、おだいじになさいまし。ちよいと暗い路地でお色艶の悪い處をばかりお見上げ申しましたんでございますけれども、何う〳〵品のいゝつたらない、立派な若樣でございますが、何だかお弱々しさうですから、何それりや否なら知れてますけれど、また。」

「あゝ、大變苦むから、心配たつたよ。あの後がひどいのさ。お前、内に入つて床を敷いて寢かしてあげると、悪寒はやんだやうで、こん度は酷い熱でね、足をばた〳〵やつて、もうあつちこつち寢返つちやあ、身體の置場がないやうに惱むのだもの。私やもう世間があると思つて我慢はしたが、あゝ〳〵見だつたらな、」沖津は乳の上へ手をあげて両手で胸を押した、

「私あ衣服を脱いでこの身體に水を浴びて、冷たくして、しツかり抱いて、抱いて、抱きしめて介抱して遣りたかつたよ、」

「まあ、」

「だつて、苦むんだもの、可哀相で見て居られやしない、一思にとさう思つて、ほんとにじれつたかつた。」
と荒僴する。婆さんはどぎまぎする體を示して、
「これは、ハヤ、何うも、何と、御挨拶を申上げて宜しいことやら。」と手をつかねて茫然たりで居る。
「おかまひなく、何うぞおとぎなさい。」
「はい、おかまひなく、何うぞ抱ッこをなさい。」
何故だらう。おまへは、年寄の癖に何んでもいふことに色氣があつていけないよ。何も母様が小兒の介抱する分には、抱いたつて、吸つたつて、可いぢやないかね。
「だつて、あなた、たとひほんとの兒だつたつて、十八九にもなつたものを、母様が抱かれますか、尤も婆さんには茶呑朋達、婿には養子といふ名にしたのもございますけれどね、まさか、あなただつて、ほんとの兒ならばなほのこと、何うして乳だつてのまされますか。」
「私は平氣さ。」

十九

「そんなら一層のこと、何もそんな苦しい御趣向をなさらなくッたつて、誰に御遠慮をなさいますものか。角の師匠だつて何時でも姉さんにお一方あれば可い、一寸々々内證で教はりにあがつても、窮屈で、氣が詰つて、ほんとに横ずわりも出來やしない。何うもいくら苦勞人でいらつしやつても、道樂もしない方は何だかケンがあつて、叱られさうで、恐いやうだ、困る困るッて、さう申して居るのでございますよ。いえ、私はじめお長屋中で、是非お一方とれ、寄ると障るといふのでございますもの。男狂をなさらなくつて困るッていはれるのは、あなたばかり。是非、あいよ、といふ寸法になすつたら宜しうございませう。何ならば、私が孫を當見をする氣で、あの若様に申しませうか、なまなか伜だの、何のといふことになりますと、物騒でございますから、」
と婆さん雀屋もやるのださうで。沖津は判然といつた。
「其は否さ。」
「いけませんか。」
「お斷り申しますね。」
「ま、何故でございます。」
「いけない譯があるんだもの。」とおもと思はせぶりで居る。
「へえ、何ういふ譯でございますね。」
「其はいはれない。をばさん、解らないだやあ。」
「何つちが御馳走します。私かね。」
「あゝ。」と合點々々をした。
「途方もない、しかし不可ませんか。」
「駄目だよ。」と沖津はまた破顔した。婆さんは故とむくれて見せて、
「御勝手になさいまし、何も斷つてとは申しません。」
「そんなこと言はないで、をばさん、ものは相談だがね、何うだらう。」
「それ御覧なさい、年寄のいふことに外れッこがあるものですか。だから言はないこッちやありません。可うございますとも。何、すぐ嬉しがらせてしまひませう。しかしお若うございますから、何てッてお呼びなさいますね、旦那、變てこだ。モシ若旦那、をかしくないこと。」
「何、わけありやしないよ、チョイと伜や——と斯うだ。」
「人、おもしろくもない。」と婆さんはまたむくれる。沖津は手をあげて、
「あれさ、何だつて、氣が早いね、何も相談てッたのは、そんなことではないのだから。何うだらう、そんないつらしいことなしにして、息

手にして抱いたら惡いだらうか、世間で何とか
かいふだらうか。」
「まだあんなことを云つていらつしやるよ。」
「眞個だよ。をばさん。」
「それぢやいけませんね。」
「何、ちよいとさ、たつた一度で可いのだから、
まあさ後生して下さいな。」と、わざとであらう、
然も思込んだ體である。
婆さんもうるさげなく取合つて、
「まづ、いけません、そんなことお話になるも
のでございますか。」
「何卒一ツ因業をいはないで、ちよつとだから
大目に見てくれないかね、私あ可愛い人形を
抱いた氣で居ようからさ。」
「人形が動きますか。」
「動くよ、手も足もふら／＼動くだらうぢやあ
ないかね。」
「いろんなことといつて、あなた、人形がものを
いひますかい。」
「さうね、それぢやものをいふ人形だと思つて
我慢をしよう、何うだね。」
「駄目でございます。」
「あきらめて、人形だと思ふ、といふのに。」
「いけませんよ。」

「何うしてもか。」沖津は眞らしく歎息した。
婆さんも思はず釣込まれて、
「も、そんなに御執心でございますか。」
「あゝ、あんなのが母様といつて抱かれてくれ
りや、世間で默つて抱かせてくれりや、も一度
抱きあ死んでも可いね。」と沖津は身に染みたや
うにしみ／＼いつた。顏は淋しかつた。

## 二十

が、忽ち忘れたやうに笑つてしまつた。
「串戯だよ、まつたく、年寄をつかまへてさ、
御免なさい。ほゝゝゝほゝ。」
「誰があなた。ですけれども、何だかしんみり
お氣の毒なやうになつたぢやございませんか。
それとなく承つてをりますが、あなたもお兒
樣があるんですつて、何故一緒におなりなさい
ませんか、そんなことは知りませんが、夜分お
歸りなすつちやあお火鉢のむかうで、あのお襟
に入つ人形を抱いて、うつむいて、考へて、唯
お一人で淋しさうにしていらつしやる時は、氣
の故か、あかりも光がないやうに見えて、お可
哀相でございますもの。何、構ひますものか、
それこそ、裸身になつても抱きなさいまし、何、
人、何といひましたつて。」
といひかけて婆さんは身を起して[illegible]

た。沖津はまた[illegible]、横濱か
寢覺の故か窶れて見える。
「をばさん堪忍しておくれ。全く昨夕は堪らな
かつたのだ。」と、[illegible]な顏をおさへていつ
て、がつくりうつむいた。
「おやあ何、おまじないの蚊帳なんか、お着せ申
しなさらないで、さうしておあけなされば好う
ございますのに、人が何かいふもいはないも、
第一あなた、見てるものはないぢやあございま
せんか。」
「なんのツていふけれど、をばさん、門にたつ
てたといまおいひぢやあないか。年甲斐もない
れ、罪だよ、お前。」といひながら、うつくしい
唇を襟にかくして歯を見せないで居る。
「やれ／＼、折角お案じ申して居りや、もう[illegible]
[illegible]たこツた。これは、[illegible]をすると、いろんな
目にあひますよ、はい。」とぐつとあをむいてお
天氣を見る。沖津は顏をあけて、キツと唇を
しめた。
「串戯だよ、をばさん、ねえ、私あ些少も構
はないけれども、何うしてさきは生先の長い方
だ。かゝりあつた場處が惡かつたから、いづれ
家でも分つて、ちつとでも風説をする引かゝり

が出來ちやあ惡いと思つたから、其でね、私の家へ連れて來るのに、わざとね、車夫は葉茶屋の前から歸してしまつたやうなわけでね。あれは、をばさん、何のよ、それ何時かも談したつけが、洲崎の、あの私の大好な可愛いおいらんのあれさ、」

婆さんは初耳ではないらしく、さもあらむといふ顏色だつた。

「なるほど然うでございますか。御道理なこツた。何か首ッたけださうで、」

「兩方とも！」

「世話はございませんね、何も若い內でございます。」

「だからさ、困るんだね。昨夜は何だつて、おいらんが洲崎を出てから、はじめて逢ひに行つたんださうだ。其がね、何でもまだいろ〳〵都合があつて、多時逢はないつもりだつたさうだけれど、をばさん、私ン處のお客がね、久しく瘧を煩つてゝ、昨夜はじめて戸外へ出たんだつて。歸宅が晩くなつて、病あがりだから、ちつと單衣もの一枚ぢやお寒氣がしたさうさ、おいらんに寢ンね子を着せて貰はうと思つたんだつてね、其が因で飛んだ事さ。」

「おや、ま、內へお歸りなされば、親御樣がありませうのに、不孝なこツた。と婆さんは、罵りながら頷いた。

「其處が難有い處ぢやあないか。結構なこつたね、をばさん。」

「何が結構なものでございます。こんな母樣ぢやあ心細いこツたよ。」

「いゝえ、私なんざまつたくよ。衣ものだ、家だ、お金子だ、芝居だつて、皆な人樣の前で見得をするんぢやあないかね。自分にやあ何にもならない。ほんとに生命も入らないといふはいろの事だもの。」と、沖津は井戸側の圓の三分の一をぐるりとまはる。

## 二十一

「むす子に女が出來りや、其ために働きますね、せつせと逹引くわ。娼妓だつて、藝妓だつて、何だつてかまやあしない。好いた同志一緒にして好い服裝をさせてさ、苦勞をさせないで、座蒲團の上へならべて坐らせて、私は傍の方で一服のみながら見て居ますね。」

「そして二人で莞爾々々して居られちやあ憎いではございませんかい。」

「さうさね、あんまり澄ましたら、眞中へ人形を抛出してやらうか。」

「へえ。」

「さうしたら笑ふだらうから。」

「あなたも他愛のないことをいつていらつしやるよ。」と婆さんは一切心得たやうなものいひである。沖津の方は熱心に、

「あら眞個だわ、何んなに樂みだらう。お腹が空いた時分にやあ、何か見繕ひますね。ちよいと三品ばかりで、いゝ、いける口なら一銚子添へるかね、で、お給仕をするさ、嘸睦じいことだらう。」とものおもふ狀していつた。

「もうさうなるとお家は退轉だ。」

「勿論二進も三進も行かなくなりや、其處は思ひ合つたなかだもの、いづれ心中をするだらうさ。さうすりや一緒に葬つて墓の前へ女郎花を少し植ゑるかね、塵一ッ葉ないのに、あか桶の新らしいので、其女郎花が少しさ、薄月の晩でも參詣して御覽な、私あ尼になつて附きつて居るよ。」

婆さんは釣瓶の棹をどんと向うへ押して、桶を抱へてしまつた。

「何うも飛んだ難有いお聽聞をうかゞひまして、こりや、死んだらば迷ひませう。あゝ、罪なこツた。南無阿彌陀。」と澄ましてツンとして行かうとする。沖津はあでやかに微笑んだ。

「お待ちよ、ちよいと待つて下さいよ。あらまあ、

實は些少後生して貰ひたいことがあるからさ。」

「もう、よしませうよ。また抱いて寝たい一件でございますから。黄粉ぢやいけない、小豆でくれろ、と下駄を穿いた足をあげたり、下げたり、小稲を抱へた儘、ご満悦でがえ〳〵やる。

「何さ、それや。

「いゝおやあいけない、俺で抱かう。あ、黄粉ぢやいけない、小豆でくれろ。」と節。

「おや、おや。」

「いえ、一寸、宜いからさ、人形を抱いたと思つて我慢をいたしませう。いえさ、ものをいふ人形だと思ふからさ。」

「何、したね、をばさん。」

「あ、黄粉ぢやいけない、小豆でくれろ。」と片手を泳ぐやうなふりで婆さんは躍り出した。

「おや〳〵。」

「あ、黄粉ぢやいけない」と、ます〳〵躍る。

「弱つたね。」

「何ぞ御用でございますか。」と、けろりとして眞面目になつて、ずつと傍へ寄つて、まるで忘れたやうだ。

「あゝ一寸ね、入舟町まで、」

「唯今直ぐでございますか。」

「いゝえ、も些少經つてからが可いだらう。」と沖津は懐から手紙を出した。

「はい〳〵、」と默りにかゝると、上下を持合つて、手紙の上書を二人でうつむいて見た。

「ね、此處さ、それ。いまいつた遊女が居る、新造の内だ。」

「何でございますね。」

「一ツ呼出して、介抱をさして遣らうと思ふの。」

「それぢやあいよ〳〵おやんなさるね。」

「あゝ、いまいつた通り、思入嬉しがらせて遣らうと思つてね。

「だつて、あなたが何うも傍についておいでなすつちやあ、おち〳〵話も出來ますまい。」

「仕方がないや、邪魔にしたら、をばさん、私、お前ン家へでも遁げて居ようか。

「生命にかけて、」

「え!」

婆さん頸を叩いた。「おかくまひ申しませう。」

「馬鹿だね。」

## 二十二 たの字

「しかし何でございますかい、あなた、此手紙を持つて參れば用は辨じますかね。新造の内に遊女が寝て居ると來ちや、他所の内とは違ひますからね。まるで見當がつかなくツて、様子が分りませんが、何うでございませう、其邊のかけひきッてや、何かに置くことはございませんか。棒を出したやうに手紙を突出してひよつとまた私の粗忽になりますと悪うございますが。」

沖津は其注意を喜んだ色あつて、

「あゝ、それも、そりや大ありだけれど、構やしない。彼の妓についてゐるのは宗平だもの。あの、船頭のさ。」

「なるほど。それぢやあ、あなたにはぐうの音も出ませんね。」と婆さんは安んじた様である。

「だけど新造が居るからね、ま、ちよいとしたつて知れた事た、いづれ食物にする氣だらうから、一ツ二ツは言句があらうけど、手紙にも書いて置いたお前も立派に口を利いておくれ。沖津がいひました、お君さんを貸して下さい、決して御損はかけないから。」

「はい〳〵、決して御損はかけないからツて。」

「さういつておくれ、大丈夫だよ。」

「いえ、そりやもう二言とは申しますまいが、また面倒なおかゝりあひにでもなりませんか

ね。」
「ちつともかまはないよ。」
大鏡帆をお入れなすつた。よツぽどお氣に入つたと見えて
「其の黄粉ちやあいけないだらう。ほゝゝゝ、」
「大きに。しかし、あなたえ。」
「何だい。」
「案じられますね、達引は可うございますが、却つて罪をお造りなさりやしまいかと思つて。」
「何故、をばさん。」
婆さんはおちついて。
「近い處が、でございますね、」と少し考へた。
「一體あの若樣はありや何處の、ま誰方なんでございます。」
「鼎さんとかいふさうと。一二度おいらんの部屋で見かけたばかりで、別に話をしたこともなかつたが、何だか可愛くツてく、夢の間も忘れないで居たんだけれども、何處の方だか些少も知らずさ。」
「へえゝ、御存じない！」
「だつてもね、第一あのおいらんが知らないぢやあないか。まだ馴じんでから手紙一本出したことがないといふもの、何うしてもいはないツさ。それでもこたへあつて、誰に見處をつけたさうで、夢中になつて騒いでるわ、そんな人さへあるぢやあないかね。
「それやまあ其で可うございますが、いつれ其位で、そして御見懸け申した處では御身分が良いやうに見えますがね、こゝを申すのでございますよ。近い處が、其遊女の方ですがね、あつちを出てからがハゝ、他に、それや内證ではありませうが、仕方なしにだツて、宗平といふのがついてをりませう。考へて見りや、カラ婦人が無茶苦茶になつた身體でございませう。世間おやあ、若い人の出戻りでさへ嫌ひますのに、身體を切つて賣つてる人ぢやあ、何うでございませう。若い時はたゞわッとおもしろいので、後前の考へがなくツて好うございますけれども、身體あ汚れてるし、人に挨拶ツたら、ては、入らつしやい、ことあをむいていふものだと思つてるものを、何うしてあなた、末遂げられるものですか。」
沖津は瞳をためて、睨んで婆さんの顔をキツと見た、井戸流に立つた、立つた身體がしまつて、稜々とした趣である。婆さんは些少も氣が付かないで、
「ちつとでも深くなりますと、あとが泣になるなあ知れてをりますからね。殊にまたいまおた賣物買物といふんぢやあありませんから、うつかり手を出すのは無分別でございますよ。お年も少し出世前のお身體でございますから、御身分に……」といひかけた。
沖津は聞いてる内に著しく顏の色がかはつて、得堪へない苦痛を感じた狀で、胸を抱いて震へたが、額には、筋が見えた。鋭く突込んで、
「分つてるよ、をばさん。お前も江戸でないことをいふ人だねえ、そんなことあ山の手のお臺所か、ふむ、問屋の隱居所でいふこッたた。惚れあつた奴が逢曳をするのに親も何も入つたものか。世間も何もありやしないやね。毛の生えた團子のやうに固くなつた素人の女あ、小生意氣に何の人、おもしろくもない。嫁ツてことあ昔から、ざらに御用はございませんか、年頃になりましたからと、門並聞いてあるいて、間の抜けた處へおつぱめるんだ。仕入ものゝ、店ざらしで押賣よ。酒屋の用聞と大した違はありやしない、暗爭とぶつた樣に手さぐりの趣があるわ。盲づかみにぶつかつた處で、嫁だ、お婿樣だ、胡瓜と南瓜のはち合せぢやあないか、氣の利かない骨頂だあね。お互に好いつ好かれつさ、思ひ合つた同志なら娼妓だつて何うしました、すきで身體を削るんぢやあるまいし、素白

のおまじなひに泥水をのむんぢやあないわね。をばさん、仕方がないからだ、腹散々玩弄にされて、なぐさまれた、それで、身體が汚れてる、出世の邪魔になる、灰吹だ、汚えなんて、素人の知らない苦界の中で、水責火責にあつた上で、世の中からすてものにされちやあ、」

沖津の脣がふるへて居た。睚をあげて、胸をしめて、

「こんな、そんな。間尺に合はないことッたらありやあしないよ。をばさん、おいらんが氣に入らなきあ、お天道様にさういふさ、私等の知つたこツちやあないのだから。」

「……」婆さんは眼ばかりまじ〳〵だつた。

「と、まあ、いつたやうなものさ。」と、沖津は色を直して切なさうに笑つて見せた。が、肩でいきをついて居る。動悸の音も聞えたらう、氣を靜めて見れば一通りの激しやうではなかつたもの。優しい聲で、

「ね、をばさん、だから後生しておくれ、可いぢやあないか。」

婆さんはこれには答へないで、後ずさりをしたが、忘れたやうに、持つて居たさッきの手紙をちよいと押戴いて懐中に入れたと思ふと、胸をはつて、足をあげて、

「あ、黄粉ぢやあいけない。」と、とん〳〵〳〵、と足拍子で、水を切るやうにばッさりと手を掉つた。

「驚いた。」

「あら、小豆でくれろ、黄粉ぢやいけない、どッこい。」と蹈込つて、矢張小桶は抱へて居る。

「あ、黄粉ぢやいけない小豆でくれろ。」

と莞爾笑もしないで、ばさり、とんと躍る時、師匠の家で裏口を通る音がして、ばつたり縁の戸のあいた時、にほやかなる人の氣勢がした。正氣づいたやうに婆さんはいやんとなつて、

「あら〳〵お眼覺だ、」といつて呵々と大笑する。同時に沖津も見返つて、清しい調子で戸の内を呼んだ。

「たの字！」

「は、姉さん。」と、姿は見えないで、婀娜たる聲なり。

「昨晩は。」といつたきり沖津は身を返した。

「をばさん、それぢやあ。」

「はい。」と頷くのを見て、其まゝずッと放れる、ト背後の方で、

「何ね、御案じなさることはないのでございますつて。」

返事もなくッてさら〳〵といふ裳の音、

「起きないかよ、三や、おひるだよ。」と呟むさうだつた。

## 後姿

### 二十三

結立の低島田、露の垂りさうなのに鼈甲の櫛、笄はなしで、白と黒とを交ぜた矢絣のお召縮緬の単衣を素膚に着て、黒繻子と獨鈷入の納戸色の博多とを打合せの帶、これをお太鼓に高く結んで、平打の帶〆で、小造の後姿、些少うつむいたなりの襟白粉、透通つて鬢の毛が映りさうだ。胸へ雨袖を合はせた下へ、しをらしく、人形を抱いたまゝ、駒下駄の低いので、前さがりになつた氣味の裳を搦きながら、水色縮緬の蹴出し素足に搦んで身輕に腕車から下りる、と傍目もふらないで、いそ〳〵と、富岡門前町のトある材木屋と清元の師匠の合角の路地の薄暗いなかへ入つて、暗まぎれになつたが、中ごろ岐阜提灯のあかりがぼッとさしたなかへ、浮かんだ色で、水を浴びたやうになつて見えたと思ふと、駒下駄の音が停んで消えてしまつた。ちやうど其日の灯頃のことである。

# 百夜通

## 二十四

はじめつからをかしいよ、私たちは思ひましたわ、年紀あい、年紀だけれど、あれでね、お宿さん、見なさる通りまだ小々しくッて、ちよいと眉でも引かうもんなら、何うして浮由はない、沒法界な年増だもの。何でも浮世か、こんなことといつちやあ、あなたの前だけれど、遊女あがりとでもいひたいやうな、凄いんですから、腕はよし、お前さん、自由は利く、其上器用はと云ふと彼のおとなしいのでございますもの、沖津さんに口説かれましたね。さつとさうでございますよ。わけはありやしませんぜ、一坊やかなんかで、お前さん、膝の上へ横抱にして（お乳ツて）なことをいつたんでございますさうさ。眞個にあなたにや、お氣の毒でなりません、私アあなたが此路地へはじめてお通ひなすつた日にお迎に參つてから、も、久しいお馴染でございますから。」

婆さんは、今夜もお君が、從に沖津が襟から戸を鎖してしまつた、物音のしない、空屋かと思はれる、緊めしい門に立つて、立盡して、小半時、戸外の道にはハヽ夜廻の拍子木が聞えるやうになつても、まだ歸らないで、果はシクシク泣いて居たのを、見るに見兼ねて、自分の住居へ抱くやうにして連れ込んだのであつた。

「つい此間だと思つてますが、もう年寄はからやつて夜半は綿の入つたものを引かけないぢやあならないやうになりましたから、久しいものでございますね、何の位經ちましたら。」

「二月になります」とお君は細い聲で一言いつたが、悄然として俯向いて居る。婆さんは甲の赤い、掌の白い、皺だらけの手の指を折つて、

「もうなるほどそんなになりました、何でございますね、あなたが一日おきにお出でなすつたとしても彼是三十度でございませう、私はよく覺えて居りますが、此頃ぢや毎晩うちでございますから、百夜通ひ……の、」といひかけて、顔を覗いた。腹の中では、「あら、をばさん」と來て、ちつとは笑顔もするだらうと一層巫山戯たつもりだけれど、今は心こゝにあらずで、お君は思屈して居るのだから、

「はあ。」といつた切、俯向いたまゝであつた。

しまつたな、と思つたが、すかさない。

「いえ御道理でございます。そりやもうお察し申しますとも。……其だのに、何でございませう。若樣に首尾よくお逢ひなすつて、いそいそして、をばさん今晩は、なんて、權四郎ン家の軒半提灯のあかりで袴傳、通りがかりに聲をかけて下すつたのは大概五六度きやありませんでございましたね。眞個に從前になつて、あなたと若樣とが、沖津さんの處へこの路地をお入りなさる日は何と嬉で、そこんな裏長屋も輕脈春めいて、花が咲いて、月が出たやうで、私なんぞ、蔭ながら嬉しいよりて、若返つた心持がしましたのに、いやもう此頃は、雨やら、風やら、お天氣模樣もこんなになつちやあ、あなたが、忍泣でもしていらつしやるのを、行燈の暗い處で聞いて居りますと、氣が揉めてノヽ、ほんとに可いお方を見ちや居られません、お可哀相でございます。」

と婆さんは灯をかきたてゝ、ほつれ髮で居るお君を見た。

「すつかりお窶れなさいましたよ。お顏の色も惡いやうだ、お察し申しますよ。ほんとに沖津さんたらあんまりだ。さきに自分のいひなすつた口ぢやあないか、容くでございますわ、十八の時に出來た兒のやうな方をさ。いけ恥かしくもなくつて、よく口說いたものだ。いゝえ、あなた、だから何ですよ、さすがに極が惡いと見

えてね、先生ぢやあ、何處か餘所へ行つて逢つてるのだと見えて、二日にも三日にも間をあけたッ切。まるッきり寄でらないだらうぢやあございませんか」

## 二十五

「ですからをばさん」とお君は顏を上げた。うるんだ眼で、ぼやけた灯を視詰めながら、

「何卒後生一生ですから神津さんにさういつて頼んで、も一度逢はして下さいな。それや、貢さんにや話して頼んで、お重さんの爲にたつてさういつて置きましたけれど、宗さんもありますし、それからまだあのお重さんが取つたあとに借金はするし、商賣は出來ないで困るといひますから、仕方なしまだ外にも一人二人世話になつて居りますから、」とお君は[illegible]やうにいつて目をつたが、貢さんに顏を見られて、情ない泣顏をした。

「をばさん、お恥かしい、私のかういふ樣ですこと、」とまた涙ぐんで、

「ですもの、そんな了簡で何も不足はいひません。些少も厭しいも口惜いもいへるやうな柄があるんぢやありませんけれど、だけれど、神津さんだつて罪ですよ、あんなに嬉しがらせて置いて、ほんとに内へ呼んどいて、貢さんに逢はせて下すつて、お重さんにやあ極の惡くないやうに、小遣を持たせ／＼して歸して下すつたときは拝みましたもの。貢の方なら捨つてもやりませう。くひついても逢ひますけれど、いろいろ世話になつて、死んでも忘れまいと思つた親切な神津さんですから、些少も恨んでは居りません。可いから、お蔦さんの方で不斷逢はんなら、たまに一度でもお君にも逢はして下すつたつて、可さゝうなものだと思ひますよ。ですからをばさん、さういつて神津さんに頼んで下さいまし。私にや何うしたつて逢つちやあくれませんから、をばさん、後生ですから、お頼み申しますから、何卒ねえ、[illegible]」とお君は[illegible]いもので目をおさへる。蔦さんは腰を張つて一膝出た。

「分つてます、分つてますとも、あなたのおつしやるのは皆尤道理でございますから、私もくッと飲込んでをりましたし、いひました、それやもう、くどいほど、晝間でも、夜中でも、顏さへ見りやつかまへて、さういつてやるのでございますがね、いふことが憎らしい、斯ういふぢやあございませんか。まあ、腹を立てないで聞きなさいましよ。

ほんとに可愛くなつて實の兒のやうに思ふから、お君にあはしちやあ爲になりません、決して逢はせることは出來ません。」ねえ。實の兒が可いぢやありませんかい。

そんなことはお前さん、かういつちやあ、あなたの前だけれど、私がさういつたことでさ。はじめお前さんを取持たうと彼の人がさういふから、お互のために[illegible]思はれるッて、私はいつたんでございまさ。神津さんが、何の其麼だつて何だつて、[illegible]も出來もあつたものかッて、御大層な口をきゝましたわね、それこんなに可哀と思つたんだから、蔦一私に關しても、きまりが惡さうなものだけれど、其處がもうあゝなつちや、思案の外なんでございますね。

（可愛いからはじめは嬉しがらせようと思つて取持つても見たけれど、も一層可愛くなつたら爲にならないと思ふやうになつて、ほんとにもう自分の内で逢曳をさしたりなんど、思出しても身震がする。甘やかすのと、叱るのとは、同一可愛さでも何處が違ひますよ、」なんと何うかしてるやうな言をいつて、カラッキシ受附けませんで、もう呆れつちまつて、あきらめものだと思つて居るのでございますがね。」

お君はぢつとして聞いて居た。

―第一、ご本人がまた何う遊ばしたといふのでございませう。何も沖津さんの處でなくッちやあこれが逢はないといふ、極つたこともございますまいに、あなたお手紙でもお出しなすつたのではございませんか。」

「お内も何にも存じませんもの。お手紙もお言づけも何うして可いのだか分りません、をばさん、何うかして下さいまし」とお君は遣瀬がなさゝうに、力なさゝうにいつた。

# みゝずばれ

## 二十六

婆さんは頷きながらも解せない顔で、

「何うしようにも斯うしようにも、あなた一體、前にも沖津さんがそんなことをいつて居ましたッけ。あんな中でおいでなさりながら、お所も番地も分らない、御存じないといふのは、何うなすつたんでございます。ま、あなたもうつかりぢやあございませんか。」

「いゝえ、そりや聞きたいのは山々でございましたけれどもね、車夫か馬丁か、ざらあるお客さんなら知らず、祕していらつしやるほど、奥床しいやうな御身分を、無理に聞かうとすると、何かいひがかりでもいつて、何時ぞや何かのためにでもするのだらうと、さう思はれてはならないと思ひましたから、こんな身分で怯けるんですもの。是非といふことも出來ませんで、其に、そんな見棄てるやうな方ぢやあないつてことは、そりや分りましたわ。ですから何にも知りません。

そんな遠慮までしてますもの、誰が、おためにならないやうなことをしますものか。それだのに、沖津さんも餘り酷いんですよ。」

「そりやもうもう無茶なんだから仕方がありません。おためになるも何も唯逢はせるのがためにならないのだ、と天窓からいつちまへば、手のつけやうがありません。妙なもので、はじめ何かいつた私の方が、今ぢやあ、あなたが御道理のやうで、何うにかしてと、ほんたうにこれでもね。いろ／＼氣を揉み拔いて居るのでございますよ。」

と自らのみこんで頷いて居る。お君は悄れ切つて居たが、あらためて、

「難有う存じます、をばさんばかりだわ、眞個に察して下さるの。」と、あどけない風で、頭を俛けた。婆さん、のみさした煙草を頑張つて煙管を落して、

「えゝ……も察しますとも。あなた、」と力をいれていつた。お君は膝に袂を重ねて、またしばらく考へたが、兩手をあげて襟へかけて灯にそむけながら、恥しさうに胸をあけた。

「こんな思ひをしてるんですよ。」

見ると、玉をのべたやうな乳の下あたり、あちこち掌で朱を印したやうになつて、まるで漆にかぶれたやうだ。婆さんは一目見ると、口をあいて鼻を皺めて、

「おや、おや、ま、おや／＼、ま、今時こんなこと。えッ、」といつて、つき出して居た顔をぐつとうしろへ引いて、「うゝむ」と大呼吸。

「ね、背中も腕も皆ですの。」折曲げて口をつけた、二の腕の折屈なんざ棒を引いたやうに蚯蚓ばれがして居たので、婆さんは眼を睜つて默つた。

「をばさん、誰にもいつて下さいますなよ。鼎さんや沖津さんにさういへば、其せゐだつていひますやうで、恩に被せると思はれてさけすまれちや嫌ですし、あんまりだからとさう思つて、私だつて知つてます。屆けてやらうかとも思ひますけれど、さうすりや世間へ知れませう。そして洲崎へでも聞えますと、あゝ、意氣地のない、働のない、身形をして素人になつたは可い、

いか、そんな情ない目にあつて居るのかと、朋家輩の思はくが恥しうございますから。醉算段で此方では蕎麥一つふるまひもしませんかつたに、手ン手に部屋から、ね、をばさん、皆ありあまつた中ぢやあなし、小遣をやりくつて素人になるのを祝つてくれました、其につけたつて知らしたかありません。

平生强いことをいつて居た、ばらがきのおいらんさへ、私が出る時、店口まで送出して、素人の姿で腕車に乗つて、挨拶をしました時は泣いてぢやありませんか、羨ましいと思つたでせう。

見返つたら、また三階で欄干につかまつて、煩つてひいいてた人が、氣張つて下さい。早くお前さんのやうに苦界を抜けたいツて、さういつて拜んだぢやありませんか。

なかにや表向はひツそりでも、鼎さんと添ふのだらうツて、からかつて深張の蝙蝠傘をくれました、私も嬉しいから、さうでもないやうな、あるやうな、見得をして居ましたもの。」お蔦は聲を呑んだ。

## 二十七

「蔦、まあ、皆が、嬉しい樂しい思で暮して居るだらうと、さう思つて羨ましがつて居ませうのに、こんな不運な、情ない、みじめな事を、口惜しい、心外な、何うして知らされますものですか。

とさう思つちやあ默つて居ますよ。母様は煩つて居ますから、些少でも聞かしたくなし、誰も知らないで居るけれど、をばさん、三日にあげず折檻されるの。

はじめの内あ可かつたの、宗さんを大事にしろ、旦那を取れ、それも唯々ツて、お重さんのいふ通り逆はないで居ましたから、をばさん、厄介になつてる私に据膳でお給仕をしてくれたでせう。

考へて見りやかるはずみなことをしてしまひました。あゝ、いつまでもこんな家業をして居ちやあ、始終は鼎さんに飽かれるだらう。出たい出たいと思つたので、ツイお重さんの口に乗つて、こんなことにならうとは知らないでさ。借金をしたのも、商賣が出來なくなつたのも皆私のためにしてくれたことだ、嬉しい、深切なと思つて居ましたから、鼎さんに逢へるのばツかり樂みにして、お重さんのいふことを背いて、困るといふから人の世話にもなつて、小遣も入れてやり、義理が惡いのに亂暴者で向う見ずだから恐いといひますから、宗さんの機嫌も取つて遣りましたえ。

宗さんたら、をばさん、洲崎ぢやあ一度來たばかり。日向臭い、あんなもの、大店へあがらうといふ人ぢやありません、蹴ころのお客なんですわ、下卑て、汚くつて、廊下でばた／＼して居たんですもの、お重さんが近所の者だからつて、泣くやうにして頼んだから、顔立だと思つて、他のおいらんに、船頭なんぞ客に取るかと思はれます、外聞の惡い思をして、一晩、それもわづかな間勤めてやりました。心持が惡いから着て寢た縮緬の浴衣は其ッ切人にくれてやつてしまつた位ですよ。

私が素人で居た時分から峰の櫻で居たんですツて、五年と三年思はれたつて、嫌な、誰が知つた事だ、モ、身震がするんですのに、出てからお重さんの家へ行きますと、をばさん、何うでせう。世話になるといふ約束で宗さんが生命がけのお金子を借りたんですつて、私を圍ひ物にでもした氣で、間さへありや入浸つて、酒の酌だ、肩を揉めだ、灸の蓋までとりかへさして、ちつと醉つてども來ようものなら、唄へだの、彈けだのツていふでせう。

お重さんがハラ／＼して居るからケンツクも食はさないで、私あつらあてに。‖土堤の芝、

人に踏まれてヽツて、モ切ない思をして彈いて聞かせると、いつでも其を彈く時は、おきまり宗さんの眠る時で、うと／＼しながら、無理な算段でお重さんに借した金子で、もう／＼困り切つておち／＼することも出來ないで居るもんだから、あせつて、くわツ／＼して、何時も火のやうになつてるのに、安酒でほてつてさ、汗くさいあの足をからやつて……」

と遊女は雨手を組みちがへて、脇の下へ入れた時、顏の色がかはつてぶる／＼した。

「坐つてる私の――仰向で裸體で寢ながら――こゝへ投懸けるの、」と聲がふるへた。

「ぐい／＼緊めるんだもの、私や呼吸が詰つて胸が痛いわ、いつでも來ると酒をのんぢやあきうやるが癖ですよ。

何だか嫌だつて其の時くらゐ、こんな嫌な、嫌な、何ともいひやうのない嫌な氣持のすることはありません。そしちやあ自分は、女房もあつて、子もあるのに、大方蚊帳もないのでせう。女房のものもなくしたんですつて。恐ろしく邪險にして、打つたり、蹴つたり、半病人になつて居るのをはりなぐつて來るんですツて、だから心の鬼に責められるんでせう。自分が苦しむほど煩えるほど、しめつけた足へ力が入つて、ぐい／＼やつて、(我あ……手前をからやつて居る時ばつかりだ。可愛がつてくれ)ツてもがいてる樣な顏でいひ／＼しますわ。モいけすかない人ツたらない。」

## 二十八

「をばさん、それさへ私は辛抱して機嫌を取つて居りました。一時すぎればまた沖津さん處へ行つて我まゝがいへようと、其が樂みで辛抱して、鼎さんの顏を見りやもう何も彼も生れ代つたやうに忘れて居たんです。其だのに、こんなになつて、鼎さんに逢はれなくなりましてからは、をばさん、私はほんとに困るんですよ。」とお君はツツと涙を拭つて、

「さつきもいひましたやうに、お重さんがそんなわけなんですから、宗さんとまだ他に一人二人世話をして貰つて居たんですが、隨分ねえ、辛い思をして取り惡い機嫌を取つて、お重さんの惡い顏を見まいと思つて、ほんとに勤めてやりました。ね、それがをばさん、鼎さんに逢はれなくなりましてからは私あもう何の人の、顏を見ることも、聲を聞くことも、あの、ものをいふこともいやになつてしまひましたの。

もう／＼嫌で／＼、堪りませんから、好なことをして振拔いたでせう。皆を怒らしてしまひました上、宗さんたら、一々お重さんをつかまへちやあ、愚痴をいつたり、威したり、セツつめますものですから、無鐵砲なんで、恐くはありませうし、自分のいつた口で義理も惡うござんすので、其尻を皆私の處へ持つて來ちやあ、初手は頼んだのが、口說くやうになつて、それから泣いたあとが腹を立つて、も今ぢやあ凄味になりました。

考へておくんなさい、眠つツちや分別が出ないからツて、夜一夜手足を縛つて、私をあの蚊帳の外へ轉がして置きました。何んなに酷うござんしたらう。またそんな內は可かつたんですけれど、今ぢやあ、もう亂暴になつちまひまして、(私だちの若い時は小刀針だ、はがひじめだつて、酷い責苦にあつたものだ、それで居ていまこんな食ふや食はずにみじめで居るのは、皆お君、手前の故だ、でなきや苦勞をしたおかけに、新造位は勤まるものを、)ツてさういつちやあ、いろんなれ、酷い目に逢はせますよ。」

お君はかういつた時、限をねむつて殘虐な折檻を追懷したんだらう。眉を顰めて口をゆがめて、身震をした。もつれがみを頰にかけて、顏を動かして胸のあたりをとみからみながらおろおろ聲になつて、

「をばさん、見て下さい、私や畏縮ッちまひましたらうね。」とうつむいて言も途絶えると、婆さんは胸一杯になつて居た溜息を一時に太く長くついた。

「やれもう、ほんたうにこりや何といつて御挨拶をいたして可いやら、一々御道理で、何とも申上げやうもございませんよ。嫌な客も口直しの若様があつたので御辛抱なすつたわ、逢はれないやうにおなんなすつて、そんな酷いことをされるのを、舊の朋輩に心外だつて隱していらつしやる、みんなもう御道理でございますがね、あなたえ、」

婆さんはしばらく考へて、

「時節をお待ちなさるといふことにいたしましたからつて、何だつて、お身體が大事でございませう。もしもお煩ひでもなすつちやあ取返しがつきませんから、此處はねえ、一番穩かに、まあ何も、から申しちやあ失禮でございますが、これが何も生娘で、操を立てゝ居るものを、代官様がなぐさまうといつて、いふことを肯かないで、責折檻をするのではありません、何の道客商賣をなすつた事であつて見ますればね、ちつと其の婆面の小遣位工面しておあげなすつたつて可らございませうぢやありませんか、私は思ふんですが、婦人はあなた操を立てようと思ふ人があつてこそ、そりや他の人に身を任せるのは死ぬほどいやでございませうけれど、いまさらやつて、鼎さんと遠退いて入らつしやる分にや、却つて、人の機嫌をお取んなさるのに、心持が惡くないだらうぢやございませんか。」

「それがいけませんの。」とお君は猶豫しないで、直ちに應じた。恰もさういはれるのを期して居たかの如くである。

## 二十九

「えゝ、それはお重さんもさういひました、鼎さんに操だてをすればこそ、他の人を振りつけるといつたやうなものだ、けれどもいまあの方に遠ざかつてゐて見れば、そんなに何も心意氣を立てることはないツて、さういつちやあ聞かせますが、をばさん、お前さんもさう思ひますか。」

とうるんだ眼で怨めしさうに顏を見た、婆さんは大に氣をうたれて、

「そりや、はや、いつたやうなわけのもので、何だか分りやしない。お君は心弱く納得して、

「おやあ其が眞個なんでせう。其が婦人の操なんでせう。自分の思つてる人のために他の者に身體を許さないのが、其が操といふんでせう、だけども、をばさん、私はいけません、をばさんがおつしやるまでもない、然うとせようと思つて、口でいふばつかりですか、お重さんがあんな酷い折檻をしますんですもの。びしびしなぐつたりついたりしちやあ、（男があつて操立をするといふなら些少は遠慮もしようけれど、さうでなくツていふことを肯かないのは、いゝ、ふてるといふものだ、我儘だ、そんな主の性骨は打挫いて、）ツてさういひますわ。

我まゝですか、をばさん、私は道理も何にも分りません、大方そんな因果な心にうまれついたんでございませうね。」

婆さんは分らないながら、あんまり可哀相なので、また默つて聞かされて居る。

「ですから煩らされて、もう苦しい、切ない、思をして、氣が遠くなつてしまふ時分にも、あゝ、こんな思をしたらこれで大方お天道様も可哀相におなんなすつて、そして逢はせて下さろだらうと、さうばかり思ひました。

それでも此方へ來ちや逢はれないで、すごすご歸りますと、また今度、またそれからと、幾度も幾度も段々酷くなりますほど、此位な思をしたら、これで何かの業が滅して、今度こそ

はと、さう思つて、樂みにして參りますと矢張逢はれなかつたんですよ。

さうしてからやつて參りますのが、自由に參られます身體ですか。よく〳〵の思ひで隙を見ちやあ、來るんですもの。道々佛樣を念じますよ。躓につまづくた、坊さんに逢つては惡い、烏の聲を聞きたくない、とびく〳〵して歩行きますの、ひよつと賭けたことがはづれまして、もう近くなつて躓いてゞも御覽なさいな、早いほどお重さんにいひわけがし安いから、其まゝ歸らうかとも思ひますが、あゝ、この間は坊さんにも逢はないで、烏の聲も聞かなかつた。それで居て、逢へなかつたもの、さうすりやういゝはらで逢へるのかも知れないからと、さう思つて行つたり來たり、なりたけ間違のないやうにと、路地口へもうつかりは入りません。其ほどにしても矢張むだでございました。

これぢや未だ苦みやうが足りないのだらう、可いから、もつとしな、もつとしな、思入折檻しておくれ。ま、此位ならばと今日のおひる、あんまりだと思ひながら今夜こそは逢へようかと、一心になつて來ましたけれど、をばさん何うしても不可ません。

鼎さんの身に祟つちやあお煩ひでも遊ばすと惡いとは思ひましたが、何うせ私の生身を責められて居るのだから、其に面じて堪忍して、いふことをきいて逢はしておくれツて、片手で拜んぢやあ、あの鍮を針でつゝいて見ましたけれど、もう〳〵こんな落目になつちまつちやあ、何だつて利きませんの。此位、此位と思ひ〳〵、思死に、大方死なゝいぢやあ逢はれませんかも知れません。も仕方がない、」

と膝を正して、お君は何か思つたらしく、居坐を直していつた。

「何卒、ねえ、いゝやうにいつて、沖津さんに頼んで見て下さいまし。ですけれども、またこれだからといつて、無理なことをなさつて、鼎さんのお爲にならないやうなことがあつては惡うございますから、それにまたいひがかりをして其せるでこんなだつていふやうに聞えますと惡うございますから、何にもこんなことはいはないで下さいましよ。何うせ殺されるんでございませう、心からですわねえ、をばさん、自分の好ですることを、恩がましい、これも道樂でござんすの、ほゝゝゝ。」と、得もいはれない顏色で淋しさうに微笑んだが、身を振つて、後へひいた膝を浮かして、

「それぢやあね。」

# はがひじめ

## 三十

「お君、お君ぢやないか。」

と鬱し怨じた然もなつかしい聲で、沖見橋の欄干に彳んで、うつかり氣抜がしたやうで居る月の中にうら若い婦人を呼びかけた。垢のついた浴衣の裾を摑んで、毛ずねを出した、肩を張つて、握拳で、ずつと寄つたのは、髪がのびた、頤のこけた、衰へた形の宗平である。

お君は富岡門前から空しく入舟町に歸る道で、人目のない、淋しい橋の上ぢやあ、大方行惱んで月に數つて居たのであらう。餘所行の一帳羅、旦那のお目見得をさせる資本だから、これはいかさずにお重が殘して置いてくれた、あの黒と白と矢飛白の小柄なのに、襦袢なしで、繻子と博多と打合せの帯をしめた、小造で華奢の女の、もつれ髪で、月をあびたから煙のやうな蒼白い光が染みて、晝はまだ帷子を着るのもあらう、洲崎の燈籠も一ツ二ツ次第に消えて、いつの間にかひツそりした時候であるから、夜は、殊に、月夜は殊に殊に川風の冷かなので、腕にも胸にもひツたりおしつけるやうに羅を

吹いて寒さうで哀である。肉のうすい肩のあたりへ、これも痩せた手をいきなり打かけて、宗平はぴつたり並んだ、大いきをつきながら、片手で胸をなでて、

「何んなに探したか知れやしない。此間ッからいつてる通りよ。いろ／＼もがいたがもうからッきし方げえしがつかねえで、瀬戸際だ。な、」といつて宗平は頷かせようとして傾いて見た。お君は肩を抱かれたまゝ丈よりは低い欄干へ両手をかけて、身體を斜によりかゝつて、應じないで俯向いて居る。宗平はくゝめるやうに、

「ぞ、何だ、不義理だらけで、方々、近所せえ晝中あ面出しも出來ねえやな。お重の婆々にもいひ分はあるけれど、どんづまりやあお前の胸一ツだ、お君何うだ、よ、から聞かしてくんねえ。」

と抱いた手で肩を揺すつて引緊めたから、しばらくたゆたうてお君は身を細くして、なやましい顔をあげて、

「何をさ、宗さん。」といひ、眼をおとしたやうにいつた。

「から些少は察してくんねえ、お前、己らお前のためにさ、何んな思をしてると思ふんだ、よ、ほんとにもう生命も何も入らねえ氣になつてるぜ。」

「はあ、何うでねえ、」と細い聲でさういつたが、極めて冷かな意味であるやうに聞えた。宗平はむッとして、色をかへた。

「何い。」

其劍幕が尋常でなかつたので、お君は怖氣だつて、

「何うせ私もたよりのない身體なんですもの。宗さん、」と術なさうに笑顔をして見せる。

「畜生、逆はせやあがら、」と宗平も痛苦の中で荒彌して、

「だからよ、しつかり胸をきかしてくんねえよ。」

「何んなさ。」

「何んなたつて、己らお前、アン婆々、ほんとに其まゝで置く奴ぢやあねえんだが、おらあ、お前が對手だ、お前さへ何うかして／＼くれりや、其、其で思ひ置くことあねえ。ほんとに二進も三進も行かねえんだ、路地裏だつて跫音をさしちやあ、あるかれねえ身の上になつちやつたい、だからよ、お君。」

また默つてしまつた。

「たあ、おい、」と小突くやうにされてお君は涙ぐんだ。宗平は怨めしさうに、

「餘りぢやあねえか、」と調子がかはつて來た。

## 三十一

宗平は氣のあせる胸をせッ／＼さして、

「手前は、何が情ねえ、えゝ！ 何が情ないッて泣くんだい。何も己をば馬鹿にし切つてる、勝手なまねをしてるんだから、おいら見たやうなものに泣かされるやうな、そんな腕のねえ娘さんぢやあるめえ。いはねえたつて、やい、己の身の上を察して泣いてくれる涙ぢやあねえ、フテ泣きてえんだ、人にものをいはせめえ、手をつけさすめえとして泣くんぢやあねえか、狸め、足を出しやがつたな！」

血相が恐しいのでお君はおろ／＼して、

「何ですよ、おまいさん、何うしたんですよ、わけをいつて下さいましな。」と故と落着いてまじめに聞くらしくも裝つた。

「だからよ、手、手前の胸を聞かしてくれッてんぢやねえかよ。」

「何んなことなの。」とすなほにおとなしくいつた。

「何んなことッつたつて大概知れたこッちやあねえか。ほんたうだ、おらあ、もう切羽詰つたんで、もう家へ歸るめえとさう思つて出たんた

ぜ。嘸々病耄けて蚊だらけの中にもがいてゐるか、餓鬼あ餓鬼で、青膨れに膨れやあがつて、腹あ仰向けにして、ぢくぢくして居やあがるか、悶えてあがいてるのが目もあてられねえ。あんまり見じめだから功徳に叩殺して打つちやつて出ようと思つたけれど、それよりや、手前の胸を開ゝ方へ心がせくか、もしひよつとか逢はれなきやあ、百年目でなくツちやあと、足も空であるいたが、ま、おらあ、ほんたうに此處で出ツくはしたんで、がつかりして氣抜けがした位なんだ。だからよ、から大概分つてら。」

お君は殺されたと思つて膽を寒うした。

「だつて分りやしないものを。」

いひも果てないに宗平は恐しい眼で默つて睨みつける。トお君は消入りさうになつて、震へながら、

「あなた、教へなさいな。」と顔を斜めに見て、あどけないものいひをしてまた莞爾した。但し顔色は眞蒼である。

「何うかしてくれツてんだい。」宗平はじれ込んでいつた。

「お金子でも拵へろツていふの。」

今度は宗平が眼を睜つて默つて居る。

「えゝ、そりや何うにかしませうわ。宗さん、お前さん何うにも可いやうにして下さい。」

お君はこゝをさへ逃るれば可いのである。けれども宗平はみんな見抜いて居るので、

「また誰も泥水をのませようたあ言はないや。お君さん、そんな一寸のがれをいふもんぢやねえ、知つてらい、そりや、いくら己のやうな間抜けでも氣安をいはれてほんたうにしやあしねえが、全くよ、己のやうなこんな野郎は、そりや手前の對手ぢやあねえ。對手ぢやあねえけれど、思は同一だ。そりや鼎ツて、少い人のあることは己あ知つてる。よく知つてる。お前の腹も分つてるけれど、意地だ、我慢だ、なあ、お君。己あ世間を狭くしたなあ、何もお前のせゐぢやあねえんだ。間抜けで、馬鹿でよ、だからお重の婆々にまんまと一杯くはされたんだ、お前の知つたこツちやあねえ、咎はあいつにあるんだけれど、あんなものは對手ぢやあねえ。また、まつたくだ、お前ほどの女を何も三十兩でたとひさ、何んな苦しい金子にもしろ三十兩でお前を買つたとは思はねえ。買つたとは思はねえが、己あ始めツから、思ひ込んで居たんだから、心ぢやあ我がものにした氣で居たんだ。から、不足ぢやああらうけれど、蟲でも可いや、生命がけで思つたんだから男の身體で買はれたと思つて、不足なは知れてるけれど、我慢して、我慢して胸をきめてくんねえ。」と切々として絲を斷つ悲痛な聲で宗平はいつた。

## 三十二

身も心もうはの空で、唯のがれたい、放して欲しと、冷汗になつて、引呼吸で、のび上るやうにして、一輪光々として涼しい、清い中空の月を仰いで、足を浮かして居るお君の耳にも、一々貫くやうに聞えてひしひしと胸にあたるほど、お君は死神に取着かれたやうで汗びつしより、背も胸も絞るやうになつて竦みながら身悶えをする。

「もう、こ、これだけいつたら分つたらう、そ、そ、そんなにいやがらなくツたつて可い、何うせ嫌はれてるのは知つてるけれど、面皮をかいた上にいけ年紀をして、あれ見ろ、女にや突出されたと、若い奴等にいはれちやあ、無理かは知らねえが立たねえや、立たねえや。な、嫌だらう、嫌だらうけれど料簡してくんねえ。もう、分つたらう、さあ、放すから落着いて心を極めてくんねえよ、可いけえ、そら、」

といつて宗平は抱込んで緊めて居た手を放した。お君は失神の體でよろよろ後へよろけてほつといふ呼吸をついた。宗平も身を開いて胸を

撫でゝ四邊を見た。其眼で月を仰いで歎息して、それから立直つて、ぢつとお君を見つめ、またゝきもしないで石のやうに立つて居たが、えッといふと倒れるやうに前へのめつて、お君の帶際をむずと取つた。怒につきあぐる聲もしどろに、

「畜生、業畜生、汝まだ遁げる氣で居やあがるな、土女郎め！」

と引きはして身體を捻向かして、また緊めるやうに、頸を抱へた。

「こんなにいつても、まだ何とも思つちやあくれないか、えゝ！　女といふものは、なあ、迷つたほどのもんぢやあねえ。」と、宗平は男泣に泣いてくひしばつて、こらへながら、ぢつと見る。

「堪忍して下さい、堪忍して下さい。」

と罪のないやうな、無心な顏色。見るうちに頬もやせたやうで、激昂の極は喪心した、恍惚として微笑んで居るやうである。其で身體はといふとぬけ出よう、乘出さうで、無意識の如く動いて、帶もそらどけた、裾も落ちた、胸もあらはになつて震へながら、殺されるのだとばかり思ふので、人欲しやであらう、据つた瞳で、のりかへるやうに身もだえしては、あちこち見返つて、いまぢやあ何もしないで唯抱いて、宗平がぢツと見詰めて居るばかりであるのに、おどおどしながらいふこともきかないで、

「御免なさいまし、御免なさいまし、あれ、堪忍して下さいよ。」とばかり呼吸の下でいつて居る。惚れてる女だ。宗平は可哀相になつたのだらう、ガツくりして、聲も和らいで、

「ま、ま、そんなに切ながることあねえ、お前も母樣のある身體だ。ぢやあ斯うしてくんねえ。ともかくも今ッから遁げてくれねえ、其なら可いだらう。ちやうど誰ンだか、うろ〳〵舟が繋いであらあ。あいつを押出しや汐は下だ、ぐいと大川へ突出すかい、沖へでも、濱へでも、銚子なり、潮來なり、あとは野となれ、ま、死なうと、活きようと舟ン中で話を極めよう。なるほど一刻に死なうとしたな、ぢつとおれの方もあわて過ぎたんだ。よ、お君、さうしてくんねえ。も、それだけのことなら肯いたつて可いだらう。うむ、さうだ。些少周章過ぎて注意其處にやお氣がつかなんだ。」と抱いて居た手も弛んで、宗平自らも一方の活路を見出したやうに然も嬉しさうに笑つた。

「はゝ、己も餘程何うかして居たんだい。」と全然其氣でお君を見ると今までとは些少も容子が變らないで、たゞあせつて居るばかり、はッとまた顏色をかへた、沈んだ調子で、

「お君、分らねえのか。」

三十三

お君は全く血の色を失つて居て、

「堪忍して下さいまし、堪忍して下さいまし、」

「だからよ、えゝ！　分らねえか。」と鋭い聲で一喝した。

「誰ぞ來て！　誰ぞ來て！」

もう手もつけられない。できり〳〵と齒を噛んで引摺つてどんと突いた。

「勝手にしやがれ。」

「あれ！」

## 土手の芝

三十四

お君は突飛ばされて一支へもなく、朽木のやうにだうとなつた。しばらく橋の上の月あかりに矢がすりの細い姿を横へたが、帶を引いて裾を亂して、噴出を膝に踏んで半ば身を起して、仰いで宗平をキッと見ると、血眼になつた手に用意があつたか、大巾な出刃を逆手に取つて、鞘を

踏まないばかり咫尺の間近に突立つて居る。
「あツ。」と魂切つて飛上り、猿臂で襟を捉まれたまゝ、恐しいので目もあてられず、お君は立ちさまにうつむけになつて、欄干に顔をすりつけながら、切なる聲で、
「堪忍して下さい。後生です。宗さん、堪忍して下さいよ。」
宗平は激して口も利けないでわなゝいて居る。
「何卒、拝みますから、何うともしませうから、聲なんぞ立てやしませんから。私も、私も、いふにいはれないほど辛いのぢやありませんか。お前さんお困りなら、何んなにもして、お金子を拵へます。もうしばらく、しばらくですから、鼎さんに一度あへますまで、堪忍して助けて下さい。さうすりや何うでもしますから、お金子。」
「金子なんか何にするもんだ。其、其鼎に逢はせるのが嫌なんだ。からなつちや、金子なんぞで取ッ返しがつくものか、手前そりや、他に男があつたつて、己にも相應にしてくれりや、我慢も出來たんだい。この間中のは覺えて居らう。内は、内だ、世間は世間だ。手前の仕向けは、仕向けと來ちやあ、我が立瀬があるもんかい。やけになつて無茶苦茶だ、もう何も後もあつたもんぢやあねえ、斷つて殺しやあしねえから、逃げろ、さ、船に乗れ、えゝ、いけ潜い何うともしろい。」と小雛を取つて引くと、捥ぎられるまでも放さぬ氣、欄干にくひついて、
「嫌、嫌、嫌ですよ、鼎さん、」と悲鳴をあげた、同時に背後から突込んだ。手許が狂つて、脇腹を掠つて切尖が欄干を切つた。トあツといつてのけぞつた、片足が地を離れて仰向けになる乳の下を、これは手應へ固く切込んだ。お君は倒れようとしたが、身を飜してばた／＼と駈出して、必死の思ひでずツと離れる。と宗平は半狂亂で追驅狀に、持つてた出刃を背後から投打する。蛸のやうに飛んで落ちた――足許の庖丁をサツクに拾つて、眼が眩んだから打ツつかつた手負の血だらけな身體を胸へ抱留めて、背後へうつくしい手をまはしたが、吾妻下駄の音を打たして入違ひになり、追つて來た宗平と、抱いて留めたお君との眞中へ、橋詰の處で、ずいと立つたは、色の白い、鼻筋の通つた、口のしまつた、眼の凛として、脊の高い女で、これは小間物屋の沖津である。
「まあ、お待ち、宗さん、待ちなつたら、私だよ。」と鋭くいつて身構をした。藍のやうな顏をして宗平は血走つた眼をきよろ／＼さしたが、釘づけになつたやうである。
「おゝ、切つたんだね、あれ血が、」といつて、少し色をかへたが、うつむいてお君の耳へ口をつけて、
「しつかりおし、しつかりおし、しつかりしてるんだよ可いかい。宗さん、酷いことをしたねえ、まあ、」
と抱へ緊めてながら顏をあげて、また宗平と向合つた。
「もうおらあ、無茶になつた、姉さん、かうなつちやあお前でも何でも對手だい、堪忍してくんねえ。」
とばた／＼して飛蒐るのを、むかうへ突いて、手負を抱へながら一足すさつた。凄い眼で、キツと見て、
「よしねえ、見ともない、嫌はれて殺すなんて、そんな間抜けなのが江戸にあるかい。」

## 三十五

「お君さん、しつかりおし。私だよ、おいらん、おいらん、鼎さんの母様が來たんだよ。」と沖津は此時傍に人無きが如く、アワヤ摑み懸らうとして纔かに控へて居る宗平には眼もくれないで、力を籠めていつて聞かしながら、またゝ

きもしないでお君の顔を見て居た。手負は空を摑んで居た五指を弾いたが、柔かに出て来つて、しつかり神津に縋りついた。

「おかみさん！」とあるかなきかの幽かな聲である。

「私や、おかみさんぢやあないよ、お君や、母様だよ。母様だよ、鼎さんの母様だ。堪忍しておくれ、私あ何んにも知らないで、たゞ可愛い人だとばかり思つてた、あとで分りました、お君さん、私あね、矢張お前と同一だ。ちつとも違はない身の上で、唯あの兒があつただけ、義理であの兒の父上様と分れた時は、お前さんのいまと變りはなかつたのだ。ねえ、だから、お前の心を察して取持つてあげたんだが、よ、お君さん、自分の子と分つてからは、堪忍しておくれ、未が案じられたので、私あ得手勝手な片贔屓だけれど、鼎さんが可愛さにお前には蛇になつたんだ。でも、こんなぢやあるまいと思つたにお前も實がありすぎるよ。むゝ、何、實があるの、忘れるのと、さういふあの兒の心意氣なら、私あ何にもこんな苦勞はしやあしない。かうと聞いたら鼎だつて活きて居てくれようか不知、皆私が惡いんだ、お前さんの心意氣はとつき殘らず聞いて居た、よ。吃驚した。大變だ、それぢやあ思違られるか、今さらくれさしちや何にもならず、宗さんに金子でも貰いて些少心を静めさしたら、幾干か、ま、お前の肩もぬけようかと、夜のあけるのを待たれないで、すぐに才覺をして来たが、晩くなつた、お君さん、世の中にあんな家業したもの、、かうしたことになつちまふのは、お前一人ぢやあないのだから、私あお前とおんなじ思の、其上に乳兒とは分れたし、十年でも生きのびただけ、よッほど不運だわ、察してね、後生だ堪忍してくんなよ。これまでにしてもまだ表向親だとも、名告りやしないは、何んなにみじめなこツたらう。よ、お君さん、堪忍したく〳〵、お前一人はやらないから、」

と耳につけ居た口を放して、また宗平を見返つた。

「宗さん、お前何うしても殺す氣か。」と落着いたものである。

「殺さねえで、其阿魔ア殺さねえで、」

「馬鹿、馬鹿、馬鹿だね、お前は。これ血迷はないでお聞きツてば。何だ、見ともねえ。女房も兒も持つてながら、餘所の女に血道をあげて、其で何かい、出来たのかい。宗さん、嫌はれたつて無茶になつて對手を殺す？　馬鹿だ、お前は。」

一所だつて、こゝ、幾干、お前さん、私お世話になつたつて、いくらお前だッて嫌なことを、男たる！」

「さうとも、聞捨にしないで聞くが可いさ、見ともない、出来もしない女を殺して其で自分も死ぬ氣だらう。いまいつた、さうだ、立派な男だ。立派だけれどね、宗さん、そんなことはよしておくれ、深川の名折だ、よう。」

「口惜いな！」と地蹈鞴を踏んで、宗平は裂けたやうにわッと男泣にないた。

「口惜かあ落着いて料簡おしよ。何うせ、私から起つた事だ、鼎に逢はして置きさいすりや、さまで愛想づかしもされなくッて、こんな氣にもなるまいから、宗さん、お聞き。此庖丁は私が貰つて跡始末をする。お前にやお處置は受けさせないから、ちやうど渡さうと思つて持つて来た金子もある。餘計でもないけれど、湯へ入つて男振を直してくんな。女房も可哀さうだよ、小兒も歩行くやうになつたらう。こゝでまた變手古な男氣なんか出して、私たちに犬死をさせないが可い。」

宗平は身を震はして、ペツたり橋の上に坐つたが、飛んで来て手負を覗いた。

「堪忍しねえよ。お君さん、モひどいことしちまつたい、姉さん、こいつは届くまいかね。」
と、泣いていつた、
「あい、あいよ、あいよ、何だよ、」と、沖津は蟲の這ふのを聞きすました耳に、
「母樣、可愛い子を禁ふものは、憎くないといふぢやありませんか。」
とお君がさういつたのが聞えたので、
「あゝ、」といつた、沖津は血の湧出づる胸のあたりへはら〳〵と落涙した。
「むゝ、分つた、だから一人はやりやしないよ。鼎さんの母樣にはお前の母樣がおなりだらう。私あ取ツかへにお前の母樣になつて、おんぶして行つてやらう。可いかい。」と自若としていつた。宗平はすりついて、
「姉さん、お前さん、お前さん、一體——馬鹿な、べらぼうな、私が、」と、せい〳〵いつて身體をあせる。と落着いて、
「可いから犬死をさせない方がいゝ、もうこれに懲りたら女を玩弄にするんぢやあないよ。蔭ながら鼎さんといふのは私の兒だとお前覺えて居ておくれ。」
「だつて、」と何かいはうとする、川へは船が一艘來た、蒔繪のやうな舳へ燈を點して居るのが月光に幽に青く見える、ト同時に上町の角へ巡査の紅の燈が來る。澄み渡つた月夜に次第に近づくので、此時おもしが懸つて持重りがしたから、横抱にお君を抱いて、仰向に膝に乘せて、自分も躍つたが、あたりを見まはして、
「氣を注けなよ。」
「うむ、」といつて宗平は立つた。船は間近になつた。
「怪しまれると面倒だ、お唄ひ、おうたひな、そしてはぐらかして遣るが可い、來ちやあ不可いから疾くさ。あれ、男のやうでもないぢやあないか。」
宗平はうろ〳〵しながら震へる兩手を握り緊めたが彈き出されたやうに衝と橋の中央へ行つて、立停まると、足蹈をして、蹈占めて、突立つて、舟と辻との兩の燈を月あかりに透かして、睨着けて、聲を張り上げ、冴えた調子で悲げしに且つ冴々と唄つた。

土手の芝人に蹈まれて一度は枯れて
　　露の情でよみがへる。

とお君がおいらんであつた頃から、これが私の心意氣だ、思だといつて、うたひ〳〵したのを、今此時此場合に此宗平が其口で我を忘れて唄つたのを、膝の手負は眼を瞑つてうつとりとなつて聞いて居たが、聞濟まして乘上つて、ぢつと苦しい呼吸で、沖津の頸に縋りついた。眼を据ゑて、
「口惜いねえ。」
「あゝ。」
とばかりほろりとした。震ひつくやうに頰ずりして、
「堪忍おしよ。」と思切つた、止を刺すと返す刃尖で、沖津は手負に伏重なつた。
唄は何處まで響いたらう。

# 笈摺草紙

一

眞先に立つたのは、黑と茶と鼠とを、縦に棒縞のお召縮緬の八尺袖。薄色の楷裏、此袷に、藍鼠地に桃色と紅で牡丹を染めた友染の長襦袢を重ねて、派手な姿。唐獅子を白で抜いた緋縮緬と繻子を打合せの帯。鼠の平打のハチン留。髪は桃割に結つた、年紀は十六ばかりな綺麗なのが、右の手に端を持つた白地の手拭に、中指の尖を繋いで、引張合ひながら後へ續くのは、二十一二の新姐で。一樂の袷の裾を端折つて、水淺黄の下〆をしやんと結んで、下長く、白い脛に緋縮緬の蹴出を絡つて居る。後から結城の衣服に淺黄の長襦袢を襲ねて、博多と黑繻子を打合せの帯。丸髷の横顔を見せたのは、二三度素人に成つたといふ風、何處か世帯染みた傑がある。

右いづれも赤緒の雪駄、一枚裏で歩を惱み、五月雨で日のあたる坂の山路を登つて來る。

「最ちつと急いでお歩行ツてば、焦れつたいねえ。」

と前に立つた一番少いのが後端に手拭を引いたので、片端に縋つて、中に立つた、背へ頭にして續く手拭をかいして居る投島田の新姐は、鬣の立つてる煙管を手にしたまゝ、ぐいと手繰寄せられて、思はず前へ出たので、いま吸つけようとして雁首を揚げてた眼の老妓は、不意に火皿を引手繰られたから、氣抜のした狀、婀娜さん被の口許に吸口をあてがつたまゝで立停まつて、

「あら、」と云つたが默つて見て居る。

「亂暴ぢやあないか、酷いよ。」と、新姐はなぐれた身體を坂道で踏据ゑた時、腹立たしげに云つた。少いのは澄ましたもので、

「だつてさ、焦れつたくツて仕樣が無いんだもの。」

「何が焦れつたいんだよ、せツせツ云つてながら、何だね、お前、そんなに急がなくツたつて可いぢやあないか。」

慳貪にたしなめると、少いのは笑ひながら、

「だつて……」とうつむいて其手拭のさきを捻る。

「だつて何うしたのさ。」

「喜いちやんはね、それ何なんだわ、お前。」と老妓はあゝついた序に、口から其拍子抜の煙管を離して、これを孔いあたり、喜、たとき云つた。

「早く行つて、また旦那に負さつてお吸なんだ……ね。」

「あゝ左樣……」と何か合點んだ顔色で、老妓と目配した目を振向けて、少いのゝ顔を見る。

「だけど、今ぢやあ何うだか不知、ねえ喜いちやん。」

「何か、え、姉さん。」

「何がツて、お前、蓑岡の若旦那はお亡なり遊ばしたからさ。」

「は、だからお葬詣をするんぢやありませんか。」

「其だからの事だね。お前何時でも甘え散らして、初中あの若旦那に負つて貰つたらう。」

「喜いちやん、惚れてたんだわ。」と背後から醉を懸けると、又中のが引取り、

「だもんだから、又今日も負つて貰はうと思つて、それで那樣にさつさと急ぐんだらう。だけ

れど、何うだかねえ、亡なつた方のこッたから。もし負つて頂かれないと、誠にお氣の毒樣見たやうなわけのもんだからねえ。」

「それで、あの、一寸相談をかけて見たのよ。」

「喜いちゃん、何うだい、ほら、こんな風に、」と背後から負はれかゝると、眞顏で眼を瞠つて聞いて居たのが、身もだえしてふりもぎつた。

「嫌だ、私。」

## 二

「でもさ、信が籠ると恐しいもんだからね、また思召に合つて、幽靈に成つて出てお見えなさらないとも限らないから。」

「そんなに氣落する事は無いよ、喜いちゃん、」と中のは背から負はれ懸つたまゝで居た。

「嫌なこッた。」

「あれ、急に薄情に成つたぢやないか、あんなに可愛がつて下すつたものを、お前、お亡なんなすつたつて、そんな嫌なこッたなんて言はうもんなら、それこそ眞個にお怨みなさらうも知れないよ。」

「だつて眞晝間ぢやあありませんか。」と、少いのは言消さうとする、あとの老妓は、ずつと寄つて、

一でも山ン中だし、御覽な、谷も、岨も、峰ン處も、青葉や、草で、一面に蒼青だ。赤いものはお前たちの襦袢位なもんぢやあないか。時ならね時分だから、人ッ子一人居ようではなし。」

ずつと頂山になれば、又丁々たる伐木の音も聞えよう。市から十町とは隔たらない、郡の境の一座の岳で、蓑岡山といふのである。持主であつた蓑岡といふのが、此を開拓いて、我が名の附いた都にしようと、此處の谷間、彼處の峰へ、堂を建てる、寺を拵へる、思切つて小さな芝居小屋も築いて見るで、家も出來たし、茶店も出た。地ならしだ、棟上だ、建立だと、三個所の廓を狩催し、藝妓を勝つて、水いろ縮緬の襷に、緋縮緬の長襦袢で、一昨年の青葉の頃は、每日玉をつけて練出させた。これが花で、押懸ける見物人が、田樂を燒いて騷いだが、彼が故人になつた後は、人口の少い、殊に一年の內四分の三以上までは、雨と雪と霰と、曇天とで持切つてる地方であるから、此山は開けなかつた。で結果は其すべての建物のあつたあとが、三年と立たぬ內、悉く、扇ケ原だの、題目堂だの、餠投松だの、襷ケ岳だのといふ急拵へな稱ながら、ものゝあはれな古跡になつて、他につかひ道はないのであるから、いま女達が踏んで居る土の中には、去年の秋土葬にした蓑岡の主人で、山下の寮の若旦那といつた美男子の、生々しい死骸が、生前一時豪遊を極めて、其驕奢の一の手段であつた、此蓑岡山の頂の下に橫はつて居る。

麓は西北に展けて、裾廣がりに、左右へ果の無い、六十萬石の田の淺翠。又海が渺として片帆が見える。空も拭つたやうではあるが、其年諸國に天變と地異とがあり、豫言が盛に行はれて、槍が降るわ、風が吹く、海嘯が寄せると恐れて居た。其五月雨の頃なので、樹立一つで目の屆かぬ、葉隱れの空、峰の裏、何處に、紫か、朱か、綠青か、人を奪つて去るやうな恐しいものゝ色が潛んで居るかも解らない。眼に映ずるものは、此時彼等の目に唯青葉、若葉、綠の草で、風もない、森とした、此單調な蒼いのが、あまり日が明いから暗いやうである。

山が淺い、東南が市に面して居て、麓の橫町の周圍には、豆腐屋が通つて居る。八百屋が荷を下して居る。トある二階窓が開いて居る。小兒が川緣で摘草をして居る。町中に挾つた花街には、三味線彈いて唄つても居れば、現に三人のうはさをして居る朋輩もあるのだけれども、三人は淋しくなつて、しばらくの間皆默つたの

である。
「だもの、晝だつて、」
老妓はあたりを見ながら云つた。此時は實際少いのを遊ばうための串戯ばかりでは無かつたらしい。
「出ないとは限らないわ、何だか出さうだ。」と仕方なく斷念めたやうなものいひ。此の新姐が手の煙管からは、煙が立つて、脈々と山懐の草の中にやゝ動いてた。

三

「皆がをかしく成つたぢやあないか、喜いちやん、お歩きな、何うした。」老妓は開いて立直つた。
おつかなびツくりで、少いのは進みさうにもしないので、
「さあ、喜いちやん、」と背から離れて、新姐もまた急がし立てる。
「仕やうがないぢやないか、世話がかゝるツたらない。先刻や、せツせツてせツつくし、何うしたのさ。」
「だつて、恐いもの、姉さん、いろんなことを言つて。」と聲も穩でない。
「さあ〳〵お行なさらないか、立つてなすつちやあ不可ませんぜ。あい、馬だ。一條路でござい、先さまからお早く。」と路をせき留められて立淀む。これは一足後れに同伴をして來た、壯い者で、半纏、股引、白足袋の雪駄穿で威勢の可いのが、供養の塔婆を一本、山路と平行の、うしろさがりに長くかついで居て、
「え、もし、お前樣方ア何をこだはつて居なさるんだ。急いで行つてお上げなさい。寮の若旦那がお待兼でさ。」
老妓は慌しく一寸銀煙管でおさへ、
「叱。源どん、お前なほ不可なくしちまつたぢやあないか。お待兼だなんていふから、其で皆が容んでるんだよ。」
「何だつてね。」
「いゝえ、幽靈が出やしないだらうかツて相談をして居たの。」と新姐は言つた。
「はゝは、景氣の可いことを言つて居なさらあ。死んだ人が幽靈になつて出てくれりや世話あねえ、眞個でさ、旦那が幽靈にでもなつてあらはれて下すつて、おい、源やといふ聲が懸りや、此方アいゝ目が出るんです。盆の心配なんざ爲ないんだけれど、あゝ仕方がないや。無駄は止して急ぎませうぜ。お前樣方の歩行くんぢやあ、いくら日が永えたつて追着きません、此頃のお天氣だ。」
と若い者は、眼をくる〳〵とやつて、空を見て、
「曇ると雨だ。さあ、あよびなさい、どれ草分けをしようかね。」と塔婆をかついだ肩を入れかへ、路傍の叢を蹈みながら、並んだ二人の横手を擦り拔けてツト前へ出る。これに誘はれて歩き出したが、皆滅入つた顏色、むだも言はないで神妙に後からついて登つた。
此の坂三町とは行くまでもない、松の葉の落溜る處、やゝ坦くなる坂の上り口、これから次第高な廣場で、例へば原を斜めしたやうな墓地にならうといふ、其取着に、一軒、山番の小屋がある。
掘立の四本柱で、假屋のやうに拵へた、去年の雪垣はまだ取りはづさない、其儘で、雨風に曝された板戸の、隙間だらけなのが四枚。危く倒れさうになつて立つて居る。これが小屋の正面で、向うの峰から、まおもての日向で、蒸した紫雲英を一面に二坪ばかり透間もなく乾してある。
件の墓參詣四人の一行は、若い者がさきに立つて、此處まで來ると、珍らしい、莖がなえて白くなつた、此花の色の、干からびながら赤い

のを見たか、恰ど満潮で埋んだやう、戸口に行かうとする蹤も無かつた。

見ると人の居る氣勢もしないで、板戸を透かす節穴の實は皆暗い。

「え、誰も居ねえのか、こゝで鍬も借りようし、」

「お花も買はうと思つたのに、」

「はてな、何處へ行つたらう。」と四人立亂れて彳んで、姿を入違ひに、あとさきを見まはすと、小高い見晴の丘の裾で、時ならぬ人影を認めたが、小松原の中へぬつと立あらはれた親仁があつて、のさ／＼と上から下りて來る。

## 四

「親仁、おゝい、親仁や、」と若い者は騷々とある山の中へ、張上げた聲を懸ける。聞えたでもなし、聞えぬ？でも無い、親仁が少し前屈みになつた、春の優い形は、段々に近づいた。

草色のどんつく布子に、同一色の繼はぎの半股引、捩れ／＼になつた小倉の固い帶を克明に尻の突さきに結んだのに、たばねた藁を一束、木剪刀を挾み添へて、小さな斧をいかつげに横へた、手には竹箒を持つて居る、何か、植木屋と、木樵と、馬方を一人で帶にしたやうな身ごしらへ。眼のふちが赤くたゞれて居るので、日向が眩いのを、眉毛か光線を遮る蔭から、細くしば／＼瞬いて、間近になると、立停まつて、瞼で嘗めるやうに一個一人瞻つた。

「えゝ、ござりませ。」

「むゝ、親仁、久濶だ。」

「はい、あり難いことに晴れました。これは姉樣達ようこそ。」

「旦那のお墓詣に來たんだよ。お爺さん達者で結構だね。」

「はい／＼、」と云つて、言はれた言をのみこんだ頷をする。

「一寸休まして貰はうねえ、」

「私、水が飲みたいの、」

「種々なことを言ふよ。」

「生憎茶はござりませぬが、水ならば今朝汲込みました、澤山まゐりませ、」と跣足であつたから、紅い草の堆いのを柔かく蹈しだき、片手に箒をついたまゝ、皺びた赤黑い、掌の生白い、大きな固い手を戸の合目に掛けた、親仁は中腰に成つて力を入れると、板戸はかた／＼と鳴つたが、外づれて、音もしないで、生乾の草の上へ沈んだやうに默つて倒れた。

「おい、」と懸聲をして、親仁はゆつたりと躙み、板戸をわきへ掻遣りながら、箒を持つてるのに係らず、手で草を押分けて、

「さあ／＼、」

「御免よ、」と若い者は一足ひよいと飛んで、廂へ彼の塔婆を立懸ける。

板戸の内は横に長い平土間で、たゝきばなしの高低が多い。椿を突込んで二ツ、薄暗い處にならべた花桶も、兩方へ傾いで居る。向う一面の框、片端を四角に取つて、四疊ばかり、其へ筵を敷いてあるが、筵から芽をふきさう、誰もお客になつて坐るものはないのであらう。框の端は板椽の樣になつて居る、こゝへ一列にならんで皆長襦袢を閃かし、白い足を蹈揃へて、赤い緒の雪駄を六つならべて、腰を懸けた。

「煙草の火でも進ぜましよ。どれ／＼。」と親仁は身を屈して入つて來て、片隅に据ゑてある黑燻の土竈の下を覗く。

若い者は塵を拂ひながら笑ひ出して、

「何時焚いた火だ、親仁、朝の御飯を炊いたおきが正午過まであるものか。」

親仁は竈へ天窓から入つて居る。チト籠つた聲で、

「はあ、さうだつけか、御意ぢや。」

「はゝゝゝは、さうだつたつて奴もないもんだ、其ともありますかい。」

「見當らねえさ。」

「何うだ、此樣子ぢやあ、汲立の水が沸いてさうだ。喜いちやん、冷めない内にあがんなさい。」

「嫌だ、私、ぼうふらが居さうだわ。」とうすツ氣味の惡い目をつける。煤だらけの天井裏の蜘蛛の闇を白く見せる光線がさして、ほこりで蓋の白い釜をかけた其土竈にならべて、手桶が一個、流はないから、直こゝで煮焚をするので、土間のじく〳〵と濡れた處に置いてある。少いのはぢつと見て、

「ねえ、姉さん。」

「今に嫩になるから御覽なさい、」と、新姐は手に持つた銀煙管を前髮の上へ投げて、くるりと廻る處を宙で受けた。

「あい、來た、よい〳〵。」

## 五

「人の氣も知らないで憎らしいねえ、咽喉が渇いて、咽喉が渇いて仕やうがないんだもの。」

「私も飲みたくツて〳〵、」といま煙管の小手しらべを御覽に入れたのが、唇をゆがめて胸を叩く。

「そら、御覽なさいな。姉さんも飲みたいんでせう。」

「あゝ、だけども、今朝御飯を焚いたおきを採すんぢやあ仕やうがない、此方アぼうふらが居たつて可いんだけれど、水で煙草はのめないしねえ。」

「何を言つてるのさ、つまらない。」と老妓は二人を制して、

「火打石でも借りようぢやないか。」

「そんだら早やお易い御用だ。」

親仁は蘇生つた心持になつて、漸く竈の中から天窓を出し得た。すぐ釜の蓋にのせてあつた、石、火打釜、ほくちなんど、大方かうして置くと濕らないからであらう。三つ道具を左右の手に取つて、

「待たつしやい、打つて進ぜます。」

こつりとやる。眼がたどれてる上に細いので、カチリと打はづしちやあ、焦れもしないで、またカッチリ。果がないので、若い者は焦込んで、

「私が打ちやす、」と引奪るやうに道具を取つた。

折角締まで下に置いて打ちかけた、かゝる好意を無にされた親仁は、手持無沙汰になり、眼をしばたゝいて、空しく指の先を眺めて居たが、

「どれ、水を汲みかへて來て進ぜよう。むかひの題目堂の清水は甘露ぢやぞい、釣瓶はあるけれどお住持はござらねえ。留守だもんで、御前、日朝樣へ俺あお初穂を汲んであげる。其代清水は俺許のも同じことぢや。へゝゝゝ、中に釣鐘の影法師が映る山の井ぢや。まあ、飲んで見ツさりませ。」

と釣鐘の大さは、身を反らして胸へ抱へる位にして見せて、威張つて手桶を引さげた、親仁は、腰を屈めて足に力を入れて、獨言を云ひながら、てく〳〵と土間から出て行く。

「こんな處に一人住をしてる人だ。何處か變つてらな、」と若い者は指のさきの火奴を吹いて、フッ〳〵と息をかけながら摘んで出した。

「はゞかり、」と云つて吸ひつけた老妓は、一息のどかに吹いて、

「むかしから氣の可い爺さんさ。寮の若旦那が家に御先代の親御から奉公めた人だつて、もう七十餘だらうねえ。かうやつてお墓守までして居りや、大概な者ぢやあないやね。ねえ、忠義ぢやありませんか、まつたくだ。惡く氣の利いたものにや出來ない事だ。」

「はい〳〵畏りました。」と新姐は莞爾する。

「馬鹿におしでない。お前けふは御命日だよ。ちと神妙に致すが可からう。」

と煙管をポンと落して老妓は兩膝に手をついたが、思ひ出したやうに、

「あゝ、ほんとに串戯いつてるんぢやあなかつた。喜いちやん、お前水を吞むんなら、増さんとあとからおいで、私ア一足さきへ行つて、お座つきでも濟まして置くから。」

斯ういつて帶を探り、四に疊んだ白紙の間から小さな珠數を出して、チヨイと頂いて手に取つて、老妓は立たむとして戸外へ向直ると、戸の外へ來て、佇んだものがある。

光の射す山の翠の中に、こゝに敷いた紫雲英に踵を入れて、恰ど此時來て、いま此方を見て立停まつた、同時に、のツそりした、足の運び、たけの高い身體を大跨にづか〳〵と來て、其背後に成つて齊しく立停まつたのは、風のかはつた、見馴れない漢の、年紀は三十二三と見えた。

## 六

色の黒い、額の拔けあがつた、頰骨の出た、いかめしいのが、袷も丈も短い衣服から、二の腕、脛のあたり、文身をしたのが露出れて居るから、此方の女どもは皆眼を睜つた。

漢は背を見て揉手をして、

「お孃樣、お休みになりますか。」

孃樣と言はれたのは、無言で頷くと見え、菅の小笠が前に俯向いた。其足を、後に引いて、身を退らし、斜に心ばかり仰向く形で、淺黄の手甲を白い紐で手首に結んだのを上げる、と二の腕が雪のやう。翳して笠の緣を取つて透かしながら、いま若い者が庇ひ、立懸けて置いた、新らしい、墨色のまだ濡れても居さうな追善の塔婆を見た。表に、、、、、、、信士と書いてある。

キツと見たが、眦を返して、笠の中から、淸い、流るゝ如き黑目勝な瞳を寄せて、框に並んで、不審げに此方を瞻る妓たちを、ぢつと見て、靜かに同伴の漢を振返る。

「え、御一服、それが可うござります。」

と入交つて前に立ち、つか〳〵と戸口に臨んだが、四邊を見廻して猶豫つて居る。恁ういふ時は、何者か見て取つて、お掛けなさい、入らつしやいましを言はねばならぬ。

親仁は空寺の山の井を汲みに行つて居ないのに、居合はせたほどの者は、留守といふでもなく、いづれも勝手の知れぬのであるから、唯きよろ〳〵するばかり。

取着が悪いので、入り兼ねたものらしい。

皆が默つて、思ひ〳〵に、只管顏と顏を瞻つて、遣場に困つた眼の行く處、小松原の中を、手桶を提げて、親仁はのそ〳〵と歸つて來た。

「えゝそら、汲んで參りました。」

言ひかけて、件の嘗廻すやうな細い眼色で、少時の間行つて來た、少時の間に、天から降つたか、湧いたのか、珍らしい人が新らしく來て、自分を待つて居たやうに感じらるゝのを思ひかけず見たのである。

法華で、下總から出る中山派の巡禮は、團扇太鼓と小撥とを持つて居るが、此千個寺詣の手は、空しく無意識に垂れて居た。扮裝は同一で、脚絆、手甲、草鞋、足袋穿。婦人と見え、爪さきが反つて、蹠の可愛い、すらつとした立姿で、袷の下の乳のあたりを鎧つて、白の頭陀袋を懸けて居る。背には笈、眞中に打つた劒形の御符の札は、頸あたりに眞すぐに、しやんと立つて凜々しかつた。

天窓のさきから爪尖まで、親仁はつく〴〵と視めながら、うつとりとしたやうであつたが、落すが如く、其手桶を下すと、身近に寄つて、紅い花の上へ、股引の足を折つて、片手を地について一膝ずり出したが、顏をあげて、立つた人の向脛のあたりへ跪いて、笠の中を差覗く。

艶かな鬢のふッさりして、前髪の亂れかゝつた、薄暗い笠の中に、眉は鮮である、鼻筋の通つた、色の白い、めツきり痩の見ゆる、俤はやつれて居るが、氣高い、品の備はつた、しまつた紅の莟のやうな口許が、此時わづかに和むと見上げた。淸い、凛とした瞳が動いて、うつむきざまに見おろした、少し曇つた月夜に背た、憂を帯びた下向の顔を、親仁は何で忘れよう。世に亡き蓑岡の主人が生命を賭けた戀女房で、山下の寮に住んで居た、紫といつた美人である。と言へば顔は見ないまでも、聞いて知つて、こゝにあるほどの者は皆忘れはせぬ。

## 七

慶應元年、上野の戰爭にさきだつて、江戸は修羅の巷となる由、豫め騷いだので、紫の一家は、兩親と、兄と、嫂、嫂は江戸の生でない上總のもので、嬰兒を持つて居た。此乳呑兒と、大甞子と合乘で駕籠一挺、紫十六と云ふ時、厚裏の雪駄を赤い切で結へた旅裝束のまゝ横に乘つた一挺、都合二挺。兩親は老人で二人一ならびに馬に乗つた。兄は歩行立で、妻のと、妹のと、交る／＼駕籠脇に引添うて、別に小荷駄馬一頭。大方の諸道具は前に三度から廻して置いて、これに積んだのは家の寶、金春流の能の大鼓打であつたから、シテワキに朱を打つた謠の本、家元から皆傳の卷物、鼓の類。ほかに紫が愛翫して、本陣へ泊まる直蓋を取つて見ようといふお雛樣、五人囃に能人形。小さい洞燈、江の島貝細工の小屛風、簞笥、鏡立、足高の夫婦膳、蒔繪の對で掌に乘りさうな。一式取揃へて嵩張つた箱が二個。田舍源氏、大倭文庫、白縫物語、と其れから小倉百人一首、大形の古代繪で、一枚毎に吉野紙で間をした歌がるた。紅猪古、白粉刷毛、贅水入、玉くしげ、疊紙、桐壺黄金砂子の香箱まで、紫が袖の薫を留めた、指の爪紅のついた品物は、殘らず荷作にして、直ぐ駕籠のあとについて居た。

別に手廻の入用のものが多い。費を省いて小荷駄一頭なら、手遊や、慰物は措いて、外のものを積んだならばと、兄と嫂は不足をいつて澁つたのだけれど、男五人、女四人、はじめから九人もあつた、紫は父親五十四、母親四十四の時の末ツ子であつたから、喩にもいふ掌の珠、簪の花なり、豫め兵亂を避けて、舞の舞臺のあつた、下谷黑門町の邸を開いて、田舍へ落ちようといふ時、矢玉が飛ぶから、と言つておどしても、雛の傍を離れないで、[illegible]さ草紙や、歌がるた、[illegible]と一緒でなくツてはと、あどけないことをいつてむづかつたわがまゝを、可愛さに眼のない兩親は、唯莞爾莞爾顔で聞き入れた、好の衣裳を襲ねたまゝ、ビラ／＼の簪、高島田、胸高の帶。ふツくりした懷中から、箱せこ簪の紅の總がしツとりとしてうつくしい。袵のあつい、きりツとした、武家の風に、品は能くツても藝人の好、町家の俠な處を取まぜた、眼さむる姿で、塗骨の銀地の扇を持ち、裾をば引きあげもしないで乘つた、駕籠には紙の枝をかざゝぬばかり、猿若町へハッチョで飛ばす時と、さしてかはりはない。尤も贔屓で抱へられて居た、江戸詰の藩主が内命で、其本國へ落したので、手當はあるなり、派手な消光はして居たなり、控へ目ではあるが、さして不自由もせず、江戸を卯月の八日といふのに。

泊り／＼も本陣で、袴穿いた男の給仕で夕餉をしたゝめる。紫は、海道の波の音が淋しいから、母親の内懷へ前髪をつけて抱かれて寝る。

さて曉の鷄の聲、驛路の馬の鈴の音。おたちといふと、駕籠が二挺、乘馬三頭、小荷駄

が一頭。

蒼空の鶴に袂を翳し、夕日の波の陸いので茜を染めた顔は、其の扇でかくしもした。暮れると、次の宿へ、乘つた駕籠を横づけで、兄の手に縋つて出る湯に入つて、化粧を直す。十日あまり八十里の道中、鬢の毛も亂さなかつた。日和が續いて、親不知も、唯蒼い空から、黒い巖に、さゞ波の白いのが、果なくさら〳〵と寄するを見たばかり。珍らしい貝殻を、駕籠舁に拾つて貰つて、大事にはこせこの間に納れて祕藏したまゝ、駕籠から下りると、ハヤ指した地方の藩主の下邸の一室に落いたので。――丁ど今、山番の小屋へ來て、爰に立つた、十一年前のことである。

## 八

地方のは手が違ひ、恰好が惡いとて、第一、母親が合點せず、人橋かけて搜しあてた、鳶の者の女房で、江戸から遁げて來たのがあつて、内證で、職にはしませぬ、頼まるれば遊びがてらといふに頼んでは、紫の髮を結はしたといふ。嫂は子持だから係り仲間はせず、父親は出嫌ひ、兄はまた勤がある。母親と紫と、二三年さきへ來て土地馴れた其鳶の女房を連れて、觀音樣だ、愛染樣だ、大師だ、池だ、といつて一寸一寸出あるいた。

皆が錦繪より他に見た事のない、振袖、高島田、裳着の裙の細い、本繻子で、紫の矢がすりに、繻珍の丸帶、猩々緋の縮緬に亂菊の縫のある箱せこを挾つた、襟足が雪のやう、耳朶の後すき透る、役者が舞臺から下りて來たやうな後姿を、生のもので、しかも往來で眼の前に。ともすれば、袖でも觸れさうな處をぞろ〳〵と、ついて歩いた人たかり。驚いて、呆れて、眼を覺して、茫乎で、うつくしい、品の可い、さつぱりした、鮮な、女の都風俗をはじめて見たのは其時で。

杜若の濃い紫なるを、雨の日蛇目傘の下に、地ずりに提げて歩行くよりも、むしろ此の矢がすりの姿は、片田舍の眼に立つて仰々しく、評判した。

何とやらいふ樓の高尾といふのが素人になつたのであらうか。葭原の中なるが、洒落本の中から駈落をして來たのであらうか。對手は誰だ、それにしては、初心だ、嬌がある、おとなしい、じろ〳〵見ると顏を赧うする、素人だ。皆がついてあるくから、おもはゆげといふ状を見よ、うつむいてつゝましげに急足でいつも歩行くわ。其癖澄まさぬ人懷しい、近からむものはおたふくども、一目なりと拜んで置け、一生の思出だ、鬢の毛一筋でも背に見ろよ、と女房持まで騷ぎ立て、寄ると觸ると其の風說。

何時の間にか素性も分つて、江戸の下谷から此方の下邸まで、土といふものは踏まないで乘打にして、金谷金之丞といふ鼓打の祕藏娘だ。

但長い道中の草臥休めに、親不知で駕籠を下りて草履で渚を踏んだと思へ。夕日がさすので扇を翳して、袂をふり絞つて肩にかけた。衣服は紫のおなじ矢がすり。横には空駕籠。嫂が乘つてまた一挺、うしろに馬が三匹で一ならびにづらりと留まつた。佐渡から打通し青疊千疊敷へ、白紙が散つたやうな波頭で、サラサラといふ凪ぎた日に、夫婦貝だ、櫻貝だ、銀杏貝だ、子安貝だ、と雲助に拾はして、與にのり、遊山ではないものを、と、皆が促しても肯入れないで、海が黑くなつて巖が白くなり、夕日が沈んで紫の衣服の色も蒼ずむまで、浪打際をあるいたとよ。海も名殘を惜んだのだと、細いことまで探つて來て、誰いふとなく都落の、紫、紫といひ囃したものである。

で半年あまり經つ間に、身の上が委しく分る頃は、本尊の姿がかくれてしまつて、あまり市

人の目に觸れなくなつた。
が、年經つてあくる年の春、川一條市を隔て[illegible]た、山下の一構、流に臨んだ森の中の一軒家で、二階造の欄干のついた、[illegible]といつて土地第一の財産家の[illegible]、丁ど山の麓になる、清ら[illegible]い細道に、裏門とは大違ひで、一枝折つてつけたばかりの門松の淋しい木戸で、また此矢がすりの姿を見たが。

# 九

こゝあたりには[illegible]しい、[illegible]を[illegible]手に追羽子を[illegible]。白い手[illegible]が撓みさう。[illegible]詞升が白頭一人立、二尺[illegible]取り、高く飛んで、やゝ風立つた、たそがれの空にきりゝと舞うて落ちかゝるのを、カチ〳〵と受留めて、羽子の音冴々しく、松をあがつて、裳がくれに、人目もくれないで、[illegible]ついてまはる、[illegible]に[illegible]こぼれた姿は、またた[illegible]方へ吹聴をされた。

いよ〳〵おもひものか、[illegible]の[illegible]になつたと、人の[illegible]て、[illegible]たつて、[illegible]色の小袖を着せた嬰兒を、乳母が抱いて眞先に[illegible]衣を合つた[illegible]で、[illegible]に[illegible]の第一であとについた、一行の[illegible]しい[illegible]の表門から出たことがある。

正月には、[illegible]を[illegible]つて[illegible]立つた。で最初が矢がすりの[illegible]で、[illegible]、それからあと[illegible]序で、[illegible]の時代は過ぎて、騒ぎ立てた人の目も靜になり、さしあたり評判が歇つた。いまにも[illegible]十年と經つた後、[illegible]美人の投票でもすることがあると、[illegible]が[illegible]投票する最高點、[illegible]一[illegible]の[illegible]といふことになるのであらうが、まづ其まで[illegible]は無事であらうと思つた、[illegible]ない。

はじめて[illegible]が立つた年から、[illegible]へて三年、柴の兒は三歳になつたといふ年紀から、不思議に品行が可いと風説した[illegible]の[illegible]代、[illegible]といつたのが、[illegible]うな[illegible]方で、相場へ手を出す、[illegible]狂をする、[illegible]傍で[illegible]そべる。といふ身持。

案のお[illegible]を[illegible]、とおふので、[illegible]出で、[illegible]出た、泉水だ、[illegible]た、[illegible]見[illegible]、[illegible]まで[illegible]もあるある、打水をして、松葉一ツこぼれて[illegible]の[illegible]をすかして見ると、[illegible]下を、夕[illegible]娼婦もの、振袖の艶なもの、一列にならんで、[illegible]八九人、まだ〳〵三[illegible]つて居たが、[illegible]の女だ、アノ[illegible]は恐ろしい、と舌を巻いた。

十二の[illegible]も、[illegible]も、[illegible]も、既に[illegible]は故人であつた[illegible]は、[illegible]ら仕上げたもので。

[illegible]

か、すぐぬき手を切つて泳いでおがつて、[illegible]よく[illegible]を[illegible]いた[illegible]で[illegible]したが、あれ〳〵とばかりに[illegible]あがつたと、[illegible]子もない風説をさへした位なもの。

[illegible]まではありあへず。[illegible]代が[illegible]しこ[illegible]

と、森の中に甍の聳えた欄干づきの總二階で、淋い大川の流に臨んだ、寮の内に住んで、五年とは持堪へず、家も藏もありのまゝで藻抜になつた。主人のからだは、こゝに、其頃寮番であつた親仁に守られて、空しく墓に眠つて居る、塔婆の面の、、、、、、、信士と書いたのが其である。

十

あれまでの分限だつた蓑岡の身上が、五七年の間に微塵に成つた。其よりも寧ろ怪むべきは、若い主人の身持である。丁ど崩れ出した前あたりから、寮に紫の姿が見えなくなり、何處へか行方が知れなくなつたが、仔細は分らない。若い主人の放蕩は何か其故ではあるまいかと、人々はいひ〳〵する。去年なくなつた一周忌。紫が所を去つて七年目で、笈を負ひ、頭陀袋をかけた、變つた千個寺詣の扮装で、恰も命日、墓番の親仁が小屋に来て佇んだのである。おもかはりはして窶れて居るが、其涼い、情深い、優しい、しかも威の備はつた眼と、笠の裏で下から見上げて眼を合した親仁は、紫が門で追羽子をした時も知つて居る、宮詣に出た時も知つて居る。中間にならべた其お雛樣の階下に蹲いて、爺や、一杯おあがりと、白酒の酌をされて、餘りの勿體なさに、いける口ながら咽入つたこともある。其時は五壇に積んだ雛壇の燃立つやうな緋の毛氈を敷いた、白と紅と桃の、花瓶に亂れ咲いた中に洞燈の灯がともれて、蠟燭の影に玉のやうな雛がまたゝく下で、こゝに寝て、お雛樣とおはなしをするの、と言つてたあどけない人であつた。ある時は絹夜具をかけた炬燵に凭れて、前栽の梅の古木が三ッ五ッ莟んだのを櫺子窓から眺めながら、乳吞兒を抱いたまゝ、件の二尺ものゝ羽子板で、曲づきをやつて、一度つきあてたのを片膝も立てないで半日落さず、女中どもを驚かした名人で、或は二百枚まいた歌留多を讀みながら取つて、主人の車がゝりを單身で突崩したこともある。一時は爺やが嘆願に困つて、大倭文庫の講釋をして聞かしたこともある、さりがたい方だと思ふと、爺やの鼻は源氏にある、内科が館に紅といつたお腰元のおとつさん、門番をして居たのによく肖て居るといつたのに悪い方なり。怨めしくもまた懐しく思つて、高樓から、また枝折戸から、書院の窓から、また湯殿の口から、ぢいやと一聲かゝると嬉しく、ぶる〳〵震へるまで、いつでも太く身にしみた。寮番であつたもの。何しに其俤を忘れよう！

親仁は足を折つて片手をつき、逆身で笠の内を覗いたまゝ、海鼠に藁をさしたやうに、べとべとと小さく、圓くなつて、額を千個寺の婦人のつまさきにつけて、草鞋をなめるやうに突伏して蹲まつた。其まゝ消えにも失せさうである。

笠傾げて、ちつと見たが、千個寺の婦人に、額をつけられた足をのけようともせず、其まゝ胸を伏せて片膝ついて、屈んで搔抱くやうに片手を其背にかけて、其時、かなぐつて笠を取つた。いまさらながら見まもらるゝ、氣高い顔で斜めに覗いて、鷹揚に、しかし優しい聲で、

―爺や息災でよかつたねと一言さういつたばかりで、眼をねむつて涙をおさへた。

親仁は附着いたまゝ離れない、布子の背を二ッ三ッ撫でて、

―もう可いよ。爺や、さあ、もう可いよ。―

―御免なさいまし、御免なさいまし。とばかりで突伏したきり泣いて居た。

戸口に立つて腕を拱き、無言で此體を見て居た同伴の漢は、脊高い身體を折屈めて、むずと親仁の襟を攫んだ。

―とつさん、まあ、これ頭を上げなせえ。―

# 十一

「あなた様、あなた様ア御機嫌よう、ござります。旦那はハヤ申譯がござりません。」と啜泣にいふことは紛れるけれども、眞心はよく知れた。其人が留守の間に、若い主人の失せたのは、自分が殺しでもしたやうに親仁は悔をいふのであらう。

千歳寺の婦人は、平伏した親仁の背に手をのせたまゝ、其頂のあたりをしめやかに見て、何にもはいはないで頷いて居る。

「これさ、起きろえ。まあ、何てえこッた。そんなに附着いてちやあ、お足が操つてえやな。えゝ、おい。」とこつ／＼と其帯の上を叩いて云つた。

「はい／＼。」

「まだ、放れねえや。しやうがねえ、山蛭のやうだ。これ串戯ぢやあねえ。人が見て笑ふぜえ。」と男は持て餘したか、引立てようとした。手を放して苦笑したか、取縋られて素直になつて居る、氣高い人のおもやつれした、束髪の、艶かなのも、櫛の齒を入れないで、しツくりと黒い頭に纏つて居る。頭足も好つかず、顔も満ら[illegible]細い白いのに、帯に係る髪を背[illegible]、色のあせた給の袖の、膝に垂れかゝつて重さうな、あはれにも無雑な姿を見て、きよろりとした目に、これも暗涙を湛へて居たが、

千歳寺はまた、極微で、、

「爺や、何うぞしたか。」と問慰めるやうな言でいつた。これに、漸とむず／＼と其面をあげて、

「何ともござりませぬ。餘りのおなつかしさに、はい、爺は何ともござりませぬ。」と親仁は身を起したが、屈んだなりで手を合はせる。

婦人は笠を片手に、裾を繕ひつゝすつと立つた。がホッといきをついて、傍にあつた手桶に目をつけて、

「清水かい。」といつて親仁を顧みる。

「えゝ、題目堂のでござります。」

「あゝ、旦那様の、然う。」

じつと見て、唇をキツと結んで、片手を胸にあけて、婦人は伏拝むが如く、たてに掌を開いた。

「爺や、一杯飲みたいがねえ。」

「召あがりますか。おいさん、おい、嬢様があがるとよ。」

「[illegible]。」

「[illegible]」

「柄杓は、」といひかけて、親仁は腰をのして急いで立つ。

「柄杓が出來るかい。茶碗々々。」と言つて、漢は、親仁が土間へ飛込んで、藝者たちのならんだ前をきよろ／＼して廻るのを見て、また苦笑。

「ちいさな、此かい。」と、[illegible]

[illegible]二人で[illegible]して居た老妓は、[illegible]て、手近にあつたのを見附けて取つた。

「おゝ、其だ、其だ、[illegible]」

「いえ、此處へあがつて、[illegible]」

[illegible]と何かそは[illegible]て、件の道を[illegible]いた上を、跣足で框から伸上りながら、手拭て掃いて居る。

漢は千歳寺を見返つて、

「お休みなさりますか。」

婦人は[illegible]用事はないで、

「此まゝでお墓へ參ります。寄るのは後にしようね。」

「それぢやあ親仁、おい、茶碗を。」と聲を掛ける。

「ま、ま、こゝへござらつせえ。」

「[illegible]」と云つて、男は[illegible]と跪いて入らうとする。ト老妓は、ツト其框から[illegible]

「もし、それへ上げませう。」

## 十二

「あ、私も飲まうや。」と、いま思ひ出したのであるまいが、先刻から變つたことに見惚れて居た少い妓は、此時立つて出ようとした。

「お待ちよ。」

「だつて、」

「いゝえさ、まだ貴女がめしあがらないぢやあないか。蓑岡の御新姐樣だよ、よく見てお置き、アノ紫樣といつた方だ、叱！」と囁き留めると、頷いて膝に手を置いた。

底に少しばかり汲取つて、白い緣の茶碗を含んだ。紫は、紅にぬれ色を見せて、唇を濡ほしたが、うつとりとしたやうであつたが、ほつと息をついて、

「ぢいや。」

「えゝ。」と、むかうで振向いて、手を膝に垂れてお辭儀をした。

「七年前にお國を出た時分、寮の井戸が濁つたから、あゝ、もう此地の水は呑まれぬか、せめて餘所の水はのむまいと思つて、川だの、池だの見る毎に、何んなにほしい時も堪へて居た。峠を越す時だの、濱邊をあるく時だの、あゝ何うかして、御國の水を、もう一度のみたいと思つて居たから。」

漢は言を引取つて、

「何よ、さつきもの、此處へ行らつしやる道で、舊の寮だとかおつしやつた、山下の邸へお寄んなすつて、主ア門のわきにかくれて待つてお出でなさる。俺あ玄關へ行つて、頭をさげた。恐れ入りますが、此方樣のお邸のお庭の、唐橋の傍にござります、アノ井戸の水を一杯下さいましと、然ういつて頼んだらう。」

「おいや、アノ水は最ういけないとね。」

「えゝ、もう何の故か、水晶のやうでござりましたが、お嬢樣お留守になつた時分から、濁りまして、旦那樣もおあんじなされます節から、ぶつ〳〵呟言をいふやうに泡が立ちます、溝のやうな臭がして一滴もいけませぬ。はい、其まゝで、いま居ります者も貰水だと申します。」

「がつかりしてお出でなすつたが、お口に合ひましたか、お嬢樣。」

「あゝ、おいしい水なの、ぢいや、寮のとかはりはないね。」

「はい。」といつたが、親仁は腰を屈めて立つて居たまゝ、すゝりなきして、古手拭を目にあてる。紫も悄然と頭をそむけた。

漢はとみかうみて、腕を拱いて默つて立つて居たが、フト思ひ出したやうに、

「およろしくば。」とばかりいつて、そつと紫の顏を見た。

瞳を返して、

「飲みますか。」とやさしくいはれて、何うしたのか、わな〳〵とふるへた。

紫の手から、おづ〳〵しながら茶碗を貰つて、目を瞑つて頂いた、が、忘れたやうに一息にあふいで呑んだ、其顏の色も變つて居る。

「もう、一生の思出でござります。」と、氣ぬけがしたやうになつて、ばつたりと、地に手をついて、がツくり首垂れた頭を擡げ、

「へい、これで、歸れならば歸りますが、こゝまでおともをいたして參りましたから、お邪魔でござりませねば、おまゐりになりますお墓まで、もう一足、おともがいたしたうございますが、」

あふいで云つた目に涙を湛へて居る。

紫は答へなかつた。

二人が情に迫つて、人目を忘れた此のありさまは、少い妓が咽喉の渇いたのも忘れさしたであらう。皆が唾をのんで見て居たのである。

此時、藝妓に附添の男の、土間にしやがんで膝

の上へ手を拱いて居たのが、獨で頷いてツト前へ出た。
「えゝ御免なすつて、此處へ出まして惡う申しましては、可いか惡いか存じませんが、御免なすつて下さい。此處に參りましたのは、皆廓の者で、旦那には大層御贔屓を蒙りました。今日ア御命日と云ふので、まあ皆がまた多勢、お參詣をしたいなんて、へい、そんなこと申しますけれど、どれも親方持、また勤の事でありますので、まあ、一人が五六人づゝのことづけを持つて來たんでございますが、あなた樣、御參詣の御樣子。こりや私等が出ます處ぢやあございません。尤も名高いので、一人も其何か、妙な、かゝりあひのものは無いのでございますけれども、故ッと御遠慮を申上げませうと存じます。で、同伴もいらつしやりますから、次手にハヤ眞に何ですが、かうやつて持つて參りました塔婆アおことづかり下さいまして、お氣に入りましたら、あなた樣、お口から、こんな奴等ア參りましたと、おことづけが願ひたう存じます。いえ、そりや最う然うおつしやるのは知れてますが、故ッと御遠慮をいたしますことで、ねえ姉さん、何うたね。」
と、くるりとうしろ向いて老妓を見ると、これも[illegible]も頷いた。
「まあ、何分。へい。」と一ツ天窓をさげて、
「何處か、ま、ぶらついて歸りませう。」
皆が顏をあはせて合點をしあつて、[illegible]に煙管をしまふ、袖を掻合る、褄を揃へ、[illegible]をたてるなど、ざつとあり。ぞろ〳〵と、綺麗ないろ〳〵の、衣は、小屋から、ばらりと出た。
紫の前で、小腰を屈めて、皆が行きかけると、身を開きながら片寄つて、
「失禮、」と言ひながら見送り果てた。
紫は振返つて、
「お前さんも歸つておくれ。」
「でもございませうか。」と、立ち兼ねた、——
これには何ぞ仔細があらう。

## 十三

「何うした、お新發意。」
しつかりした聲、濱の摩耶寺の鐘樓の前で、背後から天窓を撫でたのは、此邊の漁師と見える。毛脛に[illegible]のやうな杉の疵、棕櫚の緒鼻緒のたつた、厚い齒の下駄を穿いた漢である。ふつかり空を見て、何か幼いものながら、習はずに經を讀む、此の境遇にある男の兒の、蹠足で胡坐かいて砂いぢりをするのでなく、剃立の可愛い天窓圓々とうつくしく、襟の白い、耳朶の大い[illegible]い清[illegible]背からまはして前で〆めた、あかぎれのない、[illegible]な小さな[illegible]、下さ[illegible]引かけたが、[illegible]で[illegible]の立つた[illegible]額に頤へて、寺の[illegible]に[illegible]向いて、[illegible]面で[illegible]をついて居る、[illegible]佇んだうしろ姿、年紀には似ないで、宛として[illegible]の山水の中の人物である。
背後から不意に天窓を撫でたので、[illegible]は驚いて振向いたが、[illegible]いで漁師を見て、あつたけた十ばかりの、あどけない顔に日があたつて、白いのにあかりがさし、一ッ[illegible]眩ぶつたく、皆が[illegible]くなつてすゝたゞれて居たが、日光をうけて[illegible]とうてある。
む[illegible]けな顔に、愛想らしい、漁師はりッ〳〵と笑つた。
「はゝゝ、お新發意、[illegible]
「また[illegible]に見えた[illegible]は大人[illegible]も言[illegible]。思ういにれて、漁師に[illegible]か行[illegible]つたが、チョイと頷いて、
「むゝ、そんなものよ、何は、[illegible]樣はお寺かの。」

とあらためて言ふ顔を、まばゆさうな目でのぞいて、ふつくりした片頬に笑み、
「あつ、あんまりお前、無理を言つてねだるから、それであん、困るんだッて、お上人様は、昨夜から出てまだお歸りぢやあないよ。」
「何か云はあ。」とまた笑つて天窓を撫でる。ト痒いか袖口で目をこすつて、
「何も岡藏が、アノ雲助をして居た時、紫色の衣服を着て錦繪のやうなお孃様に、櫻貝を拾つてあげたからッて、お上人さんも御存じの事おや無いのだもの。アノそれから、女房も貰はないで居るからたつて、それも何もお上人さん知らないこッた。そんなことは、あのお經には書いて無いから、どんなにねだられたつて分りやしないよ。それだのに、むつかしい、苦い顔して、お前來るとは、お上人さんをせめるから、それだから、あゝ、今日は居ないんだよ。ほんたうに、うるさいッて言つておいでだつた。」と云ひながら、莞爾する。岡藏と云ふのは、堪らないやうな面相で苦笑をして、
「あんなこと言はあ、何時聞いたよ、お新發意。え、誰に習つてそんなこと覺えたよ。むゝ、何、おらあ何にもそんなことは知らねえぞ。いや、ほんたうに、和尚め、留守か。」
「あい。」と頷いてまた目をこすつた。新發意は忘れたやうに、こんどは眞面目である。
「おやあお新發意、お前さん、昨夜また一人だつた。むゝ、知らせば可いに。おらあ、また泊に來て、足蟄ぶッて、頭の上でお前を躍らせて遣るだッけなア、淋しかつたらう。狸和尚め、いゝ年紀をからげて、拂子のやうな白いやつを生やしてながら、畜生、何處へ芋を掘りに行きあかつたか。」と苦い顔をして、緊つた一文字の大口を弛めてまた微に笑つた。

## 十四

岡藏はフト思ひついたやうに四邊を見たが、鳶はまだ屋の棟に居て、日向で此折から羽づくろひをした。が、けろりとして嘴を腹毛にさして凝とした。
「のんきな狀だ。」と投げたやうに云つて、岡藏はまた俯向いて、新發意が目をこすつて居る顔を覗き、
「そりや、然うとな、お新發意、誰かお寺にお客があらうな。」
「どんな。」と袖口を引張り直してあをむいた。
「どんなツて何よ、六十六部よ。え、ちやあない、巡禮か、そら、何よ。アノ何とか言はあ、御題目を書いた御札をしよつて、笈かついでる、何、千個寺か、むゝ、それだ。」と頷くと、新發意も意を得て、默つて合點々々する。
「何よ、女ばかりのよ。」
また頷く。
「えゝ、二人連だ、婆さんと、少い二十八九た、むゝ、然うだ。」と一言毎に、岡藏は身に力を入れて、
「來たか、お寺へ、え、居る。然うか、何處に居るの。」
と何かそはそはして、其裾を穿いた毛脛もがたがたしさうに、むくつけな顔の目も眉も動いて、寺をずつと見込んで、爪立つたばかりにあたりを見た。片折戸から遙に卵塔場をすかした處を、
「何だい。」と新發意に然う言はれて、激した赤い顔で、背いて屋の棟に眼をそらした。
「何うだい、蔦ア野面だなあ、お新發意。」
とつかぬ事を言つて、また顔を見合せた。
「はゝゝは。」
「お客様が何うしたの。」
「何よ。えゝと、何でもねえがの。さつき磯でもつて、其二人づれに、俺あ此處の此のお寺の名を聞かれたわけよ。二人とも笠をかぶつて居

たかた。から、まあ、ずつと砂道を眞直に一町ばかり行つた處だツて教へたかた、何か、土地は初めての樣だ、殊にハヤ日にあぶられちやあ居れえ、弱々しい、心許ねえ。あつち此方、笠の中から、え、何よ、其少いのがすかして見ながら行つたわけよ。一條道なり、近所に家あれえ、一軒だ。あの松の中の寺だつて、砂原見通しの此森へ、見當まで著けて教へたから、見はぐして迷やしまいと思つたけれど、何處か心許ねえ。何の一足だ。ついて行つて案内して、次手に御前に一番驕らしてやれ。女同士だ、母懐かやうだと然う思つてな、あとからついて來ようとすると、えゝ、お新發意、居合はせた奴じもが、なねきおやあねえか、見な、見な、岡ア千個寺の女のあとについてかあ、道中の何かを狙ひやあがつて、汝ア山猫だあ。谷の藪のお比丘尼をおツぽらまして、のもお前だらうツて、汚らはしいことを言ふかこの、俺もむくれ切つて見合はせたが、何だか擽いやうで堪らねえから、我慢が出來ねえで、實は皆の目をかくれて來たのよ。何か、顔を見られるやうで、子供のお前にも極が惡い、と云つたやうな次第のものよ。つまらないわけだ。なあ、お新發意。」と來た方を此方向いて閻蔵は心咎めかするらしかつた。

新發意は、いたいけで、

「あの、然う、二人とも先刻來たの。摩耶夫人樣にお參をして、本堂に坐つておいでだつたから、お上人さん、留守だつたけれど、休んでござるが可いつて、お位牌堂のわきの小座敷へ通したんだ。」

「え、不思議だ、本堂に坐つて、小座敷に通つた。むゝ、お新發意よくしてあげた。」

## 十五

「然して何か、お小僧樣とか、お新發意とか、はい、とか、有難う、とか、ものを言ふかえ、ものを、何、え、誰だつて、然うよ。啞で無えツてしやべらないと云ふ奴もねえけれど、其處が何だ、チト其、ものだからよ。それ、千個寺の女はまた云ふことが此人方等と違ふだらうかと思つてよ。えゝ、何、坐つたツて。矢張あたりまへの、袖をトやつて、足をトやつて、坐つたか。え、む、然うかた、あんた人でも矢張然うかた。坐つたり、立つたりするだらうか。でも、何處か違やしねえか。あたりまへか。何んな容だつた、む、なるほど眞似られめえ。彼でな、それだか、何だ、えゝ、おらあ、こりや、何うかして居らあ。」

しきりにあせつたが、閻蔵はホッと息をついて空を見た、

「見れえ、お新發意、眼あ、野面だぜえ。」と話はけろりとして居たのである、新發意は默つてしまつて、聞くといふよりは、むしろ、ものを言ふ閻蔵を見て居たのであつた。

「むゝ、そして何か、番茶でもついでくれたか。」

「あゝ、土瓶で出した。それから、いり豆があつたから皿を持つて行つたの。」

閻蔵はほた〳〵して、

「旨えな、其いゝ頭にやあ花が咲くぜ。お新發意あ何日だい。む、よく〳〵してあげてくれたことも然も嬉しさうである。あまりの樣子ツたらないから、新發意も怪しくなつたか、

「あの、知つた人。」

「何、何、別に何も知つた人と云ふのちやあないが、その、何よ。」とこんな幼いものゝ前ながら、閻蔵は口籠る。トちつと其顔を見て居て、

「あゝ、錦繪のお孃樣か。」と、禪心あつて、謂いもの、五本の指、胴中物有これ什麼で、突拍子もないことを一喝したやうに、隙かぬことをおツつけにいつた。

岡藏吃驚した。
「串戯を言はあ、勿體ねえ。」
「それだつて、うつくしい人だから。あの、モ一人、お婆さんの方は、何かいろんなことを話すけれど、きれいな人アそんなに云やしない。私、傍へ行きたいけれど、遠慮してるの。本堂の佛様、やさしい顏して、拜むと、少し莞爾しておいでだけれど、何だか勿體ないもの、傍へ寄ると、でも、叱りさうぢやあないけれど、恐いやうだ。貴いのだつて、お上人さん、然う云つた。」
とおぼろげなことをいふ。岡藏は聞いて、案じて居て、
「むゝ、そりや人品よ、威があると云ふものだ。えゝと、小座敷に二人か。」
「あゝ、然してぴつしやり閉切つてあるの。先刻もそツと行つて見たら、分らないんだけれど、泣いてたやうだ。だから何うしようと思つて、お上人様ア お留守だし、こゝにアノ、それでこゝに居るんだよ。」
とたよりなげな風情である。此兒も人なつこい、愛くるしいので。
「待たねえよ、泣いて居たつて。はてな、待ちねえ、小座敷に居ると云やあ、何だ、ソツと行つたら、前栽から様子が知れよう。何うかしてモ一度見たいもんだが、え、お新發意、お前さんも何なら一緒に連れて行きねえ、そつと見よう。」
「だつて惡いから。」
「可いやな、こんな野郎ぢやあ惡からう。氣味を惡くされると惡いで、おらあ、遠くに居て內證で見らあ。お前さん小兒だから女の兒は構はねえ。えい、おい、然うしねえ。だから叱られたらあやまることよ。可か、さあ、さきへ行きねえ。ついてかあ。あゝ、小兒を出に……小恥かしくもなく……畜生……」
「何うしたの。」
「野面なもんだぜ。」と、岡藏は竦んで、鳶を見た。

## 十六

小さな身體に緣下駄を引摺つて、青く伸びた芝の上を、新發意は、黑い帶で無垢の姿で、ソツと小座敷の庭にうかゞひ寄る。
岡藏はずつと離れて、木戸の中へ片足を踏込、半身を庭の陣へ入れながら、片足は境內に浮かして居、横になつた顏を出して、構はぬ、開けい、小兒だから大事ない、氣に逆つたらあやまることツた、と兩手を出して、……見返つちや猶豫ふ新發意の身體を遠くから掬つて押すやうな。仕方、手眞似をして居る。
微笑ながら頷いては、少しづゝ前へ出て、いや小座敷の前と思ふと、障子の裏に人の氣勢。また猶豫つて、岡藏を振返る。ト焦つて押すやうに手を上げ下げして煩しがつ。頷いて、またコツソリと寄つたが、極が惡かつたか、庭前を直角に切つて筋違にツゝと外れた。新發意は小さな築山の下の、根笹隱れに二坪ばかりの池があつて杜若が咲いて居る、其ふちに立つて、手のものを落したやうな、呆れた岡藏の顏を遙に見返つて、所在なく莞爾した。
「不可え／＼。」と、口の內で呟いて、岡藏は伸上りざまに手を振つた。
新發意はあどけなく、いや／＼をして、また莞爾したが、其まゝ池のふちに屈んだ、圓い脊は緣下駄の上へちやんと据ゑられた。
むかうで岡藏にます／＼焦られて、新發意は俯向いたが、遣瀬なさゝうに指のさきで長く伸びた杜若の葉のさきを摘んだ。ト葉摺れがして、一葉サラ／＼と動いて、新發意の蹲つてぢつとして居る姿がチラツと搖れるやうに見えた。途端に、

「あれ！」と叫んだ、障子の裏で魂切る聲、吃驚して、新發意の姿は白い兎が飛ぶやうに築山のうしろへ流れて隱れる。岡藏もハッとして小蔭へ跼む。

十七

障子の透間に手が懸つて、急いだ如く其半ばを開く、ト板縁に載せてある小笠の紐を結へて附けた笈の上へ、色のあせた衣ながら、衣紋の正しい、威のある美しい顏、束髮をつやゝかに耳にかけた、手甲のまゝ、親指のさきを少し開けかけた障子にかけて立つたのは。——昨日の其時、摩耶寺に居た紫である。

蒼海原は眼のやう、砂の濱にさら〳〵と日かげがさして、池の中は菖の最中で、水に根徹の蔭が晴く、濃紫の杜若の花が沈んで、葉さき闇に戰いで居る。その一面の庭をずつと見た。眉は憂はしげに、清い目がうろ〳〵して居た。

「何ぢや。」と、取續いて、背後から慌しげに立つて來て、笈の傍へ、これは片膝ついて、も一枚障子を右へ開けて、齊しく庭前を見廻したのは、母親と見えた、七十あまりの老女である。

消えも入りさうな地下の叫び聲、あなやと見る間に立つて出で、其庭を見廻しても、海の方を見遣つても、濱松の中を透かしても、右を見ても、左を見ても、目につく蟲一匹這つて居らぬ。あまりの仰々しさに顚倒した胸の轟くのが耳について、肉が動くやうな。女は、ト見れば、ぢつと目を瞑つて居るが、陸にも海にも何事も無い。うつかりした樣子であつた。どぎまぎしながら、笈の竹を一ツ拍つて、

「これ。」

「はい。」と、はツきり答へた。

「何うぞしたかの、けたゝましい。何ぢやつたぞ。」吻と息を吐いて、おなじく手甲したので胸を撫でる。

立つた紫もといきをついて、

「母樣、御免なさいまし。」

「えゝ、何あやまることも何もないがの。まゝ、無事でよかつた。お前つひぞない、何うしたのぢや。癩のせゐでか、恐しいものでも見えましたか。」

「いゝえ、堪忍なさいまし。つい何でございます。寺のお小僧さんですら、彼處の杜若を引きましたのか、障子の間から見えたもんですから、私はもう吃驚いたしました。」

「お小僧樣が杜若を摘んだツて、其が何の吃驚[illegible]しいではないか、話しておみ、聞かせておくれ。」

「可うございます、母樣。」と云つた時は、顏の色も常であつた。

「何も祕すことはないに、はなしてお聞かせ、氣に懸ります。」と疑ひの色は解けぬ。

「祕しますのではないの、母樣。お氣に懸りますならば申しませう。あの、山下の寮に殘して參りました坊やが三歳になりました。あゝ、丁ど今時分。」と言ひかけて、つく〴〵と空を眺めて、

「庭橋の下に池がありましたつけ、杜若が咲いて居て、ちよこ〳〵あるきましたもんですから、乳母のさきへ立つて駈け出します、アレと云つて追ひつきましたが、水の中へ落ちましたの。私は、秋と千代と二人で、行かうとすつて、欄干に立つて見て居りましたが、吃驚いたして氣が遠くなつたのですよ。坊やは蟲も起さないで何ともございませんかつた。私はそれから一月ばかり寢ましたの。をかしうございますこと。其からはもう、小さな池、水、なんぞにちかよりますと、何時でもはら〳〵思ひますのに、杜若も咲いて居ますし、池も池で、丁ど其時のやうな氣がしましたから、落ちはせぬか、危い、と其で聲を立て

たんですよ。ちかごろこんなに吃驚したことはありません。嘸、お驚きなすつたでせう。私さへあんまり！」と云つて紫は笑つて居た。

## 十八

丁ど此折、新發意は築山の蔭から根笹越に、最と其愛々らしい顔を少し傾けて出した。眩い眼で、これは驚かされた聲の成行を伺つたのであつた。

が心づかひをして居た千個寺は、少いのは立ち、老いたるは膝をついて、二人ともあからさまに縁側に笈がくれに見えたので、惡いことでも見付かつたやうに、あわてゝ、かくれようとする。

トいま紫の話すのを頷き〳〵、目をしばたたいて、堪へない風情だつた老女が、目疾くこれを認めて、

「あの、もし、お小僧様。」と聲を懸ける。

呼ばれてかくれあへず、新發意は間の惡さうにまた顔を出して覗いた。

「おいで、おいで、こゝへおいでなさい。」と老女は手招きする。少し進んだが、傍に凜として立つて居る、先刻、懐しいが遠慮がある、叱られさうにはないけれども恐いと云つた、紫に憚あつて、新發意は、さうなく、近づき兼ねるのである。

「人見をするかの。」と老女は紫を顧みた。

「遠慮をするのですよ。」と云つた紫は、其威のある目を和らげながら、口許をやさしく、頷くやうに傾いて、ぢつと新發意を遥に見た。

然うすると齊しく、大な縁下駄をやりちがへ、蹈みかへ、些もしどろにばた〳〵と駈けて來て、縁先で留まると、

「あい。」と云つて嬉しさうな目色をする。

「いろ〳〵御面倒で難有う存じます。あなた、幾歳になりますえ。」と老女が聞く。

「十一。」

「あゝ、お十一かい。何時此お寺へおいでなされたの。」

「去年、お父さんが亡なつてから。」

「おゝ、まあ、其はお可哀相に、そして母様は。」

「存じません。」

「御存じないのか、それはまあ、そして何は矢張此處のお生れかい。」

「然うぢやないの、彼處からアノ海を渡つて、お上人様と船に乗つて來た。」と云つて、うつむいた。襟の白い、耳の大なつむりのすつぱりと、青いのを、紫は瞬もしないで瞻つて居る。

老女はすり寄つて、

「いろ〳〵なことを聞きますが、お小僧様、あなた、母様は御存じないが、父様は知つておいでなさるかい。何といふお方だつた。え、お小僧様。」と顔を覗いてから問ひかけた。紫は思はず、聲をかけて、傍から、

「母様、そんなことおよしなさいましよ。思ひ出してお泣きです、惡うございますよ。」とおさへて云ふ。

「あゝ、左様だつたか。左様だつた、左様だつた。」とこれは口をつぐんだ。新發意は不審げに、とすつて居た、たゞれた赤い目で振仰向いて、うつとりしたやうに紫の顔を瞻る。ト心付いたものであらう。

「お目が痛みますか。」とやさしく然う云つた、紫は極めて機嫌のいゝ面色である。

「痛かあないの、痒い。」とあうむがへしに云つて、紫はしとやかに指で、縁に屈んで、手早く一ツほどいた手巾をはづして、新發意の頤にかけた、手が暖であつたが、少しふるへた。顔を背けて母親を見返りながら、

「目もらひですよ。」

## 十九

「それではお小僧樣、禁厭をしてお貰ひなさい。目もらひと云ふものは、一寸仕方をして、人の末の女兒に結んで貰ふと治ります。丁ど可い、この女は私が一番末の女ぢや。お役に立てゝあげませう。つひぞ未ださせたことはないで知りますまいがの、むゝ、よく利く、現當に治ります。仕方は私が敎へますよ。お小僧樣、まあ、此處へお上りなされ。」

「あい。」といつた、が猶豫つて、そと紫の顏を見た。目の所爲もあるか、おもはゆげである。

「此方へ、」と云つて、紫も指で緣側を敎へたが、なほしりごみをして居たので、莞爾笑つて手を入れた。脇の下へ兩手を挾んで、紫は、ツと白衣の童を抱きあげたが、似げなく活潑に、しかも迅速な仕方であつた。板緣へ抱下して、

「輕いな。」新發意は日向の板緣で、瞻られる顏をやるせなげに笈の裏へ押かくして、嬉しげな微笑の見える、ふつくりした横顏を見せながら、極惡げに横すわりをして居る。うしろむきに圓い臀の乘つた踵、投出した足は練物でしたやうにきれいである。

其內老女は何か、拵へた。紙を切つて、長く五寸ばかりのものを紫の手に渡して、

「さあ、これを持つて此處に居るのだよ、可いかい。お小僧樣は內へござつて、此障子の、ほゝゝ、幸といふでもないが破れて居る、こゝから其惡い方の片目でのぞく。お前は其處に其振をあてがつて居て、はじめは伸して置く、彼方でお小僧樣が、(なあにを結ぶ、)と然ういふと、お前は其處から(目もらひ結ぶ、)といつて、一ッ環にする。可いかい。それからまた、彼方で(なあにを結ぶ、)お前が(目もらひ結ぶ、)と斯う云ふわけぢや。其處で、も一ッ環をこしらへる。またいつて、またいふと、三度、可いかい、三度繰返し、わを三個拵へる。これが、おまじなひで直ぐに治るのだから、さあ〳〵、お小僧樣おはじめ。」と、老女はまめやかに促しながら、居寄つて膝に手をついて、障子の破目に覗き合ふ、二人の狀を視めて居た。

「さあ〳〵、あなたからぢや、なアにを結ぶと……」

「なあにを。」とやう〳〵云つたが、新發意は目を放して此方を覗いた。

「ちやんとおつしやい。」

「だつて、あの……おばあさん。」

「可いからおつしやいな。」と、障子の內から聲が懸つた。

「なあにを結ぶ。」

「ほゝゝ、め、も、ら、ひ、む、す、ぶ。」

「これ笑はず、眞面目ぢや。」と老女はたしなめるやうに云つて笑つた。

「何ですか、母樣、極が惡うございます。」と紫は振向いたが、母親と見合した雪の樣な顏をやゝ赤らめて居る。

「今度はお小僧樣、そちらで云ふのぢや。」と、促しても、默つて居るので、

「どれ、何うしておいでぢやの。」と呟きながら老女は立つて小座敷へ入つた。

直ちに聲がした。

「なアにを結ぶ。」

「目、も、ら、ひ、」と受けて見たが、たゞならぬ音調で、結びかけた環を引き結ひあへず、ソと見ると、母親は內に入つて人目がなかつた時の、紫の顏は蒼かつた。あとを云ひ得ないで密かにむせんだのである。

「何うおしだい。」

「目もらひ結ぶ。」と、居直つてしつかり云つた。

「何を結ぶ。」とあどけない、何にも知らぬ聲の中に、ものゝあはれは籠つて居る。

## 二十

目もらひ結ぶ、
何を結ぶ、
　目もらひ結ぶ。

いひ直して今さきを、絶句しないで二度續けた。

紫の手の緒も三個の環を結び果てた。が、他に見るものがなければこそ、わかねた緒を様に入れつゝ、紫に盗見らるゝ心地がした。で、何となく振返る途端に、もつゝやうを四取つて、恐る／＼顔を出して、木戸の蔭でうかゞつて居た岡藏の顔をチラリと見た。其まゝ顔を背けたが、をさないことを見られたと思つて紫は顔を背ける時故と當惑した。

岡藏は何と思つたか、肝心の顔で、つか／＼と進んだが、あからさまに晴姿が見えた處で、ぱッたり膝を折つて先生に手を支いた。

けれども、これは紫に見えなかつた。いまは微笑んで目をそらしたまゝ、紫は身を起して小座敷へ入る、とうしろ手ですつと障子をしめた。たをやめは障子のなかへ人目から消えたのである。

座につく／＼と老女は笑つて、

一御苦勞ちやつた。お小僧様、とあ、もうちやんとなほります。」

お役目は行儀よく／＼坐つて、紫の前でいたいけに手を支へ、

「ありがたう存じました。」とおとなしく然らいつて、機嫌のいゝ顔をおつと見たが、ハッチリと一ツまたゝいた時、……カタリといふ音。耳を傾けて聞きまゝ立つて、くるりと背後向いてちよこなく立つたと思ふと、すた／＼駈け出して、引戻されたやうに板敷の黒光がする本堂の前で、振返つて見た、白衣の姿は、巨大な賽錢箱にかくれて、後に跫音が聞えて止んだ。

障子の外に咳いた者がする。

身を開いて、恭しく膝に手を置くと、おづ／＼下の方から擡あげて、岡藏は自ら罵つた。其野面を出して一目見たが、頭も上らない。で切なる聲で、

「大事ござりません、決して御慮外は申しません。私は其、もうお覺えはござりますまいが、十年經ちました。忘れずにお見知り申して居ります。親不知で、旦那様のいゝ、お駕籠を舁きました雲助でござります。かやうな處へしやつ面を出しまして、ハヤお氣味が惡うござります。

えゝ、お氣に障りましたら、えゝ、もう海の彼方へでも参ります。其節透見をいたしましても濟みませぬか、へい御容赦が無ければ出ますのでやあござりませなんだ。唯今荒肝を拉ぱしたのを拜みまして、何か狸て夢中であたり出ました。

えゝ、此方人づれにもおつしやるのではござりますまいが、然うやつていらつしやれば、龍馬のやうな頭馬だ、たでの千個様のつもりで、何か御心配の様子をお話し下さりまし。何ういふ御縁やら、いまだに生きてもあけますまいたつ、と云ふことのしどろなから、眞心は面に見えて、紫の色もとけたので、遂に老女は語りだした。

## 二十一

金春金之丞は、逃へられた藏主が特に内意を下して、十分の手當で國許なる其下邸まで落したくらゐ贔屓の大鼓打ではあつたけれど、維新の際なり、本領が危いので、能處の騷ぎでない。最初の内こそ、折々心着があつて、留守役の者から附届もしてくれたが、國事多端の折から、段々構ひつけずなつて、金之丞は老夫婦、空屋を借りて、格子戸の中に茶釜の小さなのを二個ならべて、紅梅燒を賣つて居たが、とても消光には足りなかつた。

九人あつた小兒の内、前後に亡なつたのが三人で、江戸に殘つたのが四人、其一人立つたの

お二人であるが、兄は其妻と[illegible]兒とを連れて別に住居をして居た。これは狂言師で、おなしく不如意になり、消光に迫[illegible]るやうに成ると、烈しい男で、片田舎で[illegible]とは何だ、どつちを見ても[illegible]やあれ[illegible]、何が欲しい、江戸ッ兒のやうでもない、空腹くばてこいらの[illegible]でも[illegible]つて[illegible]けと、泣縋る女房を[illegible]ばして出ちやあ、大酒を[illegible]つて血を吐いて死んだので、女房は連子で、一[illegible]に嫁いたから、これは傍になるのではない。

一番の[illegible]女といふのは、[illegible]も[illegible]れて来もあつた。[illegible]で、これは一家が此[illegible]へ来る時分は、番町の小ッ[illegible]辻籠の上手だと云つて、いつも[illegible]門して居た、なにがしと云ふのにかたづいて居たが、上野の落ちたと[illegible]が聞える頃から[illegible]少も音信が来なかつた。其次のは、些少二の町で、[illegible]に薄あばたのあつた女だが、[illegible]めて[illegible]なので、[illegible]の小[illegible]たといふ、大[illegible]姪とやらの許に嫁いで居る。それこれにめぐりあひもしようため、また一人[illegible]の[illegible]子になつて、舅と折合が惡いため、家[illegible]の女と[illegible]落をした弟があるから、[illegible]行方も[illegible]ねようため、見す／＼山[illegible]の路頭に立たうよりも、[illegible]より法[illegible]の信者で、[illegible]に[illegible]をして[illegible]に[illegible]いたのであるから、[illegible]と云ふより、津々浦々の[illegible]に[illegible]託しよう、小[illegible]にも行つて見ようし、身延へも詣らうと、老夫婦か破[illegible]の暗い行燈の下に、一夜の[illegible]を[illegible]つて、[illegible]二人に緒[illegible]をして、大[illegible]いふの[illegible]を[illegible]と、[illegible]と別々にして、たゝんで笈のなかへ入れた。いよいよ[illegible]に出ることになつた。

これより前、[illegible]は、[illegible]たゝる[illegible]の山下の家に、あなたの女中にかしづかれて氣まゝで遊んで居たのであるが、[illegible]ではなんにも[illegible]に、不自由はさせません、[illegible]、[illegible]をしよう、[illegible]においでなさいまし、[illegible]をたてませうと、[illegible]主人までが手をついて云つたけれど、[illegible]として[illegible]かない。[illegible]か[illegible]意氣な、べらぼうめ、御身は知らないで、[illegible]でこせえた家[illegible]た。かゝりうどになつて[illegible]るかい、金[illegible]之丞は女で食はぬと、[illegible]て、[illegible]人の、[illegible]な、おとなしい[illegible]から、ありッたけの[illegible]を云つて、[illegible]は[illegible]は可愛がつてやつて下さい。[illegible]にも[illegible]すまッ子で、老人ども音ひなり放題に[illegible]と甘やかし過ぎました。[illegible]と、手[illegible]と、[illegible]留多が上手で、これは名人と云つても可いが、[illegible]にはならず、[illegible]も[illegible]ませぬ。不束なものなから、身にかへて可愛[illegible]ございると、いつも然ういひ／＼した。

でいよ／＼老夫婦が笈をしよつて、夜にげ同様に[illegible]することになつて、[illegible]へ[illegible]と、[illegible]を[illegible]て、[illegible]駕籠であとから[illegible]落いたのである。

## 二十二

おともをしませう、[illegible]人から[illegible]しました。お二人が然うやつて、[illegible]に行らつしやるものと、お年寄なり、[illegible]の[illegible]屋と云ふので、みな[illegible]て、[illegible]も[illegible]いて居た、[illegible]、[illegible]二十[illegible]であつた。[illegible]下[illegible]を[illegible]けて、[illegible]の[illegible]を見に出るやうに、[illegible]から、[illegible]でドリて、[illegible]の中に[illegible]て、[illegible]に出たのであるが、[illegible]人の[illegible]で[illegible]たと[illegible]、[illegible]も[illegible]で[illegible]ると、[illegible]ふ、[illegible]い約束がしてあつたので。[illegible]で[illegible]鞋を穿いて出てから数へて、日數二十[illegible]幾日、[illegible]日がちやうど、其日になるまで、[illegible]

かの海を船で越せば、一夜路で國に着き得らるゝ。
て約束は變へられぬ。久しい間のことである
から、譬ひ何のやうにものがかはつて居ようと
も、きつと蓑岡へ歸らねばならないのである。
　彼の旗本に嫁いて居て、はじめて紫が國に着いた頃は、まだ三代目の種彦が筆を取つた、白縫物語の續だの、葛飾物語だの、出る毎に送つてくれた、一番の姉は、會津の城で亂軍のなかに、髮を被つて血だらけになつて最期を遂げたのが分り、小倉へ行つては、既に其妹が亡なつて、一周忌の法筵に列したのである。また駈落をした若い夫婦には、西國でも、畿內でもめぐりあはない內、去年、若狹小濱の木賃宿で、父親は恍々としてうはごとの如く、內百番の養老を口吟みながら、紫の膝を枕に、大往生を遂げてしまつた。年紀は八十三であつた。
　殘る母親は七十四で、紫の打明けていつたのを聞くと、親の年紀を數へては濟まないけれど、七年の間には見送り果てようと、果敢ないことを、あはれにも、胸に疊んで居たのであつたが、まだ恁らやつて達者で居る。
　はじめさゝ見棄てられなかつたものを、たとひ良人に誓つたにしろ、七年が、九年にならうが、一層手を取つて步行さへ腑甲斐ないものを一人路傍に棄てゝ行かれはせぬ。夫もまた婿に對して、今になつて阿容々々母親がついて行かれる義理ではない。自分は面を被らうと、此は亡なつた舍春に對して濟まぬ。と云つて一人殘らうとしては、紫が海を渡らうと言はないので、もし自分の爲に約束をたがへるやうでは、義として此母親は縊れにも死なねばならぬ。死ぬのは易いが、それでは折角少い身を、千個苦までして、我慢の父親を見送つた孝の道完からずで、水の泡といふものなり。海さへ渡れば、明日を後れず、約束を違へないことの出來るやう、今日此寺まで來て着いた。來る路でも、母は繰り返して進めるけれども、紫は決しない。てそれならば死なうといはるゝ、死なうと泣いはれては、約束に趣いて、母親を棄てねばならず。それはといつて、棄てられるわけのものではない。棄てなければ行かれないが、一緒に行つては婿に濟まぬ。これはまた老人の意地て、亡き人の我意は曲けぬといふので、とからにも決しかねるとのことを、一徹な母親は、其一徹な眼に涙ぐんで、長々と岡藏に語り果てた。紫は威儀を崩さず、手を膝にしてうつむいて居る。
森とした小座敷を遙にへだつて、くりやの方で、若有無量百千萬億衆生受諸苦惱と張上げた、淸い、うら少い聲で、新發意の誦すのがあはれに聞える。
　肉を動かして、瞬きもしないで聞いてゐた岡藏は血の上つた赭くした顏で、元氣よく云つた、
「何易いことを、えゝ！　御心配はございません。御母様は私がお引受け申しませう。こんなけちなんちやございますが、腕力があるだけ、負ひましたり、手を引いたりは、孃樣よりも確でげす。七むづかしい、氣の置ける、嬶も丁ど持ちませぬ。些少もお心置きはございません。魚臭い漁師町お嫌ならば、此まゝで、此小座敷に樂隱居でおいでなせえ。三日も四日も、あひまにや一月も、ふいと消えて行く變な和尙ではございますが、私ア大好で、爺だけなど兄弟分だ。お小僧様も、それはもう優しい、おとなしい、深切な兒でございますぜ。えゝ、さうなされまし、お母様の。そして其代りお願だ。孃樣が行らつしやる處まで、丁ど船も漕ぎまさあ、海は座敷も同一で、氣心は知れてます。孃樣がうつくしいたつて、波、風、霧を起すやうな氣まぐれは出しません。きつとあけ方までにや、向うの浦へ漕ぎつけますから、恐れ多い

こッたけれど、船のおともはさして下さい、私が一生のお願だ。」としみぐ\、思入つた體でいつた。岡藏はまた紫を見た時、疊にくッついて平伏した。

紫はぢつと見た。母親は胸に手を置いた。

：爾時：

聞—是—觀—世—音—菩—薩—即—時—觀—其—音—聲—皆—得—解—脱—と、朗らかに聞えたのである。

母親は耳を澄まして、

「紫。」

「はい。」

「あゝ、御利益ぢや。お頼み申さう。」

紫はうつむいて、たてこめた室のやゝ暗い、隅なる床柱のしらぐ\と艶を帯びて日の映ずる前で、ぢつと思ひ沈んだが、涙ぐんだ目をあげて、畏つた岡藏を嬉しげに見た。

一昨日は知らず。昨日の其時の紫は、けふ此時、山番の親仁が小屋の前へ、岡藏にひざまづかれて佇んで居るのである。

## 二十三

「え、孃樣、こんなことになりまして、ハヤ申上げやうもござりません。もう亡なつたお方でござります。お墓まで參りましてもお邪魔にはなりますまいで、道々でも歸れぐ\とおつしやるのを、無理におともいたしましたが、これから先は、きつとお許は出ますまいと思ひますけれど、何卒おともをさして下さいまし。」と、岡藏は手を揉みながら、きづかはしさうである。

紫は目を瞑りながら、横にさした櫛を拔いた、が見て、一ッばかり、ほつれ毛を掻上げる。

「えゝ、第一、いくらお約束だつたつて、孃樣、もう孃樣、亡なつた方に何うしてお逢ひなさります。」

と眼を瞬つて紫の顏を見た。

「唯お墓參を遊ばすばかりなら、何も傍に居たからたつて、差支へはありさうもござりませぬ。お約束さへ濟みまして、日も違はずに、お墓になつていらつしやる處までおいでなさりましたら、其で佛樣も言句はござりますまいに。摩耶寺にや、母親樣がおいでゝござりますぜ。またお同伴をして歸りたらござります。まあ、お墓參を遊ばして、何うなさらうと云ふ思召で。」

「夫婦の中のことだもの、其はお前には分りません。」

と紫はあでやかに微笑んだが、ツと其手にして居た櫛を、呆れる岡藏の手にのせた、

「お目にかゝる時、さしあつては悪いから、お前さんもうお歸り。そして何かの御緣でせうから、母樣のことを頼みました。またね、摩耶寺のあのお小僧さんが、フト私の坊やだつたら、母樣が治してやつた目だ、大事におしッて、然うことづかつて下さい、坊やでなくッても可い、可愛らしい兒だから、心着けてあげませう。櫛はね、お前さん女房を取つてさゝしておくれ。何、またうかゞつてね、おゆるしが出たら、三年でも、一月でも、一日でも、逢ひに行きます、と母樣は皆御存じだから、さう申せば分りますよ。」と落着いて靜かに然ういつた。紫はいま志のものが、託して行つた、塔婆に手をかけたが、小さな輕いのであるから、笈をしよつた立姿で、眞蒼な山をうしろに、小屋の前の紫雲英を踏んで居ながら、兩手にのせて頂いたが、脇へ落して、手に斜めに横へた。

「爺や。」

「えゝ。」とばかり纔に答へた。親仁は目にあてて居た古手拭を攫んだまゝ、腰を屈めてひよこひよこと土間から出る。

「おまゐりをするから。」

「御奇特でござります。」と、いそぐ\して立ち

まはり、ぶきつちやうに其古手拭を克明に帯に挾んで、樒とあか桶とを兩手に提げて、

「御新姐樣。」

「案内しておくれ。」と、いひながら、紫は、嗚咽して手をこまぬいて居る岡藏を見返つた。

「それでは、ね、」

「お、お妨をいたしましては惡うございます。」といつた聲がふるへて、かゝるあでなる顏の、これが見納だと、最後に一目見たかつたが、岡藏は顏があがらなかつた。蟲が這ふけはひのやうな、幽なゆかしい衣の香。薫が細く縷々として、空に靡いて去るやうな心地がして、紫の遠ざかるのが天窓にあり／＼と響いて、胸を衝いた岡藏は、あゝ、これがよみぢを歩行く人の跫音だと思ひ取つた。愚直な親仁は、何か忘れ物があると言はれたさうで、息を切つて駈け戻つて、探したけれど、誰が、紫の其時の、心を知らないものがあらう。

岡藏は前後を忘れて駈けつけると、墓間近になつた時、蠟燭を銜へて、烏が裴岡山の頂の松へ、ばツさり飛んだのを、青葉の間にあざやかに見た。

# 紅葉先生逝去前十五分間

明治三十六年十一月

明治三十六年十月三十日十一時……、形勢不穩なり、予は二階に行きて、謹みて、隣室に畏まれり。此處には、石橋、丸岡、久我の三氏あり。

人々は耳より耳に、耳より耳に、鈍き、弱き、稻妻の如き囁を傳へ居れり。

病室は唯寂として些のもの音もなし。時々時計の軋る聲とともに、すゝり泣の聞ゆるあるのみ。

室と室とを隔てたる四枚の襖、其の一端、北の方のみ細目に開けたる間より、五分措き、三分措きに、白衣、色新しき少看護婦、悄然として出で、靜に、しかれども、ふら／＼と、水の如き燈の中を過ぎりては、廊下に彳める醫師と相見て私語す。

雨頻なり。

正に十分、醫師は衝と入りて、眉に憂苦を湛へつゝ、もはや、カンフルの注射無用なる由を說き聞かせり。

風又た一層を加

雨はたゞ波の漾ふが如き氣勢して降りしきる。

これよりさき、病室に幽なるしはぶきの聲あるだに、其の都度、皆慄然として魂を消したるが、今や、偏に吐息といへども聞えずなりぬ。

時に看護婦は襖より半身を顯して、ソト醫師に目くばせ爲り、同時に相携へて病室に入りて見えずなれり。

石橋氏は椅子に凭りて、身を堪へ支ふること能はざるものゝ如く、且つ仰ぎ、且つ俯し、左を見、右を見て、心地死なむとするものゝ如くなりき。

（角田氏入る。）

人々の囁は漸く繁く濃かに成り來れり、月の入、引汐、といふ聲、閃き聞えつ。

十一時十五分、予は病室の事を語る能はず。

——鏡花全集卷十五より

# 高野聖

## 一

「參謀本部編纂の地圖を又繰開いて見るでもなからう、と思つたけれども、餘りの道ぢやから、手を觸るさへ暑くるしい、旅の法衣の袖をかゝげて、表紙を附けた折本になつてるのを引張り出した。

飛騨から信州へ越える深山の間道で、丁度立休らはうといふ一本の樹立も無い、右も左も山ばかりぢや、手を伸ばすと達きさうな峰があると、其の峰へ峰が乘り、巓が被さつて、飛ぶ鳥も見えず、雲の形も見えぬ。

道と空との間に唯一人我ばかり、凡そ正午と覺しい極熱の太陽の色も白いほどに冴え返つた光線を、深々と戴いた一重の檜笠に凌いで、恁う圖面を見た。」

旅僧は然ういつて、握拳を兩方枕に乘せ、其で額を支へながら俯向いた。

道連になつた上人は、名古屋から此の越前敦賀の旅籠屋に來て、今しがた枕に就いた時まで、私が知つてる限り餘り仰向けになつたことのない、詰り傲然として物を見ない質の人物である。

一體東海道掛川の宿から同じ汽車に乘り組んだと覺えて居る、腰掛の隅に頭を垂れて、死灰の如く控へたから別段目にも留まらなかつた。

尾張の停車場で他の乘組は言合せたやうに、不殘下りたので、函の中には唯上人と私と二人になつた。

此の汽車は新橋を昨夜九時半に發つて、今夕敦賀に入らうといふ、名古屋では正午だつたから、飯に一折の鮨を買つた。旅僧も私と同じく其の鮨を求めたのであるが。蓋を開けると、ばらばらと海苔が懸つた、五目飯の下等なので。

「やあ、人參と干瓢ばかりだ。」と粗忽ッかしく絶叫した。私の顏を見て旅僧は耐へ兼ねたものと見える、吃々と笑ひ出した、固より二人ばかりなり、知己にはそれから成つたのだが、聞けば之から越前へ行つて、派は違ふが永平寺に訪ねるものがある、但し敦賀に一泊とのこと。

若狹へ歸省する私もおなじ處で泊らねばならないのであるから、其處で同行の約束が出來た。

渠は高野山に籍を置くものだといつた、年配四十五六、柔和な何等の奇も見えぬ、可懷しい、おとなしやかな風采で、羅紗の角袖の外套を着て、白のふらんねるの襟巻をしめ、土耳古形の帽を冠り、毛絲の手袋を嵌め、白足袋に日和下駄で、一見、僧侶よりは世の中の宗匠といふものに、其よりも寧ろ俗歟。

「お泊りは何方ぢやな、」といつて聞かれたから、私は一人旅の旅宿の詰らなさを、染々歎息した、第一盆を持つて女中が坐睡をする、番頭が空世辭をいふ、廊下を歩行くとじろじろ目をつける、何より最も耐へ難いのは晩飯の支度が濟むと、忽ち灯を行燈に換へて、薄暗い處でお休みなさいと命令されるが、私は夜が更けるまで寐ることが出來ないから、其間の心持といつたらない、殊に此頃の夜は長し、東京を出る時から一晩の泊が氣になつてならない位、差支へがなくば御坊と御一所に。

快く頷いて、北陸地方を行脚の節はいつでも杖を休める香取屋といふのがある、舊は一軒の旅店であつたが、一人女の評判なのがなく

なつてからは看板を外した、けれども昔から懇意な者は斷らず泊めて、老人夫婦が内端に世話をして呉れる、宜しくば其へ、其代といひかけて、折を下に置いて、

「御馳走は人參と干瓢ばかりぢや。」

と呵々と笑つた、愼み深さうな打見よりは氣の輕い。

## 二

岐阜では未だ蒼空が見えたけれども、後は名にし負ふ北國空、米原、長濱は薄曇、幽に日が射して、寒さが身に染みると思つたが、柳ケ瀨では雨、汽車の窓が暗くなるに從うて、白いものがちら〳〵交つて來た。

「雪ですよ。」

「然やうぢやな。」といつたばかりで別に氣に留めず、仰いで空を見ようともしない、此時に限らず、賤ケ岳が、といつて古戰場を指した時も、琵琶湖の風景を語つた時も、旅僧は唯頷いたばかりである。

敦賀で悚毛の立つほど煩はしいのは宿引の惡弊で、其日も期したる如く、汽車を下りると停車場の出口から町端へかけて招きの提灯、印傘の堤を築き、潛抜ける隙もあらなく旅人を取圍んで、手ン手に喧しく己が家號を呼立てる、中にも烈しいのは、素早く手荷物を引手繰つて、へい難有う樣で、を喰はす、頭痛持は血が上るほど耐へ切れないのが、例の下を向いて悠々と小取廻に通抜ける旅僧は、誰も袖を曳かなかつたから、幸ひ其後に跟いて町へ入つて、吻といふ息を吐いた。

雪は小止なく、今は雨も交らず乾いた輕いのがさら〳〵と面を打ち、宵ながら門を鎖した敦賀の通はひつそりして一條二條縱橫に、辻の角は廣々と、白く積つた中を、道の程八町ばかりで、唯ある軒下に辿り着いたのが名指の香取屋。

床にも座敷にも飾りといつては無いが、柱立の見事な、疊の堅い、爐の大いなる、自在鍵の鯉は鱗が黄金造であるかと思はるゝ艶を持つた、素ばらしい竈を二ツ並べて一斗飯は焚けさうな目覺しい釜の懸つた古家で。

亭主は法然天窓、木綿の筒袖の中へ兩手の先を竦まして、火鉢の前でも手を出さぬ、ぬらりとした親仁、女房の方は愛嬌のある、一寸世辭の可い婆さん、件の人參と干瓢の話を旅僧が打出すと、莞爾々々笑ひながら、縮緬雜魚と、鰈の干物と、とろゝ昆布の味噌汁とで膳を出した、物の言振取成なんど、如何にも、上人とは別懇の間と見えて、連の私の居心の可いと謂つたらない。

軈て二階に寢床を拵へてくれた、天井は低いが、梁は丸太で二抱もあらう、屋の棟から斜に渡つて座敷の果の廂の處では天窓に支へさうになつて居る、巖丈な屋造、是なら裏の山から雪崩が來てもびくともせぬ。

特に炬燵が出來て居たから私は其まゝ嬉しく入つた。寢床は最う一組同一炬燵に敷いてあつたが、旅僧は之には來らず、横に枕を並べて、火の氣のない臥床に寢た。

寢る時、上人は帶を解かぬ、勿論衣服も脫がぬ、着たまゝ圓くなつて俯向形に腰からすつぽりと入つて、肩に夜具の袖を掛けると手を突いて畏つた、其の樣子は我々と反對で、顏に枕をするのである。

程なく寂然として寐に就きさうだから、汽車の中でもくれ〳〵いつたのは此處のこと、私は夜が更けるまで寐ることが出來ない、あはれと思つて最う暫くつきあつて、而して諸國を行脚なすつた内のおもしろい談をといつて打解けて幼らしくねだつた。

すると上人は頷いて、私は中年から仰向け

に枕に就かぬのが癖で、寢るにも此儘ではあるけれども目は未だなか〳〵冴えて居る、急に寐就かれないのはお前樣と同一であらう。出家のいふことでも、教だの、戒だの、說法とばかりは限らぬ、若いの、聞かつしやい、と言つて語り出した。後で聞くと宗門名譽の說教師で、六明寺の宗朝といふ大和尚であつたさうな。

## 三

「今に最う一人此處へ來て寢るさうぢやが、お前樣と同國ぢやの、若狹の者で塗物の旅商人。いや此の男なぞは若いが感心に實體な好い男。

私が今話の序開をした其の飛驒の山越を遣つた時の、麓の茶屋で一緒になつた富山の賣藥といふ奴あ、けたいの惡い、ねぢ〳〵した厭な壯佼で。

先づこれから峠に掛らうといふ日の、朝早く、尤も先の泊はもの丶三時位には發つて來たので、涼しい內に六里ばかり、其の茶屋までのしたのぢやが朝晴でじり〳〵暑いわ。

慾張拔いて大急ぎで步いたから咽が渴いて爲樣があるまい、早速茶を飮まうと思うたが、まだ湯が沸いて居らぬといふ。

何うして其時分ぢやからというて、滅多に人通のない山道、朝顏の咲いてる內に煙が立つ道理もなし。

床几の前には冷たさうな小流があつたから手桶の水を汲まうとして一寸氣がついた。

其といふのが、時節柄暑さのため、可恐しい惡い病が流行つて、先に通つた辻などゝいふ村は、から一面に石灰だらけぢやあるまいか。

（もし、姉さん。）といつて茶店の女に、

（此水はこりや井戶のでござりますか。）と、極りも惡し、もぢ〳〵聞くとの。

（いんね、川のでございます。）といふ、はて面妖なと思つた。

（山したの方には大分流行病がございますが、此水は何から、辻の方から流れて來るのではありませんか。）

（然うでねえ。）と女は何氣なく答へた、先づ嬉しやと思ふと、お聞きなさいよ。

此處に居て先刻から休んでござつたのが、右の賣藥ぢや。此の又萬金丹の下廻と來た日には、御存じの通り、千筋の單衣に小倉の帶、當節は時計を挾んで居ます、脚絆、股引、之は勿論、草鞋がけ、千草木綿の風呂敷包の角ばつたのを首に結へて、桐油合羽を小さく疊んで此奴を眞田紐で右の包につけるか、小弁慶の木綿の蝙蝠傘を一本、お極だね、一寸見ると、いやどれもこれも克明で、分別のありさうな顏をして。

これが泊に着くと、大形の浴衣に變つて、帶廣解で燒酎をちびり〳〵遣りながら、旅籠屋の女のふとつた膝へ脛を上げようといふ輩ぢや。

（これや、法界坊。）

なんて、天窓から嘗めて居ら。

（異なことをいふやうだが何かね、世の中の女が出來ねえと相場が極つて、すつぺら坊主になつて矢張生命は欲しいのかね、不思議ぢやあねえか、爭はれねえもんだ、姉さん見ねえ、彼で未だ未練のある內が可いぢやあねえか、）といつて顏を見合せて二人で呵々と笑つたい。

年紀は若し、お前樣、私は眞赤になつた、手に汲んだ川の水を飮みかねて猶豫つて居るとね。

ポンと煙管を拂いて、

（何、遠慮をしねえで浴びるほどやんなせえ、生命が危くなりや、藥を遣らあ、其爲に私がついてるんだぜ、なあ姉さん。おい、其だつても無錢ぢやあ不可えよ、憚りながら神方萬金丹、一貼三百だ、欲しくば買ひな、未だ坊主に報捨

をするやうな罪は造らねえ、其とも何うだお前いふことを肯くか。」といつて茶店の女の背中を叩いた。

私は匆々に遁出した。

いや、膵だの、女の背中だのといつて、いけ年を仕つた和尚が業體で恐入るが、話が、話ぢやから其處は宜しく。」

## 四

「私も腹立紛れぢや、無暗と急いで、それからどん／＼山の裾を田圃道へかゝる。

半町ばかり行くと、路が恁う急に高くなつて、上りが一ケ處、横から能く見えた、弓形で宛で土で勅使橋がかゝつてるやうな。上を見ながら、之へ足を踏懸けた時、以前の藥賣がすたすた遣つて來て追着いたが。

別に言葉も交さず、又ものをいつたからといふて、返事をする氣は此方にもない。何處までも人を凌いだ仕打な藥賣は流眄にかけて故とらしう私を通越して、すた／＼前へ出て、ぬつと小山のやうな路の突先へ蝙蝠傘を差して立つたが、其まゝ向うへ下りて見えなくなる。

其後から爪先上り、軈てまた太鼓の胴のやうな路の上へ體が乘つた、其なりに又下りぢや。

賣藥は先へ下りたが立停まつて頻に四邊を眴して居る樣子、執念深く何か巧んだかと、快からず續いたが、さてよく見ると仔細があるわい。

路は此處で二條になつて、一條はこれから直に坂になつて上りも急なり、草も兩方から生茂つたのが、路傍の其の角の處にある、其こそ四抱、さうさな、五抱もあらうといふ一本の檜の、背後へ蜿つて切出したやうな大巖が二ツ三ツ四ツと並んで、上の方へ層なつて其の背後へ通じて居るが、私が見當をつけて、心組んだのは此方ではないので、矢張今まで歩いて來た其の幅の廣いなだらかな方が正しく本道、あと二里足らず行けば山になつて、其からが峠になる筈。

唯見ると、何うしたことかさ、今いふ其檜ぢやが、其處らに何にもない路を横斷つて見果のつかぬ田圃の中空へ虹のやうに突出て居る。見事な、根方の處の土が壞れて大鰻を捏ねたやうな根が幾筋ともなく露れた、其根から一筋の水が颯と落ちて、地の上へ流れるのが、取つて進まうとする道の眞中に流出してあたりは一面。

田圃が湖にならぬが不思議で、どう／＼と瀬になつて、前途に一叢の藪が見える、其を境にして凡そ二町ばかりの間宛て川ぢや。礫はばら／＼、飛石のやうにひよい／＼と大跨で傳へさうにずつと見ごたへのあるのが、それでも人の手で並べたに違ひはない。

尤も衣服を脱いで渡るほどの大事なのではないが、本街道には些と難儀過ぎて、なか／＼馬などが歩行かれる譯のものではないので。

賣藥もこれで迷つたのであらうと思ふ内、切放れよく向を變へて右の坂をすた／＼と上りはじめた。見る間に檜を後に潜り抜けると、私が體の上あたりへ出て下を向き、

（おい／＼、松本へ出る路は此方だよ、）といつて無造作にまた五六歩。

岩の頭へ半身を乘出して、

（茫然してると、木精が攫ふぜ、晝間だつて容赦はねえよ。）と嘲るが如く言ひ棄てたが、軈て岩の陰に入つて高い處の草に隠れた。

暫くすると見上げるほどな邊へ蝙蝠傘の先が出たが、木の枝とすれ／＼になつて茂みの中に見えなくなつた。

（どッこいしよ、）と暢氣なかけ聲で、其の流の石の上を飛々に傳つて來たのは、茣蓙の尻當をした、何にもつけない天秤棒を片手で擔いだ

百姓ぢや。」

## 五

一先刻の茶店から此處へ來るまで、賣藥の外は誰にも逢はなんだことは申上げるまでもない。

今別れ際に聲を懸けられたので、先方は道中の商賣人と見ただけに、まさかと思つても氣迷がするので、今朝も立ちぎはによく見て來た、前にも申す、其の圖面をな、此處でも開けて見ようとして居た處。

（一寸伺ひたう存じますが、）

（これは何でござりまする、）と山國の人などは殊に出家と見ると丁寧にいつてくれる。

（いえ、お伺ひ申しますまでもございませんが、道は矢張これを素直に參るのでございませうな。）

（松本へ行かつしやる？　あゝ〳〵本道ぢや、何ね、此間の梅雨に水が出て、とてつもない川さ出來たでがすよ。）

（未だずつと何處までも此水でございませうか。）

（何の、お前樣、見たばかりぢや、譯はござりませぬ、水になつたのは向うの那の藪までゞ、後は矢張これと同一道筋で、山までは荷車が並んで通るでがす。藪のあるのは舊大きいお邸の醫者樣の跡でな、此處等はこれでも一ツの村でがした、十三年前の大水の時、から一面に野良になりましたよ、人死もいけえこと。御坊樣歩行きながらお念佛でも唱へて遣つてくれさつしやい。）と問はぬことまで深切に話します。其で能く仔細が解つて確になりはなつたけれども、現に一人踏迷つた者がある。

（此方の道はこりや何處へ行くので、）といつて賣藥の入つた左手の坂を尋ねて見た。

（はい、これは五十年ばかり前までは人が歩行いた舊道でがす。矢張信州へ出まする、先は一つで七里ばかり總體近うござりますが、いや今時往來の出來るのぢやあござりませぬ。去年も御坊樣、親子連の巡禮が間違へて入つたといふで、はれ大變な、乞食を見たやうな者ぢやというて、人命に代りはねえ、追かけて助けべえと、巡査樣が三人、村の者が十二人、一組になつて之から押登つて、やつと連れて戻つた位でがす。御坊樣も血氣に逸つて近道をしてはなりましねえぞ、草臥れて野宿をしてからが此處を行かつしやるよりは增でござるに。はい、氣を付けて行かつしやれ。）

此處で百姓に別れて其の川の石の上を行かうとしたが弗と猶豫つたのは賣藥の身の上で。

まさかに聞いたほどでもあるまいが、其が本當ならば見殺ぢや、何の道私は出家の體、日が暮れるまでに宿へ着いて屋根の下に寢るには及ばぬ、追着いて引戻して遣らう。罷違うて舊道を皆歩行いても怪しうはあるまい、恁ういふ時候ぢや、狼の旬でもなく、魑魅魍魎の汐さきでもない、まゝよ、と思うて、見送ると早や深切な百姓の姿も見えぬ。

（可し。）

思切つて坂道を取つて懸つた、俠氣があつたのではござらぬ、血氣に逸つたでは固よりない、今申したやうではずつと最う悟つたやうぢやが、いやなか〳〵の臆病者、川の水を飲むのさへ氣が怯けたほど生命が大事で、何故又と謂はつしやるか。

唯挨拶をしたばかりの男なら、私は實の處、快からぬ人と思つたから、其まゝで見棄てるのが、故とするやうで、氣が責めてならなんだから、」

と宗朝は矢張俯向けに床に入つたまゝ合掌していつた。

「其では口でいふ念佛にも濟まぬと思うてさ。」

# 六

「さて、聞かつしやい、私はそれから檜の裏を抜けた、岩の下から岩の上へ出た、樹の中を潜つて草深い徑を何處までも、何處までも。

すると何時の間にか今上つた山は過ぎて又一ツ山が近いて來た、此邊暫くの間は野が廣々として、先刻通つた本街道より最つと幅の廣い、なだらかな一筋道。

心持西と、東と、眞中に山を一ツ置いて二條並んだ路のやうな、いかさまこれならば槍を立てゝも行列が通つたであらう。

此の廣ッ場でも目の及ぶ限り芥子粒ほどの大さの賣藥の姿も見ないで、時々燒けるやうな空を小さな蟲が飛び歩行いた。

歩行くには此の方が心細い、あたりがぱッとして居ると便がないよ。勿論飛驒越と銘を打つた日には、七里に一軒十里に五軒といふ相場、其處で粟の飯にありつけば都合も上の方といふことになつて居ります。其を覺悟のことで、足は相應に達者、いや屈せずに進んだ進んだ。すると、段々又山が兩方から逼つて來て、肩に支へさうな狹いとこになつた、直に上。

さあ、之からが名代の天生峠と心得たから、此方も其氣になつて、何しろ暑いので、喘ぎながら先づ草鞋の紐を緊直した。

丁度此の上口の邊に美濃の蓮大寺の本堂の床下まで吹拔けの風穴があるといふことを年經つてから聞きましたが、なか〳〵其處どころの沙汰ではない、一生懸命、景色も奇跡もあるものかい、お天氣さへ晴れたか曇つたか譯が解らず、目じろぎもしないですた〳〵と捏ねて上る。

とお前樣お聞かせ申す話は、これからぢやが、最初に申す通り路がいかにも惡い、宛然人が通ひさうでない上に、恐しいのは、蛇で。兩方の叢に尾と頭とを突込んで、のたりと橋を渡して居るではあるまいか。

私は眞先に出會した時は笠を被つて竹杖を突いたまゝ、はッと息を引いて膝を折つて坐つて。

いやもう生得大嫌、嫌といふより恐怖いのでな。

其時は先づ人助けにずる〳〵と尾を引いて、向うで鎌首を上げたと思ふと草をさら〳〵と渡つた。

漸う起上つて道の五六町も行くと、又同一やうに、胴中を乾かして尾も首も見えぬが、ぬたり！

あッといふて飛退いたが、其も隱れた。三度目に出會つたのが、いや急には動かず、然も胴體の太さ、譬ひ這出した處でぬら〳〵と遣られては凡そ五分間位尾を出すまでに間があらうと思ふ長蟲と見えたので、已むことを得ず私は跨ぎ越した、途端に下腹が突張つてぞッと身の毛、毛穴が不殘鱗に變つて、顏の色も其の蛇のやうになつたらうと目を塞いだ位。

絞るやうな冷汗になる氣味の惡さ、足が竦んだといふて立つて居られる數ではないからびく〳〵しながら路を急ぐと又しても居たよ。

然も今度のは半分に引切つてある胴から尾ばかりの蟲ぢや、切口が蒼みを帶びて其で恁う黄色な汁が流れてぴく〳〵と動いたわ。

我を忘れてばら〳〵とあとへ遁歸つたが、氣が付けば例のが未だ居るであらう、譬ひ殺されるまでも二度とは彼を跨ぐ氣はせぬ。あゝ先刻のお百姓がものゝ間違でも故道には蛇がかうといつてくれたら、地獄へ落ちても來なかつたにと照りつけられて、涙が流れた、南無阿彌陀佛、今でも悚然とする。」と額に手を。

# 七

果が無いから膽を据ゑた、固より引返す分で

はない。舊の處には矢張丈足らずの骸がある。遠くへ避けて草の中へ駈け拔けたが、今にもあとの半分が絡ひつきさうで耐らぬから氣臆がして足が竦張ると石に躓いて轉んだ、其時膝節を痛めましたものと見える。

それからがく／＼して歩行くのが少し難澁になつたけれども、此處で倒れては溫氣で蒸殺されるばかりぢやと、我身で我身を激まして首筋を取つて引立てるやうにして峠の方へ。

何しろ路傍の草いきれが可恐しい、大鳥の卵見たやうなものなんぞ足許にごろ／＼して居る茂り藪。

又二里ばかり大蛇の蜿るやうな坂を、山懷に突當つて岩角を曲つて、木の根を繞つて參つたが此處のことで餘りの道ぢやつたから、參謀本部の繪圖面を開いて見ました。

何矢張道は同一で聞いたにも見たのにも變はない、舊道は此方に相違はないから心遣りにも何にもならず、固より歴とした圖面というて、描いてある道は唯栗の毬の上へ赤い筋が引張つてあるばかり。

難儀さも、蛇も、毛蟲も、鳥の卵も、草いきれも、記してある筈はないのぢやから、薩張と疊んで懷に入れて、うむと此の乳の下へ念佛を唱へ込んで立直つたは可いが、息も引かぬ内に情無い長蟲が路を切つた。

其處でもう所詮叶はぬと思つたなり、これは此の山の靈であらうと考へて、杖を棄てゝ膝を曲げ、じり／＼する地に兩手をついて、

（誠に濟みませぬがお通しなすつて下さりまし、成たけお午睡の邪魔にならぬやうに密と通行いたしまする。

御覽の通り杖も棄てました。）と我折れ染々と頼んで額を上げるとざツといふ凄じい音で。

心持餘程の大蛇と思つた、三尺、四尺、五尺四方、一丈餘、段々と草の動くのが廣がつて、傍の溪へ、一文字に颯と靡いた、果は峰も山も一齊に搖いだ、恐氣を震つて立竦むと涼しさが身に染みて、氣が付くと山颪よ。

此の折から聞えはじめたのは哄といふ山彥に傳はる響、丁度山の奧に風が渦卷いて其處から吹起る穴があいたやうに感じられる。

何しろ山靈感應あつたか、蛇は見えなくなり暑さも凌ぎよくなつたので、氣も勇み足も捗取つたが、程なく急に風が冷たくなつた理由を會得することが出來た。

といふのは目の前に大森林があらはれたので。

世の譬にも天生峠は蒼空に雨が降るといふ、人の話にも神代から杣が手を入れぬ森があると聞いたのに、今までは餘り樹がなさ過ぎた。

今度は蛇のかはりに蟹が歩きさうで草鞋が冷えた。暫くすると暗くなつた、杉、松、榎と處々見分けが出來るばかりに遠い處から幽に日の光の射すあたりでは、土の色が皆黑い。中には光線が森を射通す工合であらう、青だの、赤だの、ひだが入つて美しい處があつた。

時々爪尖に絡まるのは葉の雫の落溜つた絲のやうな流で、これは枝を打つて高い處を走るので。ともすると又常磐木が落葉する、何の樹とも知れずばら／＼と鳴り、かさ／＼と音がしてぱつと檜笠にかゝることもある、或は行過ぎた背後へこぼれるのもある、其等は枝から枝に溜つて居て何十年ぶりではじめて地の上まで落ちるのか分らぬ。」

## 八

「心細さは申すまでもなかつたが、卑怯な樣でも修行の積まぬ身には、恁う云ふ暗い處の方が却つて觀念に便が宜い。何しろ體が凌ぎよくなつたために足の弱も忘れたので、道も大きに捗取つて、先づこれで七分は森の中を越した

らうと思ふ處で五六尺天窓の上らしかつた樹の枝から、ぼたりと笠の上へ落ち留まつたものがある。

鉛の錘かとおもふ心持、何か木の實でゞもあるか知らんと、二三度振つて見たが附着いて居て其まゝには取れないから、何心なく手をやつて掴むと、滑らかに冷りと來た。

見ると海鼠を裂いたやうな目も口もない者ぢやが、動物には違ひない。不氣味で投出さうとするとずる〳〵と辷つて指の尖へ吸ついてぶらりと下つた、其の放れた指の尖から眞赤な美しい血が垂々と出たから、吃驚して目の下へ指をつけてぢつと見ると、今折曲げた肱の處へつるりと垂懸つて居るのは同形をした、幅が五分、丈が三寸ばかりの山海鼠。

呆氣に取られて見る〳〵内に、下の方から縮みながら、ぶく〳〵と太つて行くのは生血をしたゝかに吸込む所爲で、濁つた黑い滑らかな肌に茶褐色の縞をもつた、疣胡瓜のやうな血を取る動物、此奴は蛭ぢやよ。

誰が目にも見違へるわけのものではないが、圖拔けて餘り大きいから一寸は氣がつかぬであつた、何の畠でも、甚麼履歴のある沼でも、此位な蛭はあらうとは思はれぬ。

肱をばさりと振つたけれども、よく喰込んだと見えてなか〳〵放れさうにしないから不氣味ながら手で抓んで引切ると、ぶつりといつてやう〳〵取れる、暫時も耐つたものではない、突然取つて大地へ叩きつけると、これほどの奴等が何萬となく巣をくつて我ものにして居ようといふ處、豫て其の用意はして居ると思はれるばかり、日のあたらぬ森の中の土は柔い、潰れさうにもないのぢや。

と最早や頸のあたりがむず〳〵して來た、平手で扱いて見ると横撫に蛭の背をぬる〳〵とすべるといふ、やあ、乳の下へ潜んで帶の間にも一疋、蒼くなつてそツと見ると肩の上にも一筋。

思はず飛上つて總身を震ひながら此大枝の下を一散にかけぬけて、走りながら先づ心覺えの奴だけは夢中でもぎ取つた。

何にしても恐しい、今の枝には蛭が生つて居るのであらうと餘の事に思つて振返ると、見返つた樹の何の枝か知らず矢張幾ツといふこともない蛭の皮ぢや。

これはと思ふ、右も、左も、前の枝も、何の事はないまるで充滿。

私は思はず恐怖の聲を立てゝ叫んだ、すると何と？　此時は目に見えて、上からぼたり〳〵と眞黑な痩せた筋の入つた雨が體へ降りかゝつて來たではないか。

草鞋を穿いた足の甲へも落ちた上へ又累り、並んだ傍へ又附着いて爪先も分らなくなつた、然うして活きてると思ふだけ脈を打つて血を吸ふやうな、思ひなしか一ツ〳〵伸縮をするやうなのを見るから氣が遠くなつて、其時不思議な考へが起きた。

此の恐しい山蛭は神代の古から此處に屯をして居て、人の來るのを待ちつけて、永い久しい間に何の位何斛かの血を吸ふと、其處でこの蟲の望が叶ふ。其の時はありツたけの蛭が不殘吸つただけの人間の血を吐出すと、其がために土がとけて山一ツ一面に血と泥との大沼にかはるであらう、其と同時に此處に日の光を遮つて晝もなほ暗い大木が切々に一ツ一ツ蛭になつて了ふのに相違ないと、いや、全くの事で。」

## 九

「凡そ人間が滅びるのは、地球の薄皮が破れて空から火が降るのでもなければ、大海が押被さるのでもない、飛騨國の樹林が蛭になるのが最初で、しまひには皆血と泥の中に筋の黑い蟲

が泳ぐ、其が代がはりの世界であらうと、ぼんやり。

なるほど此の森も入口では何の事もなかつたのに、中へ來ると此通り、もつと奥深く進んだら早や不殘立樹の根の方から朽ちて山蛭になつて居よう、助かるまい、此處で取殺される因緣らしい、取留めのない考へが浮んだのも人が知死期に近いたからだと弗と氣が付いた。

何の道死ぬるものなら一足でも前へ進んで、世間の者が夢にも知らぬ血と泥の大沼の片端でも見て置かうと、然う覺悟が極つては氣味の惡いも何もあつたものぢやない、體中珠數生になつたのを手當次第に掻い除け挘り棄て、拔き取りなどして、手を擧げ足を踏んで、宛で躍り狂ふ形で歩行き出した。

はじめの中は一廻も太つたやうに思はれて痒さが耐らなかつたが、しまひにはげつそり痩せたと感じられてづき／＼痛んでならぬ、其上を容赦なく歩行く内にも入交りに襲ひをつた。

既に目も眩んで倒れさうになると、禍は此處が絕頂であつたと見えて、隧道を拔けたやうに、遙に一輪のかすれた月を拜んだのは、蛭の林の出口なので。

いや蒼空の下へ出た時には、何のことも忘れて、碎けろ、微塵になれと横なぐりに體を山路へ打倒した。それでからもう砂利でも針でもあれと地へこすりつけて、十餘りも蛭の死骸を引くりかへした上から、五六間向うへ飛んで身顫をして突立つた。

人を馬鹿にして居るではありませんか。あたりの山では處々茅蜩殿、血と泥の大沼にならうといふ森を控へて鳴いて居る、日は斜、溪底はもう暗い。

先づこれならば狼の餌食になつても其は一思に死なれるからと、路は丁度だら／＼下なり、小僧さん、調子はづれに竹の杖を肩にかついで、すたこら遁げたわ。

これで蛭に惱まされて痛いのか、痒いのか、それとも擽つたいのか得もいはれぬ苦しみさへなかつたら、嬉しさに獨り飛驒山越の間道で、御經に節をつけて外道踊をやつたであらう、一寸清心丹でも噛碎いて疵口へつけたら何うだと、大分世の中の事に氣がついて來たわ。抓つても確に活返つたのぢやが、夫にしても富山の藥賣は何うしたらう、那の様子では疾に血になつて泥沼に。皮ばかりの死骸は森の中の暗い處、おまけに意地の汚い下司な動物が骨までしやぶらうと何百といふ數でのしかゝつて居た日には、酢をぶちまけても分る氣遣はあるまい。

恁う思つて居る間、件のだら／＼坂は大分長かつた。

其を下り切ると流が聞えて、飛んだ處に長さ一間ばかりの土橋がかゝつて居る。

はや其の谷川の音を聞くと我身で持餘す蛭の吸殼を眞逆に投込んで、水に浸したら嘸可い心地であらうと思ふ位、何の渡りかけて壞れたら夫なりけり。

危いとも思はずにずつと懸る、少しぐら／＼としたが難なく越した。向うから又坂ぢや、今度は上りさ、御苦勞千萬。」

## 十

「到底も此の疲れやうでは、坂を上るわけには行くまいと思つたが、ふと前途に、ヒイ、ンと馬の嘶くのが谺して聞えた。

馬士が戻るのか小荷駄が通るか、今朝一人の百姓に別れてから時の經つたは僅ぢやが、三年も五年も同一ものをいふ人間とは中を隔てた。馬が居るやうでは左も右も人里に緣があると、之がために氣が勇んで、えゝやつと今一揉。

一軒の山家の前へ來たのには、然まで難儀は

感じなかつた、夏のことで戸障子の締もせず、殊に一軒家、あけ開いたなり門といふてもない、突然破縁になつて男が一人、私はもう何の見境もなく、

（頼みます、頼みます、）といふさへ助を呼ぶやうな調子で、取縋らぬばかりにした。

（御免なさいまし、）といつたがものもいはない、首筋をぐつたりと、耳を肩で塞ぐほど顔を横にしたまゝ小兒らしい、意味のない、然もぼつちりした目で、じろ／＼と門に立つたものを瞻める、其の瞳を動かすさへ、おつくふらしい、氣の拔けた身の持方。裾短で袖は肱より少い、糊氣のある、ちやん／＼を着て、胸のあたりで紐で結へたが、一ッ身のものを着たやうに出ッ腹の太り肉、太鼓を張つたくらゐに、すべ／＼とふくれて然も出臍といふ奴、南瓜の蔕ほどな異形な者を、片手でいぢくりながら幽靈の手つきで、片手を宙にぶらり。

足は忘れたか投出した、腰がなくば暖簾を立てたやうに疊まれさうな、年紀が其で居て二十二三、口をあんぐりやつた上唇で巻込めよう、鼻の低さ、出額。五分刈の伸びたのが前は鷄冠の如くになつて、頸脚へ撥ねて耳に被つた、唖か、白痴か、これから蛙にならうとするやうな少年。私は驚いた、此方の生命に別條はないが、先方樣の形相。いや、大別條。

（一寸お願ひ申します。）

それでも爲方がないから又言葉をかけたが少しも通ぜず、ばたりといふと僅に首の位置をかへて今度は左の肩を枕にした、口の開いてること舊の如し。

恁う云ふのは、惡くすると突然ふんづかまへて臍を捻りながら返事のかはりに甞めようも知れぬ。

私は一足退つたが、いかに深山だといつても是を一人で置くといふ法はあるまい、と足を爪立てゝ少し聲高に、

（何方ぞ、御免なさい、）といつた。

背戸と思ふあたりで再び馬の嘶く聲。

（何方、）と納戸の方でいつたのは女ぢやから、南無三寶、此の白い首には鱗が生えて、體は床を這つて尾をずる／＼と引いて出ようと、又退つた。

（おゝ、御坊樣、）と立顯れたのは小造の美しい、聲も清しい、ものやさしい。

私は大息を吐いて、何にもいはず、

（はい、）と頭を下げましたよ。

婦人は膝をついて坐つたが、前へ伸上るやうにして、黄昏にしよんぼり立つた私が姿を透かして見て、

（何か用でござんすかい。）

休めともいはずはじめから宿の常世は留守らしい、人を泊めないと極めたもののやうに見える。

いひ後れては却つて出そびれて頼むにも頼まれぬ仕儀にもなることと、つか／＼と前へ出た。

丁寧に腰を屈めて、

（私は、山越で信州へ參ります者ですが旅籠のございます處までは未だ何の位でございませう。）

## 十一

（貴方まだ八里餘でございますよ。）

（其他に別に泊めてくれます家もないのでせうか。）

（其はございません。）といひながら目たゝきもしないで清い目で私の顔をつく／＼見て居た。

（いえもう何でございます、實は此先一町行け、然うすれば上段の室に寢かして一晩扇いで居て其で功徳のためにする家があると承りま

しても、全くの處一足も歩行けますのではございません、何處の物置でも馬小屋の隅でも宜いのでございますから後生でございます。)と先刻馬の嘶いたのは此家より外にはないと思つたから言つた。

婦人は暫く考へて居たが、ふと傍を向いて布の袋を取つて、膝のあたりに置いた桶の中へざら〳〵と一幅、水を溢すやうにあけて縁をおさへて、手で掬つて俯向いて見たが、

(あゝ、お泊め申しませう、丁度炊いてあげますほどお米もございますから、其に夏のことで、山家は冷えましても夜のものに御不自由もござんすまい、さあ、左も右もあなた、お上り遊ばして。)

といふと言葉の切れぬ先にどつかり腰を落した。婦人は衝と身を起して立つて來て、

(御坊樣、それでござんすが一寸お斷り申して置かねばなりません。)

判然いはれたので私はびく〳〵もので、

(唯、はい。)

(否、別のことぢやござんせぬが、私は癖として都の話を聞くのが病でございます、口に蓋をしておいでなさいましても無理やりに聞かうといたしますが、あなた忘れても其時聞かして下さいますな、可うござんすかい、私は無理にお尋ね申します、あなたは何うしてもお話しなさいませぬ、其を是非にと申しましても斷つて仰有らないやうに屹と念を入れて置きますよ。)

と仔細ありげなことをいつた。

山の高さも谷の深さも底の知れない一軒家の婦人の言葉とは思うたが保つにむづかしい戒でもなし、私は唯頷くばかり。

(唯、宜しうございます、何事も仰有りつけは背きますまい。)

婦人は言下に打解けて、

(さあ〳〵汚うございますが早く此方へ、お寛ぎなさいまし、然うしてお洗足を上げませうかえ。)

(いえ、其には及びませぬ、雜巾をお貸し下さいまし。あゝ、それからもし其のお雜巾次手にズツぷりお絞んなすつて下さると助ります、途中で大變な目に逢ひましたので體を打棄りたいほど氣味が惡うございますので、一ツ背中を拭かうと存じますが、恐入りますな。)

(然う、汗におなりなさいました、嘸ぞまあ、お暑うござんしたでせう、お待ちなさいまし、旅籠へお着き遊ばして湯にお入りなさいますのが、旅するお方には何より御馳走だと申しますね、湯どころか、お茶さへ碌におもてなしもいたしませんが、那の、此の裏の崖を下りますと、綺麗な流がございますから一層其へ行らつしやつてお流しが宜しうございませう。)

聞いたゞけでも飛んでも行きたい。

(えゝ、其は何より結構でございますな。)

(さあ、其では御案内申しませう、どれ、丁度私も米を磨ぎに參ります。)と件の桶を小脇に抱へて、縁側から、藁草履を穿いて出たが、屈んで板縁の下を覗いて、引出したのは一足の古下駄で、かちりと合して埃を拂いて揃へて呉れた。

(お穿きなさいまし、草鞋は此處にお置きなすつて、)

私は手をあげて、一禮して、

(恐入ります、これは何うも、)

(お泊め申すとなりましたら、あの、他生の縁とやらでござんす、あなた御遠慮を遊ばしますなよ。)先づ恐しく調子が可いぢやて。」

## 十二

「(さあ、私に跟いて此方へ、)と件の米磨桶を引抱へて手拭を細い帯に挾んで立つた。

髪は房りとするのを束ねてな、櫛をはさんで

手で留めて居る、其の姿の佳さといふてはなかつた。
婦人は手早く草鞋を穿いたから、早速古下駄を引掛けて、縁から立つ時一寸見ると、それ例の白痴殿じや。
同じく婦人の方をじろりと見たつけよ、舌不足が饒舌るやうな、愚にもつかぬ聲を出して、
（姉や、こえ、こえ。）といひながら氣だるさうに手を持上げて其の蓬々と生えた天窓を撫でた。
（坊さま、坊さま？）
すると婦人は、下ぶくれな顔に笑くぼを刻んで、三ツばかりはき／＼と續けて頷いた。
少年はうむといつたが、ぐたりとして又臍をくり／＼／＼。
私は餘り氣の毒さに顔も上げられないで密つと盗むやうにして見ると、婦人は何事も別に氣に懸けては居らぬ様子、其まゝ後へ跟いて出ようとする時、紫陽花の花の蔭からぬいと出た一名の親仁がある。
背戸から廻つて來たらしい、草鞋を穿いたなりで、胴亂の根付を紐長にぶらりと提げ、銜煙管をしながら並んで立停まつた。
（和尚様おいでなさい。）
婦人は其方を振向いて、
（おじ様何うでござんした。）
（然ればさの、頓馬で間の抜けたといふのは彼のことかい。根ッから早や狐でなければ乗せ得さうにもない奴ぢやが、其處はおらが口ぢや、うまく仲人して、二月や三月はお嬢様が御不自由のねえやうに、翌日はものにして澤山と此處へ擔ぎ込みます。）
（お頼み申しますよ。）
（承知、承知、おゝ、嬢様何處さ行かつしやる。）
（崖の水まで一寸。）
（若い坊様連れて川へ落つこちさつしやるな。おら此處に眼張つて待つ居るに、）と横様に縁にのさり。
（貴僧、あんなことを申しますよ。）と顔を見て微笑んだ。
（一人で參りませう、）と傍へ退くと、親仁は吃々と笑つて、
（はゝゝゝ、さあ、早くいつてござらつせえ。）
（をゝ嬢様、今日はお前、珍らしいお客がお二方ござんした、恁う云ふ時はあとから又見えようも知れません、次郎さんばかりでは來た者が弱んなさらう、己が歸るまで其處に休んで居ておくれでないか。）
（可いともの。）といひかけて、親仁は少年の傍へにじり寄つて、鐵挺を見たやうな拳で、背中をどんとくらはした、白痴の腹はだぶりとして、べそをかくやうな口つきで、にやりと笑ふ。
私は悚然として面を背けたが、婦人は何氣ない體であつた。
親仁は大口を開いて、
（留守におらが此の亭主を盗むぞよ。）
（はい、ならば手柄でござんす、さあ、貴僧參りませうか。）
背後から親仁が見るやうに思つたが、導かるゝまゝに壁について、彼の紫陽花のある方ではない。
軈て背戸と思ふ處で左に馬小屋を見た、ことゝといふ音は羽目を蹴るのであらう、もう其邊から薄暗くなつて來る。
（貴僧、こゝから下りるのでございます、辷りはいたしませぬが、道が酷うございますからお靜に、）といふ。」

## 十三

「其處から下りるのだと思はれる、松の木の細くツて度外れに背の高い、ひよろ／＼した凡そ

五六間上までは小枝一ツもないのがある。其中を潜つたが、仰ぐと梢に出て白い、月の形は此處でも別にかはりは無かつた、浮世は何處にあるか十三夜で。

先へ立つた婦人の姿が目さきを放れたから、松の幹に摑まつて覗くと、つい下に居た。

仰向いて、

(急に低くなりますから氣をつけて。こりや貴僧には足駄では無理でございましたか不知、宜しくば草履とお取交へ申しませう。)

立後れたのを歩行き惱んだと察した樣子、何が扨て轉げ落ちても早く行つて蛭の垢を落したさ。

(何、いけませんければ跣足になります分のこと、何卒お構ひなく、孃樣に御心配をかけては濟みません。)

(あれ、孃樣ですつて、)と稍調子を高めて、艶麗に笑つた。

(唯、唯今あの爺樣が、然やう申しましたやうに存じますが、夫人でございますか。)

(何にしても貴僧には叔母さん位な年紀ですよ。まあ、お早くいらつしやい、草履も可うござんすけれど、棘がさゝりますと不可ません、それにじく／＼濡れて居てお氣味が惡うございませうから。)と向う向でいひながら衣服の片褄をぐいとあげた。眞白なのが暗まぎれ、歩行くと霜が消えて行くやうな。

ずん／＼ずん／＼と道を下りる、傍らの叢から、のさ／＼と出たのは蟇で。

(あれ、氣味が惡いよ。)といふと婦人は背後へ高々と踵を上げて向うへ飛んだ。

(お客樣が被在つしやるではないかね、人の足になんか搦まつて、贅澤ぢやあないか、お前達は蟲を吸つて居れば澤山だよ。

貴僧ずん／＼入らつしやいましな、何うもしはしません。恁う云ふ處ですからあんなものまで人懷しうございます、厭ぢやないかね、お前達と友達を見たやうで可愧しい、あれ可けませんよ。)

蟇はのさ／＼と又草を分けて入つた、婦人はむかうへずいと。

(さあ此の上へ乘るんです、土が柔かで壞えますから地面は歩行かれません。)

いかにも大木の僵れたのが草がくれに其の幹をあらはして居る、乘ると足駄穿で差支へがない、丸木だけれども可恐しく太いので、尤もこれを渡り果てると忽ち流の音が耳に激した、それまでには餘程の間。

仰いで見ると松の樹はもう影も見えない、十三夜の月はずつと低うなつたが、今下りた山の頂に半ばかゝつて、手が屆きさうにあざやかだけれども、高さは凡そ計り知られぬ。

(貴僧、此方へ。)

といつた婦人はもう一息、目の下に立つて待つて居た。

其處は早や一面の岩で、岩の上へ谷川の水がかゝつて此處によどみを作つて居る、川幅は一間ばかり、水に臨めば音は然までにもないが、美しさは玉を解いて流したやう、却つて遠くの方で凄じく岩に碎ける響がする。

向う岸は又一座の山の裾で、頂の方は眞暗だが、山の端から其山腹を射る月の光に照し出された邊からは大石小石、栄螺のやうなの、六尺角に切出したの、劍のやうなのやら、鞠の形をしたのやら、目の屆く限り不殘岩で、次第に大きく水に浸つたのは唯小山のやう。」

## 十四

「(可い鹽梅に今日は水がふえて居りますから、中へ入りませんでも此上で可うございます。)と甲を浸して爪先を屈めながら、雪のやうな素足で石の盤の上に立つて居た。

自分達が立つた側は、却つて此方の山の裾が水に迫つて、丁度切穴の形になつて、其處へ此の石を嵌めたやうな誂。川上も下流も見えぬが、向うの彼の岩山、九十九折のやうな形、流は五尺、三尺、一間ばかりづゝ上流の方が段々遠く、飛々に岩をかゞつたやうに隱見して、いづれも月光を浴びた、銀の鎧の姿、目のあたり近いのはゆるぎ絲を捌くが如く眞白に激つて。

（結構な流でございますな。）

（はい、此の水は源が瀧でございます、此山を旅するお方は皆な大風のやうな音を何處かで聞きます。貴僧は此方へ被入つしやる道でお心着きはなさいませんかい。）

然ればこそ山蛭の大藪へ入らうといふ少し前から其の音を。

（彼は林へ風の當るのではございませんので？）

（否、誰でも然う申します、那の森から三里ばかり傍道へ入りました處に大瀧があるのでございます、其は〳〵日本一ださうですが、路が嶮しうござんすので、十人に一人參つたものはございません。其の瀧が荒れましたと申しまして、丁度今から十三年前、可恐しい洪水がございました、恁麼高い處まで川の底になりましてね、麓の村も山の家も不殘流れて了ひました。此の上の洞も、はじめは二十軒ばかりあつたのでござんす、此の流も其時から出來ました、御覽なさいましな、此通り皆石が流れたのでございますよ。）

婦人は何時かもう米を精げ果てゝ、衣紋の亂れた、乳の端もほの見ゆる、膨らかな胸を反して立つた、鼻高く口を結んで目を恍惚と上を向いて頂を仰いだが、月はなほ半腹の其の累々たる巖を照すばかり。

（今でも恁うやつて見ますと恐いやうでございます。）と屈んで二の腕の處を洗つて居ると。

（あれ、貴僧、那樣行儀の可いことをして被在しつてはお召が濡れます、氣味が惡うございますよ、すつぱり裸體になつてお洗ひなさいまし、私が流して上げませう。）

（否。）

（否ぢやあござんせぬ、それ、それ、お法衣の袖が浸るではありませんか、）といふと突然背後から帯に手をかけて、身悶をして縮むのを、邪慳らしくすつぱり脱いで取つた。

私は師匠が嚴しかつたし、經を讀む身體ぢや、肌さへ脱いだことはつひぞ覺えぬ。然も婦人の前、蝸牛が城を明け渡したやうで、口を利くさへ、況して手足のあがきも出來ず、背中を圓くして、膝を合せて、縮かまると、婦人は脱がした法衣を傍らの枝へふはりとかけた。

（お召は恁うやつて置きませう、さあお背を、あれさ、ぢつとして。お孃樣と仰有つて下さいましたお禮に、叔母さんが世話を燒くのでござんす、お人の惡い、）といつて片袖を前齒で引上げ、

玉のやうな二の腕をあからさまに背中に乘せたが、熟と見て、

（まあ、）

（何うかいたしてをりますか。）

（痣のやうになつて、一面に。）

（えゝ、それでございます、酷い目に逢ひました。）

思ひ出しても悚然とするて。」

## 十五

「婦人は驚いた顔をして、

（それでは森の中で、大層でございますこと、旅をする人が、飛騨の山では蛭が降るといふのは彼處でござんす。貴僧は抜道を御存じないから正面に蛭の巣をお通りなさいましたのでござ

いますよ。お生命も冥加な位、馬でも牛でも吸ひ殺すのでございますもの。然し疼くやうにお痒いのでござんせうね。）

（唯今では最う痛みますばかりになりました、）

（それでは恁麼ものでこすりましては柔かいお肌が擦剝けませう、）といふと手が綿のやうに障つた。

それから両方の肩から、背、横腹、臀、さらさら水をかけてはさすつてくれる。

それがさ、骨に透つて冷たいかといふと然うではなかつた。暑い時分ぢやが、理窟をいふと恁うではあるまい、私の血が沸いたせゐか、婦人の温気か、手で洗つてくれる水が可い工合に身に染みる、尤も質の佳い水は柔かぢやさうな。

其の心地の得もいはれなさで、眠気がさしたでもあるまいが、うと／＼する様子で、疵の痛みがなくなつて気が遠くなつて、ひたと附ついて居る婦人の身体で、私は花びらの中へ包まれたやうな工合。

山家の者には肖合はぬ、都にも希な器量はいふに及ばぬが弱々しさうな風采ぢや、背中を流す中にもはツ／＼と内証で呼吸がはずむから、最う断らう／＼と思ひながら、例の恍惚で、気はつきながら洗はした。

其上、山の気か、女の香か、ほんのりと佳い薫がする、私は背後でつく息ぢやらうと思つた。」

上人は一寸句切つて、

「いや、お前様お手近ぢや、其の明を掻き立つて貰ひたい、暗いと怪しからぬ話ぢや、此処等から一番野面で遣つけよう。」

枕を並べた上人の姿も朧げに明は暗くなつて居た、早速燈心を明くすると、上人は微笑みながら続けたのである。

「さあ、然うやつて何時の間にやら現とも無しに、恁う、其の不思議な、結構な薫のする暖い花の中へ柔かに包まれて、足、腰、手、肩、頸から次第に天窓まで一面に被つたから吃驚、石に尻餅を搗いて、足を水の中に投げ出したから落ちたと思ふ途端に、女の手が背後から肩越しに胸をおさへたので確りつかまつた。

（貴僧、お傍に居て汗臭うはござんせぬかい、飛んだ暑がりなんでございますから、恁うやつて居りましても恁麼でございますよ。）といふ胸にある手を取つたのを、慌てゝ放して棒のやうに立つた。

（失礼、）

（いゝえ誰も見て居りはしませんよ。）と澄して言ふ、婦人も何時の間にか衣服を脱いで全身を練絹のやうに露して居たのぢや。

何と驚くまいことか。

（恁麼に太つて居りますから、最うお可愧しいほど暑いのでございます、今時は毎日二度も三度も来ては恁うやつて汗を流します、此の水がございませんかつたら何ういたしませう、貴僧、お手拭）といつて絞つたのを寄越した。

（其でおみ足をお拭きなさいまし。）

何時の間にか、体はちやんと拭いてあつた、お話し申すも恐多いが、はゝはゝ。」

## 十六

「なるほど見た処、衣服を着た時の姿とは違うて肉つきの豊な、ふつくりとした膚。

（先刻小屋へ入つて世話をしましたので、ぬら／＼した馬の鼻息が体中へかゝつて気味が悪うござんす。丁度可うございますから私も体を拭きませう、）

と姉弟が内端話をするやうな調子。手をあげて黒髪をおさへながら腋の下を手拭でぐいと拭き、あとを両手で絞りながら立つた姿、唯

これ手のそうなのを恁る淸水で淸めた、恁う云ふ女の汗は薄紅になつて流れよう。

一寸々々と櫛を入れて、

「まあ、女がこんなお轉婆をいたしまして、川へ落こちたら何うしませう、川下へ流れて出ましたら、村里の者が何といつて見ませうね。」

「白桃の花だと思ひます。」と弗と心付いて何の氣もなしにいふと、顏が合うた。

すると、然も嬉しさうに莞爾して其時だけは初々しう年紀も七ッ八ッ若やぐばかり、處女の羞を含んで下を向いた。

私は其まゝ目を外らしたが、其の一段の婦人の姿が月を浴びて、薄い煙に包まれながら向う岸の潵に濡れて黑い、滑かな大きな石へ蒼味を帶びて透通つて映るやうに見えた。

するとね、夜目で判然とは目に入らなんだが地體何でも洞穴があると見える。ひら〳〵と、此方からもひら〳〵と、もの〻鳥ほどはあらうといふ大蝙蝠が目を遮つた。

「あれ、不可いよ、お客樣があるぢやないかね。」

不意を打たれたやうに叫んで身悶えをしたのは婦人。

「何うかなさいましたか、」最うちやんと法衣を着たから氣丈夫に尋ねる。

「否、」

といつたばかりで極が惡さうに、くるりと後向になつた。

其時小犬ほどな鼠色の小坊主が、ちよこ〳〵とやつて來て、啊呀と思ふと、崖から橫に宙をひよいと、背後から婦人の背中へぴつたり。

裸體の立姿は腰から消えたやうになつて、抱ついたものがある。

「畜生、お客樣が見えないかい。」

と聲に怒を帶びたが、

「お前達は生意氣だよ、」と激しくいひさま、腋の下から覗かうとした件の動物の天窓を振返りさまにくらはしたで。

キッ〳〵というて奇聲を放つた、件の小坊主は其まゝ後飛びに又宙を飛んで、今まで法衣をかけて置いた、枝の尖へ長い手で釣し下つたと思ふと、くるりと釣瓶覆に上へ乘つて、其なりさら〳〵と木登をしたのは、何と猿ぢやあるまいか。

枝から枝を傳ふと見えて、見上げるやうに高い木の、軈て梢まで、かさ〳〵がさり。

まばらに葉の中を透かして月は山の端を放れた、其の梢のあたり。

婦人はものに拗ねたやう、今の惡戯、いや、毎々、蟇と蝙蝠と、お猿で三度ぢや。

其の惡戯に多く機嫌を損ねた形、あまり子供がはしやぎ過ぎると、若い母樣には得てある圖ぢや。

本當に怒り出す

といつた風情で面倒臭さうに衣服を着て居たから、私は何にも問はずに小さくなつて默つて控へた。」

## 十七

「優しいなかに強みのある、氣輕に見えても何處にか落着のある、馴々しくて犯し易からぬ品の可い、如何なることにもいざとなれば驚くに足らぬといふ身に應のあるといつたやうな風の婦人、恁く嬌瞋を發しては屹度可いことはあるまい、今此の婦人に邪慳にされては木から落ちた猿同然ぢやと、おつかなびつくりで、おづ〳〵控へて居たが、いや案ずるより產が安い。

「貴僧、嘸をかしかつたでござんせうね、」と自分でも思ひ出したやうに快く微笑みながら、

「爲やうがないのでございますよ。」

以前と變らず心安くなつた、帶を早やしめたので、

（其では家へ歸りませう。）と米磨桶を小脇にして、草履を引かけて衝と崖へ上つた。

（お危うござんすから。）

（否、もう大分勝手が分つて居ります。）

ずツと心得た意ぢやつたが、扨上る時見ると思ひの外上までは大層高い。

軈て又例の木の丸太を渡るのぢやが、先刻もいつた通り草のなかに横倒れになつて居る木地が恁う丁度鱗のやうで、譬にも能くいふが松の木は蟒に似て居るで。

殊に崖を、上の方へ、可い鹽梅に蜿つた樣子が、飛んだものに持つて來いなり、凡そ此の位な胴中の長蟲がと思ふと、頭と尾を草に隱して、月あかりに歴然とそれ。

山路の時を思ひ出すと我ながら足が竦む。

婦人は深切に後を氣遣うては氣を付けてくれる。

（其をお渡りなさいます時、下を見てはなりません、丁度ちゆうとで餘程谷が深いのでございますから、目が廻ふと惡うございます。）

（はい。）

愚圖々々してはゐられぬから、我身を笑ひつけて、先づ乘つた。引かゝるやう、刻が入れてあるのぢやから、氣さへ確なら足駄でも歩行かれる。

其がさ、一件ぢやから耐らぬて、乘ると恁うぐら／＼して柔かにずる／＼と這ひさうぢやから、わツといふと引跨いで腰をどさり。

（あゝ、意氣地はございませんねえ。足駄では無理でございませう、之とお穿き換へなさいまし、あれさ、ちやんといふことを肯くんですよ。）

私はその先刻から何んとなく此婦人に畏敬の念が生じて善か惡か、何の道命令されるやうに心得たから、いはるゝまゝに草履を穿いた。

するとお聞きなさい、婦人は足駄を穿きながら手を取つてくれます。

忽ち身が輕くなつたやうに覺えて、譯なく後に從つて、ひよいと那の孤家の背戸の端へ出た。

出會頭に聲を懸けたものがある。

（やあ、大分手間が取れると思つたに、御坊樣舊の體で歸らつしやつたの、）

（何をいふんだね、小父樣家の番は何うおしだ。）

（もう可い時分ぢや、又私も餘り遲うなつては道が困るで、そろ／＼青を引出して支度して置かうと思うてよ。）

（其はお待遠でござんした。）

（何さ、行つて見さつしやい御亭主は無事ぢや、いやなか／＼私が手には口說き落されなんだ、はゝはゝ。）と意味もないことを大笑して、親仁は廐の方へてく／＼と行つた。

白痴はおなじ處に猶形を存して居る、海月も日にあたらねば解けぬと見える。

## 十八

「ヒイヽン！　叱、どう／＼／＼と背戸を廻る鰭爪の音が緣へ響いて親仁は一頭の馬を門前へ引き出した。

轡頭を取つて立ちはだかり、

（孃樣そんなら此儘で私參りやする、はい、御坊樣に澤山御馳走して上げなされ。）

婦人は爐緣に行燈を引附け、俯向いて鍋の下を燻して居たが、振仰ぎ、鐵の火箸を持つた手に膝を置いて、

（御苦勞でござんす。）

（いんえ御懇には及びましねえ。叱！）と荒繩の綱を引く。青で蘆毛、裸馬で逞しいが、鬣の薄い牡ぢやわい。

其馬がさ、私も別に馬は珍らしうもないが、白痴殿の背後に畏つて手持不沙汰ぢやから今

引いて行かうとする時縁側へひらりと出て、
(其馬は何處へ。)
(おゝ、諏訪の湖の邊まで馬市へ出しやすのぢや、これから明朝御坊様が歩行かつしやる山路を越えて行きやす。)
(もし、其へ乘つて今からお遁げ遊ばすお意ではないかい。)
婦人は慌しく遮つて聲を懸けた。
(いえ、勿體ない、修行の身が馬で足休めをしませうなぞとは存じませぬ。)
(何でも人間を乘つけられさうな馬ぢやあござらぬ。御坊様は命拾ひをなされたのぢやで、大人しうして嬢様の袖の中で、今夜は助けて貰はつしやい。然様ならちよつくら行つて參りますよ。)
(あい。)
(畜生。)といつたが馬は出ないわ。びく〳〵と蠢いて見える大な鼻面を此方へ捻ぢ向けて頻に私等が居る方を見る樣子。
(どう〳〵どう、畜生これあだけた獸ぢや、やい！)
右左にして綱を引張つたが、脚から根をつけた如くにぬツくと立つて居てびくともせぬ。
親仁大いに苛立つて、叩いたり、打つたり、馬の胴體について二三度ぐる〳〵と廻つたが少しも歩かぬ。肩でぶツつかるやうにして横腹へ體をあてた時、漸う前足を上げたばかり又四脚を突張り拔く。
(嬢様々々。)
と親仁が喚くと、婦人は一寸立つて白い爪さきをちよろ〳〵と眞黑に煤けた太い柱を楯に取つて、馬の目の屆かぬほどに小隱れた。
其内腰に挾んだ、煮染めたやうな、なえ〳〵の手拭を拔いて克明に刻んだ額の皺の汗を拭いて、親仁は之で可しといふ氣組、再び前へ廻つたが、舊に依つて貧乏動もしないので、綱に兩手をかけて足を揃へて反返るやうにして、うむと總身に力を入れた。途端に何うぢやい。
凄じく嘶いて前足を兩方中空へ飜したから、小さな親仁は仰向けに引くりかへつた、づどどう、月夜に砂煙が𤏋と立つ。
白痴にも之は可笑しかつたらう、此時ばかりぢや、眞直に首を据ゑて厚い唇をばくりと開けた、大粒な齒を露出して、那の宙へ下げて居る手を風で煽るやうに、はらり〳〵。
(世話が燒けることねえ、)
婦人は投げるやうにいつて草履を突かけて土間へつい と出る。
(嬢様勘違ひさつしやるな、これはお前様ではないぞ、何でもはじめから其處な御坊様に目をつけたッけよ、畜生俗縁があるだッぺいわさ。)
俗縁は驚いたい。
すると婦人が、
(貴僧こゝへ入らつしやる路で誰にかお逢ひなさりはしませんか。)」

## 十九

「(はい、辻の手前で富山の反魂丹賣に逢ひましたが、一足前に矢張此路へ入りました。)
(あゝ、然う。)と會心の笑を洩して婦人は蘆毛の方を見た、凡そ耐らなく可笑しいといつたはしたない風采で。
極めて與し易う見えたので、
(もしや此家へ參りませなんだでございませうか。)
(否、存じません。)といふ時忽ち犯すべからざる者になつたから、私は口をつぐむと、婦人は、這を扱げて衣服の塵を拂うて居る馬の前足の下に小さな親仁を見向いて、
(爲様がないねえ、)といひながら、かなぐるやうにして、其の細帯を解きかけた、片端が土へ

引かうとするのを、[illegible]

（あゝ、あゝ。）と濁つた聲を出して白痴が件のひよろりとした手を差向けたので、婦人は解いたのを渡して遣ると、風呂敷を寛げたやうな、他愛のない、力のない、膝の上へわがねて寳物を守護するやうぢや。

婦人は衣紋を抱き合せ、乳の下でおさへながら靜に土間を出て馬の傍へつゝと寄つた。

私は唯呆氣に取られて見て居ると、爪立をして伸び上り、手をしなやかに空ざまにして、二三度鬣を撫でたが。

大きな鼻頭の正面にすつくりと立つた。丈もすら〳〵と急に高くなつたやうに見えた、婦人は目を据ゑ、口を結び、眉を開いて恍惚となつた有様、愛嬌も嬌態も、世話らしい打解けた風は頓に失せて、神か、魔かと思はれる。

其時裏の山、向うの峰、左右前後にすく〳〵とあるのが、一ツ一ツ嘴を向け、頭を擡げて、此の一落の別天地、親仁を下手に控へ、馬に面して彳んだ月下の美女の姿を差覗くが如く、陰々として深山の氣が籠つて來た。

生ぬるい風のやうな氣勢がすると思ふと、左の肩から片膚を脱いだが、右の手を脱して、前へ廻し、ふくらんだ胸のあたりで着て居た其の單衣を圓げて持ち、霞も絡はぬ姿になつた。

馬は背、腹の皮を弛めて汗もしとゞに流れんばかり、突張つた脚もなよ〳〵として身震をしたが、鼻面を地につけて一掴の白泡を吹出したと思ふと前足を折らうとする。

其時、頤の下へ手をかけて、片手で持つて居た單衣をふはりと投げて馬の目を蔽ふが否や、兎は躍つて、仰向けざまに身を飜し、妖氣を籠めて朦朧とした月あかりに、前足の間に膚が挟まつたと思ふと、衣を脱して掻取りながら下腹を衝と潜つて横に抜けて出た。

親仁は差心得たものと見える、此の機かけに手綱を引いたから、馬はすた〳〵と健脚を山路に上げた、しやん、しやん、しやん、しやんしやん、しやんしやん、——見る間に眼界を遠ざかる。

婦人は早や衣服を引かけて縁側へ入つて來て、突然帶を取らうとすると、白痴は惜しさうに押へて放さず、手を上げて、婦人の胸を壓へようとした。

邪慳に拂ひ退けて、屹と睨んで見せると、其のまゝがつくりと頭を垂れた、總ての光景は行燈の火も幽に幻のやうに見えたが、爐にくべた柴がひら〳〵と炎先を立てたので、婦人は衝と走つて入る。空の月のうらを行くと思ふあたり遙に馬子唄が聞えたて。」

## 二十

「さて、其から御飯の時ぢや、膳には山家の香の物、生薑の漬けたのと、わかめを茹でたの、鹽漬の名も知らぬ蕈の味噌汁、いやなか〳〵人參と干瓢どころではござらぬ。

品物は侘しいが、なか〳〵の御手料理、餓ゑては居るし、冥加至極なお給仕、盆を膝に構へて其上に肱をついて、頬を支へながら、嬉しさうに見て居たわ。

縁側に居た白痴は誰も取合はぬ徒然に堪へられなくなつたものか、ぐた〳〵と膝行出して、婦人の傍へ其の便々たる腹を持つて來たが、崩れたやうに胡坐して、頻にこう我が膳を視めて、指をした。

（うゝ〳〵、うゝ〳〵。）

（何でございますね、あとでお食んなさい、お客様ぢやあありませんか。）

白痴は情ない顔をして口を曲めながら頭を掉つた。

（厭？　仕樣がありませんね、それぢや御一所に召しあがれ。貴僧、御免を蒙りますよ。）

私は思はず箸を置いて、

(さあ何うぞお構ひなく、飛んだ御造作を頂きます。)

(否、何の貴僧。お前さん後程に私と一所にお食んなされば可いのに。困つた人でございますよ)とそらさぬ愛想、手早く同一やうな膳を拵へてならべて出した。

飯のつけやうも数々しい女房ぶり、然も何となく奥床しい、上品な、高家の風がある。

白痴はどんよりした目をあけて膳の上を睨めて居たが、

(彼を、あゝ、彼、彼。)といつてきよろ〳〵と四辺を瞶す。

婦人は熟と瞻つて、

(まあ、可いぢやないか。そんなものは何時でも食べられます、今夜はお客様がありますよ。)

(うむ、いや、いや。)と肩腹を揺つたが、べそを掻いて泣出しさう。

婦人は困じ果てたらしい、傍のもの〻気の毒さ。

(嬢様、何か存じませんが、おつしやる通りになすつたが可いではございませんか。私にお気遣は却つて心苦しうございます。)と慇懃にいうた。

婦人は又最う一度、

(厭かい、これでは悪いのかい。)

白痴が泣出しさうにすると、然も怨めしげに流眄に見ながら、こはれ〳〵になつた戸棚の中から、鉢に入つたのを取り出して手早く白痴の膳につけた。

(はい。)と故とらしく、すねたやうにいつて笑顔造。

はてさて迷惑な、こりや目の前で青色蛇の旨煮か、腹籠の猿の蒸焼か、災難が軽くつても、赤蛙の干物を大口にしやぶるであらうと、潜と見て居ると、片手に椀を持ちながら摑出したのは老沢庵。

其もさ、刻んだのではないで、一本三ツ切にしたらうといふ屈竟なのを横銜へにしてやらかすのぢや。

婦人はよく〳〵あしらひかねたか、盗むやうに私を見て颯と顔を赧らめて初心らしい、然様な質ではあるまいに、恥かしげに膝なる手拭の端を口にあてた。

なるほど此の少年はこれであらう、身体は沢庵色にふとつて居る。やがてわけもなく餌食を平らげて湯ともいはず、ふツ〳〵と大儀さうに呼吸を向うへ吐くわさ。

(何でございますか、私は胸に支へましたやうで、些少も欲しくございませんから、又後程に頂きましやう、)

と婦人自分は箸も取らずに二ツの膳を片つけてな。

## 二十一

一頻刻悄乎して居たつけ。

(貴僧、嘸お疲労、直にお休ませ申しませうか。)

(難有う存じます、未だ些とも眠くはございません、先刻体を洗ひましたので草臥もすつかり復りました。)

(那の流は何んな病にでもよく利きます、私が苦労をいたしまして骨と皮ばかりに体が朽れましても、半日彼処につかつて居りますと、水々しくなるのでございますよ。尤も那の、これから冬になりまして山が宛然氷つて了ひ、川も崖も不残雪になりましても、貴僧が行水を遊ばした彼処ばかりは水が隠れませぬ、然うしていきり立ちます。

鉄砲疵のございます猿だの、貴僧、足を折つた五位鷺、種々なものが浴みに参りますから其

の足許で唯の聲が出来ます位、屹と其が利いたのでございませう。

那様にございませんければ恁うやつてお話をなすつて下さいまし、寂しくつてなりません、本当にお可懐しうございますが、恁麼山の中に引籠つてをりますと、ものをいふことも忘れましたやうで、心細いのでございますよ。

貴僧、それでもお眠ければ御遠慮なさいますなえ。別にお寝室と申してもございませんが其代り蚊は一ツも居ませんよ、町方ではね、上の洞の者は、里へ泊りに来た時蚊帳を釣つて寝かさうとすると、何うして入るのか解らないので、梯子を貸せいと喚いたと申して嬲るのでございます。

澤山朝寝を遊ばしても鐘は聞えず、鶏も鳴きません、犬だつて居りませんからお心安うござんせう。

此人も生れ落ちると此山で育つたので、何にも存じません代り、気の可い人で些ともお心置はないのでござんす。

それでも風俗のかはつた方が被入つしやいますと、大事にしてお辞儀をすることだけは知つてゞございますが、未だ御挨拶をいたしませんね、此頃は體がだるいと見えてお惰けさんになんなすつたよ。いゝえ、宙で愚なのではございません、何でもちやんと心得て居ります。

さあ、御坊様に御挨拶をなすつて下さい、まあ、お辞儀をお忘れかい。）と親しげに身を寄せて、顔を差覗いて、いそ／＼していふと、白痴はふら／＼と両手をついて、ぜんまいが切れたやうにがつくり一禮。

（はい、）といつて私も何か胸が迫つて頭を下げた。

其まゝ其の俯向いた拍子に筋が抜けたらしい、横に流れようとするのを、婦人は優しう扶け起して、

（おゝ、よく為たのねえ、）

天晴といひたさうな顔色で、

（貴僧、申せば何でも出来ませうと思ひますけれども、此人の病ばかりはお医者の手でも那の水でも復りませなんだ、両足が立ちませんのでございますから、何を覚えさしましても役には立ちません。其に御覧なさいまし、お辞儀一ツいたしますさへ、あの通り大儀らしい。

ものを教へますと覚えますのに骨が折れて切なうござんせう、體を苦しませるだけだと存じて何にも為せないで置きますから、段々、手を動かす働も、ものをいふことも忘れました。

其でも那の、謡が唄へますわ。二ツ三ツ今でも知つて居りますよ。さあお客様に一ツお聞かせなさいましなね。）

白痴は婦人を見て、又私が顔をじろ／＼見て、人見知をするといつた形で首を振つた。

## 二十二

左右して、婦人が、励ますやうに、賺すやうにして勧めると、白痴は首を曲げて彼の臍を弄びながら唄つた。

木曾の御嶽山は夏でも寒い、
袷遣りたや足袋添へて。

（よく知つて居りませう、）と婦人は聞き澄して莞爾する。

不思議や、唄つた時の白痴の聲は此話をお聞きなさるお前様は固よりぢやが、私も推量したとは月鼈雲泥、天地の相違、節廻し、あげさげ、呼吸の続く処から、第一其の清らかな涼しい聲といふ者は、到底此の少年の喉から出たものではない。先づ前の世の此白痴の身が、冥土から管で其のふくれた腹へ通はして寄越すほどに聞えましたよ。

私は畏つて聞き果てると、膝に手をついたッ切り何うしても顔を上げて其処な男女を見る

ことも出来ぬ、何か騒がキヤツ／＼して、はらはらと落涙した。
婦人は目早く見つけたさうで、
（おや、貴僧、何うかなさいましたか。）
急にものもいはれなんだが漸々、
（いゝえ、何、変つたことでもござりませぬ、私も嬢様のことは別にお尋ね申しませんから、貴女も何にも問うては下さりますな。）
と仔細は語らず唯思ひ入つて然う言うたが、実は以前から様子でも知れる、金釵玉簪をかざし、蝶衣を纏うて、珠履を穿たば、正に驪山に入つて、相抱くべき豊肥妖艶の人が、其男に対する取廻しの優しさ、隔なさ、深切さに、人事ながら嬉しくて、思はず涙が流れたのぢや。
すると人の腹の中を読みかねるやうな婦人ではない、忽ち様子を悟つたかして、
（貴僧は真個にお優しい。）といつて、得も謂はれぬ色を目に湛へて、ぢつと見た。私も首を低れた、むかうでも差俯向く。
いや、行燈が又薄暗くなつて参つたやうぢやが、恐らくこりや白痴の所為ぢやて。
其時よ。
座が白けて、暫く言葉が途絶えたうちに所在がないので、唄うたひの太夫、退屈をしたと見えて、顔の前の行燈を吸ひ込むやうな大欠伸をしたから。
身動きをしてな、
（寝ようちやあ、寝ようちやあ。）とよた／＼體を持扱ふわい。
（眠うなつたのかい、もうお寝か。）といつたが坐り直つて不と気がついたやうに四辺を眴した。戸外は恰も真昼のやう、月の光は開け放した家の内へはら／＼とさして、紫陽花の色も鮮麗に蒼かつた。
（貴僧ももうお休みなさいますか。）
（はい、御厄介にあひなりまする。）
（まあ、いま床を敷かします、おゆつくりなさいましな。戸外へは近うござんすが、夏は広い方が結句宜うございませう、私どもは納戸へ臥せりますから、貴僧は此処へお広くお寛ぎが可うござんす、一寸待つて。）といひかけて衝と立ち、つか／＼と足早に土間へ下りた、余り身のこなしが活溌であつたので、其の拍子に黒髪が先を巻いたまゝ項へ崩れた。
鬢をおさへて戸につかまつて、戸外を透かしたが、独言をした。
（おや／＼さつきの騒ぎで櫛を落したさうな。）
いかさま馬の腹を潜つた時ぢやて。」

## 二十三

此折から下の廊下に跫音がして、静に大跨に歩行いたのが、寂として居るから能く。
軈て小用を達した様子、雨戸をばたりと開けるのが聞えた、手水鉢へ柄杓の響。
「おゝ、積つた、積つた。」と呟いたのは、旅籠屋の亭主の声である。
「ほゝう、此の若狭の商人は何処へか泊つたと見える、何か愉快い夢でも見て居るかな。」
「何うぞ其後を、それから。」と聞く身には他事をいふうちが悶かしく、膠もなく続きを促した。
「さて、夜も更けました、」といつて旅僧は又語出した。
「大抵推量もなさるであらうが、いかに草臥れて居つても申上げたやうな深山の孤家で、眠られるものではない、其に少し気になつて、はじめの内私を寝かさなかつた事もあるし、目は冴えて、まじ／＼して居たが、有繁に、疲が酷いから、心は少し茫乎して来た、何しろ夜の白むのが待遠でならぬ。
其処ではじめの内は我ともなく鐘の音の聞え

るのを心頼みにして、今鳴るか、もう鳴るか、はて時刻はたつぷり經つたものをと、怪しんだが、やがて氣が付いて、恁ういふ處ぢや山寺處ではないと思ふと、俄に心細くなつた。

其時は早や、夜がものに譬へると谷の底ぢや、白痴がだらしのない寐息も聞えなくなると、忽ち戸の外にものゝ氣勢がして來た。

獸の跫音のやうで、然まで遠くの方から歩行いて來たのではないやう、猿も、蟇も、居る處と、氣休めに先づ考へたが、なか〳〵何うして。

暫くすると今其奴が正面の戸に近いたなと思つたのが、羊の鳴聲になる。

私は其の方を枕にして居たのぢやから、つまり枕頭の戸外ぢやな。暫くすると、右手の彼の紫陽花が咲いて居た其の花の下あたりで、鳥の羽ばたきする音。

むさゝびか知らぬがきツ〳〵といつて屋の棟へ、やがて凡そ小山ほどあらうと氣取られるのが胸を壓すほどに近いて來て、牛が鳴いた、遠く彼方からひた〳〵と小刻に駈けて來るのは、二本足に草鞋を穿いた獸と思はれた、いやさまざまにむら〳〵と家のぐるりを取卷いたやうで、二十三十のものゝ鼻息、羽音、中には囁いて居るのがある。恰も何よ、それ畜生道の地獄の繪を、月夜に映したやうな怪しの姿が板戸一重、魑魅魍魎といふのであらうか、ざわ〳〵と木の葉が戰ぐ氣色だつた。

息を凝すと、納戸で、

(うむ、)といつて長く呼吸を引いて一聲、魘れたのは婦人ぢや。

(今夜はお客樣があるよ。)と叫んだ。

(お客樣があるぢやないか。)

と暫く經つて二度目のは判然と清しい聲。

極めて低聲で、

(お客樣があるよ。)といつて寢返る音がした、更に寢返る音がした。

戸の外のものゝ氣勢は動搖を造るが如く、ぐら〳〵と家が搖いた。

私は陀羅尼を呪した。

若不順我呪　惱亂說法者
頭破作七分　如阿梨樹枝
如殺父母罪　亦如壓油殃
斗秤欺誑人　調達破僧罪
犯此法師者　當獲如是殃

と一心不亂、颯と木の葉を捲いて風が南へ吹いたが、忽ち靜り返つた、夫婦が閨もひツそりした。」

## 二十四

「翌日又正午頃、里近く、瀧のある處で、昨日馬を賣りに行つた親仁の歸りに逢うた。

丁度私が修行に出るのを止して孤家に引返して、婦人と一所に生涯を送らうと思つて居た處で。

實を申すと此處へ來る途中でも其の事ばかり考へる、蛇の橋も幸になし、蛭の林もなかつたが、道が難澁なにつけても、汗が流れて心持が惡いにつけても、今更行脚も詰らない。紫の袈裟をかけて、七堂伽藍に住んだ處で何程のこともあるまい、活佛樣ぢやといふて、わあ〳〵拜まれゝば人いきれで胸が惡くなるばかりか。

些とお話もいかゞぢやから、先刻はことを分けていひませなんだが、昨夜も白痴を寢かしつけると、婦人が又爐のある處へやつて來て、世の中へ苦勞をしに出ようより、夏は涼しく、冬は暖い、此の流に一所に私の傍においでなさいといふてくれるし、まだ〳〵其ばかりでは自分に魔が魅したやうぢやけれども、こゝに我身で我身に言譯が出來るといふのは、頻に婦人が不便でならぬ、深山の孤家に白痴の伽をして言葉も通ぜず、日を經るに從うてものをいふ

こゝで、忘れようとしても忘れられぬといふは何たる事！

唯に今宵も東雲に袂を振り切つて別れようとすると、お名殘惜しや、かやうな處に恁うやつて老朽ちる身で、再びお目にはかゝられまい、いさゝ小川の水になりとも、何處ぞで白桃の花が流れるのを御覽になつたら、私の體が谷川に沈んで、ちぎれ〳〵になつたことゝ思へ、といつて悄れながら、なほ深切に、道は唯此の谷川の流に沿うて行きさへすれば、何れほど遠くても里に出らるゝ、目の下近く水が躍つて、瀧になつて落つるのを見たら、人家が近づいたと心を安んずるやうに、と氣をつけて、孤家の見えなくなつた邊で、指しをしてくれた。

其手と手を取交すには及ばずとも、傍につき添つて、朝夕の話對手、蕈の汁で御膳を食べたり、私が榾を焚いて、婦人が鍋をかけて、私が木の實を拾つて、婦人が皮を剝いて、それから障子の内と外で、話をしたり、笑つたり、それから谷川で二人して、其時の婦人が裸體になつて私が背中へ呼吸が通つて、微妙な薫の花びらに暖に包まれたら、其まゝ命が失せても可い！

瀧の水を見るにつけても耐へ難いのは其事であつた、いや、冷汗が流れますて。

其上、もう氣がたるみ、筋が弛んで、早や歩行くのに飽きが來て、喜ばねばならぬ人家が近づいたのも、高がよくされて口の臭い婆さんに澁茶を振舞はれるのが關の山と、里へ入るのも厭になつたから、石の上へ膝を懸けた、丁度目の下にある瀧ぢやつた、これがさ、後に聞くと女夫瀧と言ふさうで。

眞中に先づ鰐鮫が口をあいたやうな先のとがつた黑い大巖が突出て居ると、上から流れて來る颯と瀬の早い谷川が、之に當つて兩に岐れて、凡そ四丈ばかりの瀧になつて哄と落ちて、又暗碧に白布を織つて矢を射るやうに里へ出るのぢやが、其巖にせかれた方は六尺ばかり、之は川の一幅を裂いて絲も亂れず、一方は幅が狹い、三尺位、この下には雜多な岩が並ぶと見えて、ちら〳〵ちら〳〵と玉の簾を百千に碎いたやう、件の鰐鮫の巖に、すれつ、縋れつ。」

## 二十五

「唯一筋でも巖を越して男瀧に縋りつかうとする形、それでも中を隔てられて末までは雫も通はぬので、揉まれ、搖られて具さに辛苦を嘗めるといふ風情、此の方は姿も窶れ容も細つて、流るゝ音さへ別様に、泣くか、怨むかとも思はれるが、あはれにも優しい女瀧ぢや。

男瀧の方はうらはらで、石を碎き、地を貫く勢、堂々たる有様ぢや、之が二つ件の巖に當つて左右に分れて二筋となつて落ちるのが身に沁みて、女瀧の心を碎く姿は、男の膝に取ついて美女が泣いて身を震はすやうで、岸に居てさへ體がわなゝく、肉が跳る。況して此の水上は、昨日孤家の婦人と水を浴びた處と思ふと、氣の所爲か其の女瀧の中に繪のやうな彼の婦人の姿が歴々、と浮いて出ると卷込まれて、沈んだと思ふと又浮いて、千筋に亂るゝ水とともに其の肌が粉に碎けて、花片が散込むやうな。あなやと思ふと更に、もとの顏も、胸も、乳も、手足も全き姿となつて、浮いつ沈みつ、ぱツと刻まれ、あツと見る間に又あらはれる。私は耐らず眞逆に瀧の中へ飛込んで、女瀧を確と抱いたとまで思つた。氣がつくと男瀧の方はどうどうと地響打たせて、山彦を呼んで轟いて流れて居る。あゝ其の力を以て何故救はぬ、儘よ！

瀧に身を投げて死なうより、舊の孤家へ引返せ。汚らはしい欲のあればこそ恁うなつた上に躊躇するわ、其顏を見て聲を聞けば、渠等夫婦

か同衾するのに枕を並べて差支へはない、それでも汗になつて修行をして、坊主で果てるよりは餘程の增しぢやと、思切つて戻らうとして、石を放れて身を起した、背後から一ツ背中を叩いて、「やあ、御坊様。」といはれたから、時が時なり、心も心、後暗いので吃驚して見ると、閻王の使ではない、これが親仁。

馬は賣つたか、身輕になつて、小さな包を肩にかけて、手に一尾の鯉の、鱗は金色なる、溌剌として尾の動きさうな、鮮しい、其丈三尺ばかりなのを、顋に藁を通して、ぶらりと提げて居た。何んにも言はず急にものもいはれないで瞻ると、親仁はおつと顏を見たよ。然うして、にやにやと、又一通りの笑ひ方ではないて、薄氣味の惡い北叟笑をして、

「何をしてござる、御修行の身が、この位の暑で、岸に休んで居さつしやる分ではあんめえ、一生懸命に歩行かつしやりや、昨夜の泊から此處まではたつた五里、もう里へ行つて地藏様を拜まつしやる時刻ぢや。

何ぢやの、己が孃様に念が懸つて煩惱が起きたのぢやの。うんにや、祕さつしやるな、おらが目は赤くつても、白いか黑いかはちやんと見える。

地體並のものならば、孃様の手が觸つて那の水を振舞はれて、今まで人間で居よう筈はない。

牛か馬か、猿か、蟇か、蝙蝠か、何にせい飛んだか跳ねたかせねばならぬ。谷川から上つて來さしつた時、手足も顏も人ぢやから、おらあ魂消た位。お前様それでも感心に志が堅固ぢやから助かつたやうなものよ。

何と、おらが曳いて行つた馬を見さしつたら う、それで、孤家へ來さつしやる山路で富山の反魂丹賣に逢はしつたといふではないか、それ見さつせい、彼の助平野郎、疾に馬になつて、それ馬市で錢になつて、錢が、そうら此の鯉に化けた。大好物で晩飯の菜になさる、お孃様を一體何ぢやと思はつしやるの。」

私は思はず遮つた。

「お上人？」

## 二十六

上人は頷きながら呟いて、

「いや、先づ聞かつしやい、彼の孤家の婦人といふは、舊な、これも私には何かの緣があつた、あの恐しい魔所へ入らうといふ岐道の水が溢れた往來で、百姓が教へて、彼處は其の以前醫者の家であつたといふたが、其の家の孃様ぢや。

何でも飛騨一圓當時變つたことも珍らしいこともなかつたが、唯取出でゝいふ不思議は此の醫者の娘で、生れると玉のやう。

母親殿は頬板のふくれた、眦の下つた、鼻の低い、俗にさし乳といふあの毒々しい左右の胸の房を含んで、何うして彼ほど美しく育つたものだらうといふ。

昔から物語の本にもある、屋の棟へ白羽の征矢が立つか、然もなければ狩倉の時貴人のお目に留つて御殿に召出されるのは、那麽のぢやと噂が高かつた。

父親の醫者といふのは、頬骨のとがつた髯の生えた、見得坊で傲慢、其癖でもぢや、勿論田舍には刈入の時よく稻の穗が目に入ると、それから煩ふ、脂目、赤目、流行目が多いから、先生眼病の方は少し遣つたが、内科と來てはからツぺた。外科なんと來た日にやあ、鬢附へ水を垂らしてひやりと疵につける位な處。

鰯の天窓も信心から、其でも命數の盡きぬ輩は本復するから、外に竹庵養仙木齋の居ない土地、相應に繁昌した。

殊に娘が十六七、女盛となつて來た時分には、藥師様が人助けに先生様の内へ生れてござつたといつて、信心渇仰の善男善女？　病男、病

如[illegible]も〳〵と詰め懸ける。

其といふのが、[illegible]嬢様が、それ、調薬の、病人には件の日薬を合せる所から愛想の一ツも、あなたお手が痛みますかい、甚麽でございます、といつて手先へ柔かな掌が障ると第一番に次作兄いといふ若いのゝりやうまちすが全快、お苦しさうなといつて腹をさすつて遣ると水あたりの差込の留まつたのがある、初手は若い男ばかりに利いたが、段々老人にも及ぼして、後には婦人の病人もこれで復る、復らぬまでも苦痛が薄らぐ、根太の膿を切つて出すさへ、錆びた小刀で引裂く医者殿が腕前ぢや、病人は七顛八倒して悲鳴を上げるのが、娘が来て背中へぴつたりと胸をあてゝ肩を押へて居ると、我慢が出来るといつたやうなわけであつたさうな。

一時彼の藪の前にある枇杷の古木へ熊蜂が来て可恐しい大きな巣をかけた。

すると、医者の内弟子で薬局、拭掃除もすれば総菜畠の芋も掘る、近い所へは車夫も勤めた、下男兼帯の熊蔵といふ、其頃二十四五歳、稀塩酸に単舎利別を混ぜたのを瓶に盗んで、内が吝嗇ぢやから見附かると叱られる、之を股引や袴と一所に戸棚の上に載せて置いて、隙さへあればちびり〳〵と飲んでた男が、庭掃除をするといつて、件の蜂の巣を見つけたッけ。

縁側へ遣つて来て、お嬢様面白いことをしてお目に懸けませう、無躾でございますが、私の此の手を握つて下さりますと、彼の蜂の中へ突込んで、蜂を掴んで見せませう。お手が障つた所だけは螫しましても痛みませぬ、竹箒で引払いては八方へ散らばつて体中に集られては其は凌げませぬ即死でございますがと、微笑んで控へる手で無理に握つて貰ひ、つか〳〵と行くと、凄じい虫の唸、軈て取つて返した左の手に熊蜂が七ツ八ツ、羽ばたきをするのがある、脚を振ふのがある、中には掴んだ指の股へ這出して居るのがあつた。

さあ、那の神様の手が障れば鉄砲玉でも通るまいと、蜘蛛の巣のやうに評判が八方へ。

其頃からいつとなく感得したものと見えて、仔細あつて、那の白痴に身を任せて山に籠つてからは神変不思議、年を経るに従うて神通自在ぢや、はじめは体を押つけたのが、足ばかりとなり、手さきとなり、果は間を隔てゝ居ても、道を迷うた旅人は嬢様が思ふまゝはッといふ呼吸で変ずるわ。

と親仁が其時物語つて、御坊は、孤家の周囲で、猿を見たら、蟇を見たら、蝙蝠を見たであらう、兎も蛇も皆嬢様に谷川の水を浴びせられて畜生にされたる輩！

あれは其時あの婦人が、蟇に絡られたのも、猿に抱かれたのも、蝙蝠に吸はれたのも、夜中に魑魅魍魎に魘はれたのも、思ひ出して、私は犇々と胸に当つた。

なほ親仁のいふやう。

今の白痴も、件の評判の高かつた頃、医者の内へ来た病人、其頃は未だ子供、朴訥な父親が附添ひ、髪の長い、兄貴がおぶつて山から出て来た。脚に難渋な腫物があつた、其の療治を頼んだので。

固より一室を借受けて、逗留をして居つたが、かほどの悩は大事ぢや、血も大分に出さねばならぬ、殊に子供、手を下すには体に精分をつけてからと、先づ一日に三ツづゝ鶏卵を飲まして、気休めに膏薬を貼つて置く。

其の膏薬を剥がすにも親や兄、又傍のものが手を懸けると、堅くなつて硬ばつたのが、めりめりと肉にくッついて取れる、ひい〳〵と泣くのぢやが、娘が手をかけてやれば黙つて耐へた。

一体は医者殿、手のつけやうがなくつて身の

衰をいひ立てに一日延ばしにしたのぢやが三日經つと、兄を殘して、克明な父親は股引の膝てずつて、あとさがりに玄關から土間へ、草鞋を穿いて又地に手をついて、次男坊の生命の扶かりまするやうに、ねえ〳〵、といふて山へ歸つた。
其でもなか〳〵捗取らず、七日も經つたので、後に殘つて附添つて居た兄者人が、丁度刈入で、此節は手が八本も欲しいほど忙しい、お天氣模樣も雨のやう、長雨にでもなりますと、山畠にかけがへのない、稻が腐つては、餓死でござりまする、總領の私は、一番の働手、かうしては居られませぬから、と辭をいつて、やれ泣くでねえぞ、としんみり子供にいひ聞かせて病人を置いて行つた。
後には子供一人、其時が、戸長樣の帳面前年紀六ツ、親六十で兒が二十なら徴兵はお目こぼしと何を間違へたか屆が五年遲うして本當は十一、それでも奧山で育つたから村の言葉も碌には知らぬが、怜悧な生れで聞分があるから、三ツづゝあひかはらず鷄卵を吸はせられる汁も、今に療治の時殘らず血になつて出ることゝ推量して、べそを掻いても、兄者が泣くなといはしつたと、[illegible]に居た心の内。
娘の情で内と一所に膳を並べて食事をさせると、澤庵の切をくはへて隅の方へ引込むいぢらしさ。
彌よ明日が手術よいふ夜は、皆寢靜まつてから、しく〳〵蚊のやうに泣いて居るのを、手水に起きた娘が見つけてあまり不便さに抱いて寢てやつた。
さて療治となると例の如く娘が背後から抱いて居たから脂汗を流しながら切れものが入るのを、感心にぢつと耐へたのに、何處を切違へたか、それから流れ出した血が留まらず、見る見る内に色が變つて、危くなつた。
醫者も蒼くなつて、騷いだが、神の扶けか漸う生命は取留まり、三日ばかりで血も留まつたが、到頭腰が拔けた、固より不具。
之が引摺つて、足を見ながら情なさうな顏をする、蟋蟀が𢪸がれた脚を口に銜へて泣くのを見るやう、目もあてられたものではない。
しまひには泣出すと、外聞もあり、少焦で、醫者は可恐しい顏をして睨みつけると、あはれがつて抱きあげる娘の胸に顏をかくして縋る狀に、年來隨分と人を手にかけた醫者も我を折つて腕組をして、はッといふ溜息。
總て父親が迎にござつた、因果と斷念めて、別に不足はいはなんだが、何分小兒が娘の手を放れようといはぬので、醫者も幸、言譯旁、親兄の心をなだめるため、其處で娘に小兒を家まで送らせることにした。
送つて來たのが孤家で。
其時分はまだ一個の莊、家も小二十軒あつたのが、娘が來て一日二日、ついほだされて逗留した五日目から大雨が降出した。瀧を覆すやうで小歇もなく家に居ながら皆蓑笠で凌いだ位、茅葺の繕ひをすることは扨置いて、表の戸もあけられず、内から内、隣同士、おう〳〵と聲をかけ合つて纔に未だ人種の世に盡きぬのを知るばかり、八日を八百年と雨の中に籠ると九日目の眞夜中から大風が吹出して其風の勢こゝが峠といふ處で忽ち泥海。
此の洪水で生殘つたのは、不思議にも娘と小兒と其に其時村から供をした此の親仁ばかり。
同一水で醫者の内も死絶えた、さればかやうな美女が片田舍に生れたのも國が世がはり、代がはりの前兆であらうと、土地のものは言ひ傳へた。
孃樣は歸るに家なく、世に唯一人となつて小兒と一所に山に留まつたのは御坊が見らるゝ通り、又彼の白痴につきそつて行屆いた世話も見

らるゝ通り、洪水の時から十三年、いよになるまで一日もかけりはない。」

といひ棄てゝ、親仁は又何時の悪い北叟笑。

（拙う身の上を話したら、孃様を不便がつて、薪を折つたり水を汲む手助けでもしてやりたいと、情が懸らう。本来の好心、可加減な慈悲じやとか、情ぢやとかいふ名につけて、一個山へ帰りたかんべい、はて措かつしやい。彼の白痴殿の女房になつて世の中へは目もやらぬ換にや、孃様は如意自在、男はより取つて、飽けば、息をかけて獣にするわ、殊に其の洪水以来、山を穿つたこの流は天道様がお授けの、男を誘ふ怪しの水、生命を取られぬものはないのぢや。

天狗道にも三熱の苦悩、髪が乱れ、色が蒼ざめ、胸が痩せて手足が細れば、谷川を浴びると旧の通り、其こそ水が垂るばかり、招けば活きた魚も来る、睨めば美しい木の實も落つる、袖を翳せば雨も降るなり、眉を開けば風も吹くぞよ。

然もうまれつきの色好み、殊に又若いのが好ぢやで、何か御坊にいうたであらうが、其を實とした處で、飽かれると尾が出来る、耳が動く、足がのびる、忽ち形が変ずるばかりぢや。

いや聴て、此の鯉を料理して、大胡坐で飲む時の魔神の姿が見せたいな。

妄念は起さずに早う此處を退かつしやい、助けられたが不思議な位、孃様別してのお情ぢやわ、生命冥加な、お若いの、屹と修行をさつしやりませ。」と又一ツ背中を叩いた、親仁は鯉を提げたまゝ見向きもしないで、山路を上の方。

見送ると小さくなつて、一座の大山の背後へかくれたと思ふと、油旱の焼けるやうな空に、其の山の頂から、すく／＼と雲が出た、滝の音も静まるばかり殷々として雷の響。

藻抜けのやうに立つて居た、私が魂は身に戻つた、其方を拝むと斉しく、杖をかい込み、小笠を傾け、踵を返すと慌しく一散に駈け下りたが、里に着いた時分に山は驟雨、親仁が婦人に齎らした鯉もこのために活きて孤家に着いたらうと思ふ大雨であつた。」

高野聖は此のことについて、敢て別に註して教を與へはしなかつたが、翌朝袂を分つて、雪中山越にかゝるのを、名残惜しく見送ると、ちらちらと雪の降るなかを次第に高く坂道を上る聖の姿、恰も雲に駕して行くやうに見えたのである。

# 豆名月

明治四十四年十月

今からざつと十二三年前、私が大塚町に居た時分のこと、丁度昔の九月十三夜の晩の月がよくつて、亜鉛屋根の黒く塗つたやつが、霜を置いたやうに見える。通りに足駄の音が高くきこえて、家へ見えられたのが横寺町の先生と柳川春葉君、もう一人誰かゞお供をして来たが、思ひ出せない。其の時に、先生が傍の半紙へかういふ戯れ書をなすつた。

雨の晴れたるを嬉しく二三子と浮かれ出て大塚の門を叩く。

眺めその玉の傘干す十三夜

別にお愛想もないので、近所から饂飩か何か取つてもてなした。そこで私がもてなし気を出して句を詠んだが、甚だうまくない。

冠者召して豆名月のおんひろひ

すると春葉君が脇をつけた。こいつが餘程うまい。

これは此あたりにすめる蟲の音

先生の十三夜の句は句集にも載つてゐないと思ふ。

――鏡花全集巻十九 飛花落葉による

# 女仙前記

## 一

「雪ぢや、雪ぢや、本場の雪ぢや。」

と呼聲。赤前垂の茶汲女が、頂の立場で旅客を待遇すと謂ひ傳へた、湯の山が、遙か川上の中空に、綠の朱の襞積に入つた橫雲のやうに見える、後朝川の岸に沿ひ、此の川に架ける朝六ッ橋の袂に榎の梢を少し下つた眞赤な夕陽に向つて、草履穿で徐々と、歩くのが靜であるから、砂埃も立てず、淸い流なれば、雲も影の映すばかり、身にはつゞれをはぎ合せた古單衣こそ絡うたれ、形はあざやかに一人。

此の邊は久しい以前、一廓の遊里であつた、後朝、朝六ッなどいふ名は、蓋し浮川竹の稱であらう、名殘に一軒、柱に朱の漆を用ゐ、欄干も赤く塗つた、これ〳〵の、瓦葺の二階家があるが、明地の隅に生茂つた、草に半ば蔽はれて、渚など立聞といふ形。

[illegible]と、傍に姿の良い一本松、鳴廊の盛な頃は、[illegible]を[illegible]いて、[illegible]子をあけて、[illegible]前に月をかけて、枝には雪をのせて、風情を盡したらうと思はるゝ、根の一丈ばかり上から、幹が瀨と二ッに分れて、右は遠山を縱に切り、左は流を斜めに截つ、間から、向うに朝六ッ橋を眺むる處、路はたら〳〵と爪先上り也。

「雪や、雪や、本場ぢや〳〵。」

心持松の半ばあたりまで、上ると、立身のまゝ足を淺し得さうな川は、稍目の下に遠ざかつて、路は狹く、手の觸るゝばかりに石垣の一構。

「本場の雪ぢや、あゝ、雪や、雪や。」

と呼びながら傳うて行く、此の垣、長く續き、高く聳えて、大石小石の合せ目堅く、網の目に組んだるが、坂下の松と齡を共にするか、苔蒸し、草茂つて、衝と額の前へ伸びたのには花さへ持つて居るのがある、此方の岸の高くなるに從うて、向う岸は見る〳〵低くなるのであるから、日は一杯に照し、光線斜めに、緋と色つき、風も快く當つて、つき草の咲きさうな影も留めぬは、かたゝゝ此の城壁の内に住む人の盛のほども思ひやらるゝ。

勿論市内唯一の豪家の搦手で、川と石垣の間の徑も、一家の者の彼の朝六ッを渡る近道に造られた位のもの、人通といつてはないのに、あきうどの雪賣よ、あきなひをするに又何故こんな處を通る。

「雪や、雪や、」

と言ふ聲弱るまで、老いたるものは、然も草臥れた樣子で、たら〳〵を今上り切つた、土手の草の上へ、肩をふりかへて荷を下した、熊笹の葉に雪を包んで、筵で卷いて、繩からげにしたのを片荷、こなたへおもりをつけて、天秤で擔いで居るのは、土地の風俗で、あらためていふまでもない氷屋である。

振返ると、湯の山は、頂を一本松の梢に並べて、さら〳〵と其間を、川幅に廣く、こゝに町の兒の七八人、浮いつ沈みつ、搦み合ひ、上になり、下になり、泳ぎ戲れて居るのがあつた、夕立が不意に襲ふと、湯の山を絞つて、一支もなく濁流を漲らすのであるから、今時分泳ぐのは、いづれも自慢の手練ばかり。

## 二

兒等が、帯を解いて置く、蛇籠は向う岸なる一筋

の下に、水は白布を翻して、婦人が二人、洗濯に余念なさゝう、橋の下には馬丁の黒い駒を洗ふのが居た。洗は夜眼を浸すばかり、敢て深いほどではないが、水底の石は鮮かに透かされても、然までには淺くない。

橋の上はちらほらと人通。

其處も夕陽に色づいて、柳の色は一際蒼く、衣あらふ婦人の黒髪に滴る葉末の露も涼しい。

「雪屋さん、一寸。」

「ああ、」

背後から手ばれに不意たといふ風で、振返ると十八九の綺麗な女。

「ござらつせえ、なんぼほど征ぜます、」と腰を捻つて、早や笊を包んだ筵に手をかけ、女の顔を眩しさうに見上げた。

女は中形の浴衣に白縮の汗襦袢、襟細く、大家の小間使と見える風俗、ものいひもしとやかに、

「否、雪ぢやあござんせんよ、お氣の毒さまですが、一寸見せて下さいな、」と賣物では無い方の、もう一ツの笊の中を差覗いて、

「まあ、」といひながら可愛らしい目、伸上つて、遙に石垣の上を仰いだが、

「奥さまは眞個にお目が早いよ。雪屋さん、兎ねえ、これ、」と笊に指をさして雪賣を又見返る。

親仁は皺だらけの顔に笑を湛へ、

「兎ぢやや、兎ぢやや、何處で見てござつた。」

雪の莚包と振分の、笊の中には、實に一尾の小兎が居て、圓く畏つて候。

柔な耳はふッと二ツ長く、全身一筋の黒毛を交へず、眞白で雪のやう、いたいけな姿かな、恐る夏の日に照されには耐へず消えるであらうと思ふに、丁寧、大笊の端に吊してある二條の細縄に、雪を包むのと同一、熊笹を一束結つけ、覆ふやうにして、兎の肌を庇つてあつた、緑の笹の色を宿して、毛の艶は猶増しに美しいので、下に咲いたまゝ/\の株も、見るものゝ目には節目とも紛ふにかゝつてある、

女はつくづく眺めて居たが、

「まあ、可愛いね、」

更めて、

「雪屋さん、此の兎は賣るのぢやありませんか、」

親仁は大笊を前に跨んだなり、

「いんや、賣物ではございませぬ。」

「おや然う、」

「が、待たつせえよ、お前様が欲しいのか。」

「否、奥さまが、」

「奥さまが？ 何處の奥さまでの。」

「此のお邸の、」といつて、小間使は再び振仰ぐ、石垣も此邊は殘りなく草が刈取られて、上には松の樹が根をそろへ、いづれも川の方に枝をさして、葉の彌榮えに榮える間に、此處、彼處、白壁が洩れて、見えて、武者窓が二ツ三ツ。

「あれ、彼處から御覽なすつたんですよ。小兒のが、とんぼを切つたり、肩車で泳いだり、其を覗いて在らつしやつたのが、私達は遠くつて氣もつかないのに、何うして、お目に入つたのでござんせう、まあ、」

## 三

「はあ、其の方がお望みで、」

「お賣りのなら買ひたし、然うでなくつても、何うにかして讓つて欲しいと仰有いますわ、眞個に望んで在らつしやるんだがねえ、不可いんですか、」と懇である。

親仁は小首を傾けて、考へながら兎の方を見遣つたが、

「いや、今もいふ通り、こりや賣物でないのぢやが、品に寄つては、はあ、進ぜますめえものでもないが、ちよつくらとはいきましねえてね。」

「其處を何うにかして、ねえ。」

「何、また別に難ケしいことでもねえて、私、其の人を見て、氣に入つたら進ぜませう、あれさん、望まつしやるお方様に、一寸お目に懸りませうかい。」

「お目に、奥さまに、」

「誰でも可えわさ、臣ぢや、之を欲しいといふ人ぢや。」と落着きつた顔色。

「それは、さつきからいふやうに奥さまなんだけれども、はてな、」

使者は一存の思案に能はず、

「まあ、一番聞いて見ることにいたしませう、」

「されば聞いて見さつせえ、」と掌うりはいかにも澄す。

「それぢやあねえ、御苦勞ですが、一所にともかくも彼處まで來て下さいな、ええ、あの裏口まで、」

「安いことぢや、」

「それでは。」

夕暮は淡く川づらを籠めたり、瀬は鳴つて蒼白く、前の山は更に緑を増して、涼風來り、向う小間使の單衣の袂は八口のあたりから、向うて行く方に逆に靡と吹いた。

親仁は荷をうむと擔け、數間を弓なりに、呼吸を入れる。

「氣をつけておいでなさいよ、道がせまいから危なうございます。」

「あい〳〵、」と小間使についていたら〳〵と、今度は搦手の要害、逕が違ひ、白の練塀になつて居るが、水を隔つこと三間に不足、未だ三人泳ぎ手は殘つて、攀ぢれば攀ぢれる堤防だけれども、餘り此處には上らぬらしく、塀は古いが、落がきのあとも見えぬ。

塀の中ほど「丁字形に仕切つた、其が小間使の導いた當家の裏口で、今出て來たのも此處からであらう、銅の板で張詰めた、あけたてにづしんといふ、嚴しい堅固な一枚戸は、左へ半ば引いたまゝ。

半身を見せて一人、銀杏返しの年上なのが、西日はあたるが、山風の渡るのを涼しさうに、立つて居た。

待構へた風で、

「お巳代さん、何うして「」と聲を懸けると、お使者は一足さき、小刻に驅け拔けて、

「あのね、」

「何てつたの、」

「賣物ぢやあないんですとさ、」

「不可いの、」

「其でね、」

と言はうとするのを、押被せて、

「お錢を遣るといつちや可いぢやあないか。」

「お聞きなさいよ、何うしてお金なんか欲しさうな顔もしませんもの、そしてね、何んな方だかお目にかゝつて、氣に入ればたゞくれるとさ。」

「たゞ、たゞは可いけれど、お目に懸りたいは亂暴ぢやあないか、何だと思つてるだらう、雪りなんぞが何うしてお前、」と目を丸くする處へ、ひよッこりと來て、

「何うぢやの、相談は出來たか、」

「あゝ、今ね、何はうといふ處です。」

「疾くさつせえ、いや日は長い久ゆつくりとやらつせえ、」

大口を開いて、

「はゝゝはゝゝ」

## 四

親仁が餘りの無頓着さ、慾るお世辭氣のない者には、主人の威光で今までにつひぞ出あはぬ、年増の女中は癪だといふ顔で若いのに入交り、

「おい爺さん、何も玉や黄金で拵へたものぢや

あ無し、何處から捕へて來たんだか知らないけれど、そんなに勿體をつけるには及ばないぢやあないかね。」

　ぬらりと立ちはだかつて居た箒賣は、荷を擔いだまゝぐるりと廻つて、年增の方に向きかはつて、

「私が兎を私が持つて、此處をずいと通越してしまへば、別なことはありましねえに、高え處から見つけさつせえたとやらで、これ、讓つてくんろと其方で言はつしやるについて、ものはだかりましたさ、玉ぢやろが黃金ぢやろが、はて土で拵えたものぢやろが、又生のものぢやろが、お前さまが何も構つてくれさつしやる事あねえだ。」

「だがさ、」といつたばかりで年增は巳代と面を見合はす。

「何と私がいふことが理合ぢやらうがの、何うでがす。」と立身上りになる。

「まあ、そりや然うだけれど、何もお前。」

「いんえ、原から賣物でねえことは斷つてあるだ、氣に入つた人になら進ぜましよがの、兎を欲しいといはつしやるのは、姉えぢやあんめえね、」と箒賣は巳代を見返つて、

「の、私其の人を見たいといつた本人よ、奥樣ぢやとかいはつしつた、えゝ？ これが又其の人なら、はあ當こともねえ話だ。」

　と眉を寄せて苦笑。

「此の人ぢやありませんとも。」

　年增は目を瞠らして、

「お巳代さん、何も(とも)と力を入れていふにはあたりません、いつ私が奥さまだといひました、はい、何うせ私は女中に生れついたんでございますよ。」と大きにむくれる。

「あれ、何ですね、」

　親仁は唯にやり〳〵、雪といふものは段々解けるものとも思はぬらしく、泰然なものである。

「何しろ一寸伺つて來ませうや、」

「あらためて聞くまでもないでせうよ。」

「なぜです。」

「だつてさ、こんな者をお庭口から入れられる譯ぢやあなし、奥さまが、何でお前お逢ひなさる氣遣はありはしないもの、出來ない相談ぢやあないか、ねえ爺さん、」

「あゝん、」

「お金子の相談ならいくらでも出來るんだけれどね、」

「いや、」

「お顏を拜まうなんて、そんなことは思ひも寄らない、駄目だよ。」と凹まされた鬱憤を押へ切れず慳貪にいつて退けると、けろりとして、

「止さつせえ、威張と出さつせえ、何もこれ私等が方からいひ出したこつちやない、いや、餘計なことで手間を取つた。」

「あれ、お前さん、」

　と慌しく巳代が、

「まあ、そんな短氣なことをいふものぢやありません、一寸、ともかくも伺つて見なくつては、」

「不可いといふのに、宛然お前宵闇にお月樣を招き出すやうなもんぢやあないか、お話になりやしない。」

「それでも唯伺つて見る分には、お氣に入らなくつても粗相にはなりませんよ、此處で私たちの料簡で、此の人を遣つてしまつては、叱られた時に取返しがつかないぢやあないか。直ぐあの何ですから お前さん一寸待つて下さいましよ。」

　親仁が素直に頷いたにもかゝはらず、風向の惡い年上の女は何につけても平ならず。

「何うともするさ、」とツンとして木戸から引込む。

五

アーチ形の此の銅で張つた裏口の戸は半ば開いたまゝで、樹立の中を後前に、母屋の方に行く路は叢ながら段のあるらしく、浴衣の姿は小さくなつて上へ、上へ。

見送りも果てず、手間が取れさうに思つたか、荷賣は又荷を下したが、左右の笊に天秤を載せかけて、其の上に腰をどつかり。

「あゝ、やれ／＼。」と何等か大なる祕密のあるやうで、然も此くらゐ無意味なことはない獨言。

親仁は何事も思はぬ狀、人を待つといふ色もなく、戸を背後にして、目の前に夕陽の彩つた、流と、未だ殘つて泳ぐ兒等と、布を洗ふ女とをぢつと眺めて居た、周圍には石垣の松の風、向うの岸には柳のそよぎ。

憖くて目に見ゆる暑さの色も薄れ／＼に日は傾く。

四邊は靜に、ざぶ／＼と流を搔攪す音も聞えて、親仁の姿は大きな掌を膝頭に据ゑたれば、髣髴として仙家の人の趣が見えた。

兎は笊の中に愛らしく蹲つて、動かず、不言、食べるものも貪らず、恰も掌で拵へたものゝやうである。

「おゝ、此處に、」といふ聲、樹立の中に媚しい氣勢がして、潑と薫る袖の留南奇、木戸を溢れて、早や袂の端、爪はづれ、練絹を盾に銜と寄つて半ば顏を差出す、傍に引添うて、戸の正面を眞向におさへたのは、再び以前の巳代であつた。

「お爺さん、よく待つて居てくれましたね、」と之は又案外な、年上の女中が如彼までに言つたにしては餘りに輕々しい物越である。

「や、お前樣でござりますか、」と親仁は中腰になつて、脊のすらりとした婦人の立姿を横から覗込むやうにして仰いで見る。

「あのね、然う申上げたら急いで出ておいでなすつたんですよ、お前さん、此の奧樣です、」と令室を蔽ふやうにして居た身を開いて一足傍に寄つて、誰にするともなしに一寸頭をさげた。

「はい、これはもし奧樣でござりますか、はいはい、」と親仁は腰を屈めて、揉手をし、身體を捻つて、向ひ合ふと、天秤は片端に繩を絡んだまゝ笊の緣をずるりと辷る。

「飛んだ無心をして濟みませんね、」と、氣高い人は、却つて無造作、品ある身を卑下した會釋、鬼神の力もなゆべき、艶麗な顏に微笑を含んで言つたが、禮を享けて、薄衣のすなほな肩を斜に、打傾ける横顏へ、おくれ毛がはら／＼と。

其まゝ、くの字形に半ば姿を木戸口からぢつと笊の中を打瞻る。黒目勝の、瞼毛の濃い、涼い、ぱつちりとした左右の瞳には、ありのまゝ眞白な兎の形が二ツ、笹の葉の綠の影を宿しながら映りさう。

「まあ、綺麗な、可愛らしい、」

「お爺さん、何處からつかまへて來たんです、」と巳代は此處に出て來る途次、令室と交へたらしい言葉を爰に問ひ出でた。

其と是とを右見左見、

「こりや、はい、私がつかまへたのではござりませぬ、取つて十九になりました、私が娘が手飼にしたものでござります。」

出直つて、

「姉さんが、然う？」

六

令室は猶もの優しく、

「而して家は何處なんです、何處から通うやつ」

「南へ出て來ます。」

「はい、私が里は、」

親仁は頷いたが、背後ざまに遠く芥子の花の彼方の、山の峰々、同然と其の頂を顕した、湯の山の方を指して、

「ずいと此の川上の湯涌谷といふ山家でござりまして、」

「おや、湯涌谷から売りに出るの、」と巳代は驚いたやうにいふ。

「遠い村かい。」

「三里程もござりませぬよ、ねえ、雪屋さん。」

「近いと申しませう。いゝえ、毎日出ますでもござりませぬ、其も町まで来ます間に、川端に貴女さま、村が七ツばかりもござりますで、ぼつ／＼、彼方此方で売れますが、今日は些と志すことがござりまして、朝はつけたりで、町方へ出て参りました。えゝ、実は此の兎を兄のやうに可愛がつて育てました娘の命日でござりまして、」と語りかけて愁然たり。

「まあ、お前、其の娘さんが亡くなつて、」

「はい、祥月でござります。」

「それぢやあ大切な記念なんですねえ」と巳代が、今更のやうに又覗いて兎を眺めて頷く

令室は寂しげに等しく頷き、

「それぢやあ無理はないのだよ、ねえ、巳代。」

「は、」と此のあたりまで手をさげた。

「どんなに私が望んだつて娘さんの記念だとき。それに通りかゝりの、知己でもない人をつかまへて、持つてるものを無遠慮な、直ぐに此方へ貰ひ受けようつて、我儘ッたらなかつたよ、本当に身勝手な、お爺さん、堪忍しておくれ、何うしたわけか、其の兎は、盗みたいほど欲しかつた。外の事なら無理にも、ふことを背いて欲しいんだけれど、然ういふ因縁があるのなら、思切つて、お爺さん、大層お手間を取らした詫をしませう。」といつたが、猶物足りなさうに、目の極り悪さうに、

「それでも断念あられないやうな気がしてならぬ、巳代、私は何うしたのだらう、」

優しさは言葉に溢れる、其の声を聞くのを嬉しげに、又然ばかりの主人の思の届かぬのを悲しさうに、巳代は首を垂れて無言であつた、親仁は慌しげに口忙しく、

「あなた様、いえ、何うして／＼あなた様に、之を差上げませいで宜いものでござりますかい、お問ひなされますに就いて在所のことをお話し申しましたばかり。其の所為で、お断り申すでは決してござりませぬぢや、言ひ次第にお察しなされまして、其で御遠慮は、お前様、余り思遣が過ぎますでござりましよ。

昔で御覧じまし、お見懸け申しました御大家の、こんな御身分の御方様ぢや、湯涌谷の百姓なぞは、はや直に口を利いたばかりでも無礼打になります分ぢや、こんな者一匹何が惜しいものでござります。

ぢやが又、お望みなされますお方様が、あなたのやうなお女中でござりませねば、理が非でも、何のお前様。

親仁が目の黒い内人手に渡すことではござりませぬ。」

力の籠る親仁の言分、強ひて望んだ我意が通つたかと、罪を造つたやうに思つて安からぬ令室より、小間使の方が然も嬉しさうである。

## 七

「したが、もし、あなた様。」

親仁は河岸の方に、身を開いて改り、

「お居室に飾物になさつしやる、瑪瑙の玉や、枝珊瑚などゝは違ひまして、生のあるものでござります。はいあは、もこもなしに可愛うございましても、何がこれ、仔細に寄つては我児でも邪魔なことがないとばかりは言はれませぬて、

随分労つてやつて下さりまし。

それに父、此の兎は、唯耳の長いばかりではございませぬ、人のいふ言も聞分けまするから、娘が呼吸を引取りますまで、友だちのやうにして、いや、あれこれと、頓とな、人と口を利くやうにして居りました。

あゝ、誰に見しよとて紅鐵漿つけよぞ、娘は叶ひ難い人を思うて焦れ死になくなりました。誰を何う慕うたか分りませんけれども、此の兎には思ふことを皆打明けてあると申して居りましたに因つて、お手許に飼つて置かつしやることなれば、永い中に、どんな夢枕に立つて、あなた様、面白いか、話しいか、それとも辛いか、悲しいか、夢を御覧じまいものでもない、それでも大事ございませぬか。」

何か意味のありさうなことをいつたのであるが、令室は今は唯、最う目のないほど可愛いものを、くれるとあるが嬉しいので、謎のやうなことは[illegible]も聞かなかつた、けれども最愛しがつた主が、懇知だといふのが深く耳に響いたので、

―可愛さうに、まあ、姉さんといふのは、何、未だ御亭主はなかつたの。」

「其の事でございます、最うこれ六十の上を越しましたる親仁の娘なら、いゝ年紀の嬶のやうに思し召しませうが、仔細がございまして私の娘分、世間體だけのことでございますから、私が娘と申しても、年紀は、―

といひかけて見るもあでやかな令室の其の俤。

「あなた様より一ツ二ツ未だ若いのでございましたが、お生も何も悉しうは存じませぬ、又そんな山家のものが、色戀と、嘸をかしう思召しませうがの、いや町の人はつひぞ來た事はないで、兎か狸、山女でも棲んで居るやうに謂ひますが、美しい冷い水も流れます、湯も湧きまする、高山の下でございますから、いつも白い雲が行つたり來たり、彼方にも此方にも雪が消えずに居りまするし、唯今頃は藤の花か、それは〳〵見事に咲いて居りまする。笠は召さいでも、舊の通り、お色も黒くはなりませず、手足のきめもあれませいで、や、其のお美しかつたこと。御慮外ではございまするが、あなた様にそッくり生うつし、」

小間使は事ふる人の、氣をかねたか、はッと耳の邊に色を染めたが、令室は我身を譬へられたのではあるけれども、思ひやらるゝ其の娘の、餘りの美しさに我知らず凄然とした。

「一分しあなた様より痩せて在らつしやつたやうに思ひます。何氣象も然うでございました。[illegible]、と其の方に呼ばれまするとはッというて私は何となく、[illegible]きに頭が下りました。あなた様がおつしやりまする聲の優しさ、勿體ないが低うやつて、しみ〳〵お顔も拜まれまする、あなた様でございますから、私が目金で此の兎を差上げまするで、何うぞおいたはり下さりますやう。

結構なお城のやうな中にお住ひでも、町は町だけ、夏は暑うございます、なるたけ涼しい處でお育て下さりまし、[illegible]ゝはでございまさけれども、唯今まで居りましたは其の雪のある、藤の咲いた、」といふ折から、キリ〳〵〳〵と大空へ、釣瓶を捲くやうな鵯の聲。

「おゝ〳〵彼が鳴きまするよ、湯涌谷はもう[illegible]うございます。」

## 八

又一聲、此處の樹立の梢に[illegible]、遙に聞ゆる山のあたり。

終日ひた鳴きに鳴き騒いで、じり〳〵と唯暑さを[illegible]永久に滲込むやうだつた蟬の聲も、二ツ三ツあわたゞしく明かに響いて靜まる

「向う岸の柳の樹の蔭から、今に――おつかさんが御覧たよ、」

泳いだ兒は瀬に乗つた。

令室は独りさら/\と木戸口に、風は其處から吹き出るか、帯の中の雪も解けて流れて上「下の草に冷い濃色」

「いえ、もう断つてお望とありますに因つて、附上り、大切物をつけました、はゝゝはゝゝ、實物に花でございます、此の上はたゞ田舍ものが持つて來た山兎一つ、貰つて遣つたと思召しまし。

何と彼のと申しても全くの處は亡くなりました與分の、其の奥様が御遺言、可愛らしい兎が見たら怯えさうな、こんなむくつけな親仁の手で育てますは可哀相おや、町へ出て、お優しい、お美しい女中を見立てゝ、其の人にいたはつて貰つてくれと、くれ/\も言ひ置きましたで、あなた様のお望は、はや、全くの處渡りに舟でございました、果うゝゝ、いやおやとおつしやりましても、私の方から頼みまする。

唯一ツ念のために申上げますが、あなた様、此の兎を、お手許にお當ひなされますと、帯とする、其の、もの、でございますか、男戀しうならつしやらうも知れませぬが、」

皆まで聞かないで令室は然も心安けに、

「私には良人がありますよ、はゝゝは、いや、これは心付きませなんだ。」

と又笑つて、

「然やうなれば、しやん/\/\と、話はこれでグイ極り、どれ、奴をそれへ、」と親仁は継接の單衣ながら、惜氣もなく地に膝をついて、腰を浮すと前屈みに笊の方。

「雪よ、雪よ、」と呼ぶと、圓くなつて居た小さな動物の耳は、胴とともに、すらりと伸び、短い前足を縁にかけて、水晶のやうな目でくる/\と親仁を見た。

「雪よ、」と又呼んで、大きな掌を瑞と打つと、其の掌の放れぬうち、一片の雪窓に躍ると見えて、衝と來て膝に抱かれたのである。

「よく、馴れて居りますこと、」

「お爺さん、」と令室は帯と思ふ處あるらしく、更めていつた。

「お爺さん、あの、今呼んだのは其の兎の名なの。」

巳代ははじめて氣が付いて、思はず、口の中で、

「お雪さま……、おや。」

「はい、何、雪は娘の名でございます。」

「おゝ、姉さん、」と令室、目には心も籠つた。

小間使は計りかねて密と其の顔を打守る、一場の光景、察するに難からず。

親仁も窪んだ目を活々とさして、

「あなた様、おなじお名前でございますか。」

「何うもねえ、然うなんですよ。」と巳代引取つていふ。

「お爺さん、其の姉さんは、まあ、何ういふお方なの、」と令室は取出でゝ然も不思議さうに聞いた。

「もし、」と遮つて「其はお聞きなされますな、何處の方か知りませぬが、湯河谷が錦葉の時分、流の岸でお出あひ申したのが初のお目もじでございます。世を捨てた者おや、お前を見かけて頼むに因つて世話してくれ、と打つけにおつしやつたが、一目見ると、其の御様子、唯もう神様がいひつけさつしやるやうでございましたで、はッというて畏りましたのでございますが、」

## 九

「其の時から兎を抱いて被在つしやりました、何も問ふなとおつしやいますから問ひませぬ、又素性を問うてお世話する位なら、はじめか

ら願ひまするわ。」
　私が目で此の、お方ならばと思ひましたら、何とならうと構はぬでござります。まづ、あなた様がわけもなく、此の兎が欲しいとおつしやるのも同じ道理でござりましよかい。」
　令室は聞きつゝ胸に手を置いて、何となく打傾かれるばかりであつたが、やがて吻と呼吸をついて、
「あゝ、ぞツとしたよ何うも、」といひながら、恍惚と、斜に湯の山の方を、葉越の日影に打仰ぎ、
「一年かあつて、藤の花が咲いて、空にいつでも白い雲が、」
　と口の裡。やがて花やかに、「あゝ、お爺さん、其處が湯涌谷といふのですか、私ははじめて聞いたやうな氣がしませんよ。何だか一度行つた事があるやうに思ふのねえ、何時だか知ら、幼な〳〵時分か知らそれとも、昨夜あたり見た夢を遠いむかしの事のやうに思ひ出したのでもあるのか知ら、」と遙に湯の山のあるあたり、明き目も、一層判然とする瞳の色ながら、夢見るやうな目をしていつた。
「はゝあ、いや、それとも、あなた様、宿世の事かも知れませぬ、又何ういふことで、後の世の事を今悟らつしやつたのかも分りませぬ、もしもあなた様が、此の兎を抱いて、湯涌谷の流の岸へさまよつてお出なされ、私が其處で出あひますかい、今の夕陽を宛然の錦葉があつて、御覧じまし、其のお雪様はあなた様で、あなた様はお雪様でござりまするわ。」
「おゝ、其の兎を、さあ、此方へ、」と令室は蘇生つて、我にかへつたやうなものいひ。
　礑と腰骨のあたりを叩いて、左の手で、膝なる其の兎を、ぢつと見ながら、掬ひ上げるが如くにする。
　ト脱兎とさへいふ譬、飜然と飛んで、令室の乳のあたり、不意だから、はつと身を引くと、兎は後足でこたへた帶の上を辷つて、するりと落ちようとする處を、兩方の袖でさすがに支へた。
　其の項に頬をあてゝ、
「何かの因縁かも知れないねえ。」
「はい、其はしかし存じませぬ。」
「奥様々々！」
　と此時、小高い背後の樹立の中から甲走つた女の呼ぶ聲、
「旦那様が」と又叫んだ。
「あゝ！　巳代や、」
「はい、」と驚いたやうに返事をして、目をくるくるやつて、既に兎が令室の手にあるのを見たが、恰も魂が拔出したらしう、巳代は茫然として居たのである。
「これ、」と兎を捧げるが如くにして見せ、
「御覧、貰つて了つたよ、巳代や、旦那様がお呼びだから、私は行く。」
「奥様！」
「うるさい！　あの後でねえお前、お禮の相談をしておくれ、可いかい、それぢやお爺さん、」
　と會釋をして、
「御免なさいよ。」といひすてゝ、活々とした風采、活潑に背後になり、袖で抱いて肩細う、恰も兎を庇ふやうに、しをらしく、俯向いたなりで、衝と歩行き出しながら、
「可いかい、屹度だよ。」とすら／＼と歩み去る、令室は幹にかくれ、枝に遮られ、葉蔭になり、褄が見え、帶が見え、肩が見えて、又褄が見えて、高い處に小さくなつた。
　後姿を見る目も樂しく、寢る間も傍を離れるのが、殘惜しいばかり主思ひの巳代は、然も可懐しさうに見送り果てたが、人氣勢が背後を襲ひ、潜んで居た[illegible]も伸上つて見て居るやうな氣がしたのが、やがて、令室に言ひつけられ

た、兎のかへしの時のことを、ト振返つて見ると影もない。

「お爺さん、おや！　お爺さん、」

思はず衝と木戸を出て、右瞻ると、居ない、左瞻てもちらとも見えぬ。

折から橋の上に入亂れた、八九人、左右に忙しい行交、扨は其の中にと、前かゞみに瞳を据ゑたが、脚ばかり目まぐるしく、人顏も定かでないので、我にもあらず、引かるゝやら、五六歩橋の方へ駈下りたが、其と思ふものもない。

又走せ返つて木戸口を此方に駈抜け、土手の高みから、長く流に沿つた水上凡そ五六町瞰下ろされるのを、件の一本松の兩岐の中から透したけれども、薄れ行く影もなかつたのである。

兩方の岸は、樹となく、屋根となく、柳となく、草となく一様にぼんやりと、目に近きものは眞黒く、遠きものは灰色になつて、湯の山には靄の幕、流は高く音を投げた。

「まあ、」とばかり呆れ顏して已代はうしろすさりにいつか木戸に來て、なほ去りやらず、夢の如く、親仁の行方を心に描いて、捕へ處もなしに眺めて居ると、蒼柳がさつと鳴り、向うの橋の袂から、丁度人脚の途絶えた橋の中ほどまで、裸の兒が矢を射るばかり、ちよこ〳〵と駈けて來て、泳上手の未た遊び足らず早やくらくなつた水の面へ、もんどりを打つて、どぶり、眞倒！

女は驚いてフイと木戸の内へ、別なる人の手が待つて居たやうに、其のトタンにハタと彼の銅張龜甲形の扉を鎖した、さて獺の暗の宵。

# をさなあそび

明治三十一年三月

兒を取ろ、兒を取ろといひ、一ツ星見着けた一ツ星見着けたといひ、子守唄、鞠唄など、幼兒の唄ふうた、また遊戲の仕方に、何ぞ悲哀なること多き、また無常なること多き。都鄙を通じて一般に然り。暮前より、いろ〳〵のことして遊び、やがて星も見えなくに黄昏るゝ頃になれば、集まれる兒等、手に手に石を拾ひ、二ツ兩手に持ちてカチ〳〵と打合せつゝ、あはれなる聲してうたふを聞け。まづ一人、

今打つ鐘は幾つの鐘ぢや

また別なるがこれに和して、

今打つ鐘は幾つの鐘ぢや
二ツの鐘ぢや。

と口々に繰返しては、かくいひて、やがて八ツの鐘ぢやといふ時、出たよ、わあ――とばかり、おばけに逐はれた状にて、ちり〳〵に家に歸るが、わが郷里にては習となり居れり。

また石隱と稱へ、釣鐘堂の傍、宮の手洗水の蔭など、故と淋しき遊び場所を選びて、一人が礫を一個何處にか秘し置くを、連なるがあとより此處彼處と物凄きあたりを屈みて差覗き、探し歩く遊びあり。蛙法師鬼と稱へて、これは月夜に限る、銘々地の上に蹲ひて、ギヤク〳〵ギヤク〳〵といひながら、ひよこひよこと桂馬飛に飛び移るを、鬼ありてあとを追ひ、おなじく蹲ひたるまゝにて其影法師を踏むと、踏まれたるが鬼になるなり。

いろ〳〵あるべし、土地に依りて異なれども、いづれ無常か、悲哀か、魔の趣味のなきはあらず。らまれぬさきから何かの因縁ごとゝ見えたり。

――鏡花全集卷十五「飛花落葉」より

# 親子そば　三人客

## 一

「花まきを一つ、」と誂へて、紬の羽織の片手を懐に、右手で燐落しの、最う灰になつた大火鉢をぐい、と引寄せながら、帳場格子を後にして整然と坐つた、角帯に金鎖を見せた客があつた。彼是十二時に近い頃、雨上りの春寒い晩である。

「まきを一、」と媚かしい聲で通したが、やがて十能に眞赤なのを堆く、紅の襷がけ、圓く白い二の腕あたり惜氣もなう、效々しく、土間を蓮葉にカラ／＼と突かけ下駄で持つて來て、鐵火箸を柄長に取つて火鉢にざツくり。

面長で色白な、些と柄は大いが、六か七と見えてあどけない風、結綿の髷がよく似合ひ、あらい絣の前垂して、立働きに繕はず、衣紋の亂れたのも初々しい。嬌態もなく眞直に立つて、火を入れるのを見て、

「お、難有う、」と忙しく兩手を翳した、客は此の節一寸々々來て見知越なので、帳場に坐つて居た、女房が愛想をいふ。

「飛んだお寒さでございますねえ。」

「寒いッて何うも、」

「妙なお天氣でございます。」

「然やうさ、」といひかけて、火鉢の縁に頬杖した、客はフト心付いたやうに、自分と斜向に、其は入口の、一間破れた障子を背。上框に腰をかけた、左足を土間一杯に踏伸し、銅色の艶々と、然も瘠せた片足を前はだけにぐいと折つて踵で臍を壓するばかり、斜に肩を落して、前のめり、坐睡すると見ゆるやう、左利の拇指と、人差を割つたのに、薄手の猪口を挾んで、肘を鍵形にしやッちこばらせ、貧乏搖ぎといふ、總身をゆすぶッては俯向いたまゝ、猪口を鼻の頭で押つけるやうにして酒を嗅いで居る親仁があつた。これを見て、目を返して、いま引返さうとする娘が、襟脚の雪のやうに鬢の浮いた、撫肩の、雙子もしなよく、すらりとした後姿を、

「あゝ、姉さん、」

「はい、」とあでやかに振返る。

「一合正宗をつけておくれ。」

「お君や、熱くしてお上げ申しな。」

「はい、はい、」

母親と客へ二ッ返事で、お君といふ娘、向をかへると手を上へ、一寸爪立つたが、眞暗な棚の、貼札を正面にならんでゐる、壜の中から一本拔いて、直ぐ下の板の間へ、無造作に十能を差置いて、小刻に、やがて、煤けた柱で劃つたやう、磨硝子を嵌めたる如き、湯氣のむらむらとして、洋燈の朦朧とある中へ見えなくなる。

彼處に父親が居て、其のかゝりで、

「かけ一上、」と口早也。

「あいよ、」

直ぐに娘は盆を据ゑて、片手を振りながら、臺所の曇つたやうな中仕切の敷居を跨いで、結綿に結んだ手柄の色、鮮麗に露れたが、此の註文は別に一人。

入口に極近く、障子に肩の觸れるばかり、悄れた狀して、羽織も着ないで、頰被をして居たらしい、なえた手拭を項に絡いて、身を窄めて居た壯佼で、顏を灯に背けたから、年紀の頃よく分らず。

「お待遠様、」

と出したのを、黙つて請取つて、腰のあたりへ引着けたまゝ莞爾。

「おやア、おやア！」

帳場から、

「父上！」

「何うしたの、」と娘もばた／＼、何につけても忙しい、壹岐殿坂下のおやこ蕎麦と看板に記して、夫婦と娘ばかり、男も使はず、近所の出前は親仁が受持つて、留守の内は板前を母親が預る、娘が給仕の共稼ぎ。

店も座敷も八疊の上り口の此の間一ツ、積んだ蒸籠を床飾にして、客は五人だとぎツしり立込む程、内端な商賣、勿論こゝが親子三人の閨にもなる。

## 二

けれども加減をよく食べさせて、種ものゝ種を惜まず、トンと腕を鳴した、打方の緊り好さ。かい魚のもりかけ屋に澤山類がないと、土方、日雇取、大工、仕事師、造兵のお職人などが味ひ覺えて、透の無い繁昌に、めツきり仕出し、未だ出來上りはしないが、つい月はじめから、金方なしに二階の普請にかゝつた位。

亭主が懸聲の大さに、女房も帳場を立つた。

「何の、今お鍋を上げようとすると、底がお前、ポカと斜ツかけに破ツたらうぢやないか。雫も殘らず、釜の中へ打ちまけよ。ほら、芬々して居ら、湯の中で暢氣なもんだ、人の氣も知らねえ奴さ。」

「希有だねえ。」

「父上、ひゞが入ツてたんでせう。」

「それにしても湯は然う温いんだからな。」

「まあ、何しろかはりをおつけよ、早くおしよ。」

といつておいて、女房は帳場に直つた。

「相濟みません。」

「御一所でなくツて不可ませんが、何うぞ召上りまし、お待遠様でございました。」と娘が誂を土間から其へ。

火鉢を一寸押遣つて、

「可いとも。」

「おう、娘さん、」と此の時、又管の猪口をひツたり盆に置いたが、糊で附着けたやうに未練らしく指も放さず、杉の丸箸が松葉に散つて、丼の蓋は桐一葉、親仁は苦々しい眉の顰んだ、然もトロンコの顔を上げて呼びかけた。

「お銚子？」と派手な聲、既に四本ばかり並んだり。

「いンや、澤山だ。」と強く首を掉つて、ガツくりとうつむき、斜に股のあたりへついた手を、膝頭へのめらせて、一ツ肩を揺つた。

「待ちねえ、待つてくんねえ。」

一調子ドス聲を高らかに、

「待つてくんねえよ、」と内懷へ手を入れたが、ふツ／＼と向うざまに息を吹いて、しばらくして、

「えゝと、然うだに因つて、」と、よろけ縞の唐棧の羽織の兩方の袖口を引いて、左右に二ツ三ツ扱くと、襟を返して、うしろへ脱ぎ、腋の下を潜らして、中央を摑んでずるりと前へ引いて噯をした。

「おう、何だぜ、」といひさま細い赤大名の雙子の、寐皺は寄つたが、未だ新しい、艶のある袷に、三尺をしめた姿で、土間へツイと立上つて、

「都合があるからね、おい、これを預けて行かあ、ねえ、おい、」と二足三足。

親仁が寄せて來るので、娘は鈴のやうな目を睜つて襷がけの其のあらはな手で、前垂の端を取つたまゝ思はず退る。

「都合があるからね、濟みませんがね。」

「あゝ、もうし、」女房は帳場の中で片膝立て

た。
「貴僧に濟まねえ、ウイ丶、濟みませんでごぜえす、ごぜえすが濟みませんでごぜえすが、ごぜえすがね。」
ほッと呼吸して、
「私あね、三崎町だ、三崎町のね、おい、藤助ッてもんです。此の何だ、町内の頭に聞いて見ねえ、知ッてら、懇意です、直に何すら、ねえ、おい。」
「お次手でよろしう、」と夫婦ほとんど一所に聲をかけたが、亭主姿は見えず、女房は一寸面を背けた。
娘はチツと見て居るのである。
「お次手でよろしう、何、お次手で、」と藤助ぐツたりと尻を下し、
「可かあねえ、よくねえです。憚んながら、濟むもんかい。そんなことをして濟むと思ひますかい、えゝ、濟むめえ、相濟むめえが、ヤイ、何うだ、姉や、
突かゝりさうな劔幕に、帳場から、
「何、貴客……お措きや、」
此方は、目くばせする、母親の顏を見て微笑んで、
「可いわねえ、母様。」

三

「可かありませんてことさ、フム、」と打棄つたやう、海鼠に首があらば此の形さ。
客は其の容子と佇んだ娘の顏を上下に打視め、
「突然だが、お前さん、お金子なら何うかしようぢやあないか、何も御縁さ、」
帳場に捻向いて、早く手を懷中へ、
「おかみさん、私が立かへて置きませう。」
「まあ、旦那、」
「滅相な、」と調子はづれに、向うから燗の出來た一燗を、亭主は不作法に引摑んでのツこり出て來た、布子に、これも襷がけ。半股引を穿いた、およそ五十前後の定九郎が、山岡頭巾で、揚幕を出た頃の蕎麥屋の風と見て可也矣。
繕ふ處更になく、
「へい、」と客の前へ突出して置いて、娘に並んで、藤助の傍に寄り、手はかけぬが、肩の上へ、掌を開いて腰を屈め、
「えゝ、もし、心持を惡くなさらねえで、一ツ勘定を濟ましておくんなさるわけにやあ行くめえかね。」
「何を、」
「いゝえさ、腹をお立てになさらねえで、何うでございませう。御都合はまゝあることなり潔白に然うやつて形を置いて行つて遣らうとおつしやる、其のお心は褒めました、讃めましたが相談でさ、唯た今ソレ鬢が破れて酒がこぼれたでおす、内の娘も希有なこッたといひます。
此處で私も心持が惡くッてなりません、吉左右だとは誰が考へても思へますまい、いや、詰らないことでもあると氣になりますね。
處を一ッ勘定を踏んで下さりや、はゝあ、今夜これだけの損つはく、其の前兆であつたにして、さて、さらりと事濟み、何うでございませう。え、もし、」
「馬鹿に、馬鹿にしやあがんない、誰だと思ふ、誰だと思ふ藤助だ。怎う、藤助を誰だと思ふ、」
深く憤つた色もないが、だらしもなら縺れかかる。
ト向けて皆が默りの折から、ぞろり〳〵と高い音、此の時まで伸して居た、件の影のやうな壯佼が、思ひ出したやうに戰つたのである。
「御主人、ともかくもまあ、其の事は氣にしないが可い、壞れた分は私が買つた、代を拂ひませう、別に、で、私が買つたものとすりゃ、お前さんが心持を惡くするにも當るまい。」

何うです、」

「飛んだことをおつしやる、勿體ない」

「そして何しようちやあないか、一つ其の方のも立かへて上げようぢやあないか。」

忽ち大音聲、

「誰だと思ふ、藤助だ、隠なしの藤じるし、」と

半から横低聲、と聞くと急に開き直つて、細い目を見据ゑながら、

「憚うノヽ、内の亭も、余所の且も、可い加減にしろい。勘定を踏んでくれの、立かへるのと好なことをいはあ、藤助だ、さあ、藤助だ。憚うなりや、さあ、手前ン處の太打が鼻緒に化けても踏まねえよ。情婦が富籤に當つてもかけらだつて達引かせねえ。天が二杯よ、一、二、三、四、銚子か、五本だ。取つといてくンねえ、斷つて預かつてくれ、え、おい、斷つてのこツた。」

「でもさ、」

「眞個にお次手で可うござんす。」

「かみさん、おかみさん、おい、かみさんや、女の癖に無勘定なことをいふない。憚う、聞きねえ。女房は家のかためなりけりさ、聞きねえ、女房は家のあツかちよ、なあ。お前さんは兩眼明かた、しかも佳い年増だ、佳い年増で居て、見ず知らずの野郎を達引いて濟むかい。

「はゝあ、さては、お前密男をしてやあがるな、」

「ほゝほゝ、」

先刻から他愛なく、莞爾々々して辭とその狀を見ながら、餘念もなう、其の管を聞いて居た、お君は兩親が、今のあまりの雑言に齊しく色を變へたにもかゝはらず、およそ堪らないと言つたやうに、

「まあ、松助にそツくりだよ。嬉しいねえ、」と摺寄つたが、いきなり唐棧の羽織を晴け取つて、手にのせると、臉のあたりがヒヤリとした。

「おゝ、冷い、雨にあつたの、母樣預つて置きませう。」

「へい、お値段を此處で、」といつて、件の壯佼はフイと立つてがらりと戸をあけた。立てかけてあつた、番傘がはずみで、ばツさり。見向きもしないで、影が消えたやうにポンと出た。

「誰だ、おねだんを此處へなんて言ふなあ、誰だい、へん、己が名は藤助でえ。」

「藤助、」

「や、」

「下名皮剝の庄兵衞、」

「……、」

「御用だ！」

「ウム、」

「神妙にしろ、」

「おゝ、先刻蕎麥屋で背後に居た、」

「夜中に羽織を取りに行つて、戸をあけさせて押込まうと、強盗品玉の枘は上ツたぞ、覺悟しろ、唯だ一人だが、鐵三郎だ。」

「旦那、まあ、御覧なせえ、」とビクともせず、内懐から、取出して、片手業で紙包、開いて掌に据ゑたのを、眞砂町の順の角あたりから、一條の赤い蛇の如く、晴を貫く瓦斯燈の灯に、唯見れば美しい半襟であつた。

「馬鹿といや、まア馬鹿でごぜえすがね、あんまり娘の罪の無さ。短刀で威したら、嬢がかぶらう、俳優だと思つて嬉しがるか、どツちにしても仕事は出來ねえと、狙つた的をフイにして、土産を持つて、寐ねえうちに、これからね、羽織を取りに引返す處でさ。

旦那、たゞ此のまんまぢやあ不可え、私も庄兵衞だ、唯今一立廻りやツつけやすぜ、天命なら仕方がねえ、お前さんの手柄になせえ。

しかし旦那、お職掌だから御無理はねえが

ね、考へて御覧じろ、私が病あつけたッて、たかゞ金子だ、働きや業なしさ。もう一人居た野郎なざア、いやに見せびらかしやあがつて、あいら、娘を狙ひまさ、疵ものにされた日にや、取返しがつくものぢやねえ。

可哀相に私のやうな惡黨せえ、涙が出るやうな可愛らしいものを、騙まうといふ奴人か世の中にや澤山ありまさ、そいつらにも些と氣を配つて、庇つて遣つておくんねえ。

はて、何處へ、持つてく土産だらう。」と水を飲んだより、名前ふた、酒の名も知らぬらしい、菁み足つて引しまつた、腰のあたりに微笑を含んで、其の半襟を帶のあたりへ突込む、と思ふと、鐵三郎は遍と退いた。

鳥籠一羽、ミすばかり開いて、疾く手にかゝつた鳥籠は、高い所にプツリと切れた。

「お前さんは未だ少いや。」

トまた一に斷と寄る、背後へ飛んで、下宮坂の峠の曖へ、谷に隱れるやうに下りた。行方知れず、上野の鐘。

## 發句

明治三十二年二月

奈良七重七堂伽藍八重櫻　芭蕉

柳散清水涸石處々　蕪村

かゝる句にはたとふべくもあらねど、假名人らずといふこじつけあり。

月殘々大根畠蕎麥畠

女われにむかひ問ふ「近頃は何うだ。」此時、「勉強してるよ。」といつてもほんとにせず、「なまけるよ。」といへば、「いけません。」といふ。「日増いから、いろ〳〵出來た。」といへば噴飯すなり。但し「護國寺のあたりを散歩してるの。」といふ時のみ、頷いて「さうか、感心だ。」といふことになりつゝあるなり。

ままに、其去年霜月女人とともに此護國寺のあたりを散策して、裏田圃より通に出づる路の邊の小川に、恰も黄昏なりしが、かんてらに灯をともして野夫一名、畔に積みて白い大根を洗ひ居たり。其まゝ、

灯ともして大根洗ふ小川かな

口ずさみて女人を顧みれば、「いつそ野川かなとしたらば好からう。」といふ、可し。

ほどもあらせず、太陽に出でたる鳴雪先生が選のなかに、名は忘れたり何とかいふ士の大根の句に、いひあはせたらむ如く同じきがありたり。

灯して大根洗ふ野川かな

これはとあぢらしく、おもしろく、思ひしが、春になりて七草の朝、道を行くとて茗荷谷に通りかゝりしに、ぼつ〳〵と降り出したれば、ありのまゝ「七草の朝から雨となりにけり」と句案じつゝ、雨具を取りに引返すと、留守をして居た酒亭の兄さん「御覧な。」といつて見せたが、ちやんとやつてござつた。

七草の朝から雨となりにけり

雨は違へども臺町にて、

傘さして荷車曳は時雨けり

蓋し實際なり。また何處にかこれよりもよいのがあるべし。恐し〳〵。

—— [illegible]より

# 藥草取

## 一

日光掩蔽　地上清涼
靉靆垂布　如可承攬
其雨普等　四方倶下
流樹無量　率土充洽
山川險谷　幽邃所生
卉木藥艸　大小諸樹

「もし憚りながらお布施申しませう。」

背後から呼ぶ優しい聲に、醫王山の半腹、樹木の鬱蒼たる中を出でゝ、不圖夜の明けたやうに、空澄み氣清く、時しも夏の初を、秋見る晝の月の如く、前途遙なる高峰の上に日輪を仰いだ高坂は、愕然として振返つた。

人の聲を聞き、姿を見ようとは、夢にも思はぬまで、遠く里を離れて、はや山深く入つて居たのに、呼懸けたのは女であつた。けれども、高坂は一見して、直に何等害心の無い者であることを認め得た。

女は片手拜みに、白い指尖を唇にあてゝ、俯向いて經を聞きつゝ、布施をしようと云ふのであるから、

「否、私は出家ぢやありません。」

と事もなげに辭退しながら、立停つて、女の其の雪のやうな耳許から、下膨れの頰に掛けて、柔に、濃い淺黄の紐を結んだのか、露の朝顏の色を宿して、加賀笠といふ、縁の深いので手を隱した、背には花籠、脚に脚絆、身輕に扮裝つたが、艶麗な姿を眺めた。

彼方は笠の下から見透すが如くにして、

「これは失禮なことを申しました。お姿は此とも然うらしくはございませんが、結構な御經をお讀みなさいますから、私は、あの、御出家ではございませんでも、御修行者でいらつしやいませうと存じまして。」

背廣の服で、足拵へして、鞄を眞深に、風呂敷包を小さく西行背負といふのにして居る。彼は名を光行とて醫科大學の學生である。

時に、妙法蓮華經藥草諭品、第五偈の半を開いたのを左の掌に捧げて居たが、右手に支いた力杖を小脇に搔上げ、

「そりやまあ、修行者は修行者だが、未だ全然素人で、奈何して御布施を戴くやうなものぢやない。

讀方だつて、何だ、大概、大學朱熹章句で行くんだから、尊い御經を勿體ないが、此の山には藥の草が多いから、氣の所爲か知らん。麓から然うやつて一里ばかりも來たかと思ふと、風も清々しい藥の香がして、何となく身に染むから、心願があつて近頃から讀み覺えたのを、誦へながら歩行いて居るんだ。」

然く打明けるのが、此際自他の爲と思つたから、高坂は親しく先づ語つて、扨、

「姉さん、お前さんは麓の村にでも住んで居る人なんか。」

「はい、二俣村でございます。」

「あゝあの、越中の礪波へ通ふ街道で、此處に來る道の岐れる、目まぐるしいほど馬の通る、彼處だね。」

「然やうでございます。最う路が惡うございまして、車が通りませんものですから、炭でも薪でも、殘らず馬に附けて出しますのでございます。」

それに丁ど此の御山の石の門のやうに成つて

居ります、戸室口から石を切出しますのを、皆馬で運びますから、一人で五疋も曳きますのでございますよ。」

「それでは其の麓から來たんだね、唯一人……。」

靜に歩を移して居た高坂は、更に又女の顏を見た。

「はい、一人でございます、而して此方へ參りますまで、お姿を見ましたのは、貴方ばかりでございますよ。」

いかにもといふ面色して、

「私も矢張、然うと、半里ばかりも、後だつた、途中で年寄つた樵夫に逢つて、路を聞いた外にはお前さん限。

奈何して往つて還るまで、人ッ子一人居ようとは思はなかつた。」

此の邊唯なだらかな蒼海原、沖へ出たやうな一面の草を瞰しながら、

「や、ものを言つても一ツ一ツ谺に響くぞ、寂しい處へ、能くお前さん一人で來たね。」

女は乳の上へ、確々、幅廣く引掛けた桃色の紐に両手を掛けて、花籠を搖直し、

「貴方、其の樵夫の衆にお尋ねなすつて可うございました。そんなに嶮しい坂ではございませんが、些とも人が通ひませんから、誠に知れ難いのでございます。」

「此の奥の知れない山の中へ入るのに、目標が那の石ばかりぢや分らんではないかね。」

それも、南北、何方か醫王山道とでも彫りつけてあれば未しもだけれど、唯河原に轉つてゐる、ごろた石の大きいやうな、其の背後から草の下に細い道があるんだもの。一寸間違へようものなら、半年經歴つても頂には行かれないと、樵夫も言つたんだが、全體何だつてそんなに祕して置く山だらう。全く那の石の裏より外に、何處も路はないのだらうか。」

「ございませんとも、此の路筋さへ御存じで在らつしやれば、世を離れました寂しさばかりで、獸も可恐いのは居りませんが、一足でも間違へて御覽なさいまし、何千丈とも知れぬ谷で、行留りになりますやら、斷崖に突當りますやら、流に岩が飛びましたり、大木の倒れたので行く前が塞つたり、其間には草樹の多いほど、毒蟲もむら〳〵して、甚麼に難儀でございませう。

舊へ歸るか、倶利伽羅峠へ出抜けますれば、無事に何方か國へ歸られます。其でなくつて無理に先へ參りますと、終局には草一條も生えません燒山に成つて、餓死をするさうでございます。

本當に貴方がおつしやいます通り、樵夫がお教へ申しました石は、昔までも目標が在り、醫王の要石と申しまして、一度踏外しますと、

それこそ路がばら〳〵になつて了ひますよ。」

名だゝる北國祕密の山、然もこそと思つたけれども、

「然し一體、醫王といふほど、此處で藥草が採れるのに、何故世間とは隔つて、行通がないのだらう。」

「それは、あの承りますと、昔から御領主の御禁山で、滅多に人をお入れなさらなかつた所爲なんでございますつて、御領主ばかりでもございません。結構な御藥の採れます場所は、又御守護の神々佛樣も、出入をお止め遊ばすのでございませうと存じます。」

譬へば仙境に異靈あつて、恣に人の藥草を採る事を許さずといふが如く聞えたので、是が少からず心に懸つた。

「それでは何か、私なんぞが入つて、行つて欲しい草を取つて歸つては惡いのか。」

と高坂は稍氣色ばんだが、悚然と肌寒くなつて、思はず口の裡で、

慧雲含潤　電光晃耀
雷聲遠震　令衆悦豫
日光掩蔽　地上清涼
靉靆垂布　如可承攬

## 二

「否、山さへお暴しなさいませねば、誰方がおいでなさいましても、大事ないさうでございます。藥の草もあります。上は毒な草も無いことはございません。無暗な者が採りますと、どんな間違にならうも知れませんから、昔から禁札が打つてあるのでございませう。

貴方は、然うして御經をお讀み遊ばすくらゐ、縱令お山で日が暮れても些ともお氣遣な事はございますまいと存じます。」

言ひかけて又近き、

「あの然やうなら、貴方はお藥になる草を採りにおいでなさるのでござんすかい。」

「少々無理な願ですがね、身内に病人があつて、迚も醫者の藥では治らんに極つたですから、此の醫王山でなくつて外に無い、私が心當の藥草を採りに來たんだが、何、姉さんは見懸けた處、花でも摘みに上るんですか。」

「御覽の通り、花を賣りますものでござんす。三日置き、三日置きに參つて、お山の花を頂いては里へ持つて出て商ひます、丁ど唯今が種々な花盛り。

千蛇が池と申しまして、頂に海のやうな大きな池がございます。而して此の山路は何處にも清水なぞ流れては居りません、其代暑い時、咽喉が渇きますと、蒼い小な花の咲きます、日蔭の草を取つて、葉の汁を嚙みますと、それは最う、冷い水を一斗ばかりも飲みましたやうに寒うなります。其が無いと凌げませんほど、水の少い處ですから、菖蒲、杜若、河骨はござんせんが、躑躅も山吹も、あの、牡丹も芍藥も、菊の花も、桔梗も、女郎花でも、皆一所に開いて居ますよ、此の六月から八月の末時分まで。其の牡丹だの、芍藥だの、結構な花が取れますから、たんとお鳥目が頂けます。まあ、どんなに綺麗でございませう。

而して貴方、お望の草をお採り遊ばすお心當は何の邊でござんすえ。」

と笠ながら差覗くやうにして親しく聞く、時に清い目がちらりと見えた。

高坂は何となく、物語の中なる人を、幽境の仙家に導く牧童などに逢ふ思ひがしたので、言も自から慇懃に、

「私も其處へ行くつもりです。四季の花の一時に咲く、何といふ處でせうな。」

「はい、美女ケ原と申します。」

「びぢよがはら？」

「あの、美しい女と書きますつて。」

女は俯向いて羞ぢたる色あり、ものゝ淑しげに微笑む樣子。

可懷しさに振返ると、

「あれ。」と袖を斜に、袂を取つて打傾き、

「あれ、まあ、御覽なさいまし。」

其の草染の左の袖に、はら／＼と五片三片紅を點じたのは、山鳥の拔羽か、非ず、蝶か、非ず、蜘蛛か、非ず、櫻の花の零れたのである。

「奈何でございませう、此の二三ケ月の間は、何處からともなく、恁うして、ちら／＼ちら／＼絶えず散つて參ります。それでも何處に櫻があるか分りません、美女ケ原へ行きますと、十里南の能登の岬、七里北に越中立山、背後に加賀が見晴せまして、もう此節は、霞も霧もかゝりませんのに、見紛ふやうな其らしい花の梢もござんせぬが、大方此の花片は、煩い町方から逃げて來て、遊んで居るのでございませう。それとも那裏這裏山の中を何かの御使に歩いて居るのかも知れません。」

と女が高く仰ぐに連れ、高坂も葎の中に伸上つた。草の綠が深くなつて、倒に雲に映るか、水底のやうな天の色、神靈秘密の氣を籠めて、薄紫と見るばかり。

「其の美女ヶ原まで何のくらゐあるね、日の暮れない中行かれるでせうか。」

「否、恁う櫻が散つて參りますから、直でございます。私も其處まで、お供いたしますが、今日こそ貴方のやうなお連がございますけれど、平時は一人で參りますから、日一杯に里まで歸るのでございます。」

「日一杯？」と思ひも寄らぬ狀。

「甚麼に又遠い處のやうに、樵夫がお敎へ申したのでござんすえ。」

「何、樵夫に聞くまでもないです。私に心覺えが丁とある。先づ凡て山の中を二日も三日も步行かなければならないですな。

尤も上りは大抵何のくらゐと、そりや豫て聞いては居るんですが、日一杯だの最う直だの、什麼に輒く行かれる處とは思はない。

御覽なさい、恁うやつて、五體の滿足なは謂ふまでもない、谷へも落ちなけりや、巖にも躓かず、衣物に綻が切れようぢやなし、生爪一つ剝しやしない。

支度は爲て來たつても餒い思ひもせず、其の蒼い花の咲く草を搜さなけりやならんほど渇く思ひを爲るでもなし、勿論此の先甚麼難儀に逢ふも知れんが、其だつて、花を取りに里から日歸をすると云ふ、姉さんと一所に行くんだ、急に日が暮れて闇にならうとも思はないが、全く是限で、一足づゝ出さへすりや、美女ヶ原になりますか。」

「えゝ、譯はございません、貴方、そんなに可恐しい處と御存じで、其の上、お藥を採りに入らつしたのでございますか。」

言下に、

「實際命懸で來ました。」と思ひ入つて答へると、女はしめやかに、

「それでは、よく／＼の事でおあんなさいませうねえ。

でも何もそんな難しい御山ではありません。但此處は靈山とか申す事、酒を覆したり、竹の皮を打棄つたりする處ではないのでございます。まあ、難有いお寺の庭、お宮の境内、上つ方の御門の内のやうな、步けば石一つありませんでも、何となく謹みませんと成りませんばかりなのでございます。而して貴方は、美女ヶ原にお心覺えの草があつて、其處までお越し遊ばすに、二日も三日もお懸りなさらねばなりませんやうな氣がすると仰有いますが、何時か一度お上り遊ばした事がございますか。」

「一度あるです。」

「まあ。」

「確に美女ヶ原と云ふ其でせうな、何でも躑躅や椿、菫も藤も、原一面に咲いて居たと覺えて居ます。けれども土地の名どころぢやない、方角さへ、何處が何だか全然夢中。

今だつて猶且、私は同一此の國の者なんですが、其時は何爲か家を出て一月餘、山へ入つてゐて、彼是、何でも生れてから死ぬまでの半分は彷徨つて、漸々其處を見たやうに思ふですが。」

高坂は語りつゝも、長途に苦み、雨露に曝された當時を思ひ起すに付け、今も、氣疲れ、心疲れて、爰に深山に塵一つ、心に懸らぬ折ながら、猶且つ重々と背に汗。

絲のやうな一條路、背後へ聲を運ぶのに、力を要した所爲もあり、藥王品を胸に抱き、杖を持つた手に帽を脫ぐと、清き額を拭ふのであつた。

其と見る目も敏く、

「もし、御案內がてら、あの、私がお前へ參りませう。どうぞ、其の方がお話も承りよう

ございますから。」
一議に及ばず、草鞋を上げて、道を左へ片避けた、足の底へ、草の根が柔に、葉末は膝を隠したが、裾を引く荊も無く天地閑に、蟲の羽音も聞えぬ。

## 三

「御免なさいまし。」
と花売は、袂に留めた花片を惜むやう／＼、袖を胸に引合せ、身を細くして、高坂の體を横に擦抜けた其片足も莽の中、路は然ばかり狭いのである。
五尺ばかり前にすらりと、立直る後姿、裳を籠めた草の茂り、近く緑に、遠く淺黄に、日の色を隈取る他に、一木のありて長く影を倒すにあらず。
背後から聲を掛け、
「大分草深くなりますな。」
「段々頂が近いんですよ。やがて此の生が人丈になつて、私の姿が見えませんやうになりますと、其を潜つて出ます處が、もう花の原でございます。」
と撫肩の優しい上へ、笠の紐弛く、紅のやうな唇をつけて、横顔で振向いたが、清い目許に笑を浮べて、
「奈何して貴方は那様にまあ唐天竺とやらへでもお出で遊ばすやうに遠い處とお思ひなさるのでございませう。」
高坂は手なる杖を荒く支いて、土を騒がす事さへせず、慎んで後に續き、
「久しい以前です。一體誰でも昔の事は、遠く隔つたやうに思ふのですから、事柄と一所に路までも遥に考へるのかも知れません。而して先づ皆夢ですよ。
けれども不残事實で。
私が以前美女ケ原で、薬草を採つたのは、もう二十年、十年が一昔、ざつと二昔も前になるです、九歳の年の夏。」
「まあ、そんなにお稚い時。」
「尤も一人ぢやなかつたです。然る人に連れられて來たですが、初め家を迷つて出た時は、東西も辨へぬ、取つて九歳の小兒ばかり。
人は高坂の光、私の名ですね、光坊が魔に捕られたのだと言ひました。よく此の地で言ふ、邪の、天狗に攫はれた其です。又實際然うかも知れんが、幼心で、自分ぢや一端親を思つたつもりで。
未だ兩親ともあつたんです。母親が大病で、暑さの取附には最う醫者が見放したので、何うかして其を復したい一心で、薬を探しに來たんですな。」
高坂は少時默つた。
「恁う言ふと、何か、然も孝行の吹聴をするやうで人聞が惡いですが、姉さん、貴女ばかりだから話をする。
今でこそ、立派な醫者もあり、病院も出來たけれど、奈何して城下が二里四方に開けて居たつて、北國の山の中、醫者らしい醫者も無い。まあ／＼其頃、土地第一といふ先生まで匙を投げて了ひました、打明けて、父が私たちに聞かせるわけのものぢやない。母様は病氣が惡いから、大人しく爲ろよ、くらゐにしてあつたんですが、何となく、人の出入、家の者の起居擧動、大病といふのは知れる。
それに其の名醫と云ふのが、五十恰好で、天窓の兀げた癖に髪の黒い、色の白い、ぞろりとした優形な親仁で、脈を取るにも、蛇の目の傘を差すにも、小指を反して、三本の指で横笛を吹くか、女郎が煙管を持つやうな手付をする、好かない奴。
私がちよこ／＼近處だから駈出しては、薬取に行くのでしたが、又薬局といふのが、其の

先生の甥とか云ふ、べろりと長い顔の、額から紅が流れたかと思ふ鼻の尖の赤い男、藥種舖の小抽斗を拔いては、机の上に紙を並べて、調合をするですが、先づ其の匙加減が如何にも怪しい。

相應に流行つて、藥取も多いから、手間取るのが焦つたさに、始終行くので見覺えて、私が其の抽斗を拔いて五つも六つも藥局の机に並べて遣る、終には、先方の手を待たないで、自分で調合をして持つて歸りました。私の爲る方が、却つて目方が揃ふくらゐ、大病だつて何だつて、そんな覺束ない藥で快くならうとは思へんぢやありませんか。

其の頃父は小立野と言ふ處の、驗のある藥師を信心で、毎日參詣爲るので、私も一寸々々連れられて行つたです。

後は自分ばかり、乳母に手を曳かれてお詣を爲ましたつけ。別に拜みやうも知らないので、唯、母親の病氣の快くなるやうと、手を合せる、それも遊び半分。

六月の十五日は、私の誕生日で、其の日、月代を剃つて、湯に入つてから、紋着の袖の長いのを被せて貰ひました。

私がと言つては可笑しいでせう。櫻模樣の五ツ紋、熨斗目の派手な、此頃聞きや加賀染とか云ふ。菊だの、萩だの、櫻だの、花束が紋に成つて居る、時節に構はず、種々の花を染交ぜてあります。尤も今時そんな紋着を着る者はない、他國には勿論ないですね。

一體此の醫王山に、四季の花が一時に開く、其の景勝を誇る爲に、加賀ばかりで染めるのださうですな。

まあ、其の紋着を着たんですね、博多に緋の一本獨鈷の小兒帶なぞで。

坊やは綺麗に成りました。母も後毛を搔上げて、而して手水を使つて、乳母が背後から羽織らせた紋着に手を通して、胸へ水色の下じめを卷いたんだが、自分で、帶を取つてメめようとすると、それなり力が拔けて、膝を支いたので、乳母が慌てゝ確乎抱くと、直に天鵞絨の括枕に鳩尾を壓へて、其の上へ胸を伏せたですよ。

產んで下すつた禮を言ふのに、唯御機嫌好うとさへ言へば可いと、父から言ひつかつて、枕頭に手を支いて、其處へ。顏を上げた私と、枕に凭れながら、熟と眺めた母と、顏が合ふと、坊や、最う復るよと言つて、涙をはらはら、差俯向いて弱々と成つたでせう。

父が肩を抱いて、徐と横に寢かした。乳母が、搔卷を被せ懸けると、襟に手をかけて、向うを向いて了ひました。

臺所から、中の室から、玄關あたりは、ばたばたした人の行交ふ音。尤も帶をしめようとして、濃いお納戸の紋着に下じめの裝で倒れた時、乳母が大聲で人を呼んだです。

やがて醫者が袴の裾を、ずるずるとやつて駈け込んだ。私には戸外へ出て遊んで來いと、乳母が言つたもんだから、庭から出たです。今も忘れない。何とも言ひやうのない、悲しい心細い思ひが爲ましたな。」

花實は聲細く、

「御道理でございますねえ。而して母樣は其後快くお成りなさいましたの。」

「お聞きなさい、それからです。

小兒は切て佛の袖に縋らうと思つたでせう。

小立野と言ふは場末です。先づ小さな山ぐらゐはある高臺、草の茂つた空地澤山な、人通の無い處を、其の藥師堂へ參つたですが、

朝の內に月代、沐浴なんか爲て、家を出たのは正午過だつたけれども、何時頃藥師堂へ參詣して、何處を歩いたのか、奈何して寢たのか。

翌朝は其の小立野から、八坂と言ひます、八段に黑い瀧の落ちるやうな、眞暗な坂を降りて、

川端へ出て居た。川は、鈴見といふ村の入口で、流も急だし、瀨の色も凄いです。

橋は、雨や雪に白つちやけて、長いのが處々、鱗の落ちた形に中弛みがして、のら〱と架つて居る其の橋の上に茫然と。

後に考へてこそ、翌朝なんですが、其の節は、夜を何處で明かしたか分らないほどですから、小兒は晩方だと思ひました。此の醫王山の頂に、眞白な月が出て居たから。

然し殘月であつたんです。何爲かと云ふに其の日の正午頃、ずつと上流の怪しげな渡を、綱に掴まつて、宙へ釣されるやうにして渡つた時は、顏が赫とする晃々と烈しい日當。

恁う言ふと、何だか明方だか晩方だか、宛然夢のやうに聞えるけれども、渡を渡つたには全く渡つたですよ。

山路は一日がゝりを覺悟をして、今度來るには麓で一泊したですが、昨日丁度前の時と同一時刻、正午頃です。岩も水も眞白な日當の中を、あの渡を渡つて見ると、二十年の昔に變らず、船着の岩も、船出の松も、確に覺えがありました。

然し九歲で越した折は、爺さんの船頭が居て船を扱ひましたつけ。

昨日は唯綱を手繰つて、一人で越したです。乘合も何も無い。

御存じの烈しい流で、棹の立つ瀨は無いですから、綱は二條、染物をしんし張に爲たやうに隙間なく手懸が出來て居る。船は小さし、胴の間へ突立つて、釣下つて、互違に手を掛けて、川幅三十間ばかりを小半時、幾度もはつと思つちや、危さに自然に目を塞ぐ。其の目を開ける時、もし、あの丈の伸びた菜種の花が斷崕の巖越に、ばら〱見えんでは、到底此の世の事とは思はれなかつたらうと考へます。

十里四方には人らしい者も無いやうに、船を纜つた大木の松の幹に立札して、渡船錢三文とある。

話は後前に成りました。

其處で小兒は、鈴見の橋に彳んで、前方を見ると、正面の中空へ、佛の掌を開いたやうに、五本の指の並んだ形、矗々立つたのが戸室の石山。靄か、霧か、後を包んで、年に二三度好く晴れた時で無いと、蒼く顯れて見えないのが、卽ち此の醫王山です。

其處に此の山が有るくらゐは、豫て聞いて、小兒心にも方角を知つて居た。而して迷子に成つたか、魔に捉られたか知れもしないのに、稚な者は、暢氣ぢやありませんか。

それが既に氣が變に成つて居たからであらうも知れんが、お腹が空かぬだけに一向苦に成らず。壞れた竹の欄干に掴つて、月の懸つた雲の中の、彼が醫王山と見て居る内に、板橋をことこと踏んで、

向うの山に、猿が三疋住みやる。中の小猿が、能う物饒舌る。何と小兒等花折りに行くまいか。今日の寒いに何の花折りに。牡丹、芍薬、菊の花折りに。一本折つては笠に插し、二本折つては、蓑に插し、三枚四枚に日が暮れて……と不圖唄ひながら……■

何となく心に浮んだは、あゝ、向うの山から、月影に見ても色の紅な花を採つて來て、それを母親の髪に插したら、屹度病氣が復るに違ひないと言ふ事です。又母は、其の花を簪にしても似合ふくらゐ若かつたですな。」

高坂は舊來た方を顧みたが、草の外には何も無い、一歩前へ花賣の女、如何にも身に染みて聞くやうに、俯向いて行くのであつた。

「そして確に、其が藥師のお告であると信じたですね。

さあ思ひ立つては矢も楯も堪らない、渡り懸けた橋を取つて返して、堤防傳ひに川上へ。

後で又渡を越えなければならない路ですがね、橋から見ると山の位置は月の入る方へ傾いて、却つて此處から言ふと、對岸の行留りの雲の上らしく見えますから、小兒心に取つて返したのが丁ど幸と、橋から渡場まで行く間の、あの、岩淵の岩は、人を隔てる[illegible]の一の砦と言つても可い。戸室の石山の麓が直に流に迫る處で、累り合つた岩石だから、路は其處で切れるですものね。

岩淵を此方に見て、大方跣足で居たでせう、すた〳〵五里も十里も辿つた意で、正午頃に着いたのが、鳴子の渡。」

四

「馬士にも、荷擔夫にも、畑打つ人にも、三人二人くらゐ宛、村一つ越しては川沿の堤防へ出る毎に逢つたですが、皆唯立停つて、じろ〳〵見送つたばかり、言葉を懸ける者は無かつたです。是は蹟半目の紋着振袖と云ふ、田舍に珍らしい異形な扮装だつたから、不思議な若殿、迂濶に物も言へないと考へたか、眞晝間、狐が化けた？　とでも思つたでせう。其とも本人逆上返つて、何を言はれても耳に入らなかつたのかも知らんですよ。

佛と其の渡場の手前で、背後から始めて呼び留めた親仁があります。兄や、兄やと太い調子。

私は仰向いて見ました。

づんぐり脊の高い、銅色の頑丈造な、年配四十五六、古い單衣の裾をぐいと端折つて、赤脛に脚絆、素足に草鞋、くわつと眩いほど日が照るのに、笠は被らず、其の菅笠の紐に、褐油合羽を疊んで、小さく縦に長く折つたのを結へて、振分けに爲て肩に投げて、兩提の煙草入、大きいのをぶら提げて、奈何云ふ氣か、澁團扇で、はた〳〵と胸毛を煽ぎながら、てくり〳〵寄つて來て、何處へ行くだ。

御山へ花を取りに、と返事すると、ふん其ならば可し、小父が同士に行つて遣るべい。但、此の前の渡を一つ越さねばならぬので、渡守が咎立をすると面倒だや、さあ、負され、と言うて背中を向けたから、合羽を跨ぐ、足を向うへ取つて、猿の兒背負、高く肩車に乘せたですな。

其の中も心の急く、山はと見ると、戸室が低く成つて、此の醫王山が鮮明な深翠、肩の上から下に瞰下されるやうな氣が爲ました。位置は變つて、川の反對の方に見えて來た、成程渡を渡らねば成りますまい。

足を揃へた片手を後へ、腰の兩提の中をちやらちやら爲せて、[illegible]します、渡守の[illegible]を見に、[illegible]、と言ふと、船を寄せた老人の腰は、親仁の兩提よりもふら〳〵して干柿のやうに干からびた小さな[illegible]。

やがて綱に摑まつて、纜を解くと疾い事！　雀が鳴子を渡るやう、猿が梢を傳ふやう、さら〳〵、さつと。」

高坂は思はず足踏をした、草の茂りがむらむらと搖いで、花片が又もや散り來る――二片三片、虚空から――。

「左右へ傾く舷へ、流蒼く摑み着いて、眞白に颯と飜ると、乘つた親仁も馴れたもので、小兒を擔いだまゝ仁王立。

眞蒼な水底へ、黒く透いて、底は知れず、目前へ押被さつた大巖の腹へ、ぴたりと船が觸寄せられた、岸は可恐しく水は深い。

巖角に刻を入れて、是を足懸りにして、此方の堤防へ上るんですな。昨日私が越した時は、先づ第一番の危難に逢ふかと、背汗を流して漸々縋り着いて上つたですが、何、其の時の親仁は……平氣なものです。」

高坂は莞爾して、

「爪尖を懸けると更に苦なく、負さつた私の方

が却つて目を塞いだばかりでした。扨、緩と歩行かつせえと、崖で下してくれました。其からは少しづゝ次第に瀧に遠ざかつて、田の畦一つばかり横に切れると、今度は赤土の一本道、兩側にちらほら松の植わつて居る處へ出ました。

六月の中ばとは云つても、此邊には珍らしい酷く暑い日だと思ひましたが、畦を渡り切つた時分から、戸室山が雲を吐いて、處々田の水へ、眞黒な雲が往つたり、來たり。

並木の松と松との間が、どんよりして、梢が鳴る、と思ふとはや大粒な雨がばら〳〵、立樹を五本と越えない中に、車軸を流す烈しい驟雨。

ちよッ待て〳〵、と獨言して、親仁が私の手を取つて、そら、臺なしに成るから脱げと言ふまゝにすると、帶を解いて、着物を剝いで、淺黄の襟の細く掛つた襦袢も殘らず。

小兒は絲も懸けぬ全裸體。

雨は灑るやうだし、恐さは恐し、ぶる〳〵顫へると、親仁が、強いぞ強いぞと、言つて、私の衣類を一丸けにして、懷中を膨らますと、紐を解いて、笠を一文字に冠つたです。

それから暗に立たせて置いて、やがて例の桐油合羽を開いて、私の天窓からすつぽりと目ばかり出るほど、宛然油紙の小兒の小包。

いゝ！ 出來た、これなら海を潜つても濡れることでは無い、さあ、眞直に前途へ駈け出せ、曳、と言うて、板で打たれたと思つた、私の臀をぴたりと一つ。

濡れた團扇は骨ばかりに裂けました。

怪飛んだやうに成つて、蹌踉けて土砂降の中を飛出すと、くるりと合羽に包まれて、見るは脚ばかりぢやありませんか。

赤蛙が化けたわ、化けたわと、親仁が呵々と笑つたですが、もう耳も聞えず眞暗三寶。何か黒山のやうな物に打付かつて、筋斗を打つて仰様に轉ぶと、瀧のやうな雨の中に、ひゝんと馬の嘶く聲。

漸々人の手に扶け起されると、合羽を解いて呉れたのは、五十ばかりの肥つた婆さん。馬士が一人腕組をして突立つて居た、門の柳の翠から、黒駒の背へ雫が流れて、はや雲切がして、其の柳の梢などは薄雲の底に蒼空が動いて居ます。

妙なものが降り込んだ。これが豆腐なら資本入らずぢや、其とも此まゝ熨斗を附けて、鎮守様へ納めさつしやるかと、馬士は掌で吸殻をころ〳〵遣る。

主さ、何うした、と婆さんが聞くんですが、四邊をきよと〳〵眴すばかり。

何處から出た化物だよ、と又厭いことを言ひます。尤も裸體が油紙に包まれて居たんぢや、氏素性有らうとは思はぬ筈。

衣物を脱がせた親仁はと、唯悄しく、來た方を眺めると、脊が小さいから馬の腹を透かして雨上りの松並木、青田の緣の用水に、白鷺の遠く飛ぶまで、瞬かずつと見渡されて、西日がほんのり紅いのに、急な大雨で往來もばつたり、其の親仁らしい姿も見えぬ。

餘の事にしく〳〵泣き出すと、こりや饑うて口も利けぬな、商賣品で錢を嚙ませるやうぢやけれど、一つ振舞うて遣ろかいと、汚い土間に緣臺を並べた、狭ツくるしい暗い隅の、苔の生えた桶の中から、豆腐を半挺、綺手に白く積んで、そりや〳〵と、頰邊の處へ突出してくれたですが、奈何して是が食べられますか。

其癖腹は干されたやうに空いて居ましたが、胸一杯に成つて、頭を掉ると、はて食好をする犬の、と呟いてぶくりと又水へ落して、これや、慈悲を享けぬ餓鬼め、出て失せと、私の胸へ突懸けた皺だらけの手の黑さ、顏も漆で固めたやう。

黒婆どの、情無い事をせまいと、名も成程黒婆といふのか、馬士が中へ割つて入ると、歯を返せ、此の人足めと怒鳴つたです。すると其の豆府の店の有る筋か、蜘蛛の巣だらけの棚で、是を地境にして壁も垣も無い隣家の小家の、縁に、膝に手を置いて熟つて居た、十ばかりも年上らしいお姐さん。見兼ねたか、縁側から摺つて下り、ごつ／＼乾かつた石地を跨いで、草履を揃つて顔を出したが、柔和な面顔、色が白い。

小児衆々々、私の許へござれ、と言ふ。狭く庄屋が家へ行かつしやい、借が無くば、此處へ馬を繋いではないと、馬士は腰の胴亂に煙管をぐつと突込んだ。

其處で裸足で手を曳かれて、土間の隅を拔けて、座敷へ連込まれる時分には、鳶が鳴いて、遠くで大勢の人聲、祭禮の太鼓が聞えました。」

高坂は打案じ、

「一度それから此方には、一生私が忘れない處なんだね、で今度來る時も、前の世の旅を二度する氣で、松一本、橋一つも心をつけて見たんだけれども、それらしい家も無く、柳の樹も分らない。それに今では、三里ばかり向うを汽車が素通りにして行くやうになつたから、人通りもなし、大方、其の馬士も、老人も最う此の世の者ぢやあるまいと思ふ、私は何だか其の人達の、顔のまゝ影を埋めた、丁ど其の上を、姉さん。」

花賣は後姿のまゝ引留められたやうになつて停つた。

「貴女と二人で歩行いて居るやうに思ふですがね。」

「それから奈何遊ばした、まあお話しなさいまし。」

と靜に前へ。高坂も徐ろに、

「娘が來て世話をするまで、私には衣服を着せる才覺も無い。暑い時節ぢやで、何とも無かろが、たゞ饑じからうで、是でも食はつしやれつて。圍爐裡の灰の中に、ぶす／＼と燻つて居たのを、拔き出してくれたのは、串に刺した茄子の燒いたんで。

ぷく／＼樺色に膨れて、湯氣が立つて居たです。

生豆腐の手摑みに比べては、勿體ない御料理と思つた。其にくれるのが優しげなお婆さん。地が性に合うで好う出來るが、未だ此の村でも初物ぢやと云ふ、其を、空腹へ三つばかり頰張りました。熱い汁が下腹へ、たら／＼と染みた處から、一睡して目が覺めると、きや／＼滲み出して、やがて吐くやら、瀉すやら、尾籠なお話だが七顛八倒、能くも生きて居られた事と、今でも思ふです。然しもう其の時は、命の親の、優しい手に抱かれて居ました。世にも綺麗な娘で。

人心地も無く苦しんだ目が、幽に開いた時、初めて見た姿は、艶やかな黒髪を、男のやうな髷に結んで、緋縮緬の襷を片袖脱いで居ました。日が經つて醫王山へ花を採りに私の手を曳いて、樓に朱の欄干のある、温泉宿を忍んで裏口から朝月夜に、田圃道へ出た時は、中形の浴衣に繻子の帯をしめて、鎌を一挺、手拭にくるんで居たです。其間に、白粉の内を。私を膝に抱いて出た時は、手を唐輪のやうに結つて、髢には玉を鏤つて、丁ど天女のやうな扮装をして、車を、牛に曳かせたのに乗つて、わい／＼と云ふ群集の中を、通つたですが、村の者が交る／＼高く傘を差掛けて練つたですね。

村端で、寺に休むと、此處で支度を替へて、多勢が口々に、御苦勞、御苦勞と云ふのを聞棄てに、娘は、一人の若い者に負させた私に一寸頰摺をして、それから、石高路の坂を越して、賑かに二階屋の揃つた中の、一番屋の棟の高い家へ入つたですが、私は唯幽に呻吟いて居た

ばかり。尤も白姥の家に三晩寐ました。其の内も、娘は外へ出ては歸つて來て膝枕を爲せて、始終集つて來る馬蠅を、拂つてくれたのを、現に苦みながら覺えて居ます。車に乘つた天女に抱かれて、多人數に圍まれて通つた時、庚申堂の傍に榛の木で、半ば姿を祕して、群集を放れてすつくと立つた、脊の高い親仁があつて、熟と私どもを見て居たのが、確に衣服を脱がせた奴と見たけれども、小兒は未だ口を利けないほど容體が惡かつたんですな。

私はたゞ其の氣高い艶麗な人を、今でも神か佛かと、思ふけれど、後で考へると、先づ恁うだらうと、思はれるのは、姥の娘で、清水谷の温泉へ、奉公に出て居たのを、祭に就いて、村の若い者が借りて來て八ケ村九ケ村を是見よと喚いて歩行いたものでせう。娘は不圖すると、湯女などであつたかも知れないです。」

## 五

「それから其の人の部屋とも思はれる綺麗な小座敷へ寐かされて、日の覺める時、物の欲しい時、咽の乾く時、涙の出る時、何時も其の娘が顏を見せない事は無かつたです。

自分でも、もう、病氣が復つたと思つた晩、手を曳いて、てら〳〵光る長い廊下を、湯殿へ連れて行つて、一所に透通るやうな温泉を浴びて、岩を平にした湯槽の傍で、すつかり體を流してから、櫛を拔いて、私の髮を柔く梳いてくれる二櫛三櫛、軈て其の櫛を湯殿の岩の上から、廊下の灯に透して、氣高い横顏で、熟と見て、あゝ好い事、美しい髮も拔けず、汚い蟲も付かなかつたと言ひました。私も氣がさして一所に櫛を瞶めたが、自分の膚も、人の體も、其の時くらゐ清く、白く美しいのは見た事がない。

私は新しい着物を着せられ、娘は桃色の扱帶のまゝ、又手を曳いて、今度は裏梯子から二階へ上つた。其の段を昇り切ると、取着に一室、新しく建増したと見えて、襖がない、白い床へ、月影が潑と射した。兩側の部屋は皆陰々と灯を置いて、鎭り返つた夜半の事です。

好い月だこと、まあ、と其のまゝ手を取つて床板を踏んで出ると、小窓が一つ。其にも障子が無いので、二人で覗くと前の甍は露が流れて、銀が溶けて走るやう。

月は山の端を放れて、半腹は暗いが、眞珠を頂いた峰は水が澄んだか明るいので、山は、と聞くと、醫王山だと言ひました。

途端にくわいと狐が鳴いたから、娘は緊乎と私を抱く。其胸に顏を當てゝ、私は我知らず、わつと泣いた。

怖くは無いよ、否怖いのでは無いと言つて、母親の病氣の次第。

恁ういふ澄み渡つた月に眺めて、其の色の赤く輝く花を採つて歸りたいと始めて此の人ならばと思つて、打明けて言ふと、暫く默つて瞳を据ゑて、私の顏を見て居たが、月夜に色の眞紅な花——屹度探しませうと言つて、——可し、可し、女の念で、と後を言ひ足したですね。

翌晩、夜更けて私を起しますから、素より此方も目を開けて待つた處、直ぐに支度をして爾時、帶をきりゝとしめた、引掛に、先刻言ひましたね、刃を手拭でくる〳〵と卷いた鎌一挺。

それから昨夜の、其の月の射す窓から密と出て、瓦屋根へ下りると、夕顏の葉の搦んだ中へ、梯子が隱して掛けてあつた。傳つて庭へ出て、裏木戸の鍵をがらりと開けて出ると、有明月の山の裾。

醫王山は手に取るやうに見えたけれど、是は祕密の山の搦手で、其處から上る道は無いですから、戸室口へ廻つて、攀ぢ上つたものと見えます。さあ、此處からが目差す御山と云ふまで

に、辻堂で二晩寐ました。
後は何う來たか、恐い姿、凄い者の路を遮つて顯るゝ度に、娘は私を背後に庇うて、其の鎌を差翳し、矗と立つと、鑞うた姫神のやうに賴母しいにつけ、雲の消えるやうに路が開けてずん／＼と。」
時に高坂は何を斷つが如き音を聞いて、唯見ると、前に立つた、女の姿は、其の肩あたりまで草隱れに成つたが、背後ざまに手を動かすに連れて、鋭き鎌、閃ける玉の如く、弓形に出沒して、步行き／＼掬切に、刃形が上下に動く毎に、丈なす茅萱半ばから、凡そ一抱づゝさつくと、切れて、靡き伏して、隱れた土が步一步、飛々に顯れて、五尺三尺一尺づゝ、前途に渠を導くのである。
高坂は、悚然として思はず手を擧げ、嘗て婦が我に爲したる如く伏拜んで、粛然とした。
其の不意に立停つたのを、行惱んだと思つたらしい、花賣は輕く見返り、
「貴方、最う些とでございますよ。」
「何うぞ。」と云つた高坂は今更ながら言葉さへ謹んで、
「美女ヶ原に今も其花がありませうか。」
「何うも身に染むお話。何うぞ早くお後をお聞かせなさいまし、而して其の時、其の花はござんしたか。」
「花は全く有つたんですが、何時も然うやつて美女ヶ原へお出での事だから、御存じはないでせうか。」
「參りましたら、其の姉さんがなすつたやうに、一所にお探し申しませう。」
「それでも私は月の出るのを待ちますつもり、其の花籠にさへ一杯に成つたら、貴女は日一杯に歸るでせう。」
「否、いつも一人で往復爲ます時は、馴れて何とも思ひませんでございましたけれども、憖じお連が出來て見ますと、もう寂しくつて一人では歸られませんから、御一所にお歸りまでお待ち申しませう。其の代どうぞ花籠の方はお手傳ひ下さいましな。」
「そりや、云ふまでもありません。」
「而してまあ、甚麼處にございましたえ。」
「其こそ夢のやうだと、云ふのだらうと思ひます。路すがら、然うやつて、影のやうな障礙に出遇つて、今にも娘が血に染まつて、私は取つて殺されうと、幾度思つたか解りませんが、黄昏と思ふ時、其の美女ケ原といふのでせう。凡八町四方ばかりの間、扇の地紙のやうな形に、上にも下にも充滿の花です。
其まゝ二人で跪いて、娘が爲るやうに手を合せて拜りました。月が出ると、餘り容易い。つい目の前の芍藥の花の中に花片の形が變つて、眞紅なのが唯一輪。
採つて前髪に押頂いた時、私の頭を撫でながら、餘の嬉しさ。娘ははら／＼と落淚して、もう死ぬまで、此の心を忘れてはなりませんと、私の頭に插させようと爲ましたけれども、髮は結んで無いのですから、其處で娘が、自分の黑髮に插しました。人の簪の花に成つても、月影に色は眞紅だつたです。
母樣の御大病、一刻も早くと、直ぐに、美女ケ原を後に爲ました。
引返す時は、苦も無く、すら／＼と下りられて、早や曉の鷄の聲。
嬉しや人里も近いと思ふ、月が落ちて明方の闇を、向うから、洶々と四五人連、松明を擧げて近寄つた。人可懷しくいそ／＼寄るといづれも、屈竟な荒漢で。
中に一人、見た事の有る顏と、思ひ出した。黒髮が家に馬を繫いだ馬士で、其の馬士、二人の姿を見ると、遁がすなと突然、私を小脇に引抱へる、殘つた奴が三人四人で、えゝ！と

云ふ娘を手取足取。何處を奈何、何ぅ方角を何のくらゐ駈けたか窮然夢中です。

軈て氣が付くと、娘と二人で、大な座敷の片隅に、馬士交り七八人に取卷かれて坐つて居ました。

何百年か解らない古襖の正面、板の間のやうな床を背負つて、大胡坐で控へたのは、何と、鳴子の渡を仁王立で越した拔群な其の親仁で。

恍惚した小兒の顏を見ると、過日の四季の花染の袷をひたりと、目の前へ投げて寄越した、大口を開いて笑つた。

や、二人とも氣に入つた、坊主は兒に成れ、女は其の母に成れ、而して何時までも娑婆へ歸るな、と言つたんです。

娘は亂髪になつて、其の花を持つたまゝ、膝に手を置いて、首垂れて默つて居た。其の返事を聞く手段で有つたと見えて、私は二晩、土間の上へ、可恐しい高い屋根裏に釣つた、駕籠の中へ入れて釣されたんです。紙に乗せて、握飯を突込んでくれたけれど、其が食べられるもんですか。

垂から透して、土間へ焚火を爲たのは雪のやうな顏を照らされて、娘が縛られて居たのを見ましたが、其なり目が眩んで了つたです。どんと駕籠が土間に下りた時、中から五六疋鼠がちよろ〱と駈出したが、代に娘が入つて來ました。

薫の高い藥を嚙んで口移しに含められて、膝に抱かれたから、一生懸命に緊乎縋り着くと、背中へ廻つた手が空を撫でるやうで、娘は空蟬の殼かと見えて、唯た二晩がほどに、絲のやうに痩せたです。

最うお目に懸られぬ、あの花染のお小袖は記念に私に下さいまし。然し義理が有りますから、必ず恁麼處に隱家が有ると、町へ歸つても言ふのではありません、と蒼白い顏して言ひ聞かす中に、駕籠が舁がれて、うと〱と十四五町。

奥様、此處まで、と聲がして、駕籠が下りると、一人手を取つて私を外へ出しました。左右に土下座して、手を支いて居た中に馬士も居た。一人が背中に私を負ふと、娘は駕籠から出て見送つたが、顏に袖を當てゝ、長柄にはッと泣伏しました。其ッ限。」

高坂は聲も曇つて、

一私を負つた男は、村を離れ、川を越して、遙に鈴見の橋の袂に差置いて歸りましたが、此の男は啞と見えて、長い途に一言も物を言や爲ません。

私は死んだ者が蘇生つたやうに成つて、家へ歸りましたが、丁度全三月經つたです。

花を枕頭に差置くと、其の時も絶え入つて居た母は、呼吸を返して、それから日増に快くなつて、五年經つてから亡くなりました、魔隱に逢つた小兒が歸つた喜びの爲に、一旦本復を爲たのだと云ふ人も有りますが、私は、其の娘の取つてくれた藥草の功德だと思ふです。

それに就けても、恩人は、と思ふ。娘は山賊に捕はれた事を、小兒心にも知つて居たけれども堅く言付けられて歸つたから、其頃三ケ國横行の大賊が、つい私どもの隣の家へ入つた時も、何も言はないで默つて居ました。

けれども、それから足が附いて、二俣の奥、戸室の麓、岩で城を築いた山寺に、兇賊籠ると知れて、未だ邏卒といつた時分、捕方が多人數、隱家を取卷いた時、表門の眞只中へ、其の親仁だと言ひます六尺一つの丸裸體、脚絆を堅く、草鞋を引〆め、背中へ十文字に引背つた、四季の花染の熨斗目の紋着、振袖が颯と山颪に纏れる中に、女の黑髪がはら〱と零れて居た。

手に一條大身の槍を提げて、背負つた女房が死骸でなくば、死人の山を築く所、無理に手活の花に爲た、申譯の葬に、醫王山の美女ケ原、花の中に埋めて歸る。汝等見送つても命が無いぞと、近寄つたのを五六人、蹴散らして、ぱつと退く中を、衝と拔けると、岩を飛び、岩を飛んで、[illegible]に槍を杖いて岩角に隱れて、それなりけりと云ふので、爾時は、それからは私が其の娘に出逢ふ門出だつた誕生日に鈴見の橋の上まで來ては、此方を拜んで歸り歸りしたですが、母が亡くなりました翌年から、東京へ修行に參つて、國へ歸つたのは漸と昨年、[illegible]んで濟ました此の山へ、後を尋ねて上る事か、特に取紛れて居る中に、申譯も無い事、ただ[illegible]手な。

又其の藥を[illegible]かねばならないやうに成つたです。以前は其の爲に年少い女を一人、犠牲に爲たくらゐですから、今度は自分が甚麼辛苦も決して厭はない。いかにも爲て其の花が欲しいですから」

言ふ中に瞼が塞つて、涙を湛へた爲ばかりで無い、弗と、心付くと消えたやうに女の姿か見えないのは、草が深くなつた所爲であつた。

丈より高い茅萱を潜つて、肩で搔分け、頭で遮けつゝ、見えない人に、物言へ、懸ける術も無いので、高坂は御經を取つて押戴き、

山川險谷　幽邃所生
卉木藥草　大小諸樹
百穀苗稼　甘蔗葡萄
雨之所潤　無不豐足
乾地普洽　藥木並茂
其雲所出　一味之水

萑の中に日が射して、經卷に、蒼く月かと思ふ草の影が映つたが、見つゝ進む内に、ちらちらと紅來り、黃來り、紫去り、白過ぎて、蝶の戲るゝ風情して、偶に斑々と印したのは、はや吹交る四季の花。

忽然として天開け、身は雲に包まれて、妙なる薰袖を蔽ひ、唯見ると堆き雪の如く、眞白き中に、紅ちらめき、瞻むる瞳に綠映じて、颯と分れて一つ一つ、花片となり、葉となつて、美女ケ原の花は高坂の袂に匂ひ、胸に咲いた。

花賣は籠を下して、立休らうて居た。笠を脫いて、襟脚長く玉を伸べて、艶澤なる黑髮を高く結んだのに、何時の間にか一輪の小さな花を簪して居た、褄はづれ、袂の端、大輪の菊の色白き中に佇んで、高坂を待つて、莞爾と笑む、美しく氣高き面ざし、威ある瞳に屹と射られて、今まで語つた人とも覺えず、はつと思ふと學生は、既に身を忘れ、名を忘れて、唯九ツばかりの稚兒に成つた思ひであつた。

「さあ、お話に紛れて遲く來ましたから、もうお月樣が見えませう。其までにどうぞ手傳つて花籠につんで下さいまし。」

と男を賴るやうに言はれたけれども、高坂は却つて唯々として、恰も神に事ふるが如く、左に菊を折り、右に牡丹を折り、前に桔梗を摘み、後に朝顏を手繰つて、再び、鈴見の橋、鳴子の渡、畷の夕立、黑婆の生豆腐、白姥の燒茄子、牛車の天女、湯宿の月、山路の利鎌、賊の住家、戶室口の別を繰返して語りつゝ、軈て一巡した時、花籠は美しく滿たされたのである。

すると籠は、花ながら花の中に埋もれて消えた。

月影が射したから、伏拜んで、心を籠めて、透かし透かし見たけれども、見廻したけれども、見遣つたけれども、ものゝ蔭に[illegible]て仄に幻かと見ゆるばかり、[illegible]も[illegible]も紫も偏に夜の色に紛るゝのみ。

殆ど絕望して倒れようと爲た時、思ひ懸けず見ると、肩を並べて齊しく手を合せてすらりと立つた、其の黑髮の花唯一輪、紅なりけり月

の光に。

高坂が其の足許に平伏したのは言ふまでもなかつた。

其の時肩を落して、美女が手を取ると、取られて膝をずらして縋着いて、その帶のあたりに面を上げたのを、月を浴びて﨟長けた、優しい顏で熟と見て、少し頰を傾けると、髮が其方へはら〳〵となるのを、密と押へる手に、簪を拔いて、戰く醫學生の襟に挾んで、恍惚爲たが、瞳が動き、

「あゝ、お可懷しい。思ふお方の御病氣は屹度其で治ります。」

あはれ、高坂が緊乎と留めた手は徒に莖を摑んで、袂は空に、美女ケ原は咲滿ちたまゝ、ゆら〳〵と前へ出たやうに覺えて、人の姿は遠く成つた。

立つて追はうと爲ると、岩に牡丹の咲重なつて、白き象の大なる頭の如き頂へ、雲に入るやう衝と立つた時、一度其の鮮明な眉が見えたが、月に風無き野になんぬ。

高坂は撞と坐した。

緘く胸なる紅の一輪を栞に、傍の芍藥の花、方一尺なる經を据ゑて、合掌して、藥王品を夜もすがら。

## 逗子だより

明治三十五年八月

夜は、はや秋の螢なるべし、風に稻葉のそよぐ中を、影淡くはら〳〵とこぼるゝ状あはれなり。

月影は、夕顏のをかしく縋れる四ツ目垣一重隔てたる裏山の雜木の中よりさして、浴衣の袖に照添ふも風情なり。

山續きに石段高く、木下闇苔蒸したる岡の上に御堂あり、觀世音おはします、寺の名を觀藏院といふ。崖の下、葎生ひ茂りて、星影の晝も見ゆべくおどろ〳〵しければ、同宿の人たち渾名して龍ケ谷といふ。

店借の此の住居は、船越街道より右にだら〳〵のぼりの處にあれば、櫻ケ岡といふべくや。

これより、「爺や茶屋」「箱根」「原口の瀧」「南瓜軒」「下櫻山」を經て、倒富士田越橋の袂を行けば、直にボートを見、眞帆片帆を望む。

爺や茶屋は、翁ひとり居て、燒酎、油、蚊遣の類を鬻ぐ、故にいふ。

原口の瀧、いはれあり、去ぬる八日大雨の暗夜、十時を過ぎて春鴻子來る、俥より出づるに、顏の色慘しく濡れ濱りて、路なる大瀧恐しかりきと。

翌日、雨の晴間を海に行く、箱根のあたりに、砂道を横切りて、用水のちよろ〳〵と蟹の渡る處あり。雨に嵩增し流れたるを、平家の落人慘じき瀑と錯りけるなり。因りて名づく、又夜雨の瀧。

此瀧を過ぎて小一町、道のほとり、山の根の巖に清水滴り、三體の地藏尊を安置して、閣礎碣たり。戲れに箱根々々と呼びしが、人あり、櫻山に向ひ合へる池子山の奥、神武寺の邊より、萬兩の實の房やかに附いたるを一本得て歸りて、此草幹の高きこと一丈、蓋し百年以來のもの也と誇る、其のをのこ國訛にや、百年といふが百年々々と聞ゆるもをかしく、今は名所となりぬ。

嗚呼なる哉、吾等書痴してもあるべきを、かくてつれ〳〵を過すにこそ。

臺所より富士見ゆ。露の木槿ほの紅う、茅屋のあちこち黑き中に、狐火かとばかり灯の色沈みて、池子の麓砧打つ折から、妹がり行くらむ遠畔の在郷唄、盆過ぎてよりあはれさ更にまされり。

——鏡花全集卷十五より

# 白羽箭

## 竹子姫

一

「おゝ、吃驚した、まあ。」

「や、こりや、是は何うも、」と突當つたのが身を開いて、對手の女に二ッ三ッ續け樣にお辭儀をしたのは、浴衣だけれども角帶で商人風の分別盛、濫に狼狽へて、往來の者に打附りなどすべき人體か。人混雜でゞもあることか、會津若松の町端れ、名にし負ふ鶴の城の大手の趾が程近く、宵だが四邊に人もない、葉月の末の月夜である、而已ならず、當夜は全市に催しあり、場末だけれども、祭禮の時に齊しい、軒提灯さへ點してあるのに、怪しからざる周章やう。

「何うも、飛んだ粗相をいたしまして、申譯もありません、何處ぞお痛めなさりませんかな。」

「可うございますよ、否、ついあの唐突で驚きましたもんですから、大きな聲をして、何處も何ともございません。」

おとなし扮裝の容色佳、二十ばかりなのが内端に云つた。

此の騒ぎに其の連なる娘二人、關の戸を鎖されたやうに同時に傍に立留まつた。いづれも同一年紀頃の、一人は二ッばかり少からう、倶も品も打上つて、房々とある髮を高く、浮世繪の元祿島田を櫛卷に崩したやうな束髮で、其の艶かな緣の中にも、雪の如き手の指にも、燦々として輝く珠あり、銀河あからさまに流れたれば、水かと紛ふ地の上に、白き光に包まれて、月の中なる立姿。羅の廣も後れ毛も、唇も裳もそよ〳〵と、雲に駕したる風情である。知る是、鶴の城若松の城主、舊藩侍何某伯の息女竹子姫。附添つたのは侍女であつた。

姫に附添うて立つたのが、傍を離れて、突當られた朋輩の身近に寄り、只管疎忽を詫びて居る町人に、

「もし、あなた、何にお驚きなさいましたの。」

「へい、」と又小腰を屈めて、仰いで其の侍女の顏を見たが、目も据らず、きよと〳〵する。

前の娘が口を添へ、

「大層お急ぎのやうではございませんか。何うぞお構ひなく、何ともいたしはしませんから、」と云ひかけて、一寸襟を扱いたが、兩手の寂しいのに心付いて、內向いて足許を。落した團扇が仄白く砂描の繪に似たり。

「まあ、私、仰山な。」と袂を取つて、腕を清く伸して拾ふ、高島田が、男の帶のあたりへ下つたので、慌てゝ屈み、

「はッ私がお取り……。や、これは早や、何うも恐縮で。否、何、貴女樣、道を急ぎました次第では無いのでござりまして。」

「一寸、あの、」

前なるが、拾つた團扇で口を蔽ひ、退いて默つたにも關らず、後の小肥に肥つたのは、帶の幅廣く前へ出た。

「私は何か吃驚なすつて、其で駈出しておいでのやうに存じますが、」

「へい〳〵、」と揉手をし、對手が饒舌つて呉れるだけ、ものを云ひ好さゝうに口輕く、

「お察し通り、いや、案の定、怯られましてな、驚きましたの何のと申して、」

膝に兩手を下げたまゝ、半身を後に捻ぢ、又見返つた、須磨明石、薄靄のかゝつた鶴の城と、月の光の竹姫とを、角振分けて左瞻右瞻、

蝸牛は一竦みで、
「いやも、驚きましたの、何のと申して。」

## 二

「あなたお城の方から駈出しておいでぢやござ いませんか。辻斬か追剝にでもお逢ひなすつたやうな御様子でしたわ。」

お定といふ肥つた方、思ふ處あるらしく、仔細を聞きつゝ、是も透すやうに大手の松。松は城の濠端に、低く飛ぶ鵲に似て見えるのである。

町人は苦笑ひ、
「辻斬處ぢやございません。然やうなものなら何の恁う慌てるには及びませんので、地體、私一人で參つたではないでございます。」
「飛んで入らつしつたのはお三方のやうでしたね。」
「御意でござりまする。三人、然も宮相撲の關取が一人。はて、彼奴等」と、やう〳〵腰を上げ、腋の下の汗を懷から直に手拭をまはして拭いて、前後を眴すと、遙か彼方に、凸凹の石を見るやう、土塀に附着いて蹲める影あり。
「は、は、彼に見えます。もう一人、や、又彼に居りますわ。」

姫が佇んだ七八間後の方、軒の下に背を見せて、白の兵兒帶を長く、紺足袋、浴衣がけ、腕まくりで、纔三尺ばかりな處を、ぶらり〳〵、行つたり、來たり。
「助役さん、おい、役場の先生、」
此方を向くと、まともに月、此際、大にてれるから、知らぬ顏の半兵衛で、聞えぬ耳の丁助也。
「私ばかり、何うもこれは、」……向ひ直つて大峰に、
「おゝい、關取、いやも、賴母しからぬ、全體關取なぞは、最初一人で引受けるなんのと云つて置いて、いざと成ると、まあ、何といふ……、」
くるりと廻つて、
「助役先生!」
突當られた當人のお君といふのが笑止がり、
「まあ、可うございますよ。」
「可い段ではござりません。夜分御女中方に打附りなんぞいたして、いゝ年紀を仕りましてな。でござりまするが、此で私が未だ一番落着いて居りましたので、關取の怯かされやうと來ました日には、其こそ貴女様方に突當る處は通越して一倚抜けに向うへ飛んだでござります。役場の先生と來ちや、腰が脱けて、地を這つたでござりますで、お體には觸らずに濟みました。唯、私がもう面目次第もござりません。」と頻に繰言を云ふのである。
「さあ、皆、」と一聲、胸を斜に、身を横に、指環に、簪に、黄金鎖に、月の光を颯と一浴び、姫は前途に立直る。
「姫様、」とお君が留めた。
お定會釋して、
「少々、何でございますから、一寸お待ち遊ばしまし。あの、お前さん、お城の方で、何にお驚きなすつたのよ。」
「いやもう、何? 處ぢやございません。其のな、今一足で御門へ入らうといたします、石垣の曲り角で、背後から出ましてな。」
「えゝ、」と、お君は口に犇と團扇を當てた。
「關取が眞中に居りました、其のな、三人が並びました中を通抜けますまでは普通の女でございました。
大の男が三人でさへ、誰ぢや、彼ぢや、瀬踏の押附合だに、女が何と日が暮れて、と思ふ間もなかつたでござります。
いゝ、ずツと前方へ行き抜けて、草の中に立ちましたつけ、屹と振返つて私どもをぢつと見ましてな、」
又もや不氣味さうに背後を見たが、

「えゝ、げら〳〵と笑ひました。
いや其癖の異變な、凄いことゝ申したら、何ともはや、幅が何のくらゐござりましたか、體を引包んで緊めつけるやうでな、耳へぶんと來て天窓へぐわん、」
と町人頭を引込ませ、胸を反しながら腦天へ手をぴたりと當てる。

三

「何が何やら、唯もう夢中で驅出して參つたでござります。」
一目見ても推量の出來る、竹姫の風采に、言はずとも其と悟つたから、侍女にもついふのだけれども、然も、はッ恐れながら、凡て申上げ奉る調子であつた。仔細を聞くや否や、ぎよつとして、二人は顏を見合せた、お定が、
「まあ、何でございます、あなた、其の女といふのは、」
「然れば、解せませぬてい。」
と眞面目。
「皆さん、お三人とも御覽なすつたんですか。」
「見ましてございませうとも。おゝい、」と再び前後を呼ぶ。
「可うございますよ。」
「失禮何處のか、女房さんなんですか、」とお君は寄添つて細い聲。
「でござりませうなあ、」とばかり間の拔けると夥しい。
お君は町人の其の顏を、差覗くやうにして、
「何處のおかみさんでございませうねえ。」
「ございますかな。何處かのおかみさんでございますかな？」
「然うですね、」
言が途絶えると、ボーンと鐘。
お定も薄氣味が惡さうに、
「何うしたと言ふんでせう。」
「何でござりますよ。別に八百屋のかみさんと申すわけではありませず、質屋の御新造でもござりますまいに因つて、いづれな、變なものでござりますかな。」
「おばけですか。」とお君は、團扇に風が籠つて、わな〳〵。
「一寸々々そんな人に會つた者が有るのでせうか。」
「別にな、誰がと申して見たと言ふもないでござりますが、一體よくお濠へ落ちましては人が死にまするで、中には覺悟をした投身も多くございますが、何と云ふ事なしに、お宮參詣の婦人が貴女、三枚襲の紋着で、濠端を通りますと、土手の草が裾を引きましたやうに、する〳〵と落ちまして、唯お濠の水の上へ横になりましただけ。
眞晝間、人通りはござりませなんだが、多勢伴が附いて居りましたで、あッといふと直に引き上げました。沈む間さへございませぬ、紅も流れず、白粉も綺麗なまゝで、最う彼の世へ參つたことがございます。
一時は、此の大手下を豆腐屋が通りかゝりますと、石垣の中から、草刈が一人、蛇に追はれたやうに逃げ出して來まして、躍上るやうに飛んで落ちて亡なりました。年々人の損じますのが、十人下なことはござりませんので、此頃ぢや、もう草も生えた次第、何だつて誰も入るものは無いでござります。」
「厭ですねえ。」
「厭ねえ。」
「はい。」
「行かうよ、さあ、出かけようね。」と竹姫は聞かぬ態、心にかゝることは無い樣で、敢てものともし給はず。
其の御袖に引附けられ、二人は左右へ摺寄つた、が、お定は躊躇るが如くにしつゝ、
「一寸、一寸、そんな恐い處へ、あなた方、構

はないで出掛けたんですか。」
「それは、もし然うでございます。えゝ、今度、伯爵家お姫樣が、」

氣を兼ねたか、口籠つて、

「はい。はじめて當會津へ御入國遊ばしましたに就いて、あなた樣方も御存じの通り、市中殘らず、提灯を點けまする、旗を出しまする、花火は揚げまする、催事やら、造物やら、十年以來の賑でございまするが、私どもも又唯ほんの心ばかり。」

# 謹上再拜

## 四

「手前佐野屋喜平と申しまする、御城下の小商賈でございまして、懇に仕りまする者どもと相談をいたしましたが、何や彼と申さうより、豫て寄合うて修行いたしまする弓術の會を一ツ、盛に催しまして、蔭ながら姫樣御入國をお祝ひ申上げませう、と大町の綺遊軒と申すので三日間な。いやもう、嗚呼がましうござりますが、其の繁昌なこと。武は盛なお國柄、弓矢の道は唯今以て廢りません。舊藩士の方々は別といたし、唯我々平の町人百姓だけも、四五十人は集りまして、一昨日から押通し、手ン手が矢數一千も仕りましたが、いやはや、其の。

平生運動がてら、尺的を、ぽんと射拔きますやうなわけには參りません。あづちが蜂の巣に成りましても、射割の板は曲みもしませんで、吹出しさうな顏をして居ります。

あぐねましてな、倒れるやら、寢るやら、大概ぐツたりと、筋が弛んでしまひました。丁ど晩方でございますが、戸外に立つた見物の中から、二十四五の痩形な、脊のすらりとした、色の淺黑い、眉の濃い、目に美しい光のある、小瀟洒した書生體の人物が、麥藁帽子を取りながら入つて見えて、諸方も失禮ですが、一本と云つて、客弓の、三分五厘重籐といふのをビーン。

矢筒を引寄せて、片肌脱ぎに身構へました、射前の見事さ。けれども何、飛入の外矢、何程の事があらうと見て居りますと、やがて番へて、キリ／＼と引絞りましたが、そりやこそ砂が立つと思ふと、何うでございませう、カチリと音がして、射割が、ばツ／＼と消えましたわ。

やんやと申す内に、立續けに五枚割りまして、悠々と膚を入れて、あつけに取られました、帳場へ挨拶をいたしますと、」

佐野屋は胸を引合せ、

「然う其の衣紋を直しまして、凜々しい好い男子でございます、帽子も被らず、抱へながらフイ、と出て行くでございます、扨こそ。

何とか云ふ槍の先生は、夜中に裏庭で二間柄をりう／＼と扱いて居ると、穗尖へ女の生首が喰附きましたとか申す事、ものは氣で魔がさします、尋常ごとではあるまい、何處で消えるか跟けて見い。

合點だと申しまして、町消防夫のおききばしり、駈出しの勘次といふ筒先が飛んで行きましたつけ。やがて目の色を赤くして駈けて歸り、大變々々、途中から帽子を深くして、靜々歸るのを、見隱れについて行くと、お城の中へ入つて、石垣のかげにかくれる、日が暮れた、と大息を吐いてございます。

そりやこそ御維新の時分鬼と呼ばれた會津の大將の、若い倅そツくりだつたと云ふ老人もございますれば、彼に居ります、役場の助役なぞは、宇賀神堂の白虎隊の木像、何番めかに、寸分違はぬのが有ると申します。

又つい先頃、連中が射藝上達の祈願を籠めまして、白木の弓に白羽の矢を野郎構の摩利支

天拿天に奉納を仕りました事もござりまする、何につけても弓矢神の御感應、追かけて拜み申せと、直に參るつもりにはいたしましたなれども、右の人とりが附いたお城でござりますで、第一手前二の足でござりました。
　然うすると、何うでござります。四斗樽が手を出したやうな、ヤ、奇代な手附をして、此方を招いて居りまする、あれ、何うでござります、やれ、やれ、やれ、」
「晦々々。」姬は心易げに、闇取の影法師を見て微笑み給へり。侍女たちはそれ處か。

五

一奴、大町の米屋の信州者で、小力がござります。矢張龜遊軒の連中でござりましてな、胸を突出して、どんと來い、何でも此處で應へて見せる。私が附いて居れば、根こそげ城が飛ついても恐いことはごんせぬえ、などゝ申します處から、好事な助役と三人、たうとう出掛けましてござりますが、途中で灯が點きまして、此處を通りました時分、もう月夜になつたでござります、はい。
　いよ〳〵お城の石垣の中へ踏込まうといたしますと、前申しました通り、瀬踏を讓り合つて居ります中に、右の、すうと顯れて、すらりと立つて、げら〳〵でござりませう。いやもう、お話し申すさへ寒氣がいたしまする。」語り果てると、ついで出すべき言も無けに、月の影とともに白け返つて默然と成る。
　唐突にはついいいくしよい。
「ほい。」と妙な顏をして、むぐ〳〵とやつて、落着いた口に手をあてゝ、
「はツくしよい。」
けろりとして、佐野屋喜平。
「えゝ、而して貴女樣方は、これから何方へかお納涼でござりますかな。」
お定が折を得たりと云ふ見得で、
「納涼に入らつしやらうとおつしやるんですかね、姬樣、」と密とお顏を見て大いに諫めむと欲する處あるものゝ如し。
　姬は耳にも入れ給はず、霞の風に靡くが如く、はら〳〵と五足六足、佐野屋の身近に、其の近優りする姿を寄せ、頷くやうに頭を下げて、
「然やうなら、難有う。」
「はーツ。」
　恐入つて佐野屋、斑兀の彼方此方、一兀百兩の分別と、自ら稱する、通計五百兩の天窓惜氣もなう、爪尖を手で握らむばかり、魂が腰に据わつて、帶の結目が、ぴんと撥ねる。
「おいでな」と潔く、言放つが如くに遊ばし、おくれ毛を、吹かせながら、內端に輕き雪駄の音。
　はや五六間露の上に、羅淡く進み給へば、それとお定。
　後れてお君が、團扇の柄を固く取つて、追ひ續いて、お定に縋りつき、小さな聲で、
「一寸、矢張、何うしてもお城へおいで遊ばすの。」
「は、ですからね。」
　お定は少し急き調子、
「姬樣、姬樣。」
　下界の天女は靄の中から鶴ケ城の大手道、見通の廣場をずん〳〵。恰も艷ある雲を渡つて、次第に近く、城の松の梢に上るかと怪まるゝ。一歩が一町も後るゝやうに、侍女はあせつて、喘ぎながら追附いたが、はやくも草の露褄に溢れて、濠は渾沌として一帶石垣を浸して暗い。
「何よ？　大きな聲をして、人が出て見るわ。」
　呼ぶのを聞流して竹御潛、はじめて立停まつて制し給へり。
「人ツ子一人居りはいたしません。姬樣、お內家を出ます時から、私どもが申上げましてございますが、お危うございますから、お見合せ

遊ばしませんか、ねえ、お君さん。」
—然うですともね、誰も参りません處へ、夜分お出で遊ばして、どんな間違がございませんとも限りません、不意に突當られましたばかりでも、私はまあ、どんなに吃驚いたしましてございませう。」
見返れば遙か眞直に隔つて、此折から助役と云ふのも、關取も、佐野屋と一所に成つたと見え、ちら／＼月の影燈籠、黑き人影動きつゝ、同一處を立去らず、姫を憂慮ふ氣勢である。

## 六

お定それと心付き、
「まつたくでございますよ。お君さんだつて、宿を出ます時は、こんなお月夜に、どう間違ひましたつて、人に突當られようとは思ひがけもいたしません。
それでございますから、ひよつとした事で、又どんな間違が無いとも申されませんし、あれが町中でございましたから吃驚しただけで、濟みましたやうなものゝ、もしか姫様、恐しい噂のございます、お城で御覧なさいまし、目をまはさないでは濟みませんではございませんか。ねえ、お君さん。」
—はあ、然うですとも。」と云ふ中も震へて居る。
「それに三太夫様なり、誰方か、男の方がお供でもいたして居りますれば、未だしもでございますが、」
未だ言ひも終らぬに、
「あゝ、お前たちを連れて行かうと言ひはしないよ、安心おしな。」
と姫は莞爾。
お定目を圓くして、
「ですけれども、」
「ねえ、お定さん、」
「否、いゝえ、頼んだつて連れて行きやしませんよ、直ね、」
姫は愛々しく打傾き、
—直私歸つて來るから、二人して此處に待つておいで。そんな臆病な者と一所に入ると、風が吹いても倒れさうよ。まあ、お君、お前震へておいでだね、確乎おしよ、何だねえ、小兒見たやうな。」
—私は、私は宜しいのでございます。姫様が、」
—何ともありやしないわ。ね、お定も可いかい、直歸るから、お君、お前、其の團扇をお貸しよ。」
—はい、」
—蟲が集ると煩いから。」
姫はお君の手から參らせた團扇の柄を、口に銜へてうつむいて、眉を曲げて後毛を掻上げ給ふ。
東京なる御館の庭を漫歩きの、道をめぐつて築山にかゝらせ給ふと敢て違はぬ氣色を見て、お定是はと、あきらめながら推返して、
「姫様、それに、あの、姫様は東京でお生れ遊ばし、今年お十八で、はじめて此方へおいでなさいましたのでございますから、些ともお城の中の御樣子を御存じではございますまい。井戸やら、釘やら、あの、燒跡へたつて、うつかり入るものぢやないと申しますのに、夜分ではございますし、」
—月夜ぢやないか。」と、澄して松ケ枝を御覧ずる。
—ですが、お城趾でございますもの、空井戸や、拔穴やら、錆びましても刀の折れたのなんか、どんな處に落ちて居りませんとも限りません。」
「私ね、繪圖面でよく拜見して、本丸の處、二の丸の處、お濠のやうすも、お炊場のことも、井戸のある場所だの、お天守のあつた處、誰が何處で討死をなすつたと云ふ事もね、あの何とかいふ奧女中が、可哀さうに身體を洗つたまゝ

見えなくなつたといふね、」

二人又ぎよつとする。

「湯殿のあつた處まで、皆知つて居ますよ、此の團扇でかうやつて、」

薄は右へ葉、左へ穗。

「草を分けて行くんだよ。」と直に蓮歩を移さるる。

「あれ。姫樣。」

「お君さん、こんな時に、秋山さんのお孃さんが居て下さると可いんですね、あの方だと、どうにかしてお止め申し上げるんだけれど。」

「眞實ね。」と熟々云つた。

「全くよ、今夜は音樂會があつて行つて在らつしやるんだもの、市長さんなんかもお孃さんのヴァイオリンを聞きにおいでなすつたと云ふのに、姫樣も行らつしやれば可いぢやあないかね、おや、どうしよう、ずん／＼おいで遊ばすよ、あれ、お君さん何うしようね。」

## 草の灯

### 七

湯川の瀬の音、松の聲、摩利支天の森の下を、石佛堂に並んで二人、漏洩る月に影を投げて、風に樹の葉の搖るゝとともに、ぶら／＼歩行の野良調子。

「やあこれ、主や大分長い事拜んで居たが何を願うたぞよ。」

「言はいでも知れたことんし、大願成就だ。」

「金持に成りたいかの。」

「まゝ、そんなもんぢや。だがの多十、」

「やあ、」

「金子は欲しいけんど、私何も金持さ成りたくはねえことんし。」

多十なるもの頷いて、

「知れた、知れた。はあ主が大願ちふは、東山の女が事だつぺや。」

「すんと、胸ぢや。」と前はだけの胸を叩いて見せて、肩にかけた手拭の端をなぶる。在方の息子風、腰に一挺の尺八を筈高にさして居る。

岩代國のお百姓、かや／＼と打笑ひ、

「措けちや、彼は新妓で全盛ぢや。角を握つて暴牛をおさへればとッても、主等が手に合ふことでは無いの。其にの、お互に、在所の名が觀母しくないことよの。野郎がまへと云ふでねえか。なあ、これ、野郎がまへと云へば、野郎さおかまひと云ふことぢや、女ッ兒は寄つかねえと、天道樣おつしやりつけだ。それよりは、やあ、三吉。」

「何だのし。」

「手近な處で、出來べい相談があるに違はねえか。」

「主が相談は何時も出來ぬことに極つて居るわし、大方又何だつぺい、西瓜のたねを銀貨にするちふ事だつぺい、主、じやうだんものだあ。」

「おッと言はぬ事、犬の兒だ、」

と暗い中を潜つて出て、

「そりや、境内を出れば、もう、其の内へ入るも同一ぢや、其處な茶店のお房ッ兒よ。」

「それ見さい。」

「はゝはゝ、これ、見さい、さいて見りよ。」と多十、居合腰になつて、肩を立て、體を斜めに槍を撥ねて、三間柄を下段の搆勢、無手で島田の眞似をして、凝と見込む。

舞臺棒なら尖の叫きさうな間近な處、此の御堂は場末の町から湯川に添ひ、野良畷を通つて、温泉の勝區東山に行く、途中・町ばかり引込んで、淺いが森の中に在り。左右は田圃で、北の方遠く飯盛山の裾に展けた、折から月の、中空に、黒雲を捲上げて、鮮の色銀の如き一條の龍の、蟠るは、城の搦手なる樹立の中に高く殘つた石垣の名殘である。西の畠を後に控へ、

て、露も星も見え透いた葭簀囲、灯影薄の穗に映り、葉は翠に、根は黒く、破れた岐阜提灯のやうな小屋は、あはれな娘の掛茶屋であつた。

多十ヤツと氣合を入れ、

「はて、わけなしの、忝し、寢鳥を刺いて取るやうなもんぢやが、なあ、三吉、主が云ふ通り出來ぬ相談、西瓜の種でしよことがないかい。」

「駄目なことんし。」

「それにしても好え容色ぢや、これはあ、主が前だが、東山の新妓さが鐵削斗をしても追つかねえだよ。」

「如才も無ア癖に何だとえ。越後もので無えだで、角兵衛はせぬとこと。」

「吐かす！」と黄な口を開けて笑ひ、多十腰を伸して、づいと立つたが、わあーと、しツこしの無い鶩の聲がぼやけて、思はず背後へ一足退く。

足許の土から湧いて出たやうに、土とすれすれ、ちよろ〳〵と白きものあり。

「何だつぺいや。」

三吉腰なる尺八を拔いて、追取刀、うつむいて透して見て、

「犬ころ、ころ、ころ、犬の兒だんし。」

## 八

「見さい、あれ向うの松の樹の根ツこの處さ、いかい事ころ〳〵して、眞桑瓜が轉がつたやうでねえか。」

多十も及腰に瞻つて、

「はあ、矢張犬ころだア、はてな。此の節の不景氣で、皆持つて來て棄てるづらあ。」

「人間の棄てられたのも居る處ぢやで、犬ころを放すにも、丁ど可かつぺいことんし。」

と少いに悟つをことを云ふ。

「惜い別嬪だに、内密でお房ッ子の店さ休まうで無アか。男知らずに、もう今年は二十を越したつぺ。對手欲しかつぺいことは、主とかはりはあんめえと思ふだがね。」

「言はづしやることよ。」

「その上、今年の春は一人のおふくろを亡くしたで、嘸心細く寂しいことだつぺ、そりや此の、」

と多十薄を握つて、末の露を額に押當て、

「觸らばこぼるゝ風情なりけりと言はあ。主唄の文句で知つて居べい。處で主さ尺八の吹ける藝人といふもんだで、むかうから袖を引くことよ。其代にゆで玉子を二ツ取つて、ラムネを飲んで、主が其の賄をするだぞ。」

「御造作でござりますだ。」

「はゝは、駄目べい言はねえで、内證で遊ぶべいよ、誰も來はせぬ、心配は無アと思ふ。」

「措けちや、措けちや、」

三吉些と歩を早うし、

「お房ッ子が許さ、腰をかけて、ひよつとか知れべいなら、會津中に附合人の無くなる事さ、主知つて居べい。それにはあ疾うにから、ならずもの、權太めが、内々手に入れて居るちふだぞ。何方も人外だで、似合だつぺいよ。たア多十。」

「然ればよ、お房つ子は知んねえが、野郎が方さ血眼で附き絡ふといふだ、床の間に活けようなら、金屏風の座敷で觀められる綺麗な枝でも、掃だめに捨てゝ置きや、蛆や蠅も一所だアさ。どのやうに嫌うても、他にかまひ人がねえ事なら、終には口說き倒されべい。」

と次第に聲低く、やがて口を噤んだが、掛茶屋の前である。

「そりや掃溜ぢや。」

「鼻を撮むべい。」

「然うはせぬことんし、罪になるだ、」

とこそ〳〵、件の松の根に近う、店頭を向うに避けて、通りがゝりに、多十褒貶氣で捨世辭

をいふ。
「今晩は。」
「や、默らつせえ。」と傍から制したが、はやくも娘の耳に入つた。
お房は中形の浴衣に、なえた黒繻子と唐縮緬の腹合せの帯、前垂の淺黄の紐、これだけ新しいのを低くしめて、すなほな艶のある黒髪を、緩くは銀杏返、燈火を少し離れて、道を行くものゝ目に背いて、くの字に端近く床几に掛けたが、黄楊の櫛も人柄で、茶店の娘さんと言はうより、少き女房が浮身を窶した水仕奉公の逐あり。紅と青とに繼ぎ足した、交りの襷を上から返して、土間にくるりと轉がつた、眞白な小犬の、大窓で土を捏ねてじやれる手を、内向いて、あやして居たが、多十の聲に半身で此方に向き、
「お掛けやすいな。」と柔に優しくいつた。多十思はず小鼻の皺を寛くのばし、ニヤリとして、
「はあ、休めといふだかね。」
「お休みなさいましな。」
「そんなら、休めだ、やあ、三吉。」
「行くべい、行くべい、」と三吉すねたやうな身振なり。
「待ちなさろ、まあ、可えといふに。」
多十は低聲の屆くやうに、伸上つてお房を見た。

## 九

「姉さん、己はあ、何もお前さ、愢うといつて、別の仔細もねえだけんど、世間體があるでや、連の者も店さ休むことは嫌だちふげに、今度來て寄りますべい。」
面と向つて愢るかけかまひのない差合を、お房は豫て覺悟をするまでに、斷念めて居るのであつた。
「次に來ておくれやすえ。」と寂しい顏で莞爾する。
薄の中の女郎花、嵩らぬ姿の捨て難さ。多十其のまゝには立上り兼ねたが、三吉に袂を引かれながら、踏留まつて、眞向に手を擴げた奴凧。
「なう姉え、茶一ツくれさつせえ、舌を濡らして行きますべい。やあ、お造作だが、此處へ持つて來てくんなさろ。」
「あい、」と靜に襷を差置き、小犬がちよつかいに出した小さな前足を、上から手鞠を突くやうに押へたが、土瓶から淙々と、松の根際へ出前の番茶。些と大ぶりな茶碗に注いで、盆に乘せ、帯に挾んだ手拭の端を、まさぐりながら、藁草履でしと／＼と、灯を離れると月影に、透通るまで色白な、襟の纖が照らされた。
「澤山おかはりをしなさいましよ。」と、しとやかに差出すのを、宙で大づかみに取らうとした、近頃の殘暑のため、干破れたやうな多十の手が、茶碗に觸れると、殆ど同時に、
「えゝ、措けッちやあ、汚れるといふに。」と三吉が横ざまに拂つた掌、辷つてお房の二の腕を礑と打つ。齊しく眉を顰めたが、盆は手を放れて、茶碗はバッタリ。
「あれ、」と留めようとした指尖を、其まゝお房は土に支いて蹲つた。
「よう、」と吃驚、多十は斜違に飛退つて、松の枝に片手をかけ、足にかぶさつた茶を、ひかゞみにぐいと擦りつけて、
「はッ魂消た、何をする。」
「私等、我等はア御國さのために兵隊になるだアぞ。こんなものを飲むと汚れるだ。」
づいと立はだかつて力んだが、月に隈なく、明かに三ツに破れた、茶碗を見ると、三吉も遂巡、袂を口に立ちも上らず、ものも言はず、お房の湮くんだいぢらしさに、遣瀬がなく大情氣で、

「フム、」といつたまゝ茫然となつたか、四邊を見廻し、じり／＼逆足、

「お城のお化ぢや、そりや出た！」と呼はりざま、身を飜して街道の方へ、ばた／＼と驅け出す後から、

「已吉やい、待ア、待ア。」

多十も續いて一目散。

彼方からも此方からも、ちよろ／＼と二匹三匹、慌忙な月の影、綺麗な斑あり、白あり、黑あり、尾を揮つて、くう／＼／＼。

膝に濡手をかけた一頭を、お房は袖でしつかり抱く。

暫時一人が見えなくなつた、堂から、正面の路の中へ、街と立出でた佇姿。こゝに人ありと見たらしく、跫音輕くつか／＼と間近く寄つた。

根上りの圓髷小形に品よく、白襟で、質素な越後上布、唐繻子の黑の丸帯で、裙短にきりゝとして、灰汁も色氣も拔けたる風采、眉を拂つて鐵漿を含んだ、臉の腫ぼつたい、目の涼い、鼻筋の通つた、丸顔ながら引締つて何處にか品のある中肉中背、古風の顔の造であるから、年紀のほど定ならず。急いで來て立留まると、ふと風が止んだので、水色縮緬の扱帯の下に、ぐツとさし込んだ、冬扇を、覺悟の懐劍拔かうとする時、人の氣勢に身を起したお房と顔を合せたのである。

十

草葉に繁く袖に沿く、目に一杯の露ながら、お房は懐しげに摺寄つて、

「おかみさん。」

「おゝ、お房さん。」

「まあ、おいツくりやしたなア、」と待ちかまへて居た様子である。

「町は賑だね、まるでお祭のやうな騒だもんだから、つい小兒見たやうに、ぶら／＼彼處此處見て歩行いて、田舍ものぢやないか。あゝ、其で遲くなつたんです。大層待たせたね。何ね、こんなに長く成るなら歸りには寄らない分に言つて行けば可かつたと思つたよ。」

「どれほど遲うても可う來ておくれやしたこと。」

「よく、未だ店をして居たねえ、而して待遠くつて、戸外へ出て居たのかい。」

悄然した風情を見て、直にソレと、破れた茶碗に目を着けて、

「まあ、お前涙ぐんで。又何か言はれたんでせう。然うだらう。」

と頷く如く、

「今來ようとすると、突然に二人、村の者が此方から飛んで來て、打突りさうにして驅け出して行つたもの。何だね、いつもいふ通り、亭主にしようとも、兄にしようとも思はない者に、何をいはれたつて構ふことはないぢやないか。お房さん。」

強くいつたが、

「しかし亂暴をされちや打棄つて置かれないね。其の茶碗は何うしたの、こんな處まで持出して、松の樹で缺いたんですか。」

「あの若い衆が通りやしてな、今晩は、と聲を掛けなはつたから、休んでおいでやすというたらなア。」

「然うすると、」

「傍へ行て腰をかけたら身體が汚れる因つて、茶を此處へくれ、言やはるで、持つて出ると、一人の方が取つて呑まうしやはつた處を、汚れる言うて、もう一人が、私の手を叩きやしたで、」と、ぢつと堪へて涙をはら／＼。

女房默つて聞いて居たが、瞳を寄せて街道の方を視め、

「お房さん、まあ入つて掛けようぢやないか、種々話もある。えゝ、お前、そんなものは打棄つてお置き。」

「でも、こなひだ、おかみはんが買うておくれやして、五ッ揃うて居るのやし。」

―可いよ、打棄つてお置きよ。あゝ、よッとしよ。ほゝほ、もう年を取ると、一々此の掛聲だよ、厭だねえ、―

尋常に腰をかけ、女房襟を寛げながら、

―おゝ、涼しい、何時もお前ん許は寒いくらゐだよ、もう蟲が鳴くだらう。」

「鈴蟲が鳴きますぜ。」

―可いことね。あら、御覽、またお友達が殖えたぢやないか。まあ、ころ／＼やつて、白や、―

くうと鳴く。

―そんなに巫山戯ると踏まれるよ。可愛いねえ、幾つ居るの。」

―五ッになりましたわな。―

いそ／＼膝をついて縁臺の下を覗く。

―お房さんお構ひでない。然う、五ッなんて居たつかね、それぢや一ッ茶碗が破れたつて何でもないよ。」

女房は帯の間から、御殿持の煙草入、思ふ處あるらしく、目を瞑つて、稍仰向き、胸の邊で、手さぐりに筒を外す、床几にかけた毛氈も、煙管の銀に花やかである。

其處へ差寄せた煙草盆で、無言で點けると手許に引き、持返して輕く一ツ、トンと火皿の灰を落す、廂をはら／＼と露の音。

女房は差覗いて、松の梢に颯々として、流るゝ如き銀河を見た。

―秋ぢやないかね。」

## 松毬

## 十一

日暮陰風吹鐵衣
孤軍轉鬪陷重圍

―お房さん。―

―無え、おかみはん、お草臥れ、此方へお上りやしてお休みやすな、―とお房は古毛氈の端を引張る。

女房は心隈に一服を味ひながら、松風に耳を傾けると、吟詩の聲が近いて、

匣中白骨行應朽
樓上紅粧尙思歸

―お聞き、誰か來るやうだね。―

―良いお月夜だす因つて、書生さんが、ぶらぶら歩かしやはるのだつせ、今に來やはりますやろ、おかみはん、あんな唄お好きだすの？―

―何ね、好も嫌もないけれど……―

いひかけて打案じ、

「お房さん、書生さんでも何でも可い、此處を通つたら聲をおかけよ。何時のやうに寄らないでも大事ない、一體どんな事をいふんだか、私が一ッ隱れて居て聞いて見るから、―

―お止しやす。お聞きやしたらお氣に障りますせ。私もう何も思やしやせんもの。」

「まあ、お前おかまひでない。否ね、何うせ分つて居る事だけれど、わざ／＼路傍へ呼出して、盆ごと打敲いて茶碗を壞すなんて、憎いことをされちや私が默つて居られない、あのね、一寸、」

―何え。」

―其處の戸は明いて居るかい、」と目で知らして、うつむいて吸殻を輕く掃いた。

葦簀の横に附着いて、隣へは古びた繪馬堂の如き、此の掛茶屋の母屋がある、月下に暗く戸を鎖して、店の燈は其處まで届かず、喪服で包んだ家の如きは、長く煩つたお房の母、世を去つて幾時も經ないのであつた。

煙草入を早く了ひ、すッと立ち、

―お房さん團扇を、―ね、蚊が居るやうね、あゝ可し、扇がありました。」と靜に胸をおさへて云つた。

「蚤が居まつせいな、おかみはん、私の事なら打棄つて置いておくれやす、お氣の毒でなりやせんえ。」

「可いよ、そしてね、何かいつたら、構はず言ひかへしてお遣り、背後に母さんが附いて居ると思つて、氣丈夫に、分つたかい。」

再び耳を傾けたが、

「來るよ、」と云つて、薄の蔭、白い穗にならんだ人の、黑髮も顏も隱れる。

間もなく日和下駄を蹈んで來る音、露にしッとりとした地に、近々と早や此處へ。

お房は柱の竹に片手をかけ、袖を取つて、姿を半ば露して、便りなげに待つて居た。松の下行く男の影。

それと見て內端に呼ぶ。

「お掛けやす、お掛けやすいな。」

其の人首を低れ腕を拱き、玆に茶屋ありと知らずに居たらう、呼ばれてはじめて心付いた趣で、立停まると、振返り、左右を見て、つかつかと步を轉じ、燈を慕つて來ようとする、路の中で前のめり、

「や、」と手を擴げて、ぢつと見て、呟く如く語るが如く、

「犬の兒だ、犬の兒だ。」

「休んでおいでやす。」

「涼しいな。」

と云ひながら、麥藁帽を脫いで持ち、猶豫ふ色なくずツと入つた。

休むと汚れるとさへいふ店に、近頃異數な擧生客。濃い飛白に扱き帶して、素足に日和下駄。色の淺黑い鼻筋の通つた、眉の濃い、品の可い、脊のすらりと高いのが、眼に星の光あり。

## 十二

客は床几の眞只中、正面に遮るものゝない稻田の空に、仄なる石垣の名殘を望んで、

「彼處に見えるのは、あれは若松の城だらうか。」と秀でた眉を顰めたが、穩ならぬ色があつた。お房は何の氣もつかず、

「はあ、お城だすえ。」

「然うか。」

とばかり默つて了ふ。

「あの、お茶一ツおあがりやす。」

「……。」

繼穗なさゝうに、

「もしな、」と云つて、捧げ出した澁茶一碗、又たゝき落されようか、彈飛されでもしようかと、さつきの今で、お房はおど〳〵。

それでも返事をしなかつた。客は目が覺めたやうに、額を上げて、まともに見たので面を背ける、お房の袖にも小犬の背にも、はら〳〵と松の影、流るゝばかりの露を留めず、簀の子の天井を洩る月は、濡れ色の艷かな女の髮に染むのである。

客はあはれにしをらしく、はじめて知つて茶碗を受けたが、口はつけず差置いて、

「酒はあるかね、姉さん。」

「は、御酒だすか。」

「むゝ、酒だ。」

お房は取附の棚に五六本、貼紙は正宗とした罎が、マッチの箱と並んだのを指して、

「彼で可うございますならお飮りやす、おいしうおすか何うだすやろ、」たよりなさうに云ふのであつた。

棚を見込むと田の風の吹通して、埃は溜つても居ないらしいが、松の葉越しの月が射すだけ、日の經つたのは知れるのであつた。

「可からう、早速一杯。何、姉さん、猪口が見當らなけりや茶碗で構はん、出しておくれ、澁けりや冷で遣つけよう、飮口が宜かつたら燗をして頂くとする、どれ。むゝ、結構に行ける、面倒だが突込んで貰はうか、其ね、口についた

封じ紙をよく剝してくれ給へ、然うだ、湯氣でべろりと糊がはがれると、難儀だからな。」

「何うだすえ、熱いのが可うおすか。」

と罎をつけた鐵瓶の肌を、やさしい手で兩方から壓へる仕種を見て、馴れないのを知つたか、氣の毒さうに、

「いや、可い時分に僕が出さう、手を伸せば譯なしだ、可し、可し。」

お房は優しい目のふちに皺を寄せて、眩しらしく客を見上げ、

「ようしておくれやす、私不束だすな、お氣の毒や。」

「いや、宜しい、按配う段取が出來た處で、何か肴はあるまいか。」

「何も旨いものはおざいやせんけれど、鷄卵の湯煎にしたの、何うだすやろ。」

「茹鷄卵か。」

「然うだつせ、地鷄卵で新しいのだすえ。」

「妙々、其を五ツ六ツ、出しておくれ、鹽はあるか、占めたな。」

盆を手許に引寄せた、客は足を擧げて床几に落着き、罎を取つて自ら注ぐと、下にも置かず、ぐつと干した。

「上出來、而して又なか〳〵名酒だ。姉さん、最う店を仕舞ふ處だつたらうに飛んだ邪魔をした。」

「何うせな、寢やしても寂しいのです、何時までもお休みやしておくれやすな。」

## 十三

客は旨さうに舌打して、

「難有い、不思議な處でありついた、こんな處で飲まうとは思はなかつた。姉さん、僕はね、土地のものぢやない、今も町を通つて來たんだが、大分賑で一寸一口遣るやうな家は、二階の欄干も物干も溢れるほどな景氣だらう。中にや、三味線太鼓の音のするのがある、旅烏が一羽ぢや些と氣が怯けて入られない。入つた處で、氣がさして駄目だし、他國の者とでも旅籠へ歸つて此の月に雨戸を閉めて飲んでも不味し、路々大鬱ぎだつたのに、よく、まあ、こんな人通りのない閑靜な處で飲ませてくれる。大いに謝すれ、然も酒が可い、かはりをつけておくれ。」

倒に雫を切つた、見事に一本。

餘り大量ではないと見えて、もう額の色も、ものいふ調子も變つたのである。

お房も嬉しさうに、いそ〳〵しながら、

「お世辭だせうけれど喜んでおくれやして、私もな……」

「何、君も惡い心持はしないといふのか。」

「お嬉しうおつせいなア。」

ハタと膝を打つて、

「厚意謝するに言なし。むゝ、いや、此の鷄卵も又至極結構だ。」

「もつと、お食りなはるものがあると可いのやけど、あの、何うだすいな、夏大根の刻んで漬けたのがおざいやつせ。」

「大阪漬だな、貰はう、貰はうとも。お誂だ、」

と大に乘る。

「そんならな、もし一寸行つて取つて參じます、待つておくれやす。」

「いや、御足勞には及ばない、其處にあるンならばだが、取りに行く、だつてお前、」

「直、其の母屋だつせ、わけありやしやせん。」

と前垂の端を取つて、お房は薄の前を通つた、あとから小犬がちよろ〳〵とついて行く。

「待て、待て、一人ぢや寂しいや、こら白。」と云ひかけたが、どちらも忽ち見えなくなると、松葉がパラ〳〵と溢れて落ちる。渠はぶる〳〵と身震ひして、上げ胡坐の脚を土間に揃へ、胸を反して眉を顰めて、鶴の城の渺として、月に百年の歷史を描けるを見るや、心迫ることあ

るかの如く、ばた／＼と忙しい足跡。

其處へ草履の音すた／＼、

「遲かつたすやろなあ」

「これは憚り。丁ど二度目のお燗もついた、姉さん、其處か母屋なのか。」

然らたす、犬小屋だつせ、」とあきらめたやうに慾も望も忘れた風采。

「暗いぢやないか、誰も人は居らんのかね。」

「え、

「父樣や、母樣は。」

「おかあさんは先達て亡くなりやした、お父さん私知らんのだす。」

「ぢや、御亭主？」

「厭だつせ、」と身を細く、兩の袂をぐいと絞る。怪訝な顏をして、

「それでは一人か。」

「はあ、一人だす。」

「夜も、」

「何時やかて、一人だつせいた、ほゝゝ、」

客は又仰いで飮み、

「笑ひ事ぢやない。こんな處に年中一人で居て何うする。」と目を輝かして云つたが、何を思ひ出したか、今更果敢ない居の彼方此方を瞰して、突然聲を上げて、

「ラムネの罎が！　冷してあるな。」

十四

「姉さん、飮むよ、大いに飮むが構はんか。」と猪口を持つた手を腕まくりで、客は目を睜つていつた。

お房はたゞおとなしく、

「ラムネ食るのだすかいな。」

「はゝあ。ラムネ、いや、ラムネを飮まうといふ理窟ぢやない。此と外に仔細のある事だ、此の仔細といふのが、又なか／＼不思議に面白い、何うだ話して聞かせようかね。」

「聞かしておくれやすな、私ほんとに寂しいのだす。」と客の床几を少し放れて、お房は前垂に袂を折りかさねて小犬のつむりを膝へながら、前髮のふツくりした、瓜核顏をなつかしさうに振仰ぐ。

「寂しいか。あゝ、寂しからう、ラムネの話も寂しいや。」と何を思出したか、がツくりとうなじを垂れた。

「何だすえ、ラムネはんツて人さんのお名だすの。」

「人の名か。」

聲を沈めて胸で笑ひ、

「人の名だ。時に姉さんの名は何といふね。」

「私の、……」

「うむ。」

「ほゝほ、私名なんかないのだツせえな、田舍ものだす。」

これを聞くと目を瞑つて、

「ラムネも同じやうなことを云つたつけ。都をば霞とともにいでしかど、秋風ぞ吹く白河の關。富士も淺間も鄙の名所だ。私は松島でございます、手前那須野が原でございますと、自分から名告らないでも、知つてる者は知つて居る。なあ、姉さん、僕が一つお前の名を當てゝ見ようか。」

「當てゝお見やす、それだすがなア、あなた此處に小犬が居りますよつて、白やなんか言やはつては厭だつせ。」

「警句一番したね、こりや愉快、」

と會心の笑を洩したが、居を切るが如く、杯を銜ゝ横に引いたり。

「心配するな、ラムネは人の名といつたけれど、出まかせに白とはいはん、謹んで中てよう。」

「そしたら私も、あなたのお名をあてまつせ。」

「面白いな、しかし野郎の名は難しい、難しいといへば女の名だつて一度であてるのは容易でない、何うだ、旨くあたつたらお前、僕の女房

になるか。」
「えゝ、其の代りにあなたを中てやしたら、旦那はんになつておくれやす。」
「可し、僕の名も亦酒から思ひついて、糟なぞは不可いよ。」
「滅相な何のまあ。」
「それでは中てよう、」とぢつと又お房の顔を瞶めたのである。
はツと赧らめて打背け、
「堪忍しておくれやす。」
つくづくと打守り、
「益々肯て居る。」
「ラムネはんにだすかいな。」と思ひ切つて云つたるやうに、お房は遣瀬なく俯向いた。
「何うだ、お前の名はお房……、」
「は、」
「お房さんといやしないか、」
「……、」
「然うだらう。當つたか。厭なものを無理に女房にしようとは云はないから、中つたら中つたといひ給へ、何うだ。」
「まあ、」とうつかり顔を上げ、女は驚いたやうに胸を反して、下についた手に力を入れると、小衣は袖の下でクッと鳴いた。
「中つたか。」
「何うして御存じだす。」と目を圓くした驚き顔、うつとりとなるばかり、いはむ方なき、艶麗さ。
愕然とした趣で、思はず猪口にかけた手が震へた。
口の裡で、
「こりや足許が海にならうも知れない。」

## 十五

「今度は、姉さん、何、お房さんが中てるんだ。さあ、」
お房はつい居て、衣紋を直し、更まつた形になり、
「それでは言ひまつせ、一時待つておくれやす、」と、土間を探ると、五ツ六ツ、又三ツ四ツ、其處にも二ツ彼處にも一ツ、自然に零れたか、取溜めたか、松毬の数ある中から、お房は一ツ拾ひ取つて、撮んで耳を寄せて、月ある方に、雪のやうな顔を傾けて、ぢつと聞く思入をして無言。
「や、」
と叫んだ、けたゝましい客の聲に、お房は振向き、
「何だすいな、」
「そりや何だ、何だね、其は、」
耳のあたりに捧げ持つて、
「これだすか。」
「榮螺の殻ぢやあるまいな、」
いふことの餘に唐突であつたのに、客も自分で氣がついたか、
「然うだ。山の中の國だつけ、」と殆ど無意識に呟くのであつた。
お房は串戯と聞いて取り、
「榮螺ツて貝の事だすか。」
「貝だ、貝だ、相模の海の名物だが、其の松毬を何うする、未だ焚火をするには早からう。」
「此な、犬の子が皆嬉しがつて手玉に取りよります因つて、拾うて置いとくのだつせいな。」
「だつて、耳に當てゝ何か聞くやうな事をするではないか。」
「あのな、此の邊は、森として居ます因つて、夏でも颯々と松の風が吹きますのが、心に染み込んで居るはけに、此な松毬を愬うしてな、」
お房は眞顔で打傾き、
「耳につけてぢいツとして居ますとな、松風が聞えまつせ。其にな、もし、夜さりなんぞ寂しうてなりません時、一心にな、これを耳にあて

て居りますと、亡なはりやしたお母さんの聲がして、遠くの方の、百里も千里もある處から、あの、何かいつてくれやはるやうな氣がしまつせいな。」

ほろりとして聲を曇らし、

「それやはけ、今な、あなたの、名を聞いて見ませうと思ひまして。」

然も思入つた狀して、頷き、

「然うか、いや。そりや聞えよう。去年海端では榮螺の殼を耳にあてゝ、浪の音が聞えるといつた人があつた。成ほど、松毬には風の音が響くだらう。どれ、僕にも一ツ貸し給へ。」と床几を放れて、ずり落ちるやうに土間へ片膝。

「あれ、おめしものがよごれやす。」と帶に挾んだのを、引出して拂ふとて、はらりと開く朝顔染。

「構やせんよ。」と退けようとして、端と端を、心々に、故とならず放しもせず。

娘ははなじろみて月の隔てに袖屛風して左の耳。男は別なるを手探りに露の小笠の草枕、右の耳にあてゝ、目を瞑ると、身動きに醉が出て、潑と全身の血が湧いた。動悸激しく胸を打つて、漂ふ船に乘る思、稻葉の白く風に動くを、打寄する月の浪かと覺えて、あはれ玉の緒もゆらぐかと、心ゆくばかり恍惚する、耳許に娘の聲、松毬の中に響いて、

「新三郎さん。」と確に其の人。

我に返ると、目の前にお房が微笑み、

「あたりましたたすやろな。」

「え！」

「新三郎さんといやるお名で、あの松坂さん、屹とだつせいなあ。」

松坂新三郎——客は衝と立上つた。

## 十六

又撑手と床几に腰、はツとはずむ息継に、注置の酒のさめたのを茶碗から雫も殘さず。じりじりと膝を向けて、

「新三郎だ、いかにも松坂だが驚いたな。お前何うして知つて居た。不思議にも何も、殆ど言語道斷ぢやないか。」と詰寄らないばかりの劍幕。

お房は澄して、

「知つて居たのではないのだす、お約束の通りあてたのだつせ。」

「姓名ともに。當る譯がないぢやないか。」

「貴客やかて私の名を丁とあてゝだつせ。」

理の當然に一言もなく口を噤んだ新三郎は、しばらくして苦笑。

「可い加減に調子を合せたのだらう、眞個の名が、お房さんと云ふのぢやなくつても、其處はお世辭だ、はいといや其までといふものさ。」

「あら私嘘を……、ほんたうに房だつせ、あなたこそ可い加減なことおつしやるのやないのだすか。」

「正銘いつはりなし、本當だから何驚く。理窟は措いて、大抵女の名は女なみに極つて居るが、男と來た日にや、權兵衞太郎兵衞から藤原の朝臣鎌足まであるんだから、まぐれあたりにも當らうやうは無い筈だ。」と半ば獨言のやうにいつて、とろりとした目で、くる／＼と四邊を眗し、穩ならぬ面色で、

「まあ、可いや、何でもかまはないから、姉さん本當のことをいつてくれ。一體何だ、僕は今何うして居る。と凭う膝に手を置いて、床几に腰をかけて居るんだらう。」

「ほゝゝ。」

「串戲ぢやない、笑ひ事處かい、容易ならぬ次第だ。僕は死んでるのか生きてるのか。確に酒を飲んで居ると考へるが、まさか、夢ぢやあるまいな。」

「まあ、あんた、何うしやはつたえ。」

「待て、今お前がものを言つたな、確に。それ

から、先刻お前の名を當てた、あとで僕の名をすつかりいつたな、事實々々、正に事實だが、こりや何處だ、岩代國若松だらう、福島縣會津郡。」

　お房は素直に、

「はあ、」

「正に相模の國の杜戸ぢやない、さら〳〵鳴つてるが、風の音か。」

「もう秋の風だつせ。」

「海ぢやあるまいな、背後は、」と捻向いて、葦簾越に差覗き、

「なるほど、土手が薄原で、うしろの畠は唐蜀か。」と又見直して視めたが、其處に人ありとは心付かず、葉がくれに潜んだのは、母屋にかくれて耳を欹てゝも、板戸が隔るので飽足らず、密に忍び出でゝ身を寄せた、お房が女房さんと呼ぶ女、薄に縋つて露も溢さず、靜り返つて居るのである。

「其處でと……、」

考へ、

「此の先に川がある、何といふ。」

「湯川といふのだす。」

「湯川、可し、果して田越の川に不非。」

調子をかへて、

「橋があつたな、」

「涙橋のことだすか。」

「涙橋か、些と氣になるが、しかし、これも湘南の景ではない、奥の御堂も杜戸の明神ではないだらう。果して此處を會津として、これが夢でも現でもないとすると、さあ、逾解らない。不思議も亦極まるぞ。」

「何だすえ、相模だの杜戸だのといやはして、あゝ、何だすな、其の先刻のラムネはんの事だすか。」

「全く其のラムネだ、乃至又榮螺の事です。」

新三郎は少しく落着いた樣子である。

## 榮螺の殼

### 十七

「聞給へ、月こそ違ふけれども去年の今日だ。相州葉山の海濱、杜戸の濱といふ處で、丁度此の店と同一やうな葦簾張に休んだ事がある。ラムネも榮螺も其の店にあつたんだ。だがね、其處等のは、休茶屋といふのぢやない、衣類を脫いで潮浴に海に入る、海水浴の先づ支度小屋といつたものだ。」

　白砂の美しい波打際に八九軒、たゞ、葦簾で間を仕切つたのが一列に並んだが、七月も未だはじめつ方、殊に其の年は雨勝で、塵の都を遁るゝほどの陽氣ではなかつたので、下櫻山、逗子の海、鳴鶴ヶ濱、養神亭、日影の茶屋から葉山をかけて避暑の客も數ふるばかり。女波男波の拔手を切るのは、別莊方の坊ちやんより、土地の小兒が多い位、況して通りがゝりに衣類を脫いで、貸手拭に猿股で、さつと一浴の如きは皆無なので、數多い其の葦簾張に、客を呼ぶものゝ姿もなかつた。

　中に一棟、左右から、四ツづゝ數へて眞中あたりの葦簾の蔭に、夕陽の舂く沖を視めて、葉山に月は白いけれども、軒に夕顏の花もなく、黄昏の風情あはれに、女一人、悄然佇んで居るのを見て、新三郎は、其の時、近きあたりの知る人の別莊に逗留中、晩餐の小鰺鮮しく、猪口を過した醉心地、もてなされに事が足つて、早附木なぞは忘れて出たので、月の出汐の波の色、此處で一服と思ふ煙草の火も欲しければ、喉も渴いた折であつた。

「直ぐにラムネをいふと、其の娘がかぶりを振つて、これはお止しなさいまし、今まで一杯に西日がさして、此の小桶の水は湯のやうでございました。溫して置きます中のラムネなぞは、

沸いたりとめたりしたのですからお身體に障りませう。店を出します時、村の衆が斷片かはりだといつて視つてくれましたから、砂地に出して置きますか、賣物ではない、といつて、何の通りがゝりのきぐれ客、際物でお鳥目さへ取つて了へば、あとで行倒れになつたつて構はないものを、殊に又盛場の人氣の惡い中で、深切に茶を沸してくれる。其もね、砂の上へぢか置で、七輪があるばかり。螢火ほど殘つた中へ、消炭を拾ひ込んで、腰の折れた團扇は、前に使へと出したあとだから、かけがひの無い蒲鉾小屋、姉さんは浴衣の袖で煽いだではないか。

　早く飮ましてくれる氣で、然うやつて氣はあせつても、心は落着いた女と見えて、僕が煙草を飮まうとすると、杉箸の尖の燻つたので、燠を挾んで出したんだが、固より火鉢なんぞ無いのだから、其處でそら先刻から、大層評判になつた其の榮螺だ。」

　新三郎は飮込ませるやうに笑を含み、

「ね、又何につかふのか知れないけれど、此處に松毬のあるやうに、其處ぢや榮螺の殼澤山。やがて綠の苔が生えて、紅蟹が棲みさうな、竹の柱の土臺にしたのが、怪しからずごツ〳〵して、怎う昨夕あたりは潮が來てかぶつたかと思ふくらゐ、尖々に露を含んで、涼しくかさなり合つて居たんだね、其の中から一ツ取つて、娘が今の燠を入れて、床几の上へ寄越してくれた。唯恥しさうに見えたつけが、何の極りの惡いことがあるものか。

　玉を敷いたやうな美しい白濱を、葭簾越。葉山の月が、音のするやうに眞丸く間近に出た。波はあつても夕風の空。風は唯、片一方の杜戸明神の眞暗な松からばかり吹いて來るやうな、何ともいはれない心持の好い時だ。榮螺の殼の煙草盆は、人の別莊に客で居て、綺麗に灰ならしをかけた、落雁に紅をつけた鬶の火入から、術と吸ひつけて、おかはりといふ手附をしつゝ、灰吹の蓋をあけながら、紅革の厚蒲團、結構ぢやあるけれども、眞四角に坐り込んで、えへんなんと、咳を咽喉へ引込ませるとは雲泥の相違。

　あゝ、雨露さへ凌げたら、此處で世帶をしても一生は暮される——姉さん、醉つぱらつて云ふのぢやないが、仔細がなければ、僕は養子にでもなる氣になつた。」と滿を引くこと如件。

## 十八

「するとね、土瓶の下を働いて居る女は、房々とある髮を、結はない櫛卷で、海邊の女だから、お前さんのやうに色は白くなかつたが、襟許もすつきり。些大柄だが、佻氣ない、うまれつきを其まゝ野育ちとは見たが、實にしをらしい、引かけ帶がずり下つて、背中の伸びたのもすら〳〵と姿よく、褪せた淺黃の下じめが美しかつた。

　はい、お茶が入りました、と茶碗になみ〳〵と注いでくれたが、いづれ海水浴の連中が、赤裸で出入つて、手盥でがぶ〳〵遣ると見える、先づあの湯屋の上り場といつたやうな店だから、茶盆に及ばず、砂地へ蹲んだなり手で寄越す容子なんざ、十年連添つた女房ぐらゐ、微塵も色氣がない中に、口ぢやいはれない風情があつた。譬へて言や、紋着袴で畏つて、床の間の牡丹を拜見するのと、山路に行暮れて、薄と一所に寢るやうなもんだらう。

　お手盆で換へて頂く、番茶の其の旨い事。出花なり、醉覺なり、飮むほどに干すほどにだ、やがて土瓶が輕く成る、澤山御馳走をあがりましたねと、古風な氣取氣のない處が、柔く深切に聞えたので、又今更染々と顏を見ると、眉の凜々しい、鼻筋の通つた、目の涼い。但瞼の肉が落ちて、うるみがあつて冴えないが、下ぶくれで瘦せても居ない、目に立つのは唇

の、宛然紅をさしたやうな、活々として居た事で、もし其の色が沈んで居たら、恐らく、髮をおろさない尼法師とも見えたらしい、寂しい女、それだけに尚何となくあはれで、こんな者でも力に成つてやりたい氣がした。

　しかし效々しい働振、水をさゝうとして、腕まくりで柄杓を取つた、が桶に汲込んであるのを、土瓶にうつす時、眞白に澄んだのに、きらきら月がさすから、これは、海邊には珍しい、好さゝうな水だ、といふと、亡なつた親仁はこればかりが自慢でございました、唯今では餘所のお別莊のお庭の井戸になつて居りますけれども、擔で頂きに參りますと、先に居たものならば、とおしやつて、汲まして下さいますと、何心なく云つたやうだけれども、聞くものゝ身に取つちや、いかにも氣の毒に考へられて、酷く身に染みたもんだから、然うか、といつた切、何を思ふといふ事も無しに、默つて了ふと、女が繼穗がなかつたと見えて、其時だ。

　又一ツ榮螺を拾つて、今度は菓子盆にでも使ふ氣か、微塵棒一ツ見當らないが、と思つたが、然うぢやない。

　姉さん、先刻、お前が行つたやうに、其の榮螺を耳にあてゝ、ぢつと遠くのものを聞くやうに、恍惚して、やゝしばらく……だから、不思議に思つて尋ねたんだね。

　然うすると、はじめは浪の音がすると云つた。氣を靜めて、何にも餘所の事を氣にかけないで、一心に耳に當てゝ居ると、底の底の方に、何ともいはれない好い音が響いて、千萬無量の、しかし騷がしくない、寂しい美しい聲が籠つて、龍宮の御殿で、魚がひそ〳〵話をして居るのが聞えるツて、本當に確と信じて居るらしい、嬰兒のやうな無邪氣な顏。

　無邪氣な心は、濁がないので、まるで、神か佛かと思ふやうな、尊いものだから、唯、あはれな深切な、優しい女と見て居た目に、別に、譬へやうのない品のある處が見えて來て、些と行過ぎた考へぢやあるけれども、成程龍宮のひそ〳〵話が、榮螺の貝から聞えるも道理。四邊の景色も景色なり、此の月が隱れたら、姿も一所に、海の靄で、消え失せる、ものゝ精ぢやあるまいか、と思つたくらゐ。

　其のくらゐなら、先方で承知をさへしてくれたら、せめて擔で汲むといふ、其の水桶をかついでなりと、一生を送る覺悟をして、二度と又例の落雁で煙草を飲むやうな、馬鹿なことをしなけりや可いものを、」

　新三郎は足蹈をして、我と我身をじれつたさう、

「其處が凡夫だ。」と肩を搖つた。

## 十九

　——其榮螺を耳に當てた姿と、其の仔細を話した樣子のしをらしさに、僕は自分を忘れてね、更めて何かいはうとした。何か言はうとしたつて、更まつて些と變だがね、醉つちや居るし、人は居ず、濱邊にや、唯其の小屋に二人なんだから、まさか唐突にもいかんから、名を聞いた。何といふ名だつて其の女の名を聞いたんだ。」

　新三郎は自分で當時の事をいふ如く、今も我を忘れて語つたが、急に我身に返つた風情で、目を瞬つて、ものを見るやうにして默つた。

　時に其處とも分かず、あたりの草の中に、あはれに床しく、露が結んだ鈴の絲が、葉に搦つて搖ぐかと、微妙な聲が幽に聞えた。

「やあ、松蟲が鳴いて居る。」

　お房も我に返つた狀で、思ありげに其方を見返り、

「佳い聲で鳴きまつせえなあ、あれ、お聞きやす、遠くでも聞えますやろ、毎晩な、私唯一人して此を聞きましては、泣いたり笑つたりしまつせいな。今夜はあなたが來ておくれやして、

おもしろいお話をしてくれやはる因つて、今まで氣も附かずに居ましたの、もつとお酒つけますせいな、遊んでおいでやして、あとを聞かしておくれやす。歸りやはると、又蟲の聲ばかりだつせ、寂しうおすけにな。」と、便なげに打見た目に、涙含まぬばかりであつた。

頭を掉つて、

「いや、未だ其の他に松毬があるぢやないか。それ、おつかさんの聲が聞えるといふ。其に上を越したものはないではないか。」と醉つた人のいふとは聞えず、達觀の僧の、識、徳ともに秀でたるが、女人を悟すが如くに言つた。

お房も甘える狀にいや〳〵して、仇氣なく、

「否な、何にも思やしませんで。一心におつかさんの事思ふ時は然うだすけれど、さきへな、蟲の聲を聞きまして、あゝ寂しやと思うたら最後だつせ。どないしたつて、矢張蟲の聲ほか聞えやせんもの。」

新三郎は、やりちがへて兩の腕で胸を抱いて、

「不可ん、何故然う泣かせるやうな事をいふんだ、女の兒のいふことでな、涙ぐむのは、大日本帝國御先祖から御法度だ。」

呵々と高く笑ひ、眦を切つてしばたゝき、

「しかし道理だ。迷つた事よりほか聞えまい。先刻、お前がするやうに松毬を取つて耳にあてた時は、海と山こそ違ふけれど、相模と岩代と百里を隔てゝ、恁うも肖た事があるものかと思つた所爲か、しばらくは夢を見たやう、醉つてるためもあらうけれど、足許もゆら〳〵して松吹く風も波に聞えた。四邊が眞暗になつて、自分の居まはりばかり月で明う、大な光の輪で包まれた氣がする中に、向うむきの女の其の、淺黄の扱帶の色まで見えて、ぞツとする時、自分の名を呼ばれたので、はツと思ふと、振返つたのはお前の額だつた。

それにつけても、榮螺の底に、龍宮の聲が聞えるといつた、其の時の人の恥入るわけだ。いかにも心に迷さへ無かつたら、自分がしても貝の中に、波の底の響がしたらうものを、些と外に思つて居た事もあつたもんだから、其の方へ氣を取られて、直に其の葭簀張を出て了つたがね。

僕の耳に響いたのは、龍宮の聲ぢやなくつて、ヴァイオリンといふ西洋の樂の調だ。

直傍の、杜戸明神の裏の、月の良い巖の上で、然るお孃さんが彈いて居た。即ち僕が客に成つて居た、別莊の主人の娘にあたる。今度、此國へ見えた、姫樣といふのも、場所は離れて居るが、同一相模の海の、鎌倉長谷といふ處の別莊から泊りがけに遊びに來て居た。別莊の主人は、以前、矢張會津の家來であつたんだね。

さあ、其のヴァイオリンの音に聞き惚れて、ふら〳〵と葭簀張を出て了つたために、龍宮の聲は聞かずじまひ。」

## 二十

「何うだ、姉さん、まあ、お前は何方が好いと思ふか。なまなか其の西洋の樂を奏でる人が、奇代の上手だつただけに僕、當分、いや長い事、丁度今月で滿一年。

正にヴァイオリンの音に迷つて居た。其がために又と得難い、龍宮の音信を聞かうとも思はなかつたが、あゝ。」

深く歎息して、松坂は床几に掛けたる其まゝ、居ずまひを正して打望む、路傍の松黑く、枝が亂れて、鶴ケ城は靄の中に包まれて見えず、空の薄曇に雲が動いて、過去つた幻の路を辿りつゝ語る中、水の透通るばかり明瞭だつた四邊のものゝ色は、朦朧となつたのである。

忍ぶには便可し、薄にさら〳〵と氣勢があつたが、蟲の音は處を移さず、思ふに樣子を何ふものゝ、身じろぎをしたのであらう。

しばらくして、

「まるで夢を見るやうだ。」と、獨り打樂つたやうにいつたが、氣をかへ、

「然ういふわけだ。榮螺もラムネも、これで皆分つたらう。其處でお前さんだが、度々いふやうだけれど、脊恰好、容子といひ、聲といひ、唯些と小造で、年紀が二ツばかり若いかと思ふだけ、店だつて又失敬だが、假小屋同然。まあ、こんなに肖たものがあらうかと見て居た處だつたから、つい名をあてるのに、お房さんかといつた、房といふのは、其時の娘の名だから。」

「まあ。」と息をひくやうにして、下から上へ袂をお手玉、細く忙しく動かしながら、

「本當だすかいな。」

「嘘かも知れんが、當つたとするんだ、それが、お前は又何うして僕の名を當てたらう。」

「そりやな。」

と直に應じたが伏目になり、帶の横を輕くたたいて、

「あのな、松毬に聞いたのだつせ。」

「實際は。」

「然うするとな、お母さんが敎へたのだす。」

「ぢや、先刻約束をしたつけが、其の母樣に聞いて見たら、何と、お前は女房になれようか。」

「……。」

「僕の女房だ、即ち松坂の細君だ。」と、新三郎は陶然として大に醉つた、前のめりにふらふらと頭を垂れて、確と兩手で膝を壓へる。

「可うございますともね、私あお媒妁をいたしませうね。」

と、朗にいふと、松蟲の鳴く音を留め、薄を分けたのは以前の女。

お房より新三郎の驚き、振向いて、醉眼をとろりと睜ると、葭簾越なり、草の中だが、曇つた空に燈明く、目も眉も衣の色も、すらりと鮮麗な立姿。

「呀、清瀧の女房ぢやないか。」

清瀧は樓の名で、東山の温泉宿、松坂の旅館であつた。

「ほゝほゝ大芝居。松坂さん、今夜は妙な處で、此で二度お目にかゝりますね。」

## 悪權太

### 二十一

清瀧の女房輕く頷いて、あでやかに莞爾し、

「御免なさいよ。」とづッと出る。

途端に礑と身を伏せたは、猪が轉んだやうな、毛むくじやらの荒漢。

但其の身の輕い事、社の路の薄原から一段低い畠のへり、五個ばかり植込の、繁つた唐黍の畑の中へ、土に生えた奴の兩脚、根こそぎに薙ぎたるばかり、もろに膝を折敷いて、風より高き音は立てず。足を踏張り、尻を立て、握拳で泥を掴んで、身體にぴりぴりと筋を張つた、眞赤く蓬に伸びて、皆に鱗のあるばかり、睜める眼、開き鼻、唇を剝き反した――口や牡丹を吐かむとす。――

腰切の古單衣に、縄の帶、脚絆ばきで、素跣足で、手拭を咽喉にわがねた、年紀二十有七八歳、獸ならば老人株、人間ならば血氣の壯者。莖を透して葉を通して、あからさまなる葭簀の中、ちぎれちぎれに亂れかゝつた青簾越に覗くが如く、燈の色に露の添ふのも、男女の姿に影のさすのも、あからさまに、つい間近。

清瀧の女房の、松坂には見せじと忍んだ、後姿も、この方には指を伸ばして届きさうな處だから、唐蜀黍の梢を小楯に、爽に調子高な醉つた聲、女房、といふまで聞いて、眉毛の毛蟲打動き、蛇の舌閃いて、日の色の變つた折

から、不意に清流の女房が、霧をかけて露れたので、見られちやならぬと、土に伺つた。

傳へ聞く其の昔、豐後の御曹子爲朝に、獸の皮をひさいだる山男に似た古今の怪物、人か、あらず、何か、あらず、惟ふに是、渡天の僧の法衣の袖に宿り來て、我が敷島の、山奇に、水の怪なるあたりへ、撫子ならぬこぼれ種、花の中に生ひ出でゝ、あはれ民草の數には洩れず、親なく、妻なく、子なく、家なく、着物もない、が、昔を、岩代國會津郡若松なる野郎帽の中に置き、身を摩利支天尊の、御堂の縁の下に置いて、權太郎、渾名を岩和名代の瞼、飯豐山の岩から岩、枝から枝を傳ふに發して、飯豐猿といふ、あぶれもの、禽獸とともに人も知つて、あたりへ寄らぬ獵夫である。

即是、お房を魅入つた色男で、もゝんがあと天窓から鹽をつけて噛るかはりに、やいの、といふ次第であるから、思ふべし。爰に焦慮の心中。

其血湧き、肉動く、殺氣を籠めて、月が空に面を蔽ふと、銀河を斜に一刷毛颯と、末濃に野末に廣くなつた、眞白き雲の其の端から、ひらりと下立つたやうな、美しいものゝ姿が、同一畑中の、唐蜀黍の繁の外へ。

水髮のつら／＼と、髱輕きみだれ銀杏、簪の玉星に蒼く、露草一輪折りかざして、夜目に夕顏のほの見ゆる、玉の顏、雪の膚、羅を透く鶴の色、すらりと瘦せて、風采拔ける天女に肖たり。白絽の襟に朱鷺色の無地の長繻袢、秋の曙、茜淡く眠れる如き薄鼠の絽に、白拔きの秋の七草、絲薄の穗は柔く、ふつくりとある胸をつゝんで、一本帶の垣根に亂れ、裳は婀娜たる女郎花、松蟲の影を宿し、桔梗の花袖に開いて、月の移るかと露に濡れたり。

片手に輝く錦の小包。上前の片褄を、密と片手で取りながら、湯川の岸から素直に、畦に通つた一筋道、枝豆蒼く植ゑたる中を、社に志す人か、薄に蟲を聞く人か、葦簾越の灯に路を尋ねて寄る人か、靜々と近いたが、これも松坂の高嶺に、不圖歩を留めて、やがて此と足を早うした。姿を見て、急いで、つか／＼と寄らうとする、目の前に大蝦蟇の、四ツに這つた權太の形に、輕く退いて、敢て騷がず、右手の扇を颯と開くと、白地に墨繪の雁がねなり、半面に霧をかけて、見て、見直しに彳んだのは、秋山衣子、新三郎がお房に語つた、ヴァイオリンの名手といふのは、此の美人の事である。

## 怨恨

## 二十二

―私は何でございますよ、今日は嬰兒になりましてね、お城の姫樣が十八で、はじめての御入國だといつて、大層賑な儀があると聞きましたもんですから、町へ見物に出て參りましたのでございますが、松坂さん、人込の中でも何でも潛つて、見世ものゝ赤い看板だつて見る覺悟だつたものですからね、行きがけに此のお房さん許へ、蝙蝠傘なんか預けましてね、大層な意氣込で出掛けましたけれど、まさか小兒衆ばかり立つて居る、辻の手品も覗いては居られませんから、あの大町名古屋の錦遊軒の射的を貴方。

人立の中で見物をして、貴方のお手際を拜見したんでございます。

それから、貴方は、ずん／＼何處かへ出て行らつしやるから、お後へつきまして、丁度可いお連だとは存じましたけれど、未だ昨今でございましてね、御縁があつてお宿を申しつかりましたばかり、そんなにお馴染でもございませんのに、お呼かけ申すも如何かと存じましたし、

餘り露骨で失禮ではございますけれど、ひよつとかして、旅の御鬱散に、那へでもお出で遊ばすのぢやないか、もし然うだと御一所は御迷惑と存じましてね。ですが、私も別に何處へといつて當はありませず、最う其方此方、お房さんの許まで歸らうかと思ひまして、道順でございますもんですから、うか〳〵お跟き申して參ります中に、貴方は傍見も遊ばさないで、段々寂しい方へお運びで、到頭お城の中へお入り遊ばすのが、廣い大手先で、遠くから見えるぢやありませんか。

おや、何だ、おともをしてお連になつても大事ないと思つて、あとから參りますと、まあ纔の間でございましたのに、あの可恐しい草の生え、夜分の事なり、お姿を見はぐりまして、一番高い處の、鹽藏の穴のふちで、姫樣と貴方と三人、妙な工合で、睨みッこで、又ばら〳〵にお別れ申しましたが、まあ、何だつてまた、夜分、あんな處へおいでなすつたのでございますえ。」

清瀧の女房は唯一ツある狹い床几に、新三郎と膝を組違へに、靜に煙草を燻らしながら、世馴れたもの丶言ひやうである。

最初嫉妬をと唐突に云はれたゝにこそ、醉つた上にも返答に支へたが、新の間に對しては、新三郎は敢て猜疑ふには當らなかつた。

「いや、鶴の城の一件ですか、ありや驚いたです。實に弱つたのなんのツて、全く意外だつた。しかし一人で遣つて來たのは、女房さん、貴女は豪い。」

「はあ、私は土地の者で、よく樣子を知つて居りますし、其に此の國ぢや、つい近ごろ、あんなに澤山忠義な方が、石になるまで、無念に凝つて討死をなすつた場所ですから、落ちて居ます瓦のかけらまでも、魂があるやらに言つておいでなさいますけれど、私は別にそんなに尊いとも恐いとも思ひません。」

「益々豪い。私なんざ土地ツ兒でもない癖に、非常に城の光景には恐入つた、唯一言もなく降參をして了つたです。失望落膽、恐らく男兒兜を脫いで軍門に降つたくらゐ、腑甲斐ない、腰の拔けた、ぐうたらな、馬鹿々々しいことはないですな。で盛に飲みます、けれども敢て醉はんです。」

「お房さん、大分召上つたの。」

「四本ばかしだすえ。」

「ざつと七合だね、それにしちや。何ですね、貴方、もつとお發しなさいまし。お房さん、お酌をおしな。何だつてあんなお城なんぞに降參をなすつたえ。」

「あんな城！」

新三郎目を欹て、

「あんな城？　こりや怪しからん、僕をして降參せしめたほどの城を、何と、あんなとは怪しからん。」

「おや、大層御贔屓を遊ばしますね。それぢや貴方は降參でなくツて、お城の方へ裏切をなさいましたか。それでは此のお房さんは、お嫁に上げられはしませんよ。」

## 二十三

「はてな、するとお前さん方は、城に怨でもある人かね。」

「松坂さん、怨のあるのは私で、お房さんは、お城に憎まれて居る方です、どつちも禁物なんでございます。」

不審な一言、

「何うしてゞすか。」

「兩親とも殺されましたのでございますもの。」

「殺された？」

「はい、あの御維新の時、官軍が瀧澤峠を越しまして、皆樣で籠城を遊ばす時でございます。私の兩親とも、水の出花と申したやうな、若

い同士で、然も貴方、私がお腹に居りまして、母が臨月でございましたが、敵が亂入と申しますので、拔身を提げながら父が母の手を引きまして、一先づ北邊へ落さうと出掛けます途中、ばら／＼お城へ駈込みます、藩の方に出合ひますと、下郎何處へ行くと聲をかけたものがあつたさうです。わけを話して、しばらくお見逃を願ひたいと、父が申しますのを、いや此の會津藩には、敵を目の前に置いて、夫婦で道行をするものは無い筈だ、卑怯！といひさま貴方、拔討に討つたさうでございます。母が倒れましたのを、每朝八百ものを賣りに參ります、野郎がまへの百姓が、此の騷ぎに荷を打棄つて負つて迯げてくれました、私を其處で産みますと、それなり母はなくなりましたさうでございますが、怨ぢやありませんか。足輕だつたと申します、二人扶持や三人扶持で、生命まで差上げて可いもんですか。何ぞといふと忠義々々つて、鼠が聲がはりをしやしますまいし、お房さんの母様は又、親御や姉さんが自殺をなすつた中に、死ぬのは損だつて、泣いておいでなすつたもんだから、其の姉さんの姑にあたる、朝ツから忠義忠義といひつゞけて、武士のだの、梓弓だのと、歌なんぞ遣りました變な婆がね、おのれ、武士の道をわきまへぬか、介錯してやらうと、長刀を持出した處へ、官軍方の長州のお士が一人飛込んで參つて、是非は知らず、若い娘が、取亂してアレ／＼いふのを、三途河の婆のやうな切髪が、長刀で追つかけるもんですから、突然押へつける、ちえツ！と殘念ですツさ。」

清瀧の女房は物語りながら、淡笑したが、薄く蒼く唇から氣を吐いたは、含んだ烟草の殘の煙。

「何うでせう。ちえツ殘念、子息の一生の心得違ひ、下賤の女を妻にしたれば、大事の場合に歌を詠めず、自殺もならず、介錯に隙取つて、死後れ、汚らはしや、敵のために手籠になるか、と大粒な涙を流したもんですから、其のお士が貴方ね。

　そんな中にも苦笑をして、血迷うたか、婆、手前幾歳になる、皺だらけの面を見ろ、いや、手籠にされるの、辱を蒙るのと、咽喉を突いたり、舌を噛んだり、第一己達がついて居る、官軍を馬鹿にした譯だ。時々兵糧にやさしつかへても、同じ日本人ぢやないか、誰も女にかつゑちや居ない。可哀さうに、といつた傍には、すなほな髮の長いのを、疊に敷いて若い奥さんが、血塗になつて居ました。それは何です、此のれ、お房さんの母さんの姉さんで、其の姉さんが片附いた後に、實家が死絶えたものですから、姉さんの緣附いたさきへ、世話になつて居たんださうですが、姑は大變な嫉妬やきで苛め拔いたツて話ですよ。

　ですから、其時なんぞも、武士の妻はこんな時だ。さあ、死ね、やれ死ね、ツて懷劍を出して押つけて、えゝ腑甲斐ない、腰拔けだ、卑怯な、おや、死にやうを知らぬな、下司め、私が教へてやらうと、また婆さんの裝束が大袈裟でさ。死におくれたのが殘念なくらゐなら、さつさと舌でも噛めば可いのに、白無垢の三枚襲かなんかで、嫁の膝を片膝でおさへつけ、たぶさを掴んで、仰向けにして、自分も拔いた九寸五分の、咽喉佛の處へ密とあてゝ、慄うせい、慄らせいツちや、五分、一寸づゝ、ぐい／＼、とせりあげて、目を白黑させながら、其の掴んだたぶさを搖るんですツさ。」

新三郎は目を瞬つて、

「あゝ、樓上紅粧尙思還、尤だ、死ねない……」

と幾度も頷いたのである。

## 二十四

「お房さんのお母さんが、目の前に姉が修羅道

の責苦に逢ふのを見て、おど／＼しながら、留めようとして傍へ寄ると其の侠氣を逆手に取つて、婆め、切尖を伸ばすから、寄るにや寄られず、縫らうとすりや、足を上げて、何をメめ直した白羽二重の蹴出しなんぞ蹈開いて、威丈高になつて、さあ／＼云つちや、」

女房はぐツと仰向き、眞白な咽喉へきらりと、硝管の喉口が觸かつた。

「自分で仕方をしちや、せり立てるもんですから、若い婦さんは、もう眞蒼になつて、目が眩んで、突伏した拍子に、婆の手が髷を摑へると、雪の樣な襟脚から、だら／＼と染んで、下の襦袢がどツと鮮血になつたさうです、」

「おかみはん、私もう。」

「お房さん恐かないよ。……御覽なさい、おや、直ぐあとで婆が自害をするかと思ふと、何うして、今度はお房さんのお嫂さんに、また何ですわ、忠義が何とかで、お國のためが何うとか、何が何とかだから自害をしろツて、逃げて歩行くのを長刀で追つかけた一件でせう。

それから何だつたさうですよ、其の長州のお士が、姑婆を意趣して置いて、女中、さあ一所に來な、何處か近所に知合があつたら、其處まで送つて行つてやらう、都なんぞ何うでも可い、髪も其まゝで、疾く、と出したに鴨居にかけておいた槍を取つて連立つて、送り届けて下すつたのが矢張此さきの野郎がまへのお寺です。

後に其のお侍は、左の手に傷を負ひまして、其時、官軍で假病院に使つて居りました、同一お寺へ見えましたもんですから、お房さんのお母さんには、早く申すと命の親。

其處でこそ、命がけで看病をしてあげました。不思議な緣で、夫婦になつて、此のお娘が出來たんでございますがね。

婆さんは氣が違つて、戰爭の濟んだあとを、方々、取亂して駈け歩行いちや、忠義々々と口癖のやうに饒舌り廻つて、お城を拜んで大道で土下座をしたり、棒ちぎれを持つて橋の上で水車のやうに振廻す。其の中にや若奥樣の事を、いや、淫婦だの、毒婦だの、敵の間諜だの、裏切だの、と惡口雜言。

後で聞いて私なぞが考へますれば、若奥さんの思だらうと存じますけれど、人氣の立つた時分ですから、武家方、町人、百姓まで、氣が違ふほど忠義な婆さん、活きながら武士の道の精靈だなんて大騷ぎ。

此頻の父上でございますが……ね、長州のお侍も、もう身體が不自由なり、長々の浪人で、國には妻子もない身だからと、若松で世帯をお持ちなすつて、御夫婦で、其お狂人どのをねえ、まあ謂はゞ、嫂さんの敵ぢやありませんか、それでも深切に引取つて、お世話をなすつたんださうですよ。

然うすると、例の大道へ出て、人立の中で、お城の方へ土下座をしたり、長刀の一手を御覽に入れたいのだから耐りません、跣足で駈出して仕やうがないものですから、少し窮屈な思をさせると、じれ込んで、梁へぶら下つたぢやありませんか。

やあ、淫婦の、毒婦の、裏切の、間諜の、非望人夫婦して、忠義の精靈にぶらんと往生を爲せたわツて、土下座と水車にヤン／＼囃し立てた連中が、まあ何うでせう、人でなし、畜生とまで言觸らして、飯座、禰の娘の、お國の爲だなんて云ふでせう。

おや、其の人達が、それほどに大事がる婆さんなら、自分が世話をすりや可いけれど、呆れ返る人間は掃除にも出來ませんし、いくら忠義の精靈だつて屎糞を垂れ散らしや汚いではありませんか。水一杯飲ませようともしない癖に、口に穢は立たぬと思つて、可い加減にする

か可いんです。

「住居にや尼に縁が添つたもんですから、段々に評判が高はつて、未だ此の娘のお父さんが活きておいでの時分から、附合ふ者もなく、それこそ口を利くものはなかつたのでございますが――お房さん、今年で七年になりますね。」

二十五

六年あとに父上さんが亡なりましてから、男親がないと、さあ、馬鹿にして、それまでは、唯向うから口を利かず、外で逢や遠くで指をする、傍へ行きや、そツぽうを向いて了ふぐらゐだつたのが、貴方、面と向つて、汚れるの何のと、云ふやうになりました。

若い方や、學校へ出て、これから軍人にでも成らう人なぞは、猶の事。お國のために命を捧げようといふ者があんな不届の奴等、傍へでも寄つたら、そこから血が腐るなんて酷い事をいつて、其の癖何なんでございますよ、今時の人で、優しい様子は知らず、唯汚れるとだけ聞いたのなぞは、悪い病の筋でもあるか、××遣ひの筋でもあるやうに思つて居るのも澤山ございます。御覧なさい、先刻も先刻です、店の前をひやかして、入ると汚れるからツて、向うの松の樹の下まで、茶盆で何うでせう、お茶を持出させて置いて、たゝき落して茶碗を割つたぢやありませんか、此の娘ばかりぢやない可哀相に犬の兒までが、うろ／＼してさ、可憎しいツたらないんですよ。」

新三郎は深く思入つた風情で聞く。お房は顔に袂と袖。

女房は語を續け、

「あの人達に謂はせたら、私も矢張非業人の子でございます。松坂さん、ですから、お城に怨が有るぢやありませんか、お房さんはお城に憎まれて居るのぢやありませんか、ねえ。」

新三郎は胸に疊んで聞いて居たのを、一時に、

「いや、解つた、解りましたとも。無法極まる、凡て無理の絶頂といふお言だが、無理はない。如何にも僕には解つたです。不埒至極だ、そんなもんです。鶴の城に絶えない燐火は、忠魂の光だとばかり思ふと大に違ふ、露となつても消え失せない、怨の涙もあるんですな。お説の通り、用便や食物の厄介がないと思つて、無暗に忠義倒しにして、人の命を、勝手に自分達の廣告にするんです、己が身の飾にするんです。竈を拜むものは、内の女房で、招猫を祭るものは賣女の徒だ。嗚呼忠臣、楠氏草、忠義は盡つて行ふべし、不斷稱讃るべきものではない、既に飯盛山の少年隊の如きも然うだ。えらい／＼と賞め倒しにして、何故其の親に別れ、姉に別れた、心の中を汲んでやらないだらう。もし一人でも、討死をするのを拒んだものがあつたら、人は必ず、卑怯と言ひ、未練と嘲へ、嫌しいのは逆賊といはう。何の、會津が亡びたつて、土も水も濁る訳ではなし、日本の國が小さくもなるのぢやない、唯、若い國士の初産の兒は、死んだあとでは見られぬではないか、なあ、おかみさん。

國に殉ぜし自殺なんかさせられた日にや、戀しい良人の前途を見届けることは出来ないぢやないか。女房を連れて逃げたのも無理はない、自殺を拒んだのも道理だ。しかし、唯一途に忠義と心がはやつて、君のため國のために、夢中で討死をした人達は、なほ氣の毒だ。何爲なら、之は、戀も情も知らない嬰兒の、呼吸の根を留めたやうなもんだから。」

二十六

新三郎は悵然として、

「いかにも城は怨むべしだ、僕も大に怨む、馬鹿に癪に障る、無法に憎い。」

清瀧の女房大に勇み、

「それぢや矢張、貴方も私どもの仲間ですね。まあ、嬉しいねえ、何うぞね、私も蔭で聞きましたら、貴方まるッ切御酒の上とも思はれません、あの此の娘を見て遣つて下さいな。」
「もしな、おかみはん、」と慌しく遮つた。
「可いよ、人から退け物にされて、まあ、こんな可哀さうな娘はありませんよ。否、世間は廣し、會津ばかりに日は照らないとは存じて居りますが、餘所へ出すのは口惜しい、矢張此の土地で、ソレ見たかと、立派なお婿さんを持たして遣りたいのでございます。
此の娘も、お母さんの亡なつたあとを、直ぐ野にするのは可厭だといつて、我慢して居りますし、私も悔しうございますから、誰も足踏をしないことは承知の上で、故と、こんな人寄せの茶店を出さして置くんですよ。」
藤三郎横手を打ち、
「其處だ、其處ですな、人生意氣に感ず。おかみさん、僕は、僕は今鶴ヶ城を怨むべしと云つたですね、けれども、僕をして、當時此の處にあらしめば、譬ひ、今三人扶持を頂かずと雖も、敵に片足も城の土は踏ませたくない。命を棄つて戰ひます、卽ち意氣だ。
今お前さんが、人の講釋に附かないで、此の、人の嫌ふ娘を、子の如く世話をするのがお意氣で、此の娘が又、母のあとを去らぬといふのも意氣で、故と茶店をさせるも意氣だ、お前さん方が、もし其時、今の年紀で、而して一國の城が落ちる場合に出會したら、恐らく、一番に討死をする人なり、自殺もする人だ。乃ち其の人の口から城を怨みだといふから、敢て咎めない、僕はいかにも道理だといふ。
而して、僕も大に怨むと言つた。言つたが、僕の此の名城を怨むのは、お前さんの怨み方と大に違ふ、違つて然も愚なるものだ。
お前さんは、意氣で怨む、眞實で怨む、情で怨む、間違つては居るけれども、人を動かす、一婦怒れば三年旱す……、罪で可い。思切つて怨め、七生までも怨め、勇士も敢て潔とする。
僕の怨方と來た日にや、意氣地なしの骨頂、のろまの素天邊、愚痴で怨む、卑怯で怨む、女々しく怨む、お話になつたもんぢやない。三尺の童子も尚恥辱とする次第なんだ。
一體僕は、此の會津に何をしに來たと思ひます、例に鶴ヶ城を見ようために來たのだね、又、何のために、此の城趾を見るのかと云ふに、」
松坂新三郎、予は青年の詩人也。
と頻に乘じて言はうとしたが、心付いて、口を噤んだ。
一先づ畫師ならば、繪にする處、城の景色を描く處。僕のは商賣……といふのも變だが、畫師ぢやないのだ。齊しく其の文字で城を寫すんで、歌にしてこれを謠ふんです──これを謠ふんです、はゝゝ、はゝ、」
擲つ如く高く笑ひ、
一藝數のない門附の言種のやうだが、是を謠ふんです。其の事を、御承知でもあらう、會津の門閥家の、秋山といふ、退役の陸軍少將に賴まれて、わざ〳〵東京から出向いたのだね。何故といふと、藩侯奥平伯爵家の令嬢、そら今度、此地に見えた、先刻城の中で、お前さんと二人出會した、那の竹子姫といふのが、此の暮に、矢張陸軍の現職に居る、然る侯爵の少佐の許へ緣組をするに就いて、其の式場で、持參の土産、舊領地、鶴ヶ城の歌を唄つて、これを秋山の娘が、ヴァイオリン──西洋の樂に合せて、彈かうといふのだ。
其處で、婿方から來た結納の中に、其の方の又名高い畫師に描かした、一雙の屏風を贈つたから、此方も確乎賴むよと、秋山の爺さんが、念を推

して寄越したんです。
　外國との戰爭も、算盤で出來る今時分、維新の節は奧羽の中堅、蒲生氏郷以來世に聞えちや居るけれど、何のザジズゼゾの國の城一ッ、と若氣のいたり。いや、こんな奴は年を取つたつて、お若龍さ、」と横ざまに額の汗を拭ひ、
「其處で保養旁、東山の、おかみさんの許へ逗留をして、暢氣に寢轉んで居ると、一足後れて來た竹姬の同勢が、町方へ繰込んで、秋山の舊の邸へ御輿が据る。わッしよい〳〵とお祭禮騷ぎ、公會堂では其の秋山の娘の音樂の會がはじまる。花火が晝間ッからポン〳〵爰へ響くから、こりや午睡をしても居られまいと、其處で出掛けた。
　道草に、弓遊軒といふのかね、あの射割が殘らず命中といふので、自分ながら、勇氣凜々。城に差懸ると日が暮れたね、だが良い月夜だつたでせう。
　月も良し、時も良し、さあ來い。矢でも鐵砲でも持つて來い。自分が此處に來たからには、薄も唯の薄にあらず、瓦も唯の瓦ぢやない、苔蒸す石垣にも句を刻んで、末世に傳はるものにしようと。」
　我身ながらも賴母しかつた。

# 古城

## 二十七

　時に氣清く、月涼しく、松の梢に吹く風も、颯と我が袖に音信るれば、直ちに微妙の調を起し、葉末に繁き夜の露も、分け行く扇にはらはらと散れば、忽ち五彩の珠と成り、萑の下に埋もれた瓦も、一度我眼に映ずれば金鍬形の兜である。萩の草鞋、薄の旗。滿天の星、燦として、鎬を削るばかりの風情、古城の詩、呵して一氣にして成るべき也と、新三郎も意氣天を衝いて昂然として、あはれ此の城、掌に在り。開けば章となり、閉づれば句となり、唱ふれば韻、謠へば律、袖と草と風と月と劒と露と、鏘々として相觸れて、其の響皆金玉と、獨自ら許したのは、唯纔に、大手の趾なる、崩れた石垣の間を潛つて、左に外濠の一方をのみ見た時の感であつた。
「眞先に驚いたのは急に眞暗になつた事だ。大手先から遠く見た處では、唯姿の好い松が二三本、低い石垣の續つたのなんぞ、いかにもお手輕な。惡くすると、月夜に見る大川端の何處のか、妾宅の跡ぐらゐに見えたのが、何うだらう、急に然う暗くなつたもんだから、雲でも出たかと空を見ると、繁つた枝の裏に月は鏡のやうにかゝつて、其で光を透さないほどな森ぢやないか。
　右にも左にも前にも後にも、森々と、五抱十抱の大木、何の事はない見上げるやうな、黑革縅の勇士豪傑に取卷れた氣がして、大に臆を挫がれたね。
　木の香が身に染むと、草は濕し、露が骨まで透つて、寒くなつて、急いで、潛り拔けると、直にまた明くなつた。
　城の外で見たのとは、松の繁で遮しただけに、月の色も鏽つて凄い。
　振返ると、森は又尋常の樹立になつて、森々として、其の下を透した時は、幹と幹で十重二十重に取圍んだ下闇の濃かさ、凡十町と思つたのが、別に然までもなく、はなれ〴〵に、ばらばら立つて居るばかり。
　月の影も根まで射して、細いが、下には萑の中を、踏分けた路もある。而して寂して、今來た邊で蟲は靜に鳴いてるな。木精でもあるか、それとも、梢に五位鷺の巢でも造つた下を、運惡く通つて、怯かされたのであらうと思つた。

それから森を出ると、廣場だつたわ。夏草もザッと痩く、内證か知らん、處々に、瓜だの、茄子だのが作つてある。歩行いと尖つた角のある石、瓦の破などが、茎つた蔓草の中にこつ〳〵して、水溜が方々にあつて、些とも人の歩行いた跡がない、さあ、氣になるのは空井戸だ。

やさしくいつても、籠城の時分、官軍から打込んだ、大砲の彈丸が、黒煙を車でまはすやうな形になつて轟と落込んだあとだけでさへ、二三丈窪んだといふのだから、容易いわけのものではないのだ。何處に、何十尋といふ深いのが、草に埋れて居ようも知れない、と思ふと、蔓が爪尖にかゝるにも足が竦んで、うつかりは進めぬ。其も見遁しなら可いけれど、右からも左からも、可恐しい牙を喰違へたやうに、大石を組合せた、石垣が突出て居て、折曲る處に、からりと、其處らの様子が異つて、こはれごはれの壁があるかと思ふと、根こそぎに樹の倒れた處がある。明くなるかと思ふと、暗くなる、吹く風も同一冷さぢやないやうな、それでも身體は汗になつた。僕の埋井戸、拔穴、穽の類が可恐しいのだから、足にじり〳〵力を入れて、まさか這ふといふわけには行かず、成るがたけ、手に觸るものさへあれば、縋たり、石なり、力にして、縋り縋り一廓を一里と積つて、ものゝ五六里も足を引摺つた。確、七ツめを入つた角だと思ふ。何心なく前へ出ようとして、フト土の色の變つたのに心付いて、密と見ると、凹になつて、どんよりして、草の中に水があるやうだつたから、根強い薄につかまつて、伸上るやうにして覗いて見たんだ。」

## 二十八

新三郎は一息つき、

「今思ひ出しても悚然とする、而して顔を前へ出して、覗くやうにして、見れば見るほど、其の水の色のやうなのが、唯一個所窪んだだけではない、段々向うへ擴がつて、然も愈下へ低くなるやうだから、これはと思つて礫を拾つた。

密と向うへのせるやうにして、拋ると、ずぶずぶと沈んだやうだつたが、しばらくして、ヅンと響いて、谺を返して、どぶん、大洪水！」

ハッと思ふと、思はず、膝ががツくりとなつた。蹌踉と退いて、大盤石を眞平面、疊を合せたやうな石垣の石の、苔の滑たるにひツたりと背を凭せたのであつた。

來る時は、ひたすら路の心づかひにのみ、氣を取られて、一の廓、二の廓、唯假初に爪先上りとばかり覺えたが、思はざりき、狹、濠の深き事、足許に無慮、一千尺。瞳を凝せば、倒に望遠鏡面の海の月を、夜の山の頂から瞰下すが如くである。

路は盡きたかと茫然として彳むと、石垣に添うて一條、八重葎の根を蘭に、恰も螢の臀いたやうなのが、蜒りながら、長く高く通じて居た。

人の通ふと見定めて、心強く、譬へば、主の棲んで色の晴碧なる、可恐しき淵を遠かる思ひして、汗ばみながらすた〳〵と上る。徑は一曲り、二曲り、三曲り、四曲り、天に黄金を鏤めたる、星の中なる七曜星、宛然行く人の胸を繞つて、縱もて手足を操る如く、ぐるりと土堤を七曲り。一點の北斗鎭座の處、其處が丁度行留で、四邊は板の如き野となつた。

時に、山あり、俄然として目前に近く、天の一方を塞いで顯れ、水あり、油然と湧いて、湖の如く、渺として碧を湛へ、森あり、雲の如く生じて、暗夜に異らず、三方を遮り終りぬ。

惟ふに人の愛に來るとともに、其の濠來り、其の森出で、山迫り、星近づいて、天に神將、樹に怪禽、土には阿修羅、水には龍王、劒を拔き、矢を番へ、牙を鳴し、鱗を立てゝ、犇々と鎧ひ固めた、實に〳〵、令百由旬内無謀裏

獄の奮闘や見ゆ。

さては本丸のあとかと思ふ。心一たび轉ずれば、奇なるかな、天の川樋に流れて、山の姿、枝の如く、水には鯉の閃ると見るまで、松に四阿、樹立の外には遠花火・夜商人の燈かして、池の面、月の面、水淺黄の空を流れて、すら〳〵と星が一ツ。

其の光、時に上へ線を曳いて消えた處に、一座、見上ぐるばかりの塔が見える。

新三郎は其處こそ、此の城の絶頂と思つたので、いで〳〵と心を勵まし、北斗の星に面を向けて、衝と進んで、手探りに草を撫でると、石で疊んだ段が知れた。

五段六段、段を攀づるに從つて眞直になつて、やがて踵を衝いて身の反るばかりに急だから、兎角に及はず、兩手を堅手と草に縋ると、嘘を卷いた葛や苔や、裏葉風に白く亂れて、露のばら〳〵と降る中を、空ざまに颯と輝いて、眞蒼に飛んで亂るゝ螢、幾百といふ數を知らず。

途端に危く、眞倒に、手を放して落ちようとした處、辛うじて身を支へて、新三郎は生れて以來、はじめて不知火の海の底を潜るが如く、雲の懸橋を渡るが如く、大鵬の背に乗るかと覺えて、半ば夢心地に身を擡ちて、纔に足を踏留めると、淡い火の塔の闇をすつたた、螢は一ツ消え、二ツ消えて續いて一度に何に下へ落して眞暗な中へ、颯と入ると、穴の半が明く見えたが、熒暖地輪を貫いて井戸ありと見る〳〵、内、上から一なだれに蔓つた同一葛の葉の、葉うら、葉うら、葉うらに隠れ、葉うらに隠れて、纔に三ツ四ツ消えもやらで、其處ぞ底深しと知るべきをなすのみ。

## 二十九

新三郎は城の中の、我を捕らむための穽かと疑いたか、然ず、俗にいふ、備當代の湖の時、海村戸の口に通ずる抜穴か、非ず。これ蓋し三百年來龍を貯へた穴藏で、籠城の折から其の底を穿つて取出したが、水晶の如くに凝結したのを鶴の嘴で突碎いて、辛うじて使用したと傳ふるのである。

此の穴のある處、天守の跡で、城中の絶頂であるから、一望、曠野、森颯と退き、山衛と展き、濠は目の下にかくれて、新三郎は一人、雲の中、天守の上に、豪める石像に似て突立つた。

大手から望み見て、土壇六尺、小風に過ぎず、望らば見えなむといへる者、正に此處に於て討死す。

出來き、降まり、頂を連ねて、近く遠く、望み、城の周圍凡五十里、天然の城壁たゞに二重ならず、三重ならず、金星あり、[illegible]の峰は其處か。水星あり、備當代の瀬は彼處か、近く日夜の[illegible]山、遠に日光山、宇都宮、見果てぬいろ〳〵の雲も城の模様に異ならず。

「ねえ、おかみさん、今夜これで二度會つた。丁度光刹、穴藏の縁で、お前さんに遇つた時も、白い旗のやうな雲が、銀河と一條ならんで、一條ザツと聞いて、茫乎月を隠して居たらう。

もう氣が遠くなつたやうに、餘り大きな城の景色に、見負けた僕には、晝だか夜だか解らなかつた。

唯其、熊ケ谷をはなれるとすぐに關東、奥州の入口からづツしりと大きな重いものゝ壓つたやうな、其ばかりか、梟は鳴く、朽木は光る、見晴の田圃にも、那處此處、灯か、それとも鬼火か、血か骨かと思ふと、又野にも山にも、敵の旗が群つて居るやうな氣持がする。」

地の底には吶喊の聲。

其處に立つは我ならず、正に一個史中の人傑、結束して此處に上つて、山野を壓した敵に望み、白旗を擧ぐれば晝となり、黒旗を動かせば夜が來るやうに思ふと同時に、

一逆もいかん、とても僕のやうな者が、此の城を文字にうつして、ヴァイオリンの音に合せるなどゝは思ひも寄らん。唄つて人に聞かせる處か、聴けてくれを呼んだつて、聞えやしまいと失望した。

いかに、自分を卸らねばッて、ぬッと押し入つて、然も夜、天守まで登り詰めた、洒亜々々さが可恐しい、と恐入つて氣恥しく、穴へ入りたいやうな氣がして、しばらくあの鹽藏のふちに、腕組をして俯向いて居た。

串戯ぢやない、全く、其の、強い畫の光、にも引入れられさうになつて成らないから、待て、こんな意氣地なしは死ぬも可いが、」

新三郎は、樒を噛んでいつた。

「忠臣義士が討死のあとだ。竈将ものが突つちや、甚迷惑なことだらう、と、やう／＼顔を上げて、見ると何うです。」

我が影ならぬ女の姿、朦朧として二ツの幻、雲に漂へる趣あり。

思はず、衝と眞直に立つと、一人は左へ、一人は右へ、今一人は其の右へ、おされ／＼にぐる／＼と、巴の如し穴藏のふちを、一まはりする、重に三度、いづれも墓の色具合で、三人、背後になつて並つた、一所で、さて

ばたと齊しく倒れようとした時、凜として清しい聲で、

（此處へ、來たは誰だえ。）といつた、（此處へ來たのは誰だえ。）といつた、凜とした清しい聲で、（此處へ來たのは誰だえ。）といつた、いつたのは竹姫であつた。

二人はハッといつて土に手をついた。いづれも魔所だと知つて居たから、互に朧氣に顔を見ながら、不思議の邂逅に言を交はさず、無言のまま物凄れに、薄暗して城を傍した。中に萬いて最も餘裕のあつたのは竹姫で、こゝに坐して鬼神にも齊眉かれ給ふべき、女性であるから。

## 三十

「言語道斷、女の子に叱られて、ハッといふやうな野郎が、これ、豆將だつて、旨く切れよう道理がない、況やだね。

何あとで考へると件の姫公も、可恐しい紛れにあんな事をいつたのだらうけれど、何うしたのか、あの時は、何故此處へ來た、と一言いはれて、實際思はず天窓が下つた。

其處がといふと、今いつたやうに、鬼に……おやない、此の竪の安帽子を、向うへ投げて一番失して、聞く打てゝ居たもんだから、はッ、はッこんだ、三太だ、」

自ら轉るお姫様に、一緒に降るぢやありませんか、僕、我知らず土下座をしたね。

姫公が寂しさうにあおつて、全く其の時は、僕を叱咤すべく、天守のあとへ天降つた、女神のやうに見えたんです。

名代のお轉婆で、人さへ留めなきや馬に乘つて、猪狩にも出かねないんだから、大方、人の寄附かない城へ、づか／＼入つて來たんだらう。

だつて豈夫、其の人だとは思はなかつた。勿論姿は見た、顔は確に姫公の顔と見た。そりやいつも一所に饒舌つたり、秋山の娘と一所に、三人で、氣軽だね、江戸の市中を下可憐しくもなく、馬車に乘つて歩行いた事なんぞあるんだから。第一。そんな心がけだから、城を見て恐入るのだ。

ね、此處だ、聞給へ、先刻、お房さんに話したのを、お前さんも聞いたでせう。そら、譬喩の穀の一件よ。

青天井も同様な、濱の家に葭簀を持つて、女房のくれる貝殻から、龍宮のひそ／＼話を聞くことが出來るやうなら、何の倉橋の木蔭でツ、手に唾して取るべしだ、慥くことは些とも

ない。」
　古城の歌我に於て何かあらむと、新三郎は憮然として、
「然るに、其をです。其の蟷螂の殻は打棄つて、杜戸明神の崖端で、別莊の令孃が彈ずるヴァイオリンの音に駈けつけて、いやはや、同一巖に腰をかけて、ウン成程など〻、隨喜渇仰を遊ばすやうな料簡方だつたもんだから、姬公の馬車に合乘を名譽と思ふやうな事になる、其の合乘を名譽と心得る始末だから、おかみさん、僕今姬君を稱して姬公といつた、いつたが、今夜がはじめてだ。現在、先刻までは奥平伯爵の姬君と思つて居たね、姬樣といつたですよ。
　何うです、其姬樣が御婚禮のひろめの席で、唱ふ歌を、仰せ畏んでこしらへるのを、天晴名譽と心得るやうだから、いざとなると、松風の音にも腰が拔ける、吶喊の聲と聞えしは松風なりけり世の中はだ。然も何と、口約束をした汝が姬が西洋だらうが、何だらうが、絲に合せてチンなど〻、御入來のお客樣のお聞きに達しようといふんぢやないか。
　何ともどうも、姬のろの隊長、二本棒の繼棒子だ。男子天窓に油をつけて、滿座の中で、汝お姬の絲に乘せる歌をつくらうなど〻あきらめたら、首く〻りの他に何が出來る、大きな咳だつて出やしない。況や古城の歌をやだね。
　切めて、切めて、龍宮の聲を聞くことのならぬ耳でも、城へ入る前に此處へ來て、お房さんの松毬から、風の音を聞いて置いたら、怎麼にだらしなくはなるまいもの！
　悔、惜しいが仕方がない。一敗地に塗れて、又再擧を計る勇氣なしだ。しかし何につけても、姬樣や秋山の娘は邪魔だ、二度と又顏を斷じて見ない。で、此のま〻おかみさん、東山へ一所に歸つて、翌日は東京へ出奔だ。かけおちです。
　敗軍の將は共に兵を談ずべからずだけれど、姉さん、君のお酌を賴む。いかにも松毬が氣に入つた。蘇つたやうな松風の音だね。大きいもので波々と一ツいから、敢て玉手を勞する、呀、構はず、鐶を倒に持ち給へ。」

# 姬神

## 三十一

「あれ、松坂さん、何方へ。否、此のま〻お歸り遊ばしては、此の娘が可哀相でございます、お媒妁人なんてすもの、默つちや居られません、お開きになら私の方がいたしませう。」と輕く留めて打微笑む、女房の袖の端を、お房は下に居て、引いて、慌しく、
「もしな、おかみはん。」
　新三郎は左右を見遣り、
「いや、何處へも行かない、何處へも行かないが、こんな話を、面と向つて遣られちや、僕だつて大いに照れる。あとでよく姉さんの氣も聞いてくれ給へ、僕は心の變らないのを、神明に誓つて來る。」
　かた〳〵靜に其の胸を鎭めようと思つたので、森の中を透して尋ねた。
「お堂は誰を祭つたんだね。」
「摩利支天樣ですよ。」
　思はず、
「荒神だ、醉つて居ちや失禮か。」
「否、此處の摩利支天樣は、優しい、天女の御像で、殿方の弓矢、劍術、女の針仕事まで、一切、藝事をお授けの御願だと申しますよ。」
「南無、藝術の、はツ。」
　頭を下げようとして、其ま〻、よろ〳〵と前へ、新三郎は廂を出た。
「謹んで隨縁し奉らう、おかみさん、直ぐ歸る。」

行つて入らつしやい。」

「お早く戻つておくれやす。」

虜中白骨行應朽
樓上紅粧倚思歸

「キーッ、」

きり〳〵と齒を嚙む音、飯豐猿の惡權太、五尺の鐵砲の肩を入かへ、銃口を今、御堂の路へ獨出た、新三郎にじり〳〵と向けた。

背後でぱちりと扇を疊んだ、秋山の令孃衣子は、靜に提げて居た、錦の袋、ヴァイオリンの小さな包を、急に袖の下に高く抱へたのである。

當時樂壇に美名を馳せて、斯道の工匠といはるゝ人、今日故鄕の公會堂に、小學校の生徒の唱歌、敎會連の讃美歌をまぜた、女敎師のオルガンなど、十數番の番組の其の眞打を厭な顏もせず勤めた歸途。

裏の畠でポチが鳴いたり、向うの山へ狸が飛んだり、エン、ヤラヤアと腕車を推したり、耶蘇が罪を淸めたり、雜巾かけたりする對手の、奏樂者お衣さんは、氣の毒で見て居られぬと、臨席しなかつた竹姬の、鶴の城の拔け驅なんぞ、衣子は夢にも知らないのであるから、其の姬のために城の歌作らむと、先んじて會津下りをした、人も知り、互に許した新三郎。扨て姬いよいよ入國して、全市縣の湧くが如く、菩提所の坊さんまで、輪袈裟で伺候する中へ、先生顏出しもしないので、姬は心にかけないまでもと、氣を揉んで居た處。

音樂會も早く濟んで、幸ひ婦が一所でなし、折もよし、月もよし、歸りがけに東山、淸瀧までは程近しと、衣子は田舍の燕尾服、羽織袴がずらりと出て、宅まで送らうといふのを斷り、あれ御家老樣のお娘御、江戸さ一番の藝者を拜めとどいや〳〵、停車場のやうに寄り來る中を、颯と腕車で驅けぬけさせ、灯しかされた軒提灯の、七ツが三ツ三ツが一ツ、いつか背に遠花火、星はら〳〵と町はづれ、湯川の岸を東山へ、淚橋近うなる、畑の彼方に月の森あり。

傳へ聞く野郎構の摩利支天は、姬神にておはします、文藝守護の御誓、手習するにも、文讀むにも、裁さきの針を持つにも、幼き時から信仰して、甘えるばかりに願ひし御堂。

人は知らじ今夜の奏樂、當代の學者、學生、紳士、貴婦人萬衆が拍手の中に、上野、神田の大會に、奏づる時の比にあらず、我ながら自ら許す、心淸しき出來榮も、靈の前に、跪きて、鄕口の節の緒に縋ると、おなじ思ひのしたればならむ。

あら尊や。十年の苦學ありとはいへ、ボーゲン（ヴァイオリンを奏づる弓、）の持方一ツ習ひ得しさへ、皆姬神の御利益。

## 三十二

薔薇の雪の薫る時、電燈の花の輝く時、女王の如く迎へられて、自ら擧べりと思ひつゝ、己が姿を水鏡、うつす高峰の月や忘れし。

忘るゝとしもなけれども、年久しうして故鄕に來て、取紛れたりとはいへ、未だ御堂にも參らずと、湯川の瀨の音、松の風、森の影空に濟み、畑に星の露を眺めて、衣子は悚然と寒くなるまで、尊く畏く勿體なく、あはれ懷しくも床しくなりて、心漫に腕車を下りた。

其時、深張をついて下りたが、川風颯と裳を吹いて、袂涼しく肌冷く、其朱鷺色の長襦袢も、秋の草の絽の一重も、唯肩にかけて朝霧を身に絡うた心持の淸々しく、駒下駄も浮いて輕きに、土筆蒲草に馴れたる路なり。舊より畑中の薄を分けても腕車が通るのではないのだし、御堂へ參つて裏路から、東山もつい近し。待たせて置くに及ばずと、供の車夫を歸さうとして、顧ると、畏つて母衣を撥ねたが、譜本を包んだ風呂敷包を、腰掛の中へ入れようとして、

焦茶の大鶴模樣の繻袢を外す時、膝の上に乘せて居て、今下りると一寸置いた、ヴァイオリンを、嘴込へ心なく下したのを見て、自分も人も唔む處と、衣子は不圖氣になつた。

其のまゝ蹴草に負けて蹴すが、心無いやうに思つたので、取棒へて涼傘を。

ヴァイオリンは衣子が自分に。それから御堂に詣づる路、幼肌染の畑を縫に、枝豆の葉影を拾うて、羅に染む夏の月、遠音に村の若者が、妻を呼ぶ尺八のをかしき音も、姫神の御前に導く、草刈る童の笛かとばかり。

衣子はいそ〳〵と蓮歩を運んで、ぽッさり行當つた唐黍の自然生。

潛つて土手へ上らうと、見るや向らの薄の中に、行燈に青き暖廻の結るやう、一軒、月に葦簾の茶屋。草の夜にあからさまであつた。

時に男の高調子、束の間も忘れぬ聲、後姿も正に其の人。

清瀧樓の書窓が覺めて、月の湯川を辿りしが、さるにても微妙きかな、御堂に參るは我がためのみか、雪にも花にも手を携へて、おなじ閑生に遊ぶ人の、寞爾をともに祈るにこそ。しばらく逢はぬ戀人なり。衣子は飛立つ心を儀めて、輕く不意を打つて驚かさむ、搦手からか、大手からかと、四邊を闘すゝ不思議の怪物。

飯豐氣の權太である。

つまも縺れる葦簾の中へ、敵意を挾むに相違がないから、衣子は、忍びやかに、樣子を見て居た。然るに清瀧の女房が、過去りし物語と、新三郎が鶴の城の述懷とは、後一句、是一語、極めて濃かなるものであつたが、時間は半時に滿たなかつた。時々男の爽なる聲、衣子には意を傳へず、きれ〲に聞ゆるばかり。唯諳へる事のみ明に知れて、これを其の人の瑕に瞰と、柳眉を寄せるばかりであつたが、しかし、其の間に權太郎が爲せる擧動は、あまたたび衣子の見る目を驚かしたのである。

他なし唐黍の莖を、向齒に嚼り切つて、密と手で倒にしたのである。衣子ははじめ、土を嘗めるのかと、傍目も觸らず視める間、泥に片頰を埋めながら、犬が干物の骨をしやぶるが如く、がり〲と喰ひはじめて、やがて根を放すと、横にして、膝を立て、兩手で握つて、穗の下へかぶりついた。が、頭を掉つて喰切つて、殘さず葉を拔ると、づんどにした青い軸、手に長きこと約五尺。

ぺたりと傴僂ひ、兩膝を兩び折敷き、胸にあてゝ、眞直にして、尖つた先を、衝と件の葦簾を的に直向けた。お房の姿の動く時、新三郎のものいふ時、清瀧の女房と、いづれを打たむと二人の一人、迷ふか銃口をまはしながら、眼を光らし髮を動かし、足を踏ばり、身もだえして、手許の顫術、息を白く、消すまじと、吹いて、フッ！　フッ！

飯豐山の獵夫は、瞋恚嫉妬の炎を吐いて、つらき女か、酷き男か、とりもち顔の女房か、唐黍の鐵砲に吐く呼吸の火繩をかけて、唯一發と狙ふ身構。詩吟一聲、新三郎が床几を放れて路を出た時、肩を搖かへ、踵を轉じて、驚破！

衣子は見る目も危く、堪りかねて、トン、と足踏をして、つゝと出た。

惡權太驚いてヌックと立つたが、縁の下に犬と寢るから其の女主人の家主樣、摩利支天の御像見るやう、艶麗に氣高い、姿を一目、あとしざりをして、白眼、唐黍の銃を投げると齊しく、踵を返して背後影、猿より疾く見えずなんぬ。

## 簪の質

### 三十三

「あなた、さ、お藥、あとで清水を召食れ、さ

あゝあなた。」

水呑を片手に、片手には、露の小粒の薬を摘みて、衣子は、新三郎の然も痛苦に堪へないやうな、眼を塞いだ顔を覗き、

「まあ、苦しさうだこと。松坂さん、あなた大層酔つたのね、一口召食れ、清心丹ですよ、合薬ですよ。」

五三の桐の定紋を、金蒔絵の蝋色塗の香箱は、薬を振出したまゝ、しまはないで、綴錦の御守殿持の紙入と一所に、浅黄の繻珍胡蝶々を白抜なるを、心なしの太鼓にきりゝとしめた、帯の間に挟んで居る。新三郎の口に寄せた薬の色は、薄曇りの月に、瑠璃の宝石は、本堂の狐格子の蔭の中から一輪さし出づる燈明の灯に映じて、共に燦然として輝くのであつた。

新三郎は階の上の眞正面、観音開きの片扉に、ぐッたりと背を凭せ、敷居に腰、両手を膝頭に組んで、砂だらけの廻廊に脚を立てながら、仰いで、眼を塞めて、幾分の涼さを得むと欲するやう、後腦を板戸に擦りつけて、切なさうに口を利かず。

彼はお廚の葦簾張を辞して、森の下を一文字に突進して此處へ来ると、はッと勢よく蹲踞するや否や、はじめから悩める態度であつた。

衣子は悪權太を見送つて、横に芒原を抜けると直ぐ後について来たのであつたが、二三度声をかけても返事せぬ、新三郎の様子を見て、薬をと思ふ、水がなし、手水鉢は木の葉の下ずみ、心づいたのは葭簀の茶店で。

それから御堂を伏拝んで、男の傍へヴァイオリンを差かけると、扇を帯に、俯向いて深くさしたが、急いで引返して駈出した、おとなしやかでも、學校育ち、悪うなると、やがて、水呑ともう一ツ、薬罐を借りて戻つた、敏い事。

新三郎は其の間に、一度眼を開いたが、下蔭を彼方に走る秋草の姿を窺はむとはせず、煩げに、じろり、傍なるヴァイオリンを一目見て、又眠る、酔に蒼ざめた顔の色は、一層惨憺たるものとなつて、無量の懊悩を露して居たのであつた。

「あなた、あなた苦しいの、又いつものやうに吐いちや不可ませんよ。身體を緊めますから、我慢しておあがんなさい。さあ。」

身體を男の横にして、

「飲まして上げませうか、一寸、いつか貴下、矢張酔つて苦しがつた時、姫様から紫雪を頂いて、夢中で姫様に背中を叩かしてさ。そら、あとで耳朶を見て大テレに照れてやつて、この薬は紫の雪ですな、お手づからでなくッては頂戴出来ない、天上の靈薬、恩賜の紫雪だつていつた事があつてね。

そんな窮屈なんぢやありませんよ、私のは一寸、君に奉る御薬よ、胡蝶と申す女でなくッちや厭ですか。」

警句一番して莞爾すると、薬は吸ひ込まれたやうに美しい掌から手も動かさず男の口。

ガリ〱と邪險に噛んで、唇に近かつた水呑からがぶりと一杯。

咽喉に支へたか、がぶ〱と飲んで、ごくりと遣つた。

新三郎は我知らず、水呑を取るに先んじて、衣子の手首を壓へたので、纖き腕は力なく揺れて、水は膝へざぶりとかゝつた。

故とたしなめるやうに、

「亂暴ねえ、御覧なさいな。」

といひながら左の袖を上へ上げて、軽く振動かすと腋あけから、ちぎれたやうな襦袢がこぼれる。

「おや、手巾を落したよ、」と、直にかけた男の膝、朱鷺色の霞を隔てゝ、衣子は密と手を取つたが、水に濡れたかヒヤリとした。

「冷いことね。」

## 三十四

襦袢の袖の濡れたまゝ、はら〳〵と媚かしい、年紀も二ツ三ツ少やいで、衝と廻廊を彼方へ去つた、欄干の橫木十字の角へすらりと立つて、乘出すやうにして、高く月に水呑を透かして、斜にして、くるりとまはして見た。

底にまだ殘つて居たから、猶豫はず、ぐッと干して、不圖、

「水杯ね、」

と思はずの獨で笑つて言つたが、心付いて、

「おゝ。厭な。」

背後ざまに其の水呑を潑すと、亂れた袖に引かゝつて、袂に入らうとするのを、はづして、帶の結目に伏せた。振返つて、斜に見ると、新三郎も又目も開いて視めながら、得もいはれない顏をして居るので、衣子はあらたまつて極の惡さう。默つて、しばらくして、優しく睨む眞似をして、醉の覺めたらしいのを嬉しさうに、

「醉つてます、詩人。」

「醉……」

聲は異樣なものであつた、頃刻くひしばつて無言であつたためか、噛みしめた齒に、かすれかすれ。

一醉、醉、醉はないで、令、令孃、お、水を最う一杯。」

「上げませうか。」

衣子はいそ〳〵傍に寄つた。並んで、水差を取りながら、

「氣がついて？ あなたまるで夢中だつたわね、先刻私が來た時なんか、傍へ寄つても顏も分らないくらゐなんですもの。お藥を上げませうと思つても水がないもんですから彼處の茶屋へ行つて借りて來たんですよ。知らない顏ですから、いきなり道具を借りるのもをかしく思はれると惡いから、簪を抵當に置いて來たの。否ね、其には及ばないで貸してくれさうだつたんですけれど、また世帶を持つてね、お金子に困る時、何かの、あの稽古だと思つてね。」

一たび其口を開かば、正に城をも傾くべきが、簪を質に器を借る、松に羽衣を脫ぎかけた、三保の浦の風流あり。拔いたのは、桔梗の花形に、寶石の星を聯ねた、金脚なるものであつた。

「經營慘憺でせう、だつて苦勞をさせるんだもの、貴方、埒濟まない譯ね。」と莞爾。新三郎は默然たり。

「でもお酒だから可いんだけれど、これがもし本當の病氣だつたら、何うでせう、」

「……」

「眞實よ。」と老實にいつて、はじめてほッと小さな吐息。

闇に目を開き、

「眞實？ 何が眞實ですか。」と屹といつたが、要領を得ないこと。

「眞實ッて……、え、眞實ッて……然うぢやありませんか。あなた眞蒼になつて苦しさうで、見て居るものが辛くつてよ、病氣でこんな容體だつたら大變ぢやありませんか。」

「打棄つてお置きなさい。」

優しい目で、

「又？ 屹とよ。謂ふと我儘をいつてしやうがありやしない。何時かもこんな亂れね、ホテルの歸途に、築地の海岸を二人で步行いて居たら、何うです、急に思出して、逗子へ行きたくなつたつて、これから直に出掛けるなんてさ、憎らしいから、勝手に御執心の龍宮の聲でも聞いておいでなさいといつたら、まさかと思つたのに終汽車で、杜戸まで行つて來てね、それなんですもの。」

といひかけて、

「忘れて居たこと。さあ、冷水、もう醉つた介抱はして上げまいと思ふけれど。」

三十五

姉が弟にいふ如く、

「だつて可哀相だから、厭ね、お酒がまだ香ふよ。ほんたうに御機嫌ばかりぢやありません、今夜なんざ、私のだつて[illegible]だわ。」

「打棄つて置くが可いです。」

「打棄つて置いて何うするの、」

「死んぢまへば其までです」と擲つやうに云つて面を背けた。

其の顏を追ふやうに、情の籠つた、とかしい、涼い目を働かして、

「また、そんなことをいつて、姉さんもう世話をしないから可い、駄々兒ッちやありやしないよ。」

「えゝ、駄々兒ですとも、工匠！」

向直つて[illegible]は言ふ聲に力を籠めた。

「僕は駄々兒です、意氣地なしの骨頂、野呂間の素天窪、二[illegible]の[illegible]だ、貴女のやうな、[illegible]の[illegible]で、[illegible]の花[illegible]で、下谷一[illegible]といふに、[illegible]つたやうな、[illegible]いたんぢやありません、[illegible]つた[illegible]をして[illegible]なさい、へむ、一人[illegible]さん下谷にござるだ。」

[illegible]はホンと手を拍つ。

「そら、ね。」と笑つて居る。

「何の、何の人をつけ、おもしろくもない、意氣地アなくても、智慧がなくても、これでも江戸ッ子のはしくれだ。チャンと打つけれや目を廻す、火事に如才はございませんが、ヴァイオリンの合方で、棟割長屋の、夜があけて堪りますか。小兒は泣出す。犬は吠える、お隣合迷惑で大屋樣御難儀だ。串戯ぢやない。」

「そら、ね。」と笑つて居る。

「お衣さん。」

笑つて答へず。

「令孃、令孃。」と、聲高に呼んだ。

「厭ね、」

「貴女惚れてますね、僕にぞッこんだね、ぼッと來て居るんですな。」

「知らないわ、私。」

「否確に惚れて居ます、又、惚れて居なへッて、此の世話が出來るものか。世の中にや、貴女に一寸見られたばかりで天窓からぞッとするものがある。[illegible]ござあ[illegible]なんか[illegible]まして貰つて御覧じろ、[illegible]の本[illegible]だ、僕も惚れてます、何のことはない、ひれふしてですな、御足の指に接吻し奉るくらゐ惚れてるんだ。兩方惚れてるから、此の縁まとまる、大吉だね、片や奏樂者片や詩人、凄い取組でございますな。白鼠細工の、天狗の孫見たやうな小僧の呼出しで、陸軍の少將が馬に乘つた立行司だ。」

「そら、ね。」と笑つて居る。

「ね、惚れて居ませう、けれどもですな、貴女は其の位置を以て、其の風采を以て、甚だ立入つたやうですが、且つ其の容貌を以てだ。いふまでもない又其の藝術を以てだ。

一朝すべてを泥土に委して、是を車夫に與へようとはしますまい、馬丁に與へようとはしますまい、譬ひ其の男に惚れてもですな。」

「ね。」と唯笑つて居る。

「又間違つて與へてならうか。今あなたが、其の身體で車夫や馬丁の嬶々になるといへば、天が許さん、人も許さん。人ごとぢやないけれど、僕も敢て許さんです。近い話が、華族樣だ、伯爵の令孃[illegible]子姬が法界師と駈落をすると云つたら、貴女は何と、默つてこれを許しますか。」

「そら、ね。」と笑つて居る。

## 狐格子

三十六

新三郎は眼を瞠らし、

「敢て許さんでせう。けれども、車夫といひ馬丁といひ、法界節といつて、更に人を傾はさず、一室を營んで居るものなら傳讃すべしだ。貴女は何と、くどいが、其の位置、藝術、風采の一切を以て、これを城の番人に與へますか。

城の番人！

僕がこゝにいふのは、戈を横へて城門に立つて、敵を防ぐ男だといふ意味ぢやない。大手前の番太郎だ、菖蒲革の袴で六尺棒で、徒士が上つても土下座をする、いや、其にも劣つた、折助仲間、紺實の類、いざ鎌倉といふ時にや、溝の埋草にもならない野郎で、一人扶持の食潰し、あはれんで言や、不便なもんだが、手厳しく掛合へば、穀盗人、賊臣ですな。

得て然ういふ奴は、城の草を取らしても、蔓に、目をまはす、當然だ。」

切歯をして、

「埋草になりや、車前子の方が餘程おためだ。今僕は、僕は今、畜生！ 此處からも判然見える、鶴ヶ城に對しては、草にも劣つた、折助仲間紺實の類です。打棄つてお置きなさい。折仲の酔ッぱらひを介抱遊ばしたなんと云つちや、御家老の嬢様お身の上です。貴女お手討もんですぜ、何の事はない、文金島田の投首で、紫の褄模様、緞子の帶を竪矢の字、緋縮緬の蹴出か何かで、鬱金の扱帶を長く引摺つて、奥庭の松の立木に縛られて居る方だ、あゝ、いたはしや、影が薄い。

御嬢様お情で、旨く行つた處で寺戸口から落人で、そら、乳母の家へのめずり込んで、其處で法界節といふんですな。第一貴女御両親をどうします。打棄つて置いて早くお歸りなさい。お衣さん歸つて下さい。」と乾といふ。

「貴方、私一人だわ。へゞれけのレケちやつた處なんか見られたもんだから、極が悪いもんだから、いろんな事をいつてさ、あなた、お酒をあがると何時も然うよ。私やもう厭だけれど、お父さまなんか、其處が好いんですとさ、そゝ、何時でも然ういふの。新三郎さんが酔つていふ、あつぷう／＼を一緒めにすると、一陣ぐらゐ、進めッて、號令が出來ますとさ、現在のなんぞ例より壯だから、三軍を叱咤するのね。」

聞きも果てず、

「ど、ど、何ういたし、ぐうの音も出ず、ぐうの音も出ないんです。城、城のしの字も出ないんです、城の歌なんか出來るもんか。」と思ひ係つて心の裡を。

衣子フト氣がついて、

「あゝ、貴方、それでお酒を飲んだのね……」

「道理で、嬢様が入らしつたのに、顔出しをしても下さらないでさ。それだから今夜、東山へ、お迎に行かうと思つて來たんですよ。畑の向うまで來ますとね、思出したと云つては勿體ならございますけれど。」

片手を上げて伏拜み、

「此れ、摩利支天様は、私が小兒の時から信心してね、まるでおねだり申すやうにして居たの。新さん、あなたや、私たちの神様ですよ。何うぞ、新さんも立派なものが出來ますやうにと、お願ひ申しに來たんですわ。何もそんな顔をしないたつて、私たちの思でも出來ますよ。」

「何うして！ 何うして！」

「否！」

「企及ぶべからず。せめて濠の埋草なら可いけれど、折仲だから迚も不可ん。しかし、口惜いです。實に無念だ。僕はもう、爪でも長かつたら、一人で、城、城の石垣に切めてひつかき疵でもつけて見たい。」

「まあ、あれ又そんな顔をしないでさ、ですから御酒なんかあがるなよ、よ、新さん。」

と眞心から、引添うてしめやかに、

「父上てばね、あなた、あなたは醉つてても車を叱咤したり、號令をかけたりなんぞなさらないでも可いの。他に仕事があるんだもの、ね、上げますよ。冷水でもあがつて、判然して下さいよ。だから、いつでも、およしなさいツていふのにね。」

果は弱々と言ふのであつた。

三十七

「眞實に、醉つちや何にも出來ないわ。」

「お待ちなさい！」

新三郎は片膝を立てゝ開直り、

「何醉つちや出來ぬ？以ての外だ。此の、此の酒あつたればこそ、未だ幽に絲のやうな望を繋いで、薪に臥し、膽を嘗めて、僕も聞いた、——此の、藝術守護の摩利支天尊の破堂の縁に立籠つて、纔かに莚旗を立てるの勇氣があるんです。

然うでなくツても、僕をして酒なからしめば、心太、[illegible]の中に海神の宮殿を見る能はずして、[illegible]者の姿に魂を飛ばす折伸だ。狭の[illegible]、[illegible]きことへ寸二分、散髪の分け方骨髄に入つて、[illegible]に精が出來てね、巨匠の袂にぶらさがつて、[illegible]の[illegible]で、死刑をうけ、魂[illegible]に[illegible]ないで、愛神のお茶漬、晩餐の餌ともゆきませんや。一膳めし小僧なんか、何を食つて活きてるだらう。車夫をやるでもなし、馬丁をするでもなし、何をして活きてるだらう、恐らくわれ／＼を喰つとるのだ、われわれが其の餌食であるとして見ると、僕なんか、お香物でお茶漬の方で、貴女なんざ本膳七五三だね。否、事實。あゝ、おなじ餌食なら氣の知れない愛神にやられるより、如かず、龍宮の細語を聞かうと心がけて、昔から手心の知れた魚の餌食となる事だ。」

堪りかねて、

「貴方。」

「……」

「新さん、私一人だわ。」

「……」

「私一人だわ。」

「……」

「私一人だわ、新さん。」

「勿論、秋山令孃唯一人、僕は醉つたテレ隱しに、見榮をいふのでも、太平樂を並べるのでも、駄々を捏ねるのでもありません。僕はもう些とも醉つちや居ないんです。お互に身體は淸し、何にも疾しい處はない。僕は折助たることを知つた、仲間の女房に女工匠は荷が重い、實に天下の不經濟ですから、斷然と別れませう。相濟まん。全く相濟まん。かゝる車夫馬丁に劣るものとは知らなかつた、あなたと手を携へてと思つた大なる望に、しかし、貴女を欺いたんぢやありません。また自ら欺きもしなかつた。自分は信じて居たんだが、已を知らざる、甚しいものであつたんです、別れませう。」

「まあ。」

手にひかへた冷水の水呑を取つて、新三郎はぶる／＼と震へた。

「水杯。」

「え。」

「謹んでわかれの水杯。」

縋りついて、

「ま、ま、待つて下さいよ、新さん、全くなの。」

「もう同一ことは言ひません。」

「ぢやあ。」

衣子は口早に息忙しく、

「それぢやあ、私、私、折助でも仲間でも可うございますよ。新さん、そんな、そんな無理ぢやありません。」とばかり、呆れ顔に茫然として、餘め事に、

「私は、涙も出ないんだもの。可いわ、折助でも。」

「否、そりや不可ん、そりや不可ん。それだと僕が今謂つた、天人ともに許さん事になる。第一差配さんが迷惑、小兒は泣出す、犬は吠えるだ、折助長屋にヴァイオリン。」

新三郎は傍に蒼く闇に光ある、秋野の露に月の影射す如き、錦の包の樂器を見て、片手にこれを取上げた。

「先づ、其方へお取りなさい」て、僕は杯を此方に持つ」と云ひかけて、衝と立ち上つた劒幕に、桔梗、刈萱、女郎花、あはれ、吹き靡けたやうに衣子も立つた。羅の袖もはら／＼して、

「何うするの。」

「そして此ッ切別れませう。」

三十八

「それとも、今、たつた今、其のヴァイオリンを擲ちますか、ボーゲンを持つた手に鍋釜を提げて、折助の飯が焚けるか何うです。もう然う決心をして下さるなら、天人ともに許さないでも、山の中なり野末なり、これから二人で駈落しませう、何うです。」

「そりや、何ですけれど、いくらも私は。」

「ぢや、其のヴァイオリンをお棄てなさい、目の前で大地へ投げて下さい、松風や浪の音なら、擦違つても氣がつかないが、鎌蒲小屋へヴァイオリンぢや、目に立つて仕様がない。」

「だつて。」と人形のやうにしッかり抱いて、悄然としたのである。

「不可ますまい、又、可いッたつて、僕がさせない、天がさせません、人もさせない、思ひ切つて別れるです。」

衣子は堪へかねて、身を揉んで、

「だつて、今、今、だつて、新さん。少し考へさして下さいな、もう何うしたら可いだらう。」

「いや、決心は瞬間です。僕だつて、僕だつて、此の、此の決心は明日までは堪へられない、一秒時。」ときれ／＼に云つて聲をくもらしたが、

「え〻。」といふより、其の自ら誓つた、別れの水を毒の如く、立突つたま〻ぐッと仰いで、衝と投げると、水呑は白い絲を曳いた。

「あれ。」

衣子は恰も其の地に落ちざるに先んじて袖で受けようとしたやうに、階からドンと下りた、立竦んで、見る／＼涙頬を傳ひ、

「まあ、まあ、新さん、それは借りて來たのぢやありませんかねえ。」

痛切なる聲して、新三郎、

「其のかはりに置いて往らつしやつた簪を、茶屋の娘にやつて下さい。」

衣子は瞬もしないで居た。

「ぢや、又杜氏の娘さんが出來たんですね。厭です、いくら、いくらあなたが、そんなでも私は厭です。簪は記念といふぢやありませんか。それだけれど、私未練ぢやないけれど、こ〻で此のヴァイオリンを棄てる決心が出來ないから、あなたの心が鎮まるまで一度お別れ申しませう。お別れ申しますよ。別れて參りますけれど、路々も考へてね、直にも引返して來ますから。」

と聲も心も沈み果てた、頭を垂れて一歩二歩、衣子のうなだれて、行く姿、優しく氣高く、うつくしい、唯見る此の世の人にあらず、月宮の美姫羅あつて、流羅の雲に乘れるが如し。

新三郎は爪立つて、伸上るまで見送つて、唯一聲、

「お衣さん。」

片手にヴァイオリンを抱いたま〻、衣子の最後に見返る時。

「たとひ僕と別れても、あなたはマイステリンとして、些とも變つたことはありません。」

「あなたは？」

「僕は。」

一詩人。」といつて爪尖に力を入れた、衣子は駈出して戻らうとしたか、一寸も動かず、描ける如くに突立つた無人の姿を一目、いはれあるべし、聞くが如くんば、我楽を棄てざれば、海神の宮殿に参じて、城の歌作ること能はざるべき也と、さかしき人は歩を轉じて、蝶々の帯、薄の裳、寂しく松吹く風に消えたり。

新三郎は倒れようとして、撞と狐格子の扉に凭つた、響に搖れて、がたりと上から、肩にかゝつたものがあつた。

「まあ、何う遊ばしたものでございます。」

來たのは清瀧の女房で。

三十九

「お房も案じて居りますよ。おや、今入らしつたお嬢様は何處へおいでなさいましたえ、松坂さん、もし、松坂さん。」

「おゝ、おかみさんか。」

「何うなすつたんでございます、お嬢さんはお見えなさらないぢやありませんか。」

「追拂つたです。」

「え。」

「様子でも知れたでせう、彼が即ち、僕をして、姫公に土下座をせしめる婦人だ、思切つて追放した。」

と新三郎太息をついて言つた。

「だつて、あんなお美しい嬢さんを、何うしてあなたは。」

「何うしてたつて死ぬほどの思だ。一生懸命、なか〳〵これが容易な事で出來るものか。」

女房は深く頷き、

「皆、お城のせゐでせう。」

「勿論。」

「怨みですねえ。」

「僕はもう、怨みが通越して無念です。此の力足らずとはいへ、何の城一ツ、城一ツ驚くことはない筈だに、それが、矢張、姫公に土下座の料簡から起るんだ。其のために、秋山のを棄てたと思ふと口惜しい。おかみさん先刻、簪を遣いて來たでせう。彼は、お房に遣つて宜しい、秋山の女の簪を奪つて、お房の髪に挿すんです。悪魔のわざだ、夜叉羅刹の擧動だ。しかし、牡戸の巌端に美人が弾ずるヴァイオリンを棄てゝ、改めて龍宮の細語を、築蝶に聞く、少くとも松ぼツくりから風の音を聞く若の験だ。何のこれたらば城の歌、何の事が、と思ふけれども、胸から割つたやうに、身體半分剝り取られた心持で、あの秋山に分れても、未だ、歌の其の緒だつて見出さない、分らん、些とも分らん、おかみさん、僕は何うして居るですかな。」

女房近く寄つて、とみかうみ、

「否、弓を持つて在らつしやいますよ。何うしてねえ。」

「弓を？」

新三郎は愕然として、唯見れば弦を挾んで、肩にかけ、弓杖を支いて扉に凭れた、思ひもかけず凜々たる勇士の如き己が姿。

「おゝ、こりや今、僕自身、自分の魂が抜けたのかと思つた、後姿が、向うの松のかげにかくれた時、何か上から來て肩に障つたものがあると思つたが、何うともなれ身體と、別に氣をつけても見なつた。それぢや、此の弓！」

「奉納の額のでございませう。」

女房も廻廊に上つて、並んで上を仰ぐと白い、新な額面は亀遊軒の一連が、謹上再拜のそれであつた。

添へて二條、白羽箭。

「何うしてこれが落ちたかね。」

目を瞑つてものをもいはず、しばらくして、雲の晴れたやうな面色して、女房は悚然とした。

「もし、摩利支天様のお授けです。」

「お授けです。」
これに言答へず、背が低いから、女の手でも抜くと取れた、矢を持直して、押頂き、
「矢遊ばせ、松坂さん、あなたの弓のお手並は、私が拝見いたしました。思ひ切つて、一心に射て御覧なさいまし、さあ、貴方。」
「何を、的は。」
「お城です。」
「……」
「ね、怨ぢやありませんか、憎らしいぢやありませんか。口惜しいでせう、無念でせう。敵とも仇とも、障礙とも思つて十分に射てお了ひなさい、もし、お分りになつたでせうね。」
新三郎、身ゆるぎをして、雀躍し、凛々しき面に笑を湛へた。
「應。」
「お分りになりましたでせう、さあ、あなた。」
「應。」
時に三日月を大く抱いて、弦を引いて衝と放した。びんと鳴つた。
取直して、片肌を脱ぐと、筋がしまつて肉が震へる。
女房が片膝ついて、上へ捧げ出す矢をそばめて、屹と彼方の空を望んだ。
雲開けて、月小く、描ける如き城の壁、黒塀の松の梢に在り。
ガツキと番へる。
「南無摩利支天尊。」と御名を念じて、女房は、おつと見詰めて、じりじりと寄つた。

# 涙橋

## 四十

「やあ、阿魔、欲しいか、これが欲しいか、ようこれ、欲しかつぺい、こら、小いもんだが太く光らあ。」
湯川にかけた涙橋、渡つた袂の路の折れ角、空の色のどんよりと、水も白くなつて曇つたのは、鬼が此の星を盗んだ所為か、燦々紫に輝く簪を、指のさきにくるくるときらめかして、牙を出して莞爾つくは飯豊猿の悪権太。
「こら、何うだ、ふはゝ、やあ桔梗の花簪とけつからあ、やあ、阿魔、汝、夢中になつて見惚れて居るで、ちよろりと鳶に攫はれたゞ、欲しかつぺいな、欲しかつぺいな。」
裳の雪の消々に、お房は取亂して、土の上。
倉の宿の星祭、寶石の簪を守つて、唯一人、御堂へ新三郎を見に行つた、清瀧の女房の留守た、どさり天井から飛込んで、背も出口に塞ひ、簾子を蹴倒して悪権太、嵐の如くに飛び出すから、兎角うの分別も、ものいふ隙もなく、銀杏がへしの根を亂して、跣足で此處まで追つて来た、お房は袷を渡り越して匂ひに味を突く突く、呼吸を切つて起きも上らず、唯髻を動かすのみ。
飯豊猿、渾名の如く、毛だらけの膝を折り、尻を突出して中腰に屈みながら、
「やあ、姉さ、欲しくば貸返すべい。己ああ、何も盗賊でねえだ、汝の顔見たいだで、摩利支天様と御堂の縁の下で寝るけれど、乞食でねえ、獣のう一ッ打放しや、食資も、飲資も、博奕資も出来るだんで、何もこれ人様のもの塵一葉、欲しかあねえ。たゞ、はあ、邪魔のねえやうに、汝此處までさ誘引出したゞ、別あねえ、返してやるべい。」
ずッと寄ると、お房は其の姿を見るさへ恐しさうに、わなわなと、震へたので、猿は長脚を高く踏んで背後へ廻つた。
廻つて、上の方から大きく持つて行く、簪は流星の如く、光を殘して、蒼く輝いてお房の黒髪に宿つたのである。
女は纔に振向いて、眞白な手を腕も露に、

嬉しさうに拜む姿。
惡權太厭な聲で、
「拜むわ、拜むわ。」
と言うてゲラ〳〵と凄く笑ひ、
「むゝ、拜むわ、そんなに嬉しいか。簪返して貰つたで拜むほど嬉しいか。まだ〳〵、其の拜んだ手、放しこはなんねえだよ、しつかりと合せて居るだよ。苦しくツても放しこはなんねえ、血反吐を吐いても合せて居るだ。身體がしびれても取つちやあなんねえ。やあ、阿魔。」
と猛くいつた、惡權太の顏の色、芳年が彩色の無慚繪陽志の風あり。
「これ、可いか、そして、お念佛唱へるだ、汝、いま首いぢめて殺してやるだ。」
「あ、あ、あれツ、」
片手を解くと、お房は攫まれた襟を放さうとおさへて、遁げようとして、前へ倒れた、項は玉を伸ばして、するりと衣紋が背中へ拔けると、襟は緊乎と踏留められた。
「靜くな、やい。はあか、これ、うむと睨んだから、黙たつて遁しツこはねえだ。やあ、阿魔、汝、風の吹く時は恐えだらうと思ふで、己、汝の家をぐる〳〵と廻つたぞ、雨の降る夜さりは夜一夜、汝の軒下に立つて居たゞ。其の美しい顏ほ、げたを見ては、遠くから拜んだい。なに、これ、通りがゝりの姉えが預けた簪一ツなくならかいこ、生死の目をするだあに、己がといふと、影も見にせえ、泣くやうにおびえるだ、合點ならねえ。それも嘘だちふなら我慢すべいが、汝、今夜他に男を拵えたゞ、業のウ燒けて、身體ア油で煮られるやうだア、堪んねえ。だけんど猿や狐でねえ、人間は一匹取換だで汝を殺しや、己も死ぬだ、やあ、阿魔、あきらめて往生せいちや。」

# 月下の的

## 四十一

「分つたつぺい、汝、人の深せつを無にして死ぬだ。己、深せつを無にされて死ぬだ。己が汝に殺されて、汝己を殺すも一ツだ。殺すも殺されるも同だつけ、算盤珠の當つて見せえ、己が方が引合ねえだ。汝惜しい命だつぺ。己、畜生同然で人間交さ出來ねえだけんど、入んねえ命といふはねえ、蟲けらだつて惜しい命だ。さあ、打つた獸たゞ賣るだよ、己が命も死んでやるべい、浮かねえで殺されろい。」と、熱き涙をこぼしながら、袂にむともせず手拭の自分の項を巻けるを取つて拭いて、ぐツと押當てた。
お房はばた〳〵、左右の手で、空を打つて、
「おかみさんえ。」と呼吸の下。
[illegible]
どりが、二人此の橋につか〳〵と寄つたが、一人は股間を見て、一人はお房を見、殊しく顯と左右に退いた。
先刻から、橋の向う詰にも五六人、影は闇いたり、すぼんだり。
「因果娘だ。」
「因果だなあ。」
「忠義の姿さんが、貫が違つて、長刀をつかつた涙橋だ。」
「然うだ、此橋だ。」
など、斷念めたやうに囁き合ひ、助けむとは固より、寄らうともしないが、駈出して戻る者、腰を屈めて透す人、いづれ、刷の毛で突いても飛上りさうな氣勢であつた。
惡權太は聲高に呵をなし、
「清瀧のさ呼ぶだあな。はあ、人間は一匹とツかへだ。あの、女房さ、生命がけで汝を庇ふで、何うすることもあんねえだつたい、汝情なし女の、人形だ思うてあきらめて居たゞが、もう、

色男さ、拵へたで、合點しねえ。呼ぶのは留めおぢや。
　こゝへ、清瀧のさ、來て己を留めべいなら、あの人を己殺すだ、人間は一匹取替えよ。一人殺しや、己其場で亡ばるだ。も一人汝を殺さうとはしねえけんど、あの人殺して助かつちや、汝、世話になつた義理い濟むめえ。やあ、覺悟しろていば、分んねえか。」
　お房は覺悟して、動かなくなつた、しばらくして又手を合せた、はや、血が流れたかと汗びつしより、それがつめたく氷つたやう、死したる如き黑髪に活々して輝くは、簪の珠の蒼い光。
　轡のやらに手拭を、差俯いた咽喉にまはして、權太は己がこはばつた手を、左右から緊めよせようとして、裳をおさへた足を踏張り、「念佛唱へろ、やい、阿魔、念佛だ、念佛だ、南無、南、南無、南、南無、南、うむ。」と一緊め、緊めようとした手を其のまゝ、空を仰いだ、惡權太、怪訝な顏して、足許を視め、左右を眴し、前後を顧み、きよろ〳〵と首を掉つて、ちつとして稍少時。
　お房を踏跨ぎながら、ぐツと伸び、流の上に目を注いだ。

月晴れ、雲切れ、星動き、凹の水銀、左右に碎けて、岩に乘り、石を噛み、岩に乘り、石を噛んで、脚下に湛へる湯川の水。
　唯見ると、岩に乘り、石を噛み、岩に乘り石を噛む、激の中に燦爛として、目を搦めて衝と錦流れつ。
　手を放して、ずツと出て、岸に半身を乘出いて、流れし切の傑れる方に大な耳を向けた。
　聞澄ませば、流の音、風の聲と相分れて、別に更に湯川を傳ひ、虚空に聞ゆる微妙音。
　之を久しうして、權太眼を瞬り、足を爪立て、其の音の聞ゆる水上の方を屹と見たが、よろよろして、影も定めず、引かるゝが如く、操らるる如く、胸毛も搖れて心臟に音の徹すと覺しくて、兩手を組んで、あこがれて去つた。
　知らずや湯川に淵をなす、水蒼く、月白き、巖に坐して、神女あり。我死なむか、此棄てなむか、包の錦は溪川の行く方も分かず流しやりしが、あまりの惜しさに、唯一曲、衣子は岸に片膝をなげて、先刻に一度ボーゲンに手のかゝると齊しく、雲分れたり、水靜まつて、響く名家のヴァイオリン。
　殆ど同時に、新三郎は白狢の當つた頰の色、月に輝き、見据ゑた瞳に心を籠めた、胸に御堂の原を洩るゝ燈明の赤きを浴びたが、あたりにものゝ氣勢あり、輕神差翳かせたまふかと、氣清く、神澄み、骨氷つて、颯と靡いた單衣に風、銀黃金の鐶を吹いて搖ぎの絲も鳴るかとばかり、此のまゝ雲にも乘らむずる、我を忘れてきり〳〵きりと滿月の如く引絞つた。
　銀河斜に鶴の城、其の片翼飜れる石垣、押手の拳に手に取る如く、矢頃は遠く隔つたが、青春意氣のほとばしる處、幻の虹を描いて、練絹の絲を空に曳けば、海の宮殿に髣髴たる、月夜の的はじり〳〵と狙ふ雙眼に引寄せた。
　いで〳〵と思ふ、こはいかに、矢猶に震ふ虚空の音樂、泣くが如く怨むが如く、囁くが如く、耳を刻んで胸を抉つて骨に染む時、矢尖にちらつく衣子の姿。
　美しき星に隔まれて、樂器を抱いて天に在り。
　左に外し、右に避けても、矢の根冷く、疾き劍、正に其の胸について放れず、秋の草の彼の姿、森の陰に消えたる時だに、おのが身半ばそぎ落されて、魂の抜け失すると、血汐凝かりし新三郎、目も眩み、腕しびれ、力なえて、藁腕の案山子矢を落した、よろ〳〵と蹌踉いて、思はず、はら〳〵と落涙する。

射損じたり、第一矢。

清瀧の女房、柳眉を逆立て、控への二の矢を、

「貴下！」と取つてさし出すを、屹と見て、打頷き、新三郎は取直して、再び丁と番へたのである。

思ひ切つて一歩を進み、更に秋水の瞳を凝し、姫神の御名を胸に、鎧の袖を掻直せば、白氣再び空を射て、放たずして疾く貫く的、矢頃可矣、飛鏃の囊縫ふ可き也。

曳固め、きりゝとしぼり、兵彿と切つて放す、弓は大浪を打つて返した、矢響き高く白狩の神箭、遙に遙に靡々として、風と相打つ雪一片。

とて手應は胸にあつた、新三郎は見る〳〵中、豁然として、心ひらけ、鏘然として文字聲あり、腹案成ンぬ、立處に。

## 寓言

明治三十三年五月

燈へ蟲が來るのを、格別に厭がるのが、十二時前後のことだつたさうで、洋燈の下に書を開いて讀んで居ると、其を防がむため、いくらか暑いのを我慢して閉切つてある窓の障子へ、ざら〳〵といつて飛びついた蟲があつた。音にもぞつとする位嫌なのであるから、もしやこれが飛込んだ日には怨敵に取着かれたやうに座敷の中を立つて逃げ、居て防ぎ、手で拂ひ、袂で拂ひ、おたおた狂ひ廻らねばならぬ。丁ど書も讀んで佳境に入つて居るのに、情ないと思ふ内も、ばさり〳〵と障子にぶつかる。たはしで擦るほどの響、小さな雀でゞもあらうと思はれて、益々恐しい。入れてはならぬと一生懸命、讀んで居た書も是等のものであつたらしい。妙な考へを持つた少年であるから、整然と坐つて、屹と向ひ、眞言を稱へて一心に印を結んだ。

別にこれが事を仕出來したとも思はず、其まゝ又机に向ふと、つい讀み惚れて果は忘れて了つたのである。

やがて寢ようといふ時、其の外の雨戸をしめようと思つて、障子をあけると、敷居の處に、かたまつたものがある。いますらりと明けて、其者の袂にさはつたと思ふのに、蠢きもしないで、じつとして居るのを、灯をかかげて見ると一疋の蟬。それではと、氣がついたから、指を摘んで掌へ乗せたが、下指も据らず、もがき苦しんだやうに小さな足を寄せたまゝ冷くなつて居るのであつた。

何心なかつたのが、此體に吃驚して、今更膽のあるのに、我ながら水を浴びたやうに悚然とするばかり。

これが、毒蟲でゞもあれば知らず、何の罪もないものをと、あはれになつた、けれども何とせむ、固より修行を積んだ神通があるのでない、はずみで無心にやつたこと。呪を解いて助けてやることも出來ない。とかくして思出したから、人知れず、あゝ飛んだことをしたつけ、蟬、蟬、おまへだと思へばこんなことにするのぢやなかつた。又いやな灯取蟲だと思つたもんだから、つい氣の毒なことを、堪忍しておくれ、もう可いから飛んで行かないか、とありのまゝ打あけて、それから靜に呼吸を吹つかけると、むぐ〳〵動きはじめたが、這ふやうにして指のさきまで、擽つたく歩行いたので、どき〳〵しながらふるふ掌を、障子の外へ出すと、中庭で颯とたつて、月のかゝつた棕櫚の樹の梢に羽ばたきを聞いたといふ。

――鏡花全集卷十五「春狐談」より

# 紅雪録

一

「旦那切符をお買ひ申しませう。」

「あゝ、待つてぞ、」と袂から財布を出して、外套の袖の下で、手を差入れて數へたが、然ももどかしさうに、突然、一等待合室の眞中に二つ並べた、大なる卓子の端へ、何にざらりと明けると、十錢五錢二十錢銀貨五十錢、紙幣まじりに電燈の下へ燦爛として散ばつた、名古屋の停車場に於てゞある。客は震ひつくやうに、肱を卓子に突着け、蔽ひかゝる姿で、片手でそゝッかしく勘定して、

「幾許だつたい。」

用を聞いた赤帽は、傍に小腰を屈め、

「貴客、何方まで。」

「新橋。」

「五圓十三錢でございます。」

「一イ二ゥ三ッと、四圓、五圓と十三錢。」

と掴んで渡したのを、赤帽は黒い毛絲の手袋を嵌めた、大な掌に請けて、一寸熟と見て、やれて出て行く。

停車場はがらんとして、夜の名古屋は眞白である。

客は小出しを財布に突込み、袂へ落すと、二つ三つ肩を揺つて、雪の名残を拂ふらしく揺つたが、四邊を眴し、つか〳〵と前面の暖爐の傍に寄つて、立つたまゝ手を翳し、ほつと息を吐いて、焦茶の中折を被つた其の頭を垂れたが、熟と是は、火氣がない、此の暖さの取れない處から、石炭の燃えて居るのを見むために、傍向いた譯ではない。

其の時、先刻から一人此の暖爐の前の腰掛に、外套の襟を立て、帽子の鍔を耳に伏せて、蹲つて、火箸で突いたり、掌で撫いだり、息を長く吹いても見たり、兎さま角うさま讀みても、火のあらないのに常倦んで居た男があつて、此の萬事の末て行んだのを見ると、ござんなれ相談相手、待兼ねたといふ風に、勇んで、帽子を揺上げるやうに顏を出したが別に言葉を懸けさうにもないから、

「何うしたんだ、厭な時間だな、」

と呟いても、汽車も遲延された様子がないで剛情張は、石炭で燃すといふことに就いて、何等の思慮も、分別も、知識も、經驗も、方法も、學問も、智慧も、勿論技術も持たぬ紳士であるから、と斷念めた顏色で、鐵火箸をぐわちやり、

「えゝ、」と舌打をして胸を撫き、噴然として白塗の高い天井を仰いだ。

待合には唯二人のみ。

此處へ、赤帽が其の紙幣を、時刻に、小倉の服の色の褪せたのも明らさまに、電燈に照されつゝ、帶着いて入つて來た。

「貴客、切符、」

「御苦勞、」と受取つた、旅客は入口の方を透しさうに見送つて、

「急行は十二時四分だね。」

二

「はい、未だ二十分ばかり間がございます、」

「未だ、二十分、待遠だな、」と呟いた、けれども二十分は然したる長時間ではない、殊に此の人は待合室に入つてから、忙しく汽車賃を出して、忙しく歩行いて、急いで暖爐の傍へ寄

つて、間もなく赤帽の手から切符を受取つたまで、ものゝ十分とはかゝるまい、案ずるに何か仔細あつて、須臾も早く、名古屋の地を離れて去りたいのであらう。

其の清い目も、優しい眉も、鼻筋の通つたのも、頬のふつくりとしたのも、停車場で慌て惑ひ、焦り、ふためくやうな容貌ではない、但其の色は、丑滿近う誰も沈むよりは、より多く沈んで居る。

單に中折の帽子、外套だけの打見では、農も、工も、商も、武も、文もないのだけれども、松は晝にも調べあり、梅は闇にも香に知れて、此の人全幅の風采は、誰が目にも學校出の年少き紳士であつた。

「お荷物は、」

「彼だ。」

細い大島の、羽織の袖を開いて指す、二つある入口の扉、右なる方に、一脚の腰かけがあつて、旅行鞄の中形なのが置いてある。

「お一個だけ。」

默つて點首く、と心得て會釋して、赤帽は直に[illegible]した。

紳士から二人の話が途切れたら、直に、獨り[illegible]目して[illegible]入れ[illegible]、頻に[illegible]目を注いだ

[illegible]の前の[illegible]けな男は、[illegible]ら[illegible]に立去るのを俯向いて見送つたが、紳士の荷物の後へ、[illegible]に背を凭せ、腕組をして、向直つて立つた、赤帽の肥つた廣い淺黑い顏を、間違に熟と、怨めしさう。

折から。どや〳〵と入つて來た。

眞先に一名の陸軍士官、帽子の低いのを冠つた肥大な紳士、痩せた細君、老人夫婦で十三ばかりの被布を被た、孫か、末子かと見えるのを連れた一組と、高等學校の制服を被た學生一人、此の七八人の人數に旅籠屋の女中、男衆が附き、見送人が交つて、待合の左右の入口から前後して繰込むと、直に八方へ入亂れ、ザッと出て退るのもあり、斜に突切つて暖爐を目指すがあり、荷物を卓子の上に載せるのがある、意味もなくてぐる〳〵と廻るのがあるし、袖を拂ふのがある、下駄を鳴らすのがある、靴を踏むのがある、反つて外套の袖を背後ざまに撥ねるかと思ふと、俯向いてコオトの裾を引張るのがある。

さて[illegible]な待合の內にも、成りたけ足數の少い通路を縫つたらしく、別に三名の赤帽は角度を計つて、肩に、頭巾に、腰にひだに、ちら〳〵と雪を蒙らねばならぬ[illegible]客の間を、[illegible]き鞠の飛交ふ[illegible]しく動いた。いづれも停車場前[illegible]から唯廣い庭一つ越すばかり、發車の間際に、待合に入つたらしい其の樣な[illegible]を經て來たのでさへ、見る眼り黑いもことしいへば、不[illegible]の形を留むる、雪は降積つて居るのである。

又今停車場に着いたさうな、[illegible]の際にかたまつた下駄の音、コト〳〵と響を交へて、可に降り積ること約五寸なるを踏いて、此處に雪の浪の寄すると聞ゆ。

「旦那々々！」

と大聲に呼んで羅紗の筒袖を左右一杯に突張らせ、手首をすくめた、脊の圖拔けて高い、眉と目の間の伸びた、[illegible]大な[illegible]の[illegible]、素足に[illegible]を穿いたがカラ〳〵と[illegible]を踏んで、陸軍士官の面前に不作法に突立つて、眞白な呼吸を吹き、大口を開けて、

「旦那々々。」

## 三

十二時に早や五分、今にも汽車が、と一同は身構へる、士官は其の[illegible]を[illegible]べながら手袋を嵌め直して居た處。

「椿事でげす、旦那、汽車は參りません。」

「汽車が来ない、何うしてか。」

「はあ、雪で留つたのでございます。」

「雪で留つた、それ〳〵」といつて、斜に卓子に凭かゝつて靴を投出して居た身體を眞直にして、室内の人々を顧して溜に微笑を洩したのは、いで諸君、諸君と憂を倶にせむ、猛き武士の心優しき態度であつた。

「雪で、おや〳〵」

「此の雪で、」

「然うかも知れない。」

「然うだらう。」

と口々にいひ交した、時も時なり、一人として此の新聞に耳を傾けないものはなかつたので、室内は殘らず動搖み渡つた。彼の肥大なる老紳士とともなつた婀ぎすな夫人の如きは、然も旅馴れた狀に振舞つて、見送つて來たらしい、五十餘りの、是も古ぼけた羅紗の筒袖の襟を上げて、其癖咽喉も胸も釦を懸けず、ぬりやすの股引、だらしのない尻端折で、大形の蝙蝠傘を携へた、前歯の抜けた老僕に對して、恰も我が家の奥と表で一寸別るゝやうに、輕く言葉を交しつゝあつたのさへ、二三歩、低い駒下駄で、つか〳〵進んで出て、誰にいふともなく、

「まあ……まあ何うも、」と呟いた。

氣の疾い學生は、其の眞帽を正さんとや、制服の裾を擬つて改札口へ駈出した。靴音は長く、響いたのである。

不幸、自己の齎し來つた反響であるのを見て、坊主窓は得意顏に、今度は其の所謂旦那なる武官のみならず、多人數を對手のつもり、調子はづれの聲を一層張り上げ、

「どうも寒い事でございますよ。何しろ貴官、江州の山の中で列車が埋りましたさうで、又彼處い等可恐しい雪だと申しますな。いや最うしツきりはございません、此の降ります事な。當所でも珍しい大雪で、はい、飛んだ話でございます、雪に埋るなんて、何うも、はゝ、はゝ、」

と頬當したやうな古羅紗の襟が、天窓へすぽんと冠さりさうに、身を揺上げて高笑す。

士官は秀でたる眉を顰め、

「何のくらゐ遅れるか。」

坊主は突張つた筒袖の手首をぐしやり、同じやうに眉を顰め、

「其がさ、もし、何時間おくれますかな、何だつて此の汽車が不能に逢ふなんて、東海道はじまつて無い事でございますでな、何いたせ、十時に此處へ着きます筈のな、其さへ今の期參りませんで。」

「呀、然うか、」

「そりや大變だ。」

「驚きましたな。」

沈着なる士官よりも、先づ四邊に立つたのが、聲々に騷ぐのであつた。

「えゝ、お寒うございますで、何なら最う一度、手前どもへお歸りの上、御休息なさりましては如何でございませう、へい〳〵、いづれ發車いたします時分を見計らひまして、又お知らせ申しますで、へい、」

「いや、そんなに遅れもせまい、」と同情ある士官は、自ら他をも慰めるが如き口振でいふ。

「だがもし、はゝはゝ、いづれ參るには參りませう。それに汽車の事でございますから、へい、けれども夜が明けますまでは、お待ちなさる譯にはなりますまいで、へい〳〵〳〵、」

ニヤ〳〵笑ひかけてまくし立てるのを、士官は默つて聞いて居たが、フト言急に調子荒く、

「見て來い！」

恰も構内で鈴が鳴つた。

兩人同音に、

「宿引め！」

## 四

鈴の音ぐわらん、ぐわらん。驅出して行く坊

主の高足駄かた／＼／＼／＼、カラコロカラカラと忙しげな多人數の跫音引續いて、廣濶なる停車場構内は、頃刻、踵と肩と褄と前後左右に入亂れた、汽車は正しく着いたのである。

此の時まで、黑き外套を見好げな品の好い後姿、冷き暖爐に手を翳して悄然として差俯向いた、以前の年少き一名の旅客は、當夜の一椿事に觸れ廻つた鐵道者の坊主の來つた時も、唯少し、頭を上げて、上なる大時計を一目見たばかり、未て振向きもしなかつたが、それか、あらぬか此の物音にはじめて此方に身を轉じて、後ろに、入口間近な、彼の荷物を置いた腰掛に歩み寄れど、承はつた、赤帽は依然として、壁に背を凭せたまゝ、腕拱いて突立てり。

「誰か。」

「私でございます。」

「今來たのは、」

「十時に此處へ着きます分が、二時間遲れて來ましたので、」

「急行は、」

「此のあとでございます。」

雪車を掻退いて、蹲つた傍の男も、此の汽車に逢つたさうで、

「いや、どうもこいしよ、」と慇懃して、欠伸とともに伸上つたが、此方に赤帽の語つたのを聞きつけて、動かず、中腰で見合せる。

「眞實でございますね、」

と寄せた夫人が、眞先に、續いて、ごほ／＼と咳きながら肥大紳士、士官も學生も入交つて、一度待合を出揃つたのが一なだれに、改札口に近い、戸の一方から引返して來た。

學生は肩にかけた提鞄の重いのを、はづして手に提げたが、卓子の上へどンと投げて、

「徹夜だ徹夜だ、」といつて背後ざまに伸上つて、十二時既に三十分を過ぎた時計を覗めながら、烈しく靴の爪尖を刻む。

爰に最も適當なる相談對手の出來たのは暖爐係で、渠は今おなじ腰掛の一方に少女を据ゑて、自分も又附添うた老婦人に對して、堪へに堪へた滿腔の不平を漏しはじめた。

「どうも此の貴女、新橋なぞは、何時だつてこんな事はござんせん。冬向は貴女、これでなくツちや凌げませんのに、何うでございませう、此の體裁ツたらないぢやありませんか。函嶺を越しますと、何となく人間の氣が節儉になりますので、鐵道の人たちだつて何も自分達のものぢやなし、とうにも石炭を入れて焚けば宜いのでございますがね。私はもう、先刻から恁うやつて始終せつちやうをして居りますけれど、火氣が失せて暖爐の裡が次第に黑くなつて來た中は、未だしも賑がありました。御覽じろ、これ、段々白くなつたのは心細いぢやありませんか。何もこれ、汽車が江州で埋まつたつて、暖爐の中へ雪が降るといふわけぢやなし、はあ、はあ、石炭がなくなつたんでさ。」

老婦人は火を求めて、一服つけたが、灰だらけになつた女煙管を、空しく懷紙で、くる／＼と捲いて拭ひつゝ、

「此のお寒いのに、石炭がないのでございますかい。」

暖爐係は頸を窄めて、彼の耳まで被さつた帽子の裡で低聲になり、

「其が貴女、否、あるにやありますよ。それ、向うの卓子の下を御覽じまし、あれ、ブリツキの箱に入れて、鐵の十能までつけてさ、黑砂糖の接待といふ寶物式、石炭にあぶらがかゝつて、然も旨さうにきら／＼光つて居ります。」背後に、老婦人が振返るに連れ椅子に凭りかゝつて立ちながら、少女の身を庇うて居た同伴の老紳士も、齊しく、石炭の箱の、暗き中に電燈の光を浴びて、幽に輝くのを眺め窺ひ、

「焚いては不可いのでございませうか。」

「其處でございます、どうもソレ官有物でありますから、私どもが、濫に手をつけますわけには參りませんで。」

## 五

「もし貴女、僅な事で大した違ひでございますこと、暖爐が消えましたのでございますか。」
傍から聲を懸けたのは痩せたる貴夫人。

此の女性は、先刻から見送の、傍の前はだけの老僕を歸すことに忙しくつて、暖爐の事などにはかゝづらつて居る暇がなかつた。

先づ其の吾妻コオトの袖口をキチンと胸で合せて、其處へ手を組んで、拇指をかされて乳の邊へ附着けるのをキッカケに、根上りに結ひつめた夜會結の項を伸べて、少し俯向き氣味になるとともに、「ねえ、お前、」と呼びかけて、扨て、御苦勞であつたこと、歸つたら宜しくいふこと、わざ〳〵見送つてくれた其の深切を謝すこと、停車場まで來ただけで厚意のほどは屆いて居ること、別段に荷物もない事、遲いこと、夜が更けた事、路が惡いこと、雪が積つて居ることを、細々と一呼吸に順序正しくいつて、其の老僕であることを最後に、御苦勞であつたを最初に、最う歸つてくれといふのであるが、これは待合に入ると直に取掛り、凡そ八九度といふもの繰返された。口上一順するとともに肥大紳士を一寸見て、

「貴下、」といふ。

づんぐりした聲で、

「あゝ、もう歸つて宜しい。歸つて宜しい、」とたゞそれだけをいふのであるが、いかにも取つて着けたやうに大儀らしく口重い、多人數の中に、此の人ほど無口なのはなく、又其の細君ほど口數の多いのはなかつた。

今も今とて、此の度は、扨て——御苦勞から——其の——老體——をいつたあとへ、恁ういふわけで何時汽車が來るか、夜があけるか、其さへ知れぬ、道中は不慮の出來事が多いもの、嘗て伊勢を旅行した時、外宮から二見ケ浦へ廻る途中で雇つた俥が前へのめつてあはや五十鈴川へ倒に落ちようとしたが、危く車夫の肩につかまつて無事であつた話を、おくれ毛を震はしながら同一の姿勢を亂さず、細やかに物語つて、それから見ると汽車の後れるなどは間々ある習に

「貴下、」

「あゝ、歸つて宜しい。歸つて宜しい。」

然うすると又前はだけの態度といふのが、ひしやけた調子で續けッきりにお辭儀をして、兩手に其の裾を搔合せると、やがて、仰向いて、ニヤリ〳〵と笑つて、果は目を瞑つて、どう仕り、さういひ終ると口を閉ぢる。其處で又裾が開く、一度は一度より次第に、ありやすりの股引の股まで顯れるのが紋切形。

あぐれ果てゝ、此の時、人を轉じて暖爐の方へ口を入れたわけで——

「はじめから威勢よく燃えては居りませんやうでございましてすがね、それでも赤いものゝ見えました中は、何となく未だ凌ぎ可いやうでございますが、どうも堪りませんこと、」コオトの肩をしめて、益々袖口を引合せる。

ぐわさり、ずる〳〵と引出した石炭箱を引立てゝ、憤然と暖爐の前へ投下したのは學生である。

「構ひませんよ。何有、構ふもんか。」

と山裝、十能をずぼと突込んだ、例の男が未練らしく紺足袋を穿いた足を、冷い鐵に押つけて居たのを引込ませると同時に、プス〳〵と陰炎の薄煙。

あれだけ火がないのかと、一同いひ合せたやうに悚然とした。

「來ました。難有い、」と、例の男、直に火箸を

取る。

これを小耳に挾んだ商人風の山高帽。

「辻占が可うございますな、最う參りませう、」

同一座客の一人が、

「いづれ追つつけ參りませうが、しかし私は一時間や二時間、汽車の遲れましたのは致し方ないとして、前途が心配でなりません、函嶺は無事でありませうか。」

答へて、

「然れば何とも申されません、尾州參州は安心でございます。私もな、何うも其邊を案じるのでございます。」と、欄干より來るべき汽車を待ちつゝ、春寒の歎を說くなりけり。

若い紳士は、並んだ赤帽にすら語もかはさないで佇んだが、悄然として再び時計を望んだ。

一時半。

六

何爲か暖爐（ストオヴ）の火が燃えぬ、突く、叩く、こぢるなど、あらゆる手段で揉んだけれども、僅に煙の濃くなつたばかり、炎は絲ほどに縺れても閃かないので、例の男は止むことを得ず、再度火箸を投出して歎息した。

「こりや壞れて居るんです、から、だらしがありませんや。雪で煙出しでも狂ひましたか知らん、こんな事といふのがあるわけのものぢやございません。」

少女は燈の燃え立つやうな、友禪縮緬の袷羽織を着て、美しい毛絲の襟卷、さげ髮にリボンの飾、拵へたやうな臙脂色の袴を穿いた﨟たけた兒であつた。

項を襟にすりつけて、うつとりとした可愛い聲で、

「眠いよう、眠いよう、」

「まあ、可哀相に、もう些と我慢をおしよ、」と情ない聲ですかしながら、老婦人は其の時まで手傳つて煽いで居た、一折の懷紙を詮方なげに袂へ入れる。

背後から老紳士、

「寢ると風邪を引くで、辛抱せいよ、佳い兒ぢやの、佳い兒ぢやの。」

瘦せた貴夫人何條これを見て默して止むべき。

「お孫樣で在らつしやいますか、まあ、お美しい、嘸おねむでございませうねえ。」

「はい、末ッ兒でござんして、いゝえ明けまして十三になりましたが、孩兒で仕樣がございません、はい、否、鬱悶も些と手前で下ります。こんな事と存じましたら、今夜は逗留をいたしませうものを、此の汽車で歸りますやうに、宅へ電報をかけましたから、皆停車場で待つて居りませう。はい、此の娘の兒や、貴女、婢どもでござんして、何事とは存じませんから、路で又どんな間違ひでもありはせんかと、大抵心配をいたして居りませう。些とでも恐い、貴女。

今更當地で泊るわけにも參りませんし、然うかと申して、迚も今夜は歸るまいなぞと存じて、皆が宅へ引取りますと、其も難儀なのでございましてね。

宅から持つて來た車が居りませんと、こんなに遲くどうすることも、出來ません。雪道を貴女、これを連れまして小半路歩行かねばなりません。」

「私歩行くのは厭よ、母ちやん、」と泣聲になつて少女は頻に項を動かす、傍の老婦人も唯くんで、

「お前そんなことをいつたつて仕樣がありませんか、はい、はい、學校のお休みにお伊勢樣へ詣りましてねえ、おもしろかつたね、いゝことをおしだけれど、後の思ひに困りましたねえ、」と、頰ずりして嬉に顰。

待合の同勢は、不殘此の樣子に集つて、默

なるもの聲するや、闃然となつて、暖爐は冷いまでも、一時洋燈は殊に其の光を増した、が、やがて其の反動は著しく、氣の滅入るばかり寂然とした。

寄り合つた人々の會話は、途切れ、一組づゝ一組づゝになつたと思ふと稍絶え、稍絶えてやがて緘默となり寂寞となつて、果は一言を發する者さへなくなつた。

少女は老婦人の膝に突伏した、側の男は暖爐の上に、やけに肱をついて打傾いた。士官と學生とは左右から卓子の上へ半身を乗出して、國民と貴族とを打較べる。傍に一個の商人は、すねたやうに、背中合せになつて、凭りついて、一は西の方藍關の汽車を待ち、他は東の方奈良の途を想へり。ありやすの腰掛は、あらゆる徒然と退屈を吸ひ盡すばかり、口と股を押開いて、壁際に仰様、少し放れて肥大紳士と、押並んで腰かけて、痩せた貴夫人は、姿勢を正しく、即ち胸尖に指を組んだが、其のコオトの色も顔も色も、ものゝ幻の消え際かと茫乎として、電燈も且つ白け渡つた。

恁くして莊嚴なる此の名古屋の停車場も、雄大なる雪の中に、唯僅に孤驛の掘立小屋、屋根あり柱ある建物に過ぎざるのみ。

## 七

更に長方形の入口の扉の中に描かれたる、室外の光景を透かし見れば、あはれ、果敢ない、風情であつた。

人々は唯まばらに黒く淡き土間の上に、斑々として、吹きつくる雪にはらはらと白き衣は、岩に碎くる潮に似て、尾張國を押渡した雪の大浪の退いたあと、散々に名殘の海松布を撒き散らした趣あり、彼處にも又小さな暖爐を取卷いて、二重三重に輪を造つたが、蓮の縄の斷れたる如く、横仆れになつたるあり、俯伏しになつたるあり、つんのめつたかと思ふあり、行倒れの如きもあり、赤毛布に莫蓙を交へ、風呂敷に頭巾を並べて、夜氣沈む、地の底に、あらゆる構内の光明を引き込む時、壁の色灰に似て朦朧として見えたるありさま、荒海なる難破船の、釘の殘つた一室に、幾百年の昔より、底の藻屑に影を留めて、世を終るまで怨靈の消えざる姿に異なるなく、時として遙に薄ら蒼き火の暖爐を透きて見えるのも此等の執念を惱みて、魔王が[illegible]に與ふといふ、呪の炎かと物凄い。

然れば硝子の窓越の、停車場前なる廣場も、白き海の如くに似て、二階三階の高樓に、ちらちらと、電燈の沈んだ色の搖ふさへ、暗夜の潮の輝く風情、物凄しく寂寞として、唯聲は風。音は雪、ものゝ氣勢は寂さであつた。

時に彼の少き旅客は、低し、といふよりも、寧ろそれよりは發し得ないやうな沈んだ調子で、

「君、君、」と二聲呼んだ。赤帽は舊の如く腕を拱いて壁に描かれた姿で突立つて、稍々頭を下げて居た。離れたものには居睡をすると見えよう。但突出でた廂の下に、黄色を帶びた一雙の眼は、怪しき星の光を帶びて、圓かに開いて居たので、重い口ながら速に應じた。

「はい、」

少い旅客も、恐らく彼を眠つて居ると思つたのであらう、餘り器用に返事をされて、はッと出後れたか、少時して、

「何は、酒は買つて貰へまいか。」

「は、」

「酒さ、」

「御酒でございますか。」

「何處か、其處等に賣つちや居らんか。」と然も人閒を憚るらしい。

「えゝ、構内の出商人は皆引いて了ひましたで

すが、未だ起きて居れば、停車場前の旅籠屋にはございませう。」と是も心得たらしく客にいふ。

「禮をする、君でなくッても誰か目着けて、一ツ御苦勞を願ひたいんだ、お頼みだが、」といつた顏の色、以前より稍暗う、

「是で、何うか、」

衝と手に渡した一枚の紙幣は、豫め懷手の袂に取出して居たのらしい。

「何の、らる貰ひますか、」

「大なのを一本ばかり。」

「鐵瓶で、四合入の、はい、宜しうございます。」と飜然、壁から放れたが、身體を廻らして出ようとして、フトしんせつに心付いたと見えて、入口の扉を入交りにハタと閉めようとする。

擦れ違ひに、すッと入つて來た婦人がある。

黑縮緬のコオトを着て、鼠縮緬の頭巾を、被らず、ト緩く頸に巻きつけた、生際の濃い、揉上げの深い色ッぽい、ふさ／＼とあるのを堆い銀杏返、はッきりした眉目隆に、一寸險、伏目勝で然うとは見えず、色の白くまで白い、圓顏ではない細面といふでもない、肩も腰も小づくりな中年増。

口は唯美しい節だけにつけたやう、もつはいふまじい状に固く唇を結んで、澄ましてツンとして反身なり。

## 八

續いて白い手巾を襟にかけた、薄命らしい小女が、兩手に、大な風呂敷包と革鞄を提げて、ちよこ／＼とお供で入る。

あとをドン、赤帽の姿は消える。

扨て長者町あたりと見えた、此の兩女は、孰しく十二時以前から待草臥れる連中であるが、雪に最も近い構内の入口の腰掛を、二人で占めて、氷りついた風情で居た。

惟ふにお納屋の中二階、將たそれ河文の奥座敷にあらざるよりは、漫りに洩らすまじき嬌音を、うつかり知人に聞かすまじく、故らに遠ざかつて居たのであらう。否や、此の待合室に其那云々、話をなすものあらむか、未だ孰か是なるを不知。

今赤帽が扉をさゝむとしたので、係りに三等の待合の、絵間鐵の如き物凄さに堪へかねて、こゝに其[?]たる姿を顯したに相違ない。

直に年少な旅客の居る、端近な件の椅子に背後向きになつて腰をかけた、間へ、持參の荷物を入れて、小女は傍に悄然。

定に入つた[?]き前面の隔なる、痩せた貴夫人の、一寸顏を上げて、此方に打顰んだ眉を向けたばかり、敢て一人として目を着けようとするものはなかつた。

實際、此の待合室は、嗣き尤物を求むるより、列車を發するに急なのである。

ぎいと扉が、赤帽を兩着けて、ごたんと閉まつた。

折角の人の須、無にならないのを嬉しさうに、しかんだ面に笑を湛へて、人には隱すものゝやう、上衣を開いて脇の下に忍ばして來た、二本の罎を密と出して、

「へゝゝへゝ、」

「どうも御苦勞、」といつて旅客は何故か深い歎息。

「旦那、お剩錢を、」

「そりや可いよ、可いよ、可いんだよ。」

「え……何うも、」

輕く一寸掌を上げて頂いたが、其のまゝ衣兜へ突込んで、片手も入れて、赤帽はきろりと四邊を眴はした。

心付いたか、匿しく、

「汽車は、些と原で埋りました。急いでぐんぐん推して參りました爲に、機關車の前へ、どえ

らい雪の山が持上つたと申しますな。何でも十二時四分に出ます、急行の切符を四五枚切りました處へ、電報が參つたさうで、此の停車場が出來ましてからはじめてなんで、はい。だが、旦那、先刻着きました此處までの列車も無事に參りましたし、様子が知れると直に迎の機關車も、工夫が大勢加勢に出ましたさうですで、皆でえツさと引張つて參ります。遲れるたつて然う大した事もございますまい。えゝ、其の御酒、荷物へお入れ申しませうか。」

「いゝや、」

といつたが、自分で革鞄の口を開けて、差覗いて取り出した、四角な紙製の小箱一個、ぴりぴりと眞中を裂くと、猪口が花片の牡丹形。

「戸外は未だ降つてるか。」

「どん〳〵、どん〳〵、」

「大雪だな、」といひ〳〵器械の口を外して、斜に取る、罎に進歩といふ銘あり。

寒さに手が震へたか能く注げず、烈しく仰いて唯僅に底に滴つたのを、ぐいと引かけ、又注いで、呷つて、ぐい。

衝と身を起して、側の澄ました美人は小刻に此の腰かけをツンと離れた、同席御免といふ如し。酒を厭ふと悟つたか、後姿をじろりと見て、乾と其の眉を顰めたが、杯を礑と下へ、四合入を倒にして、仰いで目を瞑つて半ばを一息。

もぞ噺すやうに口を取つて、トンと其の進歩の底を外套の袖に支くと、吻と息を吐いたが、早や、目瞼に颯と漲る血の色。

低聲で呼んで、

「赤帽君、どうだ君。」

## 九

呼ばれて赤帽は其の梟にも似た鋭い目を細うしたが、酒の香を嗅ぐや否や、實はあらぬ方を見て居たのであつた。

「寒くツて寒くツて、堪らないぢやないか、君も一杯やれ、」

と破り棄てた包紙の端で、罎の口をきりゝと拭いて、其まゝ赤帽に差向けた。

「ぐツと引かけ給へ。」

「難有うございます、まあ、貴客、あがりまし、」

「可いよ、澤山あるよ、さあ、君、」

「では其のお杯で下さいまし、其の方が結構でございます。」と然も〳〵嬉しさうに手を出した。

直に獻して、

「成程然うか、ぢや、是で。」

酌は身體を捻向けて手が逆になつたので、拙くなつてだぶ〳〵と出て、掌に溢れたので、慌しく右の手で持ちかへると、唇に銜へて喫ひ切るばかりに手袋を外すや否や、未だ雫の留まぬ猪口の下へ重手をしたが、おツと受けて、我慢して、やがて、ぺろり横撫に嘗めた時、酒浸りの其の手袋は歯を放れてほろりと落ちた。

構はず赤帽の掌を、彼是旅客の肩と摺れ〳〵に、近く見れば硬い薄鬚の生えた頤を、猪口の上へ持つて來て、直角に腰を突出して曲げたが、ちゆツと吸つて舌鼓、タツタツ。

「へい、貴客へ。」

「まあ、お壓へだ。」

「で……ですかな。」

「追つかけて最う一杯。否、未だ、構はず構はず。」

五杯目をごくりと飲んで、漸ツと腰を伸して、短胴の下へしめ込んだ、三尺の下あたりへ、重いものゝやうに飲みさしを据ゑて持つ。

「何うだ、おもしろい事でもないか、」

旅客は此時ふら〳〵として、肱を腰かけの手に曲げて、頬を支へ、仰向いて、赤帽の顔を見

上げて打傾いた。

赤幘は庇の下で、額晴く伏目になり、

「おもしろいは旦那方こそ、當地へ新年の御旅行でございますか、」

「何、然ういふわけでもない、」

「何時おいでになつたのでございます。」

「昨日の朝さ。」

「東京から、」

「あゝ、然うだよ。」

「それは大分御遠方から、又强いお急ぎでございますな。」

「詰らんもの、」と投げたやうに落膽した風しにいふ。

「そりや、最う一向詰りません、別に見るやうな處はありませず、名所も景色もございませんので、」

「否、なか／＼然うでもないよ、前津も佳し、大池も佳し、此の電車の通る正面にすツくり記念碑の立つた處なんざ、西洋へでも行つたやうだ、町香湊は目を驚かす。それに紫川といふ名所があるぢやないか、第一君たちの名所だらう、」

「何串戯おつしやいまし、私どもは商、それよりか、大建築になりまして、勸工場のなかに、唯有い名所なんで、はい。

何でも信濃の善光寺より、もつと立派な普請ださうで、去年の夏からかゝつて居りますが、大した地形でございます。まあ其でも出來ましたら、精々通ひませうと存じまして、あくせく働いて居りますんで。

何の旦那、紫川なんて、名所どころか、金銀を棄てる溝でございます。」

と赤幘は苦笑。

「噓を吐け、もつと飮んで、些と其の泥を吐かないか、」と此方も微笑んで鑵を取る。

赤幘は時に四邊を見たが、人は唯昏々として、灰の如く、煙の如く、一の色濃き影もあらず、却つて柳行李、支那革鞄、風呂敷包など、算を亂したのが、むく／＼と動き出しつゝ、人語を發すらむ氣勢である。

憚らず杯を上げて、殘れるを飮み干した。

其を返さうとして躊躇つて、つまさぐつて、俯向いて熟と視めたが、

「此のお猪口は、旦那、牡丹亭のでございますな。」

十

「えゝ、饂飩の煮込が、彼處は名物でございまして、火鉢ごと座敷へ持出して喰はせますが、閑靜な佳い處でございます。牡丹亭へおいでなさいましたのでございますか。」

「あゝ、牡丹亭へも行つた、紫川へも嵌つた、」と酒がいはすか、明さまに語つたが、聲は沈んで居た。

其處で赤幘が心安けに、

「失禮ですが、お杯を差上げませう、へゝへ、其はお樂みでございます。」

「何、」

と受けると赤幘が酌をする、旨さうに一口飮み、

「私ぢやない、朋友さ、同伴さ、飛んでもない馬鹿な奴さ、好色な奴さ、な、しかし羨しい男さ。」

「へい、お同伴樣で、」

些と要領を得ないで赤幘は眞面目である。

「長々と川一條や雪の原、其の水は紫で、廓の灯は美しからう、こゝへ千之助が旅姿で通ふのか、」

「千之助樣とおつしやいますと、」

「千の字さ、私の其の朋友さ。深見といつてね、兎角深みへ嵌りたがる男だ、又其の溝へでも落ちなければ可い、」と半ばは獨言のやうに、

いつた。

「ネ一人行らしつたんでは危險でございます、一所に行つてお上げなされば可うございました。だが旦那、然うすると婦人の兒が喜びますかはりに、恁うやつて結構な御酒を頂くわけには參りませんので。」

「お世辭もんだな、さあ、又上げよう、しかし君、男の酌では詰るまい。」

「とういたしまして、えゝ、少しわけがございまして、婦人なんぞ人間とは思ひません。」

「いやお互にな、」

といつて呵々と笑つたが、夜陰なり、折から片側の一際薄暗い中に、此の聲は凄かつた。

「なんぞといふが、其の實は人間以上かも知れないよ、人は知らず私には事實然うだ、ねえ、赤帽君、」

「へい？」

「人間以上か、以下か、何うだか知らないけれど、何しろ名古屋の婦人は酒を嫌ふと見えるな。」

旅客は突然、妙なことを。

赤帽は何かは知らず、

「然うとも限りはしますまいで、一體に餘り酒の好な婦人といふのはございません。」

「特に名古屋が甚しい、見給へ、此處に居た美人なんさ、酒をはじめると否や遁げました。」

と大分醉が廻つて來た、勿論一息に約二合を呷つたのであるから。

對手も以ての外可い機嫌で、

「成程御尤でございますな。」

「激しいのは、人の飲むのを見てさへ三舍を避ける、杯を出したら墮落をして、酒を飲ませたら目を廻すだらう、實は其の濃見千之助といふ男も、此の名古屋へ酒を飲まうと思つて出掛けて來たのさ。」

「何處かお氣に入つた料理屋がございますので、」

「否、飲ませて貰はうといふのだ、酒を強請りに來たんだね。」

「へい、」

「其の強請らうといふ對手は、當地の高等官の細君でね、所謂當世の貴夫人さ。多分名をいつたら君なぞも知つて居よう、地方は廣くッても狹いから、彼が誰某の夫人といつて指を折れば直に分る。名代の派手者で、殊に無類の美人だから。」

えゝ、成程、其のお方へ、千之助さんとおつしやるのが、酒の無心に入らしつたんで、旦那、係が惡うございますな。」

「聞きゝも惡いんだ、何も銀の平打の簪や、金蒔繪の櫛を證據に、嫁り込まうといふのぢやない、貴夫人といふのはね、其の千の字の姉さんなんだよ。」

## 十一

「兩親ないない男だから、姉は姉で勿論だけれど、母親とも、父親とも、兄とも、叔母とも思つて、懷しがる、慕ふ、甘える、可恐しがる騷ぎなんです。其姉に、去年手嚴しく禁酒を命ぜられたと思ひ給へ。矢張新年、此の名古屋へ來た時の事で、弟は東京に住んで、姉は、かたついた先の主人が當地へ勤めるので、來て居るんだが、久しぶりで逢つたんだ。殊に一學校も卒業して、まあ〳〵榮譽を擔つて來たといつても可い、唯二人の姉弟です。夫人の方でも懷しい、慕はしい、甘やかしたい、又叱つても見たい男の兒だから、逗留をして居る中は、彼處、此處と連れて步行く、朝ッから御馳走して、寢る間も惜しい〳〵らゐに騷いださうさ。其のうち又夫人の知己の令孃なんか、女連三四人で、千の字と一所に、前津の田圃をぶら〳〵步行で、皆それ指環ね、時計ね、金剛石、紅寶石、眞珠、

黄金、珊瑚、白襟やら、友染やら、裾模様、江戸棲、といふ扮装。畦の稲塚の跡だの、大根の枯葉などをおもしろさうに、田舎道の丸木橋を恐怖がつたり、手を曳いたり、溜滓を辷つて、鼻紙を使ふのもあれば、向うで手巾をふるのもあつて、さゝんざで此の一行が牡丹亭へ練込んだ時、

母屋とは立離れた亭つくりの六畳か何かへ、色と香を充満に陣取つて、一寸一口といふ処だが、女連、殊に其の姉さんは、千之助の些少も左が利かないのを知つてるから、お銚子抜で、といふ誂になると、件の千の字此処で堪らなくなつて、事露顕に及んだといふのは、是非お膳の無いのを註文をしたんださうな。

尤も姉さん知つて居る千之助は飲まなかつた、けれども最う大学を卒業しようといふ間際から、些と仔細あつて飲みはじめた、なか〳〵の酒家なんだ。

赤幀は酌をしながら、

「いづれ、お仕込みでございませう。」

「馬鹿をいへ、私が仕込まれた位なものだ。

（生意気だね、）何かで仔細なく許可が出て、直に杯洗がちり〳〵、凡て、まぶし、茶碗蒸、お鮨に、奈良漬、甘いものは、むしやん、外郎の類に至るまで、辛いといへば唐辛子にもかつゑて居た処だから、ぐいのみに三四合またゝく間、口を喇叭にして、けるりを眺めて、呆れ返つて居るのを、

（姉さん、〳〵）といふと、此の声の懸けやうが、魔性のものを呼ぶやうだつて交せ返した、人の悪い令嬢があつて、姉さん、串戯半分に不機嫌不斜。

（私が困るわ。）と苦々しがつて居る中は未だ可かつたさうだツけ。

其の勢でふら〳〵と出た、暮方だつたつてな、酔顔朦朧として真赤だから、姉さんが、

（恥ツかきねえ、同行は恐れる。）

とそれでも莞爾していふと、

（其方で頭巾を被れば可い、）なんのつて大気焔。

道が変つたから、あの大池のふちを通つた、黄昏なり、遠くでちら〳〵と灯は点く、はじめてだから大な湖と見えたらう、困つた千の字は、龍宮の入口でも見つけたやうに、好い景色だつちや、ふら〳〵水際へのめるから、

（貴下、危いことよ、）ツていふのがあると、姉さんは邪険な声に、優しく眉を顰めながら、

（うつちやつてお置きなさい。）

（誰か対手はありませんか、直に心中だ。）と先生大生酔。

色気かと思ふと、袂から、茶屋で攫つて来た、ゆで玉子を出して噛ります。

是で最う当分勘当の価値十分だから、姉さんは貴夫人式の丸髷、脊が高くなるほどツンとしてずん〳〵、前へ行くあとから、よろ〳〵よろよろと道を綾にかけて歩行いたが、一軒屋の手前に、路傍の明地の端へ、夕風で焚火がしてあつた。

ちよろ〳〵炎の上つてるのを、とろりと見つけて、何処まで意地が汚いのか、止せば可いのに。」

—はて、へい。」

と赤幀は猪口を差控へる。

## 十二

「深見が巻煙草を出すと、突然口へ銜へて、蹌踉けながら點けようとすると、僅なことも恩愛で、蟲が知らせるとでもいふ事か。澄まして前へ立つた姉さんが、其時フト振返つて、

（あゝ、危い。）といつたが間に合ず、無精にも程のあつた、懐手をしたまゝ口で吸ひつけようとしたから、ぐら〳〵となつて、焚火の

[illegible]横倒にワンのあつた、
赤帽は思はず口へ出して、
「えゝ、危い。」
そら、懐手だから足搔がつかない、其まゝ姿を崩すやうに、ぐたぐたとなつたが、あ、あ、と呻いつたッ切。
夫人が顔の色をかへて飛んで來て、地へ膝をついた、友染の長襦袢が泥染れになるのも構はず、一心になつて抱起したが、片袖姿で火さ。
自分でも紫紺の縮緬の襟卷や、江戸褄の彼處此處焦して構はず、揉消す處へ、皆寄つて始末はつけたが、直に腕車で愛知病院へ駈込むといふ騷ぎぢやないか。
左のこの腕から大火傷、今でも痕は消えないが、まるでこれから、」
といつて旅客は袖をかゝげて見せた、其の露したのは右の腕で。
「ずッとこれへかけて朱で刺ものをしたやうに、倶利伽羅紋々の龍の形、可恐しい極印を打つた、其の千之助の手を取つて夫人が自分は涙ながら、じりじりとあぶらを絞らせて、此處できつぱりと禁酒の申渡。
尤もそんなにかたまるまでに、いかに親身とはいひながら、其の優しい介抱といふものは、怪我人よりも夫人の方が、いたいたしいまで痩せたくらゐ。
此處で、音もなく恐れ入つて、男らしく立派に誓つた。
「決して酒はのみません。」
恁ういふわけで酒を斷つたが、東京へ歸つてから、又感心に、一滴嘗めても見ないといふ大勇猛な精進さ、まあ、ざつと一年間。」
赤帽は取つておきの手の猪口を、つくづくと見てうつむきながら、然も感に堪へた趣で、
「御酒をおやめなすつた其のお方も感心でございますが、留めさせた其の御夫人は猶豪うございますな。眞心が通じませんでは、然うは爲せられぬでございませうに。えゝ、たとひ親身の姉様にした處で、今時そんな優しい婦人がありませうか、いづれ極昔風なお孃樣で、女學校などゝいふものは、門をお潜りなさつたこともないお人でございませうですな。」
と思ひ入つた樣子で聞いたが、目は輝くのであつた。
旅客は何とも心づかず、
「どうして東京で有名な學校出のぱりぱりだ、縱の字も讀むし横の字もすらすら讀む、馬や自轉車は知らないが、ぶらんこにも乘つたらう、荒き風處ぢやない、テニスの球にまで當つた人だよ。」
「へい、袴を穿いた學問にもそんなのがありますか、へい。」
といつたが心ありげな、あとの言を酒で壓へて、赤帽はぐつと飲んだ。
「怪我にもそんなしんせつな人でもありましたら、張合になつて留められませうに、私なども、へい、是が病で不可ません、それでずッと御辛抱なさりますか。」
旅客は丁と膝を拍つて、
「はゝは、處が不可い。」
「はて、留められませんかい、」と彼方も色に出て眞赤に笑つた、齒が白い。
「其處で酒を強情りに來たのさ。」
「なるほど。」
「其の姉さんに。」
「へい、なるほど。」
「いかに飲みたければといつて、一旦斷ちますと誓つたものが、對手が金比羅樣でなくつたつて、むざむざ飲まれるものではない。
何、さきは婦人だ、しかも姉だ、また東京で酒を飲むのが名古屋まで知れるものか、知れたつて小兒ぢやなし、一人前の男だと、いつて了

へばそれまでだが、其處は義理だ、情愛といふもんです、」

　といひかけて悄然とした。

## 十三

「そんならまたそれほど義理情愛をわきまへたら、默つて禁酒をして居れば可いやうなわけになるが、其が不可い、といふのは、赤帽君、君は何故か十年の知己のやうな氣がしてならん、こんな場合であるからかも知れないが、私は然うではないやうだ。」

「私も貴客、何となく、へん、飛んだ無躾でございます。」

「あゝ、私の知己なら、千之助にも又知己だ。朋友のために、まあ、聞いてくれ給へ、

　元來ね、其の深見が酒をはじめたそも〳〵が、何も好や道樂ではないんです、私なぞが見ても、止むを得ず酒にしたのだ、詰り藥なんだ。

　奴は其の[illegible]で生命がけで戀つて居た婦人があつた、思うて遂げざる戀で、其のものは他家へ縁づいてしまつたんだ。

　赤帽の眼は又ぎろりとして、貴を帶びて輝いたが、人知れず一種異様なものであつた。若し一旦是を見たら、いかに酒が言はするにせよ、必ず其の物語を中止したであらう、けれども赤帽には庇があつた、庇は人に暗かつた。

「縁づいて了つたんだと、唯口でいへばそれだけの事だけれど、若い當人の身に取つちや、身體がしびれて血の色が變るくらゐ、それからといふものは、酒を飲まないで、千之助、顏に酒きた色のある事はなかつたんだね。

　是だもの、いかに義理だつて、情愛だつて、姉さんの一言で酒を斷つたのは容易なわけぢやない、こりや私などには出來ない。

　けれども又、情愛で飲みはじめた酒だから、同じ情愛で斷つことが出來たんです。

　一體飲む中も、止めてからも、心が狂ふほど、情ない思ひをしながら、其處は教育のある男だから、やけを起すなぞといふ不心得な事は微塵もなく、蔭ながら其の餘所へ縁づいた、戀人の無事を祈り、幸福なやうにと希つて、舅姑の氣質やなんか、實家の親だちより恐らく一倍だらうと思ふほど、氣を揉んでさ。いや、其の初産のおめでたさを、風の音信に聞いて、朋友の醫學生に、西洋産婆と、取揚の優劣を、内證で聞く如きに到つては、馬鹿々々しいが、心は潔い。

　然して其の男の心持といふのは、何時か、何年の後か、或は何十年經つてか、そりや知れないけれど、先方が白髮になり、自分も齒が拔けて、誰が目にも色氣のなくなつた時か、もし然までに待たないでも、自分も斷念めて他の女を女房に持てるやうになるか、或は一朝豁然として大悟徹底をしてだ、女に對して心の動かないやうな見留がついたら、其の時こそ戀人の手を公に握つて、御亭主の前、親類の前、知己の前で、一度自分が、どれほどに思つて居たかを、其の婦人に打明けて、薩張笑つて退けようといふのだつた。

　何故なら年は若し、思ふの戀ふのといふ事なんぞは、天下の一大事と心得て居たのだから、情なく傍へ縁附かれるまで一度も素振にさへ、前方へ心を通じたことがなかつたさうで、又それだけに心は深いんだものね、死ぬまで默つて居るのは餘り情ないといふわけなんです。」と辭もしめやかにいふのである。

　赤帽の顏の色は、やゝ解けて、

「それでは約束をして置きながら、寢返りを打つたといふわけではございませんな。」

「眞個さ。」

「へい、それならば未だしもでございますがね、

もしか寝返を打つた同僚なら、活かしては置けませんで。と、可恐しい世辭をいつて、又杯を傾けたから、

「貴客、心がはりなら女學生でございませうか、何にも知らんのでは大した薄情な女といふではありませんで、薄情な女でなければ、大方蝦茶袴は穿いた事のない人でございませう。」

「可恐しく蝦茶に祟る、意恨でもあるか、」

と不圖耳に立つたから問うたが、

「へゝ、何、然ういふわけでもございませんので。」

「然うか、いや然し違つたよ。千の字の其の叶はなかつた戀人といふのは、矢張姉さんなる夫人の學校朋達で、しかも容色が佳いので、兩方惚れ合つて姉妹同樣、婦人同志で悋氣をしたといふくらゐなんだ。」

## 十四

「だから千之助の姉さんといふのも、大に其の間の弟の情を知つて居るから、同じ酒の意見にも、特別の意味が籠つて、實に涙があつたんだね、其處で、其のまんま禁酒して、其の氣で辛抱をすれば、何事もなかつたのを、急に我慢が出來なくなつて、東京から酒を強請りに來たといふものは、何うです、去年の秋、其の戀人が、産後で果敢なくなつたぢやないか、勿論、華奢でね、どうせ、はじめッから兒を産まれなどは無理なんだ、無理だつて、しかし、こればかりは仕方がない。

仕方がないのに、斷念められないのは、千の字で、唯一心に、そら、今の其の機會を待つて、一度思つただけを打明けようと、卑屈なやうだが因縁さ。それぱかりを樂みに、當にして居た、其の美しい的に、ほろりと消えられては、急に闇、國も處も知らず名もない山の中に、眞暗な道を踏迷つて、唯便りにした綺麗な星に落ちられたやうに、心細く、情なく、寂しくなつて、其のまゝ死ぬのさへ、冥土に頼みないやうな、何ともいはれない心持。切て酒でもなくば、迚も立つちや歩行かれなくなつたから、其處で強請りに來たわけなんだが。

其も勤める役所があつて、おいそれと、直に旅行も出來ないので、一日千秋、此の新年の休暇を待構へた。

今度は、兎も角も一旦男が盟を立てた、其の盟を破らうといふのだから、萬止むを得ない心の中をね、利發な姉さんは大抵容子で知つて居ても、是も道斷、つひぞ口へ出した事はないのだから、更めて打明けよう、手紙でいへる事ぢやない。

そんな、こんなで、昨日名古屋に出掛けたんです。」

赤帽は庇を斜に、酒に熱して色づいた、耳を傾けて聞いて居たが、

「はあ、」

溜息をして、獨で頷き、

「酒も唯、恁うがぶ〳〵頂いて了へば其までゞ、此の娑婆を素通りにしたも同一で、何の味もないでございますが、そんなに嚙〆めて召食つた、其の御酒は貴客、まづ、どんな味がしたでございませうな、」と舌打をしながら染々。

旅客は案外氣の拔けたやうに、

「いやはや、甘からず、辛からず、苦からず、澁からず、他愛のない、力のない、當のない、水のやうだといひたいけれど、それも波立を飲むやうなもんぢやなかつたさうだ。」

「へい？ 然ういたしますと、」と力を入れる。

「實は飲まずさ。」

と崩折れていつた。

「おう、それぢや、其の姉さんとおつしやる夫人から、何てつてもお許が出なかつたのでございますか。」

「何これを許さないやうな思ひやりのない婦人なら、東京から、わざ／＼誰が強請りになぞ來るもんか。また、はじめッからそんな人には盟もしないさ。」
「では貴客、」
「居ないよ。」
「はて、」
「留守さ、暮の三十日から奈良へ旅行をして留守だといひます。其の主人も居ない、是は公用で、もッと以前に、佐世保の方へ行つて居るんだ。

あとは書生と女中ばかり、森閑とした留守宅へ、昨夜一晩、望の酒處の沙汰ではない。

然も歸宅のほどは知れずといふね、然う何時までも家をおあけはなさるまいと傍ぢやいふのだが、日限で拔けて出た身體だらう。松の內待つて居る譯ではないから、唯もう茫乎、三時間と五時間と、惚うして居ては、魂が拔けて、身體が藻脫の殼にならうも知れぬ、又の事、と思ひ切つて、晝過ぎ、出發つて歸ることに極めると、それでも未だ買つて歸る土産に氣がついたもんだから、

旅客もつい、話の次手に心付いたか、又革鞄を開けて取出した。

一議論に紛れて、すつかり心付かなかつた、爰に好い物がある、萬歳とかいふのゝ蒲鉾ださうだ。汽車の中で、酒の時ッて、內から……蒸籠屋で、お歲暮に到來といふのを達引いてくれた。一ッ喰はう、君もやれ、甘いぜ、此品は。」

## 十五

「其處で書生さんに調へて貰つて、革鞄に詰込むと、直に出發。

皆が見送らうといふのを、いや、暫時の間も留守が大事だ。か何か氣の利いたやうなことをいつて、其の代り、停車場まで腕車を、といふので、帳場のを雇ひ込んで、さつさと引出させたは可い。これが其のまゝ、此處へつけば、何の仔細もなかつたのに、途中で、彼の記念碑を見ると、フト魔が魅して氣が變つたんださうさ。」
「えゝ、其處で、あの紫川へ。」
「否、そら、ものが記念碑だらう、何か不知、禁酒事件に取つては、千之助に一大記念のある牡丹亭だ、腕車の上で、不圖其處を思ひ出した。

行つて見よう、と突然轅をかけて、梶棒を其方へ向けさしたんだ。

餘り物足りない旅行なり、德氣なし、それに汽車も此の急行があるといふ考へで、牡丹亭へ行つて見ると、一寸腰をかけてと思つたのが、つい、其の何となく懷しくつて、歸られない。酒は飲めないのに、肴は鮑、あの片思ひといふのなんぞ、氣にして箸もつけないで、人ッ子一人居ようぢやなし、寂れた景色を觀めて居る中、雪がちら／＼と降り出した。

嫌な底冷がして、一昨日あたり、青空が見える底から、時々さつと、高い銀杏の梢から、落葉するやうに降つたつけ。

又此の雪が禁物なんだ。

何でも千之助が其の戀人を見納め、といふのが、其の人、湯あがりで、ほんのりして、濡髮が思はせぶり、橫顏にかゝつた姿で、机に頰杖をついた處を、硝子窓、其の窓へ一ぱいにしッきりなく、雪がかゝつてこんもり、珠で飾つたやうなそこへ、ぼんやりと赤く灯の影が映るのを、杉の垣根越、其の家から歸り際、玄關で分れた逕が、屋敷町の裏手へぐるりと廻つて、迂つて部屋へ入つた令孃の居間を、梅の枝から透かした處。

然も結納の取交はせのあつた夜さ。千は、

「男子でありながら、何たらう未練らしい、雪の中に立竦んで、暫時恍と見る內に、見る／＼、

中に其の合歡の花の色が部屋の内の暖さに、硝子窓には鎖さへ置いたのに、颯と青白くたつたのを、あゝ、心の冷さが、面に顯れる位な女が、怨みに思つた事もあつたが、天花をされた時には、いや、もうあの時分も、影が此の世の人ではない、早や既に白玉樓中の仙女であつたのかも知れないなどゝ、何かにつけて愚になつて、くだらない事も忘れないから。
　雪で又思ひ出した。
　然も急には留みさうもない、其處等も白くなる、火鉢を擁へてつくねんとしたッ切、名殘が惜くつて立てないから、日の暮れるまでも恁うしてなぞと。
　しかし冷い中に待つて居る車夫は氣の毒、千歳、それに新年で急しからうと、其處で、荷物を引取つて返したさうだが、此が又惡かつた。
　さあ、居ると極めると歸りたい、何の、一人で其處に熟として、日の暮れるまで遊ばれるくらゐなら、最う一晩、姉さんを待つたつて可いわけたんです。
　革鞄を提げて、せつかちに牡丹亭を飛出すと、いつかの大池の岸について一町はづれまで一町足らず、火傷をして乘せられた時覺えがある、此處で車を、と思つたが間違で、さあ、無からう。
記念碑の處まで出さへすりや電車もある事と、其のまゝ目つぶしを喰ふ雪の中をかまはず、突切つて何町か分らない、方角をつけて急いで來ると、間の惡い時といふものは。何と鼻緒がブッツリ。
　雪は薄くかゝつたばかりだから、踏留まるはずみに踏の惡い處、ぐつしやり足袋跣足、出るも引くもならばこそ。
　幸ひ土塀板塀だの生垣つゞきの裏町で、一人も人通りはなかつたから、轉まれの獨樂で蹲つた形は、御當地の人へ見せないで濟んだが、其のまゝぢや何うする事もなりません。
　可鹽梅に、雪も小降になつたから、おまじなひほどに白く積つた、路傍の杉垣に革鞄を寄せかけて、ともかく馴れぬ旅路といふ體裁に……、下駄を結へつけようとして居ると……。」

## 十六

「貴客、貴客、」と優しい聲で呼び懸けた婦人がある。
　此方は手巾を引裂くのも面倒だから、其のままで、俯向いて結んで居た處、其處等に知己はなし、婦人だし、別に通りがゝりのものがあつて、其に話しかけたのだらうと思つたけれど、呼ぶのがつい耳近で、宛然枕頭で鶯でも鳴くやうだから、振向いて見ると直ぐ背後。
　革鞄を立てかけた杉垣の其の枝折戸に、目の覺めるやうなのが立つて居た。
　年紀は二十三四、後で七ッになる兒と、五ッのと、二人の母親であることが知れたんだから、六、七かも分らない。
　生際の濃い、あまるほど澤山な髮を花月卷で、冴々しく燦々する寶玉を飾つた横櫛、乙女椿の花簪、目の涼い、二重瞼の、頰のふツくりした、色の白い、口許の緊つた少し濃過ぎると思ふ程に眉のくッきりとした、脊も些高過ぎるばかりだから、猪見榮がある、肉が厚いといつた柄で、立増つた品格があるではないが、何となく總體におもみのある、其が然も媚めいた形容だつたさうだ。
　一寸見には……先づ、燃え立つ牡丹の大輪なのを、どんより曇つた少し蒸暑い日に、身體へ汗ばんで視めるといつた風情。顏を見たばかりでも、ほんのり人肌の暖さが身に染みて、ちらちら降つて居る雪も、其の人の身に觸ると忽ち融と薄紅。花片にもなりさうな。傘はさゝず、赤い鼻緒の上草履で其こそ小留みのない白いものが、圓く積つたやうな新しい足袋。褄は

ず薄寒の庭芝を踏んだが、片褄がぞろりと爪尖にかゝつて、惜氣もなく、蓮葉に小肥りのした二の腕の露なまで、枝折戸の桂に高く片手をかけて、伸上つて覗くやう。

片手に桃色の絹の手巾をはらりと、其の手で上前の褄を取るやうに、薄鼠の風通お召の上衣の、朱鷺色の扱帯があからさまに、懸うずり下つて幅廣な、其下あたりで輕く指のさきで引上げたが、一體に着崩れのした、下着はヅッしり更紗縮緬、紅色友染の對丈襦袢も、裾長う、身うごきをすると藤色の其の裾が、はら〳〵となる、しどけなさ。

上に黒縮緬三ッ紋の羽織を、無造作に引つかけたが、肩を辷つて、其の褄を取つた手首にからんで、緋綸子の裏が、だらりと肩へ、一太刀浴びた紅かと、艶も、緻いも、情も、色も、其處から溢れるばかりの装。

見てさへ然うだのに、片膝取亂したほどの酒機嫌か、羽織のずッて落ちるまで、炬燵にでも蒸されたらう、うつとりと濕ッぽく、霞を帶びた眼の縁、頬の色、一時にあけないのも道理であつた。

（私ですか。）

貴客、無御難儀でございませう。）ッていつたさうた、こりや勿論鼻緒を踏切つたのを見て、しんせつで出て來たんだね。

然ういつて、兩手で手巾を披いて、緋蹴出に胸へかけて、裂く眞似をした時、微に口を歪めたが、（あれからお見受け申しまして、私も、あの、手巾でも差上げませうと思つて來たんですがね、お待ち遊ばせよ、貴客、それぢやお穿物が間に逢ひましても、御足が泥だらけで、あれ、臺なし、お氣味が惡くッて不可ません。まあ、一寸お寄り遊ばして支度をなすつて行らつしやい。さあすぐに。否、私だつて、お世話をやかして頂きたいと存じて、出て來たのでございますもの、御遠慮を遊ばすな。誰も居りはいたしません。）と莞爾していつたさうだ。

平に辭退をしたんだが、又事も増して來たし、つい其の言に誘はれた。

（お庭口から失禮です、お言に甘えますが、しかし表へ廻りましてお臺所口で伺ふぞ。）（貴客田舎家へおいで遊ばしてそんな事をおつしやるものではございません。）と招いて手を取るやうに、身體にまで心を入れて、千之助を連れ込んだが、どうして田舎家どころぢやない。

大家の別莊と見えた、生垣の工合なぞは古風な寮のやうに誂へたが、向ふと、正面に小高い西洋造の構があるんだ。」

赤帽が突然、

「旦那、其、其奴が、どんなことをいたしました。」と猪口を持つた手が震へた。

「知つてるか。」

「名古屋に西洋室のある別莊は一軒しかございませんで、淫婦！」といつた眼の色が尋常ならず、ぎろり、旅客の目に映つて、殺氣を帶びて見えたのである。

明治三十年八月

## 説林

故人一葉の説に因れば綻に飯粒をクッつけたので水馬が涌れるさうなり。柳浪子の説に從へば、妖物くさいといふは五色の香がするのなり。天外子が襖を開けば、腹の痛む時（チキン、ロース）を食べれば直り、宙外子の説によれば人體パンを多食すれば美人に遠かる。また水蔭子の説に從へば、蛙といふものは恐いものなり。亞太夫子の說く處に因れば、すべて小說家は口紅をつけて歩行くが宜しく候。

――鏡花全集卷十五「[illegible]」より

# 續紅雪錄

一

「淫婦、淫婦といふか、赤帽君、君は彼の別莊の美人を淫婦といふか。」

旅客は激しく疊みかけるやうに言ひ返した。

「え丶、能く彼の體が、白い骨になつて溶解けない事だと思ふくらゐなもんなんで、」と横に蒲鉾を喰ひ切つた。

「大層委しいと見える、ありや一體何ういふ身分だ。」

「へい、御存じではございませんか、ありや貴客有名な、……といふ、大したお役人樣の奧樣でございます。」

「否、そりや聞いた、千之助に聞いたから心得て居るが、其の生立だよ、其の以前の事だよ。」

「まあ、旦那、千之助樣を先づ、別莊へ連込みました、あとをお聞かせ下さいまし、承りかけたで、氣になつてなりません。又お話の樣子に因りましては、申上げます心得がございますで。」と半ば殘したのを口へ入れて、拇指をぺろりと舐める。

旅客は次第に醉が出た、何の仔細もない事を、然も感に堪へた趣して、

「あ丶、成程、私も人事だが、癪に障つて、腹に納めちや居られんのだ。こんな事を胸に持つて、ぐづ〱して乘つた日にや、雪の上へ、猶汽車が重からう。最う〱東京へ歸るまでに、すつかり胸のすくやうにさらけ出して了ひたい。」

其處で千の字だ。

其の媚いたのに連れられて、枝折戸を入つたわ。風俗のしどけない、裾がぞろりと敷きさうなのと並んだ處は、お庭内を道行といふ姿だけれども、前鼻緒の切れた下駄と、鞄とを兩手に提げて、跛を引いて悄乎は、餘り圖の好い形ぢやない。意氣地なしの千の字め、何の事はない、小學校の色男が、腕白に苛められて、泣ツ面で居る處を、綺麗な餘所の小母さんに助けられた有樣です。

これから何處ともなく、室の花がほんのりと薫つて來るやうな、婦人と肩を、いや婦人に肩を摺寄せられて、些と固くなつたといふ體で、あひかはらず跛でれ、薄雪のか丶つた一面の芝の上を、取着の其の小高い西洋室へ行くんだが、芝生は眞圓な小さな山の形に出來て居て、段はないが爪尖上。右の方は此の築山の裾を、小川が一條繞つて居たが、水が切れて美しい小石ばかり。窓の梅の北面は雪封じて寒し、さ、龜裂が入つたやうに底に氷が張つて居た。通る間、外の樹はない、梅がばら〱五六本、枝ぶりに紅梅だらうと思ふのもあつたが、皆蕾が堅かつた。

左の方は、遠く奧の方に、黑板塀が、松の植込の中に見えて、此處は、飛石、石燈籠、盆栽もならべてある、折曲りの緣も見える、次第に歩行くにつれて高くなると、目の下に、藁葺の小屋が故ツと一ツ、茶座敷と見えて、廂には落葉の赤らんだのが其のま丶、庭も仕切つてお定りの敷松葉。横手の、今の緣側に、ずツと障子が並んで、端の一枚が開いて居た、早や樹の蔭は薄暗いから、其處にでも人が居れば居るだらうかと思ふやうなもの丶、寂寞して、なるほど、(誰も居りません)といつたのが眞個らしい。

何でも、此の西洋室は、一室だけ、好事で、

別莊の二階に拵へたので、直ぐ扉を開けると、築山へ出て、芝生を下りるやうになつて居るのだつた。

入口の扉の傍に、前津から廣見へかけて、田圃を見晴しの處に、何處の公園にもある、ロハ臺のやうな腰掛が二三脚置いてあつたから、千之助は其の上へ鞄を置いて、

（お言に甘えまして、飛んだ失禮をいたしましたが、それでは此處を少々お借り申して、）

（何ですね、貴客、まあ、此方へお入ンなさいまし、）ツて、二三歩前へ驅拔けると、庭内を練つて來た上靴のまんま半ば引明けたなりになつて居る扉の中へ、ひら／＼と入りながら、ぱたりと其處へ上靴を直して出して、

（さあ、何うぞ、御覽なさいな、吹込みますぢやありませんか、）と半身を出して硝子の戸越。

雪が又灑と一時。

二

「（本宅は貴客、これでも何ですよ、賑かな町の方で、近所が騷々しいんですよ。其にね、主だつた人は暮ほどから、上向きの用をかねまして、東京へ參つて居て、留守なんでございますけれど、春だもんですから、つい人出入が多し、客も澤山で頻くつて不可ません。

師走から又何の彼のツて、氣忙しく／＼ツて逆氣せましてね、大概病人になりましたから、一日ゆつくり、些と手足を伸しませうと思つて、今朝起拔けに、此方へ參りますつもりにして置きましたのに、出掛けようとすると、又二三人、餘所の夫人だの、お孃樣だの、中には御夫婦づれで入らつしやるのなんかあるんですもの、ひとり者の處へは罪ですね、）と手巾を口に當てなんぞ。

（やう／＼、お晝過ぎになつてから、出て參りましてね、一日だけ、尼になりました氣で、おもいれ休まうと思つたんです。

然ういたしますと、女中どもが、憎いことを申すぢやありませんか。

どうして賑かなことの好な、私がですねえ、洒落にも、好事にも、一人で別莊へなんか入らしつて、半日だつて辛抱がなるもんですか。須磨、明石は、本で讀んでこそ風情がありますけれど、）ツて女中が云つたと謂ふんだが、そりや何うだか、大方自分のこしらへた、言葉の綾とかいふんだらう。

それでも聞く者にや趣があつて、優しい氣がする、別嬪なか／＼の學者さ、君が云ふ、いづれ蝦茶を穿いたものと、直に分る。―

赤幘は讀めたやうに、讀めないやうに、一へい、人相に露はれるでございますかな、蝦茶にも、ありや山に千年、寄宿に千年、甲羅の生えた萬年蝦茶でございまさ。

其の癖、見た處は學校あがりのやうぢやございますまい。私は能く知つて居りますが、豪い御役人の夫人で居ながら、惡くすると、高等淫賣、商賣人上りも藝妓ぢやありませんで、女郎上りのやうに、べたついて、第一、あの裾ツつきを寬うして、蹴出をふんだんにひらめかす工合なんさ、容易ぢやありませんや。あゝいふのは、何でも袴馴れた處から、腰を引括る紅いものは、禮服と心得て、惜氣もなく踏み出すんでございますよ。何だつて貴客、婦人の褄に、帶がなくツて歩行くんだから、蝦茶を穿いた圖は、惡く見ると大道中を褌一ツでお練りも同然、肥つてこそ見えますけれど、長襦袢一枚といふ姿だ、無法だらうぢやありませんか。奴め、其に馴れ切つて居るもんだから、ソレひら／＼とするのは平氣でさ、不躾千萬な、私ア考へますが、屹と其の千之助樣とおつしやるのが、しどけないツてお話だと承りますから、是非其の風を、見せられたのに違ひますま

いと思ふですがな。」

「なに、其のくらゐで濟むものか、磨き込んだ欅の卓子を圍んで、差向ひで居ると、椅子へかかつて居ながら、下で密と足を踏む、」

「はあ、はあ。」

「婦人の方からだぜ、千の字は、汚れた足袋を脱いで上つたから素足だらう、又素足でなくつたつて、こりやヒヤリと應へる。」

「畜生、」といつて赤帽は陶然として酔へる顏の、頬を膨らして天眼に的なく睨んだ。

旅客は頬杖で下を見ながら、駒下駄の尖を刻して、

「寒からうと云つて、椅子を引擢つて暖爐の前へ揃へて、無理に並んで掛けると思ふと、手を出させて、隱させながら、貴客のお手の方が小いか不知、なんて、見て居る中に、指環の嵌つた、細いが重い指で、一寸突くな。」

「それだ、それだ旦那。」

「然うかと思ふと又、逆上せる〳〵と云つて、目のうちを颯と紅くして、肩を落して横顏で覗込むやうにして、

（女は何故然うなんでせうね、貴客の其の冷こいお手を、ちつと當てゝ下すつたら、どんなに清々するでせう、厭？ お厭なら、撲つて頂戴、さア撲つて頂戴な、撲たれると私嬉しいの。）なんのツて云つたさうだ。」

赤帽は厚い唇を割つて、生々しい牙を剝いて、獰に笑つて、

「吐かしてけつかる。」

三

「（今度は、さあ暑いから、些と其處等を視めませう、別々に立つちや厭よ、貴客は直に景色に見惚れて、傍に居る私を忘れるでせう、然うして、御覧なさい。）と云ふと、二人で打並ひにかける低い椅子さ。

（私も煙草が喫めましたら、然うして居て、煙だけ含まして頂きませうのに、飛んだ不粹ですわ、）なんかね。」

「其の術、其の術！」

「然うかと思ふと、

（でも然うやつて、何時まで居られる身體でせう、貴客は下駄の緒さへたちましたら、直にお歸りになるんですもの。離れる稽古をして見ませう。）とはらりと立つと寢臺にぐツたり、崩れた風情に腰をかけて、俯向いて、

（あゝ、寂しい、おゝ、心細い、つまらない、歸すのは厭になつてよ、貴下お泊りなさいまし。）」

「吐かしてけつかる、厚かましい、」と赤帽は呻つていつた。

「何の其時の千の字か、厚かましいと思ふものか、最う、惚けて惚けて惚け通つて、いくらか其の媚の情で、血の動いてるやうな人間だ。はるばる來て其にや逢へず、婦人の今のいひ種ぢやないが、寂しい、心細い、詰らない處で、牡丹亭の雪で無常を感じて、鼻緒が切れたので、既に滅亡、氣も魂も魄も凍りついた處へ、優しい、情らしい婦人の、然も、萎へたやうな美人のだね、何の事はない、久しい間の禁酒のあとへ、一滴、恐しく酔ふ、嬉しい、烈しい、怪しい、花の露を注込んだやうなものだ。

然も吹曝の雪の中から、襦袢も襟も帯も袖も、色の濃い、蕊の長い、花片の大い、香の高いのが名も知れず爛漫として天竺の名所に咲いたやうな、硝子室へ入つたばかりか、暖爐はくわつ〳〵と。

奴は最う扉を開かれて茶色の窓掛で包まれた、一面に黄色いやうな、室へ入つた、のつけから、耳は鳴る、肉は躍る、血は走る、唇は乾く、足は竦む、膚は荒れる、氣味の悪い汗は

垂々流れる、碌すッぽ口は利けず、饒舌れば前を越される、言質は引たくられる、體のいゝ生娘が婚禮の晩の如しだ――其で幾歳だと思召す、姓は深見、名は千之助、行年かぞへて二十七さ。早熟だと小兒のある年だ、馬鹿な奴だ、だから惚れた女には不叶戀で、指をくはへたあとが禁酒、禁酒のあとが姉さんお留守で、あとで鼻緒を踏切つた、それから酒だ、此の後でお茶漬を食べるとおいしい、お汁粉も惡くないが、婦人は不可い。凡そ烏啼が惡かつたり、鼻緒が切れた前兆で、情人の出來た驗がない、內へ歸ると女房が返討か、主人が自殺か、母親が病氣か、舅様が頓死だ、然もなけりや借金取が居催促。然も新しい穿物ぢやないか、尤も餘りお高くないのだ。然し可い酒だ、大に飲む、さあ、君も飲め。」とはずんで手を伸して猪口を銜と出すと、此の人の言話は、酒が言はするのであることを、其の容貌と風采と擧動とを見て悟りつゝ、猶後段を聞かむことを欲する思切なる赤帽は、途中で切らすまじとて滿々とこそ注いだりけれ。

「そんなだもの、何うして厚かましいなんて、心で澄まして居なんぞ出來るもんか。君聞け、其の愚なること甚しきやだ、甚しきに到つては何だ。庭から入れようとして、硝子張の扉から先づ半身を出してな、(さあ〱、)といひ〱入つても行かず、立つて覗いて待つた時の、其の婦人の顏がだ、亡なした戀人に肖て居ると思つて、天窓から悚然としたと謂ふぢやないか。

いや、そんな、ちよろッかな料簡だから、嫌はれたに相違ない、又嫌はれるやうだから、女旱のした奴だ、尤も紅い雪はためしがあるが、女の降つたといふことは、年代記には記してない。

まあ、君、聞け、其の氣で聞け。」

「えゝ、聞かんで何うするもんです。」

「それだもの、泊つて行けと云はれたので、まさか泊らうとは思はなかつたさうだけれど、間拔め、眞面目になつて辭退をした、其のいひぐさを聞き給へ。

「飛んだことを、貴女の御名譽のためにも、私は直ぐ、お暇をしなければなりません、とさ。」

## 四

「尤も此の人はね、兩親が世を去つて、東京の山の手に、學校へ通ひながら、自炊をして居た時分、花が咲いても出嫌ひで、日曜にや朝寐が樂み、大戸も潜戸も閉めたまゝ、半日引被つて居ると、郵便が來て、配達が戸を叩いても、起きないから、合長屋の娘が受取つて、庭口から廻つて、しまりはない緣側の戸をあけるのと一所に、庭の櫻が、はら〱散つて入るといふ、春風の暖さ。ぐッすり寐込んで居るのを起して、手紙を渡しながら、若旦那、私も眠うございます、裾の方へお邪魔をさして下さいましな、トくの字形になつて謂つたと思へ。」

「旦那、何のお話でございます、怪しかりませんな、へゝゝゝ、」

「否さ、先づ譬がだよ。うむ、寐たけりや入つて寐ろ、といふと其の娘が笑つて云ふのにや、「一寸、こんな時は、厭だ、成らん、不可い、とおつしやるもんですよ。然うしないと、おいやなら、殺して頂戴か何か、機會がなくッて入れません。と笑つて出て行つたので、舌を卷いて、今時の女は、と、驚いたといふ。何、本人は眞個、眠いから頼むこと、正直に取つたんださうだ、些と時世後れな人だな。

「そんな事は後れた方が結構で。」

「だがね、其の氣だから不可ません、寢臺に腰をかけて、今夜は泊れ、といふのを、矢張鼻緒の世話をしてくれようと云ふのと一般、雪は降

るし、……尤もそれまでに、豫め、折角當にして、わざ／＼東京から尋ねて來た、姉が奈良行の留守のため、逢はなく、失望して歸るッて事を話したもんだから、心を察して、しんせつに泊めようと云ふのだと思つたので。勿論、姉さんが此方に居りや、最う一晩くらゐ逗留する筈の事を、話して了つた後だから、用があるの、急ぐのは、言譯になるまいぢやないか。其處で、

「貴女の名譽のため、とは、いひ種が厭味だね。」

とすると別嬪は、身體を投げ出したやうに、上靴の裏を見せて、男の方へ、白い爪先を揃へて反したから、寢臺に深く手を支いて、長く伸ばした膝の上で、手巾を輪にしたり、はらりと解いたり、

「貴方にこそですわ、何の女に、名譽も身分もありませう。お泊り遊ばして下さいますりや、却つて私の名譽ですわ。まあ、お馴染もないのに厚かましい、それでも氣の利かない旅籠屋だと思つて下されば、随分肯入れて下すつても可いやうに存じます。お厭でせう、お厭でせう、お厭でせうが、行暮れた旅の空なら、野にも山にもお寐らないとは限らない。唯もう一思ひに然う斷念めて下さいまし、そんなにして在らつしやると、種々、東京の夫人の事やなんか、お考へなさるから、言ふことを背いて下さいません。思ひ切つて、恁うして、」といふと上靴を脱いで、其の足を何だ、ふツくりした裾にくるんで、するりと浮して寢臺の上へ、活潑に横に寢た、上前を引張つても、友染は媚しい。」

「其だ、旦那。」

と赤帽はフト調子高に言つて、拳を握り、腰を曲げて、相撲が仕切つた身構で、激しく足踏をしたのである。

「寢て見せて、

「さあ、一思ひに恁うやつて此處へ横にお成んなさいまし、私が搔卷を持つて來て、密とおかけ申しませう。然うして目を瞑つて頂戴な、然うすりやもう、斷念がついて泊られますやうになりませう、よ、然うなさいましよ、貴下後生だから、然うなすつて下さいよ、」といつてね、まくれた袖の二の腕の、雪のやうなのを惜氣もなく、小兒のやうに寢臺を打つて、手巾を投げちや釣り寄せる、其の桃色のが靡く度に、得ならぬ薫が馥郁として、霞の梯、溢れ、渡れ！どうして猫がチヨツカイで、袂をおもちやにすると思へるものか。

初對面の男にそんな事が、と思ふかも知らんけれど、なか／＼其のくらゐは何でもない、あとで、薄茶を一服といつて、下座敷へ連れて行つてから、火鉢を中に差向ひとなつた時にや、じり／＼と摺寄つて來て、膝をね、膝へ、」

「汽車が出ます、」と野放圖な大聲、扉から坊主天窓を出したのは例の豫言者。

がらんと鈴が鳴りはじめた。

## 五

「お待ちなさいまし、旦那、唯今出ますのは急行が着いたのでは無いでございます。此の名古屋を十一時三十分に出ますのが、あとが來ませんために是まで見合せて居りましたのを、餘り遲くなりますに因つて、仕立てゝ出すでございます。こりや一々停車場へ寄りますですから、のろくツて仕やうがありません。」

「然うか。」といつて、少い旅客は、一度立ちかけたのを猶豫つたが、早や此の待合には、荷物も人も其の隻影を留めなかつた。尤も汽車の出發することを知るとともに、念のため赤帽は勢よく駈け出して其の急行にあらざることを、確めた上引返して來たのである。

其の間に旅客の醉顏に映じて、待合に在りたる同勢は、最後に入つて來た、彼の名古屋美人

を眞先に、學生が續き、士官が續き、商人を前後に、少女を連れた老夫婦を眞中に、暖爐係が間に挾り、痩せた貴夫人と肥大紳士が其のあとへ、ぬりやすの晩引が殿して、別に二三の赤帽と荷物とが間を縫ひつゝ、朦朧として一方口から出て去つたが、恰も消え失せたやうな感があつた。

「しかし、不殘乘つた、」と改札口の方を伸上る風情で、旅客は迷へる面色である。

赤帽は根を生してヌックと立ち、

「お話のあとが承りたいで、お留め申すではないでございます。此の汽車は低うやつて平時一時間餘り前へ出るですがな、すぐ早や停車場五ッと行かない中に、急行が、がッと背後から出拔いて乘越すでございます。其の氣の利かん事ッたら、辛抱が出來るわけのものではないですよ。

折角お待ちなすつたものだ。如何に後れるッたつて、彼是二時半、追ッつけ關ケ原から乘りつけませう。」

未だ決せず、差俯向き、

「是は何時だ、若橋着は、」

「お極りは丁度十二時といふのでございますが、得て、後れ勝なのが、此の樣子ぢや、雜と四時頃にはなりませう。旦那惡い事は言はんで、ございます、思ひ切つてお待ちなさいまし、え、もう暫時。」と心から留めて云ふ。

旅客は默つて、やゝあつて、

「君も、寢轉んで、留める方だな。」

「はゝ、はゝゝゝゝ、」

「いや、引留められて良い事はないのだが、可からう――。」

「お待ちなさいますかな。」

「其のかはり、もしか、來なかつたら、夜の明けるまで附合ふんだぜ。」

「可うがすとも、」

「可いかね。」

「然う極つたら、」と手を伸して扉を引寄せて鎖さうとする。

と云ふ構内から、づッと入つたのは一名の驛夫で、此の待合の卓子の上へ、鈴をがちやんと置くと、此方をじろりと見て、身を開いた赤帽に擦れ違つて、ドンと自分で向うから閉めた、これは寢に行くのかも知れない。

汽車は汽笛も鳴さず、雪の上を幻のやうに、熱田をさして、横に長い、薄い茫乎した火の光が野中に埋れた時分と覺し。

「一言は未だある、眞個に賴んだぜ。やがて無くなるわ、火が消えるわ、汽車は來ないわ、君は行くわとなると、駕籠は遲し、腕車はなし、あつても行く處はなし、名古屋は雪だし、然うなりや自殺だ、」といつた。

赤帽は色を作して、屹と腕組。

「飛んだことをおつしやらあ!」

「何、其の千の字だとさ、私はどうして、いざ低うなつた日には、汽車が來たつて、饒舌つちまはなけりや乘りやしないが、可哀相に。

千之助は散々なぶられたあとで、別莊から追ひ出された。やがて、十時過よ、それも、雪が吹雪になつてからだ、何の、何の罪もないものを……」と少し途切れる。

赤帽は熟と見て、

「旦那、緩りうかゞひますで、それから何うしたでございますな。」

## 六

「いかに千之助を嘗めてかゝつた惡戲だつて、唯鼻緖を立てゝやるなんかで、呼び込んだばかりで、此方が名古屋へ來たわけを話すものでもなし、又先方だつて突然、泊れ、寢ろなんと云ふ數ぢやない、言つた處で誰も眞面目に挨拶をするんぢやないのだが。

其處が今のね、須磨明石の一件です。

はじめ、別嬪の云ふのにや、

「女中が然う申すんでございますよ、須磨や明石は本で讀んでこそおもしろうございますが、其のお身になつて御覽なさい、どんなに寂しいか心細いか情ないか知れません。別莊へは、お上方もおいでなさらず、寮番の爺一人、お疊もお廊下も石のやうに冷くなつて寂れ切つて居りませう、場末だし、人通りはなし、鼬の名所なんですもの。爺が又、談でもある人なら可うございますが、五十年前の事を、私が小兒の時分、といつて其の時に、其の祖父から聞いたこと、あれこれといふ他に、世間話は、因果經の引き事さへ存じません。そんなものを對手にして、貴女の御氣象、何うして御辛抱が出來ませう、狆が出ますとさ。なんのと申して、人を馬鹿にして留めますのが、貴客。

女中たちは私に御褒美を驕らして、歌留多や雙六といふ巧なんでございますわ。

まあお前たち、お湯へ入るばかりが身體を淸めるのぢやありません、たまには一日、浮世も離れて見なければ、と高慢なことをいつて、斷つてと申したものですから、そんならおいでなさいまし、其のかはりには誰もおつき申しません、晩のめし食りものも、お重詰で持つて參つて、直に御免を蒙つて了ひますが、貴女お一人、お別莊へ流しものになつて、尼寺でお籠なといまし、と口惜坊。

あゝ可いよ、可いとも。寒さに淸水が涸れないで居たら、それで道明寺で凌いで見せるよ、晩の支度にも及ばない、と爭つて參りました。

師走のはじめの煤掃の時に、一寸見まはりましたばかり、絨氈を敷いてあるべき處へ、筵を擴げて、爺が私得に搗かせました、缺餅を乾かして並べてございますやうな寂れ方なんですもの、何の床の間を見ましても、懸物一幅かゝつて居ず、花一輪咲いては居ません、赤いのは爺の鼻の尖ばかり。

濟ッと思ひ切つて出て來ました、行火の香をさして立働くぢやありませんか。

それでも來がけには、大層威勢よく、霜げて寒いのに、十疊の眞中へ、濕ッぽい炭をついだ、火鉢か何かで、緣側の障子を明けさして、淋しい冬木を視めながら、おや／＼何十里來たか不知・此のさきに名古屋といふ町があるのかと、望み通り、浮世を離れた心持になつて、ソレ見たか、內ぢや寂しがるだらう、可い氣味だと、風說して居ようが、然うは行かないとをかしくつて、氣違ひ染みた、一人で莞爾笑つたり何かして、澄まして居りましたが。

おつと鬱ぎ込んで來ましたのか、貴客、宅を出て參つてから二時とは經ちませんのでございますもの。まあ、こんな事では今夜どころか晩方までも覺束ない、何うしたら可からうと、大概苦に病みます內、ちら／＼白いものが降つて來て、枯樹に花も咲きかゝりますから、いくらか紛れて居ましたがね、寒いの何のぢやございません。

床の間に掛けた飾藁の大なのが、ざあ／＼鳴りまして、蠶が家の蓑かと思ふと、山奧の瀧にも見えます。

掃除は綺麗にすると見えて、其處等に塵一葉ございませんのが、水淸ければ、と申すやうで、人の住んで居るやうぢやないのですわ。神樣ぢやなし、佛樣ぢやなし、よく昔から申します、お城だの、大な邸には不開室といふのがあるんですッて、座敷の眞中に、お化粧をして、婦人が、客でもなし、人を待つでもなし、悄乎と坐つて居ます、私の身體が、其の不開室のお化のやうだと思ひますと、悚然として、貴客、堪らなくなつて、此の見晴しの二階へ驅け上つたんでございますよ。」と、滑らかにすら／＼やる。尤

も話は前後したが、こりや其の西洋室へ、千之助を入れてから直ぐの事なんだよ。」

と引かけたが。

七

杯を鞄の上、旅客は腰かけに胡坐になつて、

「（まあ、何より先へ、爺に暖爐を焚かせまして、肩からぞく／＼震へるのが留りました、御覧の通り、此の室は、こんなに陽氣なんですから、やう／＼、雪も視められるやうになりましたけれども、寂しいのは同一で、詰らないの何のぢやありません。

然うかといつて餘計な我慢のやうですけれども、今更阿容々々、歸るのは口惜しうございますし、泊るとなると、どうして貴客、思ひ出しても下座敷が悚然とする、おともだちを呼びませうにも、正月だと申すのに、誰が尼になるお交際をしてくれます。又、間違つて、望んで來る者はいくらもありました處で、氣に合はない人とお話をいたす位なら、はじめから今日此の[illegible]へは參りません。

何うぞ助けると思つて、おゆつくりなすつて下さいまし、よ、後生でございます。）ツちや、ソレ卓子の下で爪先を觸る一件だ。

暖爐の傍へ引寄せたり、椅子で背中を附着けたり、たうとう寢臺の上へだらしのない寢やうをした。」

「そんな處を畜生、奴の胸を突通して、彼の生つ白い皮の下にや、だく／＼どんな風に血が流れるか、一番。淫婦め、お極をやつて居ら。」

と横顔になつて頤を尖らした、薄い髯がすつくりと立つて見えると、肩を聳かして、赤帽はだぶ／＼とした衣兜の中へ、手を突込んで血相する。

爾時さした杯を、對手の胸のあたりへ出したまゝ、差控へて、旅客は屹と見たのであつた。

「君！」

「は。」

「無禮な奴だ、君なら殺すか。」

「殺、殺しませいでか。」

「むゝ、まあ、飲め、私なら私も殺す。」

「旦那も。」

「いや、其の場合に臨んで、然も其が我が色を誇つて、男を愚弄して、半日の無聊を慰めた上に、人の迷ふのを以て自分の容色の美いことを、自分に證據立てる道具にすると悟つたら、少くとも生かしちや置かれんと思つたに相違ない、たとひ手は下さんまでもだ。

千之助だつて、いかに内氣だといつて、男兒は男兒だ。然うと知つたら、何、あとの恥辱を受けるやうな間拔けなことをするものか。

けれどもです。」

けれどもですと弱くなり、

「毒とは知らず、香に迷ひ蜜に醉うて、既に其の婦人を以て、自分の戀人に肖て居ると思ふ心から、牡丹亭の雪といひ鼻緒の切れた小路といひ、不意に天降つた天女といひ、不思議の縁といひ、故鄕から遠く離れた旅といひ、唯酒が飲みたいくらゐに、わざ／＼名古屋まで來たのといひ、姉が留守といひ、前後はまるで夢のやう、今日ら不開室の化粧した幽靈といはれたので、其の下座敷が歴然と目に浮んで悚然とした氣といひ……、あゝ、それほど今も思ふのに、一言心も通じないで、幽冥處を隔つたのは、あまりに果敢ない。其のあまりに果然ないために、此處で夢を見るのであらうと、茫然として、思はず、寢ながら投げた手巾の胸にかゝつた片端を、じりゝと取つて引かれて寄つた。

（あれ、）と一聲。」

「え！」

「思ひ出したやうに起直つて、
（まあ、私やどうしたんでせうねえ。）」
「それ／＼。」
「嘸、君。」
「何うにも恁うにも、寂しくツて、氣が沈んで、消えても行くやうに思ひました處へ、貴客をお連れ申して參つて嬉しいまぎれに、お茶もまだ差上げません。
お泊り下されば お客様、お泊料を安うして、晩のお支度をいたしませう、それには女中が本宅から重詰を持つて參りませうが、爺に申しつけて、お湯もすぐに沸かさせます。御酒はいかがでござんすえ、ほゝゝほゝ。）
なんて佻氣なく、そは／＼して。」

八

「（まあ、お茶を上げませうにも、あの好な缺餅を、歯のないどてで含みながら、がぶ／＼飲みます、鼻の赤い爺の、行火へかけちや煮くたらしは、貴客お氣味が惡いでせう。其のかはり内職に草鞋を造る人ですから、お鼻緒は上手に出來ます。もう／＼泥になりまして行のつもりで來たんですから、お煮花の用意もございませんが、お待ちなさいまし、四疊半には、いつかいたしたまゝの棗がございませう、粗末ですが道具も揃つて居る筈ですから、一服たてゝ差上げませう、行らつしやいな！」

ずッと遠慮のない、十年の知己をあしらふやうに、ものは言はさないで、すッと扉を開けてさ、さつ／＼と廊下へ出ると、こゝに白く塗つた欄干がある、直ぐに螺旋形の壇階子。下りようとして一寸つかまつて、背を曲げると、むかうへすッきりと顔が映つた。色の白い眉の鮮かな。其の取着に姿見がかゝつて居る。

其處へ、上靴の音を輕く行くと、
（來て下さいな。）
（何です。）
（此處をね、少々開けたいんですが、しばらく見た事がありませんから、何があるか分りません、鼬でも飛び出すと、氣味が惡うございますから、傍に居て下さいな。）ツていふのだ。

姿見の下が、けんどんで、小さな謠の本に扇を打違へにつけた、色紙が張交ぜになつて居ようといふ大變な和洋折衷。

開けると、冷い、美しい、戸棚の中に、友染縮緬の肩當をした、藍、紫、黄など五色染の絹夜具、桃色の裏がすらりと見える。
（まあ、いゝこと。雨傘にも化けないで。）といつて、何だか開けるのが大事らしいから、氣にして覗き込んで居た千助の手を、屈んで見て居たのが立上りさまにむッと握つて、稲妻のやうに、片靨を深く、莞爾したのが、姿見に映ると思ふと、取つた手を引張るやうにして、ばらばらと駈け出して、其の螺旋形の梯子段を附着いたなりにトンとトントントン。

明るい西洋室から穴藏の中へ引摺り込まれるやうに、千はずる／＼と落ちて行くと、早や薄暗くなつた疊廊下へ落ち込んだ、直ぐ横手の襖を明けると、十疊室。

向うの縁の障子が一枚開いて、戸外は雪で、何こな／＼に烈しく巴十文字に動いて居るが、何にもない廣間は、眞中に小さく、桐火桶と淺黄縮緬の媚いた座蒲團があるばかり、寂として唯疊の青いのが陰に沈んで、帆の影一ツない大晦日の海見たやうな。

火桶の中に、濕つて佗しかつたと聞いた、其の炭も起り切つたあとゝ見えて、眞中に、閑になつて居る。

（しばらく此處で、まあ、お敷きなさいまし、蒲團を裏返しませうか。）と小首を傾けて、千に敷かせて、自分も一所。しばらく肩を合せて、凭れかゝる氣味合で、默つて居たが、其の内に

膝を浮して、輕く乘せるゝ、重いか、懐手で、うつとりして、

（待つて在らつしやいよ！　支度をしますから。）

（否、それには。）といふ内に、後姿の、裾捌き、雪の色ちら〳〵と、介入つて來た襖の外へ、くるりと振向いて、全身で大く振返つたが、すッとしめると、遠くまで跫音がして寂寞となつた。

あとで千之助は、膝を視めてキチンと坐つて、小な咳をしたが何ういふものか。

雪の降るのを背後にして、床の間を向いて、其座蒲團に乘つて居たが、なるほど瀧だ。恐らく大な簑蓑だといふぢやないか、當地では。彼するかね。」

「えゝ、よく寺方で行るでございます。門跡の書院なんか大いのをかけるですが、何か、立派だといふので逆つたでございませう。」

「其の樋、千家の流を汲んださうだ、何でも和洋古今に渡るんだな。

それやよしさ、さおて半時ばかり、つくねんと待つて居たが、其の時は然まで心細くもなく、不開室と云つた部屋とは知つたけれども、自ら男…お威と思ふほどにも無かつたさうだ。本人、人間あつかひは爲れないのに。

しばらくすると、内の、おもて玄關と思ふ處に、から〳〵と腕車の音さ。」

「其のまゝ出しぬいて本宅へ歸つたですかな。」

「否、曳込んだの。」

「はて。」

# 九

「一時、何となく陽氣が立つて聞えたが、頃刻すると、小刻な跫音がまじつて、廊下を二三人で此方へ近いて來る坊ちやん、お駈け遊ばしてはお危うございますよ、といふ女の聲がして、それから一圖になつたが、襖をあけると、二十二三の仲働と思はれる、唐縮緬の友染の帯をお定りのお太鼓で、厚化粧、切立の絲織の前垂したのが、薄暗い臺洋燈を持つて來ると、其に續いて、五歳ぐらゐ、洋服の男の兒と、八歳ばかりの被布を着た女の兒が、ちよこちよこと躍るやうな身振で駈け込んで來た。女中はね、あかりを置いて、一寸會釋して、おいたをなすつては、不可ませんよ、と捨臺辭で出て行く。

小兒たちは、もの珍しさうに、叔父さんの左右へ寄つて、男の兒が、突然火鉢の上へ、肥つた赤い手をかざしたがね、片手に剝きかけの蜜柑を一個。

こりや敵の首を分捕つたやうに、座敷の中を差上げて來たものだ。

女の兒も傍へ坐ると、此の方は持つて來た護謨毬を、かさねた袂へ入れて、火鉢へ手を出して一所に左右から顏を見た。

あゝ、よく肖た女の兒だと思ひながら、千馬鹿め、まだ別嬪が此の小兒たちの母親だとは氣がつかず、自分の戀人も姉弟は多かつたなんのと、お話にもなるんぢやない。

それに出入の多い邸と見えて、人見知もしない處が、最初は憎々もなかつたさうだが、男の兒が口を利くとぎよつとした。

（おい、剝いておくれ。さ。）

（是をですか。）ツて、火鉢の上で、皮を剝いて渡さうとすると、

（厭だい、お獅子にするんだい、お獅子だい。）

分るまい、

（あのね、恁うやつてね、くるとやるのよ、と女の兒が高慢に指揮をしたが、薄皮を剝いて引くりかへすと云ふこツた。

色男畏つてね、指を汁だらけにして、旨く

行かない、一片、分片ちぎれたのを拵へると、
じろ〳〵見て居たつけ、
（爺、上手だ、不器用だなあ、）と傚うだよ。
癪に障つたが對手は小兒だ。
（どうも旨く行きません。）と出して遣ると、
ぺろりと吸つて、殘つた薄皮を火桶へぴよい、ヂュウ、殘り少なの火が又一倍消えて、烟が立つ、眉を顰めて手で拂つて居ると、
（さあ。）と又出した。
片一方で女の兒が、卷煙草を見つけたらう。女だけに、お世辭のつもりか知らんが迷惑だ。
一本吸ひつけて渡します。
（難有うよ。）と半分ばかり飲んで置くと、あとから直ぐつけて、
（あい。）と出す。
（さあ。）
蜜柑を剝けだ。
（あい。）
煙草を飲めさ。
のべつ幕なし、汁がしみて指がべた〳〵する處へ、煙草の脂が染まるだらう、氣味の惡い事、手巾は下駄を結へようとして泥だらけになつたのを打棄つたし、一々半紙を引張り出すも、お細工ものをするやうだから、汚れた手を袂へ突込んぢや、襦袢で拭く始末。
（さあ。）
それ蜜柑。
（あい。）
煙草。
むら〳〵として、えゝ、一合ぐッと呷つたらな、此奴等蹴殺してくれようと思つた。
しつきりなしに（さあ。）と（あい。）
其の中に煙が出るのがおもしろくなつたか、男の兒まで眞似をして煙草の方へ手を出した、飲まねば強ひる、傍を向けばせがむ、屹と見りや泣きさうになる、立續けだから堪らない。舌は澁くなる、咽喉はつまる、頭痛はする、ごほんごほんと咳入つて、胸をおさへて、もう〳〵煙草と蜜柑は一生たち物だと思つて、眞個だよ、心の内で泣いたさうだ。」
と旅客は呵々と高く笑つた。

十

「可笑しからう、君も笑へ、大に笑へ、私も笑ふ、笑つて遣る、壯に其の屈辱の醜體を笑ふんだ。又緣側から覗いて笑つて居たものがあつた。
婦人が何時の間にか向うへ廻つて、其の開けてある障子の外へ、すつくりと立つて居たのだ。
千之助が煙に咽せ入りながら、胸を壓へて、はア〳〵いつて、吹通しの方に顏を向けると、其處には、帶は解き捨てゝ、水淺黄の扱帶を寛く、胸なりに裾を引いて、脊は一層高いが、先刻よりはすらりとして、其房々とした黑髮が、少しほつれて、頰にかゝつた、小耳の處へ、濡手拭をあてゝ居たが、湯上りと見えて、しつとりと雨を含んだ、花も枝も雫が垂りさう、色はいよ〳〵白く、ほんのり薄紅さへさしたのが、洋燈に映つて、あからさまになつたが、ちらりと、姿を殘しただけ。
（お寒いでせう。）とばかりで障子を引く。女の兒が、
（母さま！）といふ中に、はたり、はたりと緣を行く重たい跫音。
千之助は吃驚した、呀、此の兒の親か、上向きの用をかねて東京へ行つて居る、内の主な人といつたのは亭主。
と八分は醉のさめた處へ、先刻の女中が、今度は臺所を働いて居たか、それともお背を流した事か、緋の下じめを急拵への、襷がけで入つて來て、

(さあ、坊ちやま、母樣がおいでなさいッて、孃樣も在らつしやい。)

といふと、女の兒は遁げるやうに、兩手を袖につッこんで直に立つたが、男の方は、

(うむ。)といふと、喰ひ殘した蜜柑の皮を、ぐしやりと千之助の膝の上。憎體に、

(馬鹿、)

(あれ、何ですね。)といつた切、別に取りなさうともしないで、女中は其のまゝ、二人の小兒は廣い座敷を縫に泳ぐやうにして、一所に惡い潮が退いたわ。其ッ切、何時まで經つても誰も出て來ない、又來さうにもしないで、火は消える、寒さは寒し、ね、火桶に噛りつくと、卷莨の吸さしが冷くなつて白骨のやうだ。

手をたゝく分ぢやなし、

(あの、あの。)と口まで出る、人を呼ぶにも遠さうだから、大聲を出すも異なものなりで、其なりに引込んで了ふ。第一、口も利けないほどに腹が空いて了つたさうだ、然うだらう、碌に晝ッから食はないんだもの。

背中へ附着きさうに空虛な處へ、立續けの煙草にあたつて、惡寒いから頭痛はする、咳嗽は起る、千之助は九死一生。

八時半頃になると、戸外へ腕車が出たやうすだ、大方小兒どもが歸つたんだらう。あゝ、然うすると、何か、手足まとひを拂つて置いて、それから世話をして異れる氣か、然う思へば遠くの方で、時々派手な笑ひ聲、それにや小兒の泣くのも聞えた、なんのと、それまでは、いくらか心を置いた千之助も、一心に最う、其の婦人が便になつて、あはれぢやないか、他人の女房と知りつゝも戀しくなつて、顏を見るのを待兼ねた。

寂しさは、前にも增して、鼠の走る音もしない、時々、あッといふ戸外の音は、積つた上へ眞白な布、くる〳〵卷きながら降るのであらう。

何といふ身の上です。

其處等を歩行くのも廊下鳶とかいふものらしい。女中は大方、先刻の話の張合で、臺重詰ものでも屆けに來たのを、いくらか手傳はさしたらうが、泣く兒に附けて歸したあとは、煮るにも炊くにも主婦の手一つ。

馴れない事を恐れ入る、まさか、汐干の屋形ぢやなし、此處で重詰ものを開くでもないと、氣扱ひをするのであらう。酒の燗でもして居るか、いや、然しそれは折角だが飮めません、と生欠伸をしたのなんざ、大藏流、鷺流にありさうな、此の男の腹は後學のために、土用干をしたいくらゐだ、尤もから乾に干せちや居たが、」

「まあ、何たることでございますなあ。」

## 十一

「やがて又小一時間も經つたと思ふと、やうやう跫音が聞えて來たから、膳か、椀か、あの裾を曳いて嫋しいのがと、うつむいで居た顏を上げると、大違ひ。

めりやすの膝小僧を出して、鼻の赤いの。ねえ君。

「それ〳〵。」

「吝な大屋が、夜中に路地を開けるやうな、身構へで、

(遲くなりましねえか、お前樣、何時の汽車だ、間に合ふかね。)といつた。」

「其だ、旦那。」

一千之助は啞赫としたが、問答に及ばずよ。

(あゝ、時間だ、失敬、)と一直線に突立つたさうだが、ふら〳〵して疊に躓いて、うろ〳〵廻る。爺が落着いて、

(矢張、はあ、入つた處から出さつせえ、此處だよ、)と先へ立つ。

最う憤る元氣もない、唯恐しくなつて、疊が一町、とあとについて、座敷を出ると、梯子段。

井戸から覗くやうに上へ折曲つて灯影が射す、夢中で上り切ると、消えてもなくなつたかと思つた自分の姿は、姿見に映つた。顔が蒼い。

扉は開けてあつた西洋室、ぼッと燃えるやうな暖さ。

卓子の上に、金光燦爛として、解放した緋珍の丸帶、一所に紐やら、帶留やら、裾やら、振やら八口やら、なえしをれた花束のやうに衣類を丸けて脱ぎ棄てた、寢臺に、其の五色染の搔卷をかけて、ぶつくり沈んで、長襦袢の肩微に圓く、もつれ毛の濃い、雪のやうな頸脚を見せて、然もぬつくりとしたやうに裾を長く伸々と寢ながら、うしろから洋燈を受けて、寶玉入の指環の手に、一寸押へ、輕く斜にかざして、横文字の書を見て居た、枕頭の黑檀の置棚に、高脚の洋杯が一個、ベルモットの瓶が並べてある。

言語道斷、ものもいはず、又いはせさうにもない風だつた。

千之助は此の狀に又柿と込上げた、ニコチンの毒を吐きさうになつた胸を擦へて、通り拔けると、入口の戸の處、

すぐに庭だから、開けるトタンに閉めようとする構で、爺が引手に手をかけて待つて居た。

(寒い半ぢや、)

といふ、芝生を見ると、眞白な中に下駄がれ、鼻緒の切れたなりで揃へてある。

飛び下りて引摑むと、パッと一時に吹きつける、部屋へもばらりと散り込んだわ。

(ほい、)と閉める。

窓あかりに、ロハ臺に置いて入つた、鞄が舊の通りあるのを見て、

(あゝ、姉が名古屋に居たらば、)とはら／＼と熱い涙。まともに面も向けられない、雪だらけの鞄を取るや否や、跣足でころげ落ちるやうに、微塵になれ、と身體を枝折戸の外へ投げ出した。

南も北も雪の横町、上も下も眞白な中に、一足蹈み留まると一所に、恥をさらへて來た、下駄を、一ッは前津の田圃の方へ、一ッは記念碑の大通の空へ、叩きつけ、投げ飛ばした、此の梟鳥は、吹雪の中を、何里さきへ翅けたらう。赤帽君。」

と呼吸をつき、

「で、私は思ふんだ、よくまあ、無事で千之助が、私の居た旅籠まで駈けつけて、無事に生命があつたらうと。

何事も思はない、唯何爲恁うといふ時、風に乘つて、姉が奈良から歸つて來てくれないのだらう、と其ばッかり思つたッてな、可哀さうぢやないか。

迚も、此のまゝでは歸られないと云つて、人心地がついてから、紫川へ行つたつけ。私も強ひて留めなかつた。唯聞いただけでさへ、少時も早く、名古屋の土地をはなれようと、私は自分で思つたがな。汽車のおくれたのは幸だ、迚も此の話を、默つて胸に持つて、東京へは歸られない。」

旅客は頭をふら／＼と、鳩尾を撫で／＼

「あゝ、是で少し胸が空いた、よく聞いてくれた、赤帽君、謝す、大に謝す、しかし君にや氣の毒だつた。」と眞面目に云ふのも酒なのである。

## 十二

赤帽は聞く中にも、醉つたか、何となくそはそはして、立ちながら足許も定まらぬやうだつ

たが、彼の黄なる目をぎよろつかせて、頻に四邊を見廻したと思ふと、

「旦那……」

旅客は語り果てゝ恍惚としたのであつた。

膝を屈めて、

「旦那、旦那。」

「あゝ？」

「ぢや、何でございますかな、お綾の阿魔は、」

「おあや、」

「えゝ、綾てえ女つちよ、綾子とけちがる。獣でえ、畜生。ぢや、其の今夜は、廣見の別莊に寐ましたかな。」

「寐た……さうだ。何、寂しいの心細いのつて、千之助にいつたのは皆術さ。何しろ、長襦袢一ツで西洋酒を枕頭だから、雪の降るのも花盛り、一夜雲に寐るつもりだらう。」

「で、一人で。」

「然うだ、爺と二人だ……」

「むゝ。……」

と下腹に響いた、呻くやうな獨言。

「此の寒だしよ……旦那、そんな奴は何うすりや可いんでございませう。」

「此方が間抜さ。」

「いんえ、其、其の千之助樣に限らずだれ、豪い人でも、學者でも、先生でも、色じかけでたらし込みやがつて、世の中に佳い婦人ほど立派なものはない、我を見ろ、とのべつに來やがつたら、唯は置けますまい。」

「……」

「何うすりや、可いんだね。」

「まづ殺すんだ。」

「可うございますかな、殺しても。」と膝を振つて、地蹈鞴を蹈んで、赤帽は握拳を上げたり下げたり。これは醉つた目に見えなかつた。

「可いとも。」

「はあ。」

と氣を詰めた、呼吸を引いて仰むけざまに又壁へ凭れたが、腕を拱き、目を瞑つて、熱い息をふッと吹いた。

天窓にくら〳〵と響いて、重い、沈んだ、小な地震のやうな深夜の物音。

赤帽は濶と目を開け、片手を、衣兜の廣い、上衣の下へ、肱を曲げて突込んだが、つか〳〵と出て、扉を押した。

「汽車が來ました、旦那。」と聲をかけ、然も勞れた體で、椅子の手について肱の上へ、横顔をつけた旅客の姿を、ぢつと見て、狼のやうな腰つき、前屈みになつてヅッと出た。

「おゝ、着いたか。」

仰いで時計を見れば、三時四十分。しばらくそれを視めたなりに、旅客は外套の袖を合せたばかり、動かないで居た。

赤帽が來るのを待つたのである。荷物は輕い、乘込の世話を賴んだのであるから。一分二分、瞬く間に早や三分、やがて、五分にならうとして沙汰がない。

心許なく、衝と立つたが、鞄を提げ、帑も、鬢も、其のまゝ、急に待合を出たけれども、何となく物足らず、四邊を眴すと天井高く、壁白く、プラットフォームのきらびやかな、しかし寂しい、電燈の影に、關ケ原の雪に埋れしとなむ、偉大なる鐵の蒸氣機關の、たらたらと汗を帶びて、黑く艶かに堆く突立つあるのみ。

夜目には其の邊の人の影も閃かず、況して構内には、蕭然として高く、纔に跫音の響くばかり、立停まれば其も留んで、赤帽の赤い氣勢もなかつた。

「はてな。」

物打案ずる場合にあらず、輕いが提げた、手荷物を、引立てるやうにして、思ひ切つて、五六歩進む改札口。

「おゝ、酷い。」
といふ婀娜な聲して、構外の吹雪の中へ、一旦停車場前の廣場に出たのが、吹き戻されて飛び返つた、カラ／＼／＼と駒下駄の音高く、たゝきを辷るやうに後じさり、少い旅客と背中合

## 十三

　瞥見ると古代紫の頭巾を深く、紫紺縮緬の肩掛を無造作に引かけて、鐵御納戸無地のお召縮緬の薄手なコオト、絹手袋の紺淡く、細りと指の長いのが、手提の旅行鞄に、縞珍の信玄袋を持添へた、丈だちすらりと、然ればこそ風には堪へじ柳腰、梅の薫を膚に籠めて、艶に品好き婦人である。
　見返ると、振向いて、
「あれ！」
「呀！」
「千之助さん。」
「姉さん。」
「千之助さん。」
「姉さんか。」
と思はずたじ／＼と後に退つた。
　夫人はぢつと立つて瞻りたるのみ。
「まあ、よく來てねえ。」といつた聲、面をかくして畳つたが、忙しげに、結び目を解く肱寒く、かつ散る袖の寒紅梅もどかしさうにかなぐつて頭巾を取つた顔は、星の目、眉の月の影、綠の黒髪はら／＼と、亂れ銀杏のおくれ毛にも、一筋の曇を帯びず。極めて晴やかなものであつた。
　旅客の傍へずツと寄つて、
「御無事？」
と頷くやうにして聞いて、然も嬉しさうに莞爾する。
　此方は醉ひたる顔を背けて――、
　言出でず。
　夫人は早く心を汲んだ、廣く且つ遠く離れて居ても、深き思はしつくりと、互に心に相合して、此の構内にしじまりつゝ、
「お絹さんも亡くなつて……。」
とばかり涙ぐんでいつたのである。
「姉さん。」
「さあ、行きませう。」
「否、私は此の汽車で歸るんです。」
「歸るんです。
「昨日お宅へ參つたんですが、折惡く、お留守だつた。姉さん、手紙で悉しく、失禮、汽車が出ますから。唯ね、酒を、酒を飲まして下さいよ。」
と名残惜しさうに、懐しさうに、うら悲しげな顔をして、早や立別るゝ二足三足、追ひ縋つたと見るといきなり、千之助の肩に手をかけた、思が籠つて、手が發奮んで、緊乎項を掻抱き、
「歸さない、歸さない、歸さない、歸さない。」
「ですが。」
「否、歸しません！　さあ、早く行つてお酒を飲みませう、私も飲んでよ。」
　行かうとする、留めるので、二ツ三ツ、改札口に近く、跫音を交へた。途端に、颯と鳴つて、咫尺を辨ぜざる雪の中を、偉人の發程、早く既に遠參尾の山野を飆して、行方遙に、汽車はずるずると出たのである。
「大變な雪ね。」
「おや、何ですか、關ケ原で。」
「はあ、埋つたの。生れてからはじめてだわ。ですからさ、九時に着くのに乗後れて、明日の一番と思つたんだけれど、何だか歸りたくなつたのよ、蟲が知らせたのね、行きませう。愚圖愚圖して居ると凍死んぢまふの。」
　とつか／＼と蓮歩を運び、威勢よく微笑みながら、
「雪に埋つたり何かして、氣の利かない汽車つ

たらありやしない、漸々、出られたつも、私の思だわ、眞個よ。」

「大分、惡くおつしやいますな。夫人。」

「おや。」

「唯今お歸りですか。」

と横合から出て、構の眞中に來て立停まつたのは、當驛長の何某氏、頰の豐な、眉の凜々しい、鼻の高い、口髭の美しい年配四十五六の紳士である。

續いて、どか〳〵と其の左右に八九名、皆一樣の扮裝して、肅然として立並んだ、いづれも局内の係員、最終の列車を送り果てゝ、各がじゝ、急くて家路に就かうとするので。

瓦斯を三ツ四ツ提げのが立交つて、灯はどれともなく、五ツ六ツ消えて暗くなつた。

## 十四

「ほゝゝ、立聽をなすつたのね。」

「はゝは、いや、串戯は止して、これからお歸宅にならうといふのですか、志那忠でもお起しなさい、酷い雪です。腕車なんざ思ひも寄らずですよ、迚も御婦人に、歩行かれるもんぢやない。」

「だつて、自分の内を見て、旅籠屋は厭ですもの、何ともありはしませんよ。」

「勿論。お連がある。」

「失禮、あの、赤帽は居ないんですか。」と目を留められたのを機に、千之助は尋ねて見た、少なからず心に懸るのである。

ト、驛夫の中の一人が、

「貴客、赤帽は最う疾うに居りません。唯今此の汽車で、此處へお下りなすつたのは、夫人、貴女お一人でした。」

「はあ、唯一人、出口から構はず吹雪の中へ飛込みますとね、渦になつて捲くんですもの、くるくるまはりながらあとじさりに驅け込んだ時は、呼吸が塞がつて、死にさうよ、今度は大丈夫。」

といつたが、千之助のと自分の荷物。

「驛長さん、預けて行きますよ、千之助さんも然うなさい。そんなものを持つちや歩行けやしないから、何うぞね。」

驛長は快諾して、

「宜しい。おい、宿直の處へ持つて行つて預かつてお上げ。」

「憚樣、恐入りますね。」

「大層お身輕になりましたな。」

「御免なさいよ。」

とて褄引上げ、頭巾をかぶると、駒下駄を脱いで、襦袢の裾、紅深く、身輕う、たゝきへ足袋跣足。

「否、私が。」と自分で、腰かけの下へ突込んで、

「それでは、誰方も。」

「氣をつけていらつしやい。」

「千之助さん、參りませう。」

並んで立向ふ名古屋の市は、打見にも、厚くも狹くもなつて居た、あまりの雪に、灯の影も見えず、二人の肩は最う霏々。

「大丈夫ですか、夫人。」驛長が聲をかける。

「否、雪さへ降れば、寄宿舍の庭でよくやつたの。」

「然し唯今のは、道行のやうですな。」

「油繪の書割ねえ。」

嫣然、千之助の手を取つて、衝と躍り込むと、浴びせたやうに、一刷颯と吹いて、二人の姿は、眞白になつて隱れたのである。

「確りなさい、確りして下さい、姉さん。」

「あ…あい。」

「痛むんですか、酷く痛むんですか。」

「そんなぢやありません。」

といふ聲も息の下、夫人は千之助の外套の袖

の下に、小やかに雪に埋れて居る。
「困りましたな、困つたな、蹲込むんですか、苦しいんですか。」と一心に背中をさすつて、勞る中も、吹雪に面を向くべからず、折から頼む樹蔭もなく、身を閉ふべき廂もない、一人はトある停車場の生垣の根を使つたが、それさへ冷い眞暗の闇、袖が觸れても氷が崩れる。
「冷えたんだ、恐しく寒いもの。私は是でも、酒があるから未だ凌げる、汽車の中で冷くなつた處へ、雪路を跣足は無謀だつた、遣りなさいよ、確ツたな、姉さん、姉さん。」
男の衣服の裾に縋つて、しばらく口も利かなかつたが。
「千之助さん、打棄つて置いて行らつしやい、貴下だつて煩ふもの。」
「串戲ぢやありません、是からお宅へ行つて、人を呼んで來るまでにや、貴女の身體は凍つて了ふ、おんぶをすりや反るんだもの。驚いた、えゝ、酷い、亂暴な降だ。」
「私や、私や、あんまりだから、千之助さん。」
「えゝ。」
「笑はうと思ふけれど、苦しくつて笑へないの。」
「眞個に泣くより笑ですね。」
強ひて慰めるやうに情ない調子で言つたが、吃驚して留めた、慌しさ。

# 十五

「あゝ、そんなものを喰べちや不可い。」
夫人は苦痛に堪へやらず、左手を男に縋りながら、雪を片手に掴んで震へる。
「水一口ないのかな！」
と殆ど絶望の聲を上げた時、風がなぐれて吹きはした、粉雪の底に、唯見ると高い窓灯、庭も屋根も、心覺えの、是ぞ恰も鼻緒を切つた折戸なのである。
膽を貫かれた心地して、胸を衝く千萬無量、思を繞らすに遑あらず。
「姉さん、別莊に灯が見えます、必死の勇でお起ちなさい。」
と兩手を取つて引起すと、灯の力と、男の腕、腕を小脇に掻込んで、引抱へるやうにして、飛びつくと、寒がつたのは積つた所爲で、枝折戸は開いて居た。
千之助も、もう跣足。
一人か、二人か我さら知らず、夢中で重い體を築山の上へ上げて、硝子扉に打附かり、聲もかけず、突然引手を捻るとハタと開く、救の鍵は手にあつた。
袖を拂ふ隙も惜しや、其のまゝ絨氈の上へよろけ込むと、袵、袂を、ばら／＼と落つる雪の、亂るゝや、散るや否や、颯と紅に染まつたのは、敷物の色の映るのではない、床に流れた血汐である。
夫人はやう／＼、閉ぢられたやうな目を開けたが、頭巾をもれてはらりと溢るゝ、もつれ毛の露の隙から、室内を一目見て、
「おゝ、綾子さん。」といつた。
寢臺の上。
今は面のほてるばかり、暖き暖爐に、ふくらかな乳房仄に、引結へる水淺黄、搔卷の襟を濡れて、いぎたなき長襦袢の胸、柔かに白く仰向いて、裾に片膝を立てたる寢姿、枕に鬢の亂れをかけて、がつくりと横に垂れた、湯上りの寢白粉、まだ其の色も褪めやらぬに、雪の顏蒼然として、咽喉にがばと鮮紅、血は長く其處から垂れて、床に花片を重ねたのであつた。
夫人は健康を復したが。
「苦」といふと椅子に僵れた。
千之助も飛退つて、扉をドンと背につける。
搖ぐわ、搖ぐわ、傍の窓掛、凹に片目を出して、ぎろりと樣子を伺ふ者あり。

赤帽がぬッと出た。

渠は醉へる時よりは、なほ面赤く、茶褐色の薄髯の中に微笑を浮べて、

「旦那、殺りましたぜ、旦那。はゝはゝ、此の通りだ。」

といつて、綾子が玉を伸べた項の中央、疵口を、赤帽は手に取つて、明晃々たる鋭き小刀の背で叩いた。

夫人はハッと面を蔽うた、袂も振も戦いだのである。

「一突にやつたでがすがな、未だなか／＼汽車は出まい、首を持つて行つて、一番お目にかけようと思つて。」

と血みどれの手を、ずばと、冷艶比類なき犠牲の、心ばかり痩せた頸にかけると、髪がゆらぎ、飾櫛がカチリと落ちる。

千之助は足が浮いた。

「一ト當にがつて置いて、ちよき／＼やりはじめた處へ、不意に飛込んでおいでなすつたで、かくれたでがすがな、能く来て下さつたい、私はね、紫川なんてとおつしやつたけれど、旦那が千之助様だことは知つてたですよ。可い心持でせうね、私もせい／＼した、はゝゝゝはゝ。」

と哄然として又一笑した、此の時の渠の風采は、緋なる其の帽、雪夜の天を蔽ひ、兩眼に凶星あり、足に氷海を踏み、手に尖刀を提げた、一個巨なる悪魔の如き堂々たるものであつた。

是には唯目禮して、千之助は夫人の前。

「姉さん、どうしませう。仔、仔細あつて、私が殺したも同然なんです。」

「えゝ。」と驚いて顔を上げた。夫人の瞼は、死骸よりも一層蒼白なものであつた。

「あの、私が死にませうか。」と千之助は屹といふ。

赤帽は小刀を植ゑたやうに、寝臺に兩手をかけて、大く乘出し、平然として、

「貴郎方、心配はありませんで、何ね、旦那を喜ばせようと思つたのは、ハケ次手だ。

此の婦人は、私が兄貴の敵ですよ。

こりやね、前に兄貴の媽々だつたでさ。兄貴は、商人の癖に、本人望といふで、此の阿魔久しい間、東京へやつて、豪い學者に仕立てたですよ、馬鹿野郎、蝦茶を緋の袴ほどに難有がつたで、自分で一つ學校を立てるなんのといふ口に乘つて恐しく金子を注ぎ込んだもんでがす。何、皆浮氣に使つたのは私が知つてまさ、其のね、私さへ、一寸口說いたくらゐな奴だ。

現在弟に不義をしかける、そんなものに、何の未練を、私が證據だ、打棄れ、と言つたけれど、へなちよこめ、其綺紫川や長者町には、向うから落ッこちる奴もあつたですが、因果だね。

たうとう何です、今の亭主におもて向き寝返りを打たれると、其の時分貸して置いた、此の別莊まで公事沙汰に負けて取られてでさ、何しろ、りうとしたお役人だ。家も落目になつたんで。

地體此の西洋室なんぞも、ハイカラ阿魔の御機嫌とりに、兄貴が拵へたもんだからね、海も山もくれてやれと、さつぱりすりや可しだけれど、意氣地なしだからね、そんな、こんなで、氣が違つて、お去らばだ。

兩親も達者だつたが、其を苦にして死にました。

私ア自分が嫁はれたつて、密通をされたつて、婦人出刃を揮るやうな吝なんぢやありません。婦人は口說くもの、金は湧くものと思つてるんだけれど、兄貴の敵だ。畜生、あのエービーシーと居を反らす頤、骨を引ッこ抜いて、妻楊枝にしてくれようと、いつも心がけて居たですがな。

不可ません。餘りだらしがないから私ア癪に障つて、一番兄貴のとこッ腹を抉つて、血を入れてくれようと、無暗に有金をつかみ出して、勘當をされると強請に行つた。
はゝはゝ、おふくろにや出刃を向ける、おやぢにや短銃をさしつける、兄貴にやナイフをひらめかす、土藏の下へ地雷火をしかけて、線香花火に火をつけたのを持つて、十間間口、一杯に立はだかつてゝ、ゆすつたですね。
噂屋の二番は氣が違つた、皆風說をしたでせう。
兄貴も氣が違つて死んだんだ、系統を引くと謂ひますから、私が今女を殺すと、誰も本氣の沙汰にやしません。
氣違ひ色情狂だ、下さりませんや。
折があつたらと、心がけてね、衣兜にや平時ナイフは吞んでゐましたけれども、手は出さないで居たですか、旦那でさへ、殺したいとおつしやつたわ。堪忍は身分のある人がすることッた。
私はね、旦那を學者だと見たですよ、先生だと睨んだね、學者の先生でさへ殺したい、殺したいが殺さないのは、身分を思ふからだとなつた日にや、してこいなだ。氣違ぢやありませんや、おまけに、別莊へ寢やがつて、この雪は、開いた口へ、眞白な牡丹餠です。
はゝはゝ、一口にやつつけました、はゝはゝ。」
と大口を開いて笑ふ。
「姉さん、此の人が氣が違つたんぢやない、私が氣が違つたんです、飛んだことを云つたんです。
「旦那、御心配をなさいますな、私はね、こればかりも。」
と爪尖を出して見せた、一時間の前に蒲鉾をつまんで、舌鼓をして嘗めた手の。
、其の、命が惜くにした仕事ぢやありません、立派に願つて出てお處刑を受けるですよ、これで先づ、久しく不孝をした、兄貴や兩親に逢つてあやまります、死んだら眞人間になりませう。
絲瓜でもないがね、すぢを引いた氣違だと謂はれるのは業肚だて、それだけは吞んで下さい、それも、何、おもて向きに云つて下さるとお名前が出る、世の中は百千人、學者の旦那が、蔭で承知をしておくんなさりや萬人力だ、心がかりはありません。
夫人！」
「は……い。」
「お見受け申した處が、千之助樣のおつしやつた、お姉樣のやうでございますな。御兩親はなし、思つた方はお亡なンなさる、千之助樣は最惜い方だ。優しい旦那だ、貴下、可愛がつて世話をしてお上げなさい、然うなつちや失禮だが、はじめてお見上げ申してから、何だかなくなつた兄貴のやうでなりません、噂兄貴は商人の世間見ずの坊ち野郎だ。旦那は學者の先生だが、人情は一ッでさ、私は亂暴をしましたがね、これでなか／＼兄思ひなんですよ、夫人、よく見てお上げなさいまし。」
「はい……はい。」といつたがあどけない娘のやうに頷いた。
「酒も澤山は毒ですぜ。」といひ添つて、赤幅は乾然と立つて目をしばたゝいた。
夫人は聲を忍んで泣いた、千之助も落淚した。
更めて、
「姉さん。」
「あゝ。」とやう／＼涙の顏。
「どうも此の人は殺されません、私が、代りに死ぬと云つても、姉さんも殺すまい。君も肯くまい。其處でだね、姉さん、凡そ貴女の名望と、憚りだけれど、其の御容色で、非常の場合です、

此の名古屋で、凡そ、此の土地に於て、樞要の地位にある人の幾人が欺けます、否、欺くんぢやない、歎願する、歎願して、言に從はされるでせう。」

「命乞ひ？」

「然うです、旅行券をごまかして外國へ遁がすんです。」

「然うね。」

とぱッちり清い目ざし、早や映る、綾子の死繪に悄然としながら、

「千之助さん。」

「えゝ。」

「手を。」

指をおさへて、一人……二人……三人……四人……五人と算ふると互に頷き、目を見合せて、吻と息。此の物語に祕すべきは、夫人が實の姉ではない、姉妹のやうだつた、千之助の戀人網子が信女であることではない、夫人二人の良人の名と、及び其の地位とである。

# 汽車

明治三十二年七月

雲烟過眼、箱根も桶狹間も關ケ原も、硝子窓から駈拔けるやうながら、分秒にして長距離を行くこととなれば須臾の間に趣變る、汽車の旅亦をかし。

嘗て上京の途なりき。家を出づる時は南雲の氣勢もなかりしに、一夜底の口といふ温泉ある山間の村に宿りしが、其夜中頃よりちらちらと降出したり。朝は風さへ加はりぬ。名にし負ふ雪國のことなれば、一日に五尺三尺と積らむも計り難しと、白山颪におもてを向けて、勇を皷して出發せしが、ハヤ行く〳〵堆うなりて、腕車進まず、路わづかに七里にして大聖寺に泊る。あくる日は既に腕車通ぜず、徒歩して福井にいたり、こゝにて聞けば敦賀に達する山越の路鎖されたり。春日野の隧道損所あり、大良のがけ崩れたりなどいひのゝしる。市中にても湯に行くさへまゝならずなりぬ。

籠ること三日半日、やうやく二日前の大阪の新聞此地に來るにあなて、覺束なくも路一筋敦賀に通ひたるをうらなひて立出でぬ。幸に別條なく、金ケ崎に達すれば案外なり。恰も雪を排し得て、一番汽車發すといふ。あくる朝彼處を發すれば滿目皚々たり、柳ケ瀨、關ケ原あたりにては、雪、茅屋の小家を埋む。雪搔や蓑笠着たる大人數いひつゝすべくもあらず。實際は混雜修羅場の如くなりけり。賤ケ嶽のあたり見る目も凄まじかりしに、其日午に至らず、長濱附近に來れば、白きものわづかに藪垣の間にかかりて、柔も畑も皆黑し。これはといふ間に停車場に入る、長濱は霙降れり。米原は寒烈しくして、たゞ天の曇れるのみ。いともをかしきは、岐阜、大垣に着けば、比較的天日赫々とやいはむ、一點の雲もなかりしならずや。而して列車の屋根よりは雪のとけて落つる雫雨の如くなり。行逢ふ汽車の旅客皆奇異の思をしつべし。小春日の野の一方に三十里遠き國のツイ今しがた降れる雪を汽車其處に被ぎてあるなり。師走十六日。

深々と雪を被げり終列車

汽車行くこと十里にして春の雪まばら

——鏡花全集卷十五「丸雪小雪」より

# 春昼

## 一

「お爺さん、お爺さん。」
「はあ、私けえ。」
と、一言で直ぐ應じたのも、四邊が靜かで他には誰も居なかつた所爲であらう。然うでないと、其の皺だらけな額に、顱卷を緩くしたのに、ほか〳〵と春の日がさして、とろりと醉つたやうな顏色で、長閑に鍬を使ふ樣子が――あの又其の下の柔な土に、しつとりと汗ばみさうな、散りこぼれたら紅の夕陽の中に、ひらひらと入つて行きさうな――暖い桃の花を、燃え立つばかり搖ぶつて頻に囀つて居る鳥の音こそ、何か話をするやうに聞かうけれども、人の聲を耳にして、それが自分を呼ぶのだとは、急に心付きさうもない、恍惚とした形であつた。

此方も此方で、恁く立處に返答されると思つたら、聲を懸けるのぢやなかつたかも知れぬ。何爲なら、扨て更めて言ふことが些と取り留めのない次第なので。本來なら此の散策子が、其のぶら〳〵歩行の手すさびに、近頃買求めた安直な杖を、眞直に路に立てゝ、鎌倉の方へ倒れたら爺を呼ばう、逗子の方へ寢たら默つて置かう、とそれでも事は濟んだのである。

多分は聞えまい、聞えなければ、其まゝ通り過ぎる分。餘計な世話だけれども、默切も些と氣になつた處。響の應ずるが如き其の、（はあ、私けえ）には、聊か不意を打たれた仕誼。

「あゝ、お爺さん。」
と低い四目垣へ一足寄ると、ゆつくりと腰をのして、背後へよいとこさと反るやうに伸びた。親仁との間は、隔てる草も別になかつた。三筋ばかり耕された土が、勢込んで、むく〳〵と湧き立つやうな快活な香を籠めて、然も寂寞とあるのみで。勿論、根を拔かれた、肥料になる、靑々と粉を吹いたそら豆の芽生に交つて、紫雲英もちらほら見えたけれども。

鳥打に手をかけて、
「つかんことを聞くがね、お前さんは何ぢやないかい、此の、其處の角屋敷の内の人ぢやないかい。」

親仁はのそりと向直つて、皺だらけの顏に一杯の日當り、桃の花の影がさした其の色に對して、打向ふ其方の屋根の甍は、白晝靑麥を燃る空に高い。

「あの家のかね。」
「其の二階のさ。」
「いんえ、違ひます。」
と、云ふことは素氣ないが、話を振切るつもりではなさゝうで、肩を一ツ搖りながら、鍬の柄を返して地について此方の顏を見た。
「然うかい、いや、お邪魔をしたね。」
これを機に、分れようとすると、片手で顱卷を拐り取つて、
「どうしまして、邪魔も何もござりましねえ。はい、お前樣、何か尋ねごとさつしやるかね。彼處の家は表門さ閉つて居りますども、貸家ではねえが……」
其の手拭を、裾と一緒に、下からつまみ上げるやうに帶へ挾んで、指を腰の兩提げに突込んだ。これでは直ぐにも通られない。
「何れ、詰らん事さ。」
「はいゝ？」

「お爺さんが彼家の人なら然う言つて行かうと思つて、別に貸家を搜してゐるわけではないのだよ。奧の方で少い婦人の聲がしたもの、空家でないのは分つてるが、」

「然うかね、女中衆も二人ばツか居るだから、」

「其の女中衆に就いてさ、私がね、今彼處の横手を此の路へかゝつて來ると、溝の石垣の處を、ずる〳〵つと這つてね、一匹居たのさ――長いのが。」

## 二

怪訝な眉を臆面なく日に這はせて、親仁、煙草入をふら〳〵。

「へい、」

「餘り好物な方ぢやないからね、實は、」

と言つて、笑ひながら、

「其の癖恐いもの見たさに立留まつて見て居ると、何ぢやないか、やがて半分ばかり垣根へ入つて、尾を水の中へぱたりと落して、鎌首を、あの羽目板へ入れたぢやないか。羽目の中は、見た處湯殿らしい。それとも臺所かも知れないが、何しろ、内に少い女たちの聲がするから、どんな事で吃驚しまいものでもない、と思ひます。

あれツ切、座敷へなり、納戸へなりのたくり込めば、一も二もありやしない。それまでと云ふもんだけれど、何處か板の間にとぐろでも卷いて居る處へ、うつかり出會したら難儀だらう。

どの道餘計なことだけれど、お前さんを見かけたから、つい其處だし、彼處の内の人だつたら、一寸心づけて行かうと思つてさ。何ね、此處等ぢや、蛇なんか何でもないのかも知れないけれど、」

「はあ、青大將かね。」

と云ひながら、大きな口をあけて、奧底もなく長閑な日の舌に染むかと笑ひかけた。

「何でもなかあねえだよ。此間も一件もので大騷ぎをしたでがす。彼處さ東京の人だからね。行つて見て進ぜますべい。疾うに、はい、何處かづらかつたも知んねえけれど、臺所の衆とは心安うするでがすから、」

「ぢやあ、然うして上げなさい、しかし心ない邪魔をしたね。」

「なあに、お前樣、どうせ日は永えでがす。はあ、お靜かにござらつせえまし。」

恁うして人間同士がお靜かに別れた頃には、一件はソレ龍の如きもの歟、凡慮の及ぶ處でない。

散策子は踵を廻らして、それから、きり〳〵はたり、きり〳〵はたりと、鷄が羽うつやうな梭の音を慕ふ如く、向う畷の垣根に添うて、二本の桃の下を通つて、三軒の田舍屋の前を過ぎる間に、十八九のと、三十ばかりなのと、機を織る婦人の姿を二人見た。

其の少い方は、納戸の破障子を半開きにして、姉さん冠の横顏を見た時、腕白く梭を投げた。其の年取つた方は、前庭の乾いた土に筵を敷いて、背むきに機臺に腰かけたが、トンと足をあげると、ゆるくキリ〳〵と鳴つたのである。

唯それだけを見て過ぎた。女今川の口繪で、なければ、近頃は餘り見掛けない、可懷しい姿、些と立佇つてといふ氣もしたけれども、小兒でも居ればだに、どの家も皆野面へ出たか、人氣は此の外になかつたから、人馴れぬ女だち物恥をしよう、いや、此の男の俤では、物驚をしようも知れぬ。此の路を後へ取つて返して、今蛇に逢つたといふ、其二階家の角を曲ると、左の方に脊の高い麥畑が、なぞへに低くなつて、一面に颯と擴がる、淺緑に美しい白波が薄りと靡く渚のあたり、雲もない空に歴々と眺

めらるゝ、西洋館とへ、青異人、赤異人と呼んで色を鬼のやうに稱ふるくらゐ、こんな風の男は髯がなくても(帽子被り)と言ふと聞く。

尤も一方は、そんな風に――よし、村のものゝ目からは青鬼赤鬼でも――蝶の飛ぶのも帆艇の帆かと見ゆるばかり、海水浴に開けて居るが、右の方は昔ながらの山の形、眞黑に、大鷲の翼打襲ねたる趣して、左右から苗代田に取詰むる峰の褄、一重は一重毎に迫つて次第に狭く、奥の方暗く行詰つたあたり、打つけなりの茅屋の窓は、山が開いた眼に似て、恰も大なる蟇の、明け行く海から掻窄んで、谷間に潛む風情である。

## 三

されば瓦を焚く竈の、屋の棟よりも高いのがあり、主の知れぬ宮もあり、無縁になつた墓地もあり、頻に落ちる椿もあり、田には大な鯲もある。

あの、西南一帶の海の潮が、浮世の波に白帆を乘せて、此しばらくの間に九十九折ある山の峽を、一ツづゝ潛にして、奥まで迎ひに來ぬ内は、いつまでも村人は、むかう向になつて、ちらほらと畑打つて居るであらう。

丁どいまの曲角の二階家あたりに、屋根の七八ッ重つたのが、此の村の中心で、それから峽の方へ飛々にまばらになり、海手と二三町が間人家が途絶えて、却つて折曲つた此の小路の兩側へ、又飛々に七八軒續いて、それが一部落になつて居る。

梭を投げた娘の目も、山の方へ瞳が通ひ、足踏みをした女房の胸にも、海の波は映らぬらしい。

通りすがりに考へつゝ、立離れた。面を壓して菜種の花。眩い日影を輝くばかり。左手の岬の緑なのも、向うの山の青いのも、偏に此の眞黄色の、僅に限あるを語るに過ぎず。足許の細流や、一段颯と簾を落して流るゝさへ、なか／＼に花の色を薄くはせぬ。

あゝ目覺ましいと思ふ目に、ちらりと見たのみ、呉織文織は、恰も一枚の白紙に、朦朧と描いた二個の其の姿を殘して餘白を眞黄色に塗つたやう。二人の衣服にも、手拭にも、襷にも、前垂にも、織つて居た其の機の色にも、聊も此の色のなかつただけ、一入鮮麗に明瞭に、腦中に描き出された。

勿論、描いた人物を判然と浮出させようとして、此の彩色で地を塗潰すのは、畫の手段に取つて、是か、非か、巧か、拙か、それは菜の花の預り知る處でない。

うつとりするまで、眼前眞黄色な中に、機織の姿の美しく宿つた時、若い婦女の衝と投げた梭の尖から、ひらりと燃えて、いま一人の足下を閃いて、輪になつて一ッ刎ねた、朱に金色を帶びた一條の線があつて、赫燿として眼を射て、流のふちなる草に飛んだが、火の消ゆるが如くやがて失せた。

赤楝蛇が、菜種の中を輝いて通つたのである。

悚然として、向直ると、突當りが、樹の枝から梢の葉へ搦んだやうな石段で、上に、茅ぶきの堂の屋根が、目近な一朶の雲かと見える。棟に咲いた紫羅傘の花の紫も手に取るばかり、峰のみどりの黑髪にさしかざゝれた裝の、其が久能谷の觀音堂。

我が散策子は、其處を志して來たのである。

爾時、これから參らうとする、前途の石段の眞下の處へ、殆ど路の幅一杯に、兩側から押被さつた雜樹の中から、眞向にぬつと、大な馬の顏がむく／＼と湧いて出た。

唯見る、それさへ不意な上、胴體は唯一ッでない。頭に頭が繋がつて、胴に胴が重なつ

て、凡そ五六間があひだ、獣の背である。

咄嗟の間、散策子は杖をついて立窘んだ。

曲角の青大將と、此傍なる菜の花の中の赤楝蛇と、向うの馬の面とへ線を引くと、細長い三角形の只中へ、封じ籠められた形になる。

奇怪なる地妖でないか。

しかし、若惡獸圍繞、利牙爪可怖も、蚖蛇及蝮蠍、氣毒煙火燃も、薩陀彼處にましますぞや。しばらくして。……

四

のんきな馬士めが、此處に人のあるを見て、はじめて、のつそり馬の鼻頭に顯れた、眞正面から前後三頭一列に並んで、たら〳〵下りをゆた〳〵と來るのであつた。

「お待遠さまでござえます。」

「はあ、お邪魔さまな。」

「御免なせえまし。」

と三人、一人々々聲をかけて通るうち、流のふちに爪立つまで、細くなつて躱したが、偶大なる皮の風呂敷に、目を包まれる心地であつた。

路は一際細く、なつたが、却つて柔かに草を踏んで、きり〳〵はたり、きり〳〵はたりと、長閑な機の音に澄されて、やがて仔細なく、蒼空の樹の間漏る、石段の下に着く。

此の石段は近頃すつかり修復が出來た。從つて、爪尖のぼりの路も、草が分れて一筋明らさまになつたから、もう蛇も出まい、其時分は大破して、丁ど繕ひにかゝらうといふ折から、馬は此の段の下に、一軒、寺といふほどでもない住職の控家がある、其の背戸へ石を積んで來たもので。

段を上ると、階子が搖れはしまいかと危むばかり、角が缺け、石が拔け、土が崩れ、足許も定まらず、よろけながら攀ぢ上つた。見る〳〵、目の下の田畠が小さくなり遠くなるに從うて、波の色が蒼う、ひた〳〵と足許に近づくのは、海を抱いた恁る山の、何處も同じ習である。

樹立に薄暗い石段の、石よりも堆い青苔の中に、あの螢袋といふ、薄紫の差俯向いた桔梗科の花の早咲を見るにつけても、何となく濕つぽい氣がして、然も湯瀧のあとを踏むやうに熱く汗ばんだのが、颯と一風、ひや〳〵となつた。境内は然まで廣くない。

そも、御堂のうしろから、左右の廻廊へ、山の裾を引廻して、雜木の枝も藍染に、其處とも分かず松風の聲。

渚は浪の雫を敷いて、砂に結び、巖に消える、其の都度音も聞えさう、但殘惜いまでぴたりと留んだは、きりはたり機の音。

此處よりして見てあれば、織姫の二人の姿は、菜種の花の中ならず、蒼海原に描かれて、浪に泛ぶらむ風情ぞかし。

いや、參詣をしませう。

五段の階、縁の下を、馬が驅け拔けさうに高いけれども、欄干は影も留めない。昔は然こそと思はれた、丹塗の柱、花狹間、梁の波の紺青も、金色の龍も色さみしく、晝の月、茅を漏りて、唐戸に蝶の影さす光景、古き土佐繪の畫面に似て、然も名工の筆意に合ひ、眩ゆからぬが奥床しう、そゞろに尊く懷しい。

格子の中は暗かつた。

戸帳を垂れた御廚子の傍に、造花の白蓮の、氣高く佛立つに、頭を垂れて、引退くこと二三尺。心靜かに四邊を見た。

合天井なる、紅々白々牡丹の花、胡粉の俤消え殘り、紅も散留つて、恰も刻んだものゝ如く、髣髴として夢に花園を仰ぐ思ひがある。

それら、花にも臺にも、丸柱は言ふまでもない。狐格子、唐戸、桁、梁、眴すものゝ此處彼處、巡拜の札の貼りつけてないのは殆どない。

彫金といふのがある、魚政といふのがある、屋根安、大工鐵、左官金。東京の淺草に、深川に。周防國、美濃、近江、加賀、能登、越前、肥後の熊本、阿波の徳島。津々浦々の渡島、稻負せ島、閑古鳥。姿は知らず名を留めた、一切の善男子善女人。木賃の夜寒の枕にも、雨の夜の苫船からも、夢は此の處に宿るであらう。巡禮たちが靈魂は時々此處に來て遊ばう。……をかし、一軒一枚の門札めくよ。

## 五

一座の靈地は、渠等のためには平等利益、樂く美しい、花園である。一度詣でたらむほどのものは、五十里、百里、三百里、筑紫の海の果からでも、思ひさへ浮んだら、束の間に此處に來て、虚空に花降る景色を見よう。月に白衣の姿も拜まう。熱あるものは、楊柳の露の滴を吸ふであらう。戀するものは、優柔な御手に縋りもしよう。御胸にも抱かれよう。はた迷へる人は、緑の甍、朱の玉垣、金銀の柱、朱欄干、瑪瑙の階、花唐戸。玉樓金殿を空想して、鳳凰の舞ふ龍の宮居に、牡丹に遊ぶ麒麟を見ながら、獅子王の座に朝日影さす、櫻の花を衾とし、明月の如き眞珠を枕に、勿體なや、御添臥を夢見るかも知れぬ。よしそれとても、大慈大悲、觀世音は咎め給はぬ。

されば是なる彫金、魚政はじめ、此處に靈魂の通ふ證據には、いづれも巡拜の札を見ただけで、どれもこれも、女名前のも、略々其の容貌と、風采と、從つて其の擧動までが、朦朧として影の如く目に浮ぶではないか。

彼の新聞で披露する、諸種の義捐金や、建札の表に掲示する寄附金の署名が寫實である時に、これは理想であると云つても可からう。

微笑みながら、一枚づゝ。扉の方へうしろ向けに、大な賽錢箱の此方、薬研のやうな破目の入つた丸柱を視めた時、一枚懷紙の切端に、すら〱とした女文字。

うたゝ寐に戀しき人を見てしより
　夢てふものは頼みそめてき
　　　　　——玉脇みを——

と優しく美しく書いたのがあつた。

「これは御參詣で。もし、もし、」

はツと心付〱と、麻の法衣の袖をかさねて、出家が一人、裾短に藁草履を穿きしめて間近に來て居た。

振向いたのを、莞爾やかに笑み迎へて、

「些と此方へ。」

賽錢箱の傍を通つて、格子戸に及腰。

「南無――」とあとは口の裏で念じながら、左右へかた〱と靜に開けた。

出家は、眞直ぐに御廚子の前、かさ〱と袈裟をずらして、袂からマッチを出すと、伸上つて御燈を點じ、額に掌を合はせたが、引返して最う一枚、佇んだ人の前の戸を開けた。

蟲ばんだが一段高く、目つ幅の廣い、部厚な敷居の内に、縱に四疊ばかり敷かれる。壁の透間を樹蔭はさすが、縁なしの疊は青々と新しかつた。

出家は、上に何にもない、小机の前に坐つて、火入ばかり、煙草なしに、灰のくすぼつたのを押出して、自分も一膝、此方へ進め、

「些とお休み下さい。」

また、かさ〱と袂を探つて、

「やあ、マ、茶は此處にもござつた、はゝは、」

と、も一ッ机の下から。

「それではお邪魔を、一寸、拜借。」

と此方は敷居越に腰をかけて、此處からも空に連なる、海の色より、より濃な霞を吸つた。

「眞個に、結構な御堂ですな、佳い景色ぢやありませんか。」

「や、最う大破でござつて。おもりをいたす佛

様に、恁う申し上げては濟まんでありますがな。はゝは、私力にもおいそれとは參りませんので、行屆かん勝でございますよ。」

## 六

「隨分御參詣はありますか。」

先づ差當り言ふことはこれであつた。

出家は頷くやうにして、机の前に座を斜めに整然と坐り、

「然やうでございます。御繁昌と申したいでありますが、當節は餘りございません。以前は、莊嚴美麗結構なものでありましたさうで。

貴下、今お通りになりましてございませう。此處からも見えます。此の山の裾へかけまして、ずつとあの菜種畠の邊、七堂伽藍建連なつて居りましたさうで。書物にも見えますが、三浦郡の久能谷では、此の岸殿寺が、土地の草分と申しまする。

坂東第二番の巡拜所、名高い靈場でございますが、唯今ではとんと其の舊跡とでも申すやうになりました。

妙なもので、却つて遠國の衆の、參詣が多うございます。近くは上總下總、遠い處は九州西國あたりから、聞傳へて巡禮なさるのがあります處、此方たちが、當地へござつて、此の近邊で聞かれますると、つい知らぬものが多くて、大きに迷ふなぞと言ふ、お話を聞くでございますよ。」

「然うしたもんです。」

「はゝ、如何にも、」

と言つて一寸言葉が途切れる。

出家の言は、聊か寄附金の勸化のやうに聞えたので、少し氣になつたが、煙草の灰を落さうとして目に留まつた火入の、いぶりくすぶつた色あひ、マッチの燃さしの突込み加減。巣鴨邊に彌勒の出世を待つて居る、眞宗大學の寄宿舍に似て、餘り世帶氣がありさうもない處は、大に胸襟を開いて然るべく、勝手に見て取つた。

其處で又清々しく一吸して、山の端の煙を吐くこと、遠見の鐵拐の如く、

「夏は嘸涼しいでせう。」

「とんと暑さ知らずでござる。御堂は申すまでもありません、下の假庵室なども至極其の涼しいので、ほんの草葺でありますが、些と御歸りがけにお立寄り、御休息なさいまし。木葉を燻べて澁茶でも獻じませう。

荒れたものでありますが、いや、茶釜から尻尾でも出ませうなら、又一興でござる。はゝはゝ、」

「お羨しい御境涯ですな。」

と客は言つた。

「どうして、貴下、然やうに悟りの開けました智識ではございません。一軒屋の一人住居、心寂しうござつてな、唯今も御參詣のお姿を、あれからお見受け申して、あとを慕つて來ましたほどで。

時に、どちらに御逗留？」

「私？　私は直き其の停車場最寄の處に、」

「しばらく、」

「先々月あたりから、」

「いづれ、御旅館で、」

「否、一室借りまして自炊です。」

「は、は、然やうで。いや、不躾でありまするが、思召しがござつたら、假庵室御用にお立て申しまする。

甚だ唐突でありまするが、昨年夏も、お一人な、矢張恁やうな事から、貴下がたのやうな御仁の御宿をいたしたことがあります。

御夫婦でも宜しい、お二人ぐらゐは樂でありますから、」

「はい、難有う。」

と莞爾して、
「一寸、通りかゝりては、然ういふ處か、此方にあらうとは思はれませんね。眞個に佳い御堂ですね、」
「折々御遊歩においで下さい。」
「勿體ない、おまゐりに來ませう。」
何心なく言つた顏を、訝しさうに打視めた。

## 七

出家は膝に手を置いて、
「これは、貴下方の口から、然う云ふことを承らうとは思はんでありました。」
「何故ですか、」
と問うては見たが、豫め、其の意味を解するに難うはないのであつた。
出家も、僅くはあるが、ふつくりした頬に笑を含んで、
「何故と申すでもありませんがな……先づ當節のお若い方が……と云ふのでござる。はゝゝゝ、近い話かな。尤も然う申すほど、私が、まだ年配ではありませんけれども、」
「分りましたとも。青年の、然も書生が、とおつしやるのでせう。
否、然ういふ御遠慮になさるから、それだから不可ません。それだから、」
と何うしたものか、じりじりと膝を向け直して、
「段々お宗旨が寂れます。此方は何お宗旨だか知りませんが。
對手は老朽ちたものだけで、年紀の少い、今の學校生活でもしたものには、迚も濟度はむづかしい、今さら、觀音でもあるまいと言ふやうなお考へだから不可んのです。
近頃は爺婆の方が横着で、嫁をいぢめる口叱言を、お念佛で句讀を切つたり、膚脱で鰻の串を横銜へで題目を唱へたり、……昔からも然う云ふのもなかつたんぢやないが、まだまだ胡散なから、地獄極樂が、幾干か念頭にあるうちは始末がよかつたのです。今ぢや、生悟りに皆が悟りを開いた顏で、惡くすると地獄の繪を見て、こりや出來が可い、などゝ言ひ兼ねません。
貴下方が、到底對手にやなるまいと思つておいでなさる、少い人達が、却つて祖師に憧がれて在ます。何うかして、安心立命が得たいと悶えてますよ。中にはそれがために氣が違ふものもあり、自殺するものさへあるぢやありませんか。
何でも構はない。途中で、はゝあ、之が二十世紀の人間だな、と思ふのを御覽なすつたら、男子でも女子でもですね、唐突に南無阿彌陀佛と聲をかけてお試しなさい、すぐに氣絶するものがあるかも知れず、直處に天窓を剃つて御弟子になりたいと言はうも知れず、ハタと手を拍つて悟るのもありませう。或はそれが基で死にたくなるものもあるかも知れません。
實際、串戲ではない。佛教は是から法燈の輝く時です。それだのに、何故か、貴下がたが因循して引込思案でいらつしやる。」
頻に耳を傾けたが、
「然やう、如何にも、はあ、然やう。いや、私どもとても、堅く申せば思想界は大維新の際で、或は其の中には神を見た、まのあたり佛に接した、或は自ら救世主であるなどゝ言ふ、當時の熊本の神風連の如き、一揆の起りましたやうな事も、ちらほら聞傳へには居りますが、いづれに致せ、高尚な御議論、御研究の方でござつても、此方人等づれ出家がお守りをする、偶像なぞは……其の、」
と言ひかけて、密と御厨子の方を見た。
「作がよければ、美術品、彫刻物として御覽なさらうと言ふ世間。
或は今後、佛教は盛にならうも知れませんが、

兎も角、偶像の方となりまするど……其の如何なものでござらうかと……同一信仰にいたしてからが、御本尊に對し、禮拜と申す方は、此の前どうあらうかと存じまする。はゝゝ、其處でございますから、自然、貴下がたには、佛教、即ち偶像教でないやうに思召しが願ひたい、御像の方は、高尚な美術品を御覽になるやうに、と存じて、つい御遊歩などゝ申すやうな次第でございますよ。」

「いや、いや、偶像でなくつて何うします。御姿を拜まないで、何を私たちが信ずるんです。貴下、偶像とおつしやるから不可ん。

　名がありませう、一體毎に。

　釋迦、文殊、普賢、勢至、觀音、皆、名があるではありませんか。」

## 八

「唯、人と言へば、他人です、何でもない。是に名がつきませう。名がつきますと、父となります、母となり、兄となり、姉となります。其處で、其の人たちを、唯、人にして扱ひますか。

　偶像も同一です。唯偶像なら何でもない、此の御堂のは觀世音です、信仰をするんでせう。

　ぢや、偶像は、木、金、乃至、土。それを金銀、珠玉で飾り、色彩を裝つたものに過ぎないと言ふんですか。人間だつて、皮、血、肉、五臟、六腑、そんなもので束ねあげて、是に衣ものを着せるんです。第一貴下、美人だつて、たかがそれまでのもんだ。

　しかし、人には靈魂がある、偶像にはそれがない、と言ふかも知れん。其の、貴下、其の貴下、靈魂が何だか分らないから、迷ひもする、悟りもする、危みもする、安心もする、拜みもする、信心もするんですもの。

　的がなくつて弓の修行が出來ますか、輕業、手品だつて學ばねばならんのです。

　偶像は要らないと言ふ人に、そんなら、戀人は唯慕ふ、愛する、こがるゝだけで、一緒にならんでも可いのか、姿を見んでも可いのか。姿を見たばかりで、口を利かずとも、口を利いたばかりで、手に縋らずとも、手に縋つただけで、寢ないでも、可いのか、と聞いて御覽なさい。

　せめて夢にでも、其の人に逢ひたいのが實情です。

　そら、幻にでも神佛を見たいでせう。釋迦、文殊、普賢、勢至、觀音、御像は難有い譯ではありませんか。」

　出家は活々とした顏になつて、目の色が輝いた。心の籠つた口のあたり、髯の穴も數へつべう、

「申されました。おもしろい。」

　ぴたりと膝に手をついて、片手を額に加へたが、

「――うたゝ寐に戀しき人を見てしより夢てふものはたのみそめてき――」

　と獨り俯向いた口の裏に誦したのは、柱に記した歌である。

　此方も思はず彼處を見た、柱なる蜘蛛の絲、あざやかなりけり水莖の跡。

「然う承れば恥入る次第で、恥を申さねば分らんでありますが、うたゝ寐の、此の和歌でござる。」

「其の歌が、」

　と此方も膝の進むを覺えず。

「えゝ、御覽なさい。其處中、それ巡拜札を貼り散らしたと申すわけで、中には、賣藥や、何かの廣告に使ひまするさうなが、それもありきたりで構はんであります。

　又誰が何時のまに貼つて參るかも分りませんので。處が、それ、其處の柱の、其の……」

「はあ、あの歌ですか。」

「御覧になつたで、」

「先刻、貴下が厨をおかけなすつた時に、」

「お目に留まつたのでありませう、其は歌の主が分つて居ります。」

「婦人ですね。」

「然やうで、最も古歌でありますさうで、小野小町の、」

「多分然うのやうです。」

「詠まれたは御自分でありませんが、いや、丁と其の詠み主のやうな美人でありましてな、」

「此の玉脇……とか言ふ婦人が、」

と、口では澄まして然う言つたが、胸はそゞろに時めいた。

「成程、今貴下がお話しになりました、其の、御像のことに就いて、戀人云々のお言葉を考へて見ますると、是は、みだらな心ではなうて、行き方こそ違ひまするが、かすかに照らせ山の端の月、と申したやうに、觀世音にあこがるゝ心を、古歌に擬へたものであつたかも分りませぬ。――夢てふものは賴み初めてき――夢になりともお姿をと言ふ。

眞個に、あゝいふ世に稀な美人ほど、早く結縁いたして佛果を得た驗も澤山ございますから。

それを大摑に、戀歌を書き散らして參つた、怪しからぬ事と、さ、それも人によりけり、御經にも、若有女人設欲求男、と有りまするから、一概に咎め立てはいたさんけれども。彼がために一人殺したでございます。」

聞くものは一驚を吃した。菜の花に見た蛇のそれより。

## 九

「まさかとお思ひなさるでありませう、お話が大分唐突でございつたで、」

出家は掌に手をあてゝ、俯いてやゝ考へ、

「いや、しかし戀歌でないといたして見ますると、其の死んだ人の方が、これは迷ひであつたかも知れんでございます。」

「飛んだ話ぢやありませんか、それは又どうした事ですか。」

と、此方は何時か、最う御堂の疊に、にじり上つて居た。よしありげな物語を聞くのに、懷が窮屈だつたから、懷中に押込んであつた、鳥打帽を引出して、傍に差置いた。

松風が音に立つた。が、春の日なれば人よりも輕く、そよ／＼と空を吹くのである。

出家は佛前の燈明を一寸見て、

「然ればでございつて。……

實は先刻お話し申した、ふとした御縁で、御堂の此の下の假庵室へお宿をいたしました、其の御仁なのでありますが。

其の貴下、うたゝ寐の歌を、其處へ書きました、婦人のために……まあ、言つて見ますれば戀煩ひ、いや、こがれ死をなすつたと申すものでございます。早い話が、――

「まあ、今時、どんな、男です。」

「丁ど貴下のやうな方で、」

呀？　茶釜でなく、這般文福和尚、澁茶にあらぬ振舞の三十棒、思はず後に瞠若として、……唯苦笑するある而已……

「これは、飛んだ處へ引合ひに出しました、」

と言つて打笑ひ、

「おつしやる事と申し、矢張然う云ふ事からお知己になつたと申し、うつかり、これは、」

「否、結構ですとも。戀で死ぬ、本望です。此の太平の世に生れて、戰場で討死をする機會がなけりや、おなじ疊の上で死ぬものを、憧れじにが洒落て居ます。」

華族の金滿家へ生れて出て、戀煩ひで死ぬ、此のくらゐ難有い事はありますまい。戀は叶ふ

方が可さゝうなもんですが、然うすると愛別離苦です。

唯死ぬほど惚れると云ふのが、命を縮めるより難いんでせう。」

「眞に御串戯ものでおいでなさる。はゝゝ、」

「眞面目ですよ。眞面目だけなほ串戯のやうに聞えるんです。あやかりたい人ですね。よくそんなのを見つけましたね。よくそんな、こがれ死をするほどの婦人が見つかりましたね。」

「それは見ることは誰にでも出來ます。美しいと申して、龍宮や天上界へ參らねば見られないのではござらんで、」

「ぢや現在居るんですね。」

「居りますとも。土地の人です。」

「此の土地のですかい。」

「然も此の久能谷でございます。」

「久能谷の、」

「貴下、何んでございませう、今日此處へお出でなさるには、其の家の前を、御通行になりましたらうで、」

「其の美人の住居の前をですか。」

と言ふ時、機を織つたわかい方の婦人が目に浮んだ、赫耀として菜の花に。

「……ぢや、あの、矢張農家の娘で、」

「否々、大財産家の細君でございます。」

「違ひました、」

と我を忘れて、呟いたが、

「然うですか、大財産家の細君ですか、ぢや最う主ある花なんですね。」

「然やうでございます。それがために、貴下、―」

「なるほど、他人のものですね。而して誰が見ても綺麗ですか、美人なんですかい。」

「はい、夏向は隨分何千人と云ふ東京からの客人で、目の覺めるやうな美麗な方もありまするが、なか〳〵此ほどのはないでございます。」

「ぢや、私が見ても戀煩ひをしさうですね、危險、危險。」

出家は眞面目に、

「何故でございますか。」

「歸路には氣を注けねばなりません。何處ですか、其の財産家の家は。」

十

菜種にまじる茅屋の彼方に、白波と、松吹風を右左、其處に旗のやうな薄霞に、しつとりと紅の染む状に桃の花を彩つた、其の屋の棟より、高いのは一ツもない。

「角の、あの二階家が、」

「えゝ？」

「彼が此の歌のかき人の住居でござつてな。」

聞くものは悚然とした。

出家は何んの氣もつかずに、

「尤も彼處へは、去年の秋、細君だけが引越して參つたので。丁ど私がお宿を致した其御仁が……お名は申しますまい。」

「それが可うございます。」

「唯、客人――でお話をいたしませう。其の方か、庵室に逗留中、夜分な、海へ入つて亡くなりました。」

「溺れたんですか、」

「と……まあ見えるでございます、亡骸が岩に打揚けられてござつたので、怪我か、それとも覺悟の上か、其處は先づ、お聞取りの上の御推察でありますが、私は前申す通り、此の歌のためぢややうにな、」

「何しろ、それは飛んだ事です。」

「其の客人が亡くなりまして、二月ばかり過ぎてから、彼處へ、」

と二階家の遙なのを、雲の上から瞰ふやう、出家は法衣の袖を上げて、

「細君が引越して來ましたので。戀ぢや、迷ぢや、といふ一騷ぎござつた時分は、此の濱方の

本宅に、家族、……唯今でも其處が本家、また横濱にも立派な店があるのでありまして、主人は大方其方へ參つて居りませうが。
此の久能谷の方は、女中ばかり、眞に閑靜に住んで居ります。」
「すると別莊なんですね。」
「いや／＼、──どうも話がいろ／＼になります、──處が久能谷の、あの二階家が本宅ぢやさうで。唯今の主人も、あの屋根の下で生れたげに申します。
其の頃は陰な谷して、屋根と申した處が、ああではありますまい、月も時雨もばら／＼葺。それでも先代の親仁と言ふのが、最う唯今では亡くなりましたが、それが貴下、小作人ながら大の節儉家で、積年の望みで、地面を少しばかり借りましたのが、私庵室の背戸の地續きで、以前立派な寺がありました。其住職の隱居所の跡だつたさうにございますよ。
畑を植ゑようと、まことに恁う天氣の可い、のどかな、陽炎がひら／＼畔に立つ時分。
親仁殿、鍬をかついで、此の坂下へ遣つて來て、自分の借地を、先づならしかけたでございます。
とツ樣晝上りにせつせえ、と小兒が呼びに來た時分、と申すで、お晝頃でありませうな。
朝疾くから、出しなに食かつたて、何ぼの事、鍬を着に居たのが、其陽氣なり、働き通しぢや。親仁殿は向顱卷、大肌脱で、精々と遣つて居た處。大抵借用分の地券面だけは、仕事が濟んで、是から些とほまちに山を削らうといふ料簡。
づか／＼山の裾を、穿りかけて居たさうでありますが、小兒が呼びに來たに就いて、一服遣るべいかで、最う一鍬、すとんと入れると、急に土が軟かく、ずぶ／＼と柄ぐるみにむぐずり込んだて。
づいと、引拔いた鍬について、じと／＼と染んで出たのが、眞紅な、ねば／＼とした水ぢや、」
「死骸ですか、」と切込んだ。
「大違ひ、大違ひ、」
と、出家は大きくかぶりを掉つて、
「誂文通り、金子でござる、」
「成程、穿當てましたね。」
「穿當てました。海の中でも紅色の鱗は目覺ましい。土を穿つて出る水も、然ういふ場合には紫より、黄色より、青い色より、其の紅色が一番見る目を驚かせます。
はて、何んであらうと、親仁殿が悶くなつて、もう二三度穿り擴けると、がつくり、うつろになつたので、山の腹へ附着いて、恁う覗いて見たさうにござる。」

## 十一

「大蛇が顋を開いたやうな、眞紅な土の空洞の中に、づぼらとした黒い塊が見えたのを、鍬の先で掻出して見ると──甕で。
蓋が打缺けて居たさうでございますが、其處からもどろ／＼と、其の丹色に底澄んで光のある粘土やうのものが充滿。
別に何んにもありませんので、親仁殿は惜氣もなく打覆して、最う一個あつた、それも甕で、奧の方へ縱に二ッ並んで居たと申します──さあ、此の方が眞物でござつた。
開けかけた蓋を慌てゝ壓へて、きよろ／＼と其處等を眴したさうでございますよ。
傍に居て覗き込んで居た、自分の小兒をさへ、睨むやうにして、じろりと見ながら、何う悠々と、肌なぞを入れて居られませう。
素肌へ、貴下、嬰兒を負ふやうに、それ、脱いで置いたぼろ半纏で、しつかりくるんで、背負上げて、がくつく腰を、鍬を杖にどツこいなぢや。默つて居ろよ、何んにも言ふな、屹と誰にも饒舌るでねえぞ、と言ひ續けて、内へ歸つて、

納戸を閉切つて暗くして、お佛壇の前へ蓮を敷いて、其處へざく／＼と裝上げた。尤も年が經つて薄黑くなつて居たさうでありますが、其の晩から小屋は何んとなく暗夜にも明るかつた、と近所のものが話でござつて。

極性な朱でござつたらう、ぶちまけた甕充滿のが、時ならぬ曼珠沙華が咲いたやうに、山際に燃えて居て、五月雨になつて消えましたとな。

其と日數が經つてから、親仁どのは、村方の用達かた／＼、東京へ參つた序に芝口の兩換店へ寄つて、汚い煙草入から煙草の粉だらけなのを一枚だけ、そつと出して、幾干に買はつしやる、と當つて見ると、いや摑んだ爪の方が黄色いくらゐでござつたに、正のものとて爭はれぬ、七兩ならばと引替へにと言ふのを、もッと氣張つてくれさつせえで、とう／＼七兩一分に替へたのがはじまり。

そこち、氣長に金子にして、やがて船一艘、古物を買ひ込んで、薪やら蒲炭の荷を廻し、追々材木へ手を出しかけ、船の數も七艘までに仕上げた時、すつぱりと賣物に出して、さて、地面を買ふ、店を擴げる、普請にかゝる。

上臺が極ると、山の貸元になつて、坐つて居て商賣が出來るやうになりました、高利は貸します。

どかとした山の林が、あの裸になつては、店さきへすく／＼と並んで、いつの間にか金を殘しては何處へか參る。

其の筈でござるて。

利のつく金子を借りて山を買ふ、木を伐りかけ、資本に支へる。こゝで材木を抵當にして、又借りる。すぐに利がつく、又伐りかゝる、資本に支へる、又借りる、利でござらう。借りた方は精々と樹を伐り出して、貸元の店へ材木を並べるばかり。追つかけられて見切つて賣るのを、安く買ひ込んで又儲ける。行つたり、來たり、家の前を通るものが、金子を置いては失せるであります。

妻子眷屬、一時にどし／＼と殖えて、人は唯、天狗が山を飲むやうな、と舌を卷いたでありまするが、蔭ぢや——其の——鍬を杖で胴震ひの一件をな、はゝゝ、此方人等、其の、も一ツの甕の朱の方だつて、手を押つけりや血になるだ、なぞと、ひそ／＼話を遣るのでござつて。」

「然う云ふ人たちは又可い鹽梅に穿當てないもんですよ。」

と顏を見合はせて二人が笑つた。

「よくしたものでございます。いくら隱して居ることでも何處を何うして知れますかな。」

「いや、それに就いて、」

出家は思出したやうに、

「恁う云ふ話がございます。其の、誰にも言ふな、と堅く口留めをされた齋之助といふ小兒が、（父樣は野良へ行つて、穴のない天保錢をドシコと背負つて歸らしたよ。）

……如何でござる、はゝゝは。」

「なるほど、穴のない天保錢。」

「其の穴のない天保錢が、當主でございます。多額納稅議員、玉駒齋之助、令夫人おみを殿、其の歌をかいた美人であります、如何でございます、貴下、」

# 十二

一先づお茶を一ツ。御約束通り澁茶でござつて、碌にお茶臺もありませんかはりには、おらんとして自然に片づいて居ります。お覺ざいさい。秋になりまするど、これで町へ遠うございますかはりには、栗柿に事を缺きませぬ。鳥を追つて柿を取り、高音を張ります鵙を驚かして、栗を落してなりと差上げませうに。

まあ、何よりもお樂に、」

と袈裟をはづして釘にかけた、障子に緋桃の

影法師。今物語の朱にも似て、破目を曖く燃ゆる狀、法衣をなぶる風情である。

庵室から打仰ぐ、石の階子は梢にかゝつて、御堂は屋根のみ浮いたやう、緑の雲にふつくりと沈んで、山の裾の、縁に迫つて萌葱なれば、あま下る蚊帳の外に、誰待つとしもなき二人、煙らぬ火鉢のふちかけて、ひら〳〵と蝶が來る。

「御堂の中では何んとなく氣もあらたまります。此處でお茶をお入れ下すつた上のお話ぢや、結構過ぎますほどですが、あの歌に別れて來たので、何んだかなごり惜い心持もします。」

「けれども、石段だけも、婀娜な御本尊へは路が近うなつてございますから、はゝはゝ。

實の處佛の前では、何か私が自分に懺悔でもしまするやうで心苦しい。此處でありますと大きに寛ぐでございます。

師のかげを七尺去ると最うなまけの通りで、困つたものでありますわ。

其處で客人でございます。――

日頃のお話ぶり、行爲、御容子な、」

「どういふ人でした。」

「それは申しますまい。私も、盲目の垣覗きよりもソツと近い、机覗きで、讀んでおいでなさつた、書物などの、お話も伺つて、何をなさる方ぢやと言ふ事も存じて居りますが、經文に書いてあることさへ、愚昧に饒舌ると間違ひます。

故人をあやまり傳へてもなりませず、何か評をするやうにも當りますから、唯々、かのな、婦人との模樣だけ、お物語しませうで。

一日晩方、極暑のみぎりでありました。濱の散歩から歸つてござつて、（和尚さん、些と海へ行つて御覽なさいませんか、綺麗な人が居ますよ。）

（はゝあ、どんな、貴下、）

（あの松原の砂路から、小松橋を渡ると、急にむかうが遠目金を嵌めたやうに圓い海になつて富士の山が見えますね、）

これは御存じでございませう。」

「知つて居ますとも。毎日のやうに遊びに出ますもの、」

「あの橋の取附きに、松の樹で取廻して――松原はずつと河を越して廣い洲の林になつて居りますな――而して庭を廣く取つて、大玄關へ石を敷詰めた、素ばらしい門のある邸がございませう。あれが、それ、玉脇の住居で。

實はあの方を、東京の方がなさる別莊を眞似て造つたでありますが、主人が交際ずきで頻と客をしまする處、いづれ海が、何よりの呼物でありますに。此の久能谷の方は、些と足場が遠くなりますから、すべて、見得装飾を向うへ持つて參つて、小松橋が本宅のやうになつて居ります。

其處で、去年の夏頃は、御新姐、申すまでもない、そちらに居たでございます。

で其の――小松橋を渡ると、急に遠目金を覗くやうな圓い海の硝子へ――ぱつと一杯に映つて、とき色の服の姿が浪の青いのと、巓の白い中へ、薄い虹がかゝつたやうに、美しく靡いて來たのがある。……

と言はれたは、即ち、それ、玉脇の……でございます。

しかし、其時はまだ誰だか本人も御存じなし、聞く方でも分りませんので。どういふ別嬪でありました、と串戯にな、團扇で煽ぎながら聞いたでございます。

客人は海水帽を脱いだばかり、未だ部屋へも上らず、其の縁側に腰をかけながら。

（誰方か尊いくらゐでした。）」

## 十三

「大分氣高く見えましたな。

客人が言ふには、

（二三間あひを置いて、おなじやうな浴衣を着た、帶を整然と結んだ、女中と見えるのが附いて通りましたよ。

唯すれ違ひざまに見たんですが、目鼻立ちのはつきりした、色の白いことゝ、唇の紅さッたらありませんでした。

盛裝と云ふ姿だのに、海水帽をうつむけに被つて――近所の人でゞもあるやうに、無造作に見えましたつけ。むかう、然うやつて下を見て帽子の廂で日を遮けるやうにして來たのが、眞直に前へ出たのと、顏を見合はせて、兩方へ避ける時、濃い睫毛から瞳を涼く睜いたのが、雪舟の筆を、紫式部の硯に染めて、濃淡のぼかしをしたやうだつた。

何んとも言へない、美しさでした。

いや、恁う云ふことをお話します、私は鳥羽繪に肖て居るかも知れない。

さあ、御飯を頂いて、柄相應に、月夜の南瓜畑でも又見に出ませうかね。）

御晩は貴下、唯それだけの事で。

翌日また散步に出て、同じ時分に庵室へ歸つて見えましたから、私が串戲に、

（雪舟の筆は如何でござつた。）

（今日は曇つた所爲か見えませんでした。）

それから二三日經つて、

（まだお天氣が直りませんな。些と涼しすぎるくらゐ、御步行には宜しいが、矢張雲がくれでござつたか。）

（否、源氏の題に、小松橋といふのはありませんが、今日はあの橋の上で。）

（それは、おめでたい。）

などゝ笑ひまする。

（まるで人違ひをしたやうに粹でした。私が是から橋を渡らうと云ふ時、向うの袂へ、十二三を頭に、十歲ぐらゐのと、七八歲ばかりのと、男の兒を三人連れて、其中の小さいのゝ肩を片手で敲きながら、上から覗き込むやうにして、莞爾して橋の上へかゝつて來ます。

どんな婦人でも羨しがりさうな、すなほな、房りした花月卷で、薄お納戶地に、ちら〱と膚の透いたやうな、何んの中形だか浴衣がけで、それで、きちんとした衣紋附。

絽でせう、空色と白とを打合はせの、模樣は一寸分らなかつたが、お太鼓に結んだ、白い方が、腰帶に當つて水無月の雪を抱いたやうで、見る目に、ぞッとして擦れ違ふ時、其の人は、忘れた形に手を垂れた、其の兩手は力なさゝうだつたが、幽にぶる〱と肩が搖れたやうでした、傍を通つた男の氣に襲はれたものでせう。

通り縋ると、どうしたのか、我を忘れたやうに、私は、あの、低い欄干へ、腰をかけて了つたんです。拔けたのだなぞと言つては不可ません。下は川ですから、あれだけの流でも、落ちようもんなら其切です――淵や瀨でないだけに、救助船とも喚かれず、又叫んだ處で、人は串戲だと思つて、笑つて見殺しにするでせう、泳を知らないから。）

と言つて苦笑をしなさつたつけ……それが眞實になつたでございます。

何うしたことか、此の戀煩に限つては、傍のものは、あは〱、笑つて見殺しにいたします。

私はじめ串戲半分、ひやかし旁々、今日は例のは如何で、などゝ申したでございます。

これは、貴下でも然やうでありませう。」

然れば何んと答へよう、喫んでた煙草の灰をはたいて、

―ですかな……どうも、これだけは眞面目に介抱は出來かねます。娘が煩ふのだと、乳母が始末をする仕來りになつて居りますがね、男の

は困りますな。
そんな時、其の川で沙魚でも釣つて居たかつたですね。」
「はゝゝ、是はをかしい。」
と出家は興ありけにハタと手を打つ。

## 十四

「是はをかしい、釣といへば丁ど其時、向う詰の岸に蹲んで、ト釣つて居たものがあつたでござる。橋詰の小店、荒物を商ふ家の亭主で、身體の痩せて引締つたには似ない、褌の緩い男で、因果とのべつ釣をして、はだけて居ませう、眞にあぶなツかしい形でな。

渾名を一厘土器と申すでござる。天窓の眞中の禿工合が、宛然ですて――川端の一厘土器――これが爾時も釣つて居ました。

庵室の客人が、唯今申す欄干に腰を掛けて、おくれ毛越にはら〳〵と靡いて通る、雪のやうな襟脚を見送ると、今、小橋を渡つた處で、中の十歳位のがぢやれて、其の腰へ抱き着いたので、白魚といふ指を反らして、輕く其の小兒の背中を打つた時だつたと申します。

（お坊ちやま、お坊ちやま、）

と大聲で呼び懸けて、

（手巾が落ちました、）と知らせたさうでありますが、件の土器殿も、餌は振舞ふ氣で、粋な後姿を見送つて居たものと見えますよ。

（やあ、）と言つて、十二三の一番上の兒が、駈けて返つて、橋の上へ落して行つた白い手巾を拾つたのを、懷中へ突込んで、默つて又飛んで行つたさうで。小兒だから、辭儀も挨拶もないでございます。

御新姐が、禮心で顏だけ振向いて、肩へ、頤をつけるやうに、居を少し曲げて、其の涼い目で、熟と此方を見返つたのが取違へたものらしい、私が許の客人と、ぴつたり出會つたでありませう。

引込まれて、はツと禮を返したが、其ツ切。御新姐の方は見られなくつて、傍を向くと貴下、一厘土器が怪訝な顏色。

いや最う、しつとり冷汗を掻いたと言ふ事、

――こりや成程。極がよくない。

局外のものが何んの氣もなしに考へれば、愚にもつかぬ事なれど、色氣があつて御覽じろ。第一、野良聲の調子ツぱづれも可笑しい處へ、自分主人でもない餘所の小兒を、坊やとも、あの兒とも言ふにこそ、へつらひがましい、お坊ちやまは不見識の行止り、申さば器量を下げた話。

今一方からは、右の土器殿にも小恥かしい次第でな、他人のしんせつで手柄をしたやうな、變な羽目になつたので。

御本人、然うとも口へ出して言はれませなんだが、それから何んとなく鬱ぎ込むのが、傍目にも見えたであります。

四五日、引籠つてござつたほどで。

後に、何も彼も打明けて私に言ひなさつた時の話では、しかし又其の間違が緣になつて、今度出會つた時は、何んとなく兩方で挨拶でもするやうになりはせまいか。然うすれば、どんなにか嬉しからう、本望ぢや、と思はれたさうな、迷ひと申すはおそろしい、情ないものでござる。世間大概の馬鹿も、これほどなことはないでございます。

三度目には御本人、」

「又、出會つたんですかい。」

と聞くものも待ち構へる。

「今度は反對に、濱の方から歸つて來るのと、濱へ出ようとする御新姐と、例の出口の處で逢つたと言ひます。

大分最う薄暗くなつて居ましたさうで……土用あけからは、日に立つて日が詰ります處へ、

一度は一度と、散歩のお歸りが遲くなつて、蚊遣りでも我慢が出來ず、私が此處へ蚊帳を釣つて潜込んでから、歸つて見えて、晩飯も最う、なぞと言はれるさへ折々の事。

爾時も、早や黄昏の、とある、人顔、朧ながら月が出たやうに、見違へない其人と、思ふと、男が五人、中に主人も居たでありませう。婦人は唯御新姐一人、それを取卷く如くにして、どやどやと些と急足で、浪打際の方へ通つたが、其の人數ぢや、空頼めの、餘所ながら目禮處の騷ぎかい、貴下、其の五人の男と云ふのが、」

十五

「眉の太い、怒り鼻のがあり、額の廣い、顎の尖つた、下目で睨むやうなのがあり、仰向けざまになつて、頬髯の中へ、煙も出さず葉卷を突込んで居るのがある。ぐるりと尻を引捲つて、扇子で叩いたものもある。どれも浴衣がけの下司は可いが、其の中に淺黄の兵兒帶、結目をぶらりと二尺ぐらゐ、こぶらの邊までぶら下げたのと、緋縮緬の扱帶をぐる／＼卷きに胸高は沙汰の限。前のは御自分のであらうが、扱帶の先生は、酒の上で、小間使のを分捕の次第らしい。

此が、不思議に客人の氣を惡くして、入相の浪も物凄くなりかけた折からなり、彼の、赤鬼青鬼なるものが、かよわい人を冥土へ引立てて行くやうで、思ひなしか、引狹まれた御新姐は、何んとなく物寂しい、快からぬ、滅入つた容子に見えて、ものあはれに、命がけにでも其奴等の中から救つて遣りたい感じが起つた。家庭の樣子も略々知れたやうで、氣が揉める、と言はれたのでありますが、貴下、これは無理ぢやて。

地獄の繪に、天女が天降つた處を描いてあつて御覽なさい。餓鬼が救はれるやうで尊かろ。蛇が、つかはしめぢやと申すのを聞いて、辨財天を、噫、お氣の毒な、嘸お氣味が惡からうと思ふものはありますまいに。迷ひぢやね。」

散策子は是に少しく腕組みした。

「しかし何ですよ、女は、自分の惚れた男が、別嬪の女房を持つてると、嫉妬らしいやうですがね。男は反對です、」

と聊か論ずる口吻。

「はゝあ、」

「男は然うでない。惚れてる婦人が、小野小町花、大江千里月といふ、對句通りになると安心します。

唯今の、其の淺黄の兵兒帶、緋縮緬の扱帶と來ると、些と考へねばならなくなる。耶蘇教の信者の女房が、主キリストと抱かれて寢た夢を見たと言ふのを聞いた時の心地と、回々教の魔神になぐさまれた夢を見たと言ふのを聞いた時の心地とは、些とそれは違ひませう。

どつち路、嬉しいない事は知れて居ますがね、前のは、先づ／＼と我慢が出來る、後のは、堪忍がなりますまい。

まあ、そんな事は措いて、何んだつて又、然う言ふ不愉快な人間ばかりが其の夫人を取卷いて居るんでせう。」

「其處は、玉脇がそれ鍬の柄を杖に支いて、ほろ半纏に引くるめは一件で、あゝ遣つて大概な華族も及ばん暮しをして、交際にかけては錢金を惜まんでありますが、情ない事には、遣方が遣方ゆゑ、身分、名譽ある人は寄つきませんで、悲哉其段は、如何はしい連中ばかり。」

「お待ちなさい、成程、然うすると其の夫人と言ふは、どんな身分の人なんですか。」

出家はあらためて、打頷き、且つ咳して、

「其處でございます。御新姐はな、年紀は、さて、誰が目にも大略は分ります、先づ二十三四、それとも五六かと言ふ處で、」

「それで主人の母様？　十二三のが頭ですかい。」

「否、どれも實子ではないでございます。」

「まゝツ兒ですか。」

「三人とも先妻が産みました。此の先妻についても、まづ、一くさりのお話はあるでございますが、それは餘事ゆゑに申さずとも宜しかろ。

二三年前に、今のを迎へたのでありますが、此處でありますよ。

何處の生れだか、育ちなのか、誰の娘だか、妹だか、皆目分らんでございます。貸しに、かたに取つたか、出して買ふやうにしたか。落魄れた華族のお姫様ぢやと言ふのもあれば、分散した大所の娘御だと申すのもあります。然らかと思ふと、箔のついた藝娼妓に違ひないと申すもあるし、豪いのは高等淫賣の上りだらうなど、甚しい沙汰をするのがござつて、丁と底知れずの池に棲む、ぬしと言ふものゝやうに、素性が分らず、つひぞ知つたものもない様子。」

## 十六

「何にいたせ、私なぞが通りすがりに見懸けましても、何んとも當りがつかぬでございます。

勿論又、坊主に鑑定の出來よう筈はなければども、其の眉のかゝり、目つき、愛嬌があると申すではない。口許なども凜として、世辭を一つ言ふやうには思はれぬが、唯何んとなく賢げに、戀も無常も知り拔いた風に見える。身體つきにも顏つきにも、情が滴ると言つた状ぢや。

戀ひ慕ふものならば、馬士でも船頭でも、われら坊主でも、無下に振切つて邪險にはしさうもない、假令戀はかなへぬまでも、然るべき返歌はありさうな。帶の結目、袂の端、何處へ一寸障つても、情の露は男の骨を溶解かさずと言ふことなし、と申す風情。

然れば、氣高いと申しても、天人神女の俤ではなうて、姫路のお天守に緋の袴で燈臺の下に何やら書を繙く、それ露が滴るやうに婀娜なと言うて、水道の水で洗ひ髮ではござらぬ。人跡絶えた山中の温泉に、唯一人雪の膚を泳がせて、丈に餘る黑髮を絞るとかの、それに肖まして。

慕はせるより、懐しがらせるより、一目見た男を魅する、力廣大。少からず、地獄、極樂、娑婆も身に附絡うて居さうな婦人、從うて、罪も報も淺からぬげに見えるでございます。

處へ、迷うた人の事なれば、淺黄の帶に緋の扱帶が、牛頭馬頭で、逢魔時の浪打際へ引立てゝでも行くやうに思はれたのでありませう――私どもの客人が――然う云ふ心持で御覽なさればこそ、其後は玉脇の邸の前を通りがかり。……

濱へ行く町から、横に折れて、背戸口を流れる小川の方へ引廻した蘆垣の蔭から、松林の幹と幹とのなかへ、襟から肩のあたり、くつきりとした耳許が際立つて、帶も裙も見えないのが、浮出したやうに眞中へあらはれて、後前に、是も肩から上ばかり、爾時は男が三人、一ならびに松の葉とすれ〳〵に、しばらく、桔梗苅萱が靡くやうに見えて、段々低くなつて隱れたのを、何か、自分との事のために、離座敷か、座敷牢へでも、送られて行くやうに思はれた、後前を引挾んだ三人の漢の首の、兇惡なのが、確に其の意味を語つて居たわ。最う是切、未來まで逢へなからうかとも思はれる、と無理なことを言ふのであります。

さ、是もぢや、玉脇の家の客人だち、主人まじりに、御新姐が、庭の築山を遊んだと思へば、それまでゞありませうに。

とう〳〵表通だけでは、氣が濟まなくなつたと見えて、前申した、其の背戸口、搦手のな、川を一つ隔てた小松原の奥深く入り込んで、う

ろつくやうになつたさうで。

　玉脇の持地ぢやありますが、此の松原は、野開きにいたしてござる。中には汐入の、一寸大きな池もあります。一面に青草で、これに松の翠がかさなつて、唯今頃は菫、夏は常夏、秋は萩、眞個に幽翠な處、些と行らしつて御覧じろ。」

「薄暗い處ですか、」

「藪のやうではありません。眞蒼な處でありますが、本でも御覧なさりながらお歩行には、至極宜しいので、」

「蛇が居ませう、」

と唐突に尋ねた。

「お嫌ひか。」

「何とも、どうも、」

「否、何の因果か、あのくらゐ世の中に嫌はれるものも少なうござる。

　しかし、氣をつけて見ると、あれでもしをらしいもので、路端などを我は顔で伸して居る處を、人が參つて、熟と視めて御覧なさい。見返しますがな、極りが惡さうに鎌首を垂れて、向うむきに羞含みますよ。憎くないもので、はゝゝは、矢張心がありますよ。」

「心があられては尚困るぢやありませんか。」

「否、鹽氣を嫌ふと見えまして、其の池のまはりには些とも居りません。邸には此頃ぢや、其の魅するやうな御新姐も留主なり、穴はすかすかと眞黒に、足許に蜂の巣になつて居りましても、蟹の住居、落ちるやうな憂慮もありません。」

## 十七

「客人は、其の穴さへ、白髑髏の目とも見えたでありませう。

　池をまはつて、川に臨んだ、玉脇の家造を、何か、御新姐のためには牢獄でゞもあるやうな考へてござるから。

　さて、潮のさし引ばかりで、流れるのではありません、どんより鼠色に淀んだ岸に、浮きもせず、沈みもやらず、末始終は碎けて鯉鮒にもなりさうに、何時頃のか五六本、丸太が浸つて居るのを見ると、あゝ、切組めば船になる。繋合はせば筏になる。然るに、綱も棹もない。戀の淵は是で渡らねばならないものか。

　生身では渡られない。靈魂だけなら乘れようものを。あゝ、樹立に包まれた木戸の中には、其の人が、と足を爪立つたりなんぞして。

　蝶の目からも、餘りふはふはして見えたでござらう。小松の中をふらふら自分も、何だか其の、肩から上ばかりに、裾も足もなくなつた心地、日中の妙な蝙蝠ぢやて。

　懷中から本を出して、

　　蠟光高懸照紗空、
　　花房夜搗紅守宮、
　　象口吹香毾㲪暖、
　　七星挂城聞漏板、
　　寒入罘罳殿影昏、
　　彩鸞簾額著霜痕、

　えゝ、何んでも此處は、蘭が鉤闌の下に月に鳴く、魏の文帝に寵せられた甄夫人が、後におとろへて幽閉されたと言ふので、鎖阿甄。とあつて、それから、

　　夢入家門上沙渚、
　　天河落處長洲路、
　　願君光明如太陽、

　妾を放て、然うすれば、魚に騎し、波を撇いて去らむ、と云ふのを微吟して、思はず、襟にはらはらと涙が落ちる。目を瞬つて、其の水中の木材よ、いで、浮べ、鰭ふつて木戸に迎へよ、と睨むばかりに瞻めたのでござるさうな。些と尋常事でありませんな。

　詩は唐詩選にでもありませうか。」

一どうですか。えゝ、何んですつて——夢に家門に入つて沙渚に上る。魂が沙漠をさまよつて歩行くやうね、天河落處長洲路、あはれぢやありませんか。
　それを聞くと、私まで何んだか、其の婦人が、幽閉されて居るやうに思ひます。
　それから何うしましたか。」
「どうと申して、段々頭がこけて、日に増し目が窪んで、顔の色が愈々悪い。
　或時、大衝發ちや、と言うて、停車場前の床屋へ、顔を剃りに行かれました。其の時だつたと申す事で。
　頭を洗ふし、久しぶりで、些と心持も爽になつて、ふらりと出ると、田舎には荒物屋が多いでございます、紙、煙草、蚊遣香、勝手道具、何んでも屋と言つた店で。床店の筋向うが、矢張其の荒物店であります處、戸外へは水を打つて、軒の提灯には未だ火を點さぬ、溝石から往來へ縁臺を跨がせて、差向ひに將棊を行つて居ます。端の歩が附木、お定りの奴で。
　用なしの身體ゆゑ、客人が其處へ寄つて、路傍に立つて、兩方とも矢鱈に飛車角の取替へこ、ころり／＼差違へる毎に、ほい、ほい、と言ふ勇ましい懸聲で。おまけに一人の親仁なぞは、媽々衆が行水の間、引渡されたものと見えて、小兒を一人胡坐の上へ抱いて、雁首を俯向けに銜へ煙管。
　で銜へたまんま、待てよ、どつこい、と言ふ毎に、煙管が打附りさうになるので、抱かれた兒は、親仁より、餘計に額に皺を寄せて、雁首を狙つて取らうとする。火は附いて居ないから、火傷はさせぬが、夢中で取られまいと振動かす、小兒は手を出す、飛車を遁ける。
　よだれを垂々と垂らしながら、占めた！とばかりで矢庭に對手の玉將を引摑むと、大きな口をへの字形に結んで見て居た赭ら顔で、脊高の、胸の大きい禪門が、鐵挺のやうな親指で、いきなり勝つた方の鼻つ頭をぐいと摑んで、豪いぞ、と引伸ばしたと思召せ、はゝゝはゝ。」

## 十八

「大きな、ハックサメをすると煙草を落した。額こツつりで小兒は泣き出す、負けた方は笑ひ出す、涎と何んかと一緒でござらう。鼻をつまんだ禪門、苦々しき顔色で、指を持餘した、鹽梅な。
　これを機會に立去らうとして、振返ると、荒物屋と葭簀一枚、隣家が間に合はせの郵便局で。其處の門口から、すらりと出たのが例の其人。汽車が着いたと見えて、馬車、車がら／＼と五六臺、それを見に出たものらしい、郵便局の軒下から往來を透かすやうにした、目が、ぱつたり客人と出會つたでありませう。
　心ありさうに、然うすると直ぐに身を引いたのが、隔ての葭簀の陰になつて、顔を背向けもしないで、其處で向直つて此方を見ました。
　軒下の身を引く時、目で引つけられたやうな心持がしたから、此方も又葭簀越に。
　爾時は、總髪の銀杏返で、珊瑚の五分珠の一本差、髪の所爲か、いつもより眉が長く見えたと言ひます。浴衣ながら帯には黄金鎖を掛けて居たさうでありますが、搖れて其の音のするほど、此方を透すのに胸を動かした、顔がさ、葭簀を横にちら／＼と霞を引いたかと思ふ、是に眩くばかりになつて、思はず一寸會釋をする。
　向うも、伏目に俯向いたと思ふと、リン／＼と貴下、高く響いたのは電話の報知ぢや。
　是を待つて居たでございますな。
　すぐに電話口へ入つて、姿は隱れましたが、淺間ゆゑ、よく聞える。
（はあ、私。あなた、餘りですわ。餘りです

わ。何うして來て下さらないの。怨んで居ますよ。あの、あなた、夜も寢られません。はあ、夜中に汽車のつくわけはありませんけれども、それでも今にもね、來て下さりはしないかと思つて。

私の方はね、もうね、一寸……どんなに離れて居りましても、あなたの聲はね、電話でなくつても聞えます。あなたには通じますまい。

どうせ、然うですよ。それだつて、こんなにお待ち申して居る、私の爲ですもの……氣をかねてばかりいらつしやらなくても宜しいわ。些とは不義理、否、父さんやお母さんに、不義理と言ふこともありませんけれど、ね、私は生命かけて、屹とですよ。今夜にも、寢ないでお待ち申しますよ。あ、あ、たんと、そんなことをお言ひなさい、どうせ寢られないんだから可うございます。怨みますよ。夢にでもお目にかゝりませうねえ。否、待たれない、待たれない……）

お道か、お光か、女の名前。

（……みいちやん、然やうなら、夢で逢ひますよ。」——

きり／＼と電話を切つたて。」

「へい、」

と思はず聞惚れる。

「其日は歸つてから、豪い元氣で、私はそれ、涼しさやと言つた句の通り、縁から足をぶら下げる。客人は其處の井戸端に焚きます据風呂に入つて、湯をつかひながら、露出しの裸體談話。

其方と、此方で、高聲でな。尤も隣近所はござらぬ。かけかまひなしで、電話の假聲まじりか何かで、

（やあ、和尚さん、梅の青葉から、湯氣の中へ絲を引くのが、月影に光つて見える、蜘蛛が下りた、）

と大氣燄ぢや、

（喝采々々、今夜お忍か。）

（勿論。）

と答へて、頭のあたりをざぶ／＼と、仰いで天に愧ぢざる顏色でありました。が、日頃の行ひから察して、如何に、思死をすればとて、苟も主ある婦人に、然ういふ不料簡を出すべき仁でないと思ひました、果せる哉。

冷奴に紫蘇の實、白瓜の香の物で、私と取膳の飯を上ると、帶を緊め直して、

（もう一度そこいらを。）

いや、これはと、ぎよつとしたが、垣の外へ出られた姿は、海の方へは行かないで、それ、其の石段を。」

一面の日當りながら、蝶の羽の動くほど、山の草に薄雲が輕く靡いて、檐から透すと、峰の方は暗かつた、餘り暖さが過ぎたから。

## 十九

降らうも知れぬ。日向へ蛇が出て居る時は、雨を持つといふ、來がけに二度まで見た。

で、雲が被つて、空氣が濕つた所爲か、笛太鼓の囃子の音が山一ツ越えた彼方と思ふあたりに、蛙が鳴くやうに、遠いが、手に取るばかり、然も沈んでうつゝの音樂のやうに聞えて來た。綾で蠟管の出來た蓄音器の如く、且つ遙に響く。

それまでも、何かそれらしい音はしたが、極めて散漫で、何の聲とも纏まらない。村々の蔀、柱、戸障子、勝手道具などが、日永に退屈して、のびを打ち、欠伸をする氣勢かと思つた。未だ晝前だのに、——時々牛の鳴くのが入交つて——時に笑ひ興ずるやうな人聲も、動かない、靜かに風に傳はるのであつた。

フト耳を澄ましたが、直ぐに出家の言になつて、

「大分町の方が賑ひますな。」

「祭禮でもありますか。」

「これは停車場近くにいらつしやると承りましたに、つい御近所でございます。」

停車場の新築開き、如何にも一月ばかり以前から取沙汰した今日は當日。規模を大きく、建直した落成式、停車場に舞臺がかゝる、東京から俳優が來る、村のもの茶番がある、餅を撒く、昨夜も夜通し騒いで居て、今朝來がけの人通りも、とけて通るばかりであつたに、はたと忘れて居たらしい。

「まつたく其に聞惚れましたが、此方が里離れて閑靜な所爲か、些とも氣が附かないで居りました。實は餘り騒々しいので、そこを遁げて參つたのです。しかし降りさうになつて來ました。」

出家の額は仰向けに廂を潜つて、

「ねんばり一濕りでございませう。地雨にはなりますまい。何、又、雨具もござる。芝居を御見物の思召がなくば、まあ御緩りなすつて。

あの音もさ、面白可笑しく、此方も見物に參る氣でもござると、ぢつと落着いては居られない程、浮いたものでありますが、さて恁う、かけかまひなしに、遠ざかつて居りますと、世を一ッ隔てたやうに、寂しい、陰氣な、妙な心地がいたすではありませんか。」

「眞個ですね。」

「昔、井戸を掘ると、地の下に犬鷄の鳴く音、人聲、牛車の軌る音などが聞えたといふ話があります。それに似て居りますな。

峠から見る、霧の下だの、暗の浪打際、ぼうと灯が映る處だの、恁やうに山の腹を向うへ越した地の裏なとで、聞きますのは、をかしく人間業でないやうだ。夜中に聞いて、狸囃子と言ふのも至極でございます。

いや、それに、就きまして、お話の客人でありますが、」

と、茶を一口急いで飲み、さしおいて、

「さて今申した通り、夜分に此の石段を上つて行かれたのでありまして。

しかし此は情に激して、發奮んだ仕事ではなかつたのでございます。

恁うやつて、此の庵室に馴れました身には、石段はつい、通ひ廊下を縱に通るほどな心地でありますからで。客人は、堂へ行かれて、柱板敷へひら〳〵と大きくさす月の影、海の果には入日の雲が燒殘つて、ちら〳〵眞紅に、黄昏過の渾沌とした、水も山も唯一面の大池の中に、其の軒端洩る夕日の影と、消え殘る夕燒の雲の片と、紅蓮白蓮の咲亂れたやうな眺望をなさつたさうな。これで御法の船に同じい、御堂の縁を離れさへなさらなかつたら、海に溺れるやうなことも起らなんだでございませう。

爰に希代な事は——

堂の裏山の方で、頻に、其の、笛太鼓、囃子が聞えたと申す事——

唯今、それ、聞えますな。あれ、あれとは、まるで方角は違ひます。」

と出家は法衣でづいと立つて、廂から指を出して、御堂の山を左の方へぐいと指した。立ち方の唐突なのと、急なのと、目前を塞いだ墨染に、一天する墨を流すかと、袖は障子を包んだのである。

## 二十

一堂の前を左に切れると、空へ抜いた隧道のやうに、兩端から突出ました巖の間、樹立を潜つて、裏山へかゝるであります。

兩方谷、海の方は、山が切れて、眞中の路を汽車が通る。一方は一谷落ちて、それからそれへ、山又山、次第に峰が重なつて、段々雲霧が深くなります。處々、山の尾が樹の根のやうに集つて、朧々とした青田を抱へた處もあり、炭

燒小屋を包んだ處もございます。

其處で、此の山傳ひの路に、畑の上を高い堤防を行く形、時々、島や白帆の見晴しへ出ますばかり、あとは生繁つて眞暗で、今時は、然までにもありませぬが、草が繁りますと、分けずには通られません。

谷には鶯、峰には目白四十雀の囀つて居る處もあり、紺青の巖の根に、春は菫、秋は龍膽の咲く處、山清水がしと〳〵と湧く徑が藥研の底のやうで、兩側の篠竹を跨いで通るなど、もの〻小半道蹈分けて參りますと、其處までが一峰で。それから崖になつて、眺が遊び、海の色もかはるのでありますが、其巓の上に、たとへて申さば、此の御堂と背中合はせに、山の尾へ凭つかゝつて、彼是大佛ぐらゐな、石地藏が無手と胡坐してござります。それがさ、石地藏と申し傳へるばかり、餘程のあら彫で、まづ坊主形の自然石と云うても宜しい、妙に御顏の尖つた處が、拜むと凄うございましてな。

堂は形だけ殘つて居りますけれども、勿體ないほど大破いたして、密と參つても床なぞずぶ〳〵と蹈拔きますわ。屋根も柱も蜘蛛の巣のやうに狼藉として、これは又境内へ足の入場もなく、崖へかけて倒れてな、でも建物があつた跡で、見霽しの廣場になつて居りますから、これから山越をなさる方が、うつかり其處へござつて、唐突の山傳に膽を潰すと申します。

其處を山續きの留りにして、向うへ降りる路は、又此の石段のやうなものではありません。わづかの間も九十九折の坂道、嶮しい上に、憖か石を入れたあとのあるだけに、爪立つて飛々に這ひ下りなければなりませんが、此の坂の兩方に、五百體千體と申す數ではない。それはそれは數へ切れぬくらゐ、いづれも一尺、一尺五寸、御丈三尺といふのはない、小さな石佛がすく〳〵並んで、最も長い年月、路傍へ轉げたのも、倒れたのもあつたでありませうが、さすがに跨ぐものはないと見えます。もたれなりにも櫛の齒のやうに揃つてあります。

是について、何かいはれのございましたことか、一々女の名と、亥年、午年、幾歳、幾歳、年齢とが彫りつけてございましてな、何時の世にか、諸國の婦人たちが、擧つて、心願を籠めたものでございませう、處で、雨露に黑髪は霜と消え、袖褄も苔と變つて、影ばかり殘つたが、お顏の細く尖つた處、以前は女體であつたらうなどゝいふ、いや女體の地藏といふはありませんが、扨て然う聞くと、なほ氣味が惡いではございませんか。

えゝ、つかぬことを申したやうでありますが、客人の話について、些と考へました事がござる。客人は、それ、其の山路を行かれたので——此の觀音の御堂を離れて、——

「成程、其の何んとも知れない、石像の處へ、」

と胸を伏せて顏を見る。

「いや〳〵、其處まではありません。唯其の山路へ、堂の左の、巖間を拔けて出たものでございます。

トいふのが、手に取るやうに、囃の音が聞えたからで。

直き其の谷間の、村あたりで、騷いで居るやうに、トン〳〵と山腹へ響いたと申すのでありますから、一寸裏山へ廻りさへすれば、足許に瞰下ろされますやうな勘定であつたので。客人は、高い處から見物をなさる氣でござつた。

入口はまだ月のたよりがございます。樹の下を、草を分けて參りますと、處々窓のやうに山が切れて、其處から、松葉掻、枝拾ひ、じれんじよ穿が谷へさして通行する、下の村へ續いた路のある處が、彼方此方に幾干もございます。

それへ出ると、何處でも廣々と見えますので、最初左の濱庇。今度は右の茅の屋根と、二三軒

處、其切目へ出て、覗いたが、何處にも、祭禮らしい處はない。海は遠く、谷は煙つて。」

## 二十一

「けれども、其の囃子の音は、草一叢、樹立一畝出さへすれば、直き見えさうに聞えますので。二足が三足、五足が十足になつて段々深く入るほど――此處まで來たのに見ないで歸るも殘惜い氣もする上に、何んだか、舊へ歸るより、前へ出る方が路も明いかと思はれて、些と急足になると、路も大分上りになつて、ぐつと伸上るやうに、思ひ切つて眞暗な中を、草を拂つて、身を退いて高い處へ。ぼんやり薄明るく、地ならしがしてあつて、心持、墓地の繩張の中でゞもあるやうな、平な丘の上へ出ると、月は曇つて了つたか、それとも海へ落ちたかといふ、一方は今來た路で向うは暗、谷か、それとも濱邊かは、判然せぬが、底一面に靄がかゝつて、其の靄に、ぼうと遠方の火事のやうな色が映つて居て、篝でも焼いて居るかと、底澄んで赤く見える。其の邊に、太鼓が聞える、笛も吹く、ワアといふ人聲がする。

如何にも賑かさうだが、さて何處とも分らぬ。客人は、其の朦朧とした頂に立つて、境は接しても、美濃近江、人情も風俗も皆違ふ寢物語の里の祭禮を、此處で見るかと思はれた、と申します。

其上、宵宮にしては些と賑か過ぎる、大方本祭の夜？ それで人の出盛りが通り過ぎた、餘程夜更らしい景色に眺めて、しばらく茫然としてござつたさうな。

ト何んとなく、心寂しい。路も餘程歩行いたやうな氣がするので、うつとり草臥れて、最う歸らうかと思ふ時、其の火氣を包んだ靄が、恁う風にでも動くかと覺えて、谷底から上へ、裙あがりに次第に色が濃うなつて、向うの山かけて映る舞台が直き目の前で燃して居る景色――何處も靄に包まれながら――

其處で、何か見極めたい氣もして、其の平地を正面に行くと、まづ、それ、山の腹が覗かれましたわ。

これはしたり！ 祭禮は谷間の里からかけて、此處が其のとまりらしい。見た處で、薄くなつて段々に下へ灯影が濃くなつて次第に賑かになつて居ます。

矢張同一やうな平な上で、客人のござる丘と、向うの丘との中に箕の形になつた場所。爪尖も辷らず、靜に安々と下りられた。

處が、箕の窪み、一方はそれ祭禮に續く谷の路でございませう。其の谷の方に寄つた疊なら八疊ばかり、油が廣く染んだ體に、草がすつぺりと禿げました。」

といひかけて、出家は、瀨戸物の火鉢を、縁の方へ少しずらして、俯向いて手で疊を仕切つた。

「これだけな、赤地の出た上へ、何か恁うぼんやり蹲つたものがある。」

ト足を崩して兎角して膝に手を置いた。

思はず、外の方を見た散策子は、雲の棚曳端に近く迫るのを知つた。

「手を上げて招いたと言ひます――ゆつたりと――行くともなしに前へ出て、それでも間二三間隔つて立停まつて、見ると、其の蹲つたものは、顏も上げないで俯向いたまゝ、股引やうのものを穿いて居る、草色の太い胡坐かいた膝の脇に、差置いた、拍子木を取つて、カチ〳〵と鳴らしたさうで、其の音が何者か齒を嚙合にせるやうに響いたと言ひます。

然うすると、」

「はあ、はあ、」

「薄汚れた帆木綿めいた破穴だらけの幕が開いたて、」

「幕が、」

「然やう。向う山の腹へ引いてあつたが、矢張靄に見えて居たので、其ものゝ手に、綱が引いてあつたと見えます、蹲つたまゝで立ちもせんので。

窪んだ淺い横穴ぢや。大きかつたといひますよ。正面に幅一間ばかり。尤も、此の邊には一寸々々然ういふのを見懸けます。背戸に近い百姓居なぞには、漬物桶を置いたり、青物を活けて重寳がる。で、幕を開けたからには其れが舞臺で。」

二十二

「成程、然う思へば、舞臺の前に、木の葉がばらばらと散ばつた中へ交つて、投錢が飛んで居たらしく見えたさうでございます。

幕が開いた——と、まあ、言ふ體でありますが、扨唯淺い、扁い、窪みだけで。何んの飾つけも、道具だてもあるのではござらぬ。何か、身體もぞく〳〵して、餘り見て居たくもなかつたさうだが、自分を見懸けて、はじめたものを、他に誰一人居るではなし、今更歸るわけにもなりませんやうな羽目になつたとか言つて、懷中の紙入に手を懸けながら、茫乎見て居たと申します。

また、陰氣な、濕つぽい音で、コツ〳〵と拍子木を打違へる。

矢張其のものゝ手から、ずうと絲が繋がつて居たものらしい。舞臺の左右、山の腹へ斜にかかつた、一幅の白い靄が同じく幕でございました。むら〳〵と兩方から舞臺際へ引寄せられると、煙が渦くやうに疊まれたと言ひます。

不細工ながら、窓のやうに、箱のやうに、黑い横穴が小さく一ツづゝ、三十五十と一側並べに仕切つてあつて、其の中にづらりと婦人が並んで居ました。

坐つたのもあり、立つたのもあり、片膝立てたじだらくな姿もある。緋の長襦袢ばかりのもある。頬のあたりに血のたれて居るのもある。縛られて居るのもある、一目見たが、それだけで、遠くの方は、小さくなつて、幽になつて、唯顏ばかり谷間に白百合の咲いたやう。

慄然として、遁げもならない處へ、またコンコンと拍子木が鳴る。

すると貴下、谷の方へ續いた、其何番目かの仕切の中から、ふらりと外へ出て、一人、小さな婦人の姿が、音もなく歩行いて來て、やがて其の舞臺へ上つたでございますが、其處へ來ると、並の大きさの、しかも、すらりとした脊丈になつて、しよんぼりした肩の處へ、恁う、頤をつけて、熟と客人の方を見向いた、其の美しさ！

正しく玉脇の御新姐で。」

二十三

「寢衣にぐる〳〵と扱帶を卷いて、霜のやうな跣足、其まゝ向うむきに、舞臺の上へ、崩折れたやうに、ト膝を曲げる。

カンと木を入れます。

釘づけのやうになつて立竦んだ客人の背後から、背中を揩つて、づゝと出たものがある。

黑い影で。

見物が他にも居たかと思ふ、と然うではない。

其の影が、よろ〳〵と舞臺へ出て、御新姐と背中合はせにぴつたり坐つた處で、此方を向いたでございませう、顏を見ると自分です。」

「えゝ！」

「それが客人御自分なのでありました。

で、私へお話に。

(眞個なら、其處で死なゝければならんのでした。)

と言つて歎息して、眞蒼になりましたつけ。

何うするか、見て居たかつたさうです。勿論、肉は躍り、血は湧いてな。

しばらくすると、其の自分が、稍身體を捻ぢ向けて、惚々と御新姐の後姿を見入つたとうで、指の尖で、薄色の寢衣の上へ、恁う山形に引いて、下へ一ツ、△を書いたでございますな三角を。

見て居る胸は、ヒヤ／＼として冷汗がびつしよりになる。

御新姐は唯首垂れて居るばかり。

今度は四角、□、を書きました。

其の男、即、客人御自分か。

御新姐の膝にかけた指の尖が、わな／＼と震へました……とな。

三度目に、○、圓いものを書いて、線の端がまとまる時、颯と地を拂つて空へ抉るやうな風が吹くと、谷底の灯の影がすつきり冴えて、鮮かな薄紅梅。濱か、海の色か、と見る耳許へ、ちやら／＼と鳴つたのは、投錢と木の葉の摺れ合ふ音で、くる／＼と廻つた。

氣がつくと、四五人、山のやうに背後から押被さつて、何時の間にか他の見物が出來たて。

彼時、御新姐の顏の色は、こぼれかゝつた艷かなおくれ毛を透いて、一入寂しくなつたと思ふと、あの其の口許で莞爾として、うしろざまにたよ／＼と、男の足に背をもたせて、膝を枕にすると、黑髮か、ずる／＼と仰向いて、眞白な胸があらはれた。其の重みで男も倒れた、舞臺がぐん／＼ずり下つて、はツと思ふと舊の土。

峰から谷底へかけて哄と聲がする。そこから夢中で驅け戻つて、蚊帳に寢た私に縋りついて、

（水を下さい。）

と言うて起された、が、身體中疵だらけで、夜露にずぶ濡であります。

それから曉かけて、一切の懺悔話。

翌日は一日寢てござつた。午すぎに女中が二人ついて、此の御堂へ參詣なさつた御新姐の姿を見て、私は慌てゝ、客人に知らさぬやう、暑いのに、貴下、此の障子を閉切つたでございますよ。

以來、あの柱に、うたゝ寐の歌がありますので。

客人はあと二三日、石の唐櫃に籠つたやうに、我と我を、手足も縛るばかり、謹んで引籠つてござつたし、私も亦油斷なく見張つて居たでございますが、貴下、聊か目を離しました僅の隙に、何處か姿が見えなくなつて、木樵が來て、點燈頃、

（私、今、來がけに、彼處さ、蛇の矢倉で見かけたよ。）

と知らせました。

客人は又其晩のやうな芝居が見たくなつたのでございませう。

死骸は海で見つかりました。

蛇の矢倉と言ふのは、此の裏山の二ツ目の裾に、水のたまつた、むかしからある横穴で、わツといふと、おう――と底知れず奧の方へ十里も廣がつて響きます。水は海まで續いて居ると申傳へるでありますが、如何なものでございますかな。

雨が二階家の方からかゝつて來た。音ばかりして草も濡らさず、裾があつて、路を通ふやうである。美人の靈が誘はれたらう。雲の黑髮、桃色衣、菜種の上を蝶を連れて、庭に來て、陽炎と並んで立つて、しめやかに窓を覗いた。

# 春晝後刻

## 二十四

此雨は間もなく霽れて、庭も山も青き天鵞絨に蝶花の刺繡ある霞を落した。何んの餘波やら、庵にも、座にも、袖にも、菜種の薰が染みたのである。

出家は、さて日が出口から、裏山の其の蛇の矢倉を案内しよう、と老實やかに勸めたけれども、此の際、觀音の御堂の背後へ通り越す心持はしなかつたので、挨拶も後日を期して、散策子は、やがて庵を辭した。

差當り、出家の物語について、何んの思慮もなく、批評も出來ず、感想も陳べられなかつたので、言はれた事、話されただけを、不殘鵜呑みにして、天窓から詰込んで、胸が膨れるまでになつたから、獨り靜に步行きながら、消化して胃の腑に落ちつけようと思つたから。

對手も出家だから仔細はあるまい、（然やうなら）が些と唐突であつたかも知れぬ。

處で、石段を背後にして、行手へ續く二階を置いて、吻と息をすると……、

一轉寐に……

と先づ口の裏で云つて見て、小首を傾けた。

杖が邪魔なので腕の處へ搖り上げて、引包んだ其の袖ともに腕組をした。菜種の花道、幕の外の引込みには引立たない野郞姿。雨上りで照々と日が射すのに、薄く一面にねんばりした足許、辷つて轉ばねば可い。

「戀しき人を見てしより……夢てふものは、」

と一寸顏を上げて見ると、左の崕から椎の樹が横に出て居る——遠くから視めると、これが石段の根を仕切る綠なので、——庵室は最う右手の背後になつた。

見たばかりで、すぐに又、

「夢と言へば、これ、自分も何んだか夢を見て居るやうだ。やがて目が覺めて、あゝ、轉寐だつたと思へば夢だが、此のまゝ、覺めなければ夢ではなからう。何時か聞いた事がある、狂人と眞人間は、唯時間の長短だけのもので、風が立つと時々波が荒れるやうに、誰でも一寸々々は狂氣だけれど、直ぐ、風ぎになつて、のたりのたりかなで濟む。もしそれが靜まらないと、浮世の波に乘つかつてる我々、ふら〳〵と櫓が搖れる、木靜まらむと欲すれども風やまずと來た日にや、船に醉ふ、其の浮世の波に浮んだ船に醉ふのが、立處に狂人なんだと。

危險々々。

卜來た日にや夢も又同一だらう。目が覺めるから、夢だけれど、いつまでも覺めなけりや、夢ぢやあるまい。

夢になら戀人に逢へると極れば、こりや一層夢にして了つて、世間で、誰某は？と尋ねた時、はい、とか何んとか言つて、蝶々二つで、ひら〳〵なんぞは悟つたものだ。

庵室の客人なんざ、今聞いたやうだと、夢てふものを賴み切りにしたのかな。」

と考へが道草の蝶に誘はれて、ふは〳〵と玉の緖が菜の花ぞひに伸びた處を、風もないのに、颯とばかり、横合から雪の腕、緋の襟で、つと爪尖を反らして足を踏伸ばした姿が、眞黑な馬に乘つて、蒼空を飜然と飛び、帽子の廂を掠めるばかり、大波を乘つて、一跨ぎに紅の虹を躍り越えたものがある。

はたと、これに空想の前途を遮られて、驚いて

心付くと、赤楝蛇のあとを過ぎて、機を織る婦人の小家も通り越して居たのであつた。

音はと思ふに、きりはたりする聲は聞えず、山越えた停車場の笛太鼓、大きな時計のセコンドの如く、胸に響いてトヽンと鳴る。

筒向ひの垣根の際に、此方を待ち受けたものらしい、鍬を杖いて立つて、莞爾ついて、のつそりと親仁あり。

「はあ、もし今歸らせえますかね。」

「や、先刻は。」

## 二十五

其の莞爾々々の顔のまゝ、鍬を離した手を揉んで、

「何んともハイ御しんせつに言はつせえて下せえやして、お庇様で、私、ええ手柄して禮を聞いたでござりやすよ。」

「別に迷惑にもならなかつたかい。」

と悠々として云つた時、少なからず風采が立上つて見えた。勿論、對手は件の親仁だけれど。

「迷惑處ではござりましねえ、かされ〳〵禮を言はれて、私大く難有がられました。」

「ぢや、むだにならなかつたかい、お前さんが始末をしたんだね。」

「竹ン尖で壓へつけてハイ、山の根つこさ藪の中へ棄てたでごぜえます。女中たちが殺すなと言ふけえ。」

「その方が心持が可い、命を取つたんだと、そんなにせずともの事を、私が訴人したんだから、怨みがあれば、此方へ取付くかも分らずさ。」

「はゝはゝ、旦那様の前だが、矢張お好きではねえでがすな。奥に居た女中は、蛇がと聞いただけでアレソレ打騷いで戸障子へ當つただよ。

私先づ庭口から入つて、其處さ縁側で案内して、それから臺所口に行つて彼方此方探索のした處、何が、お前様御勘考さ違はねえ、湯殿の西の隅に、べいら〳〵舌さあ吐いとるだ。

思つたより大うがした。

畜生め。われと行水するだら蛙飛込む古池と云ふへ行けさ。化粧部屋覗きをつて白粉つけてどうしるだい。白鷺にでも押惚れたかと、ぐいとなやして動かさねえ。どうしべいな、長アくして思案のして居りや、遠くから足の尖を爪立つて、お殺しでない、打棄つておくれ、御新姐は病氣のせゐで物事氣にしてなんねえから、と女中たちが口を揃へて云ふもんだでね、藝もねえ、殺生するにや當らねえでがすから、藪疊へ潜らして退けました。

御新姐は、氣分が勝れねえとつて、二階に寢てござらしけえ。

今しがた小雨が降つて、お天氣が上ると、お前様、雨よりは大きい紅色の露がぼつたり〳〵する、あの桃の木の下の許さ、背戸口から御新姐が、紫色の蝙蝠傘さして出てござつて、爺やさん、今ほどは難有う。其の厭なものゝ居た事を、通りがかりに知らして下すつたお方は、巖殿の方へおいでなすつたと云ふが、未だお歸りになつた様子はないかい。)ッて聞かしつた。

(どうだかね、私、内方へ參つたは些との間だし、雨に駈出しても來さつしやらねえもんだで、未だ歸らつしやらねえでごぜえませう。

それとも身輕でハイずん〳〵行かつせえたもんだで、山越しに名越の方さ出さつしやつたかも知れましねえ、)言うたらばの。

(お見上げ申したら、よくお禮を申して下さいよ。)ッてよ。

其の溝さ飛越して、其路を、」

垣の外の此方と同一通筋。

「ハイぶらり〳〵、谷戸の方へ、行かしつけえ。」

と言ひかけて身體ごと、此の巖殿から橿原へ出口の方へ振向いた。身の擧動が仰山で、然も用ありげな素振だつたので散策子もおなじく其方を。……歸途の我には恰も前途に當る。

「それ見えるでがさ。の、彼處さ土手の上にござらつしやる。」

錦の帶を解いた樣な、媚めかしい草の上、雨のあとの薄霞、山の裾に靉靆く中に一張の紫大きさ月輪の如く、はた菫の花束に似たるあり。紫羅傘と書いていちはちの花、字の通りだと、それ美人の持物。

散策子は一目見て、早く既に其の霞の端の、ひた／＼と來て膚に絡ふのを覺えた。

彼處と此方と、言ひ知らぬ、春の景色の繋がる中へ、蕈のやうな親仁の手、無骨な指で指して、

「彼處さ、それ、傘の陰に憩んでござる。はゝは、誰を聞かつせえ、待つてるだに。」

## 二十六

樣に落した紫の傘には、あの紫苑に來る、黄金色の昆蟲の翼の如き、燦々した日の光が射込んで、草に輝くばかりに見える。

其の蔭から、しなやかな裳が、土手の翠を左右へ殘して、線もなしに、よろけ縞のお召縮緬で、嫋態よく仕切つたが、油のやうにとろりとした、雨のあとの路との間、あるかなしに、細い褄先が柔かくしつとりと、内端に掻込んだ足袋で留まつて、其處から襦袢の友染が、豐かに膝まで捌かれた。雪駄は一ッ土に脱いで、片足はしなやかに、草に曲げて居るのである。

前を通らうとして、我にもあらず立淀んだ。散策子は、下衆儕と賭物して、鬼が出る宇治橋の夕暮を、唯一騎、東へ打たする思がした。

低く近づいた跫音は、件の紫の傘を小楯に、土手へかけて悠然と踞に投げた、艷にして凄い緋の袴に、小波寄する微な響さへ與へなかつたにもかゝはらず、此方は一ッ胴震ひをして、立直つて、我知らず肩を聳やかすと、杖をぐいと振つて、九字を切りかけて、匆々と通つた。

路は、あはれ、鬼の脱いだ其の沓を跨がねばならぬほど狹いので、心から、一方は海の方へ、一方は橿原の山里へ、一方は來し方の巖殿になる、久能谷の此の出口は、恰も、ものゝ撞木の形。前は一面の麥畠。

正面に、青麥に對した時、散策子の面は恰も醉へるが如きものであつた。

南無三寶聲がかゝつた。それ、言はぬことではない。

「……」

一散に遁げもならず、立停まつた渠は、馬の尾に油を塗つて置いて、鷲摑みの掌を辷り拔けなんだを口惜く思つたらう。

「私、」

と振返つて、

「ですかい、」と言ひつゝ一目見たのは、頭禿に齒豁なるものではなく、日の光射す紫のかげを籠めた俤は、几帳に宿る月の影、雲の鬢、簪の星、丹花の唇、芙蓉の眦、柳の腰を草に縋つて、鼓草の花に浮べる状、虛空にかゝつた裝である。

白魚のやうな指が、一寸、紫紺の半襟を引き合はせると、美しい瞳が動いて、

「失禮を……」

と唯莞爾する。

「はあ、」と言つた切、腰のまはり、遁路を見て置くのである。

「貴下お呼び留め申しまして、」

とふつくりとした胸を上げると、やゝ俯れかかつて土手に寢るやうにして居た姿を前へ。

「はあ、何、」

眞正直な顏をして、

「私ですか、」と空とぼける。

「貴下のやうなお姿だ、と聞きましてございます、先刻は、眞に御心配下さいまして、」

徐ら、雪のやうな白足袋で、脱ぎ棄てた雪駄を引寄せた時、女樂は一層はら／＼と、模樣の花が傍に立つて、ぱッと留南奇の薫がする。

美女は立直つて、

「お蔭樣で災難を、」

と襟首を見せてつむりを下げた。

其時獨武者、杖をわきはさみ、兜を脱いで、

「えゝ、何んですかな、」と曖昧。

美女は親しげに笑ひかけて、

「ほゝ、私は最う災難と申します、災難ですわ、貴下。彼が座敷へでも入りますか、知らないで居て御覽なさいまし、當分家を明渡して、何處かへ参らなければなりませんの。眞個に然うなりましたら、どうしませう。お蔭樣で助りましてございますよ。難有う存じます。」

「それにしても、私と極めたのは、」

と思ふことが思はず口へ出た。

是は些と調子はづれだつたので、聞き返すやうに、

「えゝ、」

## 二十七

「先刻の、あの青大將の事なんでせう。それにしても、よく私だと云ふのが分りましたね、驚きました。」

と眞顔の逃構で、駒の頭を立直すと、なほ打笑み、

「そりや知れますわ。こんな田舍ですもの。而して御覽の通り、人通りのない處ぢやありませんか。

貴下のやうな方の出入は、今朝ッからお一人しかありませんもの。丁と存じて居りますよ。」

「では、あの爺さんにお聞きなすつて、」

「否、私ども石垣の前を通りがかりの時、二階から拝みました……」

「ぢやあ、私が青大將を見た時に、」

「貴下のお姿が楯におなり下さいましたから、其時も、厭なものを見ないで濟みました。」

と少し打傾いて懐しさう。

「ですが、貴女、」とうつかりいふ、

「はい？」

と促すやうに言ひかけられて、ハタと行詰つたらしく、杖をコツ／＼と瞬一ツ、唇を引締めた。

追つかけて、

「何んでございますか、聞かして頂戴。」

と婉然とする。

慌て氣味に狼狽つきながら、

「貴女は、貴女は氣分が惡くつて寢ていらつしやるんだ、と云ふぢやありませんか。」

「あら、こんなに甲羅を干して居りますものを。」

「へい、」と、綱は目を睜つて、あゝ、我ながらまづいことを言つた顔色。

美女は其の顏を差覗く風情して、瞳を斜に衝と流しながら、華奢な掌を輕く頰に當てると、紅がひらりと搦む。

腕の雪を拂ふ音、さら／＼と衣摺れして、

「眞個は、寢て居ましたの……」

「何んですツて、」

と苦笑。

「でも其時は寢て居やしませんの。貴下起きて居たんですよ。あら、」

と稍調子高に、

「何を言つてるんだか分らないわねえ。」

馴々しく云ふと、急に胸を反らして、すッきりとした耳許を見せながら、顏を反向けて俯向いたが、其まゝ身體の平均を保つやうに、片足

をうしろへ引いて、立直つて、
「否、寝て居たんぢやなかつたんですけども、貴下のお姿を拝みますと、急に心持が悪くなつて、それから寝たんです。」
「これは酷い、酷いよ、貴女は。」
棄て身に衝と寄り進んで、
「ぢや青大将の方が増だつたんだ。だのに、態々呼留めて、災難を免れたとまで事を誇大にして、嘸なんぞおつしやつて、元来、私は余計な世話だと思つて、御婦人ばかりの御住居だと聞いたにつけても、愈々極が悪くつて、此処だつて、貴女、こそ〳〵遁げて通らうとしたんぢやありませんか。それを大袈裟に礼を言つて、極を悪がらせた上に、姿とは何事です。幽霊ぢやあるまいし、心持を悪くする姿と云ふがありますか。図體とか、状とか云ふものですよ。其の私の図體を見て、心持が悪くなつたは些と烈しい。それがために寝たは、残酷ぢやありませんか。
要らんおせつかいを申上げたのが、見苦しかつたら然うおつしやい。此お関所をあやまつて通して頂く――勧進帳でも読みませうか。それでいけなけりや仕方がない、元の[illegible]へ引返して、山越で出奔する分の事です。」

と逆寄せの決心で、然う言つたのをキッカケに、どかと土手の草へ腰をかけたつもりの処、負けまい気の、魔ものゝ顔を見詰めて居たので、横ざまに落しつける筈の腰が据らず、床几を辷つて、づるりと大地へ。
「あら、お危い。」
と云ふが早いか、眩いばかり目の前へ、霞を抜けた極彩色。さそくに友染の褄を乱して、繕ひもなくはらりと折敷き、片手が踏み抜いた下駄一ッ前壺を押して寄越すと、扶け起すつもりであらう、片手が薄色の手巾ごと、ひらめいて芬と薫つて、優しく男の背にかゝつた。

## 二十八

南無観世音大菩薩……助けさせたまへと、散策子は心の裏、陣備も身構もこれにて粉になる。
「お足袋が泥だらけになりました、直き其処でござんすから、一寸おいすがせ申しませう。お脱ぎ遊ばせな。」
と指をかけようとする爪尖を、慌しく引込ませるを拍子に、腰を引いて、今度は大丈夫に、背中を土手へ凭るばかり、ばたりと腰を懸ける。暖い草が、ちりげもとで赫とほてつて、汗びつしより、まつかな顔をして且つ目をきよろつかせながら、
「構はんです、構はんです、こんな足袋なんぞ。」
ヤレ又落語の前座が言ひさうなことを、とヒヤリとして、漸と瞳を定めて見ると、美女は跳飛んだ杖を拾つて、しなやかに両手でついて、悠々と立つて居る。
羽織なしの引かけ帯、ゆるやかな袷の着こなしか、いまの身じろぎで、片前下りに友染の紅匂ひこぼれて、水色縮緬の扱帯の端、やゝずり下つた風情さへ、杖には似合はないだけ、恰も人質に取られた形――可哀や、お主の身がはりに、恋の重荷でへし折れよう。
「眞個に済みませんでした。」
又候先を越して、
「私、どうしたら可いでせう。」
と思ひ案ずる目を半ば閉ぢて、屈託らしく、盲目が歎息をするやうに、ものあはれな装して、
「うつかり飛んだ事を申上げて、私、そんなつもりで言つたんぢやありませんわ。貴下のお姿を見て、それから心持が悪くなりましたつて、言通りの事が、もし眞個なら、

どうして口へ出して言へますもんですか。貴下のお姿を見て、それから心持が悪く……」

再び口の裏で繰返して見て、

「おほゝ、まあ、大概お察し遊ばして下さいましたね。」

と欒にとし寄つて、袖を土手へ敷いて凭れるやうにして並べた。春の草は、其肩のあたりを翠に仕切つて、二人の裾は、足許なる麥畠に臨んだのである。

「然う云ふつもりで申上げたんでござんせんことは、よく分つてますぢやありませんか。」

「はい、」

「ね、貴下、」

「はい、」

と無意味に合點して頷くと、未だ心が濟まぬらしく、

「言とがめをなすつてさ、眞個にお人が悪いよ。」

と巽に搦む。

聊か辯ぜざるべからず、と横に見向いて、

「人の悪いのは貴女でせう。私は何も言とがめなんぞした覺えはない。心持が悪いとおつしやるからおつしやる通りに伺ひました。」

「そして、腹をお立てなすつたんですもの。」

「否。恐縮をしたまでです。」

「其處は貴下、お察し遊ばして下さる處ぢやありませんか。」

言の綾もございますわ。朝顔の葉を御覽なさいまし、表はあんなに薄つぺらたもんですが、裏はふつくりして居りますもの……裏を聞いて下さいよ。」

「裏だと……お待ちなさいよ。」

えゝ、といきつぎに目を瞑つて、仰向いて一呼吸ついて、

「心持が悪くなつた反對なんだから、私の姿を見ると、それから心持が善くなつた――事になる――可い加減になさい、馬鹿になすつて、」

と極めつける。但し笑ひながら。

清い目で屹と見て、

「むづかしいのね？　どう言へば恁うおつしやつて、貴下、弱いものをおいぢめ遊ばすもんぢやないわ。私は煩つて居るんぢやありませんか。」

草に手をついて膝をずらし、

「お聞きなさいましよ、まあ、」

と恍惚したやうに笑を含む口許は、鐵漿をつけて居はしまいかと思はれるほど、婀娜めいたものであつた。

「まあ、私に、戀しい懷しい方があるとしませうね。可うござんすか……」

## 二十九

「戀しい懷しい方があつて、そしてどうしても逢へないで、夜も寐られないほどに思ひ詰めて、心も亂れゝば氣も狂ひさうになつて居りますものが、せめて肖たお方でもと思ふのに、此頃は恁うやつて此處等には東京からおいでなすつたらしいのも見えませんし處へ、何年ぶりか、幾月處か、フト然うらしい、肖た姿をお見受け申したとしましたら、貴下、」

と手許に丈のびた影のある、土筆の根を摘み試み、

「爾時は……、而して何んですか、切なくつて、あとで臥つたと申しますのに、爾時は、どんな心持でと言つて可いのでございませうね。

矢張、あの、厭な心持になつて、と云ふほかはないではありませんか。それを申したんでございますよ。」

一言もなく……しばらくして、

「ぢや、然う云ふ方がおあんなさるんですね、」

と僅に一方へ切抜けようとした。

「御存じの癖に。」

と、伏兵大いに起る。

「えゝ、」

「御存じの癖に。」

「今お目にかゝつたばかり、お名も何も存じませんのに、どうしてそんな事が分ります。」

うたゝ寐に戀しき人を見てしより、其の、みを、と云ふ名も知らぬではなかつたけれども、夢のいはれも聞きたさに。

「それでも、私が氣疾をして居ります事を御存じのやうでしたわ、先刻、」

「それは、何、あの畑打ちの爺さんが、蛇をつかまへに行つた時に、貴女はお二階に、と言つて、一寸御様子を漏らしただけです。それも唯、御氣分が惡いとだけ。

私の形を見て、お心持が惡くなつたなんぞつて事は、些とも話しませんから、知らう道理はないのです。但、譬をおつしやるかも知れないと云ふ、貴女は聞いたと思ひましたけれども、此處を通らないでは歸られませんもんですから、恁うと分つたら穴へでも入るんだつけ。お目にかゝるつもりでなかつたんです。しかし私が知らないで、二階から御覧なすつただけは、そりや仕方がない。」

「まだ、あんな事をおつしやるよ。然うお疑ひなさるんなら申しませう。貴下、此のまあ麗かな、樹も、草も、血があれば湧くんでせう。朱の色した日の光にほか〳〵と、土も人膚のやうに暖うござんす。竹があつても暗くなく、花に陰もありません。燃えるやうにちら〳〵咲いて、水へ散つても朱塗の杯になつてゆる〳〵流れませう。海も眞蒼な酒のやうで、空は、」

と白い掌を、膝に仰向けて打仰ぎ、

「緑の油のやう。とろ〳〵と、曇もないのに淀んで居て、夢を見ないかと勸めるやうですわ。山の形も柔かな天鵞絨の、ふつくりした括枕に似て居ます。其方此方陽炎や、絲遊がたきしめた濃いたきものゝやうに靡くでせう。雲雀は鳴かうとして居るんでせう。鶯が、遠くの方で、低い處で、此方にも里がある、樂しいよ、と鳴いて居ます。何不足のない、申分のない、目を瞑れば直ぐにうと〳〵と夢を見ますやうな、此の春の日中なんでございますがね、貴下、これをどうお思ひなさいますえ。」

「どうと言つて、」

と言に連れられた春の其の日中から、瞳を美女の姿にかへした。

「貴下は、どんなお心持がなさいますえ、」

「……。」

「お樂みですか。」

「はあ、」

「お嬉しうございますか。」

「はあ、」

「お賑かでございますか。」

「貴女は？」

「私は心持が惡いんでございます、丁ど貴下のお姿を拜みました時のやうに、」

と言ひかけて吻と小さなといき、人質の彼の杖を、斜に兩手で膝へ取つた。情の海に棹す美女。思はず腕組をして熟と見る。

## 三十

「此の春の日の日中の心持を申しますのは、夢をお話するやうで、何んとも口へ出しては言へませんのね。何うでせう、此のしんとして寂しいことは。矢張、夢に賑かな處を見るやうではございませんか。……幾歳かの時に、乳母の背中から見ました、祭禮の時のやうにも思はれます。

何爲か、秋の暮より今、此の方が心細いんですもの。それで居て汗が出ます、汗ぢやなくつて、恁う、あの、暖かさで、心を絞り出されるやうですわ。苦しくもなく、切なくもなく、血

を絞られるやうですわ。柔かな木の葉の尖で、骨を拔かれますやうではございませんか。こんな時には、肌が蕩けるのだつて言ひますが、私は何んだか、水になつて、其の溶けるのが消えて行きさうで涙が出ます、涙だつて、悲しいんぢやありません、然うかと言つて嬉しいんでもありません。

あの貴下、叱られて出る涙と慰められて出る涙とござんすのね。此の春の日に出ますのは、其の慰められて泣くんです。矢張悲しいんでせうかねえ。おなじ寂しさでも、秋の暮のは自然が寂しいので、春の日の寂しいのは、人が寂しいのではありませんか。

あゝ遣つて、田圃にちらほら見えます人も、秋のだと、しつかりして、てん〴〵が景色の寂しさに負けないやうに、張合を持つて居るんでせう。見た處でも、しよんぼりした脚にも氣が入つて居るやうですけれど、今しがたは、すつかり魂を拔き取られて、ふは〳〵浮き上つて、あのまゝ、鳥か、蝶々にでもなりさうですね。心細いやうですね。

暖い、優しい、柔かな、すなほな風にさそはれて、菫草の花が、ふつと、綿になつて消えるやうに魂がなりさうなんですもの。極樂と云ふものが、アノ確に目に見えて、而して死んで行くと同一心持なんでせう。

樂しいと知りつゝも、情ない、心細い、頼りのない、悲しい事なんぢやありませんか。

而して涙が出ますのは、悲しくつて泣くんでせうか、甘えて泣くんでせうかねえ。

私はずた〳〵に切られるやうで、胸を掻きむしられるやうで、そしてそれが痛くも痒くもなく、日當りへ桃の花が、はら〳〵とこぼれるやうで、長閑で、麗で、美しくつて、其で居て寂しくつて、雲のない空が頼りのないやうで、緑の野が砂原のやうで、前生の事のやうで、目の前の事のやうで、心の内が言ひたくツて、言はれなくツて、焦ツたくツて、口惜くツて、いら〳〵して、じり〳〵して、其くせぼツとして、うつとり地の底へ引込まれると申しますより、空へ抱き上げられる鹽梅の、何んとも言へない心持がして、それで寢ましたんですが、貴下、」

小雨が晴れて日の照るやう、忽ち麗なおももちして、

「恁う申しても矢張お氣に障りますか。貴下のお姿を見て、心持が惡くなつたと言ひましたのを、未だ許しちや下さいませんか、おや、貴下何うなさいましたの。」

身動ぎもせず聞き澄んだ散策子の茫然とした目の前へ、紅白粉の烈しい流が眩い日の光で渦いて、くる〳〵と廻つて居た。

「何んだか、私も變な心持になりました、ああ。」

と掌で目を掩つて、

「で、其處でお休みになつて、」

「はあ、」

「夢でも御覽になりましたか。」

思はず口へ出したが、言ひ直した、餘り唐突と心付いて、

「然う云ふお心持でうたゝ寐でもしましたら、どんな夢を見るでせうな。」

「矢張、貴下のお姿を見ますわ。」

「えゝ、」

「此處に恁うやつて居りますやうな。ほゝほほ。」

と言ひ知らずあでやかなものである。

「いや、串戲はよして、其の貴女、戀しい、慕はしい、而してどうしても、最う逢へない、とお言ひなすつた、其の方の事を御覽なさるでせうね。」

「其の貴下に肖た、」

「否さ、」

此處で顏を見合はせて、二人とも拗つて居た草を同時に棄てた。

「成程。寂としたもんですね、どうでせう、此の閑さは……」

　頂の松の中では、頻に目白が囀るのである。

## 三十一

「又此の樫原と云ふんですか、山の裾がすくすく出張つて、大きな怪物の土地の神が海の方へ向つて、天地に開いた口の、奧齒へ苗代田麥畠などを、引銜へた形に見えます。谷戸の方は、恁う見た處、何んの影もなく、春の日が行渡つて、些と曇があればそれが霞のやうな、長閑な景色で居ながら、何んだか厭な心持の處ですね。」

　美女は身を震はして、何故か嬉しさうに、

「あゝ、貴下も其の(厭な心持)をおつしやいましたよ。ぢや、もう私も其のお話をいたしましても差支へございませんのね。」

「可うございます。はゝはゝ。」

　ト一寸更まつた容子をして、うしろ見られる趣で、其二階家の前から路が一畝り、矮い藁屋の、屋根にも葉にも一面の、椿の花の紅の中へ入つて、菜畠へ纔に顯れ、苗代田で又絕えて、遙かに山の裾の翠に添うて、濁つた灰汁の色をなして、ゆつたりと向うへ通じて、左右から突出た山でとまる。樫原の奧深く、蒸し上るやうに低く霞の立つあたり、背中合せが停車場で、其の腹へ笛太鼓の、異樣に響く音を籠めた。其處へ、遙かに瞳を通はせ、しばらく茫然とした風情であつた。

「然うですねえ、はじめは、まあ、心持、彼の邊からだらうと思ふんですわ、聲が聞えて來ましたのは。」

「何んの聲です？」

「はあ、私が臥りまして、枕に髮をこすりつけて、悶えて、あせつて、焦れて、つく〴〵口惜くつて、情なくつて、身がしびれるやうな、骨が溶けるやうな、心持で居た時でした。先刻の、あの雨の音、さあつと他愛なく軒へかゝつて通りましたのが、丁ど彼處あたりから降り出して來たやうに、寢て居て思はれたのでございます。

　あの停車場の囃子の音に、何時か氣を取られて居て、それだからでせう。今でも停車場の人ごみの上へだけは、細い雨がかゝつて居るやうに思はれますもの。未だ何處にか雨氣が殘つて居りますなら、向うの霞の中でせうと思ひますよ。

　と、其細い、幽な、空を通るかと思ふ雨の中に、圖太い、底力のある、そして、さびのついた鹽辛聲を、腹の底から押出して、

(えゝ、えゝ、えゝ、伺ひます。お話はお馴染の東京世渡草、商人の假聲物眞似。先づ神田邊の事でございまして、えゝ、大家の店前にござります。夜のしら〳〵明けに、小僧さんが門口を掃いて居りまする と、納豆、納豆――)

と申して、情ない調子になつて、

(えゝ、お御酒を頂きまして聲が續きません、助けて遣つておくんなさい。)

と厭な聲が、流れ星のやうに、尾を曳いて響くんでございますの。

　私は何んですか、悚然として寢床に足を縮めました。しばらくして、又其の(えゝ、えゝ)と云ふ變な聲が聞えるんです。今度は些と近くなつて。

　それから段々あの樫原の家を向ひ合ひに、飛び飛びに、千鳥にかけて一軒一軒、何處でもおなじことを同一ところまで言つて、お錢をねだりますんでございますがね、暖い、ねんばりした雨も、其の門附の足と一緒に、向うへ寄つ

たり、此方へよつたり、ゆる〳〵歩行いて來ますやうです。

其の納豆納豆――と云ふのだの、東京と云ふのですの、店前だの、小僧が門口を掃いて居る處だと申しますのが、何んだか懷しい、兩親の事や、生れました處なんぞ、昔が思ひ出されまして、身體を煮られるやうな心持がして我慢が出來ないで、搔卷の襟へ食ひついて、しつかり胸を抱いて、そして恍惚となつて居りますと、やがて、些と強く雨が來て當ります時、内の門へ參つたのでございます。

(えゝ、えゝ、えゝ、)

と言ひ出すぢやございませんか。

(お話はお馴染の東京世渡草、商人の假聲物眞似。先づ神田邊の事でございまして、えゝ、大家の店さきでございます。夜のしら〳〵あけに、小僧さんが門口を掃いて居りますと、納豆納豆――)

とだけ申して、

(えゝ、お御酒を頂きまして聲が續きません、助けて遣つておくんなさい。)

と一分一厘おなじことを、おなじ調子で云ふんですもの。私の門へ來ましたまでに、遠くから丁ど十三度聞いたのでございます。」

## 三十二

「女中が直ぐに出なかつたんです。

(ねえ、助けておくんなさいた、お御酒を頂いたもんだからね、聲が續かねえんで、えへ、えへ、)

厭な咳なんぞして、

(遣つておくんなさいよ、飲み過ぎて切ねえんで、助けておくんなさい、お願えだ。)

と言つて獨言のやうに、貴下、

(遣り切ねえや、)ツて、いけ太々しい容子つたらないんですもの。其處らへ、ペッペッ唾をしつかけて居さうですわ。

小錢の音をちやら〳〵とさして、女中が出さうにしましたから、

(光かい、光や、)

と呼んで、二階の上り口へ來ましたのを、押留めるやうに、床の中から、

(何んだね、)

と自分でも些と尖々しく言つたんです。

(門附でございます。)

(藝人かい！)

(はい、)

ツて吃驚して居ました。

(不可いよ、遣つちや不可ない。藝人なら藝人らしく藝をして錢をお取り、と然うお言ひ。出來ないなら出來ないと言つて乞食をおし。なぜ又自分の藝が出來ない、ほど酒を呑んだ、と言つてお遣り。いけ酒亞々々失禮ぢやないか。)

とむら〳〵として、どうしたんですか、じりじり胸が煮え返るやうで極めつけますと、鷄と發音を忍んで、光やは、二階を下りましたつけ。

お恥しうございますわ。

甲高かつたさうで、よく下まで聞えたと見えます。表二階に居たんですから。

(何んだつて、)

と門口で喚つてかゝるやうな聲がしました。枕をおさへて起上りますと、女中の聲で、御病氣なんだからと、こそ〳〵云ふが聞えました。

嘲るやうに、

(病人なら病人らしく死ん了へ。治るもんなら治つたら可からう。何んだつて愚圖ついて、煩つて居るんだ。)

と諸顔なのが白い歯を剝き出して云ふやうです。はあ、そんな心持がしましたつ。

(おゝ、死んで見せようか、死ぬのが何も、と

つゝと立つと、ふら／＼して床を放れて倒れました。段へ、裾を投げ出して、欄干につかまつた時、雨がさつと暗くなつて、私はひとりで泣いたんです。其れッ切、聲も聞えなくなつて、門附は何處へ參りましたか。雨も上つて、又明い日が當りました。何んですかねえ、十文字に小兒を引背負つて跣足で歩行いて居る、四十恰好の、頑丈な、繪に描いた、赤鬼と言つた形のものゝやうに、今恁うやつてお話をします内も考へられます。女中に聞いたのでもございませんのに——

　又最う寢床へ倒れッ切になりませうかとも存じましたけれども、然うしたら氣でも違ひさうですから、ぶら／＼日向へ出て來たんでございます。

　否、はじめてお目にかゝりました貴下に、こんなお話を申上げまして、最う氣が違つて居りますのかも分りませんが、」

　と言ひかけて、心を籠めて見詰めたらしい、目の色は美しかつた。

「貴下、眞個に未來と云ふものはありますものでございませうか知ら。」

「……」

「もしあるものと極りますなら、地獄でも極樂でも構ひません。逢ひたい人が其處に居るんなら。さつさと其處へ行けば宜しいんですけれども、」

　と土筆のたけの指白う、又うつゝなげに草を摘み、摘み、

「屹と然うと極りませんから、もしか、死んで其れッ切になつては情ないんですもの。其くらゐなら、生きて居て思ひ惱んで、煩つて、段々消えて行きます方が、幾干か増だと思ひます。忘れないで、何時までも、何時までも、」

　と言ひ／＼抜き取つた草の葉をキリ／＼と白齒で噛んだ。

　トタンに慌しく、男の膝越に衝とのばした袖の色も、帶の影も、緑の中に濃くなつて、活々として蓮葉なものいひ。

「いけないわ、人の惡い。」

　散策子は答へに窮して、實は草の上に位置も構はず投出された、オリイブ色の上表紙に、とき色のリボンで封のある、ノオトブックを、つまさぐつて居たのを見たので。

## 三十三

「此方へ下さいよ、厭ですよ。」

と端へかけた手を手帳に控へて、麥畠へ眞正面、話をわきへずらさうと、青天白日に身構へつゝ、

「歌がお出來なさいましたか。」

「ほゝほゝ、」

　と唯笑ふ。

「繪をお描きになるんですか。」

「ほゝほゝ。」

「結構ですな、お樂しみですね、些と拜見いたしたいもんです。」

　手を放したが、附着いた肩も退けないで、

「お見せ申しませうかね。」

　あどけない狀で笑ひながら、持直してぱらぱらと男の帶のあたりへ開く。手帳の枚頁は、此の人の手に恰も蝶の翼を重ねたやうであつたが、鉛筆で描いたのは……

　一目見て散策子は蒼くなつた。

　大小濃薄亂雜に、半ばかきさしたのもあり、歪んだのもあり、震へたのもあり、やめたのもあるが、○と□△ばかり。

「ね、上手でせう。此處等の人達は、貴下、玉脇では、繪を描くと申しますとさ。此の土手へ出ちや、何時までも恁うして居ますのに、唯居ては、谷戸口の番人のやうでをかしうござんすから、いつかッからはじめたんですわ。」

大層評判が宜しうございますから……何ですよ、此頃に繪具を持出して、草の上で風流の店びらきをしようと思ひます、大した寫生ぢやありませんか。

此の圓いのが海、この三角が山、此の四角いのが田圃だと思へばそれでもようござんす。それから○い顔にして、□い胴にして△に坐つて居る、今戸燒の姉樣だと思へばそれでも可うございます、袴を穿いた殿樣だと思へばそれでも可いでせう。

それから……水中に物あり、筆者に問へば知らずと答ふと、高慢な顔色をしても可いんですし、名を知らない死んだ人の戒名だと思つて拜んでも可いんですよ。」

「戒名」

やう／＼聲が出て、

と口が利ける。

「何、何んと云ふんです。」

「四角院丸々三角居士と、」

いひながら土手に胸をつけて、袖を草に、太脛のあたりまで、友染を散亂して、すらりと片足片褄を泳がせながら、から内へ搔込むやうにして、鉛筆ですら／＼と其の三體の祕密を記した。

テン／＼カラ、テンカラと、耳許に太鼓の音。

二人の外に人のない世ではない。アノ椿の、燃え落ちるやうに、向うの茅屋へ、續いてぽた／＼と溢れたと思ふと、菜種の路を葉がくれに、眞黄色な花の上へ、ひらりと彩つて出たものがある。

茅屋の軒へ、鷄が二羽舞上つたのかと思つた。

二個の頭、獅子頭、高いのと低いのと、後になり先になり、縺れる、狂ふ、花すれ、葉ずれ、菜種に、と見るとやがて足許から其方へ續く青麥の畠の端、玉脇の門の前へ、出て來た連獅子。

汚れた萌黄の裁着に、泥草鞋の乾いた埃も、霞が麥にかゝるやう、志して何處へ行く。早其の太鼓を打留めて、急足に近づいた。いづれも子獅子の角兵衞大小。小さい方は八ツばかり、上は十三——四と見えたが、すぐに久能谷の出口を突切り、紅白の牡丹の花、はつと俤に立つばかり、ひらりと前を行き過ぎる。

「お待ち一寸、」

と聲をかけて美女は起直つた。今の姿を其のまゝに、雪駄は獅子の蝶を飛ばして、土手の草に横坐りになる。

ト獅子は紅の切を捌いて、二つとも、立つて頭を向けた、

「あゝ、あの、兒たち、お待ちなね。」

テン／＼／＼（大きい方が）トンと當てると、太鼓の面に撥が飛んで、ぶる／＼と細に躍る。

「アリャ」

小獅子は路へ橋に反つた、のけ樣の頤ふつくりと、二かは目に紅を潮して、口許の可愛らしい、色の白い兒であつた。

## 三十四

「おほゝゝ、大層勉强するわねえ、まあ、お待ちよ。あれさ、そんなに苦しい思ひをして引くりかへらなくとても可いんだよ、可いんだよ。」

と壓へつけるやうに云ふと、ぴよいと立直つて頭の堆く大きく突出た、紅の花の庇の下に、くるツとした目を睜つて立つた。

ブル／＼ツと、跡を引いて太鼓が止む。

美女は膝をずらしながら、帶に手をかけて、搖り上げたが、

「お待ちよ、今お錢を上げるからね、」

手帳の紙へはしり書して、一枚手許へ引切つた、其のまゝ獅子をさし招いて、

「おいで／＼、あゝ、お前ね、これを持つて、

其の角の二階家へ行つて取つておいで。」

留守へ言ひつけた情と見える。

後馳せに散策子は袂へ手を突込んで、

「細いのならありますよ。」

「否、可うござんすよ、さあ、兄や、行つて來な。」

撥を片手で引つかむと、恐る〳〵差出した手を素疾く引込め、とさかをはらりと振つて行く。

「さあ、お前此方へおいで、」

小さな方を膝許へ。

きよとんとして、ものも言はず、棒を呑んだ人形のやうな顔を、凝と見て、

「幾歳なの、」

「八歳でござえス。」

「母さんはないの。」

「角兵衛に、そんなものがあるもんか。」

「お前は知らないでもね、母様の方は知つてるかも知れないよ、」

と衝と手を袴越に白く掛ける、とぐいと引寄せて、横抱きに抱くと、獅子頭はばくりと仰向けに地を離つて、草鞋は宙に反つた。鶏の羽の飾には、椰子の葉を吹く風が渡る。

「貴下、」

と落着いて見返つて、

「私の兒かも知れないんですよ。」

トタンに、つるりと腕を辷つて、獅子は、倒にトンと返つて、ぶる〳〵と身體をふつたが、けろりとして突立つた。

「えへゝゝゝ、」

此處へ勢よく兄獅子が引返して、

「頂いたい、頂いたい。」

二つばかり天窓を掉つたが、又撥を當てる。

「可いよ、そんなことをしなくつても、」

と裳をずりおろすやうにして止めた顔と、未だ掴んだまゝの大な銀貨とを互に見較べ、二個ともとぼんとする。時に朱盆の口を開いて、眼を輝すものは何。

「其のかはり、ことづけたいものがあるんだよ、待つておくれ。」

と其の○□△を樂書の餘白へ、鉛筆を眞直に取つてすら〳〵と春の水の靡くさまに走らした假名は、かくれもなく、散策子に讀得られた。

君とまたみるめおひせば四方の海の
　　水の底をもかつき見てまし

散策子は思はず海の方を〓と見た。波は平かである。青麥につゞく紺青の、水平線上雪一山。

富士の影が渚を打つて、ひた〳〵と薄く被さる、藍色の西洋館の棟高く、二三羽鳩が舞ふのして、ゆるく手巾を掉り動かす狀であつた。

小さく疊んで、幼い方の手に其の（ことづけ）を渡すと、ふッくりした頤で、合點々々をすると見えたが、いきなり二階家の方へ行かうとした。

使を頼まれたと思つたらしい。

「おい、其方へ行くんぢやない。」

と立入つたが聲を懸けた。

美女は莞爾して、

「唯持つて行つてくれゝば可いの、何處へッて當はないの。落したら其處でよし、失くしたら其ッ切で可いんだから……唯心持だけなんだから……」

「ぢや、唯持つて行きや可いのかね、奥さん、」

と聞いて頷くのを見て、年紀上だけに心得顔で、危つかしさうに仰向いて吃驚した風で居る幼い方の、獅子頭を背後へ引いて、

「こん中へ入れとくだア、奴、大事にして持つてんねえよ。」

獅子が並んでお辭儀をすると、すた〳〵と駈け出した。後白浪に海の方、紅の母衣翻翩として、青麥の根に霞み行く。

## 三十五

さて半時ばかりの後、散策子の姿は、一人、彼處から鳩の舞ふのを見た、濱邊の藍色の西洋館の傍なる、砂山の上に顯れた。

其處へ來ると、浪打際までも行かないで、太く草臥れた狀で、ぐッたりと先づ足を投げて腰を卸す。どれ、貴女のために(ことづけ)の行方を見屆けませう。連獅子のあとを追つて、と云ふのをしほに、未だ我儘が言ひ足りず、話相手の欲しかつたらしい美女に辭して、袂を分つたが、獅子の飛ぶのに足の續くわけはない。

一先づ歸宅して寢轉ばうと思つたのであるが、久能谷を離れて街道を見ると、人の瀨を造つて、停車場へ押懸ける夥しさ。中には最う此處等から假聲をつかつて行く壯佼がある、淺黃の襦袢を膚脫いで行く女房がある、其の演劇の恐しさ。大江山の段か何か知らず、迚も町へは寄附かれたものではない。

で、路と一緒に、人通りの横を切つて、田圃を拔けて來たのである。

正面にくぎり正しい、雪白な霞を召した山の女王のましますばかり。見渡す限り海の色。濱に引上げた船や、笊や、馬秣のやうに散ばつたかじめの如き、いづれも海に對して、我は顏をするのではないから、固より馴れた目を遮りはせぬ。

且つ人一人居なければ、眞晝の樣な月夜とも思はれよう。長閑さはしかし野にも山にも增つて、あらゆる内砂の俤は、暖い霧に似て居る。

鳩は蒼空を舞ふのである。ゆつたりした浪にも誘はれず、風にも乘らず、同一處を――其の友は館の中に、こと〳〵と堋を踏んで、くゝと啼く。

人は恁う云ふ處に、恁うして居ても、胸の雲霧の霽れぬ事は、寐られぬ衾と相違はない。

徒らに砂を握れば、くぼみもせず、高くもならず、他愛なくほろ〳〵と崩れると、又傍から漏り添へる。水を摑むやうなもので、搜ればはら〳〵とたゞ貝が出る。

渚には敷滿ちたが、何んにも見えない處でも、纔に砂を分ければ貝がある。未だ此の他に、何が住んで居ようも知れぬ。手の屆く近い處が然うである。

水の底を搜したら、藻がためにこがれ死をしたと言ふ、久能谷の庵室の客も、其處に健在であらうも知れぬ。

否、健在ならばと云ふ心で、君と共みるめおひせば四方の海の、水の底へも潜らうと、(ことづけ)をしたのであらう。

此の歌は、平安朝に艶名一世を壓した、田かりける童に襖をかりて、あをかりしより思ひそめてき、とあこがれた情に感じて、奥へと言ひて呼び入れけるとなむ……名媛の作と思ふ。

言ふまでもないが、手帳に此をしるした人は、御堂の柱に、うたゝ寐の歌を樂書したとおなじ玉脇の妻、みを子である。

深く考ふるまでもなく、庵の客と玉脇の妻との間には、不可思議の感應で、夢の契があつたらしい。

男は眞先に世間外に、はた世間のあるのを知つて、空想をして實現せしめむがために、身を以て直ちに幽冥に趣いたものゝやうであるが、婦人は未だ半信半疑で居るのは、それとなく胸中の鬱悶を漏らした、未來があるものと定り、靈魂の行末が極つたら、直ぐにあとを追はうと言つた、言の端にも顯れて居た。

唯其有耶無耶であるために、男のあとを追ひもならず、生長らへる效もないので。

そゞろに門附を怪しんで、冥土の使のやうに感じた如きは幾分か心が亂れて居る。意氣張つ

くて死んで見せように到つては、益々惜亂のほどが思ひ遣られる。

又一面から見れば、門附が談話の中に、神田邊の店で、江戸紫の夜あけがた、小僧が門を掃いて居る、納豆の聲がした……のは、其の人が生涯の東雲頃であつたかも知れぬ。——やがて暴風雨となつたが——

兎に角、（ことづけ）は何うならう。玉脇の妻は、以て未來の有無を占はうとしたらしかつたに——頭陀袋にも納めず、帯にもつけず、袂にも入れず、角兵衛が其の獅子頭の中に、封じて去つたのも氣懸りになる。瀟替してきらめくものを摑ませて、のッつ反ッつの苦悶を見せない、上花主のために、商賣冥利、随一大切な處へ、偶然受取つて行つたのであらうけれども。

あれがもし、島にでも攫はれたら、思ふ人は虚空にあり、と信じて、大人は羽化して飛ぶであらうか。いや／＼羊が食ふまでも、角兵衛は再び引返して其音信は傳へまい。

從つて砂を崩せば、從つて手にたまつた、色々の貝殻にフト目を留めて、

君とまたみる日おひせば四方の海の……

我にもあらず口ずさんだ。

實に答へぬ。

もし又うつせ貝が、大いなる水の心を語り得るたら、渚に敷いた、いさゝ貝の花吹雪は、いつも私語を絶えせぬだらうに。されば幼兒が拾つても、われらが砂から掘り出しても、這個ものいはぬは同一である。

小貝を其處で捨てた。

而して横ざまに砂に倒れた。腰の下はすぐになだれたけれども、辷り落ちても埋れはせぬ。

しばらくして、其の半眼に閉ぢた目は、斜めに鳴鶴ケ岬まで線を引いて、其の半ばと思ふ點へ、ひら／＼と燃え立つやうな、不知火にはつきり覺めた。

とそれは獅子頭の緋の母衣であつた。

二人とも出て來た。濱は鳴鶴ケ岬から、小坪の崕まで、人影一ツ見えぬ處へ。

停車場に演劇がある、町も村も引つぷるつて誰が角兵衛に取合はう。あはれ人の中のぼうふらのやうな忙しい稼業の兒たち、今日はおのづから閑なのである。

二人は此處でも後になり先になり、脚絆の足を入れ違ひ、頭を組んで白浪を被ぐばかり浪打際を歩行いたが、やがて其の大きい方は、五六尺渚を放れて、日影の如く散亂れた、かじめの中へ、草鞋を突出して休んだ。

小獅子は一層活潑に、衝と浪を追ふ、還と追はれる。其光景、ひとへに人の兒の戯れるやうには見えず、嘗て孤兒院の兒が此處に來て、一種の監督の下に、遊んだのを見たが、それとひとつで、浮世の浪に揉み立てられるかといぢらしい。但其の頭の獅子が怒り狂つて、たけり戰ふ勢である。

勝では可い！

ト草鞋を脱いで、跣足になつて横歩行をしはじめた。あしを濡らして遊んで居る。

大きい方は仰向けに母衣を敷いて、膝を小さな山形に寢た。

磯を横ッ飛の時は、其の草鞋を脱いだばかりであつたが、やがて脚絆を取つて、膝まで入つて、靜かに立つて居たと思ふと、引返して袴を脱いで、今度は衣類をまくつて腰までつかつて、二三度密と潮をはねたが、又ちよこ／＼と取つて返して、頭を剃退け、衣類を脱いで、丸裸になつて一文字に飛込んだ。陽氣はそれでも可かつたが、泳ぎは知らぬ兒と見える。唯勢よく、水を逆に刎ね返した。手でなぐつて、足で踏むを、海水は稲妻のやうに幼兒を包んで其の左右へ飛んだ。——雫ばかりの音もせず——慘

子はひとへに嬰兒になつた、白光は頭を撫で、漣波は胸を抱いた。何等の寵兒ぞ、天地の大きな盥で産湯を浴びるよ。

散策子はむくと起きて、ひそかに其の幸福を祝するのであつた。

あとで聞くと、小兒心にもあまりの嬉しさに、此一幅の春の海に對して、報恩の志であつたといふ。一旦出て、濱へ上つて、寢た獅子の肩の處へしやがんで居たが、對手が起返ると、濡れた身體に、頭だけ取つて獅子を被いだ。

それから更に水に入つた。些と出過ぎたと思ふほど、分けられた波の脚は、二線長く廣く尾を引いて、小獅子の姿は伊豆の岬に、ちよと小さな點になつた。

濱に居るのが胡坐かいたと思ふと、テン、テン、テンテンツ、テンテンテン、波に丁と打込む太鼓、油のやうな海面へ、綾を流して、響くと同時に、水の中に立つたのが、一曲、頭を倒に。

これに眩めいたものであらう、啊呀忘はし、よみぢの(ことづけ)を籠めたる獅子を、と見る内に、幼兒は見えなくなつた。

未だ浮ばぬ。

太鼓が止んで、濱なるは棒立ちになつた。

砂山を慌しく一文字に駈けて、此方が近い時、どうしたのか、脱ぎ捨てた袴、着物、脚絆、海草の乾びた狀の、あらゆる記念と一緒に、太鼓も泥草鞋も一まとめに引かゝへて、大きな渠は、砂煙を上げて町の方へ一散に逃げたのである。

浪はのたりと打つ。

ハヤ二三人駈けて來たが、いづれも高聲の大笑ひ、

「馬鹿な奴だ。」

「馬鹿野郎。」

ボク〳〵と來た巡査に、散策子が、縋りつくやうにして、一言いふと、

「角兵衞が、はゝゝ、然うぢやさうで。」

死骸は其の日終日見當らなかつたが、翌日しらしらあけの引潮に、去年の夏、庵室の客が溺れたとおなじ鳴鶴ケ岬の岩に上つた時は二人であつた。顏が玉のやうな乳房にくつついて、緋母衣がびつしより、其雪の腕にからんで、一人は美にして艶であつた。玉脇の妻は靈魂の行方が分つたのであらう。

然らば、といつて、土手の下で、分れ際に、やゝ遠ざかつて、見返つた時――其紫の深張を帶のあたりで横にして、少し打傾いて、黑髮の頭おもげに見送つて居た姿を忘れぬ。どんなに潮に亂れたらう。渚の砂は、崩しても、積る、くぼめば、たまる、音もせぬ。たゞ美しい骨が出る。貝の色は、日の紅、渚の雪、浪の緣。

## 花見風俗（雨聲會席上卷紙に）

大正三年五月

紺地に茶の竪縞一枚小袖、緋の紋縮緬の長襦袢、共に對丈にして袖長し。極薄いクリーム色に枝垂れ櫻を縫潰しの半襟、青磁色に銀で縫分けの手綱染の帶、白木の兩刳の駒下駄。襟脚雪の如く白く、緋鹿子の肌襦袢の襟微かに見ゆ。キリゝとした仇な顏、細面。右正に危く見染め申候所、下町の娘花見の風俗。

――鏡花全集卷十五より

# 婦系圖（前篇）

## 鯛、比目魚

### 一

「素顏に口紅で美しいから、其の色に紛ふけれども、可愛い音は、唇が鳴るのではない。お蔦は、皓齒に酸漿を含んで居る。……早瀬の細君は丁ど（二十）と見えるが三だと、其の年紀で酸漿を鳴らすんだもの、大概素性も知れたもんだ、」と四邊近所は官員の多い、屋敷町の夫人連が風說をする。

旣に昨夜も、神樂坂の緣日に、櫻草を買つた次手に、可いのを選つて、晝夜帶の間に挾んで歸つた酸漿を、隣家の娘――女學生に、一ッ上げませう、と言つて、そんな野蠻なものは要らないわ！と拗ねられて、利いた風な、と口惜がつた。

面當にと云ふでもあるまい。恰も其の隣家の娘の居間と、垣一ッ隔てた此の臺所、腰障子の際に、懷手で佇んで、何だか所在なさゝうに、頻に酸漿を鳴らして居たが、不圖銀杏返のほつれた鬢を傾けて、目をぱつちりと開けて何かを聞澄ますやうにした。

コロ〳〵コロ〳〵、クウ〳〵コロ〳〵と聲がする。唇の鳴るのに連れて。

一寸吹留むと、今は寂寞として、其の聲が止まつて、ぼッと腰障子へ暖う春の日は當るが、軒を傳ふ猫も居らず、雀の影もさゝぬ。

鼠かと思つたさうで、斜に棚の上を見遣つたが、鍋も車輪もかたりとも云はず、古新聞が又がさりともせぬ。

四邊を見ながら、うつかり酸漿に齒が觸る。と其の幽な音にも直ちに應じて、コロ〳〵。少し心着いて、續けざまに吹いて見れば、透かさずクウ〳〵、調子を合はせる。

聞き定めて、

「おや、」と云つて、一段下流の板敷へ下りると、お源と云ふ女中が、今しがた此處から驅け出して、玄關の來客を取次いだ草履が一ッ。ぞんざいに黑い裏を見せて引くり返つて居るのを、白い指で一寸直し、素足に引懸け、がたり腰障子を左へ開けると、十時過ぎの太陽が、向うの井戸端の、棚の上から斜つかけに、遍く射込んで、俎の上に揃へた、菠薐草の根を、紅に照らしたばかり。

多分は其だらう、口眞似をするのは、と當りをつけた御用聞きの酒屋の小僧は、何處にも隱れて居るのではなかつた。

眉を顰めながら、其癖恍惚した、迫らない顏色で、今度は口ずさむと言ふよりも故と試みに、コロ〳〵、と舌の尖で音を入れる。響に應じて、コロ〳〵と行つたが、此方は一吹きで控へたのに、先方は發奮んだと見えて、コロ〳〵コロ。

これを聞いて、屈んで、板へ敷く半纏の裾を搔取り、膝に挾んだ下交の褄を內端に、障子腰から肩を乘出すやうにして、つい目の前の、下水の溜りに目を着けた。

もとより、溝板の蓋があるから、ものゝ形は見えぬけれども、優い連彈は正しく其の中。

笑を含んで、クウ〳〵と吹き鳴らすと、コロコロと拍子を揃へて、近づいただけ音を高く、調子に冴えてカタ〳〵カタ！

「蛙だね。」

と莞爾した、其の唇の紅を染めたやうに、酸漿を指に取つて、衣紋を輕く拊ちながら、

「惜らしい、お源や……」
來て御覽、と呼ばうとして、聲が出たのを、啣へて酸漿を又吸つた。
ククと吹く、カタ／＼、ククと吹く、カタカタ、蝶々の翅で三味線の胴をうつかと思はれつゝ、靜かに長くる春の日や、お蔦の袖に二三寸。
「おう、」と突込んで長く引いた、遠くから威勢の可い聲。
來たのは江戸前の魚屋で。

## 二

此處へ、臺所と居間の隔てを開け、茶菓子を運んで、二階から下りたお源といふ、小柄の可い島田の女中が、逆上せたやうな顔色で、
「奥様、魚屋が参りました。」
「大きな聲をおしでないよ。」
とお蔦は振向いて低聲で窘め、お源が背後から通るやうに、身を開きながら、
「聞えるぢやないか。」
目配せをすると、お源は莞爾して俯向いたが、ほんのり紅くした顔を勝手口から外へ出して路地の中を目迎へる。
「奥様は？」
と其の顔へ、打着けるやうに聲を懸けた。又是が其の「おう、」の調子で響いたので、お源が氣を揉んで、手を振つて壓へた處へ、盤臺を肩にぬいと立つた魚屋は、渾名を（め組）と稱へる、名代の芝ッ兒。
半纏は薄汚れ、腹掛の色が褪せ、三尺が捻ぢくれて、股引は縮んだ、が、盤臺は美しい。
いつもの向顱卷が、四五日陽氣がぽか／＼するので、ひしやげ帽子を蓮の葉かぶり、些とも涼しさうには見えぬ。例によつて飲こしめした、朝つから赤ら顔の、とろんとした目で、お蔦が其處に居るのを見て、
「おいでなさい、奥様、へゝゝへゝ。」
「お止しつてば、氣障ぢやないか。お源もほた、」
と指の尖で、鬢を一寸搔きながら、袖を女中の肩に當てゝ、
「お前も矢張言ふんだもの、半纏着た奥様が、江戸に在るものかね。」
「だつて、ねえ、めのさん。」
とお源は袖を擦抜けて、俎板の前へ蹲む。
「それぢや御新造かね。」
「そんなお錢はありやしないわ。」
「ぢや、おかみさん。」
「あいよ。」
「へッ、」
と一ッ胸でしやくつて笑ひながら、盤臺を下ろして、天秤を立掛ける時、菠薐草を揃へて居る、お源の背を上から見て、
「相かはらず大な尻だぜ、臺所充滿だ。串戲ぢやねえ。目量にしたら、凡そ何のくれえ掛るだらう。」
「お前さんの押くらゐ掛ります。」
「あゝ云ふ口だ。はゝはゝ、奥さんのお仕込みだらう。」
「めの字、」
「えゝ、」
「二階にお客さまが居るぢやないか、奥様はおよしと言ふのにね。」
「おつと、然うか、」
べろ／＼と舌を吸つて、
「何だつて、日蔭ものにして置くだらう、こんな實のある、氣前の可い……」
「値切らない、」
「眞個によ、所帶持の可い姉さんを。分らない旦ぢやねえか。」
「可いよ。私が承知して居るんだから、」
と睨の切れたのを伏目になつて、お蔦は襟に頤をつけたが、愼ましく、しをらしく、且

つ濕やかに見えたので、め組もおとなしく領いた。

お源が横向きに口を出して、

「何があるの。」

「へ、野暮な事を聞くもんだ。相變らず旨えものを食はして遣るのよ。默つて入物を出しねえな。」

「はい、はい、どうせ無代價で頂戴いたしますものでございます。めのさんのお魚は、現金にも月末にも、つひぞ、お代をお取り遊ばしたことはございません。」

「皮肉を言ふぜ。何てつたつて、お前は何うせ無代價で頂くもんぢやねえか。」

「大きに、お世話、御主人様から頂きます。」

「あれ、見や、肉田を搖つて居ら。」

「一寸、番毎いがみあつて居ないでさ。お源や、お客様に御飯を出さうかい。」

「如何でございますか、婦人の方ですから、そんなに、お手間は取れますまい。」

三

「だつてお前、急に歸りさうもないぢやないか。」

と云つて、め組の蓋を撥つた盤臺を差覗くと、鯛へ濃色を導いて、龍宮の錦を見る風情、章魚の影は映らぬが、河岸の朝の月影は、未だ其の鱗に消えないのである。

俎板をポンと渡すと、目の下一尺の鮮紅、反を打つて鮮然と乗る。

とろんこの目には似ず、キラリと出刃を眞名箸の構に取つて、

「刺身かい。」

「然うね、」

とお蔦は、半纏の袖を合はせて、一寸傾く。

「燒きねえ、昨日も刺身だつたから……」

と腰を入れると腕の冴、颯と吹いて、鱗がばら／＼。

「次手に少々お燒きなさいますなぞも又、へゝへゝ、お宜しうございませう。御婦人のお客で、お二階ぢや大層お話が持てますさうでございますから。」

「憚樣。お客は旦那樣のお友達の母樣でございます。」

め組が鯛をおろす形は、何時見ても染々可い、と評判の手つきに見惚れながら、お源が引取つて口を入れる。

えらを一突き、ぐいと放して、

「凹んだな。何時かの新ぎれぢやねえけれど、め組の公鹽が廻り過ぎたい。」

「然ういや、め組の字、」

とお蔦は片手を懐に、するりと辷る黒繻子の襟を引いて、

「過日頼んだ、河野さん許へ、其の後通つて見れないッて言ふぢやないか、何うしたの？」

「むゝ、河野ッて、何かい、あの南町のお邸かい。」

「あゝ、何故か、魚屋が來ないッて、昨日も内へ來て、旦那に然う言つて居なすつたよ。行かないの、」

「行かねえ。」

「眞個に、」

「行きませんとも！」

「なぜさ、」

「何故ッて、お前、あん獸ア、」

お源が慌しく、

「めのさん、」

「何だ。」

「めのさんや。お前さん一寸、お二階に來ていらつしやるのは其の河野さんの母樣ぢやないか、氣をお着けな。」

格子をすつぽり鮨の子掬みで、

「ホイ阿陀佛、へい、彼處にや隱居ばかりだと思つたら……」

「否ね、つい一昨日あたり故郷の靜岡からおいでなすつたんですとさ。私がお取次に出たら河野の母でございます、とおつしやつたわ。」
「だから、母様が見えたのに、おいしいものが無いッて、河野さんが言つて居なすつたのさ、お前、」
「おいしいものが聞いて呆れら。へい、而して靜岡たつてね。」
「あゝ、」
「と御維新以來、江戸ッ兒の親分の、慶喜様が行つて居た處だ。第一恐く申すめの公も、江戸城を明渡しの、落人を極めた時分、二年越居た事がありますぜ。
　馬鹿にしねえ、大親分が居て、それから私が居た土地だ。大概江戸ッ兒になつてさうなもんだに、又何うして、あんな獸が居るんだらう。
　聞きねえ。
　過日もね、お前、眞個はお前、一軒かけ離れて、彼處へ行くのは荷なんだけれども、些とポカと來たし、佳い魚がなくッて困るッて言ひなさる、廻つてお上げ、とお前さんが口を利くから、チョッ蔦ちやんの言ふこッた。
　脚を達引け、と二三度行つたわ。何ぢやねえか、一度お前、おう、先公、居るかいッて、景氣に呼んだと思ひねえ。」
　お蔦は莞爾して、
「いゝえ、せんこうッて誰のこつたね。」
「内の、お友達よ。河野さんは、學士だとか、學者だとか、先生だとか言ふこッたから、一ッ奉つて呼んだのよ。」
　と鰭をぱつさり。

四

「可いぢやねえか、お前、先公だから先公よ。何も野郎とも兄弟とも言つたわけぢやねえ。」
　と庖丁の尖を危く辷らして、鼻の下を引擦つて、
「すると何だ、肥満のお三どんが、ぶつちやう面をしやあがつて、旦那様とか、先生とかお言ひなさい、御近所へ聞えます、と吐したらうぢやねえか。
　えゝ、そんなに奉られたけりや三太夫でも抱へれば可い。口に税を出すくらゐなら、憚んながら私あ酒も喫はなけりや魚も賣らねえ。お源ちやんの前だけれども。おつと慫うした處は、お尻の方だ。」
「そんなに、お邪魔なら退けますよ。」
　お源が俎板を直して向直る。と面を合はせて、
「はゝゝゝは、今日あ、」
「何かい、それで腹を立つて行かないのかい。」
「其處はお前さんに免じて肝の蟲を壓へつけた。翌日も廻つたがね、今度は言種が尚ほ氣に食はねえ。
　今日は最うお菜が出來たから要らないよサ。合點なるめえぢやねえか。私が商ふ魚だつて、品に因つちや好嫌えは當然だ。ものを見てよ、其上で欲しくなきや止すが可い。喰ひたくもねえものを勿體ねえ、お附合ひに買ふにや當りやせん、食もたれの曖なんぞで、せゝり箸をされた日にや、第一魚が可哀相だ。
　此方はお前、河岸で一番首を討取る氣組みで、佳いものを仕入れても、一ッおいしく食はせて遣らうと、汗みづくで駈附けるんだ。醜女が情人を探しはしめえし、最う出來たよで斷られちや、間尺に合ふもんぢやねえ。ね、蔦ちやんの前だけれど、」
「今度は私が背後を向かうか。」
　とお蔦は、下に居る女中の上から、向うの棚へ手を伸ばして、摺鉢に伏せた目笊を取る。
「そらよ、此方が旦の分。こりやお源坊のだ。奥様はあらが可い、煮るとも潮にするともして、天窓を噛りの、目球をつるりだ。」

「私は天窓を嚙るのかい。」
お蔦は莞爾して、め組に其の笊を持たせながら、指の尖で、涼しい鯛の目を一寸當る。
「ワン〳〵に言ふやうだわ、何だねえ、失禮な。」
とお源は柄杓で、がたりと手桶の底を汲む。
「田舎ものめ、河野の邸へ鞍替しろ、朝飯に牛はあつても、鯛の目を食つた犬は昔から江戸にや無えんだ。」
「はい、はい、」
手桶を引立てゝ、お源は腰を切つて、出て、溝板を下駄で鳴らす。
「あれ、邪險にお踏みでない、私の情人が居るんだから。」
「情人がね。」
「へい、」
と言つたばかり、此方は忙がしい顏色で、女中は閑楽てにして、井戸端へかた〳〵行く。
「溝の中に、はてな。」
印半纏の腰を落して、溝板を見當に指しながら、ひしやげた帽子をくるりと廻して、
「籠つてますね。」
「見せようか。」
「是非お目に懸りてえね。」
「お待ちよ、」
と目笊は流へ。お蔦は立直つて腰障子へ手をかけたが、溝の上に脊伸をして、今度は氣構へて勿體らしく酸漿をクウと鳴らすと、言合せたやうにコロ〳〵コロ。
「ね、可愛いだらう。」
カタ〳〵カタ！
「蛙だ、蛙だ。はゝはゝ、此奴ア可い。成程蔦ちやんの情人かも知れねえ。」
「朧月夜の色なんだよ。」
得意らしく澄ました顏は、柳に對して花やかである。
「畜生め、拜んで遣れ。」
と好事に蹲込んで、溝板を取らうとする、め組は手品の玉手箱の蓋を開ける手つきなり。
「お止しよ、逃げるから、」
と言ふ處へ、しとやかに、階子段を下りる音。トタンに井戸端で、ざあと鳴つたは、柳の枝に風ならず、長閑に釣瓶を覆したのである。

## 見知越

### 五

續いてドン〳〵粗略に下りたのは、名を主税といふ、當家、早瀬の主人で、直ぐに玄關に聲が聞える。
「失禮、河野さんに……又……お遊びに。然やうなら。……」
格子戸の音がしたのは、客が外へ出たのである。爾時、お蔦の留めるのも聞かないで、溝なる連彈を見屆けようと、矢庭に其蓋を拂つため組は、蛙の形も認めない先に、お蔦がすつと身を退いて、腰障子の蔭へ立隱れをしたので、あゝ、落人でもないに氣の毒だ、と思つて、客は那樣人間だらうと、格子から今出た處を透して見る。と其處で一つ腰を屈めて、立直つた束髮は、前刻から風說のあつた、河野の母親と云ふ女性。
黑の紋羽二重の紋着羽織、些と丈の長いのを襟を詰めた後姿。伜が學士だ先生だと言ふのでも、大略知れた年紀は爭はれず、髮は薄いが、櫛に照々と艶が見えた。
脊は高いが、小肥に肥つた肩の稍怒つたのは、妙齡には御難だけれども、此の位な年配で、服装が可いと威が備はる。それに焦茶の肩掛をしたのは、今日あたりの陽氣には聊かお荷物だらうと思はれるが、是も近頃は身躾の一ツで、貴婦人方は、菖蒲が過ぎても遊ばさるゝ。

直ぐに御歩行かと思ふと、まだ其から雨手へ手袋を嵌めたか、念入りに片手づゝ手首へぐつと扱いた時、襦袢の裏の紅いのがチラリと翻る。

年紀のほどを心づもりに知つため組は、其のちら／＼を一目見ると、や、火の粉が飛んだやうに、ヘツと頸を窘めた處へ、

「また、花道かい？」

とお蔦が低聲。

「附際々々。」

と最う一息め組の首を縮める時、先方は格子戸に立かけた蝙蝠傘を手に取つて、又候會釋がある。

「思入れ澤山だ。いよう！」

おつと其の口を塞いだ。聲は固より聞えまいが、此方に人の居るは知れたらう。振返つて、額の廣い、鼻筋の通つた顔で、屹と見越した、目が光つて、其まゝ悠々と路地を町へ。――勿論勝手口は通らぬのである。め組はつか／＼と二足三足、

「おや／＼おや。」

調子はづれな聲を放つて、手を擴げて茫乎となる。

「何うしたの。」

「可訝しいぜ。」

と急に威勢よく引返して、

「彼が、今のが、其の、河野ツてえのゝ母親かね、静岡だつて、故郷あ。」

「あゝ。」

「家は醫者ぢやねえか知らん。はてな。」

「何うした、め組。」

とむざうさに臺所へ現はれた、二十七八の小薩張したのは主税である。

「へゝへゝ。」

滿面に笑を含んだ、め組は蓮葉帽子の中から、夕映のやうな顔色。

「お早うござい。」

「何が早いものか。最う午飯だらう、何だ御馳走は。」

と覗込んで、

「はゝあ、鯛だな。」

「鯛とおつしやいよ、見ツともない。」

とお蔦が笑ふ。

「他の魚屋の商ふのは鯛さ、め組のに限つちや鯛よ、なあ、めい公。」

「違えねえ。」

「だつて、貴郎は柄にないわ、主公様は大人しく鯛魚とおつしやるもんです、ねえ、めのさん。」

「違えねえ。」

主税は色氣のない大息をついて、

「何にしろ、あゝ腹が空いたぜ。」

「然うでせうツて、寢坊をするから、まだ朝御飯を食らないもの。」

「違えねえ、確にアリヤ、」

と、め組は路地口へ伸上る。

## 六

「大分御執心のやうだが、何うした。」

と、め組の其の素振に目を着けて、主税は空腹だと云ふのに。……

「後姿に惚れたのかい。おい、最う可い加減なお婆さんだぜ。」

「だつて貴郎にやお婆さんでも、め組には似合ひな年紀ごろだわ。ねえ、一寸、」

「へゝ、違えねえ。」

「よく／＼(違えねえ。)を云ふ人さ。」

「だから、確だらうと思ふんでさ。」

と呟いて獨りで飲込み、仰向いて天秤棒を取りながら、

「旦那、」

「己ら御免だ。」と主税は懐手で一ツ肩を搖る。

「え、何を。」
「文でも屆けてくれぢやないか。」
「御串戲。否さ、串戲は止して今のお客は直ぐに南町の家へ歸りさうな樣子でしたかね。」
「むゝ、ずッと歸ると言つたつけ。」
「難有え、」
額をぴつしやり。
「後を慕つて、おゝ然うだ、と遣れ。」
「行くのかい、河野さんへ。」
「一寸ね、」
「ぢや可いけれど。貴郎、」
と主税を見て莞爾して、
「めい公がね、又我儘を云つて困つたんですよ。お邸風を吹かしたり、お惣菜並に扱ふから、河野さんへは最う行かないツて。折角お賴まれなすつたものを、貴郎が困るだらうと思つて、是から意見をしてやらうと思つた處だつたのよ。」
「然うか。」
と何故か、主税は氣の無い返事をする。
「御覽なさい。然うすると急にあの通り。眞個に氣が變るつちやありやしない。まるで猫の目ね。」
「違えねえ、猫の目の犬の子だ。どつこい忙がしい、」
と荷を上げさうにするのを見て、
「待て、待て、」
「澤山よ。貴郎の分は三切あるわ。まだ昨日のも殘つてるぢやありませんか。めのさん、可いんだよ。此の人にね、お前の饌臺を覗かせると、皆欲しがるンだから……」
「これ、」
旦那樣苦い顏で、
「端近で何の事たい、野良猫に扱ひやあがる。」
「だつ……て、」
「め組も默つて笑つてる事はない、何か言へ、營業の妨害をする婦だ。」
「肯かないよ、めの字、澤山なんだから、」
「まあ、お前、」
「否、澤山、大事な所帶だわ。」
「驚きますな。」
「私、最う障子を閉めてよ。」
「め組、此の體だ。」
「へゝゝ、此奴ばかりや犬も食はねえ、いや、四寸づゝ食りまし。」
「おい、待てと云ふに。」
「さつさとおいでよ、魚屋のやうでもない。」
「いや、遣瀨がねえ。」
と天秤棒を心にして、め組は一ツくるりと廻る。
「お菜のあとねだりをするんぢや、ないと云ふに。」
と笑ひながらお蔦を睨んで、
「なあ、め組。」
「えゝ、」
「これから河野へ行くんだらう。」
「三枚並で駈附けまさ。」
「それに就いてだ、一寸、此處に話が出來た。」

## 七

「其の、河野へ行くに就いてだが、」
と主税は何か、言淀んで、
「何は、」
お蔦に目配せ、
「茶はないのか。」
「お茶ツて？　有りますわ。ほゝほゝ、まあ、人に叱言を云ふ癖に、貴郎こそ端近で見ッともないぢやありませんか――ありますわ――さあ、彼方へ行らつしやい。」
と上らうとする臺所に、主税が立塞がつて居るので、袖の端を一寸突いて、
「さあ、」
め組は威勢よく、

「へい、跡は明晩……ちやねえ、翌の朝だ。」
「待ちなッてば、」
「可いよ、めのさん。」
「はて、何うしたら、」と首を振る。
「お前たちは、」
と主税は呆れた顔で呵々と笑つて、
「相應に氣が利かないのに、早飲込だからこんがらがつて仕様がない。め組も又、さんざ油を賣つた癖に、急にそは〳〵せずともだ。まあ、待て、己が話があると言へば。
其處でだ……お茶と申すは、冷たい……」
と口へつけて、指で飲む眞似。
「と行る一件だ。」
「め組に……」
「澤山だ、澤山だ。私なら、」
と聲ばかり澤山で、依然として蜂の腰、龍の口、させ、飲まうの構になる。
「不可ません、最う飲んでるんだもの。此の上煽らして御覧なさい。また過日のやうに、一寸盤臺を預つとくんねえ、か何かで、」
お蔦は半纏の袖を投げて、婀娜に酔ッぱらひを、拳固で見せて、
「其ッ切、五日の間行方知れずになつ了ふ。」
「旦那、恁うなると頂きてえね、人間は依怙地なもんだ。」
「可いから、己が承知だから、」
「ぢや、め組に附合つて、これから遊びにでも何でもおいでなさい。お腹が空いたつて私、知らないから。さあ、其處を退いて頂戴よ、通れやしないわね。」
「あゝ、もし〳〵、」
主税は身を躱して通しながら、
「御立腹の處を重々恐縮でございますが、お次手に、手前にも一杯、同じく冷いのを。」
「知りませんよ。」
とつゝと入る。
「旦も、ゆすり方は素人ぢやねえ。なか〳〵馴れてら。」
最う飲みかけたやうなもの言ひで、腰障子から首を突込み、
「今度八丁堀の私の内へ遊びに來ておくんなせえ。一番私がね、嚊々左衛門に酒を強請る呼吸と云ふのをお目にかけまさ。」
「女房が寄せつけやしまい、第一吃驚するだらう、己なんぞが飛込んぢや、山の手から猪ぐらゐに。所かはれば品かはるだ。なあ、め組。」
と下流へかけて板の間へ、主税は腰を掛け込んで、
「處で、些と申しかねるが、今の河野の一件だ。」
「何です、旦、」
と吃驚するほど眞顔。
「お前さんや、奥様で、私に言ひ憎いつて事はありやしねえ、又私が承つて困るつて事もねえぢやねえかね。
嚊々を貸せとも言ひなさりやしめえ、早い話が。何又御使ひ途がありや御用立て申します。」
「打附けた話は恁うだ、南町は些と君には遠廻りの處を、是非廻つて貰ひたいと云ふもんだから、家内で口を利いて行くやうになつたんだから、此處が些と言ひ憎いのだが。今云つた、其れ、膚合の合はない處だ。
今來た、あの母親も、何の彼のつて云つて居るからな、最う彼家へは行かない方が可いぜ。心持を惡くしてくれちや困るよ。又何だ、其内に一杯奢るから。」
とまめやかに言ふ。

## 八

皆まで聞かず、め組は力んで、
「誰が、誰があんな許へ、私ア今も、だから然う云つてたんで、賴まれたッて行きやしねえ。」
「處が、又何か氣が變つて、三枚並で駈附ける

なぞと云ふからよ。」

「そりや、何でさ、えゝ、一寸其の氣になりや成ッたがね、商ひになんか行くもんか。あの母親ッて奴を冷かしに出かける計でさ。」

「然う云ふ料簡だから、お前、南町御構ひになるんだわ。」

と盆の上に茶呑茶碗……不心服な二人分……燒海苔にはり〳〵は心意氣ながら、極めて恭しからず押附もの〻に粗雜に持つて、お蔦が臺所へ顯れて、

「お客樣は、め組の事を、何か文句を言つたんですか。」

「文句は此方にあるんだけれど、言分は先方にあつたのよ。」

と盆を受取つて押出して、

「さあ、茶を一つ飲み給へ。時に、お茶菓子にも言分があるね、最う些と何うか腹に溜りさうなもんにないかい。」

「貴郞のやうに意地汚ではありません。め組は何にも食べやしないのよ。」

「食べやしねえばかりぢやありませんや、時々、此の所爲で食べられなくなる騷ぎだ。へゝへ、」

と帽子を上へ拔上げると、元氣に額の皺を伸ばして、がぶりと一口。鶺鴒の尾の如く、左の人指をひよいと刎ね、ぐいと首を据ゑて、べろぺろと舌舐る。

主税はむしやりと海苔を頰張り、

「め組は可いが己の方さ、何とも以て大空腹の所だから。」

「ですから御飯になさいなね、種々な事を言つて、お握飯を拵へろつて言ひかねやしないんだわ。」

「實は……」と莞爾々々、

「其の氣なきにしもあらずだよ。」

「可い加減になさいまし、め組は商賣がありますよ。疾くお話しなさいなね。」

「然う、然う。いや、可い氣なもんです。」

と絲底を一つ撫でゝ、

「其の言分と云ふのは、恁うだ。何うも、あの魚屋も可いが、門の外から（おう）と怒鳴り込んで、（先公居るか。）は困る。此間も御隱居をつかまへて、此奴あ婆さんに食はして遣れは、如何にも餘りです。内ぢやいゝがえんに知己があるやうで、眞に近所へ極が惡い。それに、聞けば藝者屋待合なんぞへ、主に出入りをするんださうだから、娘たちの爲にもならず、第一家庭の亂れです。また風說によると、あの、魚屋の出入をする家は、何處でも工面が惡いつて事たてから、かた〳〵、折角、お世話を願つたけれど、宜しいやうに、貴下から、と先づ體と恁うよ。」

め組より、お蔦が呆れた顏をして、

「わざ〳〵其の斷りに來なすつたの。」

「然うばかりぢやなかつたが、まあ、それも一ッはあつた。」

「仰山だわねえ。」

「些と仰山なやうだけれど、お邸つき合ひのお勝手口へ、此の男が飛込んだんぢや、小火ぐらゐには吃驚したらう。馴れない内は時々火事かと思ふやうな聲で怒鳴り込むからな、こりや世話をしたのが無理だつた。め組怒つちやア不可い。」

「分つた……」

と唐突に膝を叩いて、

「旦那、的切然うだ。だから、私ア逢えねえッて云つたんだ。彼奴、兇狀持だ。」

「えゝ—」

何としたか、主税、茶碗酒をふらりと持つた手が、キチンと極る。

「兇狀持え？」とお蔦も袖を抱いたのである。

め組は、何處か當なしに睨むやうに目を据ゑて、

「それを、私ア、私ア其たね、ウイ、丁と知つてるんだ。知つてるもんだから、だもんだから。……」

## 九

「ウイ、だから私が出入つちや、どんな事で暴露ようも知れねえと云ふ肚だ。此方あ臺所までだから、些とも氣がつかなかつたが、先方ぢや奧から見懸けたもんだね。一昨日頃靜岡から出て來たつて、今も蔦ちやんの話だつけ。狀あ見やがれ、もつと先から來て居たんだ。家風に合はねえも、近所の外聞もあるもんか、笑かしやあがら。」

と大きに氣勢ふ。

「何だ、何だ、兇狀とは。」

「あの、河野さんの母様がかい。」

とお蔦も眞顏で訝つた。

「彼でなくつて、兇狀持は、誰なもんかね。」

「ほほゝ、貴郎、眞面目で聞くことはないんだわ。め組の云ふ兇狀持なら、あの令夫人が如彼見えて、內々大福餅がお好きだぐらゐなもんですよ。お彼岸にお萩餅を拵へたつて、自分の女房を敵のやうに云ふ人だもの。ねえ、然うだらう。めの字、何か甘いものが好きなんだらう。」

「いづれ、何か隱喰ひさ、盜人上戶なら味方同士だ。」

「へゝ、其通り、隱喰ひにや隱喰ひだが、喰つたものがね。」

「何だ。」

「馬でさ。」

「馬たと……」

「旅俳優かい。」

「否、馬丁……貞藏つて……馬丁でね、私が靜岡に落ちてた時分の飮友達、旦那が戰爭に行つた留守に、ちよろりと嘗めたが、病着で、噯の出るほど食つたんだ。」

主税は思はず乘出して、酒もあつたが元氣よく、

「眞個か、め組、眞個かい。」

と事を好んだ聞きやうをする。

「嘘よ、貴郎、あの方たちが、那樣ことがあつて可いもんですか、めの字、滅多なことは云ふもんぢやありません、外の事と違ふよ、お前、」

「あれ、串戲ぢやねえ。是が嘘なら、私の鯛は場違だ。えゝ、旦那、河野の本家は靜岡で、醫者だらうね。そら、御覧じろ、河野ツてえから氣がつかなかつた。門に大な榎があつて、榎邸と云や、お前、興津江尻まで聞えたもんだね。

今見りや、此處を出た客てえのは、榎邸の奧樣で、其馬丁の情婦だ。

だから私ア、冷かしに行つて遣らうと思つたんだ。嘘にも眞個にも、兒があらあ、兒が。ああ。」

又一口がぶりと遣つて、い、はり〳〵を噛んだ齒をすゝつて、

「ねえ、大勢小兒がありませう。」

「南町の學士先生も其の一人、何でも兄弟は大勢ある。八九人かも知れないよ、いや、眞個なら驚いたな。」

「おゝ、待ちねえ、其の先生は幾歳だね。」

「六か、七だ。」

「二十とだね、すると其上か、それとも下かね。どつち道其の人ぢやねえ、何でも馬丁の因果のたねは婦人なんだ。いづれ緣附いちや居るだらうが、これほど確な事はねえ。私ア特別で心得てるんで、誰も知つちや居ますめえよ。知らぬは亭主ばかりなりぢやねえんだから、御存じは魚屋惣助（本名）ばかりなりだ。

はゝはゝ、下郎は口のさがねえもんだ。」

ぐいと唇を撫でた手で、ポカリと茶碗の蓋をした。

「危え、危え、冷かしに行く處ぢやねえ。蜆汁[illegible]と此奴だけは、命がけでも留められねえんだから、あの人のお前でも[illegible]ねえ。[illegible]さんにお手のもので、[illegible]られたら大変だ。だが、何だ、[illegible]られねえ顔で居ておくんねえ、[illegible]町内に[illegible]たかられたからね。」

「あゝ、お前も最うおいでゞない。」

「行くもんか、行けったって[illegible]だ、お[illegible]、り、へい。[illegible]、」

と茶碗を[illegible]くと、

「[illegible]な人だよ。仕[illegible]ないね、さあ、茶碗をお[illegible]」

「あゝ、」

と何か考へ込んだ、[illegible]に顔を上げて、

「最う些と精しく其の[illegible]を聞かせないか。」

昨日[illegible]から、[illegible]人の[illegible]が[illegible]て来たかと、お源が一文字に飛込んだ。

「旦、旦那様、あの、あの、あの〳〵、」

## 矢車草

### 十

[illegible]

[illegible]所から格子を突掛って、其の[illegible]に[illegible]し、襷を外すのお蔦を[illegible]ぐやうな身構へで、

「真砂町の、」

「や、先生か。」

真砂町と聞いただけで、主税は素直に突立ち上る。お蔦はさそくに身を躱して、ひらりと壁に附着いた。

「否、お嬢様でございます。」

「嬢的、お妙さんか。」

と謂ふと斉しく、まだ湯気のある茶碗を置いた途端を、飛上る足で蹴覆して、羽織の紐を引掴んで、横飛びに台所を消えようとして、

「赤いか、」

お蔦を見向いて面を撫でると、涼しい瞳で、それ見たかと云ふ目色で、

「誰が見ても……」と、ぐつと落着く。

「弱つた。」と頭を抱へる。

「朝湯々々、」と莞爾笑ふ。

「軍師なる哉、諸葛孔明。」といひ棄てに、ばたばたと駈出て行つたが、玄関に[illegible]へる[illegible]である。

ふわふわとした声を掛けて、未だ未練にお茶の[illegible]を[illegible]さないで、め組の[illegible]が、[illegible]の[illegible]に[illegible]れた、とろんこの相格で、

「いよう、天人。」と向うを覗く。

「不可いよ、」

と強く云ふ、お蔦の声が屹としたので、きよとんとして立つ[illegible]を、[illegible]から[illegible]手で、ちよろりと其の[illegible]心の茶碗を[illegible]って、

「先生だわ。」

と睨めつけると、下[illegible]、[illegible]して、[illegible]って天窓の下へ潜ると、ひよいと[illegible]の真中へ。向うの板塀に肩を寄せたは、遠くから路を開く心得、するすると[illegible]も出て行く。

最う、玄関の、格子が開きさうなものだと思ふと、音もしなければ、[illegible]もせぬので、お蔦が、

「御覧、」と目配せする。

覗くは失禮と控へたのが、[illegible]越で水口から目ばかり出したと思ふと、反返るやうに引込んで、

「大変でございます。お台所口へ入らつしやいます。」

「えゝ、此方へ、」

[illegible]を[illegible]、[illegible]を[illegible]ったお蔦を[illegible]、[illegible]から[illegible]に[illegible]って、[illegible]をカチリと[illegible]めた。

「あれ、奥様。」

「お前、そのお盆なんぞ、早くよ。」と釣鐘にでも隠れたさうに、扉から居間へ飄然と飛込む。

驚いたのはお源坊、漂子となつて、唯くるくると働く目に、一目輝くと見たはかりて、意氣地なくべた／＼と坐つて、偏に恐入つてお辭儀をする。

「御免なさいよ。」

と優しい聲、はツと花降る留南奇の薫に、お源は恍惚として顔を上げると、帶も、袂も、衣紋も、扱帶も、花いろ／＼の立姿。まあ！ 紫と、水淺黄と、白と紅咲き重なつた、矢車草を片袖に、月夜に孔雀を見るやうな。

め組が刎返した流汁の溝溜も是がために水澄んで、霞をかけたる蒼空が、底美しく映るばかり。先祖が乙姫に戀歌して、懲る處に流された、蛙の兒よ、いでや、柳の袂に似た、君の袖に縋れかし。

妙子は、有名な獨逸文學者、なにがし大學の教授、文學士酒井俊藏の愛娘である。

父様は、此の家の主人、早瀬主税には、先生で大恩人、且つ御主に當る。さればこそ、嬢様と聞くと齊しく、朝から臺所で冷酒のぐい煽り、魚屋と茶碗を合はせた、其の暴動魔の如きが、立處に影を潜めた。

未だそれよりも内證なのは、引窓を閉めたため、勝手の暗い……其の……誰たか。

十一

妙子の手は、矢車の花の色に際立つて、温柔な葉の中に、枝を一寸持替へながら、

「こんなものを持つて居ますから、此方から……」

と聞咲つて、お源に氣の毒さう、……りと優しく微笑み、

「お邪魔をしてね。」

「何ういたしまして、最う臺なしでございまして、」と雑巾を引摑んで、

「あれ、お召ものが、」

と云ふ内に、吾妻下駄が可愛く並んで、白足袋薄く、藤色の裾を捌いて、濃いお納戸地に、淺黄と赤で、撫子と水の繡珍の帶腰、向う屈みに水瓶へ、花菫の簪と、リボンの色か、蝶々の翼薄黄色に、ちら／＼と先へ映つて、矢車を插込むと、五彩の露は一人である。

「此處に置かして頂戴よ。まあ、お酒の香がしてねえ、」と手を放すと、搖々となる矢車草より、薫ばかりも玉に染む、顔酔ひて桃に似たり。

「御覧なさい、矢車が酔つてふら／＼するわ。」

と罪もなく莞爾する。

お源はとそまご、

「えゝ、酒屋の小僧が、ぞんざいたものでございますから。」

「一寸、溢したの。矢張惡戯な小僧さん、……にはつかり有つて居るんですよ、其ン昨いと同一よ。」

厭社會觀のやうな口ぶり、說くが如く、言ひながら、上に上つて、片手に其まで持つて居た、紫の風呂敷包、眞四角なのを差置いた。

「お裾が汚れます、お嬢様。」

「否、可いのよ、」

と褄は上げても、袖は板の間に敷くのであつた。

「あら、お惣菜になすつて下さい。」

「どうも恐れ入ります。」

「旨くはありませんよ、……せ、お手製なんですから。」

少し途切れて、

「お内ですか……」

「はい、」

「主税さんは……あの旦那様は、」

と言ひかけて、急に氣が着いたか、

「まあ、何うしたの、暗いのねえ。」

成程、其處までは水口の明が取れたが、奥へ

行く道は晴かつた。

「も、仕樣がないのでございますよ。眞側に、」

「あら、何うしませう。」

とお源は飛上つて、慌てゝ引窓を、くるり、かたり。颯と明るく虹の幻、娘の肩から矢車草に。

此時臺所へ落着いて顔を出した、主人の主税と、妙子は面を見合はせた。

「驚かして上げませうと思つたんだけれども。」

と、笑つて、串戯を言ひながら、艶なる花と對丈に、其處に娘が跪居るので、主税は謹んで机に片手を支いたのである。

「驚かしちや、私厭ですよ。」

「おや、何故那樣水口からなんぞお入んなさいます。丁と玄關へお出迎ひをして居るぢやありませんか。」

「それでもね、」

と愛々しく打傾き、

「お惣菜なんか持込むのに、お玄關からおはいりましては不躾ですもの。それに、花にも水を遣りたかつたの。」

「綺麗ですな、まあ、お源、どうだ、綺麗ぢやないか。」

「眞側にお綺麗でございますこと。」と、是は妙子に見惚れて居る。

「同じく、頂戴が出來ますんでせう。」

「何うしようか知ら、お茶を食るんなら可いけれど、お酒を飲むんぢや、可厭相だわ。」

「え、酒なんぞ。」

「厭な、おほゝ、主税さん、飲んでるのね。」

「はゝゝ、は、さ、まあ、二階へ。」

と通用するやうな。後へする／＼衣の音。階子段の下あたりで、主税が思出したやうに、

「成程、今日は日曜ですな。」

「さうせ、然うよ、日曜が遊びに來たのよ。」

## 十二

二階の六疊の書齋へ入ると、机の向うへ引附けるは失禮らしいと思つたさうで、火鉢を座中へ持つて出て、床の間の前に坐蒲團。

「どうぞ、お敷きなさいまし。」

主税は坐つて、慇懃に手を支いて、

「まあ、よくいらつしやいました。」

「はい」と、ばかり、長年内に居た書生の事、隨分、我儘も言つたり、甘えたり、勉強の邪魔もしたり、惡口も言つたり、喧嘩もしたり。帽子と花簪の中であつた。が、さて恁うなると、心は隔てでも兵子帶と扱帯ほど隔てが出來る。

主税、其の扱にすれば、お嬢さんも晴がましく、顔の色とおなじやうな、手巾を便りにして、姿と一緒にひら／＼と動かすと、疊に陽炎が燃えるやうなり。

「御無沙汰を致しまして濟みません。奥樣もお變りがございませんで、結構でございます。先生は相變らず……飲酒りますか。」

「誰か、と同じやうに……矢張……」と莞爾。

落着かない坐りやうをして居るから、火鉢の角へ、力を入れて手を掛けながら、床の掛物に目を反らす。

主税は額に手を當てゝ、

「いや、恐縮。ですが今日のは、こりや逆上せますんですよ。前刻朝湯に參りました」

「父樣もね、矢張朝湯に參るんですよ、不思議だわね。」

主税は胸を撫ぜた體に、兩膝にがたりと手を置き、

「平に、奥樣には御內分。貴女、早瀬が朝湯に參つて居たなぞと、お話をなすつては不可ませんよ。」

「眞側に貴郎の半分でも、父樣が母樣の言ふことを肯くと可いんだけれど、學校でも皆が評判をするんですもの、人が惡いのは、私の事をお話さん。なんて冷評すわ。」

「結構ぢやありませんか。」
「厭だわ、私は、」
「だつて、貴女、先生がお嬢さんのお酌で快く御酒を召食れば、それに越した事はありません。後に其の筋から御褒美が出ます。養老の瀧でも何でも、昔から孝行な人物の親は、大概酒を飲みますものです。貴女をお酌さん。」なぞと云ふ奴は、親のために焼芋を調へ、牡丹餅を買ひ……お茶番の孝女だ。
と大に燥つて笑ふと、妙子は怨めしさうな目で、可愛らしく見たばかり。
「私は、最う歸ります。」
「御串戯をおつしやつては不可ません。これから其の焼芋だの、牡丹餅だの。」
「えゝ、私はお茶番の孝女ですから。」
「先あ、御褒美を差上げませう。」
と主税が引寄せる茶道具の、其處等を視めて、
「お客様があつたのね。お邪魔をしたのぢやありませんか。」
「否、最う歸つた後です。」
「厭な人ね！」
と唐突に澄まして云ふ。
「見たんですか。」
「見やしませんけれど。御覧なさいな。お茶臺に茶碗が伏つて居るぢやありませんか、お茶臺に茶碗を伏せる人は、貴下嫌だもの、父様も。」
「大晴れ御鑑定、本阿彌で入らつしやる。」と急須子をあける。
「誰方なの？」
「御存じのない者です。河野と云ふ私の友達……來て居たのは其母親ですよ。」
「河野さ？ 主税さん。」と妙子はふつくりした前髪で打傾き、
「學士の方ぢやなくつて、」
「知つていらつしやるか、」と茶筒にかけた手を留めた。
「其の母様と云ふのは、四十餘りの、あの、若造りで、一寸お化粧なんぞして、細面の、鼻筋の通つた、何だか權式の高い、違つて？」
「[illegible]、何うして貴女、」
「私の學校へ、參觀に。」

## 十三 新學士

「昨日は母様が來て御厄介でした。」
と、今夜主税の机の際に、河野英吉が、未だ洋服の膝も[illegible]、[illegible]威儀堂々く[illegible]と云ふ風で[illegible]、は、は、と口を擴つて、無頓着に云ふは無邪氣、餘り實の無さ過ぎるやうな笑方、文學士と肩書の名刺と共に、清しいだけに美しい若々しい髭を押揉んだ、此と目立つばかり口が大いのに、似合はず聲の優しい男で、氣焔を吐くのが愚痴のやうに聞きなされる事がある。尤も、何を爲るにも、福、徳とだけ際を數へれば濟む身分。貧乏は知らないと云つても可いから、愚痴になるわけはないが、自分の親を、其の年紀で、友達の前で、呼ぶに母様を以てするのでも大略解る。酒に醉はずにアルコホルに中毒るやうな人物で。
年紀は二十七、從五位勳三等、前の軍醫監、同姓英臣の長男、七人の同胞の中に英吉ばかりが男子で、姉が一人、妹が五人、其の中縁附いたのが三人で。姉は靜岡の本宅に、然る醫學士を婿にして、現に病院を開いて居る。
南町の邸は、祖母さんが監督に附いて、英吉が主人で、三人の妹が、それ〴〵學校に通つて居るので、既に縁組みした令嬢たちも、皆其處から通學した、別室のやうで且つ學問所、

家嚴は是に樹楊閣と題したのである。漢詩の嗜がある軍醫だから、何等か樹楊の出處があらう、但し其義審ならず。

英吉に問ふと、素湯を飲むやうな事を云ふ。枝も榮えて、葉も繁ると云ふのだらう、松柏も古いから、其處で樹楊だと。

説を為すものあり、曰く、樹楊の樹は男兒に較べ、楊は令孃たちに擬へたのであらう。漢皇重色思傾國……楊家女有、と同一字だ。道理こそ皆美人であると。それ或は然らむ。が男の方は、樹に臨風、とばかりで出處が怪しく、花骨牌から出たやうであるから、遂に孰方も信にはならぬ。

休題、南町の樹楊閣は、監督が祖母さんで、同窓が嫁たちで、更に掣る處が無いから、天下泰平、家内安全、威風は擅ひ次第、英吉は遊び放題、在學中も、酒樓はじめ烏金の絶倍で、屢々かいがいんに及んだのみか、卒業も二年ばかり後れたけれども、首尾よく學位を得たと聞いて、親たちは先づ占めた、ひきであをたんの摑みだと思ふと、手八の蒔直しで夜泊の、書流連。祖母さんの命を承けて、妹達から注進櫛の齒を挽くが如し。で、意見かたがた、然るべき嫁もあらばの寸法で、此度母親が上京したので、妹子が通ふ女學校を參觀したと云ふにつけても、意味ある處が解せられる。

「何うだい、君、窮屈な思ひをしたらう。」

親が參つて、嘸御迷惑、と惡氣は無い挨拶も、母様で、威儀で、嚴重で、窮屈な思ひを、と云ふから、何と答いか、恐入つたらう、と極めつける如くに聞える。

例の調子と知つて居るから、主税は別に氣にも留めず、勿論、恐入る必要も無いので、

「妹に持たうと云ふんぢやなし、些とも窮屈な事はありません。」

机の前に大胡坐で、悠然と煙草を輪に吹く。

「しかし、君、其の口から、何だらう。」

と其の何だか、火箸で灰を引掻いて、

「僕は窮屈で困る。母様が傾倒たから、自から襟を正すと云つたやうな工合でね。……眞の妹なんざ、隨分脫兎の如しだけれど、母様の前ぢや殆ど處女だね。」

と髭を捻る。

十四

「で、何かね、母様は、」

と主税は笑ひながら、故と同一やうに母様と云つて、煙管を敲き、

「しばらく御滯在なんですかい。」

「一月ぐらゐ居るかも知れない、あゝ、」と火鉢に凭掛る。

「ぢやあ當分謹慎だね。今夜なぞも、是から眞直にお歸りだらう、何處へも寄りやしますまいな。」

「うふゝ、考へてるんだ。」と又灰に線を引く。

「相變らず辛抱が出來ないか。」

「うむ、何、然うでも無い。母様が可愛がつてくれるから、來て居る間は内も愉快だよ。賑かぢやあるし、料理が上手だから食物も旨いし、君、昨夜は妹たちと一所に西洋料理を奢つて貰つた、僕は七皿喰つた。はゝは、」

と火箸をポンと灰に投げて、仰向いて、頬杖ついて、片足を崩になる。

「御馳走と云へば内へ、來るお組だが、」

皆まで聞かず、英吉は莞爾したやうに、

「ありや君、最う來なくッても可いよ。餘り失禮な奴だと、母様が大變感情を害したからね、君から斷つてくれ給へ。」

と眞面目で云つて、衣兜から手巾をそゝくさ引張出し、口を拭いて、

「どうせ東京の魚だもの、鯛のを買つたつて新鮮しいのは無い。偶に總菜の中で刎ねてると

思や、鰻で鳴くか、然うでなければ比目魚の下に、手品の鯔が泳いでるんだと、母様が然う云つたつけ。」

め組が聞いたら、立處に汝の一命覺束ない、事を云つて、けろりとして、

「静岡は口の奢つた、旨いものを食ふ處さ、汽車の辨當でも試給へ、東海道一番だよ。」

主税は何處までも髭のある坊ちやんにして、邪はない氣で、

「いや、何か、手前ともで、め組のものを召食つて、大層御意に叶つたから、是非寄越してくれと誰かゞ仰有るもんだから取あへず差立てたんだ。御家風を存じないでもなかつたけれども、承知の上で、君が斷つてと云つたから、」

「僕は構はん。僕は構はんが、あの調子だもの、祖母さんや妹たちは固よりだ。故郷から連れて來て居る下女さへ吃驚したよ。母様は、僕を呼びつけて談じたです。あんなものに朋輩呼はりをされるやうな惡い事をしたか。其處等の藝妓にや、魚屋だの、蒲鉾屋の職人、蕎麥屋の出前持の客が有ると云ふから、お前、何處ぞで一座でもおしたらう、とね、叱られたです。

僕は何、彼は通りもんです。早瀬の許へ行つても、同一、今日は旨えものを食はせて遣らう。居るか、と云つた調子です、と云つたら、母様が云ふにや、當然だ、早瀬ぢや、細君……」

と云ひかけて、ぐつと支へたが、ニヤリとして、

「君、僕は饒舌りやしないよ。僕は決して饒舌らんさ。秘密で居ることを知つてるから、君の不利益になるやうな事は云はないがね、妹たちが知つてるんだ。何處かで聞いて來たもんだから、ついね、」

と氣の毒さう。

「まあ、可い、そんな事は構はないが、僕と懇意にしてくれるんなら、最う些と君、遊蕩を控へて貰ひたいね。

昨日も君の母様が來て、つくづく、若様の不始末を愚痴るのが、何だか僕が取卷きでもして、わッと浮かせるやうぢやないか。

高利を世話をして、口錢を取る。酒を飲ませてお流頂戴。切々内へ呼び出しちや、花骨牌でも撒きさうに思つてるんだ。何の事はない、美少年錄のソレ何たつけ、安保箭五郎直行さ。甚しきは美人局でも遣りかねないほど輕蔑して居る。母様の口ぶりが、」

と稍其の調子が強くなつたが、急に事も無げな串戯口。

「えゝ、隊長、些と謹んでくれないか。」

「母様の來て居る内は謹慎さ。」

と灰を掻きまはして、

「其の代り、西洋料理七皿だ。」と火箸をバタリ。

## 十五

「ぢやあ色氣より食氣の方だ、何だか自棄に食ふやうぢやないか。しかし、まあ其で濟みや結構さ。」

「濟みやしないよ、七皿のあとか、一銚子、玉子に海苔と來て、おいゝ、おひけと成ると可いんだけれど、矢張一人で寢るんだから、大きに足が突張つてです。それに母様が來たから、些とは小遣があるし、二三時間駈出して行つて來ようかとも思ふ。何うだらう、君、迷惑をするだらうか。」

と甘えるやうな身體つき、座蒲團にぐつたりして、横合から覗いて云ふ。

「何が迷惑さ。君の身體で、御自分お出かけなさるに、些とも迷惑な事はない。迷惑な事はないが……」

「否、處が今夜は、君の内へ來たことを、母様が知つてるからね。今のやうな話ぢや、父君が引張出したやうに、母様に思はれようかと、心配をするだらうと云ふんだ。」

「お疑ひなさるは御勝手さ。癪に障ればつたつて、恐い事、何があるものか、君の母親が何だ?」

と云ひかけて、語氣をかへ、

「然う云つ了へば、實も蓋もない。痛くない腹を探られるのは、僕だつて厭だ。それにしても早瀬へ遊びに行くと云ふ君に、よく故障を入れなかつたね。」

「うむ、そりや彼です、君に逢はない内は疑つて居ないでもなかつたがね、」

敢て險面は無い容子で、

「昨日逢つてから、然うした人ぢやないやうだ、」

と頷いて居た。「母樣はね、君、目が高いんだ、所謂士を知る明ありだよ。」

「おや、何か、士を知る明があつて、それで、何か、然うした人ぢやないやうだ、(やうだ。)と未だ疑があるのかい。」

「だつて唯一面識だものね、三四度交際つて見給へ。」「直ぐ分るよ、五度とは言はない。」

「何、お母樣に交際ふには當らんぢやないか。せめて年増でもあればだが、最う婆さまだ。」

と横を向いて、微笑んで、机の上の本を見た。何の書たか酒井藏書の印が見える。眞砂町から借用したものであらう。

英吉は、火鉢越に覗きながら、其の段は見るでもなく、

「年紀は取つてるけれど、未だ見た處は若いよ。君、婦人會なんぞぢや、後姿を時々姉と見違へられるさ。

で、何だ、然うやつて人を見る明が有るもんだから、婿の選擇は殘らず母樣に任せてあるんだ。取當てるよ。君、内の姉の婿にした醫學士なんざ大當りだ、病院の立派になつた事を見給へな。」

「僕なんざ御選擇に預れまいか。」

と氣を、其の書物に取られたか、木に竹を接いだやうな事を云ふと、以ての外眞面目に受けて、

「君か、君は何た、學位は持つちや居らんけれど、獨逸のいけるのは僕が知つてるからね。母樣の信用さへ得てくれりや、何だ。えゝ君、妹たちには、固より評判が可いんだからね、色男、はゝは。」

と他愛なく身體中で笑ひ、

「だつて、如何する。階下に居るのを、」

背後を見返り、

「湯かい。見えなかつたやうだつけ。」

主税は堪へず失笑したが、向直つて話に乘るやうに、

「まあ、可い加減にして、疾く一人貰つたら何うだ。人の事より御自分が。然うすりや道樂も留みます。安保箭五郎惡い事は言はないが、何うだ。」

「むゝ、其の事だがね。」

とぐつたりして居た胸を起して、又手巾で口を拭いて、何爲か、縞のずぼんを揃へて、了と畏まつて、

「實は其の事なんだ。」

「何が其の事だ。」

「矢張其の事さ。」

「いづれ其の事だらう。」

「えゝ、知つてるのか。」

「些とも知らない。」

と煙管を取つて、

「いや、眞面目に〱、何か、心當りでも出來たかね。」

## 縁談

### 十六

時に河野が其の事と言へば、孰れ婦に違ひないが、早瀬は何時も此の人から、其の收紅拾紫、

鶯を鳴かしたり、蝶を弄んだりの件に就いて、いや、あゝ云つたが是は何と、係う申したが其は如何。無心をされたが何うしたものか、成るべくは斷りたい、斷つたら嫌はれようか、嫌はれては甚だ不好い。一體戀人でありながら金子をくれろは變な工合だ、妙だよ。其の意志のある處を知るに苦む、などゝ、ドリ！紅をさして、蚯蚓までも突附けて、意見？を問はれるには恐れて居る。

誇るに西洋料理七皿を以てする、式の如き君樣であるから、冷評せば眞に受ける、打棄つて置けば悄げる、はぐらかしても乘出す。勢ひ可い加減にでも返事をすれば、即ち期せずして遊蕩の顧問になる。尠からず惱まされて、自分にお蔦と云ふ弱點があるだけ、人知れず冷汗が習であつたから、其の事なら最ら聞くまい、と手強く念を入れると、今夜はずぼんの膝を畏つただけ大眞面目。尤も馴染の相談も串戲ではないのだけれども。特に更つて、つひにない事、もぢ〳〵して、

「實はね、母樣も云つたんだ、君に相談をして見ろと……

「緣談だね、眞面目な。」

珍らしさうに額を見て、

「母樣から御聲懸りで、僕に相談と云ふ緣談の口は、當時心當りが無いが。あゝ、」

と輕く膝を叩いた。

「隣家のかい。むゝ、彼は別嬪だ。一寸高慢ぢやあるが、其のかはり學校はなか〳〵出來るさうだ。」

英吉は小兒のやうに頭を振つて、

「うゝむ、違ふよ。」

「違ふ。ぢや誰だい。」

と落着いて尋ねると、慌てゝ衣兜へ手を突込み、肩を高らして、一ツ搖つて、

「眞砂町の、」

「眞砂町！……」

と聞くや否や、鸚鵡返しに力が入つた。床の間にしつとりと露を被いだ矢車の花は、燈の明を餘所に、暖か過ぎて障子を透した、富士見町あたりの大空の星の光を宿して、美しく活つて居る。

見よ、河野が座を、斜に避けた處には、昨日の袖の香を留めた、友染の花も、綾の霞も、疊の上を消えないのである。

眞砂町、と聞返すと齊しく、屹と其の座に目を注いだが、驚破と謂はゞ身を以て、影をも守らむ意氣組であつた。

英吉は又火箸を突支棒のやうにして、押立尻をしながら、火鉢の上へ乘掛つて、

「あの、酒井ね、君の先生の。彼處に娘があるんだね。」

「あるさ。」と云つたが、餘り取つても着けないやうで、我ながら冷かに聞えたから、

「知らなかつたかな、君は。隨分其の方へかけちや、脫落はあるまいに。」

「洋燈臺下暗しで、（と大に洒落れて、）薩張氣が付かなかつた。君ン許へもちよく〳〵遊びに來るんだらう。」

「お成りがあるさ。僕には御主人だ。」

「ぢや一度ぐらゐ逢ひさうなものだつた。」

何か殘惜く、かごとがましく、不平さうに謂つたのが、何故見せなかつた、と詰るやうに聞えたので、早瀨は石を突流す如く、

「緣が無かつたんだらうよ。」

「處があります、はゝは、」と、こゝで又相好ともに足を崩して、ぐたりと橫坐りになつたに、

「思ふに逢はずして思はざるに……ぢやない。向うも來れば僕も來るのに、此家で逢ひさうなものだつたが、然うでなくつて君、學校で見たよ。あゝ、あの人の行く學校で、妙子さんの行く學校で。」

と、何だか話に乘らないから、畳みかけて云つた。妙子、と早や名の此の男に知られたのを、早瀬は其の人のために恥辱のやうに思つて、不快な色が眉の根に浮んだ。
「如何して、學校で、」
と此際故と尋ねたのである。母子で參觀したことは、最う心得て居たのに。

## 十七

「如何も恁うも無いさ。母樣と二人で參觀に出掛けたんだ。教頭は僕と同窓だからね。先にから來て見い、來て見い、と云ふけれど、顏の方ぢや大した評判の無い學校だから、馬鹿にして居たが驚いたね。勿論五年級にや佳いのが居ると云つたつけが、」
「おやあ其の教頭、媒酌人も遣るんだな。」
と舌尖三分で切附けたが、一向に感じないで、
「遣るさ。其のかはり待合や、何かぢや、僕の方が媒酌人だよ。」
「怪しからん。黒と白とか、待て？ 海老茶と紺縮緬と交換たな。いや、可い面の皮だ。づらりと並べて選取りにお目に掛けます、小格子の見世だ。」
「可いぢやないか、學校の目的は、良妻賢母を造るんだもの、生理の講義も聞かせりや、媒酌もしようぢやあないか。」
と此の人にして大警句。早瀬は恐入つた體で、
「成程、」
「勿論人を見て爲るこツた、いくら媒酌人をすればツて、人毎に許しやしない。其處は地位もあり、財産もあり、學位も有るもんなら、」
と自若として、自分で云つて、意氣頗る昂然たりで、
「講堂で良妻賢母を拵へて、丁と父兄に渡す方が、雙方の利益だもの。教頭だつて、其處は考へて居るよ。」
「で何かね、」
早瀬は斜に開き直つて、
「其處で僕の、僕の先生の娘を見たんだな。」
「あゝ、然も首席よ。出來るんだね。而して見た處、優美で、品が良くつて、愛嬌がある。澤山ない、滅多にないんだ。高級三百顏色なし。照陽殿裏第一人だよ。恰も可、學校も照陽女學校さ。」
と冷えた茶をがぶりと一口。浮かれの體とおいてなすつて、
「はは、僕ばかりでない、第一母樣が氣に入つたさ。彼なら河野家の嫁にしても、まあ〳〵……恥かしくない、と云つて、教頭に尋ねたら、酒井妙子と云ふんだ、一寸、教員室で立話をしたんだから、委しいことは追てとして、其日は歸つた。
すると昨日、母樣が此處へ訪ねて來たらう。歸りがけに、飯田町から見附を出ようとする處で、腕車を飛ばして來た、母衣の中のがそれだツたつて、矢車の花を。」
と言ひかけて、床の間を凝と見て、
「あゝ、是だ〳〵。」
ひよいと腰を擡げて、道學にないと手を伸ばした樣子が、一本引拔きさうに見えたので、
「河野！」
「えゝ、」
「それから。おい、肝心な處だ。フム、」
乘つて出たのに引込まれて、ト居直つて、
「あの砂埃の中を水際立つて、驅け拔けるやうに、それや綺麗だつたと云ふのだ。立留つて見送ると、此の内の前へ車を下ろしたらう。徐々引返したんです、母樣がね。休んで居た車夫に、今のお孃さんは眞中の家へですか。……い、然うで、と云ふのを聞いて歸つたのさね。」

と早口に饒舌つて、
「美人だねえ、君、」とゆつたり顔を見る。
ト遣つた工合は、世が美人のやうだ、醒た。
「結婚なんざ申込んぢや、」と笑ひながら、人に戀するかの如く云つて、丁と肩を突いて、
「浮氣もいゝ。」
「浮氣ぢやない、今度ばかしや大眞面目だがね、君、何うかなるまいか。」
又甘えるやうに、顔を正的に突出して、頤を支へた指で、頬に託し〳〵、爪を嚙る。
早瀬はしばらく默つたが、思はず拱いて居た腕を解くと、背後ざまに机に肱、片手を緊乎と膝に支いて、
「貰ふさ。」
「え。」
「お貰ひなさい。」
「くれやうか。」
「話によつちや、くれませう。」
「後繼者ぢやないんだね。」
「勿論後繼者ぢやあない。」
「おや、まあ、話は出來るとして、」と、澄まし云つて、今度は心ありげに早瀬の顔を。
「だが、何だよ、私ア、」と云つた調子が變つて、
「媒酌人は斷るぜ、照陽女學校の教頭ぢやないんだから。」

十八

然うすると英吉が、豫て心得たりの態度で、媒酌人は勿論、然るべき人をと云つたのか、其許如きに勤まるものかと、輕んじ賤しめたやうに聞えて、
「それが、いざとなりや、教育界に名望のある道學者先生の叔父もあるし、叔父様の幕下で、現下其筋の顯職にある人物も居るんだから、立派に遣つてくれるんだけれど、其の代、媒酌人を立てるまでに、」
と手を揃へて、火鉢の上へ突出して、いや、と遣る、
「先方の身分も調べねばならず、妙子、」と最う呼棄てにして、「の品行の點もあり、まあ、學校は優等としてだね。酒井は飲酒家だと云ふから、遺傳性の懸念もありだ、其は大丈夫としてからが、ああ、云ふ差しいことは有り勝たから、肺病の憂があつてはならず、酒井の親族關係、妙子の交友の如何、其處等を一ッ委しく聞かして貰ひたいんだがね。」
主税は堪りかねて、ばり〳〵と烏府の中を突崩した。此の暖いのに、河野が雨手を翳すほど、火鉢の火は消えかゝつたので、彼は炭を繼がうとして横向になつて居たから、背けた顔に、蒼褪めた顔の色は見えなかつたが、
「最う一度聞かう、何だつけな。先方の身分？」
「うむ、先方の身分さ。」
「獨逸文學者よ、文學士だ……大學教授よ。知つてるだらう、私の先生だ。」
「む、、そりや分つてるがね、妙子の品行の點もあり、」
「それから、」
「遺傳さ、」
「肺病かね、」
「親族關係、交友の如何さ。何、女達の事なんぞ、大した條件では無いよ。結婚をすれば、處女時代の交際は自然に疎くなるです。其に母様が嚴しく躾ければ、其の方は心配はないが、む、、未だ要點は財産だ。が、酒井は困つて居やしないだらうか。誰も知つた俠客風の人間だから、人の世話をすりや、つい物費も少くない。其上にや、評判の飲酒家だし、遊ぶ方も盛だと云ふし、借金は何うだらう。」
主税は默つて、茶を注いだが、強ひて落着いた容子に見えた。
「何かね、持參金でも望みなのかね。」
「馬鹿を謂ひ給へ、妹たちを緣附けるに、此方

から持參はさせるが、僕が結婚するに、苟も河野の世子が持參金などを望むものか。

君、僕の家ぢや、何だ、女の兒が一人生れると、七夜から直ぐに積立金をするよ。それ立派に支度が出來るだらう。結婚してからは、其の利息が化粧料、小遣と成らうと云ふんだ。自然嫁入先でも幅が利きます。尤も其の金子を、婿の名に書き替へるわけぢやないが、河野家に於てさ、一人々々の名にして保管してあるんだから、例へば婿が多日月給に離れるやうな事があつても、忽ち破綻を生ずる如き不面目は無い。

と云ふ圓滿な家庭になつて居るんだ。で前方の財産は望ぢやないが、餘り困つて居るやうだと、親族の關係から、つい迷惑をする事に成つちや困る。娘の縁で、一時借用なぞと云ふのは有りがちだから。」

「酒井先生は江戸兒だ！」

と唐突に一喝して、

「神田の祭禮に叩き賣つても、娘の縁で借りるもんかい。河野！」

と屹と見た目の鋭さ。眉を昻げて、

「髭があつたり、本を讀んだり、お互の交際は窮屈だ。撲倒すのを野蠻と云ふんだ。」

お蔦は湯から歸つて來た。艶やかな濡髮に、梅花の匂馥郁として、襦子の襟の烏羽玉にも、香やは隱るゝ路地の宵。格子戸を憚つて、臺所の暗がりへ入ると、二階は常ならぬ聲高で、お源の出迎へる氣勢もない。

石鹸を卷いた手拭を持つたまゝで、密と階子段の下へ行くと、お源は扉に附着いて、一心に聞いて居た。

## 十九

「先生が酒を飲まうと飲むまいと、借金が有らうと無からうと、大きなお世話だ。遺傳が、肺病が、品行が何だ。當方からお給事をしようと云ふんぢやなし、第一欲しいと仰有つたつて、差上げるやら、平に御免を被るやら、其邊も分らないのに、人の大切な令孃を、裸體にして檢査をするやうな事を聞くのは、無禮ぢやないか。

私あ第一、河野、世間の宗教家と稱ふる奴が、吾々を捕へて、罪の兒だの、救つて遣るのと、商賣柄好きな事を云ふ。藥屋の廣告は構はんが、しらきちやうめんな人間に向つて罪の子とは何んだい。本人は兎も角も、其の親たちに對して怪しからん言種だと思つてるんです。

今君が尋問に及んだ、先生の令孃の身許檢べの條件が、唯の一ヶ條でもだ、河野英吉氏の意志から出たのなら、私は最う學者や紳士の交際は御免蒙る。其のかはりだ、半纏着の附合ひになつて撲倒すよ。はゝは、えい、おい、」

と調子が碎けて、

「母樣の指揮だらう、一々、私は恐らして懇意にして居るから、君の性質は知つてるんだ。君は惚れたんだらう、一も二もなく妙ちやんを見染めたんだ。」

「ら、まあ……」と對手の血相もあり、もぢもぢする。

「惚れてよ、可愛い、可憐いものなら、何故命がけになつて貰はない。

結婚をしたあとで、不具にならうが、肺病にならうが、また其の肺病がうつつて、其がために共々倒れようが、そんな事を構ふもんか。

まあ、何は措いて、嫁の内の財産を云々するなんざ、不埒の至だ。萬々一、實家の親が困窮して、都合に依つて無心合力でもしたとする。可愛い女房の親ぢやないか。自分にも親なんだぜ、餘裕があつたら勿論貢ぐんだ。無ければ斷る。が、人情なら三杯食ふ飯を一杯づゝ分けるんだ。着物は下着から脱いで遣るのよ。」

と思ひ入つた體で、煙草を持つた手の尖がぶ

るよると云へると、相手の河野は、一向氣にも留めない樣子で、廊下の窓で聞いて居ただけ其れ一寸たが、默つて門の外で、思はずはら〳〵と落涙したのはお菅である。

「何の話?」と傍の騷しいのを慮つて、階子段の下で漸と聞くと、「縁談でございますよ、」とお源の答へに、ええ、旦那の、と湯上りの顔と上氣した顔の色を變へたが、「否、河野様が御自分の、」と聞いて、まあ、と呆れたやうに莞爾して、忍んで段を上つて、上り口の次の室の三疊へ、襖子を捲つて拔足で、兩方へ開けた襖の蔭へ入つたのを、兩人には氣が付かずに居るのである。

と河野は自分には勢のない、聞くものには張合のない口吻で、

「だが、母さんは、

「母様が何だ、母様が娶ふんぢやあるまい、君が女房にするんぢやないか、何でも其の選方だから、いや、標識にかゝつて、見合をしたの、と屢々聞かされるのが一々斷定はせんけれども、雜と三十ぐらゐあつた。其の内、君が、自分で斷つたのは一ツもあるまい。皆母さんが惡う云つた、叔父さんが、あゝだ、父さんが、それだ、と難癖を附けちや破談だ。

君の一家は、凡そ何のくらゐな御門閥かは知らん。河野から縁談を申懸けられる天下の婦人は、いづれも恥辱を蒙るやうで、豫て不快に堪へんのだ。

昔の國主大名が綺姿で搜せば知らず、そんな御註文に應ずるのが、えゝ、河野、何處にだつてあるものか。」

と果は歎息して云ふのであつた。河野は急に景氣ついて、

「何、無いことはありやしない。そりや有るよ。君、僕ン許の妹たちは、誰でも其註文に應ずるやうに仕立てゝあるんだ。

揃つて容色も好、又不思議に皆別嬪だ。知つてるだらう。生れたての嬰兒の時は、隨分、をかしな、色の黑いのもあるけれど、母さんが手しほに掛けて、妙齢にするまでには、兎も角も十人並以上になるんだ、ね、然うぢやないか。」

主税は然す言もなく、是には否應なく頷かされたのである。蓋し事實であるから。

## 一家一門

### 二十

「それから、財産は先刻も謂つた通り、一人一人に用意がしてある。持參なり、何なりは、父樣も兄も本職だから注意が屆くよ。其他は萬事母樣が預かつて一手に躾けるんだ。

好嫌は別として、此方で他に求める條件だけは、ちやんと此方にも整へてあるんだから、强ち身勝手ばかり謂ふんぢやない。

けれども、品行の點は、疑へば疑へると云ふだらう。其處はね、生理上も斟酌をして、徐々色氣が、と思ふ時分には、妹たちが、未だ未だ自分で、男を何うの戀うのと云ふ惡智慧の出ない先に、親の鑒定で、婿を見附けて授けるんです。

否も應も有りやしない。衣服の柄ほども文句を謂はんさ。謂はない筈だ、何にも知らないで授けられるんだから。しかし間違ひはない、其處は母さんの目が高いもの。」

「すると何かね、婿を選ぶにも、凡そ其の條件が滿足に解決されないと不可んのだね。」

「勿論さ、だから、皆圓滿に遣つとるよ。第一の姉が醫學士さね、直の妹の縁附いて居るのが、理學士。其の次のが工學士。皆食ひはぐれはないさ。……今又話のある四番目のも醫學士さ、」

「妙に選取つて揃へたもんたな。」

「一應、其は父様の主義で、兄弟一家一門を揃へて、天下に一階級を形造らうと云ふんだ。成るべくは、銘々夫々の收入も、一番の姉が三百圓なら、次が二百五十圓、次が二百圓、次が百五十圓、末が百圓と云つた工合に長幼の等差を整然と附けたいと云ふわけだ。

先づ行はれて居る、今の處ぢや。而して其の子、其の孫、と次第に此の社會に於ける地位を向上しようと云ふのが理想なんです。例へば、今の代が學士なら、其の次が博士さ、大博士さね、君。

謂つて見れば、貴族院も、一家族で一黨を立てることが出來る。内閣も一門で組織し得るやうにと云ふ遠大の理想があるんだ。又、其に、父様にや孫も八九人出來た。婿を引取つて教育して居るのも三四人ある。着々として歩を進めて居る。何でも妹たちが人才を引着けるんだ。」

人事ながら、主税は内顧に顔を潮して、

「おや、君の妹たちは、皆學士を釣る餌だ。」

「一言でも可い、擽はれ、一原氏の婿だもの。一人や二人落第が出來ても可い、そりや大丈夫心配なしだ。僕たちの目は曇りやしない。家族々々に地位を高めようとするんだから、奇才俊才、傑物は不可。然う云ふのは時々失敗を遣る。望む處は凡才で間違ひの無いのが可いのだ。正々堂々の陣さ、信玄流です。小豆長光を翳して旗下へ切込むやうなのは、快は快なりだが、永久持重の策にあらず……

其の理想に於ける河野家の僕が中心なんだらう。其の中心に据らうと云ふ基なんだから、大いに愼重の態度を取らんけりや成らんぢやないか。詰り一家の女王なんだから。」

河野は、渠が所謂正々堂々として說くこと一條。其の理想に於ける根ざしの深さは、此の男の口から言つても、僕の愚痴のやうに聞えるのや、其の落着かない腰には似ない、殆ど動かすべからざる、確乎としたものであつた。

「いや、能く解つた。成程其の主義ぢや、人の娘の體格檢査をせざあなるまい。しかし私は厭だ！　私の娘なら斷るよ、例ひ御試驗には及第を致しましても、」

と冷かに笑ふと、河野は人物に肖ず、此には傲然として、信ずる處ある如く、合點んだ笑ひ方をして、

「でも、條件さへ通過すれば、僕は娶ふよ。はゝゝ、些と貰ふね、おい、一本貰つて行くぜ。」

と脫兎の如く、豫て計つて居たやうに、此時ひよいと立つと、體を斜に、衣兜に片手を突込んだまゝ、急々と床の間に立向うて、早や手が掛つた、花の矢車。

片膝立てゝ、颯と色をかへて、

「不可いよ。」

「何故かい？」

と澄まして見返る。主税は、稍々あせつた氣味で、

「何故と云つて、」

「はゝはゝ、其處が、肝心な處だ、と母様が云つたんだ。」

と突立つたまゝ、ニヤリとして、

「早瀬、君が何うかして居るんぢやないか、ええ、おい、嫂子を。」

## 二十一

冷か、熱か、匕首、寸鐵にして、英吉の其の舌の根を留めようと急つたが、咄嗟に針を吐く能はずして、主税は默つて腰を撫る。

英吉は、此處ぞ、と土俵に仕切つた形で、片手に花の莖を引攫み、片手で髮を捻りながら、目をぎろ／＼と……但冴えない光で、

「だから、君、何丹何藏分髮と云ふんだらう。其なら然う云ひ給へ、僕の方にも又手加減があ

るんだ、何うだね。」
信玄流の敵が、却つて此の奇兵を用ゐたにも係らず、主税の答へは車懸りでも何でもない、極めて平凡なものであつた。
「怪しからん事を云ふな、串戲とは違ふ、大切なお孃さんだ。」
「其の大切のお孃さんを何うかして居るんぢやないか、其とも心で思つてるんか。」
「怪しからん事を云ふなと云ふのに。」
「おや確かい。」
「御念には及びません。」
「そんなら何も、然ら我が河野家の理想に反對して、人が折角聞かうとする、妙子の容子を祕さんでも可いぢやないか。話が纏まりや、其の人にも幸福だよ、河野一黨の女王になるんだ。」
「幸か、不幸か、そりや知らん、が、私は厭だ。一門の繁榮を望むために、娘を餌にするの、嫁の體格檢査をするの、と云ふのは眞平御免だ。惚れたからは、癩でも肺病でも構はんのでなくつちや、妙ちやんの相談は決してせん。勿論お孃は瑕のない玉だけれど、露出しにして河野家に御覽に入れるのは、平相國清盛に招かれて月が顏を出すやうなものよ。」と聊か云ひ得て濃い烟草を吻と吐いたは、正に隱の如く、山の端の朧氣ならむ趣であつた。
「なら可い、君に聞かんでも餘所で聞くよ。」
と案外また英吉は腹立つた様子もなく、爭や勝てりの態度で、
「しかし緣起だ、こりや一本貰つて行くよ。妙子が御持參の花だから、」
「…………」
「君が何うと云ふ事も無いのなら、一本二本惜むにや當るまい、こんなに澤山あるものを、」
「…………」
「失敬、」
あはや拔き出さうとする。と床しい人香が、はつと襲つて、
「不可ませんよ。」と半纏の襟を扱きながら、お蔦が襖から、すつと出て、英吉の肩へ手を載せると、蹌踉けるやうに振向く處を、入違ひに床の間を背負つて、花を庇つて膝をついて、
「厭ですよ、私が活けたのが臺なしになります。」
と嫣然として一笑する。
「だつて、だつて君、突込んであるんぢやないか、池の坊も遠州もありやしない。些とぐらゐ拔いたつて、敢てお手前が崩れると云ふでもないよ。」
とさすがに手を控へて、例の衣兜へ突込んだが、お蔦の目前を、(手を提ろ、手提ろ。)の體で、靴足袋で、どたばた、どたばた。
「はい、これは柳橋流と云ふんです。柳のやうに房々活けてありませう、ちやんと流儀があるぢやありませんか。」
「嘘を吐き給へ、まあ可いから、僕が惚込んだ花だから。」
主税は火鉢をぐつと手許へ。お蔦はすらりと立つて、
「だつて最う主のある花ですもの。」
「主がある！」と目を睜る。
「えゝ、ありますとも、主税と云つてね。」
「それ見ろ、早瀬、」
「何だ、お前、」
「否、貴下、此の花を引張るのは、私を口說くのと同一譯よ。主があるんですもの。さあ、引張つて御覽なさい。」
と寄ると、英吉は一足引く。
「さあ、口說いて頂戴、」
と寄ると、英吉は一足引く。微笑みながら摺り寄るたびに、たじ／＼と退つて、やがて次の間へ、もそりと出る。

# 道學先生

## 二十二

月の十二日は本郷の藥師樣の縁日で、電車が通るやうに成つても相かはらず賑かな。書肆文求堂を最う此方と富坂寄の大道へ出した露店の、如何はしい道具に交ぜて、ばら〳〵古本がある中の、表紙の除れた、けばの立つた、端摺の甚い、三世相を開けて、燻ぼつたカンテラの燈で見て居る男は、是は、早瀬主税である。

何の事ぞ、酒井先生の薫陶で、少くとも外國語を以て家を爲し、自腹で朝酒を呷る者が、今更如何なる必要があつて、前世の鸚鵡たり、猩々たるを懸念する？

尤も學者だと云つて、天氣の好い日に淺草をぶらついて、奧山を見ないとも限らぬ。爾時如何なる必要があつて、玉乘の看板を觀ると云ふ、奇問を發するものがあれば、其の者愚ならずんば狂に近い。鰻屋の前を通つて、好い匂がしたと云つても、直ぐに隣の茶漬屋へ駈込みの、箸を持ちながら嗅ぐ事をしない以上は、速斷して、伊勢屋だとは言憎い。

主税とても、唯通りがゝりに、露店の古本の中にあつた三世相が目を遮つたから、見たばかりだ、と言へば其までゞある。けれども、渠は目下誰かの縁談について、配慮しつゝあるのではない歟。然も開けて見て居る處が――夫婦相性の事――は棄置かれぬ。

且つ其の顏色が、紋付の羽織で、褄の厚い內君と、水兵服の坊やを連れて、別に一人抱いて、鮨にしようか、汁粉にしようか、と歩行つて居る紳士のやうな、平和な、樂しげなものではなく、主税は何か、思ひ屈した、沈んだ、憂はしげな色が見える。

好男子世に處して、屈託さうな面色で、露店の三世相を繰るとなると、柳の下に掌を見せる、八卦の亡者と大差はない、違ひは寧ろそれ以上である。

所以ある哉、主税の其の面上の雲は、河野英吉と床の間の矢車草……お妙の花を爭つた時から、早や其の影が懸つたのであつた。爾時はお蔦の機智で、柔能く强を制することを得たのだから、例なら、いや、女房は持つべきものだ、と差對ひで祝杯を擧げかねないのが、冴えない顏をしながら、湯は込んで居たか、と聞いて、フイと出掛けた樣子も、其縁談を聞いた耳を、水道の水で洗はむと欲する趣があつた。

本來だと、朋友が先生の令孃を娶りたいに就いて、下聽に來たものを、聞かせない、と云ふも依怙地なり、料簡の狹い話。二才らしく又何も、娘がくれた花だと云つて、人に惜むにも當らない。此の筆法を以てすれば、情婦から來た文殼が紛込んだと云ふので、紙屑買を追懸けて、慌てゝ盜賊と怒鳴り兼ねまい。此方の人措いて下さんせ、と洒落にも豔めて然るべき者までが、其折から、一寸留女の格で早瀬に花を持たせたのでも、河野一家に對しては、お蔦さへ、如何の感情を持つかゞ明かに解る。

其は英吉と、內の人の結婚に對する意見の衝突の次第を、襖の蔭で聽取つた所爲もあらう。然うでなくつても、惚れさうな藝妓はないか、新學士に是非と云つて、達引きさうな朋輩はないか、と煩く尋ねるやうな英吉に、厭なこつた、良人が手を支いてものを言ふ大切なお孃さんを、とお蔦は唯それだけでさへ引退る。處へ、幾條も幾條も家中の縁の絲は兩親で元結をして、颯さらりと鵜繩に捌いて、娘たちに浮世の波を潜らせて、鯉を先途と鮎を呑ませて、ぐツと手許へ引手繰つては、咽喉をギウの、獲物を占め、一門一家の繁昌を企むやうな、ソンな勘作の許へお孃さんを嫁られるもんか。

否、私が肯かないわ、とお源をつかまへて談ずる處へ、熱い湯だつた、と幾干か氣色を直して、がたひし、と歸つて來た主税に、一寸お前さん、大丈夫なんですか、とお蔦の方が念を入れたほどの勢。

## 二十三

何が大丈夫だか、主税には唐突で、即座には合點しかねるばかり、お蔦の方の意氣込が凄じい。

まだ、取留めた話ではなし、唯學校で見初めた、と脈らしく云ふ。其も、戀には丸木橋を渡つて落ちてこそ然るべきを、石の橋を叩いて、杖を支いて渡らうとする縁談だから、其處等聽合はせて歩行く中に、誰かの口で水を注せば、直ぐに川留めの洪水ほどに目を廻してお流れになるだらう。

雖然、何爲か、母子連で學校へ觀に行つた、と聞いただけで、お妙さんを觀世物にし、又爲れたやうで癪に障つた。然し物にはなるまいよ、と主税が落着くと、否、私は心配です。何處を何う聞き廻つたつて、あの、お孃さんに難癖を着けるものはありません。いづれ眞砂町様へ言入れるに違ひますまい。それに河野と云ふ人が、他に取柄は無いけれど、唯賴もしいのが押の強いことなんですから、一押二押で、惡くすると出來ますよ。出來るやうな氣がしてならない。私は何だか最うお妙さんが、ぺろ〳〵と嘗められる夢を見て、今夜にも寢て居て魘されさうで、お可哀相でなりません。貴郎油斷をしちや厭ですよ、と云つた――お蔦の方が、其晩毛蟲に附着かれた夢を見た。何時も河野の其の眉が似て居ると思つたから。――

尤も河野は、綺麗に細眉にして居たが、剃りづけませぬやう、と父様の命令で、近頃太くして居るので、毛蟲ではない、臥蠶である。然るに此の不生産的の美人は、蠶の世を利するを知らずして、毛蟲の厭ふべきを恐れて居た、不心得と言はねばならぬ。

で、お蔦は、例ひ貴郎が、其癖、内々お妙さんに岡惚をして居るのでも可い、河野に添はせるくらゐなら、貴郎の令夫人にして私が追出される方が一層増だ、とまで極端に排斥する。

此の異體同心の無二の味方を得て、主税も何となく頼母しかつたが、扨て風は何處を吹いて居たか、半月ばかりは、英吉も例になく顔を見せなかつた。

と一日、

「早瀬氏は居らるゝかね。」

應柄のやうな、然うかと云つて間違ひの無いやうな訪れ方をして、お源に名刺を取次がせた者がある。

主税は、しかゝつて居た飜譯の筆を留めて、請取つて見ると、一寸心當りが無かつたが、どんな人だ、と聞くと、あの、痘痕のおあんなさいます、と一番狭く目についた人相を言つたので、直ぐ分つた。

本名坂田禮之進、通り名をアバ大人、誰か早口な男がタの字を落した、ゆつくり言へばアバタ大人、孰方でも能く通る。通りが可ければと言つて、渾名を名刺に書くものではない。手札は立派に、坂田禮之進……傍へ羅馬字で、L. Sakata.

即ち隱れもなき道學者先生である。

渠の道學は、宗教的ではない、倫理的、寧ろ男女交際的である。とともに、其の痘痕と、細君が若うして且つ美であるのを以て、處々の講堂に於ても、演説會に於ても、音に聞えた君子である。

謂ふまでもなく道德圓滿、但其の細君は三度目で、前の二人とも若死をして、目下のが又顔色が近來、蒼い。

と云つて敢て君子の徳を傷けるのではない、

が、要のないお饒舌をするわけではない。大人は、自分にも二度まで夫人を殺しただけ、盃の數の三々九度、三度の松風、さゝんざの二十七度で、婚姻の事には馴れてござる。

處へ、名にし負ふ道學者と來て、天下此の位信用すべき媒妁人は少いから、呉も越も隔てなく口を利いて巧く纏める。從うて諸家の閨門に出入することを頻繁にして、時々厭らしい！　と云ふ風說を聞く。其の袖を曳いたり、手を握つたりするのが、所謂男女交際的で、此の男の餘德であらう。尤も出來た驗はない。蓋し爲ざるにあらず能はざるなりでも何でも、道德は堅固で通る。於愛乎、品行方正、御媒妁人でも食つて行かれる……

## 二十四

道學先生の、其の坂田禮之進であるから、少くとも細君が出入りをするやうな家庭へ顏出しをする筈がない。と一度は怪んだが、偶然河野の叔父に、同一道學者何某の有るのに心付いて、主稅は思はず眉を寄せた。

諸家お出入りの媒妁人、或意味に於ける地者稼の雄たる大家、扨は、と早やお妙の事が胸に應へて、先づ兎も角も二階へ通すと、年配は五十ばかり、推しもの、痘痕は一目見て氣の毒な程で、然も黑い。字義を以て論ずると月下氷人でない、竈下炭焼であるが、身嗜よく、カラアが白く、磨込んだ額が照々と光る。地の透く髮を一筋梳に整然と櫛を入れて、髭の尖から小鼻へかけて、ぎら／＼と油ぎつた處、如何にも內君が病身らしい。

扨て、お初にお目に懸りまする、如何でごわりまするか、益々御繁昌で、と嚔食ふに困つて切々稼ぐだらう、と謂はないばかりな言を、けろりとして世辭に云つて、衣兜から御殿持の煙草入、薄色の鐵の派手な鹽瀬に、鐵扇かづらの浮織のある、近頃行はるゝ洋服持。何處のか媒妁人した御緣女の贈物らしく、貰つた時の移香を、今佉く中古に草臥れても同一香の香水で、追かけ追かけ香はせてある持物を取出して、氣になるほど爪の伸びた、湯が嫌らしい手に短い延の銀煙管、何か目出度い薄つぺらな彫のあるのを控へながら、先づ一ッ奥齒をスッと吸つて、寛悠と構へた處は、生命保險の勸誘も出來さうに見えた。

甚だ突然でごわりまするが、酒井俊藏氏令孃の儀で……ごわりまして、と又スッと啣せゝりをする。

それ、えへん！　と云へば灰吹と、諸禮躾方第一義に有るけれども、何にも御馳走をしない人に、假ひ噯が葱臭からうが、干鱈の纖維が挾つて居さうであらうが、お楊枝を、と云ふは無禮に當る。

其處で、止むことを得ず、むず／＼する口を堪へる下から、直ぐに、スッと又候風を入れて、でごわりまするに就いて、恁やうな事は、餘り正面から申入れまするよりと、考へることでごわりまする……と搔つまんで謂へば、自分は未だ一面識も無いから、門生の主稅から紹介をして貰ひたいと言ふのである。

南無三、橋は渡つた、何時の間にか、お妙は試驗濟の合格になつた。

今は表向に緣談を申込むばかりに爲たらしい。其に、自分に紹介を求めるのは、英吉に反對した廉もあり、主稅は面當をされるやうに擽つたく思つたばかりか、少からず敵の機敏に、不意打を食つたのである。

否、お斷り申しませう、英吉君に難癖のある譯ではないが、河野家の理想と言ふものが根も葉も擧げて氣に入らない。餘所で紹介をお求めなさるなり、又酒井先生は紹介の有り無しで、客の分隔をするやうな人ではないから——直接にお談しなすつて、御緣があれば纏る分、心

に潔しとしない事に、名札一枚御荷擔は中々
ぬる、と若武者だけに逸つてかゝると、其分は
百も合點で、戰場往來の古兵。
取りあへず、スースーと齒をすゝつて、ニヤニヤと笑ひかけて、何か令孃お身の上に就いて、下聽をするのが、御贊成なかつたと申すことでごわりましたな。御意に因れば、好いた女なら娼妓でもと少しおまけをして、構はん、死なば諸共にと云ふ。いや、人生意氣を重んず、(ト背をすゝつて)で、ごわりまするが、世間もあり親もあり‥‥
と是から道學者の面目を發揮して、河野のために其の理想の、道義上完美にして非難すべき點の無いのを説くこと數千言。約半日にして一先づ旅籠前に立歸つた。雜と半日居たけれども、飯時を避けるなぞは、さすがに馴れたものである。

## 二十五

客が來れば姿を隱すお蔦が内に居るほどで、道學先生と太刀打して、議論に勝てよう道理が無い。主税の意氣づくで言ふことは、喇叭之進の背ですゝられるのみであつたが、厭なものは厭だ、と城を枕に討死をする態度で、少々自棄氣味の、酒井先生へ紹介は斷然、お斷り。
其處を一つお考へ直されて、と言を殘して歸つた後で、アバ大人が媒妁では猶の事。とお蔦の顏が蒼くなつて俯されでもするやうに、顏も飲まないで買物をする、とお蔦はお蔦で、かくまつてあつた主君を、客を合圖に自分で遠ざけ、と隨分憚れたほどの嗚き愉讃、可愛い夫が可惜しがる大切なお主の娘、成らば身替りにも、と云ふ道士方、凡てお淨瑠璃の三の切を手本だが、常くはない。
さあ、貴郎、然うしていらつしやる處ではありません、早く眞砂町へおいでなすつて、先生お何なら奥樣まで、あんな許へは御相談なさいませんやうに、お頼みなさらなくツちや不可ません。一寸、着物を着換へて、と箪笥をがたりと引いて、ア、しばらく御無沙汰なすつた、明日あの組が参りますから、何ぞお土産をお持ちなさいまし、先生は蕎麥したものがお好きだ、と云ふし、彼奴が片思ひになるやうに能が丁ど可い、と他愛もない。
馬鹿を云へ、緣談の前へ立つて、讒口なんぞ利かうものなら、己の方が勘當だ、そんな先生でないのだから、と一言にして刎ねられた、棧橋の策不被用焉。
又考へて見れば、道學者の謎を待たずとも、河野家に不都合はない。英吉とても、學士とだらしの無いばかり、其に結婚すれば自然治まる、と自分も云へば、然もあらう。人の前で、何樣と云はうが、父樣と云はうが、道義上素で支はない、却つて結構なくらゐである。
其の是を非する所以に‥‥曰く‥‥言ひ難し
だから、表向きは何處へも遣らぬ。
困つたな、と膝を組めば、困りましたねえ、とお蔦も鬱ぐ。
此處へ大なる福音を齎し來つたのはお源で。手廻りの使ひに遣つたのに、大分後れたにもかゝはらず、水口の戸を、がたひし勢よく、唯今歸りました、あの、御新造樣、大丈夫でございます。
明後日出來るのかい、とお蔦がきりもりで、夏の掻巻に、と思つて古浴衣の綿を拔いて中を置かせに遣つてある、紺屋へ催促の返事か、と思ふと、然うでない。
此の忠義ものは、二人の憂を憂として、紺屋から歸りがけに、千栽ものゝ、風呂敷包を持つたまゝ、内の前を一度通り越して、見附へ出て、土手際の賣卜者に占て貰つた、と云ふのであつた。
對手は學士の方ですつて、それまで申して占

て占ひをしたら、迚も縁は無い斷念めものだ、と謂ひましたから、私は嬉しくつて、三錢の見料へ白銅一つ發奮みました。可い氣味でございますと、獨りで喜んでアハアハ笑ふ。

まあ、嬉しいぢやないか、よく、お前、お孃さんの年なんか知つて居たね、と云ふと、勿怪な顏をして、否、誰方のお年も存じません。お蔦は瞞に落ちない樣子をして、賣卜者は、年紀を聞きやしないかい。えゝ、聞きましたから私の年を謂つて遣りました。

當然よ、先手に學士でお前ぢや、と堪りかねて主税が云ふのを聞いて、目を睜つて、しばらくして、えゝ！　口惜いと、臺所へ逃込んで、賣卜屋の畜生め、どた〱どた。

二人は顏を見合せて、漸々に笑ひ出た。

すぐにお蔦が、新しい半襟を一掛禮に遣つて、其の晩は市が榮えたが。

二三日經つて、何も無く、其れとなく、お妙がお持たせの重箱を返しかた〱、土産ものを持つて、主税が眞砂町へ出向くと、生憎、先生はお留守、令夫人は御墓參、お妙は學校のひけが遲かつた。

## 二十六

假に其の日、先生なり奧方なりに逢つた處で、縁談の事に就いて、兎角う謂ふつもりでなく、又言はれる筋でもなかつたが、久濶振ではあり、誰方も留守と云ふのに氣拔けがする。今度來た玄關の書生は馴染が薄いから、卷莨の吸殼澤山な火鉢を頻に突着けられても、眞に乘る話も出ず。しかし此の一兩日に、坂田と云ふ道學者が先生を訪問はしませんか、と尋ねて、來ない、と聞いただけを取柄。土産ものを包んで行つた風呂敷を疊みもしないで突込んで、見ツともないほど袂を膨らませて、茫乎して歸りがけ、其の横町の中程まで來ると、早瀨さん御機嫌宜しう、と頓狂に仰々しく聲を懸けた者がある。

玄關に居た頃から馴染の車屋で、見ると障子を横にして眩い日當りを遮つた帳場から、ぬい、と顏を出したのは、酒井へお出入りの其の車夫。

熟と立停まつて一言二言交す次手に、主税は不圖心付いて、もしや此頃、先生の事だの、お孃さんの事を聞きに來たものはないか、と聞くと、月にじめにモオニングを着た、痘痕のある立派な旦那が。

來たか！　へい、お目出たい話なんだから些とばかり樣子を聞かせな、とおつしやいましてね。終にや、き樣、お伴をするだらう、懸りつけの醫者は何處だ、とお尋ねなさいましたつけ。

臺所から、筒袖を着た女房が、ひよつこり出て來て、おやまあ早瀨さん、と笑ひかけて、否、やどでも此處が御奉公と存じましてね、最う最う賞めて賞めて賞め拔いてお聞かせ申しましてございますよ。お孃樣も近々御緣が極りますさうで、おめでたう存じます、えへゝ、と燥いだ。

餘計な事を、と不興な顏をして、不愛想に別れたが、何も車屋へ搜りを入れずともの事だ。又其にしても、モオニング着用は何事だと、苦々しさ一方ならず。

曲角の漬物屋、此處等へも探偵が入つたらうと思ふと、筋向ひのハイカラ造りの煙草屋がある。此の亭主もペラ〱お饒舌をする男だが、同じく申上げたらう、と通りがゝりに睨むと、腰かけ込んだ學生を對手に、其の又金齒の目立つ事。

宿へ歸ると、お蔦はお蔦で、其の晩出直して、今度は自分が賣卜の前へ立つと、此の緣は乾と結ばる、と易が出たので、大きに鬱ぐ。

尤も賣卜者も如才はない。お源が行つたのに

較べれば、容子を見ただけでも、お蔦の方が結ばるに違ひはないから。

　一日措いて、主税が自分傭まれの然る學校の授業を濟まして歸つて來ると、門口にのそりと立つて、頭を撫でながら、じろ／＼門札を視めて居たのが、坂田禮之進。

　早や此處から薗をスーと吸つて、先刻からお待ち申して……は些と變だ。

　扨は誰も物申に應ふるものが無かつたのであらう。女中は外出で？　お蔦は隱れた。……

　無人で失禮、さあ、何うぞ、と先方は編上靴で手間が取れる。主税は氣早に靴を脱いで、癇癪紛に、突然二階へ驅上る。段の下の扉の蔭から、そりやこそ旦那樣、と、によつと出た、お源を見ると、取次に出ないも道理、勝手働きの玉襷、長刀小脇に搔込んだりな。高箒に手拭を被せたのを、柄長に構へて、逆上せた顔色。

　馬鹿め、と噴出して飛上る後から、稍あつて、道學先生、のそり／＼。

　二階の論判一時に餘りけるほどに、雷様の時の用心の線香を芬とさせ、居間から顯はれたのはお蔦で、爻はないが、禁厭は心ゆかし、片手に煙草を一撮。拔足で玄關へ出て、禮之進の靴の中へ。此の燃草は利が可かつた。燧と烟が、むら／＼と立つ狼烟を合圖に、二階から降りる氣勢、鏘然路地へお蔦が遁込むと、未だ其の烟は消えないので、手水を撒きかけて此の一藝に見惚れたお源が、さつしたりと、手でしやくつて、ざぶりと掛けると、をかしな皮の臭がして、其處等中水だらけ。

## 二十七

　夫れ熟々、史を按ずるに、城なり、陣所、戰場なり、軍は婦の出る方が大概敗ける。此の日、道學先生に對する語學者は勝利でなく、禮之進の靴は名譽の負傷で、揚々と引揚げた。

　所以如何となれば、お職とあれば最早紹介は求めますまい。其のかはりには、當方から酒井家へ申入れまする、此の縁談に就きまして、貴方から先生に向つて、河野に對する御非難をなされぬやう。御意見は御意見、感情問題は別として、是だけはお願ひ申したいでごわりまするが、と婉曲に言ひは言つたが、露骨に遣つたら、邪魔をする勿であるから、御懸念無用と、男らしく判然答へたは可いけれども、要するに釘を刺されたのであつた。

　禮之進の方でも、酒井へ出入りの車夫まで搜を入れた程だから、其の分は隨分手が廻つて、從つて、先生が主税に對する信用の點も、情愛のほども、子の如く、弟の如きものであるところへ分つたので、先んずれば人を制すで、ぴたりと其の口を壓へたのであらう。

　譏口は決して利かない、と早瀨は自分も言つたが、又此の門生の口一ツで、見事、纏る縁も破ることは出來たのだつたに。

　此處で賽は河野の手に在矣。兎も角もソレ勝負、丁か半かは酒井家の意志の存する處に因るのみとぞ成んぬる。

　先生が不承知を言へばだけれども、諾、とあれば其まで。お妙は河野英吉の妻になるのである。河野英吉の妻にお妙がなるのである哉。

　お蔦さへ、憂慮ふより寧ろ口惜がつて、ヤイヤイ騒ぐから、主税の、とつおいつは一通りではない。何は措いても、餘所ながら眞砂町の樣子を、と思ふと、元來お蔦あるために、何となく疵持つ足、思ひなしで敷居が高い。

　で何となく遠のいて、漸々二日前に、久しぶりで御機嫌窺ひに出た處。悪くすると、最う禮之進が出向いて、縁談が始まつて居さうな中へ、急に足近くは我ながら氣が咎める。

　愚圖々々すれば、貴郎例に似合はない、きりきりなさいなね……とお蔦が歯痒がる。

　勇を鼓して出掛けた日が、先生は、來客があ

つて、お話中。玄關の書生が取次に、「と二次、來い」は、ぎよつとした。さりとては聞かない。内證のお蔦の事、露顯にても及んだかと、まさかとは思ふが氣怯れがして、奥方にも一寸挨拶をしたばかり。其の挨拶を受けらるゝ時の奥方が、端然として針仕事の、氣高い、奥床しい、懐しい姿を見るにつけても、お蔦に思較べて、愈々後暗さに、あとねだりを被成らないなら、久しぶりですから一銚子、と莞爾して仰せある、優しい顔が、眩しいやうに後退して、いづれ又、と逃出すが如く歸りしなに、お客は誰？……と窃と玄關の書生に當つて見ると、坂田禮之進、噫、止んぬる哉。

しばらくは早瀬の家内、火の消えたる如しで、憂慮しさの餘り、思切つて、更に眞砂町へ伺つたのが、卽ち薬師の緣日であつたのである。

此と、恐怖の形で、先づ玄關を覗いて、書生が燈下に讀書するのを見て、又お邪魔に、と頭から遠慮をして、扨て、先生は、と尋ねると、前刻御外出。奥樣は、と云ふと、少々御風邪の氣味。それでは、お見舞に、と奥に入らうとする緣側で、女中が、唯今すや〳〵と御寐になつていらつしやいます、と云ふ。

悄々玄關へ戻つて、お孃さんは、と取つて置きの頼みの綱を引いて見ると、是は、以前奉公して居た女中で、四谷の方へ緣附いたのが、一年ぶりで無沙汰見舞に來て、一晩御厄介になる筈で、お夜食が濟むと、奥方の仰に因つて、お孃さんのお伴をして、薬師の緣日へ出たのであつた。

それでは私も通の方を、いづれ後刻、と是を機に。出しなに又念のために、其後、坂田と云ふのは來ませんか、と聞くと、アバ大人ですか、と書生は早や渾名を憶えた。はゝゝ、來ましたよ。今日の午後。

## 男金女土

## 二十八

主税は、禮之進が早くも二度の魁を働いたのに、少なからず機先を制せられたのと——搗てて加へてお蔦の一件が暴露たために、先生が太く感情を損ねられて、故とにも然う爲れる歟、と思はれないでもない——玄關の疊が冷く堅いやうな心持とに、屈託の腕を拱いて、其處ともなく横町から通へ出て、件の漬物屋の前を通ると、向う側が唯ある大構の邸の黒板塀で、此間しばらく、三方から緣日の空が取圍んで押搖がす如く、きら〳〵と星がきらめいて、それから富坂をかけて小石川の高臺の樹立へ暗くなる、一寸人足の途絶え處。

東へ、西へ、と置場處の間數を示した標札が仄白く立つて、車は一臺も無かつた。眞黒な溝の縁に、野を焚いた跡の濕つたかと見える破風呂敷を開いて、式の如き小灯が、夏になつても是ばかりは蛍も寄るまい、閉の果敢なさ。三束五束附木を並べたのを前に置いて、手を支いて、縺れ髪の頂清らかに、襟脚白く、女房がお辭儀をした、仰向けになつて、踏反つて、泣寐入りに寐入つたらしい嬰兒が懐に、膝に縋つて六歳ばかりの男の子が、指を銜へながら往來をきよろきよろと視める背後に、母親の其の背に凭れかゝつて、四歳ぐらゐなのが最う一人。

一陣風が吹くと、姿も消されさうで哀な光景。浮世の影繪が鬼の手の機關で、月なき辻へ映るのである。

然りながら、緣日の神佛は、賽錢の降る中ならず、恁る處にこそ、影向して、露にな濡れそ、夜風に堪へよ、と母子の上に袖笠して、遠音に觀世ものゝ囃子の聲を打聞かせ給ふらむよ。

健在なれ、御身等、今若、牛若、生立てよ、と窃に河野の一門を呪つて、主税は袂から[illegible]

と音する松の葉を投げて、足疾く其の前を通り過ぎた。
不圖側の煙草屋の金齒の亭主が、箱火鉢を前に、胸を反らせて、煙管を逆に吸口でぴたり戸外を指して、ニヤリと笑つたのが目に附くと同時に、四五人店前を塞いだ書生が、此方を見向いて、八の字が崩れ、九の字が分れたかと一同に立騒いで、よう、と聲を懸ける、萬歳、と云ふ、叱、と壓へた者がある。
向うの眞砂町の原は、眞中あたり、火定の濟んだ跡のやうに、寂しく中空へ立つ火氣を包んで、黒く輪になつて人集り。寂寞した其の原のへりを、此の時通りかゝつた女が二人。
主税は一目見て、胸が騒いだ。右の方のが、お妙である。
リボンも額も單に白く、かすりの羽織が夜の艶に、ちら〳〵と蝶が行交ふ歩行ぶり、紅ちらめく袖は長いが、不斷着の姿は、年も二ツ三ツ長けて大人びて、愛らしいよりも艶麗であつた。
風呂敷包を左手に載せて、左の方へ附いたのは、大一番の圓髷だけれども、花簪の下になつて、脊が低い。渾名を餡と云つて、ちよんぼりと目の丸い、額に見上げ皺の夥多しい婦で、主税が玄關に居た頃勤めた女中どん。
心懸けの好い、實體もので、身が定まつてからも、恁うした御機嫌うかゞひに出る志。お主の娘に引添うて、身を固めて行く態の、其の圓髷の大きいのも、恁る折から頼もしい。
煙草屋の店でくる〳〵ぱち〳〵、一打ばかりの眼球の中を、仕切つて、我身でお妙を遮るやうに、主税は眞中へ立つたから、餘り人目に立つので、此方から進んで出て、聲を掛けるのは憚つて差控へた。
而してお妙が氣が付かないで、すら〳〵と行過ぎたのが、主税は何となく心寂しかつた。つい前の年までは、自分が、如彼して附いて出たに。
とリボンが靡いて、お妙は立停まつた。
肩が離れて、大きな白足袋の色新しく、附木を賣る女房のあはれな灯に近いたのは圓髷で。實直ものゝ丁寧に、屈み腰になつて手を出したは、志を惠んだらしい。親子が揃つて額づいた時、お妙の手の巾着が、羽織の紐の下へ入つて、姿は辻の暗がりへ。
書生たちは、ぞろ〳〵と煙草屋の軒を出て、齊しく星を仰いだのである。

## 二十九

〇男金女土大に吉、子五人か九人あり衣食滿ち富貴にして——
男金女土こそ大吉よ
衣食みち〳〵……
と歌の方も衣食みち〳〵のあとは、虫蝕と、雨染みと、摺剝けたので分らぬが、上に、業平と小町のやうなのが對向ひで、前に土器を控へると、萬歳烏帽子が五人ばかり、づらりと平伏した處が描いてある。如何樣にも大吉に相違ない。
主税は、お妙の背後姿を見送つて、風が染みるやうな懷手で、俯向き勝ちに藥師堂の方へ歩行いて來て、爰に露店の中に、三世相がひつくりかへつて、是見よ、と言はないばかりなのに目が留まつて、漫に手に取つて、相性の處を開けたのであつた。
其の英吉が、金の性、お妙が、土性であることは、豫めお蔦が美しい指の節から、寅卯戌亥と繰出したものである。
半吉でゞもある事か、大に吉は、主税に取つて、一向に芽出度くない。勿論、如何に迷へばと云つて、三世相を氣にするやうな男ではないけれども、自分は兎に角、先生は言ふに及ばずながら、奥方は何うかすると、一白九紫を口にされる。同じ相性でも、始わるし、中程宜し

からず、末覺束なしと云ふ緣なら、幾十か破談の方に轉みはあるが……衣食滿ち溢ち富貴……は終つた。

のみならず、子五人か、九人あるべしで、平家の一門、藤原一族、愈よ天下に蔓らむずる根ざしが見えて容易でない。

旣に過日も、現に今日の午後にも、禮之進が推參に及んだ、と云ふきつさきなり、何となく、此の様、縺まりさうで、一方ならず氣に懸る。

あゝ、先生には言はれぬ事、奥方には遠慮をすべき事にしても、今しも原の前で、お妙さんを見懸けた時、聲を懸けて呼び留めて、もし河野の話が出たら、私は厭、とおつしやいよ、と一言いへば可かつたものを。

大道で話をするのが可許しければ、其邊の西洋料理へ、と云つても構はず、鳥居の中には藪蕎麥もある。さしむかひに云ふではなし、間諜も附添つた、其の女中とても、提革の、六間堀の帶の間柄、何の遠慮も仔細も無かつた。

お妙さんが又、あの日でなつて、お小遣はあるの？　とは冷評しても、何處かへ連れられるのを厭味らしく考へるやうな間ではないに、ぬかつたことをしたよ。

なぜ一言情あらなく、思ひ儘れて、當と其の大杏を嘗めて居ると、次第々々に揷畫の最上人に髭が生えて、忽ち尻尾のやうに足を投げ出したと思ふと、横倒れに、小町の膝へ凭れかゝつて、でれ〳〵と蕩けた顔が、河野英吉に、寸分違はぬ。

「旦那如何でございます。えへゝゝ、」と、かんてらの灯の蔭から、氣味の惡い唐突の笑聲は、當露店の亭主で、目を細うして、額で睨んで、

「大分御意に召しましたやうで、えへゝ。」

「幾干だい。」

とぎよつとした主税は、空で値を聞いて見た。

「然うでげすな。」

と古帽子の庇から透かして、撓めつゝ、

「二十錢にいたして置きます。」と天窓から十倍に吹懸ける。

頓時かんてらが煽る。

主税は思はず三世相を落して、

「高價い！」

「お品が少うげして、へゝゝ、當節の九星早合點、陶宮手引草など云ふ活版本とは違ひますで、」

「何だか知らんが、散々汚れて引斷されて居るぢやないか。」

「でげすがな、繪が燦然として居りますでな、揷畫は秀蘭齋貞秀で、是や三世相かきの名人でげす。」

と出放題な事を云ふ。相性さへ惡かつたら、主税は二十錢の其二倍でも敢て惜くはなかつたらう。

「餘り高價いよ。」と立ちかける。

「お幾干で？　えゝ、旦那。」

と引留めるやうに押へて云つた。

「半分か。」

「へい。」

「其だつて廉くはない。」

## 三十

亭主は膝を抱いて反身になり、禪の問答持つて來い、と云ふ高慢な顔色で、

「半價値は酷うげす。植木屋だと、ちやあ鉢は要りませんか、とぶつて手を打つんでげすがな。畫だけ引剝して差上げる譯にも參りませんで。何うぞ一番御奮發を願ひてえんで。五錢や十錢、旦那方にや何だけの御散財でもおりやしません。へゝゝへゝ、」

「一體高過ぎる、無法だよ。」

と主税は其の言種が憎いから、益々買ふ氣は出なくなる。

「でげすがな、これから切通の坂を一ツお下り

になりや、五兩と十兩は負ふんでげせう。其處で以て、へゝゝ、相性は聞きたし年紀は祕したしなんて寸法だ。えゝ、旦那、三世相は御覗僥にお求め下さいな。」

愈々むつとして、

「要らない。」と、又立たうとする。

「ぢや最う五錢、五百、たつた五錢。」

片手を開いて、肱で肩癖の手つきになり、ばらばらと主税の目前へ揉み立てる。

憤然として衝と立つた。主税の肩越しにきらりと飛んで、かんてらの燻つた明を切つて玉の如く、古本の上に異彩を放つた銀貨があつた。

同時に、

「要るものなら買つて置け。」

と鏥のある、凜とした聲がかゝつた。

主税は思はず身を窘めた。帽子を拂つて、は、と手を下げて、

「先生。」

露店の亭主は這出して、慌てゝ古道具の中へ手を支いて、片手で銀貨を壓へながら、きよとんと見上げる。

茶の中折帽を無造作に、黑地に茶の千筋、平お召の一枚小袖。黑斜子に丁子巴の三つ紋の羽織、紺の無地獻上博多の帶腰すつきりと、片手を懷に、裄短な袖を投げた風采は、丈高く痩せぎすな躯に粹である。然も上品に衣紋正しく、黑八丈の襟を合はせて、色の淺黑い、鼻筋の通つた、目に恐ろしく威のある、品のある、眉の秀でた、但其の口許はお妙に肖て、嬰兒も懷くべく無量の愛の含まるゝ。

一寸見には、彼の令孃にして、其の父ぞとは思はれぬ。令夫人は許嫁で、お妙は先生が未だ金釦であつた頃の若木の花。夫婦の色香を分けたのである、とも云ふが……

酒井は何處か小酌の歸途と覺しく、玉樹一人緣日の四邊を拂つてイんだ。又何時か、人足も稍々此の邊に疎になつて、藥師の御堂の境内のみ、其中空も汗するばかり、油煙が低く、露店の大傘を壓して居る。

會釋をして纔に擡げた、主税の顏を、其の威のある目で屹と見て、

「少いものが何だ、端錢を彼是人中で云つて居る奴があるかい、見つともない。」

と言ひ棄てゝ、直ぐに歩を移して、少し肩の昂つたのも、霜に堪へ、雪を忍んだ、梅の樹振は潔い。

呆氣に取られた顏をして、亭主が、づゝと乘出しながら、

「へい。」

とばかり怯えるやうに差出した三世相を、ものをも言はず引攫んで、追縋つて跡に附くと、早や五六間前途へ離れた。

「何うも恐入ります。えゝ、何、別に入用なのぢやないのでございますから、はい、」

と最初の一喝に怯氣々々もので、申譯らしく獨言のやうに言ふ。

酒井は、すらりと懷手のまゝ、斜めに見返つて、

「用らないものを、何だつて價を聞くんだ。素見すのかい、お前は、」

「……」

「素見すのかよ。」

「えゝ、別に、」と俯向いて怨めしさうに、三世相を揉み、且つ捻る。

少時して、酒井は不圖歩を停めて、

「早瀨。」

「はい。」

と此の返事は嬉しさうに聞えたのである。

## 三十一

名を呼ばれるさへ嬉しいほど、久濶懸違つて居たので、いそ〳〵懷しさうに擦寄つたが、續いて云つた酒井の言は、太く主税の胸を刺し

た。

「何處へ行くんだ。」

是で突放されたやうになつて、思はず後退りすること三尺半。

此の前の、原一つ越した横町が、先生の住居である。其方に向つて行くのに、從つて歩行くものを、（何處へ行く。）は情ない。散々の不首尾に、云ふ事も、しどろになつて、

「散歩でございます。」

「故々、此處の縁日へ出て來たのか。」

「否、實は……」

と聊か取附くことが出來た……

「先刻、御宅へ伺ひましたのですが、御留守でございましたから、後程に又參りませうと存じまして、其間此の邊にぶらついて居りました。先生は、」

酒井がづゝと歩行き出したので、たじ〳〵と後を慕うて、

「何方へ？」

「俺か。」

「ずつとお歸宅でございますか。」

知れ切つたやうな事を、つなぎだけに尋ねると、此の答へが又案外なものであつた。

「俺は、何だ、是からお前の處へ出掛けるんだ。」

「えゝ！」と云つたが、何は措いても夜が明けたやうに勇み立つて、

「おや、あの此方から……角の電車へ、」と自分は一足引返したが、慌てゝ又先へ出て、

「お車を申しませうか。」

とそは〳〵する。

「水道橋まで歩行くが可い。あゝ、酔醒めだ。」

と、衣紋を揺つて、ぐつと袖口へ突込んだ、引緊めた腕組になつたと思ふと、林檎の綺麗な、芭蕉實の芬と薫る、燈の眞蒼な、明い水菓子屋の角を曲つて、猶豫はず衝と横町の暗がりへ入つた。

下宿屋の瓦斯は遠し、顏が見えないから幾干か物が云ひよくなつて、

「奥さんが、お風邪氣でいらつしやいますさうで、不可ませんでございます。」

「逢つたか。」

「否、すや〳〵お寐だと承りましたから、御遠慮申しました。」

「妙は居たかい。」

「四谷へ縁附いて居ります、先のお光をお連れなさいまして、縁日へ。」

「然うか、娘が出歩行くやうぢや、大した御容態でも無しさ。」

と少し言が和らいで來たので、主税は吻と呼吸を吐いて、はじめて持扱つた三世相を懷中、始末をすると、意氣沮喪の下口で、急な不意打。

「お前の許でも皆健康か。」

又冷りとした。内には女中と……自分ばかり、（皆健康か。）は尋常事でない。雖然、よもや、と思ふから、其の（皆）を解耳であらう、と自分でも疑つて、

「はい？」

と、聞直したつもりを、酒井が其まゝ聞流して了つたので（然やうでございます。）と云ふ意味になる。

で、安からぬ心地がする。突當りの砲兵工廠の夜の光景は、樂天的に眺めると、向島の花盛を幻燈で中空へ顯はしたやうで、轟々と轟く響が、吾妻橋を渡る車かと聞紛さるゝが、悲觀すると、煙が黄に、炎が黒い。

通りかゝる時、蒸氣が眞白な瀧のやうに横ざまに漲つて路を塞いだ。

やがて、水道橋の袂に着く――酒井は其の雲に駕して、悠々として、早瀬は霧に包まれて、ふら〳〵して。

無言の間、吹かして居た、香の高い巻莨を、煙の絡んだまゝ、ハタと其處で酒井が棄てると、蒸氣は、こゝで露になつて、ジューと火が消える。

薊色の光が、ばら〳〵と暗に散ると、炬の如く輝く星が、人を乘せて衝と外濠を流れて來た。

## 電車

### 三十二

河野から酒井へ申込んだ、其の緣談の事の爲では無いが、同じ此の十二日の夜、道學者坂田禮之進は、渠が、主なる發企者で且つ幹事である處の、男女交際會――又の名、家族懇話會――委しく註するまでもない、其の向の夫婦が幾組か、一處に相會して、飲んだり、食つたり、饒舌つたり……と云ふと尾籠になる、紳士貴婦人が互に相親睦する集會で、談政治に涉ることは少ないが、宗教、文學、美術、演劇、音樂の品定めが其處で成立つ。現代に於ける思潮の淵源、天堂と食堂を兼備へて、薔薇薫じ星の輝く美的の會合、とあつて、おいゝ、おしめと譯を念頭に置かない催しであるから、留守では、芋が焦げて、小兒が泣く。町内迷惑な……其の、男女交際會の軍用金、諸處から取集めた百有餘圓を、馴染の會席へ支拂ひの用があつて、夜、モオニングを着て、段一[illegible]の明い電車に乘つた。

（アバ大人ですか、へゝ、今日の午後。）と酒井先生方の書生が主税に告げたのと、案ずるに同日であるから、其の編上靴は、一日に市中の何のくらゐに足跡を印するか料られぬ。御苦勞千萬と謂はねばならぬ。

先哲曰く、時は黃金である。そんな隙潰しをしないでも、交際會の會費なら、其場で請取つて直ぐに拂ひを濟ましたら好さゝうなものだが、一先づ手許へ引取つて、更めて夫子自身を勞するのは？　知らずや、此の勘定の時は、席料なしに、其家の何とか云ふ姉さんに、茶の給仕をさせて無錢で手を握るのだ、と云つたものがある。世には演劇の見物の幹事をして、其を緣に、俳優と蜜語する貴婦人もあると云ふから。

尤も是は、嘘であらう。が、會費を衣兜にして、電車に乘つたのは事實である。

「えゝ、込合ひますから御注意を願ひます。」

禮之進は提革に摑りながら、人と、車の動搖の都度、成るべく操りのポンチたらざる態度を保つて、而して、乘合の、肩、頰、耳などの透間から、痘痕を散らして、目を配つて、鬢、簪、庇、目つきの色々を、膳の上の箸休めの氣で、ちびり〳〵と獨酌の格。あゝ、江戸兒は此の味を知るまい、と乘合の婦の移香を、樂みさうに、歯をスーと遣つて、片手で頤を撫で居たが、車掌の其の御注意に、其と心付くと、俄然として、慄然として、腐塞うして、腰が輕い。

途端に引込めた、年紀の少い半纏着の手ッ首を、即座の冷汗と取つて置きの脊汗で、ぬらめいた手で、夢中に確乎と引摑んだ。

道學先生の德孤ならず、隣に掏摸が居たさうな。

「……」

と、わなゝいて、氣が上づツて、唯睨む。

對手は手拭も被らない職人體のが、ギックリ、髮の搖れるほど、頭を下げて、

「御免なすつて、」と盜むやうに哀憐を乞ふ目づかひをする。

「出、出しをらう、」

と震へ聲で、

「馬鹿！」と一つ極めつけた。

「何うぞ、御免なすつて、眞平、へい……」

と革に縋つたまゝ、ぐつたりと成つて、悄氣返つた職人の状は、消えも入りたいとよりは、宛然罪を恥ぢて、自分で縊つたやうである。

「コリヤ。」と又怒鳴つて、滿面の痘痕を蠢かして、堪へず、握拳を擧げて其の横頬を、ハタと撲つた。

「あ、痛え。」

と横に身を反らして、泣聲になつて、

「酷、酷うござんすね……旦那、ア痛々。」

最一つ拳で、勝誇つて、

「酷いも何も要つたものか。」

哄と立上る多人數の影で、月の前を黒雲が走るやうな電車の中。大事に革鞄を抱きながら、車掌が甲走つた早口で、

「御免なさい、何ですか、何ですか。」

## 三十三

カラアの純白な、髮をきちんと分けた紳士が、職人體の半纏着を引捉へて、出せ、出せ、と喚いて居るからには、其間の消息一目して瞭然たりで、車掌も些とも猶豫はず、無手と曲者の肩を捉つた。

「降りろ——さあ。」

と一ツしやくり附けると、革を離して、蹌踉と凭れかゝる。半纏着に又凭れ懸かるやうになつて、三人揉重なつて、車掌臺へ壓されて出ると、先から、がらりと扉を開けて、把手に手を置きながら、中を覗込んで居た運轉手が、チリン無しに丁ど其處の停留所に車を留めた。

御獄山を少し進んだ一ッ橋通を右に見る邊で、此街鐵は、是から御承知の如く東明館前を通つて兩國へ行くのである。

「少々お待ちを……」

と車掌も大事件の肩を摑まへて居るから、息急いて、四五人押込まうとする乘合はせの乘組を制しながら、後退りに身を反らせて、曲者を釣身に出ると、兩手を突張つて禮之進も續いて、どたり。

後からぞろ〳〵と七八人、我勝ちに見物に飛出たのがある。事ありと見て、乘らうとしたのも其のまゝ足を留めて、押取卷いた。二人ばかり婦も交つて。

外へ、其の人數を吐出したので、風が透いて、すつきり透明になつて、行儀よく乘合の膝だけは揃ひながら、思ひ〳〵に捻向いて、硝子戸から覗く中に、片足膝の上へ投げて、丁子巴の羽織の袖を組合はせて、茶の其の中折を頰深く、ふら〳〵坐睡りをして居たらしい人物は、酒井俊藏であつた。

けれども、禮之進が今、外へ出たと見ると同時に、明かに其の兩眼を睜いた瞳には、一點も睡さうな曇が無い。

惟ふに、乘合ひの蔭ではあつたが、禮之進に目を着けられて、例の(益々御繁譯で。)を前置に、(就きましては御縁女儀、を場處柄も介はず辯じられよう恐があるため、計略茲に出たのであらう。但其の緣談を嫌つたと云ふ形跡は聊も見當らぬか。

「擲られたのかい。」

「はい。」

唯見ると、酒井の向ひ合はせ、正面を右へ離れて、丁ど其の曲者の立つた袖下の處に主税が居て、愼く答へた。

「何でございますか、騷ぎです。」

先生の前で、立騷いでは、と控へたが、門生が澄まし込んで冷淡に膝に手を置いて居るにも係らず、酒井はづツと立つて、脊高々車掌臺へ出かけて、此處にも立淀む一團の、彌次の上から、大路へ顏を出した……時であつた。

主客顛倒、曲者の手がポカリと飛んで、禮之進の痘痕は砕けた、火の出るやう。

「猿唐人め。」

あらう事か、あつと顚げたを堪へて退る、道學者の襟飾へ、斜かひに肩を突懸けて、横押にぐいと押して、

「何だ、何だ、何だ、何だと？　掏摸だ、盜賊だと……クソを喰へ。ナニ其の、胡麻和のやうな汝が面を甜めろい！　さあ、何處に私が汝の紙入を掏つたんだ。

此方あ又、串戯ぢやねえ。込合つてる中だから、汝の足でも踏んだんだらう、と思つてよ。足ぐれえ踏んだにしちや、怒りやうが御大層だが、面を見りや、踵と大した違えは無えから、はゝゝ。」

と夜の大路へ笑が響いて、

「汝の方ぢや、面を踏まれた分にして、怒りやがるんだ、と斷念めてよ。難有く思へ、日傭取のお職人様が月給取に謝罪つたんだ。

何時出來た規則だか知らねえが、股ツたア出すなツてえ、肥滿つた乳母どんが焦れツたがりやしめえし、厭味ツたらしい言分だが、其奴も承知で乘つてるからにや、他樣の足を踏みや、引摺下される御法だ、と往生してよ。」

と、車掌にひよこと頭を下げて、

「へいこら、と下りて遣りや、何だ、掏摸だ。掏摸たア何でえ。」

又禮之進に突懸る。

## 三十四

「掏られた、盜られたツて、幾干ばかり臺所の小遣をごまかして來やあがつたか知らねえけれど、汝が其の面で、何うせなけなしの小遣だらう、落しつこはねえ。

へん、鈍漢。何の道、掏られたにや違えはねえが、汝が其の間拔けな風で、內から此處まで蟇口が有るもんかい、疾くの昔にちよろまかされて居やあがつたんだ。

さあ、お目通りで、着物を引捋つて神田兒の膚合を見せて遣らあ、汝が口說く婦ぢやねえから、見たつて目の潰れる憂慮はねえ、安心して切立の褌を拜みやあがれ。

え、恁う、念晴しを澄ました上ぢや、汝、何うするか見ろ。」

「やあ、風が變つた、風が變つた。」

と酒井は快活に云つて、原の席に歸つた。

車掌臺からどや〳〵と客が引込む、直ぐ後へ——見張員に事情を通じて、事件を引渡したと思はれる——車掌が勢なく戻つて、がちやりと提革鞄を一つ搖つて、チヽンと遣つたが、まだ殘惜さうに大路に半身を乘出して人だかりの混々揉むのを、通り過ぎ狀に見て進む。

と錦帶橋の月の景色を、長谷川が大道具で見せたやうに、づらりと繫つて停留して居た幾つとない電車は、大通を廻り舞臺。事の起つた車內では、風說とり〳〵。

あれは掏摸の術でございます。はじめに恐入つて居た樣子ぢや、確に業をしたに違ひませんが、最う電車を下りますまでには同類の袂へすつこかしにして、證據が無いから逆捻ぢを遣るでございます、と小商人風の一分別ありさうなのが其の同伴らしい前垂掛に云ふと、此方では法然天窓の隱居樣が、七度搜して人を疑へぢや、滅多な事は謂はれんもので、なう。

然らおつしやれば、あの掏られた、と言ひなさる洋服を着た方も、をかしな御仁でござりますよ。此娘の貴下、（と隣に腰かけた、孫らしい、豐肌した娘の膝を叩いて、）簪へ、貴下、立つて居て一寸々々手をお觸りなさるでございます。御仁體が、御仁體なり、此の娘が恥かしがつて、お止しよ、お止しよ、と申しますから、何をなさる、と口まで出ましたのを堪へて居たのでござりますよ。お止しよ、お祖母さんと、其の娘は又同じことを爰で云つて、ぽうと紅くなる。

法然天窓は苦笑ひをして……後からせゝるや

ら、前からは毛の生えた、大な足を突出すやら……など、浄瑠璃にもあつて、なう、昔、此の登り下りの乗合船では女子衆が怪しからず迷惑をしたものぢやが、電車の中でも遣りますか、なら、結句、掏摸よりは困りものぢやて。

　駄目でさ、だつてお前さん、いきなり引摺り下ろして了つたんだから、それ、ばら〳〵一緒に大勢が飛出しましたね、よしんばですね、同類が居た處で、疾くの前、何處かへ、すつ飛んで居るんですから手係りはありやしません。然うで無くつて、一人も乗客が散らずに居りや、私達だつて關合ひは抜けませんや。巡査が來て、一應検べるなんぞツて事に成りかねません。え、後は何うなるツて、お前さん、掏摸は現行犯ですからね、證據が無くつて、知らないと云や、其までゞさ。又眞個に掏られたんだか何だか知れたもんぢやありません、どうせ間抜けた奴なんでさあね、と折革鞄を抱へ込んだ、何處かの中小僧らしいのが、隣合つた乗合の親仁に、尻上りに弁じたのである。

　孰れ道學先生のために、記すべき事ではない。

　敢て人の憂を見て喜ぶやうな男では無いが、然りとて差當り如彼した中の禮之進のために、其の憂を憂として悲むほどの君子でも無からう。惡くすると、（狀を見ろ。）ぐらゐは云ふらしい主税が、風向きの惡い大人の風説を、耳を澄まして聞き取りながら、太く憂はしげな面色で。

　實際鬱込んで居るのは何爲歟。

　忘れてはならぬ、差向ひに酒井先生が、何となく、主税を睨むが如くにして居ることを。

## 三十五

　鬱ぐも道理、然うして電車の動くまゝに身を任せては居るものゝ、主税は果して何處へ連れらるゝのか、雲に乗せられたやうな心持がするのである。

　尤も、薬師の縁日で一所になつて、水道橋から外濠線に乗つた時は、仰せに因つて飯田町なる、自分の住居へ供をして行つたのであるが、元來其の夜は、露店の一喝と言ひ、途中の容子と言ひ、酒井の調子が凜として嚴しくつて、豫て恩威並び行はるゝ師の君の、其の恩に預かれさうではなく、罰利生ある親分の、其の罰の方が行はれさうな形勢は、言はずともの事であつたから、電車でも片隅へ竦んで、可成其處でも乗客が込んだ、人蔭に成つて、睦い大目玉の光から、顔を躱して免れて居たは可いが、とて、神樂坂で下りて、見附の橋を、今夜に限つて、高い處のやうに、危つかしく渡ると、件の賣卜者の行燈が、眞黑な石垣の根に、狐火かと見えて、急に土手の松風を聞く邊から、徐々足許が覺束なくなつて、心も暗く、吐胸を突いたのは、お蔦の儀。

　偏に御目玉の可恐しいのも、何を秘さう縞子の帶に極つたのであるから、是より門口へかゝる……敢て、のろけるにしもあらずだけれども、自分の跫音は、聞覺えて居る。

　其の跫音が、他の跫音と共に、澄まして音信れゝば、（お歸んなさい。）で出て來るは定のもの。分けて、お妙の事を、やきもき氣を揉んで居る處。其が爲に懲うして出向いた、眞砂町の様子を聞き度さに、殊に、似たもの夫婦の譬、信玄流の沈勇の方では無いから、随分鐵然と露れ兼ねない。

　いざ、露れた場合には……と主税は冷汗になつて、胸が躍る。

　生憎例のやうに話もしないで、つか〳〵酒井が歩行いたので、兎角う云ふ間もなかつた、早や我家の路地が。

　堪りかねて、先生、と、呼んで、女中が寝て居ますと失禮ですから、一寸！と云ふが疾いか、

（お先へ）、は體で出て、横ッ飛びに駈け拔ける内も、あゝ、我ながら拙い言分。

（待て！ 待て！）

それ、聲が掛つた。

酒井は其處で足を留めた。

屹と立つて、

（背から衆るやうな内へ、邪魔をするは氣の毒だ。他へ行かう、一緒に來な。）

で路が變つて、先生の爲るまゝ、鷲に攫はれたやうな思ひで乘つたのが、此の兩國行——

なか〳〵道學者の風說に就いて、善惡ともに、自から思慮を回らすやうな餘裕とては無いのである。

電車が萬世橋の交叉點を眞直ぐに貫いても、鷲は翼を納めぬので、さては此のまゝ隅田川へ流罪ものか、輕くて本所から東京の外へ追放に成らうも知れぬ。

と觀念の眼を閉ぢて首垂れた。

「早瀨、」

「は、」

「降りるんだ。」

一場展開した廣小路は、二階の燈と、三階の燈と、店の燈と、街路の燈と、蒼に、萌黃に、紅に、寸隙なく鏤められた、綾の幕ぞと見る程に、八重に往來ふ人影に、忽ち寸々と引分けられ、さら〳〵と風に連れて、鈴を入れた幾千の輝く鞠と成つて、八方に投げ交はさるゝかと思はれる。

こゝに一際夜の雲の濃やかに綠の色を重ねたのは、隅田へ潮がさすのであらう。水の影か、星が閃く。

我が酒井と主稅の姿は、此の廣小路の二點となつて、淺草橋を渡果てると、富貴竈が巨人の如く、仁丹が城の如く、相對して角を仕切つた、横町へ、斜めに入つて、磨硝子の軒の燈籠の、媚かしく寂寞して、ちら〳〵と雪の降るやうな數ある中を、蓑を着た狀して、忍びやかに行くのであつた。

## 柏家

### 三十六

やがて、貸切と書いた紙の白い、其の門の柱の暗い、敷石の燈と明い、靜寂としながら幽なやうに、三味線の音が、チラ〳〵水の上を流れて聞える、一軒大構の料理店の前を通つて、三つ四つ軒燈籠の影に送られ、御神燈の灯に迎へられつゝ、地の濡れた、軒に艷ある、其の横町の中程へ行くと、一條朧な露地がある。

藝妓家二軒の廂間で、透かすと、奥に薄墨で描いたやうな、竹垣が見えて、涼しい若葉の梅が一木、月はなけれど、風情を知らせ顏にすつきりと彳むと、向ひ合つた板塀越に、青柳の忍び姿が、おくれ毛を銜へた態で、すら〳〵と靡いて居る。

梅と柳の間を潛つて、酒井は其の竹垣について當ると、處から何となく羽織の背の婀娜めくのを、隣家の背戸の、低い石燈籠がト蹲んだ形で差覗く。

主稅は四邊を見て立つたのである。

先生が其の肩の聳えた、懷手のまゝ、片手で不精らしく丁々と枝折戸を叩くと、ばた〳〵と跫音聞えて、緣の雨戸が細目に開いた。

と派手な友染の模樣が透いて、眞圓な顏を出したが、燈なしでも、其の切下げた前髮の下の、くるッとした目は屆く。隔ては一重で、つい目の前の、丁字巴の紋を見ると、莞爾々々と笑ひかけて、默つて引込むと、又ばた〳〵ばた。

程もあらせず、何處かでねぢを壓したと見える、其の小座敷へ、電燈が颯と點くのを合圖に、中脊で瘦ぎすな、二十ばかりの細面、薄化粧して眉の鮮明な、口許の引緊つた藝妓島田が、

故とらしい堅氣づくり。袷をしやんと、前垂がけ、褄を取るのは知らない風に、庭下駄を引掛けて、二ツ三ツ飛石を傳うて、カチリと外すと、戸を押してづツと入る先生の背中を一ツ、默言で、はたと打つた。是は、此の柏屋の姐さんの、小芳と云ふものゝ妹分で、綱次と聞えた流行妓である。

「大層な要害だな。」

「物騒ですもの。」

「些とは貯蓄つたか。」

と粗雜に廊下へ上る。先生に從うて、浮かぬ顏の主税と入違ひに、綱次は、あとの戸を閉めながら、

「お珍らしいこと。」

「…………」

「蔦吉姉さんはお達者？」と小さな聲。

主税はヒヤリとして、ついに無い、ものをも言はず、恐れた顏をして、一寸睨んで、竊と上つて、開けた障子へ身體は入れたが、敷居際へ畏まる。

酒井先生、座敷の眞中へぬいと突立つたまゝで――其時茶がゝつた縞を、雨戸で消して入り來る綱次に、

「何うだ、色男が羅出したやうに見えるか。」

とづツと胸を張つて見せる。

「私には解りません、姉さんにお見せなさいまし、今に歸りますから、」

「然う目前が利かないから、お茶を挽くのよ。當節は女學生でも、今頃は内にや居ない。些と日比谷へでも出かけるが可い。」

「憚樣、お座敷は宵の口だけですよ。」

と姿見の前から座蒲團をするりと引いて、床の間の横へ直した。

「さあ、早瀬さん。」と、最う一枚。

主税は膝の傍へ置いたまゝ也。

友染の羽織を着たのが、店から火鉢を抱へて來て、膝と一所に、お大事のものゝやうに据ゑると、先生は引跨ぐ體に胡坐の膝へ挾んで、口の邊を一ツ撫でゝ、

「敷きな、敷きな。」

と主税を見向いた。

「はい。」

とばかりで、其の目玉に射られるやうで堅くなつて何處も見ず、面を背けると端なく、重箪笥の前なる姿見。此處で梳る柳の髮は長からう、其の姿見の丈が高い。

## 三十七

「お敷きなさいなね、貴下。此家へ入らつしやりや、先生も何もありはしません、御遠慮をなさらなくつても可いんですよ。」

と意氣、文學士を呑む。此の女は、主税が整然として居るのを、氣の毒がるより、寧ろ自分の方が、偏に窮屈を感ずるので。

其癖、先生には、却つて、遠慮の無い樣子で、肩を並べるやうにして支膝で坐りながら、火鉢の灰をならして、手で其の縁をスッと扱く。

「茶を一ツ、熱いのを。」

と酒井は今のを聞かない振で、

「それから酒だ。」

綱次は入口の低い襖を振返つて、ト拜む風に、雪のやうな手を敲く。

「自分で起て。少いものが、不精を極めるな。」

「厭ですよ。ちやんと番をして居なくつては。姉さんに言ひつかつて居るんだから。」

と言ひながら、人懷かしげに莞爾して、

「ねえ、早瀬さん。」

「で、ございますかな。」と漸々膝出り出して、遠くから、背を圓くして伸上つて、腕を出して、巻莨に火を點けたが、お蔦が物指を當てた襦袢の袖が見えたので、氣にして、慌てゝ、引込める。

「些と透かさないか、籠るやうだ。」

「繪端ですか。」

「うゝむ、」

と頭を掉つたので、すつと立つて、背後の肱掛窓を開けると、辛うじて、雨落だけの隙を殘して、嶮しい、忍返しのある、然も眞新しい黒板塀が見える。

「見晴しても御覽なさいよ。」

と主税を振向いて又笑ふ。

酒井が凝と、其の塀を視めて、

「一面の杉の立樹だ、森々としたものさ。」

と擽つて、獨りで笑つた。

「しかし山燒の跡だと見えて、眞黒は酷いな。俺もゆく〳〵は此家へ引取られようと思つたが、裏が建つて、川が見えなくなつたから分別を變へたよ。」

其處へ女樂がちら〳〵來る。

「お出花を、早く〳〵。」

「はあ、」

「熱くするんだよ。」

「これ、小兒ばつかり使はないで、些と立つて食ふもの丶心配でもしろ。民は何うした、彼は可い。小老實に働くから。今に歸つたら是非酌をさせよう。あゝ、愛嬌のある處で。」

「そんなに、若いのが好なら、御内のお嫁さんが可いんだわ。ねえ早瀬さん。」

是には早瀬も答へなかつたが、先生も苦笑した。

「妙も近頃は不可くなつたよ。奧方と目配せを爲合つて、兎角銚子をこぎつて不可ん。第一酌をしないね、學校で、(お酌さん。)と云ふさうだ。小兒どもの癖に、相應に皮肉なことを云ふもんだ。」

「貴郎には小兒でも、最うお嫁入盛ぢやありませんか。何うかすると、此地へも入らつしやる、學校出の方にや、酒井さんの天女が、何のと云つちや、あの、騷いでおいでなさるのがありますわ。」

「あゝ、嬰兒をか、何處の坊やだ。」

「あら、あんなことを云つて。此方の早瀬さんなんかでも、丁ど似合ひの年紀頃ぢやありませんか。」

と何でもなう云つて退けたが、主税は懷中の三世相とともに胸に支へて俯向いた。

「其の癖、當人は嫁入と云や鼠の繪だと思つて居るよ。」

と云ひかけて莞爾として、

「むゝ、是は、猫の前で危い話だ。」

と横顏へ煙を吹くと、

「引播いてよ。」と手を擧げたが、思ひ出したやうに座を立つて、

「何うしたんだらうねえ、電話は、」と呟いて出ようとする。

「おい、阿婆は？」

「最う寐ました。」

「いや、老人は然う有りたい。」

座の白ける間は措かず、綱次はすぐに引返して、

「姉さんは、最う先方は出たさうですわ。」

云ふ間程なく、矢を射るやうな腕車一臺、からからと門に着いたと思ふと、

「唯今！」と車夫の聲。

## 三十八

「然うかい。」

と……意味のある優しい聲を、一寸誰かに懸けながら、一枚の襖音なく、すらりと開いて入つたのは、座敷歸りの小芳である。

瓜核顏の、鼻の準繩な、目の柔和しい、心ばかり面窶がして、黑髮の多いのも、世帶を知つたやうで奧床しい。眉の稍濃い、生際の可い、洗ひ髮を引詰めた總髮の銀杏返に、すつきりと櫛の齒が通つて、柳に雨の艶の涼しさ。撫肩の衣紋つき、少し高目なお太鼓の帶の後姿が、

恰も姿見に映つたれば、水のやうに透通る細長い月の中から抜出したやうで氣高いくらゐ。成程此の娘の母親なら、藝者家の阿婆でも、見棄を爲よう、と頷かれる。

「まあ、よく入らしつてねえ。」

と主税の方へ挨拶して、微笑みながら、濃い茶に鶴の羽小紋の紋着二枚袷、藍氣鼠の半襟、白茶地に翁格子の博多の丸帶、古代模樣空色縮緬の長襦袢、愼ましやかに、酒井に引添うた風采は、左支へなく頭が下るが、分けて其の夜の首尾であるから、主税は丁寧に手を下げて、

「御機嫌宜う、」と會釋をする。

爾時、先生憮然として、

「藝者に挨拶を爲る奴があるか。」

是に一言句あるべき處を、姉さんは柔順しいから、

「お出花が冷くなつて、」

と酒井の呑さしを取つて、いそ〳〵立つて、開けてある肱掛窓から、暗い雨落へ、ざぶりと覆すと、斜めに見返つて、

「大な湯覆しだな、お前ン許のは。」

「あんな事ばかり云つて、」

と、主税を見て莞爾して、白歯を染めても似合ふ年紀、少しも浮いた樣子は見えぬ。

それから、小芳は伏目になつて、二人の男へ茶を注いだが、此處に居れば其の役目の、綱次は車が着いた時、さあお歸りだ、と云ふとともに、はら〳〵座敷を出たのと知るべし。

酒井は輕く襟を扱いて、

「其處で、御馳走は、」

「綱次さんが承知をして居ます。」

「また寄鍋だらう、白瀧澤山と云ふ。」

「何うですか。」

と横目で見て、嬉しさうに笑を含む。

「いづれ不漁さ。」

と打棄るやうに云つたが、向直つて、

「早瀬、」と呼んだ聲が更まつた。

「えゝ。」

「先刻の三世相を見せろ。」

仔細なくては成らぬ樣子があるので、ぎよつとしながら、辭むべき數ではない。……柏家は天井裏を掃除しても、こんなものは出まいと思はれる、薄汚れたのを、電燈の下に、先生の手に、もぢ〳〵と奉る。

引取つて、ぐいと開けた、氣が入つて膝を立てた、額の色が嶮しくなつた。と見て膽を冷したのは主税で、小芳は何の氣も着かないから、晴々しい面色で、覗込んで、

「心當りでも出來たんですか。」

不答。煙草の喫さしを灰の中へ邪險に突込み、

「何は、何うした。」

と唐突に聞かれたので、小芳は恍惚したやうに、酒井の顏を視めると……

「彼よ、一寸意氣な、清元の旨い、景氣の可い、」

いひ〳〵本を引返して、

「扱帶で、鏡に向つた處は、綺のやうだと云ふ評判の……」

と凝と見られて、小芳は引入れられたやうに、

「蔦吉さん。」

と云つて、喫ひかけた煙管を忘れる。

主税は天窓から悚然とした。

「彼は何うした。」

「え、」

「彼は薩摩山手になつて容子を知らんが、相變らず繁昌か。」

## 三十九

小芳は我知らず、「あゝ、何うしよう、」と云ふ瞳が、主税の方へ流るゝのを、無理に堪へて、酒井を瞻つた瞳が震へて、

「蔦吉さんは最う落籍ましたさうです。」
と言はせも果てずに、
「(さうです。)は可怪しい。近所に居ながら、知らん奴があるか、判然謂へ、落籍たのか！」
「はい、」と伏目になつたトタンに、優しげな睫毛が、(何うかなさいよ。)と、主税の顔へ目配せする。
酒井は、主税を見向きもしないで、悠々とした調子に成り、
「そりや可い事をした、泥水稼業を留めたのは芽出度い。で、何處に居る、當時は……よ？」
「私はよく存じませんので……あの、何處か深川に居るんですつて。」
「深川？　深川と云ふ人に落籍されたのか、川向うの深川かい。」
「……。」
「何うだよ、おい、知らない奴があるか。お前、仲が好くつて、姉妹のやうだと云つたぢやないか。姉妹分が落籍たのに、其の行先が分らない、べら棒があるもんかい。
姉さんとか、小芳さんとか云つて、先方でも落籍祝ひに、赤飯ぐらゐ配つたらう、お前食つたらう、其奴を。
蒸立だとか、好い色だとか云つて、喜んでよ。
此方からも、イの切手の五十錢ぐらゐ祝つたらう。小遣帳に記いてゐるだらう。其の婦の行先が知れない奴があるものか。
知らなきや馬鹿だ。尤も、己のやうな素一歩と腐合はうと云ふ料簡方だから、はじめから悧怜でないのは知れてるんだ。馬鹿は構はん、何うせ、藝者だ、世間並ぢやない。藝者の馬鹿は構はんが、薄情は不可んな！　薄情は。薄情な奴は俺ら眞平だ。」
「何時、私が、薄情な、」
と口惜しく屹となる處を、酒井の劔幕が烈しいので、悄れて聲が濕んだのである。
「薄情でない！　薄情さ。懇意な婦の、居處を知らなけりや薄情ぢやないか。」
「だつて、貴郎。だつて、先方でも、つい音信をしないもんですから、」
「先方が音信をしなくつても、お前の薄情は帳消は出來ん。何故此方から尋ねんのだ。こんな稼業だから、暇が無い。行通はしないでも、居處が分らんぢや、近火は何うする！　火事見舞に町内の頭も遣らん。そんな仲よしがあるものか、薄情だよ、水臭いよ。」
姉さんの震へるのを見て、身から出た主税は堪りかねて、
「先生、」
と呼んだが、心ばかりで、此の聲は口へは出なかつた。
酒井は耳にも掛けないで、
「濟まん事さ、俺も他人でないお前を、薄情者には爲たくないから、居處を教へて遣らう。
堀の内へでも參詣る時は道順だ。煎餅の袋でも持つて尋ねて遣れ。おい、蔦吉は、當時飯田町五丁目の早瀬主税の處に居るよ。」
眞蒼になつて、
「先生、」
「早瀨！」
と一聲屹となつて、膝を向けると、疾風一陣、黒雲を捲いて、三世相を飛ばし來つて、主税の前へ礑と落した。
眶の光射るが如く、
「見ろ！　野郎は、素袷のすツとこ被よ。婦は編笠を着て三味線を持つた、其の門附の絵のある處が、お前たちの相性だ。
はじめから承知だらう。今更本郷くんだりの俺の繩張内を胡亂ついて、三世相の盗人覗きをするにや當るまい。
其の間拔けさ加減だから、露店の亭主に馬鹿にされるんだ。立派な土百姓に成りやあがつ

たた、田舎漢め！」

## 四十

主税は漸々、其も喉が乾くか、かすれた聲で、

「三世相を見て居りましたのは、何も、そんな、そんな譯ぢやございません……」とだけで後が續かぬ。

「飜譯でも頼まれたか、前世は牛だとか、午だとか。」

と串戯のやうな警拔な詰問が出たので、聊か言が引立つて、

「否、實は其の何でございまして。其の、此間中から、お孃さんの御縁談がはじまつて居ります、と聞きましたもんですから。」

小芳は鶴と酒井を見た。此の間でも初に聞いた、お妙の縁談と云ふのを珍らしさうに。

「はゝあ、ぢや何か、妙と、河野英吉との相性を檢べたのかい。」

果せる哉、禮之進が運動で、先生は早や平家の公達を御存じ、と主税は、折柄も、我身も忘れて、

「はい、」と云つて、思はず先生の顔を見ると、瞼が颯と暗く成るまで、眉の根がじりゝと寄つて、

「大きに、お世話だ、酒井俊蔵と云ふ父親と、歴然とした、謹（夫人の名。）と云ふ母親が附いて居る妙の縁談を、門附風情が何を知つて、周章てなさんな。

「僭上だよ、無禮だよ、罰當り！

お前が、男世帯をして、いや、菜が不味いとか、女中が燒豆腐ばかり食はせるとか愚痴つた、と云つて、可いか、此の間持つて行つた重詰なんざ、妙が獨活を切つて、奥さんが煮たんだ。

お前達ア道具の無い内だから、勿體ない、一度先生が目を通して、綺麗に裝つてあるのを、重箱のまゝ、賣婦とせゝり箸なんぞしやあがつて、辨松にや叶はないとか、何とか、薄生意氣な事を言つたらう。

よく、其の慈姑が咽喉に詰つて、頓死をしなかつたよ。

無禮千萬な、未だ其の上に、妙の縁談の邪魔をすると云ふは何事だ。」

と大喝した。

主税は思はず居直つて、

「邪魔を……私、私が、邪魔なんぞいたしますものでございますか。」

「邪魔をしない！ 邪魔をせんものが、縁談の事に就いて、坂田が己に紹介を頼んだ時、お前何故其を斷つたんだ。」

「……」

「何故斷つた？」

「あんな、道學者。」

「道學者が何うした。結構さ。道學者はお前のやうな犬でない、畜生ぢやないよ。何か、お前は先方の河野一家の理想とか、主義とかに就いて、不服だ、不贊成だ、と云つたさうだ。不服も不贊成もあつたものか。人間並の事を云ふな。

畜生の分際で、出過ぎた奴だ。

第一、汝のやうな間違つた料簡で、先生の心が解るのかよ！ お前は不贊成でも己は贊成だか、お前は不服でも己は心服だか――知れるかい。

何の彼のと、故障を云つて、（御門生は、令孃に思召しがあるのでごわりませう。）と坂田がお齒を吸つて、合點んで居たが、何うだ。」

「えゝ！ あの、痘痕が、」

と色をかへて戰いた。主税は而も點々と汗を流して、

「他の事とは違ひます、聞棄てに成りません。私は、私は、是は、更めて、坂田に談じなければ成りません。」

「何だ、坂田に談じる？ 坂田に談じるまでもない。己が然う思つたら何うするんだ、先生が、

然う思つたら何うするよ。」

「誰が、先生、そんな事。」

「否、內の玄關の書生も云つた、坂田が己の許へ來たと云ふと、お前の目の色が違ふさうだ。車夫も云つた、車夫の女房も云つたよ。（誰か妙の事を聞きに來たものはないか。）と云つて、お前、車屋でまで聞くんださうだな。恥しくは思はんか、大きな態をしやあがつて、薄髯の生えた面を、何處まで曝して歩行いて居るんだ。」

と火鉢をぐい／＼と揺つて。

## 四十一

彼方へ蹌々、此方へ蹌々、狐の憑いたやうに、俺の近所を、葛西街道にして、肥料桶の臭を爲せるのは何處の奴だ。

何か、聞きや、河野の方で、妙の身體に探捜を入れるのが、不都合だとか、不意氣だとか言ふさうだが、」

噫、禮之進が皆饒舌つた……

「意氣も不意氣も士百姓の知つた事かい。これ、河野はお前のやうな狐憑ぢやないのだぜ。學位のある、立派な男が、大切な嫁を娶るのだ。念を入れんで何うするものか。檢べるのは當然だ。藝者を媽々にするんぢやない。また己の方から、探捜を入れて貰ひたいのよ。さあ、何處でも穿鑿を爲て見ろ、と裸體で見せて差支への無いやうに、己と、謹とで育てたんだ。

何が可恐しい？ 何が不平だ？ 何が苦しい？

己は、渠等の檢べるのより、お前が其處等をまごつく方が何のくらゐ迷惑か知れんのだ。

假令んば、奴等に、身元檢べを爲れるのが迷惑とする、癪に障るとなりや、己が了と心得てる。此の指一本、妙の身體を秘した日にや、按摩の勢揃ほど道學者輩が杖を突張つて押寄せて、垣覗きを遣つたつて、黒子一點も見せやしない、誰だと思ふ、おい、己だ。」

と又屹と見て、

「何爲、泰然と落着拂つて、いや、其はお芽出度い、と云つて、賴まれた時、紹介をせん。癪に障る、野暮だ、と云ふ道學者に、ぐッと首根ッ子を壓へられて、（早瀬氏は是がために、些と手負猪でごわりましてな。）なんて、背をすゝらせるんだ。

馬鹿野郎！ 俺ら弟子は幾千でもある、が小兒の內から手許に置いて、餡ン棒までねぶらせて、妙と同一內で育てたのは、汝ばかりだ。其の子分が、道學者に冷かされるやうな事を、何爲するよ。

（世間に在るやつでごわります。飼犬に手を噛まれると申して、以來あの御門生には、令孃お氣を着けなさらんと相成りませんで。）坂田が云つたを知つてるか。

馬鹿野郎、これ、」

と迫つた調子に、慈愛が籠つて、

「然ほどの鈍的でも無かつたが、天罰よ。先生の目を眩まして、賣婦なんぞ引摺込む罰が當つて、魔が魅したんだ。嫁入前の大事な娘だ、そんな狐の憑いた口で、向後妙の名も言ふな。生意氣に道學者に難癖なんぞ着けやあがつて、汝の面當にも、娘は河野英吉にたゝッ吳れるから然う思へ。」

「貴郎、」

と小芳が顏を上げて、

「早瀬さんに、どんな仕損ひが、お有んなすつたか存じませんが、決して、お內や、お孃さんの……（と聲を曇つて、）お爲惡かれ、と思つてなすつたんぢやござんすまいから、」

「何だ。爲惡かれ、と思はん奴が、何故藝者を引摺込んで、師匠に對して申譯のないやうな不埒を働く。第一お前も、」

稻妻が西へ飛んで、

「同類だ、共謀だ、同罪だ〳〵。おい、藝者を何だと思つて居る。藪入に新橋を見た素丁稚のやうな難有いもんだと思つて居るのか。馬鹿だから、己が不便を掛けて置きや、増長して、酒井は藝者の情婦を難有がつてると思ふんだらう。高慢に口なんぞ突出しやがつて。俯向いて居ろ。」

はつと首垂れたが、目に涙一杯。

「そんな、貴郎、難有がつてるなんのッて、」

「難有くないものを、何故俺の大事な弟子に蔦吉を取持つたんだい！」

主税は手を支いて摺つて出た。

「先、先生、姉さんは、何にも御存じぢやございません、其は、お目遊ひでございまして、」

と大呼吸を胸で吐くと、

「默れ！　生れてから、俺ら、目遊ひをしたのは、お前達二人ばかりだ。」

## 四十二

「お言葉を反しますやうでございますが、」

主税は小芳の自分に對する情が仇になりさうなので、あるにもあられず摺身になつて、

「誰が然う云ふことをお耳に入れましたか存じませんが、藝者が内に居りますなんて飛んだ事でございます。矢張、あの坂田の奴が、怪しかりません事を。私は覺悟がございます、彼奴に對しましては、」と目の血走るまで意氣込んだが、後暗い身の明は、些とも立つのでは無かつた。

「覺悟がある、何の覺悟だ。己に申譯が無くつて、首を縊る覺悟か。」

「否、坂田の畜生、根もない事を、」

「馬鹿！」

と叱して、調子を弛めて、

「も休み〳〵言へ。失禮な、他人の壁訴訟を聞いて、根も無い事を疑ふやうな酒井だと思つて居るか。お前が其の盲目だから惡い事を働いて、一端己の目を盗んだ氣で洒亞々々として居るんだ。

先刻何うした、牛込見附で何うしたよ。慌てやあがつて、言種もあらうに、（女中が寢て居ますと失禮ですから。）と駈出した、彼は何の状だ。

婆が高利貸をして居やしまい、主人の留守に十時前から寢込む奴が何處に在る。

又寢て居れば無禮だ、と誰が云つたい。これ、お前たちに掛けちや、己の目は暗でも光るよ。飯田町の子分の内には、玄關の揚板の下に、どんな生意氣な、婦の下駄が潜んでるか、鼻緒の色まで心得てるんだ。べらぼうめ、内證でする事は客の靴へ灸を据ゑるのさへ秘し了されないで、（恐るべき家庭でごわります。）と道學者に言はれるやうな、薄つぺらな奴等が、先生の目を拔かうなぞと、天下を望むやうな叛逆を企てるな。

惡事を爲るならするやうに、最つと手際よく立派に遣れ。見事に己を間拔けにして見ろ。同じ叱言を言ふんでも、其點だけは恐入つたと、鼻毛を算まして讃めて遣るんだ。三下め、先生の目を盗んでも、お前なんぞのは、たか〴〵駈出しの（タッシェン、ディープ）だ。」

是は、（掏摸）と云ふ事ださうである。主税は折れるやうに手をハッと支いた。

「恐入つたか、何うだ。」

「ですが、全く、其の、そんな事は……」

「無い？」

「……」

「藝者は内に居ないと云ふのか。」

「はい。」

霹靂の如く、

「歸れ！」

小芳が思はず肩を窘める。

「早瀬さん、私、私ぢや、」

と聲が消えて、小芳は紋着の袖其まゝ、肩も

殘らず面を蔽ふ。
「いや、愛想の盡きた蛆蟲め、往生際の惡い丁稚だ。そんな、しみつたれた奴は盜賊だつて風上にも置きやしない、酒井の前は恐れ多いよ、歸れ！
　これ、普通にも事情はある、親不孝でも理窟が有る。前座のやうな情實でもあつて、一旦内へ入れたものなら、猫の兒の始末をするにも、鰹節はつきものだ。談を附けて、手を切らして、綺麗に捌いて遣らうと思つて、お前の許へ行くつもりで、百と、二百は、懷中に心得て出て來たんだ。
　此段に成つても、未だ、あゝ、心得違ひをいたしました。先生よしなに、とは言ひ得ないで、祕し隱しをする料簡ぢや、汝が家を野天にして、婦とさかつて居たいのだらう。それで身が立つなら立つて見ろ。口惜しくば、おい、恁うやつて馴染の藝者を傍に置いて、弟子に劒突をくはせられる、己のやうな者に成つて出直して來い。
　さあ、歸れ、歸れ、歸れ！　汚はしい。歸らんか。此の座敷は己の座敷だ。己の座敷から追出すんだ。歸らんか、野郎、歸れと云ふに、其處を起たんと蹴殺すぞ！—
「あれ、お謝罪をなさいまし。」と小芳が楯に、おろ〳〵する。
　主税は、碎けよ、と身を揉んで、
「小芳さん、お取なしを願ひます。」と熟と瞻めて色が變つた。
「奧さんに、奧さんに、お願ひなさいよ、」

## 四十三

「何を、奧さんに頼めだい、默れ、誰が藝者の取持なんぞ爲ると思ふか。先刻も云ふ通り、芳、お前も同類だ、同類は同罪だよ。早瀬を叩出した後ぢや己が追出る、お前とも是切だから、然う思へ。」
　と言はるゝまゝに、忍び音が、聲に出て、肩の震へが、袖を搖つた。小芳は幼いものゝ如く、あはれに頭を掉つて、厭々をするのであつた。
「姉さん、」
　と思込んだ顏を擡げた、主税は瞼を引擦つて、元氣附いたやうな、調子ばかりで、一向取留の無い樣子、しどろに成つて、
「貴女は、貴女は御心配下さいませんやうに……先生、」
　と更めて、兩手を支いて、息を切つて、
「申譯がございません。飛んだ連累でお在んなさいます。何うぞ、姉さんには、そんな事をおつしやいません樣に、私を御存分になさいまして。」
「存分にすれば蹴殺すばかりよ。」
　と吐出すやうに云つて、はじめて、豐かに煙を吸つた。
「ぢや恐入つたんだな。
　内に蔦吉が居るんだな。
　最う陳じないな。」
「心得違ひをいたしまして……何とも申しやうがございません。」
　と吻と息を吐いたと思ふと、聲が濕む。
　最早罪に伏したので、今までは執成すことも出來なかつた小芳が、此處ぞ、と見計つて、初心にも、袂の先を爪さぐりながら、
「大目に見てお上げなすつて下さいまし。蔦吉さんも仇な氣ぢやありません。決して早瀬さんのお世帶の不爲に成るやうな事はしませんですよ。一生懸命だつたんですから。あんな派手な妓が落籍祝どころぢやありません、貴郎、着換も無くしてまで、借金の方をつけて、夜遁げをするやうにして落籍たんですもの。
　堅氣に世帶が持てさへすれば、其の内には、世間でも、商賣したのは忘れませうから、早瀬さんの御身分に障るやうなこともございますまい。

最う此の節ぢや、洗濯ものも出來るし、單衣ぐらゐ縫へますつて、此の間も夜晩く私に逢ひに來たんですがね。——

と婀娜な涙聲に成つて、

「羽織が無いから日中は出られない、と拗ねたやうに云ふのがね、どんなに嬉しさうだつたでせう。其に土地馴れないのに、臆病な妓ですから、早瀬さんが居らなくつて留守にして居なさいます、今頃は、どんなに心細がつて、戸に附着いて、土間に立つて、歸りを待つて居るか知れません、私あ其を思ふと……」

と紫色の、袂を染めて、淺く厭へた襦袢の袖口。月に露添ふ顔を見て、主税もはら／＼と落涙する。

「世迷言を言ふなよ。」

と膠もなく、虞氏が涙を斥けて、

「早瀬何うだ、別れるか。」

「行處もございません、仕樣が無いんでございますから、先生さへ、お見免し下さいますれば、私の外聞や、そんな事は、世間體なんぞ。」と

慄ふつて聲が乾く

「否、不可ん、許しや爲ないよ。」

「然う仰有つて下さいますのも、世間を思つて下さいますからでございます。最う、私は、自分だけでは、決心をいたしまして、世間には、隨分一人前の腕を持つて居ながら、財産を當に婿養子に成りましたり、汝が勝手に嫁にすると申して、人の娘の體格檢査を望みましたり、」

と赫となつて、此の時や〻血の色が眉宇に浮んだ。

「女學校の教師をして、媒妁をいたしましたり……それよりか、拾人の無い、社會の遺失物を内へ入れます方が、同じ不都合でも、罪は淺からうと存じまして。其も決して女房になんぞ、爲ますわけではございません。一生日蔭ものゝ下女同樣に、唯内證で置いて遣りますだけのことでございますから。」

「血迷ふな。腕があつて婿養子に成る、女學校で見合をする、そりや勝手だ、己の弟子ぢやないんだから。其のかはり藝者を内へ入れる奴も弟子ぢやないのだ、分らんか。」

## 四十四

折から食卓を持つて現れた、友染の其の愛々しいのは、座の恰も吹荒んだ風の跡のやうな趣に對して、散り殘つた歸花の風情に見えた。輝く電燈に光さへ、凩の對手や空に月一つ、で光景が凄じい。

一言も物いはぬ三人の口は、一度にバアと云つて驚かさうと、我がために、はた爾く閉されて居るやうに思つて、友染は、簪の花とともに、堅く成つて膳を据ゑて、浮上るやうに立つて、小刻に襖の際。

川千鳥が其處まで通つて、チリチリ、と音が留まつた。杯洗、鉢肴などを、ちよこ／＼運んで、小じんまりと綺麗に並べる中も、姉さんは、唯火鉢を些とずらしたばかり、悄れて俯向いて、成らば直ぐに、頭が打つのを壓へたさうに、火箸に置く手の白々と、白けた容子を、立際に打傾いで、熟と見て出ようとする時、

「食ふものは此だけか。」

と酒井は笑みを含んだが、此際、天窓から臨んで食ふと、大口を開けられたやうに感じたさうで、襖の蔭で慄然と萎んで壁の暗さに消えて行く。

慌てゝ、あとを閉めないで行つたから、小芳が心付いて立たうとすると、する／＼と裾を捌いて、慌しげに來たのは綱次。

唯今の注進に、ソレと急いで、廊下の襖を引抜いて、長火鉢の前を斜と立ち状に來た。

前垂掛けとはがらりと變つて、鐵お納戸地に、白の角通しの縮緬、かはり色の裳を拂つて、上下對の袷の襲、黒繻珍に金茶で菖蒲を織出し

た丸帯、緋綸子の長襦袢、冷く絡んだ雪の腕で、猶豫ふ色なく、持つて來た銚子を向けつつ、

「お酌、」

冴えた音を入れると、鶯のほうと立つ、膳の上の陽炎に、電氣の光が和いで、朧々と春に返る。

「未だ宵の口かい。」

「柏家だけではね。」と莞爾する。

「遠慮なく出懸けるが可い、然し猥褻だな。」

「あら、何故？」

「十一時過ぎてからの座敷ぢやないか。」

「御免なさいよ、苦界だわ。ねえ、早瀨さん、さあ、めしあがれよ、ぐうと。」

「否、最う。」

主税は猪口を視むるのみ。

「お察しなさいよ。」

と先生に又お酌をして、

「御贔屓の民子ちやんが、大江山に捕まへられて居ますから、助出しに行くんだわ。渡邊の綱次なのよ。」

「道理こそ、鎖帷子の扮裝だ。」

「鏝のやうに、根が出過ぎはしなくつて。姉さん。」

と髱に手を觸る。

「否、」

と云つて、言の内に、（そんなに心配をおしでない。）の意味が籠る。綱次は、（安心）の體に、胸を一寸輕く撫でゝ、

「おいしいものが、直ぐにあとから、」

「綱次姉さん、また電話よ。」

と廊下から雛妓の聲。

「あい、あい、彼方でも御用とおつしやる。では、直き行つて來ますから、貴下歸つちや、厭ですよ、民ちやんを連れて來て、一所に又お汁粉をね。」

酒井は默つて頷いた。

「早瀨さん、御緩り。」

と行く春や、主税は其さへ心細さうに見送つて、先生の目から面を背ける。

酒井は、杯を、つゝと獻し、

「早瀨、近う寄れ、最つと。」

と進ませ、肩を聳かして屹と見て、

「さあ、一ツ遣らう。何うだ、別離の杯にするか。」

「……」

「其とも婦を思切るか。芳、酌いで遣れ、おい、何うだ、早瀨。これ、酌いでやれ、酌がないかよ。」

銚子を舉げて、猪口を取つて、二人は顏を合せたのである。

## 四十五

爾時、眼光稻妻の如く左右を射て、

「何を愚圖々々して居るんだ。」

「私がお願ひでござんすから、」と小芳は胸の躍るのを、片手で密と壓へながら、

「兎も角も今夜の處は、早瀨さんを歸して上げて下さいまし。而して能く考へさして、更めてお返事をお聞きなすつて下さいましな、後生ですわ、貴郞。

ねえ、早瀨さん、然うなさいよ。先生も、こんなに仰有るんですから、貴下も能く御分別をなさいまし、此處は私が身にかへてお預り申しますから。よ……」

と促されても立ちかねる、主税は後を憂慮ふのである。

「蔦吉さんが、どんなに何したつて、私が知らない顏をして居れば可かつたのですけれど、思ふ事は誰も同一だと、私――」

と襟に頤深く、迫つた呼吸の早口に、

「身につまされたもんだから、遂々こんな事にして了つて、元はと云へば……」

「そんな、貴女が惡いなんて、そんな事があるもんですか。」

と酒井の前を庇ふ氣で、肩に力味を入れて云つたが、續いて言はうとする、

（貴方がお世話なさいませんでも……）の以下は、怪しからず、と心着いて、ハッと又小さくなつた。

「否、私が惡いんです。ですから、後で叱られますから、貴下、兎も角もお歸んなすつて……」

「成らん！　此の場に及んで分別も糸瓜もあるかい。こんな馬鹿は、助けて返すと、婦を連れて駈落を爲かねない。短兵急に首を壓へて叩つ斬つて了ふのだ。

早瀨。」

と苛々した音調で、

「是も非も無い。さあ、たとへ俺が無理でも構はん、無情でも差支へん、婦が怨んでも、泣いても可い。憧れ死に死んでも可い。先生の命令だ、切れつ了へ。

俺を棄てる歟、婦を棄てる歟。

むゝ、此の他に言句はないのよ。」

「何うだ。」と頤で言はせて、悠然と天井を仰いで、くるりと背を見せて、ドンと食卓に肱をついた。

「婦を棄てます。先生。」

と判然云つた。其處を、酌をした小芳の手の調子と、主税の猪口と相觸れて、カチリと鳴つた。

「幾久しく、お杯を。」と、ぐつと飮んで口を塞いだのである。

物をも言はず、背向きに成つたまゝ、世帶話をするやうに、先生は小芳に向つて、

「其方の、其方の熱い方を。――最う一杯、最う一ッ。」

と立續けに、五ッ六ッ。ほッと酒が色に出ると、懷中物を懷へ、羽織の紐を引懸けて、づゝと立つた。

「早瀨は涙を乾かしてから外へ出ろ。」

小芳はひたと、酒井の肩に、前髮の附くばかり、後に引添うて縋り状に、

「お歸んなさるの。」

「謹が病氣よ。―」

と自分で雨戸を。

「其は不可ませんこと。」と縁側に、水際立つてはらりと取つた、隅田の春の空色の褄。力なき小芳の足は、カラリと庭下駄に音を立てたが、枝折戸の未だ開かぬほど、主税は座をずらして、障子の蔭に成つて、忙しく卷莨を吸ふのであつた。

二時ばかり過ぎてから、主税が柏家の枝折戸を出たのは、やがて一時に近かつたらう。爾時は姐さんはじめ、綱次と最う一人の其の民子と云ふ、牡丹の花のやうな若いのも、一所に三人で路地の角まで。

「お互に辛抱するのよう。」と酒氣のある派手な聲で、主税を送つたのは綱次であつた、ト同時に、渠は姐さんと、手を緊乎と取り合つた。

時に、寂りした横町の、唯ある軒燈籠の白い明と、板塀の黑い蔭とに挾つて、平くなつて居た、頰被をした傳法が、一人、後先を眴して、衝と出て、五六歩行過ぎた、早瀨の背後へ、……拔足で急々。

「もし、」

「……」

「先刻ア何うも。よく助けて下すつたねえ。」

と頰かむりを取つた顏は……禮之進に捕まつた、電車の中の、其の半纏着。

## 誰が引く袖

### 四十六

土曜日は正午までゞ授業が濟む――教室を出

る娘たちで、照陽女學校は一齊に溫室の花を綠の空に開いたやう、殺と麗な日を浴びた色香は、百合よりも芳しく、杜若よりも紫である。

年上の五年級が、最後に靜々と出拂つて、最う是で忘れた花の一枚もない。四五人がちらほらと、式臺へ出懸る中に、妙子が居た。

阿嬢は、就中活潑に、大形の紅入友染の袂の端を蘆色の八ツ口から飜然と掉つて、何を急いだか飛下りるやうに、靴の尖を揃へて、トンと土間へ出た處へ、小使が一人ばた〳〵と草履穿で急いで來て、

「あゝ酒井樣。」

と云ふ。優等生で、此の容色であるから、寄宿舍へ出入りの諸商人も知らぬ者は無いのに、別けて馴染の翁樣ゆゑ、いづれ菖蒲と引き煩はずに名を呼んだ。

「はゝい。」

と振向くと、小使は小腰を屈めて、

「敎頭樣が少し御用でござります。」

「私に、」

「一寸お出で下さりまし。」

「あら、何でせう、」

と友達も、吃驚したやうな顏で眴すと、出口に一人、駒下駄を揃へて一人、一人は日傘を開け掛けて、其邊の辻まで一所に歸る、お定まりの道連が、齊しく三方からお妙の顏を瞻つて默つた。

此の段は、豫め敎頭が心得さしたか、翁樣が又、其處等の口が姦しいと察した氣轉か、

「何か、お父樣へ御託づけものがござりますで。」

「まあ、然う、」

と莞爾して、

「待つてゝ下すつて?」と三人へ、一度に黑目勝なのを働して見せると、言合せた樣に、二人まで、胸を撫で下して、ホヽと笑つた――お腹が空いた――と云ふ事ださうである。

お妙はずん〳〵小使について廊下を引返しながら、怒つたやうな顏をして、振向いて同じやうに胸の許を擦つて見せた。

「應接室でござりますわ。」

敎員室の前を通ると、背後むきで、丁寧に、風呂敷の皺を伸して、何か包みかけて居たのは習字の敎師。向うに仰樣に寢て、兩肱を空に、後腦を引掴むやうにして椅子にかゝつて居たのは、數學の先生で。看護婦のやうな服裝で、ちやうど聲高に笑つた婦は、言はずとも、體操の師匠である。

行きがゝりに目についた、お妙は直ぐに俯目になつて、コト〳〵跫音が早くなつた。階子段の裏を拔けると、次の次の、應接室の扉は、半開きに成つて、ペンキ塗の硝子戶入の、大書棚の前に、卓子に向つて二三種新聞は見えたが、それではなしに、背文字の金の燦爛たる、新しい洋書の中ほどを開けて讀む、天窓の、照々光るのは、當女學校の敎頭、倫理と英文學受持……の學士、宮畑閑耕。同じ文學士河野英吉の親友で、待合では世話に成り、學校では世話をする一人である。

(蝦茶と緋縮緬の交換だ。)と主税が憤つた一人である。

此の編の記者は、敎頭氏、君に因つて、男性を形容するに、留南奇の薫馥郁としてと云ふ、創作的文字を愛に挾み得ることを感謝しよう。勿論、其の香の、二十世紀であるのは言ふまでもない。

お妙は、扉に半身を隱して留まる。小使は其のまゝ向うへ行過ぎる。

閑耕は、キラリ目金を向けて、じろりと見ると、目を細うして、髭の尖をピンと立てた、頤が圓い。

「此方へ、」

と鷹揚に云つて、再び澄まして書見に及ぶ。
　お妙は扉に附着いたなりで、入口を左へ立つて、本の包みを抱いたまゝ、しとやかに會釋をしたが、敢て其よりは進まなかつた。
「此方へ。」と無造作なやうに、今度は書見のまゝ聲をかけたが、落着かれず、又ひよいと目を上げると、其の發奮で目金が躍る。
　頰桁へ兩手をぴつたり、慌てゝ目金の柄を、鼻筋へ揉込むと、睫毛を瞼へ込んで、驚いて、指の尖を滑らして、瞼を擦つて、
「は、は、は、」と無意味な笑方をしたが、向直つて眞面目な顔で、
「何うですな。」

## 四十七

　最う傍へ來さうなものと、閑耕教頭が、再び、じろりと見ると、お妙は身動きもしないで、熟と立つて、﨟たけた眉が、雲の生際に浮いて見えるやうに俯向いて居るから、威勢に怖ぢて、頭も得上げぬのであらう、いや、然もあらむ、と思ふと……然らでない。酒井先生の令嬢は、笑を含んで居るのである。
　其は、其は愛々しい、仇氣ない微笑であつたけれども、此の時の教頭には、素直に言ふ事を肯いて、御前へ侍はぬだけに、人の惡い、與し易からざるものがあるやうに思はれた。で、苦い顔をして、
「酒井さん、此處へ來なくちや不可んですよ。」
　時に教頭胸を反らして、卓子をドンと拳で鳴らすと、妙子はつゝと勇ましく進んで、差向ひに面を合はせて、其のふつくりした二重瞼を、臆する色なく、圓く睜つて、
「御用ですか。」
　と云つた風采、云ひ知らぬ品威が籠つて、閑耕は思ひかけず、はつと照らされて俯向いた。
　教場でこそあれ、二人だけで口を利くのは、抑々生れて以來最初である。が、是は教場以外では如何なる場合にても、然うであらうも計られぬ。
　はて、教頭ほどの者が、こんな譯ではない筈だが、と更めて疑の目を擧げると、脊もすらりとして椅子に居る我を仰ぐよ、酒井の孃は依然として氣高いのである。
「酒井さん……」
　聲の出處が、倫理を講ずるやうには行かぬ。
　咽喉が狂つて震へがあるので、えへん！と咳いて、手巾で擦つて、四邊を眴したが、湯も水も有るのでない、其處で、
「小ウ使いゝ、」と怒鳴つた。
「へ――い、」
　と謹んだ返事が響く。教頭は是に因つて、大に其の威嚴を恢復し得て、勢に乘じて、
「貴孃に聞く事があるんですが、」
「はい。」
「參謀本部の飜譯を爲て、未だ學校なども獨逸語を持つて居ますな――早瀬主税――と云ふ、彼は、貴孃の父樣の弟子ですな。」
「えゝ、然う……」
「で、貴孃の御宅に置いて、修業をおさせなすつたさうだが、一體彼の幾歳ぐらゐの時からですか。」
「知りません。」
　と素氣なく云つた。
「知らない？」
　と妙な顔をして、額でお妙を見上げて、
「知らないですか。」
「えゝ、前にからですもの。内の人と同一ですから、何時頃からだか分りませんの。」
「貴孃は幾歳ぐらゐから、交際をしたですか。」
「……」
　と默つて教頭を見て、然も不思議さうに、
「交際つて、私、厭ねえ。早瀬さんは内の人なんですもの。」と打微笑む。

「内の人。」
「えゝ、」と猶豫はず頷いた。
「貴娘、然う云ふ事を言つては不可ますまい。彼を（内の人）だなんと云ふと、御兩親をはじめ、貴娘の名譽に關はるでせうが、あゝ」
と口を開いてニヤリとする。
お妙はツンとして横を向いた、眦に優しい怒が籠つたのである。
閑耕は、其の背けた顏を覗込むやうにして、胸を曲げ、膝を叩きながら、鼻の尖に、へゝん、と笑つて、
「あんな者と、貴娘交際するなんて。藝者を細君にして居ると云ふぢやありませんか。汚はしい。怪しからん不行跡です。實に學者の體面を汚すものです。然う云ふ者の許へ貴娘出入りをしては成りません。知らない事はないのでせう。」
妙子は何にも言はなかつたが、はじめて眩しさうに瞬きした。
小使が來て、低頭して命を聞くと、教頭は頤で教へて、
「何を、茶をくれい。」
「へい。」
「其處を閉めて行け、寄宿生が覗くやうだ。」

## 四十八

扉が閉ると、教頭身構を崩して、仰向けに笑ひ懸けて、
「まあ、お掛けなさい、其處へ。貴娘の爲に成らんから、云ふのだよ。」
故々立つて突着けた、椅子の縁は、袂に觸れて、其の片袖を動かしたけれども、お妙は規則正しいお答禮をしただけで、元の横向きに立つて居る。
「早瀬の事はまだ〳〵、其處ぢやないですが、」
と直ぐに又眉を顰めて、談じつけるやうな調子に變つて、
「酒井さん、早瀬は、ありや罪人だね、我々は其の名を口にするさへ憚るべき惡漢ですね。」
とのツそり手を伸ばして、卓子の上に散ばつた新聞を撫でながら、
「貴娘、今日のA……新聞を見んのですか。」
一言聞くと、颯と瞼を紅にして、お妙は友染の襦袢ぐるみ袂の端を堅く握つた。
「見ませんか、」
と問返した時、教頭は傲然として、卓子に頤杖を支く。
「えゝ、」とばかりで、お妙は俯向いて、瞬きしつゝ、流眄をするのであつた。
「別に、一大事に關して早瀬は父様の許へ、頃日に參つた事はないですかね。或は何か貴娘、聞いた事はありませんか。」
小さな聲だつたが判然と、
「否。」と云つて、袖に抱いた風呂敷包の紫を、皓齒で噛んだ。此の時、此の色は、瞼の其の朱を奪うて、寂しく白く見えたのである。
「行かん筈はないでせうが、貴娘、知つて居て、未だ私の前に、祕すのぢやないかね。」
「存じませんの。」
と頭を掉つたが、いたいけに、拗ねたやうで、且つくどいのを煩さゝう。
「ぢや、まあ、知らないと爲て。其から、お話するですがね。早瀬は、彼は、掏摸の手傳ひをする、巾着切の片割のやうな男ですぞ！」
簪の花が凜として色が冴えたか氣が籠つて、屹と、教頭を見向いたが、其の目の遣場が無ささうに、向うの壁に充滿の、偉なる全世界の地圖の、サハラの沙漠の有るあたりを、清い瞳がうろ〳〵する。
「勿論早瀬は、其がために、分けて規律の正しい、參謀本部の方は、此の新聞が出ない先に辭職、免官に、成つたです。是は其の掏摸に遭つた、當人の、御存じぢやらうね、坂田禮之進氏、

彼の方の耳に第一に入つたです。で。見ないんなら御覽なさい。外の二三の新聞にも記いてあるですが。此のA…が一番悉しい。」

と落着いて向うへ開いて、三の面を指で敎へて、

「此處にありますが、お讀みなさい。」

「歸つて、私、內で聞きます。」と云つた、脣の花が戰いだ。

「は、は、は、貴孃、（內の人）だなんと云つたから、極が惡いかね。何、知らないんなら宜しいです。私は貴孃の名譽を思つて、注意のために云ふんだから、能くお聞きなさい。歸つて聞いたつて駄目さね。」

と太く衒つた語氣を帶びて、

「父樣は、自分の門生だから、十に八九は祕すですもの。何で眞相が解りますか。」

コツ〳〵廊下から剝啄をした者がある。と、敎頭は、ぎろりと目金を光らしたが、反身に伸びて、

「カム、イン、」と猶豫はずに答へた。

此の剝啄と、カム、インは、極りに呼吸が合過ぎて、恰も豫て言合せてあつたもののやうである。

則ち扉を細目に、先づ七分立の寫眞の如く、顏から半身を突入れて中を覗いたのは河野英吉。白地に星模樣の竪ネクタイ、金剛石の針留の光つただけでも、天窓から爪尖まで、其日の扮裝想ふべしで、髮から油が溶けさう。

早や得も言はれぬ悅喜の面で、

「やあ、」と聲を懸けると、入違ひに、後をドーン。

扉の響きは、ぶる〳〵と、お妙の細い靴の尖に傳はつて、搖らめく胸に、地圖の大西洋の波が煽る。

## 四十九

「失敬、失敬。」

と些と持上げて、浮かせ氣味に物馴れた風で、河野は敎頭と握手に及んで、

「やあ、失敬、」と云ひながら、お妙の背後から、橫顏をじろりと見る。

河野の調子の發奮んだほど、敎頭は冷かな位に落着いた態度で、

「何處の歸りか。」

「大學（と力を入れて、）の圖書館に檢べものをして、其から精養軒で午飯を食うて來た。是から父H博士の許へ行かねばならん。」

と忙しさうに肩を揺つて、

「君（と故と低聲で呼んで、）此方は……」

「生徒――」と見下げたやうに云ふ。

「はあ、」

「ミス酒井と云ふ、」と橫を向いて忍び笑を遣る。

「うむ、眞砂町の酒井氏の、」

と首を伸ばして、分つたやうな、分らぬやうな、見知越のやうな、で、無いやうな。其邊あやふやなお妙の顏の見方をしたが、

「君、紹介して呉れ給へ。」

「學校で、紹介は可訝しからう。」

「だつて最う敎場ぢやないぢやないか。」

「其では、」と眞に餘儀なさゝうに、さて、嚴格に、

「酒井さん、過般も參觀に見えられた、是は文學士河野英吉君。」

同じ文字を露した大形の名刺の芬と薰るのを、疾く用意をして居たらしい、ひよいと抓んで、蚤いこと、お妙の袖摺れに出さうとするのを、拙い！と目で留め、敎頭は髭で制して、小鼻へ掛けて揉み上げ揉上げ揉んだりける。

英吉は眼を睜つて、急いで其の名刺と共に、兩手を衣兜に突込んだが、斜めに腰を捻るよと見れば、ちよこ〳〵步行きに、ぐるりと地圖を

背負つて、お妙の眞正面へ立つて、最一つ肩を揉んで、手の汗を、ずぼんの横へ擦りつけて、澄めた氣で、くの字形に腕を出したは、短兵急に握手の積か、唯見ると、搖がぬ黒髮に自然と四邊を拂はれて、

「やあ、はゝはゝ、失敬。」

と英吉大照れに成つて、後ざまに退つて(お、神よ。)と云ひさうな態に成り、

「お遊びに入らつしやい、妹たちが、學校は違ひますが、皆貴女を知つて居るのですよ。はあ……」

と獨りで領いて、大廻りに卓子の端を廻つて、どたりと、腹這ひになるまでに、擴げた新聞の上へ乘懸つて、

「何を話して居たのだい。」

敎頭を一寸見れば、閑耕は額で睨めつけ、苦き顏して、其の行過を躾めながら、

「實は、今、酒井さんに忠告をして居る處だ。」

お妙は色を又染めた。

「あゝ、早瀨か。」

「然うだとも！ えゝ、酒井さん……」

默つて居るから、

「酒井さん！」

「はゝい、」と聲がふるへて聞える。

「貴娘知らんのならお聞きなさい。頃日の事ですが、今も云つた、坂田禮之進氏が、兩國行の電車で、百圓ばかり掏摸に掏られたです。取られたと思ふと、氣が着いて、直に其奴を引摑へて、車掌とで引摺下ろしたまでは、恐入つて冷却して居た其の掏摸がだね、忽ち烈火の如くに猛り出して、坂田氏をなぐつた騷ぎだ。」

「撲られたつてなあ、大人、氣の毒だつたよ。」

「災難とも。で、何です。巡査が來たけれども、何の證據も擧らんもんで、其の場は其ッ切で、坂田氏は何の事はない、打たれ損の形だつたんだね。お聞きなさい――貴娘。

證據は無かつたが、怪むべき風體の奴だから、其筋の係が、其奴を附廻して、同じ夜の午前二時頃に、淺草橋邊で、フトした星が附いて取抑へると、今度は袱紗に包んだ紙入ぐるみ、手も着けないで、坂田氏の盜られた金子を持つて居たんだ。

ねえ、貴娘。拘引して嚴重に檢べたんだね。何處へ其まで隱して置いたか。先刻は無かつた紙入を、と云ふ事になる……とです。」

敎頭が云ふと、英吉が輕忽しく、

「妙だ、妙だよ。妙さなあ。」

## 五十

「掏摸の名も新聞に出て居るがね、何とか小僧萬太と云ふんだ。其奴の白狀した處では、電車の中で掏つた時、大不出來しに打摑つて、往生をしたんだが、對手が面を撲つたから、癪に障つて堪らないので、丁度袖の下に俯向いて居た男の袖口から、早業で其の紙入をずらかし込んで、最う占めた、と其處で逆捻に捻ぢたと云ふんだね。

處で、いゝ、まん直しの仕事でもしたいものだと、柳橋邊を、晩く成つてから胡亂ついて居ると、うつかり出會つたのが、先刻、紙入を辷らかした男だから、金子は何う成つたらうと思つて、捕つたら其迄だ、と惡度胸で當つて見ると、道理で袖が重い、と云つて、はじめて、氣が着いて、袂を探して其の紙入を出して與れて、しかし、一旦此方の手へ渡つたもんだから、よく掏摸仲間が遣ると云ふ、小包にでもして、其筋へ出さなくつちや不可んぞ、と念を入れて渡してくれた。一所に交番へ來い！ とも云はずに、すつきりした其人へ義理が有るから、手も附けないで突出すつもりで、一先づ木賃宿へ歸らうとする處を、御用に成りました。唯た一時でも善人に成つて償とした處だつたから摑つたんで、

盜人心を持つた時なら、淺草橋の欄干を踏んで、富貴竈の屋根へ飛んでも、旦那方の手に合ふんぢやないと、太平樂を並べた。太い奴は太い奴として。

　酒井さん。其の掏摸の、袖の下に成つて、坂田氏の紙入を預つたと云ふ男は、誰だと思ひますか、ねえ、是が早瀨なんだ。」

　と教頭は椅子をずらして、卓子を輕く打つて、

「何うです、貴娘が聞いても變だらうが。其筋ぢや、直ぐ其の關係者にも當りがついて、早瀨も確か一二度警察へ呼ばれた筈だ。しかし其の申立てが、掏摸の言に符合するし、早瀨も些とは人に知られた、然るべき身分だし、何は措いても、名の響いた貴娘の父樣の門下だ、と云ふので、何の仔細も無く濟むにや濟んだ。

　眞砂町の御宅へも、此の事に附いて、刑事が出向いたさうだが、そりや憚つて新聞にも書かず、御兩親も貴娘には聞かせんだらう。

　で、まあ、濟んだ事で、早瀨は參謀本部の翻譯官も辭した、新聞には罪狀も出してあるが、考へて御覽なさい。

　同じ電車に乘つて居て、坂田氏が掏られた事を其の騷ぎで知らん筈がない。知つて居てだね、紙入が自分の袂に入つて居る事を……まあ、假に掏摸に聞かれるまで氣がつかなんだにしてからがだ、愈々分つた時、面識の有る坂田氏へ返さうとはしないで、ですね、」

　河野にも言を分けて、

「直接に掏摸に渡して遣るも如何なもんだよ。何よりもだね、そんな盜賊とひそ〳〵話をして……公然とは出來んさ、いづれ密々話さ。」

　誰も否とは云はんのに、獨りで嵩にかゝつて、

「紙入を手から手へ讓渡を爲るなんて、そんな、不都合な、後暗い。」

「だがね、」

　と一寸々々、新聞を見るやうにしては、お妙の額を伺ひ〳〵、孃があらぬ方を向いて、今は流眄もしなくなつたので、果は遠慮なく視めて居たのが、なえた樣な聲を出して、

「坂田が疑ふやうに、掏摸の同類だと云ふ、そんな事は無いよ。君、

「何うとも云へん、酒井氏の内に居たと云ふだけで、誰の子だか素性も知れないんだと云ふぢやないか。」

「父上に……聞いて……頂戴。」

　とお妙は口惜しさうに、あはれや、ふるみ聲して云つた。

　二人密と目を合せて、苦々しげに教頭が、

「敢て然う云ふ探索をする必要は無いですがね、よしんば何事も措いて問はんとして、少くとも掏摸に同情したに違ひない、然うだらう。」

「そりや彼の男の主義かも知れんよ。」

「主義、危險極まる主義だ。で、要するにです、酒井さん。あゝ云ふ者と交際をなさると云ふと、先づ貴娘の名譽、續いては此の學校の名譽に係りますから、以來、口なんぞ利いては成りません。宜しいかね。危險だから近寄らんやうになさい、何をするか分らんから、あんな奴は。」

　お妙は氣を張つめむと勤むる如く、熟と瞶る地圖を的に、目を睜つて、先刻から何んなに堪へたらう。得忍ばず涙ぐむと、最うはら〳〵と露になつて、紫の包にこぼれた。あはれ主税をして見せしめば、ために命も惜むまじ。

## 五十一

　いや、學士二人驚いた事。

「貴娘、何うしたんだ。」

　と教頭が椅子から突立つた時は、お妙は始から確乎握つた袂を其まゝ、白羽二重の肌襦袢の

筒袖の口を開く、袂の包に袖を重ねて、肩をせめて押込むばかり顔を伏せて、聲は立てずに泣くのであつた。

「えゝ、何うして泣くんです。」

靴音高く傍へ寄ると、河野も慌しく立つて来て、

「泣いちや不可ませんなあ、何も悲しい事は無いですよ。」

「私は貴娘を叱つたんぢやない。」

「けれども、此の言振が些と穏でなかつたよ。だから誤解をされたんだ。貴娘泣く事はありません、」

と密と肩に手を掛けたが、お妙の振拂ひもしなかつたのは、泣入つて、知らなかつた所為であつたに……

河野英吉嬉しさうな顔をして、

「さあ、機嫌を直してお話しなさい。」と云ふ時、きよと／＼目で、お妙の俯向いた玉の頸へ、横から徐々と頬を寄せて、リボンの花結びに一寸觸れて、じた／＼と總身を戦かしたが、教頭は見て見ぬ振の、謂へらく、今夜の會計は河野持だ。

途端にお妙が身動をしたので、刎飛ばされたやうに、がたりと退る。

「最う歸つても可いんですか。」

と顔を隠したまゝお妙が云つた。是には返す言もあるまい。

「可いですとも！」

と教頭が言ひも果てぬに、身を捻つたなりで、禮もしないで、つか／＼と出さうにすると、がたがたと靴を鳴らして、教頭は及腰に追つかけて、

「貴娘内へ歸つて、父様にこんな事を話しては不可んですよ。貴娘の名譽を重んじて忠告をしただけですから、ね、宜いですかね、ね。」

急いた聲で賺すが如く、顔を附着けて云ふのを聞いて、お妙は立留まつて、おとなしく頷いたが、「許す。」の態度で、然も優しかつた。

「あゝ。」と、安堵と溜息を一所にして、教頭は室の眞中に、茫乎と突立つ。

河野の姿が、横ざまに飛んで、あたふた先へ立つて扉を開いて控へたのと、擦違ひに、お妙は衝と抜けて、顔に當てた袖を落した。

雨を帯びたる海棠に、廊下の埃は鎮まつて、正午過の早や蔭になつたが、打向ひたる式臺の、戸外は麗な日なのである。

ト押重つて、木の實の生つた状に顔を並べて、齊しくお妙を見送つた、四ツの髭の粘り加減は、蛞蝓の這ふにこそ。

眞砂町の家へ歸ると、玄関には書生が居て、送迎ひの手數を掛けるから、いつも素通りにして、横の木戸をトンと押して、水口から庭へ廻つて、縁側へ飛上るのが例で。

さしむき今日あたりは、飛石を踏んだまゝ、母様御飯、と遣つて、何ですね、唯今も言はないで、と嗜められさうな處。

然うではなかつた。

例の通りで、庭へ入ると、母様は風邪が長引いたので、最う大概は快いが、未だ些と寒氣がする肩つきで、寝着の上に、縞の羽織を羽織つて、珍らしい櫛巻で、面窶れがした上に、色が抜けるほど白くなつて、品の可いのが婀かしい。

寝床の上に端然と坐つて、膝へ掻巻の襟をかけて、其の日の新聞を讀む——半面が柔かに蒲團に敷いて居る。

これを見ると、何うしたか、お妙は飛石に突据ゑられたやうに成つて、立留まつた。

美しい袂の影が、座敷へ通つて、母様は心着いて、

「遅かつたね。」

「えゝ、お友達と作文の相談をして居たの。」

優しくも教頭のために、腹案があつたと見えて、淀みなく返事をしながら、何となく力なささうに、靴を脱ぎかける處へ、玄關から次の茶の間へ、急いで來た跫音で、襖の外から、書生の聲。

「お嬢さんですか、今日の新聞に、切拔きをなすつたのは。」

## 紫

### 五十二

お茶漬さら／＼、大好な鰺の新切で御飯が濟むと、硯を一枚、房楊枝を持添へて、袴を取つたばかり、くたびれるほど固く卷いた扱帶に手拭を挾んで、金盥をがらん、と提げて、黒塗に[illegible]の[illegible]の緒の立つた、當の凹つた、女中の[illegible]所[illegible]を、[illegible]の素足に突掛けたが、[illegible]足袋を脱いだまゝの濡氣なのを些とも介意はず、水口から木戸を出て、日の光を浴びた状は、[illegible]の[illegible]波に似て非なりで、[illegible]の[illegible]。

と云ふ容[illegible]

お嬢は[illegible]、[illegible]の前の井戸へ出て、乾いては居たが辷りのある井戸流へ、危氣も無く[illegible]つた下駄で乘つた。女中も[illegible]る[illegible]、[illegible]の躾が可いから、最う十一二の時分から肩についたものだけは、人手には掛けさせないので、此處へは[illegible]で、水心があつて、つい去年あたりまで、土用中は、遠慮なしにから／＼と汲み上げて、釣瓶へ唇を押附けるので、井筒の紅梅は葉になつても、時々花片が浮ぶのであつた。直に桃色の襷を出して、袂を投げて滑らした、惜氣の無い二の腕あたり、柳の絮の散るよと見えて、井戸繩が走つたと思ふと、金盥へ入れた硯の上へ颯とかゝる、水が紫に、墨が散つた。

宿墨を洗ふ氣で、楊枝の房を、小指を觸れて[illegible]りはじめたが、何を焦れたか、ぐいと引斷るやうに邪險である。

ト構内の長屋の前へ、通勤に出る外、[illegible]り着て來た事の無い、珍らしい背廣の扮裝、何だか衣服を[illegible]ましたて、其の上着中でも持つたのを見懸けぬ、蝙蝠傘をへ[illegible]て、早瀬が[illegible]を[illegible]しながら、悄然として入つて來たが、梅の許なるお嬢を見る……

「おゝ、」

と慌しい、懷しげな聲をかけて、

「お嬢さん。」

お嬢は其までも氣がつかなかつた、呼ばれて、手を留めて主税を見たが、水を汲んだ名殘か、瞳の色がほんのりと、物いはぬ口は、露や、玉や、凡そ聲なき言なき世の其等の、美しいものより美しく、歌よりも心が籠つた。

「又、水いたづらをして居るんですね。」

と瞳を凝めて元氣らしく、町々と笑ふと、[illegible]しい瞳が睨むやうに動き止まつて、

「金魚ぢやなくつてよ。硯を洗ふの。」

「あゝ、成程。」

と始めて金盥を覗き込んで俯向いた時、人知れず目をしばたゝいたが、然あらぬ體で、

「御清書ですかい。」

「否、あの、繪なの。あの、上手な。明後日學校へ持つて行くのを、是から描くんだわ。」

「御手本は何です、姉樣の繪ですか。」

「嘘よ、そんなものぢや無いわ。あゝ、」

と莞爾して、獨りで頷いて、

「もつと可いもの、[illegible]に[illegible]よ。」

「[illegible]、[illegible]にし、と[illegible]ですね。」

と云ひかけて愁然たり。

お嬢は何の氣もつかない、派手な面色して、

「まあ、何時[illegible]に、一寸、感心だわねえ。」

「可[illegible]に。」

と苦笑ひをすると、お嬢は[illegible]で、

「だつて、主税さん、先年私の誕生日に、お酒に酔つて眠つたぢやありませんか。貴下は、浅くとも清き流れの方よ、真個の歌は何に無いの。」
とつけ／＼云ふ。
「いや、恐入りましたよ。（ト一寸額に手を當てゝ、）先生は？」と更めて聞くと、心ありげに頷いて、
「居てよ、二階に。」（おいでなさいな。を色で云つて、瞬たく生垣から、二階を振仰ぐ。
主税は忽ち思ひついたやうに、
「お嬢さん、」と云ふや否や、蝙蝠傘を投出す如く、井の柱へ押倒して、勢猛に、上衣を片腕から脱ぎかけて、
「久しぶりで、私が洗つて差上げませう。」と、脱いだ上衣を、井戸側へ突込むほど引掛けたと思ふと、お妙がものを云ふ間も無かつた。手を早や金盥に突込んで、
「貴嬢、其の房楊枝を。――浅くとも清き流れだ。」

## 五十三

「あら、亂暴ねえ、一寸、まだ釣瓶から雫がするのに、こんな處へ脱ぐんだもの。」
と嗜めるやうに云つて、お妙は上衣を引取つて、露に白い小腕で、掻二重で結へたやうに、胸へ、薄色を抱いたのである。
「貴嬢は、先生のやうに癇性で、寒の中も、井戸端へ持出して、さあ／＼水を使ふんだから、恁うやつて洗ふのにも心持は可いけれども、其の代り手を皸だらけにするんです。爪の間へ染みた日にや、一寸ぢや取れないんですからね。」
「厭ねえ、恩に被せて。誰も頼みはしないんだわ。」
「恩に被せるんぢやありません。爪紅と云つて、貴嬢、紅をさしたやうな美しい手の先を臺なしになさるから、だから云ふんです。矢張私が居た時分のやうに、お玄關の書生さんにしてお貰ひなさいよ。
あゝ、是は、」
と片頬笑みをして、
「餘り上等な墨ではありませんな。」
「可いわ！　どうせ安いんだわ。最う私がするから可くつてよ。」
「手が墨だらけになりますと云ふのに。貴嬢そんな邪險な事を云つて、私の手がお身代に立つて居る處ぢやありませんか。」
「それでもね、恁うやつてお召物を持つて居る手も、隨分、隨分」と力を入れて、微笑んで、「迷惑してよ。」
「相變らずだ。」と獨言のやうに云つて、「ですが、何ですね、近頃は、大層御勉強でございますね。」
「何うしてね？　主税さん。」
「だつて、明後日お持ちなさらうと云ふ繪を、最う今日から御手廻しぢやありませんか。」
「明日は日曜だもの、遊ばなくつちや、」
「あゝ日曜ですね。」
と卓子を拂つた、硯は顔も映りさう。熟と見て振仰いで、
「其の、衣兜にあります、其の半紙を取つて下さい。」
「主税さん。」
「はあ、」
「ほゝほゝ。」と唯笑ふ。
「何が、可笑しいんです。え、額に墨が刎ねましたか。」
「否、ほゝほゝ、」
「何ですつては、」
「あのね、」
「はあ。」
「もしかすると……」
「えゝ、えゝ、」

「ほゝゝ、明日又日曜ね、貴郎の許へ遊びに行つてよ。」
　水に映つた主税の色は、颯と薄墨の暗くなつた。あはれ、仔細あつて、飯田町の家は最う無かつたのである。
「入らつしやいましとも。」
　と勢込んで、思入つた語氣で答へた。
「あの、庭の白百合は最う咲いたの、」
「……」
「此の間行つた時、未だ蕾が堅かつたから、早く咲くやうに、おまじなひに、私、フッ〳〵とふくらまして來たけれど、」
　と云ふ口許こそふくらなりけれ。主税の背は、撞木にかけて縮つたのである。
　ト見て、お妙が言はうとする時、からりと開いた格子の音、玄關の書生がぬつと出た。心づけても言ふことを肯かぬ、羽織の紐を結ばずに長くさげて、大跨に歩行いて來て、
「早瀬さん、先生が、」
　二階の廊下は目の上の、先生は最う御存じ。
「は、唯今、」
　と姿は見えぬ、二階へ返事をするやうにして、硯を手に据ゑ、急いで立つと、上衣を開いて、背後へ廻つて、足駄穿いたが對丈に、肩を抱くやうに着せかける。
「やあ、是は、是は何うも。」
　と骨も碎くる背に被いで、戰くばかり身を揉むと、
「意地が惡いわ、突張るんだもの。あら、憎らしいわねえ。」
　と身動ぎに眉を顰めて――長屋の窓からお[illegible]の媽々の顏が出て居るのも、路地口に野良猫が、のつそり居るのも、書生が無念さうに其の羽織の紐をくる〳〵と廻すのも――一向氣にもかけず、平氣で着せて、襟を壓へて、爪立つて、
「厭な、どうして、こんなに雲脂が生きて？」

## 五十四

　主税が大急ぎで、ト引挾まるやうになつて、格子戸を潛つた時、手をぶらりと下げて見送つたお妙が、無邪氣な忍び笑。
「まあ、粗匆かしいこと。」
　窓に硯を持つて入つて、其かはり蝙蝠傘と、其の椅子に引掛けた中折帽を忘れた。
　後へ立淀んで、此方を視めた書生が、お妙の其の笑顏を見ると、崩れるほどにニヤリとしたが、例の羽織の紐を輪形に捩つて、格子を叩きながら、のそりと入つた。
　誰も居なくなると、お妙は其の二重瞼をふつくりとするまで、最う、其の速力を以てすれば。主税が上つたらしい二階を見上げて、横歩行きに、井の柱へ手をかけて、伸上るやうにして居た。やがて、柱に背をつけて、くるりと向をかへて俛れると、學校から歸つたなりの袂を取つて、振をはらりと手許へ返して、睫毛の濃くなるまで熟と見て、袷と唐縮緬友染の長襦袢のかさなる袖を、ちゆう〳〵たこかいなと算へるばかりに、丁寧に引分けて、深いほど手首を入れたは、内心人目を忍んだつもりであるが、此の所作で餘計に目に着く。
　但遣方が仇氣ないから、未だ覗いて居る件の長屋窓の女房の目では、おや〳〵細螺か、鞠か、もしそれ豎豆だ、と思つた、が、然うで無い。
　引出したのは、細長い小さな紙で、字のかいたもの、はて、怪しからんが、心配には及ばぬ――新聞の切拔であつた。
　然ればこそ、學校の應接室でも、頻に袂を氣にしたので、是に、[illegible]の百有餘聞を摘つた……摘要に關した記事が、細に一段ばかり有ることは言ふまでもない。
　お妙に、今朝學校へ出掛けに、女中が味噌汁

を装つて來る門に、[illegible]に佇んだやうになつて、例に因つて主の前の早讀と云ふのをすると、〔獨語學者、掛價〕ぢや、いゝ加減な挑發的の標題で、力の其の條に出て居たので、持ちかへて、見向いたり、引張つたり、摑んだり、太く氣に掛けた樣子だつたが、ツンと怒つた顏をしたと思ふと、お盆を差出した女中と入違ひに、洋燈唯ついと起つて、鋏を襟の下へ、忍んで來て、四邊を憚つて、ずぶりと入れると、切取つた千代紙なり、あつさり裁ちは上出來なり、見事な手際でチヨキ／＼チヨキ。

奥樣は、神妙を勤めて、二階へ先生を起しに行つて、貴郎、貴郎と云ふ折柄、書生は玄關にたんばたん。女中は丁ど、臺所の何かの湯氣に隱れたから、爾時は誰も知らなかつたが、知れずに濟みさうな事でもなし、又これだけを切取つても、主税の迷惑は隱されぬ、內へだつて、新聞は外に二三種も來るのだけれども、そんな事は不關焉。

で、教頭の歸るを待たずして、お妙は一切を知つて居たので、話を聞いて驚くより、無念の涙が早かつたのである。

と書生は又、內々はがき便見たやうなものへ、投書をする道樂があつて、今日あたり出さうな處を、床の中から手で一寸と引いたが、是等だから、奥へ先生に成つたのを、あとで[illegible]い て見ると、恰も其頁へ、目的物が出る筈、ここの面が一小間切拔いてあるので、落膽したが、いや、此の惡戲、故意的に摑つたり、と怨恨骨髓に徹して、いつもより歸宅の遲いのを、玄關の障子から覗め透して待構へて、木戸を入つたのを追かけて詰問に及んだので。爾時のお妙の返事と云ふのが、あゝ、私よ、と澄ましたものだつた。

其を又ひとりで此處で見直しつゝ、半ば過ぎると、目を外らして、多時思入つた風であつたが、ばさ／＼と引裂いて、くるりと丸めてハタと向う見ずに投り出すと、最一ツの柱の許に、其の蝙蝠傘に掛けてある、主税の中折帽へ留まつたので、——

「憎らしい。」と瞳を凝めて、憎さ氣にして、帽子を取つて、袖で、ばた／＼と埃を拂つた。

書生が、すつ飛んで、格子を出て、何處へ急ぐのか、お妙の前を通りかけて、

「えへゝゝ。」

爾時お妙は、主税の蝙蝠傘を引掴へて、

「何處へ行くの。」

「車屋へ大急ぎでございます。」

「あら、父上はお出掛に、」

「否、車を待たせて、アベ大人を呼びますので、はゝは。」

## はなむけ

### 五十五

媒妁人は宵の口、燈火を中に、酒井とさしむかひの坂田禮之進。

「唯今は御使で、時にお馬車をお遣はしで恐縮にごわります。實はな、一寸私用で外出をいたし居りましたが、俗に彼の、蟲が知らせるとか申すやうな儀で、何か、心急ぎ、歸宅いたしまするゝ、門口に馬車がごわりまして、來客かと存じましたれば、いや、」と額を撫でゝ笑ふのに前歯が露出。

「はゝはゝ、即ち御待たせのお馬車、早速間に合ひました。實に好都合と云つて宜しいので。是と申すも、偏に御縁のごわりまする兆でごわりまするな、はあ、」

酒井も珍らしく威儀を正して、

「お呼立て申して失禮ですが、家內が病氣で居ますんで、」と、手を伸して、卷莨をぐつ、と拔く。

「時に、如何でごわりまするな、御令室御病氣は。御勝れ遊ばさん事は、先達ての折も伺ひましてごわりましてな。河野でも承り及んで、英吉君の母なども大きにお案じ申して居ります。何ういふ御容體でいらつしやりまするか、私も其の、甚だ心配を仕りまするので、はあ。」

「別に心配なんぢやありません。肺病でも無いんですから。」

と先生警抜なことを云つて、俯向きざまに、灰を掻つたが、左手を袖口へ掻込んで胸を張つて煙を吸つた。道之進は、畏つたずぼんの膝を、骸骨の両手で二つ叩いて、スーと云つたばかりで、斜めに酒井の顔を見込むと、

「たかゞ風邪のこぢれです。」

「其の風邪が萬病の原ぢや、と誰でも申すことでごわりまするが、事實でな。何分御注意なさらんと成りません。」

と妙に白けた顔が、燈火に赤く見えて、

「では、然やうに御病中でごわりましては、御縁女の事に就きまして、御令室と未だ御相談下さりまする間もごわりませんので。」

と重々しく素引きかけると、酒井は事も無げな口吻。

「いや、相談は為ましたよ。」

「はゝあ、御相談下さりましたか。其は、」と頤を揉んで、スーと云つて、

「御令室の思召は如何でごわりませうか。實は、恁やうな事は、打明けて申せば、貴下より御令室の御意向が主でごわりまするで、其の御言葉一ツが、如何の極りまする處で、推着けがましうごわりますが、英吉君の母も、此の御返事……と申しまするより、寧ろ黄道吉日をば待ちまして、唯今以て、東京に逗留いたして居りまする次第で。はあ。御令室の御言葉一ツで。」

と、意氣込んで、スーと忙しく吸つて、

「何か、私までも、其を承りまするに就いて、此のな、胸が轟くでごわりまするが、」

と熟と見据ゑると、酒井は半ば目を閉ぢながら、

「他ならぬ先生の御口添ぢやあるし、伺つた通りで、河野さんの方も申分の無い御家です。實際、願つてもない良縁で、固より彼是異存のある筈はありませんが、但不束な娘ですから、」

「否、否、」

と頭を掉つて、大に發奮み、

「飛んだ事でごわります、怪しからんな、河野英吉夫人を、不束などゝ御意なされますると、親御の貴下のお口でも、坂田道太郎聞捨てに相成りません、はゝはゝ。で、何時承諾下さりますかな。」

「家内は大喜びで是非とも願ひたいと云ひますよ。」

時に襖に音信つた、柔な衣の氣勢があつた――其は次の座敷からで――先生の二階は、八疊と六疊二室で、其の八疊の方が書齋であるが、爰に坂田と相對したのは、壇から上口の六疊の方。

道之進は又頤に手を當て、

「いや、何とも。私大願成就仕りましたやうな心持で。お蔭を持ちまして、痘痕が榮えるでごわりまする。は、はゝ、」

道學先生が、口から其の聲を發するは、例として話の纏まつた時に限るのであつた。

## 五十六

望んでも得難き良縁で異存なし、とあれば、此の縁談は最う纏つたもの、と、今までの經驗に因つて、道學者は何か心得るのに、酒井が其の氣骨稜々たる姿に似ず、悠然と構へて、煙草の煙を長々と續ける工合か、何うも未だ話の

切目では無さゝうで、是から一物あるらしい、底の方の擽つたさに、禮之進は、日一日行歩き廻る、ほとぼりの冷めやらぬ、靴足袋の裏が何となく生熱い。

坐つた膝をもぢ〳〵さして、

「えゝ、御令室が御快諾下されましたと成りますると、貴下の思召は。」

些とも猶豫はずに、

「私に言句のあらう筈はありません。」

「はあ、成程、」と乘かゝつたが、未だ荷が濟まぬ。是で決着しなければ成らぬ譯だが……

「しますると、御當人、妙子樣でごわりまするが。」

「娘は小兒です。箸を持つて、婿をはさんで、アンとお開き、と哺めて遣るやうな緣談ですから、否も應もあつたもんぢやありません。」

と小刻みに灰を落したが、直ぐに又煙草にする。

道學先生、堪りかねて、手を揉り、膝を搖つて、

「では、御兩親はじめ、御緣女にも、御得心下されましたれば、直ぐ結納と申すやうな御相談は如何なものでごわりませうか。善は急げでごわりまするで。」と講義の外の格言を提出した。

「先生、其處ですよ。」と灰吹に、づいと突込む。

「成程、就きまして、何か、別儀が。」

「大有り。」と調子が碎けて、「私どもには願ふ處の御緣であるし、妙にも彼是は申させません。無論ですね、お前、河野さんの嫁に成るんだ。はい、と云ふに間違ひはありませんか、他に最う一人、貴下からお話し下すつて、承知をさせて頂きたいものがあるんです。何うでせう、其の者へ御相談下さるわけに參りませうか。」

「お易い事で。何でごわりまするか、孰方ぞ、御親類でゞもおあんなさりまするならば、直ぐに此の足で駈着けましても宜しう存じまするで。えゝ、御姓名、御住所は何とおつしやる？」

「住居は飯田町ですが、」

と云ふ時、先生の肩がやゝ聳えた。

「早瀨ですよ。」

「御門生。」と、吃驚する。

「掏摸一件の男です。」と意味ありげに打微笑む。

禮之進、苦り切つた顏色で、

「へゝい、其は又、何う云ふ次第でごわりまするか、唯御門生と承りましたが、何ぞ深しき理由でもおありなさりますと云ふ……」

「理由も何にもありません。早瀨は妙に惚れて居ます。」と澄まして云つた、酒井俊藏は世に聞えたる文學士である。

道學者はアッと痩癡、目を圓かにして口をつぐむ。

「實の親より、當人より、ゾッこん惚れてる奴の意向に從つた方が、一番間違が無くつて宜しい。早瀨が此の緣談を結構だ、と申せば、直ぐに妙を差上げますよ。面倒は入らん。先生が立處に手を曳いて、河野へ連れてお出でなすつて構ひません。早瀨が不可い、と云へば、斷然お斷りをするまでゞす。」

默つては居られない。

「しますると、其の、」

と少し顏の色も變へて、

「御門生は、妙子樣に……」と、あとは他人でも聊か言ひかねて憚つたのを、……酒井は平然として、

「惚れて居ますともさ。同一家に我儘を言合つて一所に育つて、それで惚れなければ何うかして居るんです。尤も其の惚方――愛――はですな、兄妹のやうか、從兄妹のやうか、其とも師弟のやうか、主從のやうか、小說のやうか、傳奇のやうか、其處は分りませんが、惚れて居るにや違ひないのですから、私は、親、伯父、叔

母、諸親類、友達、失禮だが、御媒酌人、そんなものゝ口に聞いたり、意見に從つたりするよりは、一も二もない、早手廻しに、娘の緣談は、惚れてる男に任せるんです。如何でせう、先生、至極妙策ぢやありませんか。其ともまた酒飲みの料簡でせうか。」

　と串戲のやうに云つて、一寸口切つたが、道學者の呆れて口が利けないのに、押被せて、

「薩張と然うして下さい。」

## 五十七

「貴下、えゝ、お言葉ではごわりまするが、」と頰の窪むばかりに吸つて、禮之進、ねつねつ、……

「然やういたしまするると、御門生早瀬子が令孃を愛すると申して、萬一結婚をいたしたいと云ふやうな場合に於きましては……でごわりまする……其の邊は如何お計ひなされまする思召でごわりまするな。」

「勝手にさせます。」と先生言下に答へた。

是に又少なからず怯かされて、

「しますると云ふと、貴下は自由結婚を御贊成で。」

「否。」

「はあ、如何樣な御趣意に相成りまするか。」

「私は許嫁の方ですよ。」と酒井は笑ふ。

「許嫁？　では、早瀬子と、令孃とは、許嫁でお在なされますので。」

「決してそんな事はありません。許嫁は、私と私の家内とです。で、二人とも其に贊成……ですか。同意だつたから、夫婦に成りましたよ。妙の方はどんな料簡だか、更らに私には分りません。早瀬とくつついて、其が自由結婚なら、自由結婚、誰かと駈落をすれば、其は駈落結婚、」

と澄ましたものである。

「へゝ、御串戲で。御議論が些と矯激でごわりませう！」

「先生、人の娘を、嫁に呉れい、と云ふ方が却つて矯激ですな、考へて見ると。けれども、習慣だから些とも誰も怪まんのです。

　貴下から緣談の申込みがある。娘には、惚れてる奴が居ますから、其の料簡次第で御話を取極める、と云ふに、不思議はありますまい。唐突に嫁入らせると、其のぞつこんであつた男が、いや、失望だわ、懊惱だわ、煩悶だわ、辷つた、轉んだ、と兎角世の中が面倒臭くつて不可んのです。」

「で、ごわりまするが、此の緣談が破れまするると、早瀬子は其で宜しいとしても、英吉君の方が、其こそ同じやうに、失望、懊惱、煩悶いたしませうで、……其の邊も御勘考下さりまするやうに。」

「大丈夫、」

と話は濟んだやうに莞爾して、

「昔から媒酌人附の緣談が纏まらなかつた爲に、死ぬの、活きるの、と云つた例はありません。騷動の起るのは、媒酌人なしの內證の奴に極つたものです。」

「はあ、」

と云つて、道學者は口を開いて、茫然として酒井の顏を見て居たが、

「しかし、貴下、聞く處に據りまするると、早瀬子は、何か、藝妓風情を、內へ入れて居ると申すでごわりまするが。」

「然やう、藝妓を入れて居て、自分で不都合だと思つたら、妙には指もさしますまい。直ちに河野へ嫁入らせる事に同意をしませう。其とも內心、妙を何うかしたいと云ふなら、妙と夫婦に成る前に、藝妓と二人で、世帶の稽古をして居るんでせう。執方とも彼奴の返事をお聞き下さい。或は、自分、妙を欲しいではないが、他なら知らず河野へは嫁つちや不可ん、と云へば、私もお斷りだ。何の道、妙に惚れてる奴だから、

其の眞實發して居るといふことは、如何に取つては、肉體の病氣と同一です。」

「勢ひ然う無くんば、掏摸の事など言ひ出したら、何は此の上の事の破れ、と謹之進行詰つて眞赤に成つ、

「是非もありませぬ、兎も角、早瀬子を説きまして、更めて御承諾を願ふでごわりまする。が、困りましたな。えゝ、先刻も飯田町の、あの早瀬子の居らるゝ路地を、私通りがゝりに覗きまするに、何か、魚屋體のものが、指圖をいたして、荷物を片着け居りまする最中。何處へ引越される、と聞きましたら、（引越すんぢやない、夜遁げだい。）と怒鳴ります仕儀で。一向其の行先も分りませんが。」

先生喟然として、

「はゝ、事實ですよ。掏摸の手傳ひをしたとかで、馬鹿野郎、東京には居られなくなつて、遁げたんです。最う此方へも暇乞に來ましたが、故郷の靜岡へ引込む、と云つて居ましたから、河野さんの本宅と同郷でせう。御相談なさるには便宜かも知れません。……御隨意に、――お引取を。」

あゝ、嫌な人には何が成る。黄色い手巾を忘れて、謹之進の歸るのを、自分で玄關へ送り出して、引返して、二階へ上つた、酒井が次の其の八疊の書齋を開けると、其處には、主税が、膝の前に手を支いて、畏つて落着しつゝ居たのである。夫人も傍に。

先生はつか／＼と上座に直つて、

「謹、酌をして遣れ。早瀬、今のはお前へ餞別だ。」

## 五十八

主税は心も闇だつたらう、覺束なげな足取で、階子段をみし／＼と下りて來て、尤も、先生と夫人が居らるゝ、八疊の書齋から、一室越し袋の口を開いたやうな明は射すが、下は長六疊で、直ぐ其處が玄關の、書生の机も暗かつた。

さすがは酒井が注意して――早瀬へ贐、にする爲だつた――道學者との談話を漏聞かせまいため、先んじて、今夜は其となく餘所へ出して置いたので。羽織の紐は、結んだか何うか、未だ歸らぬ。

醉つては居ないが、蹌踉と、壁へ手をつくばかりにして、壇を下り切ると、主税は眞暗な穴へ落ちた思がして、がつくりと成つて、諸膝を支かうとしたが、先生は兎も角、其處まで送り出さうとした夫人を、平に、と推着けるやうに辭退して來たものを、此處で躊躇して居る内に、座を立たれては恐れ多い、と心を引立てた腰を、自分で突飛ばす如く、大跨に出合頭。

颯と開いた襖とともに、唐縮緬友染の不斷帶、格子の銘仙の羽織を着て、何時か、縁日で見たさうな、三ツ四ツ年紀の長けた姿。細い透綾子の笠のかゝつた、脊の高い竹臺の洋燈を、杖に支く状に持つて、奥様の居室から、衝と立ちざまの容子であつた。

お妙の顏を一目見ると、主税は物をも言はないで、其のまゝ其處へ、膝を折つて、疊に突伏すが如く會釋をすると、お妙も、默つて差置いた洋燈の臺擦れに、肩を細うして指の尖を揃へて坐る、袂が疊にさらりと敷く音。

こんな慇懃な挨拶をしたのは、二人とも二人には最初で。玄關の障子に殆ど裾の附着く處で、向ひ合つて、恁うして、さて別れるのである。

と主税が、胸を斜めにして、片手を膝へ上げた時、お妙のリボンは、何の色か、眞白な蝶つやう、燈火のうつろふ影に、黑髮を離れてゆらゆらと搖めいた。

「最う歸るの？」

と先へ聲を懸けられて、纔に顏を上げてお妙

を見たが、此の時の像は、主税が世を終るまで、忘れまじきものであつた。
机に向つた横坐りに、やゝ亂れたが衣紋を氣にして、手で一寸々々と掻合はせるのが、何やら薄寒さうで風采も沈んだのに、唇が眞黒だつたは、杜若を描く墨の、紫の雫を含んだのであらう、艶に婀娜かしく、且つ寂しく、翌日の髷は結ふ筈の後れ毛さへ、眉を掠めてははらはらと、白き牡丹の花片に心の影のたゝずまへる。
「お孃さん。」
「……」
「御機嫌宜う。」
「貴方も。」と唯一言、無量の情が籠つたのである。
靴を穿いて格子を出るのを、お妙は洋燈を背にして、框の障子に摑つて、熟と覗くやうに見送りながら、
「然うなら。」
と淸よく云つたが、快く別れを告げたのでは無く、學校の歸りに、何處かで朋輩と別れる時のやうに、然る折には然う云ふものと、規則で口へ出たのらしい。
格子の外にちらちらした、主税の姿が、まるで見えなく成つたと思ふと、お妙は堪へた瞳に、顏だけを障子で隱して、其のつかまつた縁を、する／＼二三度、烈しく掌で擦つたが、背を捻つて、切なさうに身を曲げて、遠い所のやうに、つい襖の彼方の茶の間を覗くと、長火鉢の傍の釣洋燈の下に、ものゝ本にも實際にも、約束通りの女中の有様。
「一寸、風邪を引くよ、と先刻から、隣座敷の机に凭つかゝつて繪を描きながら、低聲で氣をつけた其の大揺れの船が、此の時、最早や見事な難船。
お妙は其の状を見定めると、何を穿いたか自分も知らずに、スッと格子を開けるが疾いか、身動ぎに端が解けた、しどけない扱帶の紅。

## 五十九

「厭よ、主税さん、地方へ行つては。」
とお妙の手は、井戸端の梅に縋つたが、聲は早瀬をせき留める。
「……」
「厭だわ、私、地方へなんぞ行つて了つては。」
主税は四邊を見たのであらう、闇の青葉に帽子が動いた。
「直き歸つて來るんですからね、心配しないで下さいよ。」
「だつて、直だつて、一月や二月で歸つて來やしないんでせう。」
「そりや、家を疊んで參るんですもの。二三年は引込みます積りです。」
「厭ねえ、二三年。……月に一度ぐらゐは遊びに行つた日曜さへ、私、待遠しかつたんだもの。そんな、二年だの、三年だの、厭だわ、私。」
お妙は格子戸を出るまでは、仔細らしく人目を忍んだやうだけれども、然うなると敢て人聞きを憚る如き、低い聲では無かつたのが、茲で急に縋りして、
「あの、貴下、父様に叱られて、内證の……奥さん、」
「えゝ！」
「其の方と別れたから、それで悲しくなつて地方へ行つて了ふのぢやないの、えゝ、ぢやなくつて？」
「……」
「其ならねえ、辛抱なさいよ。母様が、其の方もお可哀相だから、可い折に、父様に然う云つて、一所にして上げるつて云つてるんですよ。私がね、（お酌さん。）をして、澤山お酒を飲まして、然うして、其の時に頼めば可いのよ、然う

樣が背いて罰くますよ。」
「……罰、罰の當つた事をおつしやる！　私は涙が溢れます、勿體ない。そりや最う、先生の御意見で夢が覺めましたから、生れ代りましたやうに、魂を入替へて、是から修行と思ひましたに、人は怨みません。自分の越度だけれど、何うしたの、恁うしたの、と云ふ汚名を被ては、人中へは出られません。
先生は、彼是れ面倒だつたら、又玄關へ來て居れ、置いて遣らう、とおつしやつて下さいますけれども、先生のお手許に居ては、尚ほ掏摸の名が世間に騷しくなるばかりです。
卑怯なやうですけれど、其よりは當分地方へ引込んで、人の噂も七十五日と云ふのを、果敢ないながら、頼みにします方が、萬全の策だ、と思ひますから、私は、一日旅行してさへ、新橋、上野の停車場に着くと拜みたいほど嬉しくなります、そんな懷しい東京ですが、しばらく別れねばなりません。」
「厭だわ、私、厭、行つちや。」
言が途絶えると、音がした、釣瓶の雫が落ちたのである。
差俯向くと、仄かにお妙の足が白い。
「靜岡へ參つて落着いて、都合が出來ますと、どんな茅屋の軒へでも、其れこそ花だけは綺麗に飾つて、歡迎をしますから、貴嬢、暑中休暇には、海水浴に入らしつて下さい。
江尻も興津も直き其處だし、未だ知りませんが、久能山だの、龍華寺だの、名所があつて、清見寺も、三保の松原も近いんですから。」
富士の山と申す、天までとゞく山を御目にかけますまで、主税は姫を賺して云つた。
「厭だわ、そんな事よりか、私、來年卒業すると、最うあんな學校や教頭なんか用は無いんだから、然うすると、主税さんの許へ、毎日朝から行つて、教頭なんかに見せつけて遣るのにねえ。口惜しいわ、掏摸の仲間だの、巾着切の同類だのつて、貴郎の事を然う云ふのよ。而して、口も利いちや不可ないつて、學校の名譽に障るつて云ふのよ。可うござんす、歸途に直ぐに、早瀬さんへ行つていツつけて遣るつて、言はうかと思つたけれど、行狀點を減かれるから。然うすると、お友達に負けるから、見つともないから、默つて居たけれど、私、泣いたの。主税さん。卒業したら、其日から、（私も掏摸かい、見て頂戴。）と、貴下の二階に居て、髯を取つて遣りたかつたに、殘念だわねえ。」
と擦寄つて、
一地方、行かないではないの。――と忘れたやうに、肩に縋れて、胸へ縋つたお妙の手を、上へ頂くが如くに取つて、主税は思はず、唇を指環に接けた。
「忘れません。私は死んでも鬼に成つて。」
君の影身に附添はむ、と青葉をさら〳〵と鳴らしたのである。

## 巣立の鷹

### 六十

「おつと、此處、此處、飯田町の先生、此方だ、此方だ、はゝはゝ。」
十二時近い新橋停車場の、まばらな、陰氣な構内も、冴返る高調子で、主税を呼懸けたのは、め組の惣助。
手荷物はすつかり、此のいさみが預つて、先へ來て待合はせたものと見える。大な支那革鞄を横倒しにして、えいこらさと腰を懸けた。重荷に小附の折革鞄、慾張つて挾んだ書物の、背のクロオスの文字が、伯林の、星の光は恁くぞとて、きら〳〵異彩を放つのを、驕華式に膝に引着け、あの右角の、三等待合の入口を、叱られぬだけに塞いで、樹下石上の身の構へ、電燈

の花見る面色、九分九厘に飲酒たり矣。
あれでは、我慢が仕切れまい、眞砂町の井筒の許で、青葉落ち、枝裂けて、お孃と分れて來る途中、何處で飲んだか、主税も陶然たるもので、くわつと二等待合室を、入口から帽子を突込んで覗く處を、め組は榮の所謂（此方。）から呼んだので。是が一言でブーンと響くほど聞えたのであるから、其大音や思ふ可し。
「やあ、待たせたなあ。」
主税も、恁うなると元氣なものなり。
ドッコイショ、と荷物は措棄てに立つて來て、
「待たせたぜ、先生、私あ九時から來て居た。」
「退屈したらう、氣の毒だつたい。」
「うんや、何、」
とニヤリとして、半纏の腹を開けると、腹掛へ衿つかひに、正宗の四合罎、ト内證で見せて、
「是だ、譯やねえ。退屈をするもんか。時々喇叭を極めちやあね、」
と向顱卷の首を掉つて、
「切符の賣下口を見物でさ。はゝは、別嬪さんの、お前さん、手ばかりが、彼處で、眞白に恁うちらつく工合は、何の事あねえ、さしがねで蝶々を使ふか、活動寫眞の花火と云ふもんだ、見物だね。難有え。はゝはゝ。」
「馬鹿だな、何だと思ふ、お役人だよ、怪しからん。」
と苦笑ひをして窘めながら、
「家はすつかり片附いたかい、大變だつたらう。」
「戰だ、宛然戰だね。だが、何だ、帳場の親方も來りや、挽子も手傳つて、燈の點く前にや緣の下の洋燈の破れまで掃出した。何を何うして可いんだか、お前さん、皆な根こそぎ敲き賣れ、と云ふけれど、然うは行かねえやね。蔦ちやんが、手を突込んだ糠味噌なんざ、打棄るのは惜いから、車屋の媽々に遣りさ。お佛壇は、蔦ちやんが人手にや渡さねえ、と云ふから、私は引背負つて、一度内へ歸つたがね、何だつて、お前さん、女人禁制で、蔦ちやんに、釆を掉らせねえで、城を明渡すんだから、煩かしいや。長火鉢の引出から、紙にくるんだ、お前さん、仕つけ絲の、拔屑を丹念に引丸めたのが出たのにや、お源坊が泣出した。こんなに御新造さんが氣をつけて繕すつたお世帶だのにツて、へん、遣つてやあがら。
えゝ、飲みましたとも。鐵砲卷は山に積むし、近所の、肴屋から、鮃はござつてら、鮪の活の可いやつを目利して、一本手提げて來て、私が切味をお目にかけたね。素敵な切味、一分だめしだ。轉がすと、一が出ようと云ふ奴を親指でなめずりながら、酒は鉢前で、焚火で、煮燗だ。
さあ、飲めつてえ、と、三人で遣りかけましたが、景氣づいたから手明きの挽子どもを在つたけ呼んで來た。薄暗い臺所を覗く奴あ、音羽から來る八百屋だつて。此方へ上れ。豆腐イもお馴染だらう。彼奴背負引け。やあ、酒屋の小僧か、き樣喇叭節を唄へ。面白え、と成つた處へ、近所の挨拶を濟まして、歸つて來た、お源坊がお前さん、一枚着換へて、お化粧をして居たらうぢやありませんか。柔取眼で小切を探して、さつさと出てゞも行く事か。御奉公のおなごりに、皆さんお酌、と來たから、難有え、大日如來、己が車に乘せて遣る、いや、私が、と戰だね。
戰と云やあ、音羽の八百屋は講釋の眞似を遣つた、親方が浪花節だ。
あゝ、是がお世帶をお持ちなさいますお祝ひだつたら、とお源坊が淚ぐんだしをらしさに。お前さん、有象無象が聲を納めて、しんみりとしたらうぢやねえか。戰だね、泣くやら、はゝゝ、笑ふやら、はゝゝゝ。」

## 六十一

「其處でお前さん、何だつて、世帯をお仕舞なさるんだか、[illegible]なら、此方等が無理をしたつて、此家の御夫婦に夜逃けなんぞ爲せる[illegible]ねえ、と一番しみつたれた服装をして、[illegible]ような[illegible]ははあ。よくしたもんだね。

[illegible]なら、お銘がついてる、と[illegible]の[illegible]を[illegible]突出した、と思ひねえ。[illegible]にや叶はねえ、御新造の方は、先生が[illegible]から世話に成つた、[illegible]、大先生が不承知だ。聞きねえ。師匠と親は無理なものと思へ、とお師匠様がいつたとよ。無理でも泣きにやならねえ處を、一々御尤もなんだから、一言もなしに、御新造も身を退いたんだ。あんなにお睦じかつた、へゝ、」

「おい、可い加減にしないかい。」

「可いやね、お前さん、遠慮をするにや當らねえ、酒屋の御用も、[illegible]も皆知つてらな。」

「なほ、惡いぜ。」

「まあ、[illegible]ときねえな。其を、お前、大先生に叱られたつて、[illegible]に別れ話にした早瀬さんも感心だらう。

たが、何だ、其で家を畳むんぢやねえ。若い[illegible]が遣損なつて、人中で面を打たれながら、お[illegible]、と[illegible]するから、[illegible]男だ。[illegible]、と絡まれて、[illegible]人を隠しに遣つたのが[illegible]たあで、[illegible]同然だ、とか何とか云つて、旦那方の交際が[illegible]成つたから、引越つて[illegible]だとね。[illegible]は間違つたかも知れねえけれど、何だつてお前さん絡まれて退かねえ、と云ふ[illegible]勢が可いから、然う云つて、さあ、おい、皆、一番しやん、と占める處だが、旦那が學者なんだから、[illegible]と遣れ。いよう旦那萬歳、と云ふと御新造萬歳、大先生萬歳で、次手にお源ちやん萬歳！——までは可かつたがね、へゝ、かゝり合だ、其の相撲も[illegible]つて遣れ。可からう、」

と乗氣に成つて、め[illegible]の[illegible]助、停車場で予貞[illegible]が交つて、

「相撲萬歳——と遣つたが、へ[illegible]りばんだい、と聞えませう。[illegible]火のやうだね。火事は何處だ、と本道で騒いで、巾着切萬歳！と叫び出す處へ、八百屋も[illegible]屋の荷の番をしながら、人だかりの中へ立つて見てござつた[illegible]様が、お前さん、苦笑ひの[illegible]をひよつこり。これ〳〵、夾[illegible]の用心だけは頼むよ、と云ふと、手[illegible]しの可い[illegible]は、車屋のかみさんが、あと、最う一度[illegible]を掛けて、[illegible]を拭き直さう、と云ふ腹で、番[illegible]手桶に水を汲んで控へて居て、何うぞ御安心下さいましッさ。

[illegible]、お[illegible]と、それから、[illegible]百合の花を[illegible]がつたから、[illegible]に[illegible]てた[illegible]が[illegible]。お源坊と、車屋のお嬶とで、[illegible]石を[illegible]見たから、[illegible]坊主の[illegible]と云ふ[illegible]人で、[illegible]を[illegible]して[illegible]ましたがね。

世の中にや、[illegible]も[illegible]つたもんで、未だがらくたを片附けてる最中でさ、だん袋を穿きあがつた、」

と云ひかけて、[illegible]の[illegible]を、じろり。

「へゝ、今夜はお前さんも[illegible]つてるけれど。まあ、可いや。で何だ、[illegible]の、お前さん、然も大面の[illegible]が、ぬうと、あの路地を入つて來やあがつて、空いたか、空いたか、と云やあがる。それが[illegible]、あいたかつた、と目に涙でも何でもねえ、[illegible]は[illegible]いたか、と云ふんでさ。近頃流行るけれど、あんまり不[illegible]だね。お前さん、人の[illegible]の中へ[illegible]んで、[illegible]なんか聞くのは。たとひ、何だ、二ッ[illegible]け大きな[illegible]へ[illegible]すんだつて、お[illegible]を[illegible]いて遣つた、雀ッ子にだつて[illegible]は惜いや、蔦ちやんなんか、馴染[illegible]成つて、[illegible]を鳴らすと鳴く、流元の蛙は何うしたらうッて[illegible]ぐぢやねえか。」

「止せよ、そんな事。」
と主税は帽子の前を下げる。
「まあさ、そんな中へ来やあがって、お剰に、往くのを待って居た、と云ふ口吻で、其の上横柄だ。誰の癪に障るのも同一だ、と見えて、可笑しうがしたぜ。車屋の[illegible]がね、お前さん、え、え、えッて、人の悪いッたら、聾の真似をして、痘痕の極印を打った、其奴の鼻頭へ横のめりに耳を突かけたと思ひねえ。奴もむか腹が立ったと見えて、空いた家か、と喚いたから、私ゃ障子庇の下に、蔦ちゃんが香を隠して置いたらしい白粉入を引出しながら、空家だい！と怒鳴った。可驚しやがって、早瀬は、と聞くから、夜遁げをしたよ、と威かすと、へゝゝ旦那、……」
め組は極めて小さい声で、
「[illegible]高利貸だ、と怒鳴ったから……」
話も事にこそよれ、勿体ない、道学の先生を……高利貸、

六十二

寂と黙ったが、と思ふと、め組はきよろ／＼四辺を見ながら、[illegible]に、[illegible]、[illegible]と言って、呼吸も吐かず、

「それからね、人を馬鹿にしやあがった、其の痘痕めい、差配は何処だと聞きやあがる。差配様か、差配様は此家の主人が夜遁をしたから、後を追っかけて留守だ、と言ったら、苦った顔色をしやがって、家賃は幾干か知らんが、前方にから、空いたら借りたい、と思うて居ったんぢや、と云ふだらうぢやねえか。お前さん、我慢なるめえぢやねえかね。悠う、可い加減にしねえかい。柳橋の蔦吉さんが、情人と世帯を持った家だ、汝達の手に渡すもんか。め組の惣助と云ふ魚河岸の大問屋が、別荘にするってよ、五百両敷金が済んでるんだ。帰れ、と喚くと、驚いて出て行ったっけ、はゝはゝ、何うだね、気に入ったらう、先生。」
「悪戯をするぢやないか。」
「だって、お前さん、言種が言種な上に、図体が気に食はねえや。しらふの時だったから、未だまあ其で済んだがね。お[illegible]の晩で御覧じろ、えて吉、存命は覚束ねえ。」
と図に乗って饒舌るのを、[illegible]に閉口れて、夜の湿の、充ち満ちた構内に沈黙の如く、千鳥を[illegible]、人もなげな[illegible]、小田原も[illegible]かったものであらう、夢中に成った[illegible]で、駅員が一名、密と寄って、中にも
め組の横腹の辺で唐突に、がんからん、がんからん、がんからん。
「ひやあ、」と瞬に呼吸を引いて、たじ／＼と退ると、駅員は冷々然として衝と去って、入口へ向いて、がらんがらん。
主税も驚いて、
「切符だ、切符だ。」
と思はず口へ出して、慌てゝ行くのを、
「おっと、おっと、先生、切符なら心得てら。」
「最う買っといたか、其は豪い。」
惣助これには答へないで、
「えゝ、驚いたい、串戯ぢやねえ、二合半が処フイにした。さあ、まあ、お乗んなせえ。」
荷物を引立てゝ来て、二人で改札口を出た。
其の半纏着と、薄色背広の押並んだ対象は妙であったが、乗客は唯此の二人[illegible]、ちら／＼と分れて映るばかり、十四五人には過ぎないのであった。
め組が、中ほどから、急にあたふたと駈出して、二等室を一ッ覗き越しに最一つ出て、ひよいと、飛込むと、早や主税が近寄る時は、荷物を入れて窓へ出た。
「此処が可いや、先生……」
「何た、[illegible]」

「知れた事だね、」
「大束を言ふな、頭巾落の身分ぢやないか。幾干だつけ。」
と横へ反身に衣兜を探ると、め組はどんぶりを、ざツくと叩き、
「心得てら。」
「お前に達引かして堪るものか。」
「うゝむ、」と眞面目で、頭を掉つた、
「不殘叩き賣つた道具のお錢が、づツしりあるんだ。お前さんが、蔦ちやんに遣れつて云ふのを、未だ預つて居るんだから、遠慮はねえ、はゝはゝ。」
「それぢや遠慮しますまいよ。」
と乘込んだ時、他に二人。よくも見ないで、窓へ立つて、主税は乘出すやうにして妙なことを云つた。其は——め組の口から漏らした、河野の母親が以前、通じたと云ふ——馬丁貞造の事に就いてゞあつた。
「何分頼むよ。」
「むゝ、可いつて事に。」
主税は笑つて、
「其の事ぢやない、馬丁の居處さ。己も捜すが、お前の方も。」
「……分つた。」
と後退つて、向うざまに顱巻を緊め直した。手を其まゝ、花火の如く上へ開いて、
「いよ、萬歳！」
傍へ來た驛員に、突のめるやうに、お辭儀をして、
「眞平御免ねえ、はゝはゝ。」
主税は窓から立直る時、向うの隅に、婀娜な櫛卷の後姿を見た。ドンと硝子戸をおろしたトタンに、斜めに振返つたのはお蔦である。
はつと思ふと、お蔦は知らぬ顏をして、またくるりと背を向いた。
汽車出でぬ。

# 春

買初に雪の山家の繪本かな
まな板に旭さすなり芹薺
爪紅の雪を染めたる若菜かな
戀人と書院に語る雪解かな
蕪園をおもふ
普門品ひねもす雨の櫻かな
母こひし夕山櫻峰の松
春月や摩耶山忉利天上寺
町内の鶯來たり朝櫻
雪洞をかざせば花の梢かな
紅閨に簪落ちたり夜半の春
花李美人の影の青きまで
釣鐘に袖觸れつ春寒き寺
おぼろ夜や片輪車のきしる音
雨の中摘むべき草を見てすぎぬ
長の家わづかに蠶なき一間
掌に花柚のせつゝ片折戸

——鏡花全集卷十五「發句」より

# 婦系圖（後篇）

## 貴婦人

### 一

其の翌日、神戸行きの急行列車が、函嶺の隧道を出切る時分、食堂の中に椅子を占めて、卓子は別であるが、一人外國の客と、流暢に獨逸語を交へて、自在に談話しつゝある青年の旅客があつた。

此方の卓子に、我が同胞の爾く巧みに外國語を操るのを、嬉しさうに、且つ頼母しさうに、熟と見ながら、時々思出したやうに、隣の椅子の上に愛らしく乘つかゝつた、かすりで揃の、袷と筒袖の羽織を着せた、四ツばかりの男の兒に、極めて上手な、肉叉と小刀の扱ひ振で、肉を切つて皿へ取分けて遣る、盛裝した貴婦人があつた。

見渡す青葉、今日しと〱、窓の緑に降りかゝる雨の中を、雲は白鷺の飛ぶ如く、ちら〱と來ては山の腹を後に走る。

函嶺を絞る點滴に、自然浴した貴婦人の膚は、滑かに玉を刻んだやうに見えた。

眞白なリボンに、黒髪の艶は、金蒔繪の櫛の光を沈めて、愈漆の如く、藤紫のぼかしに牡丹の花、蕊に金入の半襟、栗色の紋お召の袷、薄色の褄を襲ねて、幽かに紅の入つた黒地友染の下襲ね、折からの雨に涼しく見える、柳の腰を、十三の絲で結んだかと黒繻子の丸帯に金泥でする〱と引いた琴の絃、添へた模様の琴柱の一枚が、膨くりと乳房を包んだ胸を壓へて、時計の金鎖を留めて居る。羽織は薄い小豆色の縮緬に……一寸分りかねたが……五ツ紋、小刀持つ手の動くに連れて、指環の珠の、幾つか連つてキラ〱人の眼を射るのは、水晶の珠數を爪繰るに似て、非ず、浮世は今を盛の色。艶麗な女俳優が、子役を連れて居るやうな。年齢は、然れば、其の兒の母親とすれば、少くとも四五であるが、姉とすれば九、でも二十でも差支へはない。

婦人は、頻に、其の獨語に巧妙な同胞の、鼻筋の通つた、細表の、色の淺黒い、眉のやゝ迫つた男の、少々しい口許と、心の透通るやうな眼光を見て、ともすれば我を忘れるばかりに成るので、小兒は手が空いたが、最う腹は出來たり、退屈らしく皿の中へ、指でくる〱と環を描いた。其も、詰らなさうに、圓い目で、貴婦人の顔を視めて、同一やうに其方を向いたが、一向珍らしくない日本の兒より、是は外國の小父さんの方が面白いから、あどけなく見入つて傾く。

其の、不思議さうに瞳をくる〱と遣つた樣子は、餘程可愛くつて、隅の窓を三角に取つて佇んだボオイさへ、莞爾した程であるから、當の外國人は髯をもじや〱と破顔して、丁ど食後の林檎を剝きかけて居た處、小刀を目八分に取つて、皮をひよいと面干に、菓物を差上げて何か口早に云ふと、青年が振返つて、身を捻ざまに、直ぐ近かつた、小兒の乘つかつた椅子へ手をかけて、

「坊ちやん、入らつしやい。好いものを上げますとさ。」と其の言を通じたが、無理な乘出しやうをして逆に向いたから、つかまつた腕に力が入つたので、椅子が斜めに、貴婦人の方へ横に成ると、其を嬉しさうに、臆面なく、

「アハアハ、」と小兒が笑ふ。

青年は、好事にも、故と自分の腰をずらして、今度は危氣なしに兩手をかけて、搖籠のやうにぐら／＼と遣ると、

「アハヽヽ」と愈嬉しがる。

御機嫌を見計つて、

「さあ、お來なさい、お來なさい。」

貴婦人の底意なく頷いたのを見て、小さな靴を思ふ樣上下に刎ねて、外國人の前に行くと、小刀と林檎と一緒に放して差置くや否や、によいと手を伸ばして、小兒を抱へて、スポンと床から捥取つたやうに、目よりも高く差上げて、覺束ない口で、

「萬歲――」

ボオイが愛想に、ハタ／＼と手を叩いた。客は時に食堂に、此の一組ばかりであつた。

## 二

「今のは獨逸人でございますか。」

外客の、食堂を出たあとで、貴婦人は青年に尋ねたのである。會話の英語でないのを、既に承知して居たので、其の方の素養のあることが知れる。

青年は椅子をぐるりと廻して、

「僕も然うかと思ひましたが、違ひます、伊太利人ださうです。」

「はあ、伊太利の、商人ですか。」

「否、何うも學者のやうです。しかし此方が學者でありませんから、科學上の談話は出來ませんでしたが、樣子が、何だか理學者らしうございます。」

「理學者、然うでございますか。」

小兒の肩に手を懸けて、

「此の父親も、些ばかり其の端くれを、致しますのでございますよ。」

扨は理學士か何ぞである。

貴婦人は恁う云つた時、やゝ得意氣に見えた。

「嘸おもしろい、お話がございましたでせうね。」

雪踏をずらす音がして、柔かな肱を、唐草の浮模樣ある、卓子の蔽に曲げて、身を入れて聞かれたので、青年は何故か、困つた顏をして、

「何う仕りまして、然うおつしやられては恐縮しましたな、僕のは、でたらめの理學者ですよ。えゝ、」

と一寸天窓を掻いて、

「林檎を食べた處から、先祖のニウトン先生を思ひ出して、其處で理學者と遣つたんです。はゝ、はゝ、實際は其の何だか些とも分りません。」

「まあ。お人の惡い。貴郎は、」

と莞爾した流石の媚かしさ。熟と見られて、青年は目を外らしたが、今は仕切の外に控へた、ボオイと硝子越に顏の合つたのを、手招きして、

「珈琲を。」

「あゝ、此方へも。」

と貴婦人も註文しながら、

「ですが、大層お話が持てましたぢやありませんか。彼地の文學のお話でゞもございましたんですか。」

「何ういたしまして、」

と青年は愈弱つて、

「人を見て法を說けは、外國人も心得て居るんでせう。僕の柄ぢや、そんな貴女、高尚な話を仕かけッこはありませんが、妙なことを云つて居ましたよ。はあ、來年の事を云つて居ました。西洋ぢや、別に鬼も笑はないと見えましてね。」

「來年の、どんな事でございます。」

「何ですつて、今年は一度國へ歸つて來年出直して來る、と申すことです。(日蝕があるから其を見に又出懸ける、東洋ぢや、殆ど皆既蝕だ。」と云ひましたが、未だ日本には、其の風說がないやうでございますね。

有つても一向心懸のございません僕なんざ、年の暮に、太神宮から暦の廻りますまでは、つい氣がつかないで了ひます。尤も東洋とだけで、支那だか、朝鮮だか、それとも、北海道か、九州か、何處で觀ようと云ふのだか、其を聞き懸けた處へ、貴女が食堂へ入つてお出なさいましたもんですから、(呀、これは日蝕處ぢやない。)と云ひましたよ。」

「ぢや、あとは、私をおなぶんなすつたんでございませうねえ。」

「御串戯おつしやつては不可ません。」

「それでは、どんなお話でございましたの。」

「實は、何う云ふ御婦人だ、と聞かれまして……」

「はあ、」

「何ですよ、貴女、腹をお立てなすつちや困りますが、ええ、」

と俯向いて、低聲になり、

「女俳優だ、と申しました。」

「まあ、」と清い目を睜つて、屹と睨むが如くにしたが、口に微笑が含まれて、苦しくはない樣子。

「澤山、そんなことを云つてお冷かしなさいまし。私は最う下りますから、」

「何方で、」

と遠慮らしく聞くと、貴婦人は小兒の事も忘れたやうに、調子が冴えて

「靜岡――ですから其先は御勝手におなぶり遊ばせ、室が違ひましても、私の乘つて居ります内は殺生でございますわ。」

「御心配はございません。僕も靜岡で下りるんです。」

「お湯。」

と小兒が云ふ時、一所に手にした、珈琲は未だ熱い。

## 三

「靜岡は何方へお越しなさいます。」

貴婦人が嬉しさうにして尋ねると、青年は稍〻元氣を失つた體に見えて、

「何處と云つて當なしなんです。當分、旅籠屋へ厄介に成りますつもりで。」

もし其ならば、土地の樣子が聞きたさうに、

「貴女、靜岡は御住居でございますか、其とも一寸御旅行でございますか。」

「東京から稼ぎに出ますんですと、未だ取柄はございますが、まるで田舍俳優ですからお恥かしう存じます。田舍も貴下、草深と云つて、名も情ないぢやありませんか。場末の小屋がけ芝居に、お飯炊の世話ばかり勤めます、おやまですわ。」

と菫色の手巾で、口許を蔽うて笑つたが、前髮に隱れない、俯向いた眉の美しさよ。

青年は少時默つて、うつかり巻煙草を取出しながら、

「何とも恐縮。決して惡氣があつたんぢやありません。貴女ぐらゐな女優があつたら、我國の名譽だと思つて、對手が外國人だから、否、眞個其のつもりで言つたんですが、眞に失禮。」

と眞面目に謝罪つて、

「失禮次手に、又お詫をします氣で伺ひますが、貴女も靜岡で、河野さん、と云ふのを御存じではございませんか。」

「河野……あの、」

深く頷き、

「はい、」

「あら、河野は私どもですわ。」

と無意識に小兒の手を取つて、卓子から伸上るやうにして、胸を起こした、帶の模樣の琴の絲、搖ぐが如く氣を籠めて、

「而して、貴下は」

「英吉君には御懇親に預ります、早瀬主税と云ふものです。」

と青年は衛と椅子を離れて立つたのである。

「まあ、早瀬さん、道理こそ。貴下は、お人が惡いわよ。」と、何も知つた目に莞爾する。

主税は驚いた顔で、

「えゝ、人が惡うございますつて？　其の女俳優、と言ひました事なんですかい。」

「否、家が氣に入らない、と仰有つて、酒井さんのお孃さんを、貴下、英吉に許しちや下さらないんですもの、ほゝゝ。」

「……」

「兄は最う失望して、蒼くなつて居りますよ。早瀬さん、初めまして、」

と此方も立つて、手巾を持つたまゝ、此の時更めて、略式の會釋あり。

「私は英さんの妹でございます。」

「あゝ、おうはさで存じて居ります。島山さんの令夫人でいらつしやいますか。……これは何うも。」

靜岡縣……某……校長、島山理學士の夫人菅子、英吉が嘗て、脫兎の如し、と評した美人は是であつた歟。

足一度靜岡の地を踏んで、其を知らない者のない、淺間の森の咲耶姫に對した、草深の此花や、實にこそ、と頷かるゝ。河野一族隨一の艷。其一門の富貴榮華は、一に此の夫人に因つて代表さるゝと稱して可い。

夫の理學士は、多年西洋に留學して、身は顯職にありながら純然たる學者肌で、無慾、恬淡、衣食ともに一向氣にしない、無趣味と云ふよりも無造作な、腹が空けば食べるので、寒ければ着るのであるから、唯其の分量の多からむことを欲するのみ。煮たのでも、焼いたのでも、酢でも構はず。兵兒帶でも、ずぼんでも、羽織に紐が無くつても、更に差支へのない人物、人に逢つても挨拶ばかりで、容易に口も利かないくらゐ。其の短を補ふに、令夫人があつて存する數か、菅子は極めて交際上手の、派手好で、話好で、遊びずきで、御馳走ずきで、世話ずきであるから、玄關に引きも切れない來客の名札は、新聞記者も、學生も、下役も、呉服屋も、繪師も、役者も、宗教家も、……悉く夫人の手に受取られて、偏に其の指環の寶玉の光によつて、名を輝かし得ると聞く。

## 四

五圓包んで惠むのもあれば、ビールを飲ませて歸らすのもあり、連れて出て、見物をさせるのもあるし、音樂會へ行く約束をするのもあれば、慈善市の相談をするのもある。飽かず、倦まず、撓まないで、客に接して、何れもをして隨喜渇仰せしむる妙を得て居て、加ふるに其の口が又古今の能辯であることは、爰に一目見て主税も知つた。

聞くが如くんば、理學士が少なからぬ年俸は、過半菅子のために消費されても、自から求むる處のない夫は、些の苦痛も感じないで、其の爲すがまゝに任せる上に、英吉も云つた通り、實家から附屬の化粧料があるから、天の爲せる麗質に、紅粉の裝を以てして、小遣が自由に成る。然も御衣勝の着痩はしたが、玉の膚豐かにして、汗は紅の露と成らう、宜なる哉、楊家の女、牛込南町に於ける河野家の學問所、桐楊塾の楊の字は、菅子あつて、撰ばれたものかも知れぬ。で、某女學院出の才媛である。

當時、女學校の廊下を、紅色の緒のたつた、襲裏の上穿草履で、ばた／＼と鳴らしたもので、其が全校に行はれて一時物議を起した。近頃靜岡の流行は、衣裳も髮飾も此の夫人と、最う一人、――土地隨一の豪家で、安倍川の橋の袂に、大巖山の峰を蔽ふ、千歲の柳とともに、鶴屋と聞えた財産家が、去年東京の然る華族から娶り得たと云ふ――新夫人の二人が、二つ巴の、巴川に渦を卷いて、お濠の水の溢るゝ勢。

「些とも存じませんで、失禮を。貴女、英吉君とは、些とも似てお出なさらないから勿論氣が着かう筈がありませんが。」

主税の此の挨拶は、眞に如才の無いもので。熟々視れば何處にか俤が似通つて、水晶と陶器とにしろ、目の大きい處などは、彼是同一であるけれども、英吉に似た、と云つて嬉しがるやうな婦人はないから、聊かも似ない事にした。

其の段は大出來だつたが、時に衣兜から燐寸を出して、鼻の先で吸つけて、ふつと煙を吐いたが早いか、矢の如く飛んで來たボオイは、小火を見附けたほどの騷ぎ方で、

「煙草は不可んですな。」

「いや、是は。」主税は狼狽へて、くるりと廻つて、そゝくさ扉を開いて、隣の休憩室の唾壺へ突込んで、喫みさしを揉消して、太く恐縮の體で引返すと、其のボオイを手許へ呼んで、夫人は莞爾々々笑ひながら低聲で何か命じて居る。但し其の笑ひ方は、他人の失策を嘲つたのではなく、親類の不出來しを面白がつたやうに見える。

「すつかり面目を失ひました。僕は、此の汽車の食堂は、生れてから最初だ。」

と、半ば、獨言を云ふ。折から四五人どやどやと客が入つた。其等には目もくれず、

「ほゝ、日本式ではないんだわねえ、貴下、お氣には入りますまい。」

「何ういたしまして、大恥辱。」

「旅馴れないのは、却つて江戸子の名譽なんですわ。」

ボオイが剩錢を持つて來て、夫人の手に渡すのを見て、大照れの主税は、口をつけたばかりの珈琲も其まゝ、立つたなりの腰も掛けずに、

「此處へも勘定。」

傍へ來て腰を屈めて、慇懃に小さな聲で、

「御一所に頂戴いたしました、は、」

「飛んでもない、貴女、」

と今度は主税が火の附くやうに慌しく急つて云ふのを、夫人は澄まして、紙入を帶の間へ、キラリと黃金の鎖が動いて、

「旅馴れた田舍稼ぎの……」

「女俳優」と云ひさうだつたが、客が居たので、

「女形にお任せなさいまし。」

とすらりと立つた丈高う、半面を颯と彩る、樺色の窓掛に、色彩羅馬の女神の如く、愛神の手を片手で曳いて、主税の肩と擦違ひ、

「さあ、此方へ入らしつて、澤山お煙草を召上れ。」

と見返りもしないで先に立つて、件の休憩室へ導いた。背に立つて、一寸小首を傾けたが、腕組をした、肩が聳えて、主税は大跨に後に續いた。

窓の外は、裾野の紫雲英、高嶺の雪、富士皓く、雨紫也。

## 五

聞けば、夫人は一週間ばかり以前から上京して、南町の桐楊塾に逗留して居たとの事。遊びではなかつたので、用は、此の小兒の二年越の眼病――寧ろ目が見えぬと云ふほどの容體で、隨分實家の醫院に於ても、治療に術を盡したが、其の效なく、一生の不幸に成りさうな、斷念のために、折から大理學士は、公用で九州地方へ旅行中。恰も母親は、兒の英吉の事に就いて、牛込に行つて居る、彼是便宜だから、大學の眼科で診斷を受けさせる爲に出向いた、今日が其の歸途だと云ふ。

固より其の女の兒に取つて、實家の祖父さんは、當時の蘭醫、昔取つた杵づかですわ、と輕い口を其の時交へて、)であるし、病院の院長は、義理の伯父さんだし、注意を等閑にしようわけはないので、はじめにも二月三月、然るべき東

京の專門醫にもかゝつたけれども、何うしても治らないから、三年前に既に思切つて、盲目の娘、（可哀相だわねえ、と客觀的の口吻だつたが、今更大學へ行つたつて、所詮效のない事は知れ切つて居るけれど、……要するに其は口實にしたんですわ、と一寸堅い語が交つた。

夫が又、隨分自分には我儘をさせるのに、東京へ出すのは、何故か蟲が嫌ふかして許さないから、是非行きたいと喧嘩も出來ず。雜と二年越、上野の花も隅田の月も見ないで居ると、京都へ染めに遣つた羽織の色も、何だか、艶がなくつて、我ながらくすんで見えるのが情ない。

まあ、御覽なさい、と云ふ折から窓を覗いた。

此の富士山だつて、東京の人がまるつ切知らないと、こんなに名高くはなりますまい。自分は田舍で埋木のやうな心地で心細くつて成らない處。夫が旅行で多日留守、此時こそと思つても、あとを預つて居る主婦なら猶の事、實家の手前も、旅をかけては出憎いから、其處で、盲目の娘をかこつけに、籠を拔けた。親鳥も、とりめにでもならなければ可い、小兒の罰が當りませう、と言つて、夫人は快活に吻々と笑ふ。

此の談話は、主税が立續けに卷煙草を燻らす間に、食堂と客室とに挾まつた、其の幅狹な休憩室に、差向ひで倚れたので。

椅子と椅子と間が眞に短いから、袖と袖と、むかひ合つて接するほどで、裳は長く足袋に落ちても、腰の高い、雪踏の尖は爪立つばかり。汽車の動搖みに留南奇が散つて、友染の花の亂るゝのを、夫人は幾度も引かされ、引かされするのであつた。

主税は其の盲目の娘と云ふのを見た。其は、食堂から此處へ入ると、突然客室の戸を開けようとして男の兒が硝子扉に手をかけた時であつた。――銀杏返に結つた、三十四五の、實直らしい、小綺麗な年增が、丁ど腰掛けの端に居て、直ぐに其處から、扉を開けて、小兒を迎へ入れたので、扨は乳母よ、と見ると、最う一人、被布を着た女の子の、キチンと坐つて、此の陽氣に、袖口へ手を引込めて、首を萎めて、ぐつたりして、其の年增の膝に凭りかゝつて居たのがあつて、病氣らしい、と思つたのが、卽ち話の、目の病い娘なのであつた。

乳母の目からは、奧に引込んで、夫人の姿は見えないが、自分は居ながら、硝子越に彼方から見透くのを、主税は何か憚つて、一寸々々氣にしては目遣ひをしたやうだつたが、其の風を見ても分る、優しい、深切らしい乳母は、太くお主の盲目なのに同情したために、自然氣が映つて成つたらしく、女の兒と同一やうに目を瞑つて、男の兒に何かものを言ひかけるにも、尙ほ深く差俯向いて、聊も室の外を窺ふ氣色は無かつたのである。

恁くて彼一句、是一句、遠慮なく、やがて靜岡に着くまで續けられた。汽車には太く倦じた體で、夫人は腕を仰向けに窓に投げて、がつくり鬢を枕する如く、果は腰帶の弛んだのさへ、引繕ふ元氣も無くなつて見えたが、鈴のやうな目は活々と、白い手首に瞳大きく、主税の顏を瞻つて、物打語るに疲れなかつた。

## 草深邊

### 六

縣廳、警察署、師範、中學、新聞社、丸の內をさして朝每に出勤する其の道其の道の紳士の、最も遲刻する人物も最う出拂つて、――初夜の九時十時のやうに、朝の九時十時頃も、一時は魔の所有に寂寞する、草深町は靜岡の侍小路を、カラ〳〵と挽いて通る、一臺、艶かな幌に、夜上りの澄渡つた富士を透かして、燃立つばかり

の鳥毛の蹴込み、友染の背當てした、高臺細骨の腕車があつた。

あの、音の冴えた、輕い腕車の軋る響きは……孃のがお出掛けに違ひない。昨日東京から歸つた筈。それ、衣更への姿を見よ、と小橋の上で留るやら、旦那を送り出して引込んだばかりの奥から、わざ／＼駈出すやら、鯱釣瓶の手を休めるやら、女連が上も下も齊しく見る目を聳てたが、腕車は確に、軒に藤棚があつて下を用水が流れる、火の番小屋と湖角の、辻の帳場で、近頃塗替へて、鳥山の令夫人に乘初めをして頂く、と十日ばかり取つて置きの逸物に違ひないが——風呂敷包一つ乘らない、空車を挽いて、車夫は被物なしに驅けるのであつた。

もの丶半時ばかり經つと、同じ腕車は、通の方から勢よく茶畑を走つて、草深の町へ曳込んで來た。時に車上に居たものを、折から行逢つた土地の豆腐屋、八百屋、（のりは何うですね——）と賣つて通る女房などは、若竹座へ乘込んだ俳優だ、と思つたし、旦那が留守の、座敷から簾越に伸上つたり、玄關の衝立の蔭に成つて覗いた奥様連は、千鳥座で金色夜叉を演ると云ふ新俳優の、あれは貫一に扮る誰かだ、と立騷いだ。

主税が又此地へ來ると、些とをかしいほど男ぶりが立勝つて、薙放しの頭髮も洗つたやうに水々しく、色もより白くすつきりとあく拔けがしたは、水道の餘波は爭はれぬ。土地の透明な光線には、（埃だらけな洋服を着換へた。）酒井先生の垢附を拜領ものらしい、黑羽二重二ツ巴の紋着の羽織の中古なのさへ、艷があつて折目が凛々しい。久留米か、薩摩か、紺絣の單衣、これだけは新しいから今年出來たので、卯の花が咲くとともに、お蔦が心懸けたものであらう。

渠は昨夜、吳服町の大東館に宿つて、今朝は夫人に迎へられて、草深さして來たのである。

仰いで、淺間の森の流るゝを見、俯して、濠の水の走るを見た。忽ち一朶紅の雲あり、夢の如く眼を遮る。合歡の花ぞ、と心着いて、流の音を耳にする時、腕車はがらりと石橋に乘懸つて、黑の大構の門に梶が下りた。

「此處かい。」とひらりと出る。

「へい、」

と門內へ驅け込んで、取附の格子戶をがらがらと開けて、車夫は橫ざまに身を開いて、淺黃裏を屈めて待つ。

冠木門は、舊式のまゝで敷木があるから、橫附けに玄關まで曳込むわけには行かない。

男の兒が先へ立つて駈出して來る事だらう、と思ひながら、主税が帽を脫いで、雨あがりの松の傍を、綠の露に袖擦りながら、格子を潜つて、土間へ入ると、天井には鶯籠でも釣つてありさうな、昔ながらの大玄關。

唯見ると、正面に一段高い、式臺、片隅の板戶を一枚開けて、後の緣から射す明りに、黑髮だけ際立つたが、蔭つた土間の薄暗さ、衣の色朦朧と、俤白き立姿、夫人は待兼ねた體に見える。

會釋もさせず、口も利かさず、見迎への莞爾して、

「まあ、遲かつたわねえ。あゝ御苦勞よ。」

一寸車夫に聲を懸けたが、

「嘸寢坊していらつしやるだらうと思つたの。さあ、此方へ。さあ、」

口早に促されて、急いで上る、主税は明い外から入つて、一倍暗い式臺に、高足を蹈んで、ドンと板戶に打附かるのも、菅子はこゝろづかぬまで、いそ／＼して、

「此方へ、さあ、ずつと此處から、ほゝゝ、市川菅女、部屋の方へ。」

と直ぐに緣づたひで、はら／＼と、素足で捌く

裳の音。

## 七

市川菅女……と耳には爲たが、玄關の片隅切つて、縁へ駈込むほどの慌しさ、主税は足早に續く咄嗟で、何の意味か分らなかつたが、其の縁の中ほどで、はじめて昨日汽車の中で、夫人を女俳優だと、外人に揶揄一番した、あゝ、祟だ、と氣が付いた。

氣が付いて、莞爾とした時、渠の眼は口許に似ず鋭かつた。

丁ど其の横が十疊で、客室らしい造だけれども、夫人は最う其處を縁づたひに通越して、次の（菅女部屋）から、

「ずつと入らつしやいよ。」と聲を懸ける。

主税が猶豫ふと、

「あら、座敷を覗いちや不可ません、未だ散らかつて居るんですから、」

と笑ふ。是は、と思ふと、縁の突當り正面の大姿見に、渠の全身、飛白の紺も鮮麗に、部屋へ入つて居る夫人が、何處から見透したらうと驚いた其の目の色まで、歴然と映つて居る。

姿見の前に、長椅子一脚、廣縁だから、十分に餘裕がある。戸袋と向合つた壁に、棚を釣つて、香水、香油、白粉の類、花瓶まじりに、ブラッシ、櫛などを並べて、洋式の化粧の間と見えるが、要するに、開き戸の押入を抜いて、造作を直して、壁を塗替へたものらしい。

薄萌葱の窓掛を、件の長椅子と雨戸の間へ引掛けて、幕が明いたやうに、絞つた裾が靡いて居る。腕車で見た合歡の花は、恰も此の庭の、黒塀の外になつて、用水は其の下を、門前の石橋續きに折曲つて流るゝので、惜い哉、庭は唯二本三本を植棄てた、長方形の空地に過ぎぬが、其のかはり富士は一目。

地を坤軸から掘覆して、將棊倒に凭せかけたやうな、あらゆる峰を麓に抱いて、折からの蒼空に、雪なす袖を纏して、輕く其の薄紅の合歡の花に乘つて居た。

「結構な御住居でございますな。」

此處で、つい通りな、然も適切なことを云つて、部屋へ入ると、長火鉢の向うに坐つた、飾を插さぬ、S巻の濡色が滴るばかり。お納戸の絹せるに、ざつくり、山繭縮緬の縞の羽織を引掛けて、帯の弛い、無造作な居住居は、直ぐに立膝にも成り兼ねないやう。横に飾つた簞笥の前なる、鏡臺の鏡の裏へ、其の玉の頸に後毛のはら／＼とあるのが通つて、新に薄化粧した美しさが背中まで透通る。白粉の香は座蒲團にも籠つたか、主税が坐ると馥郁たり。

「こんな處へお通し申すんですから、まあ、堅くるしい御挨拶はお止しなさいよ。一寸昨夜は旅籠屋で、一人で寂しかつたでせう。」

と火箸を壓へたさうな白い手が、銅壺の湯氣を除けて、ちら／＼して、

「昨夜にも、お迎ひに上げませうと思つたけれど、一度、寂しい思をさして置かないと、他國へ來て、友達の難有さが分らないんですもの。是からも粗末にして不實をすると不可ないから……」

と莞爾笑つて、瞥と見て、

「其に最う內が臺なしですからね、私が一週間も居なかつた日にや、門前雀羅を張るんだわ。手紙一ッ來ないんですもの。今朝起抜けから、自分で掃を持つやら、掃出すやら、大騷ぎ。未だ些とも片附かないんですけれど、貴下も詰らなからうし、私も早く逢ひたいから、可い加減にして、直ぐに腕車を持たせて、大急ぎ、と云つて遣つたんですがね。

あの、地方の腕車だつて疾いでせう。其でも何よ、未だか、未だか、と立つて見たり坐つて見たり、何にも手につかないで、御覽なさい、身化粧をしたまんま、鏡臺を始末する方角も

ないぢやありませんか。たうとう玄關の處へ立切りに待つて居たの。何處を通つて來らしつて？」

返事も聞かないで、ボン／＼時計を打仰ぐに、象牙のやうな咽喉を仰向け、胸を反らした、片手を疊へ。

「まあ、未だ一時間にも成らないのね。半日ばかり待つてたやうよ。途中で何處を見て來ました。大東館の直き此方の大きな山葵の看板を見ましたか、郵便局は。あの右の手の廣小路の正面に、煉瓦の建物があつたでせう。縣廳よ。お城の中だわ。あゝ、さあ、早瀨さん、澤山喫つて頂戴、お煙草。露西亞卷だつて、貰つたんだけれど、島山（夫を云ふ）は些とも喫みませんから……」

## 八

其から名物だ、と云つて扇屋の饅頭を出して、茶を焙じる手つきはなよやかだつたが、鐵瓶の湯は未だ沸らぬ、と銅壺から湯を掬む柄杓の柄が、へし折れて、短く成つて居たのみか、二度ばかり土瓶にうつして、最う一杯、どぶりと突込む。他愛なく、拔けて柄に成つて了つたので、

「まあ、」と笑んだ顏をして、斜めに取つて見透かした風情は、此の夫人の艶なるだけ、中指の鼈甲の斑を、日影に透かした趣だつたが、

「仕樣がないわね。」と笑つて、其の柄を投り出した樣子は、世帶の事には餘り心を用ゐない、學生生活の俤が殘つた。

主税が、小兒衆は、と尋ねると、二人とも乳母が連れて、土產ものなんぞ持つて、東京から歸つた報知旁々、朝早くから出向いたとある。

「河野の父さんの方も、內々小兒をだしに使つて東京へ遊びに行つた事を知つて居るんですから、言句は言はないまでも、苦い顏をして、鬚の中から一睨み睨むに違ひはないんですもの、難有くないわ。母樣は自分の方へ、娘が慕つて行つたんですから御機嫌が可いでせう、最う暫と經つと歸つて來ます。其までは、私、實家へは顏を出さないつもりで、當分風邪をひいた分よ。」

と火鉢の緣に肱をついて、男の顏を視めながら、魂の拔け出したやうな佛氣ないことを云ふ。

「そりや、惡いでせう。」

と主税が却つて心配らしく、

「彼方から、誰方かお來なさりやしませんか。貴女がお歸りだ、と知れましたら。」

「來るもんですか。義兄（醫學士――姉婿を云ふ）は忙しいし、また些とでも嫂さんを出さないのよ。大でれ／＼なんですから。父さんはね、其にね、頃日は、家族主義の事に就いて、些と纏まつた著述をするんだつて、母屋に閉籠つて、時々は、何よ、一日藏の中に入り切の事があつてよ。藏には書物が一杯ですから。父さんはね、醫者なんですけれど、もと個人、人一人二人の病を治すより、國の病を治したい、と云ふ大な希望の人ですからね。過年、あの、家族主義と個人主義とが新聞で騷ぎましたね。あの時も、父樣は、東京の叔父さんだの、坂田（道學者）さんに應援して、火の出るやうに、敵と戰つたんだわ。

惜い事に、兄さん（英吉）も奔走してくれたんですけれど、可い機關がなくつて、ほんの教育雜誌のやうなものに掲つたものですから、論文も、名も出ないで了つて、殘念だからつて、一生懸命に遣つてますの。確か、貴下の先生の酒井さんは、其の時の、あの敵方の大立ものぢやなくつて？」

と不意に質問の矢が來たので、些と、狼狽ついたやうだつたが、

「何うでしたか、最う忘れましたよ。」と氣もなく答へる。

別に狙つたので無いらしく、
「でも、何でせう、貴下は、矢張、個人主義でお出なさるんでせう。」
「僕は饅頭主義で、番茶主義です。」
と、何故か氣競つて云つて、片手で饅頭を色氣なくむしやりと遣つて、息も吐かずに、番茶を呷る。
「あれ、嘘ばつかり。貴下は柳橋主義の癖に、」
夫人は薄笑ひの目をぱつちりと、睫毛を裂いたやうに黒目勝なので睨むやうにした。
「一寸、吃驚して。……そら、御覧なさい、未だ驚かして上げる事があるわ。」
と振返りざまに背後向きに肩を捻ぢて、茶棚の上へ手を遣つた、活潑な身動きに、下交の褄が辷つた。
其のまゝ横坐りに見得もなく、長火鉢の横から肩を斜めに身を寄せて、翳すが如く開いて見せたは……
「呀！ 讀本を買ひましたね。」
「先生、是は何て云ふの？」
「冷評しては不可ませんな、商賣道具を。」
「否、眞面目に、貴下が此の靜岡で、獨逸語の塾を開くと云ふから、早いでせう、最う買つて來たの。いの一番のお弟子入よ。一寸、リイダアと云ふのを、獨逸では……」
「レエゼウツフ（讀本）——月謝が出ますぜ。」
「レエゼウツフ。」

## 九

「あの、何？」
と眞に打解けたものいひで、
「精々勉强したら、名高い、ギヨウテの（フアウスト）だとか、シルレルの（ウイルヘルム、テル）……でしたつけかね、其なんぞ、何年ぐらゐで讀めるやうに成るんでせう。」
「直き讀めます、」
と讀本を受取つて、片手で大摑みに引開けながら、
「僕ぐらゐにはと云ふ、但書が入りますけれど。」
「だつて……」
「否、出來ます。」
「あら、眞個に……」
「尤も月謝次第ですな。」
「あゝだもの、」
と衝と身を退いて、叱るが如く、
「何故、然うだらう。ちやんと御馳走は存じて居りますよ。」
茶棚の傍の襖を開けて、つんつるてんな着物を着た、二百八十間の橋向う、鞠子邊の産らしい、十六七の婢どんが、
「ふアい、奧樣。」と訛つて云ふ。
聞いただけで、怜悧な菅子は、最う其の用を悟つたらしい。
「誰か來たの？」
「ひやあ、」
「あら、厭な。一寸、當分はお留守とおいひと云つたぢやないの？」
「アニ、はい、で、ござりますけんど、お客樣で、ござんしねえで、あれさ、もの、吳服町の手代衆でござりますだ。」
「あゝ、谷屋のかい、ぢや搆はないよ、此方へ、」
と云ひかけて、主税を見向いて、
「かくまつて有る人だから……ほゝゝ、其方へ行きませうよ。」
トきよとんとした顏をして、婢は跡も閉めないで、のつそり引込む。
衣紋を直したと思ふと、はらりと氣早に立つて、跼つた婢の髮を、袂で拂つて、最う居ない。
はて心得ぬ、是だけの構に、乳母の他はあの女中ばかりであらう歟。主人は九州へ旅行中で、夫人が七日ばかりの留守を、彼だけでは覺束

ない。第一、多勢の客の出入に、茶の給仕さへ覺束ない。――と早瀬は四邊を窺したが――
後で知れた――留守中は、實家の抱車夫が夜宿りに來て、晝は其の女房が來て居たので。晝飯の時に分つたのでは、客へ馳走は、殘らず電話で料理屋から取寄せる……尤も、珍客と云ふのであつたかも知れぬ。

そんな事は何うでも可いが、不思議なもので、早瀬と、夫人の間に、頻に往來があつた其の頃しばらくの間は、此の家に養はれて中學へ通つて居る書生の、美濃安八の男が、夫人が上京したあと直ぐに、故郷の親が病氣と云ふので歸つて居た――是が居ると、たとひ日中は學校へ出ても、別に仔細は無かつたらうに。

扨て、夫人は、谷屋の手代と云ふのを、隣室の其の十疊へ通したらしい、何か話聲がして居る内、

「早瀬さん――」

主税は、夫人が此室を出て、大廻りに行つた通りに、聲も大廻りに遠い處に聞き取つて、靜に其の跡を辿りつゝ返事が遲いと、

「早瀬さん、」

と近く又呼ぶ。今しがた、（かくまつて有る人だ、）と串戯を云つたものを。

「一室數は幾つばかりあれば可くつて？」

「何です、何です。」

餘り唐突で解し兼ねる。

「貴下のお借りなさらうと云ふお家よ。一寸、」

「えゝ、然うですね。」

「おほゝゝ、話が遠いわ。此方へ來らつしやいよ。おほゝゝ、縁側から、縁側から。」

夫人がした通りに、茶棚の傍の襖口へ行きかけた主税は、（菅女部屋）の中を、トぐるりと廻つて、苦笑をしながら縁へ出ると、是は！　三足と隔てない次の座敷。開けた障子に背を凭せて、立膝の褄は深いが、圓く肥えた膝も露に夫人は頬を支へて居た。

一朝から戸迷ひをなすつては、泊つたら貴下、何うして、」

と振向いた顏の、花の色は、合歡の影。

「へゝゝゝゝ。」

と、向うに控へたのは、呉服屋の手代なり。

鬱金木綿の風呂敷に、浴衣地が堆い。

## 二人連

十

午後、宮ヶ崎町の方から、ツン〳〵と彼方此方の二階で綿を打つ音を、時ならぬ砧の合方にして、淺間の社の南口、裏門にかゝつた、島山夫人、早瀬の二人は、花道へ出たやうである。

門際の流に臨むと、頃日の雨で、用水が水嵩増して溢るゝばかり道へ波を打つて、然も濁らず、蒼く瀧つて龍の躍るが如く、茂の下を流るゝさへあるに、大空から賤機山の蔭がさすので、橋を渡る時、夫人は洋傘をすぼめた。

只見ると黒髪に變りはないが、脊がすらりとして、帶腰の靡くやうに見えたのは、羽織なしの一枚袷と云ふ扮裝の所爲で、又着換へて居た――此の方が、姿も佳く、能く似合ふ。但し媚かしさは少なくなつて、幾干か氣韻が高く見えるが、其だけに品が可い。

セルで足袋を穿いては、軍人の奥方めく、素足では待合から出たやうだ、と云つて邸を出掛けに着換へたが、膚に、緋の紋縮緬の長襦袢。

二人の兒の母親で、其の燃立つやうなのは、兎もすると同一軍人好みに成りたがるが、垢拔けのした、意氣の壯な、色の白いのが着ると、汗ばんだ木瓜の花のやうに生暖なものではなく、雪の下もみぢで凜とする。

部屋で、先刻是を着た時も、乳を壓へて衝と袖を滑らすやうに、男に氣を兼ねたものではなか

つた。露に其の長襦袢に水紅色の紐をぐる〳〵と巻いた形で、牡丹の花から抜出たやうに緣の姿見の前に立つ――、
「市川菅女。」と莞爾々々笑つて、澄まして袷を掻取つて、襟を合はせて、ト背向きに頸を捻ぢて、衣紋つきを映した時、早瀬が緣の其の棚から、ブラッシを取つて、ごし〳〵痒さうに天窓を引掻いて居たのを見ると、
「そんな邪險な撫着けやうがあるもんですか、私が分けて上げますからお待ちなさい。」
　と云ふのを、聞かない振でさつさと引込まうとしたので、
「あれ、お待ちなさいよ。」と、下〆をしたばかりで、衝と寄つて、ブラッシを引奪ると、窓掛をさらさらと引いて、端近で、綺麗に分けて遣つて、前へ廻つて覗き込むやうに瞳をためて額を見た。
　胸の血汐の通ふのが、波打つて、風に戰いて見ゆるばかり、撓まぬ膚の未開紅、此の意氣なれば二十六七でも、紅の色は褪せぬ。
　境内の櫻の樹蔭に、靜々、夫人の裳が留まると、早瀬が傍から向うを見て、
「茶店があります、一休みして參りませう。」
「彼處へですか。」
「お誂へ通り、緋くちやな赤毛布が敷いてあつて、水々しい婆さんが居ますね、お茶を飲んで行きませうよ。」
　と謹んで色には出ぬが、午飯に一銚子賜つたさうで、早瀬は怪しからず可い機嫌。
「咽喉が渇いて？」
「ひりつくやうです。」
「では……」
　茶店の婆さんと云ふのが、式の如く古ぼけて、ごほん、と咳くのが聞えるから、夫人は餘り氣が進まぬらしかつたが、二三人子守女に、きよろきよろ見られながら、づゝと入る。
「お掛けなさいまし。お日和でございます。よう御參詣なさりました。」
　夫人が佇んで居て掛けないのを見て、早瀬は懷中から切立の手拭を出して、はた〳〵と毛布を掃つて、
「さあ、何うぞ。」
　笑つて云ふと、夫人は婆さんを背後にして、悠々と腰を下ろして、
「江戸兒は心得たものね。」
「人を馬鹿にしていらつしやる。」
　と、さしむかひの夫人の衣紋はづれに、店先を覗いて、
「やあ、甘酒がある……」

## 十一

「お止しなさいよ。先刻もあんなものを食つてさ、お腹を惡くしますから。」
　と低聲でたしなめるやうに云つた。（先刻のあんなものは――鮪の茶漬で――慶喜公の邸あとだと云ふ、可懷しいお茶屋から、故と取寄せた午飯の馳走の中に、刺身は江戸には限るまい、と特別に夫人が膳につけたのを、やがてお茶漬で掻込んだのを見て、其時は太く嬉しがつた。
　得て是を嗜むもの、河野の一門に一人も無し、で、夫人も口惜しいが不可いさうである。
「此處で甘酒を飲まなくつては、鳩にして豆、」
　と云ふと、婆さんが早耳で、
「はい、盆に一杯五厘宛でございます。」
「私は鳩と遊びませう。貴下は甘酒でも冷酒でも御勝手に召食れ。」
　と前の床几に並べたのを、さらりと撒くと、颯と音して、揃ひも揃つた雉子鳩が、神代に鳥の湧いたやうに、むら〳〵と寄せて來るので、又一盆、最う一盆、夫人は立上つて更に一盆。
「一杯、二杯、三杯、四杯、五杯！」
　早瀬は其の數を算へながら、
「あゝ、僕は唯た一杯だ。婆さん甘酒を早く、」

「はい〳〵、あれ、まあ、御覽じまし、鳰の喜びますこと、澤山奧樣に頂いて、クウ〳〵かい喃、おゝ〳〵。」

と合點々々、ほた〳〵笑をこぼしながら甘酒を釜から汲む。

見る〳〵うち、輝く玄潮の退いたか、と鳩は掃いたやうに空へ散つて、咄嗟に寂寞とした日當りの地の上へ、ぼんやりと影がさして、よぼよぼ、蠢いて出た者がある。

鼻の下は然までゞないが、ものゝ切尖に瘦せた頤から、耳へかけて胡麻鹽鬚が栗の毬のやうに、すく〳〵、頰肉がつくりと落ち、小鼻が出て、窪んだ目が赤味走つて、額の皺は小さな天窓を揉込んだごとく刻んで深い。色蒼く垢じみて、筋で繫いだばかりげつそり肩の瘦せた手に、是だけは脚より太い、しつかりした、竹の杖を支いたが、然まで容子の賤しくない落魄らしい、五十近の男の……肺病とは一目で分る……襟垢でぴか〳〵した、閉絲の斷れた、寢ン寢子を今時分。

藁草履を引摺つて、勢の無さは埃も得立てず、地の底に滅入込むやうにして、正面から辿つて來て、此處へ休まうとしたらしかつたが、目も最う疎くて、近寄るまで、心着かなんだらう。其處に貴婦人がゐるのを見ると、出かゝつた足を内へ折曲げ、杖で留めて、眩さうに細めた目に、あはれや、笑を湛へて、婆さんの顏をじろりと見た。

「おゝ、貞さんか。」

と耳立つほど、名を若く呼んだトタンに、早瀨は屹となつて銳く見た。

が、夫人は顏を背けたから何にも知らない。

「主あ、何うさしつた、久しく見えなんだ。」

と云ふさへ、下地はあるらしい婆さんの方が、見たばかりで最う、ごほ〳〵。

「方なしぢや、」

思ひの他、聲だけは確であつたが、惡寒がするか、いぢけた小兒がいや〳〵をすると同一に、縮めた首を破れた寢ン寢子の襟に擦つて、

「埒明かんで、久しい風邪でな、稼業は出來ず、段々弱るばつかりぢや。芭蕉の葉を煎じて飲むと、熱が除れると云ふので。」

と肩を怒らしたは、咳かうとしたらしいが、其の力も無いか、口へ手を當てゝ俯向いた。

「何より利くさうなが、主あ飲ましつたか。」

「然ればぢや、方々樣へ御願ひ申して頂いて來ては、飲んだにも、飲んだにも、大な芭蕉を葉ごとまるで飲んだくらゐぢやけれど、少しも……」

とがつくり首を掉つて、

「驗が見えぬぢやて。」

驗なきにはあらずかし、御身の骸は疾く消えて、賤機山に根もあらぬ、裂けし芭蕉の幻のみ、果敢なく其處に立てるならずや。

ごほ〳〵と頷き〳〵、咳入りつゝ、婆さんが持つて來た甘酒を、早瀨が取らうとするのを、取らせまいと、無言で、はたと手で拂つた。此の時、夫人は手巾で口を壓へながら、甘酒の茶碗を、衝と傍へ奪つたのである。

## 十二

「芭蕉の葉を煎じたを立續けに飲ましつて、效驗の無い事はあるまいが、疾く快うならうと思ひなさる慾で、焦らつしやるに因つて何ようない、氣長に養生さつしやるが何より藥ぢや。喃、主、氣の持ちやうに依るぞいの。」

と婆さんは己を慰めるやうな、自分も勢の無いやうな事を云ふ。

病人は、苦を訴ふるほどの元氣も持たぬ風で、目で頷き、肩で息をし、息をして、

「此頃は病氣と張合ふ勇もないで、何うなとしてくれ、最う投身ぢや。人に由つては大蒜が可え、と云ふだがな。大蒜は肺の藥に成るげぢやけれども、私は恁う見えても癆咳とは思はん、

風邪のこぢれぢやに因つて、熱さへ除れゝば、と矢張芭蕉ぢや。」

愚痴のあはれや、繰返して、杖に縋つた手を置替へ、

「煎じて飲むはまだるこいで、早や、根からかぶりつきたいやうに思ふがい。」

と切なさうに顏を獅嚙める。

「焦らつしやる事よ、苛れてはようない、ようないぞの。まあ、休んでござらんか、よ。主あ何んなにか大儀ぢやらうなう。」

「此と休まいて貰ひたいがの、」

菅子と早瀨の居るのを見て、遠慮らしく、もぢもぢして、

「腰を下ろすと能う立てぬで、久しぶりで出た次手ぢや、やつと其處等を見て、歸りに寄るわい。見霽へ上る、此の男坂の百四段も、見たばかりで、最う〳〵慄然とする〳〵、」

と重さうな頭を掉つて、額を横向きに杖を上げると、尖がぶる〳〵震ふ。

此方に腰掛けたまゝ、胸を伸ばして、早瀨が何か云はうとした、(構はず休らへ)と聲を懸けさうだつたが、夫人が、ト見て、指を彈いて禁めたので默つた。

「そんなら歸りに寄りなされ、氣をつけて行かつしやいよ。」

物は言はず、啞るが如く頷くと、足で足を押動かし、寢ン寢子廣き芭蕉の影は、葉がくれに破れて失せた。やがて此の世に、其の杖ばかり殘るであらう。其の杖は、野墓に立てゝも、蜻蛉も留まるまい。病人の居たあとしばらくは、餌を飼つても、鳩の寄りさうな景色は無かつた。

「お婆さん、」

と早瀨が調子高に呼んだ。

さすがに滅入つて居た婆さんも、此の若い、威勢の可い聲に、蘇生つたやうに成つて、

「へい、」

「今の、風說なら最う止しつこ。私は見たばかりで胸が痛いのよ。」

と、威しては可けさうもないので、片手で拜むやうにして、夫人は厭々をした。

「否、一ッ心當りは無いか、家を聞いて見ようと思ふんです。見物より、其の方が肝心ですもの。」

「あゝ、然うね。」

「何處か、貸家はあるまいか。」

「へい、無い事もございませぬが、旦那樣方の住まつしやりますやうな邸は、此の居まはりにはございませぬ。鷹匠町邊をお聞きなさりましたか、何うでございます。」

「其の鷹匠町邊にこそ、御邸ばかりで、僕等の住めさうな家はないのだ。」

「何んなのがお望みでございまするやら、」

「廉いのが可い、何でも廉いのが可いんだよ。」

「早瀨さん。」と、夫人が見つともないと壓へて云ふ。

「長屋で可いのよ、長屋々々。」

と構はず、遣るので、叉目で叱る。

「へゝゝ、お幾干ばかりなのをお搜しなされまするやら。」

心當りがあるか、ごほりと咳きつゝ、甘酒の釜の蓋を膝行つて出る。

「靜岡ぢや、お米は一升幾干だい。」

「えゝ。」

「厭よ、後生。」

と婆さんを避けかた〳〵、立構へで、夫人が肩を擦寄せると、早瀨は後へ開いて、夫人の肩越に婆さんを見て、

「それとも一間に幾干だね、其から聞いて屋賃の處を。」

「最う、私は、」と堪りかねたか、早瀨の膝をハタと打つと、赤らめた顏を手巾で半ば蔽ひながら、茶店を境内へ衝と出る。

## 十三

何處も變らず、風呂敷包を首に引掛けた草鞋穿の親仁だの、日和下駄で尻端折り、高帽と云ふ扮裝などが、四五人境内をぶら〳〵して、何を見るやら、孰れも仰向いてばかり通る。

石段の下あたりで、緑に包まれた夫人の姿は、色も一際鮮麗で、青葉越に緋鯉の躍る池の水に、影も映りさうに彳んだが、手巾を振つて、促して、茶店から引張り寄せた早瀬に、

「可い加減になさいよ、極が惡いぢやありませんか。」

「はい、お忘れもの。」

と澄ました顏で、洋傘を持つて來た、柄の方を返して出すと、夫人は手巾を持換へて、然うでない方の手に取つたが……不思議に此の男のは汗ばんで居なかつた。誰のも、恁う云ふ際は、持つたあとがしつとり、中には、じめ〳〵とするのさへある。……

夫人は一寸俯目に成つて、輕く其の洋傘を支いて、

「能く氣がついてねえ。(小さな聲で、)——大儀、」

「はッ、主稅御供仕りまする上からは、御道中聊かたりとも御懸念はござりませぬ。」

「靜岡は陽氣でせう、ほゝほゝ。」

「三等米なら六升臺で、暮しも樂な處ですつて、婆さんが言ひましたつけ。」

「あら又、厭ねえ、貴下は。後生ですから其の(お米は幾干だい、)と云ふのだけは堪忍して頂戴な。最う私は極が惡くつて、同行は恐れるわ。」

「えゝ、然うおつしやれば、貴女もどうぞ其の手巾で、恁う、お招きに成るのだけは止して下さい。餘りと云へば紋切形だ。」

「何うせね、柳橋のやうなわけには……」

「否、今も、子守女めらが、貴女が手巾をお掉りなさるのを見て、……はゝはゝ、」

「何ですつて、」

「はゝはゝはゝ。」

と事も無げに笑ひながら、

「(男と女と豆煎、一盆五厘だよ。)ツて、飛んでもない、わッと囃して遁げましたぜ。」

ツと横を向く、脊が屹と高く成つた。引かなぐつて、其の手巾をはたと地に擲つや否や、裳を蹴つて、前途へつか〳〵。

爾時義經少しも騷がず、落ちた菫色の絹に風が戰いで、鳩の羽溌と薫るのを、悠々と拾ひ取つて、ぐつと袂に突込んだ、手を其まゝ、袖引合はせ、腕組した時、色が變つて、人知れず俯向いたが、直ぐに大跨に夫人の後について、社の廻廊を曲つた所で追着いた。

「夫人。」

「……」

「貴女腹をお立てなすつたんですか、困りましたな。知らぬ他國へ參りまして、今貴女に見棄てられては、東西も分りませんで、途方に暮れます。何うぞ、御機嫌を御直し下さい、夫人、」

「……」

「英吉君の御妹御、菅子さん、」

「……」

「島山夫人……河野令孃……不可い、不可い。……」

と口の裡で云つて、歩行き〳〵、

「眞個に機嫌を直して、貴女、御世話下さい、今更獨ちや心細くつて何うすることも出來ません。最う決して貴女の前で、米の直は申しますまい。其の代り、貴女もどうぞ貴族的でない、僕が住まれさうな、實際、相談の出來さうな長屋式のをお心掛けなすつて下さい。實は其の御樣子ぢや、二十圓以内の家は念頭にお置きなさらないやうに見受けたものですから、聊か諷する處あるつもりで、」

何時の間にか、有名な隨神門も知らず〳〵通越した、北口を表門へ出て了つた。

社は山に向ひ、直ぐ畠で、却つて裏門が町續きに成つて居るが、出口に家が並んで居るから、其の前を通る時、主税も默つた。

夫人は固より口を開かぬ。

やがて茶店を折曲つて、小家まばらな、場末の町へ、未だツンとした態度でずん〳〵入る。

大巖山の町の上に、小さな溝があるばかり、障子の破から人顔も見えないので、其時づツと寄つて、

「ものを云つて下さいよ。」

「……」

「夫人、」

「……」

## 十四

少時――主税も最う口を利かうとは思はない様子に成つて、別に苦にする顔色でもないが、腕を拱いた態で、夫人の一足後れに跟いて行く。

裏町の中程に懸ると、兩側の家は、執れも火が消えたやうに寂寞して、空屋かと思へば、蜘蛛の巣を引くやうな絲車の音が何家とも無く戸外へ漏れる。路傍に石の古井筒があるが、缺目に青苔の生えた、其にも濡色はなく、ばさ〳〵燥いで、流も乾びて居る。其處等何軒かして日に幾度、と數へるほどは米を磨ぐものも無いのであらう。時々陰に籠つて、しつこしの無い、咳の聲の聞えるのが、墓の中から、未だ生きて居ると唸くやう。はづれ掛けた羽目に、咳止飴と黒く書いた廣告の、其を賣る店の名の、風に取られて讀めないのも、何となく世に便りがない。

振返つて、來た方を見れば、町の入口を、眞暗な隧道に樹立が塞いで、炎のやうに光線が透く。其の上から、日のかげつた大巖山が、其處は人の落ちた谷底ぞ、と聳え立つて峰から哄と吹き下した。

かつ散る紅、靡いたのは、夫人の褄と軒の鯛で、鯛は恵比壽が引抱へた處の繪を、色は褪せたが紺暖簾に染めて掛けた、一軒（御染物處）があつたのである。

廂から突出した物干棹に、薄汚れた紅の切が忘れてある。下に、荷車の片輪はづれたのが、塵芥で埋つた溝へ、引傾いて落込んだ――是を境にして軒隣は、中にも見すぼらしい破屋で、煤のふさ〳〵と下つた眞黒な潛戸の上の壁に、何の禁厭やら、上に春野山、と書いて、口の裂けた白黒まだらの狗の、前脚を立てた姿が、雨滲に浮び出でゝ、朦朧とお札の中に顯れて活けるが如し。それでも鬼が來て覗くか、樂書で揘ちたやうな雨戸の、節穴の下に柊の枝が落ちて居た……鬼も屆まねばなるまい、最ど低い屋根が崩れかゝつて、一日見ても空家である――又何うして住まれよう――お札も懸る家に在つては、軒を傳つて狗の通るやうに見えて物凄い。

フト立留まつて、此の茅屋を視めた夫人が、何と思つたか、主税と人違ひに小戻りして、洋傘を袖の下へ横へると、惜げもなく、髪で、件の暖簾を分けて、隣の紺屋の店前へ顔を入れた。

「御免なさいよ、御隣家の屋を借りたいんですが、」

「何でございますと、」

と、頓興な女房の聲がする。

「家賃は幾干でせうか。」

「あゝ、貞造さんの家の事かね。」

餘り思切つた夫人の擧動に、呆氣に取られて茫然とした主税は、（貞造。）の名に鋭く耳をそばだてた。

「空家ではございませぬが。」

「然う、空家ぢやないの、失禮。」

と肩の暖簾をはづして出たが、

「大照れ、大照れ、」

と言つて、莞爾して、

「早瀬さん、」

「……」

「人のことを、貴族的だなんのつて、いざ、と成りや私だつて、此のくらゐな事はして上げるわ。此の家ぢや、貴下だつて、借りたいと言つて聞かれないでせう。一寸、これでも家の世話が私に出来なくつて？」

さすがに夫人も是は離れ業であつたと見え、目のふちが颯と成つて、胸で呼吸をはずませる。

其の燃ゆるやうな瞳を凝と見て、やゝあつて、

「驚きました。」

「驚いたでせう、可い氣味、」

と嬉しさうに、勝誇つた色が見えたが、歩行き出さうとして、其の茅屋を最う一目。

「しかし樣が悪かつてよ。」

「何とも申しやうはありません。當座の御禮のしるし迄に……と先刻拾つて置いた菫色の手巾を出すと、默つて頷いたばかりで、取るやうな、取らぬやうな、歩行きながら肩が並ぶ。袖が擦合うたまゝ、夫人が未だ取られぬのを、離すと落ちるし、然うかと云つて、手はかけて居るから……引込めもならず……提げて居ると……手巾が隔てに成つた袖が觸れさうだつたので、二人が忙しく左右を見た、兩側の伏屋の、あゝ、何の軒にも怪しいお札の貌が……

# 貸小袖

## 十五

今來た郵便は、夫人の許へ、主人の島山理學士から、歸宅を知らせて來たのだらう……と何となく然う云ふ氣がしつゝ——三四日日和が續いて、夜に成つても最う暑いから——長火鉢を避けた食卓の角の處に、さすがに未だ端然と坐つて、傍の（若女部屋）で、主税は獨酌にして、ビール。

塀の前を、用水が流るゝために、波打つばかり、窓掛に合歡の花の影こそ搖れ搖れ通へ、涼しく人目は屆かぬから、縁の雨戸は開けたまゝで、心置なく飲めるのを、あれだけの酒好が、何爲か、夫人の居ない時は、硝子杯へ注ける口も苦さうに、差置いて、何うやら鬱ぐらしい。

襖が開いた、と思ふと、羽織なしの引掛帶、結目が摺つて、横に成つて、くつろいだ衣紋の、胸から、柔かにふつくりと高い、眞白な線を、讀みかけた玉章で斜めに仕切つて、衽下りに其の繰伸した手紙の片端を、北齋が描いた蹴出の如く、ぶる〳〵とぶら下げながら出た處は、そんじよ藝者の風がある。

「漸と寢かしつけたわ。」

と崩るゝやうに、ぱつたり坐つて、

「上の兒は、最う原つから乳母が好いんだし、坊も、久しく私と寢ようなんぞと云はなかつたんだけれども、貴下にかゝりつ切で構ひつけないし、留守にばつかりしたもんだから、先刻のあの取ッ着かれやうを御覽なさい。」

と手紙を見い〳〵忙しさうに云ふ。如何にも此處で膳を出したはじめには、小兒が二人とも母樣にこびりついて、坊やなんざ、武者振つく勢。目の見えない頃は、寂しさうに坐つた切で、顔に、夫人の膝から帶をかけて兩手で撫でるし、坊やは肩から負はれかゝつて、背ける顔へ頬を押着け、躱す顔の耳許へかじりつくばかりの甘え方。見るまにばら〳〵に鬢が亂れて、面影も痩せたやうに、口のあたりまで振りかゝるのを搔い拂ふ其の白やかな手が、空を攫んで悶えるやうで、（乳母來ておくれ。）と云つた聲が悲鳴のやうに聞えた。乳母が、（まあ、何でござります、孃ちやまも、坊つちやまも、お客樣の前で。）と主税の方を向いたばかりで、何時も孃さまかぶれの、眠つたやうな俯目の、顔を見よ

うとしないので、元氣なく微笑みながら、娘の兒の手を曳くと、雁々其は離れたが、坊やが何と云つても肯かなくつて、果は泣出して亂暴するので、時の間も座を惜しさうな夫人が、寢かしつけに行つたのである。

其處へ、しばらくして、郵便――だつた。

すら〳〵と讀果てた。手紙を卷戻しながら額を振上げると、亂れたまゝの後れ毛を、煩さゝうに搔上げて、

「つひぞ思出しもしなかつた、乳なんか飲まれて、散々骨を絞られたわ。」

と急いで衣紋を繕つて、

「さあ、お酌をしませう。」

瓶を上げると、邪慳。

「まあ、些とも召食らないのね。お酌がなくつては不可いの、一寸贅澤だわ。ほゝほゝ、家も極まつたし、一人で世帯を持つた時何うするのよ。」

「澤山頂きました、こんなに御厄介に成つては、實に濟みません……最う、徐々失禮しませう。」

と恐しく眞面目に云ふ。

「否、歸さない。此間から、お泊んなさいお泊んなさいと云つても、貴下が惡いと云ふし、私も遠慮したけれど、可いわ、最う泊つても。

今ね、御覽なさい、牛込に居る母樣から手紙が來て、早瀨さんが靜岡へお出なすつて、幸ひお知己に成つたのなら、精一杯御馳走をなさい、と云つて來たの。嬉しいわ、私。

あのね、實は是は返事なんです。汽車の中でお目にかゝつた事から、都合があつて此方で塾をお開きなさるに就いて、些とも土地の樣子を御存じぢやない、と云ふから、私がお世話をしてなんて、其處はね、可いやうに手紙を出したの、其の返事。」

と掌に卷き据ゑた手紙の上を、輕く一つ丁と拍つて、

「母樣が可い、と云つたら、天下晴れたものなんだわ。緩り召食れ。而して、是非今夜は泊るんですよ。其のつもりで風呂も沸してありますから、お入んなさい。寢しなにしますか、それとも颯と流してから喫りますか。どちらでも、最う沸いてるわ。そして、泊るんですよ。可くつて、」

念を入れて、やがて諾と云はせて、

「あゝ、昨日も一昨日も、合歡の花の下へ來ては、晩方寂しさうに歸つたわねえ。」

# 十六

扨て湯へ入る時、はじめて理學士の書齋を通つた。が、机の上は亂雜で、其處に据ゑた座蒲團も無かつた、早瀨に敷かせて居るのが其らしい。

机には、擴げたまゝの新聞も幅をすれば、小兒の玩弄物も乘つて、大きな書棚の上には、世帯道具が置いてある。

湯は、だゞつ廣い、薄暗い臺所の板敷を拔けて、土間へ出て、庇間を一跨ぎ、据風呂を此の空地から焚くので、雨の降る日は難儀さうた。

其處に蹈んで居た、例のつんつるてん鞠子の婢が、湯加減を聞いたが上鹽梅。

どつぷり沈んで、遙々で雨戸を繰る響、臺所をばた〳〵二三度行交ひする音を聞きながら、やがて洗ひ果てゝ又浴びたが、湯の設計は、此の邸に似ず古びて居た。

小灯の朦々と包まれた湯氣の中から、突然褌のなりで、下駄がけで出ると、颯と風の通る庇間に月が見えた。廂はづれに覗いただけで影さす程にはあらねども、只見れば尊き光かな、裸身に颯と白銀を鎧つたやうに二の腕あたり蒼ずんだ。

思はず打仰いで、

「あゝ、お妙さん。」

俯向いた肩がふるへて、

「お蔦！」
蹌踉いたやうに母屋の羽目に凭れた時、
「早瀬さん。」と、つい臺所に、派手やかな夫人の聲で、
「貴下、上つたら、此れにお着換へなさいよ。爰に置いときますから。」
「憚り。」
と我に返つて、上つて見ると、薄べりを敷いた上に、浴衣がある。琉球紬の書生羽織が添へてあつたが、それには及ばぬから浴衣だけ取つて手を通すと、裄短に腕が出て着心の變な事は、引上げても、引上げても、裾が摺るのを、引縮めて部屋へ戻ると……道理こそ婦物。中形模樣の媚かしいのに、藍の香が芬とする。突立つて見て居ると、夫人は中腰に膝を支いて、鐵瓶を掛けながら、
「似合つたでせう、過日谷屋が持つて來て、貴下が見立てゝ下すつたのを、直ぐ仕立てさしたのよ。島山のは未だ着へないし、あるのは古いから、我慢して寢衣に着て頂戴。」
「むざ〳〵新しいのを。」
と主税は袖を引張る。
「否、私、今着て見たの、お初ではありません。不遠慮なく、でも、お氣味が惡くはなくつて。一寸着たから。」
「氣味が惡い。」
「……」
「もんですか。勿體至極もござらん。」
と極つたが、何か未だ物足りない。
「帶ですか。」
「然やう。」
「これを上げませう。」
とすつと立つて、上〆をずるりと手繰つた、麻の葉絞の縮緬。
「……」
目を見合せ、
「可いわ。」
とはたと疊に落して、
「私も一風呂入つて來ませう。今の内に。」
主税はあとで座敷を出て、縁側を、十疊の客室の前から、玄關の橫手あたりまで、行つたり來たり、やゝ跫音のするまで步行いた。
婢が來て、ぬいと立つて、
「夫人が言ひましけえ、お涼みなさりますなら雨戸を開けるでござります。」
「否、宜しい。」
「はいゝ。」と念入りに返事する。
「何時も何時頃にお休みだい。」
と親しげに問ひかけながら、口不重寶な返事は待たずに、長火鉢の傍へ、つか〳〵と歸つて、紙入の中をざつくりと摑んだ。
「疾い事、最う紙に二個。」
「一個は乳母さんに、お前さんから、夫人に云はんのだよ。」

## 十七

寢たのは彼是一時。
膳は片附いて、火鉢の火の白いのが果敢ないほど、夜も更けて、寂と寒くなつたが、話に實が入つたのと、最う寢よう、最う寢ようで炭も繼がず。それでも火の氣が便りだから、横坐りに、褄を引合せては肩で押して、灰の中へ露はな肱も落ちるまで、火鉢の緣に凭れかゝつて、小豆ほどな火を拾ふ。……湯上りの上、晝間步行き廻つた疲れが出た菅子は、髮も衣紋も、帶も姿も萎えたやうで、顏だけは、ほんのりした——麥酒は苦くて嫌ひ、と葡萄酒を硝子杯に二ツばかりの——醉さへ醒めず、黑目は大きく睫毛が開いて、艷かに濕つて、唇の紅が濡れ膩く。手足は冷えたらうと思ふまで、頭に氣が籠つた樣子で、相互の話を留めないのを、餘り晩くなつては、又御家來衆が、變にでも思ふと不可ませんから、と其こそ、人に聞えたら變に思はれさうな事を、

早瀬が云つて、其れでも夫人の未だ話し飽かないのを、慇懃促しても肯入れなかつたが……火鉢で隔てゝ、柔かく乘出して居た肩の、衣の裏がするりと辷つた時、薄寒さうに、がつくりと頷くと見ると、早急にフイ立つ……。

膝に搦んだ裳が落ちて、蹌踉めく袖が、はらりと、茶棚の傍の襖に當つた。肩を引いて、胸を反らして、おつくらしく、身體で開けるやうにして、次室へ入る。

板廊下を一つ隔てゝ、其處に四疊半があるのに、床が敷いてあつて、小兒が二人背中合せに枕して、眞中に透いた處がある。乳母が兩方を向いて寢かし附けたらしいが、熟く寢入つて居て、乳母は居なかつた。

ト其處を通り越して、見えなく成つた切、襖も閉めないで置きながら、夫人は頃刻經つても來なかつた。

早瀬は灰に突込んだ堆い卷莨の吸殼を視めながら、あゝ、喫んだと思ひ、あゝ、饒舌つたと考へる。

其の話、と云ふのが、豫て約束で、あの、ギヨウテの（エルテル）を直譯的にと云ふ註文で、傳へ聞く、彼の大詩聖は、或時シルレルと葡萄の杯を合せて、予等が詩、年を經るに從ひて愈貴からむこと斯の酒の如くならむ、と誓つたさうだわね、と硝子杯を火に翳して其の血汐の如き紅を眉に宿して、大した學者でせう、などゝ夫人、得意であつたが、お酌が柳橋のでなくつては、と云ふ機掛から、エルテルは後日にして、まあ、題も（ハヤセ）と云ふのを是非聞かして下さい、酒井さんの御意見で、お別れなすつた事は、東京で兄にも聞きましたが、戀人は何うなさいました。厭だわ、聞かさなくつちや、と強ひられた。

早瀬は悉しく懺悔するが如く語つたが、都合上、爰では要を摘んで置く。……

義理から別離話になると、お蔦は、しかし二度藝者をする氣は無いから、幸ひめ組の惣助の女房は、島田が名人の女髪結。柳橋は廻り場で、自分も結つて貰つて懇意だし、め組とは又あゝ云ふ中で、打明話が出來るから、一層其の弟子に成つて髪結で身を立てる。商賣をひいてからは、いつも獨りで束ねるが、銀杏返なら不自由はなし、雛妓の桃割ぐらゐは慰みに結つて遣つて、お世辭にも譽められた覺えがある。出來ないことはありますまい、親もなし、兄弟もなし、行く處と云へば元の柳橋の主人の內、それよりは肴屋へ內弟子に入つて當分梳手を手傳ひませう。……何も心まかせ、と其に極まつた。此の事は、酒井先生も御承知で、內證で飯田町の二階で、直々に、お蔦に逢つて下すつて、其の志の殊勝なのに、つく〲頷いて、手づから、小遣など、いろ〲心着があつた、と云ふ。

其切、顏も見ないで、靜岡へ引込むつもりだつたが、め組の惣助の計ひで、不意に汽車の中で逢つて、横濱まで送る、と云ふのであつた。處が終列車で、濱が留まりだつたから、旅籠も人目を憚つて、場末の野毛の目立たない內へ一晩泊つた。

（そんな時は、）

と醉つて居た夫人が口を挾んで、顏を見て笑つたので、しばらくして、

（背中合せで、別々に。）

翌日、平沼から急行列車で乘り込んで、爾して夫人に逢つたんだと。……

## うつら〱

### 十八

中途で談話に引入れられて鬱ぐくらゐ、同情もしたが、藝者なんか、眞個にお止しなさいよ、

と夫人が云ふ。主税は、當初から醉はなきや話せないで陶然として居たが、然りながら夫人、日本廣しと雖も、私にお飯を炊いてくれた婦は、お蔦の他ありません。母親の顏も知らないから、噫、と喟然として天井を仰いで歎ずるのを見て、誰が赤い顏をしてまで、貸家を聞いて上げました、と流眄にかけて、ツンとした時、失禮ながら、家で命は繋げません、貴女は御飯が炊けますまい。明日は炊くわ。米を煮るのだ、と笑つて、それから其の花は咲いたのだつたが、しかし、君の事だ、可哀相に、と憐愍はしたけれども、徹頭徹尾、藝者はおよしなさい。）……此の後たとひ酒井さんのお許可が出ても、私が不承知よ。で、さて最う、夜が更けたのである。

出て來ない——夫人は何うしたらう。

がた／＼音がした臺所も、遠く成るまで寂寞して、耳馴れたれば今更めけど、戸外は數萬の蛙の聲、蛙、蛙、蛙、蛙と書いた文字に、一ツ／＼音があつて、天地に響くが如く、はた古戰場を記した文に、聲、聲、聲があつて、草と何と齊しく聲を放つて鳴くが如く、何となく雲が出て、白く移り行くに從つて、動搖を造つて、月が暗くなる氣勢がする。

時に湯氣の蒸した風呂と、庭園の月を思ふと、一生の道中記に、荒れた驛路の夜の孤旅が思出される。

渠は愁然として額を壓へた。

「何うぞお休み下さりまし。」

と例の俯向いた陰氣な風で、敷居越に乳母が手を支いた。

「いろ／＼お使ひ立てます。」

と直ぐにづツと立つて、

「何方ですか。」

「其處から、お座敷へ何うぞ……あの、先刻は又、」と頭を下げた。

寢床は其の、十疊の眞中に敷いてあつた。

枕許に水指と、硝子杯を伏せて盆がある。煙草盆を並べて、最う一つ、黒塗金蒔繪の小さな棚を飾つて、毛絲で編んだ紫陽花の青い花に、玉の丸火屋の殘燈を包んで載せて、中の棚に、香包を斜めに、古銅の香合が置いてあつて、下の臺へ鼻紙を。重しの代りに、女持の金時計が、底澄んで、キラ／＼星のやうに耀いて居た。

じろりと視めて、莞爾して、蒲團に乘ると、腰が沈む。天鵞絨の括枕を横へ取つて、足を伸して褄にかさねた、蒼縞の郡内に、桃色の縮の肩當てした搔卷を引き寄せる、手が辷つて、ひやりと輕くかゝつた裏の羽二重が燃ゆるやう。

トタンに次の書齋で、する／＼と帶を解く音がしたので、未だ横に成らなかつた主税は、搔卷の襟に兩肱を支いた。

乳母が何か云つたやうだつたが、其は聞えないで、派手な夫人の聲して、

「あゝ、此のまゝ寢ようよ。何うせ臺なしなんだから。」

と云つたと思ふと、隔ての襖の左右より、中ほどがスーと開いたが、此方の十疊の京間は廣し、向うの灯も暗いから、裳はかくれて、乳の下の衣紋が見えた。

「お休みなさい。」

「失禮。」

と云ふ。襖を閉めて扉を引いた。が、幻の花環一つ、黒髮のありし邊、宙に殘つて、消えずに俤に立つ。

主税は仰向けに倒れたが、枕はしないで、兩手を廻して、緊乎と後腦を壓いた。目はハツキリと瞬いて、失せやらぬ其の幻を視めて居た。

時過ぎる、時過ぎる、其の時の過ぎる間に、乳母が長火鉢の處の、洋燈を消したのが知れて、しつこは、しつこは、と小兒に云ふのが聞えたが、やがて靜まつて、時過ぎた。

早瀬は起上つて、棚の殘燈を取つて、縁へ出

た。其の廊下を抜けると又北向きの緣で、其の突當りに、便所があるのだが、夫人が寝てから、大廻りに玄關へ出て、椅子の婢の寝た裾を通つて、板戸を開けて、臺所の片隅の扉から出て、小用を足して、手を洗つて、手拭を持つと、夫人が湯で使つたのを掛けたらしい、冷く手に觸つて、ほんのり白粉の香がする。

## 十九

寝室へ戻つて、何か思切つたやうな意氣込で、早瀬は勢よく枕して目を閉ぢたが、枕許の香は、包を開けても見ず、手拭の移香でもない。活々した、何の花か、其薫の影はないが、透通つて、きら〳〵、露を揺つて、幽な波を描いて戀を囁くかと思はれる一種微妙な匂が有つて、搔卷の袖を辿つて來て、和かに面を撫でる。

其を搔拂ふ如く、目の上を兩手で無慚に引擦ると、ものゝ香は淡と枕に遁げて、緣側の障子の隙へ、音も無く潜んだらしかつたが、又……有りもしない風を傳つて、引返して、今度は輕く胸に乘る。

寝返りを打てば、袖の邊にふつと拂はれて、やがて次の間と隔ての、襖の際に籠つた氣勢、原の花片に香が戻つて、匂は一處に集つたか、薫が一入高く成つた。

快い、然りながら、強い刺戟を感じて、早瀬が寝られぬ目を開けると、先刻（お休みなさい。）を云つた時、菅子が其處へ長襦袢の褄模様を殘した、襖の中途の、人の丈の肩あたりに、幻の花環は、色が薄らいで、花も白澄んだけれども、未だ歴々と其に映る。

枕に手を支き、むつくり起きると、恰も其の花環の下、襖の合せ目の處に、殘燈の隈かと見えて、薄紫に疊を染めて、菫色の手巾が、悠然として落ちたのに心着いた。

薫は扨は其からと、見る〳〵、心ゆくばかりに思ふと、萌黄に敷いた疊の上に、一簇の菫が咲競つたやうに成つて、朦朧とした花環の中に、就中輪の大きい、目に立つ花の花片が、ひら〳〵と動くや否や、立處に翅にかはつて、蝶々に化けて、髪の黒い女の瞳が、其の同一處にちら〳〵する。

早瀬は、甘い、香しい、暖かな、とろりとした、春の野に横はる心地で、枕を逆に搔卷の上へ寝卷の腹ん這に成つて、蒲團の裾に乘出しながら、頬杖を支いて、恍惚した狀に其の菫を見てゐる內、上にたゝずむ蝶々と齊しく、花の匂が懐しくなつたと見える。

徐ら、手を伸して紫の影を引くと、手巾は其のまゝ手に取れた。……が菫には根が有つて、襖の合せ目を離れない。

不思議に思つて、蝶々がする風情に、手で猫の如く、手巾を揺動かすと、一寸ばかり襖が……開……い……た。

と見ると、手巾の片端に、紅の幻影が一條、柔かに結ばれて、夫人の閨に、する〳〵と繋つて居たのであつた。

菫が咲いて蝶の舞ふ、人の世の情の犯る折から、こんな處には、何時でも此の一條が落ちて居る、名づけて緣の絲と云ふ。禁斷の智慧の果實と齊しく、今も神の試みで、棄てゝ手に取らぬ者は神の兒となるし、取つて繋ぐものは惡魔の眷屬となり、畜生の淺猿しさとなる。是を夢みれば蝶となり、慕へば花となり、解けば美しき霞と成り、結べば恐しき蛇と成る。

如何に、此時。

隔ての襖が、より多く開いた。見る〳〵朱き蛇は、其の燃ゆる色に黄金の鱗の紋を立てて、菫の花を搔潜つた尾に、主税の手首を卷きながら、頭に婦人の乳の下を紅見せて噛んで居た。

颯と花環が消えると、横に枕した夫人の黒髪、後向きに、搔卷の襟を出た肩の邊が露に

見えた、殘燈は其の枕許にも差置いてあつたが、どちらの明でも、繋いだものゝ中は斷たれず。……

ぶる〳〵震ふと、夫人はふいと衾を出て、胸を壓へて、熟と見据ゑた目に、閨の内を眗して、茫としたやうで、未だ覺めやらぬ夢に、菫咲く春の野を徜徉ふ如く、裳も疊に漾つたが、稍あつて、はじめて其の怪しい投帶の我を纏へるに心着いたか、あ、と忍び音に、壓された、目の美しい蝶の顏は、仰向けに衾の中へ落ちた。

## 思ひやり

### 二十

妙子は同伴も無しに唯一人、學校がへりの態で、八丁堀に只ある路地へ入つて來た。

通ふ其の學校は、麹町邊であるが、何處を何う廻つたのか、眞砂町の嬢さんが此の邊へ來るのは、旅行をするやうなもので、野山を越えて遙々と……近所で温習つて居る三味線も、旅の衣はすゞかけの。

目で聞く如く、ぱつちりと、其の黒目勝なのを睜つたお妙は、鶯の聲を見る時と同一な可愛い顏で、路地に立つて眗しながら、橘に井げたの紋、塲の内講中のお札を並べた、上原と標だけの門札を視めて、單衣の襟を一寸合はせて、すつと其の格子戸へ寄つて、横に立つて、洋傘を支いたが、聲を懸けようとしたらしく、斜めに覗き込んだ顏を赤らめて、默つて俯向いて伏目に成つた。口許より睫毛が長く、日にさした影は小さく軒下に隱れた。

コト〳〵と其の洋傘で、爪先の土を叩いて居たが、

「御免なさい。」

と漸々云ふ、控へ目だつたけれども、朗に清しい、框の障子越にずつと透る。

中から能く似た、稍落着いた靜な聲で、

「はあ、誰方？」

お妙は自分から調子が低く、今のは聞えない分に極めて居たのを、すぐの返事は、些と不意討と云ふ風で、吃驚して顏を上げる。

「誰方、」

「あの……髮結さんの内は此方でせうか。」

「はい、此方でございますが。」と座を立つた氣勢に連れて、もの云ふ調子が嫋娜に成る。

と眞正面に内を透かして、格子戸に目を押附ける。

「何ぞ御用。」

と纔か透いて居た障子をすらりと開ける。粹で、品の佳い、しつとりした縞お召に、黒繻子の丸帶した御新造風の圓髷は、見違へるやうに質素だけれども、みどりの黒髮たぐひなさ、柳橋の小芳であつた。

立身で、框から外を見たが、こんな門には最明寺、思ひも寄らぬ令孃風に、急いで支膝に成つて、

「生憎出掛けて居りませんが、貴孃、何方樣でいらつしやいますか。歸りましたら、直ぐ上りますやうに申しませう。」

瞳も離さないで視めたお妙が、後馳せに會釋して、

「然う、でも、あの、誰方かおいでゞせう。内へ來て貰ふんぢやないの。私が結つて欲しいのよ。どうせ、こんなのですから、」

と指でも壓へず、惜氣なく束髮の鬢を揮つて、

「お師匠さんで無くつても可いんです。お弟子さんがお在なら、一寸結んで下さいな。」

縋つて頼むやうに他なく云つて、しつかり格子に攫まつて、差覗きながら、

「小母さんでも可いわ。」

我を（小母さん）にして髮を結つて、と云はれたので、我ながら忘れたやうに、心から美し

い笑顔に成つて、
「貴孃、まあ、どちらから。あの、御近所でいらつしやいますか。」
「否、遠いのよ。」
「お遠うございますか。」
「極遠だわ。」
「え、、」
「嘘ねえ、本郷のねえ、酒井といふの。」
「お孃樣、まあ、」
と土間に一足おろしさまに、小芳は、急いで框から開ける手が、戸に掴まつたお妙の指を、中から壓へたのも氣が附かぬか、駒下駄の先を、逆に半分踏まへて、片褄蹴出のみだれさへ、忘れたやうに瞻つて、
「お妙樣。」
「小母さんは、早瀬さんの……あの……お蔦さん？」

## 二十一

「入らつしやいまし、」
と小芳が太く更まつて、三指を突いた時、お妙は窮屈さうに六疊の上座へ直されて居たのである。
「貴孃、まあ、何うしてこんな處へ、唯た御一人なんですか。途中で何かございませんでしたか。お暑かつたでせうのに。唯今手拭を絞つて差上げます。」
と一齊に云ひかけられて、袖を胸で壓いで居た手を留めて、
「暑いんぢやないの。私、極が惡いから、それで以て、あの、」
と袂を額に當てゝ、鈴のやうな目ばかり出して、
「小母さんが、お蔦さん？」と低聲で又聞いた。
「あれ、何うしませう。餘り思懸けない方が、お見えなさいましたもんですから、私は狼狽て了つてさ。ほゝゝ、いふことも前後に成るんですもの、まあ、御免なさいまし。
私は……ぢやありません。其の……何でございますよ、お蔦さんが煩つて寢て居りますので、見舞に來たんでございます。」
「えゝ、御病氣」と寂慮しげに打傾く。
「はあ、久しい間、」
「澤山、惡くつて？」
「否、そんなでも無いやうですけれど、臥つて居りますから、お茶はあげられませんでせう。ですが、御緩り、まあ、なさいまし。此の頃では、お增さんも氣に掛けて、早く歸つて參りますから、眞個に……お孃さん、」

と擦寄つて、うつかりと見惚れて居る。
上框が三疊で、直ぐ次が此の六疊。前の縁が折曲つた處に、最う一室、障子は眞中で開いて居たが、閉つた蔭に、床があれば有るらしい。
向うは餘所の藏で行詰つたが、所謂猫の額ほどは庭も在つて、青いものも少しは見える。小綺麗さは、暢だくれには過ぎたりと雖も、お增といふ女房の腕で、然も若い。上原とあつた門札こそ、世を忍ぶ假の名でも何でもない、即ち是れめ組の住居、實は女髪結お增の家と云つて然るべきであらう。
惣助の得意先は、皆、渠を稱して恩田百姓と呼ぶ。註に不及、作取りの唯儲け、商賣で儲けるだけは、飲むも可し、打つも可し、買ふも可しだが、何が扨其で濟まうか。儲けを飲んで、資本で買つて、其から女房の衣服で打つ。
それお株がはじまつた、と見ると、女房はがち／＼と在りたけの身上へ錠をおろして、鍵を晝夜帶へ突込んで、當分商賣は爲せません、と仕事に出る。
トかますの煙草入に湯錢も無い。おなまめだんぶつ、座敷牢だ、と火鉢の前に縮まつて、下げ煙管の投首が、或時惡心增長して、鐵瓶を引外し、滿立つた湯を流へあけて、溝の湯氣の消

えぬ間に、茶蕎麥で一杯を極めた。

當時女房に斷當されたが、漸とよりが戻つて以來、金目な物は重箱まで殘らず出入先へ預けたから、家には似ない程度の疎末さ。何處を見てもがらんとして、間狹な内には結句蔭張して可さゝうなが、お妙は目を外らす壁張りの繪も無いので、連に袂を爪操つて、

「可いのよ、小母さん、髮結さんの許だから、極が惡いから然う云つて來たけれど、髮なんぞ結はなくつたつて構はなくつてよ。此とも私、結ひたくはないの、」

と投出したやうに云つて、

「早瀬さんの、あの、主税さんの奥さんに、私、お目にかゝれなくつて？」

「姉さん、」

ト、障子の内から。

「あい、」と小芳が立構へで、縁へ振向いて其方を見込むと、

「私、其處へ行つても可いかい？」

小芳が急いで繕つたひで、障子を向うへ押しながら、膝を敷居越に枕許。

枕についた束髮、半ば掻卷を藻脱けた姿の、空蟬のあはれな胸を、痩せた手でしつかりと、浴衣に襲ねた寢衣の襟の、はだかつたのを切なさうに掴みながら、銀杏返の鬢の崩れを、引結へた頭重げに、透通るやうに色の白い、鼻筋の通つた顔を、がつくりと肩につけて、吻と今呼吸をしたはお蔦である。

## 二十二

お蔦は急に起上つた身體のあがきで、寢床に添つた押入の暗い方へ顔の向いたのを、此方へ見返すさへ術なさうであつた。

枕から透く、其の細う縒れた背へ、小芳が密と手を入れて、上へ抱起すやうにして、

「切なくはないかい、お蔦さん、起きられるかい、お前さん、無理をしては不可いよ。」

「あゝ、難有う、」

と漸々起直つて、鉢卷を取ると、あはれなほど振りかゝる後れ毛を掻上げながら、

「何だか、骨が拔けたやうで可笑しいわ、氣障だねえ、ぐつたりして。」

と蓮葉に云つて、口惜しさうに力のない膝を緊め合はせる。

お妙は最う六疊の縁へ立つて來て、障子に摑まつて覗いて居たが、

「寢ていらつしやいよ、よう、然うしてお在なさいよ。私が其處へ行つてよ。」

と其まで遠慮したらしかつたが、さあと成ると、飄然と縁を切つて走込むばかりの勢――小芳の方が一目先へ御見の濟んだ馴染だけ、此の方が便りになつたか、薄くお太皷に結んだ黒繻子の其の帶へ、擦着くやうに坐つて、袖のわきから顔だけ出して、はじめて逢つたお蔦の顔を、瞬もしないで凝と視める。

肩を落して、お蔦が蒲團の外へ出ようとするのを、

「よう、然うしていらつしやいなね。そんなにして、私は困るわ。」

「はじめまして、」

と餘り白くて、血の通るのは覺束ない頸を下げて、手を支きつゝ、

「失禮でございますから、」

「よう、私困るのよ。寢て居て下さらなくつては。小母さん、然う云つて下さいな。」

と氣を揉んで、我を忘れて、小芳の背中を丁々と叩いて、取次げ、と急つて云ふ。

其の優しさが身に沁みたか、お蔦の手を緊乎握つた、小芳の指も震へつゝ、

「お蔦さん、可いから寢てお在な、お孃さんがあんなに云つて下さるからさ。」

「否、そんなぢやありません。切なければ直きに寢ますよ。お孃さん、難有う存じます。貴孃、

よくおいで下さいましたのね。而して、よく宅が知れましたわね。此の邊へは、滅多においでなさいましたことはございませんでせうにねえ。」

小芳は只今更感心したやうに熟々云つた。

「はあ、分らなくつてね。私、方々で聞いて極が惡かつたわ。探すのさへ、煩しいんですもの。何だか、あの、小母さんたちは、一寸は、あの、逢つて下さらなからうと思つて、私、心配ッたら無かつてよ。」

「私たちが……」

「何為でございますえ。」

と兩方へ身を開いて、お妙を眞中にして左右から、珍らしさうに顔を見ると、俯向きながら打微笑み、

「だつて私は、些ともお金子が無いんですもの。お茶屋へ行つて、呼ばなくつては逢へないのぢやありませんか。」

お蔦がハッと吐息をつくと、小芳は故と笑ひながら、

「怪我にもそんな事があるもんですか。其に、お蔦さんも、最う堅氣です。私が、何も……あの、尤も、私に逢はうとおつしやつて下すつたのではございませんが、」

と何為か、怨めしさうな、然も優しい目で瞻つて、

「私は何も、そんな者ぢやありませんのに。」

「厭よ、小母さん、私、兩方とも寫眞で見て知つて居てよ。」

と仇氣なく、小芳の肩へ手を掛けて、前髪を推込むばかり、額をつけて顔を隱した。

二人目と目を見合せて、

「極が惡い、お蔦さん。」

「姉さん、私は恥かしい。」

「最う……」

「あゝ、」

思はず一所に同音に云つた。

「寫眞なんか撮るまいよ、」――と。

## 二十三

お妙は時に、小芳の背後で、内證で袂を覗いて居たが、細い紙に包んだものを出して氣兼さうに、

「小母さん、あの、お蔦さんが煩つていらつしやる事は、私は知らなかつたんですから、お見舞ぢやないの、あのね、あの、お土産に、私、毛絲で何か編んで上げようと思つたのよ。

だけれども何が可いか、些とも分らないでせう。粋な藝者衆だから、ハイカラなものは不可いでせう。靴足袋も、手袋も、銀貨入も、そんなものぢや仕方が無いから、是をね、私、極が惡いけれども持つて來ました。小母さんから上げて頂戴。」

「お喜びなさいよ、お嬢さんが、」

「まあ、」

と嬉しさうに頂くのを、小芳が見い〳〵、蒲團へ膝を乘懸けて、

「何を下すつたい。」

「開けて見ても可いかね。」

「早く拜見おしなねえ。」

「あら！ 見ちや可厭よ、猾いわ、小母さんは。」

と背中へ推着いて、唯た今まで味方に賴んだのを、最う目の敵にして、小突く。

お蔦は病氣で氣も弱つて、

「遠慮しませうかね、」と柔順しく膝の上へ大事に置く。

「眞個に、お蔦さんは羨しいわね。」

と然も羨しさうに小芳が云ふと、お妙はツト打仰向いて、目を大きくして何か考へるやうだつたが、最一ッの袂から緋天鵞絨の小さな蝦蟇口を可愛らしく引出して、

「小母さん、是を上げませう。怒つちや不厭よ。」

澤山あると可いけれど、大な銀貨（五十錢）が三個だけだわ。

先の紙入の時は、お紙幣が……然うねえ……あの、四圓ばかりあつたのに、此の間落してねえ。」

と驚いたやうな顏をして、

「何うしようかと思つたの。だから些とぼかしだけれど、小母さん怒らないで取つといて下さいな。」

小芳が吃驚したらしい顏を、お蔦は振上げた目で眙と見て、

「あゝ、先生のお孃さん。……とも……角も……頂戴おしよ、姉さん、」

「お禮を申上げます。」

と作法正しく、手を支いたが、柳の髮の品の佳さ。頭も得上げず、聲が曇つて、

「何うぞ、此金で、苦界が拔けられますやうに。」

爾時お蔦も、いもと假名書の包を開けて、元氣よく奮んだ調子で、

「おゝ、半襟を……姉さん、江戶紫の。」

「主税さんが好な色よ。」

と喜ばれたのを嬉しげに、はじめて膝を横にずらして、蒲團にお妙が袖をかけた。

「姉さん、」

とお蔦は俯向いた小芳を起して、膝突き合せて居直つたが、頰を薄蒼う染むるまで其の半襟を咽喉に當てゝ、頤深く熟と壓へた、浴衣に映る紫榮えて、血を吐く胸の美しさよ。

「私が死んだら、姉さん、經帷子も何にも要らない、お孃さんに頂いた、此の半襟を掛けさしておくれよ、賴んだよ。」

と云ふ下から、桔梗を走る露に似て、玉か、はら〱と襟を走る。

「えゝ、お前さん、そんな、まあ、拗ねたやうな事をお言ひでない。お孃さんのお志、私、私なんざ、今頂いた御祝儀を資本にして、銀行を建てるんです。而して借金を返してね、綺麗に藝者を止すんだよ。」

と串戲らしく言ひながら、果敢ないお蔦の姿につけ、情にもろく崩折れつゝ、お妙を中に面を背けて、紛らす煙草の煙も無かつた。

小芳の心中、兎も角も、お蔦の賴み少ない風情は、お妙にも見て取られて、睫毛を闇に振はしつゝ、

「お醫者には懸つて居るの。」

「否、私も其の意見をして居た處でござんすよ。お醫者樣にも碌に診て貰はないで、藥も嫌ひで飮まないんですもの、貴女からも然う云つて遣つて下さいましな。」

と、はじめて煙草盆から一服吸つて、小芳はお妙の聲を聞くのを、樂しさうに待つ顏色。

# お取膳

## 二十四

爾時お妙の言と云ふのが、餘り案外であつたのから、小芳は慌しく銀の小さな吸口を擲いて煙管を棄てたのである。

「お醫者もお藥も、私だつて大嫌ひだわ。」

と至つて眞面目で、

「まづいものを服せて、而してお菓子を食べては惡いの、林檎を食べては不可いの、と種々なことを云ふんですもの。そんな事よりねえ、面白いことをしてお遊びなさいよ。」

小芳が（まあ。）と云ふ體で呆れると、お蔦は寂しさうな笑を見せて、

「お孃さん、其の貴孃、面白いことが無いんですもの。」と勢のない呼吸をする。

「主税さんに逢へば可いでせう。」

「え、」

「貴女、逢ひたいでせう。」

二人が默つて居ても、お妙は目まじろぎもしないで、

「私たつて逢ひたいつてよ。靜岡へ行つてから、全く一年に成るんですもの、隨分だと思ふわ、手紙も寄越さないんですもの。私は、餘りだと思つてよ。

皆のお清書をする時、硯を洗つてくれて、而して其の晩別れたのは、丁ど今月ぢやありませんか。其時の村若なんさ、最う私、嬰兒が描いたやうに思ふんですよ。隨分しばらくなんですもの、私だつて逢ひたいわ。」

と見る／＼睫にうるみを持つたが、活々した顏は撓まず、聲も凜々と冴えた。

「それですから、貴女も逢ひたからうと思つてねえ。實は私相談に來たの。最と早くから、來よう、來ようと思つたんだけれど、極が惡いしねえ、其に私見たやうなものには逢つて下さらないでせうと思つて、學校の歸りに幾度も九段まで來て止したの。

それでも、あの、築地から來るお友達に、此の邊の事を聞いて置いて、九段から、電車に乘るのは分つたの。だけどもねえ、一度萬世橋で降りて了つて、來られなくなつた事があるのよ。

其のお友達と一所に來ると、新富座の處まで教へて上げませうッて云ふんだけれど、學校で又何か言はれると惡いから、今日も同一電車に乘らないやうに、招魂社の中にしばらく居たら、男の書生さんが傍へ來て附着いて歩行くんですもの。私、斬られるかと思つて可恐かつたわ、ねえ、お僧の肉が藥に成ると云ふんでせう、ですもの、危いわ。

最う一生懸命に此處へ來て、まあ、可かつた、と思つてよ。

あのね、あの、」

と蓐の綴絲を引張つて、

「貴女も主税さんも、父さんに叱られて其で恁うして居るんだつて、可哀相だわ。私なら默つちや居ないわ、我儘を云つて遣るわ。だつて、自分だつて、母様が不可いと云ふお酒を飲んで仕様が無いんですもの。自分も惡いのよ。

貴女叱られたら、おあやまんなさいよ。而してね、父さんはね、私や母様の云ふ事は、其は、憎らしくつてよ、些とも肯かないけれど、人が來て頼むとねえ、何でも(厭だ。)とは言はないで、一々引受けるの。私ちやんと傳授を知つて居るから、其を知らせて上げたいの、貴女が御病氣で來られないんなら、小母さん、」

と隔てなく、小芳の膝に手を置いて、

「小母さんでも可うござんす。構はないで家へ入らつしやいよ。玄關の書生さんは嫌なお客樣をじろ／＼見るから極が惡かつたら遠慮は無いわ、ずん／＼庭の方から來らつしやい。

私がね、直ぐに二階へ連れてつて、上げるわ。然うするとねえ、母樣がお酒を出すでせう。私がお酌をして酔はせてよ。アハアハ笑つて、プンと響くやうな大な聲を出したら、而したら最う可いわ。

是非、主税さんを呼んで下さい。電報で――電報と云つて頂戴、可くつて。不可いとか何とか、父さんが然う云つたら、膝をつかまへて離さないの。而して、お蔦さんが寂しがつて、こんなに煩つていらつしやると云つて御覽なさい。あんなに可恐らしくつても、あはれな話だと直きに泣くんですもの、屹と承知するわ。

其のかはり、主税さんが歸つて來たら、日曜に遊びに行くから、而うしたらば、あの……」

と蓐の端につまつて、お蔦の顏を覗くやうにして、

「貴女も、私を可厭がらないで、一所に遊んで頂戴よ。前に飯田町に行きたくつても、貴女が隱れるから、どんなに遠慮だつたか知れないわ。」

最う二人とも泣いて居たが、お蔦は、はッと

面を伏せた。

## 二十五

涙を拂つて、お蔦が、

「姉さん、私は浮世に未練が出た。又生命が惜くなつたよ。皆さんに心配を懸けないで、今日からお醫師にも懸りませう、藥も服むよ。

お孃さん、最う早瀨さんには逢へなくつても、貴女がお達者でいらつしやいます内は、死にたくはなくなりました。」

と身を切めて、わな〳〵震へる。

「寒氣がするのねえ、さあ、お寢なさいよ、私が掛けて上げませう。」

掻卷の襟へ惜氣もなく、お妙が袖も手も入れて引くのを見て、

「あゝ、勿體ない。そんなに被成つては不可ません。皆が然うおつ無いつて言ひますけれど、私は色のついた痰を吐きますから、大切なお身體に、もしか、感染でもすると成りません。」

吃驚した顔の色も、颯と桃色なが心細い。

「可いわ！」

「可いわではござんせん。あれ、而して寒氣なんぞしませんよ、最う私は熱くつて汗が出るやうなんです、それから、姉さん、」

と小芳を見て、

「何ぞ……」

と云ふと、默つて頷く。

「來たらね、こんな處でなく、彼方へ行つて、お前さん、お孃さんと。」

「今日は私に任せておくれ。」

「否、」

「不可いよ、私がするんだよ。」

「お孃さん、あゝですもの。見舞に來て、一寸、病人を苛めるものがあつて、」

「無理ばつかり云ふ人だよ、私に理由があるんだから。」

「理由は私にだつて有りますよ。あの、過般もお前さんに話したらう。早瀨さんと別れて、恁ら成る時、煙草を買へ、とおつしやつて、先生の下すつた、其はね、折目のつかない十圓紙幣が三枚。勿體ないから、死んだらお葬式に使つて欲しくつて、お佛壇の抽斗へ紙に包んでしまつてある、其を今日使ひたいのよ、お孃さんに差上げて、而して私も食べたいから、」

と唯言ふのさへ病人だけ、遺言のやうに果敢なく聞えた。

「あゝ、そんなら然うおしな。どれ、大急ぎで、いひつけよう。」

「戸外は暑からうねえ。」

「何の、お蔦さん。お孃さんに上げるんだもの、無理にも洋傘をさすものか。」

「角の小間物屋で電話をお借りよ。」

「あゝ、知つてるよ。餘りあらくない中くらゐな處が好からうねえ。」

「私はヤケに大串が可いけれど、お孃さんは、」

「此處で皆一所に食べるんでなくつちや、厭。」

「お相伴しますとも、お取膳とやらで、」

と小芳が嬉しさうに云ふ。

「おや、私も大きいの。」

「感心、」

とお蔦が莞爾。

「驚きましたねえ。」

と立つ。

「御飯も一所よ。」

「あいよ、」

と框を下りる時、褄を取りさうにして、振向いた目のふちお顔はつたく、小芳は胸を抱いて、

格子をがら〳〵。

「お孃さん、」

とお蔦が懷しさうに、

「もと〳〵、然う云ふ約束で別れたんですけれど、私の方へも丸一年……些とも便がないんですよ。

人が教へてくれましてね、新聞を見ると、すつかり土地の様子が知れるツて言ひますから、去年の七月から此の國の民友新聞と云ふのを取りましてね、朝起きると直ぐ覗いて、もう見落しはしなからうか、と隙さへあれば、廣告まで讀みますんですが、些とも早瀬さんの事を書いてあつたことはありませんから、何うしてお在でだか分りません。

此頃ぢや落膽して、勢も張合も無いんですけれども、もしやにひかされては見て居ます。

唯た一度、早瀬さんのことを書いてあつたのがござんしてね、切拔いて紙入の中へ入れてありますから、今、お目に掛けますよ。」

## 二十六

お蔦は横に居直つて、押入の戸を右へ開ける、と上も下も佛壇で、一ツは當家の、自分でお蔦が守をするのは同居だけに下に在る。それも何となくものあはれだけれども、後姿で褄の萎えた、かよわい状は、物語にでもあるやうな。

直ぐに其の裳から、佛壇の中へ消えさうに腰が細く、撫肩がしをれて、影が薄い。

紙入の中は、しばらく指の尖で掻探さねば成らなかつたほど、可哀相に大切に蔵つて、小さく、整然と疊んで、濱町の清正公の出世開運のお札と一所にしてあつた、其の新聞の切拔を出す、とお妙は早や隔心も無く、十年の馴染のやうに、横ざまに膝に凭れながら、頭を伸して、衝構へて、

「一寸、どんなことが書いてあつて。又掏摸を助けたりなんか、不可ないことをしたのぢやないの。」

「否、まあ、貴女がお讀みなさいまし。」

「拜見な。」

と寢轉ぶやうにして、頰杖ついて、疊の上で讀むのを見ながら、拔きかけた、佛壇の抽斗を覗くと、其處に仰向けにしてある主税の寫眞を密と見て、ほろりとしながら、カタリと閉めた。

懷中へ、其の酒井先生恩賜の紙幣の紙包を取つて、佛壇の中に落ちた線香立ての灰を、フッフッと吹いて、手で撫でる。

戸外を金魚賣が通つた。

「何でせう。此の小使は、又可訝なものぢやないの。」

とお妙が顏を赤うして云ふ。新聞に書いたのは（ＡＢＣ横町。）と云ふ標題で、西の草深のはづれ、淺間に寄つた、最う郡部に成らうとする唯ある小路を、近頃渾名してＡＢＣ横町と稱へる。既に阿倍郡であるのだから語呂が合ひ過ぎるけれども是は獨語學者早瀬主税氏が、爰に私塾を開いて、朝から其の聲の絶間のない處から、學生が戯に誰が名づけたのが、一般に廣まつて、豆腐屋までがＡＢＣ横町と呼んで、土地の名物である。名物と云へば、最一ツ其の早瀬塾の若いもので、是が煮焚、拭掃除、萬端世話をするのであるが、通例なら學僕と云ふ處、粹な見習で、鼻唄を唄へばと云つても學問をするのでない。以前早瀬氏が東京で或學校に講師だつた、其處で知己の小使が、使つて來たものださうだが、俳優の聲色が上手で落語も行る。時々（入らつしやい、）と怒鳴つて、下足に札を通して通學生を驚かす、罪んだ愛敬もので、小使さん、小使さんと、有名な島山夫人をはじめ、近頃流行のやうに成つて、獨逸語を其の横町に學ぶ貴婦人達が、大分御贔屓である、と云ふ雜報の意味であつた。

小芳が、おゝ暑い、と云ひつゝ、いそ〳〵と歸つて來た。

話に其の小使の事も交つて、何であらうと三人が風説とり〴〵の中へ、へい、お待遠樣、と來たのが竹葉。

小芳が火を起すと、氣取氣の無いお孃さん、臺所へ土瓶を提げて出る。お蔦も次に連れて

踉蹌起きて出て、自慢の番茶を焙じ加減で、三人睦じくお取膳。

お妙が奈良漬にほうと成つた、額がほてると洗つたので、小芳が櫛毛を持つて、鬢とお化粧を直すと、お蔦がぐい、と櫛を拭いて一歯入れる。

苦勞人が二人がゝりで、妙子は品のいゝ處へ粋に成つて、又あるまじき美麗さを、飽かず視めて、小芳が幾度も恍惚氣抜けのするやうなのを、あゝ、先生に瓜二つ、御尤もな次第だけれども、傍り手放しで口惜いから、あとでいぢめて遣らう、とお蔦が思ひ設けたが、……あゝ、然りとては……

いづれ南觀には内證なんだから、と（おいしかつてよ。）を見得もなく門口でまで云つて、遲くならない内、お妙は八ツ下りに歸つた。路地の角まで見送つて、やゝあつて引返した小芳が、ばた〳〵と駈込んで、半狂亂に、犇と、お蔦に縋りついて、

「我慢が出來ない。我慢が出來ない。我慢が出來ない、あんな可愛いお孃さんにお育てになすつたお手柄は、眞砂町の夫人だけれど、産…産んだのは私だよ、私の子だよ、お蔦さん、身體へ觸つたら觸る度に、胸がうづいて成らなんだ、御覽よ、乳のはつたこと。」

と、手を引入れて引緊めて、わつとばかりに聲を立てると、思はず然と抱き合つて、

「あれ、確乎おし、小芳さん、癪が起ると不可いよ。私たちは何の因果で、」

藝者なんぞに成つたとて、色も諸分も知拔いた、いづれ名取の婦ども、處女のやうに泣いたのである。

# 小待合

## 二十七

「恁う〳〵、姐え、姐え、目を開いて口を利きねえ。尤も、くわつと開いた處で、富士も筑波も見えるか何うだか、覺束ねえ日だけれどよ。はゝ、いくら江戸前の肴屋だつて、玄關から怒鳴り込む奴があるかい。お客だぜ。お客樣だぜ。おい、お前の方で惣菜は要らなくつても、己が方で座敷が要るんだ。何を！　座敷が無え、古風な事を言ふな、藝者の霜枯ぢやあるめえし。」

と盤臺をどさりと横づけに、澄まして天秤を立てかける。微醉のめ組の惣助。商賣の歸途に又ぐれた――是だから女房が、内には鐵瓶さへ置かないのである。

立迎へた小待合の女中は、坐りもやらず中腰でうろ〳〵して、

「全くお生憎なんですよ。」

と入口を塞いだ前へ、平氣で、づんと腰を下ろして、

「見ねえ、身もんでえをする度に、どんぶりが鳴らあ、腹の蟲が泣くんぢやねえ、金子の音だ。びく〳〵するねえ。お望みとありや、千兩束で足の裏を撫いて通るぜ。」

とあげ底で、ボコポン靴をずぶりと脱いで、裝塵の此方へボカン。

聲が高いので最う一人、奧からばた〳〵と女中が出て來て、推重なると、力を得たらしく、以前の女中が、

「眞個にお前さん、お座敷が無いのですよ。」

「看板を下ろせ、」

と喚いて、

「座敷がなくば押入へ案内しねえ、天井だつて用は足りらい。やあ、御新規お一人樣あ、」

と尻上りに云つて、外道面の口を尖らす、相好鹽吹の面の如し。

「其方の姉は話せさうだな。うんや、矢張お座敷ござなく面だ。變な面だな。はゝはゝ、トおつしやる方が、餘り變でねえ面でもねえ。」

行詰つた鼻の下へ、握拳を捻込むやらに引擦つて、
「憚んながら恁う見えても、餘所行きの情婦があるぜ。待合へ來て見繕ひで拵えるやうな、べらぼうな長生をするもんかい。おう、八丁堀のめの字が來たが、の、の、承知か、承知か、と電話を掛けねえ。柳橋の小芳さん許だ。柏屋の綱次と云ふ美しいのが、忽然として顯れらあ。何うだ、驚いたか。銀行の頭取が肴屋に化けて來たのよ。いよ、御趣向！」
と變な手つき、にうと女中の鼻頭へ突出して、
「それとも半纏着は看板に障るから上げねえ、とでも吐かして見ろ。河岸から鯨を背負つて來て、汝ン許で泳がせるぞ、濱町界隈洪水だ。地震より恐怖え、屋根骨は浮上るぜ。」
　女中二人が目配せして、
「とも角お上んなさいまし、」
「何うにか致しますから。」
「何だ、何うにかする。格子で馴染を引くやうな、氣障な事を言やあがる。だが心底は見屆けたよ。いや、御案内引。」
　と黄聲を發して、どさり、と廊下の壁に打附りながら、
「何處だ、何處だ、さあ、持つて來い、座敷を。」
で、突立つて大手を擴げる。
「何うぞ此方へ、」
　と廊下で別れて、一人が折曲つて二階へ上る後から、どし／＼亂入。只ある六疊へのめずり込むと、蒲團も待たず、半股引の薄汚れたので大胡坐。
「御酒をあがりますか。」
「何升お燗をしますか、と聞きねえ。仕入れてあるんぢや追つくめえ。」
　女中が苦笑ひして立たうとすると、長々と手を伸ばして、据眼で首を振つて、チヨ、舌鼓を打つて、
「待ちな／＼。太夫前藝と仕つて、一ツ瀧の水を走らせる、」
　とふいと立つて、
「鷲尾の三郎案内致せ。鵯越の逆落しと遣れ。裏階子から便所だ、便所だ。」
　何處の夜講で聞いたさうな。

## 二十八

手水鉢の處へめ組はのつそり。里心のついた振られ客のやうな腰附で、中庭越に下座敷をきよろ／＼と眴したが、何處へ何んと見當附けたか、案内も待たず、元の二階へも戻らないで、唯ある一室へのつそりと入つて、襖際へ、どさりと又胡坐に成る。
　女中が慌しく駈込んで、
「まあ、何處へ入らつしやるんですか。」
　と、たしなめるやうに云ふと、
「此處にいらつしやら。は、は、心配するな。」
「困りますよ。隣のお座敷には、お客様が有るぢやありませんか。」
「構はねえ、一向構はねえ。」
「此方がお構ひなさいませんでも、彼方様で。」
「可いぢやねえか、お互だ。此んな處へ來て何も、向う様だつて遠慮はねえ。大家様の隱居殿の葬禮に立つとつてよ、町内が質屋で打附つたやうなものだ。一ツ穴の狐だい。己あ又、猫のさかるやうな高い處は厭だからよ。勘當された息子ぢやねえが、二階で寢ると魘されらあ。身分相當割床と遣るんだ。棟割に住んでるから、壁隣の賑かなのが賴もしいや。」
「不可ませんよ。そんなことをお言ひなすつちや、選好んで此のお座敷へ入らつしやらないだつて、幾らでも空いてるぢやありませんか。」
「空いてる！　恁う、唯た今座敷はねえ、お生憎だと云つたぢやねえか。氣障は言はねえ、氣障な事は云はねえから、默つて早く燗けて來ね

えよ。」

いひがゝりに止むを得ず、厭な顔して、

「ちや、御酒を上るだけになすつて下さいよ、お肴は？」

「肴は己が盤臺にあら。竹の皮に包んでな、斑鮭の鎌ン處があるから、其奴を燒いて持つて來ねえ。蔦ちやんが好だつたんだが、此の節ぢや何にも食けねえや。折角殘して歸つても今日も食ふめえ。」

と獨言に成つて、ぐつたりして、

「媽々に遣るんぢや張合が無え。燒いて來れえ、燒いて來ねえ。」

女中は、氣違かと危んで、怪訝な顔をしたが、試みに、

「而して綱次さんを掛けるんですか。」

「うんや、今度は此方がお生憎だ。些とも馴染でも情婦でもねえ。口說きやうに因つちや出來ねえ事もあるめえと思ふつよ。尤も惚れてるにや惚れてるんだ。待ちねえ、隣の室で口說いてら、然も二人かゝりだ。」

「一寸、」

と留めて姉さんは興さめ顔。

「此方は一人だ、今に來たら、お前も手傳つて口說いて哭んねえ。何だ、何だ、」と聞く耳立てて、

「純潔な愛だ。けつ、けつ、たあ何だい。」

と、襖にどしんと頬を當てゝ、

「蟻の戸渡で居やあがらあ、べらぼうめ。」

「やかましい！」

隣の室から堪りかねたか叱咤した。

「地獄だ！」

「あれ、」

と女中が留めようとする手も屆かず、ばたりめ組が襖を開けると、何時の間に用意をしたか、取つて捨てた手拭の中から腹掛を出た出刃庖丁。

「此の毛唐人めら、汝、何うするか見やあがれ。」

あツと云つて、眞前に縁へ遁げた洋服は——河野英吉。續いて駈出さうとする照陽女學校の教頭、宮畑閑耕の胸づくし、釦が引ちぎれて辷つた手で、背後から抱込んだ。

「其、其處に泣いていらつしやるたア大先生の孃樣でがせう。飯田町の路地で拜んで、一度だが忘れねえ。此奴等が此の地獄宿へ引張込んだのを見懸けたから、ちびり／＼遣りながら、癇の色ばなしを冷かしといて、ゆつくり揆らうと思つたが、勿體なくツて我慢ならねえ。酒井さんのお孃さん、私が恁うやつて居る處を、此處へ來て、此ン畜生打擲いてお遣んなせえ、お打ちなせえ、お打ちなせえ。

何うして又こんな處へ……何、八丁堀へおいでなすつてゝえゝ、お歸んなさる電車で逢つたら、二人で道歩きが怪しいから、教師の役目で檢べるツて、……沙汰の限りだ。

むゝ、此奴等、活かして置くんぢやねえけれど、娑婆で逢つた讐だ、盆に來て禮を云へ。」

と突飛ばすと、閑耕の飼つた身體が、縁側で、はあ／＼夢中になつて體操のやうな手つきで居た英吉に倒れかゝつて、脚が搦んで漾ふ處へ、チャブ臺の鉢を取つて、ぱらり天窓から酢を浴せた。惣助呵々と笑つて、大音に、

「鬼は外、鬼は外——」

## 道子

### 二十九

夫の所好で白粉は濃いが、色は淡い。淡しとて、容色の劣る意味ではない。秋の花は春のと違つて、艶を競ひ、美を誇る心が無いから、日向より蔭に、晝より夜、日よりも月に風情があつて、あはれが深く、趣が淺いのである。

河野病院長醫學士の內室、河野家の惣領

嬉、道子の俤は其であつた。

何の姉妹も活々して、派手に花やかで、日の光に輝いて居る中に、獨り慎ましやかで、しとやかで、露を待つ、月にあこがるゝ、芙蓉は丈の伸びても物寂しく、さした紅も、偏へに身躾らしく、裝つた衣も、鈴蟲の宿らしい。

何時も引籠勝で、色の香も夫ばかりが慰むのであつたが、今日は寺町の若竹座で、某孤兒院に寄附の演劇があつて、其に附屬して、市の貴婦人連が、張出しの天幕を臨時の運動場にしつらへて、慈善市を開く。謂ふまでもなく草深の妹は先陣承りの飛將軍。其處で此の會の殆ど參謀長とも謂つべき本宅の大切な母親が、生憎病氣で、然したる事では無いが、推して然う云ふ場所へ出て、氣配り心扱ひをするのは、甚だ豫後のために宜しからず、と醫家だけに深く注意した處から、自分で進んだ次第では無く、道子が出席することに成つた。——

六月下旬の事なりけり。

朝涼の内に支度が出來て、そよ／＼と風が渡る、袖がひた／＼と腕に靡いて、引緊つた白の衣紋着、腕車を彩る青葉の緑、鼈甲の中指に影が透く、艶かな圓髷で、誰にも似ない瓜核顏、氣高く颯と乘出した處は、きりゝとして、然も優しく、媚かず温柔して、河野一族第一の品。

嗜も氣風も此であるから、院長の夫人よりも、大居向の御新姐らしい。はたそれ途中一土手田畝道へかゝつて、青田越に富士の山に對した景色は、慈善市へ出掛ける貴女とよりは、淺間の社へ御代參の御守殿と云ふ風があつた。

腕車は病院所在地の横田の方から、此の田畝を越して、城の裏通を走つたが、突かけ若竹座へは行くのでなく、やがて西草深へ掛込んで、櫻椿は島山の門の、例の石橋の際に着く。

姉夫人は、餘り馴れない會場へ一人で行くのが頼りないので、菅子を誘ひに來たのであつたが、靜かな内へ通つて見ると、妹は影も見えず、小兒達も、乳母も書生も居ないで、長火鉢の前に主人の理學士が唯一人、下宿屋に居て寢坊をした時のやうに詰らなさうな顏をして、膳に向つて新聞を讀んで居た。火鉢に味噌汁の鍋か掛つて、未だ其が煮立たぬから、係らして待つて居るのである。

氣輕なら一番威かしても見よう處、姉夫人は少し腰を屈めて、縁から差覗いた、眉の柔な笑顔を、綺麗に、小さく疊んだ手巾で半ば隠しながら、

「お一人」

「やあ、誰かと思つた。」

と髭のべつたりした口許に笑は見せたが、御承知の人爲で、何うとも謂はぬ。姉夫人は、矢張半分隱れたまゝ、

「瀧ちやんや、透さんは。」

「母樣が出掛けるんで、跡を追ふですから、乳母が連れて、日曜だから山田（玄關の書生の名）もついて遊びです。平時だと御宅へ上るんだけれど、今日の慈善會には、御都合で貴女も出掛けると云ふから、珍らしくは無いが、又淺間へ行つて、豆か麩を食はしとるですかな。」

「では最う菅子さんは參りましたね。」

「先刻出たです。」

何爲待つてゝくれないのだらう、と云ふ顏色もしないで、

「あゝ、最つと早く來れば可うございました。一所に行つて欲しかつたし、それに四五日お來えなさらないから、瀧ちやんや透さんの顏も見たくつて。」

と優しく云つて本意なさゝう。一門の中に、此の人ばかり、一人も小兒を持たぬ。

## 三十

姉夫人の、其の本意無げな樣子を見て、理學士は、あゝ、氣の毒だと思ふと、此の人物だけ

に一層口重に成つて、言譯もしなければ慰めもせずに、希代にニヤリとして默つて了ふ。

と直ぐ出掛けようか、何うしようと、氣拔のした姿ら寂しく、姉夫人も言なく、手を掛けて居た柱を背に向直つて、黒塀越に、雲切れがしたやうに合歡の散つた、日曜の朝の青田を見遣つた時、ぶつ／＼騷しい鍋の音。

只見ると、むら／＼と湯氣が立つて、理學士が蓋を取つた、が餘程腹が空いたと見えて、

「失禮します。」と碗を手にする。

「お待ちなさいまし、煑詰りはしませんか。」

と肉色の絹の長襦袢で、縮緬の褄摺る音なひ、する／＼と長火鉢の前へ行つて、科よく覗いて見て、

「まあ、辛うござんすよ、これぢや。」

と銅壺の湯を注して、杓文字で一つ輕く壓へて、

「お裝け申しませう。」と艶麗に云ふ。

「恐縮ですな。」

と碗を出して、理學士は、道子が、毛一筋も亂れない圓髷の艶も溢さず、白粉の濃い襟を据ゑて、端然とした白襟、薄お納戸の其の紗綾形小紋の紋着で、味噌汁を裝ふ白々とした手を、感に堪へて見て居たが、

「御手を勞しますな、」

と一代の世辭を云つて、嬉しさうに笑つて、

「御馳走（とチウと吸つて）是は旨い。」

「人樣のもので義理をして。ほゝゝ、お土産も持つて參りません。」

其挨拶もせずに、理學士は箸もつけないで、ごツくごツく。

「非常においしいです。僕は味噌汁と云ふものは、鹽が辛くなきや湯を飲むやうな味の無いものだとばかり思うたです。今、貴女、干杓に二杯入れたですね。彼は汁を旨く喰はせる禁厭ですかね。」

「はい、お禁厭でございます。」

と云つた目のふちに、蕾のやうな微笑を含んで居たから。

「は、は、は、串戲でせう。」

「菅子さんに聞いて御覽なさいまし。」

「然う云へば貴女、最うお出掛けなさらなければなりますまいぞ。」

「は、私は些とも急ぎませんけれど、今日は名代も兼ねて居りますから、疾く參つてお手傳ひをいたしませんと、又菅子さんに叱言を言はれると不可ません——最う其では、若竹座へ參つて居ります時分でせうね。」

「うんえ、」

頰ばつた飯に籠つて、變な聲。

「道寄をしたですよ。貴女是からおいでなさるなら、早瀨の許へお出でなさい、彼處に居ませうで。」

「しますと、あの方も御一所なんですか。」

「一所ぢやないです。早瀨があゝ言ふ依怙地もんですで。半分馬鹿にして居て、孤兒院の義捐なんざ贊成せんです。今日の會へも出んと云ふさうで。其を是非說破して引張出すんだと云ひましたから、今頃は盛に長紅舌を弄して居るでせう、は、はゝ。」

と調子高に笑つて、厭な顏をして、

「行つて見て下さらんか。貴女、」

「はい、」

と何爲か俯向いたが、姉夫人は其のまゝしとやかに別れの會釋。

「又逢違ひになりませんやうに、それでは御飯を召食りかけた處を、失禮ですが、」

「いや、最う濟んだです。」

其の日は珍らしく理學士が玄關まで送つて出た。

絹足袋の、靜な疊ざはりには、客の來たのを心着かなかつた鞠子の婢も、旦那樣の踏み

しだいに出る跫音に、ひよつこり臺所から顏を見せる。

「今日は、」

と少し打傾いて、姉夫人が、物優しく聲をかける。

「ひやあ、」と打魂消て棒立ちに成つたは、出入りをする、貴婦人の、自分にこんな樣子をしてくれるのは、ついぞ有つた驗が無いので。

車夫が門外から飛込んで來て駒下駄を直す。

「ＡＢ横町でしたかね。彼處へ廻りますから、」

「へい、へい、へロペロの先生の。」と心得たるものである。

三十一

早瀬は、妹が連れて父の住居へも來れば病院へも二三度來て知つて居るが、新聞にまで書いた、雜の(小使)と云ふ卅使はどんなであらう、男世帶だと云ふし、他に人は居ないさうであるから、取次には屹と其の(小使)が出るに違ひない、と籠勝な道子は面白いものを見もし聞きもするやうな、物珍らしい、樂しみな、時めくやうな心持もして、早や大巖山が眼に近い、西草深のはづれの町、前途は直ぐに阿倍の安東村に成る——近來評判のＡＢ横町へ入ると、前庭に古びた黑塀を廻らした、平屋の行詰つた、それでも一軒立ちの門構、低く傾いたのに、獨逸教授、と看板だけ新しい。

腕車を待たせて、立附けの惡い門をあければ、女の足でも五歩は無い、直き正面の格子戸から物靜かに音づれたが、あの調子なれば、話聲は早や聞えさうなもの、と思ふ妹の聲も響かず、可厭な顏をして出て來よう、と思つた其の(小使)でもなしに、車夫の所謂へろ／＼の先生、早瀬主稅、左の袖口の綻びた廣袖のやうな絣の單衣でひよいと出て、顏を見ると、是は、とばかり笑み迎へて、さあ、此方へ、と云ふのか、座敷へ引返す途中に成るまで、氣疾に引込んで了つたので、左右の暇も無く、姉夫人は鶴が山路に蹈迷つたやうな形で、机だの、卓子だの、算を亂した中を拾つて通つた。

菅子さんは、と先づ問ふと、未だ見えぬ。が、孰れお立寄りに相違ない。今にも威勢の可い駒下駄の音が聞えませう。格子がからりと鳴ると、立處に此の部屋へ、お姿が露れますからお休みなさりながらお待ちなさい、と机の傍に坐り込んで、煙草を喫まうとして、打棄つて、フイと立つて蒲團を持出すやら、開放しませう、と障子を押開いたかと思ふと、此方の庭が最う些とあると宜しいのですが、と云ふやら。軟らかつて居りまして、と床の間の新聞を投り出すやら、火鉢を押出して突附けるかとすれば、何だ、熱いのに、と急いで又揩らすやら。何故か見苦しいほど慌しい氣で、蜘蛛の圍をかけるやうに煩く夫人の居まはりを立ちつ居つ。間には口を續けて、能く入らつしやいました、ようこそおいで、思ひがけない、不思議な御方が、不思議だ、不思議だ、と絶えず饒舌つたのである。

「まあ、まあ、何うぞ、何うぞ、」

と其の中に落着いた夫人もつい、口早に成つて、額を擡上げながら、些と胸を反らして、片手で煙を拂ふやうな樣をした。

早瀬は其の時、机の前の我が座を離れて、夫人の背後に突立つて居たので、上下に顏を見合はせた。餘り騷がれたためか、内氣な夫人の顏は、瞼に色を染めたのである。

と、早瀬は人間が變つたほど、落着いて座に返つて、徐に卷煙草を取つて、まだ吸ひつけないで、ぴたりと片手を膝に支いた、肩が聳えた。

「夫人、貴女は是から慈善市へ入らしつて、貧者のためにお働きなさるんですねえ。」

と沈んで云ふ。

顏を見詰められたので、睫毛を伏せて、

「はい、ですが私は唯お手傳ひでございます。」

「お願ひがございます。」

と締るが如く、主税がはたと兩手を支いた。

餘り以外な事の體に、答ふる術なく、默つて凝視に見て居たが、果しなく頭も擡げず、突いた手に疊を摑んだ夢慮しさに、棄ても置かれぬ氣に成つて、

「貴下、まあ、更まつて何でございますの。」

とは云つたが、思入つた人の體に、氣味惡くもなつて、遁腰の膝を浮かせる。

「失禮な事を云ふやうですが、今日の催はじめ、貴女方のなさいます慈善は、博くまんべんなく、情をお懸けに成りますので、旱に雨を降らせると同樣の手段。萎えしぼんだ草樹も、其の惠に依つて、蘇生るのでありますが、然し其は、實に大無邊な自然の力でなくつては出來ない事で、人間業ぢや、なか〳〵燒石へ如露で灑懸けるぐらゐに過ぎますまい。」

## 三十二

「廣く行渡るばかりを望んで、途中で霧消えに成るやうな情を掛けずに、其の惠の露を濺へて、唯一つのもの〻根に灑いで、名もない草の葉をだけも、蒼々と活かして頂きたい。

大勢寄つてなさる仕事を、貴女方、各々御一人宛で、專門に、完全に、一人を救つて下さるわけには參りませんか。力が餘れば二人です、三人です、五人ですな。餘所の子供の世話を燒く隙に、自分の兒に風邪を感かせないやうに、外國の奴隸に同情をする心で、御自分のお使ひに成る女中を勦つて遣つて欲しいんですが、是ぢや大摑みのお話です、何も其を彼此申上げるわけでは無いのです。

處が、差當り、今日の前に、貴女の一雫の涙を頂かないと、死んでも死に切れない、あはれな者があるんです。

此の事に就きましては、私は夜の目も合はないほど心を苦めまして。」

と漸々少し落着いて、

「前から、貴女の御憐愍を願はうと思つて居たんですけれど、島山さんのと違つて、貴女には輕々しくお目に懸る事も出來ませんし、然うかと云つて、打棄つて置けば、取返しの成りません一大事、何うしようかと存じて居りました處へ、實に何とも思ひがけない、不思議な御光來で、殊に其が慈善會に入らつしやる途中などは、神佛の引合はせと申しても宜しいのです。

何うぞ、其の、遍く、御施しに成らうと云ふ如露の水を一雫、一滴で可うございます、私の方へお配分なすつてくださるわけには參りませんか。

御存じの風來者でありますけれども、早瀬が一生の恩に被ます。」

と拳を握り緊めて云ふのを、半ば驚き、半ば呆れ、且つ恐れて聞いて居たやうだつた、重かつた夫人の眉が、此に至ると微笑に開けて、深切に、しかし躾めるやうな優しい調子で、

「お金子が御入用なんでございますか。」

と胸へ、しなやかに手を當てたは、次第に依つては、直にも帶の間へ辷つて、懷紙の間から華奢な（嚢物）の動作である。道子は屢々妹の口から風說されて、其の暮向を知つて居た。

ト早瀬の聲に力が入つて、

「金子にも何にも、私が、自分の事ではありません。」

「まあ、失禮な事を云つて、」

と襟を合はせて面を染め、

「何うしませう私は。では貴下の事ではございませんので。」

「えゝ、勿論、救つて頂きたい者は他にあるんです。」

「何うぞ、その、其は島山のに御相談下さいま

し。私も父出來ますことなら、蔭で――お手傳ひいたしませうけれど、河野醫學士が、喧しうございますから。」

……と俯向いて物寂しう、

「私が自分では、何うも計ひ兼ねますの。其には不調法でもございますし、何も、妹の方が馴れて居りますから。」

「否、貴女で無くては不可んのです。ですから途方に暮れます。其の者は、其に最う死にかゝつた病人で、翌日も待たないと云ふ容體なんです。

六十近い老人で、孫子は固より、親類らしい者もない、全然やもめで、實際形影相弔ふと云ふ其の影も、破蒲團の中へ消えて、骨と皮ばかりの、其の皮も貴女、褥摺れに摺切れて居るぢやありませんか。

日の光も見えない目を開いて、其で唯一目、唯一目、貴女、夫人の顔が見たいと云ひます。」

「えゝ、」

「御介抱にも及びません、手を取つて頂くにも及びません、言をお交はし下さるにも及びません、申すまでもない、金錢の御心配は決して無いので。眞暗な地獄の底から一目貴女を拜むのを、佛とも、天人とも、山の端の月の光とも思つて、一生の思出に、莞爾したいと云ふのですから、お聞届け下さると、實に貴女は人間以上の大善根をなさいます。夫人、大慈大悲の御心持で、此の願ひをお叶へ下さるわけには參りませんか、十分間とは申しません。」

と、じり〳〵と寄ると、婦夫人、思はず膝を進めつゝ、

「何處の、どんな人でございますの。」

「直き此の安東村に居るんです。貞造と申して、以前御宅の馬丁をしたもので、……夫人、貴女の、實の……御父上……」

## 三十三

「其の……手紙を御覽なさいましたら、最うお疑はありますまい。其は貴女の御父上、英臣さんが、御出征中、貴女の母樣が御宅の馬丁貞造と……」

早瀨は一寸言を切つて……夫人が其時、わなゝきつゝ持つ手を落して、膝の上に飜然と一葉、半紙に書いた女文字。其の玉章の中には、恐ろしい言葉が塗籠んでゞもあつたやうに、眞蒼に成つて、白襟にあはれ口紅の色も薄れて、頤深く差入れた、俤を屹と視て、

「……などゝ云ふ言だけも、貴女方のお耳へ入れられる筈のものぢやありません、けれども、差迫つた場合ですから、繕つて申上げる暇もありません。

で、其のために貴女がおできなすつたんで、まだお腹にいらつしやる間には、貴女の母樣が水にもしようか、と云ふ考へから、土地に居ては、何かにつけて人目があると、以前、母樣をお育て申した乳母が美濃安八の者で、――唯今島山さんの玄關に居る書生は孫ださうです。其處へ始末を爲に行つてお在なすつた間に、貞造へお遣はしなすつたお手紙なんです。

馬丁はして居たが、貞造は然るべき族を食んだ舊藩の御馬廻の倅で、若氣の至りぢやあるし、附合ふものが附合ふものですから、御主人の奥樣と出來たのを、嬉しい紛れ、鼻で指をさして、つい酒の上ぢや惚氣を云つた事もあるさうですが、根が惡人ではないのですから、兒をなくすと云ふ恐しい相談に震ひ上つて、其の位なら、御身分をお棄てなすつて、一所に逃げておくんなさい。お背入れ無く、思切つた業をなさりや、表向きに坐込む、と變つた言種を爲たために、奥さんも思案に餘つて、氣を揉んで居なすつた處へ、思ひの外用事が早く片附いて、英臣さんが凱旋でせう。腹帶には些と間が在つたもんだから、其なりに日が經つて、貴女は九

月兒でお在なさる。

「おゝ、世間ぢや、あゝ、よくお育ちなすつた、河野さんは、お家が醫者だから。……然うで無いと、大抵九月兒は育たんものだと申します。又舊弊な連中には、戰爭で人が多く死んだから、生れるのが早い、と云つたさうです。

名譽に、とお思ひなすつたか、其とも最初の御出産で、お喜びの餘りか、英臣さんは現に貴女の御父上だ。

貞造は、無事に健かに産れた兒の顏を一目見ると、安心をして、貴女の七夜の御祝ひに醉つたのがお殘懷で、お暇を頂いて、お邸を出たんです。

朝晩お顏を見て居ちや、又どんな不了簡が起るまいものでも無い、と云ふ遠慮と、其に肺病の出る身體、若い内から傳癆質があつたさうで。勞々お邸を出ると成ると、力業は出來ず、然らかと云つて、其の時分は未だ達者だつた、阿母を一人養はなければ成らないもんですから、奥さんが手切なり心着なり下すつた幾干かの金子を資本にして、初めは淺間の額堂裏へ、大弓場を出したさうです。

幸ひ商賣が的に當つて、何うにか食つて行かれる見込みのついた處で、女房を持つたんですがね。いや、罰は覿面だ。境内へ參詣か、ゝつて居た、見世物師と密通いて、有金を攫つて逃げたんです。然も貴女、女房が孕んで居たと云ふぢやありませんか。」

「まあ、」

と、夫人は我知らず嘆息した。

「忌々しい、と其處で大弓の株を賣つて、今度は安東村の空地を安く借りて、馬場を拵へて、貸馬を行つたんですな。

貴女、其こそ乳母日傘で、お淺間へ參詣に行らしつた歸り途、圓い竹の埒に掴つて、御覽なすつた事もありませう。道々お摘みなすつた蒲草なんぞ、馬に投げて遣つたりなさいましたのを、貞造が知つて居ます。

阿母が死んだあとで、段々馬場も寂れて、一時に二頭斃死た馬を賣つて、自棄酒を飲んだのが、最う飲仕舞で。米も買へなくなる、粥も薄くなる。漸と馬小屋へ根太を打附けたので雨露を凌いで、今も其處に居るんですが、馬場のあとは紺屋の物干に成つたんです。……」

## 三十四

「私は不思議な縁で、去年靜岡へ參つて……

然も其の翌日でした。島山さんのと、淺間を通つた時、茶店へ休んで、其の貞造に逢つたんです。それから恁う云ふ秘密な事を打明けられるまで、懇意に成つて、唯今の處ぢや、是非貴女のお耳へ入れなくつては成りませんほど、老人危篤なのでございます。

私でさへ、是は一番貴女に願つて、逢つて遣つて頂きたいと思ひましたから、今迄幾度か病人に勸めても見ましたけれども、否々、何にも御存じない貴女に、恁う云ふ事をお聞かせ申すのは、足を取つて地獄へ引落すやうなもの。あとぢや月も日も、貴女のお目には暗くならう。お最惜い、と貞造が頭を掉ります。

道理だと控へました。尤も私も及ばずながら醫師の世話もしたんです、藥も飲ませました。名高い醫學士でお在なさるから一ッ河野さんの病院へ入院しては何うか、餘所ながらお道さんのお顏を見られようから、と云ひましたが、以ての外だ、と肯きません。

清い者です。

人の惡い奴で御覽なさい、對手が貴女の母樣で、其のお手紙が一通ありや、貞造は一生涯朝から刺身で飲めるんですぜ。

又些とでも強請がましい了見があつたり、一錢たりとも御心配を掛けるやうな考へがあるんなら、私は誓つて口は利かんのです。

然うぢや無い！唯一目拜みたいと云ふ、其さへ我慢に我慢をし扱いた、其もです……老人自分ぢや、未だ治らないとは思つて居なかつたからなので。煎じて飲むのがまだるッこし、藥鍋の世話をするものも無いから、藥だと云ふ芭蕉の葉を、青いまんまで嚼つたと言ひます――

其の元氣だから、何うか恁うか藥が利いて、一度なんざ、私と一所に安倍川へ行つて餅を食べて茶を喫んで歸つた事もあつたんですが、其がいゝめを見せたので、先頃から又とッと褥に着いて、今は斷念めた處から、貴女を見たい、一目逢ひたいと、現に言ふやうに成つたんです。

容體が容體ですから、何うぞ息のある内にと心配をして居たんですが、人に相談の出來る事ぢやなし、御宅へ參つてお話をしようにも、こりや貴女と對向ひでなくつては出來ますまい。

失禮だけれども、御主人の醫學士は、非常に貴女を愛して在らつしやるために、恐ろしく嫉妬深い、と島山さんのに、聞きました。

殆ど當惑して居た處へ、今日のおいでは實に不思議と云つても可い。一言（父よ。）とおつしやつて、と其までも望むんぢや無いのです。彌陀の白光とも思つて、貴女を一目と、云ふのですから、逢つてさへ下されば、其こそ、あの、屋中眞黑に下つた煤も、藤の花に咲きかはつて、其の紫の雲の中に、貴女のお顏を見る嬉しさは何んなでせう。

然うなれば、不幸極まる、あはれな、情ない老人が、却つて百萬人の中に一人も得られない幸福なものと成つて、明かに端麗な天人を見ることを得て、極樂往生を遂げるんです、――奧さん。」

と云つた主税の聲が、夫人の肩から總身へ浸渡るやうであつた。

「貞造は、貴女の實の父親で、又或意味から申すと、貴女の生命の恩人ですよ。」

「は……い。」

「會は混雜しませう。若竹座は大變な人でせう。其に夜も更けると申しますから、人目を紛らすのに仔細ありません。得難い機會です。私がお供をして、一寸見舞に參るわけには參りませんか。」

と片手に燐寸を持つたと思ふと、片手が衝と伸びて猶豫はず夫人の膝から、古手紙を、ト引取つて、

「一度お話した上は、たとひ貴女が不承知でも、最うこんなものは、――」

と擦と火を摺ると、ひら〳〵と燃え上つて、蒼くなつて消えた。が、靡きかゝる煙の中に、夫人の顏がちら〳〵と動いて、何となく、髪はれて膝も搖ら搖ら。

居住を直して、更まつて、

「お連れ下さいまし、何うぞ。」

から〳〵と格子の開く音。それ、言はぬことか、早や座に見えた菅子の姿。眩いばかりの裝いで、坐りもやらず、

「まあ、姉さん！」

## 私語

### 三十五

「最う遲いわ、姉さん、早く行らつしやらないでは、何をして居るの、」

と菅子は立つたまゝで急込んで云ふ。戸外の暑さか、駈込んだ所爲か、赫と逆上せた顏の色胸打騷ける姉夫人、道子が却つて物靜かに、

「先刻から待つて居たんですよ。」

「待つて居たつて、私は方々に用があるんだもの、早々と行つて下さらないぢや、」

「何ですねえ、邪險な、和女を待つて居たんですよ、來がけに草深へも寄つたのよ、一所に連

れて行つて欲しいと思つて。——さあ、其では行きませうね。」
「私は用があるわ。」
「寄道をするんですか。」
「ちや……無いけども、是から、此の早瀬さんと一議論して、何でも慈善會へ引張り出すんですから手間が取れてよ。」
と未だ坐りもせぬ。
主税は腕組をしながら、
「はゝはゝ、まあ、貴女も、お聞きなさい、お菅さんの議論と云ふのを。いくら僕を説いたつて、何にもなりやしないんですから。」
「承はつて參りませうか。」
と姉夫人が立ちかけた膝を又据ゑて、何となく殘惜さうな風が見えると、
「早く行らつしやらなくつちや……私は可いけれども、姉さん、貴女は兄さん(醫學士)がやかましいんだもの、面倒よ。」
と見下ろす顏を、斜めに振仰いだ、蒼白い姉の顏に、血が上つて、颯と成つたが、寂しく笑つて、
「よゝ、然うね、私は前に參りませう。會場の樣子は分らないけれど、別にまごつくやうな事はありますまいから。」
とおとなしく坐つて、端然と會釋して、
「お邪魔をいたしましてございます。」と一寸早瀬の目を見たが、——雙方で瞬きした。
「まあ、御一所が宜しいぢやありませんか。お菅さんも然うなさい。」
「否、然うしては居られません、最つと、」
と聲に力が籠つて、
「種々お話を伺ひたう存じますけれども……」
「私も、直だわ。」
「待つて居ますよ。」
と優しい物越、悄々と出る後姿。主税は玄關へ見送つて、身を蔽にして、密と其の袂の端を扣へた。
「然やうなら!」
勢よく引返すと、早や門の外を轆轆として腕車が行く。
「暑い、暑い、何うも大變に暑いのね。」
菅子は最う其處に、袖を輕く坐つて居たが、露の汗の惱ましげに、朱鷺色縮緬の上〆の端を寛めた、邊は夏草の盛りのやうで、明い部屋に白々地な、衣ばかりが冷しい蔭。
「久振だわね。」
「久振ぢや無いぢやありませんか。今の言種は何です、ありや。……姉さんにお氣の毒で、傍で聞いて居られやしない。」
「だつて事實だもの。病院に入切で居ながら、何時の何時には、姉さんが誰と話をしたツて事、不殘旦那樣御存じなの、最う思召つたら無いんですからね。
其でも大事にして置かないと、院長は家中の稼ぎ人で、すつかり經濟を引受けてるんだわ。お庇樣で一番末の妹の九ッに成るのさへ、早や、ちやんと嫁入支度が出來てるのよ。
道樂一ッするんぢやなし、唯、姉さんを樂みにして働いて居るんですからね。些とでも怒らしちや大變なのだから、貴下も氣をつけて下さらなくつちや困るわ。」
「何を云つてるんです、面白くもない。」
「今の樣子ッたら何です、厭に御懇ね。而して肩を持つことね。油斷もすきも成りはしない。」
「可い加減になさい。串戲も、」
「だつて姉さんが、どんな事があればつたつて、男と對向ひで五分間と居る人ぢやないのよ。貴下は口前が巧くつて、調子が可いから、だから坐り込んで居るんぢやありませんか。眞個に厭よ。貴下浮氣なんぞしちや、最う、澤山だわ。」
「まるで是や、人情本の口繪のやうだ。何です、對向つた、此の體裁は。

## 三十六

しめやかな聲で、夫人が――

「貴下……何うするのよ。」

「……」

「私が是ほど願つても、未だ妙子さんを兄さん(英吉)には許してくれないの。今までにもどんなに頼んだか知れないのに、それぢや貴下、餘りぢやありませんか。

去年から口說通しなんだわ。貴下がはじめて、靜岡へ來て、私と知己に成つたと云ふのを聞いて、(精一杯御待遇をなさい。)ツて東京から母さんが手紙で然う云つて寄越したのも、酒井さんとの緣談を、貴下に調へて頂きたければこそだもの。

母さんだつて、何のくらゐ心配して居るか知れないんだわ。此方から結婚を申込んで刎ねられるなんて、そんな事――河野家の不名譽よ、恥辱ツたらありませんものね。

兄さんも、どんなにか妙子さんを好いて居ると見えて、一體が遊蕩過ぎる處へ、今度の事ぢや失望して、自棄氣味らしいのよ、遣り方が。自分で自分を酒で殺しちや、脈ぢやありませんか、まあ、」

と一際低聲で、

「一寸、如何な事でも小待合へなんぞ倒込むんですつて。監督の叔父さんから內々注意があるもんだから、最う疾くに兄さんへは家でお金子を送らない事にして、獨立で遣れツて名義だけれども、其の實、勘當同樣なの。

此頃ぢや北町(桐楊塾)へも寄り着かないんですつて。

だつて何處に轉がつて居たつて、皆お金子が要るんでせう。何處から出て? いづれ借りるんだわ。また河野の家の事を知つて居て、高利で貸すものがあるんだから困つて了ふ。千と千五百と纏つたお金子で、母樣が整理を着けたのも二度よ。洋行させる費用に、と云つて積立てゝあつた兄さんの分は、疾の昔無くなつて、三度目の時には皆私たち妹の分にまで、手がついたんぢやありませんか。

妙子さんの話がはじまつてからは、丁ど私も北町へ行つて居て知つて居るけれど、其は、氣の毒なほど神妙に成つたのに。……

もと〳〵氣の小さい、懷育ちのお坊ちゃんなんだから、遊蕩も駄々で可かつたんだけれど、其だけに又自棄に成つちや亂暴さが堪らないんだもの。

病院の義兄は養子だし、大勢の兄弟中に、漸と學位の取れた、かけ替へのない人を、そんなにして了つちや、其は家でも眞個に困るのよ。

早瀨さん、貴下の心一つで、話が纏まるんぢやありませんか。私が賴むんだから助けると思つて肯いて頂戴、ねえ……それぢや、餘り貴下薄情よ。」

「ですから、ですから。」

と抑へるやうに口を入れて、

「決して脈だとは言ひやしない。是からでも飛んで行つて、先生に話をして結納を持つて歸りませう。」

事もなげに打笑つて、

「それぢや反對だつた。結納は此方から持つて行くんでしたつけ。」

「其のかはり又、(あの安東村の紺屋の隣家の乞食小屋で結婚式を擧げろ、)ツて言ふんでせう。貴下は何故然う依怙地に、さもしいお米の價を氣にするやうなことを言ふんだらう。

眞個に串戲では無いわ! 一家の浮沈と云つたやうな場合ですからね。私もどんなに苦勞だか知れないんだもの。御覽なさい、痩せたでせう。此頃ぢや、此方に、何んな事でもあるやうに、島山(理學士)を見ると、最うね、身體が萎

むやうな事があるわ。土間へ駈下りて男の紐を解いたり結んだりして遣つてもぢやありませんか。

跪いて、夫の足に接吻をする位なものよ。誰が爲せるの、早瀬さん。——貴下の意地ひとつぢやありませんか。

些とは察して、肯いてくれたつて、滿更罰は當るまいと、私思ふんですがね。」

机に凭れて、堅く成つて笑ひながら聞いてゐた主税が、屹と居直つて、

「ぢや貴女に、御自分に酬して、お妙さんを嫁に欲しいと言ふんですか。」

「まあ……然うよ。」

「然う、其では色仕掛になすつたんだね。」

## 三十七

「怒つたの、貴下、怒つちや厭よ、私。貴下は眞個に此節ぢや、何うして、そんなに氣が強く成つたんだらうねえ。」

「貴女が水臭い事を言ふからさ。」

「何方が水臭いんだか分りはしない。私はまさか、校内を出るわけには行かず、お稽古に來たつて、大勢入込みなんだもの。ゆつくりお話をする間も無いぢやありませんか。

過日何を言ひました。あの合歡の花が記念だから、夜中に彼處へ忍んで行く、——霧の暗い蛙の聲を聞きながら用水樋に立つて居て、貴女があの黑塀の中から、低う、扱帶か何ぞで、姿を見せて下すつたら、どんなだらう。花がちらちらするか、闇か、螢か、月か、明星か、世の中がどんな時に、そんな夢が見られませう——なんて串戲云ふから、洗濯をするに可いの、瓜が冷せて面白いのツて、島山に然う云つて、到頭彼處の、板塀を切拔いて水門を拵へさせたんだわ。

「頭痛がしてならないから、十疊の眞中へ一人で寢て見たいの、なんのツて、都合をするのに、貴下は、素通りさへしないぢやありませんか。」

「演劇のやうだ。」

と低聲で笑ふと、

「理想實行よ。」と笑顏で言ふ。

「何うして渡るんです。」

「まさか橋をかける言種は、貴下、無いもの。」

「だから、渡られますまい。」

「合歡の樹の枝は低くつてよ。攀つて、お渡んなさいなね。」

「河童ぢやあるまいし、」

「ほゝほゝ、」

と今度は夫人の方が笑ひ出したが。

「何にしろ、貴下は不實よ。」

「何が不實です。」

「何うかして下さいな」

——更つて——

「妙子さんを。」

「ですから色仕掛か、と云ふんです。」

「あんな恐い顔をして。(と莞爾して。)眞個はね、私……自ら擲いて居るんだわ。家のために、自分の名譽を犠牲にして、貴下から妙子さんを、兄さんの嫁に貰はう、と然う思つて此方へ往來をして居るの。

で無くつて、何うして島山の顔や、母様の顔が見て居られます。第一、乳母になつて面を見られるやうよ。其にね、何爲か、誰よりも目の見えない娘が一番恐いわ。母さん、と云つて、あの、見えない目で見られると、慄然としてよ。私は元氣で居るけれど、何だか、其のために生身を削られるやうで瘠せるのよ。可哀相だ、と思つたら、貴下、妙子さんを下さいな。其が何より私の安心になるんです。……其にね、他の人は、でも無いけれど、母様がね、其はね、實に注意深いんですから、何だか、然うねえ、春の歌留多會時分から、有りもしない事でもありさうに疑つて居るやうなの。もしかしたら、貴

「私の身體は何うなると思つて？ですから妙子さんを一下されば、有形にも無形にも立派な言譯に成るんだわ。ひよつとすると、母様の方でも、妙子さんの爲にするのだ、と思つて居るのかも知れなくつてよ。顏さへ見りや、私が何うかして早瀬さんに承知させますよ、母様が何かない先に然う言つて置くから。よう、後生だから早瀬さん。」

言ひ言ひ、縋るやうに言ふ。

「詰らん事を。先生のお孃さんを言譯に使つて可いもんですか。」

「然うすると、私最う、母さんの顏が見られなくなるかも知れませんよ。」

「僕だつて活きて二度と、先生の顏が見られないやうに……」と思はず拳を握つたのを、我を引緊められた如くに、夫人は思ひ取つて、しみじみ。

「ぢや、私の、私の身體は何うなつて？」

「譯は無い、島山から離縁されて、」

「そんな事が、出來るもんですか。」

「出來ないもんですか。當然だ、」

と自若として言ふと、呆れたやうに、又……莞爾、

「貴下は何うして然うだらう。」

## 三十八

「何うも恁うもありはしません、其が當然ぢやありませんか。義、周の粟を食はずとさへ云ふんだ。貴女、」

と主税は澄まして言ひ懸けたが、常ならぬ夫人の目の色に口を噤んだ。菅子は息急しい胸を壓へるのか、乳の上へ手を置いて、

「何だつて、そりや餘りだわ、早瀬さん、」

と、ツンとする。

「不都合ですとも！島山さんが喜ばないのに、恁うして節々おいでなさるんです。

其で居て、家庭の平和が保てよう法は無い。實は恁う〳〵だ、と打明けて、御主人の意見にお任せなさい。私も又卑怯な覺悟ぢやありません、事實明かに、其の人の好まない自分の許へ、令夫人をお寄せ申すんだから、謹んで島山さんの思はくに服するんだ。

だから貴女も然うなさい。懊惱も煩悶も有つたもんか。世の中には國家の大法を犯し、大不埒を働いて置いて、知らん顏で口を拭いて濟まして居ようなどゝ言ふ人があるが、間違つて居ます。」

夫人は是を戲のやうに聞いて、早瀬の言を露も眞とは思はぬ樣子で、

「戲談おつしやいよ！　嘘にも、そんな事を云つて、事が起つたら子供たちは何うする？」

と皆まで言はせず、事も無げに答へた。

「無論、島山さんの心まかせで、何所に連れて出ろと、言はれりや連れて出る。置いて行けとたら、置いて……」

「暢氣で怒る事も出來はしない。身に染みて下さいな、ね……」

「何が暢氣だらう、此のくらゐ暢氣で無い事はない。小使と私と二人口でさへ、今の月謝の收入ぢや苦しい處へ、貴女方親子を背負ひ込むんだ。靜岡は六升代でも痩腕にや堪へまさ。」

餘の事と、夫人は凝と瞻つて、

「私がこんなに苦勞をするのに、眞個に貴下は不實だわ。」

「いざと云ふ時、貴女を棄てゝ逐電でもすりや不實でせう。胴を据ゑて、覺悟を極めて、飽まで島山さんが疑つて、重ねて四ッにするんなら、先へ眞二ッに成らうと云ふのに、何が不實です。私は實は何にも知らんが、夫人が御勝手に遊びにおいでなさるんだなんて言ひはしない。」

「然う云つて了つては、一も二も無いけれど。」

「又、一も二も無いんですから、」

「だつて世の中は、然う貴下の云ふやうには參

りませんもの。」

「成らんのぢやない、成る、が、勝手に爲んのだ。戀愛は自由です、けれども、こんな世の中ぢや罪に成る事がある。盗賊は自由かも知れん、勿論罪に成る。人殺、放火、凡て自由かも知れんが、罪に成ります。既に其の罪を犯した上は、相當の罰を受けるのが亦當然ぢやありませんか。愚圖々々塗祕さうとするから、卑怯未練な、吝な、了見が起つて、他と不都合しながら亭主の飯を食つてるやうな、猫の戀に成るのがある。しみつたれてるぢやありませんか。度胸を据ゑて、首の座へお直んなさい。私なんざ疾くに——先生……には面は合はされない、お蔦……の顏も見ないものと思つて居る。此の上は、何んなことだつて恐れはしません。

其に貴女は、島山さんに不快を感じさせながら、未だ矢張、夫には貞女で、子には慈悲ある母親で、親には孝女で、社會の淑女で、世の龜鑑とも成るべき德を備へた貴婦人顏をしようとするから、痩せもし、苦勞もするんです。

浮氣をする、貞女、孝女、慈母、淑女、そんな者があるもんか。」

「ぢや……私を、」

と擦寄つて、

「不埒と言はないばッかりね。」

さすがに顏の色をかへて屹と睨むと、頷いて、

「同時に私だつて、」

と笑つて言ふ。

其の肩を突いて、

「まあ、仕やうの無い我儘だよ。」

## 三十九

「貴下は始めから然うなんだわ。……

道學者の坂田（アバ大人）さんが、兄さんの嫉口を利くのが癪に障るからつて、（攫徒の手つだひをして、參謀本部も諭旨免官に成りました。攫徒は、其の時の事を恩にして、警察では、知らない間に袂へ入れて置いて逆捻を食はしたやうに云つてくれたけれど、其の實は、知つて居て攫徒の手から紙入を受取つて遣つたんだ。其で宜しくばお稽古にお出でなさい、早瀬主税は攫徒の補助をした東京の食詰者です。と此の辯を開く時、千島座か何處かで公衆に演説をする、と云つた人だもの——私が留めたから止したけれど……

早瀬の胸のあたりに、背向きになつて、投出した褄を、熟と見ながら、

「私、何うしたら、そんな亂暴な人を友だちにしたんだか。」

と自から怪むが如く獨言つと、

「不都合な方と知りながら、貴女と附合つてる私と同一でせう。」

「だつて私は、貴下のために惡いやうにと爲た事は一つも無いのに、貴下の方ぢや、私の身の立たないやうに、立たないやうにと言ふぢやありませんか。早瀬さんへ行くのが惡いんなら（何うでも爲て下さい、御心まかせ。何のつて、そんな事が、譬へにも島山に言はれるもんですか。

島山の方は、其れで離縁に成るとして、然うしたら、貴下、第一河野の家名は何う成ると思ふのよ。末代まで、汚點がついて、系圖が汚れるぢやありませんか」

「既に云々が有るんぢやありませんか。其を祕さうとするんぢやありませんか。卑怯だと云ふんです。」

「そんな事を云つて、何故、貴下は、」

少し急込つて、倚背向きに、

「貴下に些とも惡意を持つて居ない、然うして名譽も何も一所に捧げて居るやうな、」

と口惜しさうに、

「私を苦しめようとなさるんだらうねえ。」

「些とも苦しめやしませんよ。」

「其だつて、亂暴な事を言つてさ、」

「貴女が困つて居るものを、何も好き好んで表向にしようと言ふんぢやない。不實だの、無情だの、私の身體は何うなるの、とお言ひなさるから、貴女の身體は、疑の晴れくもりで――制裁を請けるんだ、と言ふんです。貴女ばかりと、言つたら不實でせう。男が諸共に、と云ふのに、些とも無情な事はありますまい。何うです。」

と言ふ顏を斜めに視て、

「ですから、そんな打破しをしないでも、妙子さんさへ下さると、圓滿に納まるばかりか、私も、どんなにか氣が安まつて、良心の呵責を免れる事が出來ますッて云ふのにね。背きますまい！　其が無情だ、と云ふんだわ。名譽も何も捧げて居る婦の願ひぢやありませんか、背いてくれたつて可いんだわ。」

「(名譽も何も)とおつしやるんだ。」

「あゝ、然うよ。」と振向いて淸く目を睜く。

「何爲其の上、家も河野もと言はんのです。名譽を別にした家がありますか。家を別にした河野がありますか。貴女はじめ家門の名譽と云ふ氣障な考へが有る内は、情合は分りません。然う云ふのか、夫より、實家の兩親が大事だつたり、他の娘の體格檢査をしたりするのだ。お妙さんに指もさゝせるもんですか。お妙さんの相談をしようと云ふんなら、先づ貴女から、名譽も家も打棄つて、誰なりとも好いた男と一所に成ると云ふ實證をお擧げなさい。」

と意氣込んで激しく云ふと、今度は夫人が、氣の無い、疲れたやうな、倦じた調子で、

「而して又、結婚式は、安東村の、あの、乞食小屋見たやうな茅屋で擧げろ、でせう。貴下はまるッ切私たちと考へが反對だわ。何だか河野の家を滅ぼさうと云ふやうな樣子だもの、家に仇する敵だわ。何うして、そんな人を、私厭でないんだか、自分で自分の氣が知れなくッてよ。あゝ、而して、最う、私、慈善市へ行かなくッては。最う何でも可いわ！　何でも可いわ。」

夫人と……別れたあとで、主税はクヮッと障子を開けて、しばらく天を仰いで居たか、

「あゝ、今日はお妙さんの日だ。」と、呟いて仰向けに寢た――妙子の日とは――日曜を意味したのである。

## 宵闇

### 四十

同、日曜の夜の事で。

日が暮れると、早瀨は玄關へ出て、框に腰を掛けて、土間の下駄を引掛けたなり、洋燈を背後に、片手を突いて長く成つて一人で居た。

よくぞ男に生れたる、と云ふ陽氣でも無く、蟲を聞く時節でも無く、家は古いが、壁から生えた芒も無し、繪でないから、一筆描きの月のあしらひも見えぬ。

ト忌々しいと言へば忌々しい、上框に、灯を背中にして、恰も門火を焚いて居るやうな――其の薄あかりが、格子戸を透して、軒で一度暗くなつて、中が絶えて、其から、ぼやけた輪を取つて、朦朧と、雨曝の木目の高い、門の扉に映つて、蝙蝠の影にもあらず、空を黑雲が行通ふか何ぞのやうに、時々、むら／＼と暗く成る……又明く成る。

目も放さず、早瀨が其を凝と視める内に、濁つたやうな其の灯影が、二三度搖々と動いて、やがて礫した波が、水の面に月輪を纏めた風情に、白やかな婦の顏が其處を覗いた。

門の扉が開くでも無しに……續いて雪のやうな衣紋が出て、其と映合つてくッきりと黑い鬢が、やがて薄お納戸の肩のあたり、きらりと光つて、帶の色の鮮麗に成つたのは――道子であつた。

門に立忍んで、窓と扉を開けて、横から様子を伺つたものである。
　一目見ると、早瀬は、づいと立つて、格子を開けながら、手招ぎをする。と、立直つて後姿に成つて、AB横町の左右を眗す趣であつたが、うしろ向きに入つて、がら〳〵と後を閉めると、……足ばかりを小刻みに急いで来て、人目の關には一重も多く、遮るものが欲しさうに、又格子を立てた。
「能うこそ、」と莞爾して云ふ。
　姉夫人は、口を、疊んだ手巾で壓へたが、すツすツと息が忙しく、
「誰方も……」
「誰も。」
「小使さんは？」
　と最う躁んだか尋ね得た。
「彼は朝つから、貞造の方へ遣つてあります、目の離せません容體ですから。」
「何から何まで難有う存じます……一人の親を……済みませんですねえ。」
　と其の手巾が目に障る。
「済まないのは私こそ。能く會場が抜けられましたな。」
「はい、色氣が悪いから、控所の茶屋で憩むやうに、と皆さんが、然う言つて下さいましたから、好い都合に、點燈頃の混雑紛れに出ましたけれど、宅の腕車では悪うございますから、途中で辻待のを雇ひますと、氣が着きませんでしたが、其が貴下、片々鰥目のやうで、其の可恐しい目で、時々振返つては、あの、幌の中を覗きましてね、私はどんなに氣味が悪うございましてせう。漸と此の横町の角で下りて、まあ、御門まで参りましたけれども、もしかお客様でも有つては悪いから、と少時立つて居りましたの。」
「お心づかひ、お察し申します。」
　と頭を下げて、
「島山さんの、お嫁さんには。」
「今しがた参りました。あんなに遅くまで——此方様に。」
「否。」
「其では道寄りをいたしましたのでございませう。灯の點きます少し前に見えましたつけ、大勢の中でございますから、遠くに姿を見ましたばかりで、別に言も交はさないで、私は急いで出て参りましたので。」
「成程、いや。お茶も差上げませんで失禮ですが、手間が取れちや又お首尾が悪いと不可ません。直ぐに、是から、」
「何うぞ然うなすつて下さいまし、貴下、御苦労様でございますねえ。」
「御苦労處ぢやありません。さあ、お供いたしませう。」
　不圖心着いたやうに、
「お待ちなさいよ、夫人。」

## 四十一

　早瀬は今更ながら、道子が其の白襟の品好く麗しい姿を視めて、
「宵暗でも、貴女の其の態ぢや恐しく目に立つて、どんな事で又其の鰥目の車夫なんぞが見着けまいものでもありません。一寸貴女手巾を。」
　と慌しい折から手の觸るも顧みず、奪ふが如く引取つて、背後から夫人の肩を肩掛のやうに包むと、撫肩は愈々細つて、身を竦めたが倚る見好げな。
　懐中から又手拭を出して、夫人に渡して、
「姉さん冠りと云ふのになさい、田舎者が爲るやうに。」
「どうせ田舎者なんですもの。」
　と打傾いて、髷に一寸手を當てゝ、
「恁うですか。」白地を被つて俯向けば、黒髪こそは隠れたれ、包むに餘る鬢の後の、雪に梅花

を伏せたやう。

主税は横から右瞻左瞻て、

「不可い、不可い、尚目立つ。貴女、失禮ですが、裾を折端つて、然う、不可んな。長襦袢が突丈ぢや、矢張清元の出語がありさうだ。」

と口の裡に獨言きつゝ、

「お氣味が悪くつても、胸へためて、ぐつと上げて、足袋との間を思ひ切つて。あゝ、おいたはしいな。」

「厭でございますね。」

「御免なさいよ。」

と言ふが疾いか、早瀬の手は空を切つて、體を躍んだと思ふと、

「あれ、」

くわつと成つて、ふら／＼と頭重く倒れようとした――手を主税の肩に突いて、道子は纔かに支へたが、早瀬の掌には逸早く壁の隅なる煤を掬つて、是を夫人の脛に塗つて、穂にあらはれて蔽はれ果てぬ、尋常な其の褄はづれを隠したのであつた。

「最う、大丈夫、河野の令夫人とは見えやしない。」

と、提の洋燈を上から、フッ！

留南奇を便に、身を寄せて、

「さあ、出掛けませう。」

胸に當つた夫人の肩は、誘はるゝまで、震へて居た。

此の横町から、安東村へは五町に足りない道だけれども、場末の賤が家ばかり。時に雨もよひの夏雲の閉した空は、星あるよりも行方遥かに、たまさか漏るゝ灯の影は、山路なる、孤家の其と疑はるゝ。

名門の女子深窓に養はれて、傍に夫無くしては、濫りに他と言葉さへ交へまじきが、今日朝からの心の裡、蓋し察するに餘あり。

我は不義者の児なりと知り、父は然も危篤の病者。逢ふが別れの今世に、臨終のなごりを惜むため、華燭銀燈輝いて、見返る空に月の如き、若竹座を忍んで出た、慈善市の光を思ふにつけても、横町の後暗さは冥土にも増るのみ歟。裾端折り、頬被して、男――とあられもない姿。脅りとでも、人目に觸れて、貴女は、と一言聞くが最後よ、活きては居られない大事の瀬戸。辛く乗切つて行く先は…實の親の死目である。道子が心はどんなであらう。

大巌山の幻が、闇の氣勢に目を壓へて、用水の音凄じく、地を捲る如く聞えた時、道子は俤さへ、衣の色さへ、有るか無きかの聲して、

「夢では無いのでせうか知ら。宙を歩行きますやうで、ふら／＼して、倒れさうでなりません。早瀬さん、お袖につかまらして下さいまし。」

「緊乎と！　可い鹽梅に人通りもありませんから。」

人は無くて、軒を走る、怪しき狗が見えたであらう。紺屋の暖簾の鯛の色は、燐火となつて燃えもせぬが、昔を知ればひづめの音して、馬の形も有りさうな、安東村へぞ着きにける。

## 四十二

道子は聲も彷徉ふやうに、

「此處は野原でございますか。」

「何故、貴女？」

「眞中に恐しい穴がございますよ。」

「あゝ、其は道端の井戸なんです。」

と透しながら早瀬が答へた。古井戸は地獄が開けた、大なる口の如くに見えたのである。

早瀬より、忍び足する、夫人の駒下駄が、却つて戰きに音高く、辿々しく四邊に響いて、やがて眞暗な軒下に導かれて、其處で留まつた。が、心着いたら、心弱い婦は、得堪へず倒れたであらう、恰も其の頭の上に、例の白黒斑な狗が蹈つて居るのである。

音訪ふ間も無く、どたんと畳を蹴て立つ音し

て、戸を開けるのと、つい其の框に眞赤な灯の、ほやの油煙に黒ずんだ小洋燈の見ゆるが同時で、ぬいと立つたは、眉の迫つた、目の鋭い、細面の壯佼で、巾狹な單衣に三尺帶を尻下り、粹な奴を誰とかする、卽ち郭の(小使)で、怪! 怪! 怪! アバ大人を掏摸れた、萬太と云ふ掏摸である。

はたと主税と面を合はせて、

「兄哥!」

「……」

「不可えぜ。」と假色のやうに云つた。

「何だ——馬鹿、お迹がある。」

「やあ、先生、大變だ。」

「何う、大變。」

衝と入る。袂に縋つて、牲の鳥の亂れ姿や、羽搔を傷めた袖を憫んで、塒のやうな戸を潛ると、跣足で下りて、小使、カタリと後を鎖し、

「病人が亡く成つたい。」

「え、」

「今駈出さうてえ處でさ。」

「醫者か。」

「お醫者は直ぐに呼んで來たがね、最う不可えツて、今しがた歸つたんで。私あ、悄として坐つて居ましたが、何でもこりや先生に來て貰はなくちや、仕樣がないと、今渾と氣が附いて飛んで行かうと思つた處で。」

「そんな法はない。死ぬなんて、」

と飛び込むと、坐ると同時で、唯一室だから其處が褥の、莚のやうな枕許へ膝を落して、覗込んだが、慌しく居直つて、其の布蒲團を持上げて、骨の着いのがくツきり見える、病人の仰向けに寢た胸へ、手を當てゝ熟とした。

「奧さん、」

と靜に呼ぶ。

道子が、取つたばかりの手拭を、引摺るやうに膝にかけて、振を繕ふ遑もなく、押並んで跪いた時、早瀨は退つて、向き直つて、

「線香なんぞ買つて——それから、種々要るものを。」

「へい、宜うがす。」

茫乎戸口に立つて居た小使は、其の跣足のまま飛んで出た。

只見れば、貞造の死骸の、恩愛に曳かれて動くのが、筵に響いて身に染みるやうに、道子の膝は打震ひつゝ、幽に唱名の聲が漏れる。

「能く御覽なさいまし。貴女も見せてお上げなさいよ。あゝ、暗くつて、其では顏が、」

手洋燈を摺らして出したが、灯が低く這つて屆かないので、裏が紺屋の物干の、破障子の下に、汚れた飯櫃があつた、其へ載せて、早瀨が立つて持出したのを、夫人が伸上るやうにして、霑をもつた目を見据ゑ、現の面で受取つたが、兩方掛けた手の震へに、ぶる〳〵と動くと思ふと、坂に成つた蓋を辷つて、阿呀と云ふ間に、袖に俯向いて、火を吹きながら、疊に落ちて碎けたではないか! 天井が眞紫に、筵が赫と赤く成つた。

此の明で、貞造の顏は、活きて眼を開いたかと、蒼白めた鼻も見えたが、松明のやうにひらひらと燃え上る、夫人の裾の手拭を、炎ながら引攫んで、土間へ叩き出した早瀨が、一大事の聲を絞つて、

「大變だ、帶に、」と一聲。餘りの事に茫となつて、其時座を避けようとする、道子の帶の結目を、引斷れよ、と引いたので、横ざまに倒れた裳の煽り、乳のあたりから波打つて、炎に燃えつと見えたのは、膚の雪に映る火を僅に襦袢に隔てたのであつた。トタンに早瀨は、身を投げて油の上をぐる〳〵と轉げた。火は是がために消えて、しばらくは黑白も分かず。阿倍街道を戻り馬が、遙に、ヒイインと嘶く聲、戸外で、犬の吠ゆる聲。

「可恐しい眞暗ですわ。」

品々を整へて、道の暗さに、提灯を借りて歸つて來た、小使が、のそりと入ると、萌黄色の紗蒲を、水のやうに疊に流して、夫人は其處に伏沈んで、早瀬は窓をあけて、欄干に腰をかけて、吻として腕をさすつて居た。——猛虎肉酔初醒時、揩磨苛痒風助威。

## 廊下づたひ

### 四十三

家の業でも、氣の弱い婦であるから、外科室の方は身震ひがすると云ふので、是非なく行かぬ事に成つて居るが、道子は、兩親の注意——寧ろ命令で、午後十時前後、寢際には必ず一度づゝ、入院患者の病室を、遍く見舞ふのが勤めであつた。

爾時は當番の看護婦が、交代に二人づゝ附添ふので、唯（御氣分は如何ですか、お大事になさいまし。）と、だけだけれども、心優しき生來の、自から言外の情が籠るため、病者は少なからぬ慰安を感じて、結句院長の廻診より、道子の端麗な、此の姿を、待ち兼ねる者が多い。

怪しからぬのは、鼻風邪如きで入院して、貴女のお手づからお藥を、と唸ると云ふが、まさかであらう。

で——此の事たるや、夫の醫學士、名は理順と云ふ——院長は餘り贊成はしないのだけれども、病人を慰めると云ふ仕事は、如何なる貴婦人がなすつても仔細ない美德であるし、兩親も斷つて希望也、不問に附して默諾の體で居る。

ト今夜もばた／＼と、上草履の音に連れて、下階の病室を濟ました後、横田の田畝を左に見て、右に停車場を望んで、此の向は天氣が好いと、雲に連つて海が見える、其の二階へ、雪洞を手にした、白衣の看護婦を從へて、眞中に院長夫人。雲を開いたやうに階子段を上へ、髮が見えて、肩、帶が露れる。

質素な浴衣に晝夜帶を……尤もお太鼓に結んで、紅鼻緒に白足袋であつたが、冬の夜なぞは寢衣に着換へて、淺黄の扱帶と云ふ事がある。

そんな時は、寢白粉の香も薫る、夫はた異香薫ずるが如く、患者は御來迎、と稱へて隨喜渇仰。

また實際、夫人が其の風采、其の容色で、看護婦を率ゐた狀は、常に天使の如く拜まれるのであつたに、如何にやしけむ、近い頃、殊に今夜あたり、色艶勝れず、圓髷も重さうに首垂れて、胸をせめて袖を襲ねた狀は、愼ましげに床し、とよりは、悄然と細つて、何か目に見えぬ絲の八重の網で、風に靡く弱腰かけて、ぐる／＼と卷かれたやう。從つて、前後を擁した二體の白衣も、天にもし有らば美しき獄卒の、法廷の高く高き處へ夫人を引立てゝ來たやうである。

扉を開放した室の、患者無しに行拔けの空は、右も左も、折から眞白な月夜で、月の表に富士の白妙、裏は紫、海ある氣勢。停車場の屋根はきら／＼と露が流れて輝く。

例に因つて、室々へ、雪洞が入り、白衣が出で、夫人が後姿になり、看護婦が前に向き、ばた／＼ばた、ばた、ばた／＼と規律正しい沈んだ音が長廊下に斷えては續き、處々月になり、又雪洞がぽつと明くなつて、やゝあつて、遙かに暗い裏階子へ消える筈のが、今夜は廊下の眞中を、ト一列になつて、水彩色の燈籠の繪の浮いて出たやうに、すら／＼此方へ引返して來て、中程より最う些と表階子へ寄つた——右隣が空いた、富士へ向いた病室の前へ來ると、夫人は立留つて、白衣は左右に分れた。

順に見舞つた中に、此の一室だけは、行きがけに何爲か殘したもので。……

只見ると胡粉で書いた番號の札に並べて、早瀬主税と記してある。

道子は間に立つて、徐に左右を見返り、默つて目禮をして、殆ど無意識に、しなやかな手を伸ばすと、看護婦の一人が、雪洞を渡して、其は兩手を、一人は片手を、膝のあたりまで下げて、ひらりと雪の一團。

ヅッと隱れて廊下を戻る。

道子は扉に吸込まれた。ト思ふと、しめ切らない其の扉の透間から、やゝ背屈みをしたらしい、低い處へ横顏を見せて廊下を差覗くと、表階子の欄干へ、雪洞を中にして、からみついたやうに成つて、二人附着いて、此方を見て居た白衣が、さらりと消えて、壇に沈む。

## 四十四

寢臺に沈んだ病人の顏の色は、是が早瀬か、と思ふほどである。

道子は雪洞を床に置いて、帶のあたりから胸を仄かに、襟を暗く、寢臺に添うて彳んで、心を細めた洋燈のあかりに、其の灰のやうな面を見たが、目は閉かに開いて居た。

ト思ふと、早瀬に顏を背けて、目を塞いだが、瞼は動くか、烈しく睫毛が震へたのである。

良あつて、

「早瀬さん、私が分りますか。」

「……」

「漸々今日のお晝頃から、あの、人顏がお分りになるやうにお成んなさいましたさうでございますね。」

「お庇樣で。」

と確に聞えた。が、腹でもの云ふ如くで、口は動かぬ。

「酷いお熱だつたんでございますのねえ。」

「看護婦に聞きました。ちやうど十日間ばかり、全ツ切人事不省で、驚きました。いつの間にか、最う、七月の中旬ださうで。」と瞑つたまゝで云ふ。

「宅では、東京の妹たちが、皆暑中休暇で歸つて參りました。」

少し枕を動かして、

「英吉君も……ですか。」

「否、彼の人だけは參りませんの。此の頃ぢや家へ歸られないやうな義理に成つて居りますから、氣の毒ですよ。

あゝ、然う申せば、」と優しく、枕許の置棚を斜に見て、

「貴下は、まあ、嘸東京へお歸りなさらなければ成らなかつたんでございませうに。生憎御病氣で、眞個に間が惡うございましたわね。酒井樣からの電報は御覽に成りましたの？」

「見ました、先刻はじめて、」

と調子が沈む。

「二通とも、」

「二通とも。」

「一通は唯（直ぐ歸れ。）ですが、二度目のには、ツタビヤウキ（蔦病氣）――謹二から承つて居りました、貴下の奧さんが御危篤のやうに存じられます。御内の小使さん、と其に草深の妹とも相談しまして、お枕許で、失禮ですが、電報の封を解きまして、私の名で、貴下が此のお熱の御樣子で、殘念ですが行らつしやれない事を、お返事申して置きました。ですが、まあ、何と云ふ折が惡いのでございませう。眞個にお察し申して居ります。」

「……病氣が幸です。達者で居たつて、何の面さげて、先生はじめ、顏が合されますもんですか。」

「何爲？　貴下、」

と、熟と頭を据ゑて、俯向いて顏を見ると、早瀬は纔に目を開いて、

「何爲とは？」

「……………」

「第一、貴女に、見せられる顏ぢやありません。」

と云ふ呼吸づかひが荒くなつて、毛布を突出

した、薄い胸の、露な骨が動いた時、道子の肩もわな〳〵して、眞白な手の戰くのが、雪の亂るゝやうであつた。

「安東村へおともをしたのは……夢ではないのでございますね。」

早瀬は差置かれた胸の手に、壓し殺されて、恰も呼吸の留るが如く、其の苦を拂はむとするやうに、痩細つた手で握つて、幾度も口を動かしつゝ辛うじて答へた。

「夢ではありません、が、此の世の事では無いのです。お、お道さん、毒を、毒を一思ひに飮まして下さい。」

と魚の渇けるが如く悶ゆる白歯に、傾く盞からこぼるゝよと見えて、衝と一片の花が觸れた。

颯となつた顏を背けて、

「夢でなければ……何うしませう！」

と道子は崩れたやうに腰を折つて、寢臺の端に額を伏した。窓の月は、キラリと笄の鐶に光つて、雪洞は仄かに玉の如き頸を照らした。

是より前、看護婦の姿が欄干から消えて、早瀬の病室の扉が堅く鎖されると同時に、裏階子の上へ、ふと顯れた一人の婦があつて、堆い前髪にも隱れない、鋭い瞳は、屹と長廊下を射るばかり。其が跫音を盗めて來て、隣の空室へ忍んだことを、斷つて置かねば成らぬ。是は道子等の母親である。

——同一事が——同一事が……五晩六晩續いた。

## 四十五

妙なことが有るもので、夜毎に、道子が早瀬の病室を出る時間の後れるほど、人こそ替れ、二人づゝの看護婦の、階子段の欄干を離れるのが遲く成つた。

何うせ其處に待つて居て、一所に二階を下りるのでは無い——要するに、遠くから、早瀬の室を窺ふ間が長く成つたのである、と言ひかへれば言ふのである。

で、今夜も又、早瀬の病室の前で、道子に別れた二人の白衣が、多時宙にかゝつたやうになつて、欄干の處に立つた。

廣庭を一つ隔てた母屋の方では、宵の口から、今度暑中休暇で歸省した、牛込桐楊塾の孃たちに、內の小兒、甥だの、姪だのが一所に成つた處へ、又小兒同志の客があり、草深の一家も來、ヴァイオリンが聞える、洋琴が鳴る、唱歌を唄ふ——此の人數へ、最う一組。菅子の妹の辰子と云ふのが、福井縣の參事官へ去年の秋緣有いて最う兒が出來た。其の一組が當河野家へ來揃ふと、此時だけは道子と共に、一族殘らず、乳母小間使と子守を交ぜて、總と五十人ばかりの人數で、兩親がついて、殊に是がために、清水港に、三保に近く、田子の浦、久能山、江尻は固より、興津、清見寺などへ、ぶらりと散步が出來ようと云ふ地を選んだ、宏大な別莊の設が有つて、例年必ず其處へ避暑する。一門の榮華を見よ、と英臣大夫妻、得意の時で、昨年は英吉だけ缺けたが、……今年も怪しい。其のかはり、新しく福井縣の顯官が加はるのである……

此母屋の方は、葉越に映る燈にも景氣ついて、小さいのが弄ぶ花火の音、松の梢に富士より高く流星も上つたが、今は靜に成つた。

壇の下から音もなく、形の白い脊の高いものが、ぬいと廊下へ出た、と思ふと、看護婦二人は驚いて退つた。

來たのは院長、醫學士河野理順である。

ホワイト襯衣に、縞の粗い慢な服、上靴を穿いたが、ビイルを呷つたらしい。充血した顏の、額に顱割のある、髭の薄い人物で、ギラリと輝く黃金緣の目金越に、看護婦等を睨め着けながら、

「君たちは……」

と云うた眼が、目金越に血走つた。

「道子に附いて居るんぢやないか。」

「は、」と一人が頭を下げる。

「何うしたか。」

「は、早瀬さんの室を、お見舞に成ります時は、何時も私どもはお附き申しませんでございます。」と爽な聲で答へた。

「何爲かい。」

「奥樣がおつしやいます。御本宅の英吉樣の御朋友ですから、看護婦なぞを連れては豪さうに見えて、容體ぶるやうで氣恥かしいから、とおつしやつて、お連れなさいませんので、は……」と云ふ。

「何時も然うか。」

と尋ねた時、衣兜に兩手を突込んで、肩を搖つた。

「はい、何時でも。」

「む、然うか。」と言棄てに、荒らかに廊下を踏んだ。

「あれ、主人の跫音でございます。」

「院長ですか。」

道子は色を變へて、

「あゝ、何うしませう、此方へ參りますよ。アレ、」

「院長が入院患者を見舞ふのに、些とも不思議はありません。」と早瀬は寢ながら平然として云つた。

目も尋常ならず、おろ／＼して、

「兩親も知りませんが、主人は酷い目に逢はせますのでございますよ。」としめ木にかけられた樣に袖を絞つて立窘むと、

「寢臺の下へお隱れなさい。可いから。」

とむつくと起きた、早瀬は毛布を飜して、夫人の裾を隱しながら、寢臺に屹と身構へたトタンに、

「院長さんが御廻診ですよう！」と看護婦の金切聲が物々しく響いたのである。

理順は既に室に迫つて、あはや開けらとすると、何處に居たか、忽然として、母夫人が立露れて、扉に手を掛けた醫學士の二の腕を、横ざまにグッと壓へて……曰く、

「院長。」

と、其の得も言はれぬ顏を、例の鋭い目で、じろりと見て、

「何うぞ、此方へ、否、是非。」

燃ゆるが如き嫉妬の腕を、小脇にしつかり抱込んだと思ふと、早や裏階子の方へ引いて退いた。——

## 螢

### 四十六

「己が分るか、分るか。おゝ酒井だ。分つたか、確乎しな。」

酒井俊藏唯一人、臨終のお蔦の枕許に、親しく顏を差寄せた。次の間には……

「あゝ、皆居るとも。妙も居るよ。大勢居るから氣を丈夫に持て！　唯早瀬が見えん、殘念だらう、己も殘念だ。病氣で入院をして居ると云ふから、致方が無い。斷念めなよ。」

と、黑髮ばかりは幾千代までも、早や其の下に消えさうな、薄白んだ耳に口を寄せて、

「未來で會へ、未來で會へ。未來で會つたら一生懸命に縋着いて居て離れるな。己のやうな邪魔者の入らないやうに用心しろ。此度離れるなよ。先生なんぞ持つな。

己は恁う云ふ事とは知らなんだ。お前より早瀬の方が可愛いから、彼に間違ひの無いやうに、怪我の無いやうにと思つたが、可哀相な事をしたよ。

早瀬に過失をさすまいと思ふ己の目には　お前の影は彼奴に魔が魅して居るやうに見えたん

だ。お前を惡魔だと思つた、己は敵だ。間をせいたつて處女ぢやない。眞逢ひたくば、どんなにしても逢へん事はない。世間體だ、一所に居て見ろ不都合だが、内證なら大目に見て遣らうと思つたものを、お前たちだけに義理がたく、死ぬまで我慢を徹したか。可哀相に。……今更卑怯な事は云はない、己を怨め、酒井俊藏を怨め、己を呪へよ！

　何うだ、自分で心を強くして、迚も諦められない、死ぬなんぞと考へないで、最う一度石に喰ついても快復つて、生木を裂いた己へ面當に、早瀬と手を引いて復讐をして見せる元氣は出せんか、意地は無いか。

最う不可まい喃。」

　と、忘れたやうなお蔦の手を膝へ取つて、熟と見て、

「痩せたよ。一昨日見た時より又半分に成つた。——これ、目を開きなよ、確乎しな、己だ、分つたか、あゝ先生だよ。皆居る、妙も來て居る。姉さん——小芳か、彼處に居るよ。

　何爲、お前は氣を長くして、早瀬が己ほどの者に成るのを待たん、己でさへ藝者の情婦は持餘して居るんだ、世の中は面倒さな。

　あの腰を突けばひよろつくやうな若い奴が、お前を内へ入れて、其で身を立つて行かれるものか。共倒れが不便だから、劍突を喰はしたんだが、可哀相に、兩方とも間を隔つて煩つて、[illegible]一つ[illegible]つて貰へないのは、お前たち何の因果だ。

　唯待つて居るだらうた、早瀬の來るのを。彼が來るから、と云つて、お前、昨夜髪を結つたさうだ。あゝ、島田が好く出來た、己が見たよ。」

　と云ふ時、次の室で泣音がした。續いてすゝり泣く聲が聞えたが、其の眞先だつたのは、お蔦の是を結つた、髪結のお増であつた。藝妓島田は名譽の婦が、如何に、丹精をぬきんでたらう。

　上らぬ枕を取交へた、括蒲團に一が沈んで、後毛の亂れさへ、一入の可傷しさに、お蔦は薄化粧さへして居るのである。

　お蔦は羞ぢてか、見て欲しかつたか、肩を捻つて、眉を眞向きに、毛筋も透通るやうな顔を向けて、なだらかに掛けた小掻巻の膝の邊に、一波打つと、力を入れたらしく寝返りした。

## 四十七

「似合つた、似合つた、あゝ、島田が佳く出來た。早瀬なんかに分るものか。鏡を見せな、さあ。」

　とじりゝと膝を寄せて、其時、颯と薄紫色の陰の籠んだ、冷い顔が、夜の風に戰ぐにつけ、蓐の隈に佛立つのを、縁から明取りの月影に透かした酒井は、

「誰か來て螢籠を外しな、厭な色だ。」

「へゝい、」と頓興な、ぼやけた聲を出して、急紺の褄の當つた千草色の半股引で、縁側を辷つて來た——女たちは皆我を忘れて大業に——中には手合つて泣いてゐるのもあるので、惣助一人三疊の火鉢の傍に、[illegible]で畏つて、首を喰切つた獅嚙面は、額に蠟燭の流れぬばかり、繪にある燈臺鬼と云ふ顔色。時々病人の部屋が寂とする毎に、邊りの女達の中へ、四ツ這に首を出して、

（死んだか）と聞いて、女房のお增に叱められ、

（未だか、）と問うて、又睨めつけられ、背後から

をしては引込んで控へたのが——大先生の前なり、やがて佛になる人の枕許、謹んで這つて出て、ひよいと立上つて螢籠を外すと、居すくまつた腰が据らず、ひよろり、で、ドンと縁へ尻餅。魂が碎けたやうに、胸へ亂れて、颯と光つた、籠の螢に、ハツと思ふ處を、

「何んですね、お前さん、——

……と鼻聲になつて居る女房に劍突を食つて、慌てゝ逃込む。

此の物音に、お蔦は又はつちりと目を睜いて、心細く、寂しげに、枕を酒井に擦寄せると……

「貴方も、寂しくは無いよ。然し何うだい。早瀬が來たら、誰も來ぬ室へ行つて會つて、然うやつて、二人許りで、言ひたいことがあるだらう。

致方が無い斷念めな。斷念めて――己を早瀬だと思へ。世界に二人と無い夫だと思へ。早瀬より豪い男だ。學問も出來る、名も高い、腕も有る、彼よりは年も上だ。背も高い、肚も確だ、聲も大い、酒も強い、借金も多い、男振も彼より増だ。女房もあり、情婦もあり、娘も有る。地位も名譽も段違ひの先生だ。酒井俊藏を夫と思へ、情人と思へ、早瀬を主税だと思つて、言ひたいことを言へ、したいことをしろ、不足はあるまい。嫉妬も彌陀も何も要らん、一心に男の名を唱へるんだ。早瀬と一所に[illegible]に縋れ、手を掛け、おい、早瀬が來た、此處に居るよ。」

と云ふと、縋りついて、膝に乘るのを、横抱きに頸を抱いた。

トつかまらうとする手に力なく、二三度探りはずしたか、震へながら緊乎と、酒井先生の襟を摑んで、

「咽喉が苦しい、あゝ、呼吸が出來ない。素人らしいが、(と莞爾して、)口移しに藥を飲まして……」

酒井は猶豫はず、水藥を口に含んだのである。

がつくりと咽喉を通ると、氣が遠く成りさうに、仰向けに恍惚したが、

「早瀬さん。」

「お蔦。」

「早瀬さん……」

「むゝ。」

「先、先生が逢つても可いつて、嬉しいねえ！」

酒井は、はら〳〵と落涙した。

## おとづれ

### 四十八

療治室の寢臺に、うつら〳〵して居た早瀬は、フト目が覺めたが……昨夜あたりから、歩行いて厠へ行かれるやうに成つたので、最う看護婦も付いて居らぬ。毎晩極つたやうに見舞つてくれた道子が、一昨日の夜の……あの時から、弗つり來ないし、一寢入りして覺めた今は、晝間、障子に遮つたのも、何を隔てたやうで心寂しい。室内を[illegible]、床に[illegible]の無さゝうだから、寢臺の縁に手をかけて、頭を擡げるやうにして出たが、廊下の外になると、最う自分でも足の確なのが分つて、南側の其方此方に、白い[illegible]に昇汞水の薄桃色にこぼれた、[illegible]に見えるのを、氣の毒らしく思ふほど、氣も爽然して、通り過ぎた。

何處も寢入つて、寂として、此の二三日めつきり暑さが增したので、中には戸を明けたまゝ、看護婦が廊下へ雪のやうな裾を出して、戸口に横はつて睡つたのもあつた。遠くで犬の吠ゆる聲はするが、幸ひ[illegible]の呻吟聲も聞えずに、更けて[illegible]二時であらう。

一階は表階子の上り口に[illegible]もあつて、其處は[illegible]も暗いが、廊下は[illegible]し、廊下はしたし、歩行くのも物靜らしいので、早瀬は[illegible]と、遠い方の、[illegible]子の[illegible]手の薄暗い中へ入つた。

ざぶり水を注けながら、見るともなしに、小窓の格子から田圃を見ると、月は屋の棟に上つたらう、影は見えぬが青田の白さ。

蛙がそよ〳〵と渡ると見れば、波のやうに葉末が分れて、田の水の透いたでもなく、きら〳〵と光つたものがある。緩い、遲い、稻妻のやうた

流れて、霧のかゝつた中に、土のひだが數へられる、大巖山に根を低く續つて消えたのは、何處かの電燈が閃いて映つたやうでもあるし、螢が飛んだやうにも思はれる。

手水に、其の景色にぶる〳〵と冷くなつて、直ぐに開けて出ようとする。戸の外へ、何か來て立つて居て、其がために重いやうな氣がして、思はず躊躇つて、暗い中に、寢間被かへた自分の浴衣の白いのを、視めて悚然として咳をしたが、口の裡で音には出ぬ。

「早瀨さん、」

「お蔦か、」

と言つた自分の聲に、聞えた聲よりも驚かされて、耳を傾けるや否や、赫と成つて我を忘れて、しやにむに引開けようとした戸が、少しきしんで、ヒヤリと氷のやうな冷いものを手に摑んで、其まゝ引開けると、裏階子が大な穴のやうに眞黑なばかりで、別に何にも無い。

瓦を嚙むやうに棟近く、夜鴉が、かあ、と鳴いた。

鳴きながら、傳うて飛ぶのを、慴として仰ぎながら、導かれるやうにふら〳〵と出ると、聲の止む時、壇階子の横を廊下に出て居た。

只見ると打向ひ遙か斜なる、渠が病室の、半開きにして來た扉の前に、ちらりと見えた婦の姿。——出たのか、入つたのか、直ぐに消えた。

ばた〳〵と、我ながら慌しく跫音を立てゝ、一文字に驅けつけたが、室へ入口で、思はず釘附にされたやうに成つた。

バサリと音して、一握の綿が舞ふやうに、むく〳〵と渦くばかり、枕許の棚を殆ど轉つて飛ぶのは、大きな、色の白い蛾で、枕をかけて陰々とした、燈の間に、恰も鞠のやうな影がさした。棚には、菅子が活けて置いた、淺黃の天鵞絨に似た西洋花の大輪があつたが、其ではなしに——藥一ツ、元來の藥嫌が、快いにつけて飲忘れた、一度ぶり殘つた呑かけの——水藥の瓶に、ばさ〳〵と當るのを、熟と瞻めて立つと、トントントンと壇を下りるやうな跫音がしたので、何處か、と見當も分らず振向いたのが表階子の方であつた。其の正面の壁に、一番明かつた燈が、アハヤ消えさうに成つて居る。

爾時、蛾に向ふ如く、衝と踏込む途端に、

——私ですよう引——と床に沈んで、足許の天井裏に、電話の線を漏れたやうな、夢の覺際に耳に殘つたやうな、胸へだけ傳はるやうな、お蔦の聲が聞えたと思ふと、蛾がハタと落ちた。

はじめて心付くと、廁の戸を冷く握つて、今まで握緊めて居た、左の掌に、細い尻尾をひら〳〵と動くのは、一尾の守宮である。

はつと開くと、雫のやうに、ぽたりと床に落ちたが、足を踏張つたまゝ動きもせぬ。是に目も放さないで、手を伸ばして、藥瓶を取ると、伸過ぎた身の發奮に、所踉けて、片膝を支いたなり、口を開けて、垂々と濺ぐと——水藥の色が光つて、守宮の頭を擡げて睨むが如き目をかけて、滴るや否や、くる〳〵と風車の如く烈しく廻るのが、見る〳〵朱を流したやうに眞赤になつて、ぶる〳〵と足を縮めるのを、早瀨は瞳を据ゑて屹と視た。

## 四十九

早瀨は其の水藥の殘餘を火影に透かして、透明な液體の中に、芥子粒ほどの泡の、風の如くめぐる狀に、莞爾して、

「面白い！」

と、投げる樣に言葉にたが、恐氣も無く、一分時の前は炎の如く眞紅に狂つたのが、早や紫色に變つて、床に氷りついて、凹つた腹の靑い守宮を摘んで、ぶらりと提げて、鼻紙を

取つて、薬瓶と一所に、八重にくる／＼と巻いて包んで、枕許の其の置戸棚の奥へ、着換の中へ突込んで、次手に未だ、何か其處等を探したのは、落ちた蛾を拾はうとするらしかつたが、其は影も無い。

　同棚には、他に二つばかり處方の違つた、今は用ゐぬ、同一薬瓶があつた。其の一個を取つて、ハタと叩きつけると、床に粉々に成るのを見向きもしないで、躍上るやうに勢込んで寢臺に上つて、無手と高胡坐を組んだと思ふと、廊下の方を屹と見て、

「馬鹿な奴等！　誰だと思ふ。」

と言ふと齊しく、仰向けに寢て、毛布を胸へ。――鷄の聲を聞きながら、大膽不敵な鼾で、すや／＼と寢たのである。

　曉かけて、院長が一度、河野の母親大夫人が一度、前後して、此の病室を差覗いて、人知れず、立去つた。

　早瀬が目を覺ますと、受持の看護婦が、

「薬は召上りましたか。瓶が落ちて破れて居りましたが。」

と注意したのは言ふまでも無かつた。

で、新しいのが最う來て居たが、此の分は平氣で服した。

　其の日燈の點く些と前に、早瀬は帶を緊直して、看護婦を呼んで、

「お世話に成りました。お庇様で何うやら助りました。最う退院をしまして宜しいさうで、後の保養は、河野さんの皆さんが行らつしやる、清水港の方へ來て爲ては何うか、と云つて下さいますから、參らうかと思ひます。何にしても一旦塾の方へ引取りますが、種々用がありますから、人を遣つて、内の小使をお呼び下さい。其から、お呼立て申して濟みませんが、少々お目に懸りたい事がございます。一寸此室までお運びを願ひたい、と河野さんに。……否、院長さんぢやありません、母屋にいらつしやる英臣さん。」

「はあ、大先生に……申し上げませう。」

「何うぞ。あゝ、もし、もし、」

と出掛けた白衣の、腰の肥いのを呼留めて、

「御書見中でもありましたら、御都合に因つて、此方から參りましても可うございますと。」

　馴染んで居るから、默つて頷いて室を出て、表階子の方へ、跫音がして、其切忙しい夕暮の蟬の聲。何處かの室で、新聞を朗讀するのが聞えたが、ものゝ五分間經つたのでは無かつた。二階も未だ下り切るまいと思ふのに、看護婦が、ばた／＼忙しく引返して、發奮に突込むやうに顏を出して、

「お客様ですよ。」

「島山さんの？」

と言ふ、呼吸も引かず、早瀬は目を瞪つて茫然とした。

　昨夜の事の不思議より、今目前の光景を、却つて夢かと思ふやう、恍惚と成つたも道理。

　看護婦の白衣にかさなつて、紫の矢絣の、色の薄いが鮮麗に、朱緞子に銀と觀世水の稍幅細な帶を胸高に、緋鹿子の背負上げして、ほんのり櫻色に上氣しながら、此方を見入つたのは、お妙である！

「まあ！……」

ときよとんとして早瀬は只と瞻めた。

「主税さん。」

と、一年越、十年も戀しく百年も可懷しい聲をかけて、看護婦の傍をすつと拔けて眞直に入つたが、

「最う快くつて？」

と胸を斜めに、帶にさし込んだ塗骨の扇子も共に、差覗くやうにした。

「お孃さん……」とまだ惚として居る。

「しばらくね。」

と前へ言はれて、はじめて吃驚した顏をして、

「先生は？」
「宜しくッて、姉さんも。」と、ちゃんと云ふ。

## 五十

寢臺と椅子との狹い間、目前に其の燃ゆるやうな星が輝いて居るので、辷り下りようとする、其も成らず。蒼空の星を仰ぐが如く、お妙の顏を見上げながら、
「何うして來たんです。誰と。貴女。何時。何の汽車で。」と、一呼吸に慌しい。
「今日の正午の汽車で、今來たわ。惣助ッて肴屋さんが一所なの。」
「え、、め組が御供で。何うして彼を御存じですね。」
「お蔦さんの事よ、」
と言ひかける、口の莟が動いたと思ふと、睫毛が濃くなつて、ほろりとして、振返ると、未だ其處に、看護婦が立つて居るので、慌てゝ袂を取つて、揉込むやうに顏を隱すと、美しい眉のはづれから、振が飜つて、朱鷺色の絽の長襦袢の袖が落ちる。
「今そんな事を聞いちや、厭！」
と突慳貪なやうに云つた。勿、問ひそ其處に人あるに、涙得堪へず、と言ふのである。
看護婦は心得て、
「では、あの、お言託は。」
「此と後にして頂きませう。お孃さん、而して、お伴をしました、め組の奴は？」
「停車場で荷物を取つて來るの。半日なら大丈夫だつて、氷につけてね、貴下の好なお魚を持つて來たのよ。病院なら直ぐ分ります、早くいらつしやいッて、腕車を然う云つて、あの、私も早く來たかつたから、先へ來たわ。皆、然うやつて思つてるのに、貴下は酷いわ。手紙も寄越さないんですもの。お蔦さん……」
と又聲が曇つて、默つて俯向いた主税を見て、
「あの、私ねえ、いろ〳〵澤山話があるわ。入院していらつしやる、と云ふから、どんなに惡いんだらうと思つたら、起きて居られるのね。其だのに、まあ……お蔦さん……私……貴下に叱言を言ふこともあるけれど、大事な用があるから、其を濟ましてから緩りしませうね。」
と甘えるやうに直ぐ繕つて、然も親しげに、
「小刀はあつて？」
餘り唐突な問だつたから、口も利けないで……又目を瞠る。
「では、さあ、私の元結を切つて頂戴。」
「元結を？ お孃さんの。」
「え、、私の髮の、」
と、主税が後へずらないと其の膝に乘つたらう、色氣も無く、寢臺の端に、後向きに薄いお太鼓の腰をかけると、緋鹿子が又燃える。其まゝお妙は俯向いて、玉の如き頸を差伸べ、
「お切んなさいよ、さあ、早くよ。父上も知つて居てよ、可いんだわ。」
と美しく流眄に見返つた時、危く手がふるへて居た。小刀の尖が、夢の如く、元結を彈くと、ゆら〳〵と下つた髮を、お妙が、はらりと掉つたので、颯と流れた薄雲の亂るゝ中から、ぽと落ちた一握の黑髮があつて、主税の膝に搦つたのである。
早瀨は水を浴びたやうに悚然とした。
「お蔦さんに託つたの。あの、記念にね、貴下に上げて下さいッて、主税さん、」
と向う状に、椅子の凭に俯伏せに成ると、拔いて持つた簪の、花片が、リボンを打つて激しく搖れて、
「最う其の他には逢へないのよ。」
お蔦の記念の玉の緒は、右の手に燃ゆるが如く、ひや〳〵と練衣の氷れる如き、筒井筒振分けて、丈にも餘るお妙の髮に、左手を密と掛けながら、今はなか〳〵に胴据つて、主税は、も

の言ふ事も聞に、
「亡くなつたものゝ遺言なんぞ……
死んでも構はない、お前が可い、とおつしやいま
したか、奥様が可い、とおつしやつたんですか
い。こんなものをお蔵へ入れて、御出世前の
大事なお身體ぢやありませんか。あゝ、鶴谷、
鶴谷。」
と貴いものに觸るやうに、靜に其の綫の艶を撫でた。
「私、出世なんかしたか無いわ。髪結さんにでも何にでも成つてよ。」
と勇ましく起直つて、
「父さんがね、吉ちやんが、病氣が治つたら東京へお歸んなさいツて、而して、あの、……お藥學をしませうね。」

# 日蝕

## 五十一

日盛りの田畝道には、草の影も無く、人も見えぬ、村々では、軒から簾を下ろして、羽目を塞いだのさへ少くない。田舎は律儀で、日蝕は日の障とて、其の影には毒あり、光には害あり、熱には病ありと言傳へる。然らぬだに其の年は九分九厘、殆ど皆既蝕と云ふのであつた。

早朝日の出の色から、どんよりとして居たのが、其まゝ消えもせず、曇りもせず、鶏卵色に濁りを帯びて、果しも無き大空に唯一つ。別に他に輝ける日輪があつて、恰も其の雛形の如く、灰色の野山の天に、寂寞として見えた――

風は終日無かつた。蒸々と悪氣の籠つた暑さは、其処等の田畝を壓するやうで、空氣は大半酸化したる如く、嬰兒の泣く聲も沈み、鶏の羽さへ羽叩くに懶げで、庇間にかけた階子に留まつて、熱と中空を仰ぐことへ無ありさうな、透間に射し入る日の光は、風に動かぬ埃に似て、人々の袖に灰を置くやう、身動にも拂はれず、物蔭にも消えず、細かに黒く引包まれたかの思がして、手足も額も同じ色の、顔にも石にも悶るか、とばかり次第に息苦しい。

白晝凝つて、黒く太陽の黄なるを包む、混沌たる雲の箇囲ともならむず光景、萬有あはや死せむとす、と思はしき使者の早打、しつきりなく走るは鴉で。黒き礫の如く、灰色の天狗の如く亂れ飛ぶ、と是に驚かされたやうに成つて、大波を打つのは海よ。其の、山の根を蔽り、岩に躍り、渚に繞つて、沖を高く中空に動けるは、我こゝに天地の間に充溢たり、何物の怪しき影ぞ、圓なる太陽の光を奪ふぞとて、大海原の怒める面を、鐵の如く波はむと、鬨立ち、躍え、憤れる戰であつたが、日は午に近き頃に及、まさに其力盛き、暗澹え、又何ともする術はざる風情して、此の海面を丈夫人は、波を作せ汐を取めて、なよ／＼と傾けた否を細にやうに成つて、黒津、江尻、清水をかけて、三保の岬、田子の浦、久能の濱に、音をも立てず倒れたのである。

一分ずつ暗くなつた、日の二時頃、倍の潮入か、慌しき輦車の音。一町ばかりを絶えず續いて、轟々と田舎道を、清水港の方から久能山の方へ、走らして通る、富士八臺、眞先の腕車が河野大夫人富子で、次のが島山夫人菅子、續いたのが福井縣参事官の新夫人辰子、是が三番目の妹で、其の次に高島田に結つたのが、此の夏卒る工學士と又縁談のある四番の未子で、五ツ目の腕車が絹子と云ふ、三五の妙齡。六臺目にお妙が居た。

一所に東京へと云ふのを、仔細あつて……早瀬が留めて、清水港の海水浴に誘つたのである。

お妙の次を道子が乗つた、ドン尻に、め組の惣助、婦ばかりの一群には花籠に熊蟒めくが、

此奴大切なお嬢の傍を、決して離れる事ではない
　是は蓋し一門の大統領、從五位勳三等河野英臣の發議に出て、景色の見物をかねた、久能山の頂で日蝕の觀測をしようとする催で。此の人達には花見にも月見にも變りはないが、驚いて着眼いた百姓たちの目には、天宮に蝕の變あつて、天人たちが遁げるのだと思へたらう。
　既に清水港の別莊に居る、各々の夫は、別に船をしつらへて、三保まはりに久能の濱へ漕ぎ寄せて、孰も其の愛人の歸途を迎へて、夜釣をしながら海上を戻る計畫。
　小兒たち、幼稚いのは、傳、乳母など、一群に、今日は別莊に殘つた次第。既に前にも言つたやうに、此の發議は英臣で、眞前に手を拍つて贊成したのは菅子で、餘は異論なく喜んで同意したが、島山夫人は就中得意であつた。
　と云ふのは、去年汽車の中で、主税が伊太利人に聞いたと云ふのを、夫人から話し傳へて、未だ何等の風說の無い時、東京の新聞へ、此の日の現象を細かに論じて載せたのは理學士であつたから。其の名忽ち天下に傳へて、靜岡では今度の日蝕を、（島山蝕）――とさへ稱へたのである。

五十二

　田を行く時、白鷺が驚いて立つた。村を出る時、小店の庭の松葉牡丹に、ちら／＼一行の影がさした。聯る腕車は、薄日なれば母衣を拂つて、手に手にさしかざしたいろ／＼の日傘に、恰も五彩の絹を中空に吹き靡かした如く、死したる風も颯と涼しく、美女たちの面を拂つて、久能の麓へ乘附けたが、途中では人一人、行歸の僧にも逢はなかつたのである。
　蝕あり、變あり、兵あり、亂ある、魔に圍まれた今日の、日の城の黑雲を穿つた拔穴の岩に、足がゝりを刻んだ樣な、久能の石段の下へ着くと、茶店は皆靜々と眞夜中の如く戸を鎖して、蜻蛉も飛ばず。白茶けた路ばかり、あか／＼と月影を見るやうに、寂然として居るのを見て、大夫人が、
「野蠻だね。」
　と嘲笑つて、車夫に指揮して、一軒店を開けさして、少時休んで、支度が出來ると、歸りは船だから腕車は不殘歸す事にして、扨て大なる花々の繪を解いて、縱に石段に投げかけた七人の裾袂、ひら／＼と扇子を使ふのが、宛然蝶のひらめくに似て、め組を後押へで、あの、石段にかゝつた。
が、河野の一族、頂へ上つたら、思ひがけない人を見よう。
　是より前、相貌堂々として、何等か銅像の擬ぐが如く、頤に鬚長き一個の紳士の、握に銀の色の燦爛たる、太く逞しき杖を支いて、ナポレオン帽子の庇深く、額に暗き皺を刻み、滿面に燃ゆるが如き怒氣を含んで、頂の方を仰ぎながら、靴音を沈めて、石段を攀ぢて、松の梢に隱れたのがあつた。
　是なむ、こゝに正に、大夫人が爲せる如く、海を行く船の龍頭に作るべき、河野の統領英臣であつたのである。
　英臣が、此の石段を、最う一階で、東照宮の本殿に成らうとする、一場の見霽に上り着いて、海面が、高く其の骨組の丈夫な雙の肩に懸つた時、音に聞えた勘助井戸を左に、右に千仞の絶壁の、豆腐を削つたやうな谷に望んで、幹には浦の苫屋を透し、枝には白き渚を掛け、緑に細波の葉を揃へた、物見の松を其ぞと見るや――松の許なる据置の腰掛に、長く成つて、肱枕して、面を半ば中折の帽子で隱して、羽織を疊んで、懷中に入れて、枕した頭の傍に、薬瓶かと思ふ、小さな包を置いて、悠々と休んで居た一個の青年を見た。

と立向つて、英臣が杖を前につき出した時、日を遮つた帽子を拂つて、柔かに起直つて、待構へ顔に莞と見迎へた。其の青年を誰とかなす——病後の色白きが、清く瘠せて、鶴の如き早瀬主税。

英臣は庇下りに、じろりと視めて、

「疾かつた、なう。」と鷹揚に一ツ頭でしやくる。

「御苦勞樣です。」

と、主税は仰ぐやうにして云つた。

「否、此處で話せうと云うたのは私ぢやで、君の方が病後大儀ぢやつたらう。しかし、こんな事を、好んで持上げたのは其方ぢやで、五分五分か、なう、はゝゝは、」

と髯の中に、唇が薄く動いて、せゝら笑ふ。

早瀬は輕く微笑みながら、

「まあ、お掛けなさいまし。」

と腰掛けた傍を指で彈いた。

「や、此處で可え。話は直き分る。」と英臣は杖を踏張んで、葉巻を銜へた。

「早瀬は結構です、其處で先日のお返事は？」

「何うか爲い、と云ふんぢやつた、なう。最う一遍云うて見い。」

「一遍申しませうかね。」

「うむ、」

と吸ひつけた唾を吐く、

「此處で極めて下さいませうか、過日、病院で掛合ひました時のやうに、久能山で返事しようぢや困りますよ。此處は久能山なんですから。又と云つちや龍爪山へでも行かなきやならない。然うすりや、宛然天狗が寄合ひをつけるやうです。」

「餘計な事を言はんで、簡單に申せ。」

と今の諧謔に稍怒氣を含んで、

「私が對手ぢや、立處に解決して遣る！」

「第一！……」

と言つた……主税の聲は朗であつた。

「貴下の奥さんを離縁なさい。」

## 隼

### 五十三

一言亡狀を極めたにも係らず、英臣は却つて物靜に聞いた。

「何爲か。」

「馬丁貞造と不埒して、お道さんを産んだからです。」

強ひて言を落着けて、

「それから、」

「第二、お道さんを私に下さい。」

「何でぢや？」

「私と、いゝ仲です。」

「むゝ、」

と口の内で言つた。

「それから、」

「第三、お菅さんを、島山から引取つてお了ひなさい。」

「何爲な。」

「私と約束しました。」

「誰と？」

はたと目を怒らすと、早瀬は澄まして、

「私とさ。」

「應、其から？」

「第四、病院をお潰しなさい。」

「何爲かい。」

「醫學士が毒を賣ります。」

「まだ有つた、なう。」と、落着いて尋ねた。

「河野家の家庭は、斯の如く汚れ果てた。……最早や、倅の嫁を娶るのに、他の大切な娘の、身分系圖などを檢べるやうな、不埒な事はいたしますまい。又一門の繁榮を計るために、娘どもを餌にして、婿を釣りますまい。

就中、獨逸文學者酒井俊藏先生の令孃に

して、身の程も辨へず、無禮を仕りました申譯が無い、とお詫びなさい。」
「然うすりや大概、河野家は支離滅裂、貴下の所謂家族主義の滅亡さ。其處で敗軍した大將た、貴下は安東村の貞造の馬小屋へでも引込むんだ。ねえ、まあ、是だけさ。」
と扇子で、そよ〳〵と胸を煽いだ。
時に傾しつゝある太陽を、纔か上に蔽ひ果さむずる修羅の叫喚の物凄じく響くが如く、油蟬の聲の山の根に染み入る中に、英臣は荒らかな聲して、
「發狂人！」
「あゝ、狂人だ、が、他の氣違は出來ないことを云つて狂ふのに、此の狂氣は、出來る相談をして澄まして居るばかりなんだよ。」
舌もやゝ釣る、脣を震かしつゝ、
「で、私が其の請求を肯かんけりや、汝、何うすッとか言ふんぢやなう。」と、太息を吐いたのである。
「此の書類の類を以て、些と古風な事だけれど、恐れながらと、遣らうと云ふのだ。其でも大概、閣下の家は破滅でせうぜ。」
英臣は辛うじて罵り得た。
「騙ぢやなう、」
「騙ですとも。」
「强請ぢやが。汝、」
「强請ですとも。」
「其で汝人間か。」
「畜生でせうか。」
「其でも獨逸語の教師か。」
「否、」
「學者と言はれようか。」
「何ういたしまして、」
「酒井の門生か。」
「其間へ來てからは、そんな者ぢやありません。騙です。」
「何、騙ぢや、」
「强請です。畜生です。而して河野家の仇なんです。」
「默れ！」
と一喝、虎の如き唸をなして、杖を雜と掴つて、
「無禮だ。默れ、小僧。」
「何だ、小父さん。」
と云つた。英臣は身心ともに燃ゆるが如き中にも、思はず掉下す得物を留めると、主税は正面へ顏を出して、呵々と笑つて、
「おい、己を、まあ、何だと思ふ。淺草田畝に巣を持つて、觀音樣へ羽を伸すから、隼の力と綽名アされた、掏摸だよ、巾着切だよ。はゝ、是から其の氣で附合ひねえ、恁う、賴むぜ、小父さん。」

## 五十四

「己が十二の小僧の時よ。朝露の林を分けて、塒を奥山へ出たと思ひねえ。蛙の面へ打かけるやうに、仕かけの噴水が、白粉の禿げた霜げた姉さんの顏を半分に仕切つて、滑車と出て居ら。其處の釣堀に、四人連、皆洋服で、未だ朝の醒めねえ顏も見えて、帽子は被つても大童と云ふ體だ。芳原げえりか、朝ッぱら鯉を釣つて居るぢやねえか。
釣つてるのは鯉だけれど、何處の田畝の鯰だらう。官員で、朝歸りで、洋服で、鈎つてりや馬鹿だ、と天窓から呑んでかゝつて、中でも鯰らしいのの黄金鎖へ手を懸ける、と了つた！
此腕を吽と掴られたんだ。
攫へて打ちでもする事か、片手で澄まし込んで釣るぢやねえか。釣つた奴を魚籠へ入れて、（小僧是を持つて供をしろ。）ッて、一睨睨まれた時は、生れて、はじめて縮んだのさ。
こりや成程ちよろッかな（隼）の手でいかねえ。よく顏も見なかつたのが此方の越度で、人に

品行柄を見たつて知れる――其頃は臺灣の屬官だつたが、今ぢや同一所の稅關長、稻坂と云ふ法學士で、大髯のやうな人物、ついて居た三人は下役だね。

後で聞きや、或時も、結婚したての細君を連れて、芳原を冷かして、格子で馴染の女に逢つて、こ、こ、所に登樓るぜ、と手を引いて連込んで、今夜は情女と遊ぶんだから、お前は次の室で待つてるんだ、と名代へ追遣つて、遊女と寢たと云ふ豪傑さね。

其ツ切、細君も泣かないか、旦那も甚助氣少しもなし。

何時か三月ばかり臺灣を留守にして、若い其の細君を女中と書生を殘して置くと、何處の婦も同一た、前から居る下役の奴々ども、いづれ夫人とか、何子とか云ふ奴等が、女同士、長官の細君の、[illegible]いのを慰んだなさ。下女に[illegible]つて[illegible]をさせたんだね。其の法學士が內へ歸ると、（お歸んなさいまし、さて奧樣は[illegible]、）[illegible]情夜があるやうに言ひつける、と[illegible]開かないで、――（出て行け。）――と怒鳴り附けた。

[illegible]と云つたと思ひます、細君ぢやない、其の下女にさ、何うです。のろかつたり、嫉過ぎたり、凡人業ぢやねえやうな、河野さん、貴下のお姉樣連にや、然う云ふのは有りますまい。

己が攫つたのは其の人だ。首を縮めて、鯉の入つた籠を下げて（魚籃）の丁稚と云ふ形で、ついて行くと、腹こなしだ、とぶらり／＼、眞砂町の酒井先生の內だつた。

學校のお留守だつたが、懇意だから、づか／＼と上つて、小僧も二階へ通されたね。（奧さん、是にもお膳を下さい。）と掏摸にも、同一やうに、御馳走。

女中の手には掛けないで、酒井さんの奧方ともあらう方が、未だ少かつた――縮緬のお羽織で、膳を据ゑて下すつて、（遠慮をしないで召食れ。）と優しく言つて下すつた時にや、己あ始めて淚が出たのよ。

先生がお歸りなさると、四ツ膳の並んだ末に、可愛い小僧が居るぢやねえか。（何だい。）と聞かれたので、法學士が大口開いて（掏摸だよ。）と言はれたので、弗つり留める氣に成つたぜ、犬畜生だけ、情には脆いのよ。

法學士が、（さあ、使賃だ、祝儀だ、）と一圓出して、（酒が飲めなきや飯を食つて最う歸れ、御苦勞だつた、今度ツからもつと上手に攫れよ。）（[illegible]）と言はれて、疊に喰ついて泣いて居ると、（勿體ねえ、奧方の聲がないんだわねえ、）と、（晩の飯を內で食つて、翌日の飯を又內で食はないか、酒井の籠で飼つて遣らう、隼。）と、それから鸚鵡の聲を眞似て、今でも囀る獨逸語だ。

世の中にや河野さん、こんな猿を養つて、育てゝくれる人も有るのに、お前さん方は、まあ何と云ふ、べらぼうな料簡方だい。

可愛い娘たちを玉に使つて、月給高で、婿を選んで、一家の繁昌とは何事だらう。

たま／＼人間に生を受けて、然も別嬪に生れたものを、一生に唯一度、生命とはつりかへの、色も戀も知らせねえで、盲目を占めるやうに野郎の懷へ捻込んで、いや、貞女になれ、賢母になれ、良妻になれ、と云つたつて、手品の種を遣はせやしめえし、然う、うまく行くものか。

見たが可い、然う、己が腕が一寸[illegible]と、學校で、道學者が、新[illegible]細工で拵へた、貞女も賢母も良妻も、ばた／＼と[illegible]しだ。」

英臣の目は血走つた。

## 五十五

「河野の家には限らねえ。凡そ世の中に、家の

爲に、女の兒を親勝手に緣附けるほど慘たらしい事はねえ。お爲ごかしに理窟を言つて、動きの取れないやうに說得すりや、十六や七の何にも知らない、無垢な女が、頭一ツ掉り得るものか。涙含んで、ぼうと成つて、俯向くので話が極つて、凝と逆上せた奴を腕車に乗せて、回生劑のやうな酒をのませる、此奴を三々九度と云ふのよ。其處で寢て起りや人の女房だ。

うつかり他と口でも利きや、直ぐに何の彼のと言はれよう。其で二人が繫つて、光つた態でもして步行けば、親達は緋織の鎧でも着たやうに淺がり身をひけらかすんだれ。

娘が惚れた男に添はせりや、譬ひ味噌漉を提げたつて、玉の冠を被つたよりは嬉しがるのを知られえのか。傍の目からは莚と見えても、當人には綾錦だ。亭主は、おい、親のものぢや無えんだよ。

己が言ふのが噓だと思つたら、お道さんに聞いて見ねえ。病院長の奥様より、馬小屋へ入つても、早瀬と世帯が持ちたいとよ。お菅さんにも聞いて見ねえ。」

一不埒な奴だ！——

と捻いた英臣の髯の色、口を開いて、黒煙に似た。

一不埒は承知よ。不埒を承知でした事を、不埒と言つたつて怯然ともしねえ。喧い、と叱めりや吃驚するかね。

今更慌てる事はないさ、はじめから知れて居ら。お前さんの許のやうな家風で、婿を持たした娘たちと、情事をするくらゐ、下女を演劇に連出すより、もつと容易いのは通相場よ。怯う、最う威張つたつて仕やうがねえ。恐怖くは無いと言へば、」

と微笑みながら、

「そんな野暮な顏をしねえで、よく言ふことを聞け、と云ふに。——

おい、未だ驚く事があるぜ。最う一枚、河野の幹を榮えさゝうと、お前さんが賴みにして居る、四番目の娘だがね、つい、此の間、暑中休暇で、東京から歸つて來た、手入らずの孃さんは、醫學士にけがされたぜ。

己に毒藥を裝らせたし、ばれかゝつたお道さんの一件を、穩便にさせるために、大奧方の計ひで、院長に押附けたんだ。己と合棒の萬太と云ふ、幼馴染の掏摸の夥間が、丁と材料を上げて居ら。

矢張家の爲だらう。河野家の名譽のために、昔惡を知つてる上、お道さんと不都合した、早瀬と云ふ者を毒殺しようと、娘を一人傷物にしたんぢやないか。

其處を言ふのだ。兒とりも家を大切がる殘酷な親だと云ふのは、よ。

何故手をついて懺悔をしない。惡かつた、是からは可愛い娘を決して名聞のために使ひますまい。家柄を鼻にかけて他の娘に無躾も申掛けますまい、と恐入つて了はないよ。小兒一人犧牲にして、毒氣なんぞ喰らないでも、坊主になつて謝んねえな。」

## 五十六

面も觸らず言を繼ぎ、

「其に、お前さん何と云つた。——此の間も病院で、此の掛合をする前に、念のために聞いた時だ。——

斷つて英吉君の嫁に欲しいとお言ひなさる、私が先生のお嬢さんは、實は柳橋の藝者の子だが、其でも差支へは無いのですか、と尋ねたら、お前さん、以ての外な顏をして、いや、途方もない。そんな賤しい素性の者なら、譬へ英吉が其の爲に、憧れ死をしようとも、己たち兩親が承知をせん。家名に係る、と云つたらう。

怯う、お前たちにや限らねえ。世間にや然うした情無え了簡な奴ばかりだから、そんな奴等

へ內當に、河野の一家を槍玉に擧げたんだ。

はじめから話にならねえ緣談だから可いけれど、是が先生も承知の上、孃さんも好いた男で、いざ、と云ふ時、然でねえ系圖しらべをされて、藝者の子だと云ふだけで、破談じもなつた時の、先生御夫婦、お孃さんの心持はどんなだらう。

己ら其を思ふから、人間並にや附合へねえ肩書つきの惡丁稚を、一人前に育てた上、大切な孃さんに惚れて居るなら添はして遣らう、とおつしやつて下すつた、先生御夫婦のお志。掏摸の野郎と顏をならべて、似而非道學者の坂田なんぞを見返さう、と云つた江戸兒のお孃さんに、一式の恩返し、二ッあつても上げたい命を、一ッ棄てるのは安價いものよ。お前さんにや氣の毒だ。無御迷惑でございませう。」

と丁寧に笑つて言つて、

「迷惑や氣の毒を斟酌して巾着切が出來るものか。眞人間でない者に、お前、道理を說いたつて、義理を言つて聞かしたつて、巡査ほどにも恐くは無えから、言句なしに往生するさ。軍に負けた、と思へば可からう。

掏摸も指で突いても、倒れるやうな石垣や、蟻で崩れる濠を穿つて、河野の城を陷たつて、はじまらねえ話ぢやねえか。

お前さん、嘸口惜からう。打ちたくば打て、殺したくば殺しねえ。義理を知つて死なうな道理を知つた己ぢやねえが、孃さんに上げた生命だから、其生命を棄てるので、お道さんや、お菅さんにも、言譯をするつもりだ。死んでも寂しい事はねえ、女房が先へ行つて待つて居ら。

お蔦と二人が、毒蛇に成つて、可愛いお妙さんを守護する寶物よ。見ろ、あの龍宮に在る珠は、惡龍が絡ひ纏つて、其器に非ずして濫りに近づく者があると、呪殺すと云ふぢやないか。

呪詛はれたんだ、呪詛はれたんだ。お妙さんに指を差して、お前たちは呪詛はれたんだ。――」

と膝に手を置き、片面を、怪しきものゝ走るが如く颯と暗くなつた海に向けて、蝕ある凄き日の光に、水底の其の惡龍の影に憧るゝ面色した時、隼の力の容貌は、却つて哲學者の如きものであつた。

英臣は苔蒸せる石の動かざる如く緘默した。

一聲高らかに雉子が啼くと、山は暗くなつた。

勘助井戸の星を覗かうと、末の娘が眞先に翩然と上つて、續いて一人々々、名ある麗人の雲の如く朦朧として露はれた途端に、英臣は豫て其の心構をしたらしい、矢庭に衣兜から短銃を出して、衝と早瀬の胸を狙つた。あはやと抱き留めた惣助は刎倒されて轉んだけれども、渠危し、と一目見て、道子と菅子が、身を以て庇ひに、背より、胸より、犇と主税を庇つたので、英臣は、面を背けて嘆息し、忽ち狙を外らすや否や、大夫人を射て、倒して、硝藥の煙とともに、蝕する日の面を仰ぎつゝ、這の傲岸なる豪傑は、自から其の胸を貫いた。

抱合つて、目を見交はして、姉妹の美人は、身を倒に崖に投じた。あはれ、蔦に纔に留まつた、道子と菅子が色ある名殘は、滅びたる世の海の底に、珊瑚の碎けしに異ならず。

折から沖を遙に、光なき晝の星よと見えて、天に連つた一點の白帆は、二人の夫等の乘れる船にして、且つ死骸の俤に似たのを、妙子に隱して、主税は高く小手を翳した。

其夜、清水港の旅店に於て、爺は山へ柴刈に、と孃さんを慰めつゝ、其のすや〳〵と寐たのを見て、お蔦の黑髮を抱きながら、早瀬は潔く毒を仰いだのである。

早瀬の遺書は、酒井先生と、河野とに宛

つた。

其の文學士河野に宛てたは。――英吉君……島山夫人が、容と色とを以て、君の爲に早瀬を擒にしようとしたのは事實である。又我自から、道子が温良優順の質に乘じて、謀つて情を迎へたのも事實である。けれども、其の孰の操をも傷けぬ。雙互に唯だ默會したのに過ぎないから、乞ふ、兩位の令妹のために、其の淑徳を疑ふことなかれ。特に君が母堂の馬丁と不徳の事の如きは、あり觸れた野人の風說に過ぎなかつた。――事實でないのを確めたに就いて、我が最初の目的の達しられないのに失望したが、幸か、不幸か、淺間の社頭で逢つた病者の名が、偶然貞造と云ふのに便つて、狂言して姉夫人を誘出し得たのであつた。從つて、第四の令妹の事は固より、毒藥の根も葉もないのを、深夜蛾が燈に斃れたのを見て、思ひ着いて、我が同類の萬太と謀つて、渠をして調へしめた毒藥を、我が手に藥の瓶に投じて、直ちに君の家嚴に迫つた。

不義、毒殺、たとへば父子、夫妻、最親至愛の間に於ても、其の實否を正すべく、是を口にすべからざる底の條件を以て、咄嗟に雷發して、河野家の家庭を襲つたのである。私は掏賊だ、はじめから敵に對しては、機謀權略、反間苦肉、有ゆる辣手段を弄して差支へないと信じた。

要は唯、君が家系門閥の誇の上に、一部の間隙を生ぜしめて、氏素性、惡の如き早瀬の前に幾分の讓步をなさしめむ希望に過ぎなかつたに、思はざりき、久能山上の事あらむとは。我は偏に、君の家嚴の、左右一顧の餘裕のない、一時の激怒を惜むとともに、清冽一塵の交るを許さぬ、峻嚴なる其の主義に深大なる敬意を表する。

英吉君、能ふべくは、我意を體して、より美しく、より清き、第二の家庭を建設せよ。人生意氣を感ぜずや――云々の意を認めてあつた。

門族の榮華の雲に蔽はれて、自家の存在と、學者の獨立とを忘れて居た英吉は、日蝕の日の、蝕の晴るゝと共に、嗟嘆して主稅に聞くべく、其の頭腦は明に、其眼は輝いたのである。

早瀬は潔く云々以下、四十二行抹消。――前篇後篇を通じ其の意味にて御覽を願ふ。はじめ新聞に連載の時、此の四十二行なし。後單行出版に際し都合により、徒に添へたるもの。或はおなじ單行本御所有の方々の、こゝにお心づかひもあらむかとて。

# 夏

瀧三條夕日にかゝる新樹かな
新築の青葉がくれとなりにけり
窓々や青田見めぐる羅漢堂
なく蛙白河に關はなかりけり
船頭も饂飩打つなり五月雨
藤棚や雨に紫末濃なる
花二つ紫陽花青き月夜かな
紫の映山紅となりぬ夕月夜
撫子の根に寄る水や夕河原
わが戀は人とる沼の花菖蒲
卯の花や家をめぐれば小き橋

――鏡花全集卷十五「發句」より

# 歌行燈

## 一

宮重大根のふとしく立てし宮柱は、ふろふきの熱田の神のみそなはす、七里のわたし浪ゆたかにして、來往の渡船難なく桑名につきたる悦びのあまり……

と口誦むやうに獨言の、膝栗毛五編の上の讀初め、霜月十日あまりの初夜。中空は冴切つて、星が水垢離取りさうな月明に、踏切の棧橋を渡る影高く、灯ちら／＼と目の下に、遠近の樹立の骨ばかりなのを視めながら、桑名の停車場へ下りた旅客がある。

月の影には相應しい、眞黒な外套の、痩せた身體に些と廣過ぎるを緩く着て、焦茶色の中折帽、眞新しいは可いが、馴れない天窓に山を立てゝ、鍔をしつくりと耳へ被さるばかり深く嵌めた、剩へ、風に取られまいための留紐を、ぶらりと皺びた頰へ下げた工合が、時世なれば、道中、笠も載せられず、と斷念めた風に見える。年配六十二三の、氣ばかり若い彌次郎兵衛。

然まで重荷ではないさうで、唐草模樣の天鵞絨の革鞄に信玄袋を引搦めて、這個を片手。片手に蝙蝠傘を支きながら、

「さて……悦びのあまり名物の燒蛤に酒汲みかはして、……と本文にある處さ、旅籠屋へ着の前に、停車場前の茶店か何かで、一本傾けて參らうかな。(何うだ、喜多八。)と行きたいが、其許は年上で、些とそりが合はぬ。だがね、家元の彌次郎兵衛どの事も、伊勢路では、これ、同伴の喜多八にはぐれて、一人旅のとぼ／＼と、棚からぶら下つた宿屋を尋ねあぐんで、泣きさうに成つたとあるです。處で其許は、道中松並木で出來た道づれの格だ。其の道づれと、何んと一口遣らうではないか、えゝ、捻平さん。」

と苦い顔を澁くした、同伴の老人は、まだ、其の上を四つ五つで、やがて七十なるべし。臘虎皮の鍔なし古帽子を、白い眉尖深々と被つて、鼠の羅紗の道行着た、股引を太く白足袋の雪駄穿。色褪せた鬱金の風呂敷、眞中を紐で結へた包を、西行背負に胸で結んで、これも信玄袋を手に一つ。片手に杖は支いたけれども、足腰はしやんとした、人柄の可いお爺様。

「其の捻平は止しにさつしやい、人聞きが惡うて成らん。道づれは可けれども、道中松並木で出來たと言ふで、何とやら、其の、私が護摩の灰でゞもあるやうに聞えるぢや。」と杖を一つ丁と支くと、後の雁が前に成つて、改札口を早々と出る。

故と一足後へ開いて、隱居が意見に急ぐやうな、連の後姿をじろりと見ながら、

「それ、其處が其れ捻平さね。松並木で出來たと云つて、何もごまのはひには限るまい。尤も若い内は遣つたかも知れんてな。はゝは。」

人も無げに笑ふ手から、引手繰るやうに切符を取られて、はつと驛夫の顔を見て、きよとんと生眞面目。

成程、此の小父御が改札口を出た殿で、何をふら／＼道草したか、汽車は最う遠くの方で、名物燒蛤の白い煙を、夢のやうに月下に吐いて、眞蒼な野路を光つて通る。……

「やがて爰を立出で辿り行くほどに、旅人の唄ふを聞けば、」

と小父御、出た處で、けろりとして又口誦んで、

「捻平さん、可い文句だ、これさ。……
　時雨蛤みやけにさんせ
　　宮のおかめが、……ヤレコリヤ、よヲしよし。」

「旦那、お供は何うで、」

と停車場前の夜の隈に、四五臺朦朧と寂しく並んだ車の中から、車夫が一人、腕組みをしてのつそり出る。

　これを聞くと彌次郎兵衛、口を捻ぢて片頬笑み、

「難有え、圖星と云ふ處へ出て來たぜ。が、同じ事を、これ、(旦那衆戻馬乘らんせんか、)と何故言はぬ。」

「へい、」と言つたが、車夫は變哲もない顏色で、其のまゝ棒立。

## 二

　小父御は外套の袖をふら〳〵と、醉つたやうな風附で、

「遣れよ、さあ、(戻馬乘らんせんか、)と後生だから一つ氣取つてくれ。」

「へい、(戻馬乘らんせんか、)と言ふでございますかね、戻馬乘らんせんか。」

と早口で車夫は實體。

「はゝはゝ、法性寺入道前の關白太政大臣と言つたら腹を立てちやつた、法性寺入道前の關白太政大臣樣と來て居る。」と又アハヽと笑ふ。

「さあ、もし召して下さい。」

と話は極つた筈にして、委細構はず、車夫は取着いて梶棒を差向ける。

　小父御、目を据ゑて故と見て、

「ヤレコリヤ車なんぞ、よヲしよし。」

「否、よしではない。」

と其處に一人つくねんと、添竹に其の、枯菊の縋つた、霜の翁は、旅のあはれを、月空に知つた姿で、

「早く車を雇はつしやれ。手荷物はあり、勝手知れぬ町の中を、何を當にぶらつかうで。」と口叱言で半ば呟く。

「いや、先づ一つ、(よヲしよし、)と切出さんと、本文に合はぬてさ。處へ喜多八が口を出して、(せうろく四錢で乘るべいか。)馬士が、(そんなら、ようせよせ。)と言ひやす、馬がヒイン〳〵と嘶う。」

「若いもの、其の人に構ふまい。車を早く。川口の湊屋と言ふ旅籠屋へ行くのぢや。」

「えゝ、二臺でございますね。」

「何んでも構はぬ、私は急ぐに……」と後向きに摑まつて、乘つた雪駄を爪立てたから、蹴込みへ入れた革鞄を跨ぎ、首に掛けた風呂敷包を外しもしないで搖つて置く。

「一蓮托生、死なば諸共、捻平待ちやれ。」

と、くす〳〵笑つて、小父御も車にしやんと乘る。……

「湊屋だえ、」

「おいよ。」

で、二臺、月に提灯の灯黄色に、廣場の端へ駈込むと……石高路をがた〳〵しながら、板塀の小路、土塀の辻、徑路を縫ふと見えて、寂しい處幾曲り。やがて二階家が建續き、町幅が絲のやう、月の光を廂で覆うて、兩側の暗い軒に、掛行燈が疎に白く、枯柳に星が亂れて、壁の蒼いのが處々。長い通の突當りには、火の見の階子が、遠山の霧を破つて、半鐘の形活けるが如し。……火の用心さつさりやせう、金棒の音に夜更けの景色。霜枯時の事ながら、月は格子にあるものを、桑名の妓達は宵寢と見える、寂しい新地へ差掛つた。

　輻の下に流るゝ道は、細き水銀の川の如く、

柱の黒い家の狀、恰も獺が祭禮をして、白張の地口行燈を掛連ねた、鐵橋を渡るやうである。

爺様の乗つた前の車が、はたと留つた。

あれ聞け……寂寞とした一條廓の、棟瓦にも響き轉げる、轍の音も留まるばかり、灘の浪を川に寄せて、千里の果も同じ水に、筑前の沖の月影を、白銀の絲で手繰つたやうに、星に晃めく唄の聲。

博多帶しめ、筑前絞、
　田舍の人とは思はれぬ、
歩行く姿が、柳町、

と博多節を流して居る。……つい目の前の軒陰に。……白地の手拭、頰被、すらりと痩ぎすな男の姿の、軒の其の、うどんと紅で書いた看板の前に、横顔ながら俯向いて、たゞ影法師のやうに彳むのがあつた。

捻平はフト車の上から、頸の風呂敷包のまゝ振向いて、何か背後へ聲を掛けた。……と同時に彌次郎兵衛の車も、丁度其の唄ふ聲を、町の中で引挾んで、がつきと留まつた。が、話の意味は通ぜずに、其のまゝ捻平のが又曳出す……後の車も續いて驅け出す。と二臺が一寸摺れ／＼に成つて、すぐ舊の通り後前に、流るゝやうな月夜の車。

## 三

お月様が一寸出て松の影、
アラ、ドッコイショ、

と沖の浪の月の中へ、颯と、撥を投げたやうに、霜を切つて、唄ひ棄てた。……饂飩屋の門に博多節を彈いたのは、轉軫を稍々縱に、三味線の手を緩めると、撥を逆手に、其の柄で彈くやうにして、仄のりと、薄赤い、其屋の板障子をすらりと開けた。

「御免なさいよ。」

頰被の中の清い目が、釜から吹出す湯氣の裏へすつきりと、出たのを一目、驚いた顔をしたのは、帳場の端に土間を跨いで、腰掛けながら、うつかり聞惚れて居た亭主で、紺の筒袖にめくら縞の前垂がけ、草色の股引で、尻からげの形、によいと立つて、

「出ないぜえ。」

は、ずるいな。……案ずるに我が家の門附を聞徳に、いざ、其の段に成つた處で、件の「出ないぜえ」を極めてこまそ心積りを、唐突に頰被を突込まれて、大分狼狽へたものらしい、尤も居合はした客はなかつた。

門附は、澄まして、背後じめに戸を閉てながら、三味線を斜にずつと入つて、

「あい、親方は出ずとも可いのさ。私の方で入るのだから。……ねえ、女房さん、そんなものぢやありませんかね。」

と些と笑聲が交つて聞えた。

女房は、これも現下の博多節に、うつかり氣を取られて、釜前の湯氣に朦として立つて居た。……淺黄の襷、白い腕を、部厚な釜の蓋に一寸載せたが、丸髷をがつくりとした、色の白い、齒を染めた中年増。此の途端に颯と瞼を赤うしたが、竈の前を横ツちよに、かた／＼と下駄の音で、亭主の膝を斜交ひに、帳場の錢箱へがつちりと手を入れる。

「あゝ、御心配には及びません。」

と門附は物優しく、

「串戯だ、強請るんぢやありません。此方が客だよ、客なんですよ。」

細長い土間の一方は、薄汚れた縱に六疊ばかりの市松疊、其處へ上れば坐れるのを、釜に近い、床几の上に、ト足を伸ばして、

「何うもね、寒くつて堪らないから、一杯御馳走に成らうと思つて。え、親方、決して其の御迷惑を掛けるもんぢやありません。」

で、優柔しく、頰被を取つた額を、唯見ると迷

惑處かい、目鼻立ちのきりゝとした、細面の、険に凄は見えるけれども、目の清らかな、眉の濃い、二十八九の人品な兄哥である。

「いや、いや、何うもな、」

と亭主は前へ出て揉手をしながら。

「しかし、此の御天氣續きで、先づ結構でござりやすよ。」と何となく煤けた天井を仰ぎ〳〵、帳場の上の神棚へ目を外らす。

「お師匠さん、」

女房前垂を一寸撫でて、

「お銚子でございますかい。」と莞爾する。

門附は手拭の上へ撥を置いて、腰へ三味線を小取廻し、内端に片膝を上げながら、床几の上に素足の胡坐。

ト裾を一つ掻込んで、

「早速一合、酒は良いのを。」

「えゝ、もう飛切りのおつけ申しますよ。」と女房は土間を横歩行き。左側の疊に据ゑた火鉢の中を、邪險に火箸で掻い掘つて、赫と赤く成つた處を、床几の門附へずいと寄せ、

「さあ、まあ、お當りなさりまし。」

「難有え、」

と鐵拐に褄へ引挾んで、ほうと呼吸を一つ長く吐いた。

「世の中にや、こんな炭火があると思ふと、里心が付いて何ほ寒い。堪らねえ。女房さん、銚子を何うかね、ヤケと言ふ熱燗にしておくんなさい、些と飲んで、うんと酔はうと云ふ、卑劣な癖が付いてるんだ、お察しものですぜ、えゝ、親方。」

「へゝゝ、貴方、それ極熱ぢや。」

女房は染めた前歯を美しく、

「あい〳〵。」

## 四

「時に何かね、今此家の前を車が二臺、旅の人を乗せて駈抜けたつけ、此の町を、……」

と干した猪口で門を指して、

「二三町行つた處で、左側の、屋根の大きさうな家へ着けたのが、蒼く月明に見えたがね、……彼處は何かい、旅籠屋ですか。」

「湊屋でございますと、なあ、」と女房が、釜の前から亭主を見向く。

「湊屋、湊屋、湊屋。此の土地ぢや、まあ彼處一軒でござりますよ。古い家ぢやが名代で。前には大きな女郎屋ぢやつたのが、旅籠屋に成つたかな、部屋々々も昔風其のまゝな家ぢやに、奥座敷の欄干の外が、海と一所の、大い揖斐の川口ぢや。白帆の船も通りますわ。鱸は刎ねる、鯔は飛ぶ、頓と類のない趣のある家ぢや、處が、時々崖裏の石垣から、獺が這込んで、夜廊下や厠に點いた燈を消して、悪戯をするげに言ひます。が、別に可恐しい化方はしませぬで。こんな月の良い晩には、庭で鉢叩きをして見せる……時雨れた夜さりは、天保錢一つ使賃で、豆腐を買ひに行くと言ふ。其も旅の衆の愛嬌ぢや言うて、豪い評判の好い旅籠屋ですがな、……お前様、此の土地はまだ何も知りなさらんかい。」

「あい、昨夜はじめて此方へ流込んで來たばかりさ。一向方角も何も分らない。月夜も闇の烏さね。」

と俯向いて、一口。

「どれ延びない内、底を一つ温めよう、遣つたり！　ほつ、」

と言つて、目を擦つて面を背けた。

「利く、利く、……恐しい利く唐辛子だ。懲う、親方の前だがね、つい過般も此の手を食つたよ、料簡が悪いのさ。何、上方筋の唐辛子だ、鬼灯の皮が精々だらう。利くものか、と高を括つてお錢は要らない藥味なり、どしこと丼へぶちまけて、松坂で飛上つた。……又遣つたさ、色

氣は無えね、涙と鼻か一時だ。と手の甲で引擦る。

女房が銚子のかはり目を、ト掌で燗を當つた。

「お師匠さん、貴方は東の方ですなあ。」

「然うさ、生は東だが、身上は北山さね。」と言ふ時、徳利の底を掌つて、垂々と猪口へしたむ。

「で、お前様、湊屋へ泊んなさらうと言ふのかな。」

其れだ、と門口で斷られう、と亭主は其の段含ませたさうな氣の可い顔色。

「御串戯もんでせう、泊りは木賃と極つて居ます、菜種と箆と草鞋の留守居、壁の破れた處から、鼠が首を長くして、私の歸るのを待つて居る。四五日は此の桑名へ御厄介に成らうと思ふ……上旅籠の湊屋で泊めてくれさうな御人品なら、御當家へ、一家の御無心申したいね、どんなもんです、女房さん。」

「こんなでよくは、泊めますわ。」

と身輕に銚子を運んで來る。……亭主驚いた眉を動かし、

「滅相な。」と帳場を背負つて、立塞がる體に腰を掛けた。いや、此の時まで、紺の鯉口に手首を拱いて、案山子の如く立つたりける。

「はゝはゝ、お言葉には及びません、饂飩屋さんで泊めるものは、醤油の雨宿りか、鰹節の行者だらう。」

と呵々と一人で笑つた。

「お師匠さん、一つお酌さしておくんなさいまし。」と女房は市松の疊の端から、薄く腰を掛込んで、土間を切つて、差向ひに銚子を取つた。

「飛んでもない事、お忙しいに。」

「否な、内ぢや蒸汽屋さんへ出前ばかりが主ですから、御覧の通りゆつくりぢやえな。眞個にお師匠さん佳いお聲ですな。なあ、貴方。」と、横顔で亭主を流眄。

「然よちや。」

とばかりて、煙草を、ぱつ／＼。

「なあ、今お聞かせやした、あの博多節を聞いたればな、……私や、ほんに、身に染みてぶる／＼と震へました。」

## 五

「然う讃められちやお座が醒める、醉も醒めさうで遣瀬がない。たかゞ大道藝人さ。」

と兄哥は照れた顔で腕組みした。

「私がお世辭を言ふものですかな、眞實ですえ。あの、其の、なあ、悚然とするやうな、恍惚するやうな、緊めたやうな、投げたやうな、緩めたやうな、まあ、何んと言うて可いやらなう。海の中に柳があつたら、お月様の影の中へ、身を投げて死にたいやうな、……何んとも言ひやうのない心持に成つたのですえ。」

と、脊筋を曲つて、顔を入れる。

「お方、お方。」

と急込んで、調もない事に不機嫌な御亭が呼ばる。

「何ぢやいし。」と振向くと、……亭主何時の間にか、神棚の下に、斜と構へて、帳面を引繰つて、苦く睨み、

「升屋が懸は未だ寄越さんかい。」

と算盤を、ぱちり／＼。

「……お師匠さん。」

「今時何うしたえ、三十日でもありもせんに。」

「師匠ぢやないわ、升屋が懸ぢやい。」

「そないに急に氣に成るなら、貴下、ちやと行つて取つて來い。」

と下拵への捌調子。亭主ぎやふんと參つた體で、

「二進が一進、二進が一進、二一天作の五、五

「二十六七八九。」と、鶯の喉の伸縮みは、加減だけで済むものを、醤油に水の割算段と笑ふ湯気の白けた處へ、星の凍てさうな按摩の笛。月天心の冬の町に、恰もこれ凩を吹込む聲す。

門附の兄哥は、ふと痩せた肩を抱いて、

「あゝ、霜に響く。」……と言つた聲が、物語を讀むやうに、朗に冴えて、且つ鋭く聞えた。

「按摩が通る……女房さん。」

「えゝ、笛を吹いてどすな。」

「音色、怪しからず身に染みる、堪らなく寒いものだ。」

と割膝に跪坐つて、飲みさしの茶の冷えたのを、茶碗に傾け、さぶりと土間へ、

「一ッ此奴へ注いでおくんな、其の方がお前さんも手數が要らない。」

「何んの、私は些とも構ふことないのですえ。」

「否、御深切は難有いが、藥罐の底へ消炭で、湧く／＼あとから醒める處へ、氷で咽喉を扱られさうな、あのピイ／＼を聞かされちや、身體にひゞつ裂がはひりさうだ。……持つて來な。」

と手を振るばかりに、一息にぐつと呷つた。

「あれ、お見事。」

と目を瞪つて、

「まあな、だけれどもな、無理酒おしいなえ。澤山、あの、心配する方があるんですやろ。」

「お方、八百屋の勘定は。」

と亭主贔屓して頤を出す。女房は面白半分、見返りもしないで、

「取りに來たらお拂ひやすな。」

「えゝ……と三百は三錢かい。」

で、算盤を空に彈く。

「女房さん。」

と呼んだ門附の聲が沈んだ。

「何んです。」

「立續けに最う一つ。而して後を直ぐ、合點かね。」

「あい。合點でございますが、貴方、豪い大酒ですな。」

「せめて酒でも參らずば。」

と陽氣な聲を出しかけたが、つと仰向いて眥を上げた。

「あれ、又來たぜ、按摩の笛が、北の方の辻から聞える。……や、こんなに、未だ夜は更けまいのに、屋根越の町一つ、恁う……田圃の畔かとも思ふ處でも吹いて居ら。」

と身忙しさうに片膝立てゝ、當所なく瞰しながら、

「音は同じだが音が違ふ……女房さん、どれが、どんな顔の按摩だね。」

と聞く。……其時、白眼の座頭の首が、月に蒼ざめて覗きさうに、屋の棟を高く見た……目が鋭い。

「あれ、貴方、鹿の啼聲ではあるまいし、笛の音で按摩の容子は分りませぬもの。」

「眞個だ。」

と寂しく笑つた、波々注いだる茶碗の酒を乾と見ながら、

「杯の月を酌まうよ、座頭殿。」と差俯いて獨言した。……が博多節の文句か、知らず、陰々として物凄しい、表の障子も裏透くばかり、霜の月の影冴えて、辻に、町に、按摩の笛、其の或ものは波に響く。

## 六

「や、按摩どのか。何んだ、唐突に驚かせる。……要らんよ、要りませぬ。」

と彌次郎兵衞。湊屋の奥座敷、此れが上段の間とも見える、次に六疊の附いた中古の十疊。障子の背後は直ぐに縁、欄干にずらりと硝子戸の外は、水煙渺として、曇らぬ空に雲かと見る、長洲の端に星一つ、水に近く晃いた、揖斐川の

流の灘は、潮を籠めた霧白く、月にも苫を伏せ、蓑を乾す、繋船の帆柱が森差と垣根に近い。其處に燭臺を傍にして、火鉢に手を懸け、怪訝な顏して、

「はて、お早いお着きお草臥れ樣で、と茶を一ツ持つて出て、年增の女中が、唯今引込んだばかりの處。これから膳にもせう、酒にもせうと思ふ一寸の隙間へ、のそりと出した、あの面はえ？……

此の方、あの年增めを見遣つて、入交つて來るは若いのか、と前髮の正面でも見ようと思へば、霜げた冬瓜に草鞋を打着けた、と言ふ異體な面を、襖の影から斜に出して、

〔按摩でやす。〕と又、惡く拔衣紋で、胸を折つて、橫坐りに、蠟燭火へ紙火屋のかゝつた灯の向うへ、ぬいと半身で出た工合が、見越入道の御靈へ、目見得の雪女郎を連れて出た、化の慶庵と言ふ體だ。

要らぬと言へば、默然で、腰から前へ、板廊下の暗い方へ、スーと消えたり……怨敵退散。」

と苦笑ひして、……床の正面に火桶を抱へた、法然天窓の、連の、其の容樣を見遣つて、

「捻平さん、お互に年は取りたくないてね。些と辨でも、とあるべき處を、お膳の前に按摩が出ますよ。……見くびつたものではないか。」

「兎角、其の年效もなく、旅籠屋の式臺口から、何んと、事も慇懃に出迎へた、家の隱居らしい切髮の婆樣をじろりと見て、

〔ヤヤ、難有い、佛壇の中に美婦が見えるわ、簀の子の天井から落ち度い。〕などと、膝栗毛の書拔きを遣らつしやるで魔が魅すのぢや。屋臺は古いわ、造りも廣大。」

と丸木の床柱を下から見上げた。

「千年の桑かの。川の底も料られぬ。燈も暗いわ、獺も出ようず。些とこれに懲りさつしやるが可い。」

「さん候、これに懲りぬ事なし。」

と奧齒のあたりを脹らまして微笑みながら、兩手を懷に、胸を擴く、襖の上なる額を讀む。題して曰く、臨風榜可小樓。

「……とある、如何樣な。」

「床に活けたは、白の小菊ぢや、一束にして摑みざし、喝采。」と讃める。

「いや、翁寂びた事を言ふわ。」

「それ〳〵、唯今懲りると言うた口の下から、何んぢや、其れは。やあ、見やれ、其許の袖口から、茶色の手の、もそ〳〵とした奴が、ぶらりと出たわ、揖斐川の獺の。」

「ほい、」

と視めて、

「南無三寶。」と、慌しく引込める。

「何んぢや其れは。」

「はゝゝは、拙者うまれつき粗忽にいたして、よくものを落す處から、内の婆どのが計略で、手袋を、ソレ、ト左右絲で繫いだものさね。袖から胸へ潛らして、ずいと引張つて兩手へ嵌めるだ。何んと恐しからう。捻平さん、憑くまで身上を思うてくれる婆どのに對しても、無駄な祝儀は出せませんな。あゝ、南無阿彌陀佛。」

「狸めが。」

と背を圓くして橫を向く。

「それ、年增が來る。祕すべし、祕すべし。」

で、手袋をたくし込む。

處へ、女中が手を支いて、

「御支度をなさりますか。」

「いや、酒と今草鞋を解いたばかりだ。泊めて貰ふから支度はしません。」と眞面目に言ふ。

色は淺黑いが容子の可い、其の年增の女中が、これには妙な顏をして、

「へい、御飯は召あがりますか。」

「先づ酒から飲まうよ。」
「あい、あしあかりますのは？」
「姉さん、此處は約束通り、焼蛤が名物だの。」

七

「其のな、焼蛤は、今も町はづれの葦簀張なんぞでいたします。矢張松毬で焼きませぬと美味うござりませんで、當家では蒸したのを差上げます、味淋入れに味美う蒸します。」
「はゝあ、榮螺の壺焼と言つた形、大道店で遣りますな。……松並木を向うに見て、松毬のちよろ／＼火、蛤の煙が此の月夜に立たうなら、丁ど龍宮の田樂で、乙姫様が洒落に姉さんかぶりを遊ばさうと云ふ處、又一段の趣だらうが、故と其れがために忍んでも出られまい。……當家の味淋蒸、其れが好からう。」
と小父御納得した顔して頷く。
「では、蛤でめしあがりますか。」
「何と、」と、故とらしく耳を出す。
「あのな、蛤でおあがりますか。」
「いや、箸で食ひやせう、はゝはゝ。」
と獨りで笑つて、懐中から膝栗毛の五篇を一冊、ホイと出して、
「難有い。」と額を叩く。

女中も思はず噴飯して、
「あれ、貴下は彌次郎兵衛様でございますな。」
「其の通り……此の度の參宮には、都合あつて五二館と云ふのへ泊つたが、内宮様へ参る途中、古市の旅籠屋、藤屋の前を通つた時は、前度いかい世話に成つた氣で、薄暗いまで奥深いあの店頭に、眞鍮の獅噛火鉢がぴか／＼とあるのを見て、略儀ながら、車の上から、帽子を脱いでお辭儀をして來た。が、町が狭いで、向う側の茶店の新姐に、此の少兀を見せるのが辛かつたよ。」
と燈に向けて、てらりと光らす。
「ほゝ、ほゝ。」
「あはゝ。」
で捻平も打笑ふと、……此の機會に誘はれたか、――先刻二人が着いた頃には、三味線太鼓で、トヽン、ヂヤカ／＼ぢやぢやぢやんと沸返るばかりだつた――丁度八ツ橋形に歩行板が架つて、土間を隔てた隣の座敷に、凡そ十四五人の同勢で、女交りに騒いだのが、今しがた按摩が影を見せた時分から、大河の汐に引かれたらしく、一時人氣勢が、遠く／＼裾擴がりに茫と退いて、寂とした。たゞだゞつ廣い中を、猿が啼きながら走廻るやうに、キヤ／＼とする雛妓の甲走つた聲が聞えて、重く、づつしりと、覆かぶさる風に、何を話すともなく多人數の物音のして居たのが、此の時、洞穴から風が抜けたやうに哄と動揺めく。
女中も笑ひ引きに、すつと立つ。
「いや、此方は陰々として居る。」
「其の方が無事で可いの。」
と捻平は火桶の上に背くゞまつて、其處へ投出した膝栗毛を差覗き、
「しかし思ひつきぢや、私は何うも此の寐つきが悪いで、今夜は一つ枕許の行燈で讀んで見ませう。」
「止しなさい、これを讀むと胸が切つて、尚ほ目が冴えて寐られなくなります。」
「何を言はつしやる、當事もない、膝栗毛を見て泣くものがあらうかい。私が事を言はつしやる。」
と言ふ處へ、以前の年増に小女がついて出て、膳と銚子を揃へて運んだ。
「蛤は直きに出來ます。」
「可、可。」
「何よりも酒の事。」
捻平も、猪口を急ぐ。
「さて汝にも一つ遣らう。燗の可い處を一杯

遣らつしやい」と彌次郎兵衛、酒飲みの癖で、些とぶる／＼する手に一杯傾けた猪口を、膳の外へ、其の膝栗毛の本の傍へ、疊の上に丁と置いて、

「姉さん、一つ酌いで遣つてくれ。」

と眞顏で言ふ。

小女が、きよとんとして顏を見ると、捻平に追つかけの酌をして居た年増が見向いて、

「喜野、お酌ぎ。其の旦那はな、彌次郎兵衛樣ぢやで、喜多八さんにお杯を上げなさるんや。」

と早や心得たものである。

## 八

小父御は何故か調子を沈めて、

「あゝ、能く言つた、俺が彌次郎兵衛は難有い。居心は可、酒は可。これで喜多八さへ一緒だつたら、膝栗毛を正のもので、太平の民となる處を、さて、杯をさしたばかりで、恁う酌いだ酒へ、蠟燭の灯のちら／＼と映る處は、何うやら餓鬼に手向けたやうだ。あの又馬鹿野郎は何うして居る……」と膝に手を支き、疊の杯を凝と見て、歎息な顏する。

捻平も、不圖此の時横を向いて腕組した。

「旦那、其の喜多八さんを何んでお連れなさりませんね。」

と愛嬌造つて女中は笑ふ。彌次郎寂しく打笑み、

「むゝ、そりや何よ、其の本の本文にある通り、伊勢の山田ではぐれた奴さ。いゝ年をして婆娑氣な、酒も飲めば巫山戯もするが、世の中は道中同然。暖いにつけ、寒いにつけ、杖柱とも思ふ同伴の若いものに別れると、六十の迷兒に成つて、もし此の邊に棚からぶら下がつたやうな宿屋はござりませんかと、賑かな町の中を獨りとぼ／＼と尋ね飽倦んで、もう落膽しやしたと云つてな、どつかり知らぬ家の店頭へ腰を落込んで、一服無心をした處……彼處を讀むと串戯ではない。……捻平さん、眞から以て涙が出ます。」

と言ふ、瞼に映つて、蠟燭の火がちら／＼とする。

「姉や、心を切つたり。」

「はい。」

と女中が向うを向く時、捻平も目をしばたゝいたが、

「ヤ、あの騷ぎわい。」

と鼻の下を長くして、土間越の隣室へ傾き、

「家いぞ金盥まで持出いたわ、人間は皆裾が天井へ宙乘りして、疊を皿小鉢が踊るさうな。おゝ／＼、三味線太鼓が鎬を削つて打合ふ樣子ぢや。」

「もし、お騷がしうござりませう、お氣の毒でござります。丁ど霜月でな、今年度の新兵さんが入營なさりますで、其の送別會ぢや言うて、彼方此方、皆、此の景氣でござります。でもな、お寐ります時分には時間に成るで靜まりませう。何うぞ御辛抱なさいまして。」

「いや／＼、其れには及ばぬ、其れには及ばぬ。」

と小父御、二人の女中の顏へ、等分に手を掉つて、

「却つて賑かで大きに可い。惡く寂寞して、又唐突に按摩に出られては弱るからな。」

「へい、按摩がな。」と何か知らず、女中も讀めぬ顏して聞返す。

捻平此の話を、打消すやうに咳して、

「さ、一獻參らう。何うぢや、此方へも酌人を些と頼んで、……ええ、それ何んとか言ふの。……桑名の殿樣時雨でお茶漬……とか言ふ、土地の唄でも聞かうではないかの。陽氣にな、くわつと一つ。旅の恥は搔棄てぢや。主はソレ叱言のやうな勸進帳でも遣らつしやい。」

染めようにも構は無いで、私はこれ、手拭でも畳んで法然天窓へ載せようでの。」と捻平が坐りながら膝を伸して高く居直る。と彌次郎眼を瞬つて、
「や、平家以來の謀叛、其許の發議は珍らしい、二方荒神鞍なしで・眞中へ乘りやせう。」
と夥しく景氣を直して、
「姉え、何んでも構はん、四五人木遣で曳いて來い。」
と肩を張つて大きに力む。
女中酌の手を差控へて、銚子を、膝に、と眞直に立てながら、
「さあ、今彼方の座敷で、もう一人二人言うて、お掛けやしたが、喜野、藝妓さんはあつたかな?」
小女が猪首で頷き、
「誰も居やはらぬ言うてどやんした。」
「かいな、旦那さん、お氣の毒さまでござります。狹い土地に、數のない藝妓やに依つて、恁うして會なんぞ立込みますと、目星い妓たちは、ちやつとの間に皆出拂ひます。然うか言うて、東京のお客樣に、餘りな人も見せられはしませずな、容色が好いとか、藝がたぎつたとか言ふのでござりませぬとなあ……」
「いや、恁うなつては、宿賃を拂はずに、此人方等夜遁をするまでも、三味線を聞かなきや納まらない。眇、いぐちでない以上は、古道具屋からでも呼んでくれ。」
「待ちなさりまし。おゝ、あの島屋の新妓さんなら屹と居るやろ。聞いて見や。喜野、ソレお急ぎぢや、廊下走つて、電話へ掛れや。」

## 九

「持つて來い、さあ、何んだ風車。」
急に勢の可い聲を出した、饂飩屋に飲む博多節の兄哥は、霜の上の燗酒で、月あかりに直ぐ醒める、色の白いのも其まゝであつたが、二三杯、呷切の茶碗酒で、目の縁へ颯と醉が出た。
「勝手にピイ／＼吹いて居れ、でん／＼太鼓に笙の笛、此方あ小兒だ、なあ、阿媽。……いや、女房さん、其れにしても何かね、御當所は、此の桑名と云ふ所は、按摩の多い所かね。」と、笛の音に瞳がちらつく。
「貴下もな、按摩の目は鰯や云ひます。名物は蛤ぢやもの、別に何も、多い譯はないけれど、こゝは新地なり、旅籠屋のある町やに因つて、つい、あの衆が、彼方此方から稼ぎに來るわな。」
「然うだ、成程新地だつた。」と何故か一人で納得して、氣の拔けたやうな片手を支く。
「お師匠さん、貴下、これから其の音聲を藝妓屋の門で聞かしてお見やす。眞個に、人死が出來ようも知れぬぜな。」と襟の處で、塗盆をくりと廻す。
「飛んだ合せかゞみだね、人死が出來て堪るものか。第一、藝妓屋の前へは、うつかり立てねえ。」
「何故え。」
「惡くすると敵に出會す。」と投首する。
「あれ、藝が身を助けると言ふ、……お師匠さん、貴下藝妓ゆゑの、お身の上かえ。……眞個にた、仇だすな。」
「逢つた! 藝者の方で、私が敵さ。」
「あれ、のけ／＼と、あんた憎いこと言ひなさんす。」と言ふ處へ、月は片明りの向う側。狹い町の、ものゝ氣勢にも暗い軒下を、からころ、からころ、駒下駄の音が、土間に淺込むやうに響いて來る。……と直ぐ其の足許を潜るやうに、按摩の笛が寂しく聞える。
門附は屹と見た。
「噂をすれば、藝妓はんが通りまつせ。貴下見

たいなら障子を開けやす……其のかはり、敵打たれうと思うてな。」

「あゝ、何時でも打たれて遣ら。ちよツ、可厭に煩く笛を吹くない。」

かたりと門の戸を外から開ける。

「えゝ、吃驚すら。」

「今晩は、——饂飩六ツ急いでな。」と草履穿きの半纏着、背中へ白く月を浴びて、赤い鼻をぬいと出す。

「へい〳〵」と筒抜けの高調子で、亭主帳場へ棒に突立ち、

「お方、そりや早うせぬかい。」

女房は澄ましたもので、

「美しい聲やな、何處の？」と聞く。

「こなひだ山田の新町から住替へた、こんの島屋の新妓ぢや。」と言ひながら、鼻赤の若い衆は、覗いた額を外に曲げる。

と門附は、背後の壁へ胸を反らして、一寸伸上るやうにして、戸に立つ男の肩越しに、皎とした月の廓の、細い通を見透かした。

駒下駄は些と遲く、未だ、からころと響いたのである。

「澤山出なさるかな。」

「まあ、こんの饂飩のやうには行かぬで。」

「其の氣で、すぐに屆けますえ。」

「はい頼んます。」と、男は歸る。

亭主帳場から背後向きに、日和下駄を探つて下り、がたりぴしりと手當り強く、其處へ廣蓋を出掛ける。はゝあ、夫婦二人の此の店、氣の毒千萬、御亭が出前持を兼ねると見えたり。

「裏表とも氣を注けるぢや、可いか、可いか。一寸道寄りをして來るで、可いか、お方。」

と其處等じろ〳〵と睨廻して、新地の月に提灯入らず、片手懷にしたなりで、亭主が出前、ヤケにがつと戸を開けた、後を閉めないで、ひよこひよこ出て行く。

釜の湯氣が颯と分れて、門附の頬に影がさした。

女房横合から來て、

「何時まで、うつかり見送つてぢや、そんなに敵が打たれたいの。」

「女房さん、桑名ぢやあ……藝者の箱屋は按摩かい。」と慄氣としたやうに肩を細く、此の時漸と居直つて、女房を見た、色が惡い。

十

「然うさ、如何に伊勢の濱荻だつて、按摩の箱屋と云ふのはなからう。私もなからうとは思ふが、今向う側を何んとか屋の新妓とかいふのが、からんころんと通るのを、何心なく見送ると、あの、一軒おき二軒おきの、軒行燈では淺黄になり、月影では青くなつて、薄い紫の座敷着で、褄を蹴出さず、ひつそりと白い襟を俯向いて、足の運びも進まないやうに何んとなく悄れて行く。……其の後から、鼠色の影法師。女の影なら月に地を這ふ筈だに、寒い道陸神が、のそ〳〵と四五尺離れた處を、ずつと前方まで附添つたんだ。腰附、肩附、歩行く振、捏ちて附着けたやうな不恰好な天窓の工合、何う見ても按摩だね、盲人らしい、あんない千鳥よ。……私あ何んだ、だから、按摩が箱屋をすると云つちや可笑しい、盲目に成つた箱屋かも知れないぜ。」

「どんな風の、どれな。」

と門へ出さうにする。

「いや、最う見えない。呼ばれた家へ入つたらしい。二人とも、ずつと前方で居なくなつた。然うか。あゝ、盲目の箱屋は居ねえのか。ア又殖えたぜ……影がさす、笛の音に影がさす、按摩の笛が降るやうだ。此の寒い月に積つたら、桑名の町は針の山に成るだらう、堪らねえ。」

とぐいと呷つて、

「えゝ、ヤケに飲め、一杯何うだ、女房さん附合ひねえ。御亭主は留守だが、明け放しよ、……構ふもんか、それ向ふ三軒の屋根越に、雪坊主のやうな山の影が覗いてら。」

と門を振向き、あ、と叫んで、

「來た、來た、來た、來やあがつた、來やあがつた、按摩々々、按摩。」

と呼吸も吐かず、續け樣に急込んだ、自分の聲に、町の中に、ぬい、と立つて、杖を脚許へ斜交ひに突張りながら、目を白く仰向いて、月に小鼻を照らされた。流しの按摩が、呼ばれたものと心得て、其のまゝ凍附くやうに立留まつたのも門附はよく分らぬ狀で、

「影か、影か、阿媽、眞個の按摩か、影法師か。」

と激しく聞く。

「眞個なら、何うおしる。貴下、そんなに按摩さんが戀しいかな。」

「戀しいよ！　あゝ。」

と呼吸を吐いて、見直して、眉を顰めながら、聲高に笑つた。

「はゝゝは、按摩にこがれて此の體さ。おゝ、按摩さん、按摩さん、這入つてくんねえ。」

門附は、撥を除けて、床几を叩いて、

「一ツ頼まう、女房さん、濟まないが一寸借りるぜ。」

「此の疊へ來て横にお成りな、按摩さん、お客だす、あとを閉めておくんなさい。」

「へい。」

コト／＼と杖の音。

「えゝ……丁と早や、影法師も同然なもので。」

と掠れ聲を白く出して、黑いけんちゆう羊羹色の被布を着た、燈の影は、赤く其の皺の中へさし込んだが、日和下駄から消えても失せず、片手を泳ぎ、片手で酒の香を嗅分けるやうに入つた。

「聞えたか。」

と此の門附、權のあるものいひで、五六本銚子の並んだ、膳を又傍へずらす。

「へゝゝ、」と一寸鼻をすゝつて、ふん、とけなりさうな香を嗅ぐ。

「待ちこがれたもんだから、戸外を犬が走つても、按摩さんに見えたのさ。恁う、惡く言ふんぢやないぜ。……其處へぬつくりと顯れたらう、醉つては居る、幻かと思つた。」

「眞個に待兼ねて居なさつたえ。あの、笛の音ばかり氣にしなさるので、私も何うやら讀めたんだが、漸と分つたわな、何んともお待遠でござんしたの。」

これは、おかみさま、御繁昌。

「お客はお一人ぢや、ゆつくり療治してあげておくれ、其れなりお寢つたら、お泊め申さう。」

と言ふ。

按摩どの、けろりとして、

「えゝ、其の氣で念入りに一ツ攫りませうで。」

と我が手を握つて、拉ぐやうにぐいと揉んだ。

「はい、旦那。」

「旦那ぢやねえ、ものもらひだ。」と又叩る。

女房が竊と睨んで、

「滅相な、あの、言ひなさる。」

## 十一

「いや、横になる處ぢやない、澤山だ、此處で澤山だよ。……第一背中へ攫られて、一呼吸でも應へられるか何うだか、實は其れさへ覺束ない。惡くすると、其のまゝ目を眩して打倒れようも知れんのさ。體よく按摩さんに攫殺されると云つた形だ。」

と眞顏で言ふ。

「飛んだ事をおつしやりませ、田舍でも、これでも、長年年期を入れました杉山流のものでござります。鳩尾に鍼をお打たせになりましても、決して間違ひのあるやうなものではござりませ

ぬ。」と呆れたやうに、按摩の剝く目は蒼かりけり。

「うまい、まづいを言ふのぢやない。何時の幾日にも何時でも、洒落にもな、生れてから未だ一度も按摩さんの味を知らないんだよ。」

「まあ、あんなに貴下、こがれなさつた癖に。」

「そりや、張つて／＼仕様がないから、目にちらつくほど待つたがね、いざ……と成ると初産です、灸の皮切も同じ事さ。何うにも勝手が分らない、痛いんだか、痒いんだか、風説に因ると擽つたいとね。多分私も擽つたからうと思ふ……處が生憎、母親が操正しく、是でも密夫の兒ぢやないさうで、其の擽つたがりやう此の上なし。……あれ、あんなあの、握飯を拵へるやうな手附をされる、と其の手で揉まれるかと思つたばかりで、最う堪らなく擽つたい。何うも、あゝ、こりや不可え。」

と胸腹へ兩腕を、しつかりついて、居竦むやうに脊筋を捻る。

「はゝゝは、これは何うも。」と按摩は手持不沙汰な趣。

女房更めて顔を覗いて、

「何うして、まあ、可愛らしい。」

……同じ事を、可哀相だ、と言つてくんねえ。……然らかと言つて、恁う張つちや、身も皮も石に成つて固りさうな、背が詰つて胸は裂ける……揉んで貰はなくては遣切れない。遣れ、構はない。」

と激しい聲して、片膝を屹と立て、

「殺す氣で遣れ。此方は覺悟だ、さあ。ときに女房さん、袖摺り合ふのも他生の緣ッさ。旅空で掛けて恁うした御世話を受けるのも前の世の何かだらう、何んだか、おなごりが惜いんです。摑殺されりや其切だ、最一つ擇りだが注いでおくれ、別れの杯に成らうも知れん。」

と雫を切つて、ついと出すと、他愛なさも餘りな、口の色の變りやう、眦も屹と成つたれば、女房は氣を打たれ、默然で唯目を睜る。

「さあ按摩さん。」

「えゝ。」

「女房さん酌いどくれよ！」

「はあ、」と酌をする手が些と震へた。

此の茶碗を、一息に仰ぎ干すと、按摩が手を掛けたのと一緒であつた。

がた／＼と身震ひしたが、面は幸に紅潮して、

「あゝ、腸へ染透る！」

「何か其の、何事か存じませぬが、按摩は大丈夫でござります。」と、これもおどつく。

「一先つ、」

と突張つた手をぐたりと緩めて、

「生命に別條は無さゝうだ、しかし、しかし應へる。」

とがつくり俯向いたのが、ぶら／＼した。

一月は寒し、炎のやうな其の指と、火水と成つて骨に響く。胸は冷い、耳は熱い。肉は燃える、血は冷える。あつ、」と言つて、兩手を落した。吃驚して按摩が手を引く、其の嘴や鮹に似たり。

兄哥は、確乎起直つて、

「いや、手をやすめず遣つてくれ、あはれと思つて靜に……よしんば徐と揉まれた處で、私は五體が碎ける思ひだ。

其の思ひをするのが可厭さに、種々に惱んだんだが、避ければ摺着く、過ぎれば引張る、逃げれば追ふ。形が無ければ聲がする……ピイ／＼笛は攻太鼓だ。恁う犇々と寄着かれちや、弱いものには我慢が出來ない。淵に臨んで、崖の上に瞰下ろして踏留まる膽玉のないものは、一層の思ひ、眞逆に飛込みます。破れかぶれよ、按摩さん、從兄弟再從兄弟か、伯父甥か、親類

なら、さあ、敵を取れ。私はね、……お仲間の按摩を一人殺して居るんだ。」

## 十二

「今から丁ど三年前。……其の年は、此の月から一月後の師走の末に名古屋へ用があつて來た。序と言つては惡いけれど、稼の繰廻しが何うにか附いて、參宮が出來ると言ふのも、お伊勢樣の思召、冥加のほど難有い。ゆつくり古市に逗留して、其れこそ次手に、……淺熊山の雲も見よう、鼓ヶ嶽の調も聞から。二見ぢや初日を拜んで、堺橋から、池の浦、沖の島で空が別れる、上郡から志摩へ入つて日和山を見物する。……海が凪いだら船を出して、伊良子ヶ崎の海鼠で飲まう、何でも五日六日は逗留と云ふつもりで。……山田では尾上町の藤屋へ泊つた。驚くべからず――まさか其の時は私だつて、浴衣に袷ぢや居やしない。

着換へに紋着の一枚も持つた、縞で襲衣の若旦那さ、……ま、然う、雲助が傾城買の昔を語る……負惜みを言ふのぢやないよ。何も自分の働きで然うした譯ぢやないのだから。――聞きねえ、親なり、叔父なり師匠なり、恩人なりと言ふ、……私が稼業ぢや江戸で一番、日本中の家元の大黑柱と云ふ、少兀の苦い面した阿父がある。

いや、其の顏色に似合はない、氣さくに巫山戲た江戸兒でね。行年其の時六十歳を、三つと刻んだはをかしいが、數へ年のサバを算んで、私が代理に宿帳をつける時は、天地人とか何んとか言つて、禪の問答をするやうに、指を三本、ひよいと出してギロリと睨む……五十七歳とかけと云ふのさ。可いかね、其の氣だもの……旅籠屋の女中が出てお給仕をする前では、阿父さんが大の禁句さ。……與一兵衞ぢやあるめえし、汝、定九郎のやうに呼ぶなえ、と脣を捻曲げて、叔父さんとも言はせねえ、兄さんと呼べ、との御意だね。

此の叔父さんのお供だらう。道中の面白さ。酒はよし、景色はよし、日和は續く。何處へ行つても女はふらない、師走の山路に、嫁菜が盛りで、然も大輪が咲いて居た。

と此の桑名、四日市、龜山と、伊勢路へ掛つた汽車の中から、おなじ切符の誰彼が――其の催について名古屋へ行つた、私たちの、まあ、……興行か、……其の興行の風説をする。噓にも何うやら、私の評判も可さゝうな。叔父は固より。……何事も言ふには及ばん。――私が口で饒舌つては、流儀の恥に成らうから、まあ、何某と言つたばかりで、世間は承知すると思つて、聞きねえ。

處がね、其の私たちの事を言ふ次手に、此の伊勢へ入つてから、屹と一緒に出る、人の名がある。可いかい、山田の古市に惣市と云ふ按摩鍼だ。」

門附は其の名を言ふ時、うつとりと瞳を据ゑた。背を抱くやうに背後に立つた按摩にも、床几に近く裾を投げて、向うに腰を掛けた女房にも、目もくれず、凝と天井を仰ぎながら、胸前にかゝる湯氣を忘れたやうに手で捌いて、

一按摩だ、が其の按摩が、舊は然る大名に仕へた士族の果で、聞きねえ、私等が流儀と、同じ其の道の藝の上手。江戸の宗家も、本山も、當國古市に於て、一人で兼ねたり、と言ふ勢で、自ら宗山と名告る天狗。高慢も高慢だが、また出來る事も出來る。……東京の本場から、誰も來て怯かされた。某も參つて拉がれた。あれで一眼でも有らうなら、三重縣に居る代物ではない。今度名古屋へ來た連中も然うぢや、贋物ではなからうから、何も宗山に稽古をして貰へとは言はぬけれど、鰻の他に、鯛がある、味を知つて歸れば可いに。――と才發けた商人風

のと、でつぷりした金の入歯の、土地の物持とは思はれる奴の話したのが、風説の中でも耳に付いた。

叔父はこく／＼坐睡をして居たつけ。私あ若気だ、襟巻で顔を隠して、睨むやうに二人を見たのよ、ね。

宿の藤屋へ着いてからも、故と、叔父を一人で湯へ遣り……女中にも一寸聞く、……挨拶に出た番頭にも、按摩の惣市、宗山と云ふ、これこれした素人が居るか、と聞くと、誰の返事も同じ事。思つたよりは高名で、現に、此の頃も藤屋に泊つた、何某侯の御隠居の御召に因つて、上下で座敷を勤た時、（さてもな、鼓ケ嶽が近い所為か、これほどの松風は、東京でも聞けぬ。）と御賞美。

（的等にも聞かせたい。）と宗山が言はれます、とちよろりと諂つた。私が膝間を、――

（的等。）と言ふ。

的等の一人、憚く言ふ私だ……」

## 十三

「寄ほ聞けば、古市のはづれに、其の惣市、小料理屋の店をして、妓の三人もある、大した勢だ、と言ふだらう。――何を！　按摩の分際で、宗家の宗の字、斯の道の本山が凄じい。僭う、按摩さん、舞臺の差は堪忍してくんな。」

と、颯と痛さうに胸を壓へた。

――後で、能く気がつけば、信州のお百姓は、東京の芝居なんぞ、眞個の者はないとて威張る。……な、宮重大根が日本一なら、蕪の千枚漬も皇国無双で、早く言へば、此の桑名の、焼蛤も三都無類さ。

其の気で居れば可いものを、二十四の前途なり、若気の一途に苛々して、第一其の宗山が気に入らない。（的等。）もぐつと癪に障れば、妾三人で鞘とした。

維新以来の世がはりに、……一時私等の稼業がすたれて、弱聞が食ふに困つたと思へ。弓矢取つては一萬石、大名株の芸人が、イヤ楊子を削る、かるめら焼を露店で賣る。……蕎麦屋の出前持に成るのもあり、現在私が其小父御などは、田舎の役場に小使をして、濁り酒のかすに酔つて、田圃の畔に寝たもんです……

其の粋がね、可いかい、私の阿母が、振袖の年頃を、嫁る處へ附込んで、小金を溜めた按摩めが、些とばかりの貸を楯に、妾にせい、と逼り懸る。――否く雨下駄を踏返して、實證でなくつちや見なかつた隅田川へ落ちようとしたつさ。――其の話にでも嫌ひな按摩が。

えゝ。

待て、見えない両眼で、汝が身の程を明く見るやう、療治を一つしてくれう。

て、翌日は謹んで、両宮へ参拝した。

其の尊さに、其の晩ばかりは些との酒で宵寝をした、叔父の夜具の裾を叩いて、枕許へ水も置き、

（女中、其處等へ見物に。）

と言つた心は、穴を塞へて、宗山を退治る料簡。

と出た、風が荒い。荒いが此の風、五十鈴川で劃られて、宇治橋の向うまでは吹くまいが、朝熊の山の峡を下から吹上げる……此が悪く生温くつて、灯の前ぢや砂が黄色い。月は雲の底に澱りして居る。神路山の樹は暗くても、二見の浪は白からう。酷い勢、ぱつと吹くので、たぢ／＼と成る。帽子が飛ぶから、其のまま、宿屋の店へ投込した……と番頭へ頼んで、坊さんが忍ぶやうに頭巾を目深々する。着替へるのも面倒で、其儘で紋付さ。――料理屋には店中へ雪崩込んで、何の洒落にな、手探で座敷をしたもんです。

門附に成る前兆さ、厭な見せかれ。」と片手を袖へ、二の腕深く突込んだ、片手で狙ふやうに茶碗を啣へて、

「ね、吉原へ行くと、まだ宵だのに寂然して居る。……軒が、がたぴしと鳴つて、軒行燈がばッばッ揺れる。三味線の音もしたけれど、吹きさらはれて大屋根へ猫の姿でけし飛ぶやうさ。何の事はない、今夜の此の寂しい新地へ、風を持つて来て、打着けたと思へば可い。

一軒、地の底と窪んだ処に、溝板から直ぐに竹の欄干に成つて、毛氈の端は刎上り、畳に赤い島が出来て、洋燈は油煙に燻つたが、眞白に塗つた姉さんが一人居る、空氣銃、吹矢の店へ、ひよろりとして引掛つたね。

取着きに、股を支いて、怪しく正面に眼の光る、悟つた顔の達磨様と、女の顔とを、七分三分に狙ひながら、

（此の邊に宗山ッて按摩は居るかい。）と此處で實は様子を聞く氣さ。押懸けて行かうたつて些とも勝手が知れないから。

（先生様かね、いらつしやります。）と何と、（的等。）の一人に、先生を、然も、様づけに呼ぶだらう。

（實は、其の人の何を、一つ、聞きたくつて来たんだが、誰が行つても頼まれてくるだらうか。）と尋ねると、大熨斗を書いた幕の蔭から、色の蒼い、鬢の亂れた、痩せた中年増が顔を出して、

（知己のない、旅の方には何うか知らぬ、お望なら内から案内して上げませうか。）と言ふ。

茶代を奮發んで、頼むと言つた。

（案内して上げなはれ、可い旦那や、氣を付けて。）と目配せをする、……と造作はない、其の塗つたのが、いきなり、欄干を跨いで出る奴さ。」

## 十四

「雨袖で口を塞いで、風の中を俯向いて行く。……其の女の案内で、つい向う路地を入ると、何處も吹附けるから、戸を鎖したが、怪しげな行燈の煽つて見える、ごたくした両側の長屋の中に、溝板の間い、格子戸造りで、此の一軒だけ二階家。

軒に、お手軽御料理としたのが、宗山先生の住居だつた。

（お客様。）と云ふ女の送りで、ずつと入る。直ぐ其處の長火鉢を取巻いて、三人ばかり、變な女が、立膝やら、横坐りやら、猫板に頬杖やら、料理の方は隙らしい。……上框の正面が、取着きの狭い階子段です。

（座敷は二階かい、）と突然頬被を取つて上らうとすると、風立つので燈を置かない。眞暗だから一寸待つて、と色めいてざわつき出す。と其の拍子に風のなぐれで、奴等の上の釣洋燈がぱつと消えた。

其處へ、中仕切の障子が、次の室の燈にほのめいて、二枚見えた。眞中へ、ぱつと映つたのが、大坊主の額の出た、脣の大い影法師。むゝ、宗山め、居るな、と思ふと、憎い事には……影法師の、其の背中に摑つて、坊主を揉んでるのが華奢らしい島田髷で、此の影は、濃く映つた。

火燵々々、と女どもが云ふ内に、

（えへん、）と咳を太くして、大な手で、灰吹を持上げたのが見えて、離れて烟管が映る。

——最う一倍、其の時髑髏が擴がつたのは、袖を開いたらしい。此奴、寝ん寝子の廣袖を着て居る。

漸と臺洋燈を點けて、

（お待遠でした、さあ、）

つて二階へ。吹矢の店から送つて來た女は、と中段から一寸見ると、両膝をづしりと、其處に居た奴の背後へ火鉢を離れて、俯向いて坐

つた。
（あの娘で可いのかな、他にもござりますよつて。）
と六畳の表座敷で低声で言ふんだ。——はゝあ、商賣も大略分つた、と思ふと、其奴が、
（お誂は。）
と大な聲。
（あつさりしたもので一寸一口、其處で……）
實は……御主人の按摩さんの、咽喉が一つ聞きたいのだ、と話した。
（咽喉？）……と其奴がね、異に蔑んだ笑ひ方をしたものです。
（先生樣の……でござりますか、早速然う申しませう。）
で、地獄の手曳め、急に衣紋繕ひをして下りる。少時して上つて來た年紀の少い十六七が、……こりや何うした、よく言ふ口だが芥溜に水仙です、鶴です。帶も襟も唐縮緬ぢやあるが、もみぢのやうに美しい。細縮緬のふつくりしたのに、淺黄鹿の子の絞高な手柄を掛けた。やあ、三人あると云ふ、妾の一人か。おゝん神の膝許で沙汰の限りな！　宗山坊主の背中を揉んでた島田髷の影らしい。惜しや、五十鈴川の星と澄まで上で世の中も、鯰の鰭で濁らう、と可哀に思ふ。此の娘が紫の袱紗に載せて、薄茶を持つて來たんです。
いや、御本山の御見識。其の咽喉を聞きに來たと成ると、……客に先つ袴を穿かせる仕向をするな、眞劍勝負面白い。で、此方も勢、懷中から羽織を出して着直したんだね。
やがて、又持出した、杯と云ふのが、朱塗に二見ケ浦を金蒔繪した、杯臺に構へたのは凄からう。
（まづ一ツ上つて、此方へ。）
と按摩の方から、此の杯の指圖をする。其の工合が、謹んで聞け、と云つた、頗る權高なものさ。
どかりと其處へ構へ込んだ。其の容子が膝も腹もづんぐりして、胴中ほど咽喉が太い。耳の傍から眉間へ掛けて、小蛇のやうに筋が畝くる。眉が薄く、鼻がひしやげて、ソレ其の唇の厚い事、お剩に頰骨がギシと出て、歯を噛むとガチガチと鳴りさう。左の一眼べとりと盲ひ、右が白眼で、ぐるりと瞰つた、然も一面、念入の黑痘痕だ。
が、爭はれないのは、不具者の相格、肩つきばかりは、みじめらしく悄乎して、猪の熊入道もがつくり投首の投衣紋で居たんだよ。」

十五

「否な、何も私が意地惡を言ふわけではないよ。」
と湊屋の女中、前垂の膝を堅くして、——傍に柔かな髪の房りした島田の鬢を重さうに差俯向く、……襟足白く冷たさうに、水紅色の羽二重の、無地の長襦袢の肩が辷つて、寒げに脊筋の抜けるまで、弱やかに、打悄れた、殘んの嫁菜花の薄紫、淺黄のやうに目に淡い、藤色縮緬の二枚着で、姿の寂しい、二十ばかりの若い藝者を流眄に掛けつゝ、
「此のお座敷は貰うて上げるから、なあ貴女、最うちやつと内へお去にや。……島家の、あの三重さんやな、貴女、お三重さん、お歸り！」
と屹と言ふ。
「お前さんがおいでやで、ようお客さんの御機嫌を取つてくれるであらうと、小女ばかり附けて置いて、私が勝手へ立違うて居る中や、……勿體ない、お客たちの、お年寄なが氣に入らぬか、近頃山田から來た言うて、此方の私の許を見くびつたか、酌をせい、と仰有つても、浮々とした顏はせず……三味線聞かうとおつしやれば、鼻の頭で笑うたげな、傍に居た喜野が見兼

ねて、私の袖を引きに來た。

先刻から、あゝ、仰うと、目の眩くなるまで、機嫌を取るやうにして、私が貴女の調子を取つて、よしこの一つ上方唄でも、何うぞ三味線の音をさしておくれ。お客様がお寂しげな、座敷が浮かぬ、お見やんせ、蠟燭の灯も白けると、賴むやうにして聞かいても、知らぬ、知らぬ、と言通す。三味線は貴女、禁物か。下手や言うて、知らぬ云うて、曲なりにもお座つき一つ彈けぬ藝妓が何處にある。

よう、思うてもお見。平の座敷か、其でないか。貴客がたのお人柄を見りや分るに、何で貴女、勤める氣や。私が濟まぬ。さ、お立ち。えゝ、私が箱を下げて遣るから。」

と優しいのがツンと立つて、襖際に横にした三味線を邪險に取つて、衝と縦様に引立てる。

「あゝれ、」

はつと裳を摺らして、取縋るやうに、女中の膝を竊と抱き、袖を引き、三味線を引留めた。お三重の姿は崩るゝ如く、芍薬の花の散るに似て、

「堪忍して下さいまし、堪忍して、堪忍して、」

と、呼吸の切れる聲が濕んで、

「お客様にも、此のお内へも、な、何で私が失禮しませう。眞個に、あの、眞個に三味線は出來ませんもの、姉さん、」

と言が途絶えた。……

「今しがたも、な、他家のお座敷、隅の方に坐つて居ました。不斷ではない、兵隊さんの送別會、大陽氣に騷ぐのに、藝のないものは置かん、衣服を脱いで踊るんなら可、可厭なら下げると……私一人歸されて、主人の家へ戻りますと、直ぐに酷いめに逢ひました、え。

三味線も彈けず、踊も出來ぬ、座敷で衣服が脱げないなら、内で脱げ、引剝ぐと、な、帯も何も取られた上、臺所で突伏せられて、引窓を故と開けた、寒いお月様のさす影で、恥かしいなあ、柄杓で水を立續けて乳へも胸へもかけられましたの。

此方から、あの、お座敷を掛けて下さいますと、何うでせう、炬燵で温めた襦袢を着せて、東京のお客おさせさうなと、な、取つて置きの衣服を出して、能う勤めて歸れや言うて、御主人が手で、駒下駄まで出すんです。

勤めるたつて、何うしませう……踊は立つて歩行くことも出來ませんし、三味線は、其が姉さん、手を當てれば誰にだつて、音のせぬ事はないけれど、彈いて聞かせとおつしやるもの、どうして私唄へます。……

不具でもないに情ない。調子が自分で出來ませんと思ひますと、何を何うして、お座敷へ置いて頂けようと思ひますと、氣が怯けて氣が怯けて、口も滿足利けませんから、何が氣に入らないで、失禮な顏をすると、お思ひ遊ばすのも無理はない、なあ。……

此のお家へは、お臺所で、洗ひ物のお手傳をいたします。姉さん、え、姉さん。」

と袖を擦つて、一生懸命、うるんだ目許を見得もなく、仰向けに成つて女中の顏。……色が見る〳〵柔いで、突いて立つた三味線の棹も撓みさうに成つた、と見ると、二人の客へ、向直つた、ふつくりとある綾の帶の結目で、倚ほ其の女中の袂を壓へて。……

# 十六

お三重は、而して、更めて二個の老人に手を支いた。

「藝者でお呼び遊ばした、と思ひますと、……御役に立たず、極りが惡うございまして、お銚子を持ちますにも手が震へてなりません。下婢をお傍へお置き遊ばしたとお思ひなさいまして、お休みになりますまでお使ひなすつて下さいま

し。お背中を敲きませう、な、何うぞな、お肩を揉まして下さいまし、其なら一生懸命に精を出します。」

と惜氣もなく前髪を疊につくまで平伏した。三指づきの折りかゞみが、こんな中でも打上る。

讀本を開いて、道中の絵をじろ〳〵と默つて見て居た捻平が、重くるしい口を開けて、

「子孫末代よい意見ぢや、旅で藝者を呼ぶなぞは、なう、お互に以後謹まう……」と火箸に手を置く。

所在なさゝうに半眼で、正面に臨風榜可小樓を仰ぎながら、煙草を忘れた巻莨、此時、口許へ火を着けて、慌てて灰へ抛つて、彌次郎兵衛は一つ咽せた。

「えゝ、いや、女中、……追つて祝儀はする。此處でと思ふが、其の娘が氣が詰らうから、何處か小座敷へ休ませて皆で饂飩でも食べてくれ。私が驕る。で、何か面白い話をして遊ばして、聽て可い時分に歸すが可い。」と、冷くなつた猪口を取つて、寂しさうに衝と飲んだ。

女中は、これよりさき、支いて突立つた其の三味線を、次の室の暗い方へ衝と押遣つて、がつくりと筋が萎えた風に、折重なるまで擦寄りながら、默然で、燈の影に水の如く打搖ぐ、お三重の背中を撫つて居た。

「島屋の亭が、そんな酷い事をしをるかえ。可いわ、内の御隱居に然う言うて、沙汰をして上げよう。心安う思うておいで、眞個にまあ、能う貴女、額へ疵もつけんの。」

と、かよわい腕を撫下ろす。

「あゝ、其も賣物ぢや言ふだけの斟酌に違ひない。……お客樣に禮言ひや。さ、而して、何かを話しがてら、御隱居の炬燵へおいで。切下髮に頭巾被つて、丁度た、羊羹切つて、茶を食べてや。けども、」

とお三重の、其の清らかな襟許から、優しい鬢毛を差覗くやうに、右瞻左瞻て、

「貴女、因果やな、眞個に、三味線は彈けぬかい。ペンともシャンとも。」

で、故と慰めるやうに吻々と笑つた。

人の情に溶けたと見える……氷る涙の玉を散らして、はつと泣いた聲の下で、

「はい、頤掛けをしましても、鹽斷ちまでしましたけれど、何うしても分りません、調子が一つ出來ません、性來でござんせう。」

師走の、闇夜に、白梅の面を蠟に照らされる。

「踊もかい。」

「は……い、」

「泣くな、弱蟲、さあ一つ飲まんか！　元氣をつけて。向後何處へか呼ばれた時は、怯えるなよ。ジャカ〳〵と引鳴らせ、絲瓜の皮で掻廻すだ、琴も胡弓も用はない。銅鑼鐃鈸を叩けさ。簫の笛をピイと遣れ、上手下手は誰にも分らぬ。其なら藝なしとは言はれまい。踊が出來ずば體操だ。一、二」

と左右へ、羽織の紐の斷れるばかり大手を擴げ、寬濶な胸を反らすと、

「三よ。」と、庄屋殿が鐵破二つ、ぬいと前へ突出いて、臂を張る如く呵々と彌次郎兵衛。

「これ、其の位な事は出來よう。いや、其も度胸だな。見た處、其のやうに氣が弱くては、如何な事も遣つけられまい、可哀相に。」と聲が搾れる。

「あの……私が、自分から、言ひます事は出來ません、お恥かしいのでございますが、舞の眞似が少しばかり立てますの、其も唯一ツだけ。」

と云ふ顏を俯向けて、恥かしさうに又手を支く。

「舞へるかえ、舞へるのかえ。」

と女中は嬉しさうな聲をして、

「おゝ、踊や言ふて明かんのおすか、聞へるのなら立つておくれ、此のお座敷、遠慮は入らん。待ちなはれ、地が要らう。これ喜野、彼處の廣間へ行つてな、内の千が然う言うたて、誰でも彈けるのを借りて來やよ。」

とぼんとして居た小女の喜野が立たうとする、と、名告つたお千が、打傾いて、優しく口許を一寸曲げて頷いて、

「待つて、待つて、」

# 十七

「一時と違ふ。……一度營處へ行きなさると、日曜でなうては出られぬ、……お國の爲やで、馴れぬ苦勞をしなさんす、新兵さんの送別會や。女衆が大勢居ても、一人拔けてもお座敷が寂しくなるもの。

可いわ、旅の恥は搔棄てを反對なが、一泊りのお客さんの前、私が三味線を搔廻さう。お三重さん、立つのは何？ 有るものか、無いものか言ふも行過ぎた……有るものとて無いけれど、何うにか間に合はせたいものではある。」

「あら、姉さん。」

と、三味線取りに立たうとした、お千の膝を袖で壓へて、此とはなじろんだ、お三重の愛嬌。

「一緒に合ふなら踊ります。あのな、私のはな、お能の舞の眞似なんです。」と、言ひも果てず、お千の膝に顏を隱して小父御と捻平に背向に成つた初々しさ。包ましやかな姿ながら、身を揉む姿の着崩れして、袖を離れて疊に長い、襦袢の袖は媚かしい。

「何、其の舞を舞ふのかい。」と彌次郎兵衞は一言云ふ。

捻平膝の本をばつたり伏せて、

「さて、飲まう。手酌でよし。此處で舞たぞは願ひ下げぢや。せめてお題目の太鼓にさつしやい。ふあはゝゝゝ、」と何故か皺枯れた高笑ひ、此の時ばかり天井に哄と響いた。

「捻平さん、捻さん。」

「おゝ。」

と不性げに渾と應へる。

「何も道中の話の種ぢや、一寸見物をしようと思ふね。」

「先づ、御免ぢや。」

「然らば、其許は目を瞑るだ。」

「えゝ、緣起の惡い事を言はさる。……明日にも江戸へ歸つて、可愛い孫娘の顏を見るまでは、死んでもなか〳〵目は瞑らぬ。」

「さて〳〵捻るわ、ソレ其處が捻平さね。勝手になされ。さあ、あの娘立つたり、此の爺樣に遠慮は入らぬぞ。それ、何にも藝がないと云うて尻腰さすらうと卑下をする。どんな眞似でも一つ遣れば、立派な藝者の面目が立つ。祝儀取るにも心持が可からうから、是非見たい。が、しかし心のまゝにしなよ、決して勤を強ひるおやないぞ。」

「あんなに仰有つて下さるもの。さあ、どんな事するのや知らんが、まづうても大事ない、大事ない、それ、支度は入らぬかい。」

「あい、」

と僅かに身を起すと、紫の襟を噛むやうに——ふつくりしたのが、あはれに窶れた——

頤深く、恥かしさうに、內懷を覗いたが、膚身に着けたと思はるゝ……胸やゝ白き衣紋を透かして、濃い紫の細い包、袱紗の縮緬が飜然と飜ると、燭臺に照つて、颯と輝く、銀の地の、あゝ、白魚の指に重さうな、一本の舞扇。

晃然とあるのを押頂くやう、前髮を掛けて、扇を其の、玉簪の如く額に當てたを、其のまゝ折目高にきり〳〵と、月の出汐の波の影、靜に照々と開くとともに、顏を隱して、反らした指のみ、兩方親骨にちらりと白い。

久川口の汐加減、隣の廣間の人動搖きが颯

と退く。

唯見れば皎然たる銀の地に、黄金の雲を散らして、紺青の月、唯一輪を描いたる、扇の影に蘚澄みて、

「――其時あま人申様、もし此たまを取得たらば、此御子を世継の御位になし給へと申しかば、子細あらじと領承し給ふ、扨て我子ゆゑに捨ん命、露ほども惜からじと、千尋のなはを腰につけ、もし此玉をとり得たらば、此なはを動かすべし、其時人々ちからをそへ――」

と調子が緊つて、

「……ひきあげ給へと約束し、一つの利劔を抜持つて、」

と扇をきりゝと袖を直すと、手練ぞ見ゆる、自から、衣紋の位に年長けて、品を定めた其の顔、硝子戸越に月さして、霜の川浪照添ふ俤。膝立据ゑた體にも、燭臺の花颯と流るゝ。

「あゝ、待ていゝ」

と捻平、力の籠つた聲を掛けた。

## 十八

で、火鉢をずつと傍へ引いて、

「女中、も些とこれへ火をおくれ。いや、立つに及ばん。其の、鐵瓶をはづせば可し。」と捻平、がいひつける。

此の場合なり、何となく、お千も起居に身體が緊つた。

靜に炭火を移させながら、捻平は膝をずらすと、革鞄などは次の室へ……其だけ床の間に差置いた……車の上でも項に掛けた風呂敷包を、重いものゝやうに両手で柔かに取つて、膝の上へ据ゑながら、お千の顔を除けて、火鉢の上へ片手を裏表かざしつゝ、

「あゝ、これ、お三重さんとか言ふの、其のお娘、手を上げられい。さ、手を上げて、」

と言ふ。……お三重は利劔で立たうとしたのを、慌しく捻平に留められたので、此の時まで、差開いた其の舞扇が、唇の花に霞むまで、俯向いた顔の、ひたと額について、片手を疊に支いて居た。恁う捻平に聲懸けられて、わづかに顔を振上げながら、きり／＼と一先づ閉ぢると、其の扇を疊むに連れて、今まで、闊と瞳を据つて見据ゑて居た瞼を、次第に寛いだ彌次郎兵衛は、ものも言はず、火鉢のふちに、ぶる／＼と震ふ指を、と支へた態の、卷莨から、音もしないで、ほろ／＼と灰がこぼれる。

捻平座蒲團を一膝出て、

「いや、更めて、篤と、見せて貰はうかや、先づ此方へ寄らしやれ。えゝ、今の謠の、氣組みと、其の態。教へも教へた、さて、習ひも習うたの。

恁うまで此を教ふるものは、四國の果にも他にはあるまい。あらかた人は分つたが、其となく音信も聞きたい。の、其許も默つて聞かつしやい。」

と彌次が方に、捻平目遣ひを一つして、

「先づ、何うして、誰から、御身は習うたの。」

「はい。」

と弱々と返事した。お三重は最う、他愛なく娘に成つて、ほろりとして、

「あの、前刻も申しましたやうに、不器用も通越した、調子はづれ、其の上覺えが惡うござんすで、長唄の宵や待ちの三味線のテンもツンも分りません。此の間まで居りました、山田の新町の姉さんが、朝と晝と、手隙な時は晩方も、日に三度づゝも、あの噛んで含めて、胸を割つて刻込むやうに教へて下すつたんでございますけれど、自分でも悲しい。……曉の、とだけ十日かゝつて、漸と眞似だけ彈けますと、夢に成つて最う手が違ひ、心では思ひながら、三の手が一へ滑つて、とぼけたやうな音がします。

捻で咽喉を引絞かれ、背中で胸を打たれたのも、絲を切った數より多い。
其も何も、私故であつてはないのです。……私が、な、まだ其の前に、鳥羽の廓に居ました時、……

「あゝ、お前さんは、鳥羽のものかい、志摩だな。」

と彌次郎兵衛がフト聞入れた。

「否、私はな、矢張お伊勢なんですけれど、父さんが死くなりましてから、的矢に賣られて行きましたの。はじめに聞いた奉公とは嘘のやうに違ひます。――お客の言ふことを聞かぬ言うて、陸で懲くば海で稼けつて、岬の下の船着から、夜になると、男衆に捉へられて、小船に積まれて海へ出て、月があつても、島の蔭の暗い處を、危いなあ、ひや／＼する、木の葉のやうに浮いて歩行いて、寂とした海の上で、……悲しい唄を唄ひます。而してお客の取れぬ時は、船頭衆の胸に縋いて、女が戀しらたる禁厭ぢや、お茶挽いた罰や、と云つて、船から海へ、びしやびしやと追下ろして、泣いて干た巌へ上げて、巌の裂目へ俯向けに口をつけさして、（こいし、こいし。）と呼ばせます。若い衆は舳に待つてゝ、聲が切れると、櫂の殻をびし／＼と打着けますの。汐風が濡れて吹く、夏の夜でも寒いもの……私の其は、師走から、寒の中で、八百八島あると言ふ、どの島も皆白い。霜風が凍りついた、巌の角は針のやうな、あの、其の上で、（こいし、こいし。）つて、唇も、しびれるばかり泣いて居る。咽喉は裂け、舌は凍つて、潮を浴びた背から冷え通つて、正體がなくなる處を、貝殻で引搔かれて、漸と緒で正氣が付くのは、灯もない、何の船やら、あの、まあ、鬼の支いた棒見るやうな帆柱の下から、皮の硬い大な手が出て、引摑んで捲込みます。

空には蒼い星ばかり、海の水は皆黑い。暗の夜の血の池に落ちたやうで、あゝ、生きて居るか……千鳥も鳴く、私も泣く。……お恥かしうござんす。」

と翳す扇の利劍に添へて、水のやうな袖をあて、顏を隱した其の風情。人は聲なくして、ただ、ちり／＼と蠟燭の涙白く散る。

此の物語を聞く人々、如何に日和山の頂より、志摩の島々、海の風、霞の池に鶴の舞ふ、あの、麗朗なる景色を見たるか。

## 十九

「泣いてばかり居ますから、氣の荒いお船頭が、こんな泣蟲を買ふほどなら、伊良子崎の海鼠を蒲團で、鯛島の烏賊を遊ぶつて、何の船からも投出される。

又、あの巌に追上げられて、霜風の間々に、（こいし、こいし。）と泣くのでござんす。

手足は凍つて貝になつても、（こいし）と泣く、のお本望な。巌の裂目を沖へ通つて、海の果まで響いて欲しい。もう船も去ね、潮も來い。……其のまゝで石に成つてしまひたいと思ふほど、お客樣、私は、あの、」

と俛れた襦袢の袖を銜へた、水紅色映る瞼のあたり、ほんのりと薄くして、

一心でばかり長い事、思つて居りまする人があつて、……顏も容色もないものが、生意氣を云ふやうですが、……たとひ殺されても、死んでもと、心願掛けて居りました。

一晩も、矢張蒼い灯の船に買はれて、其の船頭衆の言ふ事を肯かなかつたので、此方の船へ突返されると、艫の處に行火を跨いで、どぶろくを飲んで居た、私を送りの若い衆がな、玉代だけ損をしやはれ、此方衆の見る前で、此の女を海士にして慰まうと、月の良い晩でした。

胴の間で衣服を脱がして、膚の紐へなはを付けて、倒に海の深みへ沈めます。すん／＼ず

んと沈んでな、もう奈落かと思ふ時、釣瓶のやうにきり〳〵と、身體を空に引上げて、髪の雫も切らせずに、又海へ突込みました。

此の時な、其の繰り縄に、長崎辺の伯父が一人乗込んで居ると云うて、お小遣の無心に來て、泊込んで居りました、二見から鳥羽がよひの馬車に、御者をします、寒中、襯衣一枚に裸膝を突いた若い人が、私のそんなにされるのを、餘り可哀相な、と然う云うて、伊勢へ歸つて、其の話をしましたので、今、あの申しました。……

此の間まで居りました、古市の新地の姉さんが、隨分なお金子を出して、私を連れ出してくれましたの。

其でな、鳥羽の鬼へも面當に、藝をよく覺えて、立派に藝子に成れやつて、姉さんが、然う言うて、目に涙を一杯ためて、びし〳〵撥で打つてまで、三味線を教へてくれるんですが、何うした因果か、些とも覺えられません。叩かれまし中指と、二の絃が[illegible]、一日に三度ず、[illegible]調子も鳴らしませんから、近所隣も遠慮して、御飯もまづいと言ふのですもの。

又月の良い晩でした、[illegible]、今の鼓八か、深川か[illegible]何か、身投[illegible]い、蒼え しいだけは、生命が絶えれば其で濟む。一層また鳥羽へ行つて、あの巖に攫まつて、(こいし、こいし、)と泣かうか知らぬ、宵の綱になはつけて、海へ入れられるが氣安いやうな、と島も海も目に見えて、ふら〳〵と月の中を、千鳥が、冥土の使ひに來て、連れて行かれさうに思ひました。……格子前へ流しが來ました。

新町の月影に、露の垂りさうな、あの、ちらちら光る撥音で、

……博多帶しめ、筑前絞り——

と、何とも言へぬ好い聲で。

(へい、不調法、お喧しう、)つて、其のまゝ行きさうにしたのです。

(あゝ、身震がするほど上手い、あやかるやうに拜んで來た、それ、お賽錢をあげる氣で、)と瀧縞お召の半纏着に、灰に袖のつくほどに、しんみり聞いてゐた姉さんが、長火鉢の抽斗から、お寶を出して、キイと、あの格子が鳴る、帶へ挿んだ懐紙に捻つて、私に持たせなすつたので、盆に乘せて、戸を開けると、もう一二間行きなさいます、一人、隣にある月をな、影法で繋いで、ちやつと行つて、

「是喃。」と呼んで、出した盆を、振向いてお取りでした。私は、思はず其の手に縋つて、涙がひとりでに出ましたえ。男で居なさら、こんなにも上手な方があるものを、切めて其の指一本でも、私の身體についたらば、とつい、おろおろと泣いたのです。

頰被をして居なすつた、あの、其の私の手を取つたまゝ、默つて、少し脇の方へ退いた處で、

(何を泣く、)つて優しい聲で、其の門附が聞いてくれます。もう恥も何も忘れてな、其の、あの、何うしても三味線の覺えられぬ事を話しました。」

## 二十

「よく聞いて、暫時熟と顏を見て居なさいました。

(藝事の出來るやうに、神へ願懸をすると云つて、夜の明けぬ内、外へ出ろ、鼓ヶ嶽の裾にある、雑木林の中へ來い。三日とも思ふけれど、主人には、七日と頼んで、すぐ、今夜の明方から。……分つたか。若い女の途中が危い、此の入口まで來て待つて遣る、化されると思ふな、夢ではない。……)

とお言ひなり、三味線を胸に附着けて、フイと暗がりへ附着いて、黒塀を去きなさいます、

其の事は言はぬけれど、明方の三時から、夜の白むまで垢離取つて、願懸すると睨んだら、姉さんは、寂んで、承知してくれました。

後とされたら死ぬ氣でな、――大恩のある御主人の、此の格子戸も見納めか、と思ふやうで、軒下へ出て振返つて、門を視めて、立つて居るとな。

（おいで。）

と云つて、突然、背後から手を取りなすつた、門附の其のお方。

私はな、よう覺悟はして居たが、天狗樣に攫はれるかと思ひましたえ。

あとは夢やら現やら。明方内へ歸つてからも、其の後は二日も三日も唯茫として居りましたの。……鼓ケ嶽の松風と、五十鈴川の流の音と聞えます、雜木の森の暗い中で、其の方に教はりました。……舞も、あの、さす手も、ひく手も、唯背後から背中を抱いて下さいますと、私の身體が、舞ひました。其れだけより存じません。

尤も、私が、あの、鳥羽の海へ投入れられた、其の身の上も話しました。其の方は不思議な事で、私とは敵のやうな中だ事も、種々入組んでは居りますけれど、鼓ケ嶽の裾の話は、誰にも言ふな、と口留めをされました。何んにも話がなりません。

五日目に、最う可いから、此を舞つて座敷をせい。褒なし、とは言ふまい、ツて、お記念なり、しるしなりに、此の舞扇を下さいました。」

と袖で胸へ緊乎と抱いて、ぶる〳〵と肩を震はした、後毛がはらりと成る。

捻平溜息をして頷き、

「いや、能く分つた。教へ方も、習ひ方も、話されずと能く分つた。時に、山田に居て、何うぢやな、其の舞だけでは勤まらなんだか。」

「はい、はじめて謠ひました時は、皆が、わつと笑ふやら、中には恐しい怖いと云ふ人もござんす。何故言ふと、五日ばかり、あの私がな、天狗樣に誘ひ出された、と風說したのでござんすから、」

「は、如何にも師匠が魔でなくては、其の立方は習はれぬわ。むゝ、で何かの、伊勢にも謠うたふものゝ、五人七人はあらうと思ふが、其の連中には見せなんだか。」

「えゝ、物好に試すつて、呼んだ方もありましたが、地をお謠ひなさる方が、何ですやら、些とも、ものに成らぬと言つて、すぐにお留めたさいましたの。」

「はゝあ、いや、其の足拍子を入れられては、やはな謠は斷れて飛ぶぢやよ。はゝはゝ、唸る連中粉灰ぢやて。かた〴〵此の桑名へ、住替へとやらしたのかの。」

「狐狸や、いや、あの、吠えて飛ぶ處は、梟の憑物がしよつた、と皆氣違にしなさいます。姉さんも、手放すのは可哀相や言つて下さいましたけれど、……周圍の人が承知しませず、……此の桑名の島屋とは、行きかひはせぬ遠い中でも、姉さんの緣續きでござんすから、預けるつもりで寄越されましたの。」

「おゝ、其處で、又辛い思をさせられるか。先づ〳〵、其は後でゆつくり聞かう。……其のお娘、私も同一ぢや。天魔でなくて、若い女が、術をするはと、仰天したので、手を留めて濟まなんだ。さあ、立直して舞うて下さい。大儀ぢやらうが一さし賴む。私も久しぶりで可懷しい、御身の姿で、若師匠の御意を得よう。」

と言の中に、膝で解く、其の風呂敷の中を見よ。土佐の名手が畫いたやうな、紅い調は立田川、月の裏皮、表皮。玉の砧を、打つや、うつゝに、天人も聞けかしとて、雲井、と銘ある祕藏の塗胴。老の手擦き美しく、錦に棧を、投ぐるやう、さら〳〵と緒を緊めて、火鉢の火

に高く壓す、と……呼吸をのんで驚いたやうに見て居たお千は、思はず、はつと兩手を支いた。

　藝の威嚴は爭はれず、此の捻平を誰とかする、七十八歳の翁、邊見秀之進。近頃孫に代を讓つて、雪叟とて隱居した、小鼓取つて、本朝無雙の名人である。

　いざや、小父御は能役者、當流第一の老手、恩地源三郎、即ち是。

　此の二人は、侯爵津の守が參宮の假の館に催された、一調の番組を勤め濟まして、あとを膝栗毛で歸る途中であつた。

## 二十一

　卸説、饂飩屋では門附の兄哥が語り次ぐ。

「いや、其から、種々勿體つける所作があつて、やがて大坊主が謠出した。

　聞くと、何うして、思つたより出來て居る、按摩鍼の藝ではない。……戸外をどツどと吹く風の中へ、此の聲を打撒けたら、あのピイ／＼笛ぐらゐに鎭まらうと云ふもんです。成程、隨分今の世には、此奴に（的等。）扱ひにされようと言ふのが少くない。

が、私に取つちや小敵だつた。けれども藝は大事です、侮るまい、と氣を緊めて、其處で、膝を。」

　と坐直ると、肩の按摩が上へ浮いて、門附の衣紋が緊る。

「……此の膝を丁と叩いて、默つて二つ三つ拍子を取ると、此の拍子が尋常んぢやない。……親なり師匠の叔父貴の膝に、小兒の時から、抱かれて習つた相傳だ。對手の節の隙間を切つて、伸縮めを緊めつ、緩めつ、聲の重味を刎上げて、咽喉の呼吸を突崩す。寸法を知らず、間拍子の分らない、滿更の素人は、盲目聾で氣にはしないが、些と商賣人の端くれで、聊か心得のある對手だと、トンと一つ打たれただけで、最う聲が引掛つて、節が不状に蹶躓く。三味線の間も同一だ。何うです、意氣なお方に釣合はぬ……ン、と一つ刎ねないと、野暮な矢の字が、とうふにかすがひ、糠に釘でぐしやりと成らあね。

　さすがに心得のある奴だけ、商賣人にぴたりと一つ、拍子で聲を押伏せられると、張つた調子が直ぐにたるんだ。思へば餘計な若氣の過失、此方は畜生の淺猿しさだが、對手は素人の悲しさだ。

　あはれや宗山。見る内に、額にたら／＼と衝と汗を流し、死聲を振絞ると、頭から胸へ膏を絞つた……あの其の大きな脣が海鼠を干したやうに乾いて來て、舌が硬つて呼吸が發奮む。わな／＼と震へる手で、疊を摑むやうに、うたひながら猪口を拾はうとする處、もう一本を未だ一枚とうたはぬ前、ピシリと其處へ高拍子を打込んだのが、下腹へ響いて、ドン底から節が拔けたものらしい。

　はつと火のやうな呼吸を吐く、トタンに眞俯向けに突伏す時、長々と舌を吐いて、犬のやうに疊を嘗めた。

（先生、御病氣か。）

つて私あ莞爾したんだ。

（是非聞きたい、平に何うか、宗山、此の上に聾に成つても、貴下のを一番、聞かずには死なれぬ。）

と拳を握つて、せい／＼言つてる。

（按摩さん。）

と私は呼んで、

（尾上町の藤屋まで、何のくらゐ離れて居る。）

（何んで。）

と聞く。

（間に依つては聲が響く。內證で來たんだ。……藤屋には私の聲が聞かしたくない、叔父が

一人當ここざるんた。勇士は猫の氣勢を知ると
さ——離れ、田舎い老人が、此の風だから寐苦しがつて、ソト起さてども居るとならない、祝儀は置いた、歸らせ。)

ト宗山は、顔と塞いだ目を、ぐる〳〵と動かして、

(さあ〳〵、今の拍子を打ちなされ……古市から尾上町まで聲が聞えようか、と言ひなされる、御大言、年のお少さ。まだ一度も聲は聞かず、顔は固より見た事もなけれども、……當流の大師匠、恩地源三郎どの養子と聞く……同じ喜多八氏の外にはあるまい。然やうでござらう、恩地。)

と私の名を丁と言ふ。

あゝ、酔つた。」

と杯をはたりと落した。

「俺酔つて悪い私の名ぢやない。叔父に濟まない。二人とも、誰にも言ふな。」

と鷹揚で、按摩と女房に目をあしらひ。

「私は羽織の裾を拂つて、

(逢つたやうな、當つたやうだ、が、何しろ、東京の的等の一人だ。宗家の宗、本山の山、宗山か。若布の附燒でも土産に持つて、東海道を這ひ上れ。恩地の臺所から音信れたら、叔父には内證で、居催促の腕白が、獨樂を廻す片手間に、此の藻掻でも教へて遣らう。)

とづゝと立つ。」

## 二十二

「痘痕の中に白眼を剝いて、よた〳〵と立上つて、血ばつた眼なから、

(可哀しいわ、若旦那、盲人の悲しさ顔は見えぬ。觸らせて下され、つかまらせて下され、一撫で、撫でさせて下され。)

と言ふ。

いや、撫でられて堪りますか。

摺抜けようとするんだがね、六疊の狹い座敷、盲目でも自分の家だ。

素早く、階子段の降口を塞いで、無手と、大手を擴げたらう……影が天井へ懸つて、充滿の黑坊主が、汗膏を流して撫でうとする。

いや、其の蛛蜘執着の、陰な不思議の形相が、今以て忘れられない。

(可厭だ、可厭だ、可厭だ。)と、此方は夢中に出ようとする、よける、留める、行違ふで、やはな、かゞら堂の二階中みし〳〵と鳴る。風は轟々と當る。唯黑雲に捲かれたやうで、可恐しくなつた、凄さは凄し。

衝と、引滯つて、ドンと飛び摺りに、どゞゝと駈け下りると、ね。

(袖や、止めませい。)

と宗山が二階で喚いた。皺枯聲が、風でぱつと耳に當ると、三四人立騷ぐ女の中から、すつと美しく姿を拔いて、格子を開けた門口で、しつかり摑まる、吹きつけて揉む風で、颯と紅い褄が搦むやうに、私に縋つたのが、結綿の、其の娘です。

背中を揉んでた、薄茶を出した、あの影法師の姿だらう。

ものを言ふ満い、張のある目を上から見込んで、構ふものか、行きがけだ。

(可愛い人だな、おい、殺されても死んでも、人の玩弄物にさるるな。)

と言捨てに突放す。

(あれ。)と云ふ聲がうしるへ、ぱつと吹飛ばされる風に向つて、砂塵の中へ、や、躍込むやうにして、一散に駈けて歸つた。

後に知つた、が、妾ぢやない。お袖と云ふ其の可愛いのは、宗山の娘だつたね。其れを娘と知つて居たら、いや、その時だつて氣が付いたら、按摩が天下の謀叛人でも、私あ退治るんぢやなかつたんだ。」

と不意にガックリと胸を折つて俯向く〳〵、按摩の手が肩を辷つて、ぬいと越す。……其の袖の陰で取るともなく、落した杯を探りながら、「もしか、按摩が尋ねて來たら、堅く居らん、と言へ、」と宿のものへ吩附けた。叔父のすや〳〵は上首尾で、並べて取つた床の中へ、すつぽり入つて引被つて、可い心持に寐たんだが。

あゝ、寐心の可い思ひをしたのは、其晩切さ。

何故ッて、宗山が其の夜の中に、私に辱められたのを口惜しがつて、傲慢な奴だけに、びしりと、もろい折方、憤死して了つたんだ。七代まで流儀に祟る、と手探りでにじり書した遺書を殘してな。死んだのは鼓ヶ嶽の裾だつた。あの廣場の雜木へ下つて、夜が明けて、漸と小止に成つた風に、ふら〳〵とまだ動いて居たとさ。

此方は何んにも知らないから、風は凪ぐ、天氣は可。叔父は一段の上機嫌。……古市を立つて二見へ行つた。朝の中、朝日館と云ふのへ入つて、いづれ泊る、……先へ鳥羽へ行つて、ゆつくりしよう、と、直ぐに車で、上の山から日の出の下、二見の浦の上を通つて、日和山を棧敷に、山の上に、海を青疊にして二人で半日。やがて朝日館へ歸る、と何うだ。

旅籠の表は黒山の人だかりで、内の廊下もごつた返す。大袈裟な事を言ふんぢやない。伊勢から私たちに逢ひに來たのだ。按摩の變事と遺書とで、其の日の内に國中に知れ渡つた。別に其の事について文句は申さぬ。萬事で宗山の留を刺したほどの豪い方々、是非に一日、山田で謠が聞かして欲しい、と羽織袴、フロックで押寄せたらう。

いや、叔父が怒るまいか。日本一の不處存もの、恩地源三郎が申渡す、向後一切、謠を口にすること罷成らん。立處に勘當だ。さて宗山とか云ふ盲人、己が不束なを知つて屈死した心、斯くの如きは藝の上の鬼神なれば、自分は、葬式の送迎、墓に謠を手向けう、と人々と約束して、私は其の場から追出された。

あとの事は何も知らず、其の時から、津々浦々をさすらひ步行く、門附の果敢い身の上。」

## 二十三

名古屋の大須の觀音の裏町で、これも浮世に別れたらしい、三味線一挺、古道具屋の店にあつたを工面したのがはじまりで、一錢二錢、三錢ぢや木賃で泊めぬ夜も多し、日數をつもると野宿も半分、京大阪と經めぐつて、西は博多まで行つたつけ。

何んだか伊勢が氣に成つて、妙に急いで、逆戻りに又來た。……

私が言つた眞の一言、人のおもちやに成るな。）と言つたを、生命がけで守つて居る、……可愛い娘に逢つたのが一生の思出だ。

何う成るものでもないんだから、早く影をくらましたが、四日市で煩つた、女房さん。」

と呼びかけた。

「お前さんぢやないけれど、深切な人があつた。漸と足腰が立つたと思ひねえ。上方筋は何でもない、聞違つて謠を聞いても、お百姓が、（風呂が滞いた、）て竹法螺吹くも同然だが、東へ上つて、箱根の山のどてつぱらへ手が掛ると、もう、な、江戸の鼓が響くから、何う我慢が成るものか！　うつかり謠をうたひさうで危くつて成らないからね、今切は越せません。これから大泉原、員辨、阿下喜をかけて、大垣街道。岐阜へ出たら北國筋へも迴らうか知ら、と富田近所を三日稼いで、桑名へ來たのが昨日だつた。

其の今夜は何うだ。不思議な人を二人見て、遣切れなくなつて此家へ飛込んだ。が、流の笛が身體に觸る。平時よりは尚ほ激しい。其處へ

又影を見た。美しい影も見れば、可恐しい影も見た。此處で按摩が殺す氣だらう。構ふもんか、勝手にしろ、似たものを引つけたと然う覺悟して按摩さん、背中へ摑つて貰つたんだ。が、筋を拔かれる、身を捩られる、私が五體は裂けるやうだ。」

と又差俯向く肩を越して、按摩の手が、其れも物に震へながら、はた〳〵と戰きながら、背中に獅嚙んだ面の附着く……門附の袷の褪せた色は、膚薄な胸を透かして、動悸が筋に映るやう、あはれ、博多の柳の蔭に、土蜘蛛一つ搦みついたやうに凄く見える。

「誰や！」

と、不意に吃驚したやうな女房の聲、うしろ見られる神棚の灯も暗くなる端に、べろ〳〵と紙が濡れて、門の腰障子に穴があいた。其れを見咎めて一つ喚く、とがた〳〵と、跫音高く、駈け退いたのは御亭どの。

いや、困つた親仁が、一人でない、薪雜棒、棒千切れで、二人ばかり若いものを連れて居た。

「御老體、」

雪叟が小鼓を緊めたのを見て……恁う言つて、恩地源三郎が儼然として顧みて、

「破格のお附合ひ、恐多いな。」

と膝に扇を取つて會釋をする。

「相變らず未熟でござる。」

と雪叟が禮を返して、其のまゝ座を下へおりんとした。

「平に、其れは。」

「いや、蒲團の上では、お流儀に失禮ぢや。」

「は、其の娘の舞が、蛸の奴の俤ゆゑに、遠慮した、では私も、」

と言つた時、左右へ、敷物を齊しく刎ねた。

「嫁女、嫁女。」

と源三郎、二聲呼んで、

「お三重さんか、私は嫁と思ふぞ。喜多八の叔父源三郎ぢや、更めて一さし舞へ。」

二人の名家が屹と居直る。

瞳の動かぬ氣高い顏して、恍惚と見詰めながら、よろ〳〵と引退る、と黑髮うつる藤紫、肩も腕も嬌娜ながら、袖に構へた扇の利劍、霜夜に聲も凛々と、

「……引上げ給へ、と約束し、一つの利劍を拔持つて……」

肩に綾なす鼓の手影、雲井の胴に光さし、艶が添つて、名譽が籠めた心の花に、調の緒の色、颯と燃え、ヤオ、と一つ聲が懸る。

「あつ、」

とばかり、屹と見据ゑた——能樂界の鶴なりしを、雲隱れつ、と惜まれた——恩地喜多八、饂飩屋の床几から、衝と片足を土間に落して、

「雪叟が鼓を打つ！　鼓を打つ！」と身を揉んだ、胸を切めて、慌しく取つて蔽うた手拭に、かつと血を吐いたが、かなぐり棄てると、右手を摑んで、按摩の手を緊乎と取つた。

「祟らば、祟れ、さあ、按摩。湊屋の門まで來い。最う一度、若旦那が聞かして遣らう。」

と、引立てて、ずいと出た。

「（源三郎）……かくて龍宮に至りて宮中を見れば、其の高さ三十丈の玉塔に、彼玉をこめ置き、香花を備へ、守護神は八龍並み居たり、其外惡魚鰐の口、遁れがたしや我命、さすが恩愛の故郷のかたぞ戀しき、あの浪のあなたにぞ……」

爾時、漲る心の張に、島田の元結弗つと切れ、肩に崩るゝ綠の黑髮。水に亂れて、灯に搖めき、疊の海は裳に澄んで、塵も留めぬ舞振かな。

「（源三郎）……我子は有らむ、父大臣もおはすらむ……」

と聲が淀んで、源三郎の地謠ふ節が、フト途

絶えようとした時であつた。

此の湊屋の門口で、爽に調子を合はした、……其の聲、白き虹の如く、衝と來て、お三重の姿に射した。

「（喜多八）……さるにても此のまゝに別れ果なんかなしさよと、涙ぐみて立ちしが……」

「やあ、大事な處、倒れるな。」

と源三郎すつと座を立ち、よろめく三重の背を支へた、老の腕に女浪の袖、此の後見の大盤石に、みるの緑の黑髪かけて、颯と翳すや舞扇は、銀地に、其の、雲も戀人の影も立添ふ、光を放つて、灯を白めて舞ふのである。

舞ひも舞うた、謡ひも謡ふ。はた雪叟が自得の祕曲に、桑名の海も、トトと大鼓の拍子を添へ、川浪近くタタと鳴つて、太鼓の響に汀を打てば、多度山の霜の頂、月の御在所ケ嶽の影、鎌ケ嶽、冠ケ嶽も冠着て、客座に並ぶ氣勢あり。

小夜更けぬ。町凍てぬ。何處としもなく虚空に笛の聞えた時、恩地喜多八は唯一人、湊屋の軒の端に、姿清く、影を濃く立つて謡ふと、月が棟高く廂を照らして、薬の面に、扇のやうな光を投げた。舞の扇と、うら表に、其處でぴたりと合ふのである。

「（喜多八）……又思切つて手を合せ、南無や志渡寺の觀音薩埵の力をあはせてたび給へとて、大悲の利劍を額にあて、龍宮に飛び入れば、左右へはつとぞ退いたりける。」

と謡ひ澄ましつゝ、

「背を貸せ、宗山。」と言ふとともに、恩地喜多八は疲れた狀して、先刻から其の裾に、大きく何やら踞まつた、形のない、ものゝ影を、腰掛くるやう、取つて引敷くが如くにした。

路一筋白くして、掛行燈の更けた彼方此方、杖を突いた按摩も交つて、ちら／＼と人立ちする。

## 夏

よしありて卯の花垣の姿かな

青蓼の廚も見えて簾暖簾

蝙蝠や二日月夜の柳町

玉造温泉にて

水晶を夜切る谷や時鳥

海松ふさの颯と大なり浪がしら

干瓢や膝が苧環剝きかへし

岸行くや雫も切らず四手網

日盛や汽車道はしる小き蟹

雲の峯石伐る斧の光かな

黑猫のさし覗きけり青簾

悟空三たび芭蕉扇を整ふ極暑かな

手にとれば月の雫や夏帽子

馬道を水鷄のありく夜更かな

——鏡花全集卷十五「發句」より

# 南地心中

## 一

「今のは、」

初阪ものゝ赤毛布、と云ふ處を、十月の半ば過ぎ、小春凪で、些と逆上せるほどな暖かさに、下着さへ襲ねて着し、野暮な縞も隱されず、頬被りがはりの鳥打帽で、朝から見物に出掛けた……

此の初阪とは、傳へ聞く、富士、淺間、大山、筑波、はじめて、出立つを初山と稱ふるに傚つて、大阪の地へ初見參と云ふ意味である。

其の男が、天滿橋を北へ渡越した處で、同伴のものに聞いた。

「今のは？」

「大阪城でございますさ。」

と片頬笑みで故と云ふ。結城の藍微塵の一枚着、唐棧柄の袷羽織、茶獻上博多の帶をぐいと緊め、白柔皮の緒の雪駄穿で、髮をすつきりと刈つた、氣の利いた若いもの、風俗は一目で知れる……俳優部屋の男衆で、初阪ものには不似合な傳法。

「まさか、天滿の橋の上から、淀川を控へて、城を見て——當人氣が足りない處へ、恁う照りつけられて、道頓堀から千日前、此の邊の沸くり返る町の中を見物だから、茫と成つて、夢を見たやうだけれど、其だつて、大阪に居る事は確に承知の上です——言はなくつても大阪城だけは分らうぢやないか。」

「御道理で、ふゝふ。」

男衆はまた笑ひながら。

「ですがね、欄干へ立つて、淀川堤を御覽なさると、貴方、恍惚とお成んなさいましたぜ。熟と考へ込んでお了ひなすつて、何かお話しするのも御氣の毒なやうな御樣子ですから、私も默りでね。えゝ、……時間の都合で、其方へは廻らないまでも、網島の見當は御案内をしろつて、親方に吩咐かつて參つたんで、彼處で一ツ、櫻宮から網島を口上で申し上げようと思つて居たのに、餘り腕組をなすつたんで、いや、案内者、大きに水を見て涼みました。

其から、ずつと默りで、橋を渡つた處で、「今のは、」とお尋ねなさるんでせう、義理にも大阪城、と申さないぢや、第一日本一の名城に對して、はゝゝ、」とついあり氣に一寸顏を見た。

初阪は鳥打の庇に手を當て、

「分りましたよ。眞田幸村に對しても、決して疎略には存じません、萌黄色の淵のやうな、音に聞いた淀川が、大阪を眞二つに分けたやうに悠揚と流れる。

電車の塵も冬空です……澄透つた空に晃々と太陽が照つて、五月頃の潮が押寄せるかと思ふ人通りの激しい中を、薄い霞一筋、岸から離れて、宛然、東海道で富士を視めるやうに、あの、城が見えたつけ。

川蒸汽の、ばら〳〵と川浪を蹴るのなんぞは、高櫓の瓦一枚浮かしたほどにも思はれず、……船に掛けた白帆くらゐは、城の壁の映るのから見れば、些細な塵です。

其の、空に浮出したやうな、水に沈んだやうな、而して幻のやうな、然うかと思ふと、歴然と、あゝ、あれが、嬰兒の時から桃太郎と一所にお馴染の城か、と思つて見て居ると、城の其の屋根の上へ、山も見えぬのに、鵺が乘つて來さうな雲が、眞黑な壁で上から壓附けるばかり、

鉛を熔かして、むら〳〵と湧懸つて來たらうではないか。」

初阪は意氣を込めて、杖をわきに挾んで云つた。

## 二

七筋ばかり、工場の呼吸であらう、黒煙が、恁う、風がないから、眞直に立騰つて、城の櫓の棟を捲いて、其の蔽被さつた暗い雲の中で、末が亂れて、むら〳〵と崩立つて、倒に高く淀川の空へ靡く。……

なびくに脈を打つて、七筋ながら、處々、斜めに太陽の光を浴びつゝ、白泡立てゝ渦いた、其の凄かつた事と云つたら。

天守の千疊敷へ打込んだ、關東勢の大砲が炎を吐いて轉がる中に、淀君をはじめ、夥多の美人の、練衣、紅の袴が寸斷々々に、城と一所に滅ぶる景色が、目に見える。……雲を貫く、工場の太い煙は、丈に餘る黒髮が、縺れて亂れるやう、而して、倒に立つたのは、長に消えぬ人々の怨恨と見えた。

大河の南岸は、細い樹の梢に、薄紫の靄が、すら〳〵。蒼空の下を、矢輻の晃々と光る車が、駈けても居たのに、水には帆の影も澄んだのに、……何うして其の時、大阪城の空ばかり暗澹として曇つたらう。

「あゝ、あの雲だ。」

と初阪は橋の北詰に、ひし〳〵と並んだ商人家の、軒の看板に隱れた城の櫓の、今は雲ばかりを、フト仰いだ。

「大丈夫だらうかね。」

が、俯向いて、足許に、二人連立つ影を見た。

「雷樣ですか。」

男衆は逸早く心得て、

「串戲ぢやありませんぜ。何の今時……」

「そんなら可いが、」

歩行き出す、と暗く成り掛けた影法師も、烈しい人脚の塵に消えて、天滿筋の眞晝間。

初阪は晴やかな顏をした。

「凄かつたよ、私は。……其の癖、此の陽氣だから、自然と淀川の水氣が立つ、陽炎のやうなものが、ひら〳〵と、其が櫓の面へかゝると、何となく、爛と美しい幻が添つて、城の名を天下に彩つて居るやうに思はれたつけ。其の花やかな中にも、しかし、長い、濃い、黒髮が潛んで、瀧のやうに動いて居た。」

城を語る時、初阪の色醉へるが如く、土地馴れぬ足許は、ふらつくばかり危まれたが、對手がしやんと來いの男衆だけ、蛸に引受けられた醉漢に似て、擦合ひ、行違ふ人の中を、傍目も觸らず饒舌るのであつた。

「時に、其について、」

「あの、別嬪の事でせう。私たちが立停まつて、お城を見て居ました。四五間さきの所に、美しく立つて、同じ方を視めて居た、あれでせう。……貴方が（今のは！）ツて一件は。それ、奴を一人、お供に連れて、」

「奴を……十五六の小間使だぜ。」

「當地ぢや、奴ツて然う言ひます。島田髷に白丈長をピンと刎ねた、小凜々しい。お約束でね、御祭禮には附きものゝ小女ですよ。あれで御祭人の髷が、元祿だつた日にや、菱川師宣ゑがく、と云ふんですね。

何だらう、とお尋ねなさるのは承知の上でさ、……又、今のを御覽なすつて、お聞きなさらないぢや、大阪が怨みます。」

「人が惡いな、此の人は。其まで心得て居て、はぐらかすんだから。（大阪城でございます、）は些と癪だらうぢやないか。」

「はゝはゝ。」

「しかし緣のない事はない。然うして、熟とあの、煙の中の凄い櫓を視めて居ると、何うだ

らう。
「四五日前に、上品な着の其、浅黄色で、佇んで居た、今の、其の美人の姿だかね、……淀川の流に引かれた、私の目の所為なんだらう。すッと向うに浮いて行つて、淀川の、あの、城の中に、天守閣とも思ふ窓から、顔を出して、此方を覗いた、然う見えた。何時の間にか、城の中へ入つて、向直つて。……黒雲の下、煙の中で、凄いの、美しいの、と云ッて、そりやなかつた。」

## 三

「だから、何だか容易ならん事が起つた、と思つて、……口惜しいんです。
実はね、昨夜、中座を見物した時、すぐ隣の桟敷に居たんだよ、今の婦人は……」と頷くやうにして初阪は云ふ。
男衆は又笑つた。
「ですとも。其を知らん顔で、しらばつくれて、唯今一見と云ふ顔をなさるから、はぐらかして上げましたんでさ。」
「だつて、住吉、天王寺も見ない前から、大阪へ着いて早々、あの婦は？ でもあるまいと思ふ。それぢや慌て過ぎて、振袖に躓いて転ぶやうだから、痩我慢で黙然で居たんだ。」
「処が、辛抱が仕切れなく成つたでせう、御尤ですとも。親方もね、実は、お見物にお目に掛ける、丁度可いからッて、故と昨夜も、貴方を隣桟敷へ御案内申したんです。
附込みでね、旦那と来て居ました。取巻に六七人芸妓が附いて。」
男衆の顔を見て、
「はあ、すると堅気かい、……以前は兎に角、」
又男衆は、然う聞かれるのを合点したらしく頷くのであつた。
「貴方、当時また南新地から出て居るんです。……否、旦那が変つたんでも、手が切れたのでもありません。矢張昨夜御覧なすつた、あれが元からの旦那でね。えゝ、然も、つい此の四五日前まで、久しく引かされて、桜の宮の片辺と云ふのに、其こそ一枚繪に成りさうな御寮人で居たんですがね。あの旦那の飛んだもの好から、洒落に又鑑札を請けて、以前のまゝの、お珊と云ふ名で、新しく披露をしました。」と質実に語す。
「阪地は風流だね、洒落に芸者に出すなんざ、悟つたもんですぜ、根こぎで手活にした花を、人助けのため拝ませる、と云ふ寸法だらう。私なんぞも、お庇で土産にありついた、と云ふ訳だ。」
「否、隣桟敷の緋の毛氈に頬杖や、褄の褶十二単掛けて、と云ふ姿ばかりではありません。貴方、もつと立派なお土産を御覧なさいませうよ。御覧なさいまし、明日、翌々日の晩は、唯今のお珊の方が、千日前から道頓堀、新地をかけて宝市の練に出て、下げ髪、緋の袴と云ふ拵装で、八年ぶりで練りますから。」
一言、下げ髪、緋の袴、と云つたのが、日のあたり城の上の雲を見た、初阪の耳を穿つて響いた。
「何、下げ髪で、緋の袴？……」
「勿論一人ぢやありません……誰か十二人、同じ姿で揃つて練ります。が、自分のこれを人髪なしに解きほぐして、其の緋の袴と揃へ〳〵に来たに依るつてのは、あの婦ばかりだと云つたもんです。一度引いて、最うそんなに経ちますけれども、私あ今日も、つい近間で見て驚きました。苦労も道楽も為たらうのに、顔容の生際が、一厘だつて抜上がつて居ませんやね、ねえ。矢張人髪なしを水で解いて、宝市は屋台ぐるみ、象を繋いで曳きませうよ。旦那もね、市に出して、お婦さんの其の姿を、

見たり、見せたりしたいばかりに、素晴らし、濱手を遣つて、披露をしたんだつて評判です。
其の市女は、藝妓に限るんです。其も藝なり、容色なり、選拔きでないと、世話人の方で出しませんから……先づ選ばれた婦は、一年中の外聞と云つたわけです。
其の中のお職だ、貴方。何しろ大阪ぢや、濱寺の魚市には、活きた龍宮が顯れる、此の住吉の寶市には、天人の素足が見えるつて言ひます。一年中の紋日ですから、まあ、是非お目に掛けませう。
貴方、一目見て立すくんで。」
「立すくみは大袈裟だね、人聞きが惡いぢやないか。」
「だつて、今でさへ、悚然となすつたぢやありませんかね。」

四

男衆の浮かぬ調子を、初阪は何故か沈んで聞く。……
「眞個そりや悚然としたよ。ひとりでに、あの婆が、城の中へ、ふいと入つて、向直つて、此方を見るらしい氣がした時は。……
黑い煙も、お珊さんか、……其の人のために空に被さつたやうに思つて。
天滿の鐵橋は、瀨多の長橋ではないけれども、美濃へ、歸る旅人に、怪しい手紙を託けたり、俵藤太に加勢を頼んだりする人に似たやうに思つたのだね。
由來、橋の上で出會ふ綺麗な婦は、凡て凄いとしてある。——
が、場所によるね……昨夜、隣棧敷で見た時は、同じ其の人だけれど、今思ふと、まるで、違つた婦さ。……君も關東ものだから遠慮なく云ふが、阪地の婦は何故だらう、生きてるのか、死んでるのか、血と云ふものがあるのか知らん、と近所に居るのも可厭なくらゐ、酷く、さました事があつたんだから……」
「へい、何がございました。やたらに何か食べたんですかい。」
「何、詰らんことを……然うぢやない。餘りと言へば見苦しいほど、大入芝居の棧敷だと云ふのに、旦那かね、其の連の男に、好三昧にされてたからさ。」
「其處は衣ものゝ悲しさですかね。何うして……當人そんなぐうたらぢやない筈です、意地張も些と可恐いやうな婦でね。以前、藝妓で居ました時、北新地、新町、堀江が、一つ舞臺で、藝妓へ、を遣つた事があります。其の時、南から舞で出ました。尤も評判な踊手なんですが、其でも他場所の婦さんに、ひけを取るまい……其の頃北に一人、向うへ廻して、些と目に餘る、家元隨一と云ふ名取りがあつたもんですから、生命がけに氣を入れて、舞つたのは道成寺。貴方、それが近頃の見ものだつたと評判しました。
能がゝりか、何か、白の鱗の膚脫ぎで、あの髮を颯と亂して、卜撞木を被つて、供養の鐘を出た時は、何となく舞臺が暗く成つて、其で振袖の襦袢を透いて、お珊さんの眞白な胸が、銀色に蒼味がゝつて光つたつて騷ぎです。
其のかはり、火のやうに舞ひ澄まして樂屋へ入ると、氣を取詰めて、ばつたり倒れた。後見が、回生劑を吞まさうと首を抱く。一人が、裝束の襟を寛げようと、あの人の胸を開けたかと思ふと、キャッと云つて尻持をついたは何うです。
鳩尾を緊めた白羽二重の腹卷の中へ、生々とした、長いのが一尾、蛇ですよ。繞々と卷込めてあつた、其奴が、のツそり、」
と慌しい懷手、黑八丈を襲ねた襟から、拇指を出して、ぎつくり、と蝮を拵へて、肩を

ぶる／＼と首を引込ませて、鎌首を出しては何うです、いつ聞いても恐れる……はゝ／＼と襟を掻く。

初阪も其は偽兼ねない婦と見た。

「執念の深いもんだから、あやかる氣で、生命かけの膚に絡つたと云ふわけだ。」

「其もあります。ですがね、心願も懸けたんですとさ。何でも願が叶ふと云ひます……呪詛も、戀も、情も、慾も、意地張も同じ事。……其の時鳩尾に卷いて居たのは、高津邊の蛇屋で賣ります……大瓶の中にぞろ／＼、と云ふ一件もので、貴方御存じですか。」

初阪は出所を聞くと慄然とした。我知らず聲を潛めて、

「知ッてる……生紙の紙袋の口を結へて、中に筋張つた動脈のやうにのたくる奴を買つて歸つて、一晩内に寢かして、それから高津の宮裏の穴へ放すんだつてね。」

## 五

「えゝ、然うですよ。其の時、願事を、思込んで言聞かせます。而して袋の口を解くと、にょろ／＼と這出すのが、屹と一度、目の前でとぐろを卷いて、首を擡げて、其の人間の顏を熟と視て、それから横穴へ這入つて隱れるつて言ひます。

其のくらゐ念の入つた長蟲ですから、買手が來て、蛇屋が貯へた其の大瓶の壓蓋を外すと、何ですとさ。黒燒の註文の時だと、うぢや／＼我一に下へ潛つて、瓶の口がぐつと透く。……放される客の時だと、ぬら／＼爭つて頭を上げて、瓶から煙が立つやうですつて、……もし、不氣味ですねえ。」

初阪は背後状に仰向いて空を見た。時に、城の雲は、賑かな町に立つ埃よりも薄かつた。

思懸けず、何の廣告か、屋根一杯に大きな布袋の繪があつて、下から見上げたものゝ、宛然唐子めくのに、思はず苦笑したが、

「昨日も其の話を聞きながら、兵庫の港、淡路島、煙突の煙でない處は殘らず屋根ばかりの、大阪を一目に見渡す、高津の宮の高臺から……湯島の女坂に似た石の段壇を下りて、其か、黒燒屋の前を通つた時は、軒から眞黒な氷柱が下つてるやうに見えて冷りとしたよ。一時に寒く成つて——唯さへ滯上り湧立つてる大阪が、あの又境内に、おでん屋、てんぷら屋、煎豆屋、とくわつ／＼ぐら／＼と、煮立て、蒸立て、燒立てて、其が天日に曝されて居るんだからね——びつしより汗に成つたのが、お庇ですつかり冷く成つた。但し餘り結構なお庇ではないのさ。

大阪へ來てから、お天氣續きだし、夜は萬燈の中に居る氣持だし、何しろ暗いと思つたのは、町を歩行く時でも、寢る時でも、黒燒屋の前を通つた時と、今しがた城の雲を見たばかりさ。」

男衆は偶と言を挾んで、

「何を御覽なさる。」

「否ね、今擦違つた、それ、」

と一寸振向きながら、

「それ、あの、忠兵衛の養母と云つた隱居さんが、紙袋を提げて居るから、」

「串戲ぢやありません。」

「私は例のかと思つた、……」

「ありや天滿の鍋の子煎餅、……成程鍋屋の隱居でせう。誰が、貴方、あんな婆さんが禁厭の蛇なんぞを、」

「はゝあ、少いものでなくつちや、利かないかね。」

「そりや……色戀の方ですけれど……慾の方と成ると、無差別ですから、老年は尚ほ然しいかも知れません。」

分けて此の二三日は、黒燒屋の蛇が賣れ盛るつて言ひます……誓文拂で、大阪中の呉服屋

が、年に一度の大見切賣をしますんでね、市中も此の通り又別して賑ひます。心齋橋筋の大丸なんかでは、景物の福引に十兩二十兩と云ふ品ものを奮發んで出しますんで、一番引當てよう了簡で、紫縮緬に蛇の袋をぶら下げて、杖を支いて、お十夜と云ふ形で、夜中に霜を踏んで、白髪で橋を渡る婆さんもあるにやあるんで。」

六

男衆も一寸町中を顧した。

「眞個かも知れません、何しろ、此の大文拂の前後に、何樣ですかね、黒焼屋の蠑螈が空虚に成つた事があるつて言ひますから。慾は可恐しい。惡くすると、ぶら提げてるのに打撞らないとも限りませんよ。」

「それ！ だから云はない事ぢやない。」

内端ながら二ツ三ツ杖を掉つて、

「其でなくツてさへ、恁う見渡した大阪の町は、道も路地も、何の家も、くわツと陽氣に明い中に、何處か一個所、陰氣な暗い處が潜んで、禮儀作法も、因縁因果も、先祖の位牌も、色も戀も、罪も報い、世間の義理も、今の蛇も蟇づゝは、皆に隠つて隠れて居さうな氣がする處へ、蠑螈の話を昨日聞いて、まさ〳〵と爪立足で、黒焼屋の前を通つてからと云ふものは、うつかりすると、新造も年増も、何か下襲の褄あたりに、一條心得て居さうで成らない。

昨夜も、芝居で……」

男衆は思出したやうに、如才なく一ツ手を拍つた。

「時に、何うしたと云ふんですえ、お璢さんが、其の旦那と？……」

「まあ、お聞き——隣合つた私の棧敷に、髪を桃割に結つて、絣の半襟で、黒繻子の襟を掛けた、黄の勝つた八丈と云つた柄の着もの、紬か何か、絣の羽織をふつくりと着た、ふさ〳〵の簪を前のめりに挿して、それは人柄な、目の涼い、眉の優しい、口許の柔順な、まだ肩揚げをした、十六七の娘が、一人入つて居たらう。……出來るだけおつくりをしたらうが、着ものも帯も、餘りいゝ家の娘ぢやないらしいのが、」

「居ました。へい、親方が、貴方に差上げた棧敷ですから、人の入る譯はないが、と云つて、私が伺ひましたつけ。貴方が、〈構やしないつと仰有るし、其處はね、大したお目障りのものではなし……あの通りの大入で、一寸退けようツて空場も見つからないものですから、其なりでお邪魔を願ツて置きました。後で聞きますと、出方が、しんせつに、まあ、喜ばせて遣らうツて、内々で入れたんださうで。……ありや何ですツて、逢阪下の辻——えゝ、天王寺に行く道です。公園寄の辻に、屋臺に一寸毛の生えたくらゐの小さな店で、あんころ餅を賣つて居る娘ださうです。いゝ娘ですね。」

其は初阪がはじめて聞く。

「然う、餅屋の姉さんかい……而して何だぜ、あの芝居の、廁に番をして居る、爺さんね、大きなどんつくを着た逞しい親仁だが、影法師のやうに見える、太く、よぼけた、」

「えゝ、駕籠傳、駕籠屋の傳五郎ツて、新地の駕籠屋で、ありや其の昔鳴らした男です。最う年紀の上に、身體を投げた無理が出て、便所の番をして居ます。其の傳が？」

「娘の、爺さんか父親なんだ。」

此は男衆が知らなかつた。

「へい、」

「知らないのかい。」

「然うかも知れません、私あ御存じの土地兒ぢやないんですから、見たり、聞いたり、透切だらけで。へい、何うして、貴方？」

「處が分つた事だから……何しろ、私が、昨夜、

あの後數一人つた時、空いた席た男所は、其の
私の處と、顏に二ツ、……
一然うですよ。
「其の開しなかつたんだ。二丁がカチと入つた時に、娘を連れて、年配の出方が一人、横手の通、竹格子だね、中座とは……扉をずイと押して、出て來て、小さく成つて、背後の廊下、お極りだ、此の處へ立つ事無用、彼處へ顏だけ出して覗んだものです。(且那、此の娘を一人前は、れませんでござりませうか。内々のもので、客ではござりません。お部屋へ觸れますと悪うござりますが、貴下樣思召で、と云つて慇懃です。
「資本は懸らず、偲うぶふ時、おのぼりの氣前を見せるんだ、と思つたから、さあ／＼御遠慮なく、で、先づ引受けたんだね。」

七

「ずつと前へお出なさい、と云つて勸めても、隅の口に遠慮して、膝に兩袖を重ねて、溢れる八ツ口の、綺麗な友染を、袂へ、手と一所に推込んで、肩を落して坐つて居たがね、……可愛らしいぢやないか。赤い紐を緊めて、雪輪に紅梅模樣の前垂かけてです。

其處でも、些と正面に身を入つて來る、屠蘇たもち／＼、顏を上げて伸上つて――背後に引込んで居るんだから見えないさね――然うしちや、簪を覗込むやうにして居たつけ。つい、知らず／＼乘出して、仕切にひつたりと喉を附けると、人いきれに、ほんのりと瞼を染めて、ぼつと成つたのか、景氣提灯の下で、恁う、私と先づ顏を並べた。おつとり心の中に憫いらしく、光榮なる哉。
　まあ、お聞きつたら。
　そりや可かつたが、一件だ。」
「一件と……おつしやると？」
「長いの、長いの。」
「其の娘が、蛇を……嘘でせう。」
「間違ひたに違ひない。けれども高津で聞いて、平家の水鳥で居たんだからね。幕間に一寸樂屋へ立違つて、又もとの所へ入らうとすると、其の娘の袂の傍に、紙袋が一つ出て居ます。
　並んで坐ると、其が可笑に成らうと云ふんだだから、大に怯んだ。何うやら氣の所爲か、むく／＼動きさうに見えるぢやないか。
　で、私は後へ引退つた。ト娘の挿した簪のひら／＼する、美しい總越しに舞臺の見えるのが、花輪で額緣を取つたやうで、其も可さ。

前へ、さら／＼どか／＼です。見いのと柔らかいのと、入亂れた足音を立てゝ、七八人、小揃襟で圍つたやうな婦の中から、赫と眞赤な顏をして、痩せた酒顚童子と云ふ、三分刈の頭で、顴骨の張つた、目のぎよろりとした、何故か顏の蒼い、袴を穿つた男が、詰襟の紺の洋服で、鞠足袋を穿く露した服裝を膝頭にたくし上げた、と云ふ妙な扮裝で、其の婦たち、鐵太郎殿の手車から轉がり出したやうに、ぬつと發奮んで出て、どしんと、音を立てゝ踏込んだのは、隣の棧敷で……
　唐突、横のめりに兩足を投出すと、痛い、前の仕切にがんと支いた肱へ、頭を乘せて、自分で頸を摑んでも、其のまゝ仰向けにぐたりと成る、可いかね。
　顏へ、花火のやうに提灯の色がぶつかります、天井と舞臺を等分に睨み着けて、（何だいと一つ怒鳴る、と思ふと、かつと云つて大酒の息を吐きながら、ここら、入らんか、と喚いたんだ。
　背後に、島田やら、銀杏返しやら、眞つて立つた徒は、右の旦那よりか、其の騷ぎだから、皆が見返る、見物の方へ氣を奪れたらしく、顏を見合はせて居たつけが。
　此の一瞬を喫ふと、べた／＼と、出も袖も

崩れて了つた。
大切な客と見えて、若い衆が一人、女中が二人、前茶屋のだらう、附いて来た。人數は六人だつたがね。旦那が一杯にのしてるから、何うして入り切れるもんぢやない。隨分肥つたのも、一人ならずさ。
茶屋のが頻に、小聲で詫を云つて叩頭をしたのは、御威勢でも此の外に場所は取れません、と詫びたんだらう。（構ひまへんで、お入りなされ。）
まづい口眞似だ、」
初阪は男衆の顔を見て微笑んだが、
一齊に云つて、茶屋の男が、私に言も掛けないで、其の中でも、就中脊の大きな大年増を一人、此方の場所へ送込んだ。すると又其の婦が、（や、どッこいしよ、）と掛聲して、澄まして、ぬつと入つて、ふはりと裸埃で前へ出て、正面充滿に陣取つたらう。」

## 八

一輛は此の肥滿女に、のし／＼蔽つこへ掛けられて、可惡しい見際手な懸に成つた。あゝ、可哀さうにと思ふ、丁ど、其の身體が、舞臺と私との中程に成つたもんだからね、可憐しいぢやないか……
綺と横顔で振向いて、貸目に成つて、（貴下は、見惜うおますやろう、）と云つて、極の悪さうに目をぱち／＼と瞬いたんです。何事も思ひません。大阪中の詫言を一人でされた氣がしたぜ。」
男衆は頭を下げた。
「御尤も道理で。」
「いや、眞個。心配しないで樂に居て、御覧々々と重ねて云ふと、芝居で泣いたなりの濕子した眉を、嬉しさうに莞爾して、向うを向いたが、一寸白い指で壓へながら、其の花簪を拔いたは何うだい。染分の總だけも、目障りに成るまいと云ふ、しをらしいんだね。
（消だ、消だ。疾くせい、のろま！）とぎつくり、と胸を頭反らして、目を剝く。此奴が、どろんと濁つて血走つてら。ぐしや／＼見上げ鐵お拵上つて筋だらけ。其の癖、すぺりと鬚のない、まだ三十くらゐ、若いんです。
（はい／＼、唯た今、直きに、）とひよこ／＼と數附に擦附ける。若衆は呼吸を爲い／＼、（御寮人樣、行屆きまへん處は、何分、）と、係う内證で云つた。
其の御寮人と云はれた、……旦那の背後に、……髪は[illegible]銀杏返だつけ……お付の中で……お着たなりで控へたのが、
「へい、成程、背後に居ました。」
「お前の實かね、天満橋で見た先刻のだぜ。一寸、色と姿を競つた中にも、一寸はあるまいと思ふ、容色は容色と見たけれども、背丈のない、何で際に拔けた、と今日より十段も見劣りがしたつて譯は。……
いづれ妾だらう。默まれものには違ひないが、若衆も、（御寮人、）と奉つて、何分、旦那を頼む、と云ふ。
取巻の藝妓たち、三人五人の手前もある。やけに土砂を振掛けても、突張返つた沈默の亡者一個、掌に引丸けて、捌を附けたけりや立ちますまい。
處が不可い。其の騒ぐ事、暴れる事、桟敷へ狼を飼つたやうです。（泣くな、わい等、）と嗅く――君の親方が立女形で滿場水を打つたやう、千百の見物が、目も口も頭も肩も、個の廣い唯一人の形に成つて、啜泣きの聲ばかり、誰が持つた手巾も、夜會草の花を濡間にしたやうに、ぐつしより萎んで、火影の映るのが血を絞るやうな處だつけ――（芝居を見て泣く奴があ

るものかい、や、怪體な！
　舞臺でも何を泣えくさるんぢやい。くわツと喧嘩を遣れ、面白らないぞ！　打殺して見せてくれ。やい、腸を摑出せ、へん、馬鹿な、」とニヤリと笑ふ。いや、其のね、ニヤリと北叟笑みをする凄さと云つたら。……待てよ、此の御寮人が内證で情人をこしらへる。嫉妬で其の妾の腸を引摺り出す時、屹と、そんな笑ひ方をする男に相違ないと思つた。
　可哀を留めたのは取卷連さ。夢中に成つて、芝居を見ながら、旦那が喚くたびに、はつとするさうで、皆が申合はせた形で、ふらりと手を擧げる。……片手をだよ。……こりや、私の前を塞いだ肥滿女も同じく遣つた。
　其の癖、默然でね、チトもしお靜に、とも言ひ得ない。
　すると、旦那です……（馬鹿め、止め了へ）と言ひながら、片手づきの反身の肩を、御寮人さ、其のお璢の方の胸の處へ突きつけて、ぐたりと成つた。……右の片手を逆に伸して、引合せたコオトの襟を引摑んで、何か、自分の胸が窮屈さうに、悶う踠いて、引開けようとしたんだがね、思ふ通りに成らなかつたもんだから、（えゝ）と云ふと、くわと開けた、細い黄金鎖が晃然と光る。帶を摑んで、ぐい、と引いて、婦の膝を、洋服の尻へ搔込んだりと思ふと、もろに凭懸つた奴が、ずる〳〵と辷つて、其なり眞仰向けさ。傍若無人だ。」

## 九

「膝枕をしたもんです。其の野分に、衣紋が崩れて、褄が亂れた。旦那の頭は下搔の褄を裂いた體に、紅入友染の、膝の長襦袢にのめずつて、靴足袋をぬいと二ツ、仕切を空へ突出したと思へ。
　大蛇のやうな鼾を搔く。……妾はいゝなぶりものにされたぢやないか。私は淺ましいと思つた。大入の芝居の棧敷で。
　江戸兒だと、見たが可い！　野郎がそんな不埒をすると、其が情人なら簪でも刺殺す……金子で買つた身體だつたら、思切つて、衝と立つて、袖を拂つて歸るんだ。
　處を、何うです。其なりに身を任せて、靜として、然も入身に嫋娜として居るぢやないか。
　摑寄せられた帶も弛んで、結目のずるりと下つた、投帶の淺黃は冷たさうに、提灯の明を引いて、寂しく婦の姿を庇ふ。其が切てもの思遣りに見えたけれども、其さへ、然うした處の過ぎた酒と色に血の荒びた、神經のとげ〳〵した、狼の手で摑出された、青光のする腸のやうに見えて、あはれに無慚な光景だつけ。」
「……へい、然うですかね、」と云つた男衆の聲は、何故か腑に落ちぬらしく聞えたのである。
「聞きや、道成寺を舞つた時、腹卷の下へ蛇を緊めた婦さんだと云ふぢやないか。……其の投帶が鎌首を擡げりや可かつたのにさ。」
「眞個ですよ。其がために、貴方ね、舞の師匠から、其の道成寺、葵の上などゝ云ふ執着の深いものは、立方禁制と言渡されて、破門だけは免れたツて、奥行きのある婦ですが……金子の力で、旦那にや自由に成らないぢやなりますまいよ。」
「氣の毒だね。」
「とおつしやると、筋も骨も拔けたやうに聞えますけれど、其の癖、隨分、仕たい三昧、我儘をするのを、旦那の方で制し切れないツて、評判をしますがね。」
「金子で其の我まゝをさせて貰ふだけに、又旦那にも棧敷で帶を解かれるやうな我儘をされるんです。身體を賣つて榮耀榮華さ、其が淺ましいと云ふんぢやないか。」

「ですがね、」

と男衆は、雪駄ちやら〳〵、で、日南の横顔、小首を捻つて、

「我儘も品によりまさ。金剛石や黄金鎖なら姿の身ぢや、我儘と云ふ申立てにもなりませんがね。

自動車のブウ〳〵も血の道に觸るか何かで、或時なんざ、奴の日傘で、青葉時に、それ女大名の信長公でさ。鳴かずんば鳴かして見せう、日中に時鳥を聞くんだ、と云ふ觸込みで、天王寺へ繰込みましたさ、貴方。

幇間が先へ廻つて、あの五重の塔の天邊へ上つて、わな〳〵震へながら雲雀笛をピイ、は何うです。

そんな我儘より、最つと偉いのは、然も其の日だつて云ふんですがね。

御堂横から蓮の池へ廻る廣場、大銀杏の根方に筵を敷いて、すとゝん、すとゝん、と太鼓を敲いて、猿を踊らして居た小僧を、御寮人お珊の方、扇子を半開か何かで、恁う反身で見ると、(可愛らしいぼんちやな。)で、俳優の誰とかにてるッて御意の上……私は人の妾やよつて、えらい道も何もないけれど、畜生に世話に成るより、些とは増や。旦那に縋んで出世させて上げる、來たはれ、と直ぐに貴方。

其の場から連れて戻つて、否應なしに、旦を說付けて、忽ち大店の手代分。大道稼ぎの猿廻しを、縞もの揃ひにきちんと取立てたなんぞは如何で。私は膝を突つく腕に、些とは實があると思ふんですが。」

初阪は此を聞くと、樣子が違つて、

「さあ、事だよ！　すると、昨夜のは其の猿廻しだ。」

十

「いや、黑服の狂犬は、まだ彼の麒麟で、ふんぞり返つて高歸。其さへ見ては居られないのに、……其手代に違ひない。……當時の久松と云つたのが、前垂がけで、何か急用と見えて、逢ひに來てからの狼藉が、眞個目に餘つたんだ。

惡口吐くのに、(猿曳め、)と云つたが、其で分つた。けづり廻しとか、摺古木とか、獸めとか云ふ事だらう。大阪では(猿曳、)と怒鳴るのかと思つたが。おや、其のお珊の方が取立てた、銀杏の下の藝人に疑ひない。

と成ると！……あの、婦は何ぼ濟まないぞ。

自分の世話をした若手代が、目の前で、額を煙管で打たれるのを、もぢ〳〵と見て居たらうぢやないか。」

「煙管で、へい？」

「あゝ、癲々と血が出た。其を何うにも爲得ないんだ。ぢや、天王寺の境内で、猿曳を拾上げたつて何の功にもなりやしない。

まあれ、……旦那は寐たらう。取巻の藝妓一統、互にほつとしたらしい。が、私に言はせりや其の徒だつて働きがないぢやないか。何のための取巻なんです。此處は腕があると、取仕切つて、御寮人に樂をさせる處され。其の柔かい膝に、女樂も露出に成るまで、石頭の拷問に掛けて、芝居で泣いて居ては濟みさうもないんだが。

可しさ、其も。

唯、其處へ、酒肴、水菓子を添へて運んで來た。するとね、圓番に結つた仲居らしいのが、世話をして、御連中、いづれもお一ツづゝは、いゝ氣なもんです。

さすがに、御寮人は、頭を一寸振つて受けなかつた。

其にも構はず……(さあ一ツ。)か何かで、美濃から近江、此方の座敷に溢れてる大きなお臀を、隣から手を伸して猪口の緣でコト〳〵と音信れると、片手で褄を撮んで、ごし〳〵と摩るのを

を突掻き突掻き、かしやりと押けたやうに仕切に隠れて、乗出して舞臺を見い見い、片手を背後へ伸ばして、猪口を引傾けたまゝ受ける、注ぐ、それ、溢す。（わやゝな、）と云ふ。

其奴が、私の胸の前で、手と手を千鳥がけに始つたんだから驚くだらう。御免も失禮も、會釋一つするんぢやない。

しかし憎くはなかつたぜ。彼の親方が舞臺に出て居て、皆が夢中で遣る事なんだ。

憎いのは一人狂犬さ。

漸と静まつたと思ふ間もない。

（酒か、）と喚くと、むく／＼と起きかゝつて、引擦つたやうな肱の上へ、彼の隙、頭を載せた。

（注げ！　馬鹿めが、）と猪口を叱つて、茶碗で、若い顔して、がぶ／＼と掻喫ふ處へ、……色の白い、華奢と纖弱い、と云つた柄さ。中脊の若いのが、紺の羽織で、廊下をちよこ／＼と來て、ト手をちやんと支いた。

（何や、）と一ッ突慳貪に云つて睨みつけたが、低聲で、若いのが何か口上を云ふのを、フー／＼と鼻で呼吸をしながら、目を瞑つて、眞仰向けに聞いたもんです。

（旦那の、旦那と云ふんだ。（旦那の此處に居るのが何ないして知れた、何や、）と又怒鳴つて、（判然ぬかしをれ。何や？　番頭か……ふ、ふ、ふん、）と嘲るやうな、あの、凄い笑顔。

やがて、苦々しさうに、而して切なさうに、眉を顰めて、膝を引結ぶと、グウ／＼と欠伸を掻出す。

いや、しばらく起きない。

若手代は、膝へ手を支いたなり、中腰でね、悠ら困つたらしく俯向いたッ切。女達は、芝居に身が入つて言も掛けず。

其の中に幕が閉つた。

滿場わッと鳴つて、ぎつしり詰つたのが、眞黒に兩方の廊下へ溢れる。

しばらくして、大分鎮まつた時だつた。幕あきに間もなさゝうで、急足に成る往来の中を、又竹の扉からひよいと出たのは、眼を[illegible]した男衆でね。手に辨當を二つ持つて居ました。

——はいよ、お辨當、と云つて、娘に差出して、渡さうとしたつけが……」

## 十一

「其處に私が居る、……知らぬ間に肥滿女の這入つたのと、振向いた娘の顔とを等分に見較べて、（和女、極が悪いやろ。そしたら私が方へ來て食りなはるか。あゝ、然うしなはれ、）と何々、笑ふ、氣の可い男で……いお稱處でございます。）と、叩んで私に挨拶して、一人で合點して辨當を持つたまゝ、づいと引退つた。

娘がね、仕切に手を支くと、俯向いて、濃い花簪を載せて居る、濃に濡れた、額り襟れた手拭を置いた、女衆の前髪の髱を浮かして、一寸考へるやうにしたつけ。其の手拭を輕く持つて、上氣した襟のあたりを二つ三つ煽ぎながら、可愛い足袋で、腰を据ゑて、すつと出て行く。……

私は煙草がなくなつたから、背後の運動場へ買ひに出た。

餘り見兼ねたから、背後向きに成つて居たがね、出しなに見ると、狂犬は其のまゝ胡坐で、傍の斯で、若い手代は何處へ立つたか居なかつた。

西の運動場には、店が一つしかない。最う幕が開く處、見物は殘らず場所へ坐直して居る、此處等は大阪は行儀が可いよ。其に、六人で、身の入つた芝居ほど、運動場は寂しいもんです。

風は冷し、呼吸ぬき旁、買つた敷島を其處で吸附けて、喫しながら、堅い薄縁の板の上を、足袋の裏冷々と、快い心持で辷らして、懐手

で、一人で座敷へ歸つて來ると、斜違に薄暗い便所が見えます。

　其のね、手水鉢の前に、大な影法師見るやうに、股摺に腰を掛けて、綿の厚い寝ン寝子で蹲つてるのが、何だつけ、君が云つた、其の傳五郎。」

「ぼけましたよ、ええ、婆婆氣な駕籠屋でした。」

「眞個だね、股引の裾をぱい、と端折つた處は豪勢だが、下腹がこけて、どんつくの廳に打たれて、猫背にへた〳〵と滅入込んで、胸から頭が生えたやうです。

　十四五枚も、堆く懐に疊んで持つた手拭は、汚れては居らないが、其の風だから手拭きに出してくれるのが、鼻紙の配分をするやうさね、潰れた古無盡の帳面の亡者に脅如。

　一度、前藝のはじめに行つて、手を洗つた時、然う思つた。

　小さな銀貨を一個握らせると、兩手で、頭の上へ押頂いて、深山に難有、難有、難有、と懐中へ頭を突込んで禮をするのが、何となくもの〻可哀い身に染みた。

　其の爺さんがね、見ると……其時、角兵衛と云ふ風で、頭を頸から……小蹲りか、と思ふと隱いたんだ。仰向けに反つて、兩手の拇指で、肩を敲かうとするが、ひッつるばかりで手が動かぬ。

　うん、と云ふ。

　呀、老人の肩打倒、危いと思つた時、幕あきの鳴ものが、チャンと入つて、下座の三味線が、トト手首を口へ取つて、濕をくれたのが、ちらりと見えて……

　何處に、もの蔭から、はら〳〵と走つて出たのは其の娘で。

　突然、爺様の背中へ掴まると、手水鉢の傍に、南天の實の撓々と、霜に伏さつた冷い緋鹿子、眞白な小腕で、どんつくの肩をたゝくぢやないか。

　青谷の線香がぶく〳〵と見けた、濡つた糊の香のぷんとする、山の書割の立て掛けてある暗い處へ凭懸つて、あゝ、さすがに此處も都だ、と顔に可懐しく熟と覗た。

　其處へ、手水鉢へ來て、手を洗つたのが、若い手代――君が云ふ、其の美少年の猿廻し。」

十二

「急いで手拭を懐中へ突込むと、若手代は其處等頻に前後を見した、……私は書割の山の蔭に潛んで居たらう。

　誰も居ないと見定めると、直ぐに、娘をわきへ押遣つて、手代が自分で、爺様の肩を敲き出した。

　二人はいゝ仲で居るらしい、一目見て樣子で知れる。」

「ほう、」

と唐突に聲を揚げて、男某は小溝を一つ向うへ跳んだ。初段は小さな石橋を渡つた時、

「私は然行をした效があると思つた。

　聲は屆かないけれども、遙でよく分る。……

　兩手を働かせながら、若手代は、額で袈こ、此處は可い、自分が介抱するから、彼方へ行つて芝居を見るやうに、と勸めるんです。娘が肯かないのを、優しく叱るらしく見えると、あいあいと頷く風でね、老人を勦る男の深切を、嬉しさうに二三度見返りながら、與はいそ〳〵と座敷へ歸る。其の背の扉を出る時、ちよいと掌を合せましたよ。

　私も歸つた。

　間もなく、何、然したる事でもなかつたらう。すぐに肩輪は解れた、と見えて、若い人は、隣の桟敷際へ戻つて來て、廊下へ、其の嬉しく頭の姫し。……

眞中へ挾つた私を御覧。美しい絹絲で、身體中かゞられる、何だか擽つたい氣持に胸が緊つて、妙に窮屈な事と云つたらない。

狂犬がむつくり、鼻息を吹直した。

(柿があるか、剝けやい、)と涎で滑々した口を切つて、絹も膚にくひ込まう、長い間枕した、姿の膝で、眞赤な目を瞬くし、手代をじろり、然も輕蔑したやうに見て、(何しとる? 汝や!)と口汚く、先づ怒鳴つた。

(何ぢや、返事を待つた、間抜け。勘定欲しい、と取りに來た金子なら、拂うて遣るは知れた事や。何吐す。……三百や五百の金。うんも、すんもあるものかい、鼻かんで敲きつけろ、と番頭に然う吐かせ。)

(はい、)と、手を支く。

(早々と去ね、こない場所へのこ〳〵と面出しをつて、何さらす、去ねやい。)

(はい、)と其でも用ずみ。前垂の下で手を揉みながら、手代が立つて、五足ばかり行きかゝると、(多一、多一、)と呼んだ。若い人は、多一と云ふんだ。

(待てい、)と云ふ。はつと引返して、又手を支くと、婦の膝をはらばひに乘出して、(何ぢやな、向うから金子くれい、と使が來て店で待つぢやな。人寄越いたら催促やい。誰や思ふ、丸官、)と云つたやうに覺えて居る。……」

「えゝ、丸田官藏、船場の大金持です。」

「然うかね、(丸官は催促されて金子出いた覺えはない。へゝん、)と云つて、取卷の藝妓徒の顏をずらりと見渡すと、例の凄いので嘲笑つて、軍鷄が蹴つけるやうに、ポンと起きたが、(寄越せ、)で、一人剝いて居た柿を引手繰る、と仕切に肱を立てゝ、頤を、新高に居る何處かの島田髷の上に突出して、丸噛りに、ぼり〳〵と喰ひかきながら、(留め了へ、)と舞臺へ喚く。

御寮人は、ぞろりと褄を引合せる。多一は、其の袖の蔭に、蹲つて居たんだね。

するとね、くひほじつた柿の核を、ぴよい〳〵と棧敷中へ吐散らして、あはゝ、あはゝ、と面相の崩れるばかり、大口を開いて笑つたつけ。

(鐵砲打て、戰爭押始めろ。大砲でも放さんかい、陰氣な芝居や、馬鹿、)と云ふと、又急に、險しい、苦い、尖つた顏をして、じろりと多一を睨みつけた。

(何しとる、うむ、)と押潰すやうに云ひます。

(それでは、番頭さんに、其の通り申聞けますでございます、)と又立つて、多一が歩行き出すと(こら!)と呼んで呼び留めた。

(丁稚々々、と今度は云ふのさ。」

聞く男衆は歎息した。

「難物ですなあ。」

## 十三

「其からの狂犬が、條理違ひの難題と云つちや、聞いて居られなかつたぜ。

(汝や、はい〳〵で、用を濟まいた顏色で、人間並に棧敷裏を足ばかりで立つて行くが、歸つたら番頭に何と言うて返事さらすんや。何や! 拂ふな、と俺が吩咐けたから其の通り申します、と申しますが、呆れるわい、これ、拂ふべき金子を拂はいで、主人の一分が立つと思ふか。五百圓や三百圓。)と大な聲して、(端金子、)で、底力を入れて塗りつけるやうに聲を窘めて……(喃、端金子を、あゝも斯うもあるものかい。俺が拂ふな、と言うたかて拂へ。さつさと一束にして突付けろ。歸れ! 大白痴、其の位な事が分らんか。)

で、又追立てゝ、立掛ける、と又しても、(待ちをれ。)だ。

(分つたか、何、分つた、偉い! 出來す、)と云つてね、ふゝん、と例の厭な笑方をして、それ、直ぐに藝妓達の顏をきよろり。

（分つたら言うて見い、歸つて何と返事をする、饒舌れ。一應は聞いて置く。丸官後學のために承りたい、ふん。）と鼻を仰向けに耳を多一に突附けて、其處にありあはせた、御寮人の黄金煙管を掴つて、立續けに、ふか〳〵吹かす。

（判然言へ、判然、ちやんと口上を以て吐かせ。うん、番頭に、番頭に、番頭に、何だ、金子を拂へ？……默れ！ 沙汰過ぎた青二才。）と可恐しい顏に成つた。（誰が？）と吠えるやうな聲で、（誰が拂へと言つた。誰が、これ、五百圓は大金だぞ！

丸官、たかを聞いてさへぶる〳〵する。これ、此の通り震へるわい。）で、胴肩を一つに搖り上げて、（大膽ものめが、土性骨の太い奴や。主人のものだとたかを括つて、大金を何の糟とも思ひくさらん、乞食を忘れたか。）

と言ふ。

目に涙を一杯ためて、（御免下さいまし。）と、退つて廊下へ手を支くと、（あやまるに及ばん、よく、考へて、何と計ふべきか、其處へくひ附いて分別して返答せい。……石に成るまで、汝や動くな。）と父柿を引手繰つて、かツ〳〵と唉ひかきながら、（止め了へ、馬鹿。）と舞臺へ怒鳴る。

（旦那樣、旦那樣。）と多一が震聲で呼んだと思へ。

（早いな、汝のやうな下根な奴には、三年かゝらうと思うた分別が、立處は偉い。俺を呼ぶからには工夫が着いたな。先づ、褒美を遣る。そりや頂け。）と柿の蔕を、色白な多一の額へたゝきつけた。

（もし、御寮人樣。）と熟と顏を見て、（何うしましたら宜しいのでございませう。）と縋るやうにして言つたか言はぬに、（猿曳め、汝や、婦に、……畜生。）と喚くが疾いか、伸掛つて、ピシリと雁首で額を打つたよ。羅宇が眞中から折れた。

此方の棧敷に居た娘が、誰より先に、ハッと仕切へ顏を伏せる、と氣を打たれたか、驚いた顏をして、新高の、丁ど下に居た一人商人風の男が、中腰に立つて上を見た。

藝妓達も一時に振向いて目を合せた、が、其だけさ。多一が壓へた手の指から、たら〳〵と絲すぢのやうに血の流れるのを見たばかり、何うにも手のつけやつがなさゝうな容子には弱つたね。お剩に知らない振をして、其のまゝで芝居を見る姉さんがあるぢやないか。

私は、ふいと立つて、部屋へ歸つた。

傍に居ちや、最う此方が撮出されるまでも、横面一ッ打挫がなくツては、新橋へ歸られまい。が、私が取組合つた、と成ると、隨分舞臺から飛んで來かねない女だちが一人居るんだからね。

頭痛がする、と樂屋へ横に成つたッ切、あとの事は知りません。道頓堀で、別に半鐘を打たなかつたから、あれなり、ぐしや〳〵と消えたんだらう。

其の婦だ、呆れたぐうたらだと思つたが、―

「もし、もし。」

と男衆が、初阪の袖を、ぐい、と引いた。

## 十四

歩行くともなく話しながらも、男の足は早かつた。唯見ると、二人から十四五間、眞直に見渡す。――狹いが、繁華の彩しい町筋を、斜めに奴を連れて過る――二個、前後にすつと並んだ薄色の洋傘は、大輪の芙蓉の太陽を浴びて、冷く輝くが如くに見えた。

水打つた地に、裳の紋の影も射す、色は四邊を拂つたのである。

「やあ、居る……」

と、思はず袂に顔を立てる、と両側を詰めた屋台の中、売り合つて露店もあり。軒にも、路にも、通路のない人立したが、いづれも言合せたやうに、其の後姿を見違つて居たらしいから、一見赤毛布の其の風采で、慌しく居る、と云へば、伴の者に吃驚した事は、往来の人の、近間なのには残らず分つた。

意気な案内者人に成つて、

「驚いては不可ません。天満の青物市です。……それ、眞正面に、御鳥居を御覧なさい。」

はじめて心付くと、先刻視めた城に對して、稜威は高し、宮居の屋根。雲に連る甍の棟は、玉を刻んだ峰である。

向つて鳥居から町一筋、朝市の済んだあと、日蔽の葭簀を撤つた、両側の組柱は、鐵橋の木質に似て、男も婦も、折から市人の服は皆黒いのに、一ツ鮮麗に行く美人の姿のために、宛然、市松障子の屋臺した、菊の花壇の如くに見えた。

「音に聞いた天満の市へ、突然入つたから驚いたんです。」

「然うでせう。」

擦違つた人は、初阪の顔を見て苦笑を含む。

兩人は苦笑した。

「ほつこり、暖い、暖い。」

蒸芋の湯気の中に、紺の鯉口した女房が、ぬつくりと立つて呼ぶ。

「おでんや、おでん!」

「饂飩あがんなはらんか、饂飩。」

「煎餅買ひなはれ、買ひなはれ。」

鮨の香氣が芬として、あるが中に、砂子戸越の紅は、住吉の蒲の鯛、淡路島の蝦であらう。市場の人の紺足袋に、はら/\と散つた青い菜は、皆天王寺の蕪と見た。……頰被したお百姓、空籠荷うて行違ふ。

軒より高い競賣もある。

傘とした飴屋の前で、奥深い白木の階に、二人先づ、帽子を手に取つた時であつた。——前途へ、今大鳥居を潜ると見た、見る目も彩な、お珊の姿が、其までは、よれ/\と気病の床を小春日和に、庭下駄がけで、我が別荘の背戸へ出たさう、投帯で褄取らぬばかりに、日の本の東西に唯二つの市の中を、徐々と拾つたのが、忽ち電の如く、颯と、照々とある圓柱に影を残して、鳥居際から衝と左へ切れた。

が、目にも留まらぬばかり、掻消すが如くに見えなく成つた。

高く競賣屋が居る、古いが、黒くがつしりした屋根越の其方の空、一點の雲もなく、冴えた水色の隈なき中に、淺黄や、紺や、紫や、青や、色つき初めた銀杏の梢に、風の騒ぐ、と視めたのは、皆見世ものゝ立幟。

太鼓に、笛に、錚々、と打響く鳴物の音のどよめいて、遠に近に、ざわ/\と聞きしは、溢るゝ群集に出盛る人數。お珊も來れば練ると云ふ、寶の市の夜をかけた、大阪中の賑ひである。

## 十五

「御覧なさい、此が亀の池です。」

と云ふ、男衆の目は、——こゝに人を渡すために架けたと云ふより、築山の景色に刻んだやうな、天満宮の境内を左へ入つて、池を渡る橋の上で——池は視ないで、向う岸へ外れた。

階を昇つて跪いた時、言ひ知らぬ神威に、引緊つた身の、拍手も堅く、附着いたのが、此處まで退出て、漸と掌の開くを覺えながら、岸に、其のお珊の佇んだのを見たのであつた。

鼓でも投げたか、奴と二人で、同じ状に洋傘を傾けて、熟と池の面を見入つて居る。

初阪は、不思議な物語に傳へる類の、同じ百里の旅人である。天満の橋を渡る時、ふと何處ともなく立顯れた、世にも凄いまで美しい

婦の手から、一通玉章を秘めた文箱を託つて來て、此なる池で、嘗て暗示された、別な美人が受取りに出たやうな氣がしてならぬ。

然も其は、途中左にもの言ふにさへ、聲の波れた……激しい人の波を泳いで來た、殷賑、心齋橋、高麗橋と相並ぶ、天滿の町筋を徹してあるにも係らず、說き難き一種寂寞の感が身に迫つた。參詣群集、隙間のない、宮、社の、フトした空地は、恁うした水ある處に、思ひかけぬ寂しさを、山中に分けて見る事がをり／＼ある。

丁ど池の邊には、其の時、他に人影も見えなかつた……

橋の上に小兒を連れた乳母が居たが、此方から連立つて、二人が行掛つた機會に、

「さあ、のゝ樣の方へ行こか。」と云つて、手を引いて、宮の方へ徐々歸つた。其の狀が、人間界へ消ゆる如くに見えた。

池は小さくして、浅茅野、芝生の小屋が今あらば、其の漆にかりだけれども、蓮華に萠黄をいれた、末の古さに……取廻した石垣も、苔むし、苦濁は牡丹を彫らぬ欄干も、漆を塗つた……。前へ、水底に枝が棲む……を存ずるために、雲に縮へに數の網を張り詰めたやうに、百千の細な影が、連立つて、ふら／＼と數知れず、薄黒く池の中に浮いたのは、皆の池の名に負へる、水に充滿た龜なのであつた。

枯蓮もばら／＼と、折れた莖に、ト唯一つ留つたのは、硫黄ヶ島の赤蜻蛉。

鯉鮒の背は諸々と、お珊の裳の影に蔭く。

居たのは、つい、橋の其方であつた。

串襟は、黒に、蘆の穗が圖に白い、紺地によりがらみの細い格子、お召縮緬の一枚小袖、つい故とらしいまで、不斷着で出たらしい。コオトも着ない、羽織の色が、派手に、濃く、而して際立つて、ぱつと目についた。

髮の艶も、色の白さも、其のために一際目立つ、――縮緬か、一樂らしい、くすんだ中に、晃々と浮くのがある、きつぱりした地の藍鼠に、小豆色と茶と紺と、すら／＼と色の通つた縞の亂立。

若葉の澄んだのに、水の色が綺に通つて、藍は青に、小豆は紅に、茶は萌黄に、紺は紫の隈を染めて、明い中に綵を……紫に……襦袢も此に消えて、山深き處、年古る池に、たゞ其の、すらりと帯を束ねたのに、霧ながら木の葉に綾なす、虹を取つて、細く、滑かに美つしく、肩に掛けて背に捌き、腰に流したやうである。汀は水を取廻して、冷い若木の薄もみぢ。

光線は白かつた。

## 十六

其の艶なのが、女の童を從へた處で、如何と佇む。……汀に寄つて……流木めいた板が一枚、ぷく／＼と浮いて、苔流れに生養の蓋のやうに見えるのがあつた。目は水を劃つて、其の板の上ばかり、たとへば温かさを積重ねた心持にふは／＼當る。

其へ、ほか／＼と甲を干した、木の葉に交つて青錢の散つた狀して、大小の龜は十ウ二十、積の石の數々居た。中には輕石の如きが交つて。――

いづれ一度は擒と成つて、供養にとて放された、お使い池で、昔賣買をされたと云ふ黑衣の男女を思出させる。島、海、澤、藪をかけた集り數、これほどの數が出合つたら、月には泣立ち、晴夜には潛んで、ひそ／＼と池の上端ではじまらう。

故郷なる、海を見るやら、向を違つても一つ一つ、首を揃へて目を瞬る。が、人も、もの言

はず、活ものが此だけ居て餘りの靜かさ。孰かが幽に、えへん、と咳拂をしさうで寂しい。

一頭、ぬつと、ざら〳〵な首を伸ばして、長く反つて、汀を仰いだのがあつた。心は、初阪等二人と齊しく、絹絲の虹を視めたに違ひない。

「氣味の惡いもんですね、よく見ると如何にも頭つきが似て居ますぜ。」

男衆は兩手を池の上へ出しながら、橋の欄干に凭れて低聲で云ふ。敢て忍音には及ばぬ事を。雖然……とゝで云ふのは、直に話すほど、間近な人に皆聞える。

「眞個、魚ぢや鯉の面色が瓜二つだよ。」

其の何に似て居るかは言はずとも知れよう。

「あゝ〳〵、板の下から潛出して、一つ水の中から顯れたのがあります。大分大きうがすぜ。」

成程、たら〳〵と漆のやうな腹を正的に、甲に濡色に薄紅をさしたのが、仰向けに鰓を此方へ、むつくりとして、而して頭の尖に、黄色く輪取つた、其の目が凸にくるりと見えて、鱗のざらめく蒼味がゝつた手を、ト板の緣へ突張つて、水から半分ぬい、と出た。

「大將、甲羅干しに板へ出る氣だ。それ乘ります。」

と男衆の云つた時、爪が外れて、ストンと落ちた。

が、直ぐに、すぼりと胸を浮かす。

「今度は乘るぜ。」

やがて、甲羅を、殘らず藻の上へ水から離して踏張つた。が、力足らず、乘出した勢が餘つて、取外すと、ずんと沈む。

「や、不可い。」

忽ち猛然として又浮いた。

で、のしり、のしりと板へ手をかけ、見るも不器用に、堅い體を伸上げる。

「しつかり〳〵、今度は大丈夫。あ、又辷つた。大事な處で。」と男衆は胸を乘出す。

汀のお珊は、褄をすらりと足を一寸踏替へた。奴島田は、洋傘を疊んで支いて、直ぐ目の下を、前髮に手庇して覗込む。

此の度は、場所を替へようとするらしい。斜に甲羅を、板に添つて、手を掛けながら、する〳〵と泳ぐ。此が、棹で操るが如くに成つて、夥多の可心持に乾いた龜の子を、カラ〳〵と載せたまゝで、水をゆら〳〵と漾れて辷つた。

が、熟として嚔したもの一つない。

板の一方は細いのである。

其處へ、手を伸ばすと、腹へ抱込めさらに見えた。

いや、困つた事は、重量に壓されて、板が引傾いたために、だふん、と潛る。

「ほい、了つた。いや、串戲ぢやない。しつかり頼むぜ。」

と、男衆は欄干をトン〳〵叩く。

あせる、と見えて、むら〳〵と紋が騷ぐ、と月影ばかり藻が分れて、端を探り〳〵手が掛つた。と思ふと、ずぼりと出る。

「蛙だと青柳硯と云ふんです。」

「眞個さ。」

## 十七

雖然、其の時も爲遂げなかつた。

「あゝ、惜い。」

男衆も共に、唯一息と思ふ處で、龜の、どぶりと沈む毎に、思はず聲を掛けて、手のものを落す心地で。

「執念深いもんですね。」

「あれ迄にしたんだ、揚げて遣りたい。が、最う弱つたかな。」

と言ふ間もなかつた。

此の時は、手の鱗も逆立つまで、しやつきりと、爪を大きく開ける、と甲の搖ぐばかり力が

入つて、其の手を扁平く後について、白く乾いた小さな龜の背に掛けた。

「はゝあ、考へた。」

「彼奴を力に取つて伸上るんです、や、や、どッこい。やれ情ない。」

ざぶりと他愛なく、又もや沈む。

男衆が時計を視た。

「最う二時半です、これから中の島を廻るんですから、徐々歸りませう。」

「しかし、何だか、揚るのを見ないぢや氣が殘るやうだね。」

「え、私も氣に成りますがね、だつて、日が暮れるまで掛るかも知れませんから。」

「妙に殘惜いやうだよ。」

男衆は、汀の縁に一寸目を遣つて、密と片頬笑して聲を潜めた。

「串戲ぢやありませんぜ。ね、それ、何だか薄りと美しい五色の霧が、冷々と掛るやうです。……變に凄いやうですぜ。龜が昇天するのかも知れません。板に上ると、其の機會に、黒雲を捲起して、震動雷電……」

「さあ、出掛けよう。」

二人は肩を寒くして、コト〱と橋の中央から取つて返す。

やがて、渡果てようとした時である。

「一寸、一寸。」

と背後から、優しいが張のある、艶かな、而して幅のある聲して呼んだ。何等の仔細なしには濟むまいと思つた半日。それ〱、言はぬ事か、それ言はぬ事か。

袖を合せて、前後に、ト齊しく振返ると、洋傘は疊んで、其は奴に持たした。縺も一條もない黒髪は、取つて撫いたかと思ふばかり、痩ぎすな、透通るやうな頸を包んで、正面に顔を合せた、眉は濃、雪な頤が細かつた。

「手前どもで、」と男衆は頷けない會釋をする。

奴は默つて、片手を其の膝のあたりへ下げた。

「然うどす。」と判然云つて莞爾する。瞼に薄く色が染まつて、類なき紅葉の中の俤である。

「一遍お待ちやす……思を遂げんと氣がゝりなよつて、見て居ておくれやす。私が手傳ふさかいな。」

猶豫ひあへず、バチンと蓮の果の飛ぶ音が響いた。お珊は帯留の黄金金具、緑の照々と輝く玉を、烏羽玉の夜の帯から星を手に取るよ、と白魚の指に外して、見得もなく、友染を柔な膝なりに、腰をなよ〱と汀に低く居て——

恰も[illegible]に[illegible]つてによいと上げた、[illegible]分けた——龜の手に、其れよ、引かむ、とすらりと投げた。

帯留は、[illegible]の[illegible]つたやうな打紐と見えた。其の尖は水に潜つて、龜の子は、ぱくりと[illegible]を噛む、ト[illegible]口を輕く袂を絞つた、小腕白く雪を伸べたが、重量がかゝるか、引く手に[illegible]に脈を打つ、其の二の腕、額、襟、頸、膚に白い處は云ふまでもない、袖、褄の、[illegible]に色めく[illegible]爪尖まで、——[illegible]然、細い、黒[illegible]の[illegible]を以て、[illegible]を引いて、描き取つた姿のやうであつた。

十八

[illegible]の[illegible]は、[illegible]く、お[illegible]の[illegible]のあたりに影を籠めた。

風なし吹添つて、城ある乾の天晴く、天滿宮の屋の棟が淀り曇つた。何處ともなく、はた〱と帆を打つ響きは、幟の聲、町には黄なる煙が走らう、數萬人の形を掠めて、……此の水のある空ばかり、雲に硝子を嵌める如く、美女の虹の姿は、姿見の中に映るかと、五色の絹を透通して、色を染めた木の葉は淡く、松の影が颯と濃い。

打擲に又脈を打つて、紫の血が通ふばかり、時に、腕の色ながら、しろ／＼と鱗が光つて、其の友染に搦んだなりに懐中から一條の蛇の蜿り出た、思ひかけず、ものゝ凄じい形に成つた。

「あ、」

と云ふ聲して、手を放すと、蛇の目輝く緑の玉は、光を消して、龜の口に銜へたまゝ、する／＼する、と水脚を引いて其のまゝ底に沈んだのである。

奴はじり／＼と後に退つた。

お珊は汀にすつくと立つた。が、血が留つて、俤は瑪瑙の白さを削つたのであつた。

此の婦が、一念懸けて、爲ると云ふに、誰が何を妨げ得よう。

日も待たず、其の翌の日の夕暮時、寶の市へ練出す前に、──丸官が昨夜芝居で振舞つた、酒の上の暴虐の負債を果させるため、とあつて、──南新地の浪屋の奥二階。金屏風を引繞らした、四海波靜に青疊の八疊で、お珊自分に、雌蝶雄蝶の長柄を取つて、橘活けた床の間の正面に、美少年の多一と、さて、名はお美津と云ふ、逢阪の辻、餅屋の娘を、二人並べて据ゑたのである。

晴の裝束は、お珊が金子に飽かして間に合はせた、寶の市の衣裝であつた。

先づ上席のお美津を謂はう。髪は結ひたての水の垂るゝやうな、十六七が潰し島田。前髪をふつくり取つて、兩端へはらりと分けた、遠山の眉にかゝる柳の絲の振分は、大阪に呼んで（いたづら）とか。緋縮緬のかけおろし。橘に實を抱かせた笄を兩方に、雲井の薫をたきしめた、烏帽子、狩衣。朱總の紐は、お珊が手にこそ引結うたれ。着つけは桃に薄霞、朱鷺色絹に白い襲、膚の雪の紅の襲に透くやう媚かしく、白の紗の、其の狩衣を裝ひ澄まして、黒繻子の帶、箱文庫。

含羞む瞼を染めて、玉の項を差俯向く、ト見ると、雛鶴一羽、松の羽衣搔取つて、曙の雲の上なる、宴に召さるゝ風情がある。

同じ烏帽子、紫の紐を深く、袖を並べて面伏さうな、多一は淺黄紗の素袍着て、白衣の袖を肅ましやかに、膝に兩手を差置いた。

前なるお美津は、小鼓に八雲琴、六人づゝが兩側に、ハオ、イヤ、と掛子を取つて、金蒔繪に銀鋲打つた欄干づき、輻も漆の車屋臺に、前囃子とて楽を奏する、其の十二人と同じ風俗。

後囃子が、又皷打つた高い屋臺に、これは男の稚兒ばかり、すり鉦に太鼓を合はせて、同じく揃ふ十二人と、多一は同じ裝束である。

二人を前に、銚子を控へて、人交ぜもしなかつた……其の時お珊の裝は、また立勝つて目覺しや。

## 十九

寶の市の屋臺に付いて、市女また姫とも稱ふる十二人の美女が練る。……

練衣小袿の紅の袴、とばかりでは言足らぬ。たゞ其の上下を裝束くにも、支度の夜は丑滿頃より、女紅場に顏を揃へて一人々々沐浴をするが、雪の膚も、白脛も、其の湯は一人づゝ紅を流し、白粉を汲替へる。髪を洗ひ、櫛を入れ、丈より長く解捌いて、緑の雫すら／＼と、香枕の香に霞むを待てば、鶏の聲數々聞えて、元結に染む霜の鐘の音。血も潔く清き身に、唐衣を着け、袴を穿くと、しら／＼と早や旭の影が、霧を破つて色を映す。

さて住吉の朝ぼらけ、白妙の松の樹の間を、靜々と詣で進む、路の裳を、皐月御殿、市の式殿にはじめて解いて、市の姫は十二人。袴を十二長く引く。……

其の市の姫十二人、御殿の正面に揃して出づれば、神官、威儀正しく彼處にあり。土器の神酒、結び昆布。やがて檜扇を授けらる。これを受けて、廊に歸つて、緋や、萌葱や、金銀の縫箔光を放つて、板戸も松の緑の影に、雲白く梢を繞る松林に日の射す中に、一列に並居る時、巫子する〳〵と立出でゝ、美女の面一人毎に、式の白粉を施し、紅をさし、墨もて黛を描く、と聞く。

素顔の雪に化粧して、皓歯に紅を濃く含み、神々しく氣高いまで、お珊は髮に、黛さへほんのりと描いて居る。が、女紅場の沐浴に、美しき膚を衆に描き、解き揃へた黒髪は、夥間の丈を揃へたけれども、一人葉は、住吉の式に連る事をしなかつた。

間際に人が缺けては事が濟まぬ。

世話人一同、袴腰を捻返して狼狽へたが、お珊が思ふまゝな金子の力で、身代りの婦が急に立つた。

で、これのみ生女の手で借り、容色も南地第一人。緋の色の緋よりも冴えた、皓紅の口許に美しく微笑んだ。

「多一さん、美津さん、一寸、どないな氣がおしやす。」

[illegible]、心易げに、烏帽子を前に、[illegible]を掛ける。

素袍の紗に透通る、燈の影に淺黄とて、月夜に色の白いやう、多一は照らされた面色だつた。

「なあ？」とお珊が聞返す、胸を薄く數を襲ねた、雪の深い裏ねの襟に、檜扇を取つて插して居た。

「御寮人樣。」

と手を下げて、

「何も、何も、私は申されませぬ。あの、たゞ夢のやうにござります。」と漸と云つて、烏帽子を正しく、はじめて上げた、女のやうな優しい眉の、右を殘して斜めに卷いたは、笞の痕に、無慚な繃帶。

お珊は黒目勝に、熟と瞻つて、

「眞個に、然う云うたら夢やな。」

と清らかな襟のあたり、座敷を衝と眴した。

ト網代、簾、其の金屏風に、人の影が殘らず映つた。

映つて、而して、緋に、紫に、朱鷺色に、二人の烏帽子、素袍、狩衣、綺あるまゝに色の影。特にお珊の黒髪が、一條長く、横雲掛けて見えたのである。

## 二十

時に、間を隔てた、同じ津屋の表二階に並んだ座敷は、殘らず丸官が借り占めて、同じ宗右衛門町に軒を揃へた、藤の棚屋と齊しく、毛氈を聯ねた中に、やがて時刻に、燈を出て、一先づ女紅場で列を整へ、先觸する露拂ひ、十人の稚兒が通り、前囃子の屋臺を挾んで、其處に、十二人の姫が續くと、藝妓の手に、檜扇取つて練る約束で、我がお珊の、市の姫の姿を見ようため、藝妓、幇間をずらりと並べて、宵からこゝに座を構へた。

が、其の座敷もまだ寂寞して、時々、階子段、廊下などに、遠い跫音、近く衝しき衣摺の音のみ聞ゆる。

お珊は袖を開き、居直つて、

「まあな、眞個に夢のやうにあろな。私かて、夢かと思ふ。」

と、靜止けた黛、恍惚と、多一の顔を瞻りながら、

「けど、何の、何の夢やおへん。たとひ夢やかて。……丸官はんの方もな、私が身に替へて、承知させた……三々九度やさかい、あゝした我まゝな、好勝手な、嬲ぶうた事は晩に變へ、やは

る人やけれ、此度からは、私が附いて居るよつて、承合うて、とないしたかて夢にはせぬ。……あんじやう思うておくんなはれや。

美津さん、」

と娘の前髪に、瞳を返して、

「不思議な御縁やな。ほゝ、」

手を口許に翳したが、

「恁う云たかて、多一さんと貴女とは、前世から約束したほど、深い交情でおいでる様子。今更ではあるまいけれど、私とは不思議な御縁やな。

思うて見れば、一昨日の夜さり、中の芝居で見たまでは天王寺の常樂會にも、天神様の御縁日にも、つひぞ出會うた事もなかつたな。

一見で恁う成つた。

貴女た、ようこそ、芝居の裏で、お爺はんの肩揉つて上げなはつた。多一さんも人目忍んで、貴女の孝行手傳はつた。……自分介抱するよつて、一條なと、可愛い可愛い女房はんに、澤山芝居を見せたい心や。又な、其の心を汲取つて、鶏へ嬉々お歸りやした、貴女の優しい、仇氣ない、可愛らしさも身に染みて。……

私はな、丸官はんに、軋々と……四角な天窓乗せられて、鶏の仕切も拷問の柱とやら、膝も骨も砕けるほど、辛い苦しい堪へ難い、苦を拔く貞節に逢ふやうな中でも、身節も恍惚するまで視めて居た。あゝ……身に、お仕置場らしい青竹の矢來の向うに……貴女等の光景をば。——

惡事は虎の千里走る、好い事は、花の香ほども外へは漏れぬ言ふけれど、貴女二人は孝行の徳、戀の功、恩愛の報だすせ。誰も知るまい、私一人、よう知つた。

逢阪に店がある、餅屋の評判のお娘さん、御兩親は、どちらも行方知れず成つた、其の借錢やら何やらで、苦勞しなはる、あのお爺さんの孫や事まで、人に聞いて知つたよつて、不圖な、彼や此や談合しよう氣に成つたも、私ばかりの心やない。

天滿の天神様へ行た、其の歸途に、つい虚氣虚氣と、最う黄昏やぶふ時を、寄つて見たい氣に成つて、貴女の餅屋へ、土産買ふ振りで入つたら、」

と微笑みながら、二人を前に。

「多一さんが、使の間を一寸逢ひに寄つて、町並灯の點された中に、其の店だけは灯もつけぬ、暗いに島田が黑かつたえ。其のな、繃帯が白う見えた。」

## 二十一

小指を外らして指の端を、襟に當てた。……と

聞けば其の縁を結ぶ生であるやうにした

續々話して居はつたた……其處へ、私が

行合はせたも、此の杯の縁結たすせ。

こゝでたゞに成らはつたら、直ぐにた、別に店を出して貰ふなり、母様持つて其處から出店へ通ふなり、あの、お爺はんと二人、どないにも暮らして行かはるやうに、私がきつと引受けた。弟、妹の分にして、丸官はんには否は言はせぬ。よつて、安心おしやす。……え、嬉しいやろ。美津さんが、あの、嬉しうてならなえ。

何うや、九太夫はん。」

と云つた、お珊は、密と聲を立てゝ、打解けた笑顔に成つた。

多一は素袍の淺黄を濃く、袖を緊めて、又其の顔を、はッと伏せる。

「ほゝゝ多一さん、貴方、然うむつかしうせずと、胡坐組む氣で、杯しなはれ。私かて、丸官はんの傍に居るのやない、此の一月は箱のある、富田屋の以前の藝妓、其のつもりで酌をするのえ。

假祝言や、儀式も作法も預るよつてな。後に

又あらためて、歴然とした媒妁人立てる。其の媒妁人やつたら、此の席でこないな串戯は言へやへん。
然ない極らずと居ておくれやす。なあ、九太夫はん。」
「御寮人様。」
と片手を畳へ、
「私は最う何も存じません、胸一杯で、ものも申されぬやうにござります。が、其の九太夫は情なうござります――」
と、術なき中にも、ものゝ嬉しさうな笑を含んだ。
「然うやかて、貴方、一昨日の暮方、御庭の上間に、……そないして、話して居なはつた處へ、私が、ト行た……姿を見ると、腰掛框の縁の下へ、悄げてもうて、潜つて隠れやはつたやないかいな。」
言ふ――其は事實であつた。――
「はい、もう今でこそ申しますが、御寮人様が父お意見の悪い、其の頃、顔とお附けなされまして、然にあんこな細寄越せ、茶を持てと、此の[illegible]に御座りまする、
「は、其上、入る穴はなし、貴女様の召しものゝ薫が、麝香とやらを嗅さますやうで、気が遠くなりました。
其の辛さより、犬に成つてのこ／＼と、下屋を這出しました時が、何ほ術なうござりましてござります。」
「ほゝ、可厭な。此の人は。……最初はな、内證で情婦に逢やはるより、何の餘所の人でないもつを、私の姿を見て隠れやはつた心の裡が、水臭いやうにあつて、口惜いと思うたけれど、な、……手を支いて詫言やはる……其の時に、門のとまりに、丁と乗つて、むぐ／＼柿を頬張つて居た、あの、大な猿が、土間へ跳下りて、貴方と一所に、頭を土へ附けたのには、つい、おろ／＼と涙が出たえ。
柿は、貴方の土産やつたさうに聞くな。
天王寺の境内で、以前鐸はしてやつた、あの猿。どない成つた問うた時、此と縁のものがあつて、其の方へ、とばかり言うて、預けた先方を話しなはらん、住吉邊の田舎へたと思うたら、大切な許に居るやもの。
おゝ、其なりで、貴方たちを、私が方へ、無理に連れまうて来て了うたが、うつかりしたな、お然はんは、今夜は私の市女笠持つて開いて貰ふよつて、其も留守。あゝ、猿は何うしたやろな。」
「はい、――」
と気が引取つた、我が身の姿と、此の場の光景、踊のさらかに臺詞を云ふやう、細く透る、お聲震へて、
「お篠さんが留守の時も、あの、戸を閉めた中に居て、ような、何時も留守してくれますつたえ。」

## 二十二

「飼主とは申しまして、却つて私の方が養はれました、あの、猿でさへ、……」
多一は片手に顔を押へて、
「御寮人様は申すまでもござりません、大道からお拾ひ下さりました。……又旦那様の目を盗みまして、私は貴に、畜生にも劣りました、……」
「何や……怪我に貴方は何やかて、芝津さんは天人や、其の人の夫やもの。まあ、二人して契束をお見やす、紋を並べたやうやないか。
けどな、多一さん、貴方な、九太夫やつたり、其ので、鷺の稽古で、床下から出やはつた處は仁木どすやろ。澤山忠義な家来では貴方やかてないやうな。
と傍目に、奥もなく云うて退けたか、ほんのりと潤みのある、瞼に薄く影が映した。

「あゝ、わるく云ふ筈ない。……貴下、其の疵、何處に最う疼痛はないか。こないした嬉しさに、づき〳〵したかて忘られう。けど、疵は刻んで消えまいな。私が傍に居たものを。美津さんの大事な男に、怪我させて済まなんだな。然やけど、美津さん、怨みにばかり、思ひやすな。何百人か人目の前で、打擲されて、熱と堪へて居やはつたも、辛抱しとげて、貴女と一所に、添遂けたいばかりなんえ。而したら、男の心中の極印打つたも同じ事、済んだかて可いのどす。」

お美津は堪へず、目に袖を當てようとした。が、朱鷺色衣に裏白きは、神の前なる薄紅梅、涙に濡らすは勿體なし。緋縮緬を手に掴む、襦袢は常の亂れとこ、強ひて堪へた顔の端に、前髪の鬢しよ〳〵と。

お珊は默りを多一に返して、

「喃、多一さんも然うだすやろな。」

「はい？」と聞返すやうにする。

「丸官はんに、柿の核吹かけられたり、口車に綱つけて廊下を引摺廻されたり、羅宇のポッキリ折れたまで、そないに打擲されやして、死に身に成つて堪へなはつたも、誰にした辛抱でもない、皆、美津さんの爲めやろな。」

「……」

「なあ、貴方、」

「……」

「えゝ、多一さん、新枕の初言葉と、私もここで了と聞く。……女子は女子同士やよつて、美津さんの味方して、私が聞きたい。貴方は然うはなからうけど、男は浮氣な……」

と見る、目がぱつちりと輝いた。多一は俯向いて見なかつた。

「……もうやさかい、美津さんの後の手券に、貴方の心を取つて置く。あゝまで堪へやした辛抱は、皆女子へ、」

「えゝ、」

「あの、美津さんへの心中だつかへ。」

多一はハツと畳に手を……其の素袍、指貫に、刀なき腰は淋しいものであつた。

「御寮人様、御推量を願ひたうござります。誓文それに相違ござりません。」

お美津の両手も、鶴の白羽の狩衣に、玉を揃へて、前髪揺れに支いて居た、簪の橘薫りもする。

「おゝ……嬉し……」

と胸を壓つて、思はず、つい云ふ聲の綾に、我を忘れて、道成寺の一條の眞紅の絲が、鮮麗に織込まれた。

其は、禁制の錦であつた。

ふと心付いた状して、動悸を鎮める體に、襟なる繪扇の端を堅手と壓へて、ト後を見て、襖にすらり靡いた、其の下げ髪の丈を眺めた。

お珊の姿は陰々とした。

## 二十三

夫婦が二人、其の若い顔を上げた時、お珊は何氣なき面色した。

「眞個になあ、くどいやうなが多一さん、よう辛抱しやはつた。中の芝居で、あの事がなかつたら、幾ら私が無理云うたかて、丸官はんに此の祝言を承知さす事は得う爲んもの。……そりやな、夫婦には成らはつたかて、立行くやうに世帯が出来んと成らんやないか。

通ひ勤めなり、別に資本出すなりと、丸官はんに、應、言はせたも、皆、貴方が、美津さんのために堪へなはつた、心中立一つやな。十年七年の奉公を一度に濟ましなはつたも同じ事。

額の疵は、其の烏帽子に、金剛石を鏤つたやうな光が映す……おゝ、天晴なお婿はん

さあ、お嫁はん、お酌せうた、」

と輕く云つたが、鮮麗に、然も威儀ある座を

正して、
「お盞。」
で、長柄の銚子に手を添へた。
朱塗の蒔絵の三組は、浪に夕日の影を重ねて、蓬莱の島の松の葉越に、如何にせし、鶴は狩衣の袖をすくめて、其の盞を取らうとせぬ。
「さ、お受けや。」
と、お珊が二度ばかり勧めたけれども、竪立つらしい胸の響きに、烏帽子の纓の揺るゝのみ。
美津は遣瀬なけに手を控へる。
ト熟と視て、
「おゝ、まだ年の行かぬ、嬰児はんや。多一はん、と、酒事しやはつた覺えがないな。貴女盞を先へ取るのを遠慮やないか。三々九度は、嫁はんが初手に受けるが法やけれど、別に儀式だつて祝言やないよつて、何うなと構はん。
然やつたら多一さん、貴方先へお受けやす。」
「はい、」と齊しく逡巡する。
「何うしやはつたえ。」
「御寮人様、一生に一度の事でございます。迚もの事に、ものが逆に成りませんやう、矢張美津から……
と一寸目を合せた。
「女から、お盞を頂かして下さりまし。」
「然やかて、含羞んで居て取んなはらん。……何や、貴方がた、をかしなえ。」
ふと氣色ばんだお珊の状に、座が寂として白けた時、表座敷に、テンテン、と二ツ三ツ、音じめの音が響いたのである。
二人は黙つて差俯向く。……
お珊は、するりと膝を寄せた。乾として、
「早うおしや！ 邪魔が入ると成らんよつて、私も直きに女紅場へ行かんと成らんえ。……な、あの、酌人が不足なかい。」
二人は、せはしげに瞳を合して、頻に目でものを云つて居た。
「もし、」
と多一が急いた聲で、
「御寮人様、此の上に何ほ罰が當ります。不足やなんの、然やうな事がありまして可いものでございますか。御免下さりまし、申しませう。貴女様、其の召しました、兩方のお袂の中が動きます。……美津は、あの、其が可恐いのでございます。」と判然云つた。
唯、顋を檜扇に、白小袖の底を透して、
「此か、」
と投げたやうに言ひながら、衝と、兩手を中へ、袂を探つて、肩をふらりと、なよ〳〵と其の唐織の袖を垂れたが、品を崩して、お手玉持つよ、と若々しい、他愛ない風があつた。
「何や、此の二條の蛇が可恐い云うて……兩方とも、言合はせたやうに、貴方二人が、自分たちで、心願掛けたものどすせ。
神屋の店で逢うた時、多一さん、貴方は此の袋一つ持つて居た。な、買うて來る次手はあつて、一夜祈はあけたけれど、用が閒が忙しうて、夜さり高津の蛇穴へ放しに行く隙がない、賴まれて欲しい——云うて、美津さんに託けう、と其が用で顏見に行かはつた云うたやないか。」

## 二十四

「美津さんも又、日が暮れたら、高津へ行て放す心やつた云うて、自分でも一筋。同じ袋に入つたのが、二ツ、ちよんと、あの、猿の留木の下に揃へてあつて、——其の時、私に打明けて、二人して言やはつたは、つい一昨日の晩方や。
其も此も、貴方がた、芝居の事があつてから、あんな奉公早う罷めて、すぐにも夫婦に成れるやうにと、身體は兩方別れて居て、言合せはせぬけれど、同じ日、同じ時に、同じ祈を掛けやはる。……

蛇もこれで條済合うた。
案の定、其の場から、思ひが叶うた、お二人さん。

彼處のな、蛇居に蛇は多けれど、貴方がたの此の條ほど、験のあつたは外にはないやろ。私かて、嘘はなし、稚い時から勤をした、辛い事、悲しい事、口惜い事、戀しい事、」

と懐手のまゝ、目を瞑つて、

「死にたいほどの事もある。……何々の思が遂げたいよつて、貴方より人に類似りたさに、同じ蛇を預つた。今少し、身に附けて居たいよつて、恁うして置いておくれやす。

貴方、結ぶの神やないか。

けれども、思ひ詰めては、自分の手でも持つたもの……一度、願が叶うた上では、人の袂にあるのさへ、美津さん、婦は、蛇は、可厭らしな。

よう貴女、此を持つまで、多一さんを思やはつた、婦同士や、察せいでか。——袂にあつたら、粗相して落すと成らん。憂慮なやろさかい、私が恁うするよつて、大事ないえ。」

と袖の中にて手を引けば、内懐の乳のあたり、浪打つやうに膨みたり。

「婦の急所で匿へて置く。……乳銜へられて、私が死なうと、蛇の影も覗かせぬ。と、美津さん、先づ、お前に。」

お珊は長柄を丁と取る。

美津は盞を震へて受けた。

手の震へで滴々と露散る姫き酒の雫、蛇の色ならずや、酌参るお珊の手を掛けて燈の影ながら、青白き虹が映つたのである。

はた〳〵とお珊が手を拍くと、傍に心得さしてあつたら、廊下の障子の開く音して、すら〳〵と足袋摺に、一間を過ぎて、又襖に此の襖を開けて、

「お召し、」

と其處へ手を支いた、褶模様の振袖は、島田の丈長、舞妓にあらず、家から齎いて來て居る奴であつた。

「可いかい。」

「はい。」と言ひさま、はら〳〵と小走りに、もとの廊下へ一度出て、其の中庭を角にした、向うの襖をすらりと開けると、閨紅に、翠の夜具。枕許に又一人、同じ姿の奴が居る。

お珊が眄つて、此方から差覗いて立つのは、蘆田鶴の彳んで、紅葉の錦の褥深く、夕映えたるを望める光景。居たのが立つて、入つたのと、奴二人の、同じ八尺對扮裝。紫の袖、白襟が、紫の袖、白襟が。

出口燃ゆる緋綸子、ひらりと折目に手を掛けて、きり〳〵と左右に廻して、此を蔽ふ六枚屏風、表に描いたも、紅葉なるべし、裏に白銀の水が走る。

彼方へ。」

お珊が一人を導いた時、兎角して座を立つた、美津が搦衣の褄の裾は、膝を露顯な素足なるに、恐ろしい深山路の棘を踏んで、あやしき錦の旅粧に行く……行燈が疊に遙々しく、もつあはれに見えたのである。奴二人は姿を隱した。

## 二十五

屏風を隔てゝ、此の、紅の袴した媒妁人に、花やかに笑つたのである。

一人を褥の上に据ゑて、お珊がやがて、一人を、其のあとから閨へ送ると、前のが、屏風の片端から、烏帽子のなりで、するりと抜ける。

下髪であとを追つて、手を取つて、枕頭から送込むと、其處に据ゑたのが、すつと立つて、裾から屏風を抜けて出る。トすぐに續いて、纏つて抱くばかりにして、送込むと、おさへて置いたのが、はら〳〵出る。

素袍、搦衣、唐衣、綾と錦の影を交へて、

風ある状に、裾袂、追ひつ追はれつ、ひら〳〵と立迷ふ風情に闇を縫つた。巫山の雲に桜[illegible]、[illegible]れば、名もなき無の淵あらむ。左、橘、右、桜、衣の模様の色香を浮かして、水は巴に渦を巻く。

「おほゝほゝ、」

呼吸も絶ゆげな、なえたやうな美津の背を、屏風の外で抱へた時、お環は、其の花やかな笑を聞かしたのである。

好き機会とや思ひけむ。

廊下に跫音、ばた〳〵と[illegible]、[illegible]、寳の市の世話人一人、眞先に、すつ〳〵すつと来る、[illegible]女房[illegible]、仲居まじりに、奴[illegible]が続いて、[illegible]ひの人数。

口々に、

「御新人様。」

「お[illegible]様。」

「女紅場では、[illegible]

貴女はかりが[illegible]」

襖の中から、

「卓は？」

と[illegible]に云ふ。

「[illegible]申し着けました、」と[illegible]が答へたので

[illegible]

「待たせはせぬえ、大事な處へ、何や！」

と聲が凜とした。

黙つて、すた〳〵、一同は廊下を引く。

とばかりあつて、襖をあけた時、今度は美津が閨に隠れて、枕も、[illegible]も見えなんだ。

多一が屏風の外に居て、床の柱の、釣籠の、白玉椿の葉の艶より、ぼんやりとした素袷で立つた。

襖が[illegible]の半身で、廊下の後前を熟と視て、人の影もなかつた途端に、[illegible]ると、引寄せた。

お環の[illegible]に[illegible]ると倒れるやうに、ハタと膝を支いた、多一の[illegible]に、[illegible]向きさまに、

[illegible]と。――

丸官の[illegible]を、表に[illegible]て、左右に開いた[illegible]に立寄りもせず、階子段を颯と下りる、と忽ち門へ姿が出た。

軒を離れて、俥に乗る時、[illegible]に立つた、丸官、と[illegible]を上下に合すや否や、矢を射るやうな二人曳。あれよ、あれよと云ふ[illegible]、[illegible]の灯に影を散らした、[illegible]は[illegible]と道を分けた。

寳の市の見物は、此よりして早や宗右衛門町の両側に、人垣を築いて見送つたのである。

其の年十月十九日、寳の市の最後の夜よ、[illegible]

[illegible]女紅場[illegible]、[illegible]たちなど、[illegible]ないか、[illegible]、市[illegible]女[illegible]持ちの人足など、[illegible]た。

通り筋の、[illegible]に、[illegible]に、[illegible]が[illegible]いたのである。

次第に数が増すと、まざ〳〵と、薄月の曇つた空に、嘴も翼も見えて、やがては、練ものの上を飛交はす。

列が[illegible]に小休みをした時は、[illegible]の中の見物さへ、[illegible]を聞いた、と[illegible]云ふ。

## 二十六

「宗八、宗八。」

[illegible]屋の表座敷、床の間の正面に、丸官[illegible]、[illegible]、何[illegible]、[illegible]なる[illegible]、[illegible]で、座にある[illegible]を大声に呼ぶ。

「はッ、」

「き様、逢阪のあんころ餅へ、使者に、[illegible]で駈着けて、今帰つた處ぢやな。」

「[illegible]にござりまして、へい。」

「何か、[illegible]に連れて此へ来る手筈ぢやつた、猿

は、留木から落ちて緣に下へ半分身體を突込んで、斃死つて居たげに云ふ……噓でないた……一實說正銘にござりまして、へい。餅屋店では、斧の傳五めに、今夜、貴方樣、お珊の方樣、

と額を敲いて、

「卽ち、御祭人樣、市へお練出しのお供を、お好とあつて承ります。……さて又、名代娘のお美津さんは、御夫婦此に……え、卽ち逢阪の辻店は、戸を寄せ掛けた明巢にござります。

處へ宗八、丸官閣下お使者といたし、俥を一散に乘着けまして、隣家の女房立會ひ、戸を押開いて見ましたれば、いや、はや、何とも惡食がないたいた樣子、お望みの猿は血を吐いて斃ち果てゝ居りましたに毛頭相違ござりません。」

「うむ。」

と苦切つて頷きながら、

「多一、あれを聞いたかい、其の通りや」と、ぐつと見下ろす。

一座の末に、うら若い新夫婦は、平伏して居たのである。

此より先、餘り御無體、お待ちや、などゝ、慌しい婦まじりの聲の中に、丸官の形、猛然と躍上つて、廊下を鳴らして魔の如く、二人の間へ押寄せた。

襖をどんと突明けると、床の間の白玉椿、怪しき明星の如き別天地に、こは思ひも掛けず、二人の姿は、綾の帳にも蔽はれず、指貫やなど、烏帽子の紐も解かないで、屛風の外に、美津は多一の膝に俯し、多一は美津の背に額を附けて、五人囃子の雛二個、袖を合せたやうであつた。

揃つて、胸先がキヤ／＼と痛むと云ふ。

「酒喫へ、意氣地なし！」

で、有無を言はせず、表二階へ引出された。

欄干の緋の毛氈は似たりしが、今夜は額を破るのでない。

「練ものを待つ內、退屈ぢや。多一やい、皆への馳走に猿を舞はいて見せてくれ。恥辱ではない。汝や、丁稚から飛上つて、今夜から、大阪の旦那の一人。昔を忘れぬためと云ふ……取立てた主人の訓戒と思へ。

呼べ、と言へば、婦どもが愚圖々々吐す。新枕は長鳴鷄の夜があけるまでは待兼ねる。

主從は三世の中ぢや、遠慮なしに閨へ推參に及んだ、惡く思ふまいな。汝や、天王寺境內に太鼓たゝいて居て、ちよこんと猿負背で、小屋へ、歸りがけに、太夫どのに餅買うて、汝も食ひをつた、行歸りから、其の娘は馴染ぢやげた。足洗うて、丁稚に成ると、右の猿は餅屋へ預けて、現に猿ケ餅と云ふこと、こゝに居る婦どもが知つた中。

田畝の鼠が、蝙蝠になつた、其の素袍ひらつかいたかて、今更隱すにや當らぬやて。却つて卑怯ぢや。

遣つてくれい。

が、聞く通り、ちやと手廻しに使者を立てた、宗八が歸つての口上、あの通り。

殘念な、猿太夫は墜ちたとあるわい。

唄など歌へ、形など見せをれ。

何吐す、」

と、とりたしを云つた二三人の年增の藝妓を睨廻いて、

「やい、多一！」

## 二十七

「致します、致します。」

と呼吸を切つて、

「皆さん御免なさりまし。」

多一はすつと衣紋を扱いた。

淺黃の素袍、侍烏帽子が、丸官と向う正面。藝妓、舞妓は左右に開く。

其の時、膝に手を支いて、

「……ま猿めでたうのう仕る、踊るが手許立廻り、肩に小腰を譲合せ、静やかに舞うたりけり……」

聲を張つた、扇拍子、疊を軽く拍ちながら、「筑紫下りの西國船、艫に八挺、舳に八挺、十六挺の櫓櫂を立てゝ……」

「喝乎々。あゝ惜い、太夫が居らぬ。千代鶴やい、猿に成れ。一若、立たぬか、立たぬか、此奴。えゝ！ 婆どもでまけて遣らう、古猿に成れ、此奴等……立たぬな、おのれ。」

と立身上りに、盃を取つて投げると、杯洗の縁にカチリと碎けて、颯と欠らが四邊に散つた。

色めき白ける燈に、一重瞼の目を清く、美津は伏せたる面を上げた。

「あゝ、皆さん、私が猿を舞ひまつせ。旦那さん、男のためどす。畜生に成つてな、私が天王寺の銀杏の下で、トントン踊つて、養ふよつてな。世帯せいでも大事ない、もう貴方、多一さんを慍めんとおくれやす。

ちやと隙もらうて去ぬよつて、多一さん、さあ、唄ひな、續いて。」

と、襟の扇子を衝と抜いて、すら／＼と座へ立つた、江戸は紫、京は紅、雪の狩衣被けながら、下萌ゆる血の、うら若草、萌黄は難波の色である。

丸官は掌を握つた。

多一の聲は凛々として、

「しもにん／＼の寶の中に――火取る玉、水取る玉……イヤア、」

と一つ掛けた聲が、忽ち切なさうに掠れた時よ。

「ハオ、イヤア、ハオ、イヤア、」霜夜を且つちる錦葉の音かと、虚空に響いた鼓の掛聲。

（コンコンチキチン、コンチキチン、コンチキチン、カラ、タッポッポ）摺鉦入れた後囃子が、遥に交つて聞えたは、先驅既に町を渡つて、前囃子の間近な氣勢。

が、座を亂すものは一人もなかつた。

「船の中には何とお寢るぞ、苫を敷寢に、苫を敷寢に楫枕、楫枕。」

玉を伸べたる脛もめげず、ツト美津は、疊に投げて手枕した。

其の時は、別に變つた樣子もなかつた。

多一が次第に、齒も軋むか、と聲を絞つて、

「葉越しの葉越しの月の影、松の葉越しの月見れば、しばし曇りて又冴ゆる、しばし曇りて又冴ゆる　しばし曇りて又冴ゆる」

と仰いだ、美津の瞳は氷れる如く、瞬きもせず、ト袖を卷いて、扇子を翳し、胸を反らして熟と睜ると齊しく、笑靨に颯と影がさして、爪立つ足が震へたと思ふと、唇をゆがめた皓齒に、苔のやうな血を噛んだが、烏帽子の紐の亂れかかつて、顔に千條の鮮血。

「あ、」

と一聲して、ばつたり倒れる。人目も振も、しどろに成つて背に縋つた。多一の片手の掌も、我が唇を壓除つて、血汐は指を溢れ落ちた。

一座わつと立騷ぐ。階子へ遁げて落ちたのさへある。

引仰向けて緊乎と抱き、

「美津さん！……二、二人は毒害された、お珊、お珊、御寮人、お珊め、婦！」

## 二十八

「床几、」

と、前後の屋臺の間に、市女の姫の第五人目で、お珊が朗かな聲を掛けた。背後に二人、朱の臺傘を翳より高々と地摺の黑髪にさしかけたのは、白丁扮裝の[illegible]人足で、並んで、萌黄紗

に朱の総紐んだ、市女笠を捧げて従つたのは、特にお珊が一人の望んだと云ふ、お美津の[illegible]の傳五郎。

　印半纏、股引、腹掛けの若いものが、さし心得て、露じとりの地に据ゑた床几に、お珊は眞先に腰を掛けた。が、此は装飾ではない。練ものは、揃つて、宗右衛門町のこゝに休むのが習であつた。

　屋臺の前なる稚兒をはじめ、間をもつて圍ばかりづゝ、前後に取つて、十二人が十二の衣、色を勝つた南地の藝妓が、揃つて、一人づゝ床几に掛かる。

　豪奢の朱は、流に階一面、緋傘の紅の毛氈に、色映交はして、千本植ゑたる櫻の梢、席に雪に咲きかゝる。白の狩衣、紅梅小袖、灯の影にちら／＼と、囃子の舞妓、藝妓など、霧に描揺つて、小鼓、八雲琴の調を休むと、後囃子なる素袍の稚兒が、淺黄櫻を織交ぜて、すり鉦、太鼓の音も憩ふ。動揺めき渡る見物は、大河の水を堰いたやう、見渡す限り列のある間、——一尺ごとに百目蠟燭、裸火を煽らし立てた、黒塗に蒔附の柵の堤を築いて、両方へ押分けたれば、練もののみが静まり返つて、人形のやうに美しく且つ凄い。

　其の中を、[illegible]たゝ／＼と地を踏んで、袴の裾を捌しつゝ。二人三人、世話人が、列の間搦を往きつ還りつ、時々顔を合はせて、二人囁く、直ぐに離れて又一人、別な世話人と一寸出逢ふ。中に一人落しものをしたやうに、うろうろと、市女たちの足許を覗いて歩行くものもあつて、大な蟻の働振、然も事ありげに見えるばかりか、斜としかけた白丁どもも、三人ならず、五人ならず、眉を顰め口を開けて空を見た。

　其の空は、暗く曇つて、處々朱の色を交へて曇つた。中を一條、列を切つて、何處からともなく、白氣が渡つて、細々と長く、道に蛾ある方に響く。聲を、あたりの湯屋の煙、又、遠い煙筒の煙が、風の死したる大阪の空を、あらむ限り這ふとも言つた。

　宵には風があつた。其は冷かつたけれども、小春風の目の餘波に、薄月さへ、朧々と底の暖いと思つたが、道頓堀で小休みして、やがて太左衛門橋を渡込む頃から、眞暗に成つたのである。

　空は次第に黒を増した。のみならず、白氣の怪みもある再燃か、誰云ふとなく、今夜十二人の市女の中に、姫の數が一人多い。凡て十三人あると云はす。

　世話人徒が、[illegible]にして、其となく、十二人一人數へて見ると、成程十三人あるが[illegible]もないと云ふ。

　念のために、他所見をさせて顔を覗いて、名を銘々に心に留めると、決して似たものが増えたのではない。定の通り十二人で、又見渡すと十三人。

　……式の最初、住吉詣の宴席に、女紅場で支度はしたが、急にお珊が気が變つて、此へ参らぬ、と言つた爲に、一人欠けた處へ、人數を増やした。が、其は伊井蓉峰の娘巴と云つて、お珊が贔屓い時から可愛がつた娘分。其の女は、と讀つに見ると、現に丸官に呼ばれて、浪屋の奥座敷に居ると云ふから、其の身代りが交つたと云ふのでもないのに。……

　其さへ尋常ならず、ひしめく、處に、揃つて加へて易からぬは、世話人の一人が見附けた——屋臺が道頓堀を越す頃から、橋へかけて、列の中に、たらたら、たら／＼と一雫づゝ、血が落ちて居ると云ふのである。

## 二十九

　一人多い、其の姫の影は朧でも、血のしたゝ

りは現に見て、誰が目にも正しく留つた。

灯の影に地を探つて、確ならず、うそ／＼捜ものをして歩行くのは、其の血のあとを辿るのであらう。

消防夫にも、駕籠屋にも、敢て怪我をしたらしいのはない。婦たちにも様子は見えぬ。尤も、南地第一の大事な市の列に立てば、些細な怪我なら、弱い舞妓も我慢して秘して退けよう。

が、市に取つては、上もなき可忌しさで。

世話人は皆密しく顰んだ。

知らずや人々。お珊は既に、襟に秘し持つた縫針で、裏を透して、左の手首の動脈を刺し貫いて居たのである。

但、初から不思議な血のあとを拾つて、列を縫つて検べて行くと、静々揃つて練る時から、お珊の裙の影で留つたのを人は知つた。

こゝに休んでから、それとなく、五人目の稚の袂を覗くものもあつた。けれども端然として居た、其の他に凝然として襟に一點の雲もなかつた。が、右手に捧げた榊に見入るのであらう、寂しく目を閉ぢて居たと云ふ。

時に、途中では然もなかつた。爰に休む内に、怪しき氣のこと、點滴る血の事、就中、稚の数の幻に一人多い事が、何時となく、傳へられて、烈しく女どもの氣を打つた。

自然と、髪を垂れ、袖を合せて、床几なる稚は皆、斉しくお珊が臨終の姿と同じ、静のさみしい風情と成つた。

血だらけだ、血だらけだ、血だらけの稚児だ——と叫ぶ——柵の外の群集の波を、鯱に追はれて泳ぐが如く、多一の顔が真蒼に顕れた。

「お呼びや、私をお知らせや。」

とお珊が云つた。

傳五爺は、懐手大きく、仰天した鐵破聲を振絞つて、

「多一か、多一はん——御寮人様は此處ぢや。」

と喚く。

早や柵の上を踏蹌めき越えて、虚空を掴んで探したのが、床几の前に、はつたり倒れて、起直り状の目の色に、日よりも血走つた。

「あゝ、待遠な、多一さん。」

と黒髪を搖ぐ、吐息と共に、男の膝に手を掛けた。

「一所には無理をしたけれど、私が先へ死にさうでな、幾度目をば瞑つたやろ。漸と此處まで堪へたえ。も一度顔を、と思ふよつて……」

丸官の握拳が、時に、瓦の破片の如く、群集を打ちのめして掻分ける、

「手でかくしておかれやすな。」と云ふ。

草鞋が颯と斜めに飛つた……丸官の忿怒は遣り果てない。

草履足袋で青い足が、柵を跨いで乗らうとするのを、一目見ると、懐中へ衝と手を入れて、南の方へ振つて、投いて、投げた。既に袋を出て居た蛇は、二筋電の如く光つて飛んだ。

わ、と立騒ぐ群集の中へ、丸官の影は飛込まれた。一人蛇のみならず、もの見高く、推掛つた両側の千人は、一齊に動揺を立て、悲鳴をあげて、泣く、叫ぶ。茶屋も屋の軒に縋つて、上足の泥波を店へ映と……津浪の餘殘は太左衛門橋、戎橋、相生橋に溢れかゝり、畳屋町、笠屋町、玉屋町を横筋に渦巻き落ちる。

見よ、見よ、鶏が鳴ひかゝつて、人の目、顔に、嘴を鳴らすを。

お珊に前寄る世の人は、又不思議にも、蛇が、と遁惑うた。其の數は唯一條ではない。屋臺から舞妓が一人倒に落ちた。其處に、めら／＼と鎌首を立て、遁ひかゝつたのである。

それ、怪我人よ、人死よ、と其處ら此處も湧き揚る。

お珊は、心靜に多一を抱いた。
「よう、熟見せておくれやす。」
「口惜い。御寮人、」と、血を吐きながら頭を振る。
「貴方ばかり殺しはせん。これお見やす、」と忘れたやうに、血が凋れて、蒼白んで、早や動かし得ぬ指を離すと、刻んだやうに、緊乎と持つた、其の脈を晒した手の橘の、鮮血に染まつたのが、重く多一の膝に落ちた。
男は少時凝視めて居た。
「口惜いは私こそ、……多一さん。女は世間に何にも出来ん。戀し、愛しい事だけには、立派に我まゝして見せう。
賣市の此の服装で、大阪中の人の見る前で、貴方の手を引いて……なあ、見事丸官を蹴つて見せう、と命をかけて思うたに。……先刻、おさする時も、押返して問うたもの、お珊、お前へ心中立や、と一言いうてくれはらぬ。
一昨日の芝居の難儀も、恁うした内證があるよつて、私のために、堪へやはつた辛抱やつたら、一生に只た一度の、嬉しい思をしようもの、多一さん、貴方は二十。私は上の姉で居て、何で恁うまで迷うたやら、堪忍しておくれや。」
とて、はじめて、はら／＼と落涙した。
絶入る耳に聞分けて、納得したか、一度は頷いたが、
「私は、私は、御寮人、生命が惜いと申しません。可哀相に、何で、何で、お美津を……」
と瞬きも果さず……
「わあ、」と魂切る。
傳五爺の胸を壓へて、
「人が立騒いで邪魔したら、撒散かいて拂ひ退けうと、お前に預けた、金貨銀貨が、其の懷中に澤山ある。不思議な事で、使はいで濟んだよつて、其もつて、な、えらい不足なやろけれど、不足、不足なやろけれど、……あゝ、術ない、最う身がなえて聲も出ぬ。
お聞きやす、多一さん、美津さんは、一所に連れずと、一人措かいて置きたかつた。貴方と二人、人は交ぜず、死ぬのが私は本望ながら、まだ此の上、貴方にも美津さんにも、濟まん事や思うたによつてな。
逢うたかえ、分つたかえ、冥土へ行てかて、二人をば並べて置く、……遣瀬ない、私の身にも成つてお見や。」
幽ながらに聲は透る。
「多一さん、手を取つて……手を取つて……離さずと……―左の此の手の動く方が、美津さ、あの娘の手をば私が引く。……さあ、三人で行からな。」
と床几を離れて、すつくと立つ。身動ぎに亂るゝ黒髪。簪落つ、と眞中から二つに割と成る。半ばを多一に振掛けた、半ばを握つて擲いたのを、翳すばかりに、浪屋の二階を指麾いた。
「おいでや、美津さんえ、……美津さんえ。」
練もの、列は疾く、はら／＼に絲が斷れた。が、十一の雛ばかりは、さすが各自に名を恥ぢて、落ちたる市女笠、折れたる塗傘、飛々に、背を潛め、顔を蔽ひ、膝を折敷きなどしたからも、嵐の如く、中の島籠めた群集が叫喚の凄じき中に、紅の袴一人々々、點々として皆留まつた。
唯見ると、雲の黒き下に、次第に不知火の消え行く光景。行方も分かぬ十人に、遠く遠く前途を示す、其が光なき十一の緋の炎と見えた。
お珊は、闇に、目も遙々と、一人づゝ、其の十一の燈を視た。

# 賣色鴨南蠻

## 一

はじめ、目に着いたのは——些と申兼ねる
が、——とに角、緋縮緬であつた。其の燃立つやうなのに、朱で處々ぼかしの入つた長襦袢で。女は裾を端折つて居たのではない、褄を高々と掲げて、膝で挾んだあたりから、紅がしつとり垂れて白い足くびを絡つたが、何うやら濡れしよびれた不氣味さに、然うして引上げたものらしい。素足に染まつて、其の紅いのが映りさうなのに、藤色の緒の重い厚ぼつたい駒下駄、泥まみれなのを、弱々と内端に揃へて、股を一つ捩つた姿で、降りしきる雨の待合所の片隅に、腰を掛けて居たのである。

日永の頃ゆゑ、まだ暮れかゝるまでもないが、やがて五時も過ぎた。場所は院線電車の萬世橋の停車場の、あの高い待合所であつた。

雪はほんのりと萌え、地はふつくりと潤んだ、昨日今日、梅、紅、霞の紫、茶の緑に闇はならむとする頃を籠めて色の濃い、……雨の暗いほど、五月雨か何ぞのやうな雨の灰汁に包まれては、景色も人も、神田川の小舟さへ、皆黒い中に、紅梅とも、緋桃とも言ふまい、横しぶきに、血の滴る如き紅木瓜の、濡れつゝぱつと咲いた風情は、見向ふものゝ、面のほてるばかり目覺しかつた。

此の目覺しいのを見て、話の主人公と成つたのは、大學病院の内科に勤むる、學問と、手腕を世に知らるゝ、最近留學して歸朝した秦宗吉氏である。

邊幅を修めない、質素な人の、住居が芝の高輪にあるので、毎日病院へ通ふのに、此の院線を使つて、お茶の水で下車して、あれから大學の所在地まで徒歩するのが習であつたが、五日も七日も斯う降續くと、何處の道も宛然泥海のやうであるから、勤人が大路の往還の、茶なり黒なり背廣で[illegible]は、まつたく大袈裟だけれど、靴が土舟と言ふ體たらく。秦氏も即ち多分に洩れず——もつとも色が白く鼻筋の通つた處は浮み兎の部に屬しては居るが——歩行き惱んで、今日は本郷どほりの電車を萬世橋で下りて、鐵の其處を横に、大な煉瓦を潜つて、高い石段を昇つた。……此だと、ちよつと歩行いただけで甲武線は東京の大中央を突拔けて、一息に品川へ、……

が、其は段取だけの事さ。時間が時間だし、雨は降る……此處も出入が嘸ぞ混むだらう、と思つたよりは甚しい混雜で、唯停車場などと、宿場がつて澄しては居られぬ。川留か、火事のやうに湧立ち揉合ふ群集の黒山。中野行を待つ右側も、品川の左側も、二重三重に人垣を造つて、線路の上まで押覆さる。

すぐに電車が來た處で、何うせ一度では乘れはしない。

宗吉は然う斷念めて、洋傘の雫を切つて、軽く黒外套の脇に挾みながら、薄い皮の手袋をスッと手首へ扱いて、濡合に透いて見える、何故か、硝子團の温室のやうな氣のする、雨氣と人の香の、むつと籠つた待合の裡へ、コッコッと、——矢藥泥に成つた——佗しい靴の尖を刻んで入つた時、ふと其の目覺しい處を視たのである。

たしか、中央の台に、まだ大な箱火鉢が出て居た。……其處で、ハタと打撞つた、其の緋縮

の炎から、忽に瞳を傍へ外らして、横状にプラットフォームへ出ようとすると、戸口の柱に、ボンと出た、も一つ赤いもの、

## 二

「貸しては下可い。何、黒山の中の赤帽で、其の胸に細紐をしつゝ、うしろ向きに凭掛つて居たが、宗吉が顔を出したのを茶色のちよんぼり髭を生した小白い横顔で、じろりと視めると、

「上りは停電で……下りは故障です。」

と、人の顔さへ見れば、返事は斯う言ふものと極めたやうに殆ど機械的に言つた。そして頸窪を其の凭掛つた柱で小突いて、超然とした。

「へツ！　上りは停電。」

「下りは故障だ。」

響の応ずるが如く、四五人口々に喋舌つた。

「あゝ、あゝ。」

「堪らねえなあ。」

「よく出来てら。」

「困つたわねえ。」と、つい釣込まれたかして、連もない女学生が猪首を縮めて呟いた。

が、いづれも、今はじめて知つたのでは無さうで、赤帽が爾く、機械的に言ふのでも分る。

慌る群集の動揺む下に、寂然たる線路は日脚に薄暗く沈んで、いまに漁が釣れるから待て、と大都市の泥海に、入江の如く彎曲しつゝ、伸々と静まり返つて、其の癖底光のする歯の上手を見せて、冷笑ふ。

赤帽の言葉を善意に解するにつけても、苟も中山高帽を冠つて、外套も服も身に添つた、洋行がへりの大学教授が、端近へ押出して、此際ぢたばた為べきではあるまい。

宗吉は——煙草は喫まないが——其の火鉢の傍へ、引退らうとして、靴を返しながら、爪先を見れば、ぐしよ濡の土間に、ちらちらと紅の褄が流れる。

紅鯉が躍つたやうである。

思はず視線の向ふのと、肩を合せて、衝と腰掛を立上つた、もう一人の女がある。丁度、緋縮緬のと並んで居た、其のつれかとも思はれる、大島の羽織を着た、円髷の、脊の高い、面長な、目鼻立のきつぱりした顔を見ると、宗吉は、あつと思つた。

再び、おや、と思つた。

と言ふのは、頃日忙しさに、不沙汰はして居るが、知己も然も其の婚礼の席に列つた、従弟の細君にそつくりで。世馴れた人間だと、すぐに、「おゝ。」と声を掛ける[illegible]、よく似て居る。

が其の似て居るのを見いたのでもなければ、思ひ掛けず出合つたのを驚いたのでもない。まさしく、其の人と思ふのが、近々と顔を合はせながら、[illegible]、赤の他人らしい[illegible]、驚愕を喫したのである。

いや、全く他人に違ひない。

けれども、[illegible]れた處、色白な容色として、[illegible]何にも似合ふ細君だが、此の女は[illegible]黄な手甲で、藍の色の濃い處から……それ、少し仰向いて居る顔つき。他人が、一寸目を留める工合は、其の細君は小鼻から[illegible]せる癖がある。……其まで、が、其のまゝで、[illegible]車を待草臥れて、雨に悩しげな様子が、小首に寄せた皺に明白にあつた。

勿論、別人とは納得しながら、うつかり口に出さうな挨拶を、唇で噛留めて、心付くと、いつの間にか、足もやゝ近づいて、帽子に手を掛けて居た極の悪さに、背を向けて立直ると、雲低く、下谷、神田の屋根一面、雨も霞も籠つた裡に、神田明神の森が見える。

唯、緋縮緬の女が、同じ方を凝と視て居た。

# 三

鼻の隆い其の顏が、かた／＼と横に寄つて、胸に白粉の着くやうに思つた。

宗吉は、愕然とするまで、再び、似た人の面影を其の女に發見したのである。

緋縮緬の女は、櫛卷に結つて、黑縮緬の紋着の羽織を撫肩にぞろりと着て、痩せた片手を、力のない襟に插して、然うやつて、引上げた褄を庇へるやうに、膝に置いた手に萌黄色のオペラバックを大事さうに持つて居る。最う三十を幾つも越した年紀ごろから思ふと、小兒の土產にする玩弄品らしい、粗末な手提を、大事さうに持つて居るは、きものも、襦袢も、素足も、櫛卷も、紋着も、何となくちぐはぐな處へ、色白さうなのが濃い化粧、口の大きく見えるまで濃々と紅をさして、細い頸の、眞白な咽喉を長く、明神の森の遠見に、伸上るやうな、ぐつと仰向いて、大きな目を𤏋と睜つた顏は首丈け活人形を繼いだやうで綺麗なよりは、もの凄い、但、美しく、凜しく、然もきり／＼としたのは類なき其の眉である。

眉は、宗吉の思ふ、忘れぬ人と寸分違はぬ。が、此に似たのはもう一人の、圓髷の方が、從弟の細君に似たほど、適格したものでは決してない、或は其が餘りよく似たゝめに引込まれて、心に刻んだ面影が緋縮緬の方に宿つたのであらうも知れぬ。

よし、眉の姿、唯一枚でも、秦宗吉の胸は、夢に三日月を呑んだやうに、晃乎と尊く、輝いて、時めいて躍つたのである。

——お千と言つた、其の女は、實に宗吉が十七の年紀の生命の親である。——

然も場所は、面前彼處に望む、神田明神の春の夜の境内であつた。

「あゝ……もう一呼吸で、剃刀で、」

と、今視めても身の毛が悚立つ。……森のめぐりの雨雲は、陰慘な鼠色の隈を取つた可恐しい面のやうで、家々の棟は瓦の牙を嚙み、齒を重ねた、其の上に二處、三處赤煉瓦の軒と、亞鉛屋根の引剝が、高い空に、赫と赤い齒莖を剝いた、人を喰ふ鬼の口に髣髴する。……其の森、其の樹立は、……春雨の煙るとばかり見る目には、三ッ五ッ縱に並べた薄紫の眉刷毛であらう。死なうとした身の、其の時を思へば、其も逆に生えた蓬々の髮である。

其の空へ、さら／＼と織物のやうに浮く、緋縮緬の女の眉よ！　瞳も据つて、瞬きもしないで、恍惚と同じ處を凝視めて居るのを、宗吉は又ちらりと見た。

あゝ其の女？

と波を打つて轟く胸に、此の停車場は、大なる艦の甲板を廻るやうに、軸を明神の森に向けた。

手に取るばかり尙ほ近い。

「なぞへに低く成つた、彼處が明神坂だな。」

其の右側の露地の突當りの家で。……

——死なうとした日の朝——宗吉は、年紀上の渠の友達に、顏を剃つて貰つた。……其の夜、明神の境內でアハヤ咽喉に擬したのは其の剃刀であるが。

（一寸順序を附けよう。）

宗吉は學資もなしに、無鐵砲に國を出て、行處のなさに、其の頃、或一團の、取止めのない不體裁な其の日ぐらしの人たちの世話に成つて、辛うじて雨露を凌いで居た。

其人たちと言ふのは、主に懶惰、放蕩のため、世に見棄てられた醫學生の落第なかまで、年輩も相應、女房持なども交つた。中には政治家の半端もあるし、實業家の下積、山師も居たし、眞面目に巡査に成らうかと言ふのもあつた。

其處で、宗吉が當時宿借りをして居たのは、

同じ明神坂下の片側長屋の一軒で、こゝには食ふや食はずの醫學生あがりの、松田と云ふのが夫婦で居た

其の突當りの、柳の樹に、軒燈の掛つた見晴あい、誰かの妾宅の貸間に居た、露の垂れさうな綺麗なのが……こゝに緋縮緬の女が似たと思ふ、其のお千さんである。

## 四

お千は、世を忍び、人目を憚る女であつた。宗吉が世話になる、渠等なかまの、殆ど首領とも言ふべき、熊澤と言ふ、追て大實業家と成ると聞いた、繪に描いた化地藏のやうな大漢が、そんじよ其の邊のを落籍したとは表向、得心させて、連出して、內證で圍つて居たのであるから。

言ふまでもなく商賣人だけれど、藝妓だか、遊女だか――其は今に於て分らない――何しろ、宗吉には三ツ四ツもつとかと思ふ年紀上の綺麗な姉さん、婀娜なお千さんだつたのである。

前夜まで――唯今のやうな、じと／＼降の雨だつたのが、花の開くやうに霽つた、彼岸前の日曜の朝、宗吉は朝飯前と言ふが、やがて、十時。……此處は、ひもじい經驗のない讀者にも御推讀を願つて置く。が、いつに成つても其の朝の御飯はなかつた。

妾宅では、前の晩、宵に一度、てんどんのお誂へ、夜中一時頃に蕎麥の出前が、芬と枕頭を包つて露地を入つたことを知つて居るので、行けば何かあるだらう……天氣が可いと尙ほ食べたい。空腹を抱いて、けつそりと落込むやうに、溝の減つた裏長屋の格子戸を開けた處へ、突當りの妾宅の柳の下から、ぞろ／＼と長閑さうに三人出た。

肩幅の廣いのが、薄汚れた黃八丈の書生羽織を、ぞろりと着たのは、此の長屋の主人で、一度戶口へ引込んだ宗吉を橫目で見ると、小指を出して、

「何うした。」

と小聲で言つた。

「まだ、お寐つてゞす。」

起きるのに張合がなくて、細君のまだ、裸體で柏餅に包まつて居るのを、然う言ふと、主人は一寸舌を出して默つて行く。

次のは、剃りたての頭の青々とした綺麗な出家。細面の色の白いのが、鼠の法衣下の上へ、黑縮緬の五紋、――お千さんのなのだ、振の紅い、――羽織を着て居た。昨夜、此の露地に入つた時は、紫の輪袈裟を雲の如く尊く纏つて、水晶の珠數を提げたのに。――

唯、うしろから、拳固で、前の圓い頭をコツンと敲く眞似して、宗吉を流眄で、ニヤリとして續いたのは、頭毛の眞中に皿に似た禿のある、色の黑い、目の窪んだ、口の大な男で、近頃まで政治家だつたが、飜つて商業に志した、ために紋着を脫いで、綿銘仙の羽織を袷短に、ありやすの股引を瘦股に穿いて居る。……小皿の平四郎。

いづれも、花骨牌で徹夜の今、明神坂の常盤湯へ行つたのである。

行違ひに、茫乎と、宗吉が妾宅へ入ると、食ふものどころか、いきなり跡始末の掃除をさせられた。

「濟まないことね、學生さんに働かしちやあ。」

とお千さんは、伊達卷一つの艶な蹴出で、お召の重衣の褄をぞろりと引いて、黑天鵝絨の座蒲團を持つて、火鉢の前を遁げながら然う言つた。

「何、目下は私たちの小僧です。」

と、廿谷と言ふ橫肥り、でぶ／＼と脊の低い、ばらりと髮を長くした、太鼓腹に角帶を卷いて、

前掛の眞田をちよきんと結んだ、此も醫學の落第生。追つて大實業家たらむとする準備中のが、笑ひながら言つたのである。

二人が、此の妾宅の貸ぬしのお妾が、――最うい〻加減な中婆さん――と癇癪に使ふ、次の室へ立つた間に、宗吉がひよろ〳〵して、時々淺ましく下腹をぐつと泣かせながら、兎に角、きれいに掃出すと、

「御苦勞々々々。」

と、調子づいて、

「さあ、貴女。」

と、甘谷が座蒲團を引攫つて、もとの處へ。……身體に似ない腰の輕い男。……尤も甘谷も、つい十日ばかり前までは宗吉と同じ長屋に貸蒲團の一ツ夜着で、芋蟲ごろ〳〵して居た處――事業の運動に外出勝の熊澤旦那が、お千さんの見張番人かた〴〵妾宅の方へ引取つて置くのであるから、甘谷ものでもお千は御主人。此のくらゐな事は當然で。

對の蒲團を、とん〳〵と小形の長火鉢の內側へ直して、

「さ、さ、貴女。」

と自分に退いて、

「いざ、……此へ」と口も氣もともに輕いが、起居が石臼を引摺るやうに、どし〳〵する。――あゝ、無理はない、脚氣がある、夜あかしはしても、朝湯には行けないのである。

「可厭ですことねえ。」

と、嫺娜な目で、襖際から覗くやうに、友染の裾を曳いた櫛卷の立姿。

## 五

櫻には些と早い、木瓜か、何やら、枝ながら障子に映る花の影に、ほんのりと日南の薫が添つて、お千がもとの座に着いた。

向うには、旦那の熊澤が、上下大島の金鎖、あの大々したので、ドカリと胡坐を組むのであらう。

「お留守ですか。」

宗吉が何となく甘谷に言つた。此處にも見えず、湯に行つた中にも居なかつた。其の熊澤を訊いたのである。

緣側の片隅で、

「えへん！」と屋鳴りのするやうな咳拂を響かせた、便所の袖で。

「熊澤は此處に居るぞう。」

「まあ、」

「隨分ですこと、ほゝゝ。」

と家主のお妾が、次の室を臺所へ通りがゝりに笑つて行く、と、お千さんが俯向いて、莞爾して、

「餘り色氣がなさ過ぎるわ。」

「其處が御婦人の毒でげす。」

と甘谷は前掛をポン〳〵と敲いて、

「お千さんは大將の彼處ン處へ落ッこちたんだ。」

「あら、隨分……酷いぢやありませんか、甘谷さん、餘りだよ。」

何にも知らない宗吉にも、此の間違は直ぐ分つた、汚いに相違ない。

「いやあ、此は、失敗、失敬、失禮。」

と甘谷は立續けに叩頭をして、

「其處で、おわびに、一つ貴女の顏を剃らして頂きやせう。いえ、自慢ぢやありませんがね、昨夜ッから申す通り、野郎圖體は不器用でも、勝奴ぐらゐにや確に使へます。剃刀を持たしちや確です。――秦君、一寸奥へ行つて、剃刀を借りて來給へ。」

宗吉は、お千さんの、湯にだけは密と行つて、も、床屋へは行けもせず、呼ぶのも愼むべき境遇を領きながら、お妾に剃刀を借りて戻る。……

「おつと！……次手に金盥……氣を利かして、氣を利かして……」

此の間に、いま何か話があつたと見える。

「さあ、何、此處へ顏を出したり、一寸手際を御覽に入れないぢや、姐さん御信用下さらない。」

「いゝえ、然うぢやありませんけれどもね、私まだ、そんなでもないんですから。」

「何、御遠慮にやあ及びません、間違つた處でたかゞ小僧の顏でさ。……丁度、ほら、むく毛が生えて、餓鬼の撮食をしたやうだ。」

宗吉は、可憐やゴクリと唾を呑んだ。

「仰向いて、ぐつと。そら、何うです、つる／＼のつる／＼と、鮮かなもんでげせう。」

「何だか危ツかしいわね。」

と少し膝を浮かしながら、手許を覗いて憂慮しさうに、動かす顏が、鐵瓶の湯氣の陽炎の薄絹を掛けつゝ、宗吉の目に、ちら／＼、ちらちら。

「大丈夫、それ此の通り、一寸一寸の一寸一寸と。」

「あれ、止して頂戴、止してよ。」

と浮かした膝を搖ら／＼と、袖が薫つて伸上る。

「何故ですてば。」

「危いわ、／＼。おとなしい、其の優しい眉毛を、落したら何うしませう。」

「其の事ですかい、」

と、一寸止めた剃刀を又當てた。

「構やしません。」

「あれ、目の縁はまだしもよ、上は止して、後生だから。」

「貴女の襟脚を剃らうてんだ。何、こんなものくらゐ。」

「あゝ、あゝ／＼、あゝあーツ」

と便所の裡で屋根へ投げた、間拔けた大欠伸。

「笑つちやあ……不可い／＼。」

「はゝゝは、笑つたつて泣いたつて、何、こんな小僧ッ子の眉毛なんか。」

「厭、厭、厭。」

と支膝のまゝ、する／＼と寄る衣摺が、遠くから狩衣の音の近くやうに宗吉の胸に響いた……疊の波に人魚の半身

「どんな母さんでせう、このお方。」

雪を欺く腕を空に、甘谷の剃刀の手を支へ、突いて離して、胸へ、抱くやうにして熟と視た。

「羨しい事、まあ、何て、いゝ眉毛だらう。親御は嘸ぞ、お可愛いだらうねえ。」

乳も白々と、優しさと可懷しさが透通るやうに視えながら、衣の綾も衣紋の色も、黑髮も、宗吉の目の眞暗に成つた時、肩に袖をば掛けられて、面を襟に伏せながら、忍び兼ねた胸を絞つて、思はず、ほろ／＼と熱い涙。

お妾が次の室から、

「切れますか剃刀は……あはせに遣らう／＼と思ひましちやあ……ついね。……」

自殺をするのに、宗吉は、床屋に持つて行きませう、と言つて、此の剃刀を取つて出た。其は同じ日の夜に入つてからである。

仔細は、……

## 六

……さて、やがて朝湯から二人が戻つて來ると、長い事便所に居た熊澤も一座で、又花札を弄ぶ事に成つて、朝飯は鮨にして、湯豆腐で一寸一杯、と言ふ。

此の使の次手に、明神の石坂、開化樓裏の、あの切立の段を下りた宮本町の横小路に、相馬煎餅——鹽煎餅の、燒方の、醬油の斑に、何となく轡の形の浮出して見える名物がある。——茶受にしよう、是非お千さんにも食べさしたい

と、甘谷の發議。で、宗吉が此を買ひに遣られたのが事の原因であつた。

何分にも、十六七の食盛りが、毎日々々、三度の食事にがつ〳〵して居た處へ、朝飯前とたとへにも言ふのが、突落されるやうに嶮しい石段を下りたドン底の空腹さ。……天麩羅とも、蕎麥とも、燒芋とも、芬と鹽煎餅の香しさがコンガリと鼻を突いて、袋を持つた手がガチ〳〵と震ふ。近飢ゑに、冷い汗が垂々と身うちに流れる堪へ難さ。

其の時分の物價で、……忘れもしない七錢が煎餅の可なり嵩のある中から……小判の如く、數二枚。

宗吉は、一坂戻つて、段々に一寸區劃のある、すぐに手を立てたやうに石坂がまた急に成る、平面な處で、銀杏の葉はまだ淺し、樅、榎の梢は遠し、晴に取るべき蔭もなしに、崕の溝端に眞俯向けに成つて、生れてはじめて、許されない禁斷の果を、相馬の名に負ふ、轡をガリ、と頰張る思ひで、馬の口にかぶりついた。が、甘さと切なさと恥かしさに、堅く成つた胸は、自から溝の上へのめつて、折れて、煎餅は口よりも吹つて胃の中でポリ〳〵と破れた。

ト突出した廂に額を打たれ、忍返の釘に眼を刺され、赫と血とともに總身が熱く、忽衝、罪ある蛇に成つて、攀上る石段は、お七が火の見を駈上つた思ひがして頭に映す太陽は、血の色して段に流れた。

宗吉は恁くて又明神の御手洗に、更に、水に閉ぢらるゝ思ひして悚然と寒氣を感じたのである。

「くす〳〵、くす〳〵。」

花骨牌の車座の、輪に身を捲かるゝ、危さを感じながら、宗吉が我知らず面を赧めて、煎餅の袋を渡したのは、甘谷の手で。

「おつと來た、めしあがれ。」

と一枚めくつて合せながら、袋をお千さんの手に渡すと、此は少々疲れた風情で、なかまへは入らぬらしい。火鉢を隔てたのが請取つて、膝で覗くやうにして開けて、

「御馳走樣ですね、……早速お毒見。」

と言つた。

此に又胸が痛んだ。だけなら、まだ然ほどまでの仔細はなかつた。

「くす〳〵、くす〳〵。」

宗吉が此の座敷へ入りしなに、最う其の忍び笑ひの聲が耳に附いたのであるが、此の時、お千さんの一枚撮んだ煎餅を、見ないやうに、一寸傍へかはした宗吉の顏に、横から打撞つたのは小皿の平四郎。……顴骨の張つた菱形の面に、窪んだ目を細く、小鼻をしかめて、

「くす〳〵。」

と又遣つた。手のわるさに落ちたと見えて札は持たず、鍍金の銀煙管を構へながら、めりやすの股引を前はだけに片膝を立てゝ居たのが、其の膝頭に顴骨をたゝき着けるやうにして、

「くす〳〵くす。」

續いて忍び笑をしたのである。

立續けに、

「くツくツくツ。」

## 七

「此方は、ぴきを泣かせて遣れか。」

と黃八丈が骨牌をめくると、黑縮緬の坊さんが、紅い裏翻然と翻して、

「餓鬼め。」

と投げた。

「うふ、うふ、うふ。」と平四郎の忍び笑が、齒莖を洩れて聲に出る。

「うふゝ、うふゝ、うふゝゝゝ。」

「何ぢやい。」と片手に猪口を取りながら、黙ら天鵝絨の蒲團の上に、萩、菖蒲、櫻、牡丹の合戰

を、どろんとした目で見据ゑて居た、大島揃、
大胡坐の熊澤が、ぎよろりと平四郎を見向いて言ふと、笑ひの聲は嚙殺を食つたやうに、赤く成るまで赫と息張つて、
「うはゝゝは、うふゝ、うふゝ、うふゝ。えツ、いや、あ、ま、チ、まはゝゝは、はツはツはツはツ、チ、□、えツ、えツ、えツ、えへゝ、うふゝ、あは〳〵あは、あは、あは、はゝゝはゝゝ、あはゝゝゝ。」
「馬鹿な。」
と唇を横舐めずつて、熊澤がぬつと突出した猪口に、酌をしようとして、銅壺から抜きかけた銚子の手を止め、お千さんが、
「何うしたの。」
「おほゝ、や、お尋ねでは恐入るが、あはゝ、テ、えツ。えゝ、えへゝ、う、ふ、ちえツ、堪らない。あツはツはツはツ。」
「魔が魅したやうだ。」
と甘谷が呆れて呟く、……と寂然と成る。
寂寞と成ると、笑ばかりが、
「ちやはゝはゝ、ふ、はゝ、うふ、へゝ、はゝゝ、えへゝゝゝゝ、えツへ、へゝ、あはゝゝ、うは、うは・うはゝ。どツこい、えゝ、チ、ちやはゝ、エ、はゝゝは、はゝゝはゝ、うツ、うツ、えへツヘツヘツ。」
と横のめりに平四郎、煙管の雁首で脾腹を突いて、身悶えして、
「くツ、苦しい……うツ、うツ、うツふゝゝ、チ、うツ、うゝ〳〵苦しい。あゝ、切ない、あはゝはゝ、あはツはツはツ、おゝ、コ、こいつは、あはゝ、ちやはゝ、テ、チ、たツたツ堪らん、はゝゝ。」
と込上げ揉立て、眞赤に成つた、七顛八倒の息継に、つぎ冷しの茶を取つて、がぶりと遣ると、
「わッ。」と噎せて、灰吹を攫んだが間に合はず、火入の灰へぷツと吐くと、むら〳〵と灰かぐら。
「あゝ、あの兒、障子を一枚開けていな。」
と黒縮緬の袖で拂つて出家が言つた。
宗吉は針の筵を飛上るやうに、其のもう一枚、肘懸窓の障子を開けると、颯と出る灰の吹雪は、すツと蒼空に渡つて、遙に品川の海に消えた。が、藏前の煙突も、十二階も、睫毛に一昨の北の方、目の下、一雪崩の崕に成つて、崕下の、ごみ〳〵した屋根を隔てゝ、日南の煎餅屋の小さな店が、油障子も覗かれる。
ト斜に、がツくりと窪んで暗い、崕と石垣の間の、溝へ明神の裏の石段に續くのが、大銀杏のやうに胸前に蔽つて、突當りに牙を噛合せた如き、小さな黒塀の忍返の下に、溝から這上つた蛆の、醜い汚い筋をぶる〳〵と震はせながら、鮎を嘗めるやうな形が、歴然と、自分が瞳に映つた時、宗吉は最早や蒼白に成つた。
此處から認められたに相違ない。
と思ふ平四郎は、渾と一所に、濡らした襟を、手巾で横撫でしつゝ、
「ふ、ふ、ふ、ふ、ふ。」……大歎息とともに尻を曳いたなごりの笑が、更に、ぐわら〳〵ぐわらと雷の鳴返す如く少年の耳を打つ！
「お煎をめしあがれな。」
目の下の崕が切立だつたら、宗吉は、お千さんの其の聲とともに、倒に落ちて其の場で五體を微塵にしたらう。
産の親を可懐しむまで、眉の一片を庇つてくれた、其の人ばかりに恥かしい。……
「一寸、宅まで。」
と息を呑んで言つた——宅とは露地の其の長屋で。
宗吉は、しかし、其の長屋の前さへ、遁隠れをするやうに素通りして、明神の境内の彼方此方、人目の隙の隅々に立つて飢さへ忘れて、半日を

泣いて泣きくらした。
星も曇つた暗き夜に、

「おかみさん——床屋へ剃刀を持つて參りませう。次手がございますから。……」

宗吉は故と格子戸をそれて、蚰蜒の這ふやうに臺所から、密と姿宅へおとづれて、家主の手から剃刀を取つた。

間を隔てた座敷に、艶やかな影が氣勢に映つて、香水の薫は、つとはしり下にも薫つた。が、寂寞して居た。

露地の長屋の赤い燈に、珍らしく、大入道やら、五分刈やら、中にも小皿で禿なる影法師が動いて、ひそ〱と聲の漏れるのが、目を忍び、音を彈ける出入りには、宗吉のために、寧ろ僥倖だつたのである。

## 八

「何をするんですよ、何をするんですよ、お前さん、串戯ではありませんか。」

社殿の裏なる、空茶店の葦簀の中で、一方の柱に使つた片隅なる大木の銀杏の幹に凭掛つて、アハヤ剃刀を咽喉に當てた時ブッと、香して、瀧縞の袖で抱いたお千さんの姿は、……宗吉の目に、高い樹の梢から颯と下りた、美しい女の顏した不思議な鳥のやうに映つた——。

剃刀をもぎ取られた後は、茫然として殆ど夢心地である。

「まあ！　可かつた。」

と、身を捻ぢて、肩を抱きつゝ、社の方を片手拜みに、

「蟲が知らしたんだわね。いま、お前さんが臺所で、剃刀を持つて行くつて聲が聞えたでせう。ドキリとしたのよ。……秦さん〱と言つたけれど、最う居ないでせう、何だかこんな、間違がありさうな氣がして成らない。私、私、でね、すぐに後から駈出したのさ。でも、何處つて當はないんだもの。鳥居前の彼處の床屋で聞いて見たの。まあね。……まるでお見えなさらないと言ふぢやあないの。しまつた、と思つたわ。半分夢中でそれでも、私が此處へ來たのは神佛のお助けです。秦さん、私が助けるんだと思つちやあ不可い。可うござんすか、可いかえ、貴方。……親御さんが影身に添つて居なさるんですよ。可うござんすか、分りましたか。」

と小兒のやうに、柔い胸も、帶も扱帶もひつたりと抱緊めて、

「御覽なさい、お月樣が、あれ、のゝさんが。」

忘れはしない、半輪の五日の月が黑雲を下りるやうに、莊嚴なる銀杏の枝に、梢さがりに掛つたのが、可懷しい亡き母の乳房の輪線の面影した。

「まあ、此からと言ふ、……女にしても蕾のいま、何うして死なうなんてしたんですよ。——私に……私……えゝ、それが私に恥かしくつて、——」

其の乳の震が胸に響く。

「何の鹽煎餅の二枚ぐらゐ、貴方が掏摸でも構やしない——私はね、あの。……まあ、とに角、内へ行きませう。可い鹽梅に誰も居ないから。」

促して、急いで脫放しの駒下駄を搜る時、白脛に緋が散つた。お千も慌しかつたと見えて、宗吉の穿物までは心付かず、可恐しい處を逃げるばかりに、息せいて手を引いたのである。

魔を除け、死神を拂ふ禁厭であらう、明神の御手洗の水を掬つて、雫ばかり宗吉の頭髮を濡らしたが、

「……息災、延命、息災延命。學問、學校、心願成就。

と、手よりも濡れた瞳を閉ぢて、頸白く、御

堂をば伏拜み、
「一口めしあがれ、……氣を靜めて——私も。」
と柄杓を重げに口にした。
「動悸を御覽なさいよ、私のさ。」
其の胸の轟きは、今より先に知つたのである。
「宗さん、私は貴方を連れて、最う彼處へは戻らない。……身にも命にもかへてね、お手傳をしますがね、……實はね、今明神樣におわびをして、貴方のお頭を濡らしたのは——實は、あの、一度内へ歸つてね。……此の剃刀で、貴方をそりたての今道心にして、一所に寢ようと思つたのよ。——あのね、實はね、今夜あたり紀州のあの坊さんに、私が抱かれて、其處へ、熊澤だの甘谷だのが踏込んで、不義いたづらの罪に落さうと言ふ相談に……何うでも、と言つて乘せられたんです。
……あの坊さんは、高野山の、金高なお寶ものを賣りに出て來て居るんでせう。何處とかの大金持だの、何省の大臣だのに賣つて遣ると言つて、だまして、熊澤が著質に入れて使つて了つて、催促される、苦しまぎれに、不斷、何だか私にね、坊さんが厭味らしい目つきをするのを知つて居て、まあ、大それた美人局だわね。
私が弱いもんだから、身體も度胸もづばぬけて、强さうな、あの人をたよりにしてこんな身裁に成つたけれど、……そんな相談をされてからはね……其の上に此の眉毛を見てからは、……」
と、お千は密と宗吉の肩を撫でた。
「つく〴〵、あんな人が可厭に成つた、——そら、どか〳〵と踏込むでせう、貴方を抱いてちやんと起きて、居直つてあいそづかしをきつぱり言つて、夜中に直ぐに飛出して、溜飲を下げて遣らうと思つたけれど……どんな發機で、自棄腹の、彼の人たちの亂暴に、貴方に怪我でもさせた日にや、取返しがつかないからと、いま胸に手を置いて、分別をしたんですよ。さ、此のまゝ何處かへ行きませう。私に任して安心なさいよ。……貴方も屹とあの人たちに二度とつき合つては不可ません。」
裏坂の石段を降りる時、宗吉は狼の峠を越して、花やかな都を見る氣がした。
「此處……然う……」
お千さんが莞爾して、鹽煎餅を買ふのに、晝夜帶を抽いたのが、安ものらしい、が、萌黄の金入。
「食べながら歩行きませう。」
「弱蟲だね。」
大通へ拔ける暗がりで、甘く、且つ香しく、皓齒でこなしたのを、口移し。……

## 九

宗吉が夜學から、徒士町のとある裏の、空瓶屋と襤褸屋の間の、貧しい下宿屋へ歸る、と引傾いだ濡緣づきの六疊から、男が一人摺違ひに出て行くと、お千さんはハッと障子を開けた。が、最う床が取つてある。……
枕頭の火鉢に、はかり炭を繼いで、目の破れた金網を斜に載せて、お千さんが懷紙であふぎながら、豌豆餅を燒いてくれた。
そして熱いのを口で吹いて嬉しさうな宗吉に、浦里の話をした。
お千は、それよりも美しく、雪はなけれど、ちら〳〵と散る花の、小庭の濕地の、石炭殼につもる可哀さ、痛々しさ。
時次郎でない、頰被したのが、黑塀の外からスツと覗く。
お千が蒼白く、はつと立つて、障子をしめようとする目の前へ、トンと下りると、つか〳〵

と縁臺へ。
「あれ、」
「おい、氣の毒だが一寸用事だ。」
と袖から蛇の首のやうに捕繩をのぞかせた。
膝をなえたやうに支きながら、お千は宗吉を背後に庇つて、
「……此の人は、……」
「いや、小僧に用はない、すぐおいで。」
「宗ちやん、……朝の御飯はね、煮豆が買つて蓋ものに、……紅生薑と、……紙の蔽がしてありますよ。」
風俗係は草履を片手に、最う入口の襖を開けて居た。
お千が穿ものをさがすうちに、風俗係は内から、戸の鍵をあけたが、軒を出るとひたりと、腰繩を打つた。
細腰はふつと消えて、すぼめた肩が、くらがりの柳に浮く。
……其のお千には、最う疾に、羽織もなく下着もなく、膚たゞ白く縞の小袖の萎えたるのみ。
宗吉は、跣足で、おそ／＼泣きながら後を追つた。
目も心も眞暗で、町も處も覺えない。颯と一條の冷い風が、電燈の細い光に櫻を誘つた時である。
「旦那。」
とお千が立停まつて、
「宗ちやん——宗ちやん。」
振向きもしないで、うなだれたのが、氣を感じて、眉を優しく振向いた。
「……」
「姉さんが、魂をあげます。」——辿りながら折つたのである。……懷紙の、白い折鶴が掌にあつた。
「此の飛ぶ處へ、すぐおいで。」
ほつと吹く息、薄紅に、折鶴は却つて蒼白く、花片にふつと乘つて、ひら／＼と空を舞つて行く。……此が落ちた大な門で、はたして宗吉は拾はれたのであつた。
電車が上り下りとも殆ど同時に來た。
宗吉は身動きもしなかつた。
唯見ると、圓髷の女が、其の緋縮緬の傍へ衝と寄つて、いつか、肩ぬげつゝ裏へ辷つた效性のない羽織を上から、引合せて遣りながら、
「さあ、來ました。」
「自動車ですか。」
と目を睜つたまゝ、緋縮緬の女はきよろ／＼として居た。

十

年少い驛員が、
「貴方がたは？」
と言つた。
乘り餘つた黑山の群集も、三四輛立續けに來た電車が、泥まで綺麗に浚つたのに、まだ待合所を出なかつた女二人、(別に一人)と宗吉をいぶかつたのである。
宗吉は言つた。
「此の御婦人が御病氣なんです。」
と、矢張、けろりと仰向いて居る緋縮緬の女を、外套の肘で庇つて言つた。
驛員の去つたあとで、
「唯今、自動車を差上げますよ。」
と宗吉は、優しく顏を覗きつゝ、圓髷の女に瞳を返して、
「一寸お見合せを願へませんか。……屹と御介抱申します。私は恁う言ふものです。」
なふだに——醫學博士——秦宗吉とあるのを見た時、……もう一人居た、散切で被布の女が、P形に直立してZの如く敬禮した、此は附添の雜仕婦であつたが、——博士が、其の從弟の

細君に似たのをよすがに、此より前、圓髷の女に言を掛けて、其の人品のゆゑに人をして疑はしめず、連は品川の某樓の女郎で、氣の狂つたため巣鴨の病院に送るのだが、自動車で行きたい、それでなければ厭だと言ふ、其のつもりにして、すかして電車で來ると、此處で自動車でないからと言つて、何でも下りて、すねたのだと言ふ。……圓髷は某樓の其の娘分、女郎の本名をお千と聞くまで、――此の雜仕婦は佛頂面して睨んで居た。

不時の回診に驚いて、或日、其の助手たち、其の白衣の看護婦たちの、ばら／＼と急いで、然も、靜粛に馳寄るのを徐ろに左右に辭して、醫學博士秦宗吉氏が、

「いえ、個人で見舞ふのです……皆さん、何うぞ。」

やがて博士は、特等室に唯一人、膝も胸も、しどけない、けろんとした狂女に、何と……手に剃刀を持たせながら、臨床に跪いて、其の胸に額を埋めて、犇と縋つて、潸然として泣きながら、微笑みながら、身も世も忘れて愚に返つたやうに、だらしなく、涙を髯に傳はらせて居た。

---

## 秋

木槿垣萩の花垣むかひあひ
鼻紙に山蟻拂ふ墓參かな
爪彈の妹が夜寒き柱かな
花火遠く木隱の星見ゆるなり
銀河天に高張立てし水の番
鵙なくや大工飯食ふ下屋敷
山伏の篠山渡る初あらし
露寒し露寒し月に蓑着ばや

鹽原にて

むらもみぢ灯して行く貉の湯

――鏡花全集卷十五「發句」より

---

## 秋

秋の雲尾上の薄見ゆるなり
水瓶に柳散込む厨かな
打果てゝ雨の網代に人もなし
來るわ／＼扱くあとへ稲を引扛ぎ
木犀の香に染む雨の鴉かな
鳴かでたゞ鶺鴒居るや石の上
田鼠や薩摩芋ひく葉の戰ぎ
十六夜やたづねし人は水神に
浦風や秋の蝶飛ぶ小松原
秋の蝶さみしさに見れば二つかな
きり／＼す此處は砂村瓜畠
蘆垣に嫁菜花さく洲崎かな

――鏡花全集卷十五「發句」より

# 眉かくしの靈

## 一

木曾街道、奈良井の驛は、中央線起點飯田橋より一五八哩二、海拔三二〇〇尺、と言出すより膝栗毛を思ふ方が手取早く行旅の情を催させる。

こゝは彌次郎兵衛、喜多八が、とぼ／＼と鳥居峠を越すと、日も西の山の端に傾きければ、兩側の旅籠屋より、女ども立出で、もし／＼お泊りぢやござんしないか、お風呂も湧いて居づにお泊りな／＼――喜多八が、まだ少し早いけれど――彌次郎、もう泊つてもよからう、なう姐さん――女、お泊りなさんし、お夜食はお飯でも、蕎麥でも、お蕎麥でよかあ、おはたご安くして上げませう。彌次郎、いかさま、安い方がいゝ、蕎麥でいくらだ。女、はい、お蕎麥なら百十六錢でござんさあ。二人は旅銀の乏しさに、そんなら然うと極めて泊つて、湯から上ると、その約束の蕎麥が出る。早速にくひかゝつて、喜多八、こつちの方では蕎麥はいゝが、したぢが惡いにはあやまる。彌次郎、そのかはりにお給仕がうつくしいからいゝ、なう姐さん、と洒落かゝつてもう一杯くんねえ。女、もうお蕎麥はそれ切りでござんさあ。彌次郎、なに、もうねえのか、たつた二ぜんづゝ食つたものを、つまらねえ、これぢやあ食ひたりねえ。喜多八、はたごが安いも凄じい。二はいばかり食つて居られるものか。彌次郎……馬鹿なつらさ、錢は出すから飯をくんねえ。……無慙や、かけなしの懷中を、けつく蕎麥だけ餘計につかはされて悄氣返る。その夜、故郷の江戸お箪笥町引出し横町、取手屋の鐶兵衛とて、工面のいゝ馴染に逢つてふもとの山寺に詣でゝ鹿の鳴聲を聞いた處……

……と思ふと、ふと此處で泊りたく成つた。停車場を、もう汽車が出ようとする間際だつたと言ふのである。

此の、筆者の友、境贊吉は、實は蔦かづら木曾の棧橋、寢覺の床などを見物のつもりで、上松までの切符を持つて居た。霜月の半であつた。

「……然も、その、蕎麥二膳には不思議な縁がありましたよ……」

と境が話した――

昨夜は松本で一泊した。御存じの通り、此の線の汽車は鹽尻から分岐點で東京から上松へ行くものが、松本で泊つたのは妙である。尤も、松本へ用があつて立寄つたのだと言へば、それまでゞ雜と濟む。が、それだと、しめくゝりが緩んで些と辻褄が合はない。何も穿鑿をするのではないけれど、實は日數の少いのに、汽車の遊びを貪つた旅行で、行途は上野から高崎、妙義山を見つゝ、横川、熊の平、淺間を眺め、輕井澤、追分をすぎ、篠の井線に乘替へて、姨捨田毎を窓から覗いて、泊りは其處で松本が豫定であつた。その松本には「いゝ娘の居る旅館があります。懇意ですから御紹介をしませう」と、名のきこえた畫家が添手紙をしてくれた。……

よせばいゝのに、昨夜その旅館につくと、成程、帳場には其らしい束髮の女が一人見えたが、座敷へ案内したのは無論女中で。……さてその紹介狀を渡したけれども、娘なんぞ寄つても着かない、……ばかりでない此の霜夜に出がらの生温い澁茶一杯汲んだきりで、お夜食ともお飯とも言出さぬ。座敷は立派で卓は紫檀だ。火鉢

は太い。が火の氣はぽつちり。で、灰の白いのにしがみついて、何しろ暖いものでお銚子をと云ふと、板前で火を引いてしまひました、何にも出來ませんと、女中さんの素氣なさ。寒さは寒し、成程、火を引いたやうな。家中寂寞とはして居たが、まだ十一時前である…酒だけなと、賴むと、お生憎。酒はないのか、ござりません。——ちや、麥酒でも、それもお氣の毒樣だと言ふ。姐さん、…境は少々居直つて、何處か近所から取寄せて貰へまいか。へいもう遲うござりますで、飲食店は寢ましたでな…飲食店だと言やあがる。はてな、停車場から、震へながら俥で來る途中、つい此の近まはりに、冷い音して、川が流れて、橋がかゝつて、兩側に遊廓らしい家が並んで、茶めし、赤い行燈もふはりと目の前にちらつくのに——あゝ、然うと知つたら輕井澤で買つた二合罎を、次郎どのゝ狗ではないが、皆なめてしまふのではなかつたものを。大歎息とともに空腹をぐうと鳴して可哀な聲で、姐さん、然うすると、酒もなし、麥酒もなし、肴もなし…御飯は。いえさ今晩の旅籠の飯は。へい、それが間に合ひませんので…火を引いたあとなもんだでなあ——何の怨か知らないが、然う成ると冷遇を通越して寄怪である。たまじ紹介狀があるだけに、喧嘩面で、宿を替へるとも言はれない。前世の業と斷念めて、せめて近所で、蕎麥か饂飩の御都合は成るまいか、と恐る〵申出ると、饂飩なら聞いて見ませう。あゝ、それを二ぜん賴みます。女中は遁腰のもつたて尻で、敷居へ半分だけ突込んで居た膝を、ぬいと引つこ拔いて不精に出て行く。

待つ事少時して盆で突出した奴を見ると、丼が唯た一つ、腹の空いた悲しさに、姐さん二ぜんを賴んだのだが。と詰るやうに言ふと、へい、二ぜん分、装込んでございますで。いや、相わかりました。何うぞお構ひなく、お引取を、と言ふまでもなし…ついと尻を見せて、すた〵と廊下を行くのを、繼兒のやうな目つきで見ながら、抱込むばかりに蓋を取ると、成程、二ぜんもり込みだけに汁もぽつちり、饂飩は白く乾いて居た。

此の旅館が、秋葉山三尺坊が、飯綱權現へ客を、たちものにした處へ打撞つたのであらう、泣くより笑だ。

その…饂飩二ぜんの昨夜を、むかし彌次郎、喜多八が、夕旅籠の蕎麥二ぜんに思較べた。聊か仰山だが、不思議の緣と言ふのは此で——急に奈良井へ泊つて見たく成つたのである。

日あしも木曾の山の端に傾いた。宿には一時雨颯とかゝつた。

雨ぐらゐの用意はして居る。驛前の俥は便らないで、洋傘で寂しく凌いで、鳴居の暗い檐づたひに、石ころ路を辿りながら度胸は据ゑたぞ。——持つて來い、蕎麥二膳。で、昨夜の饂飩は暗討だ。——今宵の蕎麥は望む處だ。——旅のあはれを味はうと、硝子張の旅館、一二軒を故と避けて、軒に山駕籠と干菜を釣し、土間の竈で、割木の火を焚く、侘しさうな旅籠屋を烏のやうに覗込み、黑き外套で、御免と、入ると、頰冠をした親父が其の竈の下を焚いて居る。框がだゞ廣く、爐が大きく、煤けた天井に八間行燈の掛つたのは、山駕籠と對の註文通り。階子下の暗い帳場に、坊主頭の番頭は面白い。

—入らつぜえ、—

蕎麥二膳、蕎麥二膳と、境が覺悟の目の前へ、身輕にひよいと出て、慇懃に會釋をされたのは、燒麩だと思ふ(しつぼく)の加料が蒲鉾だつたやうな氣がした。

「お客樣だよ——鶴の三番。」

女中も、服裝は木綿だが、前垂がけの薩張した、年紀の少い色白なのが、窓、欄干を覗く、

松の中を、攀上るやうに三階へ案内した。——十疊敷。……柱も天井も丈夫造りで、床の間の誂にも聊かの厭味がない、玄關つきとは似もつかない、しつかりした屋臺である。

敷蒲團の綿も暖かに、熊の皮の見事なのが敷いてあるわ。はゝあ、膝栗毛時代に、峠路で賣つて居た、猿の腹ごもり、大蛇の肝、獸の皮と言ふのは此れだ、と滑稽た殿樣に成つて件の熊の皮に着座に及ぶと、すぐに臺十能へ火を入れて女中さんが上つて來て、惜氣もなく銅の大火鉢へ打まけたが、又夥多しい。青い火さきが、堅炭を搦んで、眞赤に熾つて、窓に沁入る山颪は颯と冴える。三階に此の火の勢は大地震のあとでは、些と申すのも憚りあるばかりである。

湯にも入つた。

さて膳だが、——蝶脚の上を見ると、蕎麥扱にしたは氣恥かしい。わらさの照燒はとにかくとして、ふつと煙の立つ厚燒の玉子に、椀が眞白な半ぺんの葛かけ、皿についたのは、此のあたりで佳品と聞く、鶫を、何と、頭を猪口に、又をふつくり、胸を開いて、五羽、串ごと丸燒にして芳しくつけてあつた。

「難有い、……實に難有い。……」

境は、其の女中に馴れない手つきの、其も嬉しい……酌をして貰ひながら、熊に乘つて、仙人の御馳走に成るやうに、慇懃に禮を言つた。

「これは大した御馳走ですな。……實に難有い……全く禮を言ひたいなあ。」

心底の事である。はぐらかすとは樣子にも見えないから、若い女中もかけ引なしに、

「旦那さん、お氣に入りまして嬉しうございますわ。さあ、もうお一つ。」

「頂戴しよう。尚ほ重ねて頂戴しよう。——時に姐さん、此の上のお願ひだがね、……何うだらう、此の鶫を別に貰つて、此處へ鍋に掛けて、煮ながら食べると言ふわけには行くまいか。——鶫はまだいくらもあるかい。」

「えゝ、笊に三杯もございます。まだ臺所の柱にも束にしてかゝつて居ります。」

「そいつは豪氣だ——。少し餘分に貰ひたい、此處で煮るやうに……可いかい。」

「はい、然う申します。」

「次手にお銚子を。火がいゝから傍へ置くだけでも冷めはしない。……通ひが遠くつて氣の毒だ。三本ばかり一時に持つておいで。……何うだい、岩見重太郎が註文をするやうだらう。」

「おほゝ。」

今朝、松本で、顏を洗つた水瓶の水とともに、胸が氷に鎖されたから、何の考へもつかなかつた、こゝで暖かに心が解けると、……分つた、饂飩で虐待した理由と言ふのが——紹介狀をつけた畫伯は、近頃でこそ一家をなしたが、若くて放浪した時代に信州路を經歷つて、その旅館には五月あまりも閉籠つた、滯る旅籠代の催促もせず、歸途には草鞋錢まで心着けた深切な家だと言つた。が、あゝ、其だ。……おなじ人の紹介だから旅籠代を滯らして、草鞋錢を貰ふのだと思つたに違ひない。……

「えゝ、此は、お客樣、お粗末な事でして。」

と紺の鯉口に、おなじ幅廣の前掛して、痩せた、色のやゝ靑黑い、陰氣だが律儀らしい、まだ三十六七ぐらゐな、五分刈の男が丁寧に襖際に畏まつた。

「何ういたして、……實に御馳走樣……。番頭さんですか。」

「いえ、當家の料理人にございますが、至つて不束でございまして。……それに、斯やうな山家邊鄙で、一向お口に合ひますものもございません。」

「飛んでもないこと。」

「つきまして、……唯今、女どもまでおつしやりつけでございましたが、鶫を貴方樣、何か鍋で

でめしあかりたいといふお言で如何やらにいたして差上げませうやら、何、女ともも矢張田舎ものゝ事でございますで、よくお言がのみ込めかねます。ゆゑに失禮ではございますが、一寸お伺ひに出ましてございますが。」

境は少からず面くらつた。

「そいつは何うも恐縮です。――遠方の處を。」

と浮り言つた……

「串戯のやうですが、全く二階まで。」

「何う仕りまして。」

「まあ、此方へ――お忙しいんですか。」

「いえ、お膳は、最う差上げました。それが、お客様も、貴方様のほか、お二組ぐらゐよりございません。」

「では、まあ此方へ。――さあ、ずつと。」

「はツ、何うも。」

「失禮をするかも知れないが、まあ、一杯。ああ、――丁度お銚子が來た。女中さん、お酌をしてあげて下さい。」

「は、いえ、手前不調法で。」

「まあ〱一杯。――弱つたな、何うも、鶫を鍋でと言つて、……其の何ですよ。」

「旦那様、帳場でも、あの、然う申して居りますの、鶫は燒いてめしあがるのが一番おいしいんでございますつて。」

「お膳にもつけて差上げましたが、此を頭から、その腦味噌をするりとな、ひと嘴りにめしあがりますのが、おいしいんでございまして、えゝ飛んだ田舎流儀ではございますがな。」

「お料理番さん……私は決して、料理をとやかう言うたのではないのですよ。……弱つたな、何うも、實はね、ある其の宴會の席で、其の席に居た藝妓が、木曾の鶫の話をしたんです――大分酒が亂れて來て、何とか節と言ふのが、あつち此方ではじまると、木曾節と言ふのがこの時顯れて、――きいても可懷しい土地だから、うろ覺えに覺えて居るが、木曾へ木曾へと積出す米は）何とかつて言ふのでね……」

「然やうで。」

と眞四角に猪口をおくと、二つ提の煙草入から、吸ひかけた煙管を、金の火鉢だ、遠慮なくコッツンと敲いて、

「……（伊那や高遠の餘り米）……と言ふでございます、米、此の女中の名でございます、お米。」

「あら、何だよ、伊作さん。」

と女中が横にらみに笑つて睨んで、

「旦那さん、――此の人は、家が伊那だもんでございますから。」

「はあ、勝頼様と同國ですな。」

「まあ、勝頼様は、こんな男振ぢやありませんが。」

「當然よ。」

とむつつりした料理番は、苦笑もせず、又コッツンと煙管を擲く。

「それだもんですから、伊那の贔屓をしますの。――木曾で唄ふのは違ひますが。――（伊那や高遠へ積出す米は、みんな木曾路の餘り米）――と言ひますの。」

「さあ……それは孰ちにしろ……其の木曾へ、木曾への機掛に出た話なんですから、私たちも醉つては居るし、それがあとの贄川だか、峠を越した先の藪原、福島、上松のあたりだか、よくは訊かなかつたけれども、其の藝妓が、客と一所に、鶫あみを掛けに木曾へ行つたと言ふ話をしたんです。……まだ夜の暗いうちに山道をずん〱上つて、案内者の指揮の場所で、かすみを張つて囮を揚げると、夜明前、霧のしらじらに、向うの尾上を、ぱつと此方の山の端へ渡る鶫の群がむら〱と來て、羽ばたきをして、かすみに掛る、じわ〱ととつて占めてすぐに焚火で附焼にして、背の熱い處を、ちゆツと

吸つて食べるんだが、そのおいしい事、……と言つて、話をしてね……」

「はあ、まつたくで。」

「……ぶる〳〵寒いから、煮燗で。一杯のみながら、息もつかずに、幾口か鶫を噛つて、あゝ、おいしいと一息して、焚火に獅噛みついたのが、すつと立つと、案内についた土地の獵師が二人、きやツと言つた──その何なんですよ。藝妓の口が血だらけに成つて居たんだとさ、生々とした半熟の小鳥の血です、……と此の話をしながら、うつかりしたやうに其の藝妓は手巾で口を壓へたんですがね……たら〳〵と赤いやつが沁みさうで、私は顏を見ましたよ。觸ると撓びさうな痩せぎすな、すらりとした、若い女で。……聞いてもうまさうだが、これは凄かつたらう、その時、東京で想像しても嶮しいとも、高いとも、深いとも、峰谷の重り合つた木曾山中のしらじらあけです……暗い裾に焚火を搦めて、すつくりと立上つたと言ふ自然、目の下の峰よりも高い處で、霧の中から綺麗な首が。」

「可厭、旦那さん。」

「話は擒くつても、何となく不氣味だね。其の口が血だらけなんだ。」

「いや、如何にも。」

「あゝ、よく無事だつたな、と私が言ふと、何うして？と訊くから、然う云ふのが、慌てる銃獵家だの、魔のさした獵師に、峰越の笹原から狙撃に二つ彈丸を食ふんです。……場所と言ひ……時刻と言ひ……昔から、夜待、あけ方の鳥あみには、魔がさして、怪しい事があると言ふが、まつたく其は魔がさしたんだつて、覿面に綺麗な鬼に成つたぢやあないか……何うせ然うよ。……私は鬼よ──。でも人に食はれる方の……なぞと言ひながら、でも可恐いわね、ぞつとすると、又口を手巾で壓へて居たのさ。」

「ふーん。」

と料理番は、我を忘れて沈んだ聲して、

「えゝ。旦那、へい、何うも、いや、全く、──實際、危うございますな。──然う言ふ場合には、殺と怪我があるんでして……よく、その姐さんは御無事でした。此の贄川の川上、御嶽口、美濃よりの峽は、よけいに取れますが、その方の場所は何處でございますか存じません──藝妓衆は東京のどちらの方で。」

「何、下町の方ですがね。」

「柳橋……」

と言つて、覗くやうに、熟と見た。

「……或はその新橋とか申します……」

「いや、その眞中ほどです……日本橋の方だけれど、宴會の席ばかりでの話ですよ。」

「お處が分つて差支へがございませんければ、參考のために、其の場所を伺つて置きたいくらゐでございまして……此の、深山幽谷の事は、人間の智慧には及びません──」

女中も俯向いて暗い顏した。

境は、此の場合誰もしよう、乘出しながら、

「何か、此の變に變つた事でも。」

「……別にその、と云つてございません。しかし、流に瀨がございますやうに、山にも淵がございますで、氣をつけなければ成りません。……唯今さしあげました鶫は、これは、つい一兩日續きまして、珍しく上の峠口で獵があつたのでございます。」

「さあ、それなんですよ。」

境は更めて猪口をうけつゝ、

「料理番さん。きみのお手際で膳につけておくんなすつたのが、見てもうまさうに、香しく、脂の垂れさうなので、ふと思出したのは、今の藝妓の口が血の一件でね。しかし私は坊さんでも、精進でも、何でもありません。望んでも結構なんだけれど、見給へ。──窓の外は雨と、もみぢで、霧が山を織つて居る。峰の中には、雲

を頂いて、雲を貫いて聳えたのが見えるんです。——どんな拍子かで、ひよいと立ちでもした時口が血に成つて首が上へ出ると……野郎で此の面だから、その嫦娥のやうな、凄く美しく、山の神の化身のやうには見えまいがね。落殘つた柿だと思つて、窓の外から鳥が突かないとも限らない……ふと變な氣がしたものだから。」

「お米さん——電燈が何故か、遲いでないか。」

料理番が沈んだ聲で言つた。

時雨は晴れつゝ、木曾の山々に暮が迫つた、奈良井川の瀨が響く。

二

「何だい、何うしたんです。」

「あゝ旦那。」

と暗夜の庭の雪の中で、

「鷺が來て、魚を狙ふんでございます。」

すぐ窓の外、間近だが池の水を渡るやうな料理番——その伊作の聲がする。

「人間が落ちたか、獺でも駈廻るのかと思つた、えらい音で驚いたよ。」

此は、その翌日の晩、おなじ、旅店の下座敷での事であつた……

境は奈良井宿に逗留した。こゝに積つた雪が、朝から降出したためではない。別に此のあたりを見物するためでもなかつた。……昨夜は、あれから鶫を鍋でと誂へたのは、しやも、かしはをするやうに、膳のわきで火鉢へ掛けて煮るだけの事、と言つたのを、料理番が心得て、そのぶつ切を、皿に山もり、目笊に一杯、葱のざく〳〵を添へて、醤油も砂糖もむきだしに、擔ぎあげた。お米が烈々と炭を繼ぐ。

越の方だが、境の故郷ゐまはりでは、季節に成ると、此の鶫を珍重すること一通りでない。料理屋が鶫御料理、じぶ御このみなどゝ言ふ立看板を軒に掲げる。鶫うどん、鶫蕎麥と蕎麥屋までが貼紙を張る。たゞし安價くない、何の椀、どの鉢に使つても、御羹、おん小蓋の見識で。ぽつちり三切、五切よりは附けないのに、葱と一所に打覆けて、鍋からもりこぼれるやうな湯氣を天井へ立てたは嬉しい。

剰へ熱燗で、熊の皮に胡坐で居た。藝者の化ものが、山賊にかはつたのである。寢る時には、厚衾に、此の熊の皮が上へ被つて、袖を包み、蔽ひ、裙を包んだのも面白い。あくる日、雪に成らうとてか、夜嵐の、じんと身に浸むのも、木曾川の瀨の凄いのも、ものゝ數ともせず、酒の血と、獸の皮とで、ほか〳〵して三階にぐつすり寢込んだ。

次第であるから、朝は朝飯から、ふつ〳〵と吹いて啜るやうな豆腐の汁も氣に入つた。

一昨日の旅館の朝は何うだらう。……溝の上澄のやうな冷い汁に、御羹ほどに蜆が泳いで、生煮の臭さと言つたらなかつた。……

山も、空も氷を透す如く澄切つて、松の葉、枯木の閃くばかり、晃々と陽がさしつゝ、それで、ちら〳〵と白いものが、飛んで、奥山に、熊が人立して、針を噴くやうな雪であつた。

朝飯が濟んで少時すると、境はしく〳〵と腹が疼み出した。——しばらくして、二三度はゞかりへ通つた。

あの、饂飩の祟りである。鶫を過食したためでは斷じてない。……ぜん分を籠にした生がへりのうどん粉の中毒らない法はない。腹を壓へて、饂飩を思ふと、思ふ下からチク〳〵と筋が動いて痛出す。——尤も、戸外は日當りに針が飛んで居ようが、少々腹が痛まうが、我慢して、汽車に乘れないと言ふ容體ではなかつたので。……唯、誰も知らない。此の宿の居心のいいのにつけて、何處かへのつらあてにと、逗留する氣に成つたのである。

處で座敷だが——その二度だつたか、廁のか

へりに、我が座敷へ入らうとして、三階の欄干から、ふと二階を覗くと、階子段の下に、開けた障子に、箒とはたきを立掛けた、中の小座敷に炬燵があつて、床の間が見通される。……床に行李と二つばかり重ねた、あせた萌葱の風呂敷づゝみの眞田紐で、中結へをしたのがあつて、旅商人と見える中年の男が、ずつぷり床を背負つて當つて居ると、向合に、一人の、中年増の女中が一寸浮腰で、膝をついて、手さきだけ炬燵に入れて、少し仰向くやうにして旅商人と話をして居る。

なつかしい浮世の状を、山の崖から掘出して、旅宿に嵌めたやうに見えた。

座敷は熊の皮である。境は、ふと奥山へ棄てられたやうに、里心が着いた。

一昨日松本で城を見て、天守に上つて、其の五層めの朝霜の高層に立つて、悚然としたやうな、雲に連る、山々の襞と再び窓に來て、身に迫るのを覺えました。バスケットに、等閑に絡めたまゝの、城あとの崩れ堀の苔むす石垣を這つて枯殘つた小さな蔦の紅の、鶴の血のしたゝる如きのを見るにつけても。……急に寂しい。「お米さん、下階に座敷はあるまいか。――炬燵に入つてぐつすりと寐たいんだ。」

二階の部屋々々は、時ならず商人衆の出入りがあるからと、望む處の下座敷、おも屋から、土間を長々と板を渡つて離座敷のやうな十疊へ導かれたのであつた。

肱掛窓の外が、すぐ庭で、池がある。白雪の飛ぶ中に、緋鯉の背、眞鯉の鰭の紫は美しい、梅も松もあしらつたが、大方は樫槻の大木である。朴の樹の二抱ばかりなのさへすつくと立つ。が、いづれも葉を振つて、素裸の山神の如き裝だつたことは言ふまでもない。

午後三時頃であつたらう。枝に梢に、雪の咲くのを、炬燵で斜違ひに、くの字に成つて――いゝ婦だとお目に掛けたい。肱掛窓を覗くと、池の向うの椿の下に料理番が立つて、つくねんと腕組して、熟と水を瞻るのが見えた。例の紺の筒袖に尻からすぼんと卷いた前垂で、雪の凌ぎに鳥打帽を被つたのは、苟も料理番が水中の鯉を覗くとは見えない。大な鶴が沼の鰌を狙つて居る形である。山も峰も、雲深く其の空を取圍む。

境は山間の旅情を解した。「料理番さん、晩の御馳走に、其の鯉を切るのかね。」「へゝ。」と薄暗い顔を上げてニヤリと笑ひながら、鳥打帽を取つてお時儀をして、また被り直すと、其のまゝごそ／＼と樹を潛つて廂に隱れる。

帳場は遠し、あとは雪がやゝ繁く成つた。

同時に、さら／＼さら／＼と水の音が響いて聞える。「――又誰か洗面所の口金を開放したな。」此がまた二度めで……今朝三階の座敷を、此處へ取替へない前に、些と遠いが、手水を取るのに清潔だからと女中が案内をするから、此の離座敷に近い洗面所に來ると、三ケ所、水道口があるのに其のどれを捻つても水が出ない。然はどの寒さとは思へないが凍てたのかと思つて、谺のやうに高く手を鳴して女中に言ふと「あれ、汲込みます。」と駈出して行くと、やがて、スッと水が出た。――座敷を取替へたあとで、はゞかりに行くと、外に手水鉢がないから、洗面所の一つを捻つたが、その時はほんのたら／＼と滴つて、辛うじて用が足りた。

しばらくすると、頻に洗面所の方で水音がする。炬燵から潛出て、土間へ下りて橋がゝりからそこを覗くと、三つの水道口、殘らず三條の水が一齊にざつと灌いで、徒らに流れて居た。たしない水らしいのに、と一つ一つ、丁寧にしめて座敷へ戻つたが、その時も料理番が池のへりの、同じ處につくねんと彳んで居たのである。

くどいやうだが、料理番の池に立つたのは、此

で二度めだ。……前のは十時頃であつたらう。ト其の時料理番が引込むと、やがて洗面所の水が、再び高く響いた。

又しても三條の水道が、殘らず開放して流れて居る。おなじ事、たしない水である。あとで手を洗はうとする時は、乾と涸れるのだからと、又しても口金をしめて置いたが――

いま、午後の三時ごろ、此の時も、更に其の水の音が聞え出したのである。庭の外には小川も流れる。奈良井川の灘も響く。木曾へ來て、水の音を氣にするのは、船に乘つて波を見まいとするやうなものである。望みこそすれ、嫌ひも避けもしないのだけれど、不思議に洗面所の開放しばかり氣に成つた。

境は又廊下へ出た。果して、三條とも揃つて――しよろ〳〵と流れて居る。「旦那さん、お風呂ですか。」手拭を持つて居たのを見て、こゝへ火を直しに、臺十能を持つて來かゝつた、お米が聲を掛けた。「いや――しかし、もう入れるかい。」「直きでございます。……今日は此の新館のが湧きますから。」成程、雪の降りしきるなかに、ほんのりと湯の香が通ふ。洗面所の傍の西洋扉が湯殿らしい。この窓からも見える。新しく建增した柱立てのまゝ、筵がこひにしたのもあり、足場を組んだ處があり、材木を積んだ納屋もある。が、荒れた寂のやうに成つて、落葉に埋れた、一帶、脇本陣とでも言ひさうな舊家が、いつか世が成金とか言つた時代の景氣に連れて、桑も蠶も當つたであらう、此のあたりも火の燃えるやうな勢に乘じて、贄川はその昔は、煮え川にして、溫泉の湧いた處だなぞと、こゝが溫泉にでも成りさうな意氣込みで、新館建增にかゝつたのを、此の一座敷と、湯殿ばかりで、そのまゝ沙汰やみに成つた事など、あとで分つた。「女中さんかい、其の水を流すのは。」閉めたばかりの水道の栓を、女中が立ちながら一つづゝ開けるのを視て、堪らず詰るやうに言つたが、次手に此の仔細も分つた。……池は、樹の根に樋を伏せて裏の川から引くのだが、一年に一二度づゝ水涸があつて、池の水が干ようとする。鯉も鮒も、一處に固つて、泡を立てゝ弱るので、臺所の大桶へ汲込んだ井戸の水を、遙々と此の洗面所へ送つて、樋がゝりの下を潜らして、池へ流込むのださうであつた。

木曾道中の新版を二三種ばかり、枕もとに散らした炬燵へ、ずぶ〳〵と潛つて、「お米さん、……折入つて、お前さんに賴みがある。」と言ひかけて、初々しく一寸俯向くのを見ると、突然として、喜多八を思起して、我が境は一人で笑つた。「は、、心配な事ではないよ。――お庇で腹按配も至つて好く成つたし、――午飯を拔いたから、晚には入合せに且つ食ひ、大に飮むとするんだが、いまね、伊作さんが澁苦い顏をして池を睨んで行きました。何うも、鯉のふとり工合を鑑定したものらしい。……乾と今晚の御馳走だと思ふんだ。――昨夜の鶫ぢやないけれど、何うも緣あつて池の前に越して來て、鯉と隣附合ひに成つて見ると、目の前から引上げられて、俎で輪切は酷い。……板前の都合もあらうし、また我がまゝを言ふのではない。……きづくりはお斷りだが、實は鯉汁大歡迎なんだ。しかし、魚屋か、何か、都合して、ほかの鯉を使つて貰ふわけには行くまいか。」――「差出た事だが、一尾か二尾で足りるものなら、お客は幾人だか、今夜の入用だけは私が其の原料を買つても可いから。」女中の返事が、「いえ、此の池のは、いつもお料理にはつかひませんのでございます。うちの旦那も、おかみさんも御志の佛の日には、鮒だの、鯉だの、……此の池へ放しなさるんでございます。料理番さんも矢張。……そして料理番は、此の池のを大事に

して、可愛がつて、その所爲ですか、隙さへあれば、默つてあゝやつて庭へ出て、池を覗いて居ますんです。」「それはお誂だ。ありがたい。」境は禮を言つたくらゐであつた。

雪の頂から星が一つ下つたやうに、入相の座敷に電燈の點いた時、女中が風呂を知らせに來た。「すぐに膳を。」と聲を掛けて置いて、待構へた湯どのへ、一散――例の洗面所の向うの扉を開けると、上場らしいが、ハテ眞暗である。いやいや提灯が一燈ぼうと薄白く點いて居る。其處にもう一枚扉があつて閉つて居た。その裡が湯どのらしい。

「半作事だと言ふから、まだ電燈が點かないのだらう。おゝ、二つ巴の紋だな。大星だか由良之助だかで、鼻を衝く、欝陶しい巴の紋も、此處へ來ると、木曾殿の御寵愛を思出させるから奥床しい。」

と帶を解きかけると、ちやぶり――といふ――人が居て湯を使ふ氣勢がする。此の時、洗面所の水の音がハタと留んだ。

境はためらつた。

が、いつでも構はぬ。……他が濟んで、湯のあいた時を知らせて貰ひたいと言つて置いたのである、誰も入つては居まい。とに角と、解きかけた帶を挾んで、づゝと寄つて、其の提灯の上から、扉にひつたりと頰をつけて伺ふと、袖のあたりに、すうーと暗く成る、蠟燭が、またぼうと明く成る。影が悲に成つて、巴が一つ片頰に映るやうに陰氣に沁込む、と思ふと、ばちやり……内端に湯が動いた。何の隙間からか、芬と梅の香を、ぬくもつて溶かしたやうな白粉の香がする。

「婦人だ。」

何しろ、此の明では、男客にしろ、一所に入ると、暗くて肩も手も跨ぎかねまい。乳に打着りかねまい。で、ばた〱と草履を突掛けたまゝ引返した。

「もう、お上りに成りまして？」と言ふ。

通が遠い、こゝで燗をするつもりで、お米がさきへ銚子だけ持つて來て居たのである。

「いや、あとにする。」

「まあ、そんなにお腹がすいたんですの。」

「腹もすいたが、誰かお客が入つて居るから。」

「へい、……此方の湯どのは、久しく使はなかつたのですが、あの、然う言つては惡うございますけど、しばらくぶりで、お掃除かた〲旦那樣に立てましたのでございますから、……あとで頂きますまでも、……あの、まだ誰方も。」

「構やしない。私はゆつくりで可いんだが、婦人の客ならさうだつたぜ。」

「へい。」

と、をかしなベソをかいた顏をすると、手に持つ銚子が湯沸にカチ〱カチと震へたつけ、あとじさりに、ふいと立つて、廊下に出た、一度ひつそり跫音を消すや否や、けたゝましい音をすたんと立てゝ、土間の板をはた〱と鳴して駈出した。

境はきよとんとして、

「何だい、あれは……」

やがて膳を持つて顯れたのが、……お米でない。年增のに替つて居た。

「やあ、中二階のおかみさん。」

行商人と、炬燵で睦じかつたのは此である。

「御亭主は何うしたい。」

「知りませんよ。」

「是非、承りたいんだがね。」

半ば串戲に、ぐツと聲を低くして、

「出るのかい……何か……あの、湯殿へ……眞個？」

「それがね、旦那、大笑ひなんでございますよ。……誰方もいらつしやらないと思つて、申上げましたのに、御新姐の方が入つておいでだつて、

旦那がおつしやつたと言ふので、米ちやん、大變な臆病なんですから。……久しくつかひません湯殿ですから、內のお上さんが、念のために——」

「あゝ然うか、……私はまた、一寸出るのかと思つたよ。」

「大丈夫、湯どのへは出ませんけれど、そのかはりお座敷へはこんなのが、ね、貴方。」

「いや、結構。」

お酌は此の方がけつく飲める。

夜は長い、雪はしん〳〵と降出した。床を取つてから、酒をもう一度、その勢でぐつすり寢よう。晩飯は可い加減で膳を下げた。

跫音が入亂れる、ばた〳〵と廊下へ續くと、洗面所の方へ落合つたらしい。ちよろ〳〵と水の音が又響出した。男の聲も交つて聞える。それが止むと、お米が襖から圓い顏を出して、

「何うぞ、お風呂へ。」

「大丈夫か。」

「ほゝゝ。」

と些とてれたやうに笑ふと、身を廊下へ引くのに、押續いて境は手拭を提げて出た。

橋がゝりの下口に、昨夜帳場に居た坊主頭の番頭と、女中頭か、それとも女房かと思ふ老けた婦と、もう一人の女中とが、といつた形に顏を並べて、一團に成つて此方を見た。其處へお米が、足袋まで見えてちよこ〳〵と橋がかりを越えて渡ると、三人の懷へ飛込むやうに一團。

「御苦勞樣。」

我がために、見とゞけ役の此の人數で、風呂を檢べたのだと思ふから聲を掛けると、一度に揃つてお時儀をして、屋根か萱ぶきの長土間に敷いた、そのあゆみ板を渡つて行く。土間のなかばで、其のおぢやのかたまりのやうな四人の形が暗く成つたのはトタンに、一つ二つ電燈がスツと息を引くやうに赤く成つて、橋がゝりのも洗面所のも一齊にパツと消えたのである。

と胸を吐くと、さら〳〵さら〳〵と三筋に……恁う順に流れて、洗面所を打つ水の下に、先刻の提灯が朦朧と、半ば暗く巴を一つ照して、墨でかいた炎か、鯰の跳ねたかと思ふ形に點れて居た。

いまにも電燈が點くだらう。湯殿口へ、これを持つて入る氣で、境がこゞみ状に手を掛けようとすると、提灯がフツと消えて見えなくなつた。

消えたのではない。矢張是が以前の如く、湯殿の戶口に點いて居た。此はおのづから下して、下の板敷の濡れたのに目の加減で、向うから影が映したものであらう。はじめから、提灯が此處にあつた次第ではない。境は、斜に影の宿つた水中の月を手に取らうとしたと同一である。

爪さぐりに、例の上り場へ……で、念のために戶口に寄ると、息が絕えさうに寂寞しながら、ぱちやんと音がした。ぞツと寒い。湯氣が天井から雫に成つて點滴るのではなしに、屋根の雪が溶けて落ちるやうな氣勢である。

ぱちやん、……ちやぶりと微に湯が動く。と又得ならず艶な、しかし冷い、そして、にほやかな、霧に白粉を包んだやうな、人膚の氣がすツと肩に絡つて、項を撫でた。

脫ぐ筈の衣紋を且つしめて、

「お米さんか。」

「いゝえ。」

と一呼吸間を置いて、湯どのゝ裡から聞えたのは、勿論我が心が我が耳に響いたのであらう。——お米でないのは言ふまでもなかつたのである。

洗面所の水の音がぴつたり留んだ。

思はず立竦んで四邊を見た。思切つて、

「入りますよ、御免。」

「いけません。」

と澄みつゝ、湯氣に濡れ〳〵とした聲が、はつきり聞えた。

「勝手にしろ！」

我を忘れて言つた時は、もう座敷へ引返して居た。

電燈は明るかつた。巴の提灯は此の光に消された。が、水は一筋、更にさら〳〵と走つて居た。

「馬鹿にしやがる。」

不氣味より、凄いより、なぶられたやうな、拗感が起つて、憤然と、仰向けにひつくり返つた。——しばらくして、境が、蘇生るやうに起直つたのは、すぐ窓の外に、とぶり、ぱちや〳〵はちや、ぼちや、ちやッと、けたゝましく池の水の掻攪まはる音を聞いたからであつた。

「何だらう。」

ばちや〳〵ばちや、ちやッ。

其處へ、ごそ〳〵と池を廻つて響いて來た。

人の來るのは、何故か料理番だらうと思つたのは、此の邊の魚を愛惜する……聞いて知つたためである。……

「何だい、何うしたんです。」

雨戸を開けて一面の雪の色のやゝ薄い處に聲を掛けた、その池も白いまで水は少いのであつた。

## 三

「どつちです、白鷺かね五位鷺かね。」

「えゝ——どつちもでございますな。両方だらうと思ふんでございますが。」

料理番の伊作は來て、窓下の戸際に、かッしり腕組をして、うしろ向に立つて言つた。

「むかうの山口の大林から下りて來るんでございますで。」

言ふ中にも顯れる、雪の降留んだ、その雲の一方は漆の如く森が黒い。

「不斷の事ではありませんか、……此の、旦那、池の水の涸れる處を狙ふんでございます。鯉も鮒も半分鰭を出して、あがきがつかないのでございますから。」

「怜悧な奴だね。」

「馬鹿な人間は困つ了ひます——魚が可哀相でございますので……然うかと言つて、夜一夜、立番をしても居られません。旦那、お寒うございます。おしめなさいまし。……そちこち御註文の時刻でございますから、何か、不手際なものでも見繕つて差上げます。」

「都合がついたら、君が來て一杯、ゆつくりつき合つてくれないか。……私は夜ふかしは平氣だから。一所に……此處で飲んで居たら、いくらか案山子に成るだらう……」

「——結構でございます。……もう臺所は片附きました、追つけ伺ひます。——いたづらな餓鬼どもめ。」

と、あとを口こごとで、雪を踏みながら、枝をざら〳〵と潜つて行く。

境は、しかし、あとの窓を閉めなかつた。勿論、極く細目には引いたが。——實は、雪の池の汀へ、來て幾羽の鷺の、魚を狩る狀を、さながら、幻燈で見るお伽話の繪のやうに思つたのである。驚破と言へば、逃立つるとも、驚かすとも、その場合の事として……第一、氣もそゞろな事は、二度まで湯殿の湯の音は、いづれの隙間からか雪とともに、鷺が起ち込んで浴みしたらう、と然うさへ思つたほどであつた。

そのまゝ熟と覗いて居ると、薄黒く、ごそ〳〵と雪を踏んで行く、伊作の袖の傍を、ふはりと巴の提灯が點いて行く。おゝ、今、窓下では提

灯を持つては居なかつたやうだ。――それに、もうやがて、庭を横ぎつて、濡縁か、戸口に入りさうだ、と思ふまで距つた。遠いまで小さく見える、唯少時して、ふとあとへ戻るやうな、やゝ大きく成つて、あの土間廊下の外の、萱屋根のつま下をすれ〳〵に段々此方へ引返す。引返すのが、氣の所爲だか、いつの間にか、中へ入つて、土間の暗がりを點れて來る。……橋がゝり、一方が洗面所、突當りが湯殿……ハテナとぎよッとするまで氣づかつたのは、その點れて來る提灯を、座敷へ振返らずに、逆に窓から庭の方に乗出しつゝ見て居る事であつた。

トタンに消えた。――頭からゾッとして、首筋を硬く振向くと、座敷に、白鷺かと思ふ女の後姿の頸脚がスッと白い。

違棚の傍に、十疊のその辰巳に据ゑた、姿見に向つた、うしろ姿である。……湯氣に山茶花の悄れたかと思ふ、濡れたやうに、しつとりと身についた藍鼠の縞小紋に、朱鷺色と白のいち松のくつきりした伊達卷で乳の下の縊れるばかり、消えさうな弱腰に、裾模様が輕く靡いて、片膝をやゝ浮かした、褄を友禪が微り溢れる、露の垂りさうな圓髷に、桔梗色の手絡が青白い、淺葱の長襦袢の裏が媚かしく搦んだ白い手で、鬢毛を撫し、使ひながら、姿見を少しこゞみなりに覗くやうにして化粧をして居た。

境は起つも坐るも知らず息を詰めたのである。

あれは、着た衣は雪の下なる薄もみぢで、膚の雪が、却つて薄もみぢを包んだかと思ふ、深く脱いだ襟脚を、すらりと引いて掻合すと、ぼつとりとして膝近だつた懐紙を取つて、くる〳〵と丸けて、掌を拭いて落したのが疊へ、白粉のこぼれるやうであつた。

衣摺れが、さらりとした時、湯どのできいた人膚に紛ふ留南奇が薫つて、少し斜めに居返ると、煙草を含んだ。吸口が白く、艶々と鐵漿が黒い。

トーンと、灰吹の音が響いた。

屹と向いて、境を見た瓜核顔は、目ぶちがふつくりと、鼻筋通つて、色の白さは凄いやう。――氣の籠つた優しい眉の兩方を懐紙で、ひたと隠して、大な瞳で熟と視て、

「……似合ひますか。」

と、莞爾した齒が黒い。唯、莞爾しながら、褄を合せ状にすつくりと立つた。顔が鴨居に、すら〳〵と丈が伸びた。

境は胸が飛んで、腰が浮いて、肩が宙へ上つた。ふはりと、其の婦の袖で抱上げられたと思つたのは、然うでない、横に口に引銜へられて、疊を空に釣上げられたのである。

山が眞黒に成つた。いや、庭が白いと、目に遮つた時は、スッと窓を出たので、手足はいつか、尾鰭に成り、我はぴち〳〵と跳ねて、婦の姿は廂を横に、ふは〳〵と欄間の天人のやうに見えた。

白い森も、白い家も、目の下に、忽ち颯と……空高く、松本城の天守をすれ〳〵に飛んだやうに思ふと、水の音がしてもんどり打つて池の中へ落ちると同時に炬燵でハッと我に返つた。

池におびたゞしい羽音が聞えた。

此の案山子になど追へるものか。

バスケットの、蔦の血を見るにつけても、青い呼吸をついてぐつたりした。

廊下へ、しと〳〵と人の音がする。ハッと息を引いて立つと料理番が膳に銚子を添へて來た。

「やあ、伊作さん。」

「おゝ、旦那。」

## 四

「昨年の丁ど今頃でございました。」

料理番はひしと、身を寄せ、肩をしめて話し出した。

「今年は今朝から雪に成りましたが、其のみぎりは、忘れもしません、前日雪が降りました。積り方は、もつと多かつたのでございます。――二時頃に、目の覚めますやうな御婦人客が、唯お一方で、おいでに成つたのでございます。――目の覚めるやうだと申しましても派手ではありません。婀娜な中に、何となく寂しさのございます、二十六七のお年ごろで高等な圓髷でおいでございました。――御容子のいゝ、脊のすらりとした、見立ての申分のない、しかし奥様と申すには、何處か媚めかしさが過ぎて居ります。其處は、田舎ものでも、大勢お客様をお見かけ申して居りますから、直きにくろうと衆だと存じましたのでございまして、此が柳橋の蓑吉さんと言ふ姐さんだつた事が、後に分りました。宿帳の方はお艶様でございます。

その御婦人を、旦那――帳場で、此のお座敷へ御案内申したのでございます。

風呂がお好きで……勿論、お綺麗な方ほど沢山ございますまいが、あつい湯へ二度、おいきに成つて、すぐと、それに夜分に一度、お入りなすつたのでございます――都合で、新館の建出しは見合せてをりますが、温泉ごのみに石で畳みました風呂は、自慢でございまして、背の二階、三階のお客様にも、些と遠うございますけれども、お入りを願つて居りました處が――實はその、時々、不思議な事がありますので、此のお座敷も同様に多日使はずに置きましたのを旦那のやうな方に試みて頂けば、おのづと変な事もなくなりませうと、相談をいたしまして、申すもいかゞでございますが、今日久しぶりで湧かしも使ひもいたしましたやうな次第なのでございます。

處で、お艶様、その御婦人でございますが、日の中一風呂お浴びになりますと(鎮守様のお宮は、と聞いて、お参詣なさいました。賛川街道よりの丘の上にございます。――山王様のお社で、むかし人身御供があがつたなど、申傳へてございます。森々と、もの寂しいお社で……おなじ神社はほかにもございますが、鎮守と言ふ、お尋ねにつけて、その儀を帳場で申しますと……道を尋ねて其處でお一人でおのぼりなさいました。目を少々お煩ひのやうで、雪がきら〳〵して疼むからと言つて、こんな土地でございます。ほんの出來あひの黒い目金を買はせて、掛けて、洋傘を杖のやうにしてお出掛けで。――此れは鎮守様へ参詣は、奈良井宿一統への禮儀挨拶と言ふお心だつたさうでございます。

無事に、先づお歸りなすつて、夕飯の時、お膳で一口あがりました。――旦那の前でございますが、板前へと、御丁寧にお心づけを下すつたものでございますから私……一寸御挨拶に出ました時、恁う言ふおたづねでございます――お社へお供物にきざ柿と楊枝とを買ひました、其の石段下の其處の小店のお媼さんの話ですが、其の下様の奥が深い森で、其の奥に桔梗ケ原と言ふ、原の中に、桔梗の池と言ふのがあつて、その池に、お一方、お美しい奥様が在らつしやると言ふことですが、眞個ですか。――

――眞個でございます、……様まで承りたいで私が申したのでございます。

勿論より證據、申して、よいか、悪いか存じませんか、現に私が一度見ましたのでございます。」

「……」

「桔梗ケ原とは申しますが、それは、秋草は綺麗に咲きます、けれども、桔梗ばかりと言ふのではございません。唯其の大池の水が眞桔梗の青い色でございます。桔梗は却つて、白い花の見事に咲きますのでございまして……

四年あとに成りますが、正午と言ふのに、此

の峠向うの藪原宿から火が出ました。正午の刻の火事は大きく成ると、何國でも申しますが、全く大焼でございました。

山王様の丘へ上りますと、一目に見えます。火の手は、七條にも上りまして、ぱち〳〵ぱんぱんと燃る音が手に取るやうに聞えます。……あれは山間の瀧か。いや、ぽんぷの水の走るのだと申すくらゐ。此の大南風の勢では、山火事に成つて、やがて、こゝもとまで押寄せはしまいかと案じますほどの激しさで、駈けつけるものは駈けつけます、騒ぐものは騒ぐ。私なぞは見物の方で、お社前は、おなじ夥間で充滿でございました。

二百十日のあれ前で、殘暑の激しい時でございましたから、つい〳〵少しづゝお社の森の中へ火を見ながら入りましたにつけて、不斷は、しつかり行くまじきとしてある處ではございますが、此の火の陽氣で、人の氣の湧いて居る場處から、深いと言つても半町とはない。大丈夫と。處で、私陰氣もので、餘り若衆づきあひがございませんから、誰を誘ふでもあるまいと、杉檜の森々としました中を、それも、思つたほど奥が深くもございませんで、一面の草花。……白い桔梗でへりを取つた百疊敷ばかりの眞青な池が、と、見ますと、その汀、もの〻二、……三……十間とはない處に……お一人、何ともおうつくしい御婦人が、鏡臺を置いて、斜に向つて、お化粧をなさつて在らつしやいました。

お髪が何うやら、お召ものが何やら、一目見ました、其の時の凄さ、可恐しさと言つてはございません。唯今思出しましても御酒が氷に成つて胸へ沁みます。慄然とします。……それで居てそのお美しさが忘れられません。勿體ないやうでございますけれども、家のないもの〻お佛壇に、うつしたお姿と存じまして一日でも、此の池の水を眺めまして、その面影を思はずには居られませんのでございます。——さあ、その時は、前後も存ぜず、翼の折れた鳥が、たゞ空から落ちるやうな思で、森を飛拔けて、一目散に、高い石段を駈下りました。私がその顏の色と怯えた樣子とてはなかつたさうでございましてな、……お社前の火事見物が、一雪崩に成つて遁下りました。森の奥から火を消すばかり冷い風で、大蛇が颯と追つたやうで、遁げた私は、野兎の飛んで落ちるやうに見えたと言ふ事でございまして。

と此の趣を、——お鶴樣、その御婦人に申しますと、——然うしたお方を、何うして、女神樣とも、お姫樣とも言はないで、奥さまと言ふんでせう。さ、其でございます。私は唯目が暗んで了ひましたが、前々より、ふとお見上げ申したものゝ言ふのでは、桔梗の池のお姿は、眉をおとして、在らつしやりまするさうで……」

境はゾッとしながら、拈つて煙草を傍へ押遣つた。

「誰方の奥方とも存ぜずに、いつとなく然う申すのでございまして……旦那。——お鶴樣に申しますと、ちつとお聞きなすつて——だと、その奥さまのお姿は、ほかにも見た方がありますかと、おつしやいます——えゝ、月の山の端、花の蘿路、螢の影、時雨の提灯、雪の川べりなど、隨分村方でも、ちらりと拜んだものはございます。——お鶴樣は此をきいて、猪口を下に置いて、なぜか、悄乎とおうつむきなさいました——

——處で旦那……その御婦人が、わざ〳〵木曾の此の山家へ一人旅をなされた用事がでございまする。」

## 五

「えゝ、其の時、此の、村方で、不思議千萬な、色出入、——變な姦通事件がございました。

村人の雁股と申す處に〔代官婆〕と言ふ、庄屋のお婆さんと言へば、まだしもらしく聞えますが、代官婆、……渾名で分りますくらゐ可恐しく權柄な家の系圖を鼻に掛けて、俺が家はむかし代官だぞよ、と二言めには、たつみ上りに成りますので、其の料簡でございますから、中年から後家に成りながら、手一つで、先づ……伜どのを立派に育てゝ、此を東京で學士先生にまで仕立てました。……其處で一頃は東京住居をして居りましたが、何でも一旦微禄した、家を、故郷に打開けて、村中の面を見返すと申して、兩三年前から、沽券潰の古家を買ひまして、其伜の學士先生の嫁御、近頃で申す若夫人と、二人で引籠つて居りますが、……菜大根、茄子などは、料理に醤油が費だと言ふ儉約で、葱、韮、大蒜、辣韮と申す五葷の類を、空地中に植込んで、鹽で辨ずるのでございまして……もう遠くから芬と、其の家が臭ひます。大蒜屋敷の代官婆と。……

處が若夫人、嫁御と言ふのが、福島の商家の娘さんで學校をでた方だが、當世に似合はないおとなしい優しい、些と内氣過ぎますぐらゐ。尤も此でなくつては代官婆と二人住居は出來ますまい。……大蒜ばなれのした方で、鍋にも釜にも、連尺にも婆どのに追使はれて、いたはしいほどよく辛抱なさいます。

霜月の半ば過ぎに、不意に東京から大蒜屋敷へお客人がございました。學士先生のお友だちで、此の方は何處へも勤めには居なさらない、尤も畫師ださうでございますから、極つた勤とてはございますまい。學士先生の方は、東京の一中學校で歴乎とした校長さんでございますが――

で、その畫師さんが、不意に、大蒜屋敷に飛込んで參つたのは、碌に旅費も持たずに、東京から遁出して來たのださうで。……と申しますのは――早い話が、御細君がありながら、よそに深い馴染が出來ました。……それがために、首尾も義理も世の中は、さん〴〵で、思餘つて細君が意見をなすつたのを、何を！と言つて、一つ横頬を撲はしたはいゝが、御先祖、お兩親の位牌にも、くらはされて然るべきは自分の方で、佛壇のある我家には居たゝまらないために、其の場から門を駈出したは出たとして、知合にも友だちにも、女房に意見をされるほどの始末で見れば、行處がなかつたので、一夜しのぎに、此の木曾谷まで遁込んだのださうでございます。遁げましたなあ。……それに、その細君と言ふのが、はじめ畫師さんには懇意で、晴れて夫婦に成るのには、此の學士先生が大層なおほね折で、そのお庇で思が叶つたと申したやうなわけださうで、……遁込み場所には屈竟なのでございました。

時に、弱りものゝ、畫師さんの、その深い馴染と言ふのが、もし、何と……お前様――手前どもに一人でお泊りに成つた其の御婦人なんでございます。……一寸申上げて置きますが、これは畫師さんのあとをたづねて、事を分けておいでに成つたのではございません。その間が雜と半月ばかりでございました。その間に、唯今申しました、姦通騒ぎが起つたのでございます。」

と料理番は一息した。

「其處で……また代官婆に變な癖がございましてな、癖より病で、――或るもの知の方に承りましたのでは訴訟狂とか申すんださうで、葱が枯れたと言つては村役場だ。小兒が睨んだと言へば交番だ。……派出所だ裁判だと、何でも上沙汰にさへ持出せば、我に理があると、それ貴客、代官婆だけに思込んで居りますのでございます。

その、大蒜屋敷の雁股へ掛ります、この街道、

磔柱の辻に獄穴のやうな窖道に引込んで、石松と言ふ獵師か、小児を連出て籠つて居ります。四十幾任で、此の小田の時は、まだ微禄をしません以前に、……其の婆の許に下男奉公、女房も女中奉公をしたものださうで。……婆が寵う家来扱ひにするのでございますが、石松の獵師も、厚い泥任で、甚しく御主人に侍つて居りますので。……

確か節が雪に成りまして、その年の初雪が思ひのほか、夜半を掛けて積りました。山の、鹿、兎が慌てます。獵は恁うした時だと、夜更に、のそ〳〵と起きて、鐵砲しらべをして、筒端で粥漬を掻食つて、手製の猿の皮の毛頭巾を被つた、蓬の戸口へ、白髪を振亂して、蕎麥切色の、窄……可厭な奴で、とき色の禿げたのを不斷まきます、尻端折りで、六十九歳の代官婆が、跣足で雪の中に突立ちました。「内へ怪ものが出た、來てくれせえ。」と顔色、手振で喘いで言ふので。……こんな時鐵砲は強うございますよ、がチリ、實彈をこめました。……當主人の後室様がお跣足でございますから、石松も素跣足、街道を突切つて、……、葱畑を、さつ〳〵と、化ものを見屆けるのぢや、靜にと言ふ事で、婆が出て來ました、納戸口から入つて中土間へ忍んで、揺されるなりに、板戸の節穴から覗きますと、な、——何と、六枚折の屏風の裡に、枕を並べて寝……申すのが、寝ては居なかつたさうでございます。若夫人が縮の長襦袢で、蚤卷の襟の肩から辷つた半身で、畫師の膝に白い手をかけて俯向に成りました、背中を男が、撫でさすつて居たのださうで。いつもは、もんぺを穿いて、木綿のちやん〳〵こで居る畫師が、其の姿で、然も其のありさまでございます。石松は化もの以上に驚いたに相違ございません。（おのれ、不義もの……人畜生）と代官婆が土蜘蛛のやうにのさばり込んで、（さい、……動くな、その状を一寸でも動いて崩すと——鐵砲だぞよ。彈丸だぞよ。）と、言ふ、にじり上りの屏風の端から、鐵砲の筒口をスツと突出して、毛の生えた蟇のやうな、石松が、目を光らして狙つて居ります。

人相と言ひ、場合と申し、ズドンと遣りかねない勢でございますから、畫師さんは面喰つたに相違ございますまい、（天罰は立處ぢや、足四本、手四つ、顔二つのさらしものにして遣るべ。）で、代官婆は、近所の村方四軒と言ふもの、其の足でたゝき起して廻つて、石松が鐵砲を向けたまゝの、其のあり状をさらしました。——夜のあけ方には、派出所の巡査、檀那寺の和尚まで立合はせると言ふ笊な事でございまして。學士先生の若夫人と色男の畫師さんは、恁う成ると、緋縮緬の腰帯もすべて、死色をした海鼠のやうに、雪にしらけて、ぐつたりと成つたのでございます。

男はともかく、婦は眞個に、うしろ手に縛りあげると、……引出すので、巡査が叱りましたが、叱られると何か……、忽ち、村の長、駐在所、村役場、派出所も、村會も一所にして、姦通の告訴をすると、……、何處へも遁らぬ監禁同様と言ふ趣で、一先づ檀那寺まで引上げる事に成りましたが、……一寸……、様に衣服を着せることを肯きませんので巡査さんが、雪のかゝつた外套を掛けまして、何と、しかし、ぞろ〳〵と村の女小児まであとへついて、寺へ参つたのでございますが。——

婦はきゝつゝ、たゞ幾度も歎息した。

「——遁がしたのでございませうな。畫師さんはその夜のうちに、寺から影をかくしました。此は然うあるべきでございます。——さて、聞きますれば、——倅の姪女、兒弟同様の……やから、倅同様に心得る。……半年あまりも留守を守つてさみしく一人で居る事ゆゑ、嫁女や、そなたも、倅と思うて、つもる話もせい

よ、と申して、身じまひをさせて、きものまで着かへさせ、寝る時は、にこ〳〵笑ひながら、床を並べさせたのだと申すことで。……此奴は成程わけしりの弟分の膝に縋つて泣きたい事もありましたらうし、藝妓でしくじるほどの畫師さんでございます、背中を撫するぐらゐはしかねますまい、……でございますな。

代官婆の憤り方を御察しなさりたう存じます。學士先生は電報で呼ばれました、何と宥めても承知をしません。是非とも姦通の訴訟を起せ、いや、恥も外聞もない、代官と言へば帯刀ぢや、武士たるものは、不義ものを成敗するは却つて名譽ぢや、と言ふまで間違つては事面倒で。斷つて、裁判沙汰にしないとなら、生きて居らぬ。咽喉笛鐵砲ぢや、鎌腹ぢや、奈良井川の淵を知らぬか……桔梗ケ池へ身を沈める……此、此、この婆あ、沙汰の限りな、桔梗ケ池へ沈めますものか、身投をしようとしたら、池が投出しませう。」

と言つて、料理番は苦笑した。

「また、今時に珍しい、學校でも、倫理、道德、修身の方を御研究もなされば、お教へもなさいます、學士は至つての御孝心、實に評判な方だけに、親御をいたはる傍の目には、此を弱遣させると思ふほどなのでございますから、困じ果てゝ、何とも申しわけも面目もないけれども、とに角一度、此の土地へ來て貰ひたい。萬事はその上で――と言ふ――學士先生から畫師さんへのお頼みでございます。

さて、これは果し狀より辛い。……何故、情でも不義ものゝ面へ、唾と石とを、人間の道のためとか申して擲ぐ方が多い世の中でございますから。……どの面さげて畫師さんが奈良井へ二度面がさらされませう、旦那。」

「これは何と言はれても來られまいなあ。」

――と言つて、學士先生との義理合では來ないわけにはまゐりますまい。處で、「その畫師さんは、その時、何處に居ると思召します。……いろの事から、怪しからん、横頬を撲つたと言ふ御新造の親の御位牌のかげに申しわけのない親御たちのお位牌から頭をかくして、尻も足もわな〳〵と震へて居ましたので、弱つた方でございます。……必ず、連れて參ります――と代官婆に、誓つて約束をなさいまして、學士先生は東京へ立たれました。

その上京中。その間の事なのでございます――柳橋の蓑吉姉さん……お艶様が……こゝへお泊りに成りましたのは……。」

## 六

――どんな用事の御都合にいたせ、夜中、近所が寝靜りましてから、お艶様が、おたづねにならうと言ふのが、代官婆の處へ、……一人では出し申されません。……ただ聞いたばかりの事でございましたけれども、おとなしい女樣について道ければ、娘様、奥様にて、……それとも申しようで……果場の稲荷をして、内々守つて進じようで……しまして、其の人達に當りましたのが、此の、不つゝかな私なんでございました……。

お支度がよろしくばと、私、此へ……此のお座敷へ提灯をもつて伺ひますと……。」

「あゝ、二つ巴の紋のだね」と、つい誘はれるやうに聞きました。

「へい。」

と暗く、含むやうな、頤で返事をしまつて、

「二度まで、湯殿に點いて居て、知つて居ますよ。」

「へい、湯殿に……湯殿に提灯を點けますやうな事はございませんが、――それとも、へい。」

此の樣子では、今しがた廊を行く時、此の料理番とともに提灯が通つたなどゝは言出せまい。

境は話を促した。

「それから、

「些と變な氣がいたしますが。——え丶、ざつとお支度濟、一度めの湯上りに薄化粧をなすつた、めしもの丶、鼠がお顏の影に藤色に成つて見えますまで、お色の白さつたらありません、姿見の前で——

境が思はず振返つた事は言ふまでもない。

「金の口で、烏金で張つた煙管で、一寸齒を染めなさつたやうに見えます。懷紙をな、眉にあて丶私を、おも長に御覽なすつて、

——似合ひますか——。」

「む丶、む。」と言ふ境の聲は、氷を頰張つたやうに咽喉に支へた。

疊のへりが、桔梗で白いやうに見えました。

(え丶、勿體ないほどお似合で。)と言ふのを聞いて、懷紙をおのけに成ると、眉のあとがいま剃立ての眞青で、……(桔梗ケ池の奧樣とは?)——(お姉妹……いや一倍お綺麗で。)と罰もあたれ、然う申さずには居られなかつたのでございます。

こ丶をお聞きなさいまし。……

(お艷さん、何うしませう。)

雪がちら〳〵雨まじりで降る中を、破れた蛇目傘で、見すぼらしい半纏で、意氣にやつれた畫師さんの御細君が、男を寢取つた情婦とも言はず、お艷樣——本妻が、その體では、情婦だつて工面は惡うございます。目を煩つて、しばらく親許へ、納屋同然な二階借りで引籠つて内職に、娘子供に長唄なんか、さらつて暮して居なさる處へ思餘つて、御細君が訪ねたのでございます。

(お艷さん、私は然う存じます。私が、貴女ほどお美しければ、こんな女房がついて居ます。何の夫が、木曾街道の女なんぞに。と姦通呼はりをする其の婆に、然う言つて遣るのが一番早分りがすると思ひます。)(え丶、何よりですともさ。それよりか、尚ほその上に、お妾でさへ此のくらゐだ。と言つて見せて遣ります方が上に、尚ほ奧さんと言ふ、奧行があつて可うございます。——奧さんのほかに、私ほどのいろがついて居ます。田舍で意地ぎたなをするもんですか。婆に、然う言つてやりませうよ。そのお嫁さんのためにも。——)

——あとで、お艷樣の、したゝめもの、かきおきなどに、此の樣子が見える事に何とも何うも、つい立至つたのでございまして。……此でございますから、何の木曾の山猿なんか、しかし、念のために土地の女の風俗を見ようと、山王樣御參詣は、その下心だつたかと存じられます。……處を、桔梗ケ池の凄い、美しいお方の事をおきゝなすつて、これが時々人目にも觸れると云ふので、自然、代官婆の目にもとまつて居て、自分の容色の見劣りがする段には、美しさで、勝つ事は出來ないと云ふ、覺悟だつたと思はれます。——尤も西洋剃刀をお持ちだつたほどで、——それで不可ければ、世の中に煩い婆、人だすけに切つ了ふ——それも、かきおきにございました。

雪道を雁股まで、棒鼻をさして、奈良井川の枝流の青白いつゝみを參りました。氷のやうな月が皎々と冴えながら、山氣が霧に凝つて包みます。巖石、ぐわら〳〵の細い谿川が、寒さに水涸れして、さら〳〵さら〳〵……あゝ、丁ど、あの音、洗面所のあの音でございます。」

「一寸、あの水口を留めて來ないか、身體の筋々へ沁渡るやうだ。」

「御同然でございまして……え丶、しかし、何うも。」

「一人ぢや不可いかね。」

「貴方様は？」―、

「いや、何、何うしたんだい、それから。」

「岩と岩に、土橋が架りまして、向うに槐の大きいのが枯れて立ちます。それが危かしく、水で揺れるやうに月影に見えました時、ジ、イと私の持ちました提灯の蠟燭が煮えました。ぼんやり灯を引きます、（暗くなると、巴が一つに成つて人魂の黒いのが歩行くやうね。）お孃様の言葉に――私はツとして覗きますと、不注意にも、何にも、お綺麗さに、そはつきましたが、と、もうかげが乏しく成つて、かへの蠟燭が入れてございません――おつき申して居ります。月夜だし、足許に差支へはございませんやうなものゝ、當館の紋の提灯は、一寸土地では幅が利きます。あなたのおためにと思ひまして、道はまだ半町足らず、つい一走りで、駈戻りました。此が間違でございました。」

聲も言も、しばらく途絶えた。

「裏土塀から臺所口へ、……まだ入りませんさきに、ドーンと天狗星の落ちたやうな音がしました。ドーンと谺を返しました。鐵砲でございます。」

「……」

「吃驚して土手へ出ますと、川べりに、薄い銀のやうでございましたお姿が見えません。提灯も何も押放出して、自分でわッと言つて駈けつけますと、居處が少しずれて、バッタリと土手腹の雪を枕に帶腰が碎川の石に倒れておいででした。（寒いわ。）と現のやうに（あゝ、冷い。）とおつしやると、その唇から絲のやうに三條に分れた血が垂れました。

――何とも、かとも、おいたはしい事に――裾をつゝまうといたします。亂れ褄の友染が、色をそのまゝに岩に凍りついて霜の秋草に觸るやうだつたのでございます。――人も立會ひ、抱起し申す縮緬が、氷でバリ／＼と音がしまして古襖から錦繪を剝がすやうで、此の方が、お身體を裂く思がしました。胸に溜つた血は暖く流れましたのに――

撃ちましたのは石松で、……親仁が、生計の苦しさから、今夜こそは、何うでも獲ものをと、いゝ、とぎ餅で山の神を祈つて出ました。玉味噌を塗つて、串にさして燒いて持ちます。其の握飯には魔が寄ると申します。かり／＼橋と言ふ、其の土橋にかゝりますと、お孃樣の方で人が來るのを、よけようと、水が少いから、つい川の岩に片足おかけなすつた、桔梗ケ池に怪しい奥樣が、水の上を横に傳ふと見て、ハッと狙打に狙をつけた俺は魔を退治たのだ。村方のためにと言つて、いまもつて狂つて居ります。――旦那、旦那、旦那、提灯が、提灯が、あれで、あ、あの、湯どのゝ橋から、……あ、あ、あゝ、旦那、向うから、私が來ます、私とおなじ男が參ります。や、並んで、お孃様が。」

境も齒の根をくひしめて、

「確乎しろ、可恐しくはない、可恐しくはない。……怨まれるわけはない。」

電燈の球が巴に成つて、黒くふはりと浮く、と、炬燵の上に提灯がぼうと掛つた。

「似合ひますか。」

座敷は一面の水に見えて、雪の氣はひが、白い桔梗の汀に咲いたやうに疊に亂れ敷いた。

# 二三羽——十二三羽

引越しをする毎に、「雀は何うしたらう。」もう八十幾つで、耳が遠かつた。——その耳を熱と澄ますやうにして、目をうつとりと空を視めて、火桶にちよこんと小さく居て、「雀は何うしたらうの。」引越しをする毎に、祖母の然う呟いたことを覺えて居る——「祖母さん、一所に越して來ますよ。」當てずッぽに氣安めを言ふと、「おゝ、然うかの。」と目皺を深く、ほく／＼と頷いた。

其のなくなつた祖母は、いつも佛の御飯の殘りだの、洗ひながしのお飯粒を、小窓に載せて、雀を可愛がつて居たのである。

私たちの一向に氣のない事は——はれて雀のものがたり——そらで嵐雪の句は知つて居ても、今朝も囀つた、と心に留めるほどではなかつた。が、少からず愛惜の念を生じたのは、おなじ麹町だが、土手三番町に住つた頃であつた。春も深く、やがて梅雨も近かつた。……庭の柿の老樹が一株。遣放しに手入れをしないから、根まはり雜草の生えた飛石の上を、ちよことよりは、ふよ／＼と雀が一羽、羽を擴げながら歩行いて居た。家内がつか／＼と跣足で下りた。いけずな女で、確に小雀と認めたらしい。チチチ、チチ、チヽツ、すぐに掌の中に入つた。——引摑みなさんな、そつと／＼。此の[illegible]、かなりせたと、傳統的にも此間[illegible]にも、それ鳥籠をと、内にはないから買ひに出る處だけれど、對手が、のりを舐める代もので、お安く扱はれつけて居るのだから、臺所の目笊で其の南の縁へ先づ伏せた——處で、生捉つて籠に入れると、一時と經たないうちに、すぐに薩摩芋を突ついたり、柿を吸つたりする、目白鳥のやうに早く人馴れをするのではない。雀の兒は容易く餌につかない、と、祖母にも聞いて知つて居たから、此のまだ草にふらついて、孵[illegible]もしない、ひよわなものを、飢ゑさしては成らない——屹と親雀が來て餌を飼はう。それには、縁では可恐がるだらう。……で、もとの飛石の上へ伏せ直した。

母鳥は直ぐに來て飛びついた。もう先刻から庭樹の間を、けたゝましく鳴きながら、彼方へ飛び、此方へ飛び、騷いでゐたのであるから。

障子を開けたまゝで覗いて居るのに、仔の可愛さには、邪險な人間に對する恐怖も忘れて、目笊の周圍を二三尺、はら／＼くる／＼と廻つて飛ぶ。ツ、と笊の目へ嘴を入れたり、颯と引いて横に飛んだり、飛びかゝつたり、舞立つたり。其のたびに、笊の中の仔雀の[illegible]つたらない。あの[illegible]縋つて、引切れさうに胸毛を震はす、[illegible]を滿にして抱きつからとするのは、おつかさんが、嘴を笊の目に、その……ツ、と入れては、ツイと引く時である。

見ると、小さな蟲を、親は嘴に銜へて居るのである。笊の中には、乳離れをせぬ嬰兒だ。火のつくやうに泣立てるのは道理である。處を、笊の目を潜らして、口から口へ哺めるのは、——人間の方で[illegible]たつたのだから——いとも容易い。

だのに、餌を見せながら鳴き叫ばせつゝ身を退いて飛廻るのは、あまり利口でない人間にも的確に解せられた。「あかちやんや、あかちややんや、ちまくをあげませう、其處を出ておいで。」と言ふのである。他の手に封じられた、仔

は何うして、自分で穽が抜けられよう？ 親は何うして、自分で穽を開けられよう？ 其の思は何うだらう。

私たちは、しみ／＼、いとしく可愛く成つたのである。

石も、折箱の蓋も撥ばして、穽を開けた。

「御免よ。」「御免なさいよ。」と、雀の方より、此方が顏を見合はせて、悄氣げつゝ座敷へ引込んだ。

少々極が惡くつて、しばらく、背戶へ顏を出さなかつた。

庭下駄を揃へてあるほどの所帶ではない。玄關の下駄を引抓んで、晩方背戶へ出て、柿の梢の一つ星を見ながら「あの雀は何うしたらう。」ありたけの飛石――と言つても五つばかり――を漫に渡ると、濕けた苔地で、すぐ上が、忍や苔、龍の髯の石垣の崖に成る、片隅に山吹があつて、こんもりした躑躅が並んで植つて居て、垣どなりの灯が、ちら／＼と透くほどに二三輪咲殘つた……その茂つた葉の、蔭も深くはない低い枝に、雀が一羽、たよりなげに宿つて居た。正に前刻の仔に違ひない。……樣子が、土から僅か二尺ばかり。これより上には立てないので、こゝまで連れて來た女親が、わりなら預けて行つたものらしい……敢て預けて行つたと言ひたい。惡戯を詫びた私たちの心を汲んだ親雀の氣の優しさよ。……その親たちの塒は何處？……この嬰兒ちやんは寂しさうだ。

土手の松へは夜鷹が來る、築土の森では木菟が鳴く。……折から宵月の頃であつた。親雀は、可恐しいものゝ目に觸れないやうに、成るたけ、葉の暗い中に隱したに違ひない。もとより藁屑も綿片もあるのではないが、薄月が映すともなしに、ぼつと、その仔雀の身に添つて、霞のやうな氣が籠つて、包んで圍く明かつたのは、親の情の朧氣ならず、輪光を顯はした影であらう。「一寸。」「何さ。」手招ぎをして、「來て見なよ。」家内を呼出して、両方から、そつと、顏を差寄せると、ぢつとしたのが、微に黄色な嘴を傾けた。その柔な胸毛の色は、さし覗いたものゝ襟よりも白かつた。

夜ふかしは何、家業のやうだから、その夜はやがて明くるまで、野良猫に注意した。彼奴が後足で立てば屆く、低い枝に、預つたからである。

朝寐はしたし、ものに紛れた。午の庭に、隈なく五月の日の光を浴びて、黄金の如く、銀の如く、飛石の上から、柿の幹、躑躅、山吹の上下を、二羽縱横に飛んで舞つて居る。ひらひら、ちら／＼と羽が輝いて、三寸、五寸、一尺、二尺、草樹の影の伸びるとともに、親雀につれて飛び習ふ、仔の翼は、次第に、次第に、上へ、上へ、自由に輕く成つて、卯の花垣の丈を切るのが、四五度馴れると見るうちに、軒をなぞへに、上町の樹の茂りの中へ飛んで見えなく成つた。

眞綿を黄に染めたやうな、あの翼が、恁う速に飛ぶのに馴れるか。且つ感じつゝ、私たちは飽かずに視めた。

あとで、臺所からかけて、女中部屋の北窓の小窓の小縁に、行つたり、來たり、出入りするのは、五六羽、八九羽、どれが、その親と仔の二羽だかは紛れて知れない。

――二三羽、五六羽、十羽、十二三羽。こゝで雀たちの數を言つた次手に、それ／＼の道の、學者方までもない、一寸わけ知りの御人に伺ひたい事がある。

別の儀でない。雀の一家族は、おなじ場所では餘り澤山には殖えないものなのであらうか知ら？ 御存じの通り、稻塚、稻田、粟黍の實る時は、平家の大軍を走らした水鳥ほどの羽音を立てゝ、畷行き、畔行くものを驚かす、夥多

しい群團を爲す。鳴子も引板も、半ば──此がための備だと思ふ。むかしのもの語にも、年月の經る間には、おなじ背戸に、孫も玄孫も群る筈だし、第一椋鳥と塒を賭けて戰ふ時の、雀の軍勢を思ひたい。よしそれは別として、長年の間には、もう些と家族が殖えようと思ふのに、十年一日と言ふが、實際、──その土手三番町を、やがて、いまの家へ越して來てから十四五年になる。──あの時、雀の親子の情に、いとしさを知つて以來、申出るほどの、さしたる御馳走でもないけれど、お飯粒の少々は毎日缺かさず撒いて置く。たとへば旅行をする時でも、……「火の用心」と、「雀君を頼むよ」……だけは、留守へ言つて置くくらゐだが、さて、何年にも、一寸來て二羽三羽、五六羽、總勢すぐつて十二三羽より數が殖えない。長者でもない癖に、俵で扶持をしないからだと、言はれゝば其までだけれど、何、私だつて、もう十羽殖えたぐらゐは、それだけ御馳走を増すつもりで居るのに。

何も、雀に託けて身代の伸びない愚痴を言ふのではない。又……別に雀の數の多く成る事ばかりを望むのではないのであるが、春に、秋に、現に目に見えて五六羽づゝは親の連れて來る子の殖えるのが分つて居るから、いつも同じほどの數なのは、何處へ行つて、何うするのだらうと思ふからである。

が、何うも樣子が、仔雀が一羽だちの出來るのを待つて、その小兒だけを窠に殘して、親雀は塒をかへるらしく思はれる。

あの、仔雀が、チイ〳〵と、ありツたけ嘴を赤く開けて、クリスマスに貰つたマントのやうに小羽を動かし、胸毛をふよ〳〵と搖がせて、斯う仰向いて強請ると、あいよ、と言つた顏色で、チチツ、チチツと幾度もお飯粒を嘴から含めて遣る。……食べても強請る、ふくめつゝ、後ねだりをするのを機掛に、一粒銜へて、お母さんは塀の上──(椿の枝下で茲にお飯が置いてある)──其處から、裏露地を切つて、向うの瓦屋根へフッと飛ぶ。とあとから仔雀がふはりと縋る。これで、羽を馴らすらしい。また一組は、おなじく餌を含んで、親雀が、狹い庭を、手水鉢の高さぐらゐに舞上ると、その胸のあたりへ附着くやうに仔雀が飛上る。尾を地へ着けないで、舞ひつゝ、飛びつゝ、庭中を翔廻りなどもする、矢張羽を馴らすらしい。此の舞踏が一齊に三組も四組もはじまる事がある。卯の花を搔亂し、萩の花を散らして狂ふ。……かはいいのに目がないから、猫も一匹だが、此の邪魔だ。もう些と、綺麗な窓掛、絨氈を敷いても遣りたいが、庭が狹いから、猫とともに眠りこぼれる風情の花は澤山ない。却つて猫につい て來るか、嘴から落すか、植ゑない草の種が一本咲いたり、薄が穗を絡める。

處で、何のなかでも、雛は甘いもの、仔はずるく甘ッたれるもので。……あの胸毛の白いのが、見て居ると、そのうちに立派に自分で餌が拾へるやうになる。澄ました顏で、コツンなどと高慢に食べて居る。いたづらもの奴、……二羽、親雀の目を拔いて飛んで來て、チュッチュッチュッとつゝき合の喧嘩さへ遣る。生意氣にも係らず、親雀がスーッと來て叱るやうな顏をすると、喧嘩の嘴も、生意氣な羽も、忽ちぐにや〳〵に成つて、チイチイ、赤坊聲で甘つたれて、餌を頂戴と、口を開いて胸毛をふは〳〵として待構へる。チチツ、チチツ、一人でお食べなと言つても肯かない。頰邊を横に振つても肯かない。で、チイ〳〵チイ……おなかが空いたの。……おゝ、よち〳〵、と言つた工合に、此の親馬鹿が、すぐにのろく成つて、お飯粒の白い處を──贅澤な奴等で、内のは挽割麥を交ぜるのだが餘程腹がすかないと麥の方へは嘴をつ

けぬ。此奴等、大地震の時は弱つたぞ――啄んで、嘴で、仔の口へ、押込み揉込むやうにするのが、凡そ堪らないと言つた形で、頬摺りをするやうに見える。

怪しからず、魅に苦労を掛ける。……その癖、他愛のないもので、陽氣がよくて、お腹がくちいと、うと〳〵と成つて居睡をする。……さあ〳〵一きり露臺へ出ようか、で、縁の上から、揃つてもの干へ出たとお思ひなさい。日のほか〳〵と一面に當る中に、雀は嘆き、影は躍る。

すてきに物干が賑だから、密と寄つて、間の本箱の横、二階裏の肱掛窓から、まぶしい日をぱちくりと遣つて覗くと、柱からも、横木からも、頭の上の小廂からも、暖な影を湧かし、翼を光らして、一齊にパッと逃げた。――飛ぶのに早い、裏邸の大榎の樹までさしわたし五十間ばかりを瞬く間もない。――(此の邊枇杷の樹が、馴染の一家族の塒なので、前通りの五本ばかりの櫻の樹(有田家)にも一群巣を食つて居るのであるが、その組は私の内へは來ないらしい、持場が違ふと見える)――時に、女中がいけぞんざいに、取込む時引外したまゝの物干棹が、筋違ひに落ちて居た。端子一寸すぐ鼻の前に、一羽可愛いのが眞正面に、ほかんと留まつて殘つて居る。――どうかして、座敷へ飛込んで戸惑ひするのを掴へると、掌で暴れるから、此のくらゐ、しみ〴〵と雀の顏を見た事はない。

ふつくりとも、ほつかりとも、細い毛へ一つづつ日光を吸込んで、おゝ、お前さんは餡で出來て居るのではないかい、と言ひたいほど、とろんとして、目を眠つて居る。道理こそ、人の目と、其の嘴と打着りさうなのに驚きもしない、と見るうちに、踏へて留つた小さな趾がひよいと片脚、幾度も下へ離れて辷りかゝると、その時はビクリと居直る。……煩つて動けないか、怪我をして居ないかな。……

以前、あしかけ四年ばかり、相州逗子に住つた時、三太郎と名づけて目白鳥が居た。

櫻山に生れたのを、をとりで捕つた人に貰つたのであつた。が、何處の巣に居て覺えたらう、鵯、駒鳥、あの邊にはよく居る頬白、何でも囀る……ほうほけきよ、ほけきよ、ほけきよ、明かに鶯の音を鳴いた。目白鳥としては駄鳥か何うかは知らないが、私は大の、ご秘藏――長屋の軒前に、水を飲ませて、籠で飼つたのだから、笑つて故と(ご)の字をつけておく――またよく馴れて、殿樣が鷹を据ゑた格で、掌に置いて、それと見せると、パッと飛んで蟲を退治た。また、冬の日のわびしさに、紅梅の花を炬燵へ乗せて、籠を開けると、花を被つて、蜜を吸ひつゝ嘴を眞黄色にして、掛蒲團の上を押廻つた。三味線を彈いて聞かせると、音に競つて籠で高囀りする。寂しい日に客が來て話をし出すと障子の外で負けまじと鳴きしきる。可愛いもので。……可愛いにつけて、斷じて籠には置くまい。秋雨のしよぼ〳〵と降るさみしい日、無事なやうにと願ひ申して、若宮寺の觀音の山へ放した時は、煩つて居た家内と二人、悄然として、ツイーツイーと梢を低く坂下りに樹を傳つて慕ひ寄る聲を聞いて、ほろりとして、一人は袖を濡らして歸つた。が――其の目白鳥の事で。……(寒い風だよ、ちよぼ一風は、しはりごはりと吹いて來る)と田越村一番の若樂が、泣聲を立てる、大根の煮える、富士おろし、西北風の烈しい夕暮に、いそがしいのと、寒いのに、向うみずに、がたりと、門の戸をしめた勢で、軒に釣つた鳥籠をがたり、バタンと撥返した。アッと思ふと、中の目白鳥は、羽ばたきもせず、横木を轉げて、落葉の挾つたやうに落ちて縮んで居る。「しまつた、……三太郎が

目をまはした。「まあ、大變ね。」と襷がけのまゝ庖丁を投げ出して、目白鳥を掌に取つて据ゑた嬶は目に一杯涙を溜めて、「何うしませう、其、其の時だ。試に手水鉢の水を柄杓で切つて管にして、露にして、目白鳥の嘴を開けて含まして、襟をあけて、膚につけて暖めて、しばらくすると、ひく／＼と動き出した。あゝ助りました。御利益と、岩殿の方へ籠を開いて、中へ入れると、あはれや、横木へつかまり得ない。おつこちるのが可恐いのか、隅の、隅の、狭い處で小く成つた。あくる日一日は、些と、ご[illegible]と言つた形で、擂餌に嘴のあとを、ほんの筋ほどつけたばかり。但し完全に蘇生つた。

此の經驗がある。水でも飲まして遣りたいと、障子を開けると、其の音に、怪我處か、わんぱくに、しかも二つばかり廻つて飛んだ。仔雀は、うとり／＼と居睡をして居たのであつた。……憎くない。

尤もなか／＼の悪戯もので、逗子の三太郎……其の目白鳥が――お茶の子だから雀の口眞似をした所爲でもあるまいが日向の縁に出して人の居ない時は、籠のまはりが雀どもの足跡だらけ。秋晴の或日、裏庭の茅葺小屋の風呂の廂へ、向うへ櫻山を見せて掛けて置くと、午少し前の、いゝ天氣で、閑な折から、雀が一羽、……丁ど目白鳥の上の廂合の樋竹の中へすぽりと入つて、ちよつと黒い頭だけ出して、上から籠を覗込む。嘴に小さな芋蟲を一つ銜へ、あつち向いて、こつち向いて、ひよい／＼と見せびらかすと、籠の中のは、戀人から來た玉章ほどに欲しがつて駈上り飛上つて取らうとすると、ひよいと面を横にして、また、ちよい／＼と見せびらかす。いや、いけずなお轉婆で。……處がはずみに掛つた拍子に、その芋蟲をポタリと籠の目へ、落したから可笑しい。目白鳥は澄まして、ペロリと退治た。吃驚仰天した顏をしたがぽんと樋の口を突出されたやうに飛んだもの。

瓢簞に宿る山雀、と言ふ謠がある。雀は樋の中がすきらしい。五六羽、また、七八羽、横にずらりと並んで、顏を出して居るのが常である。

或殿が領分巡回の途中、菊の咲いた百姓家に床几を据ゑると、背戸畑の梅の枝に、大な瓢簞が釣してある。梅見と言ふ時節でない。

「これよ、……あの、瓢簞は何に致すのぢやな。」

その農家の親仁が、

「へい／＼、山雀の宿にござります。」

「あゝ、風情なものぢやの。」

能の狂言の小舞の謠に、

　いたいけしたるものあり。張子の顔や、練
　稚兒。しゆくしや結びに、さゝ結び、やま
　しな結びに風車。瓢簞に宿る山雀、胡桃に
　ふける友鳥……

「いまはじめて相分つた。――些少ぢやが餌の料を取らせよう。」

小春の麗な話がある。

御前のお目にとまつた、謠のまゝの山雀は、瓢簞を宿とする。此方人等の雀は、棟割長屋で、樋竹の相借家だ。

腹が空くと、電信の針がねに一座ずらりと出て、ぽち／＼ぽちと中空高く順に並ぶ。中でも音頭取が、電柱の頂邊に一羽留つて、チイと鳴く。これを合圖に、一齊にチイと鳴出す。――塀と枇杷の樹の間に當つて。で御飯をくれろと、催促をするのである。

私が即ち取次いで、

「催促てるよ、／＼。」

「せはしないのね。……煩いよ。」

など言ひながら、茶碗に裝つて、婦たちは露地へ廻る。此が此のうへ後れると、勇悍なのが一羽押寄せる。馬に乘つた勢で、小庭を縁側へ飛上つて、ちよん、ちよん、ちよん／＼と、雀あ

るきに扉を拔けて臺所へ入つて、お竈の前を廻るかと思ふと、上の引窓へパッと飛ぶ。

「些と自分でもお働き、蟲を取るんだよ。」

何も、背分けるのでもあるまいが、言の下に、萩の小枝を、花の中へすら〳〵、葉の上はさら、さら……あの撓々とした細い枝へ、塀の上、椿の樹からトンと下りると、下りたなりにすつと辷つて、一寸末を傾して乘下る。すぐに、くるりと腹を見せて、葉裏を潛つてひよいと攀ぢると、また一羽が、おなじやうに塀の上からトンと下りる。下りると、すつと枝に撓つて、ぶら下るかと思ふと、飜然と傳ふ。又一羽が待兼ねてトンと下りる。一株の萩を、五六羽で、ゆさゆさ搖つて、盛の時は花もこぼさず、嘴で銜へたり、尾で跳ねたり、横顏で覗いたり、倒くして、裏おもて、蟲を漁りつゝ、滑稽けてはずんで、ストンと落ちるかとすると、翼をひら〳〵と宙へ躍つて、小枝の尖へひよいと乘る。

水上さんが此を聞いて、莞爾して勸めた。

「鞦韆を拵へてお遣んなさい。」

家の庭が廣いから、直ぐにとゝへ氣がついた。私たちは思ひも寄らなかつた。絲で杉箸を結へて、其の萩の枝に釣つた。……此の庭を乘氣で借るると、雀の興行をするやうだから見合はせる。が、鞦韆に乘つて、翩飜ぶつくりこ、なぞは何でもない。時とすると、塀の上に、いま睦じく二羽啄んで居たと思ふ、その一羽が、忽然として姿を隱す。飛びもしないのに、おやおやと人間の目にも隱れるのを、……恁う搜すと、いま居た塀の笠木の、すぐ裏へ、頭を揉込むやうにして縱に附着いて居るのである。脚がかりもないのに巧なもので。——然うすると、見失つた友の一羽が、怪訝な樣子で、チヽと鳴き〳〵、其處らを覗くが、その笠木の一寸した出張りの咽に、頭が附着いて居るのだから、どつちを覗いても、上からでは目に附かない。チチッ、チチッと少時搜して、パッと枇杷の樹へ飛んで歸ると、そのあとで、密と頭を半分出してきよろ〳〵と見ながら、嬉しさうに、羽を搖つて後から颯と飛んで行く。……惟ふに、人の子のするかくれんぼである。

さて、恁うたわいもない事を言つて居るうちに——前刻言つた——仔どもが育つて、ひとりだち、ひとり遊びが出來るやうに成ると、胸毛の白いのばかりを殘して、親鳥は何處へ飛ぶのか居なく成る。數は增しもせず、減りもせず、同じく十五六羽どまりで、そのうちには、芽が葉になり、葉が花に、花が實に成り、雀の咽が黑く成る。年々二三度おんなじなのである。

……妙な事は、いま言つた、萩また椿、朝顏の花、露草などは、枝にも蔓にも隱れて遊んで居るらしい……と言ふよりは、親雀から教へられて居るらしい。——が、見馴れぬものが少しでもあると、可恐がつて近づかぬ。一日でも二日でも遠くの方へ退いて居る。尤も、時には此方から、故とおいでの儀を御免蒙る事がある。物干へ蒲團を干す時である。

お孃さん、お坊ちやんたち、一家揃つて、いい心持に成つて、ふつくりと、蒲團に團欒を試みるのだから堪らない。ほと〳〵と、あとが、ふんだらけ。此には弱る。其處で工夫をして、他所から頂戴して貯へて居る鈎の皮を釣つて置く。と枇杷の宿に居すくまつて、裏屋根へ來るのも、おつかなびつくり、一寸ぼつ〳〵跳つ度だから面白い。

先、一夏緣日で、月見草を買つて來て、萩の傍へ植えた事がある。夕月に、あの花が露を香はせてぱツと咲くと、いつも此の黃昏には、一時留り鮮に騷ぐのに、ひそまり返つて一羽だつて飛んで來ない。はじめは怪しんだが、二日め三日めには心着いた。意地なし、臆病。烏瓜、夕顏などは分けても知己だらうのに、はじめ

て咲いた月見草の黄色な花が可恐いらしい……可哀相だから植替へようかと、言ふうちに、四日めの夕暮頃から、漸と出て來た。何、一度味をしめると食ついて露も吸ひかねぬ。

まだある。土手三番町の事を言つた時、卯の花垣をなどゝ、少々調子に乘つたやうだけれど、まつたく其の庭に咲いて居た。土地では珍しいから、引越す時一枝折つて來てさし芽にしたのが、次第に丈たかく生立ちはしたが、葉ばかり茂つて、蕾を持たない。丁ど十年目に、一昨年の卯月の末にはじめて咲いた、それも塀を高く越した日當りのいゝ一枝だけ眞白に咲くと、其の朝から雀がバッタリ。意氣地なし。また丁ど其の卯の花の枝の下に御飯が乘つて居る。前年の月見草で心得て、此の時は澄まして居た。やがて一羽づゝ密と來た。忽ち卯の花に遊ぶこと萩に戲るゝが如しである。花の白いのにさへ怯えるのであるから、雪の降つた朝の臆病思ふべしで、枇杷塚と言ひたい、むかうの眞白の木の丘に埋れて、聲さへ立てないで可哀である。

椿の葉を拂つても、飛石の上を搔分けても、物干に雪の溶けかゝつた處へ餌を見せても影を見せない。炎天、日盛の電車道には、焦げるやうな砂を浴びて、蟷螂の斧と言つた強いのが普通だのに、此はどうしたものであらう。……はじめ、こゝへ引越したてに、一二年居た雀は、雪なんぞは驚かなかつた。山を兎が飛ぶやうに、雪を蓑にして、吹雪を散らして翔けたものを――

こゝで思ふ。其の兒、その孫、二代三代に到つて、次第おくり、追續ぎに、おなじ血筋ながら、いつか、黄色な花、白い花、雪などに對する、親雀の申しふくめが消えるのであらうと思ふ。

泰西の諸國にて、その公園に群る雀は、パンに馴れて、人の掌にも帽子にも遊ぶと聞く。

何故に、わが背戸の雀は、見馴れない花の色をさへ恐るゝのであらう。實に花なればこそ、些とでも變つた人間の顏には、渠等は大なる用心をしなければならない。不意の礫の戸に當る事幾度ぞ。思ひも寄らぬ蜜柑の皮、梨の核の、雨落、鉢前に飛ぶのは數々である。

牛乳屋が露地へ入れば驚き、酒屋の小僧が「今日は」を叫べば逃げ、大工が來たと見ればすくみ、屋根屋が來ればひそみ、疊屋が來ても寄りつかない。

いつかは、何かの新聞で、東海道の何某は雀うちの老手である。並木づたひに御油から赤坂まで行く間に、雀の獲もの約一千を下らないと言ふのを見て戰慄した。空氣銃を取つて、日曜の朝、こゝの露地口に立つ、狩獵服の若い紳士たちは、失禮ながら、犬ころしに見える。

去年の暮にも、隣家の少年が空氣銃を求め得て高く捧げて歩行いた。隣家の少年では防ぎ難い。おつかひものは、たゞ煎餅の袋だけれども、雀のために、うちの小母さんが折入つて頼んだ。

親たちが笑つて、

「お宅の雀を狙へば、銃を沒收すると言ふ約定ずみです。」

嘗て、北越、倶利伽羅を汽車で通つた時、峠の驛の屋根に、車のとゞろくにも驚かず、雀の日光に浴しつゝ、屋根を自在に、樋の宿に出入りするのを見て、谷に咲殘つた撫子にも、火牛の修羅の巷を忘れた。――古戰場を忘れたのが可いのではない、忘れさせたのが雀なのである。

モウパッサンが普佛戰爭を題材にした一篇の讀みだしは、「巴里は包圍されて饑ゑつゝ悶えて居る。屋根の上に雀も少くなり、下水の埃も少くなつた。」と言ふのではなかつたか。

雪の時は――見馴れぬ花の、それとは違つて、

天地を包む雪であるから、もし此に恐れたと成ると、雀のためには、大地震以上の天變である。東京のは早く消えるから可いもの、五日十日續るのには何うするだらう。半歳雪に埋もるゝ國もある。

或時も、また雪のために一日形を見せないから、……眞個に事だが案じて居ると、次の朝の事である。ツイ――と寂しさうに鳴いて、目白鳥が唯一羽、雪を被いで、紅に咲いた一輪、寒椿の花に來て、ちら／＼と嘴も尾も白くしながら枝を潜つた。

垣根から見て居ると、しばらくすると、雀が一羽、ハツと來て、おなじ枝に、花の上下を、一所に廻つた。續いて三羽五羽、一齊に皆來た。御飯はすぐ樋の下にある。パツパ、チイ／＼囀きほひに雀の群を上げて、躍りながら、飛かゝる、啄むと、今度は目白鳥が中へ交つた。

雀同士は、突合つて、先を爭つて狂つても、その目白鳥にはおとなしく優しかつた。そして目白鳥は、嬉しさうに、不思議さうに、雀の飯を視めて居た。

私は何故か涙ぐんだ。

優しい目白鳥は、花の蜜に惠まれよう。――親のない雀は、うつくしい愛らしい小鳥に、教へられ、導かれて、雪の不安を忘れたのである。

それにつけても、親雀は何處へ行く。――

――去年七月の末であつた。……餘り暑いので、愚に返つて、恁う何うも、おゝ暑いでめげては不可い。小兒の時は、日盛に蜻蛉を釣つたと、炎天に打つかる氣で、そのまゝ日盛を散歩した。

その氣の次手に、……何となく、其處等屋敷町の垣根を探して（ごん／＼ごま）が見たかつたのである。此の名からして小兒で可い。――私は大好きだ。スヾメノエンドウ、スヾメウリ、スヾメノヒエ、雀百合、雀萩、雀紫苑、雀茶の鄙たけた稱に對して、スヾメの名のつく一列の雜草の中に、此のごん／＼ごまを、私はひそかに「スヾメの蠟燭」と稱して、内々贔屓で居る。

分けて、盂蘭盆のその月は、墓詣の田舍道、寺つゞきの草垣に、線香を片手に、此のスヾメの蠟燭、ごん／＼ごまを摘んだ思出の可懷しさがある。

然も其の癖、卑怯にも片陰を拾ひ／＼小さな社の境内だの、心當りの、邸の垣根を覗いたが、前年の生垣も煉瓦にかはつたのが多い。――清水谷の奥まで掃除が屆く。――梅雨の頃は、闇黑に月の影がさしたほどに、彼方此方に目に着いた紫陽花も、此の二三年こつちは最う少い。――荷車のあとには芽ぐんでも、自動車の轍の下には生えまいから、いまは車前草さへ直ぐには見ようたつて間に合はない。

で、何處でも、あの、珊瑚を木乃伊にしたやうな、ごん／＼ごまは見當らなかつた。――ないものねだりで、尚ほ欲しい。歩行くうちに汗を流した。

場所は言ふまい。が、向うに森が見えて、樹の茂つた坂がある。……私が覺えてからも、むかし道中の茶屋旅籠のやうな、中庭を行拔けに、土間へ腰を掛けさせる大黑茶漬の店があつた。

――その坂を下りかゝる片側に、坂なりに落込んだ空溝の廣いのがあつて、道には破朽ちた橋が架つてある。其の空溝を隔てた、葎を其のまゝ斜違ひに下りる藪垣を、むかう裏から這つて、茂つて、またたとへば、瑪瑙で刻んだ、さゝ蟹のやうなスヾメの蠟燭が見つかつた。

つかまへて支へて、乘出しても、溝に隔てられて手が屆かなかつた。

杖の柄で搔寄せようとするが、辷る。――がさ／＼と遣つて居ると、目の下の枝折戸から

――こんな處に出入口があつたかと思ふ――葎戸の扉が開いて、洋々と肥つた、でつぷり漢が仰向いて出た。そびらの洗ひざらし、漆紋の禿げたのを被たが、肥つて大いから、手足も腹もぬつと露出て、ちやん〳〵を被つたやうに見える、逞ましい肥大漢の柄に似合はず、おだやかな、柔和な顔して、

「何か、おとしものでもなされたか、拾つてあげませうかな。」

と言つた。四十ぐらゐの年配である。

私は一寸挨拶をして、わけを言はなければ成らなかつた。

「はゝあ、どん〳〵ごま、……お薬用か、何か禁厭にでもなりますので？」

と兎に角、踏傍だし、探がして居る。裏の壁境には、清淨なのが澤山あるから、御休息かた〴〵。で、ものゝ言ひぶりと人のいゝ顔色が、氣も爾かせなければ、遠慮もさせなかつた。

「丁ど午睡時、徒然で居ります。」

導かるゝまゝ、折戸を入ると、そんなに廣いと言ふではないが、谷間の一軒家と言つた形で、三方が高臺の森、林に包まれた、ゆつくりした荒れた庭で、むかうに座敷の、縁が涼しく、油蝉の聲の中に閑寂に見えた。私は一寸其處へ掛けて、何彼で濟ますつもりだつたが、古畳で若くるしい、せめてのおもてなしと、竹のづんど切の花活を持つて、庭へ出直すと臺所の前あたり、井戸があつて、撥釣瓶の、釣瓦が、虚空へ飛んで猿のやうに撥ねて居た。傍に青芒が一叢生茂り、桔梗の早咲の花が二三輪、たゞ初々しく咲いたのを、茶と一枝、三箇ばかり精一を取添へて、竹筒に插して、のつしりとした腰つきで、井戸から撥釣瓶でざぶりと汲上げ、片手の水差に汲んで、桔梗に灑いで、胸はだかりに提げた處は、腕まで毛だらけだつたが、床へ据ゑて、圓い手で、枝ぶりを一寸整めた形は、侘助として、そして圓い手頸で、きちんと纏つた。掛物も何も見えぬ。が、唯その桔梗の一輪が、紫の星の照らすやうに据つたのである。此の待遇のために、私は、縁を座敷へ進まなければならなかつた。

「粗茶を一つ獻じませう。何事も御覧の通りの侘住居で。……あの、茶道具を、これへな。」

と言ふと、次の間の――崖の草のすぐ覗く――竹簀子の濡縁に、むかうむきに端居して……いま私の入つた時、一度ていねいに、お時儀をしたまゝ、うしろ姿で、ちらりと赤い小さなもの、年紀ごろで視て勿論お手玉ではない、材料か何ぞせつせと縫つて居た、……島田髷に艶々しい、きやしやな、色白なのが立つて手傳つて、――肥大漢と二人して、やがて焜爐を縁側へ。……炭つけを入れて、炭を継いで、土瓶を掛けて、茶盆を並べて、それから、団扇ではた〳〵と焜爐の火口を煽ぎはじめた。

「あれに澤山ございます、あの、咲きました處に。」

「瀧でも落ちさうな崖です――こんな町中に、あらうとは思はれません。御閑靜で實に結構です。薄が湧いたやうに見えますのは。」

「鳥瓜でございます。下闇で暗がりでありますから、日中から、一杯咲きます。――あすこに、いくらでも、ごん〳〵ごまがございますでな。貴方は何とかおつしやいましたな、スヾメの蠟燭。」

これよりして、私は、茶の煮える間と言ふもの、およそ此の篇に記したイの可愛さを愛で話したのである。時々微笑んでは振向いて聞く。娘か、若い妻か。或は妾か。世に美しい女の樣に、一つはうか〳〵讀はれて、氣の毒さんだ事は言ふまでもない。

さて幾度か、茶をかへた。

「これを御續に。」

「勿論かさねまして、頃日に。——では、失禮。」

「あゝ、しばらく。……これは、貴方、おめしものが。」

……心着くと、おめしものも氣恥しい、浴衣だが、うしろの縫めが、しかも、したゝか綻びて居たのである。

「こゝもとは茅屋でも、田舍漢ではありませんぢや。尻端折……飛んでもない。……あゝ、あんた、一寸繕つておあげ申せ。」

「はい。」

すぐに立つ人が、手の針は、まつげにこぼれて、目に見えぬが、絲は優しく、背筋にスッと含まれた。

「あなた……」

「あゝ、これ、紅い絲で縫へるものかな。」

「あれ——おほゝゝ。」

私がのつそりと突立つた裾へ、女の脊筋が斜つたやうに流つて、右に左に、背を向ると、背勝手が惡い、白い指がちらちら亂れる。

「恐縮です、何とも何うも。」

「然う三人とも言ふもの同着いたのでは、第一私のお此の肥滿がや、お縫ひが埋らんわい。衣服をお脫ぎなさつて……さゝ、それが早い。——御遠慮があつては成らぬ——が、お身に合ひさうな着替はなしぢや……これは、一つ、亭主が素裸に相成りませう。それならばお心安い。」

きびらを絹いで、すつぱりと脫ぎ放した。褌の肥大漢で、

「それ、貴方。……お脫ぎなすつて。」

と毛むくじやらの大胡坐を搔く。

呆氣に取られて立すくむと、

「おゝ、これ、あんた、あんたも衣ものを脫ぎなさい。みな裸ぢや。然うすればお客人の遠慮がなう成る。……はゝはゝ、それが何より。さ、脫ぎなさい〳〵。」

串戯にしてもと、私は躊躇して、言も出ぬのに、女はすがに觸な帯を解いた。膝へ手繰ると、袖を兩方へ引溜して、雪を分けるやうに、するりと脫ぐ。……肩は搖らうたよりふつくりと肉を置いて、脊筋をすんなりと、撫肩して、白い胸を乳が覗いた。それでも、脫ぎかけた浴衣を胸ほど膝に半ば挾んだのを、おつ、と遮ふと、あれ、と言ふ間に、亭主がするすると引いて取つた。

「はゝゝは。」

と笑ひながら、既にして、朱鷺色の布一重である。

私も脫いだ。汗は垂々と落ちた。が、憚りながら褌は白い。一輪の精神の紫の影に映えて、女はうるほへる玉のやうであつた。

その手が絲を曳いて、針をあやつつたのである。

縫へると、帯をしめると、私は膝を折るやうにして、前のめりに木戸口へ駈出した。挨拶は濟ましたが、咄嗟のその早さに、でつぷり漢と女は、衣を引掛ける間もなかつたらう……あの裸體のまゝ、井戸の前を、斜すゝきに、白く揺れて人の姿の怪しい蝶に似て、すつと出た。

その光景は、地獄か、極樂か、覺束ない。

「あなた……爺さんに、よろしく。」

と女が莞爾して言つた。

坂を駈上つて、ほつと呼吸を吐いた。が、しばらく茫然として佇んだ。——電車の音はあとさきに聞えながら、方角が分らなかつた。直下の炎天に目さへくらむばかりだつたのである。

時に——目の下の森につゝまれた谷の中から、一セイして、高らかに鶯の音が雲へ、峰に響いた。

……話の中に、稽古の弟子も歸つたと言つた。——あの主人は、簫を吹くのであるか。……然ういへば、鬚と言へば見馴れない風俗だか

ら、見た目をこそ鶯といへれども、肥大漢は・はじめから、野袴に成つてまで、烏帽子のやうなものをチョンと頭にのせて居た。

「奇人だ。」

「いや、……陛下、あの谷には、隱窟があると言ふ。……その種々の意味で。……何しろ十年ばかり前には、暴風雨に崩くづれがあつて、大分、人が死んだ處だから。」――

と其女たちは私に言つた。

突當り、樹蔭のたゞあの寂寥には、みよめき女房の面が赤馬の額に見えたと言ふ、むかし武士の話がある。……霜が枝に吹くやうに、汗――が幻を描いたのかも知れない。が、何故か、私は、……實を言へば、雀の宿にともなはれたやうな思ひがするのである。

かさねてと思ふ、日をかさねて一月にたらず、九月一日のあの大地震であつた。

「雀たちは……雀たちは……」

火を避けて野宿しつゝ、炎の中に飛ぶ炎の、小鳥の形を、眞夜半かけて案じたが、家に歸ると、轉げ落ちたまゝ底に水を殘して、南天の根に、ひゞも入らずに殘つた手水鉢のふちに、一羽、ちよんと傳つて居て、額を見て、チイと鳴いた。

後に、宿と、谷の家を覗きに行つた。近づくと胸は轟いた。が、たゞ燒原であつた。

私は夢かとも思ふ。いや、雀の宿の氣がする。……あの大漢のまる顏に、口許のちよぼんとしたのを思へ。卯の毛で胡粉を刷いたやうな女の膚の、どこか、頤の下あたりに、黑いあざはなかつたか、うつむいた島田髷の影のやうに――

をかしな事は、その時摘んで來たごん〳〵ごまは、いつ何うしたか定かには覺えないのに、秋雨の草に生えて、塀を傳つて居たのである。

「何うだい、雀。」

知らぬ顏して、何にも言はないで、南天燭の葉に日の當る、小庭に、雀はちよん、ちよんと遊んで居る。

# 冬

湯の山の椋鳥おなじ小春かな

川添の茶屋湯屋時雨けり

片時雨紅葉かけたる軒暗し

鷺や尼上を一つ行く千鳥

路傍の石に夕日や枯すゝき

こがらしや噴水に飛ぶ鉋屑

鵺の額かゝる霙の峰の堂

京に入りて市の鯨を見たりけり

松明投げて獸追ひやる枯野かな

猪やてんてれつくてんてれつくと

臥猪かと驚く朴の落葉かな

山茶花に此の熱燗の恥かしき

凩や天狗が築く一夜塔

ピンゾロの丁と起きたり鐘氷る

藏前や師走月夜の炭俵

――鏡花全集卷十五「俳句」より

# 栃の實

朝六つの橋を、その明方に渡つた――此の橋のある處は、いま麻生津と云ふ里である。其から三里ばかりで武生に着いた。みち／＼可懐しい白山にわかれ、日野ヶ峰に迎へられ、やがて、越前の御嶽の山懷に抱かれた事は云ふまでもなからう。――武生は昔の府中である。

其の年は八月中旬、近江、越前の國境に凄じい山嘯の洪水があつて、いつも敦賀――其處から汽車が通じて居た――へ行く順路の、春日野峠を越えて、大良、大日枝、山岨を斷崕の海に沿ふ新道は、崖くづれのために、全く道の塞つた事は、もう金澤を立つ時から分つて居た。

前夜、福井に一泊して、その朝六つ橋、麻生津を、まだ山かつらに月影を結ぶ頃、霧の中を俥で過ぎて、やがて武生に着いたのであつた。

――誰も知らう、此處は水の美しい、女のきれいな處である。柳屋の柳の陰に、門走る谿河の流に、すゞしい姿は、まだ朝霧を其のまゝの萩にも女郎花にも較べらるゝ。が、それどころではない。前途のきづかはしさは、俥も此宿で留まつて、あとの山路は、その、いづれに向つても、もはや通じないと言ふのである。

茶店の縁に腰を掛けて、澁茶を飲みながら評議をした。……春日野の新道一條、勿論不可い。たゞ道は最も奧で、山は就中深いが、栃木峠から中の河内は越せさうである。それには一週間ばかり以來、郵便物が通ずると言ふのを聞くさへ、雁の初だよりで、古の名將、また英雄が、淚に、血に、屍を埋め、名を殘した、あの、山また山、また山の山路を、重る峠を、一羽でとぶか、と袖をしめ、襟を合はせた。山靈に對して、小さな身體は、既に茶店の屋根を覗く、御嶽の巓に呑まれて居たのであつた。

「一氣をつけておいでなせえましよ。」……腹は荒れて、洪水に松の並木も倒れた。たゞ畔のやうな街道端まで、福井の車夫は、笠を手にして見送りつゝ、われさへ指す方を知らぬ狀ながら、式ばかり日にやけた黒い手を擧げて、高く雲の前途を指した。

秋のはじめの、空は晴れつゝ、熱い雲のみ往來して、田に立つ人の影もない。稻も、畠も、夥多しい洪水のあとである。

道を切つて、街道を横に瀨をつくる、流に迷つて、根こそぎ倒れた並木の松を、丸木橋とよりは筏に踏んで、心細さに見返ると、車夫はなほ手廂して立つて居た。

翼をいためた燕の、ひとり地づれに辿るのを、あはれがつて、去りあへず見送つて居たのであらう。

たゞさへ行惱むのに、秋暑しと云ふ言葉は、殘暑の酷しさより身にこたへる。また汗の目に、野山の赤いまで暑かつた。洪水には荒れても、稻葉の色、青菜の影ばかりはあらうと思ふのに、あの勝山とは、まるで方角が違ふものを、右も左も、泥の乾いた煙草畑で、喘ぐ息さへ舌に辛い。

祖母が縫つてくれた鞄代用の更紗の袋を、斜つかひに掛けたばかり、身は輕いが、そのかはり洋傘の日影も持たぬ。

紅葉先生は、その洋傘が好きでなかつた。遮らなければ成らない日射は、扇子を翳されたものである。從つて、一門の誰かれが、大概洋傘

を意に介しない。連れて不忍の蓮見から、入谷の朝顔なども、ふと前に、一杯のんだ片頰の日影に、揃つて扇子をかざしたのである。せずともい、眞似をして。……勿論、蚊を、いや、蚊帳を吊して飲む程のものが、歩行くに日よけをするわけはない。蚊帳の方は、まだしかし人ざきも憚るが、洋傘の方は大威張で持たずに濟んだ。

神樂坂邊をのすのには、成程〻なしで以て事は濟むのだけれども、此の道中には困却した。剰へ……其の年は何處も陽氣が惡かつたので、私は腹を痛めて居た。襯衣らしい眞似もしない悲しさには、不い腹とも譬へかねて、朝立つた福井の旅籠で、むれ際の飯を少しばかり。しく〳〵下腹の痛む處へ、洪水のあとの乾旱は眞にこたへた。鳥打帽の鐵びた上へ手拭の頰かむりぐらゐでは追着かない、早や十月の聲を聞いて居たから、護身用の扇子も持たぬ。路傍に藪はあつても、竹を挿き、枝を折るほどの勢もないから、玉江の蘆は名のみ聞く、……湯のやうな淺沼の薦を折取つて、くる〳〵とまはしても、何、秋風が吹くものか。

が、一刻も早く東京へ――唯その憐憫に、山も見ず、雲も見ず、無二無三に道を急いで、忘れもしない、村の名の虎杖に着いた時は、杖と云ふ字に縋りたい思がした。――近頃は多く板取と書くのを見る。その頃、藁家の軒札には虎杖村と書いてあつた。

ふと、軒に乾した煙草の葉と、蕃椒の間に、山駕籠の煤けたのが一挺掛つた藁家を見て、朽縁へ摚と掛けた。「小父さんもう歩行けない。見なさる通りの書生坊で、相當、お駄賃もあげられないけれど、中の河内まで何とかして駕籠の都合は出來ないでせうか。」「さればの。」耳にかけた輪珠數を外すと、木綿小紋のちやん〳〵子、經肩衣とか云つて、紋の着いた袖なしを――外は暑いがもう秋だ――もつくりと着込んで、裏納戸の端緣に胡坐かいて、横背戸に倒れたまゝ眞紅の花の小さく成つた、鳳仙花の叢を視めながら、煙管を横銜へにして居た親仁が、一膝ずるりと摺つて出て、「一肩遣つても進じようがの、對手を一つ聞かなくては、なう。」「お願ひです、身體もわるし、……實に弱りました。」「待たつせえ、何とかすべい。」お佛壇へ珠數を置くと、えいこらと立つて、土間の足半を突掛けた。五十の上だが、しやんとした足つきで、石磈道を向うへ切つて、樗の花が咲重りつゝ、屋根ぐるみ引傾いた、日陰の小屋へ滑るやうに入つた、が、今度は經肩衣を引脱いで、小脇に絞つて取つて返した。「對手も丁度可かつたで。」一人で駕籠を下すのが、腰もしやんと樂なもので。――相棒の肩も廣い、年紀も少し少いのは、早や支度をして、駕籠の荷棒を、えツしと擔ぎ、片手に――はじめて視た――繪で知つたほど想像のつく大きな蓑蟲を提げて出て來たのである。「あゝ、御苦勞様――松明ですか。」「えい、松明でや。」「途中、山路で日が暮れますか。」「何、歸りの支度でや、夜嵐で提灯は持たねえもんだで。」中の河内までは、往還六里餘と聞く。――駕籠は夜をかけて引返すのである。

留守に念も置かないで、そのまゝ駕籠を舁出した。「おゝ、あんばいが惡いだね、冷えては成んめえ。」樹立の暗く成つた時、一度下して、二人して、二人が夜道の用意をした、どんつくの半纏を駕籠の屋根につけたのを、敷かせて、一枚、一枚、背中に當がつて、情に包んでくれたのである。

見上ぐる山の巖膚から、淸水は雨に滴つて、底知れぬ谷暗く、風は梢に渡りつゝ、水は蜘蛛手に岨を走つて、駕籠は縱に成つて、雲を仰ぐ。

前棒の親仁が、「此の一山の、見さつせえ、殘らず栃の木の大木でや。皆五抱へ、七抱へぢ

や。――森々としたもんでがんせうが。」と後棒が言を添へる。「――いかな日にも、はあ、眞夏の炎天にも、此の森で一度雨の降らぬ事はねえので。」清水の音の道さへ、[illegible]の袖も、森林の陰に黒染して、身はおのづから涼しかつた。

「――加州家の御先祖が、今の武生の城にござらしつた時から、斧入れずでの。何ういふものか、はい、御維新前まで、越前の中で、此處一山は、加賀領でござつたよ――お前樣、なつかしかんべい。」――「いや、俺は其よりでも早く東京へ行きたいよ。」「お若いで、えらい元氣ぢやの。」……はいよ、……ほいよ。」と聲を合はせて、道は[illegible]の小流を渡んだ、

私は駕籠の中に端と縋つた。

草に巨人の足跡の如き、奇形の峰の平地へ出た。續々と樹迫つた、かすかな空は、青朗にして、明靜である。

山氣の中に優しい聲して、「お掛けなさいまし。」背は森を潛れる如く、[illegible]、推黒き峰の茶屋に、木の根のくりぬきの火鉢を控へて、盤二臺にも餘りなむ、大熊の皮を敷いた彼方に、出でゝた、むすび髪の色白な娘、[illegible]は、[illegible]と活ける其の熊の背に、片膝して臂を掛けた、奇しき山姫の風情があつた。

袖も靡く。……山嵐颯として、白い雲は、その黒髪の肩越に、裏座敷の[illegible]の欄干に掛つて、水の落つる如く、千仭の谷へ流れた。

その裏座敷に、二人一組、別に一人、一人は旅商人、二人は官吏らしい旅客が居て憩つた。いづれも、柳ケ瀬から、中の河内越して、武生へ下る途中なのである。

横づけの駕籠を[illegible]いて、親仁が、「お前さま、おだるけりや、お茶を[illegible]つて進ぜますで。」――「いえ、困ますから。」

娘が塗盆に茶をのせて、「あの、栃の餅、あがりますか。」「[illegible]さんたちにも何うぞ。」――はい。――其處に三人の客にも詰はない。皆栃の實の餅の盆を控へて居た。

娘の色の白妙に、折敷の餅は澁ながら、五ツ、茶の花のやうに咲いた。が、私は矢張腹が痛んだ。

勘定の時に、其を言つて斷つた。――「うまくないものゝやうに、皆殘して濟みません。」あゝ、娘は、茶碗を白湯に汲みかへて、熊の膽をくれたのである。

[illegible]は、ずつと見て、而してのんだ。

栃の餅を包んで差寄せた。「堅くなりませうけれど、……あの、もう二度とお通りにはなりませんよ。こんな山奥の、おはなしばかり、お土産に。――此の實を入れて搗きますのです、あの、餅より之を、お土産に。」と、めりんすの帶の合せ目から、ことりと拾つて、白い掌で、此方に渡した。

小さな鷄卵の、輕く角を取つて扁めて、薄漆を掛けたやうな、艶かな堅い實である。すかすと、きめに、うすもみぢの影が映る。

私はいつまでも持つて居る。

手箪笥の抽斗深く、時々思出して手に据ゑると、殼の裡で、優しい音がする。

# 年譜

明治六年十一月四日、金澤市下新町二十三番地に生る。名は鏡太郎。父は清次、政光と云ふ、金屬の彫工なり。母は鈴、江戸下谷の出生、葛野流の鼓の家、中田氏の女にして、能樂師松本金太郎の小妹。金太郎は中田の家を出でゝ、松本の養子となれるなり。

明治九年四月、年四つの時、父母に伴はれ、土地の向山に遊び、はじめて城の天守を望み、殆ど町の全景を覽る。山中の蕎麥屋にて、もり三杯を服し、往復を歩行きて、健脚健啖を、しばしば一つ話にさる。健啖は知らず、其の後五里以上の道を歩行し得たる覺えなし、嘲笑すべき男の足弱なり。

明治十三年四月、町より淺野川を隔てたる、東馬場、養成小學校に入學。これより先、母に草双紙の繪解を、町内のうつくしき娘たちに、口碑、傳說を聞くこと多し。

明治十六年十二月、母、年二十九にして。……

明治十七年六月、父にともなはれて、石川郡松任、成の摩耶夫人に詣づ。隣の流に合歡の花咲き、池に杜若咲なり。なき母を思ひ慕ふ念いよいよ深し。學期より金澤高等小學校に入學。後一年ならずして、北陸英和學校に轉ず、西洋人によつて經營されたるミッションスクールなり。ウィルソン第一讀本よりはじめて、パーレイ萬國史等にいたる。

明治二十年五月、英和學校をひき、專門學校、(後の第四高等學校)入學準備中、町内のわんぱく等、あひともに、やあやあなどゝ武者修業の眞似をなし、逆襲中、大怪我をなす。ために素志を緩して、英數學の某私塾に通ふ。英語の教授を手傳ふ。

明治二十二年四月、友人の下宿にて、はじめて紅葉先生の「色懺悔」を讀む。庭に桃櫻咲き、隣に機の梭の音、其の調子に似て聞えたり。六月富山に旅行し、友人の許にあり。國文英語の補習の座を開きしが、いまだ三月ならずして歸鄕す。あまたの小說を耽讀せり。大抵、貸本。見料は、辰口鑛泉に住ひつゝ、母なきわれをいとをしみし、叔母の小遣と、其の娘の小分の化粧料なり。

明治二十三年十一月二十八日、此の日發程。猶ほ陸路を經て、敦賀より汽車にて上京。こ[illegible]したる紅葉先生の門生たらむとのみ志しゝが、なかなか面接の機なく、徒に一箇年間、巷に迷ひ、下宿を追はれ、半歳に居を移すこと十三四次。盛夏鎌倉にさすらひし事あり、彼處も今は都となりぬ。或時は麻布今井町の寺院より、淺草田原町の裏長屋に移りし事あり。

明治二十四年十月、牛込横寺町四十七番地に、はじめて紅葉先生を訪ぬ。志を述ぶるや、ただちに門下たることを許され、其の翌日より玄關番を承る。十九日午前と覺ゆ。これより衣食煙草ともに、偏に先生の恩恵による。——新婚の令夫人、島田髷にておはせしかば、兩三日、妹ぎみと思ひまゐらせき。

明治二十五年六月、先生の「夏小袖」春陽堂より匿名にて出づ。作者の名を言ひあてたる讀者に懸賞の催しなり。堅く祕して、店員にも、活版所にも、先生の眞蹟を知らざらしめむがために、玄關番全稿を書寫す。指呼するもの十に八九は中らず。其の名あらはるゝや、「やつたな、覺えて居れ。」と、裏庭籬より端書の舞込むに至る。先生リッチモンドを斜にふかして、莞

爾として、「これを知るもの全國三人」と。即ち先生と、和田鷹城と、玄關番なり。内弟子信用を受く。十二月、金澤市大火、實家類燒の厄に逢ふ。歸郷。年内大雪の中を上京す。汽車いまだ敦賀以北を通ぜざりき。

明治二十六年五月、京都日出新聞に「冠彌左衞門」を連載す。うけざる故を以て、新聞當事者より、先生に對し、其の中止を請求して止まず、狀信二十通に餘る。然れども、少年の弟子の出端を折られむをあはれみて、俠氣勵烈、折衝を重ねて、其の(完)を得せしめらる。此のよし後に知る處、偏に先生の大慈なり。翌年いづれより轉賣せしや、加賀、北陸新報に、おなじ插畫とともに掲げて、社は喝采を得たりと聞く。そのいはれを知らず。此の年、「活人形」を探偵文庫に、ならびに「金時計」を少年文學に。此の兩册は、生前の父に見することを得たり。八月、重き脚氣を病み、療養のため歸郷。十月、京都に赴く。同地滯留中なりし、先生に汽車賃の補助をうけて横寺町に歸らむがためなりき。時小春にして、途中大聖寺より大に雪降る。年末この紀行に潤色して、「他人の妻」一篇を作る。年を經て發表せし「怪語」は其の一部なり。餘は散佚せしにや、

明治二十七年一月九日、父を喪ふ。歸郷、生活の計を知らず。たゞ祖母の激勵の故に、祖母と幼弟を殘して上京す。十月、「豫備兵」つゞいて、「義血俠血」讀賣新聞に出づ。ともに歸郷中、翌日の米の計なきに切れる試作。其の新聞に掲げられたるは、先生の大斧鉞のたまものなり。

明治二十八年二月、家計を支ふる必要上、博文館編輯する所の日用百科書の編纂に從ふため、小石川戸崎町大橋乙羽氏の宅に移る。紅葉先生、弟子の行を壯ならしむるため、西洋料理を馳走さる。いまだ酒なし。ホークと、ナイフの持ち方を教へられしも此の時なり。四月、「夜行巡査」を文藝俱樂部に發表。青年文誌上、田岡嶺雲氏の讚をうく。つゞいて「外科室」深夜にして成りて、文藝俱樂部卷頭に盛裝して出づ。六月、年七十を越えたる祖母を見むがために歸郷し、八九月ともに祖母の慈愛に逗留。北國新聞に「黑猫」を草す。十月歸京。また脚氣に惱む。

明治二十九年一月、舊冬より病を推して、趣向したる「海城發電」「琵琶傳」「化銀杏」三篇、一は太陽に、一は國民之友に、一は青年小説に出づ。世評皆喧し、褒貶相半ばす。否、寧ろ罵評の包圍なりし。五月、小石川大塚町に居をトし、祖母を迎ふ。年七十七。東京に住むを喜びて、越前國春日野峠を徒歩して上りたり。祖母の感化による。「龍潭譚」小説六佳選に出づ。めざまし草の批評に鑑み、「九ツ谺」と改めむとせしが、いま同じ題を存す。「一之卷」「二之卷」を、月をついで文藝俱樂部に連載し初む。十月より讀賣新聞に「照葉狂言」。――此の頃笹川臨風、氣輕に大塚の長屋に訪ひ來り、ともに十二社に遊び、酒はのまずに餠をかじる。

明治三十年四月、鷗外、後藤寅之助氏、新著月刊を起したる、其の首卷に「化鳥」を書く。此の頃より酒杯を手にし、人の遊に伴ふ。然れども「笈ずる草紙」は、推して端坐精進の作と言はむ。

明治三十一年二月、「辰巳巷談」を新小説に寄す。新文藝に載せたる「親子そば三人客」は、本郷壹岐殿坂の蕎麥屋に時雨の夜の實景なり。

明治三十二年一月、伊藤すゞと相識る、十二月、「湯島詣」新作にして春陽堂より、單行、出版。

明治三十三年二月、「高野聖」、新小説に出づ。

明治三十四年十一月、「袖屛風」新小説に。

明治三十五年一月、「女仙前記」新小説に出づ。

「祝盃」は、一度に各新聞の新年號に載せたるもの。

二月、名古屋に行く。七月の末より九月上旬まで、逗子櫻山街道の一軒家にあり。胃腸を病めるなり。すゞ臺所を手傳ふ。十月、「起誓文」新小説に出づ。

明治三十六年三月、牛込神樂町に引越す。五月、すゞと同棲。その此を得たるは、竹馬の郷友、吉田賢龍氏の厚誼なり。十月三十日、紅葉先生逝去さる。十一月より、國民新聞に、「風流線」を載せはじむ。これより前、「薬草取」は、換菓篇の一篇にして、同業、皆ともに先生の病床に呈したるなり。先生、筆を枕に取りて、尚ほ章行の句讀を正したまひたり。十月、「白羽箭」文藝倶樂部に出づ。月光、草に深き、古城を歌へるなり。

明治三十七年三月、「紅雪錄」四月、「續紅雪錄」——雪中の旅情は、名古屋停車場に、これを見たるなり。

明治三十八年二月、「銀短冊」文藝倶樂部、「瓔珞品」新小説。

明治三十九年二月、祖母を喪ふ。年八十七。七月、ますます健康を害ひ、靜養のため、逗子、田越に借家。一夏の假すまひ、やがて四年越の長きに亘れり。殆ど、粥と、じやが薯を食するのみ。十一月、「春晝」新小説に出づ。うたゝねに戀しき人を見てしより夢てふものはたのみそめてき。雨は屋を漏り、梟、軒に鳴き、風は欅の枝を折りて、棟の柿葺を貫き、破衾の天井を刺さむとす。蘆の穗は霜寒き秋に散り、さゝ蟹は、むれつゝ疊を走りぬ。「春晝後刻」を草せり。蝶か、夢か、殆ど恍惚の間にあり。李長吉は、其の頃嗜みよみたるもの。

明治四十年一月、「婦系圖」を、やまと新聞に連載す。

明治四十一年、「新作草迷宮」春陽堂にて單行出版。二月、歸京して麹町土手三番町に居を卜す。敷金の出資、店うけ人は、ともに彌次郎兵衛、臨風氏なりとす。激務に惱む。秋たちてより土手の松に木兎の聲聞えたり。

明治四十二年十月、「白鷺」東京朝日新聞に出づ。

明治四十三年一月、「歌行燈」此の年より「鏡花集」袖珍本の刊行はじまる。年月相續ぎて五巻とす。五月、麹町下六番町十一に。十月、「三味線堀」三田文學に出づ。頁數の少き雜誌に、一稿百枚は、永井荷風氏の厚情による。

明治四十四年一月、「朱日記」三田文學。十月「銀鈴集」隆文館より。——この頃は里見弴氏有島家にあり。長髪白皙、しばしば家人の見る處。はじめ未だ逢はず、後次第に相近づく。

明治四十五年一月、「南地心中」四月、中央公論に「三人の盲の話」

大正元年十一月、「印度更紗」中央公論。

大正二年三月、「夜叉ケ池」演藝倶樂部。十二月、「海神別莊」中央公論。ともに戲曲。おなじく「戀女房」鳳鳴社より單行す。

大正三年九月、「日本橋」知友堀尾成章氏の千章館より。小村雪岱氏はじめて裝畫を試む。

大正四年四月、「新つや物語」文藝倶樂部、六月、「夕顔」三田文學。六月、「鏡花選集」十月「遊里集」ともに春陽堂。出版。

大正五年十月、水上瀧太郎氏英國より歸る。此の年、初夏のはじめより、あしき病流行したるに恐をなし、門を出でざること、殆ど三月。瀧君歸朝の當時、久保田万太郎氏と相伴ひて訪れたるに快談し、十一月下旬、はじめて大根河岸に一酌す。此月新小説に「萩すゝき内證話」

大正六年九月、「天守物語」新小説。

大正七年六月、「鴛鴦帳」至誠堂より、新作單行。前年の春、書肆より前借して、多日稿成らず。作者酒間に鬱ぐを見て、水上瀧太郎氏、我が小遣其の額に係る、金子を返せと言ふ。厚

譏と意氣に且つ感じて、草稿すゝみぬ。

大正八年一月、「ゆかりの女」を婦人畫報に連載しはじむ。

大正九年一月、「伯爵の釵」を、婦女界に、五月、「賣色鴨南蠻」を人間に。六月の頃と覺ゆ、映畫の事により、谷崎潤一郎氏と會す、芥川龍之介氏も殆ど同時なり。

大正十年二月、水上瀧太郎氏編する處の著作綱要、「靑蛉集」の附錄に出づ。訂正增補したるは、春陽堂の「全集」にあり。

大正十一年一月、「身延の鶯」を東京日日新聞に、八月より、「りんどうとなでしこ」を女性にのせはじむ。

大正十二年九月、大地震。火を避けて露宿二晝夜、家内皆無事。提灯のあかりをたよりに、徹宵、「露宿」「十六夜」を書く。

大正十三年三月、「二三羽——十二三羽」女性に出づ。「七寶の柱」を新潮社上梓。五月、苦樂に、「眉かくしの靈」を寄す。

大正十四年一月、改造社より「番町夜講」を出す。七月、春陽堂より「鏡花全集」刊行しはじむ、[illegible]氏の勞少からず。

大正十五年一月、女性に、「戰國新茶漬」を載す。[illegible]つ、上杉謙信、場に登りて、自から大に喜ぶ。

昭和二年二月、「多神教」——文藝春秋。

昭和二年四月、改造に「卵塔場の天女」——七月、期に遲るゝこと八ヶ月にして、「全集」成る。この集のために、一方ならぬ厚意に預りし、芥川龍之介氏の二十四日の通夜の書齋に、鐵瓶を掛けたるまゝの夏冷き火鉢の傍に、其の月の配本第十五卷、蔽を拂はれたりしを視て、思はず淚さしぐみぬ。八月、東京大阪日日新聞、新八景の記事のため十和田湖を觀る、三角醫學博士同遊。森林中に、奧入瀨川をさかのぼり、戶の口、休屋に宿り、秋田に行く。途中、湖風淸冷、薄荷の濱に酒を煮る。

昭和三年三月、肺炎を病む、五月癒えて、修善寺に遊ぶ。「飛剱幻なり」改造七月に載するところ。

昭和三年八月二十五日印刷
昭和三年九月一日發行

現代日本文學全集 第十四篇

著者 泉鏡太郎

發行者 山本美
東京市芝區愛宕下町四丁目六番地

印刷者 杉山愛二
東京市牛込區市谷加賀町一ノ一二

發兌 東京市芝區愛宕下町四丁目六番地
改造社
振替東京八四〇二二番
電話芝(43)一一二一番
一一二二番
一一二三番
一一二四番

[illegible]

EAST-ASIAN LIB. UNIVERSITY OF TORONTO
3 1761 03055 2129

改造社